

バージョン 6.2.0



WebSphere Process Server のインストールおよび構成



バージョン 6.2.0



**WebSphere Process Server のインストールおよび構成**

お願い

本書および本書で紹介する製品をご使用になる前に、本書末尾の『特記事項』セクションに記載されている情報をお読みください。

本書は、WebSphere® Process Server for Multiplatforms バージョン 6、リリース 2、モディフィケーション 0 (製品番号 5724-L01) および新しい版で明記されていない限り、以降のすべてのリリースおよびモディフィケーションに適用されます。

お客様の環境によっては、資料中の円記号がバックスラッシュと表示されたり、バックスラッシュが円記号と表示されたりする場合があります。

原典： WebSphere® Process Server for Multiplatforms  
Version 6.2.0  
Installing and Configuring WebSphere Process Server

発行： 日本アイ・ビー・エム株式会社

担当： トランスレーション・サービス・センター

第1刷 2009.1

© Copyright International Business Machines Corporation 2005, 2008.

---

## PDF ブックおよびインフォメーション・センター

PDF ブックは、印刷およびオフラインでの参照用に提供されています。最新情報は、オンラインのインフォメーション・センターを参照してください。

セットとして、PDF ブックには、インフォメーション・センターと同一の内容が含まれます。

PDF 資料は、バージョン 6.0 またはバージョン 6.1 など、インフォメーション・センターのメジャー・リリースの後の四半期以内にご利用いただけます。

PDF 資料の更新頻度は、インフォメーション・センターより低いですが、Redbooks® よりも頻繁に更新されます。通常、PDF ブックはブックに十分な変更が累積されたときに更新されます。

PDF ブックの外部にあるトピックへのリンクを選択すると、Web 上のインフォメーション・センターに移動します。PDF ブックの外部にあるターゲットへのリンクには、そのターゲットが PDF ブックと Web ページのどちらなのかを示すアイコンによるマークが付いています。

表 1. 本書の外部にあるトピックへのリンクのプレフィックスとなるアイコン

アイコン	説明
	<p data-bbox="537 260 1325 285">インフォメーション・センターのページを含む、Web ページへのリンク。</p> <p data-bbox="537 317 1421 411">インフォメーション・センターへのリンクは、ターゲット・トピックが新しい場所に移動した場合でもその機能を保つように、間接参照ルーティング・サービスを経由します。</p> <p data-bbox="537 443 1421 604">ローカルのインフォメーション・センターでリンク先ページを見つけたい場合は、リンクのタイトルを検索することができます。あるいは、トピック ID を検索することもできます。検索の結果、タイプが異なる製品についてのトピックがいくつか見つかった場合は、検索結果の「グループ別 (Group by)」コントロールを使用して、表示するトピック・インスタンスを識別できます。以下に例を示します。</p> <ol data-bbox="537 625 1421 905" style="list-style-type: none"> <li>1. リンク URL をコピーします。例えば、リンクを右クリックして「リンク先をコピーする (Copy link location)」を選択します。例: <code>http://www14.software.ibm.com/webapp/wsbroker/redirect?version=wbpm620&amp;product=wesb-dist&amp;topic=tins_apply_service</code></li> <li>2. <code>&amp;topic=</code> の後のトピック ID をコピーします。例: <code>tins_apply_service</code></li> <li>3. ローカル・インフォメーション・センターの検索フィールドに、トピック ID を貼り付けます。文書機能がローカルにインストールされている場合は、検索結果にそのトピックが表示されます。以下に例を示します。</li> </ol> <div data-bbox="581 915 1421 1108" style="border: 1px solid black; padding: 10px; margin: 10px 0;"> <p data-bbox="594 926 816 951">1 result(s) found for</p> <p data-bbox="594 972 1102 1020">Group by: None   Platform   Version   Product Show Summary</p> <p data-bbox="594 1041 1344 1089">Update Installer を使用したフィックスパックおよびリフレッシュ・パックのインストール</p> </div> <ol data-bbox="537 1146 1182 1171" style="list-style-type: none"> <li>4. 検索結果のリンクをクリックしてトピックを表示します。</li> </ol>
	<p data-bbox="537 1192 797 1218">PDF ブックへのリンク。</p>

# 目次

PDF ブックおよびインフォメーション・センター . . . . .	iii
表 . . . . .	ix
第 1 章 一般的なインストールおよび構成タスクへのショートカット . . . . .	1
第 2 章 WebSphere Process Server のパッケージ化 . . . . .	3
第 3 章 WebSphere Process Server のインストールの準備 . . . . .	37
製品の互換性 . . . . .	37
WebSphere Process Server のインストールに関する前提条件 . . . . .	38
サーバーおよびノードの停止 . . . . .	40
インストールのためのオペレーティング・システムの準備 . . . . .	42
AIX システムのインストール準備 . . . . .	42
HP-UX システムのインストール準備 . . . . .	47
i5/OS システムのインストール準備 . . . . .	53
Linux システムのインストール準備 . . . . .	54
Solaris システムのインストール準備 . . . . .	60
Windows システムのインストール準備 . . . . .	64
製品インストール前の共通データベースの手動作成 . . . . .	69
DB2 for i5/OS スクリプトの編集 . . . . .	70
DB2 スクリプトの編集 . . . . .	72
DB2 for z/OS スクリプトの編集 . . . . .	73
Informix スクリプトの編集 . . . . .	75
Oracle スクリプトの編集 . . . . .	76
Microsoft SQL Server スクリプトの編集 . . . . .	78
第 4 章 ソフトウェアのインストール . . . . .	81
Launchpad の開始 . . . . .	83
Launchpad のオプション . . . . .	85
WebSphere Process Server の対話式インストール . . . . .	96
既存の WebSphere Process Server のインストール済み環境でのインストール . . . . .	102
既存の WebSphere Enterprise Service Bus または WebSphere Process Server Client のインストール済み環境でのインストール . . . . .	106
既存の WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment インストール済み環境でのインストール . . . . .	109
WebSphere Process Server のインストールおよびプロファイルの作成の対話式実行 . . . . .	112
デプロイメント環境による WebSphere Process Server の対話式インストール . . . . .	121
WebSphere Process Server Client の対話式インストール . . . . .	136
既存のインストール済み環境への追加フィーチャーのインストール . . . . .	141
WebSphere Process Server インストール済み環境への WebSphere Enterprise Service Bus または WebSphere Process Server Client インストール済み環境の変換 . . . . .	146
Linux、UNIX、および Windows へのサイレント・インストール . . . . .	149
i5/OS での System i サーバーからのサイレント・インストール . . . . .	154
Windows ワークステーションのコマンド行から i5/OS をサイレント・インストールする . . . . .	157
基礎となる統合インストール・パッケージの置換 . . . . .	160
i5/OS でのスクリプトの実行 . . . . .	161
ファースト・ステップ・コンソールの開始 . . . . .	162
ファースト・ステップ・コンソールのオプション . . . . .	165
wbi_ivt コマンド行ユーティリティ . . . . .	172
メッセージ・サービス・クライアントのインストール . . . . .	175
インストールの開始 . . . . .	175
JNDILookup Web Service アプリケーションのインストール . . . . .	178
第 5 章 ドキュメンテーションのインストール . . . . .	181
新しいヘルプ・システムのインストール . . . . .	182
ヘルプ・システムへの最新ドキュメンテーションのインストール . . . . .	183
ヘルプ・システムへの別のバージョンのドキュメンテーションのインストール . . . . .	185
Eclipse ベースの他のヘルプ・ビューアーへのドキュメンテーションのインストール . . . . .	187
ヘルプ・システムの始動 . . . . .	189
ヘルプ・システムの停止 . . . . .	189
ヘルプ・システムの表示 . . . . .	190
ドキュメンテーションのアンインストール . . . . .	190
第 6 章 製品のインストールの検査 . . . . .	193
インストール済みファイルの検査合計の検証 . . . . .	194
部品表との照合 . . . . .	196
構成済みファイルの品目に対する新しいベースライン検査合計の計算 . . . . .	201
検査合計の比較からのファイルの除外 . . . . .	204
特定のファイルおよびコンポーネントの検査合計の比較 . . . . .	209
installver_wbi コマンドのデフォルトのメッセージ・ダイジェスト・アルゴリズムの変更 . . . . .	212
installver_wbi コマンドを使用したメモリー不足の状態の処理 . . . . .	213

installver_wbi コマンド	214
<b>第 7 章 ほかの WebSphere 製品のインストール済み環境との共存</b>	<b>225</b>
各種 WebSphere 製品の既存のインストール済み環境と共存する WebSphere Process Server または WebSphere Process Server Client のインストール	226
WebSphere Business Integration Server Foundation、および選択した 6.0 より前のバージョンの WebSphere Application Server 製品の構成インストールと共存する新規 WebSphere Process Server プロファイルの作成	227
ほかの WebSphere 製品のプロファイルと共存する新しい WebSphere Process Server プロファイルの作成	228
<b>第 8 章 ソフトウェアの構成</b>	<b>231</b>
プロファイルの構成	231
プロファイル	231
プロファイルの作成または拡張に関する前提条件	232
プロファイルの作成	239
既存のプロファイルの拡張	277
manageprofiles コマンド	302
デフォルト値を使用したプロファイルの構成	335
カスタマイズした値を使用したプロファイルの構成	345
デプロイメント環境に対するプロファイルの構成	404
プロファイルの作成後または拡張後の共通データベースとテーブルの作成	435
プロファイルの作成後または拡張後の共通データベースでのテーブルの作成	436
i5/OS でのリモート・データベース・サポートの構成	438
リモート z/OS サーバー上の DB2 での Common Event Infrastructure リポジトリと共通データベース・リポジトリの作成	446
リモート z/OS システムでの DB2 メッセージ・ロガー・データベースの構成	446
manageprofiles コマンドを使用したプロファイルの削除	449
デプロイメント環境の構成	450
デプロイメント環境トポロジーの更新	450
ホスト別名の構成	452
デプロイメント環境の認証別名の構成	452
カスタム・デプロイメント環境の構成	453
デプロイメント環境の据え置かれた構成の構成	456
コマンド行を使用したデプロイメント環境の構成	456
デプロイメント環境のデータ・ソースの構成	457
コマンド行を使用したデプロイメント環境定義の作成	458
コマンド行を使用したデプロイメント環境定義の削除	459
コマンド行を使用したデプロイメント環境定義の名前変更	461
コマンド行を使用したデプロイメント環境定義へのノードの追加	462

コマンド行を使用したデプロイメント環境定義からのノードの削除	463
コマンド行を使用したデプロイメント環境定義内のノード名の変更	465
デプロイメント環境定義パラメーターの変更	466
コマンド行を使用したデプロイメント環境の状況表示	467
サーバーまたはクラスターの SCA サポートの構成	469
サーバーおよびクラスターでの Service Component Architecture サポートに関する考慮事項	471
REST サービス・エンドポイントの構成	472
Business Process Choreographer の構成	473
ビジネス・スペース の構成	474
プロファイル管理ツールを使用したビジネス・スペースの構成	474
管理コンソールを使用したビジネス・スペースの構成	476
「デプロイメント環境構成」ウィザードの一部としてビジネス・スペースを構成する	478
ビジネス・スペースのデータベース表の構成	479
管理コンソールでビジネス・スペース・ウィジェットのエンドポイントを使用可能にする	481
リモート・エンドポイントに対してビジネス・スペース・ウィジェットを手動で使用可能にする	483
複数のエンドポイントに対してビジネス・スペース・ウィジェットを使用可能にする	487
ビジネス・スペースでヒューマン・ワークフロー・ウィジェットを実行するために HTML-Dojo フォームを使用可能にする	491
ビジネス・スペースのセキュリティーのセットアップ	492
ビジネス・ルールおよびセレクターの構成	496
ビジネス・ルールとセレクターの監査ログの構成	496
コマンドを使用したビジネス・ルールとセレクターの監査の構成	497
ビジネス・ルール・マネージャーのインストールの考慮事項	500
リレーションシップ・サービスの構成	507
拡張メッセージング・リソースの構成	508
拡張メッセージング・サービスを使用可能にする	509
遅延応答を処理するためのリスナー・ポートの拡張の構成	510
拡張メッセージング・プロバイダーを選択する	511
Common Event Infrastructure の構成	517
Common Event Infrastructure コンポーネント	518
管理コンソールを使用した Common Event Infrastructure の構成	520
Common Event Infrastructure アプリケーションのデプロイ	522
イベント・メッセージングの構成	526
イベント・データベースの構成	529
WebSphere Business Monitor 用のクロスセル Common Event Infrastructure 構成	557
WebSphere Business Integration Adapter の構成	558

WebSphere Business Integration Adapter の管理の セットアップ . . . . .	558	プロファイル、ノード、ホスト、およびセルの命名 の考慮事項 . . . . .	633
<b>第 9 章 デプロイメント環境の検証 . . . . .</b>	<b>561</b>	.nifregistry ファイルおよび vpd.properties ファイル	643
アプリケーション・デプロイメント・ターゲット・ クラスターの始動の確認. . . . .	562	オペレーティング・システムのレジストリー・キー	646
テスト・アプリケーションのインストール. . . . .	563	ポート番号設定. . . . .	647
ルーティング用テスト・アプリケーションの構成	564	WebSphere Process Server の製品コンポーネント	648
テスト・アプリケーションの開始. . . . .	565	製品のバージョン情報および履歴情報 . . . . .	648
テスト・アプリケーションの実行. . . . .	566	製品ライブラリー、ディレクトリー、サブシステ ム、ジョブ・キュー、ジョブ記述、および出力キュー	649
その他のアプリケーションのインストールおよびア クセス. . . . .	566	複数プロファイル環境のプロファイル・コマンド	651
<b>第 10 章 Update Installer を使用した フィックスパックおよびリフレッシュ・ パックのインストール . . . . .</b>	<b>569</b>	パスポート・アドバンテージからインストールする ときの特別な考慮事項 . . . . .	651
Update Installer for WebSphere Software のインスト ール . . . . .	575	<b>第 14 章 IBM WebSphere Installation Factory の使用 . . . . .</b>	<b>653</b>
保守パッケージのアンインストール. . . . .	578	IBM WebSphere Installation Factory - 概要. . . . .	653
<b>第 11 章 カスタマイズ・インストー ル・パッケージによるフィックスパック およびリフレッシュ・パックのインスト ール . . . . .</b>	<b>583</b>	IBM WebSphere Installation Factory のインストール	654
<b>第 12 章 ソフトウェアのアンインスト ール . . . . .</b>	<b>585</b>	カスタマイズ・インストール・パッケージの処理	656
GUI の使用またはサイレント・モードによる製品の アンインストール. . . . .	585	IBM WebSphere Installation Factory の開始 . . . . .	658
アンインストールに失敗した後の再インストールの 準備 . . . . .	592	カスタマイズ・インストール・パッケージの作成	684
AIX システムでアンインストールに失敗した後 の再インストールの準備. . . . .	593	カスタマイズ・インストール・パッケージのイン ストール: タスクのロードマップ. . . . .	693
HP-UX システムでアンインストールに失敗した 後の再インストールの準備. . . . .	596	カスタマイズ・インストール・パッケージにより インストールした環境の保守 . . . . .	714
i5/OS システムでアンインストールに失敗した後 の再インストールの準備. . . . .	599	カスタマイズ・インストール・パッケージのイン ストールのアンインストール . . . . .	716
Linux システムでアンインストールに失敗した後 の再インストールの準備. . . . .	601	統合インストール・パッケージの処理 . . . . .	716
Solaris システムでアンインストールに失敗した 後の再インストールの準備. . . . .	604	統合インストール・パッケージの開発およびインス トール. . . . .	717
Windows システムでアンインストールに失敗し た後の再インストールの準備 . . . . .	608	IIP の概要 . . . . .	718
Business Process Choreographer のアンインストール	612	IIP マクロ置き換え . . . . .	721
<b>第 13 章 インストール情報. . . . .</b>	<b>613</b>	ビルド定義の作成と IIP の生成 . . . . .	724
ポート競合の回避. . . . .	613	IIP のインストール . . . . .	733
暫定修正の自動インストール . . . . .	614	Installation Factory ツールのアンインストール . . . . .	764
製品、プロファイル、およびツールのデフォルト・ インストール・ディレクトリー . . . . .	615	<b>第 15 章 インストールおよび構成のト ラブルシューティング . . . . .</b>	<b>767</b>
i5/OS スクリプト . . . . .	622	メッセージ: インストールおよびプロファイル作成	771
install コマンド. . . . .	624	サポートされる IBM JDK が見つかりませんで した。この製品に同梱されている IBM JDK は install_root/JDK に配置されている必要があります。 問題を訂正して再試行してください。 . . . .	772
Linux および UNIX オペレーティング・システム でのディスク・ドライブのマウント. . . . .	630	警告: スtring " <code>&lt;type_name&gt;</code> " をタイプ FontStruct に変換できません (Warning: Cannot convert string " <code>&lt;type_name&gt;</code> " to type FontStruct) . . . . .	772
Mozilla 1.7 での各国語サポート . . . . .	633	インストールとプロファイル作成のログ・ファイル	773
		Launchpad アプリケーションのトラブルシューティ ング . . . . .	777
		サイレント・インストールのトラブルシューティ ング . . . . .	779
		i5/OS インストールのトラブルシューティングのヒ ント . . . . .	780
		失敗した Ant 構成スクリプトの診断 . . . . .	781
		プロファイルの作成または拡張時の障害からのリカ バリー. . . . .	783

Business Process Choreographer 構成のトラブルシューティング . . . . . 786

特記事項. . . . . 787

# 表

1. 本書の外部にあるトピックへのリンクのプレフィックスとなるアイコン . . . . .	iv	29. ファースト・ステップ・コンソールのオプションが呼び出すコマンド . . . . .	170
2. WebSphere Process Server に付属するソフトウェア . . . . .	4	30. サイトのエレメント属性 . . . . .	186
3. AIX メディア・パック (32 ビット) の内容 . . . . .	9	31. 指定される manageprofiles コマンド・パラメーター . . . . .	249
4. AIX メディア・パック (64 ビット) の内容 . . . . .	10	32. デフォルトの manageprofiles コマンド・パラメーター . . . . .	250
5. HP-UX メディア・パック (32 ビット) の内容 . . . . .	12	33. 指定される manageprofiles コマンド・パラメーター . . . . .	251
6. HP-UX メディア・パック (64 ビット) の内容 . . . . .	13	34. デフォルトの manageprofiles コマンド・パラメーター . . . . .	251
7. i5/OS メディア・パックの内容 . . . . .	15	35. 指定される manageprofiles コマンド・パラメーター . . . . .	252
8. Linux x86 メディア・パック (32 ビット) の内容 . . . . .	18	36. デフォルトの manageprofiles コマンド・パラメーター . . . . .	253
9. Linux x86 メディア・パック (64 ビット) の内容 . . . . .	20	37. 指定される manageprofiles コマンド・パラメーター . . . . .	253
10. Linux POWER メディア・パック (32 ビット) の内容 . . . . .	22	38. デフォルトの manageprofiles コマンド・パラメーター . . . . .	254
11. Linux POWER メディア・パック (64 ビット) の内容 . . . . .	24	39. 指定される manageprofiles コマンド・パラメーター . . . . .	255
12. Linux on System z メディア・パック (31 ビット) の内容 . . . . .	26	40. デフォルトの manageprofiles コマンド・パラメーター . . . . .	256
13. Linux on System z メディア・パック (64 ビット) の内容 . . . . .	27	41. 指定される manageprofiles コマンド・パラメーター . . . . .	256
14. Solaris x86 メディア・パック (32 ビット) の内容 . . . . .	29	42. デフォルトの manageprofiles コマンド・パラメーター . . . . .	257
15. Solaris SPARC および x86 メディア・パック (64 ビット) の内容 . . . . .	30	43. 指定される manageprofiles コマンド・パラメーター . . . . .	257
16. Windows メディア・パック (32 ビット) の内容 . . . . .	32	44. デフォルトの manageprofiles コマンド・パラメーター . . . . .	258
17. Windows メディア・パック (64 ビット) の内容 . . . . .	34	45. 指定される manageprofiles コマンド・パラメーター . . . . .	258
18. 利用可能なデータベース・タイプおよびそのディレクトリ名 . . . . .	69	46. デフォルトの manageprofiles コマンド・パラメーター . . . . .	259
19. WebSphere Process Server 用の DB2 for i5/OS スクリプト . . . . .	70	47. 指定される manageprofiles コマンド・パラメーター . . . . .	260
20. WebSphere Process Server 用の DB2 スクリプト . . . . .	72	48. デフォルトの manageprofiles コマンド・パラメーター . . . . .	261
21. WebSphere Process Server 用の DB2 for z/OS スクリプト . . . . .	73	49. 指定される manageprofiles コマンド・パラメーター . . . . .	261
22. WebSphere Process Server 用の Informix スクリプト . . . . .	75	50. デフォルトの manageprofiles コマンド・パラメーター . . . . .	262
23. WebSphere Process Server 用の Oracle スクリプト . . . . .	76	51. 指定される manageprofiles コマンド・パラメーター . . . . .	263
24. デフォルトのスキーマ . . . . .	77	52. デフォルトの manageprofiles コマンド・パラメーター . . . . .	263
25. WebSphere Process Server 用の Microsoft SQL Server スクリプト . . . . .	78	53. Oracle 用追加 manageprofiles コマンド・パラメーター . . . . .	264
26. WebSphere 製品の既存のインストールに基づく次のステップ . . . . .	100	54. 指定される manageprofiles コマンド・パラメーター . . . . .	267
27. 既存のデプロイメント・マネージャー上のデプロイメント環境パターンによって提供されるクラスター . . . . .	132		
28. ファースト・ステップ・コンソールで使用可能なオプション . . . . .	166		

55. デフォルトの manageprofiles コマンド・パラメーター . . . . .	268	83. 指定される manageprofiles コマンド・パラメーター . . . . .	301
56. Oracle 用追加 manageprofiles コマンド・パラメーター . . . . .	268	84. デフォルトの manageprofiles コマンド・パラメーター . . . . .	301
57. 指定される manageprofiles コマンド・パラメーター . . . . .	272	85. 指定される manageprofiles コマンド・パラメーター . . . . .	302
58. デフォルトの manageprofiles コマンド・パラメーター . . . . .	272	86. デフォルトの manageprofiles コマンド・パラメーター . . . . .	302
59. Oracle 用追加 manageprofiles コマンド・パラメーター . . . . .	273	87. 共通データベースの構成に使用できる manageprofiles パラメーター (Derby Embedded を使用) . . . . .	324
60. 指定される manageprofiles コマンド・パラメーター . . . . .	273	88. 共通データベースの構成に使用できる manageprofiles パラメーター (Derby Network Server を使用) . . . . .	325
61. デフォルトの manageprofiles コマンド・パラメーター . . . . .	274	89. 共通データベースの構成に使用できる manageprofiles パラメーター (DB2 Universal を使用) . . . . .	325
62. Oracle 用追加 manageprofiles コマンド・パラメーター . . . . .	274	90. 共通データベースの構成に使用できる manageprofiles パラメーター (DB2 Universal Runtime Client を使用) . . . . .	326
63. 指定される manageprofiles コマンド・パラメーター . . . . .	275	91. i5/OS オペレーティング・システムに提供されたデータベースを使用した共通データベースの構成のために使用可能な manageprofiles パラメーター . . . . .	327
64. デフォルトの manageprofiles コマンド・パラメーター . . . . .	276	92. DB2 for z/OS v8 または DB2 for z/OS v9 を使用した共通データベースの構成のために使用可能な manageprofiles パラメーター . . . . .	327
65. 指定される manageprofiles コマンド・パラメーター . . . . .	276	93. Oracle 9i, Oracle 10g, または Oracle 11g を使用する共通データベースの構成で使用可能な manageprofiles パラメーター . . . . .	328
66. デフォルトの manageprofiles コマンド・パラメーター . . . . .	277	94. 共通データベースの構成に使用できる manageprofiles パラメーター (Informix Dynamic Server を使用) . . . . .	329
67. 指定される manageprofiles コマンド・パラメーター . . . . .	288	95. Microsoft SQL Server (組み込み) または Microsoft SQL Server (Data Direct) を使用する共通データベースの構成に使用可能な manageprofiles パラメーター . . . . .	330
68. デフォルトの manageprofiles コマンド・パラメーター . . . . .	288	96. Derby Embedded を使用した Common Event Infrastructure データベースの構成のために使用可能な manageprofiles パラメーター . . . . .	331
69. 指定される manageprofiles コマンド・パラメーター . . . . .	289	97. Derby Network Server を使用した Common Event Infrastructure データベースの構成のために使用可能な manageprofiles パラメーター . . . . .	331
70. デフォルトの manageprofiles コマンド・パラメーター . . . . .	289	98. DB2 Universal を使用した Common Event Infrastructure データベースの構成のために使用可能な manageprofiles パラメーター . . . . .	332
71. 指定される manageprofiles コマンド・パラメーター . . . . .	290	99. i5/OS オペレーティング・システムに提供されたデータベースを使用した Common Event Infrastructure データベースの構成のために使用可能な manageprofiles パラメーター . . . . .	332
72. デフォルトの manageprofiles コマンド・パラメーター . . . . .	290	100. DB2 for z/OS v8 または DB2 for z/OS v9 を使用した Common Event Infrastructure データベースの構成のために使用可能な manageprofiles パラメーター . . . . .	333
73. 指定される manageprofiles コマンド・パラメーター . . . . .	291		
74. デフォルトの manageprofiles コマンド・パラメーター . . . . .	291		
75. 指定される manageprofiles コマンド・パラメーター . . . . .	292		
76. 指定される manageprofiles コマンド・パラメーター . . . . .	292		
77. 指定される manageprofiles コマンド・パラメーター . . . . .	294		
78. デフォルトの manageprofiles コマンド・パラメーター . . . . .	294		
79. Oracle 用追加 manageprofiles コマンド・パラメーター . . . . .	294		
80. 指定される manageprofiles コマンド・パラメーター . . . . .	297		
81. デフォルトの manageprofiles コマンド・パラメーター . . . . .	298		
82. Oracle 用追加 manageprofiles コマンド・パラメーター . . . . .	298		

101. Oracle 9i, Oracle 10g, または Oracle 11g を使用する Common Event Infrastructure データベースの構成で使用可能な manageprofiles パラメーター . . . . .	333	124. Oracle 9i の必須の共通データベース構成フィールド . . . . .	395
102. Informix Dynamic Server を使用した Common Event Infrastructure データベースの構成のために使用可能な manageprofiles パラメーター . . . . .	334	125. Oracle 10g または 11g の必須の共通データベース構成フィールド . . . . .	396
103. Microsoft SQL Server (組み込み) または Microsoft SQL Server (Data Direct) を使用する Common Event Infrastructure データベースの構成に使用可能な manageprofiles パラメーター . . . . .	335	126. Derby Network Server の必須の共通データベース構成フィールド . . . . .	420
104. Derby Network Server の必須の共通データベース構成フィールド . . . . .	363	127. DB2 Universal Database の場合の必須の共通データベース構成フィールド . . . . .	420
105. DB2 Universal Database の場合の必須の共通データベース構成フィールド . . . . .	363	128. DB2 for z/OS V8 および V9 の場合の必須の共通データベース構成フィールド . . . . .	421
106. DB2 for z/OS V8 および V9 の場合の必須の共通データベース構成フィールド . . . . .	364	129. DB2 UDB for iSeries (ツールボックス) または DB2 for i5/OS (ツールボックス) の必須共通データベース構成フィールド . . . . .	422
107. DB2 UDB for iSeries (ツールボックス) または DB2 for i5/OS (ツールボックス) の必須共通データベース構成フィールド . . . . .	365	130. DB2 UDB for iSeries (ネイティブ) または DB2 for i5/OS (ネイティブ) の必須共通データベース構成フィールド . . . . .	422
108. DB2 UDB for iSeries (ネイティブ) または DB2 for i5/OS (ネイティブ) の必須共通データベース構成フィールド . . . . .	366	131. DB2 Universal Runtime Client の場合の必須の共通データベース構成フィールド . . . . .	423
109. DB2 Universal Runtime Client の場合の必須の共通データベース構成フィールド . . . . .	366	132. Informix Dynamic Server の場合の必須の共通データベース構成フィールド . . . . .	424
110. Informix Dynamic Server の場合の必須の共通データベース構成フィールド . . . . .	367	133. Microsoft SQL Server Embedded の場合の必須の共通データベース構成フィールド . . . . .	424
111. Microsoft SQL Server Embedded の場合の必須の共通データベース構成フィールド . . . . .	368	134. Microsoft SQL Server Data Direct の場合の必須の共通データベース構成フィールド . . . . .	425
112. Microsoft SQL Server Data Direct の場合の必須の共通データベース構成フィールド . . . . .	368	135. Oracle 9i の必須の共通データベース構成フィールド . . . . .	426
113. Oracle 9i の必須の共通データベース構成フィールド . . . . .	369	136. Oracle 10g または 11g の必須の共通データベース構成フィールド . . . . .	427
114. Oracle 10g または 11g の必須の共通データベース構成フィールド . . . . .	370	137. 既存のデプロイメント・マネージャー上のデプロイメント環境パターンによって提供されるクラスター . . . . .	433
115. Derby Network Server の必須の共通データベース構成フィールド . . . . .	389	138. トポロジー・インスタンスの使用可能状況 (使用可能性が低い順から高い順) . . . . .	468
116. DB2 Universal Database の場合の必須の共通データベース構成フィールド . . . . .	389	139. イベント・データベースの制限 . . . . .	530
117. DB2 for z/OS V8 および V9 の場合の必須の共通データベース構成フィールド . . . . .	390	140. 保守パッケージのアンインストール時に必要な情報 . . . . .	579
118. DB2 UDB for iSeries (ツールボックス) または DB2 for i5/OS (ツールボックス) の必須共通データベース構成フィールド . . . . .	391	141. install_root デフォルト・ディレクトリー . . . . .	617
119. DB2 UDB for iSeries (ネイティブ) または DB2 for i5/OS (ネイティブ) の必須共通データベース構成フィールド . . . . .	391	142. profile_root デフォルト・ディレクトリー . . . . .	617
120. DB2 Universal Runtime Client の場合の必須の共通データベース構成フィールド . . . . .	392	143. updi_root デフォルト・ディレクトリー . . . . .	618
121. Informix Dynamic Server の場合の必須の共通データベース構成フィールド . . . . .	393	144. cip_proc_server_root デフォルト・ディレクトリー . . . . .	619
122. Microsoft SQL Server Embedded の場合の必須の共通データベース構成フィールド . . . . .	393	145. クリーン・サーバーの i5/OS デフォルト・ディレクトリー . . . . .	619
123. Microsoft SQL Server Data Direct の場合の必須の共通データベース構成フィールド . . . . .	394	146. WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment が既にインストールされている場合の install_root デフォルト・ディレクトリー . . . . .	620
		147. WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment が既にインストールされている場合の i5/OS デフォルト・ディレクトリー . . . . .	620
		148. WebSphere Process Server の既存のインストールが存在している場合の install_root デフォルト・ディレクトリー . . . . .	621

149. WebSphere Process Server がインストールされている場合の i5/OS デフォルト・ディレクトリー . . . . .	621	156. WebSphere Process Server install コマンド・オプションの値の表 . . . . .	627
150. WebSphere Process Server を WebSphere Enterprise Service Bus の既存のインストール済み環境の上にインストールしたときの install_root デフォルト・ディレクトリー . . . . .	622	157. ノード、ホスト、およびセルの命名ガイドライン . . . . .	634
151. WebSphere Enterprise Service Bus がインストールされている場合の i5/OS デフォルト・ディレクトリー . . . . .	622	158. vpd.properties ファイル内にある WebSphere 製品の ID. . . . .	645
152. i5/OS 用の WebSphere Process Server でよく使用されるスクリプト . . . . .	623	159. WebSphere Process Server および WebSphere Enterprise Service Bus を登録するときに使用するキー . . . . .	646
153. i5/OS プラットフォーム固有のスクリプト . . . . .	624	160. WebSphere Process Server のフィーチャー	648
154. WebSphere Application Server Network Deployment Supplements V6.1 CD および WebSphere Application Server Toolkit V6.1.1 Disk 1 CD でのソフトウェアのインストール・コマンド . . . . .	625	161. 製品のバージョン情報および履歴情報のリンク . . . . .	649
155. WebSphere Process Server DVD でのソフトウェアのインストール・コマンド . . . . .	625	162. サポートされるトレードアップ・パス . . . . .	712
		163. 終了コードのアクション . . . . .	736
		164. デフォルトのインストール・ディレクトリー・パスの値 . . . . .	752
		165. IIP インストール・オプション . . . . .	759
		166. WebSphere Process Server コンポーネントのインストール・ログおよびプロファイル・ログ . . . . .	773

---

## 第 1 章 一般的なインストールおよび構成タスクへのショートカット

以下の項目をご覧になると、よく使用されるインストールおよび構成タスクを迅速に開始できます。

- インストールの前提条件について
- 製品インストール前の共通データベースの手動作成
- 製品の対話式インストール
- コマンド行を使用した製品のインストール
- **i5/OS** System i<sup>®</sup> サーバーからの製品のインストール
- **i5/OS** Windows<sup>®</sup> ワークステーションのコマンド行からの製品のインストール
- ドキュメンテーションのインストール
- プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの作成
- manageprofiles コマンドを使用したプロファイルの作成
- プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの拡張
- manageprofiles コマンドを使用したプロファイルの拡張
- i5/OS<sup>®</sup> でのリモート・データベース・サポートの構成
- リモート z/OS<sup>®</sup> システムでの DB2<sup>®</sup> メッセージ・ロガー・データベースの構成
- manageprofiles コマンドを使用したプロファイルの削除
- デプロイメント環境の構成
- サーバーまたはクラスターの SCA サポートの構成
- ランタイム環境での Business Process Choreographer のセットアップ
- ビジネス・スペースの構成
- ビジネス・ルールおよびセレクターの構成
- リレーションシップ・サービスの構成
- WebSphere<sup>®</sup> Business Integration Adapter の構成
- Common Event Infrastructure の構成
- 製品のインストールおよびプロファイル作成の検証
- デプロイメント環境の検証
- Update Installer を使用したフィックスパックおよびリフレッシュ・パックのインストール
- カスタマイズ・インストール・パッケージによるフィックスパックおよびリフレッシュ・パックのインストール
- 製品のアンインストール
- IBM<sup>®</sup> Installation Factory を使用した製品インストールのカスタマイズ
- インストールおよび構成のトラブルシューティング



---

## 第 2 章 WebSphere Process Server のパッケージ化

ここでは、WebSphere Process Server の入手方法、そのメディア・パックに格納されているソフトウェア、ダウンロード可能な電子インストール・イメージについて説明します。

### WebSphere Process Server の入手方法

以下のいずれかの方法で、製品コードを取得することができます。

- CD-ROM および DVD メディアなどの製品メディア・パックから。
- パスポート・アドバンテージ・サイトから。ここでは、ライセンス交付を受けたカスタマーがインストール・イメージをダウンロードすることができます。ダウンロード可能なイメージの詳細については、パスポート・アドバンテージのダウンロードの資料を参照してください。

このソフトウェアを購入するには、IBM 担当員または IBM 販売店にお問い合わせいただくか、WebSphere Process Server のホーム・ページ (<http://www.ibm.com/software/integration/wps>) にアクセスして、左側の列の「How to buy」のリンクを選択します。

### WebSphere Process Server に付属するソフトウェア

各メディア・パックには、WebSphere Process Server をインストールし、WebSphere Process Server 環境をセットアップし、アプリケーションのアセンブルとデプロイを行うのに必要なソフトウェアが含まれています。また、お客様の実稼働環境や開発環境に付加価値とツール・サポートを提供するオプションの補助ソフトウェア・プログラムも、各メディア・パックに組み込まれています。

4 ページの表 2 に、WebSphere Process Server 製品に付属するソフトウェアを示します。必ずしもすべてのプラットフォームにすべてのソフトウェアが供給されているわけではありません。

表2. WebSphere Process Server に付属するソフトウェア

ソフトウェア	説明
WebSphere Process Server	<p>サービス指向アーキテクチャ (SOA) を基本にした、単一の単純化プログラミング・モデルである WebSphere Process Server は、オープン・スタンダードに基づくすべての統合スタイルを実現しサポートすることにより、多種多様な要員、ワークフロー、アプリケーション、システム、プラットフォーム、およびアーキテクチャにまたがるビジネス・プロセスを自動化する次世代のビジネス・プロセス・サーバーです。このリリースの WebSphere Process Server の新機能は、「WebSphere Process Server for Multiplatforms バージョン 6.2.0 製品の概要」PDF の『このリリースの新機能』のトピックで説明しています。または、WebSphere Process Server for Multiplatforms バージョン 6.1 オンライン・インフォメーション・センター (<a href="http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/dmndhelp/v6r1mx/">http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/dmndhelp/v6r1mx/</a>) で、トピックを表示できます。</p>
WebSphere Application Server Network Deployment	<p>業界最高峰の Java ベース・アプリケーション・プラットフォームで、ダイナミックな e-business の世界でのエンタープライズ・データやトランザクションを統合します。WebSphere Process Server の土台になっている Network Deployment 版は、優れたアプリケーション・デプロイメント環境を提供し、WebSphere 製品ファミリーから期待されるセキュリティ、パフォーマンス、可用性、接続性、スケーラビリティに加え、トランザクション管理の拡張機能を提供するアプリケーション・サービスを備えています。さらにこの構成によって、クラスタリング、エッジ・オブ・ネットワーク・サービス、Web サービス機能の強化、分散構成の高可用性を実現できます。WebSphere Application Server Network Deployment について詳しくは、WebSphere Application Server Network Deployment インフォメーション・センターを参照してください。</p>
IBM HTTP Server	<p>すべての e-business アプリケーションの基礎は Web サーバーです。IBM HTTP Server の機能には、次のようなものが含まれます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 容易なインストール</li> <li>• SSL セキュア接続のサポート</li> <li>• Fast Response Cache Accelerator</li> <li>• WebSphere バンドルの一部としての IBM サポート</li> <li>• ハードウェア暗号のサポート</li> <li>• IHS サーバーの管理および構成に役立つ Administration Server</li> <li>• すべての WebSphere 製品に共通の、ナビゲートが容易な設計を採用したヘルプ情報</li> </ul>

表 2. WebSphere Process Server に付属するソフトウェア (続き)

ソフトウェア	説明
Web サーバー・プラグイン	WebSphere Process Server は、サポートしている Web サーバーごとに、固有のバイナリー・プラグイン・モジュールと関連のプラグイン構成ファイルを提供します。プラグイン・インストール・ウィザードにより、必要なファイルがインストールされ、WebSphere Process Server の Web サーバーと基本のアプリケーション・サーバーが構成されてサーバー間の通信が可能になります。
WebSphere Application Server Application Clients	アプリケーション・クライアント・モジュールは、Java™ アプリケーションにアクセスするためのクライアントが格納されている Java Archive (JAR) ファイルです。基礎となる WebSphere Application Server 製品と通信する J2EE およびシン・アプリケーション・クライアントを実行するには、Application Server のエレメントをクライアントの実行先マシンにインストールしておく必要があります。ただし、システムに Application Server がインストールされていない場合は、使用しているクライアント・アプリケーションにスタンドアロンのクライアント・ランタイム環境を提供する Application Clients をインストールできます。
Eclipse ベースの IBM User Interface ヘルプ・システム	WebSphere Process Server 資料のダウンロード可能版は Eclipse 文書プラグインとしてパッケージ化されており、IBM User Interface ヘルプ・システムを使用して表示する必要があります。このヘルプ・システム (つまりビューアー) および文書プラグイン形式は、Eclipse Project によって開発されたオープン・ソースの方法を基にしています。
IBM Message Service Clients	<p>メッセージング機能と Web サービス機能を非 Java 環境で提供するソフトウェア。提供された以下のクライアントを使用することにより、アプリケーションと WebSphere Process Server 間の対話を拡張します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• IBM Message Service Client for C/C++ は JMS モデルを拡張して、C および C++ アプリケーションへのメッセージングを行います。</li> <li>• IBM Message Service Client for .NET を使用すると、.NET アプリケーションを JMS ベースの情報フローに加えることができます。</li> </ul>
WebSphere Application Server Toolkit	WebSphere Application Server Network Deployment などのアプリケーション・サーバーに公開するための基本的なアセンブリー・ツールおよびデプロイメント・ツールを提供します。このツールを使用して、基本的な単体テスト、デバッグ、プロファイル作成の各機能を実行することもできます。

表2. WebSphere Process Server に付属するソフトウェア (続き)

ソフトウェア	説明
WebSphere Application Server Edge Components	Edge Components を備え、高可用性、ハイ・ボリューム環境のニーズに対応しています。Edge Components には高性能のロード・バランシング、キャッシング、および集中セキュリティー機能があります。詳細については、WebSphere Application Server Network Deployment Edge Components の Web ページを参照してください。
DB2 Restricted Enterprise Edition	<p>DB2 Restricted Enterprise Edition には、DB2 Enterprise Server Edition (DB2 Enterprise 9) の一部が含まれています。DB2 Enterprise 9 は、中規模から大規模の企業のデータ・サーバー要件を満たすように設計されています。これは、Linux<sup>®</sup>、UNIX<sup>®</sup>、または Windows サーバーにデプロイでき、1 個のプロセッサから 100 個のプロセッサまで、あらゆるサイズに対応可能です。DB2 Enterprise 9 は、エンタープライズ全体のオンデマンド・ソリューションを構築するのに理想的なファウンデーションです。広範な配列の自律型または自己管理機能により、管理者の時間が開放されてビジネス・バリューの推進に集中できます。使いやすい DB2 および自己管理特性のおかげで、小規模なインプリメンテーションでは専門管理者が不要な場合さえあります。</p> <p>DB2 が提供するクライアントは以下のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• DB2 Runtime Client。このクライアントは、アプリケーションが DB2 サーバーにアクセスできるようにするのに最適です。</li> <li>• DB2 Client。このクライアントには、DB2 Runtime Client にあるすべての機能に加えて、クライアント/サーバー構成、データベース管理、アプリケーション開発の機能が組み込まれています。</li> </ul>
IBM Tivoli <sup>®</sup> Directory Server	IBM Tivoli Directory Server 製品は、強力な Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) インフラストラクチャーです。Tivoli Directory Server は、包括的な ID 管理アプリケーションと先進のソフトウェア・アーキテクチャーを展開するための基盤を提供します。詳しくは、IBM Tivoli Directory Server を参照してください。
IBM Tivoli Access Manager Servers	IBM Tivoli Access Manager Servers は、e-ビジネス・アプリケーションとすぐに統合して、機密保護機能のある、統一されたパーソナルな e-ビジネス体験を提供します。認証および許可の API を提供し、統合を行うことにより、Tivoli Access Manager Servers は、拡大する企業内に分散する可能性のあるビジネス上重要なアプリケーションおよびデータに対する機密保護機能のあるアクセスを支援します。詳しくは、IBM Tivoli Access Manager for e-business を参照してください。

表2. WebSphere Process Server に付属するソフトウェア (続き)

ソフトウェア	説明
WebSphere Partner Gateway Advanced Edition	WebSphere Partner Gateway では、EDI およびインターネット標準をサポートする統合ゲートウェイ・ソリューションが提供され、エンタープライズ・プロセスを外部パートナーまで拡張することが可能になります。WebSphere ソフトウェア・プラットフォームとのプロセス統合を目的とする統合パートナー・サービスが提供されます。企業間 (B2B) のゲートウェイ統合は企業と取引先コミュニティとの B2B 通信の集中化を可能にし、複数の取引先との連絡の一元的な管理および企業の末端でのセキュリティの高い環境が実現します。WebSphere Partner Gateway Advanced Edition について詳しくは、WebSphere Partner Gateway Advanced Edition を参照してください。
IBM WebSphere Installation Factory	IBM WebSphere Installation Factory は、すぐに使用可能なインストール・パッケージを作成するための機能です。このインストール・パッケージを使用することにより、特定のニーズに対して設計された WebSphere 製品を、安全な方法で何度も繰り返してインストールすることができます。このインストール・パッケージは、カスタマイズされた WebSphere Process Server のインストール・イメージです。このイメージには、1 つ以上の保守パッケージ、スクリプト、および作成されたインストーションのカスタマイズに役立つその他のファイルを含めることができます。
マイグレーション・ツール	マイグレーション・ツールを使用すると、前のバージョンの WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus からのマイグレーションを実行できます。WebSphere Process Server 用および WebSphere Application Server 用のマイグレーション・ツールがあります。マイグレーション・ツールにより、マイグレーション・プロセスが一通り行われます。
WebSphere ソフトウェア用の IBM Update Installer	WebSphere ソフトウェア用の IBM Update Installer は、更新 (暫定修正、フィックスバック、およびリフレッシュ・バック) を WebSphere ソフトウェア (WebSphere Enterprise Bus V6.2 リリース、WebSphere Process Server V6.2 リリース、WebSphere Application Server V6.1 リリース、IBM HTTP Server、Web Server プラグイン、および WebSphere Application Clients など) にインストールするために使用するツールです。
IBM Rational® Agent Controller	IBM Rational Agent Controller は、クライアント・アプリケーションが起動してローカルまたはリモートのアプリケーションを管理できるようにし、実行中のアプリケーションの情報を他のアプリケーションに提供するデーモンです。

表 2. WebSphere Process Server に付属するソフトウェア (続き)

ソフトウェア	説明
IBM Support Assistant	<p>IBM Support Assistant (ISA) は、さまざまな IBM サポート・リソースの使用を支援するツールです。IBM Support Assistant は、ソフトウェアに関する疑問点の解決に役立つ次の 4 つのコンポーネントを備えています。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 検索コンポーネント。複数の場所にある適切なサポート情報にアクセスする際に役立ちます。</li> <li>• サポート・リンク・コンポーネント: 各種の IBM Web リソース (IBM 製品サイト、IBM サポート・サイト、IBM ニュース・グループへのリンクなど) にアクセスするために便利なロケーションを提供します。</li> <li>• 教育コンポーネント: IBM 製品の教育 Web サイト (IBM Education Assistant モジュールなど) へのガイド付きアクセスを提供します。</li> <li>• サービス・コンポーネント: 主要なシステム・データを含む詳細な問題報告書を IBM に送ることができません。</li> </ul> <p>IBM Support Assistant と WebSphere Process Server を一緒に使用する場合は、IBM Support Assistant バージョン 3.0 をインストールしてから、WebSphere Process Server 用のプラグインをインストールする必要があります。</p>

## WebSphere Process Server に付属するメディア・パック

WebSphere Process Server には 8 つのメディア・パックがあります。各メディア・パックには、特定の稼働環境に適用される製品メディアが含まれています。

注: 各メディア・パックには、WebSphere Process Server 6.2.0 Quick Start CD が含まれています。この CD-ROM には、各国語版の「WebSphere Process Server クイック・スタート・ガイド」が収録されています。

プラットフォームごとの内容の詳細については、以下のセクションを参照してください。

- 『AIX メディア・パック』
- 11 ページの『HP-UX メディア・パック』
- 15 ページの『i5/OS メディア・パック』
- 18 ページの『Linux x86 メディア・パック』
- 22 ページの『Linux POWER メディア・パック』
- 26 ページの『Linux on System z メディア・パック』
- 28 ページの『Solaris メディア・パック』
- 32 ページの『Windows メディア・パック』

## AIX® メディア・パック

以下の表は、AIX 用 WebSphere Process Server に付属する 32 ビット・メディアを示します。

表 3. AIX メディア・パック (32 ビット) の内容

メディア・ラベル	供給形態
<b>アセンブリー 1: インストール用の推奨イメージ</b>	
WebSphere Process Server 6.2 AIX 32-bit	<p>1 枚の DVD に、以下のインストール可能コンポーネントを収録しています。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• WebSphere Process Server (WBI ディレクトリー内)</li> <li>• IBM WebSphere Installation Factory (IF ディレクトリー内)</li> <li>• WebSphere ソフトウェア用 IBM Update Installer (UpdateInstaller ディレクトリー内)</li> <li>• IBM User Interface ヘルプ・システム (IEHS ディレクトリー内)</li> <li>• メッセージング・クライアント (Message Service Client for C/C++) (MsgClients ディレクトリー内)</li> <li>• マイグレーション・ツール (Migration ディレクトリー内)</li> <li>• WebSphere Application Server Network Deployment (バージョン 6.1.0.21) (WAS ディレクトリー内)</li> </ul> <p><i>WebSphere Process Server V6.2 DVD、WebSphere Application Server Network Deployment Supplements V6.1 CD、および WebSphere Application Server Toolkit V6.1.1 Disk 1 CD の任意のインストール可能コンポーネントをインストールし、その情報を表示するには、ルート・ディレクトリーの Launchpad アプリケーションを使用します。ただし、IBM WebSphere Installation Factory は例外です。このコンポーネントは、654 ページの『IBM WebSphere Installation Factory のインストール』に示す手順に従ってインストールする必要があります。</i></p>
WebSphere Application Server Network Deployment 6.1 Supplements AIX 32-bit	<p>1 枚の CD-ROM に、以下のインストール可能コンポーネントを収録しています。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• WebSphere Application Server 用アプリケーション・クライアント</li> <li>• IBM HTTP Server</li> <li>• IBM Support Assistant</li> <li>• Web サーバー・プラグイン</li> <li>• マイグレーション・ツール</li> </ul>
WebSphere Application Server Toolkit 6.1.1 for 32-bit Windows	2 枚の CD-ROM。
WebSphere Application Server Toolkit 6.1.1 for 32-bit Linux on x86	2 枚の CD-ROM。
<b>アセンブリー 2: オプションのインストール・イメージ</b>	

表3. AIX メディア・パック (32 ビット) の内容 (続き)

メディア・ラベル	供給形態
WebSphere Application Server Network Deployment 6.1 for 32-bit AIX	1 枚の CD-ROM。 この CD-ROM は、WebSphere Application Server Network Deployment Custom Install Packages (CIP) を作成する場合の IBM WebSphere Installation Factory でのみ使用します。
WebSphere Application Server Network Deployment Rational Agent Controller 6.1.5	1 枚の CD-ROM。
Edge Components 6.1 for AIX	1 枚の CD-ROM。
Edge Components for IPv6 6.1	1 枚の CD-ROM。
Tivoli Access Manager 6.0	1 枚の CD-ROM。
Tivoli Directory Server 6.0	1 枚の CD-ROM。
IBM DB2 Restricted Enterprise Server Edition 9.5 - Authorized User Option - Activation CD	1 枚の CD-ROM。
IBM DB2 Enterprise Server Edition 9.5 for AIX	1 枚の DVD。
IBM Data Server Runtime Client 9.5 for AIX	1 枚の DVD。
IBM Data Server Drivers 9.5 for AIX, HP-UX, Solaris, Linux, and Windows	1 枚の DVD。
IBM Data Server Client 9.5 for AIX	1 枚の DVD。
WebSphere Partner Gateway Advanced Edition 6.2 for AIX	1 枚の CD-ROM。
Data Interchange Services 6.0 for Windows	1 枚の CD-ROM。

以下の表は、AIX 用 WebSphere Process Server に付属する 64 ビット・メディアを示します。

表4. AIX メディア・パック (64 ビット) の内容

メディア・ラベル	供給形態
アセンブリー 1: インストール用の推奨イメージ	

表 4. AIX メディア・パック (64 ビット) の内容 (続き)

メディア・ラベル	供給形態
WebSphere Process Server 6.2 AIX 64-bit	<p>1 枚の DVD に、以下のインストール可能コンポーネントを収録しています。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• WebSphere Process Server (WBI ディレクトリー内)</li> <li>• IBM WebSphere Installation Factory (IF ディレクトリー内)</li> <li>• WebSphere ソフトウェア用 IBM Update Installer (UpdateInstaller ディレクトリー内)</li> <li>• IBM User Interface ヘルプ・システム (IEHS ディレクトリー内)</li> <li>• メッセージング・クライアント (Message Service Client for C/C++) (MsgClients ディレクトリー内)</li> <li>• マイグレーション・ツール (Migration ディレクトリー内)</li> <li>• WebSphere Application Server Network Deployment (バージョン 6.1.0.21) (WAS ディレクトリー内)</li> </ul> <p><i>WebSphere Process Server V6.2 DVD、WebSphere Application Server Network Deployment Supplements V6.1 CD、および WebSphere Application Server Toolkit V6.1.1 Disk 1 CD の任意のインストール可能コンポーネントをインストールし、その情報を表示するには、ルート・ディレクトリーの Launchpad アプリケーションを使用します。ただし、IBM Installation Factory は例外です。このコンポーネントは、654 ページの『IBM WebSphere Installation Factory のインストール』に示す手順に従ってインストールする必要があります。</i></p>
WebSphere Application Server Network Deployment 6.1 Supplements AIX 64-bit	<p>1 枚の CD-ROM に、以下のインストール可能コンポーネントを収録しています。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• IBM HTTP Server</li> <li>• IBM Support Assistant</li> <li>• Web サーバー・プラグイン</li> <li>• マイグレーション・ツール</li> </ul>
<b>アセンブリー 2: オプションのインストール・イメージ</b>	
WebSphere Application Server Network Deployment 6.1 for 64-bit AIX	<p>1 枚の CD-ROM。</p> <p>この CD-ROM は、WebSphere Application Server Network Deployment Custom Install Packages (CIP) を作成する場合の IBM WebSphere Installation Factory でのみ使用します。</p>

## HP-UX メディア・パック

以下の表は、HP-UX 用 WebSphere Process Server に付属する 32 ビット・メディアを示します。

表 5. HP-UX メディア・パック (32 ビット) の内容

メディア・ラベル	供給形態
<b>アセンブリー 1: インストール用の推奨イメージ</b>	
WebSphere Process Server 6.2 HP-UX 32-bit	<p>1 枚の DVD に、以下のインストール可能コンポーネントを収録しています。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• WebSphere Process Server (WBI ディレクトリー内)</li> <li>• Installation Factory (IF ディレクトリー内)</li> <li>• WebSphere ソフトウェア用 IBM Update Installer (UpdateInstaller ディレクトリー内)</li> <li>• IBM User Interface ヘルプ・システム (IEHS ディレクトリー内)</li> <li>• メッセージング・クライアント (Message Service Client for C/C++) (MsgClients ディレクトリー内)</li> <li>• マイグレーション・ツール (Migration ディレクトリー内)</li> <li>• WebSphere Application Server Network Deployment (6.1.0.21) (WAS ディレクトリー内)</li> </ul> <p><i>WebSphere Process Server V6.2 DVD</i>、<i>WebSphere Application Server Network Deployment Supplements V6.1 CD</i>、および <i>WebSphere Application Server Toolkit V6.1.1 Disk 1 CD</i> の任意のインストール可能コンポーネントをインストールし、その情報を表示するには、ルート・ディレクトリーの Launchpad アプリケーションを使用します。ただし、IBM WebSphere Installation Factory は例外です。このコンポーネントは、654 ページの『IBM WebSphere Installation Factory のインストール』に示す手順に従ってインストールする必要があります。</p>
WebSphere Application Server Network Deployment 6.1 Supplements HP-UX 32-bit	<p>1 枚の CD-ROM に、以下のインストール可能コンポーネントを収録しています。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• WebSphere Application Server 用アプリケーション・クライアント</li> <li>• IBM HTTP Server</li> <li>• IBM Support Assistant</li> <li>• Web サーバー・プラグイン</li> <li>• マイグレーション・ツール</li> </ul>
WebSphere Application Server Toolkit 6.1.1 for 32-bit Windows	2 枚の CD-ROM。
WebSphere Application Server Toolkit 6.1.1 for 32-bit Linux on x86	2 枚の CD-ROM。
<b>アセンブリー 2: オプションのインストール・イメージ</b>	

表 5. HP-UX メディア・パック (32 ビット) の内容 (続き)

メディア・ラベル	供給形態
WebSphere Application Server Network Deployment 6.1 for 32-bit HP-UX	1 枚の CD-ROM。 この CD-ROM は、WebSphere Application Server Network Deployment Custom Install Packages (CIP) を作成する場合の IBM WebSphere Installation Factory でのみ使用します。
Rational Agent Controller 6.1.5	1 枚の CD-ROM。
Edge Components 6.1 HP-UX	1 枚の CD-ROM。
Edge Components 6.1 HP-UX for IPv6	1 枚の CD-ROM。
Tivoli Access Manager 6.0 HP-UX	1 枚の CD-ROM。
Tivoli Directory Server 6.0	1 枚の CD-ROM。
IBM DB2 Restricted Enterprise Server Edition 9.5 - Authorized User Option - Activation CD	1 枚の CD-ROM。
IBM DB2 Enterprise Server Edition 9.5 for HP-UX on HP Integrity Itanium-based systems	1 枚の DVD。
IBM Data Server Runtime Client 9.5 for HP-UX on HP Integrity Itanium-based systems	1 枚の DVD。
IBM Data Server Drivers 9.5 for AIX, HP-UX, Solaris, Linux, and Windows	1 枚の DVD。
IBM Data Server Client 9.5 for HP-UX on HP Integrity Itanium-based systems	1 枚の DVD。

以下の表は、HP-UX 用 WebSphere Process Server に付属する 64 ビット・メディアを示します。

表 6. HP-UX メディア・パック (64 ビット) の内容

メディア・ラベル	供給形態
アセンブリー 1: インストール用の推奨イメージ	

表 6. HP-UX メディア・パック (64 ビット) の内容 (続き)

メディア・ラベル	供給形態
WebSphere Process Server 6.2 HP-UX IA64	<p>1 枚の DVD に、以下のインストール可能コンポーネントを収録しています。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• WebSphere Process Server (WBI ディレクトリー内)</li> <li>• IBM WebSphere Installation Factory (IF ディレクトリー内)</li> <li>• WebSphere ソフトウェア用 IBM Update Installer (UpdateInstaller ディレクトリー内)</li> <li>• IBM User Interface ヘルプ・システム (IEHS ディレクトリー内)</li> <li>• メッセージング・クライアント (Message Service Client for C/C++) (MsgClients ディレクトリー内)</li> <li>• マイグレーション・ツール (Migration ディレクトリー内)</li> <li>• WebSphere Application Server Network Deployment (6.1.0.21) (WAS ディレクトリー内)</li> </ul> <p><i>WebSphere Process Server V6.2 DVD</i>、<i>WebSphere Application Server Network Deployment Supplements V6.1 CD</i>、および <i>WebSphere Application Server Toolkit V6.1.1 Disk 1 CD</i> の任意のインストール可能コンポーネントをインストールし、その情報を表示するには、ルート・ディレクトリーの Launchpad アプリケーションを使用します。ただし、IBM WebSphere Installation Factory は例外です。このコンポーネントは、654 ページの『IBM WebSphere Installation Factory のインストール』に示す手順に従ってインストールする必要があります。</p>
WebSphere Application Server Network Deployment 6.1 Supplements HP-UX 64-bit	<p>1 枚の CD-ROM に、以下のインストール可能コンポーネントを収録しています。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• IBM HTTP Server</li> <li>• IBM Support Assistant</li> <li>• Web サーバー・プラグイン</li> <li>• マイグレーション・ツール</li> </ul>
<b>アセンブリー 2: オプションのインストール・イメージ</b>	
WebSphere Application Server Network Deployment 6.1 for 64-bit HP-UX	<p>1 枚の CD-ROM。</p> <p>この CD-ROM は、WebSphere Application Server Network Deployment Custom Install Packages (CIP) を作成する場合の IBM WebSphere Installation Factory でのみ使用します。</p>
Edge Components V6.1 HP-UX IA64 64-bit	1 枚の CD-ROM。
Edge Components V6.1 HP-UX IA64 64-bit for IPV6	1 枚の CD-ROM。

表 6. HP-UX メディア・パック (64 ビット) の内容 (続き)

メディア・ラベル	供給形態
WebSphere Partner Gateway Advanced Edition 6.2 for HP-UX IA64	1 枚の CD-ROM。
Data Interchange Services 6.0 for Advanced Edition	1 枚の CD-ROM。

## i5/OS メディア・パック

以下の表は、i5/OS 用 WebSphere Process Server に付属するメディアを示します。

表 7. i5/OS メディア・パックの内容

メディア・ラベル	供給形態
<b>アセンブリー 1: インストール用の推奨イメージ</b>	
WebSphere Process Server 6.2 DVD	<p>1 枚の DVD に、以下のインストール可能コンポーネントを収録しています。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• WebSphere Process Server (WBI ディレクトリー内)</li> <li>• IBM WebSphere Installation Factory (IF ディレクトリー内)</li> <li>• WebSphere ソフトウェア用 IBM Update Installer (UpdateInstaller ディレクトリー内)</li> <li>• IBM User Interface ヘルプ・システム (IEHS ディレクトリー内)</li> <li>• WebSphere Application Server Network Deployment (バージョン 6.1.0.21) (WAS ディレクトリー内)</li> </ul> <p><i>WebSphere Process Server V6.2 DVD</i>、<i>WebSphere Application Server Network Deployment Supplements V6.1 CD</i>、および <i>WebSphere Application Server Toolkit V6.1.1 Disk 1 CD</i> の任意のインストール可能コンポーネントをインストールし、その情報を表示するには、ルート・ディレクトリーの Launchpad アプリケーションを使用します。ただし、IBM WebSphere Installation Factory は例外です。このコンポーネントは、654 ページの『IBM WebSphere Installation Factory のインストール』に示す手順に従ってインストールする必要があります。</p>
WebSphere Application Server Network Deployment 6.1 Supplements for i5/OS	<p>1 枚の CD-ROM に、以下のインストール可能コンポーネントを収録しています。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• WebSphere Application Server 用アプリケーション・クライアント</li> <li>• IBM Support Assistant</li> <li>• Web サーバー・プラグイン</li> <li>• マイグレーション・ツール</li> </ul>
WebSphere Application Server Toolkit 6.1.1 for 32-bit Windows	2 枚の CD-ROM。

表 7. i5/OS メディア・パックの内容 (続き)

メディア・ラベル	供給形態
WebSphere Application Server Toolkit 6.1.1 for 32-bit Linux on x86	2 枚の CD-ROM。
<b>アセンブリー 2: オプションのインストール・イメージ</b>	
WebSphere Application Server Network Deployment 6.1 for i5/OS	1 枚の CD-ROM。 この CD-ROM は、WebSphere Application Server Network Deployment Custom Install Packages (CIP) を作成する場合の IBM WebSphere Installation Factory でのみ使用します。
Rational Agent Controller 6.1.5	1 枚の CD-ROM。
WebSphere Application Server Network Deployment 6.1 Windows Supplements - 32-bit	1 枚の CD-ROM。
WebSphere Application Server Network Deployment 6.1 Supplements AIX - 32-bit	1 枚の CD-ROM。
WebSphere Application Server Network Deployment 6.1 Supplements Solaris - 32-bit	1 枚の CD-ROM。
WebSphere Application Server Network Deployment 6.1 Supplements HP-UX - 32-bit	1 枚の CD-ROM。
WebSphere Application Server Network Deployment 6.1 Supplements Linux x86 32-bit	1 枚の CD-ROM。
WebSphere Application Server 6.1 WorldTypeFonts Linux Supplements - Linux x86 32-bit	1 枚の CD-ROM。
WebSphere Application Server Network Deployment 6.1 Linux PowerPC® Supplements	1 枚の CD-ROM。
WebSphere Application Server Network Deployment 6.1 Linux on z Supplements	1 枚の CD-ROM。
Edge Components V6.1 Windows	1 枚の CD-ROM。
Edge Components V6.1 Windows for IPV6	1 枚の CD-ROM。
Edge Components V6.1 AIX	1 枚の CD-ROM。
Edge Components V6.1 AIX for IPV6	1 枚の CD-ROM。
Edge Components V6.1 Solaris	1 枚の CD-ROM。
Edge Components V6.1 Solaris for IPV6	1 枚の CD-ROM。
Edge Components V6.1 HP-UX	1 枚の CD-ROM。

表 7. i5/OS メディア・パックの内容 (続き)

メディア・ラベル	供給形態
Edge Components V6.1 HP-UX for IPV6	1 枚の CD-ROM。
Edge Components V6.1 Linux x86	1 枚の CD-ROM。
Edge Components V6.1 Linux x86 for IPV6	1 枚の CD-ROM。
Edge Components V6.1 Linux PPC 32-bit	1 枚の CD-ROM。
Edge Components V6.1 Linux PPC 32-bit for IPV6	1 枚の CD-ROM。
Edge Components V6.1 Linux on z	1 枚の CD-ROM。
<b>アセンブリ 3: オプションのインストール・イメージ</b>	
WebSphere Application Server Network Deployment 6.1 Windows 2k3 AMD 64-bit Supplements	1 枚の CD-ROM。
WebSphere Application Server Network Deployment 6.1 Supplements AIX 64-bit	1 枚の CD-ROM。
WebSphere Application Server Network Deployment 6.1 Supplements Solaris Opteron 64-bit	1 枚の CD-ROM。
WebSphere Application Server Network Deployment 6.1 Supplements Solaris SPARC 64-bit	1 枚の CD-ROM。
WebSphere Application Server Network Deployment 6.1 Supplements HP-UX 64-bit	1 枚の CD-ROM。
WebSphere Application Server Network Deployment 6.1 Linux 64-bit Supplements	1 枚の CD-ROM。
WebSphere Application Server Network Deployment 6.1 Linux PowerPC 64-bit Supplements	1 枚の CD-ROM。
WebSphere Application Server Network Deployment 6.1 Linux on z 64-bit Supplements	1 枚の CD-ROM。
Edge Components 6.1 Windows AMD Opteron 64-bit	1 枚の CD-ROM。
Edge Components 6.1 Windows AMD Opteron 64-bit IPV6	1 枚の CD-ROM。

表7. *i5/OS* メディア・パックの内容 (続き)

メディア・ラベル	供給形態
Edge Components 6.1 Solaris x86-64	1 枚の CD-ROM。
Edge Components 6.1 HP-UX IA64 64-bit	1 枚の CD-ROM。
Edge Components 6.1 HP-UX IA64 64-bit for IPV6	1 枚の CD-ROM。
Edge Components 6.1 Linux x86 64-bit	1 枚の CD-ROM。
Edge Components 6.1 Linux x86 64-bit for IPV6	1 枚の CD-ROM。
Edge Components 6.1 Linux PPC 64-bit	1 枚の CD-ROM。
Edge Components 6.1 Linux PPC 64-bit for IPV6	1 枚の CD-ROM。
Edge Components 6.1 Linux on z 64-bit for IPV6	1 枚の CD-ROM。

## Linux x86 メディア・パック

以下の表は、Linux x86 用 WebSphere Process Server に付属する 32 ビット・メディアを示します。

表8. *Linux x86* メディア・パック (32 ビット) の内容

メディア・ラベル	供給形態
アセンブリー 1: インストール用の推奨イメージ	

表 8. Linux x86 メディア・バック (32 ビット) の内容 (続き)

メディア・ラベル	供給形態
WebSphere Process Server 6.2 Linux x86 32-bit	<p>1 枚の DVD に、以下のインストール可能コンポーネントを収録しています。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• WebSphere Process Server (WBI ディレクトリー内)</li> <li>• IBM WebSphere Installation Factory (IF ディレクトリー内)</li> <li>• WebSphere ソフトウェア用 IBM Update Installer (UpdateInstaller ディレクトリー内)</li> <li>• IBM User Interface ヘルプ・システム (IEHS ディレクトリー内)</li> <li>• メッセージング・クライアント (Message Service Client for C/C++) (MsgClients ディレクトリー内)</li> <li>• マイグレーション・ツール (Migration ディレクトリー内)</li> <li>• WebSphere Application Server Network Deployment (バージョン 6.1.0.21) (WAS ディレクトリー内)</li> </ul> <p><i>WebSphere Process Server V6.2 DVD</i>、<i>WebSphere Application Server Network Deployment Supplements V6.1 CD</i>、および <i>WebSphere Application Server Toolkit V6.1.1 Disk 1 CD</i> の任意のインストール可能コンポーネントをインストールし、その情報を表示するには、ルート・ディレクトリーの Launchpad アプリケーションを使用します。ただし、IBM WebSphere Installation Factory は例外です。このコンポーネントは、654 ページの『IBM WebSphere Installation Factory のインストール』に示す手順に従ってインストールする必要があります。</p>
WebSphere Application Server Network Deployment Supplements 6.1 Linux x86 32-bit Supplements	<p>1 枚の CD-ROM に、以下のインストール可能コンポーネントを収録しています。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• WebSphere Application Server 用アプリケーション・クライアント</li> <li>• IBM HTTP Server</li> <li>• IBM Support Assistant</li> <li>• Web サーバー・プラグイン</li> <li>• マイグレーション・ツール</li> </ul>
WebSphere Application Server 6.1 WorldTypeFonts Linux Supplements	1 枚の CD-ROM。
WebSphere Application Server Toolkit 6.1.1 for 32-bit Windows	2 枚の CD-ROM。
WebSphere Application Server Toolkit 6.1.1 for 32-bit Linux on x86	2 枚の CD-ROM。
<b>アセンブリー 2: オプションのインストール・イメージ</b>	

表 8. Linux x86 メディア・パック (32 ビット) の内容 (続き)

メディア・ラベル	供給形態
WebSphere Application Server Network Deployment 6.1 for Linux x86 32-bit	1 枚の CD-ROM。 この CD-ROM は、WebSphere Application Server Network Deployment Custom Install Packages (CIP) を作成する場合の IBM WebSphere Installation Factory でのみ使用します。
Rational Agent Controller 6.1.5	1 枚の CD-ROM。
Edge Components 6.1 Linux x86	1 枚の CD-ROM。
Edge Components 6.1 Linux x86 for IPV6	1 枚の CD-ROM。
Tivoli Access Manager 6.0 Linux Intel®	1 枚の CD-ROM。
Tivoli Directory Server 6.0 Linux Intel	1 枚の CD-ROM。
IBM Data Server Runtime Client 9.5 for Linux on 32-bit AMD and Intel systems (x86)	1 枚の DVD。
IBM Data Server Drivers 9.5 for AIX, HP-UX, Solaris, Linux, and Windows	1 枚の DVD。
IBM Data Server Client 9.5 for Linux on 32-bit AMD and Intel systems (x86)	1 枚の DVD。
WebSphere Partner Gateway Advanced Edition 6.2 for Linux Intel	1 枚の CD-ROM。
Data Interchange Services 6.0 Advanced Edition	1 枚の CD-ROM。

以下の表は、Linux x86 用 WebSphere Process Server に付属する 64 ビット・メディアを示します。

表 9. Linux x86 メディア・パック (64 ビット) の内容

メディア・ラベル	供給形態
アセンブリー 1: インストール用の推奨イメージ	

表9. Linux x86 メディア・バック (64 ビット) の内容 (続き)

メディア・ラベル	供給形態
WebSphere Process Server 6.2 Linux x86 64-bit	<p>1 枚の DVD に、以下のインストール可能コンポーネントを収録しています。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• WebSphere Process Server (WBI ディレクトリー内)</li> <li>• IBM WebSphere Installation Factory (IF ディレクトリー内)</li> <li>• WebSphere ソフトウェア用 IBM Update Installer (UpdateInstaller ディレクトリー内)</li> <li>• IBM User Interface ヘルプ・システム (IEHS ディレクトリー内)</li> <li>• メッセージング・クライアント (Message Service Client for C/C++) (MsgClients ディレクトリー内)</li> <li>• マイグレーション・ツール (Migration ディレクトリー内)</li> <li>• WebSphere Application Server Network Deployment (バージョン 6.1.0.21) (WAS ディレクトリー内)</li> </ul> <p><i>WebSphere Process Server V6.2 DVD、WebSphere Application Server Network Deployment Supplements V6.1 CD、および WebSphere Application Server Toolkit V6.1.1 Disk 1 CD の任意のインストール可能コンポーネントをインストールし、その情報を表示するには、ルート・ディレクトリーの Launchpad アプリケーションを使用します。ただし、IBM WebSphere Installation Factory は例外です。このコンポーネントは、654 ページの『IBM WebSphere Installation Factory のインストール』に示す手順に従ってインストールする必要があります。</i></p>
WebSphere Application Server Network Deployment Supplements 6.1 Linux 64-bit	<p>1 枚の CD-ROM に、以下のインストール可能コンポーネントを収録しています。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• IBM HTTP Server</li> <li>• IBM Support Assistant</li> <li>• Web サーバー・プラグイン</li> <li>• マイグレーション・ツール</li> </ul>
<b>アセンブリー 2: オプションのインストール・イメージ</b>	
WebSphere Application Server Network Deployment 6.1 for Linux 64-bit	<p>1 枚の CD-ROM。</p> <p>この CD-ROM は、WebSphere Application Server Network Deployment Custom Install Packages (CIP) を作成する場合の IBM WebSphere Installation Factory でのみ使用します。</p>
Edge Components 6.1 Linux x86 64-bit	1 枚の CD-ROM。
Edge Components 6.1 Linux x86 64-bit for IPv6	1 枚の CD-ROM。

表9. Linux x86 メディア・パック (64 ビット) の内容 (続き)

メディア・ラベル	供給形態
IBM DB2 Restricted Enterprise Server Edition 9.5 - Authorized User Option - Activation CD	1 枚の CD-ROM。
IBM DB2 Enterprise Server Edition 9.5 for Linux on AMD64 and Intel EM64T systems (x64)	1 枚の DVD。
IBM Data Server Runtime Client 9.5 for Linux on AMD64 and Intel EM64T systems (x64)	1 枚の DVD。
IBM Data Server Drivers 9.5 for AIX, HP-UX, Solaris, Linux, and Windows	1 枚の DVD。
IBM Data Server Client 9.5 for Linux on AMD64 and Intel EM64T systems (x64)	1 枚の DVD。

## Linux POWER™ メディア・パック

以下の表は、Linux POWER 用 WebSphere Process Server に付属する 32 ビット・メディアを示します。

表10. Linux POWER メディア・パック (32 ビット) の内容

メディア・ラベル	供給形態
アセンブリー 1: インストール用の推奨イメージ	

表 10. Linux POWER メディア・パック (32 ビット) の内容 (続き)

メディア・ラベル	供給形態
WebSphere Process Server 6.2 Linux PPC 32-bit	<p>1 枚の DVD に、以下のインストール可能コンポーネントを収録しています。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• WebSphere Process Server (WBI ディレクトリー内)</li> <li>• IBM WebSphere Installation Factory (IF ディレクトリー内)</li> <li>• WebSphere ソフトウェア用 IBM Update Installer (UpdateInstaller ディレクトリー内)</li> <li>• IBM User Interface ヘルプ・システム (IEHS ディレクトリー内)</li> <li>• メッセージング・クライアント (Message Service Client for C/C++) (MsgClients ディレクトリー内)</li> <li>• マイグレーション・ツール (Migration ディレクトリー内)</li> <li>• WebSphere Application Server Network Deployment (バージョン 6.1.0.21) (WAS ディレクトリー内)</li> </ul> <p><i>WebSphere Process Server V6.2 DVD、WebSphere Application Server Network Deployment Supplements V6.1 CD、および WebSphere Application Server Toolkit V6.1.1 Disk 1 CD の任意のインストール可能コンポーネントをインストールし、その情報を表示するには、ルート・ディレクトリーの Launchpad アプリケーションを使用します。ただし、IBM WebSphere Installation Factory は例外です。このコンポーネントは、654 ページの『IBM WebSphere Installation Factory のインストール』に示す手順に従ってインストールする必要があります。</i></p>
WebSphere Application Server Network Deployment 6.1 Linux PowerPC Supplements	<p>1 枚の CD-ROM に、以下のインストール可能コンポーネントを収録しています。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• WebSphere Application Server 用アプリケーション・クライアント</li> <li>• IBM HTTP Server</li> <li>• IBM Support Assistant</li> <li>• Web サーバー・プラグイン</li> <li>• マイグレーション・ツール</li> </ul>
WebSphere Application Server 6.1 WorldTypeFonts Linux Supplements	1 枚の CD-ROM。
Application Server Toolkit 6.1.1 for Windows CD	2 枚の CD-ROM。
Application Server Toolkit 6.1.1 for Linux on x86 CD	2 枚の CD-ROM。
<b>アセンブリー 2: オプションのインストール・イメージ</b>	

表 10. Linux POWER メディア・パック (32 ビット) の内容 (続き)

メディア・ラベル	供給形態
WebSphere Application Server Network Deployment 6.1 for Linux PowerPC	1 枚の CD-ROM。  この CD-ROM は、WebSphere Application Server Network Deployment Custom Install Packages (CIP) を作成する場合の IBM WebSphere Installation Factory でのみ使用します。
Rational Agent Controller 6.1.5	1 枚の CD-ROM。
Edge Components 6.1 Linux PPC 32-bit	1 枚の CD-ROM。
Edge Components Linux PPC 32-bit for IPV6	1 枚の CD-ROM。
Tivoli Access Manager 6.0 Linux PowerPC	1 枚の CD-ROM。
Tivoli Directory Server 6.0 Linux PowerPC	1 枚の CD-ROM。
IBM DB2 Restricted Enterprise Server Edition 9.5 - Authorized User Option - Activation CD	1 枚の CD-ROM。
IBM DB2 Enterprise Server Edition 9.5 for Linux on POWER (System i and System p <sup>®</sup> ) systems	1 枚の DVD。
IBM Data Server Runtime Client 9.5 for Linux on POWER (System i and System p) systems	1 枚の DVD。
IBM Data Server Drivers 9.5 for AIX, HP-UX, Solaris, Linux, and Windows	1 枚の DVD。
IBM Data Server Client 9.5 for Linux on POWER (System i and System p) systems	1 枚の DVD。
WebSphere Partner Gateway Advanced Edition 6.2 Linux PowerPC	1 枚の CD-ROM。
Data Interchange Services 6.0 for Advanced Edition	1 枚の CD-ROM。

以下の表は、Linux POWER 用 WebSphere Process Server に付属する 64 ビット・メディアを示します。

表 11. Linux POWER メディア・パック (64 ビット) の内容

メディア・ラベル	供給形態
アセンブリー 1: インストール用の推奨イメージ	

表 11. Linux POWER メディア・パック (64 ビット) の内容 (続き)

メディア・ラベル	供給形態
WebSphere Process Server 6.2 Linux PPC 64-bit	<p>1 枚の DVD に、以下のインストール可能コンポーネントを収録しています。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• WebSphere Process Server (WBI ディレクトリー内)</li> <li>• IBM WebSphere Installation Factory (IF ディレクトリー内)</li> <li>• WebSphere ソフトウェア用 IBM Update Installer (UpdateInstaller ディレクトリー内)</li> <li>• IBM User Interface ヘルプ・システム (IEHS ディレクトリー内)</li> <li>• メッセージング・クライアント (Message Service Client for C/C++) (MsgClients ディレクトリー内)</li> <li>• マイグレーション・ツール (Migration ディレクトリー内)</li> <li>• WebSphere Application Server Network Deployment (バージョン 6.1.0.21) (WAS ディレクトリー内)</li> </ul> <p><i>WebSphere Process Server V6.2 DVD、WebSphere Application Server Network Deployment Supplements V6.1 CD、および WebSphere Application Server Toolkit V6.1.1 Disk 1 CD の任意のインストール可能コンポーネントをインストールし、その情報を表示するには、ルート・ディレクトリーの Launchpad アプリケーションを使用します。ただし、IBM WebSphere Installation Factory は例外です。このコンポーネントは、654 ページの『IBM WebSphere Installation Factory のインストール』に示す手順に従ってインストールする必要があります。</i></p>
WebSphere Application Server Network Deployment 6.1 Linux PowerPC 64-bit Supplements	<p>1 枚の CD-ROM に、以下のインストール可能コンポーネントを収録しています。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• IBM HTTP Server</li> <li>• IBM Support Assistant</li> <li>• Web サーバー・プラグイン</li> <li>• マイグレーション・ツール</li> </ul>
<b>アセンブリー 2: オプションのインストール・イメージ</b>	
WebSphere Application Server Network Deployment 6.1 for Linux PowerPC 64-bit	<p>1 枚の CD-ROM。</p> <p>この CD-ROM は、WebSphere Application Server Network Deployment Custom Install Packages (CIP) を作成する場合の IBM WebSphere Installation Factory でのみ使用します。</p>
Edge Components 6.1 Linux PPC 64-bit	1 枚の CD-ROM。
Edge Components 6.1 Linux PPC 64-bit for IPv6	1 枚の CD-ROM。

## Linux on System z® メディア・パック

以下の表は、System z 上の Linux 用 WebSphere Process Server に付属する 31 ビット・メディアを示します。

表 12. Linux on System z メディア・パック (31 ビット) の内容

メディア・ラベル	供給形態
<b>アセンブリー 1: インストール用の推奨イメージ</b>	
WebSphere Process Server 6.2 Linux on System z 31-bit	<p>1 枚の DVD に、以下のインストール可能コンポーネントを収録しています。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• WebSphere Process Server (WBI ディレクトリー内)</li> <li>• IBM WebSphere Installation Factory (IF ディレクトリー内)</li> <li>• WebSphere ソフトウェア用 IBM Update Installer (UpdateInstaller ディレクトリー内)</li> <li>• IBM User Interface ヘルプ・システム (IEHS ディレクトリー内)</li> <li>• メッセージング・クライアント (Message Service Client for C/C++) (MsgClients ディレクトリー内)</li> <li>• マイグレーション・ツール (Migration ディレクトリー内)</li> <li>• WebSphere Application Server Network Deployment (バージョン 6.1.0.21) (WAS ディレクトリー内)</li> </ul> <p><i>WebSphere Process Server V6.2 DVD、WebSphere Application Server Network Deployment Supplements V6.1 CD、および WebSphere Application Server Toolkit V6.1.1 Disk 1 CD の任意のインストール可能コンポーネントをインストールし、その情報を表示するには、ルート・ディレクトリーの Launchpad アプリケーションを使用します。ただし、IBM WebSphere Installation Factory は例外です。このコンポーネントは、654 ページの『IBM WebSphere Installation Factory のインストール』に示す手順に従ってインストールする必要があります。</i></p>
WebSphere Application Server Network Deployment 6.1 Linux on System z Supplements	<p>1 枚の CD-ROM に、以下のインストール可能コンポーネントを収録しています。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• IBM HTTP Server</li> <li>• IBM Support Assistant</li> <li>• Web サーバー・プラグイン</li> <li>• マイグレーション・ツール</li> </ul>
WebSphere Process Server 6.1 WorldTypeFonts Linux Supplements	1 枚の CD-ROM。
Application Server Toolkit 6.1.1 for 32-bit Windows	2 枚の CD-ROM。
Application Server Toolkit 6.1.1 for 32-bit Linux on x86	2 枚の CD-ROM。
<b>アセンブリー 2: オプションのインストール・イメージ</b>	

表 12. Linux on System z メディア・パック (31 ビット) の内容 (続き)

メディア・ラベル	供給形態
WebSphere Application Server Network Deployment 6.1 for Linux on System z	1 枚の CD-ROM。 この CD-ROM は、WebSphere Application Server Network Deployment Custom Install Packages (CIP) を作成する場合の IBM WebSphere Installation Factory でのみ使用します。
Rational Agent Controller 6.1.5	1 枚の CD-ROM。
Edge Components 6.1 for Linux on System z	1 枚の CD-ROM。
Tivoli Access Manager 6.0 for Linux on System z	1 枚の CD-ROM。
Tivoli Directory Server 6.0 for Linux on System z	1 枚の CD-ROM。
IBM DB2 Restricted Enterprise Server Edition 9.5 - Authorized User Option - Activation CD	1 枚の CD-ROM。
IBM DB2 Enterprise Server Edition 9.5 for Linux on System z	1 枚の DVD。
IBM Data Server Runtime Client 9.5 for Linux on System z	1 枚の DVD。
IBM Data Server Drivers 9.5 for AIX, HP-UX, Solaris, Linux, and Windows	1 枚の DVD。
IBM Data Server Client 9.5 for System z	1 枚の DVD。

以下の表は、System z 上の Linux 用 WebSphere Process Server に付属する 64 ビット・メディアを示します。

表 13. Linux on System z メディア・パック (64 ビット) の内容

メディア・ラベル	供給形態
アセンブリー 1: インストール用の推奨イメージ	

表 13. Linux on System z メディア・パック (64 ビット) の内容 (続き)

メディア・ラベル	供給形態
WebSphere Process Server 6.2 Linux on System z 64-bit	<p>1 枚の DVD に、以下のインストール可能コンポーネントを収録しています。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• WebSphere Process Server (WBI ディレクトリー内)</li> <li>• IBM WebSphere Installation Factory (IF ディレクトリー内)</li> <li>• WebSphere ソフトウェア用 IBM Update Installer (UpdateInstaller ディレクトリー内)</li> <li>• IBM User Interface ヘルプ・システム (IEHS ディレクトリー内)</li> <li>• メッセージング・クライアント (Message Service Client for C/C++) (MsgClients ディレクトリー内)</li> <li>• マイグレーション・ツール (Migration ディレクトリー内)</li> <li>• WebSphere Application Server Network Deployment (バージョン 6.1.0.21) (WAS ディレクトリー内)</li> </ul> <p><i>WebSphere Process Server V6.2 DVD</i>、<i>WebSphere Application Server Network Deployment Supplements V6.1 CD</i>、および <i>WebSphere Application Server Toolkit V6.1.1 Disk 1 CD</i> の任意のインストール可能コンポーネントをインストールし、その情報を表示するには、ルート・ディレクトリーの Launchpad アプリケーションを使用します。ただし、IBM WebSphere Installation Factory は例外です。このコンポーネントは、654 ページの『IBM WebSphere Installation Factory のインストール』に示す手順に従ってインストールする必要があります。</p>
WebSphere Application Server Network Deployment 6.1 Linux on System z 64-bit Supplements	<p>1 枚の CD-ROM に、以下のインストール可能コンポーネントを収録しています。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• IBM HTTP Server</li> <li>• IBM Support Assistant</li> <li>• Web サーバー・プラグイン</li> <li>• マイグレーション・ツール</li> </ul>
<b>アセンブリー 2: オプションのインストール・イメージ</b>	
WebSphere Application Server Network Deployment 6.1 for Linux on z 64-bit	<p>1 枚の CD-ROM。</p> <p>この CD-ROM は、WebSphere Application Server Network Deployment Custom Install Packages (CIP) を作成する場合の IBM WebSphere Installation Factory でのみ使用します。</p>
Edge Components for Linux on System z 64-bit for IPV6	<p>1 枚の CD-ROM。</p>

## Solaris メディア・パック

以下の表に、WebSphere Process Server for Solaris x86 に付属する 32 ビット・メディアを示します。

表 14. Solaris x86 メディア・パック (32 ビット) の内容

メディア・ラベル	供給形態
<b>アセンブリー 1: インストール用の推奨イメージ</b>	
WebSphere Process Server 6.2 Solaris 32-bit	<p>1 枚の DVD に、以下のインストール可能コンポーネントを収録しています。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• WebSphere Process Server (WBI ディレクトリー内)</li> <li>• IBM WebSphere Installation Factory (IF ディレクトリー内)</li> <li>• WebSphere ソフトウェア用 IBM Update Installer (UpdateInstaller ディレクトリー内)</li> <li>• IBM User Interface ヘルプ・システム (IEHS ディレクトリー内)</li> <li>• メッセージング・クライアント (Message Service Client for C/C++) (MsgClients ディレクトリー内)</li> <li>• マイグレーション・ツール (Migration ディレクトリー内)</li> <li>• WebSphere Application Server Network Deployment (バージョン 6.1.0.21) (WAS ディレクトリー内)</li> </ul> <p><i>WebSphere Process Server V6.2 DVD、WebSphere Application Server Network Deployment Supplements V6.1 CD、および WebSphere Application Server Toolkit V6.1.1 Disk 1 CD の任意のインストール可能コンポーネントをインストールし、その情報を表示するには、ルート・ディレクトリーの Launchpad アプリケーションを使用します。ただし、IBM WebSphere Installation Factory は例外です。このコンポーネントは、654 ページの『IBM WebSphere Installation Factory のインストール』に示す手順に従ってインストールする必要があります。</i></p>
WebSphere Application Server Network Deployment Supplements 6.1 Solaris 32-bit	<p>1 枚の CD-ROM に、以下のインストール可能コンポーネントを収録しています。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• WebSphere Application Server 用アプリケーション・クライアント</li> <li>• IBM HTTP Server</li> <li>• IBM Support Assistant</li> <li>• Web サーバー・プラグイン</li> <li>• マイグレーション・ツール</li> </ul>
Application Server Toolkit 6.1.1 for 32-bit Windows	2 枚の CD-ROM。
Application Server Toolkit 6.1.1 for 32-bit Linux on x86	2 枚の CD-ROM。
<b>アセンブリー 2: オプションのインストール・イメージ</b>	

表 14. Solaris x86 メディア・パック (32 ビット) の内容 (続き)

メディア・ラベル	供給形態
WebSphere Application Server Network Deployment 6.1 for 32-bit Solaris	1 枚の CD-ROM。 この CD-ROM は、WebSphere Application Server Network Deployment Custom Install Packages (CIP) を作成する場合の IBM WebSphere Installation Factory でのみ使用します。
Rational Agent Controller 6.1.5	1 枚の CD-ROM。
Edge Components 6.1 Solaris	1 枚の CD-ROM。
Edge Components 6.1 Solaris for IPV6	1 枚の CD-ROM。
Tivoli Access Manager 6.0 Solaris	1 枚の CD-ROM。
Tivoli Directory Server 6.0 Solaris	1 枚の CD-ROM。
IBM DB2 Restricted Enterprise Server Edition 9.5 - Authorized User Option - Activation CD	1 枚の CD-ROM。
IBM DB2 Enterprise Server Edition 9.5 for Solaris on UltraSPARC systems	1 枚の DVD。
IBM Data Server Runtime Client 9.5 for Solaris on UltraSPARC systems	1 枚の DVD。
IBM Data Server Drivers 9.5 for AIX, HP-UX, Solaris, Linux, and Windows	1 枚の DVD。
IBM Data Server Client 9.5 for Solaris on UltraSPARC systems	1 枚の DVD。
WebSphere Partner Gateway Advanced Edition 6.2 Solaris	1 枚の CD-ROM。
Data Interchange Services 6.0 for Advanced Edition	1 枚の CD-ROM。

以下の表に、WebSphere Process Server for Solaris SPARC および x86 に付属する 64 ビット・メディアを示します。

表 15. Solaris SPARC および x86 メディア・パック (64 ビット) の内容

メディア・ラベル	供給形態
アセンブリー 1: インストール用の推奨イメージ	

表 15. Solaris SPARC および x86 メディア・パック (64 ビット) の内容 (続き)

メディア・ラベル	供給形態
WebSphere Process Server 6.2 Solaris x86 64-bit	1 枚の DVD に、以下のインストール可能コンポーネントを収録しています。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• WebSphere Process Server (WBI ディレクトリー内)</li> <li>• IBM WebSphere Installation Factory (IF ディレクトリー内)</li> <li>• WebSphere ソフトウェア用 IBM Update Installer (UpdateInstaller ディレクトリー内)</li> <li>• IBM User Interface ヘルプ・システム (IEHS ディレクトリー内)</li> <li>• メッセージング・クライアント (Message Service Client for C/C++) (MsgClients ディレクトリー内)</li> <li>• マイグレーション・ツール (Migration ディレクトリー内)</li> <li>• WebSphere Application Server Network Deployment (バージョン 6.1.0.21) (WAS ディレクトリー内)</li> </ul> WebSphere Process Server V6.2 DVD、WebSphere Application Server Network Deployment Supplements V6.1 CD、および WebSphere Application Server Toolkit V6.1.1 Disk 1 CD の任意のインストール可能コンポーネントをインストールし、その情報を表示するには、ルート・ディレクトリーの Launchpad アプリケーションを使用します。ただし、IBM WebSphere Installation Factory は例外です。このコンポーネントは、654 ページの『IBM WebSphere Installation Factory のインストール』に示す手順に従ってインストールする必要があります。
WebSphere Application Server Network Deployment 6.1 Supplements Solaris Opteron 64-bit	1 枚の CD-ROM に、以下のインストール可能コンポーネントを収録しています。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• IBM HTTP Server</li> <li>• IBM Support Assistant</li> <li>• Web サーバー・プラグイン</li> <li>• マイグレーション・ツール</li> </ul>
WebSphere Process Server 6.2 Solaris SPARC 64-bit	1 枚の DVD。
WebSphere Application Server Network Deployment 6.1 Supplements Solaris SPARC 64-bit	1 枚の CD-ROM に、以下のインストール可能コンポーネントを収録しています。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• IBM HTTP Server</li> <li>• IBM Support Assistant</li> <li>• Web サーバー・プラグイン</li> <li>• マイグレーション・ツール</li> </ul>
<b>アセンブリー 2: オプションのインストール・イメージ</b>	

表 15. Solaris SPARC および x86 メディア・パック (64 ビット) の内容 (続き)

メディア・ラベル	供給形態
WebSphere Application Server Network Deployment 6.1 for Solaris Opteron 64-bit	1 枚の CD-ROM。  この CD-ROM は、WebSphere Application Server Network Deployment Custom Install Packages (CIP) を作成する場合の IBM WebSphere Installation Factory でのみ使用します。
Edge Components 6.1 Solaris x86-64	1 枚の CD-ROM。
IBM DB2 Restricted Enterprise Server Edition 9.5 - Authorized User Option - Activation CD	1 枚の CD-ROM。
IBM DB2 Enterprise Server Edition 9.5 for Solaris on x64 systems	1 枚の DVD。
IBM Data Server Runtime Client 9.5 for Solaris x64	1 枚の DVD。
IBM Data Server Drivers 9.5 for AIX, HP-UX, Solaris, Linux, and Windows	1 枚の DVD。
IBM Data Server Client 9.5 for Solaris x64	1 枚の DVD。
WebSphere Application Server Network Deployment 6.1 for Solaris SPARC 64-bit	1 枚の CD-ROM。

## Windows メディア・パック

以下の表は、Windows 用 WebSphere Process Server に付属する 32 ビット・メディアを示します。

表 16. Windows メディア・パック (32 ビット) の内容

メディア・ラベル	供給形態
アセンブリー 1: インストール用の推奨イメージ	

表 16. Windows メディア・バック (32 ビット) の内容 (続き)

メディア・ラベル	供給形態
WebSphere Process Server 6.2 Windows 32-bit	<p>1 枚の DVD に、以下のインストール可能コンポーネントを収録しています。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• WebSphere Process Server (WBI ディレクトリー内)</li> <li>• IBM WebSphere Installation Factory (IF ディレクトリー内)</li> <li>• WebSphere ソフトウェア用 IBM Update Installer (UpdateInstaller ディレクトリー内)</li> <li>• IBM User Interface ヘルプ・システム (IEHS ディレクトリー内)</li> <li>• メッセージング・クライアント (Message Service Client for C/C++ および Message Service Client for .NET) (MsgClients ディレクトリー内)</li> <li>• マイグレーション・ツール (Migration ディレクトリー内)</li> <li>• WebSphere Application Server Network Deployment (バージョン 6.1.0.21) (WAS ディレクトリー内)</li> </ul> <p><i>WebSphere Process Server V6.2 DVD、WebSphere Application Server Network Deployment Supplements V6.1 CD、および WebSphere Application Server Toolkit V6.1.1 Disk 1 CD の任意のインストール可能コンポーネントをインストールし、その情報を表示するには、ルート・ディレクトリーの Launchpad アプリケーションを使用します。ただし、IBM WebSphere Installation Factory は例外です。このコンポーネントは、654 ページの『IBM WebSphere Installation Factory のインストール』に示す手順に従ってインストールする必要があります。</i></p>
WebSphere Application Server Network Deployment Supplements 6.1 Windows 32-bit	<p>1 枚の CD-ROM に、以下のインストール可能コンポーネントを収録しています。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• WebSphere Application Server 用アプリケーション・クライアント</li> <li>• IBM HTTP Server</li> <li>• IBM Support Assistant</li> <li>• Web サーバー・プラグイン</li> <li>• マイグレーション・ツール</li> </ul>
Application Server Toolkit 6.1.1 for Windows	2 枚の CD-ROM。
Application Server Toolkit 6.1.1 for Linux on x86	2 枚の CD-ROM。
アセンブリー 2: オプションのインストール・イメージ	

表 16. Windows メディア・パック (32 ビット) の内容 (続き)

メディア・ラベル	供給形態
WebSphere Application Server Network Deployment 6.1 Windows 32-bit	1 枚の CD-ROM。  この CD-ROM は、WebSphere Application Server Network Deployment Custom Install Packages (CIP) を作成する場合の IBM WebSphere Installation Factory でのみ使用します。
Rational Agent Controller 6.1.5	1 枚の CD-ROM。
Edge Components 6.1	1 枚の CD-ROM。
Edge Components for IPv6 6.1 for Windows	1 枚の CD-ROM。
Tivoli Access Manager 6.0 for Windows	1 枚の CD-ROM。
Tivoli Directory Server 6.0 for Windows	1 枚の CD-ROM。
IBM DB2 Restricted Enterprise Server Edition 9.5 - Authorized User Option - Activation CD	1 枚の CD-ROM。
IBM DB2 Enterprise Server Edition 9.5 for Windows on 32-bit AMD and Intel systems (x86)	1 枚の DVD。
IBM Data Server Runtime Client 9.5 for Windows on 32-bit AMD and Intel systems (x86)	1 枚の DVD。
IBM Data Server Drivers 9.5 for Windows on 32-bit AMD and Intel systems (x86)	1 枚の DVD。
IBM Data Server Client 9.5 for Windows on 32-bit AMD and Intel systems (x86)	1 枚の DVD。
WebSphere Partner Gateway Advanced Edition 6.2 for Windows	1 枚の CD-ROM。
Data Interchange Services 6.0 for Windows	1 枚の CD-ROM。

以下の表は、Windows 用 WebSphere Process Server に付属する 64 ビット・メディアを示します。

表 17. Windows メディア・パック (64 ビット) の内容

メディア・ラベル	供給形態
アセンブリー 1: インストール用の推奨イメージ	

表 17. Windows メディア・バック (64 ビット) の内容 (続き)

メディア・ラベル	供給形態
WebSphere Process Server 6.2 Windows 64-bit	<p>1 枚の DVD に、以下のインストール可能コンポーネントを収録しています。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• WebSphere Process Server (WBI ディレクトリー内)</li> <li>• IBM WebSphere Installation Factory (IF ディレクトリー内)</li> <li>• WebSphere ソフトウェア用 IBM Update Installer (UpdateInstaller ディレクトリー内)</li> <li>• IBM User Interface ヘルプ・システム (IEHS ディレクトリー内)</li> <li>• マイグレーション・ツール (Migration ディレクトリー内)</li> <li>• WebSphere Application Server Network Deployment (バージョン 6.1.0.21) (WAS ディレクトリー内)</li> </ul> <p><i>WebSphere Process Server V6.2 DVD、WebSphere Application Server Network Deployment Supplements V6.1 CD、および WebSphere Application Server Toolkit V6.1.1 Disk 1 CD の任意のインストール可能コンポーネントをインストールし、その情報を表示するには、ルート・ディレクトリーの Launchpad アプリケーションを使用します。ただし、IBM WebSphere Installation Factory は例外です。このコンポーネントは、654 ページの『IBM WebSphere Installation Factory のインストール』に示す手順に従ってインストールする必要があります。</i></p>
WebSphere Application Server Network Deployment 6.1 Windows 2k3 AMD 64-bit Supplements	<p>1 枚の CD-ROM に、以下のインストール可能コンポーネントを収録しています。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• IBM HTTP Server</li> <li>• IBM Support Assistant</li> <li>• Web サーバー・プラグイン</li> <li>• マイグレーション・ツール</li> </ul>
<b>アセンブリー 2: オプションのインストール・イメージ</b>	
WebSphere Application Server Network Deployment 6.1 Windows 2k3 AMD 64-bit	<p>1 枚の CD-ROM。</p> <p>この CD-ROM は、WebSphere Application Server Network Deployment Custom Install Packages (CIP) を作成する場合の IBM WebSphere Installation Factory でのみ使用します。</p>
Edge Components 6.1 Windows AMD Opteron 64-bit	1 枚の CD-ROM。
Edge Components 6.1 Windows AMD Opteron 64-bit for IPv6	1 枚の CD-ROM。
IBM DB2 Restricted Enterprise Server Edition 9.5 - Authorized User Option - Activation CD	1 枚の CD-ROM。

表 17. Windows メディア・バック (64 ビット) の内容 (続き)

メディア・ラベル	供給形態
IBM DB2 Enterprise Server Edition 9.5 for Windows on AMD64 and Intel EM64T systems (x64)	1 枚の DVD。
IBM Data Server Runtime Client 9.5 for Windows on AMD64 and Intel EM64T systems (x64)	1 枚の DVD。
IBM Data Server Drivers 9.5 for Windows on AMD64 and Intel EM64T systems (x64)	1 枚の DVD。
IBM Data Server Client 9.5 for Windows on AMD64 and Intel EM64T systems (x64)	1 枚の DVD。

---

## 第 3 章 WebSphere Process Server のインストールの準備

WebSphere Process Server をインストールする前に、ご使用のシステムがすべてのハードウェアおよびソフトウェア要件を満たしていることを確認して、オペレーティング・システムをインストールに向けて準備してください。また、スタンドアロン・サーバーを作成するのか Network Deployment のシナリオを作成するのかを決定し、必要に応じて詳細な構成計画を立てる必要もあります。

### このタスクについて

サブトピックでは、WebSphere Process Server を新しい環境と既存の環境にインストールするための準備について説明しています。この情報を参照して、スタンドアロン・サーバーのシナリオを作成するのか、Network Deployment のシナリオを作成するのかを選択し、既存の環境に与える影響について検討します。

### 次のタスク

81 ページの『第 4 章 ソフトウェアのインストール』にある指示に従って、ソフトウェアをインストールします。

---

## 製品の互換性

WebSphere Process Server をインストールする前に、他の WebSphere 製品との互換性の問題を知っておく必要があります。

### WebSphere Application Server および WebSphere Enterprise Service Bus

WebSphere Process Server は、WebSphere Application Server または WebSphere Enterprise Service Bus のあらゆるバージョンと同じワークステーションにインストールできます。WebSphere Process Server を別途インストールすることができます。あるいは、WebSphere Application Server バージョン 6.1 または WebSphere Enterprise Service Bus バージョン 6.2 がインストール済みの場合、拡張して WebSphere Process Server の機能を保有させることを選択することもできます。

### WebSphere Business Integration Server Foundation

WebSphere Process Server は、どのバージョンの WebSphere Business Integration Server Foundation にもインストールできません。WebSphere Process Server を、WebSphere Business Integration Server Foundation と同じワークステーションに、別のインストールとしてインストールすることができます。

## WebSphere Process Server のインストールに関する前提条件

WebSphere Process Server または WebSphere Process Server Client をインストールする前に、一連の前提条件が満たされていることを確認する必要があります。

前提条件は以下のとおりです。

- インストールの計画をたてます。

インストールの計画、および WebSphere Process Server で必要とされるデータベースについて詳しくは、『WebSphere Process Server の計画』の各トピックを参照してください。

- 必ずすべてのハードウェア要件およびソフトウェア要件をシステムが満たすようにします。また、インストールのための十分なスペースをシステムに確保します(一時スペースを含む)。詳しくは、WebSphere Process Server detailed system requirements を参照してください。
- WebSphere Application Server ND および Feature Pack for Web Services を含むインストール・パッケージ (IIP) は、WebSphere Process Server インストールの一部としてインストールされます。WebSphere Process Server インストーラーと一緒に使用可能な統合された IIP のタイプには制限があります。
  - IIP には、WebSphere Application Server ND と Feature Pack for Web Services が含まれている必要があります。
  - IIP の保守レベルは、WebSphere Process Server インストーラーで必要とされるレベル以上になっている必要があります。
  - IIP には、主要なオファリングとしての WebSphere Application Server ND と、追加のオファリングとしての Feature Pack for Web Services が、それぞれ 1 つだけ含まれている必要があります。
- インストール用のオペレーティング・システムを準備します。プラットフォーム固有の情報へのリンクについては、42 ページの『インストールのためのオペレーティング・システムの準備』を参照してください。
- WebSphere Application Server または WebSphere Application Network Deployment の既存のインストール済み環境に WebSphere Process Server をインストールする場合は、製品体系が一致していることを確認する必要があります。64 ビット・バージョンの WebSphere Application Server または WebSphere Application Network Deployment に 32 ビット・バージョンの WebSphere Process Server をインストールすることも、32 ビット・バージョンの WebSphere Application Server または WebSphere Application Network Deployment に 64 ビット・バージョンの WebSphere Process Server をインストールすることもできません。
- Passport Advantage®で入手したイメージからインストールを行う場合は、651 ページの『パスポート・アドバンテージからインストールするときの特別な考慮事項』を参照して、ユーザー許可とディレクトリー・セットアップに関するガイドラインを確認してください。
- WebSphere Process Server をインストールする前に、データベース・インスタンスの所有者が DB2 を開始していることを確認してください。
- デプロイメント環境のデプロイメント・マネージャー・プロファイル作成の一部であるデータベース構成パネルには、データベース管理者 (DBA) 特権が必要です。製品のインストーラーまたはプロファイル管理ツールのデプロイメント環境

機能を使用する場合に、データベース製品として Derby ネットワーク・サーバー以外のデータベースを使用するときは、データベース構成パネルの「データベースで認証するユーザー名」フィールドで指定するユーザー ID は DBA 特権を持っている必要があります。

インストールまたはプロファイル作成手順中にデータベース作成を延期することを選択した場合でも、ユーザー ID には DBA 特権が必要です。これは、データベース作成を延期することにしても、共通データベースを作成しないだけだからです。インストーラーまたはプロファイル管理ツールがデプロイメント環境 (クラスター・トポロジー) を構成するとき、共通データベースのほかに、Business Process Choreographer、Common Event Infrastructure、およびメッセージング・エンジンのバックエンド・データベース・サーバーに必要な表およびスキーマを作成します。このためには、これらのスキーマおよび表がデータベースのアクセス権エラーなしに作成できるように、ユーザー ID に DBA 特権があることが必要です。

ユーザー ID に DBA 特権がない場合は、以下のような予備手段を使用します。

1. プロファイルを作成せずに製品をインストールします。
  2. プロファイル管理ツールを使用して、デプロイメント・マネージャーおよびカスタム・プロファイルを (すべてに対して拡張パスを使用して) 作成します。標準的な、またはデプロイメント環境のパスは使用しません。デプロイメント・マネージャー・プロファイル作成の間、データベース・スクリプトの実行を遅らせるオプションを選択します。
  3. カスタム・プロファイルをデプロイメント・マネージャーに統合します。
  4. DBA に共通 DB の作成を依頼します。以下のサイトの情報で、データベース・オブジェクトを手動で作成するのに必要なスクリプトを提供しています。435 ページの『プロファイルの作成後または拡張後の共通データベースとテーブルの作成』
  5. 管理コンソールを使用して、必要なデプロイメント環境を作成します。詳しくは、デプロイメント環境の作成を参照してください。
- DB2® Universal Database™ を使用する計画の場合は、インストールの前に以下の手順を実行する必要があります。
    - リモート・システム上にサーバーが置かれている場合、DB2 クライアントで DB2 データベースを構成するときは、クライアント・システムがサーバーと通信するように構成されていることと、DB2 ノードがカタログされていることを確認してください。詳しくは、DB2 Universal Database 資料を参照してください。
    - |       |      |
|-------|------|
| Linux | UNIX |
|-------|------|

**Linux および UNIX プラットフォームの場合:** Linux または UNIX システムで DB2 データベースを構成する場合は、以下のステップを実行してデータベース環境を整えます。
      1. `/etc/group` を変更し、製品をインストールしたユーザー ID が `db2instance` と同じグループになるようにします。
      2. `db2instance/sqllib/db2profile` スクリプトを実行してデータベース環境を調達します (`db2instance` は、使用するデータベース・インスタンスの名前に置き換えてください)。

- 機能の追加先または拡張の対象とするすべての製品で、サーバー、デプロイメント・マネージャー、およびノード・エージェントのすべてのプロセスを停止します。これらのタスクの実行方法については、『サーバーおよびノードの停止』を参照してください。
- 機能の追加先または拡張の対象とする製品で、すべての保守パッケージをアンインストールします。`updi_root/update` コマンドを使用して Update Installer プログラムを開始し、すべての保守パッケージを検索してアンインストールします。これを行う理由は、製品を変換するために必要な機能およびコンポーネントには、保守が適用されていないためです。すべての保守パッケージを除去すると、製品全体が同じリリース・レベルになります。その後で、保守パッケージを再適用できます。
- **Linux** **Linux** プラットフォームの場合: WebSphere Process Server インストールに以下の項目があることを確認します。
  - カーネルおよび C ランタイム・ライブラリー
  - C++ ランタイム・ライブラリーの最新のバージョンとすべての互換性バージョン
  - X Window ライブラリーおよびランタイム
  - GTK ランタイム・ライブラリー

前提条件が満たされたら、製品をインストールする準備は完了です。

## サーバーおよびノードの停止

機能の追加先とする製品、または拡張あるいはアンインストールを行う製品のすべてで、サーバー、デプロイメント・マネージャー、ノード・エージェントのすべてのプロセスを停止します。

### このタスクについて

特定のコマンドを使用して、サーバー、デプロイメント・マネージャー、およびノード・エージェント・プロセスを停止します。以下のステップを実行してこれらのプロセスを停止してください。

#### 手順

- 1 つ以上のデプロイメント・マネージャーがインストールされている場合は、**stopManager** コマンドを使用して各 `dmgr` プロセスを停止します。例えば、プラットフォームに応じて、以下のコマンドのいずれかを実行します (ここで、`profile_root` はデプロイメント・マネージャー・プロファイルのインストール・ディレクトリーを表します)。

- **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合: `profile_root/bin/stopManager`

- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:  
`profile_root/bin/stopManager.sh`

- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合:  
`profile_root%bin%stopManager.bat`

セキュリティーが有効な場合は、代わりに以下のコマンドのいずれかを使用します。

- **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合: `profile_root/bin/stopManager -user user_ID -password password`
  - **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合: `profile_root/bin/stopManager.sh -user user_ID -password password`
  - **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: `profile_root¥bin¥stopManager.bat -user user_ID -password password`
2. **stopNode** コマンドを使用して、ノード・エージェント・プロセスを停止します。システムのデプロイメント・マネージャーに統合されているノードがある場合は、統合されたノードと共に各サーバーで実行されている可能性のある個々のノード・エージェント・プロセスを停止します。例えば、プラットフォームに応じて、以下のいずれかのコマンドを実行し、ノード・エージェント・プロセスを停止します (ここで、`profile_root` は統合ノードのインストール・ディレクトリを表します)。

- **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合: `profile_root/bin/stopNode`
- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合: `profile_root/bin/stopNode.sh`
- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: `profile_root¥bin¥stopNode.bat`

サーバーが稼働中で、セキュリティーが使用可能な場合は、代わりに以下のコマンドのいずれかを使用します。

- **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合: `profile_root/bin/stopNode -user user_ID -password password`
  - **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合: `profile_root/bin/stopNode.sh -user user_ID -password password`
  - **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: `profile_root¥bin¥stopNode.bat -user user_ID -password password`
3. **stopServer** コマンドを使用して、稼働しているスタンドアロン・サーバーをそれぞれ停止します。サーバー上のすべてのプロファイルのサーバー・プロセスをすべて停止します。例えば、プラットフォームに応じて、以下のいずれかのコマンドを実行し、プロファイル内のサーバーを停止します。この例では、`profile_root` は、以下のようなプロファイルのインストール・ロケーションを表します。
- **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合: `profile_root/bin/stopServer serverName`
  - **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合: `profile_root/bin/stopServer.sh server1`
  - **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: `profile_root¥bin¥stopServer.bat server1`

サーバーが稼働中で、セキュリティーが使用可能な場合は、代わりに以下のコマンドのいずれかを使用します。

- **i5/OS** i5/OS プラットフォームの場合: `profile_root/bin/stopServer serverName -user user_ID -password password`
- **Linux** **UNIX** Linux および UNIX プラットフォームの場合: `profile_root/bin/stopServer.sh server1 -user user_ID -password password`
- **Windows** Windows プラットフォームの場合: `profile_root¥bin¥stopServer.bat server1 -user user_ID -password password`

## 次のタスク

これで、WebSphere 製品に機能を追加したり、この製品を拡張またはアンインストールできるようになりました。

---

## インストールのためのオペレーティング・システムの準備

WebSphere Process Server のインストール要件はオペレーティング・システムによって異なることがあります。WebSphere Process Server をインストールするためのオペレーティング・システムを準備する必要があります。

オペレーティング・システムの準備には、ディスク・スペースの割り振りやオペレーティング・システムに対するパッチのインストールなどの変更が含まれます。IBM では、各オペレーティング・システム・プラットフォーム上で製品をテストしています。このテストにより、製品を正しく実行するためにオペレーティング・システムの変更が必要かどうかを検証します。必要な変更を加えなければ、製品は正しく実行されません。

インストール環境を準備する前に、『WebSphere Process Server の計画』のトピックを検討して、システムのセットアップ方法を決定してください。次に、このセクションで、ご使用のオペレーティング・システムに固有の手順を参照してください。

## AIX システムのインストール準備

AIX システムで WebSphere Process Server のインストールの準備を行う方法について説明します。

### このタスクについて

このインストールでは、InstallShield MultiPlatform (ISMP) ウィザードが使用されます。製品はサイレント・インストールすることもできます。サイレント・モードは、コマンド行で、インストール前に編集した応答ファイルを示すパラメーターを指定して起動します。

現在のオペレーティング・システムにさらに多くの一時スペースが必要な場合や、前提条件パッケージが存在しないなどの問題が発生した場合は、インストールをキャンセルして必要な変更を行ってからインストールをもう一度実行します。

**制約事項:** プロファイル管理ツールは Eclipse ベースのアプリケーションであり、Cygwin/X を使用したりモートの AIX マシン上での Eclipse ベースのアプリケーション

ョンの実行に関する既知の問題があります。これは、プロファイル管理ツールおよび Installation Factory の使用に影響を与えます。例えば、Cygwin/X をリモート AIX 上で使用する場合、プロファイル管理ツールのスプラッシュ画面が表示されますが、プロファイル管理ツールは実際には表示されません。こうした問題に関する既存の Bugzilla レポートの詳細については、『Bugzilla - Bug 36806』にある情報を参照してください。異なる X サーバー (Hummingbird Exceed など) が使用される場合、これらの問題は発生しません。

**注:** WebSphere Process Server は、ユーザーが空でないディレクトリーをインストールするのを防ぎます。lost+found サブディレクトリーを持つディレクトリーに WebSphere Process Server をインストールしようとした場合、空のディレクトリーを使用するように通知する画面が表示されます。空のディレクトリーではなくこのディレクトリーにインストールする場合は、lost+found ディレクトリーを削除します。ただし、fsck を次に実行すると lost+found ディレクトリーがもう一度作成されます。これは、既存のインストール環境には影響しません。アンインストールを実行しても、このディレクトリーは削除されません。

以下の手順を使用して、WebSphere Process Server をインストールするためにオペレーティング・システムを準備します。

#### 手順

1. オプション: Mozilla ブラウザーがインストールされていない場合はインストールします。Mozilla ブラウザーは、ランチパッド・コンソールをサポートします。System Management Interface Tool (SMIT) を使用して、Mozilla 1.7.8 あるいはそれ以降のパッケージがインストールされているかどうかを確認します。まだインストールされていない場合、以下の手順を実行します。
  - a. サポートされる AIX 用 Mozilla (1.7.8 以降) の最新バージョンをダウンロードします。AIX 向けの Mozilla は、次のロケーションから入手できます。

AIX 用 Web ブラウザー。

installp イメージをダウンロードし、SMIT からインストールします。

**重要:** Mozilla Web サイトで配布されている Mozilla イメージについては、IBM ではテストもサポートも行っていません。ダウンロード Web サイト (Trials and demos) からダウンロードした Mozilla イメージのバージョンは、テスト済みであり、サポートされています。

Mozilla 1.7.5 以前を使用すると、ISMP がインストール時の初期化に失敗することがあります。例えば、Launchpad リンクが失敗したように表示される場合があります。詳しくは、「V6.0.2: The WebSphere Application Server launchpad fails with Mozilla 1.7.5 (and earlier) on 64-bit AIX 5.2 or 5.3」を参照してください。

2. オプション: サポートされるブラウザーのロケーションをエクスポートします。

ブラウザーのロケーションを識別するコマンドを使用して、サポートされるブラウザーのロケーションをエクスポートします。

例えば、Mozilla パッケージが /usr/bin/mozilla ディレクトリーにある場合、以下のコマンドを使用します。

```
export BROWSER=/usr/bin/mozilla
```

3. オプション: **サイレント・インストールのみ**: サイレント・インストール中に X Window サービスへの呼び出しの原因となる既知の ISMP 問題を許可しません。

ご使用の AIX ワークステーションの DISPLAY 環境変数が、ログインされていない X サーバーを指すことがあります。これは、以下の 2 つの共通シナリオによって発生する可能性があります。

- ご使用の AIX ワークステーションで X サーバーは稼働しているが、ユーザーがログインしていないため、X サーバーがグラフィカル・ログイン画面で滞留しています。
- ご使用の AIX ワークステーションが、ログインされていないリモート X サーバーで X Window アプリケーションを表示するように構成されています。

ISMP が X Window サービスを呼び出すため、サイレント・インストールはいずれの場合も停止します。

以下の 2 つの解決策があります。

- サイレント・インストールを開始する前に、グラフィカル・ユーザー・インターフェースを介してローカル X サーバーにログインします。
- 以下の例に示すように、ヌルまたはブランクを指すように DISPLAY 環境変数をエクスポートします。

```
export DISPLAY=null
```

4. システムにログオンします。ユーザー ID には root 権限がなくても構いません。
5. umask を選択します。これにより、所有者がファイルに対する読み取りおよび書き込みを行ったり、他のユーザーが一般的なシステム・ポリシーに従ってこれらのファイルにアクセスしたりできます。root ユーザーの場合は、022 の umask をお勧めします。root ユーザー以外の場合は、ユーザーがグループを共用するかどうかに応じて 002 または 022 の umask を使用できます。

umask 設定を確認するには、以下のコマンドを実行します。

```
umask
```

umask 設定を 022 に設定するには、以下のコマンドを実行します。

```
umask 022
```

6. 製品をインストールするワークステーションで、WebSphere Application Server、WebSphere Process Server、または WebSphere Enterprise Service Bus に関連したすべての Java プロセスを停止します。
7. IBM HTTP Server などの Web サーバー・プロセスはすべて停止します。
8. インストールされるパッケージを SMIT ツールを使用して表示し、以下のステップで説明するパッケージの更新が必要かどうかを判断します。
9. Info-ZIP 製品の最新バージョンをダウンロードし、ZIP ファイルの問題を回避します。Info-ZIP の Web サイトにある Info-ZIP パッケージの現行バージョンをダウンロードします。
10. 十分なディスク・スペースを提供します。WebSphere Process Server およびその関連製品のインストールに必要なスペースについては、WebSphere Process

Server detailed system requirementsにある WebSphere Process Server の詳細なシステム要件を参照し、その製品のご使用のバージョンへのリンクを選択してください。

AIX 上の JFS ファイル・システムでは、ディレクトリーに拡張スペースを割り振ることができます。インストール・ウィザードに十分なスペースがない場合、ISMP は動的にスペース割り振りを増やすために、より多くのスペースを要求するシステム呼び出しを発行します。これが /usr ディレクトリーで発生したときに表示されるメッセージは、以下の例と類似しています。

注: 次のファイル・システムがインストール中に拡張されます:

```
/usr
(NOTE: The following file systems will be expanded during the installation:
/usr)
```

プロファイル作成のための必要スペースが AIX 上にあることを手動で確認します。基礎となる ISMP コードに既知の問題があったため、AIX システムでのスペース検査が正しく行われません。

11. java.lang.NullPointerException エラーを回避するため、リンク切れのあるファイル・システムをアンマウントします。

ファイル・システムへのリンクが切れている場合、インストールしようとする時、以下のエラーが発生して失敗する可能性があります。

An error occurred during wizard bean change notification:

```
java.lang.NullPointerException
  at com.ibm.wizard.platform.aix.AixFileUtils.
    getFileSystemData(AixFileUtils.java:388)
  at com.ibm.wizard.platform.aix.AixFileUtils.
    getPartitionDataWithExecs(AixFileUtils.java:172)
  at com.ibm.wizard.platform.aix.AixFileUtils.
    getPartitionData(AixFileUtils.java:104)
  at com.ibm.wizard.platform.aix.AixFileServiceImpl.
    getPartitionNames(AixFileServiceImpl.java:397)
...
```

以下の手順を使用して、問題のあるファイル・システムを識別してアンマウントします。

- a. **df -k** コマンドを使用して、ファイル・システムへのリンク切れを検査します。1024-blocks size 列にブランク値がリストされているファイル・システムを探します。値が「-」(ダッシュ)になっているエントリーは問題ありません。以下の例は、iw031864:/cdrom/db2\_v91\_aix53 ファイル・システムと、(おそらく) /dev/lv00 ファイル・システムにも問題が存在することを示します。/proc ファイル・システムに問題はありません。

```
> df -k
Filesystem      1024-blocks      Free %Used    Iused %Iused Mounted on
/dev/hd4         1048576         447924   58%     2497    1% /
/dev/hd3         4259840        2835816   34%      484    1% /tmp
/proc            -                -         -         -      - /proc
/dev/lv01        2097152         229276   90%     3982    1% /storage
/dev/lv00        2097152         458632   79%     42910   9% /usr
iw031864:/cdrom/db2_v91_aix53
```

- b. 最初に、例の iw031864:/cdrom/db2\_v91\_aix53 ファイル・システムのように、明確な問題を示しているファイル・システムをアンマウントします。これを行うには、次のコマンドのいずれかを使用します。

```
> umount /cdrom/db2_v91_aix53
> umount /cdrom
```

- c. インストールを再開します。
  - d. 問題が解決しない場合は、ブランク値があるファイル・システム (この例の /dev/lv00 ファイル・システムなど) をアンマウントしてください。
  - e. リンク切れのあるファイル・システムをアンマウントしても問題が解決しない場合は、ワークステーションをリブートして、再度インストールを開始してください。
12. 前提条件および相互前提条件が、必要なリリース・レベルであることを確認します。

インストール・ウィザードは、前提条件となるオペレーティング・システム・パッチを検査しますが、前提条件をまだ確認していない場合は、WebSphere Process Server でサポートされる前提条件となるハードウェアとソフトウェアを確認してください。この情報にアクセスするには、『Supported hardware and software website』のサイトで WebSphere Process Server の詳細なシステム要件を参照し、ご使用のバージョンの WebSphere Process Server へのリンクを選択してください。

サポートされているバージョンへのマイグレーションについては、IBM 以外の前提条件および相互に必要な製品の資料を参照してください。

13. emacs または他のフリーウェアで提供される **cp** コマンドではなく、システムの **cp** コマンドが使用されていることを確認します。

システムの **cp** コマンドではなく、フリーウェア・パッケージの一部である **cp** コマンドを使用して製品をインストールする場合、インストールが正常に完了したように見えても、製品によってインストールされる Java 2 SDK では、*install\_root/java* ディレクトリー (*install\_root* は WebSphere Process Server のインストール・ディレクトリーを表す) のファイルが欠落する可能性があります。

ファイルが欠落していると、必要なシンボリック・リンクが壊れる可能性があります。WebSphere Process Server 製品を正常にインストールするには、PATH からフリーウェアの **cp** コマンドを除去する必要があります。

オペレーティング・システムに emacs または他のフリーウェアをインストールしている場合は、以下のステップを実行して、システムで使用されている **cp** コマンドを識別し、フリーウェアの **cp** コマンドが使用されている場合には、それを非活動化します。

- a. WebSphere Process Server 製品用のインストール・プログラムを実行する前に、コマンド・プロンプトで `which cp` と入力します。
  - b. その結果のディレクトリー出力に `freeware` が含まれている場合、PATH から `freeware` ディレクトリーを除去します。例えば、出力が `.../freeware/bin/cp` のような場合は、PATH からこのディレクトリーを除去します。
  - c. WebSphere Process Server をインストールします。
  - d. `freeware` ディレクトリーを PATH に戻します。
14. 製品ディスクのコピー上の Java 2 SDK が正常に動作することを確認します。

お客様用の製品 DVD を製品 DVD のコピーによって作成したか、お客様用の DVD を電子ダウンロード・イメージから作成した場合は、以下のステップを実行して、Java 2 SDK が正常に動作することを確認します。

- a. 自分が作成した製品ディスクで、`/JDK/jre.pak/repository/package.java.jre/java/jre/bin` ディレクトリーにナビゲートします。 これを実行するには、以下のコマンドを発行します。  

```
cd /JDK/jre.pak/repository/package.java.jre/java/jre/bin
```
- b. Java 2 SDK のバージョンを確認します。 これを実行するには、以下のコマンドを発行します。  

```
./java -version
```

Java 2 SDK が完全であれば、コマンドはエラーを伴わずに正常に完了します。

- c. 作成したその他すべての製品ディスクについて、この手順を繰り返します。

## タスクの結果

この手順によって、WebSphere Process Server をインストールできるようにオペレーティング・システムを準備します。

## 次のタスク

オペレーティング・システムの準備が完了すると、WebSphere Process Server をインストールできます。別の選択可能なさまざまなインストール手段についての説明は、81 ページの『第 4 章 ソフトウェアのインストール』を参照してください。

## HP-UX システムのインストール準備

HP-UX システムで WebSphere Process Server のインストールの準備を行う方法を学習します。

### このタスクについて

このインストールでは、InstallShield MultiPlatform (ISMP) ウィザードが使用されます。製品はサイレント・インストールすることもできます。サイレント・モードは、コマンド行で、インストール前に編集した応答ファイルを示すパラメーターを指定して起動します。

**制約事項:** プロファイル管理ツールは Eclipse ベースのアプリケーションで、Cygwin/X を使用したリモート HP-UX マシン上での Eclipse ベースのアプリケーションの実行に関する既知の問題があります。これは、プロファイル管理ツールおよび Installation Factory の使用に影響を与えます。こうした問題に関する既存の Bugzilla レポートの詳細については、『Bugzilla - Bug 36806』にある情報を参照してください。異なる X サーバー (Hummingbird Exceed など) が使用される場合、これらの問題は発生しません。

以下の手順を使用して、WebSphere Process Server をインストールするためにオペレーティング・システムを準備します。

### 手順

1. システムにログオンします。ユーザー ID には root 権限がなくても構いません。
2. umask を選択します。これにより、所有者がファイルに対する読み取りおよび書き込みを行ったり、他のユーザーが一般的なシステム・ポリシーに従ってこれらのファイルにアクセスしたりできます。root ユーザーの場合は、022 の umask をお勧めします。root ユーザー以外の場合は、ユーザーがグループを共有するかどうかに応じて 002 または 022 の umask を使用できます。

umask 設定を確認するには、以下のコマンドを実行します。

```
umask
```

umask 設定を 022 に設定するには、以下のコマンドを実行します。

```
umask 022
```

3. オプション: Mozilla ブラウザーがインストールされていない場合はインストールします。Mozilla ブラウザーは、ランチパッド・コンソールをサポートしません。

Mozilla ブラウザーは、Mozilla からダウンロードしてインストールします。

4. オプション: サポートされるブラウザのロケーションをエクスポートします。

ブラウザのロケーションを識別するコマンドを使用して、サポートされるブラウザのロケーションをエクスポートします。

例えば、Mozilla パッケージが /usr/bin/mozilla ディレクトリーにある場合、以下のコマンドを使用します。

```
export BROWSER=/usr/bin/mozilla
```

5. 製品をインストールするワークステーションで、WebSphere Application Server、WebSphere Application Server Network Deployment、WebSphere Process Server、または WebSphere Enterprise Service Bus に関連したすべての Java プロセスを停止します。
6. IBM HTTP Server などの Web サーバー・プロセスはすべて停止します。
7. 十分なディスク・スペースを準備します。WebSphere Process Server およびその関連製品のインストールに必要なスペースについては、WebSphere Process Server detailed system requirements にある WebSphere Process Server の詳細なシステム要件を参照し、その製品のご使用のバージョンへのリンクを選択してください。
8. WebSphere Process Server をサポートするように、カーネル値を設定します。

HP-UX のカーネル値の一部は、製品にとって通常は小さすぎます。カーネル値の設定方法については、50 ページの『HP-UX システムでのカーネル値の設定』を参照してください。

9. 前提条件および相互前提条件が、必要なリリース・レベルであることを確認します。

インストール・ウィザードは、前提条件となるオペレーティング・システム・パッチを検査しますが、前提条件をまだ確認していない場合は、WebSphere Process Server でサポートされる前提条件となるハードウェアとソフトウェアを確認してください。この情報にアクセスするには、『WebSphere Process Server

detailed system requirements』にある WebSphere Process Server の詳細なシステム要件を参照し、ご使用のバージョンの WebSphere Process Server へのリンクを選択してください。

サポートされているバージョンへのマイグレーションについては、IBM 以外の前提条件および相互に必要な製品の資料を参照してください。

10. emacs または他のフリーウェアで提供される **cp** コマンドではなく、システムの **cp** コマンドが使用されていることを確認します。

注: システムの **cp** コマンドではなく、フリーウェア・パッケージの一部である **cp** コマンドを使用して製品をインストールする場合、インストールが正常に完了したように見えても、製品によってインストールされる Java 2 SDK では、*install\_root/java* ディレクトリー (*install\_root* は WebSphere Process Server のインストール・ディレクトリーを表す) のファイルが欠落する可能性があります。

ファイルが欠落していると、必要なシンボリック・リンクが壊れる可能性があります。WebSphere Process Server 製品を正常にインストールするには、PATH からフリーウェアの **cp** コマンドを除去する必要があります。

オペレーティング・システムに emacs または他のフリーウェアをインストールしている場合は、以下のステップを実行して、システムで使用されている **cp** コマンドを識別し、フリーウェアの **cp** コマンドが使用されている場合には、それを非活動化します。

- a. WebSphere Process Server 製品用のインストール・プログラムを実行する前に、コマンド・プロンプトで `which cp` と入力します。
  - b. その結果のディレクトリー出力に `freeware` が含まれている場合、PATH から `freeware` ディレクトリーを除去します。例えば、出力が `.../freeware/bin/cp` のような場合は、PATH からこのディレクトリーを除去します。
  - c. WebSphere Process Server をインストールします。
  - d. `freeware` ディレクトリーを PATH に戻します。
11. 製品ディスクのご使用のコピー上の Java 2 SDK が正常に動作していることを確認します。

お客様用の製品 DVD を製品 DVD のコピーによって作成したか、お客様用の DVD を電子ダウンロード・イメージから作成した場合は、以下のステップを実行して、Java 2 SDK が正常に動作することを確認します。

- a. 作成した製品ディスクの `/JDK/jre.pak/repository/package.java.jre/java/jre/bin` ディレクトリーに移動します。これを実行するには、以下のコマンドを発行します。

```
cd /JDK/jre.pak/repository/package.java.jre/java/jre/bin
```
- b. Java 2 SDK のバージョンを確認します。これを実行するには、以下のコマンドを発行します。

```
./java -version
```

Java 2 SDK が完全であれば、コマンドはエラーを伴わずに正常に完了します。

- c. 作成したその他すべての製品ディスクについて、この手順を繰り返します。

## タスクの結果

この手順によって、WebSphere Process Server をインストールできるようにオペレーティング・システムを準備します。

## 次のタスク

オペレーティング・システムの準備が完了すると、WebSphere Process Server をインストールできます。別の選択可能なさまざまなインストール手段についての説明は、81 ページの『第 4 章 ソフトウェアのインストール』を参照してください。

## HP-UX システムでのカーネル値の設定

HP-UX のカーネル値の一部は、WebSphere Process Server インストールにとって通常は小さすぎます。特定のカーネル・パラメーターをより高い値に設定する必要があります。

## このタスクについて

以下の手順を使用して、WebSphere Process Server で使用できるようにカーネル・パラメーターを設定します。

### 手順

1. ホスト・ワークステーションに root としてログインします (まだログインしていない場合)。
2. 物理メモリーを判別します。特定のカーネル・パラメーターを使用可能な物理容量より大きく設定してしまうことを避けるために、マシンのメモリー限度を理解しておくことは重要です。物理メモリーを決定するには、以下のステップを実行します。
  - a. /usr/sbin/sam コマンドを使用して HP-UX System Administration Manager (SAM) ユーティリティーを開始します。
  - b. 「パフォーマンス・モニター (Performance Monitors)」 > 「システム・プロパティ (System Properties)」 > 「メモリー (Memory)」を選択します。
  - c. 「Physical Memory」の値をメモし、「OK」を選択します。
  - d. SAM ユーティリティーを終了します。
3. maxfiles および maxfiles\_lim などの特定のパラメーターを 4096 より高い値に設定する必要があります。そのために最初に /usr/conf/master.d/core-hpux ファイルを編集して、SAM ユーティリティーが 2048 より大きい値を設定できるようにする必要があります。以下のテーブルでは、それぞれ 8000 と 8196 を推奨しています。このファイルを編集するには、以下のステップを実行します。
  - a. テキスト・エディターで /usr/conf/master.d/core-hpux ファイルを開きます。
  - b. `*range maxfiles<=2048` という行を `*range maxfiles<=60000` に変更します。
  - c. `*range maxfiles_lim<=2048` という行を `*range maxfiles_lim<=60000` に変更します。
  - d. ファイルを保管してクローズします。

4. SAM ユーティリティが古い値を /var/sam/boot.config ファイルに保管しています。新しい値を保存するには、以下のステップを実行して、SAM ユーティリティで強制的に boot.config ファイルを新規作成する必要があります。
  - a. 既存バージョンの /var/sam/boot.config ファイルを /tmp ディレクトリーなどの別のロケーションに移動します。
  - b. SAM ユーティリティを開始します。
  - c. 「カーネル構成 (Kernel Configuration)」 > 「構成可能パラメーター (Configurable Parameters)」を選択します。「カーネル構成 (Kernel Configuration)」ウィンドウが開き、新しい boot.config ファイルが作成されます。

または、次のコマンドを使用して、boot.config ファイルを再ビルドします。

```
# /usr/sam/sbin/getkinfo -b
```

5. 以下のようにして、新規カーネル・パラメーター値を設定します。
  - a. /usr/sbin/sam コマンドを使用して SAM ユーティリティを開始します。
  - b. SAM ユーティリティで、「カーネル構成 (Kernel Configuration)」 > 「構成可能パラメーター (Configurable Parameters)」を選択します。
  - c. 次の表に示す各パラメーターについて、以下の手順を実行します。
    - 1) 変更するパラメーターを強調表示します。
    - 2) 「アクション (Actions)」 > 「構成可能パラメーターの変更 (Modify Configurable Parameter)」を選択します。
    - 3) 「Formula/Value」フィールドに新しい値を入力します。
    - 4) 「OK」を選択します。

WebSphere Process Server を実行するための標準的なカーネル設定を、以下の表で示される順序で変更します。

パラメーター	値
swchunk	8192
shmseg	512
maxdsiz	3221225472
maxdsiz_64bit	64424509440
maxfiles_lim	10000 (maxfiles の前にこの値を変更する)
maxfiles	8192
semume	512
semmsl	3072
msgssz	512 (msgmax の前にこの値を変更する)
nkthread	10000
max_thread_proc	4096
nproc	8192 (maxuprc の前にこの値を変更する)
maxuprc	4096
nflocks	11585
ninode	8110
msgmap	13109
msgseg	32767 (msgmax の前にこの値を変更する)

パラメーター	値
msgmnb	65535 (0x10000) (msgmax の前にこの値を変更する)
msgmnb	131070 (同じシステムで複数のプロファイルを実行している場合)
msgmax	65535 (0x10000)
msgmax	131070 (同じシステムで複数のプロファイルを実行している場合)
msgmni	4634
semmns	11586
semmni	8192
semmnu	8180
shmmax	185513715302
shmmni	8192
STRMSGSZ	65535
dbc_max_pc	10
nstrpty	60
cmc_plat_poll	15
msgtql	13107

WebSphere Process Server と IBM DB2 が同じワークステーション上にあると、カーネル値が表に示した値より大きくなる場合があります。

DB2 Universal Database バージョン 8.x の推奨 HP-UX カーネル構成パラメーターについては、DB2 インフォメーション・センター (DB2 インフォメーション・センターによるこそ) を参照してください。

6. 「アクション (Actions)」 > 「新規カーネルの処理 (Process New Kernel)」を選択します。
7. 情報ウィンドウで「はい」を選択して、ワークステーションを再始動する決定を確認します。

スクリーン内の指示に従ってワークステーションを再始動し、新しい設定値を有効にします。

8. 表示を HP 以外のワークステーションにリダイレクトする場合は、WebSphere Process Server インストール・ウィザードを実行する前に以下のステップを実行します。
  - a. 次のコマンドを実行して、アプリケーションにアクセス可能なすべての public ロケールに関する情報を取得する。

```
# locale -a
```
  - b. 表示される出力からシステムに応じた値を選択し、LANG 環境変数にこの値を設定する。LANG の値を en\_US.iso88591 に設定するコマンドの例を次に示します。

```
# export LANG=en_US.iso88591
```

## i5/OS システムのインストール準備

i5/OS システムで WebSphere Process Server のインストールの準備を行う方法を学習します。

### このタスクについて

このインストールでは、InstallShield Multiplatform (ISMP) ウィザードが使用されます。i5/OS にインストールするには、以下の 3 つの方法のいずれかを実行します。

- i5/OS システムに接続された Windows PC から対話式に実行する。
- i5/OS システムに接続された Windows PC からサイレント・インストールを実行して非対話式に実行する。
- i5/OS システムでネイティブに実行されるサイレント・インストールを使用して非対話式にインストールする。

サイレント・モードは、コマンド行で、インストール前に編集した応答ファイルを示すパラメーターを指定して起動します。

以下の手順を使用して、WebSphere Process Server をインストールするためにオペレーティング・システムを準備します。

### 手順

1. システム上の他の製品インストールの QWAS61 サブシステム上で実行されている可能性のある WebSphere Application Server、WebSphere Process Server、および WebSphere Enterprise Service Bus サーバーをすべて停止します。
2. WRKACTJOB SBS コマンドを使用して、QWAS61 サブシステムが終了したかどうかを確認します。サブシステムがまだアクティブな場合は、endsbs コマンドを使用して終了させてください。
3. 使用するシステムがハードウェア前提条件およびソフトウェア前提条件をすべて満たしていることを確認します。必要な場合は前提ソフトウェアをインストールします。WebSphere Process Server detailed system requirementsにある WebSphere Process Server の詳細なシステム要件を参照し、ご使用の製品バージョンのリンクを選択してください。

WebSphere Process Server に推奨される最小限のハードウェア要件を満たさない i5/OS システムで System i サーバーが稼働している場合でも、製品をインストールして実行することは可能です。ただし、WebSphere Process Server 環境の動作が遅くなるほか、アプリケーションが正常に実行されない可能性があります。

4. 適切な i5/OS 累積 PTF パッケージを入手してインストールします。詳しくは、『System i の累積 PTF』を参照してください。
5. Java、データベース、および HTTP Server 製品の最新グループ PTF がシステムに適用されていることを確認します。

### タスクの結果

この手順によって、WebSphere Process Server をインストールできるようにオペレーティング・システムを準備します。

## 次のタスク

オペレーティング・システムの準備が完了すると、WebSphere Process Server をインストールできます。別の選択可能なさまざまなインストール手段についての説明は、81 ページの『第 4 章 ソフトウェアのインストール』を参照してください。

### i5/OSでのサブシステムの構成

startServer コマンドを使用すると、デフォルトの WebSphere Application Server サブシステムおよびネイティブ・オブジェクトを WebSphere Business Integration (WBI) サブシステムおよびネイティブ・オブジェクトに変更できます。

#### このタスクについて

デフォルトでは、WebSphere Process Server は、WebSphere Application Server により提供されるサブシステム内で動作します。そのサブシステムは QWAS61 という名前であり、WebSphere Application Server によってあらかじめ提供され、構成されています。さらに、WBI ネイティブ・オブジェクトは QWBIJOBQ、QWBIOUQT、QWBIJOBQ、および QWBI61 です。デフォルトでは、WebSphere Process Server は WebSphere Process Server サーバーがそれらを使用するようには構成されていません。

ただし、このサーバーは、必要に応じて QWBI61 サブシステムを使用するように切り替えることができます。例えば、以下の手順を実行すると、WebSphere Business Integration のネイティブ・オブジェクトを使用して、WebSphere Business Integration サブシステムで WebSphere Business Integration アプリケーション・サーバーを始動できます。

#### 手順

1. i5/OS コマンド行に移動して Qshell を開始します。
2. Qshell から、以下のコマンドを入力します。

```
startServer - profileName ProcSrv01 -jobd QWBI61/QWBIJOBQ -jobq  
/QWBI61/QWBIJOBQ -outq /QWBI61/QWBIOUQT -sbs /QWBI61/QWBI61
```

## Linux システムのインストール準備

Linux システムでの WebSphere Process Server のインストールを準備する方法について説明します。

#### このタスクについて

このインストールでは、InstallShield MultiPlatform (ISMP) ウィザードが使用されます。製品はサイレント・インストールすることもできます。サイレント・モードは、コマンド行で、インストール前に編集した応答ファイルを示すパラメーターを指定して起動します。非ルート・インストール・サポートは、インストール・ウィザードおよびサイレント・インストールの両方で使用可能です。

このトピックで説明するステップの多くは、すべての Linux ディストリビューションに共通ですが、中には追加のステップが必要な Linux ディストリビューションもあります。すべての共通ステップを実行し、ご使用のディストリビューションに必要な追加ステップがあればそれらも完了してください。ご使用のディストリビュー

ションが WebSphere Process Server でサポートされているにもかかわらずこのトピック内に記載されていない場合は、製品サポート・サイト (WebSphere Process Server Support) にアクセスして、製品リリース後の技術情報のうち、ご使用のオペレーティング・システムに該当する情報を確認してください。ご使用のディストリビューションの技術情報がない場合、追加ステップは不要な可能性があります。

通常、追加のステップが必要となるのは、ディストリビューションのデフォルト・インストールを実行しても必要なライブラリー機能やオペレーティング・システム機能が提供されない場合です。WebSphere Process Server のインストール先となるのが、カスタマイズされた Linux システムであり、ご使用ディストリビューションのデフォルト・インストールによって提供されるパッケージとは著しく異なるパッケージがインストールされている場合は、WebSphere Process Server の実行に必要なパッケージをそのカスタマイズされた環境に確実にインストールしておいてください。WebSphere Process Server は、各 Linux ディストリビューションおよびその更新に必要なパッケージのリストを保持していません。

以下の手順を使用して、WebSphere Process Server をインストールするためにオペレーティング・システムを準備します。WebSphere Application Server が適正に実行されるためには、ご使用の Linux インストール済み環境に以下の項目が含まれている必要があります。

- カーネルおよび C ランタイム・ライブラリー
- C++ ランタイム・ライブラリーの最新のバージョンとすべての互換性バージョン
- X Window ライブラリーおよびランタイム
- GTK ランタイム・ライブラリー

#### 手順

1. システムにログオンします。ユーザー ID には root 権限がなくても構いません。
2. `umask` を選択します。これにより、所有者がファイルに対する読み取りおよび書き込みを行ったり、他のユーザーが一般的なシステム・ポリシーに従ってこれらのファイルにアクセスしたりできます。root ユーザーの場合は、022 の `umask` をお勧めします。root ユーザー以外の場合は、ユーザーがグループを共有するかどうかに応じて 002 または 022 の `umask` を使用できます。

`umask` 設定を確認するには、以下のコマンドを実行します。

```
umask
```

`umask` 設定を 022 に設定するには、以下のコマンドを実行します。

```
umask 022
```

3. オプション: Mozilla Firefox Web ブラウザーをダウンロードしてインストールし、製品ディスク上のランチパッド・アプリケーションを使用できるようにします。Firefox ブラウザーがない場合は、Mozilla からそのブラウザーをダウンロードしてインストールします。

**重要:** Firefox をインストールしたディレクトリー以外のディレクトリーから `>firefoxURL` を開始する必要がある場合があるため、Firefox がパスに入って

いるか確認してください。 "`>ln -s /locationToFirefox/firefox firefox`" とタイプ入力することにより、`/opt/bin` ディレクトリーへのシンボリック・リンクを追加できます。

4. オプション: サポートされるブラウザのロケーションをエクスポートします。

ブラウザのロケーションを識別するコマンドを使用して、サポートされるブラウザのロケーションをエクスポートします。

例えば、Firefox のパッケージが `/opt/bin/firefox` ディレクトリーにある場合は、次のコマンドを使用します。

```
export BROWSER=/opt/bin/firefox
```

5. 製品をインストールするワークステーションで、WebSphere Application Server、WebSphere Application Server Network Deployment、WebSphere Process Server、または WebSphere Enterprise Service Bus に関連したすべての Java プロセスを停止します。
6. IBM HTTP Server などの Web サーバー・プロセスはすべて停止します。
7. 十分なディスク・スペースを提供します。WebSphere Process Server およびその関連製品のインストールに必要なスペースについては、WebSphere Process Server detailed system requirements にある WebSphere Process Server の詳細なシステム要件を参照し、その製品のご使用のバージョンへのリンクを選択してください。
8. 前提条件および相互前提条件が、必要なりリース・レベルであることを確認します。

インストール・ウィザードは、前提条件となるオペレーティング・システム・パッチを検査しますが、前提条件をまだ確認していない場合は、WebSphere Process Server でサポートされる前提条件となるハードウェアとソフトウェアを確認してください。この情報にアクセスするには、『WebSphere Process Server detailed system requirements』にある WebSphere Process Server の詳細なシステム要件を参照し、ご使用のバージョンの WebSphere Process Server へのリンクを選択してください。

サポートされているバージョンへのマイグレーションについては、IBM 以外の前提条件および相互に必要な製品の資料を参照してください。

9. `addNode` および `importWasprofile` コマンドで発生する問題を回避したり、開かれているファイルの数が多すぎるときに `ejbdeploy` が失敗するのを回避したりするには、`bash` コマンド・シェル・プロファイルの `ulimit` 設定値を大きくします。

`addNode` コマンド・スクリプトは、ノードを追加すると失敗することがあります。また、`importWasprofile` コマンドは、構成アーカイブをインポートすると失敗する場合があります。`importWasprofile` コマンドは、カスタマイズ・インストール・パッケージ (CIP) にカスタマイズ済みプロファイルが含まれている場合、CIP のインストール中に失敗する可能性があります。

セッションのログイン時にロードされる `bash` シェル・プロファイル・スクリプトで、カーネルの `ulimit` 設定値に高い値を設定してください。`ulimit` の設定は、シェル・プロファイル・スクリプトにコマンドを追加して、Linux コマン

ド・シェル上で行ってください。シェル・プロファイル・スクリプトは、通常、次のホーム・ディレクトリーにあります。ulimit の値を 8192 に設定するには、次のコマンドを発行します。

- a. cd ~
- b. vi .bashrc
- c. ulimit -n 8192

注: ulimit コマンドを実行するには、root 特権が必要です。

addNode コマンドについて詳しくは、『The WebSphere Application Server addNode command or the importWasprofile command can fail on Linux systems』を参照してください。

10. ファイルを修正した場合は、etc/issue ファイルのオリジナル・コピーを復元します。 .

インストール・ウィザードの prereqChecker プログラムは、このファイルを使用して、オペレーティング・システムのバージョンを検査します。オリジナル・バージョンを復元できない場合は、サポートされていないオペレーティング・システムについての「オペレーティング・システム・レベル・チェック (Operating System Level Check)」メッセージを無視してください。警告が出ていてもインストールは正常に続行できます。

11. emacs または他のフリーウェアで提供される cp コマンドではなく、システムの cp コマンドが使用されていることを確認します。

システムの cp コマンドではなく、フリーウェア・パッケージの一部である cp コマンドを使用して製品をインストールする場合、インストールが正常に完了したように見えても、製品によってインストールされる Java 2 SDK では、install\_root/java ディレクトリー (install\_root は WebSphere Process Server のインストール・ディレクトリーを表す) のファイルが欠落する可能性があります。

ファイルが欠落していると、必要なシンボリック・リンクが壊れる可能性があります。WebSphere Process Server 製品を正常にインストールするには、PATH からフリーウェアの cp コマンドを除去する必要があります。

オペレーティング・システムに emacs または他のフリーウェアをインストールしている場合は、以下のステップを実行して、システムで使用されている cp コマンドを識別し、フリーウェアの cp コマンドが使用されている場合には、それを非活動化します。

- a. コマンド・プロンプトで which cp と入力します。
- b. その結果のディレクトリー出力に freeware が含まれている場合、PATH から freeware ディレクトリーを除去します。例えば、出力が .../freeware/bin/cp のような場合は、PATH からこのディレクトリーを除去します。

WebSphere Process Server をインストールした後 (後のトピックで説明します)、freeware ディレクトリーを PATH 変数に追加して戻します。

12. ディストリビューション固有のセットアップ作業がある場合は、それを完了します。

ご使用のディストリビューションに必要なステップをすべて実行してください。詳しくは、以下の WebSphere Application Server 固有のトピックを参照してください。

- Red Hat Enterprise Linux 5
- Red Hat Enterprise Linux 4
- SuSE Linux Enterprise Server 9.0 SP2 または 3
- SUSE Linux Enterprise Server (SLES) 10.0

上記以外のサポートされているディストリビューションを使用している場合は、WebSphere Application Server のサポート・サイトにアクセスして、ご使用のディストリビューションに関する技術情報が公表されているかどうかを確認します。技術情報が公表されている場合は、該当のフィックスを適用します。

13. 製品ディスクのご使用のコピー上の Java 2 SDK が正常に動作していることを確認します。

お客様用の製品 DVD を製品 DVD のコピーによって作成したか、お客様用の DVD を電子ダウンロード・イメージから作成した場合は、以下のステップを実行して、Java 2 SDK が正常に動作することを確認します。

- a. 作成した製品ディスクで、/JDK/jre.pak/repository/package.java.jre/java/jre/bin ディレクトリーに移動します。 これを実行するには、以下のコマンドを発行します。

```
cd /JDK/jre.pak/repository/package.java.jre/java/jre/bin
```

- b. Java 2 SDK のバージョンを確認します。 これを実行するには、以下のコマンドを発行します。

```
./java -version
```

Java 2 SDK が完全であれば、コマンドはエラーを伴わずに正常に完了します。

- c. 作成したその他すべての製品ディスクについて、この手順を繰り返します。

## タスクの結果

この手順によって、WebSphere Process Server をインストールできるようにオペレーティング・システムを準備します。

## 次のタスク

オペレーティング・システムの準備が完了すると、WebSphere Process Server をインストールできます。別の選択可能なさまざまなインストール手段についての説明は、81 ページの『第 4 章 ソフトウェアのインストール』を参照してください。

## Linux パッケージのインストールと検証

Linux システム上で WebSphere Process Server 製品が必要とする前提条件ライブラリー (パッケージ) をインストールおよび検証する方法について説明します。

## 始める前に

次の手順を実行する前に、Linux オペレーティング・システムをインストールして、54 ページの『Linux システムのインストール準備』のステップを完了します。

## このタスクについて

Linux オペレーティング・システムで `compat-libstdc++-33-3.2.3-47.3` パッケージが必要であること、およびパッケージに 2 つのバージョンがあることを前提としています。1 つ目のバージョンは、32 ビット・プラットフォーム用であり、もう 1 つのバージョンは、64 ビット・プラットフォーム用です。この手順では、パッケージがインストールされているかどうかを確認するためにオペレーティング・システムを照会する方法、オペレーティング・システムのディスクに欠落しているパッケージを見つける方法、およびパッケージをインストールする方法を示しています。

この例では、PowerPC 64 ビット・ハードウェア・プラットフォームで、Red Hat Enterprise Linux (RHEL) を使用します。また、この例では、RHEL で、`compat-libstdc++-33-3.2.3-47.3` パッケージの 32 ビット・バージョンおよび 64 ビット・バージョンの両方が必要であるものとします。

## 手順

1. パッケージがすでにインストールされているかどうかを判別するために、次のコマンドを実行してオペレーティング・システムを照会します。

```
rpm -qa | grep compat-libstdc++-33-3.2.3-
```

この例では、オペレーティング・システムで一致するパッケージが見つからなかったため、空白行が表示されます。

また、`grep` 引数を指定せずに次のコマンドを実行して検索すると、ファイルについての明示的メッセージを表示することができます。

```
rpm -q compat-libstdc++-33-3.2.3-
```

オペレーティング・システムより、次のメッセージが返されます。

```
パッケージ compat-libstdc++-33-3.2.3- がインストールされていません  
(package compat-libstdc++-33-3.2.3- is not installed)
```

2. オペレーティング・システムのメディア上で、関連するすべてのパッケージを見つけ、それらの完全修飾位置を取得します。

この例では、オペレーティング・システムのメディアは、`/media/cdrom` にマウントされている CD であると仮定しています。ご使用の CD-ROM 装置は、例えば、`/media/cdrecorder` などの別の位置にある場合があります。

```
find /media/cdrom -name compat-libstdc++-33-3.2.3-*
```

この例では、オペレーティング・システムで 2 つの一致するパッケージ名が見つかります。1 つ目のパッケージは 32 ビット・バージョンであり、もう 1 つのパッケージは 64 ビット・バージョンです。

```
/media/cdrom/RedHat/RPMS/compat-libstdc++-33-3.2.3-47.3.ppc.rpm  
/media/cdrom/RedHat/RPMS/compat-libstdc++-33-3.2.3-47.3.ppc64.rpm
```

3. 次のコマンドを実行して最初の欠落しているパッケージをインストールします。

```
rpm -ivh /media/cdrom/RedHat/RPMS/compat-libstdc++-33-3.2.3-47.3.ppc.rpm
```

4. 次のコマンドを実行して 2 番目の欠落しているパッケージをインストールします。

```
rpm -ivh /media/cdrom/RedHat/RPMS/compat-libstdc++-33-3.2.3-47.3.ppc64.rpm
```

5. オプション: **1 つのコマンドでパッケージを検索およびインストールする代替方式:** 次のコマンドを使用してパッケージを検出し、検出したすべてのパッケージをインストールします。

前のステップで説明した手順でパッケージを検出し、インストールしようとしたパッケージのみが次のコマンドによってインストールされていることを確認します。

```
find /media/cdrom -name compat-libstdc++-33-3.2.3-* | xargs rpm -ivh
```

この単一のコマンドにより両方のパッケージがインストールされます。

6. オプション: **既存のパッケージを更新する代替コマンド:** 次のコマンドを使用して、欠落しているパッケージを検出しインストールするか、既存のパッケージを検出し更新します。

```
find /media/cdrom -name compat-libstdc++-33-3.2.3-* | xargs rpm -Uvh
```

この単一のコマンドを実行すると、パッケージがインストールされていない場合はそのパッケージがインストールされます。パッケージがインストールされている場合、このコマンドを実行すると、パッケージが新しいバージョンに更新されます。

## 次のタスク

必須パッケージは、オペレーティング・システムごとに異なります。各 Linux オペレーティング・システムで必要なパッケージのリストについては、54 ページの『Linux システムのインストール準備』を参照してください。

## Solaris システムのインストール準備

Solaris システムでの WebSphere Process Server のインストールを準備する方法について説明します。

### このタスクについて

このインストールでは、InstallShield MultiPlatform (ISMP) ウィザードが使用されます。製品はサイレント・インストールすることもできます。サイレント・モードは、コマンド行で、インストール前に編集した応答ファイルを示すパラメーターを指定して起動します。

ご使用のオペレーティング・システムにさらに多くの一時スペースが必要であったり、前提条件パッケージが存在しないなどの問題が発生した場合は、インストールをキャンセルして必要な変更を行ってからインストールを再開します。

**制約事項:** プロファイル管理ツールは Eclipse ベースのアプリケーションで、Cygwin/X を使用したリモート Solaris マシン上での Eclipse ベースのアプリケーションの実行に関する既知の問題があります。これは、プロファイル管理ツールおよび Installation Factory の使用に影響を与えます。例えば、Cygwin/X をリモート AIX 上で使用する場合、プロファイル管理ツールのスプラッシュ画面が表示されま

すが、プロファイル管理ツールは実際には表示されません。こうした問題に関する既存の Bugzilla レポートの詳細については、『Bugzilla - Bug 36806』にある情報を参照してください。異なる X サーバー (Hummingbird Exceed など) が使用される場合、これらの問題は発生しません。

以下の手順を使用して、WebSphere Process Server をインストールするためにオペレーティング・システムを準備します。

#### 手順

1. システムにログオンします。ユーザー ID には root 権限がなくても構いません。
2. umask を選択します。これにより、所有者がファイルに対する読み取りおよび書き込みを行ったり、他のユーザーが一般的なシステム・ポリシーに従ってそれらのファイルにアクセスしたりできます。root ユーザーの場合は、022 の umask をお勧めします。root ユーザー以外の場合は、ユーザーがグループを共有するかどうかに応じて 002 または 022 の umask を使用できます。

umask 設定を確認するには、以下のコマンドを実行します。

```
umask
```

umask 設定を 022 に設定するには、以下のコマンドを実行します。

```
umask 022
```

3. 「Solaris ソフトウェア・グループの選択 (Select Solaris Software Group)」パネルで「**グループ全体 (Entire Group)**」オプションを選択します。
4. オプション: Mozilla ブラウザーがインストールされていない場合はインストールします。Mozilla ブラウザーは、ランチパッド・コンソールをサポートします。Mozilla ブラウザーは、Mozilla からダウンロードしてインストールします。
5. オプション: サポートされるブラウザのロケーションをエクスポートします。

ブラウザのロケーションを識別するコマンドを使用して、サポートされるブラウザのロケーションをエクスポートします。

例えば、Mozilla パッケージが /usr/bin/mozilla ディレクトリーにある場合、以下のコマンドを使用します。

```
BROWSER=/usr/bin/mozilla  
export BROWSER
```

6. オプション: Exceed を構成して Automatic Font Substitution を使用不可に設定します。Hummingbird Exceed パッケージを使用して Solaris オペレーティング・システムが稼働しているワークステーションに接続してから、プロファイル管理ツールを起動すると、一部のフォント・サイズとスタイルが、ネイティブの Solaris の表示から同一操作を実行したときとは異なって表示されます。フォント・サイズとスタイルは、バンドルされている Java ランタイム環境 (JRE) でのフォント選択に基づいて変化します。フォントをさまざまに変化させないようにするには、以下の手順で Hummingbird Exceed を構成して Automatic Font Substitution を使用不可に設定します。

- a. Hummingbird Exceed のユーザー・インターフェースから、「**Xconfig**」 > 「**Font**」 > 「**Font Database**」 > 「**Disable (Automatic Font Substitution)**」を選択します。
  - b. 「**OK**」を選択します。
  - c. Hummingbird Exceed パッケージを再始動します。
7. 製品をインストールするワークステーションで、WebSphere Application Server、WebSphere Application Server Network Deployment、WebSphere Process Server、または WebSphere Enterprise Service Bus に関連したすべての Java プロセスを停止します。
  8. IBM HTTP Server などの Web サーバー・プロセスはすべて停止します。
  9. 十分なディスク・スペースを提供します。WebSphere Process Server およびその関連製品のインストールに必要なスペースについては、WebSphere Process Server detailed system requirements にある WebSphere Process Server の詳細なシステム要件を参照し、その製品のご使用のバージョンへのリンクを選択してください。
  10. WebSphere Process Server をサポートするように、カーネル値を設定します。

Solaris のカーネル値の一部は、製品にとって通常は小さすぎます。カーネル値の設定方法については、63 ページの『Solaris システムでのカーネル値の設定』を参照してください。

11. 前提条件および相互前提条件が、必要なリリース・レベルであることを確認します。

インストール・ウィザードは、前提条件となるオペレーティング・システム・パッチを検査しますが、前提条件をまだ確認していない場合は、WebSphere Process Server でサポートされる前提条件となるハードウェアとソフトウェアを確認してください。この情報にアクセスするには、『Supported Hardware and Software Website』のサイトで WebSphere Process Server の詳細なシステム要件を参照し、ご使用のバージョンの WebSphere Process Server へのリンクを選択してください。

サポートされているバージョンへのマイグレーションについては、IBM 以外の前提条件および相互に必要な製品の資料を参照してください。

12. emacs または他のフリーウェアで提供される **cp** コマンドではなく、システムの **cp** コマンドが使用されていることを確認します。

システムの **cp** コマンドではなく、フリーウェア・パッケージの一部である **cp** コマンドを使用して製品をインストールする場合、インストールが正常に完了したように見えても、製品によってインストールされる Java 2 SDK では、*install\_root/java* ディレクトリー (*install\_root* は WebSphere Process Server のインストール・ディレクトリーを表す) のファイルが欠落する可能性があります。

ファイルが欠落していると、必要なシンボリック・リンクが壊れる可能性があります。WebSphere Process Server 製品を正常にインストールするには、PATH からフリーウェアの **cp** コマンドを除去する必要があります。

オペレーティング・システムに emacs または他のフリーウェアをインストールしている場合は、以下のステップを実行して、システムで使用されている **cp** コマンドを識別し、フリーウェアの **cp** コマンドが使用されている場合には、それを非活動化します。

- a. WebSphere Process Server 製品用のインストール・プログラムを実行する前に、コマンド・プロンプトで `which cp` と入力します。
  - b. その結果のディレクトリー出力に `freeware` が含まれている場合、`PATH` から `freeware` ディレクトリーを除去します。例えば、出力が `.../freeware/bin/cp` のような場合は、`PATH` からこのディレクトリーを除去します。
  - c. WebSphere Process Server をインストールします。
  - d. `freeware` ディレクトリーを `PATH` に戻してください。
13. 製品ディスクのご使用のコピー上の Java 2 SDK が正常に動作していることを確認します。

お客様用の製品 DVD を製品 DVD のコピーによって作成したか、お客様用の DVD を電子ダウンロード・イメージから作成した場合は、以下のステップを実行して、Java 2 SDK が正常に動作することを確認します。

- a. 作成した製品ディスクで、`/JDK/jre.pak/repository/package.java.jre/java/jre/bin` ディレクトリーに移動します。これを実行するには、以下のコマンドを発行します。

```
cd /JDK/jre.pak/repository/package.java.jre/java/jre/bin
```

- b. Java 2 SDK のバージョンを確認します。これを実行するには、以下のコマンドを発行します。

```
./java -version
```

Java 2 SDK が完全であれば、コマンドはエラーを伴わずに正常に完了します。

- c. 作成したその他すべての製品ディスクについて、この手順を繰り返します。

## タスクの結果

この手順によって、WebSphere Process Server をインストールできるようにオペレーティング・システムを準備します。

## 次のタスク

オペレーティング・システムの準備が完了すると、WebSphere Process Server をインストールできます。別の選択可能なさまざまなインストール手段についての説明は、81 ページの『第 4 章 ソフトウェアのインストール』を参照してください。

## Solaris システムでのカーネル値の設定

Solaris のカーネル値の一部は、通常、WebSphere Process Server インストール済み環境にとっては小さすぎます。特定のカーネル・パラメーターをより高い値に設定する方法について説明します。

## このタスクについて

以下の手順を使用して、カーネル・パラメーターを設定します。

### 手順

1. ホスト・ワークステーションに `root` としてログインします (まだログインしていない場合)。
2. ワークステーション構成を確認します。

これを実行するには、以下のコマンドを入力します。

```
sysdef -i
```

3. カーネル値を設定します。 変更する必要があるカーネルのパラメーターおよびその変更方法は、インストールした Solaris のバージョンにより異なります。

- Solaris 9 がインストールされている場合は、次の操作を実行します。
  - a. `/etc/system` ファイルを編集します。以下の例に示されている値を使用します。

```
set shmsys:shminfo_shmmax = 4294967295
set shmsys:shminfo_shmseg = 1024
set shmsys:shminfo_shmmni = 1024
set semsys:seminfo_semaem = 16384
set semsys:seminfo_semmni = 1024
set semsys:seminfo_semmmap = 1026
set semsys:seminfo_semmns = 16384
set semsys:seminfo_semmnl = 100
set semsys:seminfo_semopm = 100
set semsys:seminfo_semmnu = 2048
set semsys:seminfo_semume = 256
set msgsys:msginfo_msgmap = 1026
set msgsys:msginfo_msgmax = 65535
set rlim_fd_cur = 1024
```

- b. オペレーティング・システムをリブートします。
- Solaris 10 がインストールされている場合は、次の操作を実行します。
    - a. `etc/project` ファイルの `shmmax` の値を、`projmod` コマンドを使用して次のように変更します。

```
# projmod -a -K "project.max-shm-memory=(priv,4G,deny)" default
```
    - b. オペレーティング・システムをリブートします。

### 次のタスク

Solaris システムの設定の詳細については、Sun Web サイト (<http://docs.sun.com>) の管理資料を参照してください。

## Windows システムのインストール準備

Windows システムでの WebSphere Process Server のインストールを準備する方法について説明します。

## 始める前に

このインストールでは、InstallShield MultiPlatform (ISMP) ウィザードが使用されます。製品はサイレント・インストールすることもできます。サイレント・モードは、コマンド行で、インストール前に編集した応答ファイルを示すパラメーターを指定して起動します。

注: マップされていないネットワーク・ドライブ (Windows エクスプローラーでは \\hostname¥sharename など) または仮想ドライブからの WebSphere Process Server のインストールはサポートされていません。最初にネットワーク・ドライブを Windows ドライブ名 (Z: など) にマップしてから、WebSphere Process Server をインストールする必要があります。

## このタスクについて

### Vista

Microsoft® Windows Vista および Windows Server 2008 オペレーティング・システムでの WebSphere Process Server サポートに関する注:

- Windows Vista オペレーティング・システムは、サーバー・プラットフォームではなく、クライアント・サイドの操作に合わせて調整されているという点で Microsoft Windows XP オペレーティング・システムと似ています。
- Windows Vista および Windows Server 2008 オペレーティング・システムには、Microsoft Windows 2003 および XP オペレーティング・システムとは異なる点がいくつかあります。WebSphere Process Server のインストールおよび操作という観点からすると、ユーザー・アカウント・コントロール (UAC) が導入されているという点が、大きな変更点の 1 つです。UAC は、Windows Vista および Windows Server 2008 オペレーティング・システムでは、デフォルトで有効になっています。

#### – ユーザー・アカウントの種類

Microsoft Windows オペレーティング・システムの旧バージョンでは、ユーザーは組み込み管理者アカウントを使用して WebSphere Process Server をインストールするのが一般的でした。しかし、Windows Vista および Windows Server 2008 オペレーティング・システムでは、管理者アカウントはデフォルトで無効になっており、その使用は推奨されていません。管理者アカウントの代わりに、オペレーティング・システムのインストール時に管理者グループ特権のあるユーザー・アカウントが作成されます。ただし、このアカウントは、デフォルトで標準のユーザー (非管理者) 特権で実行されます。この資料では、このアカウントのことを「管理者アカウント」と呼びます。

初期管理者アカウントに加えて、Windows Vista および Windows Server 2008 オペレーティング・システムで他のアカウントを作成することができます。これらの他のアカウントは、デフォルトで管理者グループのメンバーではありません。これら両方のアカウントは、デフォルトで標準のユーザー特権で実行され、管理者特権では実行されません。特定の状況では、両方のアカウントを管理者特権で実行することは可能ですが、そのようにするにはいずれの場合も、ユーザーの特権を昇格させる必要があります。

#### – 管理者への昇格

Windows Vista オペレーティング・システムで、操作に管理者特権が必要であることが検出されると、ユーザーに対して管理者特権への昇格を求めるプロンプトが出される場合があります。この場合、操作を続行するには、ユーザーの確認が必要です。

- 管理者アカウントからの昇格を求めるプロンプトが出される場合、ユーザーが行う必要があるのは、操作を確認することだけです。
- これが、管理者グループのメンバーではないアカウントで発生する場合、操作を続行するには、ユーザーは管理者アカウントのパスワードを指定する必要があります。

#### - レジストリーおよびディレクトリーへのアクセス

- オペレーティング・システムのレジストリーの特定の領域でキーを作成、削除、または変更するには、管理者特権が必要です。

プログラムが、例えば Windows Service を構成するために、これらの保護された領域に存在するレジストリー項目を作成または変更する必要がある場合は、そのプログラムを管理者特権で実行する必要があります。標準のユーザー特権で実行している場合は、このようなアクションを実行することはできません。

- オペレーティング・システムのファイル・システムの特定の領域でプログラム・ファイルを作成、削除、または変更するには、管理者特権が必要です。

Program Files ディレクトリーなどが、このような領域に属しています。プログラムが Program Files ディレクトリーに存在するファイル (ログ・ファイル、プロファイル、または構成ファイル) を変更する必要がある場合は、そのプログラムを管理者特権で実行する必要があります。標準のユーザー特権で実行している場合は、このようなアクションを実行することはできません。

以下の手順を使用して、WebSphere Process Server をインストールするためにオペレーティング・システムを準備します。

#### 手順

1. システムにログオンします。

ユーザー ID には管理者特権がなくても構いません。ただし、管理者以外のユーザーとして製品をインストールする場合、いくつかの制約があります。例えば、WebSphere Process Server 用の Windows サービスを作成することはできません。Windows サービスを作成する場合、ユーザーには、「オペレーティング・システムの一部として機能」および「サービスとしてログオン」という拡張ユーザー権限が必要です。

**ヒント:** Windows サービスの作成は、`install.exe -OPT`

`PROF_winserviceCheck="false"` というオプションを指定してコマンド行からグラフィカル・インターフェースを起動することにより、無効にすることができます。

ユーザー ID が管理者グループに属している場合、インストール・ウィザードは Windows ユーザー ID に拡張ユーザー権限を付与します。サイレント・インストールでは、これらの権限は与えられません。Windows プラットフォー

ムで新規ユーザー ID を作成してサイレント・インストールを行う場合、正しくサイレント・インストールを実行できるようにするには、その前に、システムを再始動して、そのユーザー ID の適切な権限をアクティブにする必要があります。

WebSphere Process Server を Windows サービスとしてインストールする場合は、スペースを含むユーザー ID を使用しないでください。ユーザー ID にスペースが含まれていると妥当性検査ができず、インストールを続行できません。

また、管理者としてシステムにログオンしない場合、プログラムはオペレーティング・システムへの登録を行いません。制約の詳細については、WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 6.1.x のインフォメーション・センターにあるトピック『非ルート・インストーラーの制限』を参照してください。

**i5/OS** **i5/OS プラットフォームの場合:** ランチパッドを使用して i5/OS システム上で WebSphere Process Server をインストールする場合には、Windows システムにサインオンします。対話式インストールの実行中は、Windows システムをクライアント・マシンとして使用して、System i サーバーに接続します。Launchpad は、Windows クライアント上で稼働します。i5/OS システム上でインストールを行うには、このシステム用の有効な i5/OS ユーザー・プロファイルを使用する必要があります。ユーザー・プロファイルには \*ALLOBJ 権限と \*SECADM 権限が必要です。これらの権限がなければ、インストールは失敗します。

2. オプション: ランチパッドを使用できるようにするため、サポートされている最新のバージョンの Internet Explorer を以下のロケーションからダウンロードします。

Download Internet Explorer 6 Service Pack 1

3. オプション: Mozilla 1.7.5 以降をダウンロードしてインストールします。
4. 製品をインストールするワークステーションで、WebSphere Application Server、WebSphere Application Server Network Deployment、WebSphere Process Server、または WebSphere Enterprise Service Bus に関連したすべての Java プロセスを停止します。
5. IBM HTTP Server などの Web サーバー・プロセスはすべて停止します。
6. process\_spawner.exe プログラムのインスタンスをすべて停止します。
7. 十分なディスク・スペースを提供します。WebSphere Process Server およびその関連製品のインストールに必要なスペースについては、WebSphere Process Server detailed system requirements にある WebSphere Process Server の詳細なシステム要件を参照し、その製品のご使用のバージョンへのリンクを選択してください。
8. 前提条件および相互前提条件が、必要なリリース・レベルであることを確認します。インストール・ウィザードは、前提条件となるオペレーティング・システム・パッチを検査しますが、前提条件をまだ確認していない場合は、WebSphere Process Server でサポートされる前提条件となるハードウェアとソフトウェアを確認してください。この情報にアクセスするには、『WebSphere

Process Server detailed system requirements』にある WebSphere Process Server の詳細なシステム要件を参照し、ご使用のバージョンの WebSphere Process Server へのリンクを選択してください。

サポートされているバージョンへのマイグレーションについては、IBM 以外の前提条件および相互に必要な製品の資料を参照してください。

9. 必要であれば、Microsoft Windows Script Host バージョン 5.6 をダウンロードして、Windows オペレーティング・システム上に「スタート」メニュー項目を適切に作成します。

このコンポーネントが既にインストールされているかどうかを確認して、インストールされていない場合にインストールするには、コマンド・ウィンドウを開いて、`cscript` と入力します。

- このコンポーネントがインストールされている場合は、コンポーネントの使用法とオプションの情報が表示されます。次のステップに進んでください。
  - このコンポーネントがインストールされていない場合は、以下のいずれかの Microsoft Web ページからダウンロードしてインストールする必要があります。
    - Windows XP の場合: Windows Script 5.6 for Windows XP and Windows 2000
    - Windows Server 2003 の場合: Windows Script 5.6 for Windows Server 2003
10. 製品ディスクのご使用のコピー上の Java 2 SDK が正常に動作していることを確認します。

お客様用の製品 DVD を製品 DVD のコピーによって作成したか、お客様用の DVD を電子ダウンロード・イメージから作成した場合は、以下のステップを実行して、Java 2 SDK が正常に動作することを確認します。

- a. 作成した製品ディスクで、`/JDK/jre.pak/repository/package.java.jre/java/jre/bin` ディレクトリに移動します。これを実行するには、以下のコマンドを発行します。

```
cd /JDK/jre.pak/repository/package.java.jre/java/jre/bin
```

- b. Java 2 SDK のバージョンを確認します。これを実行するには、以下のコマンドを発行します。

```
./java -version
```

Java 2 SDK が完全であれば、コマンドはエラーを伴わずに正常に完了します。

- c. 作成したその他すべての製品ディスクについて、この手順を繰り返します。

## タスクの結果

この手順によって、WebSphere Process Server をインストールできるようにオペレーティング・システムを準備します。

## 次のタスク

オペレーティング・システムの準備が完了すると、WebSphere Process Server をインストールできます。別の選択可能なさまざまなインストール手段についての説明は、81 ページの『第 4 章 ソフトウェアのインストール』を参照してください。

## 製品インストール前の共通データベースの手動作成

共通データベースを手動で作成する場合、以下の指示に従ってください。

### このタスクについて

組織で、データベースを別々のデータベース管理者によって作成することが必要な場合があります。そのため、プロファイルを作成または拡張する前に、DBA は WebSphere Process Server 共通データベースを作成することが必要な場合があります。製品インストール中にプロファイルを作成または拡張する場合、DBA は製品のインストール前にデータベースを作成する必要がありません。WebSphere Process Server は、データベースの作成に使用できるデフォルトのスクリプトを提供します。

利用可能なデータベース・タイプおよびそのディレクトリー名は、以下のとおりです。

表 18. 利用可能なデータベース・タイプおよびそのディレクトリー名

データベース・タイプ	ディレクトリー名
DB2 Universal Database (z/OS および i5/OS 以外のすべてのオペレーティング・システム)	DB2
DB2 for z/OS バージョン 8.x	DB2zOSV8
DB2 for z/OS バージョン 9.x	DB2zOSV9
Informix®	Informix
Oracle	Oracle
Microsoft SQL Server	SQLServer
DB2 for i5/OS [ネイティブ][ツールボックス]	DB2iSeries

### 手順

1. データベース作成スクリプトを含むディレクトリーに移動します。スクリプトは、製品メディアおよび製品インストール後のディレクトリーの両方にあります。デフォルトでは、スクリプトは以下のディレクトリーにあります。

- 製品メディアの場所:

– **i5/OS** **Linux** **UNIX** `<media_root>/dbscripts` または `<extract_directory>/dbscripts`

– **Windows** `<media_root>%dbscripts` または `<extract_directory>%dbscripts`

- インストール後の場所:

– **i5/OS** **Linux** **UNIX** `install_root/dbscripts`

- **Windows** `install_root%dbscripts`
2. ご使用のデータベース製品向けの共通データベース・スクリプトを含むディレクトリーを開きます。 デフォルトの場所はプラットフォームによって異なります。
    - **i5/OS**   **Linux**   **UNIX**   `.../CommonDB/db_type`
    - **Windows**   `...%CommonDB%db_type`
 変数 `db_type` はサポートされているデータベース製品を表します。
  3. 標準的なデータベース定義ツール、ネイティブ・コマンド、および手順を使用して適切なスクリプトを編集することにより、データベースを作成します。 スクリプトには、データベース、テーブル、および索引を作成するための基本的なステートメントのみが含まれています。 特定のデータベース・スクリプトの編集について詳しくは、サブトピックを参照してください。 サブトピックでは、スクリプトの編集は製品メディアまたは抽出ディレクトリーで行うことを想定しています。
  4. ご使用のバージョンのスクリプトを実行します。 ご使用のデータベースで .sql スクリプトを実行する方法については、そのデータベース製品の資料を参照してください。
  5. エラーが発生した場合、またはデータベース・クライアントの出力で障害があることが示された場合、報告されたエラーを修正します。

## 次のタスク

データベースが正常に作成されたら、製品をインストールします。

## DB2 for i5/OS スクリプトの編集

共通データベースを手動で作成するには、WebSphere Process Server に付属のスクリプトを編集する必要があります。このトピックでは、DB2iSeries データベースに関連付けられたスクリプトの編集方法を説明します。

### このタスクについて

スクリプトを実行して DB2iSeries データベースを手動で作成できるようにするには、まず WebSphere Process Server 用にスクリプトをカスタマイズする必要があります。 WebSphere Process Server には、以下のスクリプトが付属しています。

表 19. WebSphere Process Server 用の DB2 for i5/OS スクリプト

createDatabase_CommonDB.sql
createTable_AppScheduler.sql
createTable_mediation.sql
createTable_RelationshipMetadataTable.sql
createTable_customization.sql
dropTable_AppScheduler.sql
configCommonDB
createTable_CommonDB.sql
createTable_lockmanager.sql

表 19. WebSphere Process Server 用の DB2 for i5/OS スクリプト (続き)

createTable_Recovery.sql
createTable_EsbLoggerMediation.sql
insertTable_CommonDB.sql
configCommonDB.bat
createDBTables

### 手順

1. 必ずデータベース・スキーマを更新可能な権限を持つユーザー ID を使用してください。
2. データベース・スクリプトが格納されているディレクトリーを見つけます。
  - `<media_root>/dbscripts/CommonDB` または `<extract_directory>/dbscripts/CommonDB`
3. `configCommonDB` の場所を探します。
  - a. `DB_NAME` 変数をデータベース名 (`*LOCAL` や `*SYSBAS` など) で置き換えます。
  - b. `DB_USER` 変数を DB2 for i5/OS のユーザー名 (`db2admin` など) で置き換えます。
  - c. `DB_SCHEMA` 変数を DB2 for i5/OS のスキーマ名 (`WPRCSDB` など) で置き換えます。

**重要:** 新規のローカル・データベースを作成する場合は、`createDB` パラメーターを `configCommonDB` スクリプトに渡す必要があります。それ以外は、既存のデータベースが使用されます。

また、システム内で重複しない固有のスキーマ名を指定する必要もあります。

4. `insertTable_CommonDB.sql` ファイルの場所を探し、次の変数を、インストールする WebSphere Process Server のバージョンで置き換えます。例えば、WebSphere Process Server のバージョンが 6.2.0.0 の場合は、次のようにします。
  - a. `MajorVersion` 変数を製品バージョン番号の最初の数字 (この場合は 6) で置き換えます。
  - b. `MinorVersion` 変数を製品バージョン番号の 2 番目の数字 (この場合は 2) で置き換えます。
  - c. `RefreshPackLevel` 変数を製品バージョン番号の 3 番目の数字 (この場合は 0) で置き換えます。
  - d. `FixpackLevel` 変数を製品バージョン番号の 4 番目の数字 (この場合は 0) で置き換えます。
5. QShell で `configCommonDB` スクリプトを実行します。これにより `createDBTables` スクリプトが実行され、共通データベースで必要なスキーマとテーブルが作成されます。

**重要:** これらのスクリプトを実行するには、i5/OS システムで `*SECOFR` 権限が必要になります。

- エラーが発生した場合、またはデータベース・クライアントの出力で障害があることが示された場合、報告されたエラーを修正して、再試行します。

## タスクの結果

共通データベースのスキーマが作成されます。

## DB2 スクリプトの編集

共通データベースを手動で作成するには、WebSphere Process Server に付属のスク립トを編集する必要があります。このトピックでは、DB2 データベースに関連付けられたスク립トの編集方法を説明します。

### このタスクについて

スク립トを実行して DB2 データベースを手動で作成できるようにするには、まず WebSphere Process Server 用にスク립トをカスタマイズする必要があります。WebSphere Process Server には、以下のスク립トが付属しています。

表 20. WebSphere Process Server 用の DB2 スクリプト

createDatabase_CommonDB.sql
createTable_AppScheduler.sql
createTable_mediation.sql
createTable_RelationshipMetadataTable.sql
createTable_customization.sql
dropTable_AppScheduler.sql
configCommonDB.sh
createTable_CommonDB.sql
createTable_lockmanager.sql
createTable_Recovery.sql
createTable_EsbLoggerMediation.sql
insertTable_CommonDB.sql
configCommonDB.bat

### 手順

- 必ずデータベース・スキーマを更新可能な権限を持つユーザー ID を使用してください。
- データベース・スク립トが格納されているディレクトリーを見つけます。
  - i5/OS** **Linux** **UNIX** `<media_root>/dbscripts/CommonDB` または `<extract_directory>/dbscripts/CommonDB`
  - Windows** `<media_root>%dbscripts%CommonDB` または `<extract_directory>%dbscripts%CommonDB`
- configCommonDB.sh ファイルの場所を探索し、以下のサブタスクを実行します。
  - `DB_NAME` 変数をデータベース名 (例えば、WPRCSDB) で置き換えます。

- b. *DB\_USER* 変数をデータベースのユーザー名 (例えば、db2admin) で置き換えます。

**重要:** 新規のローカル・データベースを作成する場合は、**createDB** パラメーターを *configCommonDB* スクリプトに渡す必要があります。それ以外は、既存のデータベースが使用されます。

4. *createDatabase\_CommonDB.sql* ファイルの場所を探し、以下のサブタスクを実行します。
  - a. *DB\_NAME* 変数をデータベース名 (例えば、WPRCSDB) で置き換えます。
5. *insertTable\_CommonDB.sql* ファイルの場所を探索し、次の変数を、インストールする WebSphere Process Server のバージョンで置き換えます。例えば、WebSphere Process Server のバージョンが 6.2.0.0 の場合は、次のようにします。
  - a. *MajorVersion* 変数を製品バージョン番号の最初の数字 (この場合は 6) で置き換えます。
  - b. *MinorVersion* 変数を製品バージョン番号の 2 番目の数字 (この場合は 2) で置き換えます。
  - c. *RefreshPackLevel* 変数を製品バージョン番号の 3 番目の数字 (この場合は 0) で置き換えます。
  - d. *FixpackLevel* 変数を製品バージョン番号の 4 番目の数字 (この場合は 0) で置き換えます。
6. ご使用の SQL スクリプトを実行します。 ご使用のデータベースで .sql スクリプトを実行する方法については、そのデータベース製品の資料を参照してください。
7. エラーが発生した場合、またはデータベース・クライアントの出力で障害があることが示された場合、報告されたエラーを修正して、再試行します。

## タスクの結果

DB2 データベースが作成されます。

## DB2 for z/OS スクリプトの編集

共通データベースを手動で作成するには、WebSphere Process Server に付属のスクリプトを編集する必要があります。このトピックでは、DB2 for z/OS データベースに関連付けられたスクリプトの編集方法を説明します。

### このタスクについて

スクリプトを実行して DB2 for z/OS データベースを手動で作成できるようにするには、まず WebSphere Process Server 用にスクリプトをカスタマイズする必要があります。WebSphere Process Server には、以下のスクリプトが付属しています。

表 21. WebSphere Process Server 用の DB2 for z/OS スクリプト

<i>createTable_CommonDB.sql</i>
<i>createTable_lockmanager.sql</i>
<i>createTable_Recovery.sql</i>
<i>createTable_EsbLoggerMediation.sql</i>

表 21. WebSphere Process Server 用の DB2 for z/OS スクリプト (続き)

insertTable_CommonDB.sql
createTable_Relationship.sql
createTable_AppScheduler.sql
createTable_mediation.sql
createTable_RelationshipMetadataTable.sql
createTable_customization.sql
dropTable_AppScheduler.sql

## 手順

- 必ずデータベース・スキーマを更新可能な権限を持つユーザー ID を使用してください。
- データベース・スクリプトが格納されているディレクトリーを見つけます。
  - i5/OS** **Linux** **UNIX** `<media_root>/dbscripts/CommonDB` または `<extract_directory>/dbscripts/CommonDB`
  - Windows** `<media_root>%dbscripts%CommonDB` または `<extract_directory>%dbscripts%CommonDB`
- DB2zOSV8 ディレクトリーまたは DB2zOSV9 ディレクトリーのスクリプトを編集するかどうかを選択します。
- insertTable\_CommonDB.sql ファイルの場所を探索し、次の変数を、インストールする WebSphere Process Server のバージョンで置き換えます。例えば、WebSphere Process Server のバージョンが 6.2.0.0 の場合は、次のようにします。
  - MajorVersion* 変数を製品バージョン番号の最初の数字 (この場合は 6) で置き換えます。
  - MinorVersion* 変数を製品バージョン番号の 2 番目の数字 (この場合は 2) で置き換えます。
  - RefreshPackLevel* 変数を製品バージョン番号の 3 番目の数字 (この場合は 0) で置き換えます。
  - FixpackLevel* 変数を製品バージョン番号の 4 番目の数字 (この場合は 0) で置き換えます。
- ご使用のスクリプトを実行します。ご使用のデータベースで .sql スクリプトを実行する方法については、そのデータベース製品の資料を参照してください。
- エラーが発生した場合、またはデータベース・クライアントの出力で障害があることが示された場合、報告されたエラーを修正して、再試行します。

## タスクの結果

DB2 for z/OS データベースが作成されます。

注: パラメーター V\_DBNAME、V\_DBSTORAGEGROUP、V\_SQLID、@DBNAME@、@STOGRP@、@\_SQLID、および @ EMA が、Business Process Choreographer のスクリプトによって置き換えられます。

## Informix スクリプトの編集

共通データベースを手動で作成するには、WebSphere Process Server に付属のスクリプトを編集する必要があります。このトピックでは、Informix データベースに関連付けられたスクリプトの編集方法を説明します。

### このタスクについて

スクリプトを実行して Informix データベースを手動で作成できるようにするには、まず WebSphere Process Server 用にスクリプトをカスタマイズする必要があります。WebSphere Process Server には、以下のスクリプトが付属しています。

表 22. WebSphere Process Server 用の Informix スクリプト

createDatabase_CommonDB.sql
createTable_AppScheduler.sql
createTable_mediation.sql
createTable_RelationshipMetadataTable.sql
createTable_customization.sql
dropTable_AppScheduler.sql
configCommonDB.sh
createTable_CommonDB.sql
createTable_lockmanager.sql
createTable_Recovery.sql
createTable_EsbLoggerMediation.sql
insertTable_CommonDB.sql
configCommonDB.bat

### 手順

- 必ずデータベース・スキーマを更新可能な権限を持つユーザー ID を使用してください。
- データベース・スクリプトが格納されているディレクトリーを見つけます。
  - i5/OS** **Linux** **UNIX** `<media_root>/dbscripts/CommonDB` または `<extract_directory>/dbscripts/CommonDB`
  - Windows** `<media_root>%dbscripts%CommonDB` または `<extract_directory>%dbscripts%CommonDB`
- createDatabase\_CommonDB.sql ファイルの場所を探し、以下のサブタスクを実行します。
  - `DB_NAME` 変数をデータベース名 (例えば、WPRCSDB) で置き換えます。
  - `DB_INSTANCE` 変数を Informix インスタンス (例えば、ol\_myinstance) で置き換えます。
  - `DB_LOCATION` 変数を Informix データベースのロケーション (c:%informix など) で置き換えます。

4. insertTable\_CommonDB.sql ファイルの場所を探索し、次の変数を、インストールする WebSphere Process Server のバージョンで置き換えます。例えば、WebSphere Process Server のバージョンが 6.2.0.0 の場合は、次のようにします。
  - a. *MajorVersion* 変数を製品バージョン番号の最初の数字 (この場合は 6) で置き換えます。
  - b. *MinorVersion* 変数を製品バージョン番号の 2 番目の数字 (この場合は 2) で置き換えます。
  - c. *RefreshPackLevel* 変数を製品バージョン番号の 3 番目の数字 (この場合は 0) で置き換えます。
  - d. *FixpackLevel* 変数を製品バージョン番号の 4 番目の数字 (この場合は 0) で置き換えます。
5. ご使用のスクリプトを実行します。 ご使用のデータベースで .sql スクリプトを実行する方法については、そのデータベース製品の資料を参照してください。
6. エラーが発生した場合、またはデータベース・クライアントの出力で障害があることが示された場合、報告されたエラーを修正して、再試行します。

## タスクの結果

Informix データベースが作成されます。

## Oracle スクリプトの編集

共通データベースを手動で作成するには、WebSphere Process Server に付属のスクリプトを編集する必要があります。このトピックでは、Oracle データベースに関連付けられたスクリプトの編集方法を説明します。

### このタスクについて

スクリプトを実行して Oracle データベースを手動で作成できるようにするには、まず WebSphere Process Server 用にスクリプトをカスタマイズする必要があります。WebSphere Process Server には、以下のスクリプトが付属しています。

表 23. WebSphere Process Server 用の Oracle スクリプト

configCommonDB.bat
configCommonDB.sh
createDatabase_commonDB.sql
createTable_AppScheduler.sql
createTable_commonDB.sql
createTable_customization.sql
createTable_EsbLoggerMediation.sql
createTable_governancerepository.sql
createTable_lockmanager.sql
createTable_mediation.sql
createTable_Recovery.sql
createTable_RelationshipMetadataTable.sql
createTable_RelationshipViewMetaaTable.sql

表 23. WebSphere Process Server 用の Oracle スクリプト (続き)

```
insertTable_CommonDB.sql
```

### 手順

1. 必ずデータベース・スキーマを更新可能な権限を持つユーザー ID を使用してください。
2. データベース・スクリプトが格納されているディレクトリーを見つけます。
  - **i5/OS** **Linux** **UNIX** `media_root/dbscripts/CommonDB/oracle` or `<extract_directory>/dbscripts/CommonDB/oracle`
  - **Windows** `media_root%dbscripts%CommonDB%oracle` or `<extract_directory>%dbscripts%CommonDB%oracle`
3. configCommonDB.bat ファイルまたは configCommonDB.sh ファイルを見つけ、以下のサブタスクを実行します。
  - a. `DB_NAME` 変数を Oracle データベース名 [SID] (ORCL など) で置き換えます。
  - b. `DB_USER` 変数を Oracle ユーザー (例えば、orauser) で置き換えます。
4. createSchema\_CommonDB.sql ファイル (必要なスキーマを作成するために使用するテンプレート) の場所を見つけます。データベース・スキーマを作成するには、以下のようにします。
  - a. `DBUSER` 変数をデータベース・スキーマ名で置き換えます。例えば、orcCOMM とします。
  - b. `DBPASS` 変数をデータベース・スキーマのパスワードで置き換えます。例えば、youNameIt とします。
  - c. 追加のスキーマごとに上記の手順を繰り返します。

以下のコンポーネントはスキーマを必要とします。プロファイルの作成中にこれらのスキーマが渡されなかった場合は、自動的に生成されます。デフォルトのスキーマは以下のとおりです。

表 24. デフォルトのスキーマ

コンポーネント	デフォルト値
CommonDB	<code>first3CharOfSIDCOMM</code>
ビジネス・スペース	IBMBUSSP
SCA.SYSTEM ME	<code>first3CharOfSIDSS00</code>
SCA.APP ME	<code>first3CharOfSIDSA00</code>
CEI ME	<code>first3CharOfSIDCM00</code>
BPC ME	<code>first3CharOfSIDBM00</code>
CEI	<code>first3CharOfSIDCEID</code>

上記のパラメーターにおいて、パスワードの値はプロファイルの構成方法によって異なります。値は、dbPassword または manageprofiles コマンドの実行中に使用する値にすることができます。これらのスクリプトを実行するには、SYSDBA 特権を持っている必要があります。

5. insertTable\_CommonDB.sql ファイルの場所を探索し、次の変数を、インストールする WebSphere Process Server のバージョンで置き換えます。例えば、WebSphere Process Server のバージョンが 6.2.0.0 の場合は、次のようにします。
  - a. *MajorVersion* 変数を製品バージョン番号の最初の数字 (この場合は 6) で置き換えます。
  - b. *MinorVersion* 変数を製品バージョン番号の 2 番目の数字 (この場合は 2) で置き換えます。
  - c. *RefreshPackLevel* 変数を製品バージョン番号の 3 番目の数字 (この場合は 0) で置き換えます。
  - d. *FixpackLevel* 変数を製品バージョン番号の 4 番目の数字 (この場合は 0) で置き換えます。
6. すべてのスクリプトを `extract_directory%dbscripts%CommonDB` ディレクトリーから Oracle マシンにコピーし、`configCommonDB.bat` スクリプトまたは `configCommonDB.sh` スクリプトを実行します。これらのスクリプトを実行するには、SYSDBA 特権を持っている必要があります。ご使用のデータベースで .sql スクリプトを実行する方法については、そのデータベース製品の資料を参照してください。
7. エラーが発生した場合、またはデータベース・クライアントの出力で障害があることが示された場合、報告されたエラーを修正して、再試行します。

## タスクの結果

Oracle データベースが作成されます。

## Microsoft SQL Server スクリプトの編集

共通データベースを手動で作成するには、WebSphere Process Server に付属のスクリプトを編集する必要があります。このトピックでは、Microsoft SQL Server データベースに関連付けられたスクリプトの編集方法を説明します。

### このタスクについて

スクリプトを実行して MicrosoftSQL Server データベースを手動で作成できるようにするには、まず WebSphere Process Server 用にスクリプトをカスタマイズする必要があります。WebSphere Process Server には、以下のスクリプトが付属しています。

表 25. WebSphere Process Server 用の Microsoft SQL Server スクリプト

createDatabase_CommonDB.sql
createTable_AppScheduler.sql
createTable_mediation.sql
createTable_RelationshipMetadataTable.sql
createTable_customization.sql
dropTable_AppScheduler.sql
createTable_CommonDB.sql
createTable_lockmanager.sql

表 25. WebSphere Process Server 用の Microsoft SQL Server スクリプト (続き)

createTable_Recovery.sql
createTable_EsbLoggerMediation.sql
insertTable_CommonDB.sql
configCommonDB.sh

## 手順

1. 必ずデータベース・スキーマを更新可能な権限を持つユーザー ID を使用してください。
2. データベース・スクリプトが格納されているディレクトリーを見つけます。
  - **i5/OS** **Linux** **UNIX** <media\_root>/dbscripts/CommonDB または <extract\_directory>/dbscripts/CommonDB
  - **Windows** <media\_root>%dbscripts%CommonDB または <extract\_directory>%dbscripts%CommonDB
3. configCommonDB.sh ファイルの場所を探索し、以下のサブタスクを実行します。
  - a. *DB\_NAME* 変数をデータベース名 (例えば、MASTER) で置き換えます。
  - b. *DB\_USER* 変数をデータベースのユーザー名 (例えば、sqluser) で置き換えます。
  - c. *DB\_HOSTNAME* 変数を SQL ホスト名 (例えば、me.usca.ibm.com) で置き換えます。
4. insertTable\_CommonDB.sql ファイルの場所を探索し、次の変数を、インストールする WebSphere Process Server のバージョンで置き換えます。例えば、WebSphere Process Server のバージョンが 6.2.0.0 の場合は、次のようにします。
  - a. *MajorVersion* 変数を製品バージョン番号の最初の数字 (この場合は 6) で置き換えます。
  - b. *MinorVersion* 変数を製品バージョン番号の 2 番目の数字 (この場合は 2) で置き換えます。
  - c. *RefreshPackLevel* 変数を製品バージョン番号の 3 番目の数字 (この場合は 0) で置き換えます。
  - d. *FixpackLevel* 変数を製品バージョン番号の 4 番目の数字 (この場合は 0) で置き換えます。
5. ご使用のバージョンのスクリプトを実行します。ご使用のデータベースで .sql スクリプトを実行する方法については、そのデータベース製品の資料を参照してください。
6. エラーが発生した場合、またはデータベース・クライアントの出力で障害があることが示された場合、報告されたエラーを修正して、再試行します。

## タスクの結果

Microsoft SQL Server データベースが作成されます。



## 第 4 章 ソフトウェアのインストール

WebSphere Process Server 製品の入手方法は 2 つあります。1 つは製品パッケージ内のディスクから入手する方法で、もう 1 つは Passport Advantage サイトからインストール・イメージをダウンロードする方法です (この場合は、そのためのライセンスが必要です)。ソフトウェアをインストールするには、グラフィカル・インターフェース・モードまたはサイレント・モードでインストール・ウィザードを使用します。サイレント・モードでは、インストール・ウィザードはグラフィカル・インターフェースを表示せずに、応答ファイルから応答を読み取ります。

WebSphere Process Server のソフトウェアをインストールする前に、現在の環境およびビジネス要件を評価して、実装するシステムがニーズを満たしていることを確認する必要があります。WebSphere Process Server のようなミドルウェアの場合、ご使用のエンタープライズ情報システム (EIS) のさまざまな面 (容量やセキュリティなど) を評価する必要があります。

インストールの計画、および WebSphere Process Server で必要とされるデータベースについては、『WebSphere Process Server の計画』の各トピックを参照してください。

次に、38 ページの『WebSphere Process Server のインストールに関する前提条件』にあるインストール前提条件を確認します。

インストールを計画して前提条件を検討したら、該当するディスクまたは配布メディアからソフトウェアをインストールします。応答ファイルを使用してソフトウェアをサイレント・インストールするか、インストール・ウィザードを使用して対話式にインストールするかを選択できます。

- すべてのプラットフォームで対話式にインストールするには、96 ページの『WebSphere Process Server の対話式インストール』を参照してください。
- **Linux** **UNIX** **Windows** Linux、UNIX、および Windows プラットフォームにサイレント・インストールするには、149 ページの『Linux、UNIX、および Windows へのサイレント・インストール』を参照してください。
- **i5/OS** Windows ワークステーションのコマンド行から i5/OS プラットフォームにサイレント・インストールするには、157 ページの『Windows ワークステーションのコマンド行から i5/OS をサイレント・インストールする』を参照してください。
- **i5/OS** System i サーバーから i5/OS プラットフォームにサイレント・インストールするには、154 ページの『i5/OS での System i サーバーからのサイレント・インストール』を参照してください。

ソフトウェアをインストールすると、製品の中核のファイル一式がワークステーション上に作成されます。これらのファイルは、スタンドアロン・サーバーおよびデプロイメント環境を構成する場合に必要です。

インストール中には、以下のオプションを選択できます。

- 既に WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment がインストールされている場合は、以下のいずれかのオプションを選択できます。
  - WebSphere Process Server または WebSphere Process Server Client を、同じワークステーション上の WebSphere Application Server のインストールと共存する別個のインストールとしてインストールする。このオプションは、初めて WebSphere Process Server をインストールする場合に最適です。
  - WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 6.1.x を拡張して WebSphere Process Server 機能に対応させる。
- WebSphere Process Server、WebSphere Process Server Client、または WebSphere Enterprise Service Bus のバージョン 6.2 が既にインストール済みである場合は、以下のオプションのいずれかを選択できます。
  - WebSphere Process Server または WebSphere Process Server Client を、同じワークステーションで既存のインストールと共存する別個のインストールとしてインストールする。
  - 既存の WebSphere Enterprise Service Bus または WebSphere Process Server Client インストールを WebSphere Process Server インストールに変換する。
  - 既存の WebSphere Process Server のインストールに追加機能をインストールする。

**制約事項:** WebSphere Process Server、WebSphere Process Server Client、または WebSphere Enterprise Service Bus の既存のバージョン 6.0.x または 6.1.x に対して、WebSphere Process Server または WebSphere Process Server Client のバージョン 6.2 を上書きインストールすることはできません。既存のインストール済み環境をバージョン 6.2 にマイグレーションする必要があります。

詳しくは、WebSphere Process Server へのマイグレーションを参照してください。

- 実行するインストールのタイプは、以下のオプションから選択できます。
  - **標準インストール (デフォルト)**。デフォルトのインストール選択項目および構成を使用して、必要に応じて WebSphere Process Server をインストールするとともに、WebSphere Application Server Network Deployment with Feature Pack for Web Services もインストールします。また、WebSphere Process Server サンプルもインストールできます。さらに、スタンドアロン・サーバー・プロファイル、デプロイメント・マネージャー・プロファイル、またはカスタム・プロファイルを作成することもできます。またはこのオプションを省略して、後でプロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成することも可能です。
  - **デプロイメント環境インストール**。必要に応じて WebSphere Process Server をインストールするとともに、WebSphere Application Server Network Deployment with Feature Pack for Web Services もインストールします。また、デプロイメント環境のセットアップ方法もガイドします。デプロイメント・マネージャーを作成して、そのデプロイメント・マネージャーにデプロイメント環境パターンを選択するか、あるいは管理対象ノードに適用する 1 つまたは複数のクラスターを選択できます。

- クライアント・インストール。デフォルトのインストール選択項目および構成を使用して、WebSphere Process Server Client をインストールするとともに、必要に応じて WebSphere Application Server Network Deployment with Feature Pack for Web Services をインストールします。これにより、WebSphere Process Server と対話するクライアント・アプリケーションの実行が可能になります。

該当するディスクまたは配布メディアからソフトウェアをインストールした後に、最新のフィックスパックを上書きインストールします。WebSphere Process Server へのフィックスパックのインストールについては、サポート・ページ (<http://www.ibm.com/software/integration/wps/support/>) の『*Recommended fixes*』に記載されている説明を参照してください。

注: WebSphere Process Server の暫定修正は、事前定義またはユーザー定義のディレクトリー・ロケーションに格納することにより、自動的にインストールできます。詳しくは、614 ページの『暫定修正の自動インストール』を参照してください。

標準的インストールまたはデプロイメント環境インストールのいずれかを実行したら、プロファイル管理ツールを使用して、スタンドアロン・サーバー・プロファイル、デプロイメント・マネージャー・プロファイル、カスタム・プロファイル、またはデプロイメント環境構成を作成することができます。また、ファースト・ステップ・コンソールを使用して、スタンドアロン・サーバー・プロファイルまたはデプロイメント・マネージャー・プロファイルが正常に作成されたことを検証したり、サーバーを始動または停止したり、その他のタスクを実行したりすることもできます。

---

## Launchpad の開始

WebSphere Process Server の Launchpad は、サーバー環境全体のインストールを一元的に実行するための参照ポイントであり、この環境には、WebSphere Process Server または WebSphere Process Server Client、WebSphere Application Server Network Deployment、一連の Web 開発ツール、Web サーバー、メッセージ・サービス・クライアント、および追加のサポート・ソフトウェアや資料を組み込むことができます。

### 始める前に

Launchpad アプリケーションは、製品 DVD およびダウンロード済みインストール・イメージに収録されています。開始する前に、以下を実行してください。

- 38 ページの『WebSphere Process Server のインストールに関する前提条件』のトピックを参照して、製品をインストールするための前提条件を確認します。
- Launchpad は Web アプリケーションなので、サポートされるバージョンの Web ブラウザーがインストールされている必要があります。

Linux

UNIX

Windows

**Linux、UNIX、および Windows プラットフォームの場合:** 各プラットフォームでサポートされる Web ブラウザーのインストール方法の詳細は、42 ページの『インストールのためのオペレーティング・システムの準備』のプラットフォーム固有のトピックを参照してください。

## このタスクについて

以下の手順を実行して、Launchpad を使用します。

### 手順

1. まだログオンしていない場合は、システムにログオンします。

**Linux** **UNIX** **Windows** **Linux、UNIX、および Windows プラットフォームの場合:** 使用するユーザー ID に root 特権や管理者特権は必要ありません。しかし、製品を非ルート・ユーザーまたは非管理者ユーザーとしてインストールする場合、いくつかの制約があります。例えば、WebSphere Process Server 用の Windows または Linux サービスを作成することはできません。また、プログラムはオペレーティング・システムへの登録を行いません。非 root ユーザーとしてインストールを実行する場合の制約の詳細は、WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 6.1.x のインフォメーション・センターにあるトピック『非ルート・インストーラーの制限』を参照してください。

**i5/OS** **i5/OS プラットフォームの場合:** ランチパッドを使用して i5/OS システム上で WebSphere Process Server をインストールする場合には、Windows システムにサインオンします。対話式インストールの実行中は、Windows システムをクライアント・マシンとして使用して、System i サーバーに接続します。Launchpad は、Windows クライアント上で稼働します。i5/OS システム上でインストールを行うには、このシステム用の有効な i5/OS ユーザー・プロファイルを使用する必要があります。ユーザー・プロファイルには \*ALLOBJ 権限と \*SECADM 権限が必要です。これらの権限がなければ、インストールは失敗します。

2. まだメディアにアクセスしていない場合は、製品 DVD からインストールするか、パスポート・アドバンテージでダウンロードしたイメージからインストールするかに応じて、以下のいずれかの方法でメディアにアクセスします。
  - 製品 DVD からインストールする場合は、「WebSphere Process Server V6.2」というラベルが付いた製品ディスクをディスク・ドライブに挿入します。必要に応じてディスク・ドライブをマウントします (詳しくは、630 ページの『Linux および UNIX オペレーティング・システムでのディスク・ドライブのマウント』を参照してください)。
  - パスポート・アドバンテージからダウンロードしたイメージからインストールする場合は、イメージを抽出したディレクトリーにナビゲートします。
3. 製品 DVD からインストールするか、パスポート・アドバンテージでダウンロードしたイメージからインストールするかに応じて、以下のいずれかの方法で Launchpad を開始します。
  - 製品 DVD からインストールする場合:
    - **i5/OS** **i5/OS プラットフォームの場合:** (Windows システムのクライアント・マシンを使用して i5/OS システムに接続します。) ディスク・ドライブのルート・ディレクトリーで、コマンド行からコマンド `launchpad.exe` を入力します。

- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合: コマンド `mount_point/launchpad.sh` を入力します。ここで、`mount_point` は Linux または UNIX システムのマウント・ポイントを表します。
- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: ディスク・ドライブのルート・ディレクトリで、コマンド行からコマンド `launchpad.exe` を入力します。
- パスポート・アドバンテージでダウンロードしたイメージからインストールする場合は、以下のようにコマンドを入力します。ここで、`extract_directory` は電子イメージを抽出したディレクトリを表します。
  - **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合: (Windows システムのクライアント・マシンを使用して i5/OS システムに接続します。) コマンド行から `extract_directory%1launchpad.exe` と入力します。
  - **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合: `extract_directory/launchpad.sh`
  - **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: コマンド行から `extract_directory%1launchpad.exe` と入力します。

Launchpad が表示されます。Launchpad の開始に関する問題が発生した場合は、777 ページの『Launchpad アプリケーションのトラブルシューティング』に記載されているトラブルシューティング情報を使用して問題を修正してください。

4. オプション: Launchpad がご使用のシステムの言語で初期化されていない場合は、「言語選択:」フィールドで適切な言語を選択します。

## タスクの結果

Launchpad を使用して、WebSphere Process Server および関連製品のインストールを開始できます。Launchpad によってインストール可能なコンポーネントの説明については、『Launchpad のオプション』を参照してください。

## 次のタスク

このトピックにアクセスした元のインストール手順に戻って、手順を継続してください。

## Launchpad のオプション

Launchpad for WebSphere Process Server には、サーバー環境全体をインストールするときに選択可能ないくつかのオプションがあります。この環境には、WebSphere Process Server または WebSphere Process Server Client、WebSphere Application Server Network Deployment、一連の Web 開発ツール、Web サーバー、メッセージ・サービス・クライアント、およびその他のサポート・ソフトウェアや資料を組み込むことができます。

**重要:** **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合: Launchpad を使用して WebSphere Process Server を i5/OS システムにインストールする場合は、Windows システムにサインオンします。対話式インストールの実行時に、Windows システムをクライア

ント・マシンとして使用して System i サーバーに接続します。Launchpad は Windows クライアント上で実行し、Launchpad オプション用にリストされるすべての Windows コマンドを使用します。

Launchpad には、*WebSphere Process Server V6.2 DVD*、*WebSphere Application Server Network Deployment Supplements V6.1 CD*、および *WebSphere Application Server Toolkit V6.1.1 Disk 1 CD* (Linux IA32 および Windows IA32 メディアにのみ収録されています) のインストール可能コンポーネントごとに、リンクがあります。

このトピック内の以下のセクションでは、さまざまな Launchpad パネルについて詳細に説明しています。

- 『「ようこそ」パネル』
- 87 ページの『「IBM WebSphere Process Server for Multiplatforms のインストール」パネル』
- 87 ページの『IBM WebSphere Process Server データベース・スクリプト』
- **i5/OS** 87 ページの『IBM WebSphere Profile Management Tool Client for i5/OS のインストール・パネル』
- **AIX** **Linux** **Solaris** **Windows** 88 ページの『「メッセージ・サービス・クライアントのインストール」パネル』
- **AIX** **Linux** **Solaris** **Windows** 88 ページの『「Message Service Client for C/C++ のインストール」パネル』
- **Windows** 89 ページの『「Message Service Client for .NET のインストール」パネル』
- 90 ページの『「追加ソフトウェアのインストール」パネル』
- **Linux** **UNIX** **Windows** 90 ページの『「IBM HTTP Server のインストール」パネル』
- 91 ページの『「Web サーバー・プラグインのインストール」パネル』
- 92 ページの『Application Client のインストール・パネル』
- **Linux** **Windows** 93 ページの『「Application Server Toolkit のインストール」パネル』
- 94 ページの『「WebSphere ソフトウェアのインストール用の IBM Update Installer」パネル』
- 94 ページの『「IBM WebSphere Installation Factory」パネル』
- 95 ページの『「IBM WebSphere Process Server ヘルプ・システムのインストール」パネル』
- **Linux** **UNIX** **Windows** 95 ページの『「IBM Support Assistant のインストール」パネル』

## 「ようこそ」パネル

「ようこそ」パネルは、Launchpad の開始時に最初に表示されるパネルです。右または左のペインで項目を選択すると、個々の Launchpad パネルが表示されます。こ

ここでは、コンポーネントのインストール・プログラムへのリンクと、(ほとんどのコンポーネントの場合) 製品について、製品のインストール方法、および製品を構成して使用する方法が説明されている資料へのリンクが含まれます。

## 「IBM WebSphere Process Server for Multiplatforms のインストール」パネル

Launchpad の「ようこそ」パネルの左側のペインから、「**IBM WebSphere Process Server のインストール**」を選択すると、右側のペインに以下のオプションが表示されます。

**WebSphere Process Server for Multiplatforms のインストール・ウィザードの起動**  
WebSphere Process Server for Multiplatforms をインストールするには、インストール・ウィザードを開始します。このプログラムは、*WebSphere Process Server V6.2 DVD* の次のロケーションに格納されています。

- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:  
/WBI/install
- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: %WBI%\install.exe

### インフォメーション・センターのオープン

オンラインで利用可能な、PDF ブック形式や Eclipse 文書プラグイン形式の、(ローカル・システムにダウンロードしてインストールできる) 完全な技術的製品情報にリンクします。

### 重要な情報の表示

このリリースに関する最新の重要フィックスや情報へのリンクを示します。

## IBM WebSphere Process Server データベース・スクリプト

Launchpad の「ようこそ」パネルの左側のペインで「**IBM WebSphere Process Server データベース・スクリプト**」を選択すると、製品のインストール前に WebSphere Process Server 環境で必要とされるデータベースおよびデータベース表をオプションで作成するために使用可能なスクリプトのロケーション情報が、右側のペインに表示されます。右側のペインには次のオプションも表示されます。

**データベース・スクリプトについての資料をインフォメーション・センターで表示**  
データベース・スクリプトの使用方法に関する最新情報を提供します。

## IBM WebSphere Profile Management Tool Client for i5/OS のインストール・パネル

**制約事項:** **i5/OS** この選択項目が表示されるのは、i5/OS プラットフォーム用 Launchpad の場合のみです。

Launchpad の「ようこそ」パネルの左側のペインから「**IBM WebSphere Profile Management Tool Client for i5/OS のインストール**」を選択すると、右側のペインに以下のオプションが表示されます。

**IBM Profile Management Tool Client for i5/OS のインストール・ウィザードの起動**  
インストール・ウィザードを使用して IBM WebSphere Profile Management

Tool Client for i5/OS をインストールします。このツールは、i5/OS システム上の WebSphere Process Server インストールでプロファイルを作成したり拡張したりするのに使用します。

## 「メッセージ・サービス・クライアントのインストール」パネル

**制約事項:** AIX Linux Solaris Windows この選択項目が表示されるのは、AIX PPC32、AIX PPC64、Linux IA32、Linux IA64、Solaris SPARC、Solaris SPARC64、および Windows IA32 プラットフォーム用の Launchpad の場合のみです。

メッセージ・サービス・クライアントは、WebSphere Process Server のメッセージング機能を非 Java 環境に拡張します。これらの機能は、TCP/IP、SSL、HTTP、および HTTPS を利用して、WebSphere ファミリー (WebSphere Application Server、WebSphere MQ、および WebSphere Message Broker など) との相互協調処理をサポートします。要求/応答、Point-to-Point、パブリッシュ/サブスクライブなど、広い範囲の対話モデルを使用できます。これらのクライアントを使用するには、関連するアプリケーションが実行されているシステム上にクライアントをインストールする必要があります。このソフトウェアは、WebSphere Process Server の使用には不要です。

Launchpad の「ようこそ」パネルの左側のペインから「メッセージ・サービス・クライアントのインストール」を選択すると、右側のペインに以下のオプションが表示されます。

### インフォメーション・センターのオープン

オンラインで利用可能な、PDF ブック形式や Eclipse 文書プラグイン形式の、(ローカル・システムにダウンロードしてインストールできる) 完全な技術的製品情報にリンクします。

### IBM Message Service Client for C/C++

IBM Message Service Client for C/C++ のインストール・ウィザードを開始するとき使用する Launchpad パネルを開きます。このパネルの詳細については、『「Message Service Client for C/C++ のインストール」パネル』を参照してください。

### IBM Message Service Client for .NET

IBM Message Service Client for .NET のインストール・ウィザードを開始するとき使用する Launchpad パネルを開きます。このパネルの詳細については、89 ページの『「Message Service Client for .NET のインストール」パネル』を参照してください。

## 「Message Service Client for C/C++ のインストール」パネル

**制約事項:** AIX Linux Solaris Windows この選択項目が表示されるのは、AIX PPC32、AIX PPC64、Linux IA32、Linux IA64、Solaris SPARC、Solaris SPARC64、および Windows IA32 プラットフォーム用の Launchpad の場合のみです。

「メッセージ・サービス・クライアントのインストール」パネルで「IBM Message Service Client for C/C++」を選択すると、以下のオプションが右側のペインに表示されます。

#### IBM Message Service Client for C/C++ のインストール・ウィザードの起動

IBM Message Service Client for C/C++ をインストールするためのインストール・ウィザードを開始します。このプログラムは、*WebSphere Process Server V6.2 DVD* の次のロケーションに格納されています。

- **AIX** プラットフォームの場合: /MsgClients/XMSCC/setupAix.bin
- **Linux IA32** プラットフォームの場合: /MsgClients/XMSCC/setuplinuxia32
- **Linux IA64** プラットフォームの場合: /MsgClients/XMSCC/setuplinux-86\_64
- **Solaris** プラットフォームの場合: /MsgClients/XMSCC/setupsolaris
- **Windows** プラットフォームの場合:  
¥MsgClients¥XMSCC¥setup.exe

#### インフォメーション・センターのオープン

オンラインで利用可能な、PDF ブック形式や Eclipse 文書プラグイン形式の、(ローカル・システムにダウンロードしてインストールできる) 完全な技術的製品情報にリンクします。

### 「Message Service Client for .NET のインストール」パネル

**制約事項:** **Windows** この選択項目が表示されるのは、Windows IA32 プラットフォーム用 Launchpad の場合のみです。

このクライアントは、.NET メッセージング・アプリケーションをサポートします。

「メッセージ・サービス・クライアントのインストール」パネルで「IBM Message Service Client for .NET」を選択すると、以下のオプションが右側のペインに表示されます。

#### IBM Message Service Client for .NET のインストール・ウィザードの起動

IBM Message Service Client for .NET をインストールするためのインストール・ウィザードを開始します。このプログラムは、*WebSphere Process Server V6.2 DVD* の次のロケーションに格納されています。

- **Windows** プラットフォームの場合:  
¥MsgClients¥XMSNET¥dotNETClientsetup.exe

#### インフォメーション・センターのオープン

オンラインで利用可能な、PDF ブック形式や Eclipse 文書プラグイン形式の、(ローカル・システムにダウンロードしてインストールできる) 完全な技術的製品情報にリンクします。

## 「追加ソフトウェアのインストール」パネル

WebSphere Process Server および WebSphere Application Server Network Deployment の他に、製品パッケージにはランタイム環境をサポートする追加ソフトウェア (Web 開発ツール、Web サーバー、およびその他のサポートするソフトウェアおよび資料) も含まれます。このソフトウェアは、WebSphere Process Server の使用には不要です。

Launchpad の「ようこそ」パネルの左側のペインか「追加ソフトウェアのインストール」を選択すると、以下のオプションが右側のペインに表示されます。

### IBM HTTP Server

IBM HTTP Server のインストール・ウィザードを開始するときに使用する Launchpad パネルを開きます。このパネルの詳細については、『「IBM HTTP Server のインストール」パネル』を参照してください。

### Web サーバー・プラグイン

Web サーバー・プラグインのインストール・ウィザードを開始するときに使用する Launchpad パネルを開きます。このパネルの詳細については、91 ページの『「Web サーバー・プラグインのインストール」パネル』を参照してください。

### Application Client

Application Client のインストール・ウィザードを開始するときに使用する Launchpad パネルを開きます。このパネルの詳細については、92 ページの『Application Client のインストール・パネル』を参照してください。

### Application Server Toolkit

Application Server Toolkit のインストール・ウィザードを開始するときに使用する Launchpad パネルを開きます。このパネルの詳細については、93 ページの『「Application Server Toolkit のインストール」パネル』を参照してください。

## 「IBM HTTP Server のインストール」パネル

**制約事項:** i5/OS この選択項目は、i5/OS プラットフォームの Launchpad の場合は表示されません。

IBM HTTP Server は、Apache HTTP Server をベースにした Web サーバーです。

「追加ソフトウェアのインストール」パネルから「IBM HTTP Server」を選択すると、以下のオプションが右側のペインに表示されます。

### IBM HTTP Server のインストール・ウィザードの起動

IBM HTTP Server をインストールするためのインストール・ウィザードを開始します。このプログラムは *WebSphere Application Server Network Deployment Supplements V6.1 CD* の次のロケーションにあります。

- Linux UNIX **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:  
/IHS/install
- Windows **Windows** プラットフォームの場合: ¥IHS¥install.exe

## IBM HTTP Server のインストール・ガイドの表示

IBM HTTP Server のインストール資料へ直接リンクします。このファイルは *WebSphere Application Server Network Deployment Supplements V6.1 CD* の次のロケーションにあります。

- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:  
/IHS/docs/InstallGuide\_en.html
- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合:  
¥IHS¥docs¥InstallGuide\_en.html

## IBM HTTP Server の README ファイルの表示

IBM HTTP Server の README ファイルへ直接リンクします。このファイルは *WebSphere Application Server Network Deployment Supplements V6.1 CD* の次のロケーションにあります。

- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:  
/IHS/readme/readme\_en.html
- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合:  
¥IHS¥readme¥readme\_en.html

## 「Web サーバー・プラグインのインストール」パネル

Web サーバー・プラグインにより、HTTP 要求を Web サーバーからアプリケーション・サーバーに転送するソフトウェアが提供されます。

「追加ソフトウェアのインストール」パネルから「Web サーバー・プラグイン」を選択すると、以下のオプションが右側のペインに表示されます。

### Web サーバー・プラグインのインストール・ウィザードの起動

1 つ以上の Web サーバー・プラグインをインストールおよび構成するには、インストール・ウィザードを開始します。このプログラムは *WebSphere Application Server Network Deployment Supplements V6.1 CD* の次のロケーションにあります。

- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:  
/plugin/install
- **i5/OS** **Windows** **i5/OS** および **Windows** プラットフォームの場合:  
¥plugin¥install.exe

### Web サーバー・プラグインのインストール・ロードマップの表示

Web サーバー・プラグインのインストールおよび構成手順へ直接リンクします。このファイルは *WebSphere Application Server Network Deployment Supplements V6.1 CD* の次のロケーションにあります。

- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:  
/plugin/index\_roadmap\_en.html
- **i5/OS** **Windows** **i5/OS** および **Windows** プラットフォームの場合:  
¥plugin¥index\_roadmap\_en.html

### Web サーバー・プラグインのインストール・ガイドの表示

Web サーバー・プラグインのインストール資料へ直接リンクします。この

ファイルは *WebSphere Application Server Network Deployment Supplements V6.1 CD* の次のロケーションにあります。

- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:  
/plugin/docs/InstallGuide\_en.html
- **i5/OS** **Windows** **i5/OS** および **Windows** プラットフォームの場合:  
¥plugin¥docs¥InstallGuide\_en.html

#### Web サーバー・プラグインの README ファイルの表示

Web サーバー・プラグインの README ファイルへ直接リンクします。このファイルは *WebSphere Application Server Network Deployment Supplements V6.1 CD* の次のロケーションにあります。

- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:  
/plugin/readme/readme\_en.html
- **i5/OS** **Windows** **i5/OS** および **Windows** プラットフォームの場合:  
¥plugin¥readme¥readme\_en.html

## Application Client のインストール・パネル

**制約事項:** Application Client は、Linux on System z または 64 ビット・プラットフォーム (i5/OS 以外) では提供されません。

Application Client は、ご使用のアプリケーション・サーバーの各種アプリケーション・プログラミング・モデルを提供します。

「追加ソフトウェアのインストール」パネルから「**Application Clients**」を選択すると、以下のオプションが右側のペインに表示されます。

#### アプリケーション・クライアントのインストール・ウィザードの起動

WebSphere Application Server アプリケーション・クライアントをインストールするためのインストール・ウィザードを開始します。アプリケーション・クライアントのインストール・ウィザードにより、クライアント・システムでクライアント・アプリケーションを稼働させるための環境がインストールされます。クライアント・アプリケーションは、分散クライアント・システムおよびホスト WebSphere Application Server システムで処理を実行します。例えば、クライアントでは GUI が提供されますが、データはホスト上で処理します。環境によっては、必要なすべてのハンドシェイクおよびプロトコルを実行します。シン・クライアント環境では、クライアント・アプリケーションに、JNDI 検索などの独自のプロトコルが必要です。このプログラムは *WebSphere Application Server Network Deployment Supplements V6.1 CD* の次のロケーションにあります。

- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:  
/AppClient/install
- **i5/OS** **Windows** **iSeries®** および **Windows** プラットフォームの場合:  
¥AppClient¥install.exe

#### アプリケーション・クライアントのインストール・ガイドの表示

WebSphere Application Server アプリケーション・クライアントのインストール

ール資料へ直接リンクします。このファイルは *WebSphere Application Server Network Deployment Supplements V6.1 CD* の次のロケーションにあります。

- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:  
/AppClient/docs/InstallGuide\_en.html
- **i5/OS** **Windows** **i5/OS** および **Windows** プラットフォームの場合:  
¥AppClient¥docs¥InstallGuide\_en.html

#### アプリケーション・クライアントの README ファイルの表示

WebSphere Application Server アプリケーション・クライアントの README ファイルへ直接リンクします。このファイルは *WebSphere Application Server Network Deployment Supplements V6.1 CD* の次のロケーションにあります。

- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:  
/AppClient/readme/readme\_en.html
- **i5/OS** **Windows** **i5/OS** および **Windows** プラットフォームの場合:  
¥AppClient¥readme¥readme\_en.html

### 「Application Server Toolkit のインストール」パネル

**制約事項:** この選択項目が表示されるのは、Linux IA32 および Windows IA32 プラットフォーム用 Launchpad の場合のみです。

Application Server Toolkit は、アプリケーション・サーバーに公開するための基本的なアセンブリー・ツールおよびデプロイメント・ツールを提供します。

「追加ソフトウェアのインストール」パネルから「**Application Server Toolkit**」を選択すると、以下のオプションが右側のペインに表示されます。

#### Application Server Toolkit のインストール・ウィザードの起動

WebSphere Application Server Toolkit を Windows および Linux (Intel) システムのみにインストールするためのインストール・ウィザードを開始します。このプログラムは *WebSphere Application Server Toolkit V6.1.1 Disk 1* の次のロケーションにあります。

- **Linux** **Linux** プラットフォームの場合: /install
- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: ¥install.exe

#### Application Server Toolkit のインストール・ガイドの表示

WebSphere Application Server Toolkit のインストール資料へ直接リンクします。このファイルは *WebSphere Application Server Toolkit V6.1.1 Disk 1* の次のロケーションにあります。

- **Linux** **Linux** プラットフォームの場合: /readme/readme\_install\_ast.html
- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合:  
¥readme¥readme\_install\_ast.html

## Application Server Toolkit の README ファイルの表示

WebSphere Application Server Toolkit の README ファイルへ直接リンクします。このファイルは *WebSphere Application Server Toolkit V6.1.1 Disk 1* の次のロケーションにあります。

- **Linux** Linux プラットフォームの場合: /readme/readme\_ast.html
- **Windows** Windows プラットフォームの場合: %readme%\readme\_ast.html

## 「WebSphere ソフトウェアのインストール用の IBM Update Installer」パネル

このツールを使用して、更新 (暫定修正、フィックスパック、およびリフレッシュ・パック) を WebSphere ソフトウェア (WebSphere Enterprise Service Bus リリース、WebSphere Process Server リリース、WebSphere Application Server リリース、IBM HTTP Server、Web サーバー・プラグイン、および WebSphere Application Client など) にインストールします。

Launchpad の「ようこそ」パネルの左側のペインから「**WebSphere ソフトウェアのインストール用の IBM Update Installer**」を選択すると、右側のペインに以下のオプションが表示されます。

### IBM Update Installer のインストール・ウィザードの起動

IBM Update Installer をインストールするためのインストール・ウィザードを開始します。このプログラムは、*WebSphere Process Server V6.2 DVD* の次のロケーションに格納されています。

- **Linux** **UNIX** Linux および UNIX プラットフォームの場合:  
/UpdateInstaller/install
- **i5/OS** **Windows** i5/OS および Windows プラットフォームの場合:  
%UpdateInstaller%\install.exe

## 「IBM WebSphere Installation Factory」パネル

このツールを使用して、カスタマイズした WebSphere Process Server インストール・パッケージを作成します。インストール・パッケージは、更新 (暫定修正、フィックスパック、およびリフレッシュ・パック) の組み込み、カスタマイズのプロファイル作成、スクリプトの実行、または他のユーザー定義ファイルをインストールするようにカスタマイズできます。

Launchpad の「ようこそ」パネルの左側のペインで「**IBM WebSphere Installation Factory**」を選択すると、右側のペインに以下のオプションが表示されます。

### IBM WebSphere Installation Factory の README ファイルの表示

IBM WebSphere Installation Factory の README ファイルへ直接リンクします。このファイルは、*WebSphere Process Server V6.2 DVD* の次のロケーションにあります。

- **Linux** **UNIX** Linux および UNIX プラットフォームの場合:  
/IF/readme/readme\_en.html
- **i5/OS** **Windows** i5/OS および Windows プラットフォームの場合:  
%IF%\readme%\readme\_en.html

## 「IBM WebSphere Process Server ヘルプ・システムのインストール」パネル

このツールを使用して Eclipse ビューアーをインストールし、WebSphere Process Server のインフォメーション・センターをローカル・コンピューター上に置くようにします。

Launchpad の「ようこそ」パネルの左側のペインから「**IBM WebSphere Process Server ヘルプ・システムのインストール**」を選択すると、右側のペインに以下のオプションが表示されます。

### IBM WebSphere Process Server ヘルプ・システムのインストール・ウィザードの起動

IBM WebSphere Process Server ヘルプ・システムをインストールするためのインストール・ウィザードを開始します。このプログラムは、*WebSphere Process Server V6.2 DVD* の次のロケーションに格納されています。

- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:  
/IEHS/install
- **i5/OS** **Windows** **i5/OS** および **Windows** プラットフォームの場合:  
¥IEHS¥install.exe

### IBM WebSphere Process Server ヘルプ・システムの README ファイルの表示

IBM WebSphere Process Server ヘルプ・システムの README ファイルへ直接リンクします。このファイルは、*WebSphere Process Server V6.2 DVD* の次のロケーションにあります。

- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:  
/IEHS/readme/readme\_en.html
- **i5/OS** **Windows** **i5/OS** および **Windows** プラットフォームの場合:  
¥IEHS¥readme¥readme\_en.html

## 「IBM Support Assistant のインストール」パネル

**制約事項:** この選択項目は、i5/OS、Linux PPC32、Linux on System z、または 64 ビット・プラットフォームの Launchpad の場合は表示されません。

このツールを使用して、IBM ソフトウェア製品に関する疑問および問題を解決します。このツールには、複数のソースにまたがった検索、重大な問題情報へのアクセス、トラブルシューティングと診断ツール、および自動データ収集および問題送信ツールが含まれます。ISA のインストール後、ISA を起動して「ようこそ」画面で「**アップデーター**」アイコンをクリックすることにより、WebSphere Process Server およびその他の IBM 製品の製品固有のプラグインをインストールできます。

Launchpad の「ようこそ」パネルの左側のペインか「**IBM Support Assistant のインストール**」を選択すると、右側のペインに以下のオプションが表示されます。

### IBM Support Assistant のインストール・ウィザードの起動

IBM Support Assistant をインストールするためのインストール・ウィザードを開始します。このプログラムは *WebSphere Application Server Network Deployment Supplements V6.1 CD* の次のロケーションにあります。

- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:  
/ISA/install.bin
- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: %ISA%\install.exe

#### IBM Support Assistant の README ファイルの表示

IBM Support Assistant の README ファイルへ直接リンクします。このファイルは *WebSphere Application Server Network Deployment Supplements V6.1* CD の次のロケーションにあります。

- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:  
/ISA/readme.txt
- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: %ISA%\readme.txt

#### IBM Support Assistant の Web サイト

IBM Support Assistant に関する追加情報へのリンクです。

---

## WebSphere Process Server の対話式インストール

インストール・ウィザードを使用して、WebSphere Process Server または WebSphere Process Server Client をインストールできます。標準インストールでは WebSphere Process Server をインストールしますが、必要に応じて WebSphere Application Server Network Deployment with Feature Pack for Web Services バージョン 6.1 をインストールします。また、必要に応じて、スタンドアロン・サーバー・プロファイル、デプロイメント・マネージャー・プロファイル、またはカスタム・プロファイルも作成されます。デプロイメント環境のインストールでは、新しいデプロイメント環境のセットアップまたは既存のデプロイメント環境の改善までのステップを、ウィザードのガイドに従って完了できます。クライアント・インストールでは、WebSphere Process Server Client がインストールされます。

### 始める前に

38 ページの『WebSphere Process Server のインストールに関する前提条件』で、製品をインストールするための前提条件のリストを確認してください。

### このタスクについて

パスポート・アドバンテージでダウンロードしたイメージからインストールすることを計画している場合、651 ページの『パスポート・アドバンテージからインストールするときの特別な考慮事項』の重要な情報を参照してください。

インストール・ウィザードの言語は、システムのデフォルト言語によって決まります。システムのデフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語が使用されます。システムのデフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からインストール・ウィザードを開始し、`java user.language` 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを使用してください。このコマンドは、製品 DVD の WBI ディレクトリーから実行することも、電子インストール・イメージから実行することもできます。この例では、変数 `lang` は言語を表します。

- **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合: (Windows システムのクライアント・マシンを使用して i5/OS システムに接続します。)

```
..%JDK%jre.pak%repository%package.java.jre%java%jre%bin%java
-Duser.language=lang -cp setup.jar run -os400was
```

• **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:

```
../JDK/jre.pak/repository/package.java.jre/java/jre/bin/java
-Duser.language=lang -cp setup.jar run
```

• **Windows** **Windows** プラットフォームの場合:

```
..%JDK%jre.pak%repository%package.java.jre%java%jre%bin%java
-Duser.language=lang -cp setup.jar run
```

例えば、Windows システム上でドイツ語のインストール・ウィザードを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
..%JDK%jre.pak%repository%package.java.jre%java%jre%bin%java
-Duser.language=de -cp setup.jar run
```

**制約事項:** インストール・ウィザードの 2 つのインスタンスを同時に実行しないでください。そのようにすると、インストールがすでに進行しているという趣旨の警告が表示されます。

インストーラー・プログラムは、コンソール・モード・インストールをサポートしていません。

インストール・ウィザードを使用して WebSphere Process Server をインストールするには、以下の手順を実行します。

## 手順

### 1. システムにログオンします。

**Linux** **UNIX** **Windows** **Linux**、**UNIX**、および **Windows** プラットフォームの場合: 使用するユーザー ID に root 特権や管理者特権は必要ありません。しかし、製品を非ルート・ユーザーまたは非管理者ユーザーとしてインストールする場合、いくつかの制約があります。例えば、WebSphere Process Server 用の Windows または Linux サービスを作成することはできません。また、プログラムはオペレーティング・システムへの登録を行いません。非 root ユーザーとしてインストールを実行する場合の制約の詳細は、WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 6.1.x のインフォメーション・センターにあるトピック『非ルート・インストーラーの制限』を参照してください。

**i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合: ランチパッドを使用して i5/OS システム上で WebSphere Process Server をインストールする場合には、Windows システムにサインオンします。対話式インストールの実行中は、Windows システムをクライアント・マシンとして使用して、System i サーバーに接続します。Launchpad は、Windows クライアント上で稼働します。i5/OS システム上でインストールを行うには、このシステム用の有効な i5/OS ユーザー・プロファイルを使用する必要があります。ユーザー・プロファイルには \*ALLOBJ 権限と \*SECADM 権限が必要です。これらの権限がなければ、インストールは失敗します。

2. 製品 DVD からインストールするか、またはパスポート・アドバンテージからダウンロードしたイメージからインストールするかに応じて、以下のいずれかの方法でメディアにアクセスします。
  - 製品 DVD からインストールする場合は、「*WebSphere Process Server V6.2 DVD*」というラベルが付いた製品ディスクをディスク・ドライブに挿入します。必要に応じてディスク・ドライブをマウントします (詳しくは、630 ページの『Linux および UNIX オペレーティング・システムでのディスク・ドライブのマウント』を参照してください)。
  - パスポート・アドバンテージからダウンロードしたイメージからインストールする場合は、イメージを抽出したディレクトリーにナビゲートします。
3. ランチパッドまたはコマンド行からインストール・ウィザードを開始します。
  - ランチパッドからインストールを開始する方法は、以下のとおりです。
    - a. 83 ページの『Launchpad の開始』の手順を実行してランチパッドを開始します。
    - b. 「IBM WebSphere Process Server のインストール」をクリックします。
    - c. 「WebSphere Process Server for Multiplatforms のインストール・ウィザードの起動」をクリックします。
  - コマンド行からインストールを開始する場合は、製品 DVD からインストールするのか、それともパスポート・アドバンテージでダウンロードしたイメージからインストールするのかに応じて、以下の `install` コマンドを発行します。

製品 DVD からインストールする場合は、次のコマンドを入力します。

- **i5/OS** **i5/OS プラットフォームの場合:** (Windows システムのクライアント・マシンを使用して i5/OS システムに接続します。) ディスク・ドライブのルート・ディレクトリーから、`¥WBI¥install.exe`。
- **Linux** **UNIX** **Linux および UNIX プラットフォームの場合:**  
`mount_point/WBI/install` と入力します。ここで、`mount_point` は Linux または UNIX システムのマウント・ポイントを表します。
- **Windows** **Windows プラットフォームの場合:** ディスク・ドライブのルート・ディレクトリーから、`¥WBI¥install.exe`。

パスポート・アドバンテージからダウンロードしたイメージからインストールする場合は、以下のようにコマンドを入力します。ここで、`extract_directory` は電子的イメージを抽出したディレクトリーを表します。

- **i5/OS** **i5/OS プラットフォームの場合:** (Windows システムのクライアント・マシンを使用して i5/OS システムに接続します。)  
`extract_directory¥WBI¥install.exe`
- **Linux** **UNIX** **Linux および UNIX プラットフォームの場合:**  
`extract_directory/WBI/install`
- **Windows** **Windows プラットフォームの場合:**  
`extract_directory¥WBI¥install.exe`

次のステップは、ご使用のプラットフォームに応じて異なります。

インストール先プラットフォーム	次のステップ
i5/OS	i5/OS サインオン・パネルが表示されます。ステップ 4 に進んでください。
Linux、UNIX、または Windows	「ようこそ」パネルが表示されます。ステップ 5 に進んでください。

4. **i5/OS** i5/OS プラットフォームの場合: i5/OS サインオン・パネルで、以下の情報を入力します。
  - ターゲットの i5/OS システムのシステム名または IP アドレス
  - ターゲット・システムで有効な i5/OS ユーザー・プロファイル。このユーザー・プロファイルには \*ALLOBJ と \*SECADM の特殊権限が必要です。
  - 指定した i5/OS ユーザー・プロファイルのパスワード

「次へ」をクリックします。「ようこそ」パネルが表示されます。
5. 「ようこそ」パネルで「次へ」をクリックします。「ソフトウェアのご使用条件」パネルが表示されます。
6. 「ソフトウェアのご使用条件」パネルで、IBM および IBM 以外のライセンス条項を確認します。この内容に同意する場合は、「**IBM および IBM 以外の両方の条件を受諾します (I accept both the IBM and the non-IBM terms)**」を選択して「次へ」をクリックします。

インストール・ウィザードは、前提条件のパッチでサポートされるオペレーティング・システムを検査します。処理が終了すると、「システム前提条件の検査」パネルが表示され、システムが検査に合格したかどうかを示されます。

システムが合格しなかった場合は、インストールをキャンセルして必要な変更を行ってから、インストールを再始動します。

7. 「システム前提条件の検査」パネルで、「次へ」をクリックします。

**制約事項:** ユーザー ID に root 特権または管理者特権がない場合、警告パネルが表示され、製品のインストール時に適用される制限が示されます。例えば、WebSphere Process Server 用の Windows または Linux サービスを作成することはできません。また、プログラムはオペレーティング・システムへの登録を行いません。インストールを続行するには、「次へ」をクリックします。

インストール・ウィザードは、以下の製品が既にインストールされているかどうかを調べます。

- WebSphere Application Server バージョン 6.1.x
- WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 6.1.x
- WebSphere Process Server バージョン 6.2
- WebSphere Process Server Client バージョン 6.2
- WebSphere Enterprise Service Bus バージョン 6.2

**重要:** .nifregistry ファイルに WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment の項目がある場合、インストール・ウィザードはこれらの未登録のインスタンスも検出します。root ユーザー、管理者ユーザー、または非 root ユーザーの場合のプラットフォーム別のファイル・ロケーションについては、643 ページの『.nifregistry ファイルおよび vpd.properties

ファイル』を参照してください。これらの製品のいずれかの未登録インストールを WebSphere Process Server のインストールと共に使用することはサポートされていません。

インストール・ウィザードが WebSphere 製品の既存のインストールを検出した場合、ウィザードにより、どの製品が見つかったかが報告されます。その場合は、新規インストールについて選択する必要があります。WebSphere 製品の既存のインストールがシステム上にあるかどうかによって、以下のいずれかを行います。

- ご使用のシステムに既にインストールされている他の WebSphere 製品がない場合は、「インストール・タイプ」パネルが表示されます。ステップ 9 (101 ページ) に進んでください。
- ご使用のシステムに既にインストールされている他の WebSphere 製品がある場合は、ステップ 8 に進んでください。

8. 表示されるパネルおよび後続ステップは、ご使用のシステムで検出された WebSphere 製品によって異なります。ご使用のシステムで表示されるパネルに応じ、次のステップを 表 26 で確認してください。

表 26. WebSphere 製品の既存のインストールに基づく次のステップ

表示されたパネル	検出された製品および次のステップ
IBM WebSphere Process Server が検出されました	WebSphere Process Server の既存のインストール (単独またはその他の WebSphere 製品のインストールとともに) があります。インストールを完了するための手順については、102 ページの『既存の WebSphere Process Server のインストール済み環境でのインストール』のトピックを参照してください。
既存の製品またはコンポーネントのインストールが検出されました	WebSphere Enterprise Service Bus または WebSphere Process Server Client の既存のインストールがあり、WebSphere Process Server の既存のインストールがありません。インストールを完了するための手順については、106 ページの『既存の WebSphere Enterprise Service Bus または WebSphere Process Server Client のインストール済み環境でのインストール』のトピックを参照してください。
検出された WebSphere Application Server	WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment の既存のインストールがあり、WebSphere Process Server、WebSphere Process Server Client、または WebSphere Enterprise Service Bus の既存のインストールがありません。インストールを完了するための手順については、109 ページの『既存の WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment インストール済み環境でのインストール』のトピックを参照してください。

9. 「インストール・タイプ」パネルで、実行するインストールのタイプを選択して、「次へ」をクリックします。

インストール・ウィザードでは、インストール・パスを選択することができます(前のパネルの選択内容によっては、すべてが表示されるとは限りません)。次のステップは、実行するインストールのタイプによって異なります。

インストール・タイプ	次のステップ
<p><b>標準インストール (デフォルト):</b> デフォルトのインストール選択項目および構成を使用して、WebSphere Process Server をインストールし、オプションで WebSphere Application Server Network Deployment with Feature Pack for Web Services もインストールします。また、WebSphere Process Server サンプルもインストールできます。さらに、スタンドアロン・サーバー・プロファイル、デプロイメント・マネージャー・プロファイル、またはカスタム・プロファイルを作成することもできます。またはこのオプションを省略して、後でプロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成することも可能です。</p> <p><b>重要:</b> 標準的インストール中にスタンドアロン・サーバー・プロファイルの作成を選択し、セキュリティーを有効にした場合、インストーラーによりそのプロファイルにサンプルの Business Process Choreographer 構成が作成されます。セキュリティーを有効にしない場合は、このサンプルの構成は作成されません。スタンドアロン・サーバーをデプロイメント・マネージャーに統合する場合は、事前にこのサンプル構成の削除が必要となります。</p>	<p>「フィーチャーの選択」パネルが表示されます。112 ページの『WebSphere Process Server のインストールおよびプロファイルの作成の対話式実行』のトピックに進んでください。</p>
<p><b>デプロイメント環境インストール:</b> WebSphere Process Server をインストールし、オプションで WebSphere Application Server Network Deployment with Feature Pack for Web Services をインストールし、デプロイメント環境のセットアップを支援します。デプロイメント・マネージャーを作成して、そのデプロイメント・マネージャーにデプロイメント環境パターンを選択するか、あるいは管理対象ノードに適用する 1 つまたは複数のクラスターを選択できます。</p>	<p>「フィーチャーの選択」パネルが表示されます。121 ページの『デプロイメント環境による WebSphere Process Server の対話式インストール』のトピックに進んでください。</p>

インストール・タイプ	次のステップ
<p>クライアント・インストール: デフォルトのインストール選択項目および構成を使用して、WebSphere Process Server Client をインストールし、オプションで WebSphere Application Server Network Deployment with Feature Pack for Web Services をインストールします。これにより、WebSphere Process Server と対話するクライアント・アプリケーションの実行が可能になります。</p>	<p>「インストール・ロケーション」パネルが表示されます。 136 ページの『WebSphere Process Server Client の対話式インストール』のトピックを参照してください。</p>

## タスクの結果

これで、インストール・ウィザードの開始、使用条件への同意、前提条件の確認、インストールに影響を与える可能性のある WebSphere 製品の既存のインストールの識別が終わりました。インストール済みの WebSphere 製品が今回のインストールに影響しない場合は、実行するインストールのタイプ (標準的、デプロイメント環境、またはクライアント) も選択しました。

## 次のタスク

行った選択に応じて該当するリンクの説明に従い、インストールを続行します。

## 既存の WebSphere Process Server のインストール済み環境でのインストール

インストール・ウィザードが、WebSphere Process Server の既存のインストール (単独またはその他の WebSphere 製品のインストールと共に存在) をシステム上で検出しました。WebSphere Process Server の新規インストールをインストールして現行のインストールと共存させるか、その代わりに機能または新規プロファイルを既存のインストール済み環境に追加するかを決定する必要があります。

## このタスクについて

以下の手順に従って、これらの選択を実行します。このトピックでは、96 ページの『WebSphere Process Server の対話式インストール』の手順に従って、インストール・ウィザードを既に開始し、ご使用条件を受諾し、前提条件を確認済みであることを前提としています。「検出された IBM WebSphere Process Server (Detected IBM WebSphere Process Server)」パネルが表示されます。

### 手順

1. 「検出された IBM WebSphere Process Server (Detected IBM WebSphere Process Server)」パネルで、新規の WebSphere Process Server インストールを処理する方法に基づいてオプションを選択し、「次へ」をクリックします。表示されるパネルおよび次のステップは、以下のいずれのオプションを選択するかによって決まります。

選択するオプション	次のステップ
<p><b>IBM WebSphere Process Server に機能を追加:</b> パネルのリストから選択した既存の WebSphere Process Server のインストール済み環境に機能を追加します。</p> <p><b>ヒント:</b> このオプションは、既存の WebSphere Process Server インストール済み環境にまだすべての機能をインストールしていない場合にのみ選択可能です。</p>	<p>「フィーチャーの選択」パネルが表示されません。インストールを完了するための手順については、141 ページの『既存のインストール済み環境への追加フィーチャーのインストール』のトピックを参照してください。</p>
<p><b>「WebSphere Process Server の新規コピーをインストール」:</b> WebSphere Process Server の新規コピーをインストールして、既存のバージョンと共存させます。</p> <p><b>ヒント:</b> このオプションは、WebSphere Process Server を WebSphere Enterprise Service Bus、WebSphere Process Server Client、WebSphere Application Server、または WebSphere Application Server Network Deployment の既存のインストール済み環境にインストールする場合にも選択できます。続く検出パネルで、それらの製品のインストールを確認し、それらの上にインストールすることができます。</p>	<p>次のパネルは、システム上に以下の WebSphere の別製品の既存のインストール済み環境があるかどうかによって異なります。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• WebSphere 製品の既存のインストール済み環境がほかにない場合、「インストール・タイプ」パネルが表示されます。ステップ 2 に進んでください。</li> <li>• WebSphere Enterprise Service Bus または WebSphere Process Server Client の既存のインストール済み環境がある場合、「既存の製品またはコンポーネントのインストールが検出されました」パネルが表示されます。トピック 106 ページの『既存の WebSphere Enterprise Service Bus または WebSphere Process Server Client のインストール済み環境でのインストール』に進んでください。</li> <li>• WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment の既存のインストール済み環境がある場合、かつ WebSphere Enterprise Service Bus または WebSphere Process Server Client の既存のインストール済み環境がない場合は、「検出された WebSphere Application Server」パネルが表示されません。トピック 109 ページの『既存の WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment インストール済み環境でのインストール』に進んでください。</li> </ul>
<p><b>プロファイル管理ツールを使用して、新しい WebSphere Process Server プロファイルを作成:</b> プロファイル管理ツールを開いて、パネルのリストから選択した既存のインストール済み環境に新規の WebSphere Process Server プロファイルを作成できるようにします。</p>	<p>「インストールの結果」パネルが表示され、プロファイル管理ツールが開始します。「終了」をクリックして、インストール・ウィザードを閉じます。</p>

2. 「インストール・タイプ」パネルで、実行するインストールのタイプを選択して、「次へ」をクリックします。

インストール・ウィザードでは、インストール・パスを選択できます (インストール・パスの選択項目は、それ以前のパネルの選択内容に基づきます)。次のステップは、実行するインストールのタイプおよび (WebSphere Process Server クライアントの場合は) インストールを実行する既存環境に WebSphere Application Server および WebSphere Application Server Network Deployment のどちらがインストールされているかによって異なります。

選択するオプション	次のステップ
<p>標準インストール (デフォルト): WebSphere Process Server (および必要に応じて WebSphere Application Server Network Deployment with Web Services Feature Pack) のインストールは、デフォルトのインストール選択と構成によって実行されます。また、WebSphere Process Server サンプルもインストールできます。さらに、スタンドアロン・サーバー・プロファイル、デプロイメント・マネージャー・プロファイル、またはカスタム・プロファイルを作成することもできます。またはこのオプションを省略して、後でプロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成することも可能です。</p> <p><b>重要:</b> 標準的インストール中にスタンドアロン・サーバー・プロファイルの作成を選択し、セキュリティーを有効にした場合、インストーラーによりそのプロファイルにサンプルの Business Process Choreographer 構成が作成されます。セキュリティーを有効にしない場合は、このサンプルの構成は作成されません。スタンドアロン・サーバーをデプロイメント・マネージャーに統合する場合は、事前にこのサンプル構成の削除が必要となります。</p>	<p>「フィーチャーの選択」パネルが表示されません。インストールを完了するための手順については、112 ページの『WebSphere Process Server のインストールおよびプロファイルの作成の対話式実行』のトピックを参照してください。</p>
<p>デプロイメント環境インストール: WebSphere Process Server をインストールし、オプションで WebSphere Application Server Network Deployment with Web Services Feature Pack をインストールして、デプロイメント環境のセットアップ手順を表示します。デプロイメント・マネージャーを作成して、そのデプロイメント・マネージャーにデプロイメント環境パターンを選択するか、あるいは管理対象ノードに適用する 1 つまたは複数のクラスターを選択できます。</p>	<p>「フィーチャーの選択」パネルが表示されません。インストールを完了するための手順については、121 ページの『デプロイメント環境による WebSphere Process Server の対話式インストール』のトピックを参照してください。</p>

選択するオプション	次のステップ
<p>クライアント・インストール: デフォルトのインストール選択項目と構成を使用して WebSphere Process Server クライアントをインストールし、オプションで WebSphere Application Server Network Deployment with Web Services Feature Pack をインストールします。これにより、WebSphere Process Server と対話するクライアント・アプリケーションの実行が可能になります。</p>	<p>表示されるパネルは、WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment の既存のインストール済み環境にインストールするかどうかによって異なります。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment の既存のインストール済み環境にインストールしない場合は、「インストール・ロケーション」パネルが表示されません。インストールを完了するための手順については、136 ページの『WebSphere Process Server Client の対話式インストール』のトピックを参照してください。</li> <li>• WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment の既存のインストール済み環境にインストールする場合は、「インストールの要約」パネルが表示されます。インストールを完了するための手順については、136 ページの『WebSphere Process Server Client の対話式インストール』のトピックを参照してください。</li> </ul> <p><b>重要:</b> WebSphere Process Server をインストールするユーザーは、WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment をインストールしたユーザーと同じである必要があります。</p>

## タスクの結果

新規インストールに影響を与える可能性がある WebSphere Process Server の既存のインストール済み環境を検出しました。ほかの WebSphere 製品のインストール済み環境がシステム上にある場合、それらの既存のインストール済み環境に製品をインストールする方法について説明するほかのトピックを参照するように説明がありました。追加の WebSphere 製品がシステム上にインストールされていない場合、実行するインストールのタイプ (標準的、デプロイメント環境、またはクライアント) を選択しました。

## 次のタスク

行った選択に応じて該当するリンクの説明に従い、インストールを続行します。

## 既存の WebSphere Enterprise Service Bus または WebSphere Process Server Client のインストール済み環境でのインストール

インストール・ウィザードが、WebSphere Enterprise Service Bus または WebSphere Process Server Client の既存のインストール済み環境（単独またはその他の WebSphere 製品のインストール済み環境と共に存在）をシステム上で検出しました。 WebSphere Process Server の新規インストールをインストールして WebSphere Enterprise Service Bus または WebSphere Process Server Client のインストール済み環境と共存させるか、その代わりに WebSphere Process Server 機能を既存のインストール済み環境に追加するかを決定する必要があります。

### このタスクについて

以下の手順に従って、これらの選択を実行します。このトピックでは、96 ページの『WebSphere Process Server の対話式インストール』の手順に従って、インストール・ウィザードを既に開始し、ご使用条件を受諾し、前提条件を確認済みであることを前提としています。「既存の製品またはコンポーネントのインストールが検出されました」パネルが表示されます。

#### 手順

1. 「既存の製品またはコンポーネントのインストールが検出されました」パネルで、新規の WebSphere Process Server インストールを処理する方法に基づいてオプションを選択し、「次へ」をクリックします。表示されるパネルおよび次のステップは、以下のいずれのオプションを選択するかによって決まります。

選択するオプション	次のステップ
<p>「WebSphere Process Server の新規コピーをインストール」： WebSphere Process Server の新規コピーをインストールして、WebSphere Enterprise Service Bus または WebSphere Process Server Client のインストール済み環境と共存させます。</p> <p>ヒント： このオプションは、WebSphere Process Server を WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment の既存のインストールの上にインストールする場合にも選択できます。 続く検出パネルで、それらの製品のインストールを確認し、それらの上にインストールすることができます。</p>	<p>次のパネルは、システム上に以下の WebSphere の別製品の既存のインストール済み環境があるかどうかによって異なります。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>• WebSphere 製品の既存のインストール済み環境がほかにない場合、「インストール・タイプ」パネルが表示されます。ステップ 2 (107 ページ) に進んでください。</li><li>• WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment の既存のインストール済み環境がある場合は「検出された WebSphere Application Server」パネルが表示されます。トピック 109 ページの『既存の WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment インストール済み環境でのインストール』に進んでください。</li></ul>

選択するオプション	次のステップ
<p>「<b>WebSphere Enterprise Service Bus</b> の既存のインストールを使用する」または「<b>Client</b> の既存のインストールを使用する」: WebSphere Process Server を、パネルのドロップダウン・リストから選択した WebSphere Enterprise Service Bus または WebSphere Process Server Client バージョンの既存のインストール済み環境にインストールします。</p>	<p>「フィーチャーの選択」パネルが表示されます。インストールを完了するための手順については、146 ページの『WebSphere Process Server インストール済み環境への WebSphere Enterprise Service Bus または WebSphere Process Server Client インストール済み環境の変換』のトピックを参照してください。</p>

- 「インストール・タイプ」パネルで、実行するインストールのタイプを選択して、「次へ」をクリックします。

インストール・ウィザードでは、インストール・パスを選択できます (インストール・パスの選択項目は、それ以前のパネルの選択内容に基づきます)。次のステップは、実行するインストールのタイプおよび (WebSphere Process Server クライアントの場合は) インストールを実行する既存環境に WebSphere Application Server および WebSphere Application Server Network Deployment のどちらがインストールされているかによって異なります。

選択するオプション	次のステップ
<p><b>標準インストール</b> (デフォルト): WebSphere Process Server (および必要に応じて WebSphere Application Server Network Deployment with Web Services Feature Pack) のインストールは、デフォルトのインストール選択と構成によって実行されます。また、WebSphere Process Server サンプルもインストールできます。さらに、スタンドアロン・サーバー・プロファイル、デプロイメント・マネージャー・プロファイル、またはカスタム・プロファイルを作成することもできます。またはこのオプションを省略して、後でプロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成することも可能です。</p> <p><b>重要:</b> 標準的インストール中にスタンドアロン・サーバー・プロファイルの作成を選択し、セキュリティーを有効にした場合、インストーラーによりそのプロファイルにサンプルの Business Process Choreographer 構成が作成されます。セキュリティーを有効にしない場合は、このサンプルの構成は作成されません。スタンドアロン・サーバーをデプロイメント・マネージャーに統合する場合は、事前にこのサンプル構成の削除が必要となります。</p>	<p>「フィーチャーの選択」パネルが表示されます。インストールを完了するための手順については、112 ページの『WebSphere Process Server のインストールおよびプロファイルの作成の対話式実行』のトピックを参照してください。</p>

選択するオプション	次のステップ
<p>デプロイメント環境インストール: WebSphere Process Server をインストールし、オプションで WebSphere Application Server Network Deployment with Web Services Feature Pack をインストールして、デプロイメント環境のセットアップ手順を表示します。デプロイメント・マネージャーを作成して、そのデプロイメント・マネージャーにデプロイメント環境パターンを選択するか、あるいは管理対象ノードに適用する 1 つまたは複数のクラスターを選択できます。</p>	<p>「フィーチャーの選択」パネルが表示されます。インストールを完了するための手順については、121 ページの『デプロイメント環境による WebSphere Process Server の対話式インストール』のトピックを参照してください。</p>
<p>クライアント・インストール: デフォルトのインストール選択項目と構成を使用して WebSphere Process Server クライアントをインストールし、オプションで WebSphere Application Server Network Deployment with Web Services Feature Pack をインストールします。これにより、WebSphere Process Server と対話するクライアント・アプリケーションの実行が可能になります。</p>	<p>表示されるパネルは、WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment の既存のインストール済み環境にインストールするかどうかによって異なります。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment の既存のインストール済み環境にインストールしない場合は、「インストール・ロケーション」パネルが表示されます。インストールを完了するための手順については、136 ページの『WebSphere Process Server Client の対話式インストール』のトピックを参照してください。</li> <li>• WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment の既存のインストール済み環境にインストールする場合は、「インストールの要約」パネルが表示されます。インストールを完了するための手順については、136 ページの『WebSphere Process Server Client の対話式インストール』のトピックを参照してください。</li> </ul> <p><b>重要:</b> WebSphere Process Server をインストールするユーザーは、WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment をインストールしたユーザーと同じである必要があります。</p>

## タスクの結果

新規インストールに影響を与える可能性がある WebSphere Enterprise Service Bus または WebSphere Process Server Client の既存のインストール済み環境をすべて検出しました。ほかの WebSphere 製品のインストール済み環境がシステム上にある場合、それらの既存のインストール済み環境に製品をインストールする方法について説明するほかのトピックを参照するように説明がありました。追加の WebSphere 製品がシステム上にインストールされていない場合、実行するインストールのタイプ

(標準的、デプロイメント環境、またはクライアント) を選択しました。

## 次のタスク

行った選択に応じて該当するリンクの説明に従い、インストールを続行します。

## 既存の WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment インストール済み環境でのインストール

インストール・ウィザードが、WebSphere Application Server、WebSphere Application Server Network Deployment、または WebSphere Application Server Network Deployment with Web Services Feature Pack の既存のインストールを検出しました。WebSphere Process Server の新規インストール (基盤となる WebSphere Application Server Network Deployment with Web Services Feature Pack の新規インストールが必要) をインストールするか、代わりに WebSphere Process Server 機能を WebSphere Application Server、WebSphere Application Server Network Deployment インストール済み環境、または WebSphere Application Server Network Deployment with Web Services Feature Pack に追加するかを決定する必要があります。

## このタスクについて

以下の手順に従って、これらの選択を実行します。このトピックでは、96 ページの『WebSphere Process Server の対話式インストール』の手順に従って、インストール・ウィザードを既に開始し、ご使用条件を受諾し、前提条件を確認済みであることを前提としています。「検出された WebSphere Application Server」パネルが表示されます。

### 手順

1. 「検出された WebSphere Application Server」パネルで、新規の WebSphere Process Server インストールを処理する方法に基づいてオプションを選択します。
  - 「**WebSphere Application Server Network Deployment with Feature Pack for Web Services の新規コピーのインストール (Install a new copy of WebSphere Application Server Network Deployment with Feature Pack for Web Services)**: WebSphere Process Server のインストール中に WebSphere Application Server Network Deployment with Feature Pack for Web Services の新規コピーをインストールします。
  - **WebSphere Application Server Network Deployment または WebSphere Application Server Network Deployment with Feature Pack for Web Services の既存のインストール環境を使用 (Use an existing installation of WebSphere Application Server Network Deployment or WebSphere Application Server Network Deployment with Feature Pack for Web Services)**: パネルのリストから選択した既存の WebSphere Application Server Network Deployment または WebSphere Application Server Network Deployment with Feature Pack for Web Services のインストール環境に WebSphere Process Server をインストールします。(このオプションは、既存の

WebSphere Application Server のインストール環境に WebSphere Process Server をインストールする場合にも関係します。)

**重要:** WebSphere Process Server をインストールするユーザーは、WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment をインストールしたユーザーと同じである必要があります。

**制約事項:** i5/OS 選択した WebSphere Application Server Network Deployment インストールが古いサービス・レベルで、WebSphere Process Server のインストールが Windows クライアントからリモートで行われている場合、このインストールを続行する前に、i5/OS システムからローカル・サイレント・インストールを使用して、WebSphere Application Server Network Deployment を更新する必要があります。

選択したら、「次へ」をクリックします。「インストール・タイプ」パネルが表示されます。

2. 「インストール・タイプ」パネルで、実行するインストールのタイプを選択して、「次へ」をクリックします。

インストール・ウィザードでは、インストール・パスを選択できます (インストール・パスの選択項目は、それ以前のパネルの選択内容に基づきます)。次のステップは、実行するインストールのタイプおよび (WebSphere Process Server クライアントの場合は) インストールを実行する既存環境に WebSphere Application Server および WebSphere Application Server Network Deployment のどちらがインストールされているかによって異なります。

選択するオプション	次のステップ
<p>標準インストール (デフォルト): WebSphere Process Server (および必要に応じて WebSphere Application Server Network Deployment with Web Services Feature Pack) のインストールは、デフォルトのインストール選択と構成によって実行されます。また、WebSphere Process Server サンプルもインストールできます。さらに、スタンドアロン・サーバー・プロファイル、デプロイメント・マネージャー・プロファイル、またはカスタム・プロファイルを作成することもできます。またはこのオプションを省略して、後でプロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成することも可能です。</p> <p><b>重要:</b> 標準的インストール中にスタンドアロン・サーバー・プロファイルの作成を選択し、セキュリティーを有効にした場合、インストーラーによりそのプロファイルにサンプルの Business Process Choreographer 構成が作成されます。セキュリティーを有効にしない場合は、このサンプルの構成は作成されません。スタンドアロン・サーバーをデプロイメント・マネージャーに統合する場合は、事前にこのサンプル構成の削除が必要となります。</p>	<p>「フィーチャーの選択」パネルが表示されます。インストールを完了するための手順については、112 ページの『WebSphere Process Server のインストールおよびプロファイルの作成の対話式実行』のトピックを参照してください。</p>
<p>デプロイメント環境インストール: WebSphere Process Server をインストールし、オプションで WebSphere Application Server Network Deployment with Web Services Feature Pack をインストールして、デプロイメント環境のセットアップ手順を表示します。デプロイメント・マネージャーを作成して、そのデプロイメント・マネージャーにデプロイメント環境パターンを選択するか、あるいは管理対象ノードに適用する 1 つまたは複数のクラスターを選択できます。</p>	<p>「フィーチャーの選択」パネルが表示されます。インストールを完了するための手順については、121 ページの『デプロイメント環境による WebSphere Process Server の対話式インストール』のトピックを参照してください。</p>

選択するオプション	次のステップ
<p>クライアント・インストール: デフォルトのインストール選択項目と構成を使用して WebSphere Process Server クライアントをインストールし、オプションで WebSphere Application Server Network Deployment with Web Services Feature Pack をインストールします。これにより、WebSphere Process Server と対話するクライアント・アプリケーションの実行が可能になります。</p>	<p>表示されるパネルは、WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment の既存のインストール済み環境にインストールするかどうかによって異なります。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment の既存のインストール済み環境にインストールしない場合は、「インストール・ロケーション」パネルが表示されません。インストールを完了するための手順については、136 ページの『WebSphere Process Server Client の対話式インストール』のトピックを参照してください。</li> <li>• WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment の既存のインストール済み環境にインストールする場合は、「インストールの要約」パネルが表示されます。インストールを完了するための手順については、136 ページの『WebSphere Process Server Client の対話式インストール』のトピックを参照してください。</li> </ul>

## タスクの結果

新規インストールに影響を与える可能性がある WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment の既存のインストール済み環境をすべて検出しました。また、実行するインストールのタイプ (標準的、デプロイメント環境、またはクライアント) も選択しました。

## 次のタスク

行った選択に応じて該当するリンクの説明に従い、インストールを続行します。

## WebSphere Process Server のインストールおよびプロファイルの作成の対話式実行

この手順を使用して、インストール・ウィザード・グラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) を使用した WebSphere Process Server のインストールおよびプロファイルの作成を実行します。このインストールの一部として WebSphere Application Server Network Deployment with Web Services Feature Pack をインストールできます。WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 6.1.x の既存のインストール済み環境に WebSphere Process Server をインストールすることも可能です。

## このタスクについて

以下の手順に従って、これらの選択を実行します。このトピックでは、96 ページの『WebSphere Process Server の対話式インストール』の手順に従って、インストール・ウィザードを開始し、前提条件と既存の WebSphere インストール環境を確認済みで、標準的インストールの実行を選択したことを前提としています。「フィーチャーの選択」パネルが表示されます。

### 手順

1. 「フィーチャーの選択」パネルで、インストールするフィーチャーを選択し、「次へ」をクリックします。

このパネルで選択できるフィーチャーの説明については、648 ページの『WebSphere Process Server の製品コンポーネント』を参照してください。

次のステップは、WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment の既存のインストール済み環境にインストールするかどうかによって異なります。

インストール状況	次のステップ
WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment の既存のインストール済み環境にインストールしている。 <b>重要:</b> WebSphere Process Server をインストールするユーザーは、WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment をインストールしたユーザーと同じである必要があります。既存のインストール済み環境のインストール・パスに括弧が含まれている場合は、その既存のインストール済み環境に上書きしてインストールすることはできません。	「WebSphere Process Server 環境」パネルが表示されます。ステップ 3 (114 ページ) に進んでください。
WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment の既存のインストール済み環境にインストールしていない。	「インストール・ロケーション」パネルが表示されます。ステップ 2 に進んでください。

2. 「インストール・ロケーション」パネルで、製品のデフォルトのインストール・ルート・ディレクトリを受け入れるか、または別のディレクトリを指定して、「次へ」をクリックします。

注: インストール・パスに括弧を使用することはできません。

**i5/OS** **i5/OS プラットフォームの場合:** i5/OS システムの「インストール・ロケーション」パネルでは、プロファイル・インストール・ディレクトリも指定できます。

**Linux** **UNIX** **Windows** **Linux、UNIX、および Windows プラットフォームの場合:** インストール・ウィザードに、システムが所有する root ユーザー

または管理者のデフォルト・インストール・ルート・ディレクトリーが表示されます。ここには、非 root ユーザー用の、ユーザーが所有する別のデフォルト・インストール・ルート・ディレクトリーが表示されます。

デフォルト・インストール・ディレクトリーと、インストール・ウィザードによるデフォルト・インストール・ディレクトリーの決定方法については、615 ページの『製品、プロファイル、およびツールのデフォルト・インストール・ディレクトリー』を参照してください。

インストール・ウィザードは、インストール・ロケーションが完全修飾されており、正しい形式であること、インストールを実行するユーザー ID によって書き込み可能であること、およびインストールを正常に実行するための十分なディスク・スペース (必要な一時スペースを含む) があることを確認します。十分なスペースがない場合は、インストール・プログラムを停止して、使用していないファイルを削除し、ごみ箱を空にすることでスペースを解放し、再度インストールを開始してください。

**重要:**

- インストール・ルート・ディレクトリーの値を指定しなければ、処理を続行することができません。
- **i5/OS** **i5/OS プラットフォームの場合:** パス名の中の各コンポーネントの最大長は 255 文字です。パス名の最大長は 16 MB です。
- **i5/OS** **Linux** **UNIX** **i5/OS、Linux、および UNIX プラットフォームの場合:** インストール・ルート・ディレクトリーにシンボリック・リンクを使用しないでください。シンボリック・リンクはサポートされていません。また、ディレクトリー・パスにはスペースを使用しないでください。
- **Windows** **Windows プラットフォームの場合:** Windows システムではディレクトリー名にセミコロンを使用しないでください (セミコロンは、Windows システム上のクラス・パスを構成するために使用される文字です)。ターゲット・ディレクトリーにセミコロンが含まれる場合、WebSphere Process Server は Windows プラットフォーム上に正しくインストールできません。

このステップが完了すると、「WebSphere Process Server 環境」パネルが表示されます。

3. 「WebSphere Process Server 環境」パネルで、作成するプロファイルのタイプを選択し (またはこの時点でプロファイルを作成しない場合は「なし」を選択し)、「次へ」をクリックします。次のステップは、選択内容によって異なります。

プロファイル・タイプ	次のステップ
スタンドアロン・サーバーまたはデプロイメント・マネージャー	「管理セキュリティ」パネルが表示されます。ステップ 5 (116 ページ) に進んでください。
カスタム	「フェデレーション (Federation)」パネルが表示されます。(カスタム・プロファイルには空のノードがあり、それを使用するには統合する必要があります。) ステップ 4 (115 ページ) に進んでください。

プロファイル・タイプ	次のステップ
<p>なし</p> <p><b>ヒント:</b> 実稼働環境を作成する場合は、「なし」を選択し、後でプロファイル管理ツールを使用するかサイレント・モードでプロファイルを作成します。</p>	<p>警告パネルにより、使用するインストール済み環境は、少なくとも 1 つのプロファイルがなければ機能できないことを示す警告が出されます。以下のいずれかを行います。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 「はい」をクリックして、プロファイルを作成しないで続行します。「インストールの要約」パネルが表示されます。ステップ 6 (117 ページ) に進んでください。インストールが完了した後、インストール・ウィザードの最後のパネルに、プロファイル管理ツールを開くためにリンクが示されます。ここでは、新規プロファイルを作成または拡張するためのオプションがいくつかあります。</li> <li>• 「いいえ」をクリックして、「WebSphere Process Server 環境」パネルに戻ります。</li> </ul>

4. **カスタム・プロファイルの場合のみ:**「フェデレーション」パネルで、ノードをプロファイル作成の一部としてデプロイメント・マネージャーに即時統合するか、または後で統合してプロファイル作成とは切り離すかを選択します。

**重要:** この時点では、以下の項目すべてに該当する場合にのみ、カスタム・ノードを統合してください。

- ほかのノードを同時に統合しない。(ノードの統合はシリアルライズする必要があります。)
- デプロイメント・マネージャーが稼働している。
- デプロイメント・マネージャーが、作成するカスタム・プロファイルと同じかそれより高いバージョン・レベルの WebSphere Process Server デプロイメント・マネージャーである。WebSphere Process Server プロファイルは WebSphere Enterprise Service Bus デプロイメント・マネージャーを使用できませんが、WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルは WebSphere Process Server デプロイメント・マネージャーを使用できます。
- デプロイメント・マネージャーで、JMX 管理ポートが有効になっている。デフォルト・プロトコルは SOAP です。
- このカスタム・ノードをマイグレーション・ターゲットとして使用する予定がない。

以下の項目のいずれかに該当する場合は、この時点ではカスタム・ノードを統合しないでください。

- 別のプロファイルが統合されている (ノードの統合はシリアルライズする必要があります)。
- デプロイメント・マネージャーが稼働していないか、実行しているかどうか不明。
- そのデプロイメント・マネージャーは、まだ WebSphere Process Server デプロイメント・マネージャーに拡張されていない。
- デプロイメント・マネージャーで、JMX 管理ポートが有効になっていない。

- デプロイメント・マネージャーが、デフォルトではないリモート・メソッド呼び出し (RMI) を優先 Java Management Extensions (JMX) コネクタとして使用するよう再構成されている。(優先コネクタ・タイプを確認するには、デプロイメント・マネージャーの管理コンソールで「システム管理」>「デプロイメント・マネージャー」>「管理サービス」を選択します。)
- プロファイルをマイグレーション・ターゲット・プロファイルとして使用する予定がある。

ノードをプロファイル作成の一環としてすぐに統合するには、以下のステップを実行します。

- デプロイメント・マネージャーのホスト名または IP アドレスと SOAP ポートを指定し、管理セキュリティーがデプロイメント・マネージャーで有効にされている場合は認証ユーザー ID とパスワードも指定します。SOAP ポート番号を検索するには、*profile\_root/logs/*にあるデプロイメント・マネージャー用の *AboutThisProfile.txt* ファイルを開き、「SOAP コネクタ・ポート」の値を確認します。
- 「**addNode** コマンドを使用して、後でこの管理対象ノードをフェデレートしてください。」チェック・ボックスは選択解除したままにします。
- 「次へ」をクリックします。インストール・ウィザードは、デプロイメント・マネージャーが存在しており通信が可能であること、およびそのデプロイメント・マネージャーの認証ユーザー ID とパスワードが有効であること(機密保護機能がある場合)を確認します。「インストールの要約」パネルが表示されます。
- ステップ 6 (117 ページ) に進んでください。

デプロイメント・マネージャーが実行中でないとき、またはほかの理由で使用できないときにカスタム・ノードを統合しようとする、警告パネルが表示されて、続行できなくなります。この警告パネルが表示されたら、「OK」をクリックしてこの警告パネルを終了し、「フェデレーション」パネルで別の選択を行ってください。

ノードを後で、プロファイル作成とは別に統合するには、以下のステップを実行します。

- 「**addNode** コマンドを使用して、後でこの管理対象ノードをフェデレートしてください。」チェック・ボックスを選択します。
- 「次へ」をクリックします。「インストールの要約」パネルが表示されます。
- ステップ 6 (117 ページ) に進んでください。

**addNode** コマンドを使用してノードを統合する方法については、402 ページの『カスタム・ノードのデプロイメント・マネージャーへの統合』を参照してください。このコマンドについては、WebSphere Application Server Network Deployment インフォメーション・センターにある『**addNode** コマンド』トピックを参照してください。

5. **WebSphere Process Server** スタンドアロン・サーバーおよびデプロイメント・マネージャー・プロファイルの場合のみ: 「管理セキュリティー」パネルで、インストール済み環境に合わせて管理セキュリティーを構成します。管理セキュリティーを使用可能にする」チェック・ボックスは選択したまま管理 ID および

パスワードを入力してセキュリティーを使用可能にするか、またはこのチェック・ボックスをクリアしてセキュリティーを使用不可にします。次に、「次へ」をクリックします。

#### **WebSphere Process Server スタンドアロン・プロファイルの場合のみ**

： WebSphere Process Server サンプルのインストールを選択した場合、ユーザー・アカウントのパスワードを指定する必要があります。また、セキュリティーを有効にすると、インストーラーによってプロファイルに対して Business Process Choreographer のサンプル構成が作成されます。セキュリティーを有効にしない場合は、このサンプルの構成は作成されません。スタンドアロン・サーバーをデプロイメント・マネージャーに統合する場合は、事前にこのサンプル構成の削除が必要となります。『Business Process Choreographer 構成の除去』を参照してください。スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合、インストーラーは、Derby Embedded を使用してビジネス・スペースを構成します。

**ヒント：** 管理 ID およびパスワードを記録し、保護された領域に保管します。これらの値がわからなければ、管理コンソールにログオンしたり、WebSphere Process Server を使用することはできません。

複数のスタンドアロン・サーバーを使用する環境では、各サーバー・プロファイルのセキュリティー・ポリシーは他のサーバー・プロファイルとは切り離されています。あるサーバー・プロファイルのセキュリティー・ポリシーを変更しても、他のプロファイルとは同期されません。

「インストールの要約」パネルが表示されます。

**注：** WebSphere Application Server Network Deployment および Feature Pack for Web Services が含まれている統合インストール・パッケージ (IIP) は、WebSphere Process Server インストールの一部としてインストールされます。IIP の検証が失敗するとエラー・パネルが表示され、問題の訂正方法に関する情報が表示されます。

6. 「インストールの要約」パネルで、インストールするコンポーネント、コンポーネントが消費するスペース量、およびコンポーネントのシステム上の場所を確認し、製品をインストールする場合は「次へ」を、指定内容を変更する場合は「戻る」をクリックします。

インストール・ウィザードは、アンインストーラー・プログラムを作成し、コンポーネントがインストール中であることを示す進行状況表示パネルを表示します。

WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment の既存のバージョンに WebSphere Process Server をインストールすることを選択した場合、インストール・ウィザードはそのインストール済み環境を検査し、以下のいずれかのアクションを実行します。

- インストール済み環境のサービス・レベルが適切な場合は、インストール・ウィザードは何も行いません。
- インストール済み環境が古いサービス・レベルである場合は、インストール・ウィザードは必要なフィックスを適用してそのインストール済み環境を適切なレベルに上げ、必要な暫定修正も適用します。

- WebSphere Process Server Samples フィーチャーを選択して、サンプル・ギャラリー・フィーチャーがインストールされていない WebSphere Application Server Network Deployment インストール済み環境上へのインストールを試みると、その WebSphere Application Server Network Deployment インストール済み環境に、サンプル・ギャラリー・フィーチャーがサイレントに追加されません。

**制約事項:** WebSphere Process Server サンプル・フィーチャーは、WebSphere Application Server Network Deployment のインストール済み環境上にも増分インストールすることができます。WebSphere Application Server のインストール済み環境にはインストールできません。したがって、WebSphere Process Server のサンプル・フィーチャーを選択し、サンプル・ギャラリー・フィーチャーがインストールされていない WebSphere Application Server のインストール済み環境に WebSphere Process Server をインストールしても、サンプル・アプリケーション・ギャラリー・フィーチャーは WebSphere Application Server のインストール済み環境にはサイレントに追加されません。

**制約事項:** i5/OS **i5/OS プラットフォームの場合:** WebSphere Application Server Network Deployment のインストール済み環境が古いサービス・レベルで、WebSphere Process Server のインストールが Windows クライアントからリモートで行われる場合、このインストールを続行する前に、i5/OS システムからローカル・サイレント・インストールを使用して、WebSphere Application Server Network Deployment を更新する必要があります。WebSphere Process Server のサンプル・フィーチャーを選択して、サンプル・ギャラリー・フィーチャーがインストールされていない WebSphere Application Server Network Deployment のインストール済み環境に上書きインストールする場合、このインストールを続行する前に、i5/OS システムからローカル・サイレント・インストールを使用して、サンプル・ギャラリー・フィーチャーを WebSphere Application Server Network Deployment に追加する必要があります。

インストールが終了すると、「インストールの結果」パネルに「成功」と表示されます。

## 重要:

インストール中にエラーが検出されると、「成功」以外のメッセージが表示される場合があります。

「部分的な成功」メッセージは、インストールは完了したがエラーが生成された場合に表示されます。インストールが部分的に成功した場合、「インストールの結果」パネルには、問題をトラブルシューティングするための正確なログ・ファイルと、そのログ・ファイルが格納されているインストール済み環境内の場所が表示されます。ログ・ファイルには、以下のファイルがあります。

- `install_error.log`
- `log.txt`

どちらのファイルも、デフォルトで以下のディレクトリに格納されます。

- **i5/OS** **Linux** **UNIX** **i5/OS、Linux、および UNIX プラットフォームの場合:** `install_root/logs/wbi/install`
- **Windows** **Windows プラットフォーム:** `install_root¥logs¥wbi¥install`

773 ページの『インストールとプロファイル作成のログ・ファイル』で、これらのログ・ファイルの説明を参照してください。

「失敗」メッセージは、インストールが完全に失敗した場合に表示されます。インストールが完全に失敗した場合、「インストールの結果」パネルには、問題のトラブルシューティングに役立つ以下のログ・ファイルの場所が表示されます。

- インストールに関連したログ・ファイルは、デフォルトで次のディレクトリに格納されます。

– **i5/OS** **Linux** **UNIX** **i5/OS、Linux、および UNIX プラットフォームの場合:** `install_root/logs/wbi/install`

– **Windows** **Windows プラットフォーム:** `install_root¥logs¥wbi¥install`

- 一時ログ・ファイルは、デフォルトで次のディレクトリに格納されます。

– **i5/OS** **Linux** **UNIX** **i5/OS、Linux、および UNIX プラットフォームの場合:** `user_home/wbilogs`

– **Windows** **Windows プラットフォームの場合:** `user_home¥wbilogs`

773 ページの『インストールとプロファイル作成のログ・ファイル』で、該当するログ・ファイルの説明を参照してください。

トラブルシューティングに役立つ情報は以下のトピックにも記載されています。

- 767 ページの『第 15 章 インストールおよび構成のトラブルシューティング』
- 777 ページの『Launchpad アプリケーションのトラブルシューティング』
- 779 ページの『サイレント・インストールのトラブルシューティング』
- 781 ページの『失敗した Ant 構成スクリプトの診断』
- **i5/OS** 780 ページの『i5/OS インストールのトラブルシューティングのヒント』

- 771 ページの『メッセージ: インストールおよびプロファイル作成』
  - 783 ページの『プロファイルの作成または拡張時の障害からのリカバリー』
7. インストールを完了します。 インストールを実行するために行う操作は、インストール中にプロファイルを作成したかどうかによって異なります。「インストールの結果」パネルで、インストール中にプロファイルを作成したかどうかに基づいて、以下のいずれかのアクションを実行します。

プロファイルの状況	次のステップ
プロファイルを作成した場合	<p>「ファースト・ステップ・コンソールの起動」チェック・ボックスが選択されていることを確認し、「終了」をクリックしてインストール・ウィザードを閉じ、ファースト・ステップ・コンソールを開始します。</p>
プロファイルを作成していない 場合	<p>次のステップは、新規プロファイルをすぐに作成するかどうかによって異なります。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 新規プロファイルを作成する場合は、「<b>プロファイル管理ツールを使用して、新しい WebSphere Process Server プロファイルを作成します</b>」の横にあるチェック・ボックスを選択したまま、「終了」をクリックします。インストール・ウィザードが閉じて、プロファイル管理ツールが開始されます。このツールを使用して新規 WebSphere Process Server プロファイルを作成する方法、または既存のプロファイルに WebSphere Process Server プロファイルに拡張する方法については、240 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの作成』または 278 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの拡張』を参照してください。</li> <li>• 新規プロファイルを作成しない 場合は、「<b>プロファイル管理ツールを使用して、新しい WebSphere Process Server プロファイルを作成します</b>」の横にあるチェック・ボックスをクリアし、「終了」をクリックします。</li> </ul> <p><b>重要:</b> 動作環境を保持するには、管理対象ノードを持つ WebSphere Process Server スタンドアロン・サーバー・プロファイル、またはデプロイメント・マネージャー・プロファイルが存在している必要があります。</p>

## タスクの結果

「インストールの結果」パネルに「成功」と表示されたら、選択したコンポーネントは正常にインストールされていて、プロファイルを作成した場合はプロファイルが正常に作成されています。

## 次のタスク

インストール時点で最新の WebSphere Process Server フィックスパックがあれば、インストール環境に上書きインストールします。WebSphere Process Server へのフィックスパックのインストールについては、サポート・ページ (<http://www.ibm.com/software/integration/wps/support/>) の『*Recommended fixes*』に記載されている説明を参照してください。

ファースト・ステップ・コンソールから WebSphere Process Server スタンドアロン・サーバー・プロファイルまたはデプロイメント・マネージャー・プロファイルを開始して、インストール済み環境が適切に作動していることを確認します。詳しくは、165 ページの『ファースト・ステップ・コンソールのオプション』を参照してください。

インストール検査ツールを使用してインストールの検査を行うこともできます。詳しくは、193 ページの『第 6 章 製品のインストールの検査』を参照してください。

### 関連概念



WebSphere が提供するビジネス・スペース

WebSphere Process Server には、WebSphere が提供するビジネス・スペースが含まれています。これは IBM WebSphere Business Process Management ポートフォリオ横断の Web インターフェースを作成、管理および統合するための共通インターフェースをアプリケーション・ユーザーに提供します。

### 関連情報



ビジネス・スペースの構成

## デプロイメント環境による WebSphere Process Server の対話式インストール

この手順を使用して、インストール・ウィザードのグラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) を使用した WebSphere Process Server のインストールを実行します。この手順では、製品のインストールに加えて、デプロイメント環境のセットアップについても説明します。デプロイメント・マネージャーを作成し、適切なデプロイメント環境パターンを選択するか、またはカスタム・プロファイルを作成して、デプロイメント環境内のクラスター・メンバーを選択することができます。このインストールの一部として WebSphere Application Server Network Deployment with Web Services Feature Pack をインストールできます。WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 6.1.x の既存のインストール済み環境に WebSphere Process Server をインストールすることも可能です。

## このタスクについて

以下の手順に従って、これらの選択を実行します。このトピックでは、96 ページの『WebSphere Process Server の対話式インストール』の手順に従ってインストール・ウィザードを開始し、前提条件と既存の WebSphere インストール環境を調べ、デプロイメント環境のインストールの実行を選択済みであることを想定しています。「フィーチャーの選択」パネルが表示されます。

### 手順

1. 「フィーチャーの選択」パネルで、インストールするフィーチャーを選択し、「次へ」をクリックします。

このパネルで選択できるフィーチャーの説明については、648 ページの『WebSphere Process Server の製品コンポーネント』を参照してください。

次のステップは、WebSphere Application Server Network Deployment のインストール済み環境上にインストールするかどうかによって異なります。

インストール状況	次のステップ
WebSphere Application Server Network Deployment のインストール済み環境上へのインストールを試みている。 <b>重要:</b> WebSphere Process Server をインストールするユーザーは、WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment をインストールしたユーザーと同じである必要があります。既存のインストール済み環境のインストール・パスに括弧が含まれている場合は、その既存のインストール済み環境に上書きしてインストールすることはできません。	「デプロイメント環境インストール」パネルが表示されます。ステップ 3 (123 ページ) に進んでください。
WebSphere Application Server Network Deployment のインストール済み環境上へのインストールを試みていない。	「インストール・ロケーション」パネルが表示されます。ステップ 2 に進んでください。

2. 「インストール・ロケーション」パネルで、製品のデフォルトのインストール・ルート・ディレクトリを受け入れるか、または別のディレクトリを指定して、「次へ」をクリックします。

**注:** インストール・パスに括弧を使用することはできません。

**i5/OS** **i5/OS プラットフォームの場合:** i5/OS システムの「インストール・ロケーション」パネルでは、プロファイル・インストール・ディレクトリも指定できます。

**Linux** **UNIX** **Windows** **Linux、UNIX、および Windows プラットフォームの場合:** インストール・ウィザードに、システムが所有する root ユーザーまたは管理者のデフォルト・インストール・ルート・ディレクトリが表示されます。ここには、非 root ユーザー用の、ユーザーが所有する別のデフォルト・インストール・ルート・ディレクトリが表示されます。

デフォルト・インストール・ディレクトリーと、インストール・ウィザードによるデフォルト・インストール・ディレクトリーの決定方法については、615 ページの『製品、プロファイル、およびツールのデフォルト・インストール・ディレクトリー』を参照してください。

インストール・ウィザードは、インストール・ロケーションが完全修飾されており、正しい形式であること、インストールを実行するユーザー ID によって書き込み可能であること、およびインストールを正常に実行するための十分なディスク・スペース (必要な一時スペースを含む) があることを確認します。十分なスペースがない場合は、インストール・プログラムを停止して、使用していないファイルを削除し、ごみ箱を空にすることでスペースを解放し、再度インストールを開始してください。

#### 重要:

- インストール・ルート・ディレクトリーの値を指定しなければ、処理を続行することができません。
- **i5/OS** **i5/OS プラットフォームの場合:** パス名の中の各コンポーネントの最大長は 255 文字です。パス名の最大長は 16 MB です。
- **i5/OS** **Linux** **UNIX** **i5/OS、Linux、および UNIX プラットフォームの場合:** インストール・ルート・ディレクトリーにシンボリック・リンクを使用しないでください。シンボリック・リンクはサポートされていません。また、ディレクトリー・パスにはスペースを使用しないでください。
- **Windows** **Windows プラットフォームの場合:** Windows システムではディレクトリー名にセミコロンを使用しないでください (セミコロンは、Windows システム上のクラス・パスを構成するために使用される文字です)。ターゲット・ディレクトリーにセミコロンが含まれる場合、WebSphere Process Server は Windows プラットフォーム上に正しくインストールできません。

このステップが完了すると、「デプロイメント環境インストール」パネルが表示されます。

3. 「デプロイメント環境インストール」パネルでは、デプロイメント・マネージャーを作成し、適切なデプロイメント環境パターンを選択するか、またはカスタム・プロファイルを作成して、デプロイメント環境内のクラスター・メンバーを選択することを決定します。次に、「次へ」をクリックします。

既存のデプロイメント・マネージャーやデプロイメント環境パターンがない場合は、最初のワークステーションでのインストール時に、「**デプロイメント・マネージャーを作成し、デプロイメント環境パターンを選択してください。**」というオプションを選択する必要があります。後続のワークステーションでのインストール時に、それらのインストール済み環境を、既にデプロイメント・マネージャーを持つデプロイメント環境内に組み込む必要がある場合は、「**カスタム・プロファイルを作成し、デプロイメント環境内のクラスター・メンバーを選択してください。**」というオプションを選択します。次のステップは選択内容によって異なります。

選択したプロファイル・タイプ	次のステップ
<p>デプロイメント・マネージャーを作成し、デプロイメント環境パターンを選択してください: このインストールの後続ステップで選択するデプロイメント環境パターンに基づき、新規のデプロイメント環境を作成するステップまでを、ウィザードのガイドに従って行います。</p> <p><b>制約事項:</b></p> <p>デプロイメント環境のデプロイメント・マネージャー・プロファイル作成の一部であるデータベース構成パネルには、データベース管理者 (DBA) 特権が必要です。製品のインストーラーまたはプロファイル管理ツールのデプロイメント環境機能を使用する場合に、データベース製品として Derby ネットワーク・サーバー以外のデータベースを使用するときは、データベース構成パネルの「データベースで認証するユーザー名」フィールドで指定するユーザー ID は DBA 特権を持っている必要があります。</p>	<p>「管理セキュリティ」パネルが表示されます。『デプロイメント・マネージャーの作成とデプロイメント環境パターンの選択』のトピックに進んでください。</p>
<p>カスタム・プロファイルを作成し、デプロイメント環境内のクラスター・メンバーを選択してください: 定義したデプロイメント環境についてのカスタム・プロファイルを、ウィザードのガイドに従って作成します。このカスタム・プロファイルを作成するために、クラスター・メンバーを選択します。そのデプロイメント環境で稼働しているデプロイメント・マネージャーに接続できる必要があります。</p>	<p>「デプロイメント・マネージャー接続」パネルが表示されます。131 ページの『デプロイメント環境でのカスタム・プロファイルの作成とクラスター・メンバーの選択』のトピックに進んでください。</p>

## タスクの結果

インストールするフィーチャーを選択し、WebSphere Application Server Network Deployment の既存のインストールへの上書きインストールを行うのではない場合はインストール・ディレクトリーを指定しました。さらに、デプロイメント・マネージャーを作成してデプロイメント環境パターンを選択するか、カスタム・プロファイルを作成して既存のデプロイメント環境内のクラスター・メンバーを選択するかを選択しました。

## 次のタスク

行った選択に応じて該当するリンクの説明に従い、インストールを続行します。

## デプロイメント・マネージャーの作成とデプロイメント環境パターンの選択

新しいデプロイメント・マネージャーの作成方法とデプロイメント環境パターンの選択方法について説明します。

## このタスクについて

この手順は、新規のデプロイメント・マネージャーを作成し、デプロイメント環境パターンを選択する必要があることを前提としています。121 ページの『デプロイメント環境による WebSphere Process Server の対話式インストール』に記載されている手順に従って作業が完了していれば、「管理セキュリティー」パネルが表示されます。以下のステップを実行して、インストールを完了してください。

### 手順

1. 「管理セキュリティー」パネルで、インストール環境の管理セキュリティーを構成します。いずれかのデプロイメント環境インストールの管理セキュリティーを使用する必要があります。管理 ID およびパスワードを指定して管理ツールにログインし、「次へ」をクリックします。管理ユーザーが WebSphere Process Server 内のリポジトリに作成されます。インストールが完了した後に、さらにユーザー、グループ、または外部リポジトリを追加できます。

「デプロイメント・マネージャーおよびデプロイメント環境パターン」パネルが表示されます。

2. 「デプロイメント・マネージャーおよびデプロイメント環境パターン」パネルで、インストール環境に使用するデプロイメント環境パターンを選択します。

以下の手順を実行します。

- a. インストールで使用するデプロイメント環境パターンを選択します。

- **リモート・メッセージングおよびリモート・サポート:** アプリケーション・デプロイメント用に 1 つのクラスター、メッセージング・インフラストラクチャー用に 1 つのリモート・クラスター、および Common Event Infrastructure やその他のサポート・アプリケーション用に 1 つのリモート・クラスターを定義します。このパターンでは、大半のビジネス統合のニーズに適合するセットアップが構成されます。迷う場合は、このパターンを選択してください。
- **リモート・メッセージング:** アプリケーション・デプロイメント用に 1 つのクラスター、およびメッセージング・インフラストラクチャー用に 1 つのリモート・クラスターを定義します。Common Event Infrastructure とその他のサポート・アプリケーションは、アプリケーション・デプロイメント・クラスター上に構成されます。
- **単一クラスター:** アプリケーション・デプロイメント用に 1 つのクラスターを定義します。メッセージング・インフラストラクチャーおよび Common Event Infrastructure とサポート・アプリケーションは、アプリケーション・デプロイメント・ターゲット・クラスター上に構成されます。

詳しくは、以下のトピックを参照してください。

- **デプロイメント環境パターン:** デプロイメント環境パターンは、デプロイメント環境に含まれるコンポーネントとリソースの制約と要件を指定します。デプロイメント環境パターンは、お客様がデプロイメント環境を最も簡単な方法で作成できるよう支援することを目的とし、大半のビジネス要件を満たせるように設計されています。
- **デプロイメント環境機能:** 堅固なデプロイメント環境を設計するには、特定の IBM 提供デプロイメント環境パターンまたはカスタム・デプロイメ

ント環境で各クラスターが提供できる機能を理解する必要があります。この知識は、ニーズに最も合うデプロイメント環境パターンを正しく判別するのに役立ちます。

- b. 「次へ」をクリックします。「デプロイメント・マネージャー・データベース構成」パターン・パネルが表示されます。
3. 「デプロイメント・マネージャー・データベース構成」パターン・パネルで、インストール環境で使用するデータベースを選択します。

以下の手順を実行します。

- a. インストール環境で使用するデータベース製品をドロップダウン・リストから選択します。

**重要:** インストール・ウィザードでデプロイメント環境インストールを実行する場合は、WebSphere Process Server でサポートされるデータベース製品のうち、下記のとおり一部のみを使用できます。

- Derby Network Server
- DB2 Universal Database
- Oracle 9i、10g、または 11g

このリストに含まれない別のサポート対象データベース製品を使用することも可能です (Informix および Microsoft SQL Server は除く。これらは、デプロイメント環境構成でサポートされません)。ただし、サポートされるその他のデータベース製品を使用するには、プロファイル管理ツールを使用してデプロイメント・マネージャーを作成する必要があります。詳しくは、239 ページの『プロファイルの作成』を参照してください。また、i5/OS システムは、ローカルの i5/OS システム上の DB2 Universal Database 製品で作成したデータベースを使用できません。DB2 Universal Database 製品は、i5/OS 以外のシステムに常駐するリモート・サーバー上でのみ 使用できます。この製品を使用するには JDBC ドライバー・タイプ 4 が必要です。

- b. 「データベース名」フィールドで、デフォルト値 WPRCSDB を受け入れるか、インストール環境で使用する共通データベースの名前を入力します。
- c. 「次へ」をクリックします。「追加のデータベース構成」パネルに、選択したデータベース製品に固有のフィールドが表示されます。
- d. このパネルでの入力方法については、129 ページの『「追加のデータベース構成」パネル』のトピックを参照してください。「追加のデータベース構成」パネルに情報を入力したら、「次へ」をクリックします。「インストールの要約」パネルが表示されます。

**注:** WebSphere Application Server Network Deployment および Feature Pack for Web Services が含まれている統合インストール・パッケージ (IIP) は、WebSphere Process Server インストールの一部としてインストールされます。IIP の検証が失敗すると、エラー・パネルが表示され、問題を訂正するための方法が示されます。

4. 「インストールの要約」パネルで、インストールするコンポーネント、コンポーネントが消費するスペース量、およびコンポーネントのシステム上の場所を確認し、製品をインストールする場合は「次へ」を、指定内容を変更する場合は「戻る」をクリックします。

インストール・ウィザードは、アンインストーラー・プログラムを作成し、コンポーネントがインストール中であることを示す進行状況表示パネルを表示します。

WebSphere Application Server Network Deployment with Web Services Feature Pack の既存のバージョンに WebSphere Process Server を上書きインストールすることを選択した場合、インストール・ウィザードは、その環境を検査して、以下のいずれかのアクションを実行します。

- インストール済み環境のサービス・レベルが適切な場合は、インストール・ウィザードは何も行いません。
- インストール済み環境が古いサービス・レベルである場合は、インストール・ウィザードは必要なフィックスを適用してそのインストール済み環境を適切なレベルに上げ、必要な暫定修正も適用します。

**制約事項:** i5/OS **i5/OS プラットフォームの場合:** WebSphere Application Server Network Deployment with Web Services Feature Pack のインストール済み環境が古いサービス・レベルで、WebSphere Process Server のインストールが Windows クライアントからリモートで行われる場合、このインストールを続行する前に、i5/OS システムからローカル・サイレント・インストールを使用して、WebSphere Application Server Network Deployment with Web Services Feature Pack を更新する必要があります。

- WebSphere Process Server サンプル・フィーチャーを選択しており、サンプル・ギャラリー・フィーチャーがインストールされていない WebSphere Application Server Network Deployment Web Services Feature Pack インストール済み環境に上書きインストールする場合、インストール・ウィザードは、その WebSphere Application Server Network Deployment Web Services Feature Pack インストール済み環境にサンプル・ギャラリー・フィーチャーをサイレントに追加します。

**制約事項:** i5/OS **i5/OS プラットフォームの場合:** WebSphere Process Server サンプル・フィーチャーを選択しており、サンプル・ギャラリー・フィーチャーがインストールされていない WebSphere Application Server Network Deployment Web Services Feature Pack のインストール済み環境に上書きインストールする場合は、このインストールを続行する前に、i5/OS システムからのローカル・サイレント・インストールを使用してサンプル・ギャラリー・フィーチャーを WebSphere Application Server Network Deployment Web Services Feature Pack に追加する必要があります。

WebSphere Application Server Network Deployment の既存のバージョンに WebSphere Process Server を上書きインストールすることを選択した場合は、インストール・ウィザードは最初に Web Services Feature Pack をインストールしてから、上記の 1 つ以上のアクションを実行して、インストール済み環境を適切なレベルに引き上げます。

インストールが終了すると、「インストールの結果」パネルに「成功」と表示されます。

## 重要:

インストール中にエラーが検出されると、「成功」以外のメッセージが表示される場合があります。

「部分的な成功」メッセージは、インストールは完了したがエラーが生成された場合に表示されます。インストールが部分的に成功した場合、「インストールの結果」パネルには、問題をトラブルシューティングするための正確なログ・ファイルと、そのログ・ファイルが格納されているインストール済み環境内の場所が表示されます。ログ・ファイルには、以下のファイルがあります。

- `install_error.log`
- `log.txt`

どちらのファイルも、デフォルトで以下のディレクトリに格納されます。

- **i5/OS** **Linux** **UNIX** **i5/OS、Linux、および UNIX プラットフォームの場合:** `install_root/logs/wbi/install`
- **Windows** **Windows プラットフォーム:** `install_root¥logs¥wbi¥install`

773 ページの『インストールとプロファイル作成のログ・ファイル』で、これらのログ・ファイルの説明を参照してください。

「失敗」メッセージは、インストールが完全に失敗した場合に表示されます。インストールが完全に失敗した場合、「インストールの結果」パネルには、問題のトラブルシューティングに役立つ以下のログ・ファイルの場所が表示されます。

- インストールに関連したログ・ファイルは、デフォルトで次のディレクトリに格納されます。

– **i5/OS** **Linux** **UNIX** **i5/OS、Linux、および UNIX プラットフォームの場合:** `install_root/logs/wbi/install`

– **Windows** **Windows プラットフォーム:** `install_root¥logs¥wbi¥install`

- 一時ログ・ファイルは、デフォルトで次のディレクトリに格納されます。

– **i5/OS** **Linux** **UNIX** **i5/OS、Linux、および UNIX プラットフォームの場合:** `user_home/wbilogs`

– **Windows** **Windows プラットフォームの場合:** `user_home¥wbilogs`

773 ページの『インストールとプロファイル作成のログ・ファイル』で、該当するログ・ファイルの説明を参照してください。

トラブルシューティングに役立つ情報は以下のトピックにも記載されています。

- 767 ページの『第 15 章 インストールおよび構成のトラブルシューティング』
- 777 ページの『Launchpad アプリケーションのトラブルシューティング』
- 779 ページの『サイレント・インストールのトラブルシューティング』
- 781 ページの『失敗した Ant 構成スクリプトの診断』
- **i5/OS** 780 ページの『i5/OS インストールのトラブルシューティングのヒント』

- 771 ページの『メッセージ: インストールおよびプロファイル作成』
  - 783 ページの『プロファイルの作成または拡張時の障害からのリカバリー』
5. ファースト・ステップ・コンソールを始動するためのチェック・ボックスが選択されていることを確認し、「終了」をクリックしてインストール・ウィザードを閉じ、ファースト・ステップ・コンソールを開始します。

## タスクの結果

「インストールの結果」パネルに「成功」と表示された場合は、選択したコンポーネントが正常にインストールされ、デプロイメント環境が正常に作成されています。

## 次のタスク

インストール時点で最新の WebSphere Process Server フィックスパックがあれば、インストール環境に上書きインストールします。WebSphere Process Server へのフィックスパックのインストールについては、サポート・ページ (<http://www.ibm.com/software/integration/wps/support/>) に記載されている説明を参照してください。

データベースがアクティブでない場合は、データベースを始動してください。次に、ファースト・ステップ・コンソールから WebSphere Process Server Deployment Manager を開始し、インストールした環境が正常に作動していることを確認します。詳しくは、165 ページの『ファースト・ステップ・コンソールのオプション』を参照してください。ファースト・ステップ・コンソールには、検証テストを実行するためのリンクと、プロファイル管理ツールを開始するためのリンクも表示されます。このツールで WebSphere Process Server カスタム・プロファイルを作成してデプロイメント環境に追加のクラスター・メンバーを定義できます。

### 「追加のデータベース構成」パネル:

インストール・ウィザードの「デプロイメント・マネージャー・データベース構成」パネルでデータベース製品を選択すると、後続のパネルにより、データベース固有の情報を入力するよう求められます。この「追加のデータベース構成」パネルのフィールドやデフォルト値は、選択したデータベース製品に応じて若干異なります。

「追加のデータベース構成」パネルに情報を入力したら、124 ページの『デプロイメント・マネージャーの作成とデプロイメント環境パターンの選択』に戻ります。

## Derby Network Server

フィールド「データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)」と「サーバー・ポート」に値を入力します (またはデフォルト値の localhost と 1527 をそれぞれ受け入れます)。

## DB2 Universal Database

注: **i5/OS** **i5/OS プラットフォームの場合:** i5/OS システムでは、ローカルの i5/OS システム上の DB2 Universal Database 製品によって作成されたデータベース

は使用できません。DB2 Universal Database 製品は、i5/OS 以外のシステムに常駐するリモート・サーバー上でのみ 使用できます。この製品を使用するには JDBC ドライバー・タイプ 4 が必要です。

「データベースで認証するユーザー名」、「データベース認証用のパスワード」、「パスワードの確認」、「JDBC ドライバーのクラスパスのロケーション (ディレクトリー)」のそれぞれのフィールドに値を入力します。

「JDBC ドライバーのクラスパスのロケーション (ディレクトリー)」フィールドでは、次のファイルを含むシステム上のロケーションを指定する必要があります。

- db2jcc.jar
- db2jcc\_license\_cu.jar または db2jcc\_license\_cisuz.jar
- i5/OS jt400.jar

指定されたロケーションでファイルが見つからない場合は、エラー・メッセージが表示されます。

ご使用の JDBC ドライバーのタイプに応じて、2 または 4 の横にあるラジオ・ボタンを選択します。

フィールド「データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)」と「サーバー・ポート」に値を入力します (またはデフォルト値の localhost と 50000 をそれぞれ受け入れます)。

#### Oracle 9i、10g、および 11g

注: i5/OS **i5/OS プラットフォームの場合:** i5/OS システムは、Oracle データベース製品で作成されたデータベースをローカル i5/OS システム上で使用できません。Oracle データベース製品はリモート・サーバー上で使用できますが、Thin JDBC ドライバーとともに使用される場合に限られます。Oracle Call Interface (oci) JDBC ドライバーはローカル・サーバー専用であるため、i5/OS は Oracle をローカルでは使用できません。

「データベース管理特権のあるユーザー名」(この ID は、Oracle データベースでの SYSDBA 特権およびスキーマ作成権限を持っている必要があります)、「データベース認証用のパスワード」、「パスワードの確認」、および「JDBC ドライバーのクラスパスのロケーション (ディレクトリー)」のフィールドに値を入力します。

「JDBC ドライバーのクラスパスのロケーション (ディレクトリー)」フィールドは、ojdbc14.jar ファイルを含むディレクトリーを指していなければなりません。指定されたロケーションでファイルが見つからない場合は、エラー・メッセージが表示されます。

ご使用の JDBC ドライバーのタイプに応じて、OCI または thin の横にあるラジオ・ボタンを選択します。

フィールド「データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)」と「サーバー・ポート」に値を入力します。「データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)」には、Oracle をローカルで実行している場合でも、Oracle インスタンス上で構成された値を使用します。「サーバー・ポート」には、デフォルト値

1521 をそのまま確定するか、値が異なる場合はポート番号を指定します。

## デプロイメント環境でのカスタム・プロファイルの作成とクラスター・メンバーの選択

既存のデプロイメント環境内でのカスタム・プロファイルの作成方法とクラスター・メンバーの選択方法について説明します。

### このタスクについて

このトピックは、既存のデプロイメント環境内でカスタム・プロファイルを作成し、クラスター・メンバーを選択する必要があることを前提としています。121 ページの『デプロイメント環境による WebSphere Process Server の対話式インストール』に記載されている手順に従って作業が完了していれば、「デプロイメント・マネージャー接続」パネルが表示されます。以下のステップを実行して、インストールを完了してください。

### 手順

1. 「デプロイメント・マネージャー接続」パネルで、クラスターを追加するデプロイメント環境を持つデプロイメント・マネージャーのホスト名または IP アドレスと SOAP ポートを指定します。認証ユーザー ID およびパスワードも指定します (デプロイメント環境のデプロイメント・マネージャーでは管理セキュリティが常に有効です)。次に、「次へ」をクリックします。このデプロイメント・マネージャーは、作成するカスタム・プロファイルのバージョンと同レベルか、それよりも上位レベルの WebSphere Process Server Deployment Manager でなければなりません。

WebSphere Process Server プロファイルは WebSphere Enterprise Service Bus デプロイメント・マネージャーを使用できませんが、WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルは WebSphere Process Server デプロイメント・マネージャーを使用できます。

デプロイメント・マネージャーの SOAP ポート番号を確認するには、*profile\_root/logs/* 下でそのデプロイメント・マネージャーの AboutThisProfile.txt ファイルを開き、「SOAP connector port」の値を調べます。

デプロイメント・マネージャーが存在し、接続可能であり、認証ユーザー ID およびパスワードがそのデプロイメント・マネージャーに対して有効であり、デプロイメント環境が定義されていることをインストール・ウィザードが検証します。

「クラスターおよびデータベースの構成 (パート 1)」パネルが開き、デプロイメント・マネージャーのデプロイメント環境パターンの情報が表示されます。

2. 「クラスターおよびデータベースの構成 (パート 1)」パネルのデプロイメント環境パターンで、このノードを割り当てるクラスターを 1 つまたは複数選択し、「次へ」をクリックします。このパネルには、インストール・ウィザードがデプロイメント・マネージャーで認識したデプロイメント環境パターンに基づいて、以下の 1 つから 3 つのクラスターが表示されます。

表 27. 既存のデプロイメント・マネージャー上のデプロイメント環境パターンによって提供されるクラスター

デプロイメント・マネージャーのデプロイメント環境パターン	提供されるクラスター
リモート・メッセージングおよびリモート・サポート	<ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>アプリケーション・デプロイメントのターゲット:</b> ユーザー・アプリケーションをデプロイする必要のあるクラスター 1 つで構成されます。</li> <li>• <b>メッセージング・インフラストラクチャー:</b> メッセージング・エンジンが配置されるクラスター 1 つで構成されます。</li> <li>• <b>サポート・インフラストラクチャー:</b> ご使用のシステムの管理に使用される Common Event Infrastructure サーバーおよびその他のインフラストラクチャー・サービスをホスティングするクラスター 1 つで構成されます。</li> </ul>
リモート・メッセージング	<ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>アプリケーション・デプロイメントのターゲット:</b> ユーザー・アプリケーションをデプロイする必要のあるクラスター 1 つで構成されます。リモート・メッセージングのデプロイメント環境パターンを使用すると、アプリケーション・デプロイメントのターゲット・クラスターは、サポート・インフラストラクチャー・クラスターの機能も果たします。</li> <li>• <b>メッセージング・インフラストラクチャー:</b> メッセージング・エンジンが配置されるクラスター 1 つで構成されます。</li> </ul>
単一クラスター	<ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>アプリケーション・デプロイメントのターゲット:</b> ユーザー・アプリケーションをデプロイする必要のあるクラスター 1 つで構成されます。単一クラスターのデプロイメント環境パターンを使用すると、アプリケーション・デプロイメントのターゲット・クラスターは、メッセージング・インフラストラクチャー・クラスターおよびサポート・インフラストラクチャー・クラスターの機能も果たします。</li> </ul>

詳しくは、以下のトピックを参照してください。

「クラスターおよびデータベースの構成 (パート 2)」パネルが開き、そのデプロイメント・マネージャーによって使用されるデータベースの情報が表示されます。

3. 「クラスターおよびデータベースの構成 (パート 2)」パネルで、JDBC ドライバー・クラスパス・ファイルのロケーションを指定し (またはデフォルトを受け入れ)、**「次へ」** をクリックします。

「インストールの要約」パネルが表示されます。

注: WebSphere Application Server Network Deployment および Feature Pack for Web Services が含まれている統合インストール・パッケージ (IIP) は、WebSphere Process Server インストールの一部としてインストールされます。IIP の検証が失敗すると、エラー・パネルが表示され、問題を訂正するための方法が示されます。

4. 「インストールの要約」パネルで、インストールするコンポーネント、コンポーネントが消費するスペース量、およびコンポーネントのシステム上の場所を確認し、製品をインストールする場合は「次へ」を、指定内容を変更する場合は「戻る」をクリックします。

インストール・ウィザードは、アンインストーラー・プログラムを作成し、コンポーネントがインストール中であることを示す進行状況表示パネルを表示します。

WebSphere Application Server Network Deployment with Web Services Feature Pack の既存のバージョンに WebSphere Process Server を上書きインストールすることを選択した場合、インストール・ウィザードは、その環境を検査して、以下のいずれかのアクションを実行します。

- インストール済み環境のサービス・レベルが適切な場合は、インストール・ウィザードは何も行いません。
- インストール済み環境が古いサービス・レベルである場合は、インストール・ウィザードは必要なフィックスを適用してそのインストール済み環境を適切なレベルに上げ、必要な暫定修正も適用します。

**制約事項:** i5/OS

WebSphere Application Server Network Deployment with Web Services Feature Pack のインストール済み環境のサービス・レベルが古く、WebSphere Process Server を Windows クライアントからリモート・インストールする場合は、i5/OS システムからのローカル・サイレント・インストールを使用して WebSphere Application Server Network Deployment with Web Services Feature Pack を更新し、そのあと、このインストールを続行する必要があります。

- WebSphere Process Server のサンプル・フィーチャーを選択して、サンプル・ギャラリー・フィーチャーがインストールされていない WebSphere Application Server Network Deployment with Web Services Feature Pack のインストール済み環境へのインストールを実行すると、インストール・ウィザードにより、その WebSphere Application Server Network Deployment with Web Services Feature Pack のインストール済み環境にサンプル・ギャラリー・フィーチャーがサイレントに追加されます。

**制約事項:** i5/OS

**i5/OS プラットフォームの場合:** WebSphere Process Server サンプル・フィーチャーを選択しており、サンプル・ギャラリー・フィーチャーがインストールされていない WebSphere Application Server Network Deployment with Web Services Feature Pack のインストール済み環境に上書きインストールする場合は、このインストールを続行する前に、i5/OS システムからのローカル・サイレント・インストールを使用して、サンプル・ギャラリー・フィーチャーを WebSphere Application Server Network Deployment with Web Services Feature Pack に追加する必要があります。

WebSphere Application Server Network Deployment の既存のバージョンに WebSphere Process Server を上書きインストールすることを選択した場合は、インストール・ウィザードは最初に Web Services Feature Pack をインストールしてから、上記の 1 つ以上のアクションを実行して、インストール済み環境を適切なレベルに引き上げます。

インストールが終了すると、「インストールの結果」パネルに「成功」と表示されます。

## 重要:

インストール中にエラーが検出されると、「成功」以外のメッセージが表示される場合があります。

「部分的な成功」メッセージは、インストールは完了したがエラーが生成された場合に表示されます。インストールが部分的に成功した場合、「インストールの結果」パネルには、問題をトラブルシューティングするための正確なログ・ファイルと、そのログ・ファイルが格納されているインストール済み環境内の場所が表示されます。ログ・ファイルには、以下のファイルがあります。

- `install_error.log`
- `log.txt`

どちらのファイルも、デフォルトで以下のディレクトリに格納されます。

- **i5/OS** **Linux** **UNIX** **i5/OS、Linux、および UNIX プラットフォームの場合:** `install_root/logs/wbi/install`
- **Windows** **Windows プラットフォーム:** `install_root¥logs¥wbi¥install`

773 ページの『インストールとプロファイル作成のログ・ファイル』で、これらのログ・ファイルの説明を参照してください。

「失敗」メッセージは、インストールが完全に失敗した場合に表示されます。インストールが完全に失敗した場合、「インストールの結果」パネルには、問題のトラブルシューティングに役立つ以下のログ・ファイルの場所が表示されます。

- インストールに関連したログ・ファイルは、デフォルトで次のディレクトリに格納されます。

– **i5/OS** **Linux** **UNIX** **i5/OS、Linux、および UNIX プラットフォームの場合:** `install_root/logs/wbi/install`

– **Windows** **Windows プラットフォーム:** `install_root¥logs¥wbi¥install`

- 一時ログ・ファイルは、デフォルトで次のディレクトリに格納されます。

– **i5/OS** **Linux** **UNIX** **i5/OS、Linux、および UNIX プラットフォームの場合:** `user_home/wbilogs`

– **Windows** **Windows プラットフォームの場合:** `user_home¥wbilogs`

773 ページの『インストールとプロファイル作成のログ・ファイル』で、該当するログ・ファイルの説明を参照してください。

トラブルシューティングに役立つ情報は以下のトピックにも記載されています。

- 767 ページの『第 15 章 インストールおよび構成のトラブルシューティング』
- 777 ページの『Launchpad アプリケーションのトラブルシューティング』
- 779 ページの『サイレント・インストールのトラブルシューティング』
- 781 ページの『失敗した Ant 構成スクリプトの診断』
- **i5/OS** 780 ページの『i5/OS インストールのトラブルシューティングのヒント』

- 771 ページの『メッセージ: インストールおよびプロファイル作成』
  - 783 ページの『プロファイルの作成または拡張時の障害からのリカバリー』
5. 「ファースト・ステップ・コンソールの起動」チェック・ボックスが選択されていることを確認し、「終了」をクリックしてインストール・ウィザードを閉じ、ファースト・ステップ・コンソールを開始します。

### タスクの結果

「インストールの結果」パネルに「成功」と表示された場合は、選択したコンポーネントが正常にインストールされ、デプロイメント環境が正常に更新されています。デプロイメント環境で稼働中のデプロイメント・マネージャーには、カスタム・プロファイルが統合されています。

### 次のタスク

インストール時点で最新の WebSphere Process Server フィックスパックがあれば、インストール環境に上書きインストールします。WebSphere Process Server へのフィックスパックのインストールについては、サポート・ページ (<http://www.ibm.com/software/integration/wps/support/>) に記載されている説明を参照してください。

WebSphere Process Server デプロイメント・マネージャーがまだ実行されていない場合は、ファースト・ステップ・コンソールから開始し、クラスターをデプロイメント環境に追加できるようにします。デプロイメント・マネージャーが開始すると、そのセルに属するノードを管理できるようになります。

## WebSphere Process Server Client の対話式インストール

この手順を使用して、インストール・ウィザード・グラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) を使用した WebSphere Process Server Client のインストールを実行します。このインストールの一部として WebSphere Application Server Network Deployment with Web Services Feature Pack をインストールできます。WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 6.1.x の既存のインストール済み環境に WebSphere Process Server Client をインストールすることも可能です。

### このタスクについて

続行する前に、『リモート・クライアント・アプリケーションの計画』および『セッション Bean のリモート・インターフェースにアクセスする』で WebSphere Process Server クライアント情報を確認します。

このトピックでは、96 ページの『WebSphere Process Server の対話式インストール』の手順に従って、インストール・ウィザードを開始し、前提条件と既存の WebSphere インストール済み環境を確認し、Client インストールの実行を選択したことを前提としています。WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment の既存のインストール済み環境に WebSphere Process Server Client をインストールしているかどうかによって、「インストールの要約」パネルと「インストール・ロケーション」パネルのいずれかが表示されています。

## 手順

1. インストールを完了します。 次のステップは、WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment の既存のインストール済み環境に WebSphere Process Server Client をインストールしているかどうかによって異なります。

インストール状況	次のステップ
WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment の既存のインストール済み環境にインストールしている。 <b>重要:</b> WebSphere Process Server をインストールするユーザーは、WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment をインストールしたユーザーと同じである必要があります。既存のインストール済み環境のインストール・パスに括弧が含まれている場合は、その既存のインストール済み環境に上書きしてインストールすることはできません。	「インストールの要約」パネルが表示されず、ステップ 3 (138 ページ) に進んでください。
WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment の既存のインストール済み環境にインストールしていない。	「インストール・ロケーション」パネルが表示されます。ステップ 2 に進んでください。

2. 「インストール・ロケーション」パネルで、製品のデフォルトのインストール・ルート・ディレクトリを受け入れるか、または別のディレクトリを指定して、「次へ」をクリックします。

**注:** インストール・パスに括弧を使用することはできません。

**i5/OS** **i5/OS プラットフォームの場合:** i5/OS システムの「インストール・ロケーション」パネルでは、プロファイル・インストール・ディレクトリも指定できます。

**Linux** **UNIX** **Windows** **Linux、UNIX、および Windows プラットフォームの場合:** インストール・ウィザードに、システムが所有する root ユーザーまたは管理者のデフォルト・インストール・ルート・ディレクトリが表示されます。ここには、非 root ユーザー用の、ユーザーが所有する別のデフォルト・インストール・ルート・ディレクトリが表示されます。

デフォルト・インストール・ディレクトリと、インストール・ウィザードによるデフォルト・インストール・ディレクトリの決定方法については、615 ページの『製品、プロファイル、およびツールのデフォルト・インストール・ディレクトリ』を参照してください。

インストール・ウィザードは、インストール・ロケーションが完全修飾されており、正しい形式であること、インストールを実行するユーザー ID によって書き込み可能であること、およびインストールを正常に実行するための十分なディスク・スペース (必要な一時スペースを含む) があることを確認します。十分なス

スペースがない場合は、インストール・プログラムを停止して、使用していないファイルを削除し、ごみ箱を空にすることでスペースを解放し、再度インストールを開始してください。

**重要:**

- インストール・ルート・ディレクトリーの値を指定しなければ、処理を続行することができません。
- **i5/OS** **i5/OS プラットフォームの場合:** パス名の中の各コンポーネントの最大長は 255 文字です。パス名の最大長は 16 MB です。
- **i5/OS** **Linux** **UNIX** **i5/OS、Linux、および UNIX プラットフォームの場合:** インストール・ルート・ディレクトリーにシンボリック・リンクを使用しないでください。シンボリック・リンクはサポートされていません。また、ディレクトリー・パスにはスペースを使用しないでください。
- **Windows** **Windows プラットフォームの場合:** Windows システムではディレクトリー名にセミコロンを使用しないでください (セミコロンは、Windows システム上のクラス・パスを構成するために使用される文字です)。ターゲット・ディレクトリーにセミコロンが含まれる場合、WebSphere Process Server は Windows プラットフォーム上に正しくインストールできません。

このステップの完了時に、「インストールの要約」パネルが表示されます。

**注:** WebSphere Application Server Network Deployment および Feature Pack for Web Services が含まれている統合インストール・パッケージ (IIP) は、WebSphere Process Server インストールの一部としてインストールされます。IIP の妥当性検査に失敗するとエラー・パネルが表示され、問題を訂正する方法についての情報が表示されます。

3. 「インストールの要約」パネルで、インストールするコンポーネント、コンポーネントが消費するスペース量、およびコンポーネントのシステム上の場所を確認してから、製品をインストールする場合は「次へ」を、指定内容を変更する場合は「戻る」を選択します。

インストール・ウィザードは、アンインストーラー・プログラムを作成し、コンポーネントがインストール中であることを示す進行状況表示パネルを表示します。

WebSphere Application Server または Web Services Feature Pack が含まれる WebSphere Application Server Network Deployment の既存のバージョンに WebSphere Process Server Client をインストールする場合、インストール・ウィザードによってそのインストール済み環境が検査され、以下のいずれかのアクションが実行されます。

- インストール済み環境のサービス・レベルが適切な場合は、インストール・ウィザードは何も行いません。
- インストール済み環境が古いサービス・レベルである場合は、インストール・ウィザードは必要なフィックスを適用してそのインストール済み環境を適切なレベルに上げ、必要な暫定修正も適用します。

**制約事項:** **i5/OS** **i5/OS プラットフォームの場合:** Web Services Feature Pack が含まれた WebSphere Application Server Network Deployment のインストール済み環境が古いサービス・レベルで、WebSphere Process Server のインストールを Windows クライアントからリモートで実行する場合は、このインストールを続行する前に、i5/OS システムでローカルのサイレント・インストールを使用して、Web Services Feature Pack が含まれた WebSphere Application Server Network Deployment を更新する必要があります。

- WebSphere Process Server のサンプル・フィーチャーを選択して、サンプル・ギャラリー・フィーチャーがインストールされていない WebSphere Application Server Network Deployment with Web Services Feature Pack のインストール済み環境へのインストールを実行すると、インストール・ウィザードにより、その WebSphere Application Server Network Deployment with Web Services Feature Pack のインストール済み環境にサンプル・ギャラリー・フィーチャーがサイレントに追加されます。

**制約事項:** **i5/OS** **i5/OS プラットフォームの場合:** WebSphere Process Server サンプル・フィーチャーを選択して、サンプル・ギャラリー・フィーチャーがインストールされていない WebSphere Application Server Network Deployment with Web Services Feature Pack のインストール済み環境にインストールするには、i5/OS システムからのローカル・サイレント・インストールにより、WebSphere Application Server Network Deployment with Web Services Feature Pack にサンプル・ギャラリー・フィーチャーをあらかじめ追加しておく必要があります。

WebSphere Application Server Network Deployment の既存のバージョンに WebSphere Process Server Client を上書きインストールすることを選択した場合は、インストール・ウィザードは最初に Web Services Feature Pack をインストールしてから、上記の 1 つ以上のアクションを実行して、インストール済み環境を適切なレベルに引き上げます。

インストールが終了すると、「インストールの結果」パネルに「成功」と表示されます。

## 重要:

インストール中にエラーが検出されると、「成功」以外のメッセージが表示される場合があります。

「部分的な成功」メッセージは、インストールは完了したがエラーが生成された場合に表示されます。インストールが部分的に成功した場合、「インストールの結果」パネルには、問題をトラブルシューティングするための正確なログ・ファイルと、そのログ・ファイルが格納されているインストール済み環境内の場所が表示されます。ログ・ファイルには、以下のファイルがあります。

- `install_error.log`
- `log.txt`

どちらのファイルも、デフォルトで以下のディレクトリに格納されます。

- **i5/OS** **Linux** **UNIX** **i5/OS、Linux、および UNIX プラットフォームの場合:** `install_root/logs/wbi/install`
- **Windows** **Windows プラットフォーム:** `install_root¥logs¥wbi¥install`

773 ページの『インストールとプロファイル作成のログ・ファイル』で、これらのログ・ファイルの説明を参照してください。

「失敗」メッセージは、インストールが完全に失敗した場合に表示されます。インストールが完全に失敗した場合、「インストールの結果」パネルには、問題のトラブルシューティングに役立つ以下のログ・ファイルの場所が表示されます。

- インストールに関連したログ・ファイルは、デフォルトで次のディレクトリに格納されます。

– **i5/OS** **Linux** **UNIX** **i5/OS、Linux、および UNIX プラットフォームの場合:** `install_root/logs/wbi/install`

– **Windows** **Windows プラットフォーム:** `install_root¥logs¥wbi¥install`

- 一時ログ・ファイルは、デフォルトで次のディレクトリに格納されます。

– **i5/OS** **Linux** **UNIX** **i5/OS、Linux、および UNIX プラットフォームの場合:** `user_home/wbilogs`

– **Windows** **Windows プラットフォームの場合:** `user_home¥wbilogs`

773 ページの『インストールとプロファイル作成のログ・ファイル』で、該当するログ・ファイルの説明を参照してください。

トラブルシューティングに役立つ情報は以下のトピックにも記載されています。

- 767 ページの『第 15 章 インストールおよび構成のトラブルシューティング』
- 777 ページの『Launchpad アプリケーションのトラブルシューティング』
- 779 ページの『サイレント・インストールのトラブルシューティング』
- 781 ページの『失敗した Ant 構成スクリプトの診断』
- **i5/OS** 780 ページの『i5/OS インストールのトラブルシューティングのヒント』

- 771 ページの『メッセージ: インストールおよびプロファイル作成』
  - 783 ページの『プロファイルの作成または拡張時の障害からのリカバリー』
4. 「終了」を選択して、インストール・ウィザードを閉じます。

## タスクの結果

「インストールの結果」パネルに「成功」と表示されている場合、WebSphere Process Server Client のインストールは成功しています。

## 次のタスク

インストール時点で最新の WebSphere Process Server フィックスパックがあれば、インストール環境に上書きインストールします。WebSphere Process Server へのフィックスパックのインストールについては、サポート・ページ (<http://www.ibm.com/software/integration/wps/support/>) の説明を参照してください。

すべての WebSphere Process Server Client ファイルが正しくインストールされているかどうか検査するには、installver\_wbi コマンドを実行します。詳しくは、194 ページの『インストール済みファイルの検査合計の検証』を参照してください。

## 既存のインストール済み環境への追加フィーチャーのインストール

この手順を使用して、インストール・ウィザード・グラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) を使用して WebSphere Process Server の既存のインストール済み環境に追加フィーチャーをインストールします。

### このタスクについて

このトピックでは、96 ページの『WebSphere Process Server の対話式インストール』の手順に従って、インストール・ウィザードを開始し、前提条件と既存の WebSphere のインストール環境を確認済みであることを前提としています。WebSphere Process Server がシステムにインストール済みであり、対話式インターフェースを使用してシステムにフィーチャーを追加するとします。WebSphere Process Server の既存のプロファイルは必要ありません。この手順を実行しても、既にインストールされているフィーチャーまたはプロファイルは変更されず、元のインストール済み環境に加えられた更新にも影響しません。「フィーチャーの選択」パネルが表示されます。

### 手順

1. 「フィーチャーの選択」パネルで、インストールするフィーチャーを選択し、「次へ」をクリックします。既にインストールされているフィーチャーは選択項目として表示されません。このパネルで選択できるフィーチャーの説明については、648 ページの『WebSphere Process Server の製品コンポーネント』を参照してください。

**ヒント:** WebSphere Process Server のサンプル・フィーチャーを追加しても、サンプルは、既存のプロファイルに自動的にデプロイされません。新しいプロファイルを作成して、サンプルをデプロイする必要があります。

「インストールの要約」パネルが表示されます。

2. 「インストールの要約」パネルで、インストールするコンポーネント、およびコンポーネントのシステム上の場所を確認し、製品をインストールする場合は「次へ」を、指定内容を変更する場合は「戻る」をクリックします。

インストール・ウィザードは、アンインストーラー・プログラムを作成し、コンポーネントがインストール中であることを示す進行状況表示パネルを表示します。

インストール・ウィザードは、基盤となる WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment with Web Services Feature Pack のインストール済み環境を検査し、以下のアクションのいずれかを実行します。

- インストール済み環境のサービス・レベルが適切な場合は、インストール・ウィザードは何も行いません。
- インストール済み環境が古いサービス・レベルである場合は、インストール・ウィザードは必要なフィックスを適用してそのインストール済み環境を適切なレベルに上げ、必要な暫定修正も適用します。

**制約事項:** i5/OS WebSphere Application Server Network Deployment with Web Services Feature Pack のインストール済み環境が古いサービス・レベルで、WebSphere Process Server のインストールが Windows クライアントからリモートで行われる場合、このインストールを続行する前に、i5/OS システムからローカル・サイレント・インストールを使用して WebSphere Application Server Network Deployment with Web Services Feature Pack を更新する必要があります。

- WebSphere Process Server サンプル・フィーチャーを選択し、サンプル・ギャラリー・フィーチャーがインストールされていない WebSphere Application Server Network Deployment with Web Services Feature Pack のインストール済み環境にインストールすると、その WebSphere Application Server Network Deployment インストール済み環境にサンプル・ギャラリー・フィーチャーがサイレントに追加されます。

**制約事項:** WebSphere Process Server サンプルの増分インストールは、WebSphere Application Server Network Deployment with Web Services Feature Pack のインストール済み環境に対してのみ実行できます (WebSphere Application Server のインストール済み環境には増分インストールできません)。したがって、WebSphere Process Server のサンプル・フィーチャーを選択し、サンプル・ギャラリー・フィーチャーがインストールされていない WebSphere Application Server のインストール済み環境に WebSphere Process Server をインストールしても、サンプル・アプリケーション・ギャラリー・フィーチャーは WebSphere Application Server のインストール済み環境にはサイレントに追加されません。

**制約事項:** i5/OS **i5/OS プラットフォームの場合:** WebSphere Process Server サンプル・フィーチャーを選択しており、サンプル・ギャラリー・フィーチャーがインストールされていない WebSphere Application Server Network Deployment with Web Services Feature Pack のインストール済み環境にインストールする場合、このインストールを続行するには、i5/OS システムからのロ

ーカル・サイレント・インストールを使用してサンプル・ギャラリー・フィーチャーを WebSphere Application Server Network Deployment with Web Services Feature Pack に追加する必要があります。

インストールが終了すると、「インストールの結果」パネルに「**成功**」と表示されます。

## 重要:

インストール中にエラーが検出されると、「成功」以外のメッセージが表示される場合があります。

「部分的な成功」メッセージは、インストールは完了したがエラーが生成された場合に表示されます。インストールが部分的に成功した場合、「インストールの結果」パネルには、問題をトラブルシューティングするための正確なログ・ファイルと、そのログ・ファイルが格納されているインストール済み環境内の場所が表示されます。ログ・ファイルには、以下のファイルがあります。

- `install_error.log`
- `log.txt`

どちらのファイルも、デフォルトで以下のディレクトリに格納されます。

- **i5/OS** **Linux** **UNIX** **i5/OS、Linux、および UNIX プラットフォームの場合:** `install_root/logs/wbi/install`
- **Windows** **Windows プラットフォーム:** `install_root/logs/wbi/install`

773 ページの『インストールとプロファイル作成のログ・ファイル』で、これらのログ・ファイルの説明を参照してください。

「失敗」メッセージは、インストールが完全に失敗した場合に表示されます。インストールが完全に失敗した場合、「インストールの結果」パネルには、問題のトラブルシューティングに役立つ以下のログ・ファイルの場所が表示されます。

- インストールに関連したログ・ファイルは、デフォルトで次のディレクトリに格納されます。

– **i5/OS** **Linux** **UNIX** **i5/OS、Linux、および UNIX プラットフォームの場合:** `install_root/logs/wbi/install`

– **Windows** **Windows プラットフォーム:** `install_root/logs/wbi/install`

- 一時ログ・ファイルは、デフォルトで次のディレクトリに格納されます。

– **i5/OS** **Linux** **UNIX** **i5/OS、Linux、および UNIX プラットフォームの場合:** `user_home/wbilogs`

– **Windows** **Windows プラットフォームの場合:** `user_home/wbilogs`

773 ページの『インストールとプロファイル作成のログ・ファイル』で、該当するログ・ファイルの説明を参照してください。

トラブルシューティングに役立つ情報は以下のトピックにも記載されています。

- 767 ページの『第 15 章 インストールおよび構成のトラブルシューティング』
- 777 ページの『Launchpad アプリケーションのトラブルシューティング』
- 779 ページの『サイレント・インストールのトラブルシューティング』
- 781 ページの『失敗した Ant 構成スクリプトの診断』
- **i5/OS** 780 ページの『i5/OS インストールのトラブルシューティングのヒント』

- 771 ページの『メッセージ: インストールおよびプロファイル作成』
  - 783 ページの『プロファイルの作成または拡張時の障害からのリカバリー』
3. 「インストールの結果」パネルで、新規のプロファイルをすぐに作成するかどうかによって、以下のいずれかのアクションを実行します。

プロファイルの状況	次のステップ
プロファイルを作成する	「プロファイル管理ツールを使用して、新しい <b>WebSphere Process Server</b> プロファイルを作成します」の横にあるチェック・ボックスを選択したまま、「終了」をクリックします。インストール・ウィザードが閉じて、プロファイル管理ツールが開始されます。このツールを使用して、新規 <b>WebSphere Process Server</b> プロファイルを作成する方法、あるいは既存のアプリケーション・サーバー・プロファイルまたは <b>WebSphere Enterprise Service Bus</b> プロファイルを <b>WebSphere Process Server</b> プロファイルに拡張する方法については、240 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの作成』および 278 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの拡張』を参照してください。
プロファイルを作成しない	「プロファイル管理ツールを使用して、新しい <b>WebSphere Process Server</b> プロファイルを作成します」の横にあるチェック・ボックスをクリアして、「終了」をクリックし、インストール・ウィザードを閉じます。  <b>重要:</b> 動作環境を保持するには、管理対象ノードを持つ <b>WebSphere Process Server</b> スタンドアロン・サーバー・プロファイル、またはデプロイメント・マネージャー・プロファイルが存在している必要があります。

## タスクの結果

「インストールの結果」パネルに「成功」と表示される場合、追加のフィーチャーのインストールは成功しています。

## 次のタスク

インストール時点で最新の **WebSphere Process Server** フィックスパックがあれば、インストール環境に上書きインストールします。 **WebSphere Process Server** へのフィックスパックのインストールについては、サポート・ページ (<http://www.ibm.com/software/integration/wps/support/>) に記載されている説明を参照してください。

プロファイルを作成しなかった場合は、240 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの作成』または 278 ページの『プロファイル管理ツールを使

用したプロファイルの拡張』を参照し、プロファイル管理ツールを使用して新規の WebSphere Process Server プロファイルを作成したり、既存のアプリケーション・サーバーまたは WebSphere Enterprise Service Bus のプロファイルを WebSphere Process Server プロファイルに拡張したりするための手順に従ってください。

WebSphere Process Server のサンプル・ギャラリーについて詳しくは、『サンプル (サンプル・ギャラリー) へのアクセス』を参照してください。

## WebSphere Process Server インストール済み環境への WebSphere Enterprise Service Bus または WebSphere Process Server Client インストール済み環境の変換

インストール・ウィザードのグラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) を使用して WebSphere Enterprise Service Bus または WebSphere Process Server Client バージョン 6.2 インストール環境を WebSphere Process Server バージョン 6.2 のインストール環境に変換するには、この手順を実行します。

### このタスクについて

このトピックでは、96 ページの『WebSphere Process Server の対話式インストール』の手順に従って、インストール・ウィザードを開始し、前提条件と既存の WebSphere のインストール環境を確認済みであることを前提としています。WebSphere Process Server を既存の WebSphere Enterprise Service Bus または WebSphere Process Server Client のインストール環境の上に対話式にインストールする必要があることも前提です。「フィーチャーの選択」パネルが表示されます。

### 手順

1. 「フィーチャーの選択」パネルで、インストールするフィーチャーを選択し、「次へ」を選択します。既にインストールされているフィーチャーは選択項目として表示されません。

このパネルで選択できるフィーチャーの説明については、648 ページの『WebSphere Process Server の製品コンポーネント』を参照してください。「インストールの要約」パネルが表示されます。

2. 「インストールの要約」パネルで、インストールするコンポーネント、およびコンポーネントのシステム上の場所を確認し、製品をインストールする場合は「次へ」を、指定内容を変更する場合は「戻る」を選択します。

インストール・ウィザードは、アンインストーラー・プログラムを作成し、コンポーネントがインストール中であることを示す進行状況表示パネルを表示します。

インストール・ウィザードは、基盤となる WebSphere Application Server または Web Services Feature Pack を含む WebSphere Application Server Network Deployment のインストール済み環境を検査し、以下のアクションのいずれかを実行します。

- インストール済み環境のサービス・レベルが適切な場合は、インストール・ウィザードは何も行いません。

- インストール済み環境が古いサービス・レベルである場合は、インストール・ウィザードは必要なフィックスを適用してそのインストール済み環境を適切なレベルに上げ、必要な暫定修正も適用します。

**制約事項:** i5/OS Web Services Feature Pack を伴う既存の WebSphere Application Server Network Deployment が以前のサービス・レベルでインストールされており、WebSphere Process Server を Windows クライアントからリモートでインストールする場合は、i5/OS システムからのローカル・サイレント・インストールにより、Web Services Feature Pack を含む WebSphere Application Server Network Deployment をあらかじめ更新しておく必要があります。

- WebSphere Process Server のサンプル・フィーチャーを選択して、サンプル・ギャラリー・フィーチャーがインストールされていない WebSphere Application Server Network Deployment with Web Services Feature Pack のインストール済み環境へのインストールを実行すると、インストール・ウィザードにより、その WebSphere Application Server Network Deployment with Web Services Feature Pack のインストール済み環境にサンプル・ギャラリー・フィーチャーがサイレントに追加されます。

**制約事項:** WebSphere Process Server のサンプル・フィーチャーは、Web Services Feature Pack を含む WebSphere Application Server Network Deployment のインストール済み環境にのみ追加インストールすることができます。WebSphere Application Server のインストール済み環境にはインストールできません。したがって、WebSphere Process Server のサンプル・フィーチャーを選択し、サンプル・ギャラリー・フィーチャーがインストールされていない WebSphere Application Server のインストール済み環境に WebSphere Process Server をインストールしても、サンプル・アプリケーション・ギャラリー・フィーチャーは WebSphere Application Server のインストール済み環境にはサイレントに追加されません。

**制約事項:** i5/OS **i5/OS プラットフォームの場合:** WebSphere Process Server サンプル・フィーチャーを選択して、サンプル・ギャラリー・フィーチャーがインストールされていない WebSphere Application Server Network Deployment with Web Services Feature Pack のインストール済み環境にインストールするには、i5/OS システムからのローカル・サイレント・インストールにより、WebSphere Application Server Network Deployment with Web Services Feature Pack にサンプル・ギャラリー・フィーチャーをあらかじめ追加しておく必要があります。

インストールが終了すると、「インストールの結果」パネルに「成功」と表示されます。

## 重要:

インストール中にエラーが検出されると、「成功」以外のメッセージが表示される場合があります。

「部分的な成功」メッセージは、インストールは完了したがエラーが生成された場合に表示されます。インストールが部分的に成功した場合、「インストールの結果」パネルには、問題をトラブルシューティングするための正確なログ・ファイルと、そのログ・ファイルが格納されているインストール済み環境内の場所が表示されます。ログ・ファイルには、以下のファイルがあります。

- `install_error.log`
- `log.txt`

どちらのファイルも、デフォルトで以下のディレクトリに格納されます。

- **i5/OS** **Linux** **UNIX** **i5/OS、Linux、および UNIX プラットフォームの場合:** `install_root/logs/wbi/install`
- **Windows** **Windows プラットフォーム:** `install_root¥logs¥wbi¥install`

773 ページの『インストールとプロファイル作成のログ・ファイル』で、これらのログ・ファイルの説明を参照してください。

「失敗」メッセージは、インストールが完全に失敗した場合に表示されます。インストールが完全に失敗した場合、「インストールの結果」パネルには、問題のトラブルシューティングに役立つ以下のログ・ファイルの場所が表示されます。

- インストールに関連したログ・ファイルは、デフォルトで次のディレクトリに格納されます。

– **i5/OS** **Linux** **UNIX** **i5/OS、Linux、および UNIX プラットフォームの場合:** `install_root/logs/wbi/install`

– **Windows** **Windows プラットフォーム:** `install_root¥logs¥wbi¥install`

- 一時ログ・ファイルは、デフォルトで次のディレクトリに格納されます。

– **i5/OS** **Linux** **UNIX** **i5/OS、Linux、および UNIX プラットフォームの場合:** `user_home/wbilogs`

– **Windows** **Windows プラットフォームの場合:** `user_home¥wbilogs`

773 ページの『インストールとプロファイル作成のログ・ファイル』で、該当するログ・ファイルの説明を参照してください。

トラブルシューティングに役立つ情報は以下のトピックにも記載されています。

- 767 ページの『第 15 章 インストールおよび構成のトラブルシューティング』
- 777 ページの『Launchpad アプリケーションのトラブルシューティング』
- 779 ページの『サイレント・インストールのトラブルシューティング』
- 781 ページの『失敗した Ant 構成スクリプトの診断』
- **i5/OS** 780 ページの『i5/OS インストールのトラブルシューティングのヒント』

- 771 ページの『メッセージ: インストールおよびプロファイル作成』
  - 783 ページの『プロファイルの作成または拡張時の障害からのリカバリー』
3. 「終了」をクリックして、インストール・ウィザードを閉じます。

## タスクの結果

「インストールの結果」パネルに「成功」と表示された場合は、製品が正常にインストールされています。

## 次のタスク

インストール時点で最新の WebSphere Process Server フィックスパックがあれば、インストール環境に上書きインストールします。WebSphere Process Server へのフィックスパックのインストールについては、サポート・ページ (<http://www.ibm.com/software/integration/wps/support/>) の説明を参照してください。

プロファイルを作成しなかった場合は、240 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの作成』または 278 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの拡張』を参照し、プロファイル管理ツールを使用して新規の WebSphere Process Server プロファイルを作成したり、既存のアプリケーション・サーバーまたは WebSphere Enterprise Service Bus のプロファイルを WebSphere Process Server プロファイルに拡張したりするための手順に従ってください。

次に、ファースト・ステップ・コンソールから作成するサーバーまたはデプロイメント・マネージャーを開始すると、インストールした環境が正常に作動していることを確認できます。詳しくは、165 ページの『ファースト・ステップ・コンソールのオプション』を参照してください。

---

## Linux、UNIX、および Windows へのサイレント・インストール

WebSphere Process Server のインストールにグラフィカル・ユーザー・インターフェースを使用しない場合は、応答ファイルというファイルを使用して、分散システムでサイレント・インストール (バックグラウンド・インストール) を実行できます。サイレント・インストールでは、グラフィカル・ユーザー・インターフェースまたは「ウィザード」は表示されず、インストール・プログラムが指定されたファイルからすべての応答を読み取ります。応答ファイルの例として `responsefile.wbis.txt` が付属しており、デフォルト値が設定されています。この応答ファイルは、WebSphere Process Server のサイレント・インストールに使用できます。

応答ファイル (オプション・ファイルとも呼ばれる) は、コマンド行オプションをインストール・プログラムに渡すために使用されます。

### 始める前に

- 38 ページの『WebSphere Process Server のインストールに関する前提条件』で、製品をインストールするための前提条件のリストを確認してください。
- セキュリティーおよびロール・ベースの許可を有効にする場合は、必ず管理者としてログインしてください。サイレント・インストール中には、デフォルトでセキュリティが有効になります。セキュリティを無効にするには、応答ファイルの `PROF_enableAdminSecurity` 値を "false" に変更します。

**重要:** インストール・パスに括弧を使用することはできません。インストール・パスに括弧が含まれている既存の WebSphere Application Server インストール済み環境上にインストールすることはできません。

**注:** 標準的インストール中にスタンドアロン・サーバー・プロファイルの作成を選択し、セキュリティーを有効にした場合、インストーラーによりそのプロファイルにサンプルの Business Process Choreographer 構成が作成されます。セキュリティーを有効にしない場合は、このサンプルの構成は作成されません。スタンドアロン・サーバーをデプロイメント・マネージャーに統合する場合は、事前にこのサンプル構成の削除が必要となります。

**Vista** **Windows Vista™ および Windows 2008 オペレーティング・システム:** これらのオペレーティング・システムが稼働しているマシンで WebSphere Process Server バージョン 6.2 のサイレント・インストールを実行するには、管理者権限が必要です。標準のユーザー権限を使用してサイレント・インストールを実行した場合、管理者権限への変更を求めるプロンプトが表示されます。以下の手順に従ってコマンド・プロンプト・ウィンドウからサイレント・インストールを実行すると、このプロンプトは表示されません。

- コマンド・プロンプトのショートカットを右クリックします。
- 「**管理者として実行 (Run As Administrator)**」をクリックします。

**重要:** **AIX** **AIX プラットフォームの場合:** AIX でのサイレント・インストール用のファイルを準備する場合は、UNIX の行終了文字 (0x0D0A) を応答ファイルの各行の末尾に指定します。ファイルを作成する最も安全な方法は、ターゲット・オペレーティング・システム上でファイルを編集することです。

コマンド行からのインストールについて詳しくは、WebSphere Process Server 技術情報の『WebSphere Process Server のサイレント・インストールに関する追加情報 (Additional Information for Silent Installation of WebSphere Process Server)』を参照してください。

## 手順

応答ファイルを使用してサイレント・インストールを行うには、以下のステップを実行します。

1. オペレーティング・システムにログオンします。
2. **Linux** **UNIX** **Linux および UNIX プラットフォームの場合:** ドライブに DVD を挿入後、一部の Linux および UNIX オペレーティング・システムではドライブをマウントする必要があります。
3. サンプル応答ファイル responsefile.wbis.txt を、WebSphere Process Server V6.2 DVD というラベルの付いたディスクの WBI ディレクトリーからシステム上の見つけやすい場所にコピーし、myoptionsfile.txt などの新しい名前を付けて保存します。
4. ターゲット・オペレーティング・システム上で、選択したフラット・ファイル・エディターを使用してファイルを編集し、ご使用のシステム用のパラメーターを

使用してカスタマイズします。応答ファイル内の指示を読み、今回のサイレント・インストールのために設定するすべてのオプションに適切な値を選択します。

応答ファイル内のすべてのパラメーターを変更できますが、以下のオプションと値に注意してください。

**重要:** 必ず、ファイル内のご使用条件への同意に関する記述において、値を "true" に変更してください。値を "false" のままにすると、インストールが失敗します。

例えば、ご使用条件への同意として `-OPT silentInstallLicenseAcceptance="true"` にしてください。

- `wpsInstallType` オプションの値を変更して、以下のいずれかのインストール・タイプを指定します。
  - "typical" - WebSphere Process Server をフルインストールします。このインストールでは、スタンドアロン・サーバー、デプロイメント・マネージャー、カスタムの初期 WebSphere Process Server 環境を定義できます (環境を定義しないことも選択できます)。

デフォルトでは、`responsefile.wbis.txt` のインストール・タイプ設定は標準的インストール、つまり `-OPT wpsInstallType="typical"` です。

- "client" - WebSphere Process Server の部分インストールです。同一セル内でプロセス・サーバーと対話するクライアント・アプリケーションを実行できます。

運用できる WebSphere Process Server クライアント環境を作成するには、オプション機能 (サンプルなど) を選択したり、インストールの一部としてプロファイルを作成したりしないでください。これを行うと、インストールが失敗する可能性があります。クライアント・インストールを作成する方法の例については、サンプル応答ファイルを参照してください。

- "ndGuided" - WebSphere Process Server のフルインストールです。デプロイメント環境をセットアップしたり、デプロイメント環境パターンに基づいてデプロイメント・マネージャーを作成したり、前に作成したデプロイメント環境を定義したりするためのガイドが表示されます。
- 標準的インストールの場合は、操作可能な WebSphere Process Server 環境を作成するためにプロファイルが必要です。インストール処理中にプロファイルを作成するように応答ファイルで値を指定することにより、プロファイルをサイレントに作成できます。オプション `profileType` の値を以下のいずれかの値に変更します。
  - `deploymentManager` - デプロイメント・マネージャーでプロファイルを作成します。以下に例を示します。  
`-OPT profileType="deploymentManager"`
  - `standAlone` - スタンドアロン・サーバーでプロファイルを作成します。以下に例を示します。  
`-OPT profileType="standAlone"`

- custom - 空のノードでプロファイルを作成します。この空のノードは、インストール後に構成できます。

```
-OPT profileType="custom"
```

- none - インストール中にプロファイルを作成しません。この値は、サイレント・インストール・プロセス中にプロファイルを作成しない場合に使用します。インストール後にプロファイル管理ツールを実行してプロファイルを作成する必要があります。

```
-OPT profileType="none"
```

responsefile.wbis.txt ファイル内にあるプロファイル関連のすべてのオプションは、PROF\_ という文字列で始まります。(オプションは manageprofiles コマンドのパラメーターと同じですが、応答ファイル内では、プロファイル・オプションであることを示すために接頭部 PROF\_ が先頭に付加されます。)  
profileType の指定によっては、これらのプロファイル・オプションを変更できます。詳しくは、応答ファイルの説明を参照してください。

注: 応答ファイルを使用して、既存のインストールのための新規プロファイルを作成する場合は、応答ファイルの -OPT installType="installNew" セクションをコメント化し、応答ファイルの -OPT createProfile セクションからコメントを外し、オプション -createProfile の値を true に変更します。以下に例を示します。

```
#-OPT installType="installNew"  
-OPT createProfile="true"
```

注: プロファイルをサイレントに作成する別の方法については、246 ページの『manageprofiles コマンドを使用したプロファイルの作成』を参照してください。

- デプロイメント環境のインストール (-OPT wpsInstallType="ndGuided") を指定した場合は、追加のオプションも指定して、インストールを定義する必要があります。ndGuidedInstallType オプションの値を以下のいずれかの値に変更します。

- deploymentManager - デプロイメント・マネージャーを作成するためのガイドを表示します。このガイドでは、選択したパターンに基づく新しいデプロイメント環境を作成します。以下に例を示します。

```
-OPT ndGuidedInstallType="deploymentManager"
```

deploymentManager の値を使用する場合は、応答ファイルの他の値も変更して、サイレント・インストール中のデプロイメント・マネージャー・サーバーの作成を詳細に定義する必要があります。

- additionalRoles - 既に定義したデプロイメント環境用のカスタム・プロファイルを作成するためのガイドを表示します。そのデプロイメント環境で稼働しているデプロイメント・マネージャーに接続できる必要があります。以下に例を示します。

```
-OPT ndGuidedInstallType="additionalRoles"
```

デプロイメント環境について詳しくは、『WebSphere Process Serverの計画』およびデプロイメント環境の実装を参照してください。

注: どの時点でも WBI ディレクトリーの *WebSphere Process Server V6.2* の DVD に戻り、応答ファイル例 `responsefile.wbis.txt` を参照してデフォルトのオプションと値を確認することができます。

5. コピーした応答ファイルに変更内容を保存します。
6. コマンドを実行し、カスタム応答ファイルを使用して *WebSphere Process Server* をインストールします。ここに示すコマンドでは、応答ファイルを一時ディレクトリーにコピーし、`myoptions.txt` に名前変更した後にファイルをカスタマイズしたと想定します。

製品 DVD から以下のコマンドを実行するか、パスポート・アドバンテージの電子イメージの内容を一時的に保存した場所から以下のコマンドを実行します。

- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合: `install -options /tmp/WBI/myoptions.txt -silent`
- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: `install.exe -options "C:%temp%WBI%myoptions.txt" -silent`

## 次の作業

`log.txt` のログ・ファイルを調べて、インストールが正常に終了していることを確認します。ログ・ファイルの場所は以下のとおりです。ここで、`install_root` は *WebSphere Process Server* または *WebSphere Process Server Client* インストールの場所を表します。

- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:  
`install_root/logs/wbi/install/log.txt`
- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: `install_root%logs%wbi%install%log.txt`

このログ・ファイルの最後の行に `INSTCONFSUCCESS` というストリングが含まれている場合、インストールは正常に終了しています。

`INSTCONFPARTIALSUCCESS`、`INSTCONFFAILED` などの別の用語がファイル内の別の行に (あるいは最後の行にも) 出現する場合がありますが、`INSTCONFSUCCESS` が最後の行に含まれていれば、インストールは正常に終了しています。

ストリング `INSTCONFPARTIALSUCCESS` または `INSTCONFFAILED` がファイルの最後の行に出現し、`INSTCONFSUCCESS` が含まれていない場合、インストール中に問題が検出されています。`INSTCONFPARTIALSUCCESS` は、インストールは完了したがエラーが生成されたことを示します。`INSTCONFFAILED` は、インストールが完全に失敗したことを示します。

インストールが正常終了しなかった場合は、`install_error.log` ファイルを調べて原因を判別してください。このログ・ファイルは、デフォルトで以下の場所にあります。

- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:  
`install_root/logs/wbi/install/install_error.log`
- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合:  
`install_root%logs%wbi%install%install_error.log`

インストールが完全に失敗した場合、以下のディレクトリーにデフォルトで存在するあらゆる一時的なログ・ファイルも調べてください。

- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:  
`user_home/wbilogs`
- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: `user_home\wbilogs`

すべてのログ・ファイルの説明については、773 ページの『インストールとプロファイル作成のログ・ファイル』を参照してください。

トラブルシューティングに役立つ情報は以下のトピックにも記載されています。

- 767 ページの『第 15 章 インストールおよび構成のトラブルシューティング』
- 777 ページの『Launchpad アプリケーションのトラブルシューティング』
- 779 ページの『サイレント・インストールのトラブルシューティング』
- 781 ページの『失敗した Ant 構成スクリプトの診断』
- **i5/OS** 780 ページの『i5/OS インストールのトラブルシューティングのヒント』
- 771 ページの『メッセージ: インストールおよびプロファイル作成』
- 783 ページの『プロファイルの作成または拡張時の障害からのリカバリー』

スタンドアロン・プロファイルまたはデプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成を選択した場合は、インストールが正常に終了したら、ファースト・ステップ・コンソールからサーバーまたはデプロイメント・マネージャーを始動し、インストールした環境が作動することを確認します。詳細については、『ファースト・ステップ・コンソールのオプション』を参照してください。インストール検査ツールを使用してインストールの検査を行うこともできます。詳しくは、『インストールの検査』を参照してください。

---

## i5/OS での System i サーバーからのサイレント・インストール

WebSphere Process Server のインストールにグラフィカル・ユーザー・インターフェースを使用しない場合は、応答ファイルというファイルを使用して System i サーバーでサイレント・インストール (バックグラウンド・インストール) を実行できます。サイレント・インストールでは、グラフィカル・ユーザー・インターフェースまたは「ウィザード」は表示されず、インストール・プログラムが指定されたファイルからすべての応答を読み取ります。応答ファイルの例として `responsefile.wbis.txt` が付属しており、デフォルト値が設定されています。この応答ファイルは、WebSphere Process Server のサイレント・インストールに使用できます。

### 始める前に

この手順を実行する前に、インストールの準備を行ってください。詳しくは、38 ページの『WebSphere Process Server のインストールに関する前提条件』および 53 ページの『i5/OS システムのインストール準備』を参照してください。

WebSphere Process Server をインストールする前に、ユーザー・プロファイルに \*ALLOBJ と \*SECADM の特殊権限が指定されていることを確認してください。

注: インストール・パスに括弧を含めることはできません。既存の WebSphere Application Server のインストール・パスに括弧が含まれている場合は、その既存のインストール済み環境に上書きしてインストールすることはできません。

## このタスクについて

WebSphere Process Server は、Qshell から **INSTALL** コマンドを使用してインストールできます。また、**RUNJVA** コマンドを使用して、インストール・ウィザードを起動することもできます。

応答ファイル (オプション・ファイルともいいます) は、コマンド行オプションをインストール・プログラムまたはアンインストール・プログラムに受け渡すために使用されます。

### 手順

1. \*ALLOBJ と \*SECADM の特殊権限を持つユーザー・プロファイルで System i サーバーにサインオンします。
2. WebSphere Process Server for i5/OS のディスクを、System i サーバーのディスク・ドライブにセットします。

WebSphere Process Server バージョン 6.2 for Windows ディスクなど、i5/OS 以外のオペレーティング・システム用のディスクは使用しないでください。

3. Copy (CPY) コマンドを使用して、ディスクから responsefile.wbis.txt ファイルのコピーを作成します。

以下に例を示します。

```
CPY OBJ('/QOPT/WEBSPPHERE') TOOBJ('/my_dir/new_dir') SUBTREE(*ALL) REPLACE(*YES)
```

QOPT は、ディスクのマウント・ポイントです。

WEBSPPHERE は、ディスク・ボリュームのラベルです。

/WBIFILES は、ディスク上の製品ディレクトリーです。これは後の手順で参照されません。

4. /WBIFILES ディレクトリーにある「IBM プログラムのご使用条件」をまだ読んでいない場合は、お読みください。

ご使用条件に同意される場合は、インストール・プロセスを続行します。

5. /MYDIR/responsefile.base.txt ファイルを編集します。
  - a. -OPT silentInstallLicenseAcceptance の値を false から true に変更します。

値 true は、ご使用条件を読んだ上で同意することを意味します。この変更は、インストールを実行するために必要です。

- b. デフォルトでは、PROF\_enableAdminSecurity オプションは true に設定されています。インストール時に作成されるデフォルト・プロファイルの管理セキュリティを有効にする場合は、PROF\_adminUserName オプションと PROF\_adminPassword オプションの値を指定する必要があります。

ユーザー ID とパスワードは、システム・ユーザーの ID とパスワード、または LDAP のユーザー ID とパスワードである必要はありません。指定した

ID とパスワードのペアは、ユーザー・レジストリーに保管され、デフォルト・プロファイルの管理セキュリティで使われます。ユーザー ID とパスワードを書き留めておいてください。

デフォルト・プロファイルの管理セキュリティを有効にしない場合は、`PROF_enableAdminSecurity` オプションの値を `true` から `false` に変更します。

**注:** Samples フィーチャーは、この製品ではデフォルトでインストールされません。これらのサンプルを使用する場合は、以下のアクションを実行してください。

- `-OPT addFeature` オプションに `sampleSelected` を指定します。
- セキュリティを有効にする場合は、`-OPT samplesPassword` オプションの値を指定します。

6. WebSphere Process Server for i5/OS のインストール・プログラムを起動します。

WebSphere Process Server for i5/OS のインストール・プログラムを起動するには、Qshell から **INSTALL** コマンドを実行するか、または CL コマンド行から **RUNJVA** コマンドを実行します。

下の例のコマンドの `path/responsefile` は、編集した `responsefile.wbis.txt` ファイルの完全修飾パスを表します。

- Qshell から **INSTALL** コマンドを実行します。
  - a. CL コマンド行で、**STRQSH** コマンドを発行して、Qshell コマンド・シェルを開始します。
  - b. `/WBI` ディレクトリーから **INSTALL** コマンドを発行して、インストール・プログラムを開始します。

```
INSTALL -options path/responsefile -silent
```

**重要:** インストールが完了するまで、Qshell セッションを終了 (PF3) しないでください。この終了を行うと、インストールが途中で停止する場合があります。

- 次のように、CL コマンド行から **RUNJVA** コマンドを発行します。

CL コマンド行で、`/my_dir/new_dir/WBI/install` ディレクトリーに移動してから、以下のコマンドを発行します。RUNJVA コマンドを 1 行で入力します。コマンドの形式を分かりやすくするために複数の行に分けて示します。

```
RUNJVA
CLASS(run) PARM('-options' 'path/responsefile')
CLASSPATH('setup.jar')
PROP(
  ('Xbootclasspath/p' '../JDK/jre.pak/repository/package.java.jre/
  java/jre/lib/xml.jar')
  (java.version 1.5)
  (is.debug 1)
)
```

## タスクの結果

インストールを起動すると、インストール・プロセスの進行を表すメッセージが表示されます。セットアップ・プログラムが完了したら、**F3** を押して終了します。

## 次のタスク

---

# Windows ワークステーションのコマンド行から i5/OS をサイレント・インストールする

インストールのもう 1 つの方法として、WebSphere Process Server for i5/OS を Windows ワークステーションのコマンド行からインストールする方法があります。

### 始める前に

この手順を実行する前に、インストールの準備を行ってください。詳しくは、38 ページの『WebSphere Process Server のインストールに関する前提条件』および 53 ページの『i5/OS システムのインストール準備』を参照してください。

**注:** インストール・パスに括弧を使用することはできません。インストール・パスに括弧が含まれている既存の WebSphere Application Server インストール済み環境上にインストールすることはできません。

### このタスクについて

リモート・サイレント・モードを使用すると、リモートの Windows ワークステーションから 1 つのコマンドを実行するだけでこの製品をインストールすることができます。インストール・オプションは応答ファイル内に指定する必要があります。インストール中はインストール・オプションを変更することはできません。パラメーターとデフォルト値については、コマンド行インストール用の `responsefile.wbis.txt` に説明されています。

### 手順

1. ご使用の System i サーバー上で TCP/IP が開始されていない場合は、制御言語 (CL) コマンド行に TCP/IP の開始 (STRTCP) コマンドを入力します。
2. ホスト・サーバーのジョブが、使用する System i サーバー上で開始されていることを確認します。ホスト・サーバーのジョブにより、インストール・コードが i5/OS 上で実行可能になります。

CL コマンド行で、次のコマンドを入力します。

```
STRHOSTSVR SERVER(*ALL)
```

3. ユーザー・プロファイルに \*ALLOBJ と \*SECADM の特殊権限が指定されていることを確認してください。
4. WebSphere Process Server for i5/OS のディスクを、Windows ワークステーションのディスク・ドライブにセットします。自動実行機能により GUI が起動されます。GUI を終了するには、「取り消し」をクリックします。

WebSphere Process Server for Windows ディスクなど、i5/OS 以外のオペレーティング・システム用のディスクは使用しないでください。

5. Windows ワークステーションでコマンド・プロンプトを開きます。
6. ディスク・ドライブに切り替えて、Windows ワークステーションのディスク・ドライブにアクセスします。例えば、`e:` と入力します。この場合、`e:` は DVD ドライブに割り当てられている文字です。

7. WBI ディレクトリーに移動します。例えば、cd WBI と入力します。
8. 応答ファイルをディスク・ディレクトリーから Windows ワークステーション上のディレクトリー (C:¥temp ディレクトリーなど) にコピーします。

以下に例を示します。

```
copy responsefile.wbis.txt C:¥temp¥RESPONSEFILE
```

9. まだお読みでない場合、¥LICENSES ディレクトリーにある「IBM プログラムのご使用条件」をお読みください。

ご使用条件に同意される場合は、インストール・プロセスを続行します。

10. RESPONSEFILE ファイルを編集します。
  - a. -OPT silentInstallLicenseAcceptance の値を false から true に変更します。

値 true は、ご使用条件を読んだ上で同意することを意味します。この変更は、インストールを実行するために必要です。

- b. デフォルトでは、PROF\_enableAdminSecurity オプションは true に設定されています。インストール時に作成されるデフォルト・プロファイルの管理セキュリティを有効にする場合は、PROF\_adminUserName オプションと PROF\_adminPassword オプションの値を指定する必要があります。

ユーザー ID とパスワードは、システム・ユーザーの ID とパスワード、または LDAP のユーザー ID とパスワードである必要はありません。指定した ID とパスワードのペアは、ユーザー・レジストリーに保管され、デフォルト・プロファイルの管理セキュリティに使用されます。WebSphere ローカル・セキュリティを指定する場合は、ユーザー ID に有効なユーザー・プロファイルを使用する必要があります。LDAP レジストリーを指定する場合は、そのレジストリーのメンバーのユーザー ID を使用する必要があります。ユーザー ID とパスワードを書き留めておいてください。

デフォルト・プロファイルの管理セキュリティを有効にしない場合は、PROF\_enableAdminSecurity オプションの値を true から false に変更します。

**注:** Samples フィーチャーは、この製品ではデフォルトでインストールされません。これらのサンプルを使用する場合は、以下のアクションを実行してください。

- -OPT addFeature オプションに sampleSelected を指定します。
- セキュリティを有効にする場合は、-OPT samplesPassword オプションの値を指定します。

11. install.exe コマンドを実行します。インストール時に使用する応答ファイルを指定します。このコマンドの実行時に、i5/OS システム名および有効な i5/OS ユーザー・プロファイルとパスワードを指定します。

このステップでは、ユーザー・プロファイルに \*ALLOBJ と \*SECADM の特殊権限が必要です。

```
install.exe system_name user_name password -options response_file -silent
```

*system\_name* 変数は、System i サーバーの名前です。 *user\_name* 変数と *password* 変数は、ユーザー・プロファイルのログイン資格情報で、 *response\_file* 変数は、応答ファイルの名前です。

このコマンドで使用されるパスワードは、コマンド行に平文で表示されます。以下に例を示します。

```
install.exe MYISERIES myUserName myPassword  
-options C:%temp%RESPONSEFILE -silent
```

このコマンドを発行すると、インストール・プロセスの実行中は制御がコマンド・プロンプトに戻ります。

## タスクの結果

この手順によって、Windows ワークステーションのコマンド行から WebSphere Process Server がインストールされます。

## 次のタスク

log.txt のログ・ファイルを調べて、インストールが正常に終了していることを確認します。ログ・ファイルは、System i サーバーのディレクトリー *install\_root/logs/wbi/install/log.txt* にあります。ここで、*install\_root* は WebSphere Process Server または WebSphere Process Server Client インストールの場所を表します。

このログ・ファイルの最後の行に INSTCONFSUCCESS というストリングが含まれている場合、インストールは正常に終了しています。

INSTCONFPARTIALSUCCESS、INSTCONFFAILED などの別の用語がファイル内の別の行に (あるいは最後の行にも) 出現する場合がありますが、INSTCONFSUCCESS が最後の行に含まれていれば、インストールは正常に終了しています。

ストリング INSTCONFPARTIALSUCCESS または INSTCONFFAILED がファイルの最後の行に出現し、INSTCONFSUCCESS が含まれていない場合、インストール中に問題が検出されています。INSTCONFPARTIALSUCCESS は、インストールは完了したがエラーが生成されたことを示します。INSTCONFFAILED は、インストールが完全に失敗したことを示します。

インストールが正常終了しなかった場合は、*install\_error.log* ファイルを調べて原因を判別してください。このログ・ファイルは、デフォルトで System i サーバーの *install\_root/logs/wbi/install/install\_error.log* ディレクトリーにあります。

インストールが完全に失敗した場合は、デフォルトでディレクトリー *user\_home/wbilogs* に存在する一時ログ・ファイルも調べてください。

すべてのログ・ファイルの説明については、773 ページの『インストールとプロファイル作成のログ・ファイル』を参照してください。

トラブルシューティングに役立つ情報は以下のトピックにも記載されています。

- 767 ページの『第 15 章 インストールおよび構成のトラブルシューティング』
- 777 ページの『Launchpad アプリケーションのトラブルシューティング』

- 779 ページの『サイレント・インストールのトラブルシューティング』
- 781 ページの『失敗した Ant 構成スクリプトの診断』
- **i5/OS** 780 ページの『i5/OS インストールのトラブルシューティングのヒント』
- 771 ページの『メッセージ: インストールおよびプロファイル作成』
- 783 ページの『プロファイルの作成または拡張時の障害からのリカバリー』

---

## 基礎となる統合インストール・パッケージの置換

IBM 提供の統合インストール・パッケージ (IIP) をユーザー定義の IIP で置き換えることができます。IIP には、WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 6.1 および Feature Pack for Web Services が組み込まれています。

### このタスクについて

IIP は、IBM WebSphere Installation Factory で作成された、集約されたインストール・パッケージで、1 つ以上の一般出荷可能なインストール・パッケージ、1 つ以上のカスタマイズ・インストール・パッケージ (CIP)、およびその他のユーザー指定ファイルとディレクトリーをこれに組み込むことができます。IIP は、これらのコントリビューションを事前定義された順序で順番に、また組織的に呼び出して、エンドツーエンド・インストールを実行します。

WebSphere Application Server V6.1 Feature Pack for Web Services は、WebSphere Application Server V6.1 の機能を拡張するもので、他のベンダーとのインターオペラビリティに重点を置いて Web サービス・メッセージの送信を非同期かつ信頼性の高い方法でセキュアに実行できるようにし、Java API for XML Web Services (JAX-WS) 2.0 プログラミング・モデルをサポートします。

IBM 提供の IIP は、WebSphere Process Server V6.2 DVD のインストール・イメージ内にあります。お客様独自の IIP を作成して、IBM 提供の IIP を置き換えることもできます。

IBM 提供の IIP を置き換えるには、以下の手順を実行します。

#### 手順

1. 基礎となる IIP を置き換えるための IIP を生成します。

生成する IIP は、以下の要件を満たしている必要があります。

- WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 6.1 および Feature Pack for Web Services が組み込まれていること。
- 保守レベルが WebSphere Process Server インストーラー (CIP の場合もある) で必要とされるレベル以上であること。
- 基本製品として WebSphere Application Server Network Deployment が組み込まれており、唯一の追加製品が Feature Pack for Web Services であること。

IIP の生成方法については、717 ページの『統合インストール・パッケージの開発およびインストール』を参照してください。

2. WebSphere Process Server V6.2 DVD で提供されているインストール・ディレクトリーおよびファイルを <user\_root\_dir> にコピーします。ここで、<user\_root\_dir> は、WebSphere Process Server V6.2 DVD のディレクトリー構造をエミュレートするユーザー指定のディレクトリーです。/iip フォルダの内容を、ユーザーが作成した IIP で置き換えます。以下のディレクトリーが、同一のルート・ディレクトリー・レベルになっていることを確認します。

```
<user_root_dir>
/iip
/JDK
/WBI
```

注: WBI ディレクトリーのインストール・ファイルは、CIP か DVD イメージのインストーラーです。CIP の場合は、追加のフォルダ custom.wbi をコピーする必要があります。

3. Launchpad を開始します。Launchpad から:
  - a. 「WebSphere Process Server のインストール」をクリックします。
  - b. 「WebSphere Process Server for Multiplatforms のインストール・ウィザードの起動」をクリックします。
4. 96 ページの『WebSphere Process Server の対話式インストール』の手順に従って、対話式インストールを実行します。

## 次のタスク

インストールが完了すると、「インストールの結果」パネルに WebSphere Application Server Network Deployment および Feature Pack for Web Services が正常にインストールされたことが示されます。インストール中に問題が発生すると、エラー・メッセージと問題を解決する方法に関する情報が表示されます。

---

## i5/OS でのスクリプトの実行

i5/OS プラットフォームでは、スクリプトは *Qshell* コマンド環境で実行します。

### 始める前に

多くの場合、i5/OS にあらかじめ組み込まれているスクリプトを実行するには、ユーザー・プロファイルに \*ALLOBJ 特殊権限または明示的な権限が定義されている必要があります。これは、UNIX プラットフォームの root 権限に似た権限です。

### このタスクについて

スクリプトを i5/OS で実行するには、以下のステップを実行します。

#### 手順

1. i5/OS コマンド行に移動します。
2. コマンド行で Qshell を開始します。STRQSH と入力します。
3. Qshell が起動したら、適切なスクリプトが含まれているディレクトリーに移動して、スクリプトを実行します。例えば、cd /QIBM/ProdData/WebSphere/ProcServer/bin と指定してディレクトリーを変更します。

## ファースト・ステップ・コンソールの開始

WebSphere Process Server をインストールしたら、ファースト・ステップ・コンソールを使用して、製品ツールの開始、製品資料へのアクセス、個別プロファイルに関連するサーバーおよび管理コンソールなどのエレメントへの指示を行います。汎用バージョンのコンソールと、インストール内のプロファイルごとのバージョンが使用可能です。

各コンソールのオプションは、インストールした機能と、当該オペレーティング・システムで使用可能なエレメントに応じて動的に表示されます。オプションには、インストールの検証、サーバーまたはデプロイメント・マネージャーの開始と停止、管理コンソールへのアクセス、プロファイル管理ツールの開始、サンプル・ギャラリーへのアクセス、製品資料へのアクセス、マイグレーション・ウィザードの開始などがあります。ファースト・ステップ・コンソールの開始方法は、汎用バージョンかプロファイル固有バージョンかに応じて異なります。

以下のセクションでは、ファースト・ステップ・コンソールの開始手順を、そのバージョンおよびシステムで使用されているプラットフォームごとに詳しく説明します。

- 163 ページの『汎用バージョンのファースト・ステップ・コンソールの開始』
- 163 ページの『i5/OS プラットフォームのプロファイルに関連付けられたファースト・ステップ・コンソールの開始』
- 164 ページの『Linux、UNIX、および Windows プラットフォームのプロファイルに関連付けられたファースト・ステップ・コンソールの開始』

### 制約事項:

- **i5/OS** **i5/OS プラットフォームの場合:** i5/OS バージョンのファースト・ステップ・コンソールには、マイグレーション・ウィザード・オプションがありません。
- WebSphere Process Server Client には関連するファースト・ステップ・コンソールがありません。基盤となる WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment のインストール済み環境には、独自のファースト・ステップ・コンソールが用意されています。
- **Windows** **i5/OS** **Windows プラットフォームの場合:** デフォルトのブラウザとして Mozilla 2.x を使用し、そのインストール・ロケーションのパス名にスペースが含まれている場合、ファースト・ステップ・コンソールが起動しないことがあります。この問題は、i5/OS プラットフォームにインストールされているプロファイルに関連したファースト・ステップ・コンソールを Windows で開始する場合にも発生する可能性があります。この問題を解消するには、以下のいずれかのアクションを実行してください。
  - Mozilla を、パス名にスペースを含まないロケーションにインストールする。
  - レジストリー・キーを変更してスペースを削除する。
  - 一時的なデフォルト・ブラウザとして Internet Explorer を指定してから、Mozilla をデフォルト・ブラウザに設定する。この操作により、レジストリー・キーからスペースが自動的に削除されます。

## 汎用バージョンのファースト・ステップ・コンソールの開始

以下のステップを実行し、汎用バージョンのファースト・ステップ・コンソールを開始します。i5/OS システムはグラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) を備えていないため、このプラットフォームのファースト・ステップ・コンソールは Windows ワークステーションから開始する必要があります。

1. コマンド・ウィンドウをオープンします。
2. 以下のディレクトリーに移動します。

- **i5/OS** i5/OS プラットフォームの場合:

`first_steps_location%firststeps%wbi%noprofile`

- **Linux** **UNIX** Linux および UNIX プラットフォームの場合:

`install_root/firststeps/wbi`

- **Windows** Windows プラットフォームの場合: `install_root%firststeps%wbi`

変数 `install_root` は、Linux、UNIX、および Windows システム上での

WebSphere Process Server のインストール・ロケーションを表し、

`first_steps_location` は、Windows ワークステーションでの i5/OS ファースト・ステップ・コンソールのロケーションを表します。 `first_steps_location` は以下のいずれかのロケーションに含まれます。

- `install_image_location%WBI%iSeries`。この `install_image_location` は、ディスク・メディアのパスまたは パスポート・アドバンテージ・イメージのロケーションを表します。
  - `pmt_client_installation`。デフォルトは `C:%Program Files%IBM%WebSphere%PMTClient` です。
3. プラットフォームに応じ、`firststeps` または `run` コマンドを以下のようにして発行し、コンソールを開始します。

- **i5/OS** i5/OS プラットフォームの場合: `run.bat`

- **Linux** **UNIX** Linux および UNIX プラットフォームの場合:

`./firststeps.sh`

- **Windows** Windows プラットフォームの場合: `firststeps.bat`

ファースト・パス:

**Windows** Windows プラットフォームの場合: 「スタート」 → 「プログラム」 → 「IBM WebSphere」 → 「Process Server 6.2」 → 「ファースト・ステップ」を選択して、Windows プラットフォームで汎用バージョンのコンソールを開始することもできます。

## i5/OS プラットフォームのプロファイルに関連付けられたファースト・ステップ・コンソールの開始

**i5/OS** 以下のタスクを実行することにより、プロファイルに関連付けられたファースト・ステップ・コンソールを起動することができます。i5/OS システムはグラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) を備えていないため、このプラットフォームのファースト・ステップ・コンソールは Windows ワークステーション

から開始する必要があります。firststeps.bat コマンドを使用して、ファースト・ステップ・コンソールを起動します。このコマンドは、以下のいずれかのロケーションに格納されています。

- インストール・メディア (インストール・ディスクまたはサーバーにダウンロードされたインストール・イメージのいずれか)の場合:

```
install_image_location¥WBI¥iSeries¥firststeps
```

- i5/OS のプロファイルに関連付けられたクライアントの場合:

```
pmt_client_installation¥PMT¥firststeps (pmt_client_installation は、デフォルトで C:¥ProgramFiles¥IBM¥WebSphere¥PMTClient)。
```

ターゲット i5/OS サーバーにログオンするためのパネルが表示されます。プロファイルが存在する i5/OS サーバーの名前、ユーザー名、パスワードを入力して「OK」をクリックします。ターゲット i5/OS サーバーのインストールと構成の内容によって、以下のいずれかの状態になります。

1. WebSphere Process Server がターゲット i5/OS サーバーにインストールされていない場合、エラー・メッセージが表示されます。
2. WebSphere Process Server がターゲット i5/OS サーバーにインストールされているがプロファイルが存在しない場合、エラー・メッセージが表示されます。
3. ターゲット i5/OS サーバーに複数の WebSphere Process Server がインストールされているが、サーバー上で構成されているプロファイルが 1 つしかない場合、ファースト・ステップ・コンソールはこのプロファイルに基づいて起動します。
4. WebSphere Process Server が 1 つだけインストールされていて、複数のプロファイルが i5/OS サーバーで構成されている場合、プロファイルの選択パネルが開きます。任意のプロファイルを選択して「OK」をクリックすると、そのプロファイルに基づいてファースト・ステップ・コンソールが起動します。
5. ターゲット i5/OS サーバーに複数の WebSphere Process Server がインストールされていて、これらの一部またはすべてに対して 1 つ以上のプロファイルが構成されている場合、「インストール選択」パネルが表示されます。この場合、インストールを選択して「OK」をクリックします。選択したインストールに対して構成されているプロファイルの数により、以下のいずれかが表示されます。
  - インストールに複数のプロファイルが含まれている場合は、前述のステップ 4 で説明したプロファイルの選択パネルが表示されます。任意のプロファイルを選択して「OK」をクリックすると、そのプロファイルに基づいてファースト・ステップ・コンソールが起動します。
  - 選択したインストールに対して構成されているプロファイルが 1 つだけの場合は、そのプロファイルに基づいてファースト・ステップ・コンソールが表示されます。

## Linux、UNIX、および Windows プラットフォームのプロファイルに関連付けられたファースト・ステップ・コンソールの開始

**Linux** **UNIX** **Windows** 以下のステップを実行し、プロファイルに関連付けられたファースト・ステップ・コンソールを開始します。

1. コマンド・ウィンドウをオープンします。

2. 以下のディレクトリーに移動します (*profile\_root* は、WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus のプロファイルのインストール場所を表します)。

- WebSphere Process Server プロファイルの場合:
  - **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:  
`profile_root/firststeps/wbi`
  - **Windows** **Windows** プラットフォームの場合:  
`profile_root%firststeps%wbi`
- WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルの場合:
  - **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:  
`profile_root/firststeps/esb`
  - **Windows** **Windows** プラットフォームの場合:  
`profile_root%firststeps%esb`

3. **firststeps** コマンドを実行して、コンソールを開始します。

- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:  
`./firststeps.sh`
- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: `firststeps.bat`

ファースト・パス:

以下のいずれかのタスクを実行して、プロファイルに関連付けられているバージョンのファースト・ステップ・コンソールを開始することもできます。

- 選択したインストール手順を実行するとき、インストール処理の終了時に「インストールが完了しました」パネルの「ファースト・ステップ・コンソール」チェック・ボックスにチェック・マークを付ける。
- プロファイルの作成または拡張処理の終了時に「プロファイル作成の完了」または「プロファイル拡張の完了」パネルの「ファースト・ステップ・コンソール」チェック・ボックスにチェック・マークを付ける。
- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus のプロファイルに関連付けられているファースト・ステップ・コンソールを開始する場合は、「スタート」 → **Programs** → 「**IBM WebSphere**」 → 「**Process Server 6.2**」 → 「*profile\_name*」 → 「ファースト・ステップ」を選択します。

ファースト・ステップ・コンソールで選択できるオプションの説明については、『ファースト・ステップ・コンソールのオプション』を参照してください。

## ファースト・ステップ・コンソールのオプション

WebSphere Process Server をインストールしたら、ファースト・ステップ・コンソールを使用して、製品ツールの開始、製品資料へのアクセス、個別プロファイルに関連するサーバーおよび管理コンソールなどのエレメントへの指示を行います。汎用バージョンのコンソールと、インストール内のプロファイルごとのバージョンが使用可能です。各コンソールのオプションは、インストールした機能と、当該オペ

レーティング・システムで使用可能なエレメントに応じて動的に表示されます。オプションには、インストールの検証、サーバーまたはデプロイメント・マネージャーの開始と停止、管理コンソールへのアクセス、プロファイル管理ツールの開始、サンプル・ギャラリーへのアクセス、製品資料へのアクセス、マイグレーション・ウィザードの開始などがあります。

**制約事項:**

- **i5/OS** **i5/OS プラットフォームの場合:** i5/OS バージョンのファースト・ステップ・コンソールには、マイグレーション・ウィザード・オプションがありません。
- WebSphere Process Server Client には関連するファースト・ステップ・コンソールがありません。基礎となる WebSphere Application Server インストールには、専用のファースト・ステップ・コンソールがあります。

さまざまなタイプのファースト・ステップ・コンソールに表示されるオプションを、表 28 に要約します。各オプションは、167 ページの『オプションの説明』で定義します。169 ページの『使用のヒント』では、各オプションで呼び出すコマンドについて説明します。

表 28. ファースト・ステップ・コンソールで使用可能なオプション

オプション	汎用バージョン	スタンドアロン・サーバーのプロファイル・バージョン	デプロイメント・マネージャーのプロファイル・バージョン	カスタム・プロファイル・バージョン
インストール検査	使用不可	使用可能	使用可能	使用不可
サーバーの始動および停止	使用不可	使用可能	使用不可	使用不可
デプロイメント・マネージャーの開始および停止	使用不可	使用不可	使用可能	使用不可
管理コンソール	使用不可	使用可能	使用可能	使用不可
プロファイル管理ツール	使用可能	使用可能	使用可能	使用可能
サンプル・ギャラリー	使用不可	使用可能	使用不可	使用不可
インフォメーション・センター	使用可能	使用可能	使用可能	使用可能
マイグレーション・ウィザード	使用可能 (i5/OS 以外)	使用可能 (i5/OS 以外)	使用可能 (i5/OS 以外)	使用可能 (i5/OS 以外)
著作権および商標	使用可能	使用不可	使用不可	使用不可
終了	使用可能	使用可能	使用可能	使用可能

## オプションの説明

さまざまなバージョンのファースト・ステップ・コンソールで表示されるオプションについて、以下に説明します。

### インストール検査

インストール検査テストを開始します。このテストでは、そのスタートアップの間に、スタンドアロン・サーバーまたはデプロイメント・マネージャーを始動し、モニターします。

スタンドアロン・サーバーまたはデプロイメント・マネージャーのプロファイルを作成して以来初めてファースト・ステップ・コンソールを使用した場合、「インストール検査」を選択してインストールを確認します。検査プロセスにより、スタンドアロン・サーバーまたはデプロイメント・マネージャーが始動されます。

インストール検査ツール (IVT) が稼働している間は、「サーバーの起動」および「デプロイメント・マネージャーの開始」オプションは選択できません。

IVT では、スタンドアロン・サーバーまたはデプロイメント・マネージャーに関する以下の有用な情報を提供します。

- サーバー・プロセスの名前
- プロファイルの名前
- プロファイル・パス (プロファイルのファイル・パスおよび名前)
- プロファイルのタイプ
- セル名
- ノード名
- 現行のエンコード
- 管理コンソールのポート番号
- SystemOut.log ファイルのロケーションおよびファイル内にリストされたエラーの数を含むさまざまな通知メッセージ
- ヘルス・モニター・レポート (スタンドアロン・サーバーの場合のみ)
- 完了メッセージ

インストールの検査について詳しくは、193 ページの『第 6 章 製品のインストールの検査』およびその子トピックを参照してください。

### サーバーの始動

サーバーが稼働している場合に「サーバーの停止」に切り替えます。

「サーバーの始動」オプションを選択すると、出力画面に状況メッセージが表示されます。成功メッセージは、サーバーが e-ビジネス用に開いていることを通知します。次に、メニュー項目が「サーバーの停止」に変わり、「管理コンソール」および「サンプル・ギャラリー」オプションの両方が使用可能になります (それらがインストールされている場合)。

「サーバーの起動」オプションを選択した場合、サーバーの起動中に「インストール検査」オプションを選択することはできません。

## デプロイメント・マネージャーの始動

デプロイメント・マネージャーが稼働している場合に「デプロイメント・マネージャーの停止」に切り替えます。

「デプロイメント・マネージャーの始動」オプションを選択すると、出力画面に状況メッセージが表示されます。成功メッセージは、デプロイメント・マネージャーが e-ビジネス用に開いていることを通知します。次に、メニュー項目が「デプロイメント・マネージャーの停止」に変わり、「管理コンソール」オプションが使用可能になります (インストールされている場合)。

「デプロイメント・マネージャーの開始」オプションを選択した場合、デプロイメント・マネージャーの実行中に「インストール検査」オプションを選択することはできません。

## 管理コンソール

プロファイルの作成時または拡張時に管理コンソールをデプロイした場合のみ表示されます。このオプションは、スタンドアロン・サーバーまたはデプロイメント・マネージャーが始動されない限り選択できません。

管理コンソールは、Web ブラウザー内で実行される構成エディターです。管理コンソールを使用することによって、スタンドアロン・サーバーまたはデプロイメント・マネージャー、およびセル内にあるすべてのアプリケーション用の XML 構成ファイルで作業することが可能になります。

管理コンソールを起動するには、「管理コンソール」を選択します。

管理コンソールにより、ログイン名を求めるプロンプトが出されます。このプロンプトはセキュリティのために出されるのではなく、セッション中に行った構成変更を識別するためのタグにすぎません。管理セキュリティが使用可能な場合、セキュア・サインオンも使用できます。

インフォメーション・センターのインストール手順では、インストール時にセキュリティを使用可能にした場合、管理ユーザー ID とパスワードを書き留めておくよう忠告しています。ID とパスワードがないと、管理コンソールまたはスクリプトを使用できません。

## プロファイル管理ツール

64 ビット Linux または Linux on System z プラットフォームでは使用できません。プロファイル管理ツールを開始します。このツールを使用すると、スタンドアロン・サーバー、デプロイメント・マネージャー、またはカスタム・プロファイルを作成できます。

プロファイルは、スタンドアロン・サーバーまたはデプロイメント・マネージャー用のランタイム環境を定義するファイルから構成されます。各プロファイルには、独自の管理インターフェースがあります。カスタム・プロファイルは例外です。カスタム・プロファイルは、ユーザーがデプロイメント・マネージャー・セルに統合したりカスタマイズしたりする空のノードです。カスタム・プロファイル用には、デフォルトのサーバー・プロセスまたはアプリケーションは作成されません。

各プロファイルには、独自のファースト・ステップ・コンソールがあります。ファースト・ステップ・コンソールを開始するコマンドは、プロファイルのファイル・セット内にあります。プロファイルに関連したファースト・ステップ・コンソールの開始プロンプトが、プロファイル管理ツールの最後のパネルに表示されます。

## サンプル・ギャラリー

プロファイルの作成時または拡張時に WebSphere Process Server サンプルをインストールした場合のみ表示されます。このオプションにより、管理コンソールで WebSphere Process Server サンプル・ギャラリーが開始されます。このオプションは、サーバーが始動されない限り選択できません。

サンプル・ギャラリーを開始するには、「**サンプル・ギャラリー**」を選択します。

製品の初期インストール時に WebSphere Process Server サンプルをインストールしていない場合、ファースト・ステップ・コンソール上にオプションは表示されません。増分インストールを実行して、サンプル機能を追加することができます。サンプルを追加すると、ファースト・ステップ・コンソール上にオプションが表示されます。

## インフォメーション・センター

オンライン・インフォメーション・センター (<http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/dmndhelp/v6r2mx/>) にリンクします。

## マイグレーション・ウィザード

マイグレーション・ツールへのグラフィカル・インターフェースである、WebSphere Process Server のバージョン間マイグレーション・ウィザードを開始します。バージョン間マイグレーション・ウィザードは、WebSphere Process Server の旧バージョンから新バージョンへのマイグレーションを支援するグラフィカル・インターフェースです。このインターフェースについて詳しくは、『マイグレーション・ウィザード』のトピックを参照してください。

## 著作権および商標

WebSphere Process Serverの著作権および商標を示します。

**終了** ファースト・ステップ・コンソールを閉じます。

## 使用のヒント

170 ページの表 29 に、WebSphere Process Server ファースト・ステップ・コンソールのオプションが呼び出すコマンドを示します。以下の個々のコマンドの詳細については、WebSphere Application Server Network Deployment インフォメーション・センターの『コマンド行ユーティリティー』セクションで、コマンドを検索してください。

- startServer コマンド
- stopServer コマンド
- startManager コマンド
- stopManager コマンド

WebSphere Process Server 製品に組み込まれている、インストール検証テスト、ファースト・ステップ・コンソール、プロファイル管理ツール、およびマイグレーション・ウィザードを開始するために使用されるコマンドは、同等の WebSphere Application Server Network Deployment のコマンドと名前が異っていたり、異なるディレクトリー・ロケーションに存在していたり、異なる機能を実行したりします。そのため、WebSphere Application Server Network Deployment のインフォメーション・センターにあるこれらのコマンドへのリンクは、ここでは示しません。

表 29. ファースト・ステップ・コンソールのオプションが呼び出すコマンド

オプション	リンク
インストール検査	<p>wbi_ivt コマンドを呼び出します。</p> <p>インストール検査テスト・コマンドがある場所は、以下のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li> <span data-bbox="630 369 711 394">i5/OS</span> <b>i5/OS</b> プラットフォーム: <code>profile_root/bin/wbi_ivt -username username -password password</code>  <b>注:</b> セキュリティーが使用可能になっている場合、<b>username</b> および <b>password</b> パラメーターは iSeries プラットフォームでは必須です。これらは Linux、UNIX、および Windows プラットフォームではオプションですが、セキュリティーが使用可能になっている場合は値の入力を求めるプロンプトが表示されます。         </li> <li> <span data-bbox="662 632 727 657">Linux</span> <span data-bbox="792 632 857 657">UNIX</span> <b>Linux</b> および <b>UNIX</b> プラットフォーム: <code>profile_root/bin/wbi_ivt.sh</code> </li> <li> <span data-bbox="651 726 732 751">Windows</span> <b>Windows</b> プラットフォーム: <code>profile_root%bin#wbi_ivt.bat</code> </li> </ul>
サーバーの始動	<p>startServer コマンドを呼び出します。</p> <p>startServer コマンドがある場所は、以下のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li> <span data-bbox="630 888 711 913">i5/OS</span> <b>i5/OS</b> プラットフォームの場合: <code>profile_root/bin/startServer</code> </li> <li> <span data-bbox="662 982 727 1008">Linux</span> <span data-bbox="792 982 857 1008">UNIX</span> <b>Linux</b> および <b>UNIX</b> プラットフォームの場合: <code>profile_root/bin/startServer.sh</code> </li> <li> <span data-bbox="651 1077 732 1102">Windows</span> <b>Windows</b> プラットフォームの場合: <code>profile_root%bin%startServer.bat</code> </li> </ul> <p>同一ワークステーション上に複数のスタンドアロン・サーバーがある場合、コマンドにより、ファースト・ステップ・コンソール内のプロファイルと同じプロファイルに関連付けられたスタンドアロン・サーバーが始動されます。</p>
サーバーの停止	<p>stopServer コマンドを呼び出します。</p> <p>stopServer コマンドがある場所は、以下のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li> <span data-bbox="630 1430 711 1455">i5/OS</span> <b>i5/OS</b> プラットフォームの場合: <code>profile_root/bin/stopServer</code> </li> <li> <span data-bbox="662 1524 727 1549">Linux</span> <span data-bbox="792 1524 857 1549">UNIX</span> <b>Linux</b> および <b>UNIX</b> プラットフォームの場合: <code>profile_root/bin/stopServer.sh</code> </li> <li> <span data-bbox="651 1619 732 1644">Windows</span> <b>Windows</b> プラットフォームの場合: <code>profile_root%bin%stopServer.bat</code> </li> </ul>

表 29. ファースト・ステップ・コンソールのオプションが呼び出すコマンド (続き)

オプション	リンク
デプロイメント・マネージャーの始動	<p>startManager コマンドを呼び出します。</p> <p>startManager コマンドがある場所は、以下のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li> <span style="background-color: #800000; color: white; padding: 2px;">i5/OS</span> <b>i5/OS</b> プラットフォームの場合: <code>profile_root/bin/startManager</code> </li> <li> <span style="background-color: #800000; color: white; padding: 2px;">Linux</span> <span style="background-color: #800000; color: white; padding: 2px;">UNIX</span> <b>Linux</b> および <b>UNIX</b> プラットフォームの場合: <code>profile_root/bin/startManager.sh</code> </li> <li> <span style="background-color: #800000; color: white; padding: 2px;">Windows</span> <b>Windows</b> プラットフォームの場合: <code>profile_root%bin%startManager.bat</code> </li> </ul> <p>同一ワークステーション上に複数のデプロイメント・マネージャーがある場合、コマンドにより、ファースト・ステップ・コンソール内のプロファイルと同じプロファイルに関連付けられたデプロイメント・マネージャーが始動されます。</p>
デプロイメント・マネージャーの停止	<p>stopManager コマンドを呼び出します。</p> <p>stopManager コマンドがある場所は、以下のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li> <span style="background-color: #800000; color: white; padding: 2px;">i5/OS</span> <b>i5/OS</b> プラットフォームの場合: <code>profile_root/bin/stopManager</code> </li> <li> <span style="background-color: #800000; color: white; padding: 2px;">Linux</span> <span style="background-color: #800000; color: white; padding: 2px;">UNIX</span> <b>Linux</b> および <b>UNIX</b> プラットフォームの場合: <code>profile_root/bin/stopManager.sh</code> </li> <li> <span style="background-color: #800000; color: white; padding: 2px;">Windows</span> <b>Windows</b> プラットフォームの場合: <code>profile_root%bin%stopManager.bat</code> </li> </ul>
管理コンソール	<p>デフォルトのブラウザを開いて管理コンソールの Web アドレスを指定します。</p> <p>同一ワークステーション上に (または i5/OS の同一論理区画上に) 複数のサーバーがある場合、ポートは異なります。ファースト・ステップ・コンソールにより、ファースト・ステップ・コンソール内のプロファイルと同じプロファイルに関連付けられた管理コンソールが開始されます。</p>

表 29. ファースト・ステップ・コンソールのオプションが呼び出すコマンド (続き)

オプション	リンク
プロファイル管理ツール	<p>pmt コマンドを呼び出します。</p> <p>pmt コマンドがある場所は、以下のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li> <b>i5/OS</b> <b>i5/OS</b> プラットフォームの場合: Windows ワークステーションから pmt コマンドが実行されます。このコマンドは、以下の 2 つの場所のいずれかにあります。 <ul style="list-style-type: none"> <li>- <code>install_image_location%WBI%iSeries%PMT%pmt.bat</code>。ここで、<code>install_image_location</code> はディスク・メディアのパス、またはパスポート・アドバンテージ・イメージのダウンロード先の場所のパスです。</li> <li>- <code>pmt_client_installation%PMT%pmt.bat</code>。デフォルトでは、<code>C:%ProgramFiles%IBM%WebSphere%PMTClient</code> です。</li> </ul> </li> <li> <b>Linux</b> <b>UNIX</b> <b>Linux</b> および <b>UNIX</b> プラットフォームの場合: <code>install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh</code> </li> <li> <b>Windows</b> プラットフォームの場合: <code>install_root%bin%ProfileManagement%pmt.bat</code> </li> </ul>
サンプル・ギャラリー	デフォルト・ブラウザを開いてサンプル Web アドレスを指定します。
インフォメーション・センター	デフォルト・ブラウザを開いてオンライン・インフォメーション・センターの Web アドレス ( <a href="http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/dmndhelp/v6r2mx/">http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/dmndhelp/v6r2mx/</a> ) を指定します。
マイグレーション・ウィザード	<p>WebSphere Process Server のバージョン間マイグレーション・スクリプトを呼び出して、マイグレーション・ウィザードを開始します。</p> <p>バージョン間マイグレーション・スクリプトのロケーションは、以下のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li> <b>Linux</b> <b>UNIX</b> <b>Linux</b> および <b>UNIX</b> プラットフォームの場合: <code>install_root/bin/wbi_migration.sh</code> </li> <li> <b>Windows</b> <b>Windows</b> プラットフォームの場合: <code>install_root%bin%wbi_migration.bat</code> </li> </ul>

### 関連情報

『wbi\_ivt コマンド行ユーティリティー』

wbi\_ivt コマンドにより、インストール検証テスト (IVT) プログラムが開始されます。IVT は、スタンドアロン・プロファイルまたはデプロイメント・マネージャー・プロファイルのインストールが正常に行われたかを検査します。プロファイルは、デプロイメント・マネージャーまたはスタンドアロン・プロファイル用のランタイム環境を定義するファイルから構成されます。各プロファイルには、独自の IVT コマンドがあります。

## wbi\_ivt コマンド行ユーティリティー

wbi\_ivt コマンドにより、インストール検証テスト (IVT) プログラムが開始されます。IVT は、スタンドアロン・プロファイルまたはデプロイメント・マネージャー・プロファイルのインストールが正常に行われたかを検査します。プロファイル

は、デプロイメント・マネージャーまたはスタンドアロン・プロファイル用のランタイム環境を定義するファイルから構成されます。各プロファイルには、独自の IVT コマンドがあります。

サーバー・プロセスが開始済みでない場合、IVT プログラムはスタンドアロンのプロファイル、またはデプロイメント・マネージャーを自動的に開始します。サーバーの初期化後、IVT は一連の検証テストを実行し、コンソール・ウィンドウに合格または不合格の状況を表示します。

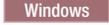
IVT プログラムは、SystemOut.log ファイルをスキャンしてエラーを調べ、プロファイルのコア機能を検査します。

**注:** スタンドアロンのプロファイルの場合、IVT はヘルス・モニター・チェックを実行し、システムの全体的な正常性のスナップショット・レポートを生成します。このレポートは、IVT ログ・ファイルに含まれています。このレポートを表示して、アプリケーション・サーバー、ノード、デプロイメント環境、メッセージング・エンジンおよびそのキュー、データベース、システム・アプリケーション、およびシステムで失敗したイベントの状況をチェックすることができます。状況には、実行中、停止、または利用不可があります。スタンドアロンのプロファイルでは、すべてのコンポーネントの状況が実行中であることを確認します。

IVT プログラムは、コマンド行またはファースト・ステップ・コンソールから始動できます。

## コマンド・ファイルのロケーション

プロファイルのインストール検証テスト・スクリプトのロケーションは、*profile\_root/bin* ディレクトリーです。スクリプト・ファイル名は以下のとおりです。

-     wbi\_ivt.sh
-  wbi\_ivt.bat
-  wbi\_ivt

## パラメーター

このコマンドに関連付けられるパラメーターを以下に示します。

### **server\_name**

サーバー・プロセスの名前 (server1 や dmgr 等) を識別するのに必要なパラメーター。

### **profile\_name**

サーバー定義を含むプロファイルの名前を識別するのに必要なパラメーター。

### **-p server\_port\_number**

ポートが 9080 (デフォルト) 以外するとき、default\_host ポートを識別するオプション・パラメーター。

### **-host machine\_host\_name**

テストするプロファイルのホスト・マシンを識別するオプション・パラメーター。デフォルトは localhost。

## wbi\_ivt コマンドの構文。

このコマンドには、以下の構文を使用します。

- **AIX** **HP-UX** **Linux** **Solaris** `profile_root/bin/wbi_ivt.sh`
- **Windows** `profile_root\bin\wbi_ivt.bat`
- **i5/OS** `profile_root/bin/wbi_ivt -username username -password password`

注: セキュリティーが有効になっているとき、i5/OS プラットフォームでは **username** および **password** パラメーターは必須です。Linux、UNIX、および Windows プラットフォームではオプションですが、セキュリティが有効になっている場合、プロンプトが出されます。

## ロギング

wbi\_ivt コマンド・ログは、結果を `profile_root/logs/wbi_ivtClient.log` ファイルに記録します。

## 例

以下の例は、ポート 9081 の default\_host を使用して myhost マシンの profile01 プロファイル中の server1 プロセスをテストします。

**AIX** **HP-UX** **Linux** **Solaris**

```
wbi_ivt.sh server1 profile01 -p 9081 -host myhost
```

**Windows**

```
wbi_ivt.bat server1 profile01 -p 9081 -host myhost
```

**i5/OS**

```
wbi_ivt server1 profile01 -p 9081 -host myhost -username username -password password
```

### 関連概念

165 ページの『ファースト・ステップ・コンソールのオプション』

WebSphere Process Server をインストールしたら、ファースト・ステップ・コンソールを使用して、製品ツールの開始、製品資料へのアクセス、個別プロファイルに関連するサーバーおよび管理コンソールなどのエレメントへの指示を行います。汎用バージョンのコンソールと、インストール内のプロファイルごとのバージョンが使用可能です。各コンソールのオプションは、インストールした機能と、当該オペレーティング・システムで使用可能なエレメントに応じて動的に表示されます。オプションには、インストールの検証、サーバーまたはデプロイメント・マネージャーの開始と停止、管理コンソールへのアクセス、プロファイル管理ツールの開始、サンプル・ギャラリーへのアクセス、製品資料へのアクセス、マイグレーション・ウィザードの開始などがあります。

---

## メッセージ・サービス・クライアントのインストール

C、C++、または .NET アプリケーションを使用可能にして WebSphere Process Server との対話に参与できるようにするには、WebSphere Process Server で提供される各 Message Service Client を使用します。このセクションでは、各 Message Service Client のインストール方法について説明します。

### このタスクについて

以下のように、WebSphere Process Server に付属する Message Service クライアントを使用することにより、アプリケーションと WebSphere Process Server の間の対話を拡張できます。

- IBM Message Service Client for C/C++ は、C および C++ アプリケーションに対するメッセージング用の JMS モデルを拡張します。
- IBM Message Service Client for .NET では、.NET アプリケーションを JMS ベースの情報フローに加えることができます。

インストールの開始方法は、インストールのタイプによって異なります。それぞれの方法の詳細は、『インストールの開始』を参照してください。

Linux、AIX、Solaris、または Windows プラットフォームへの Message Service クライアントのインストールについて詳しくは、サブトピックで説明します。

J2EE クライアント・サポートをインストールして、WebSphere Application Server (Web サービス・クライアント、EJB クライアント、および JMS クライアントを含む) から使用することもできます。J2EE クライアント・サポートのインストールについて詳しくは、『WebSphere Application Server のアプリケーション・クライアントのインストール』を参照してください。

## インストールの開始

Message Service クライアントのインストール方法は、使用するインストールのタイプによって異なります。

### このタスクについて

以下のサブトピックから、インストールの開始方法を選択してください。

### 次のタスク

Message Service Clients for C/C++ および .NET を備えた WebSphere Process Server で提供された管理 JMS オブジェクトを使用する場合、WebSphere Process Server が提供する JNDILookup Web Service を、非 Java クライアントが非 Java 環境から管理 JMS オブジェクトにアクセスできるように構成する必要があります。

### Launchpad からのインストールの開始

このセクションでは、WebSphere Process Server の Launchpad から Message Service クライアントのインストールを開始する方法を説明します。

## 始める前に

メッセージ・サービス・クライアントをインストールする前に、以下を確認する必要があります。

- ご使用のシステムがすべてのハードウェアおよびソフトウェア要件を満たしていることを確認します。 *WebSphere Process Server detailed system requirements*を参照してください。
- Linux システムでは root として、Windows システムでは管理者グループのメンバーとしてログオンしていること。
- 製品 DVD から Message Service クライアントをインストールする場合は、ご使用のプラットフォームに応じた *WebSphere Process Server V6.2* の DVD が手元にあることを確認してください。メッセージ・サービス・クライアントを別の場所からインストールする場合は、ディスクの内容が置かれている場所を知っていることを確認します。

## このタスクについて

このトピックでは、WebSphere Process Server に同梱されている以下のメッセージ・サービス・クライアントを、Linux または Windows プラットフォームにインストールする方法について説明します。

- Message Service Client for C/C++
- Message Service Client for .NET

このタスクは、83 ページの『Launchpad の開始』で説明されているように、ユーザーがすでに WebSphere Process Server の Launchpad を開いたことを前提としています。

## 手順

1. Launchpad から、インストールするクライアント用のインストール・ウィザードを開きます。このウィザードを開くには、以下のオプションを選択します。
  - a. 「ようこそ」ページで、「メッセージ・サービス・クライアントのインストール」をクリックします。
  - b. 「メッセージ・サービス・クライアントのインストール」ページで、インストールするクライアントの名前（例えば、**IBM Message Service Client for C/C++**）をクリックします。
  - c. 選択したクライアントのインストール・ページで、インストール・ウィザードを起動するためのオプションを選択します。例えば、Message Service Client for C/C++ 用のウィザードを開始するには、「**IBM Message Service Client for C/C++ のインストール・ウィザードの起動**」をクリックします。インストール・ウィザードがウェルカム・メッセージを表示したら、選択したクライアントのインストールを開始する準備が整ったこととなります。
2. 以下のいずれかの作業を実行して、クライアントをインストールします。
  - インストール・ウィザードを使用した Message Service Client for C/C++ のインストール (Installing Message Service Client for C/C++ using the installation wizard)

- インストール・ウィザードを使用した Message Service Client for .NET のインストール (Installing Message Service Client for .NET using the installation wizard)

## DVD からのインストールの開始

このセクションでは、WebSphere Process Server の Launchpad を使用せずに、ディスクから Message Service クライアントのインストールを開始する方法について説明します。

### 始める前に

メッセージ・サービス・クライアントをインストールする前に、以下を確認する必要があります。

- ご使用のシステムがすべてのハードウェアおよびソフトウェア要件を満たしていることを確認します。 WebSphere Process Server detailed system requirements を参照してください。
- Linux システムでは root として、 Windows システムでは管理者グループのメンバーとしてログオンしていること。
- ご使用のプラットフォームに応じた *WebSphere Process Server V6.2 DVD* が提供されていることを確認します。

### このタスクについて

このトピックでは、WebSphere Process Server に同梱されている以下のメッセージ・サービス・クライアントを、Linux または Windows プラットフォームにインストールする方法について説明します。

- Message Service Client for C/C++
- Message Service Client for .NET

### 手順

1. ディスクをドライブに挿入し、インストール・プログラムを実行します。 インストール・ウィザードがウェルカム・メッセージを表示したら、選択したクライアントのインストールを開始する準備が整ったことになります。
2. 以下のいずれかの作業を実行して、クライアントをインストールします。
  - インストール・ウィザードを使用した Message Service Client for C/C++ のインストール (Installing Message Service Client for C/C++ using the installation wizard)
  - インストール・ウィザードを使用した Message Service Client for .NET のインストール (Installing Message Service Client for .NET using the installation wizard)

## ダウンロードからのインストールの開始

このセクションでは、フィックスパックまたはサービス・ダウンロードから WebSphere Process Server Message Service クライアントのインストールを開始する方法を説明します。

## 始める前に

メッセージ・サービス・クライアントをインストールする前に、以下を確認する必要があります。

- ご使用のシステムがすべてのハードウェアおよびソフトウェア要件を満たしていることを確認します。 WebSphere Process Server detailed system requirementsを参照してください。
- Linux システムでは root として、 Windows システムでは管理者グループのメンバーとしてログオンしていること。

## このタスクについて

このトピックでは、WebSphere Process Server に同梱されている以下のメッセージ・サービス・クライアントを、Linux または Windows プラットフォームにインストールする方法について説明します。

- Message Service Client for C/C++
- Message Service Client for .NET

### 手順

1. ご使用のプラットフォームに応じた zip ファイルまたは tar.gz ファイルをダウンロードします。その内容を一時ディレクトリーに unzip または解凍して untar します。
2. インストール・プログラムを実行します。 インストール・ウィザードがウェルカム・メッセージを表示したら、選択したクライアントのインストールを開始する準備が整ったこととなります。
3. 以下のいずれかの作業を実行して、クライアントをインストールします。
  - インストール・ウィザードを使用した Message Service Client for C/C++ のインストール (Installing Message Service Client for C/C++ using the installation wizard)
  - インストール・ウィザードを使用した Message Service Client for .NET のインストール (Installing Message Service Client for .NET using the installation wizard)

## JNDILookup Web Service アプリケーションのインストール

WebSphere Process Server は、非 Java クライアントには解釈できない管理対象 JMS オブジェクトを保持しています。非 Java クライアントが管理対象オブジェクトにアクセスできるようにするため、WebSphere Process Server には JNDILookup Web Service が用意されています。この Web サービスは、プロキシとして動作して、非 Java クライアントが JMS 管理対象オブジェクトを取得できるようにします。

## 始める前に

JNDILookup Web Service アプリケーションをインストールする前に、システムに WebSphere Process Server がインストールされ、稼働していることを確認する必要があります。

## このタスクについて

WebSphere Process Server インストールに対して非 Java クライアントからのアクセスがある場合は、JNDILookup Web Service をインストールする必要があります。このアプリケーションは、次の手順に従い、管理コンソールを使用してインストールできます。

**重要:** 以下のステップを実行し始めてからアプリケーションのインストールを中止する場合は、「キャンセル」をクリックして終了してください。管理コンソールの別のページに移動する場合は、まず必ず、アプリケーションのインストール・ページで「キャンセル」をクリックしてください。

### 手順

1. コンソールのナビゲーション・ツリーで、「アプリケーション」 → 「新規アプリケーションのインストール」とクリックします。
  - 2 ページで構成される「アプリケーション・インストールの準備」ページの最初のページが表示されます。
2. 最初の「アプリケーション・インストールの準備」ページで、新規アプリケーションへのパスを指定します。
  - a. `install_root/installableApps`ディレクトリーを参照し、`SIBXJndiLookupEAR.ear`を選択します。
  - b. 「次へ」をクリックします。
3. 2 番目の「アプリケーション・インストールの準備」ページで、次のステップを実行します。
  - a. デフォルトのバインディングおよびマッピングを生成するかどうかを選択します。

デフォルト・バインディングを使用すると、アプリケーションにある不完全なバインディングすべてにデフォルト値が入力されます。既存のバインディングは変更されません。デフォルト・バインディングの生成で使用されるデフォルト値は、カスタマイズすることができます。
  - b. 「次へ」をクリックします。

「新規アプリケーションのインストール」ページが表示されます。
4. 「ステップ 1: インストール・オプションの選択」パネルで、「Web サービスのデプロイ」を選択します。
5. 「ステップ 5: 要約」をクリックして、「要約」パネルに移動します。
6. 「要約」パネルで、「終了」をクリックします。

### 次のタスク

アプリケーションのインストールの進行を示すメッセージを確認します。アプリケーションが正常にインストールされたら、マスター構成への変更を保管します。コンソール・ナビゲーション・ツリーで「アプリケーション」 → 「エンタープライズ・アプリケーション」の順にクリックしてアクセスされる「エンタープライズ・アプリケーション」ページ上の、デプロイ済みアプリケーションのリストに `SIBXJndiLookup` が表示されるようになります。

「エンタープライズ・アプリケーション」ページからアプリケーションを開始するには、**SIBXJndiLookup** を選択して、「開始」をクリックします。

## 第 5 章 ドキュメンテーションのインストール

IBM WebSphere Process Server ヘルプ・システムは、製品インストールの Launchpad からご使用のシステムにインストールすることができます。

### 始める前に

注: **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合: IBM WebSphere Process Server ヘルプ・システムは、Windows クライアント上にインストールする必要があります。

IBM WebSphere Process Server ヘルプ・システムのインストール・ウィザードを実行するには、ドキュメンテーションをダウンロードするためのインターネット接続が機能している必要があります。インターネットに接続できない場合はインストール・ウィザードが停止し、ご使用のコンピューターをインターネットに接続してからインストール・プロセスを再開するよう求められます。

更新機能を使用して、WebSphere Business Process Management 製品ファミリー (WebSphere Process Server バージョン 6.2 や WebSphere ESB バージョン 6.2 など) と同じバージョンの製品に対して提供されている最新のドキュメンテーションでローカル・インストールを更新できます。旧バージョンの製品 (WebSphere Process Server バージョン 6.1.2 など) のヘルプ・システムがある場合は、新しい製品バージョンのドキュメンテーション更新サイトを指すように bookmarks.xml ファイルを変更することによって、そのヘルプ・システムに新しい製品バージョンのドキュメンテーションを追加できます。

### このタスクについて

製品ドキュメンテーションは、製品インストール Launchpad からインストールできるヘルプ・システム内で参照することができます。ヘルプ・システムのインストール・ウィザードでは、既存のヘルプ・システムがある場合にはその中にドキュメンテーションをインストールする手順が示されます。また、新規にヘルプ・システムをインストールすることもできます。

ヘルプ・システムは、スタンドアロン・モードとサーバー・モードのいずれでも開始および使用できます。スタンドアロン・モードでは、ヘルプ・システムは個人用のヘルプ・システムとして機能します。サーバー (インフォメーション・センター) モードでは、ヘルプ・システムは公開されたドキュメンテーション・サーバーとして機能し、ネットワーク上の他の Web ブラウザーは指定のポートでこのヘルプ・システムに接続できます。

### 手順

1. インストール・ウィザードを開始します。そのためには、WebSphere Process Server の Launchpad の「ようこそ」ページで「**IBM WebSphere Process Server ヘルプ・システム**」をクリックし、次に IBM WebSphere Process Server ヘルプ・システムのインストール・パネルで「**IBM WebSphere Process Server ヘルプ・システムのインストール・ウィザードの起動**」をクリックします。

2. IBM WebSphere Process Server ヘルプ・システムのインストール・ウィザードの「ようこそ」パネルで、「次へ」をクリックします。
3. ドキュメンテーションを既存のヘルプ・システムにインストールすることを確認するインストール・ウィザード・パネルで、次のいずれかのオプションを選択して「次へ」をクリックします。

オプション	説明
新しいインストールを作成する	インストール済みの IBM WebSphere Process Server ヘルプ・システムがない場合は、『新しいヘルプ・システムのインストール』の説明に従ってください。
既存のインストールを検索する	<p>IBM WebSphere Process Server ヘルプ・システムが既にインストールされている場合は、そのヘルプ・システム内にドキュメンテーションをドキュメント・プラグインとして一括でインストールすることができます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• インストール・ウィザードが既存のドキュメンテーションを検索するためのデフォルトのディレクトリーを確認し、「次へ」をクリックします。</li> <li>• 既存のドキュメンテーションが検出された場合は、183 ページの『ヘルプ・システムへの最新ドキュメンテーションのインストール』の説明に従って更新機能を使用し、新しいドキュメンテーションをインストールします。</li> </ul>

## 次のタスク

IBM WebSphere Process Server ヘルプ・システムのインストールが完了すると、ヘルプ・システムを開いて製品ドキュメンテーションを表示できるようになります。

---

## 新しいヘルプ・システムのインストール

以前にインストールされた IBM WebSphere Process Server ヘルプ・システムがない場合は、WebSphere Process Server の Launchpad からインストールすることができます。

### 始める前に

181 ページの『第 5 章 ドキュメンテーションのインストール』の手順に従って、IBM WebSphere Process Server ヘルプ・システムのインストール・ウィザードを開始します。

### 手順

1. 「インストール・ロケーション」パネルで、IBM WebSphere Process Server ヘルプ・システム用のルート・ディレクトリーを選択します。

オプション	説明
デフォルトのロケーションを確認するには、「次へ」をクリックする。	<p>root ユーザーによるインストール用のデフォルトのインストール・ロケーションは次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>AIX</b> <b>AIX</b> プラットフォームの場合: /user/IBM/WebSphere/ProcServerDocs</li> <li>• <b>HP-UX</b> <b>Solaris</b> <b>HP-UX</b> および <b>Solaris</b> プラットフォームの場合: /opt/IBM/WebSphere/ProcServerDocs</li> <li>• <b>Linux</b> <b>Linux</b> プラットフォームの場合: /opt/ibm/WebSphere/ProcServerDocs</li> <li>• <b>Windows</b> <b>Windows</b> プラットフォームの場合: C:\Program Files\IBM\WebSphere\ProcServerDocs</li> </ul>
別のディレクトリを指定するには、「参照」をクリックする。	インストール・ウィザードに表示されるファイル・ブラウザを使用して、ヘルプ・システムのインストール先とする別のディレクトリを選択できます。

IBM WebSphere Process Server ヘルプ・システムのインストール・ウィザードにより、IBM User Interface Help System Built on Eclipse のヘルプ・ビューアーがインストールされ、サーバーからインストール可能な資料のリストが表示されます。

2. インストールしたい資料のチェック・ボックスを選択し、「次へ」をクリックします。
3. 「次へ」をクリックして、インストールする項目のリストを確認します。「インストールの要約」パネルに、ヘルプ・システムが製品として、英語の資料と翻訳済み資料のセットが機能として、リストされます。英語版の資料は、別の言語版の資料を選択した場合でも、デフォルトで必ず一緒にインストールされます。インストール・ウィザードにより、ヘルプ・システムがインストールされます。
4. 「完了」をクリックすると、インストールが完了します。

### 次のタスク

ヘルプ・システムを始動すると、資料を表示できます。

---

## ヘルプ・システムへの最新ドキュメンテーションのインストール

IBM WebSphere Process Server のヘルプ・システムが既にインストールされている場合は、そのヘルプ・システム内で更新機能を使用することにより、製品ドキュメンテーションをヘルプ・システムにインストールし、ヘルプ・システムで表示することができます。

### 始める前に

IBM WebSphere Process Server ヘルプ・システムにドキュメンテーションをインストールするには、ドキュメンテーションをダウンロードするためのインターネット

接続が機能している必要があります。また、IBM WebSphere Process Server ヘルプ・システムのインストール・ウィザードにより、ご使用のシステム内に互換性のあるヘルプ・システムが検出されていなければなりません。WebSphere Process Server ヘルプ・システム以外のヘルプ・ビューアーにドキュメンテーションをインストールする方法については、『Eclipse ベースの他のヘルプ・ビューアーへのドキュメンテーションのインストール』を参照してください。

使用できるのは、以前にインストールした IBM WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus のヘルプ・システムのみです。WebSphere Process Server および WebSphere Enterprise Service Bus のヘルプ・システムは (バージョンが同じであれば) 同等であり、相互に入れ替えて使用できます。更新機能を使用してご使用のバージョンの製品に対して提供されている最新のドキュメンテーションを入手する場合、旧バージョンの IBM User Interface Help System Built on Eclipse および Eclipse ベースのヘルプ・ビューアーは使用できません。これらには製品ドキュメンテーションのインストールを開始する更新機能が備わっていないため、インストール・ウィザードでは検出されません。

## このタスクについて

更新機能を使用して、WebSphere Business Process Management 製品ファミリー (WebSphere Process Server バージョン 6.2 や WebSphere ESB バージョン 6.2 など) と同じバージョンの製品に対して提供されている最新のドキュメンテーションでローカル・インストールを更新できます。

### 注:

更新機能で実行できるのは、WebSphere Business Process Management 製品ファミリーの同じバージョンの製品に対して提供されている最新のドキュメンテーションのインストールに限られているため、以下を行うには、追加の手順を実行する必要があります。

- 6.2 用のドキュメンテーションをバージョン 6.1.2 の IBM WebSphere Process Server ヘルプ・システムに追加する
- 6.1.2 用のドキュメンテーションをバージョン 6.2 の IBM WebSphere Process Server ヘルプ・システムに追加する
- WebSphere Business Process Management 製品以外のドキュメンテーションをバージョン 6.2 の IBM WebSphere Process Server ヘルプ・システムに追加する

旧バージョンの製品 (WebSphere Process Server バージョン 6.1.2 など) のヘルプ・システムがある場合は、新しい製品バージョンのドキュメンテーション更新サイトを指すように bookmarks.xml ファイルを変更することによって、そのヘルプ・システムに新しい製品バージョンのドキュメンテーションを追加できます。

bookmarks.xml ファイルの変更方法について詳しくは、185 ページの『ヘルプ・システムへの別のバージョンのドキュメンテーションのインストール』を参照してください。

### 手順

1. IBM WebSphere Process Server ヘルプ・システムのインストール・ウィザードの実行をまだキャンセルしていない場合はキャンセルし、ここに示す手順に従って、ヘルプ・システム内から製品ドキュメンテーションをインストールしてください。

- 『ヘルプ・システム・ビューアーの始動』の説明に従って IBM WebSphere Process Server ヘルプ・システムを始動します。
- ヘルプ・システムのツールバーで「更新」アイコンをクリックし、インストール済みドキュメンテーションのリストの下部にある「更新の検索 (Find Updates)」をクリックします。ヘルプ・システムにより IBM ヘルプ・システム・サーバーに自動接続され、インストール可能なドキュメンテーション・セットのリストが表示されます。このセットには各国語版の製品ドキュメンテーションが含まれており、別の製品に関するドキュメンテーション・セットが含まれる場合もあります。
- インストールしたいドキュメンテーションのチェック・ボックスを選択します。
- 「更新のインストール (Install Updates)」をクリックして、ドキュメンテーションのインストールを確定します。選択したドキュメンテーションが IBM WebSphere Process Server ヘルプ・システムにインストールされます。

## 次のタスク

ヘルプ・システムを終了してから再始動すると、新規にインストールされたドキュメンテーションを表示できます。

## ヘルプ・システムへの別のバージョンのドキュメンテーションのインストール

旧バージョンの製品 (WebSphere Process Server バージョン 6.1.2 など) の IBM WebSphere Process Server ヘルプ・システムがすでにインストールされている場合は、新しい製品バージョンのドキュメンテーション更新サイトを指すように bookmarks.xml ファイルを変更することによって、そのヘルプ・システムに新しい製品バージョンのドキュメンテーションを追加できます。

## 始める前に

IBM WebSphere Process Server ヘルプ・システムにドキュメンテーションをインストールするには、ドキュメンテーションをダウンロードするためのインターネット接続が機能している必要があります。また、IBM WebSphere Process Server ヘルプ・システムのインストール・ウィザードにより、ご使用のシステム内に互換性のあるヘルプ・システムが検出されていなければなりません。WebSphere Process Server ヘルプ・システム以外のヘルプ・ビューアーにドキュメンテーションをインストールする方法については、『Eclipse ベースの他のヘルプ・ビューアーへのドキュメンテーションのインストール』を参照してください。

使用できるのは、以前にインストールした IBM WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus のヘルプ・システムのみです。WebSphere Process Server および WebSphere Enterprise Service Bus のヘルプ・システムは (バージョンが同じであれば) 同等であり、相互に入れ替えて使用できます。更新機能を使用し、ご使用のバージョンの製品に対して提供されている最新のドキュメンテーションを入手する場合、旧バージョンの IBM User Interface Help System Built on Eclipse および Eclipse ベースのヘルプ・ビューアーは使用できません。これらには製品ドキュメンテーションのインストールを開始する更新機能が備わっていないため、インストール・ウィザードでは検出されません。

## このタスクについて

以下のいずれかの組み合わせのドキュメンテーションをインストールするには、下記の手順を実行します。

- 6.2 用のドキュメンテーションをバージョン 6.1.2 の IBM WebSphere Process Server ヘルプ・システムに追加する
- 6.1.2 用のドキュメンテーションをバージョン 6.2 の IBM WebSphere Process Server ヘルプ・システムに追加する
- WebSphere Business Process Management 製品以外のドキュメンテーションをバージョン 6.2 の IBM WebSphere Process Server ヘルプ・システムに追加する

### 手順

1. IBM WebSphere Process Server ヘルプ・システムのインストール・ウィザードの実行をまだキャンセルしていない場合はキャンセルし、ここに示す手順に従って、ヘルプ・システム内から製品ドキュメンテーションをインストールしてください。
2. オプション: 新バージョンの製品に関する情報を更新するには、以下の手順を実行します。
  - a. Eclipse ベースのヘルプ・ビューアーのプラグイン・ディレクトリーに移動します。
  - b. そのプラグイン・ディレクトリーで、Eclipse の「webapp」プラグイン・ディレクトリーを探します (通常は、org.eclipse.help.webapp\_<version> のような名前です)。例えば、バージョン 3.1.1 の Eclipse webapp プラグイン・フォルダーの名前は、org.eclipse.help.webapp\_3.1.1 です。
  - c. そのプラグイン・フォルダーで、ファイル bookmarks.xml を編集のために開きます。
  - d. サイト・エレメント属性の値を追加するか、変更します。

表 30. サイトのエレメント属性

name (optional)	IBM ヘルプ・システム・サーバー
url	<ul style="list-style-type: none"><li>• バージョン 6.2 のドキュメンテーションの場合: <a href="http://publib.boulder.ibm.com/dmndhelp/downloads/v6r2mx">http://publib.boulder.ibm.com/dmndhelp/downloads/v6r2mx</a></li><li>• バージョン 6.1.2 のドキュメンテーションの場合: <a href="http://publib.boulder.ibm.com/dmndhelp/downloads/">http://publib.boulder.ibm.com/dmndhelp/downloads/</a></li></ul>

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<bookmarks>
  <site name="IBM Help System server"
        url="http://publib.boulder.ibm.com/dmndhelp/downloads/v6r2mx" />
</bookmarks>
```

3. 『ヘルプ・システム・ビューアーの始動』の説明に従って IBM WebSphere Process Server ヘルプ・システムを始動します。
4. ヘルプ・システムのツールバーで「更新」アイコンをクリックし、インストール済みドキュメンテーションのリストの下部にある「更新の検索 (Find Updates)」をクリックします。ヘルプ・システムにより IBM ヘルプ・システム・サーバーに自動接続され、インストール可能なドキュメンテーション・セットのリスト

が表示されます。このセットには各国語版の製品ドキュメンテーションが含まれており、別の製品に関するドキュメンテーション・セットが含まれる場合もあります。

5. インストールしたいドキュメンテーションのチェック・ボックスを選択します。
6. 「更新のインストール (Install Updates)」をクリックして、ドキュメンテーションのインストールを確定します。 選択したドキュメンテーションが IBM WebSphere Process Server ヘルプ・システムにインストールされます。

## 次のタスク

ヘルプ・システムを終了してから再始動すると、新規にインストールされたドキュメンテーションを表示できます。

---

## Eclipse ベースの他のヘルプ・ビューアーへのドキュメンテーションのインストール

Eclipse ベースのヘルプ・ビューアーを使用していて、WebSphere Process Server のドキュメンテーションをそこで表示できるようにしたい場合は、ビューアーをそのドキュメンテーションを表示するように構成できます。

### 始める前に

Eclipse ベースのヘルプ・ビューアーにドキュメンテーションをインストールするには、インターネットに接続してドキュメンテーションをダウンロードする必要があります。また、Eclipse ベースのヘルプ・ビューアーのバージョンが 3.1.0 以上である必要があります。

### このタスクについて

IBM WebSphere Process Server ヘルプ・システムは、特に WebSphere Business Process Management 製品のバージョン 6.2 を対象とする更新サーバーからドキュメンテーションをダウンロードするように構成されています。その更新サーバーからドキュメンテーションをダウンロードするように他の Eclipse ベースのヘルプ・システムを構成できます。

### 手順

1. Eclipse ベースのヘルプ・ビューアーのプラグイン・ディレクトリーに移動します。
2. そのプラグイン・ディレクトリーで、Eclipse の「webapp」プラグイン・ディレクトリーを探します (通常は、org.eclipse.help.webapp\_<version> のような名前です)。例えば、3.1.0 バージョンの Eclipse webapp プラグイン・フォルダーの名前は、org.eclipse.help.webapp\_3.1.0 です。
3. そのプラグイン・フォルダーで、ファイル bookmarks.xml を編集のために開きます。
4. サイト・エレメント属性の値を追加するか、変更します。

オプション	説明
name (optional)	更新サーバー

オプション	説明
url	http://publib.boulder.ibm.com/dmndhelp/downloads/v6r2mx

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<bookmarks>
  <site name="update server"
    url="http://publib.boulder.ibm.com/dmndhelp/downloads/v6r2mx" />
</bookmarks>
```

5. スタンドアロン・モードでヘルプ・システムを始動します。サーバー・モードでは更新機能を使用できません。ヘルプ・システムがすでに実行中の場合は、停止してから再始動する必要があります。
6. ブラウズ・ウィンドウ右上のツールバーの更新ボタン (  ) をクリックします。ヘルプ・ビューアーに、現在インストールされているドキュメンテーションのリストが表示されます。以下に例を示します。

**Installed documentation**

- + IEHS information center document version 3.1.1
- + IEHS help system document version 3.1.1

[\[Find Updates\]](#)

7. 「更新の検索 (Find Update)」をクリックして更新サーバーにアクセスします。更新サーバーは、文書機能のダウンロード元リモート・サーバーです。ヘルプ・ビューアーに、入手可能な更新のリストが表示されます。以下に例を示します。

**Select updates you want to install**

**Updates for existing documentation**

No updates for existing documentation

**New documentation**

- + WebSphere Process Server 英語版ドキュメンテーション・バージョン 6.2
- + WebSphere Enterprise Service Bus 英語版ドキュメンテーション・バージョン 6.2
- + WebSphere Integration Developer 英語版ドキュメンテーション・バージョン 6.2

[\[Install Updates\]](#)

8. インストールするドキュメンテーションを選択します。WebSphere Process Server のドキュメンテーションがまだインストールされていない場合は、そのドキュメンテーション・セットが新規ドキュメンテーションのセクションにリストされます。
9. 「更新のインストール (Install Updates)」をクリックします。サーバーからドキュメンテーション・セットをダウンロードすると、その進行状況がヘルプ・ビューアーに表示されます。ヘルプ・ビューアーに、正常にインストールされたドキュメンテーションのリストが表示されます。
10. 「終了」をクリックしてインストール・プロセスを完了し、ヘルプ・ビューアーを再始動します。

## 次のタスク

ヘルプ・システムで、新規にインストールされたドキュメンテーションを表示できます。

---

## ヘルプ・システムの始動

ヘルプ・システムを始動するには、ご使用のコンピューター上でコマンド・ファイルを使用します。

### 始める前に

#### 手順

- ヘルプ・システムがインストールされているディレクトリーに移動します。
- ヘルプ・システムをスタンドアロン・モードで始動するには、以下の手順を実行します。
  - そのディレクトリーで、次のうち適切なスクリプトを開始します。
    - **Linux および UNIX プラットフォームの場合:** `help_start.sh`
    - **Windows プラットフォームの場合:** `help_start.bat`

システムが始動するまでに数分かかることがあります。

- ヘルプ・システムをサーバー・モードで始動するには、以下の手順を実行します。
  - そのディレクトリーで、次のうち適切なスクリプトを開始します。
    - **Linux および UNIX プラットフォームの場合:** `IC_start.sh`
    - **Windows プラットフォームの場合:** `IC_start.bat`

サーバーを始動するためのスクリプトのポート設定は、テキスト・エディターで値を変更することで編集できます。デフォルトのポート設定は 8888 です。コマンド行ウィンドウが表示されます。

### タスクの結果

ヘルプ・システムが開始されます。

---

## ヘルプ・システムの停止

ヘルプ・システムを停止するには、ご使用のコンピューター上でコマンド・ファイルを使用します。

#### 手順

- ヘルプ・システムがインストールされているディレクトリーに移動します。
- スタンドアロン・モードで実行されているヘルプ・システム・ビューアーを停止するには、以下の手順を実行します。
  - そのディレクトリーで、次のうち適切なスクリプトを開始します。
    - **Linux および UNIX プラットフォームの場合:** `help_end.sh`
    - **Windows プラットフォームの場合:** `help_end.bat`

3. サーバー・モードで実行されているヘルプ・システム・ビューアーを停止するには、以下の手順を実行します。
  - a. そのディレクトリーで、次のうち適切なスクリプトを開始します。
    - Linux および UNIX プラットフォームの場合: IC\_end.sh
    - Windows プラットフォームの場合: IC\_end.bat

## タスクの結果

ヘルプ・システムが停止されます。

---

## ヘルプ・システムの表示

ヘルプ・システムのコンテンツを表示するには、Web ブラウザーを使用します。

### 始める前に

ヘルプ・システムをサーバー・モードで実行すると、ユーザー定義のポートで Web アプリケーションが呼び出され、そのヘルプ・システムに接続する任意の Web ブラウザーにヘルプのコンテンツが提供されます。ヘルプ・ページおよびメニューは、Web ブラウザーのロケールで表示されます。サーバーを始動するポートを変更するために、開始スクリプトをテキスト・エディターで変更できます。

### このタスクについて

インフォメーション・センターをスタンドアロン・モードで開始すると、資料が自動的に表示されます。しかし、サーバー・モードで資料を表示させるには、以下の手順を実行する必要があります。

#### 手順

1. Web ブラウザーを開きます。
2. ヘルプ・ページの URL `http://<servername>:<port>/help` を入力します。ここで、`<servername>` は IBM Eclipse ヘルプ・システムがインストールされているシステムのホスト名または IP アドレスです。例えば、インフォメーション・センターがサーバー `xyz.com` にインストールされており、デフォルトのポートを使用している場合は、URL `http://xyz.ibm.com:8888/help` を入力することでインフォメーション・センターを開くことができます。
3. Enter を押します。システムが始動するまでに数分かかることがあります。

---

## ドキュメンテーションのアンインストール

IBM WebSphere Process Server ヘルプ・システム用のアンインストール・ウィザードを使用すると、ヘルプ・システムおよびその中に含まれているすべてのドキュメンテーションを、ご使用のローカル・システムから完全に削除できます。

### 始める前に

IBM WebSphere Process Server ヘルプ・システムのアンインストール・ウィザードを実行するには、インターネット接続が機能している必要があります。

#### 手順

1. ヘルプ・システムがインストールされているディレクトリーに移動して `uninstall` サブディレクトリーを開き、アンインストーラー・スクリプトを起動します。
2. アンインストール・ウィザードの「ようこそ」パネルで「次へ」をクリックします。
3. 「要約」パネルで「次へ」をクリックして、表示されるヘルプ・システムが削除対象のものであることを確認します。 ヘルプ・システムの削除中は、アンインストール・ウィザードに進行パネルが表示されます。
4. アンインストール完了パネルで「終了」をクリックして、アンインストールを確認し、ウィザードを終了します。



---

## 第 6 章 製品のインストールの検査

WebSphere Process Server が正常にインストールされ、スタンドアロン・サーバー・プロファイルまたはデプロイメント・マネージャー・プロファイルが正常に作成されていることを確認するには、インストール検査ツールを使用します。プロファイルは、デプロイメント・マネージャーまたはサーバー用のランタイム環境を定義するファイルから構成されます。installver\_wbi 検査合計ツールを使用してコア製品ファイルを検査します。インストール検査テスト (IVT) ツールを使用して、各プロファイルを検査します。

### 始める前に

インストール検査ツールは、WebSphere Process Server をインストールし、スタンドアロン・サーバー・プロファイルまたはデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成した後に使用することができます。

### このタスクについて

インストール検査ツールを使用して、製品が正常にインストールされたことを確認できます。WebSphere Process Server には、次の 2 つのインストール検査ツールが含まれています。

- installver\_wbi 検査合計ツール。システムにインストールされた WebSphere Process Server ファイルが完全にインストールされたかどうかを検査します。installver\_wbi ツールは、各インストール済み WebSphere Process Server ファイルの検査合計をファイルごとの正しい検査合計と比較して相違点を報告します。
- インストール検査テスト (IVT) ツール。デプロイメント・マネージャー・プロファイルとスタンドアロン・サーバー・プロファイルをテストして、サーバー・プロセスが開始できるかどうかを確認します。IVT プログラムは、製品のログ・ファイルをスキャンしてエラーの有無を調べ、製品のコア機能を検証します。さらに、IVT はヘルス・モニター検査を実行し、スタンドアロン・サーバー・プロファイル用のレポートを生成します。

検査ツールを使用するには、以下のステップを実行します。

### 手順

1. すべての WebSphere Process Server ファイルが正しくインストールされているかどうか検査するには、installver\_wbi コマンドを実行します。

詳しくは、194 ページの『インストール済みファイルの検査合計の検証』を参照してください。

2. プロファイルが適切に作成されているかどうかを検査するには、インストール検査テスト (IVT) ツールを使用します。ファースト・ステップ・コンソールで、「インストール検査」をクリックするか、または wbi\_ivt コマンドを使用します。

## 次のタスク

製品をインストールし、インストールを検査した後、さらにプロファイルを作成してインストールを構成することができます。

---

## インストール済みファイルの検査合計の検証

製品のインストール後または保守パッケージのインストール後に、インストール検査ユーティリティ (IVU) を使用できます。これにより、インストール済みファイル・セットの検査合計を計算し、製品部品表の検査合計と照合して検証できます。

### 始める前に

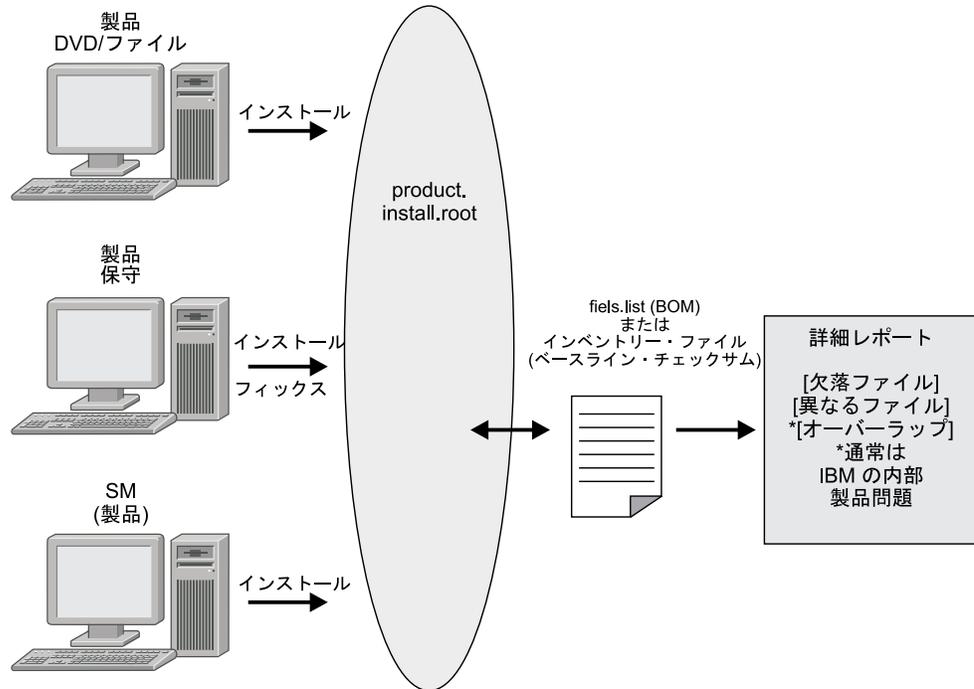
製品をインストールすると、IVU もインストールされます。これは、`installver_wbi.bat` コマンド行ツールです。

### このタスクについて

`installver_wbi.bat` コマンド行ツールを使用して、インストール済みファイルの検査合計を計算し、その検査合計を製品の部品表と照合します。

インストール検査ユーティリティ・ツールは、WebSphere Process Server のインストール中にインストールされます。

また、重要な構成変更を行った後で、IVU を使用して、システムの新しい検査合計を計算することもできます。`installver_wbi.bat` ツールは、構成済みのシステムの品目内にある各ファイルごとに新しいベースライン検査合計を計算して、その後の比較処理でファイルの変更点を示すために使用することができます。このような比較は、構成済みのシステムでのファイルの不正変更などを検出するのに役立ちます。例えば、新しい検査合計を使用して、複数システム上のインストールを比較することができます。以下の図は、主要な使用例を説明しています。ここでは、製品ライフ・サイクルの任意のポイントで製品検査を実行するか、またはベースライン検査合計機能の一部であるインベントリー・ファイルを使用して、構成システムのファイル全体の検査を行うことができます。



このツールの最も一般的な使用法は、製品の部品表をインストール済みのファイル・セットと比較することですが、その他のタスクも可能です。

インストール済みのファイルの検査合計を確認するには、以下のステップを実行します。

- インストール済みのファイルを部品表と照合します。

詳しくは、196 ページの『部品表との照合』を参照してください。

- 新しいベースライン検査合計を作成し、使用します。

詳しくは、201 ページの『構成済みファイルの品目に対する新しいベースライン検査合計の計算』を参照してください。

- ファイルやコンポーネントを比較から除外します。

詳しくは、204 ページの『検査合計の比較からのファイルの除外』を参照してください。

- 特定のファイルやコンポーネントのみを比較の対象に含めます。

詳しくは、209 ページの『特定のファイルおよびコンポーネントの検査合計の比較』を参照してください。

- 検査合計を計算するためのデフォルトのメッセージ・ダイジェスト・アルゴリズムを変更します。

詳しくは、212 ページの『installver\_wbi コマンドのデフォルトのメッセージ・ダイジェスト・アルゴリズムの変更』を参照してください。

- メモリー不足状態を処理します。

詳しくは、213 ページの『installver\_wbi コマンドを使用したメモリー不足の状態の処理』を参照してください。

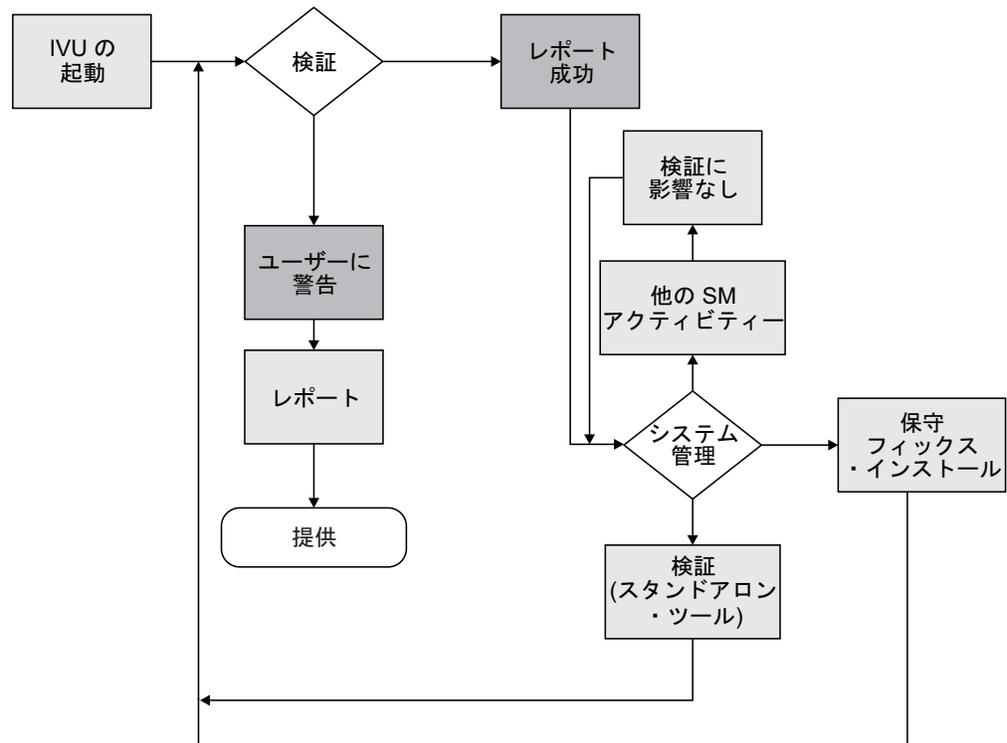
- installver\_wbi.bat コマンド・ファイルを検査します。

## タスクの結果

インストール済みまたは更新済みのファイル・セットが製品の部品表と一致するという条件が満たされると、製品ファイルの検証が終了したことになります。

問題が検出された場合は、WebSphere Process Server Support Web サイトをチェックして、その問題が既知の問題であるかどうかを確認してください。

IVU は次の図で説明するロジックを使用したタスクを実行します。



## 部品表との照合

製品のインストール後、インストール済みファイルの実際の検査合計を、製品に付属している部品表と照合します。検査合計が一致すれば、インストールされた製品のインストールが適切であることになります。検査合計が異なる場合は、相違点を調べて、問題があるかどうかを判断します。

### 始める前に

インストール済みファイルの検査合計と付属する部品表の比較を行う前に、製品をインストールしてください。

## このタスクについて

`installver_wbi` コマンドを使用して、部品表ファイル・セットとインストール済みファイルの検査合計を照合し、すべてのインストール済みファイルが正しいかどうか確認します。このインストール・ファイルの検査システム機能を提供するために、製品にはコンポーネントごとの部品表ファイルが付属しています。

`installver_wbi` ツールは、インストール済み環境内で検出された全コンポーネントのリストを動的に生成します。

`installver_wbi` コマンド・ファイルは、インストール・ルート・ディレクトリーの次の `bin` ディレクトリー内にあります。

- **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合: `install_root/bin/installver_wbi`
- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:  
`install_root/bin/installver_wbi.sh`
- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: `install_root\bin\installver_wbi.bat`

コマンド行から `installver_wbi` ツールを開始するには、ディレクトリーを `bin` ディレクトリーに移動します。

部品表をインストール済みファイル・システムと照合するには、以下のステップを実行します。

- 製品ファイルの検査合計を、部品表ファイル内の正しい検査合計と比較するには、以下のコマンドを入力します。
  - **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合: `install_root/bin/installver_wbi`
  - **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:  
`install_root/bin/installver_wbi.sh`
  - **Windows** **Windows** プラットフォームの場合:  
`install_root\bin\installver_wbi.bat`
- 検査合計を比較してトレース結果を表示するには、以下のコマンドを入力します。
  - **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合: `./installver_wbi -trace`
  - **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:  
`./installver_wbi.sh -trace`
  - **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: `installver_wbi.bat -trace`
- `installver_wbi` コマンドの使用方法に関する情報を表示するには、以下のコマンドを入力します。
  - **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合: `./installver_wbi -help`
  - **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:  
`./installver_wbi.sh -help`
  - **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: `installver_wbi.bat -help`

- 検査合計を比較して、特定のファイルおよびコンポーネントのみを比較の対象として含める場合は、209ページの『特定のファイルおよびコンポーネントの検査合計の比較』を参照してください。コマンドでリストしたファイルおよびコンポーネントのみを比較することができます。
- 検査合計を比較し、除外するファイルのリストを無視するには、以下のコマンドを入力します。

- **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合: `./installver_wbi -ignoreuserexclude`
- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合: `./installver_wbi.sh -ignoreuserexclude`
- **Windows** **Windows** プラットフォーム: `installver_wbi.bat -ignoreuserexclude`

部品表の検査合計から除外するファイルのリストを指定する方法については、204ページの『検査合計の比較からのファイルの除外』を参照してください。

- 検査合計を比較し、すべての IBM 除外ファイルは無視するには、以下のコマンドを入力します。

- **i5/OS** **i5/OS** プラットフォーム: `./installver_wbi -ignoreibmexclude`
- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォーム: `./installver_wbi.sh -ignoreibmexclude`
- **Windows** **Windows** プラットフォーム: `installver_wbi.bat -ignoreibmexclude`

## タスクの結果

`install_root/bin` ディレクトリーから検査合計のコマンドのうちのいずれかを実行すると、端末コンソールにコマンドの状況が表示されます。

**ロギングの結果:** `installver_wbi` ユーティリティーで、コンポーネントごとにメッセージが作成されます。また、部品表にあるすべてのコンポーネントの検査に基づいた、全体としての成功も報告します。以下のメッセージは完了を示します。

- I CWNVU0400I: [ivu] Total issues found : 625
- I CWNVU0340I: [ivu] Done.

これらのメッセージでは、検出された問題の合計数を報告します。問題の数がゼロの場合は、すべてのコンポーネントが存在しており、問題はありません。

`installver_wbi` ユーティリティーでは、ログ用のファイル名を指定せずに **-log** パラメーターを使用した場合、コマンドの結果を `install_root/logs/installver.log` ファイルに記録します。

**-log** パラメーターと引数を使用して、出力をリダイレクトすることができます。存在しているディレクトリーを指定する必要があります。例: `./installver_wbi.sh -log /tmp/waslogs/my_installver.log`

## 例

以下のコマンドでは、この例を生成し、インストール済みの製品を製品の部品表と比較した結果を表示します。

- **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合: `./installver_wbi`
- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合: `./installver_wbi.sh`
- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: `installver_wbi.bat`

### エラーのあるコンポーネントからの出力例

この例では、比較によって検出されたエラーを示しています。

```
I CWNVU0160I: [ivu] Verifying.
I CWNVU0170I: [ivu] The installation root directory is E:\WPS61¥
I CWNVU0300I: [ivu] The total number of user excluded files found is 38.
I CWNVU0300I: [ivu] The total number of IBM excluded files found is 82.
I CWNVU0185I: [ivu] Searching component directory for file listing: files.list
I CWNVU0460I: [ivu] The utility is running.
I CWNVU0260I: [ivu] The total number of components found is: 441
I CWNVU0270I: [ivu] Gathering installation root data.
W CWNVU0280W: [ivu] Component mismatch: expected mismatchcomponentname
but found mismatchingname
I CWNVU0360I: [ivu] The following bill of materials issue is found for component
nullvaluesample: Hash must not be null or an empty string.
I CWNVU0360I: [ivu] The following bill of materials issue is found for component
nullvaluesample: Name must not be null or an empty string.
I CWNVU0360I: [ivu] The following bill of materials issue is found for component
nullvaluesample: Hash must not be null or an empty string.
I CWNVU0360I: [ivu] The following bill of materials issue is found for component
nullvaluesample: Permission must not be null or an empty string.
I CWNVU0360I: [ivu] The following bill of materials issue is found for component
symlinksample: Hash must not be null or an empty string.
I CWNVU0290I: [ivu] Starting the verification for 6 components.

I CWNVU0470I: [ivu] Starting to analyze: _binarycomponentsample
I CWNVU0480I: [ivu] Done analyzing: _binarycomponentsample

I CWNVU0470I: [ivu] Starting to analyze: nullvaluesample
I CWNVU0430I: [ivu] The following file is missing: testpath
I CWNVU0390I: [ivu] Component issues found : 1
I CWNVU0480I: [ivu] Done analyzing: nullvaluesample

I CWNVU0470I: [ivu] Starting to analyze: overlapbinarycomponentsample
W CWNVU0422W: [ivu] The following file is overlapped: lib/binaryTest.jar
W CWNVU0425W: [ivu] The overlap is caused by: _binarycomponentsample
I CWNVU0390I: [ivu] Component issues found : 1
I CWNVU0480I: [ivu] Done analyzing: overlapbinarycomponentsample

I CWNVU0470I: [ivu] Starting to analyze: regularcomponentsample
I CWNVU0440I: [ivu] The following file is different: lib/different.jar
I CWNVU0410I: [ivu] fc19318dd13128ce14344d066510a982269c241b is the
checksum in the bill of materials.
I CWNVU0420I: [ivu] 517d5a7240861ec297fa07542a7bf7470bb604fe is the
checksum on the file system.
I CWNVU0440I: [ivu] The following file is different: lib/ibmtemplateexclude.jar
I CWNVU0410I: [ivu] d3ac7a4ef1a8ffb4134f2f6e7f3c0d249d74b674 is the
checksum in the bill of materials.
I CWNVU0420I: [ivu] d3ac7a4ef1a838b4134f2f6e7f3c0d249d74b674 is the
checksum on the file system.
I CWNVU0430I: [ivu] The following file is missing: lib/missing.jar
I CWNVU0440I: [ivu] The following file is different: lib/usertemplateexclude.jar
```

```
I CWNVU0410I: [ivu] 12dea96fec20593566ab75ff2c9949596833adc9 is the
checksum in the bill of materials.
I CWNVU0420I: [ivu] 12dea96fec20593566ab75692c9949596833adc9 is the
checksum on the file system.
I CWNVU0430I: [ivu] The following file is missing: missingfilebutwithbaddirectory/
missingBadDirectory.jar
I CWNVU0390I: [ivu] Component issues found : 5
I CWNVU0480I: [ivu] Done analyzing: regularcomponentsample

I CWNVU0470I: [ivu] Starting to analyze: symlinksample
I CWNVU0480I: [ivu] Done analyzing: symlinksample

I CWNVU0400I: [ivu] Total issues found : 7
I CWNVU0340I: [ivu] Done.
```

### 標準的な正常インストールの出力例

この例では、正常なインストールの検査の標準的な結果を示しています。

実際上の問題と判断する前に、その問題をよく調べてください。

```
I CWNVU0160I: [ivu] Verifying.
I CWNVU0170I: [ivu] The installation root directory is E:\WPS61¥
I CWNVU0300I: [ivu] The total number of user excluded files found is 38.
I CWNVU0300I: [ivu] The total number of IBM excluded files found is 82.
I CWNVU0185I: [ivu] Searching component directory for file listing: files.list
I CWNVU0460I: [ivu] The utility is running.
I CWNVU0260I: [ivu] The total number of components found is: 441
I CWNVU0270I: [ivu] Gathering installation root data.
I CWNVU0290I: [ivu] Starting the verification for 439 components.

I CWNVU0470I: [ivu] Starting to analyze: ArtifactLoaderImpl
I CWNVU0480I: [ivu] Done analyzing: ArtifactLoaderImpl

I CWNVU0470I: [ivu] Starting to analyze: activity.impl
I CWNVU0480I: [ivu] Done analyzing: activity.impl

I CWNVU0470I: [ivu] Starting to analyze: activity.session.impl
I CWNVU0480I: [ivu] Done analyzing: activity.session.impl

I CWNVU0470I: [ivu] Starting to analyze: acwa
I CWNVU0480I: [ivu] Done analyzing: acwa

I CWNVU0470I: [ivu] Starting to analyze: adapter
I CWNVU0480I: [ivu] Done analyzing: adapter
...

I CWNVU0470I: [ivu] Starting to analyze: workspace
I CWNVU0480I: [ivu] Done analyzing: workspace

I CWNVU0470I: [ivu] Starting to analyze: workspace.query
I CWNVU0480I: [ivu] Done analyzing: workspace.query

I CWNVU0470I: [ivu] Starting to analyze: wps.rt.bundle
I CWNVU0480I: [ivu] Done analyzing: wps.rt.bundle

I CWNVU0470I: [ivu] Starting to analyze: wps.wccm.bundle
I CWNVU0480I: [ivu] Done analyzing: wps.wccm.bundle

I CWNVU0470I: [ivu] Starting to analyze: wpsnd
I CWNVU0480I: [ivu] Done analyzing: wpsnd

I CWNVU0470I: [ivu] Starting to analyze: wsadie.bundle
I CWNVU0480I: [ivu] Done analyzing: wsadie.bundle
```

```
I CWNVU0470I: [ivu] Starting to analyze: wsba.impl
I CWNVU0480I: [ivu] Done analyzing: wsba.impl

I CWNVU0400I: [ivu] Total issues found : 0
I CWNVU0340I: [ivu] Done.
```

## 構成済みファイルの品目に対する新しいベースライン検査合計の計算

インストールの後、インストール済みファイルの実際の検査合計を、製品に付属している部品表と照合することができます。システムを構成した後に、検査合計を作成して、システムを定期的に検査合計と比較できるようにできます。その結果を使用して、構成済みのシステムに対する変更を分析します。

### 始める前に

製品を構成した後、新しいベースライン検査合計を保管して、システムに対する新しい検査合計の標準を設定します。

### このタスクについて

`installver_wbi` コマンドを使用すると、構成済みファイルの品目を作成し、これを現在インストールされているファイルと比較することができます。

`installver_wbi` コマンドは、インストール・ルート・ディレクトリー内のすべてのファイルの品目に対するベースライン検査合計を新たに計算することができます。コマンドを実行すると、デフォルトで、現行作業ディレクトリー内の `sys.inv` ファイルに新しい検査合計が格納されます。別のファイル・パスとファイル名を指定することができます。インストール・ルート・ディレクトリーの外部にファイルを作成したり、比較からファイルを除外したりします。

後で、`sys.inv` ファイル (または、品目の作成時に指定したファイル) にある検査合計を、現在インストールされているファイルの検査合計と比較して、どのファイルが変更になっているかを確認します。

ベースライン検査合計レポートにより、欠落ファイル、追加されたファイル、変更されたファイルが示されます。

`installver_wbi` コマンド・ファイルは、インストール・ルート・ディレクトリーの次の `bin` ディレクトリー内にあります。

- **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合: `install_root/bin/installver_wbi`
- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:  
`install_root/bin/installver_wbi.sh`
- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: `install_root\bin\installver_wbi.bat`

コマンド行から `installver_wbi` ツールを開始するには、ディレクトリーを `bin` ディレクトリーに移動します。

構成済みファイルの品目に対する新規ベースライン検査合計を計算するには、以下の手順を実行してください。

- ・ インストール・ルート・ディレクトリーに現在インストールされているファイルの品目リストを作成するには、以下のように入力します。

- **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合: `./installver_wbi -createinventory`
- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合: `./installver_wbi.sh -createinventory`
- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: `installver_wbi.bat -createinventory`

**Windows** 例えば、`installver_wbi.bat -createinventory` コマンドを実行して、デフォルトの `install_root\bin\sys.inv` ファイルを作成すると、Windows システムに次のメッセージが表示される場合があります。

```
W CWNVU0320W: [ivu] The
C:¥IBM¥WebSphere¥ProcServer¥bin¥sys.inv
inventory file is within the product installation root directory:
C:¥IBM¥WebSphere¥ProcServer.
```

Create the file outside of the installation root directory to omit the file from the verification.

```
I CWNVU0300I: [ivu] The total number of user excluded files found are 2.
I CWNVU0300I: [ivu] The total number of IBM excluded files found are 78.
I CWNVU0310I: [ivu] Creating the following inventory file:
C:¥IBM¥WebSphere¥ProcServer¥bin¥sys.inv
I CWNVU0460I: [ivu] The utility is running.
```

例えば、`installver_wbi -createinventory` コマンドを実行して、デフォルトの `install_root\bin\sys.inv` ファイルを作成すると、i5/OS システムに次のメッセージが表示される場合があります。

注: このコマンドは i5/OS プラットフォーム上の Qshell 環境内で機能します。

```
W CWNVU0320W: [ivu] The
/QIBM/ProdData/WebSphere/ProcServer/bin/sys.inventory file is within the product installation
root directory: /QIBM/ProdData/WebSphere/ProcServer.
```

Create the file outside of the installation root directory to omit the file from the verification.

```
I CWNVU0300I: [ivu] The total number of user excluded files found are 2.
I CWNVU0300I: [ivu] The total number of IBM excluded files found are 78.
I CWNVU0310I: [ivu] Creating the following inventory file:
/QIBM/ProdData/WebSphere/ProcServer/bin/sys.inv
I CWNVU0460I: [ivu] The utility is running.
```

コマンドの実行が終了すると、次の完了メッセージが表示されます。

```
I CWNVU0340I: [ivu] Done.
```

sys.inv には、この Windows システムの例に示すような新しい品目が格納されています。

```
#C:¥IBM¥WebSphere¥AppServer¥
#2005.10.10_06.24.06PM_EDT
#user_ID
#-createinventory -log
241fe4e309abfd8f2c5911216dbabd61dd4751a6
|_jvm¥bin¥appletviewer.exe
|42032
|2004.10.28 05.37.02AM EDT
```

```

e00c6ea688ab67e004ec6cfac26ec48541a5b9ff
|_jvm%bin%dbghe1p.dll
|712192
|2004.10.28 05.36.50AM EDT
916e244deeb44b9d3218aafa3b56c8680aa31f2f
|_jvm%bin%extcheck.exe
|42040
|2004.10.28 05.37.02AM EDT
...
7fc3bb38e8b90fed05cd0440953000c2cc965b44
|web%spidocs%stylesheet.css
|1240
|2005.10.09 12.14.17AM EDT
22706a0d900c52f1c015c870ddee25581c5d57b
|web%spidocs%toHTML%index.html
|867
|2005.10.09 12.14.17AM EDT

```

- 品目ファイルをインストール・ルート・ディレクトリーの外部のディレクトリーに作成して、品目ファイルを比較から除外するには、以下のように入力します。

- **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合: `./installver_wbi -createinventory /tmp/system.inv`

- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合: `./installver_wbi.sh -createinventory /tmp/system.inv`

- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: `installver_wbi.bat -createinventory "C:%temp%system.inv"`

- 品目リストを、インストール・ルート・ディレクトリーに現在インストールされているファイルと比較するには、以下のように入力します。

- **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合: `./installver_wbi -compare`

- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合: `./installver_wbi.sh -compare`

- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: `installver_wbi.bat -compare`

品目ファイルをデフォルトのロケーション以外の場所で作成した場合は、以下の構文を使用します。

- **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合: `./installver_wbi -compare /tmp/system.inv`

- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合: `./installver_wbi.sh -compare /tmp/system.inv`

- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: `installver_wbi.bat -compare "C:%temp%system.inv"`

- 比較してトレースの結果を表示するには、以下のように入力します。

- **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合: `./installver_wbi -compare -trace`

- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合: `./installver_wbi.sh -compare -trace`

- **Windows** Windows プラットフォームの場合: `installver_wbi.bat -compare -trace`
- 比較するときに、品目の比較から指定したファイルを除外するには、以下のように入力します。
  - **i5/OS** i5/OS プラットフォームの場合: `./installver_wbi -compare -exclude fn1;fn2;fn3;...`
  - **Linux** **UNIX** Linux および UNIX プラットフォームの場合: `./installver_wbi.sh -compare -exclude fn1;fn2;fn3;...`
  - **Windows** Windows プラットフォームの場合: `installver_wbi.bat -compare -exclude fn1;fn2;fn3;...`
- 比較するときに、品目の比較に指定したファイルのみを対象として含めるには、以下のように入力します。
  - **i5/OS** i5/OS プラットフォームの場合: `./installver_wbi -compare -include fn1;fn2;fn3;...`
  - **Linux** **UNIX** Linux および UNIX プラットフォームの場合: `./installver_wbi.sh -compare -include fn1;fn2;fn3;...`
  - **Windows** Windows プラットフォームの場合: `installver_wbi.bat -compare -include fn1;fn2;fn3;...`

## タスクの結果

`install_root/bin` ディレクトリーから `installver_wbi` コマンドを実行すると、端末コンソールにコマンドの状況が表示されます。ログを作成する場合は、`-log` パラメーターを使用します。

## 検査合計の比較からのファイルの除外

比較から除外する個々のファイルを指定するか、または除外する個々のコンポーネントを指定します。あるいは、1 つの構成可能なプロパティ・ファイルを作成して、部品表の検査から除外するファイルのリストを指定します。

### 始める前に

検査合計を比較し、除外プロパティを使用する前に、製品をインストールしてください。

### このタスクについて

`installver_wbi` コマンドの除外プロパティを使用して、ファイルを検査合計の比較から除外することができます。

IBM では、デフォルトでいくつかのファイルを検査合計の比較から除外しています。ユーザーがファイルを除外することもできます。除外されたファイルの数は、最初のいくつかのメッセージの中で報告されます。以下に例を示します。

```
I CWNVU0160I: [ivu] Verifying.
I CWNVU0170I: [ivu] The installation root directory is ...
I CWNVU0300I: [ivu] The total number of user excluded files found are 0.
I CWNVU0300I: [ivu] The total number of IBM excluded files found are 82.
```

...

ファイルを比較から除外するには、いくつかの方法があります。

`installver_wbi` コマンド・ファイルは、インストール・ルート・ディレクトリーの次の `bin` ディレクトリー内にあります。

- **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合: `install_root/bin/installver_wbi`
- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:  
`install_root/bin/installver_wbi.sh`
- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: `install_root/bin/installver_wbi.bat`

コマンド行から `installver_wbi` ツールを開始するには、ディレクトリーを `bin` ディレクトリーに移動します。

ファイルを検査合計の比較から除外するには、以下の手順を実行します。

- 1 つ以上のコンポーネント内の全ファイルをその比較対象から除外するには、以下のコマンドを入力してください。

```
- i5/OS i5/OS プラットフォームの場合: ./installver_wbi  
-excludecomponent comp1;comp2;comp3;...
```

```
- Linux UNIX Linux および UNIX プラットフォームの場合:  
./installver_wbi.sh -excludecomponent comp1;comp2;comp3;...
```

```
- Windows Windows プラットフォーム: installver_wbi.bat  
-excludecomponent comp1;comp2;comp3;...
```

**Linux** **UNIX** 例えば、コンポーネント内にある、既知の許容可能な問題を回避するために、`prereq.wccm` コンポーネントを除外する場合は、以下のように入力します。

```
./installver_wbi.sh -log -excludecomponent prereq.wccm
```

結果として出力されるメッセージに、以下のような除外が示されます。

```
I CWNVU0160I: [ivu] Verifying.
I CWNVU0170I: [ivu] The installation root directory is E:\WPS61¥
I CWNVU0300I: [ivu] The total number of user excluded files found is 38.
I CWNVU0300I: [ivu] The total number of IBM excluded files found is 82.
I CWNVU0185I: [ivu] Searching component directory for file listing: files.list
I CWNVU0460I: [ivu] The utility is running.
I CWNVU0260I: [ivu] The total number of components found is: 441
I CWNVU0270I: [ivu] Gathering installation root data.
I CWNVU0290I: [ivu] Starting the verification for 439 components.
...
I CWNVU0400I: [ivu] Total issues found : 0
I CWNVU0340I: [ivu] Done.
```

- 比較対象から特定のファイルを除外するには、以下のコマンドを入力します。

```
- i5/OS i5/OS プラットフォームの場合: install_root/bin/installver_wbi  
-exclude fn1;fn2;fn3
```

- **Linux** **UNIX** Linux および UNIX プラットフォームの場合:  
`install_root/bin/installver_wbi.sh -exclude fn1;fn2;fn3`
- **Windows** Windows プラットフォームの場合:  
`install_root%bin%installver_wbi.bat -exclude fn1;fn2;fn3`

例えば、比較の対象として `prereq.wccm` コンポーネントのみを含め、前回の比較実行時に欠落していたファイルを除外するには、以下のように入力します。

```
...
I CWNVU0470I: [ivu] Starting to analyze: prereq.wccm
I CWNVU0430I: [ivu] The following file is missing:
web/configDocs/activitysessionejbext/ActivitySessionEJBJarExtension.html
I CWNVU0430I: [ivu] The following file is missing:
web/configDocs/activitysessionejbext/ActivitySessionEnterpriseBeanExtension.html
I CWNVU0430I: [ivu] The following file is missing:
web/configDocs/activitysessionejbext/ContainerActivitySession.html
...
```

**Windows** 以下は、前の例で強調表示された欠落ファイルを除外するための入力例です。

```
installver_wbi.bat -log -includecomponent prereq.wccm -exclude web%configDocs%activitysessionejbext%
ActivitySessionEJBJarExtension.html;web%configDocs%activitysessionejbext%
ActivitySessionEnterpriseBeanExtension.html
```

**ヒント:** **Windows** Windows プラットフォームの場合: ディレクトリーの区切りには、Windows 形式のスラッシュ、または UNIX 形式のスラッシュを使用してください。

結果として、以下のように、除外されたファイルは比較されなかったことが示されます。

```
I CWNVU0160I: [ivu] Verifying.
I CWNVU0170I: [ivu] The installation root directory is ...
I CWNVU0300I: [ivu] The total number of user excluded files found are 0.
I CWNVU0300I: [ivu] The total number of IBM excluded files found are 82.
I CWNVU0185I: [ivu] Searching component directory for file listing: files.list
I CWNVU0260I: [ivu] The total number of components found is: 285
I CWNVU0270I: [ivu] Gathering installation root data.
I CWNVU0460I: [ivu] The utility is running.
I CWNVU0290I: [ivu] Starting the verification for 1 components.

I CWNVU0470I: [ivu] Starting to analyze: prereq.wccm
I CWNVU0430I: [ivu] The following file is missing:
web/configDocs/activitysessionejbext/ContainerActivitySession.html
...
I CWNVU0390I: [ivu] Component issues found : 623
I CWNVU0480I: [ivu] Done analyzing: prereq.wccm

I CWNVU0400I: [ivu] Total issues found : 623
I CWNVU0340I: [ivu] Done.
```

2 つのファイルが比較に入れられたとすると、その 2 つがリストに入っており、問題の数は前の例のように 625 となるはずですが。

**ヒント:** この例の強調表示された行は、次のステップで説明するユーザー・テンプレート・ファイルにリストされた除外ファイルのための予約行です。強調表示された行では、`-exclude` パラメーターを指定した `installver_wbi` コマンド行でリストしたファイルはカウントされません。

- ユーザー・テンプレートを作成および使用して、検査合計を比較するときに、その比較から特定のファイルを除外するには、以下のステップを実行します。 部品表の検査から除外するファイルのリストを指定するために、構成可能なプロパティ・ファイルを使用することができます。

1. 以下のコマンドを入力して、空のテンプレート・ファイルを作成します。

- **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合: `install_root/bin/installver_wbi template_name -createtemplate`

- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合: `install_root/bin/installver_wbi.sh template_name -createtemplate`

- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: `install_root¥bin¥installver_wbi.bat template_name -createtemplate`

**Windows** 例えば、Windows システム上にデフォルトのユーザー・テンプレート・ファイル作成するには、以下のように入力します。

```
installver_wbi.bat -createtemplate
I CWNVU0200I: [ivu] Creating template:
C:¥IBM¥WebSphere¥ProcServer¥profiles¥
Dmgr01¥properties¥ivu_user.template
I CWNVU0340I: [ivu] Done.
```

**i5/OS** 例えば、i5/OS システム上にデフォルトのユーザー・テンプレート・ファイル作成するには、以下のように入力します。

```
installver_wbi -createtemplate
I CWNVU0200I: [ivu] Creating template:
/QIBM/ProdData/WebSphere/ProcServer/profiles/
Dmgr01/properties/ivu_user.template
I CWNVU0340I: [ivu] Done.
```

デフォルト・プロファイルの `properties` ディレクトリーに、`ivu_user.template` ファイルが作成されます。この例では、デプロイメント・マネージャー・プロファイルです。

`-template_name` パラメーターはオプションです。ただし、テンプレート・ファイルは、`install_root/profiles/Dmgr01/properties` ディレクトリーのような、デフォルト・プロファイルの `properties` ディレクトリー内に存在していなければなりません。

2. テンプレート・ファイル内に、除外するファイルをリストします。

プロパティ・ファイルの形式は、以下のようになります。

```
<template>
  <componentfiles componentname="name_of_component">
    <file>
      <relativepath action="exclude">file_name</relativepath>
    </file>
  </componentfiles>
</template>
```

例えば、以下のように、前の例に示したコンポーネントとファイルをリストします。

```

<template>
  <componentfiles componentname="prereq.wccm">
    <file>
      <relativepath action="exclude">
web/configDocs/activitysessionejbext/ ¥
ActivitySessionEnterpriseBeanExtension.html
      </relativepath>
    </file>
    <file>
      <relativepath action="exclude">
web/configDocs/activitysessionejbext/ ¥
ActivitySessionEJBJarExtension.html
      </relativepath>
    </file>
  </componentfiles>
</template>

```

**ヒント:** 引用符や二重引用符を使用して、ファイル名を区切らないでください。

3. テンプレート・ファイルを使用して、以下のように比較からファイルを除外します。

以下に例を示します。

```
installver_wbi.bat -log
```

ivu\_user.template ファイルが、デフォルト・プロファイルの properties ディレクトリに存在する場合は、installver\_wbi コマンドがこのファイルを使用します。

結果として、いくつかのユーザー・ファイルが除外されたことが示されます。

```

I CWNVU0160I: [ivu] Verifying.
I CWNVU0170I: [ivu] The installation root directory is ...
I CWNVU0300I: [ivu] The total number of user excluded files found are 2.
I CWNVU0300I: [ivu] The total number of IBM excluded files found are 82.
I CWNVU0185I: [ivu] Searching component directory for file listing: files.list
I CWNVU0460I: [ivu] The utility is running.
I CWNVU0260I: [ivu] The total number of components found is: 285
I CWNVU0270I: [ivu] Gathering installation root data.
I CWNVU0290I: [ivu] Starting the verification for 1 components.

```

```

I CWNVU0470I: [ivu] Starting to analyze: prereq.wccm
I CWNVU0430I: [ivu] The following file is missing:
web/configDocs/activitysessionejbext/ContainerActivitySession.html

```

...

```

I CWNVU0430I: [ivu] The following file is missing:
web/configDocs/wssecurity/generator-binding.html
I CWNVU0390I: [ivu] Component issues found : 623
I CWNVU0480I: [ivu] Done analyzing: prereq.wccm

```

```

I CWNVU0400I: [ivu] Total issues found : 623
I CWNVU0340I: [ivu] Done.

```

## タスクの結果

install\_root/bin ディレクトリからいずれかの検査合計コマンドを実行すると、端末コンソールまたはログ・ファイルにコマンドの状況が示されます。

## 特定のファイルおよびコンポーネントの検査合計の比較

部品表の検査の対象に含める個々のファイルまたはコンポーネントを指定します。

### 始める前に

個々のファイルおよびコンポーネントの検査合計を比較する前に、製品のインストールを完了してください。

### このタスクについて

包含プロパティを使用して、個別のファイルおよびコンポーネントを指定することができます。

デフォルトでは、IBM が除外するファイルを除く全ファイルが検査合計の比較の対象に含まれます。以下のような出力が示されます。

```
I CWNVU0160I: [ivu] Verifying.
I CWNVU0170I: [ivu] The installation root directory is E:¥WPS61¥
I CWNVU0300I: [ivu] The total number of user excluded files found are 0.
I CWNVU0300I: [ivu] The total number of IBM excluded files found are 82.
I CWNVU0185I: [ivu] Searching component directory for file listing: files.list
I CWNVU0460I: [ivu] The utility is running.
I CWNVU0260I: [ivu] The total number of components found is: 441
I CWNVU0270I: [ivu] Gathering installation root data.
I CWNVU0460I: [ivu] The utility is running.
I CWNVU0290I: [ivu] Starting the verification for 441 components.

I CWNVU0470I: [ivu] Starting to analyze: activity
I CWNVU0480I: [ivu] Done analyzing: activity

...
```

特定のファイルのみを比較の対象に含めるには、いくつかの方法があります。

`installver_wbi` コマンド・ファイルは、インストール・ルート・ディレクトリーの次の `bin` ディレクトリー内にあります。

- **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合: `install_root/bin/installver_wbi`
- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:  
`install_root/bin/installver_wbi.sh`
- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: `install_root¥bin¥installver_wbi.bat`

コマンド行から `installver_wbi` ツールを開始するには、ディレクトリーを `bin` ディレクトリーに移動します。

特定のファイルおよびコンポーネントの検査合計を比較するには、以下の手順を実行します。

- 検査合計の比較対象として特定のコンポーネントのみを指定するには、以下のコマンドを入力します。

```
- i5/OS i5/OS プラットフォーム: ./installver_wbi -includecomponent comp1;comp2;comp3;...
```

```
- Linux UNIX Linux および UNIX プラットフォーム:  
./installver_wbi.sh -includecomponent comp1;comp2;comp3;...
```

- **Windows** **Windows** プラットフォーム: `installver_wbi.bat`  
`-includecomponent comp1;comp2;comp3;...`

例えば、activity コンポーネントを対象に含める場合は、以下のように入力します。

- **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合: `./installver_wbi -log`  
`-includecomponent activity`
- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:  
`./installver_wbi.sh -log -includecomponent activity`
- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: `installver_wbi.bat -log`  
`-includecomponent activity`

結果として出力されるメッセージに、包含が示されます。以下のような出力が示されます。

```
I CWNVU0160I: [ivu] Verifying.
I CWNVU0170I: [ivu] The installation root directory is ...
I CWNVU0300I: [ivu] The total number of user excluded files found are 0.
I CWNVU0300I: [ivu] The total number of IBM excluded files found are 82.
I CWNVU0185I: [ivu] Searching component directory for file listing: files.list
I CWNVU0460I: [ivu] The utility is running.
I CWNVU0260I: [ivu] The total number of components found is: 285
I CWNVU0270I: [ivu] Gathering installation root data.
I CWNVU0290I: [ivu] Starting the verification for 1 components.

I CWNVU0470I: [ivu] Starting to analyze: activity
I CWNVU0480I: [ivu] Done analyzing: activity

I CWNVU0400I: [ivu] Total issues found : 0
I CWNVU0340I: [ivu] Done.
```

- 検査合計の比較対象として特定のファイルのみを指定するには、以下のコマンドを入力します。

- **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合: `install_root/bin/installver_wbi`  
`-include fn1;fn2;fn3`
- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:  
`install_root/bin/installver_wbi.sh -include fn1;fn2;fn3`
- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合:  
`install_root%bin%installver_wbi.bat -include fn1;fn2;fn3`

例えば、`properties/version/proxy.server.component` ファイルのみを対象に含めることができます。この例では、検査合計の相違点を生成するように変更になります。

- **Windows**  
`installver_wbi.bat -log -include properties%version%proxy.server.component`
- **i5/OS**  
`installver_wbi -log -include properties/version/proxy.server.component`

結果として、対象に含められたファイルが比較され、このファイルを参照するすべてのコンポーネントを探して、285 個のコンポーネントがスキャンされたことが示されます。以下のような出力が示されます。

```

I CWNVU0160I: [ivu] Verifying.
...
I CWNVU0300I: [ivu] The total number of user excluded files found are 0.
I CWNVU0300I: [ivu] The total number of IBM excluded files found is 82.
I CWNVU0185I: [ivu] Searching component directory for file listing: files.list
I CWNVU0460I: [ivu] The utility is running.
I CWNVU0260I: [ivu] The total number of components found is: 285
I CWNVU0270I: [ivu] Gathering installation root data.
I CWNVU0290I: [ivu] Starting the verification for 285 components.

I CWNVU0470I: [ivu] Starting to analyze: activity
I CWNVU0480I: [ivu] Done analyzing: activity
...
I CWNVU0470I: [ivu] Starting to analyze: proxy.server
I CWNVU0440I: [ivu] The following file is different: properties/version/proxy.server.component
I CWNVU0410I: [ivu] f385fc95977092e0482d52f9d1d5bebbc39fbb10 is the checksum in the bill of materials.
I CWNVU0420I: [ivu] b43bda7f1e7202d1f9495fc74ac14b8d85830aab is the checksum on the file system.
I CWNVU0390I: [ivu] Component issues found : 1
I CWNVU0480I: [ivu] Done analyzing: proxy.server
...
I CWNVU0400I: [ivu] Total issues found : 1
I CWNVU0340I: [ivu] Done.

```

ファイルが 1 つのコンポーネント内のみにあることが分かっている場合は、以下のように入力して、ファイルの比較を該当するコンポーネントに限定することで、比較を高速化することができます。以下に例を示します。

– **Windows**

```
installver_wbi.bat -log -includecomponent proxy.server -include properties\version\proxy.server.component
```

– **i5/OS**

```
installver_wbi -log -includecomponent proxy.server -include properties/version/proxy.server.component
```

結果として、比較が 1 つのコンポーネントに限定されたことが示されます。以下のような出力が示されます。

```

I CWNVU0160I: [ivu] Verifying.
...
I CWNVU0300I: [ivu] The total number of user excluded files found are 0.
I CWNVU0300I: [ivu] The total number of IBM excluded files found is 82.
I CWNVU0185I: [ivu] Searching component directory for file listing: files.list
I CWNVU0460I: [ivu] The utility is running.
I CWNVU0260I: [ivu] The total number of components found is: 285
I CWNVU0270I: [ivu] Gathering installation root data.
I CWNVU0460I: [ivu] The utility is running.
I CWNVU0290I: [ivu] Starting the verification for 1 components.

I CWNVU0470I: [ivu] Starting to analyze: proxy.server
I CWNVU0440I: [ivu] The following file is different: properties/version/proxy.server.component
I CWNVU0410I: [ivu] f385fc95977092e0482d52f9d1d5bebbc39fbb10 is the checksum in the bill of materials.
I CWNVU0420I: [ivu] b43bda7f1e7202d1f9495fc74ac14b8d85830aab is the checksum on the file system.
I CWNVU0390I: [ivu] Component issues found : 1
I CWNVU0480I: [ivu] Done analyzing: proxy.server

I CWNVU0400I: [ivu] Total issues found : 1
I CWNVU0340I: [ivu] Done.

```

## タスクの結果

*install\_root/bin* ディレクトリーからいずれかの検査合計コマンドを実行すると、端末コンソールまたはログ・ファイルにコマンドの状況が示されます。

## installver\_wbi コマンドのデフォルトのメッセージ・ダイジェスト・アルゴリズムの変更

インストールされたファイルの検査合計を比較するためのデフォルトのメッセージ・ダイジェスト・アルゴリズムは、変更することができます。アルゴリズムを変更するには、installver\_wbi コマンド・スクリプトを編集する必要があります。

### 始める前に

デフォルトのメッセージ・ダイジェスト・アルゴリズムを SHA から MD5 へ変更する前に、製品をインストールしてください。

また、コマンド・ファイルを変更する前に、installver\_wbi コマンドを使用して製品ファイルを検査します。

### このタスクについて

デフォルトのメッセージ・ダイジェスト・アルゴリズムは、米国連邦標準技術局 (NIST) の Secure Hash Standard (SHS) に含まれるセキュア・ハッシュ・アルゴリズム (SHA) のうちの 1 つです。SHA-1 は、米国政府の標準ハッシュ関数です。詳細については、連邦情報処理標準 (FIPS) Web ページ (<http://csrc.nist.gov/publications/fips/index.html>) の資料 FIPS 180-2 を参照してください。

WebSphere Process Server の FIPS への準拠について詳しくは、『連邦情報処理標準』を参照してください。

これより古い MD5 メッセージ・ダイジェスト・アルゴリズムも使用することができます。MD5 は、SHA ほど安全ではなく、後方互換性を確保する目的でのみ提供されているため、推奨されないメッセージ・アルゴリズムのタイプです。

どうしても必要な場合に限って、デフォルトのメッセージ・ダイジェスト・アルゴリズムを SHA から MD5 に変更します。この変更を行うには、installver\_wbi.bat ファイルまたは installver\_wbi.sh ファイルを編集します。アルゴリズムを変更すると、製品の部品表の SHA ベースの検査合計が無効になります。このため、メッセージ・ダイジェスト・アルゴリズムを変更する前に、製品ファイルを確認します。

デフォルトのメッセージ・ダイジェスト・アルゴリズムを変更するには、以下の手順を実行します。

### 手順

1. installver\_wbi コマンド・スクリプトを編集する場合:

- **i5/OS** i5/OS プラットフォームの場合: `install_root/bin/installver_wbi` ファイルを編集します。
- **Linux** **UNIX** Linux および UNIX プラットフォームの場合: `install_root/bin/installver_wbi.sh` ファイルを編集します。
- **Windows** Windows プラットフォームの場合: `install_root\bin\installver_wbi.bat` ファイルを編集します。

2. スクリプト・ファイルに以下の環境プロパティを追加します。

```
-Dchecksum.type=MD5
```

デフォルト値は以下のとおりです。

`-Dchecksum.type=SHA`

3. 変更を保存します。

## タスクの結果

アルゴリズムを変更した後、`installver_wbi` コマンドを実行してそれが正しく機能することを確認してください。

## installver\_wbi コマンドを使用したメモリー不足の状態の処理

`installver_wbi` コマンドの使用時のメモリー要件は、その製品のインストール済みファイル・セットのサイズと関係しています。基本的な検査シナリオでは、インストール済みファイル・セットと、提供されている部品表とを比較するために、最大で 128 MB から 256 MB のヒープ・サイズが必要な場合があります。

### このタスクについて

製品の検査またはベースライン検査合計の検査用にさらにメモリーが必要な場合は、`installver_wbi` コマンド・スクリプトに設定値を挿入して、Java 仮想マシン (JVM) の最大ヒープ・サイズの設定を増やしてください。

**注:** `i5/OS` i5/OS システムでは、デフォルトの Java 最大ヒープ・サイズは \*NOMAX であるため、サイズを増加させる必要はありません。

メモリー不足の状態を処理するには、以下の手順を実行します。

### 手順

1. `installver_wbi` コマンド・スクリプトを編集する場合:

- `Linux` `UNIX` **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:  
`install_root/bin/installver_wbi.sh` ファイルを編集します。
- `Windows` **Windows** プラットフォームの場合:  
`install_root\bin\installver_wbi.bat` ファイルを編集します。

2. 最大ヒープ・サイズの設定を追加または増加させる場合:

- `Linux` `UNIX` **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合: 以下の行を変更します。

```
"$JAVA_HOME"/bin/java ¥
```

次のように変更:

```
"$JAVA_HOME"/bin/java -Xmx256M ¥
```

- `Windows` **Windows** プラットフォームの場合: 以下の行を変更します。  
"%JAVA\_HOME%\bin\java" "-Dproduct.home=%WAS\_HOME%"

次のように変更:

```
"%JAVA_HOME%\bin\java" -Xmx256M "-Dproduct.home=%WAS_HOME%"
```

3. 変更を保存します。

## タスクの結果

設定を変更した後、installver\_wbi コマンドが正しく機能することを確認するため、コマンドを実行してください。

## installver\_wbi コマンド

インストール済みのファイルについて検査合計を計算し、その検査合計と提供されている製品の部品表とを比較する場合に、installver\_wbi コマンドを使用します。

### 目的

installver\_wbi コマンドは、2 つの主要な機能を実行します。このコマンドは、インストール済みのファイルの検査合計を計算して、その検査合計を提供されている製品の部品表と比較します。また、installver\_wbi コマンドを使用して構成済みのシステムの品目内にある各ファイルごとに新しいベースライン検査合計を計算し、その後の比較処理でファイルの変更点を示すために使用することができます。

デフォルトのログ・ファイルは、*install\_root/logs/installver.log* ファイルです。-log パラメーターと引数を使用して、出力をリダイレクトすることができます。デフォルトのログ・ファイルを生成する場合は、-log パラメーターをファイル引数なしで使用してください。

**検査合計の計算:** installver\_wbi コマンドは、製品のインストール済みのファイルごとに検査合計を計算します。このコマンドは、計算した各検査合計をファイルの正しい検査合計と比較します。正しい検査合計は、部品表ファイルとして提供されています。各コンポーネントごとに、部品表ファイルが 1 つずつ存在します。

このツールは、各コンポーネントの部品表ファイルを解析して、コンポーネントのファイルごとの正しい検査合計値を求めます。どの製品ファイルも、いずれかの部品表ファイルにエンタリーされています。1 つの製品ファイルのエンタリーでは、その製品のファイル・パスと正しい検査合計値を示しています。

**提供されている部品表ファイル:** 各部品表ファイルには、files.list という名前が付いています。各コンポーネントに、files.list ファイルが 1 つずつ提供されています。それぞれの files.list ファイルは、いずれかの *install\_root/properties/version/nif/backup/component\_name* ディレクトリーの中にあります。コンポーネントごとに *component\_name* ディレクトリーが存在します。

例えば、activity コンポーネント用の files.list ファイルは *install\_root/properties/version/nif/backup/component\_name* ディレクトリー内にあります。このファイルの例を以下に示します。

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<componentfiles componentname="activity">
  <file>
    <relativepath>properties/version/activity.component</relativepath>
    <checksum>1a20dc54694e81fccd16c80f7c1bb6b46bba8768</checksum>
    <permissions>644</permissions>
    <installoperation>remove</installoperation>
  </file>
  <file>
    <relativepath>lib/activity.jar</relativepath>
    <checksum>2f056cc01be7ff42bb343e962d26328d5332c88c</checksum>
```

```
<permissions>644</permissions>
<installoperation>remove</installoperation>
</file>
</componentfiles>
```

計算した検査合計を正しい検査合計と比較: ツールは、各部品表ファイル内の各製品ファイルの処理中に、それに対応するインストール済みの製品ファイルの実際の検査合計値も計算します。この後ツールは、製品ファイルの検査合計を、部品表ファイル内の正しい検査合計値と比較します。ツールは、これに相違点があれば、その相違点を報告します。

#### コマンド・ファイルのロケーション:

installver\_wbi コマンド・ファイルは、インストール・ルート・ディレクトリーの次の bin ディレクトリー内にあります。

- **i5/OS** i5/OS プラットフォームの場合: `install_root/bin/installver_wbi`
- **Linux** **UNIX** Linux および UNIX プラットフォームの場合:  
`install_root/bin/installver_wbi.sh`
- **Windows** Windows プラットフォームの場合: `install_root/bin/installver_wbi.bat`

コマンド行から installver\_wbi ツールを開始するには、ディレクトリーを bin ディレクトリーに移動します。このツールは、z/OS を除く、サポートされるすべてのオペレーティング・システム上で稼働します。例えば、Linux システムまたは UNIX システム上でツールを開始する場合は、以下のコマンドを使用します。

```
./installver_wbi.sh
```

注: **i5/OS** i5/OS では、これらのスクリプトを実行できるようにするために、ネイティブの i5/OS コマンド・ウィンドウから QSH または STRQSH コマンドを使用して、QShell を呼び出す必要があります。

#### コマンドの使用方法についての情報を表示するための構文

- **i5/OS** i5/OS プラットフォームの場合: `./installver_wbi -help`
- **Linux** **UNIX** Linux および UNIX プラットフォームの場合:  
`./installver_wbi.sh -help`
- **Windows** Windows プラットフォームの場合: `installver_wbi.bat -help`

#### 全コンポーネントをリストするための構文

- **i5/OS** i5/OS プラットフォーム: `./installver_wbi -listcomponents`
- **Linux** **UNIX** Linux および UNIX プラットフォーム:  
`./installver_wbi.sh -listcomponents`
- **Windows** Windows プラットフォーム: `installver_wbi.bat -listcomponents`

#### 製品ファイルを部品表ファイルと比較するための構文

部品表を自動的にインストール済みのファイル・システムと照合する場合は、以下のコマンド構文を使用します。

- **i5/OS** i5/OS プラットフォームの場合: `install_root/bin/installver_wbi`
- **Linux** **UNIX** Linux および UNIX プラットフォームの場合:  
`install_root/bin/installver_wbi.sh`
- **Windows** Windows プラットフォームの場合:  
`install_root¥bin¥installver_wbi.bat`

インストール済みファイルを製品の部品表ファイルと比較する場合のコマンドの使用例については、196 ページの『部品表との照合』を参照してください。

## 比較およびコマンド使用法の例

検査合計を比較するときに、比較の対象に指定のファイルのみを含める場合:

- **i5/OS** i5/OS プラットフォーム: `./installver_wbi -include fn1;fn2;fn3`
- **Linux** **UNIX** Linux および UNIX プラットフォーム:  
`./installver_wbi.sh -include fn1;fn2;fn3`
- **Windows** Windows プラットフォーム: `installver_wbi.bat -include fn1;fn2;fn3`

指定したファイルまたはコンポーネントのみを比較する場合のコマンドの使用例については、『特定のファイルおよびコンポーネントの検査合計の比較』を参照してください。

検査合計を比較するときに、比較の対象に指定のコンポーネントのみを含める場合:

- **i5/OS** i5/OS プラットフォーム: `./installver_wbi -includecomponent comp1;comp2;comp3;...`
- **Linux** **UNIX** Linux および UNIX プラットフォーム:  
`./installver_wbi.sh -includecomponent comp1;comp2;comp3;...`
- **Windows** Windows プラットフォーム: `installver_wbi.bat -includecomponent comp1;comp2;comp3;...`

検査合計を比較するときに、比較から特定のコンポーネントを除外する場合:

- **i5/OS** i5/OS プラットフォーム: `./installver_wbi -excludecomponent comp1;comp2;comp3;...`
- **Linux** **UNIX** Linux および UNIX プラットフォーム:  
`./installver_wbi.sh -excludecomponent comp1;comp2;comp3;...`
- **Windows** Windows プラットフォーム: `installver_wbi.bat -excludecomponent comp1;comp2;comp3;...`

比較からファイルを除外する場合のコマンドの使用例については、204 ページの『検査合計の比較からのファイルの除外』を参照してください。

検査合計を比較するときに、ユーザーが除外したファイルは無視する場合:

- **i5/OS** i5/OS プラットフォームの場合: `./installver_wbi -ignoreuserexclude`

- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:  
./installver\_wbi.sh -ignoreuserexclude
- **Windows** **Windows** プラットフォーム: installver\_wbi.bat -ignoreuserexclude

検査合計を比較するときに、IBM が除外したファイルが無視する場合:

- **i5/OS** **i5/OS** プラットフォーム: ./installver\_wbi -ignoreibmexclude
- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォーム:  
./installver\_wbi.sh -ignoreibmexclude
- **Windows** **Windows** プラットフォーム: installver\_wbi.bat -ignoreibmexclude

全コンポーネントのリストのみをする場合:

- **i5/OS** **i5/OS** プラットフォーム: ./installver\_wbi -listcomponents
- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォーム:  
./installver\_wbi.sh -listcomponents
- **Windows** **Windows** プラットフォーム: installver\_wbi.bat -listcomponents

テンプレート (除外されたファイルのリスト用) のみを作成する場合:

- **i5/OS** **i5/OS** プラットフォーム: ./installver\_wbi -createtemplate
- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォーム:  
./installver\_wbi.sh -createtemplate
- **Windows** **Windows** プラットフォーム: installver\_wbi.bat -createtemplate

## 検査合計を部品表と照合するためのパラメーター

製品ファイルの検査合計を部品表ファイルの正しい検査合計と比較する際に、コマンドに関連付けられるパラメーターを以下に示します。

**-componentdir** *directory\_1;directory\_2;directory\_n*

WebSphere Application Server 製品がコンポーネントごとの個々の部品表リストを格納するディレクトリーの名前を示すオプション・パラメーター。

デフォルト値は *install\_root/properties/version/nif/backup* ディレクトリーです。

**-createtemplate** [*file\_name* ]

検査合計の比較からファイルを除外するためのテンプレート・プロパティ・ファイルを作成します。テンプレート・プロパティ・ファイルを編集して、検査から除外したい各ファイルごとに 1 行ずつ追加します。

ファイル指定引数がない場合、installver\_wbi ツールは、*install\_root/properties/ivu\_user.template* ファイルを作成します。

ファイル名を指定した場合、installver\_wbi ツールは、作業ディレクトリー (デフォルトでは *install\_root/profiles/profile\_name/bin* ディレクトリー) 内にそのファイルを作成します。

- **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合: コマンド行で以下を入力します。
  1. *cdinstall\_root/bin*

2. `./installver_wbi -createtemplate`

- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合: コマンド行で以下を入力します。

1. `cd install_root/bin`

2. `./installver_wbi.sh -createtemplate`

- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: コマンド行で以下を入力します。

1. `cd install_root\bin`

2. `installver_wbi.bat -createtemplate`

`installver_wbi` ツールは、デフォルト・プロファイルの `properties` ディレクトリ一内に、テンプレート・プロパティ・ファイルを作成します。

- **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合: `default_profile_root/properties/ivu.user.template`

- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合: `default_profile_root/properties/ivu.user.template`

- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: `default_profile_root\properties\ivu.user.template`

**-exclude** *file1;file2;file3; ...*

複数のファイルを検査から除外します。

セミコロン (;) またはコロン (:) を使用して、ファイル名とファイル名を区切ります。

**-excludecomponent** *component1;component2;component3; ...*

複数のコンポーネントを検査から除外します。

セミコロン (;) またはコロン (:) を使用して、コンポーネント名とコンポーネント名を区切ります。

**-filelist** *file\_name*

IBM が特定の製品コンポーネント内の製品ファイルの正しい検査合計を識別するために使用するファイルの名前を示すオプション・パラメーター。

デフォルト値は `files.list` です。

**-help**

使用法の情報を表示します。

**-ignoreuserexclude**

デフォルトの `install_root/properties/ivu_user.template` ファイルが存在しているときに、このデフォルトのファイルを見捨て、テンプレートにリストされているファイルと比較します。

ファイル指定で `-createtemplate` パラメーターを使用して、別のロケーションにテンプレート・ファイルを作成する場合は、`-ignoreusertemplate` パラメーターを指定しても効果はありません。

**-ignoreibmexclude**

インストール・ルート・ディレクトリー内にあるすべてのファイルの検査合計を比較します。IBM は、デフォルトで検査から特定のファイルを除外するように指定しています。-ignoreibmexclude パラメーターを使用すると、installver\_wbi ツールで、これらのファイルも含めて検査を行うことができます。

**-include** *file1;file2;file3; ...*

指定するファイルを検査の対象に含めて、その他のファイルすべてを除外します。

セミコロン (;) またはコロン (:) を使用して、ファイル名とファイル名を区切ります。

**-includecomponent** *component1;component2;component3; ...*

指定するコンポーネントを検査の対象に含めて、その他のコンポーネントすべてを除外します。

セミコロン (;) またはコロン (:) を使用して、コンポーネント名とコンポーネント名を区切ります。

**-installroot** *directory\_name*

デフォルトのインストール・ルート・ディレクトリーを指定変更します。

**-listcomponents**

製品のコンポーネントのリストを表示します。コンポーネントごとに 1 つずつ files.list ファイルがあります。

**-log** [*file\_path\_and\_file\_name\_of\_log\_file*]

デフォルトのログ・ファイルは、*install\_root/logs/installver.log* ファイルです。-log パラメーターと引数を使用して、出力をリダイレクトすることができます。

**-profilehome** *directory\_name*

インストール・ルート・ディレクトリー内のデフォルト・プロファイル・ディレクトリーを指定変更します。

**-trace**

ツールの検査対象とツールが発見した内容のトレース出力を提供します。

## 構成済みファイルの品目に対する新しいベースライン検査合計を作成および使用するための構文

構成済みファイルの品目を作成し、これを現在インストールされているファイルと比較するには、以下の構文を使用します。

インストール・ルート・ディレクトリーに現在インストールされているファイルの品目リストを作成する場合:

- **i5/OS** i5/OS プラットフォームの場合: `./installver_wbi -createinventory [path/file_name], such as ./installver_wbi -createinventory /tmp/system.inv`
- **Linux** **UNIX** Linux および UNIX プラットフォームの場合:  
`./installver_wbi.sh -createinventory [path/file_name], such as  
./installver_wbi.sh -createinventory /tmp/system.inv`

- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: `installver_wbi.bat`  
`-createinventory [path%file_name]`, such as `installver_wbi.bat`  
`-createinventory C:%temp%system.inv`

品目リストを、インストール・ルート・ディレクトリーに現在インストールされているファイルと比較する場合:

- **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合: `./installver_wbi -compare /path/file_name`
- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:  
`./installver_wbi.sh -compare /path/file_name`
- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: `installver_wbi.bat -compare path%file_name`

比較してトレースの結果を表示する場合:

- **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合: `./installver_wbi -compare /path/file_name -trace`
- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:  
`./installver_wbi.sh -compare /path/file_name -trace`
- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: `installver_wbi.bat -compare /path/file_name -trace`

使用法の情報を表示する場合:

- **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合: `./installver_wbi -help`
- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:  
`./installver_wbi.sh -help`
- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: `installver_wbi.bat -help`

比較するときに、品目の比較から指定したファイルを除外する場合:

- **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合: `./installver_wbi -compare /path/file_name -exclude fn1;fn2;fn3;...`
- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:  
`./installver_wbi.sh -compare /path/file_name -exclude fn1;fn2;fn3;...`
- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: `installver_wbi.bat -compare %path%file_name -exclude fn1;fn2;fn3;...`

比較するときに、品目の比較に指定したファイルのみを対象として含める場合:

- **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合: `./installver_wbi -compare /path/file_name -include fn1;fn2;fn3;...`
- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:  
`./installver_wbi.sh -compare /path/file_name -include fn1;fn2;fn3;...`

- **Windows** Windows プラットフォームの場合: `installver_wbi.bat -compare /path/file_name -include fn1;fn2;fn3;...`

## ファイル品目の検査合計を作成および使用するためのパラメーター

このコマンドに関連付けられるパラメーターを以下に示します。

### **-compare** *file\_path\_and\_file\_name\_of\_existing\_inventory\_file*

既存の品目リストを既存ファイルと比較して、相違点を調べます。

最初に `-createinventory` パラメーターを使用して、品目リストを作成します。次に、`-compare` パラメーターを使用して、この品目リストを、比較時にシステム内に存在する実際のファイルと比較します。

比較の結果として、変更されたクラス、変更されたファイル、欠落ファイル、追加されたファイルが示されます。このような比較は、ウイルス・ファイルがないかどうかの検査などに非常に役に立ちます。

### **-createinventory** *directory\_name*

`profile_root/bin` ディレクトリーなどの現行作業ディレクトリー内の `sys.inv` ファイルに、デフォルトで新しい検査合計を作成します。ファイル・パスとファイル名を指定することができます。インストール・ルート・ディレクトリーの外部にファイルを作成したり、比較からファイルを除外したりします。

`installver_wbi` ツールは、どのディレクトリーでも指示することができます。デフォルト・ディレクトリーは、インストール・ルート・ディレクトリーです。

品目からファイルまたはコンポーネントを除外することができます。

`installver_wbi` ツールは、ファイルごとに検査合計を計算します。品目内の各ファイルのエントリーには、以下の一般的なパターンがあります。

`checksum|relativepath/file_name|file_size|last_modified_time`

品目リストを作成したら、`-compare` パラメーターを使用して、このリストを比較時にシステム内に存在する実際のファイルと比較します。

### **-exclude** *file1;file2;file3;...*

複数のファイルを比較から除外します。

セミコロン (;) またはコロン (:) を使用して、ファイル名とファイル名を区切ります。

### **-help**

使用法の情報を表示します。

### **-include** *file1;file2;file3; ...*

ファイルを比較の対象に含めて、その他のファイルすべてを除外します。

セミコロン (;) またはコロン (:) を使用して、ファイル名とファイル名を区切ります。

### **-installroot** *directory\_name*

デフォルトのインストール・ルート・ディレクトリーを指定変更します。

### **-log** [*file\_path\_and\_file\_name\_of\_log\_file*]

デフォルトのログ・ファイルは、`install_root/logs/installver.log` ファイルです。`-log` パラメーターと引数を使用して、出力をリダイレクトすることができます。

#### **-trace**

ツールの検査対象とツールが発見した内容のトレース出力を提供します。

### **例**

以下の例は、`installver_wbi` コマンドを実行して検査合計を比較したときに発生する可能性のある問題を示しています。

コンポーネントの拡張時に発生するような、意図的に生じた検査合計の不一致のエントリーは無視してください

変更した各ファイルごとに検査合計は異なります。

```
I CWNVU0470I: [ivu] Starting to analyze: regularcomponentsample
I CWNVU0440I: [ivu] The following file is different: lib/different.jar
I CWNVU0410I: [ivu] fc19318dd13128ce14344d066510a982269c241b is the checksum in
the bill of materials.
I CWNVU0420I: [ivu] 517d5a7240861ec297fa07542a7bf7470bb604fe is the checksum on
the file system.
I CWNVU0390I: [ivu] Component issues found : 1
I CWNVU0480I: [ivu] Done analyzing: regularcomponentsample
```

#### **明らかな通知 (I) メッセージは無視してください**

いくつかのメッセージは、通常期待される結果からの逸脱を示しますが、重大な問題を示してはいません。

```
I CWNVU0360I: [ivu] The following bill of materials issue is found for component
nullvaluesample:
Hash must not be null or an empty string.
```

ファイルが重複している場合は、潜在的な製品の問題または IBM 提供の部品表の不正変更の可能性があります。

```
I CWNVU0470I: [ivu] Starting to analyze: overlapbinarycomponentsample
W CWNVU0422W: [ivu] The following file is overlapped: lib/binaryTest.jar
W CWNVU0425W: [ivu] The overlap is caused by: _binarycomponentsample
I CWNVU0390I: [ivu] Component issues found : 1
I CWNVU0480I: [ivu] Done analyzing: overlapbinarycomponentsample
```

#### **以下の問題については、IBM サポートにお問い合わせください**

次の形式のメッセージが表示された場合は、IBM サポートに連絡してください。

```
W CWNVU0280W: [ivu] Component mismatch: expected ... but found ...
```

既知の問題とその解決策についての IBM サポートの有効な現行情報については、この IBM サポート・ページを参照してください。

IBM サポートが提供する資料を参照すれば、この問題を解決するために必要な情報を集めるための時間を節減することができます。PMR を開く前に、この IBM サポート・ページを参照してください。

類似したインストールの既知の問題が見つからない場合、または提供されている情報では問題が解決しない場合は、IBM サポートに連絡してください。

## 次の手順

インストールの検査が終了したら、プロファイルを作成するか、または既存プロファイルでアプリケーションをデプロイすることができます。



---

## 第 7 章 ほかの WebSphere 製品のインストール済み環境との共存

WebSphere Process Server バージョン 6.2 のインストール済み環境は、同一システム上で任意のバージョンの WebSphere Enterprise Service Bus、WebSphere Process Server、および精選された WebSphere 製品と共存できます。

WebSphere Process Server バージョン 6.2 のインストール済み環境は、以下のサポート対象製品とバージョンの 1 つ以上のインストール済み環境と同じシステム上で同時に稼働させることができます。

- IBM WebSphere Process Server バージョン 6.2、6.1.x、および 6.x
- IBM WebSphere Enterprise Service Bus バージョン 6.2、6.1.x、および 6.0.x
- IBM WebSphere Application Server バージョン 6.1、6.0.x、および 5.x
- IBM WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 6.1、6.0.x、および 5.x
- IBM WebSphere Business Integration Server Foundation バージョン 5.x
-    IBM WebSphere Application Server Enterprise バージョン 5.0.x

共存を構成する際、通信エラーを防ぐために発生したすべてのポートの競合を解決する必要があります。サーバーの各バージョンには、異なるデータベースがインストールされている必要があります。

共存と、以下に説明するマイグレーション、更新、または相互協調処理 とを混同しないようにしてください。

- **マイグレーション** とは、WebSphere Process Server の前のリリースから新しいリリースに構成をコピーすることです。WebSphere Process Server または WebSphere ESB の前のバージョンを既にインストールしているシステムに WebSphere Process Server バージョン 6.2 をインストールして、WebSphere Process Server または WebSphere ESB のより新しいバージョンにマイグレーションする場合、詳しくは、WebSphere Process Server へのマイグレーションを参照してください。
- **更新** とは、既存のインストール済み環境にある古いファイルまたはデータを現行情報で置き換えることです。リフレッシュ・パック、暫定修正、フィックスパックなどが更新の例として挙げられます。更新の方法について詳しくは、569 ページの『第 10 章 Update Installer を使用したフィックスパックおよびリフレッシュ・パックのインストール』を参照してください。
- **相互協調処理** とは、共存する複数の製品インストール済み環境などの 2 つの異なるシステム間でデータを交換することです。通常、WebSphere Process Server のこのバージョンは、多数の前のバージョンと相互協調処理が可能です。インターオペラビリティ (相互運用性) をサポートするには、最新の修正レベルを適用

する必要があります。詳しくは、『WebSphere Process Serverと他の WebSphere Application Server 製品との間のインターオペラビリティの計画』を参照してください。

---

## 各種 WebSphere 製品の既存のインストール済み環境と共存する WebSphere Process Server または WebSphere Process Server Client のインストール

この手順を使用して、WebSphere Process Server、WebSphere Process Server Client、WebSphere Enterprise Service Bus、または WebSphere Application Server あるいは WebSphere Application Server Network Deployment のサポートされているバージョンのいずれかが既にインストールされているシステムに WebSphere Process Server または WebSphere Process Server Client をインストールします。この手順では、インストール・ウィザードのグラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) を使用します。

### 始める前に

38 ページの『WebSphere Process Server のインストールに関する前提条件』で、製品をインストールするための前提条件リストを確認します。

### このタスクについて

この手順は、以下の製品のうち 1 つ以上が既にインストールされていることを前提としています。

- WebSphere Process Server、 WebSphere Process Server クライアント、または WebSphere Enterprise Service Bus バージョン 6.2
- WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 6.1

既存のプロファイルは必要ありません。また、対話式インターフェースを使用してインストールすることも前提になっています。以下の手順を使用して、製品をインストールします。

### 手順

1. 96 ページの『WebSphere Process Server の対話式インストール』のトピックに進んでステップに従ってインストール・ウィザードを開始し、ご使用条件を受け入れて前提条件を確認します。

この手順は、システム上にある以下の製品の既存のインストールを識別します。

- WebSphere Process Server、 WebSphere Process Server クライアント、または WebSphere Enterprise Service Bus バージョン 6.2
  - WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 6.1
2. システム上の既存のインストール済み環境を確認するパネルを表示したら、WebSphere Process Server の新規コピーをインストールして既存のバージョンと共存させることを選択します。

3. インストール・ウィザードの各パネルの手順を実行して進み、製品をインストールします。「インストールの結果」パネルに「成功」と表示されている場合、製品は正常にインストールされています。インストール時にプロファイルを作成した場合は、プロファイルが正常に作成されています。
4. 必要に応じて、プロファイル管理ツールまたは `manageprofiles` コマンドを使用して、プロファイルを作成します。

プロファイル作成時に、`manageprofiles` コマンドでは、デフォルトのポート値の代わりに指定したポート値を使用できます。ポート・ファイルを使用することも、開始ポートを指定することも、デフォルトのポート値を受け入れることもできます。詳しくは、302 ページの『`manageprofiles` コマンド』を参照してください。

5. インストールが正常に終了したら、スタンドアロン・サーバー・プロファイルまたはデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成した後に、ファースト・ステップ・コンソールから製品を始動し、インストール済み環境が適切に作動していることを確認します。詳しくは、165 ページの『ファースト・ステップ・コンソールのオプション』を参照してください。インストール検査ツールを使用してインストールの検査を行うこともできます。詳しくは、193 ページの『第 6 章 製品のインストールの検査』を参照してください。
6. ポートの競合のために始動できないノードがある場合は、構成ファイル内のポートの割り当てを競合しないポートに変更します。以下の方法のいずれかを使用します。
  - `updatePorts` ツールを実行します。『Updating ports in an existing profile』を参照してください。
  - `profile_root/config/cells/cell_name/nodes/node_name/serverindex.xml` ファイルを編集します。『スクリプトによる `serverindex.xml` ファイルに保持されているポート番号の設定』を参照してください。
  - スクリプトを実行します。詳しくは、『アプリケーション・サービス提供環境のスクリプト記述 (`wsadmin`)』を参照してください。

## タスクの結果

これで、WebSphere Process Server の 2 つのインストール済み環境を同一のシステム上に共存させることができました。

---

## WebSphere Business Integration Server Foundation、および選択した 6.0 より前のバージョンの WebSphere Application Server 製品の構成インスタンスと共存する新規 WebSphere Process Server プロファイルの作成

この手順を実行して、単一のシステム上で WebSphere Business Integration Server Foundation バージョン 5.x、WebSphere Application Server バージョン 5.x、WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 5.x、または WebSphere Application Server Enterprise バージョン 5.0.x の構成インスタンスと共存するように WebSphere Process Server バージョン 6.2 プロファイルを作成します。この手順では、プロファイル管理ツールのグラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) を使用します。

## 始める前に

プロファイルの作成または拡張に関する一般的な前提条件を 232 ページの『プロファイルの作成または拡張に関する前提条件』で確認してください。また、240 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの作成』または 278 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの拡張』に特有の前提条件についても検討してください。これらの前提条件に加えて、以下のいずれかの既存のインストール済み環境が存在している必要もあります。

- 既存の構成インスタンスを持つ WebSphere Business Integration Server Foundation バージョン 5.x。
- 既存の構成インスタンスを持つ WebSphere Application Server バージョン 5.x、WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 5.x、または WebSphere Application Server Enterprise バージョン 5.0.x。 WebSphere Application Server Enterprise バージョン 5.0.x との共存は、Linux、UNIX、および Windows プラットフォームでのみサポートされます。

## このタスクについて

新規プロファイルを作成するには、以下の手順を実行します。

### 手順

1. 新規 WebSphere Process Server プロファイルを作成します。

そのためには、240 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの作成』または 278 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの拡張』の手順を実行します。

プロファイル管理ツールを使用して処理を進めるときには、「ポート値割り当て」パネル上で、新規プロファイル用に指定されたポートが、既存の構成インスタンスに割り当てられたポートとは異なる固有のポートであることを確認してください。

2. スタンドアロン・サーバー・プロファイルまたはデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成した場合は、そのプロファイルが共存するインスタンスと共に正しく動作していることを確認します。プロファイルが正しく動作していることを確認するには、共存するインスタンスの稼働中にファースト・ステップ・コンソールからプロファイルを開始します。正常に開始された場合、プロファイルは正しく動作しています。

## タスクの結果

新しい WebSphere Process Server プロファイルが存在します。

---

## ほかの WebSphere 製品のプロファイルと共存する新しい WebSphere Process Server プロファイルの作成

以下の手順を使用して、WebSphere Enterprise Service Bus バージョン 6.0.x、6.1、6.2 と WebSphere Application Server バージョン 6.0 と 6.1、または WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 6.0 または 6.1 のプロファイルと単一のワークステーションで共存させる WebSphere Process Server プ

ロファイルを作成します。この手順では、プロファイル管理ツールのグラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) を使用します。

## 始める前に

プロファイルの作成または拡張に関する一般的な前提条件を 232 ページの『プロファイルの作成または拡張に関する前提条件』で確認してください。また、240 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの作成』または 278 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの拡張』に特有の前提条件についても検討してください。それらの前提条件に加えて、WebSphere Enterprise Service Bus バージョン 6.2、6.1、または 6.0.x、WebSphere Application Server バージョン 6.0 および 6.1、または WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 6.0 または 6.1 がすでにインストールされていて、既存のプロファイルが存在していることも必要です。

## このタスクについて

新規プロファイルを作成するには、以下の手順を実行します。

### 手順

1. 新規 WebSphere Process Server プロファイルを作成します。

そのためには、240 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの作成』または 278 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの拡張』の手順を実行します。

プロファイル管理ツールを使用して処理を進めるときには、「ポート値割り当て」パネル上で、新規プロファイル用に指定されたポートが、既存のプロファイルに割り当てられたポートとは異なる固有のポートであることを確認してください。

2. スタンドアロン・サーバー・プロファイルまたはデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成した場合、そのプロファイルが共存するプロファイルと共に正しく動作していることを確認します。プロファイルが正しく動作していることを確認するには、共存するプロファイルの稼働中にファースト・ステップ・コンソールからそのプロファイルを開始します。正常に開始された場合、プロファイルは正しく動作しています。

## タスクの結果

新しい WebSphere Process Server プロファイルが存在します。



---

## 第 8 章 ソフトウェアの構成

WebSphere Process Server をインストールしたら、追加の構成タスクを完了して、ランタイム環境を完全に準備する必要があります。

---

### プロファイルの構成

スタンドアロン・サーバー・プロファイル、デプロイメント・マネージャー・プロファイル、およびカスタム・プロファイル (管理対象ノード) という 3 つの種類のプロファイルがあります。各プロファイルは、別々のファイル (コマンド、構成ファイル、およびログ・ファイル) を使用して、別々のランタイム環境を定義します。このセクションの各トピックでは、WebSphere Process Server のインストール後にこれらのプロファイルを使用するために実行が必要になる場合があるタスクについて、詳細に説明しています。

### プロファイル

プロファイルでは、個別のコマンド・ファイル、構成ファイル、ログ・ファイルを持つ固有のランタイム環境を定義します。プロファイルでは、スタンドアロン・サーバー、デプロイメント・マネージャー、および管理対象ノードの 3 つのタイプの環境を定義します。

プロファイルを使用すると、WebSphere Process Server バイナリー・ファイルの複数のコピーをインストールしなくても、1 つのシステムに複数のランタイム環境を保持することができます。

最初のプロファイルは、WebSphere Process Server のインストール時に自動的に作成されます。後で、バイナリー・ファイルの 2 つめのコピーをインストールしなくても、プロファイル管理ツールまたは `manageprofiles` コマンドを使用して、同じシステム上に追加のプロファイルを作成することができます。

**注:** 分散プラットフォームでは、各プロファイルには固有の名前があります。z/OS では、すべてのプロファイルに「default」という名前が付けられます。

### プロファイル・ディレクトリー

システム内の各プロファイルには、それぞれのファイルをすべて収容するための独自のディレクトリーがあります。プロファイルの作成時に、プロファイル・ディレクトリーの場所を指定します。デフォルトでは、WebSphere Process Server がインストールされたディレクトリーの `profiles` ディレクトリーになります。例: `Dmgr01` プロファイルは `C:\Program Files\IBM\WebSphere\ProcServer\profiles\Dmgr01` です。

### ファースト・ステップ・コンソール

**Linux** **UNIX** **Windows** **i5/OS** システム内のすべてのプロファイルには、ファースト・ステップ・コンソールがあります。このコンソールは、スタンド

アロン・サーバー、デプロイメント・マネージャー、または管理対象ノードを熟知するためのユーザー・インターフェースです。

## デフォルト・プロファイル

WebSphere Process Server の 1 つのインストール環境内に作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、WebSphere Process Server がインストールされたディレクトリー内の `¥bin` ディレクトリーから出されるコマンドのデフォルトのターゲットです。システム上にプロファイルが 1 つしかない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに対して作用します。プロファイルをもう 1 つ作成すると、そのプロファイルをデフォルトにすることができます。

**注:** デフォルト・プロファイルは、必ずしも「default」という名前のプロファイルではあるとは限りません。

## プロファイルの拡張

WebSphere Application Server Network Deployment または WebSphere ESB 用に作成されたデプロイメント・マネージャー、カスタム・プロファイル、またはスタンドアロン・サーバーが既にある場合は、既存の機能のほかに WebSphere Process Server をサポートするように、そのプロファイルを拡張できます。プロファイルを拡張するには、最初に WebSphere Process Server をインストールします。次にプロファイル管理ツールまたは `manageprofiles` コマンドを使用します。

**制約事項:** プロファイルが、既にデプロイメント・マネージャーに統合済みの管理対象ノードを定義する場合は、そのプロファイルを拡張できません。

## プロファイルの作成または拡張に関する前提条件

プロファイルの作成または拡張を実行する前に、一連の前提条件を満たしていることを確認する必要があります。

- WebSphere Process Server が既にインストールされている。インストールされていない場合は、81 ページの『第 4 章 ソフトウェアのインストール』にあるインストール手順を参照してください。
- 製品をインストールしたユーザー ID でない場合は、WebSphere Process Server インストール内の選択されたディレクトリーへの書き込み権限を持つ必要があります。それらの権限を取得する方法については、235 ページの『非 root ユーザーに対するファイルとディレクトリーの書き込み権限の、プロファイル作成のための付与』を参照してください。プロファイルは、`install_root/profiles` 以外のディレクトリーに作成する必要があります。

**注:** i5/OS の場合、プロファイルを作成するユーザーは、システムの `*ALLOBJ` 権限、または `*SECOFR` ユーザー・クラスを持つ必要があります。また、i5/OS のプロファイルが `user_data_root/profiles/..` 下に作成されます。分散プラットフォームのように `install_root/profiles` ではありません。

- 作成または拡張するプロファイルのタイプがわかっている。プロファイルについて詳しくは、231 ページの『プロファイル』を参照してください。
- プロファイルを作成または拡張する場合は、以下の正しい手順に従う必要がある。

- 既存のプロファイルを拡張するのではなく新しいプロファイルを作成する場合は、以下のトピックのいずれかを参照してください。
  - 対話式インターフェースを使用してプロファイルを作成する場合: 240 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの作成』
  - `manageprofiles` コマンドを使用してプロファイルを作成する場合: 246 ページの『`manageprofiles` コマンドを使用したプロファイルの作成』
- 既存の WebSphere Application Server、WebSphere Application Server Network Deployment、または WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルに WebSphere Process Server プロファイルに拡張する場合は、以下のトピックの 1 つを参照してください。
  - 対話式インターフェースを使用してプロファイルを拡張する場合: 278 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの拡張』
  - `manageprofiles` コマンドを使用してプロファイルを拡張する場合: 284 ページの『`manageprofiles` コマンドを使用したプロファイルの拡張』

**重要:** プロファイル管理ツールまたは `manageprofiles` コマンドを使用して拡張しようとしているプロファイルは、既に統合済みの管理対象ノードを定義できません。

- 64 ビット・プラットフォーム (i5/OS は除く) または Linux on System z プラットフォーム上でプロファイルを作成または拡張するときは、プロファイル管理ツールを使用できません。これらのプラットフォーム上でプロファイルを作成または拡張するには、`manageprofiles` コマンドを使用する必要があります。詳しくは、246 ページの『`manageprofiles` コマンドを使用したプロファイルの作成』を参照してください。
- 拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーをシャットダウンする。
- プロファイル、ノード、ホスト、およびセル (該当する場合) の名前を設定するときに検討しなければならない予約語や問題点について、633 ページの『プロファイル、ノード、ホスト、およびセルの命名の考慮事項』の情報を確認する必要があります。
- 新しいプロファイルの作成または拡張に十分なディスク・スペースと一時スペースがある。スペース所要量については、WebSphere Process Server detailed system requirementsにある WebSphere Process Server の詳細なシステム要件を参照し、WebSphere Process Server のバージョンのリンクを選択してください。

以下は、製品データベースに関連する前提条件です。

- プロファイルの作成と拡張のプロセスで、Common Event Infrastructure コンポーネントで使用するデータベースと、他の選択したコンポーネントで使用する共通データベースを構成することを確認します。新しいデータベースとテーブルを作成する場合、またはユーザーやデータベース管理者 (DBA) が手動で実行する必要があるスクリプトを作成して実際のデータベース構成を先送りする場合のいずれでも、以下のデータベース詳細情報を確認しなければなりません。
  - データベース構成の場合:
    - 共通データベース名
    - Common Event Infrastructure データベース名
    - データベース認証用のユーザー ID およびパスワード (Derby Embedded の場合は不要)。

- JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのディレクトリーの場所 (Derby Embedded、Derby Network Server、または Microsoft SQL Server Embedded の場合は不要)。
  - データベース・サーバー・ホスト名 (Derby Embedded または DB2 Universal Runtime Client では不要)。
  - サーバー・ポート (Derby Embedded、DB2 for i5/OS (ネイティブ)、DB2 for i5/OS (ツールボックス)、DB2 UDB for iSeries (ツールボックス)、DB2 UDB for iSeries (ネイティブ)、または DB2 Universal Runtime Client では不要)。
  - イベント・サービス・インスタンス名 (Informix Dynamic Server、Oracle、および Microsoft SQL Server コマンド行でのみ必要)。
  - データベース・サーバーのインストール・ディレクトリー (Informix Dynamic Server および Oracle でのみ必要)。
  - システム管理者のユーザー ID とパスワード (Oracle および Microsoft SQL Server でのみ必要)。
  - Oracle 11g では、プロファイルを作成する前に、SYSDBA 特権のあるユーザー ID を取得している必要があります。
  - データベース・サーバー名 (Microsoft SQL Server でのみ必要)。
  - データベース・ノード名 (DB2 サーバーがリモートの場合) (DB2 Universal の場合のみ必須)。
  - JDBC ドライバー・タイプ (DB2 Universal Database、Oracle 9i、Oracle 10g、または Oracle 11g でのみ必要)。
  - データベース別名 (DB2 for z/OS V8 および V9 でのみ必要)。
  - 接続ロケーション (DB2 for z/OS V8 および V9 でのみ必要)。
  - ストレージ・グループ名 (DB2 for z/OS V8 および V9 でのみ必要)。
  - データベース・サブシステム名 (DB2 for z/OS V8 および V9 でのみ必要)。
  - 4K、8K、および 16K のバッファ・プール名 (DB2 for z/OS V8 および V9 のコマンド行でのみ設定可能)。
  - イベント・サービス・データベースのディスク・サイズ (DB2 for z/OS V8 および V9 のコマンド行でのみ設定可能)。
  - データベース・コレクション名 (DB2 for i5/OS (ネイティブ)、DB2 for i5/OS (ツールボックス) で必要)。
  - イベント・サービス・インスタンス名 (Informix Dynamic Server でのみ必要)。
  - CommonDB ユーザー ID およびパスワード (Oracle でのみ必要で、デプロイメント環境 Dmgr プロファイルには適用外)。
- 共通データベース・リポジトリーをリモート・サーバーで使用、または作成する場合は、プロファイルの作成または拡張を開始する前にこのリポジトリーを作成する必要があります。ローカル・サーバーにリポジトリーを作成することも、リモート・サーバーの既存のリポジトリーを使用することも可能です。このデータベースを作成するために使用できるデフォルトのスキプトの場所については、69 ページの『製品インストール前の共通データベースの手動作成』を参照してください。
  - Common Event Infrastructure および共通データベースのリポジトリーとして、リモート z/OS マシン上の DB2 を使用する場合は、DBA が z/OS サーバー上に 3 つのデータベース (event、eventcat、および WPRCSDB) を作成し、それぞれに対

して正しいストレージ・グループ (デフォルトは EVTST0) を作成する必要があります。DBA は、サイトの標準的なデータベース定義ツールや手順を使用できます。

CreateDB.sh を実行する前に、以下のバッファー・プールをこれらの DB2 コマンドで割り振る必要があります。

```
-ALTER BUFFERPOOL (BP1) VPSIZE(20000)  
-ALTER BUFFERPOOL (BP2) VPSIZE(20000)  
-ALTER BUFFERPOOL (BP3) VPSIZE(20000)
```

また、これらを使用する権限が以下のように付与されていることを確認する必要があります。

```
GRANT USE OF BUFFERPOOL BP1 TO PUBLIC;  
GRANT USE OF BUFFERPOOL BP2 TO PUBLIC;  
GRANT USE OF BUFFERPOOL BP3 TO PUBLIC;
```

- event データベースと eventcat データベース、および関連するストレージ・グループを作成する場合、DBA は『イベント・データベースの構成』とそのサブトピックを参照します。
- WPRCSDB データベースとそれに関連するストレージ・グループを作成する場合、DBA は、以下のディレクトリーにあるデフォルト・スクリプトを編集して実行してください。

```
- Linux UNIX install_root/dbscripts/CommonDB/DB2zOSV8/ または  
install_root/dbscripts/CommonDB/DB2zOSV9/
```

```
- Windows install_root¥dbscripts¥CommonDB¥DB2zOSV8¥ または  
install_root¥dbscripts¥CommonDB¥DB2zOSV9¥
```

これらの前提条件について検討したら、このトピックにアクセスする前に参照していた元のトピックに戻ります。

## 非 root ユーザーに対するファイルとディレクトリーの書き込み権限の、プロファイル作成のための付与

製品のインストール・ユーザー (root または管理者の場合と非 root ユーザーの場合がある) は、該当する WebSphere Process Server のファイルとディレクトリーへの書き込み権限を他の非 root ユーザーに付与することができます。この権限付与を行うと、非 root ユーザーがプロファイルを作成できるようになります。製品インストーラーは、プロファイル作成の権限を持つユーザーのグループを作成することもでき、また個々のユーザーにプロファイル作成の権限を付与することもできます。以下の作業の例では、プロファイルの作成権限があるグループの作成方法を示しています。

**制約事項:** **i5/OS** このトピックで説明されているタスクは、i5/OS ではサポートされていません。

この説明全体にわたり、「インストール・ユーザー」と「製品インストール・ユーザー」という用語は、WebSphere Process Server をインストールしたユーザー ID のことを指しています。

**制約事項:** WebSphere Process Server では、製品インストール・ユーザーから他の非 root ユーザーへの既存のプロファイルの所有権の変更はサポートされていません。このため、非 root ユーザーによる、別のユーザーによって所有されているプロファイルの拡張はサポートされません。

非 root ユーザーは、自分の環境を管理できるように、独自のプロファイルを作成します。通常、これらのユーザーは開発の目的で環境を管理します。

非 root ユーザーは、製品の `install_root/profiles` ディレクトリーではなく、自身の専用ディレクトリー構造にプロファイルを格納する必要があります。

**制約事項:** プロファイルを作成する非 root ユーザーには、操作性の制限があります。固有の名前とポート値を提案するプロファイル管理ツール内の仕組みは、非 root ユーザーには使用不可になります。さらに非 root ユーザーは、プロファイル管理ツールのフィールドのうち、プロファイル名、ノード名、セル名、ポート割り当ての各フィールドのデフォルト値も変更する必要があります。製品インストール・ユーザーは、各フィールドの値の範囲を非 root ユーザーに割り当てることができ、また非 root ユーザーが各自の割り当てられた値の範囲を遵守し、また自分の定義の整合性を維持するための責任を非 root ユーザーに割り当てることができます。

### 製品インストール・ユーザーが適切な権限を付与するために実行する必要がある手順

インストール・ユーザーは、以下のステップを実行して、`profilers` グループを作成し、このグループにプロファイル作成のための適切な権限を付与することができます。

1. 製品インストール・ユーザーとして、WebSphere Process Server システムにログオンします。(製品インストール・ユーザーは、root または管理者の場合と非 root ユーザーの場合があります。)
2. オペレーティング・システム・コマンドを使用して、以下のようにします。
  - プロファイルの作成を実行できるユーザーをすべて組み込むグループ (名前は `profiles`) を作成します。
  - プロファイルの作成を実行できるユーザー (名前は `user1`) を作成します。
  - ユーザー `product_installer` と `user1` を `profilers` グループに追加します。
3. **Linux** **UNIX** ログオフし、インストール・ユーザーとして再びログオンして、新しいグループを有効にします。
4. インストール・ユーザーとして、以下のディレクトリーを作成します。

- **Linux** **UNIX** 次のように入力して、`install_root/logs/manageprofiles` ディレクトリーを作成します。

```
mkdir install_root/logs/manageprofiles
```

**Windows** Windows の資料の説明に従って、`install_root¥logs¥manageprofiles` ディレクトリーを作成します。この手順例の場合、ディレクトリーは次のとおりです。

```
install_root¥logs¥manageprofiles
```

- **Linux** **UNIX** 次のように入力して、*install\_root/properties/fsdb* ディレクトリーを作成します。

```
mkdir install_root/properties/fsdb
```

**Windows** Windows の資料の説明に従って、*install\_root%properties%fsdb* ディレクトリーを作成します。この手順例の場合、ディレクトリーは次のとおりです。

```
install_root%properties%fsdb
```

5. インストール・ユーザーとして、ご使用のオペレーティング・システムの方法に従って、*profileRegistry.xml* ファイルを作成します。この例の場合、ファイル・パスは次のとおりです。

**Linux** **UNIX**

```
install_root/properties/profileRegistry.xml
```

**Windows**

```
install_root%properties%profileRegistry.xml
```

ご使用のオペレーティング・システムの説明に従って、次の情報を *profileRegistry.xml* ファイルに追加します。ファイルは、UTF-8 でエンコードする必要があります。

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<profiles/>
```

6. 製品インストール・ユーザーとして、オペレーティング・システムのツールを使用して、ディレクトリーとファイルのアクセス許可を変更します。

**Linux** **UNIX**

次の例では、変数 *\$WASHOME* が WebSphere Process Server のルート・インストール・ディレクトリーの */opt/IBM/WebSphere/ProcServer* であると想定しています。

```
export WASHOME=/opt/IBM/WebSphere/ProcServer
echo $WASHOME
echo "Performing chgrp/chmod per WAS directions..."
chgrp profilers $WASHOME/logs/manageprofiles
chmod g+wr $WASHOME/logs/manageprofiles
chgrp profilers $WASHOME/properties
chmod g+wr $WASHOME/properties
chgrp profilers $WASHOME/properties/fsdb
chmod g+wr $WASHOME/properties/fsdb
chgrp profilers $WASHOME/properties/profileRegistry.xml
chmod g+wr $WASHOME/properties/profileRegistry.xml
chgrp -R profilers $WASHOME/profileTemplates
```

**HP-UX**

次のコマンドをさらに実行します。ここで *profile\_template\_name* は、それぞれ *default*、*dmgr*、または *managed* です。

```
chmod -R g+wr $WASHOME/profileTemplates/profile_template_name/documents
```

プロファイルの作成時にファイルがプロファイル・ディレクトリーにコピーされる際、ファイルの所有権は保持されます。プロファイル・ディレクトリーにコピーされたファイルがプロファイル作成プロセスの一環で変更できるように、プロファイル・ディレクトリーに対する書き込み権限を付与しました。プロファイル

の作成を開始する前に、既に profileTemplate ディレクトリー構造に存在していたファイルは、プロファイルの作成時には変更されません。

**Linux** 以下の追加コマンドを発行します。

```
chgrp profilers $WASHOME/properties/Profiles.menu
chmod g+wr $WASHOME/properties/Profiles.menu
```

**Windows** 次の例では、変数 \$WASHOME が WebSphere Process Server のルート・インストール・ディレクトリーの C:\Program Files\IBM\WebSphere\ProcServer であると想定しています。Windows の資料の説明に従って、profilers グループに以下のディレクトリーとそれらのファイルに対する読み取り権限および書き込み権限を付与します。

```
@WASHOME\logs\manageprofiles
@WASHOME\properties
@WASHOME\properties\fsdb
@WASHOME\properties\profileRegistry.xml
```

非 root ユーザーに許可エラーが発生した場合は、追加ファイルの許可を変更することが必要になる場合があります。例えば、製品インストール・ユーザーが非 root ユーザーにプロファイルの削除の権限を与える場合、製品インストール・ユーザーは以下のファイルを削除することが必要になる場合があります。

**Linux** **UNIX** `install_root/properties/profileRegistry.xml_LOCK`

**Windows** `install_root\properties\profileRegistry.xml_LOCK`

このファイルを削除する権限を非 root ユーザーに付与するには、そのユーザーにこのファイルへの書き込み権限を付与します。それでも非 root ユーザーがこのプロファイルを削除できない場合は、製品インストール・ユーザーがこのプロファイルを削除することができます。

## 結果

インストール・ユーザーが profilers グループを作成し、特定のディレクトリーとファイルに対する適切な、プロファイル作成のための権限をこのグループに付与しました。非 root ユーザーがプロファイルの作成のために書き込む必要がある、WebSphere Process Server のインストール・ルートに存在するディレクトリーとファイルはこれらだけです。

## 次の作業

profilers グループに属している非 root ユーザーは、この非 root ユーザーが所有していて、書き込み権限を持っているディレクトリーにプロファイルを作成することができます。ただし、非 root ユーザーは、製品のインストール・ルート・ディレクトリーにプロファイルを作成することはできません。

root 以外の 1 つのユーザー ID で、複数のプロファイルを管理することができます。同じ root 以外のユーザー ID で、プロファイルがサーバーとノード・エージェントが含まれたプロファイルであるデプロイメント・マネージャー・プロファイルであるか、カスタム・プロファイルであるかに関係なく 1 つのプロファイル全体を管理することができます。グローバル・セキュリティまたは管理セキュリティー

が使用可能か使用不可かに関係なく、セル内のプロファイルごとに異なるユーザー ID を使用することができます。ユーザー ID には、root と root 以外のユーザー ID を混用することができます。例えば、root ユーザーでデプロイメント・マネージャー・プロファイルを管理する一方で、非 root ユーザーでサーバーとノード・エージェントが含まれたプロファイルを管理することができ、またこの逆も可能です。ただし、通常は 1 root ユーザーまたは 1 非 root ユーザーがセル内のすべてのプロファイルを管理することができます。

非 root ユーザーは、root ユーザーがプロファイルを管理するために使用するのと同じタスクを使用できます。

## プロファイルの作成

新規の WebSphere Enterprise Service Bus または WebSphere Process Server プロファイルを作成する方法について説明します。プロファイルの作成は、manageprofiles コマンドを使用してコマンド行から行うことも、プロファイル管理ツールのグラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) を使用して対話式に行うこともできます。

### 始める前に

作成するプロファイルのタイプを選択します。プロファイルについて詳しくは、231 ページの『プロファイル』を参照してください。232 ページの『プロファイルの作成または拡張に関する前提条件』のトピックで、プロファイルを作成または拡張するための前提条件のリストを調べます。

### このタスクについて

デプロイメント・マネージャー、スタンドアロン・サーバー、またはカスタム・プロファイルの任意の組み合わせを作成できます。プロファイル管理ツールまたは manageprofiles コマンドを使用するたびに、プロファイルが 1 つ作成されます。

**制約事項:** 64 ビット・プラットフォーム (i5/OS を除く) または Linux on System z プラットフォーム上では、プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成または拡張することはできません。これらのプラットフォーム上でプロファイルを作成するには、manageprofiles コマンドを使用する必要があります。詳しくは、246 ページの『manageprofiles コマンドを使用したプロファイルの作成』を参照してください。

### 手順

プロファイルの作成を、manageprofiles コマンドを使用してコマンド行から行うか、プロファイル管理ツールを使用して対話式に行うかを決定します。高速で行う場合、または類似したプロファイルを作成するためにコマンド行 (またはプロパティ・ファイル) を再利用する場合は、コマンド行を使用します。ウィザードに手順を表示する場合は、プロファイル管理ツールを使用します。

- manageprofiles コマンドを使用してプロファイルを作成するには、246 ページの『manageprofiles コマンドを使用したプロファイルの作成』のトピックを参照してください。

- プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成するには、『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの作成』のトピックを参照してください。ここでは、以下の作業を実行します。
  - プロファイル管理ツールを開始します。
  - WebSphere Process Server と WebSphere Enterprise Service Bus のいずれのプロファイルを作成するかを選択します。
  - 作成するプロファイルのタイプ (スタンドアロン・サーバー、デプロイメント・マネージャー、またはカスタム) を選択します。
  - 実行するプロファイル作成のタイプを以下から選択します。
    - **標準的** (デフォルト)。デフォルトの構成設定でプロファイルが作成されます。
    - **高度**。プロファイルに独自の構成値を指定できます。
    - **デプロイメント環境** (デプロイメント・マネージャーまたはカスタム・プロファイルのみ)。デプロイメント・マネージャーを作成し、そのデプロイメント環境パターンを選択するか、管理対象ノードに適用するクラスター (複数可) を選択します。プロファイルの独自の構成値を指定します。
  - 選択したプロファイル作成のタイプに基づいて、トピック『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの作成』内のリンクにより適切な対話式手順を表示し、必要なプロファイル作成を実行できるようになります。

## プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの作成

プロファイル管理ツールのグラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) を使用して、スタンドアロン・サーバー・プロファイル、デプロイメント・マネージャー・プロファイル、またはカスタム・プロファイルを作成します。

### 始める前に

232 ページの『プロファイルの作成または拡張に関する前提条件』で、プロファイルを作成または拡張するための前提条件リストを確認してください。

次のステップを実行して、プロファイルを作成します。

### 手順

1. WebSphere Process Server プロファイル管理ツールを開始します。

以下のいずれかのコマンドを使用します。

- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:  
`install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh`
- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合:  
`install_root¥bin¥ProfileManagement¥pmt.bat`
- **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合:  
`pmt_client_installation¥PMT¥pmt.bat` (デフォルトでは  
`C:¥ProgramFiles¥IBM¥WebSphere¥PMTClient`)

このツールを開始するための各種の方法については、243 ページの『プロファイル管理ツールの開始』のトピックを参照してください。

次のステップは、WebSphere Application Server、WebSphere Application Server Network Deployment、WebSphere Application Server Network Deployment with Web Services Feature Pack、WebSphere Process Server、または WebSphere Enterprise Service Bus のプロファイルが既にシステムに存在するかどうかによって異なります。

システムに既存のプロファイルがありますか。	次のステップ
いいえ	「ようこそ」パネルが表示されます。ステップ 3 に進んでください。
はい	「プロファイルの作成または拡張 (Create or augment profile)」パネルが表示されます。ステップ 2 に進んでください。

- 「プロファイルの作成または拡張 (Create or augment profile)」パネルで「作成」をクリックします。

プロファイル管理ツールが別のウィンドウで開き、「ようこそ」パネルが表示されます。

- 「ようこそ」パネルで「次へ」をクリックします。

「環境の選択」パネルが表示されます。

- 「環境の選択」パネルで、「**WebSphere Process Server**」または「**WebSphere Enterprise Service Bus**」を選択し、「次へ」をクリックします。

**重要:** このパネルで「セル」、「デプロイメント・マネージャー」、「アプリケーション・サーバー」、「カスタム・プロファイル」の項目を選択しないでください。これらの項目は、WebSphere Application Server プロファイル・タイプを表します。このパネルで「**WebSphere Process Server**」または「**WebSphere Enterprise Service Bus**」を選択することにより、作成されるプロファイルがその製品タイプのもになります。作成するプロファイルのタイプ (スタンドアロン・サーバー、デプロイメント・マネージャー、またはカスタム) は、後のステップで指定します。

次のステップは、WebSphere Process Server を WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment のいずれに上書きインストールしたかによって異なり、以下のようになります (WebSphere Process Server プロファイル管理ツールでは WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルを作成できますが、ここに示す手順では WebSphere Process Server がインストールされているとします)。

WebSphere Process Server の基盤となっている WebSphere Application Server 製品	次のステップ
WebSphere Application Server	スタンドアロン・サーバー・プロファイルのみを作成できます。したがって、「プロファイル作成オプション」パネルが表示されます。ステップ 6 (242 ページ) に進んでください。

WebSphere Process Server の基盤となっている WebSphere Application Server 製品	次のステップ
WebSphere Application Server Network Deployment	「プロファイル・タイプの選択」パネルから、作成するプロファイルのタイプを選択する必要があります。ステップ 5 に進んでください。

- 「プロファイル・タイプの選択」パネルで、作成するプロファイルのタイプを選択し、「次へ」をクリックします。

「プロファイル作成オプション」パネルが表示されます。

- 「プロファイル作成オプション」パネルで、実行するプロファイル作成のタイプとして「標準」、「拡張」、(デプロイメント・マネージャーまたはカスタム・プロファイルの場合は)「デプロイメント環境」のいずれかを選択し、「次へ」をクリックします。「標準的」オプションでは、デフォルトの構成設定でプロファイルが作成されます。「高度」オプションでは、プロファイルに独自の構成値を指定できます。「デプロイメント環境」オプションでは、プロファイルに独自の構成値を指定できます。さらに、デプロイメント・マネージャーを作成してデプロイメント環境パターンを選択したり、1 つまたは複数のクラスターを選択して管理対象ノードに適用したりすることができます。
- プロファイル管理ツールの次のパネルに進む前に、以下のいずれかのトピックに記載されている手順を行い、プロファイルを構成して作成を完了してください。

選択したプロファイル作成のタイプ	選択したプロファイル・タイプ (スタンドアロン・サーバー、デプロイメント・マネージャー、またはカスタム) に基づいてプロファイルの作成を完了するための手順
標準的	<ul style="list-style-type: none"> <li>337 ページの『デフォルト値を使用したスタンドアロン・サーバー・プロファイルの構成』</li> <li>340 ページの『デフォルト値を使用したデプロイメント・マネージャー・プロファイルの構成』</li> <li>343 ページの『デフォルト値を使用したカスタム・プロファイル (管理対象ノード) の構成』</li> </ul>
高度	<ul style="list-style-type: none"> <li>347 ページの『カスタマイズした値を使用したスタンドアロン・サーバー・プロファイルの構成』</li> <li>375 ページの『カスタマイズした値を使用したデプロイメント・マネージャー・プロファイルの構成』</li> <li>397 ページの『カスタマイズした値を使用したカスタム・プロファイル (管理対象ノード) の構成』</li> </ul>

<p>選択したプロファイル作成のタイプ</p>	<p>選択したプロファイル・タイプ (スタンドアロン・サーバー、デプロイメント・マネージャー、またはカスタム) に基づいてプロファイルの作成を完了するための手順</p>
<p><b>デプロイメント環境</b>  <b>重要:</b> 既存のデプロイメント・マネージャーやデプロイメント環境パターンがない場合は、最初のワークステーションでのプロファイル作成時に、405 ページの『デプロイメント環境用のデプロイメント・マネージャー・プロファイルの構成』の説明に従って作業する必要があります。後続のワークステーションでのプロファイル作成時には、428 ページの『デプロイメント環境用のカスタム・プロファイル (管理対象ノード) の構成』の説明に従ってください。</p> <p><b>制約事項:</b></p> <p>デプロイメント環境のデプロイメント・マネージャー・プロファイル作成の一部であるデータベース構成パネルには、データベース管理者 (DBA) 特権が必要です。製品のインストーラーまたはプロファイル管理ツールのデプロイメント環境機能を使用する場合に、データベース製品として Derby ネットワーク・サーバー以外のデータベースを使用するときは、データベース構成パネルの「データベースで認証するユーザー名」フィールドで指定するユーザー ID は DBA 特権を持っている必要があります。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 405 ページの『デプロイメント環境用のデプロイメント・マネージャー・プロファイルの構成』</li> <li>• 428 ページの『デプロイメント環境用のカスタム・プロファイル (管理対象ノード) の構成』</li> </ul>

## タスクの結果

これで、指定したタイプの新規稼働環境 (スタンドアロン・サーバー、デプロイメント・マネージャー、またはカスタム) を定義するプロファイルを構成する準備ができました。

### プロファイル管理ツールの開始:

プロファイル管理ツールを開始する前に、制約事項に注意し、特定の前提条件が満たされていることを確認してください。プロファイル管理ツールは、実行するときのプラットフォームに応じて、いくつかの方法で開始できます。

### 制約事項:

- 64 ビット・プラットフォーム (i5/OS を除く) または Linux on System z プラットフォーム上では、プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成または拡張することはできません。

- **i5/OS** WebSphere Process Server が i5/OS システムにインストールされると、プロファイル管理ツールはスタンドアロン・モードでのみ実行されます。Application Server Toolkit (AST) ツールからこのツールを起動することはできません。
- **i5/OS** プロファイル管理ツールのパネル上の「参照」ボタンが使用不可になります。
- **Vista** **複数インスタンスを持つ非ルート・ユーザーの制約事項:**  
WebSphere Process Server の複数インスタンスをルート・ユーザーとしてインストールし、それらのインスタンスのサブセットだけに非ルート・ユーザーのアクセスを与えた場合、プロファイル管理ツールはその非ルート・ユーザーに対して正しく機能しません。さらに、com.ibm.wsspi.profile.WSProfileException、つまりアクセス拒否メッセージが `install_root\bin\ProfileManagement\pmt.bat` ファイルに発生します。デフォルトでは、非ルート・ユーザーはプログラム・ファイル・ディレクトリーにアクセス権がありません。プログラム・ファイル・ディレクトリーは製品がデフォルトでインストールされる場所です。この問題を解決するには、非ルート・ユーザーが製品をインストールできるようにするか、他の製品インスタンスにアクセスする許可を得るかです。

**Linux** **UNIX** **Windows** プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。システムのデフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、`java user.language` 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。次のコマンドを実行します。

- **Linux** **UNIX** `install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar`
- **Windows** `install_root\java\bin\java -Duser.language=locale install_root\bin\ProfileManagement\startup.jar`

例えば、Linux システム上でドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/
bin/ProfileManagement/startup.jar
```

### すべてのプラットフォームでのプロファイル管理ツールの開始

プロファイル管理ツールを任意のプラットフォームで開始するには、以下のいずれかの方法を使用します。

- ファースト・ステップ・コンソールから。ファースト・ステップ・コンソールを開始する方法については、162 ページの『ファースト・ステップ・コンソールの開始』を参照してください。
- インストールの最後に、プロファイル管理ツールを開始するためのチェック・ボックスを選択する。

## i5/OS プラットフォームでのプロファイル管理ツールの開始

**i5/OS** Profile Management Tool Client for i5/OS は Java アプリケーションで、Windows ワークステーションにインストールしておく必要があります。このツールは、Windows ワークステーションで i5/OS のクライアントとして稼働し、WebSphere Process Server インストールをホスティングする i5/OS サーバーにリモートで接続します。このツールをインストールして開始するには、以下のようになります。

1. 以下の 2 つのどちらかの方法で、Profile Management Tool Client for i5/OS を Windows ワークステーションにインストールします。
  - 製品のランチパッドから、「**WebSphere Profile Management Tool Client for i5/OS のインストール**」をクリックします。
  - 製品ルート・ディレクトリーの ¥PMTClient¥PMTInstaller.exe をクリックします。

インストールすると、Windows の「スタート」メニューに項目が作成されます。

2. Windows の「スタート」メニューから「スタート」 > 「プログラム」 または 「すべてのプログラム」 > 「IBM WebSphere」 > 「Profile Management Tool Client for i5/OS」とクリックしてツールを開始します。表示されたパネルで System i サーバーにサインオンすることができます。
3. サインオン・パネルで、リモート i5/OS システム名、i5/OS ユーザー・プロファイル、およびパスワードを入力し、「**OK**」をクリックします。
4. 次のパネルで、使用するインストール済み環境 (WebSphere Process Server の複数のインストール済み環境が存在する場合) およびポート番号を選択します。次に「**プロファイル管理ツールの起動**」をクリックします。

**注:** デフォルトのポート番号は 1099 です。これは別のポートに変更できます。このポート番号が使用中の場合は、エラー・メッセージが表示されます。続行するには異なるポート番号を選択します。

プロファイル管理ツール・クライアントから新しいバージョンの WebSphere Process Server のサーバーに接続すると、サーバーのバージョンに合わせてプロファイル管理ツール・クライアントを更新するかどうかを確認するためのメッセージが表示されます。「はい」をクリックすると、プロファイル管理ツール・クライアントが自動的に更新され、プロファイル管理ツールが開きます。

プロファイル管理ツール・クライアントから古いバージョンの WebSphere Process Server のサーバーに接続すると、サーバーと同じバージョンのプロファイル管理ツール・クライアントをインストールするよう促すメッセージが表示されます。サーバーと同じバージョンのプロファイル管理ツール・クライアントをインストールするまで、プロファイル管理ツールにアクセスできません。

## Linux および UNIX プラットフォームでのプロファイル管理ツールの開始

**Linux** **UNIX** このツールは、Linux および UNIX プラットフォーム上で、コマンド `install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh` を実行して開始できます。

## Windows プラットフォームでのプロファイル管理ツールの開始

**Windows** Windows プラットフォームでは、以下の方法でプロファイル管理ツールを開始できます。

- Windows の「スタート」メニューを使用します。例えば、「スタート」>「プログラム」または「すべてのプログラム」>「IBM WebSphere」>「Process Server 6.2」>「プロファイル管理ツール」を選択します。
- `install_root%bin%ProfileManagement%pmt.bat` コマンドを実行します。

## manageprofiles コマンドを使用したプロファイルの作成

`manageprofiles` コマンドおよびプロパティ・ファイルを使用してコマンド行からプロファイルを作成する方法について説明します。

### 始める前に

`manageprofiles` コマンドについて詳しくは、302 ページの『`manageprofiles` コマンド』を参照してください。

`manageprofiles` コマンドを実行する前に、次のタスクを完了したか確認します。

- 232 ページの『プロファイルの作成または拡張に関する前提条件』で、プロファイルを作成または拡張するための前提条件を確認している。
- 248 ページの『`manageprofiles` コマンドによる Derby または DB2 データベースのプロファイルの作成 - 例』または 262 ページの『例: `manageprofiles` コマンドと Oracle データベースを使用したプロファイルの作成』に記載されているプロファイル作成コマンドの例を確認している。
- 同じプロファイルで `manageprofiles` コマンドを実行していないことをチェックしている。エラー・メッセージが表示された場合は、別のプロファイル作成操作や拡張操作が進行中かどうかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

**この作業に必要なセキュリティのロール:** 235 ページの『非 root ユーザーに対するファイルとディレクトリーの書き込み権限の、プロファイル作成のための付与』を参照してください。

**注:** **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合: `user_data_root/profiles` ディレクトリーで、読み取り、書き込み、およびコマンドを実行するためのオペレーティング・システムの許可が必要です。

`manageprofiles` コマンドを使用してプロファイルを作成するには、以下のステップを実行します。

### 手順

1. 作成するプロファイルの種類を決定します。これにより、新しいプロファイルに使用するテンプレートが決まります (`-templatePath` オプションを使用)。以下のテンプレートを使用できます。
  - `default.wbiserver`: WebSphere Process Server スタンドアロン・サーバー・プロファイル用で、スタンドアロン・サーバーを定義します。

- `dmgr.wbiserver`: WebSphere Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイル用で、デプロイメント・マネージャーを定義します。デプロイメント・マネージャーは、1 つ以上のマシン上にあるサーバーの論理グループに、1 つの管理インターフェースを提供します。
- `managed.wbiserver`: WebSphere Process Server カスタム・プロファイル用で、デプロイメント・マネージャーにフェデレートされた場合、管理対象ノードを定義します。デプロイメント環境を必要とするソリューションを使用する場合は、ランタイム環境に 1 つ以上の管理対象ノードが必要になります。カスタム・プロファイルには、作動可能にするためにデプロイメント・マネージャー・セル内に統合する必要のある空のノードが含まれています。カスタム・プロファイルを統合すると、カスタム・プロファイルが管理対象ノードに変更されます。統合先のデプロイメント・マネージャーのリリース・レベルが、作成しているカスタム・プロファイルのリリース・レベル以上でない場合は、ノードを統合しないでください。また、WebSphere Process Server プロファイルの場合は WebSphere Enterprise Service Bus デプロイメント・マネージャーを使用できませんが、WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルでは、WebSphere Process Server デプロイメント・マネージャーを使用できます。
- `default.esbserver`: WebSphere Enterprise Service Bus スタンドアロン・サーバー・プロファイル用で、スタンドアロン・サーバーを定義します。
- `dmgr.esbserver`: WebSphere Enterprise Service Bus デプロイメント・マネージャー・プロファイル用で、デプロイメント・マネージャーを定義します。
- `managed.esbserver`: WebSphere Enterprise Service Bus カスタム・プロファイル用で、デプロイメント・マネージャーにフェデレートされた場合、管理対象ノードを定義します。統合先のデプロイメント・マネージャーのリリース・レベルが、作成しているカスタム・プロファイルのリリース・レベル以上でない場合は、ノードを統合しないでください。WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルは、WebSphere Enterprise Service Bus または WebSphere Process Server デプロイメント・マネージャー使用できます。

各プロファイルのテンプレートは、`install_root/profileTemplates` ディレクトリー内にあります。

2. 248 ページの『`manageprofiles` コマンドによる Derby または DB2 データベースのプロファイルの作成 - 例』または 262 ページの『例: `manageprofiles` コマンドと Oracle データベースを使用したプロファイルの作成』に記載されているプロファイル作成の例を検討して、ご使用のプロファイルのタイプにどのパラメーターが必要であるかを判断します。
  3. プロファイルに提供する値を決定します。これを行うには、305 ページの『`manageprofiles` パラメーター』のトピックのデフォルト値を検討して、これらがプロファイルに必要なものかどうかを確認します。
  4. コマンド行からファイルを実行します。これらは単純な例です。より複雑な例については、248 ページの『`manageprofiles` コマンドによる Derby または DB2 データベースのプロファイルの作成 - 例』または 262 ページの『例: `manageprofiles` コマンドと Oracle データベースを使用したプロファイルの作成』を参照してください。
- `i5/OS` `manageprofiles -create -templatePath install_root/profileTemplates/default.wbiserver`

- **Linux** **UNIX** `manageprofiles.sh -create -templatePath install_root/profileTemplates/default.wbiserver`
- **Windows** `manageprofiles.bat -create -templatePath install_root¥profileTemplates¥default.wbiserver`

応答ファイルを作成した場合は、**-response** パラメーターを使用して `-response myResponseFile` とします。

以下の例に、作成操作のための応答ファイルを示します。

```
create
profileName=testResponseFileCreate
profilePath=profile_root
templatePath=install_root/profileTemplates/default.wbiserver
nodeName=myNodeName
cellName=myCellName
hostName=myHostName
omitAction=myOptionalAction1, myOptionalAction2
```

コマンドにより、実行につれて状況が表示されます。完了するまで待ってください。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

## 次のタスク

「INSTCONFSUCCESS: プロファイルの作成は正常に終了しました。」というメッセージが表示された場合は、プロファイルの作成が正常に完了したことが分かります。また、以下のログ・ファイルを確認できます。

- **Linux** **UNIX** `install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log`
- **Windows** `install_root¥logs¥manageprofiles¥profile_name_create.log`
- **i5/OS** `user_data_root/profileRegistry/logs/manageprofiles/profile_name_create.log`

インストール検査テスト (IVT) ツールを実行して、プロファイルが正常に作成されたことを確認する。このためには、以下のコマンドを実行します。

- **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合: `profile_root/bin/wbi_ivt`
- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォーム:  
`profile_root/bin/wbi_ivt.sh`
- **Windows** **Windows** プラットフォーム: `profile_root¥bin¥wbi_ivt.bat`

**manageprofiles** コマンドによる **Derby** または **DB2** データベースのプロファイルの作成 - 例:

インストール済み環境で **manageprofiles** コマンドを使用して、スタンドアロン・サーバー、デプロイメント・マネージャー、およびカスタム・プロファイルを作成するのに役立つプロファイル作成コマンドの例。

## スタンドアロン・サーバーのプロファイル

以下のコマンド例は、Windows サーバー上で *my\_WPSSA\_profile* と呼ばれる WebSphere Process Server スタンドアロン・サーバー・プロファイルを作成します。表 31 および 250 ページの表 32 のパラメーターは以下を指定します。

- DB2 Universal データベース製品は共通データベースおよび Common Event Infrastructure データベースの両方に使用でき、これらは両方ともローカル・ホストに既に存在すると想定されています。どちらのデータベースも後で構成するように設定されています (コマンド・パラメーター値を **-dbDelayConfig "false"** および **-dbDelayConfig "true"** にすると、構成スクリプトは作成されますが実行されないことが指定されます)。データベース関連の *manageprofiles* パラメーターの完全なリストは、トピック 323 ページの『共通データベース構成用の *manageprofiles* パラメーター (データベース製品ごと)』および 330 ページの『Common Event Infrastructure データベース構成の *manageprofiles* パラメーター (データベース製品ごと)』を参照してください。
- Windows サービスは手動で開始するように設定されます。
- サンプルの Business Process Choreographer 実装環境は作成されません。
- ビジネス・ルール・マネージャーは構成されません。
- WebSphere が提供するビジネス・スペースは構成されません。
- プロファイル作成プロセスにより、ポート値 (データベース関連のポートは除く) が自動的に設定されます。このプロセスでは、新規プロファイルが他のプロファイルに対して検証され、ポートの競合が存在しないことが確認されます。

**ヒント:** *manageprofiles* コマンドが指定するポート値をオーバーライドするには、**-portsFile** パラメーターを使用します。すべての有効な *manageprofiles* パラメーターのリストについては、305 ページの『*manageprofiles* パラメーター』を参照してください。

- 管理セキュリティは使用可能になります。

表 31 は、スタンドアロン・サーバー・プロファイルを作成するために使用する *manageprofiles* コマンド・パラメーターと値の例を示したものです。

表 31. 指定される *manageprofiles* コマンド・パラメーター

パラメーター	値
-create	N/A
-templatePath	"install_root ¥profileTemplates¥default.wbiserver" (完全修飾されていることが必要)
-profileName	"my_WPSSA_profile"
-enableAdminSecurity	"true"
-adminPassword	"admin_pwd"
-adminUserName	"admin_id"
-dbServerPort	"50000"
-ceiDbName	"event"
-dbDelayConfig	"false"
-dbHostName	"localhost"

表 31. 指定される *manageprofiles* コマンド・パラメーター (続き)

パラメーター	値
-ceiDbAlreadyConfigured	"false"
-configureBPC	"false"
-dbType	"DB2_Universal"
-dbName	"WPRCSDB"
-dbCreateNew	"false"
-dbDelayConfig	"true"
-dbUserId	"db_id"
-dbPassword	"db_pwd"
-dbDriverType	"4"
-dbHostName	"localhost"
-dbServerPort	"50000"
-dbCommonForME	"false"
-fileStoreForME	"false" (-dbCommonForME が true の場合、true は不可)
-configureBSpace	"false"
-configureBRM	"true"

表 32 は、通常では変更する必要のない *manageprofiles* コマンド・パラメーターとデフォルト値を示したものです。

表 32. デフォルトの *manageprofiles* コマンド・パラメーター

パラメーター	デフォルト値
-profilePath	"install_root¥profiles¥ my_WPSSA_profile"
-hostName	"host_name"
-nodeName	"host_nameNodenode_number"
-cellName	"host_nameNodenode_numbercell_numberCell"
 -winserviceCheck	"true"
 -winserviceAccountType	"localsystem"
 -winserviceStartupType	"manual"
 -winserviceUserName	"Administrator"
-dbOutputscriptDir	"install_root¥profiles¥my_WPSSA_profile ¥dbscripts¥CEL_event"
-dbJDBCClasspath	"install_root¥universalDriver_wbi¥lib"
-dbJDBCClasspath	"install_root¥universalDriver_wbi¥lib"
-dbOutputScriptDir	"install_root¥profiles¥my_WPSSA_profile ¥dbscripts¥CommonDB¥DB2¥WPRCSDB"

## WebSphere Enterprise Service Bus の例

以下は、*my\_WESBSA\_profile* と呼ばれる WebSphere Enterprise Service Bus スタンドアロン・サーバー・プロファイルを作成する類似した例です。以下のような違いがあります。

- Derby Embedded データベース製品は、共通データベースと Common Event Infrastructure データベースの両方に使用されます。これらのデータベースは、プロファイル作成プロセスの実行時にローカル・ホスト上で作成および構成されるように設定されています。

表 33 は、*manageprofiles* コマンド・パラメーターと値の例を示したものです。

表 33. 指定される *manageprofiles* コマンド・パラメーター

パラメーター	値
-create	N/A
-templatePath	"install_root ¥profileTemplates¥default.esbserver" (完全修飾 されていることが必要)
-profileName	"my_WESBSA_profile"
-enableAdminSecurity	"true"
-adminPassword	"admin_pwd"
-adminUserName	"admin_id"
-ceiDbName	"event"
-dbDelayConfig	"true"
-ceiDbAlreadyConfigured	"false"
-dbType	"DERBY_EMBEDDED"
-dbName	"WPRCSDB"
-dbCreateNew	"true"
-dbDelayConfig	"false"
-dbCommonForME	"false"
-fileStoreForME	"false" (-dbCommonForME が true の場合、 true は不可)
-configureBspace	"false"

表 34 は、通常では変更する必要のない *manageprofiles* コマンド・パラメーターとデフォルト値を示したものです。

表 34. デフォルトの *manageprofiles* コマンド・パラメーター

パラメーター	デフォルト値
-profilePath	"install_root¥profiles¥ my_WESBSA_profile"
-hostName	"host_name"
-nodeName	"host_nameNodenode_number"
-cellName	"host_nameNodenode_numbercell_numberCell"
<b>Windows</b> -winserviceStartupType	"manual"
<b>Windows</b> -winserviceCheck	"true"

表 34. デフォルトの *manageprofiles* コマンド・パラメーター (続き)

パラメーター	デフォルト値
<b>Windows</b> -winserviceAccountType	"localsystem"
<b>Windows</b> -winserviceUserName	"Administrator"
-dbOutputScriptDir	"install_root¥profiles¥my_WESBSA_profile ¥dbscripts¥CommonDB¥Derby¥WPRCSDB"

### デプロイメント・マネージャー・プロファイル (デプロイメント環境のセットアップなし)

以下のコマンド例は、Windows サーバー上で *my\_WPSDMGR\_profile* と呼ばれるデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成します。

表 35 および 253 ページの表 36 のパラメーターは以下を指定します。

- DB2 Universal データベース製品は共通データベース用に使用されますが、これはリモート・ホスト上に存在すると想定されています。このデータベースは後で構成するように設定されています (**-dbDelayConfig "true"** コマンドのパラメーター値により構成スクリプトは作成されますが、実行されません)。データベース関連の *manageprofiles* パラメーターの完全なリストは、トピック 323 ページの『共通データベース構成用の *manageprofiles* パラメーター (データベース製品ごと)』を参照してください。
- Windows サービスは手動で開始するように設定されます。
- プロファイル作成プロセスにより、ポート値 (データベース関連のポートは除く) が自動的に設定されます。このプロセスでは、新規プロファイルが他のプロファイルに対して検証され、ポートの競合が存在しないことが確認されます。

**ヒント:** *manageprofiles* コマンドが指定するポート値をオーバーライドするには、**-portsFile** パラメーターを使用します。すべての有効な *manageprofiles* パラメーターのリストについては、305 ページの『*manageprofiles* パラメーター』を参照してください。

- 管理セキュリティは使用可能になります。

表 35 は、デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成するために使用する *manageprofiles* コマンド・パラメーターと値の例を示したものです。

表 35. 指定される *manageprofiles* コマンド・パラメーター

パラメーター	値
-create	N/A
-templatePath	"install_root ¥profileTemplates¥dmgr.wbiserver" (完全修飾されていることが必要)
-profileName	"my_WPSDMGR_profile"
-enableAdminSecurity	"true"
-adminPassword	"admin_pwd"
-adminUserName	"admin_id"
-ndTopology	"false"

表 35. 指定される *manageprofiles* コマンド・パラメーター (続き)

パラメーター	値
-dbType	"DB2_Universal"
-dbName	"WPRCSDB"
-dbCreateNew	"false"
-dbDelayConfig	"true"
-dbUserId	"db_id"
-dbPassword	"db_pwd"
-dbDriverType	"4"
-dbHostName	"remote_host_name"
-dbServerPort	"50000"

表 36 は、通常では変更する必要のない *manageprofiles* コマンド・パラメーターとデフォルト値を示したものです。

表 36. デフォルトの *manageprofiles* コマンド・パラメーター

パラメーター	デフォルト値
-profilePath	"install_root¥profiles¥ my_WPSDMGR_profile"
-hostName	"host_name"
-nodeName	"host_nameCellManagernode_number"
-cellName	"host_nameCellcell_number"
 -winserviceCheck	"true"
 -winserviceAccountType	"localsystem"
 -winserviceStartupType	"manual"
 -winserviceUserName	"Administrator"
-dbJDBCClasspath	"install_root¥universalDriver_wbi¥lib"
-dbOutputScriptDir	"install_root¥profiles¥my_WPSDMGR_profile ¥dbscripts¥CommonDB¥DB2¥WPRCSDB"

## WebSphere Enterprise Service Bus の例

以下は、*my\_WESBDMGR\_profile* と呼ばれる WebSphere Enterprise Service Bus デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成する類似した例です。異なる点は、Derby Network Server データベース製品は共通データベースに使用でき、これはプロファイル作成プロセス中にローカル・ホストで作成および構成されるように設定されることです。

表 37 は、デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成するために使用する *manageprofiles* コマンド・パラメーターと値の例を示したものです。

表 37. 指定される *manageprofiles* コマンド・パラメーター

パラメーター	値
-create	N/A

表 37. 指定される *manageprofiles* コマンド・パラメーター (続き)

パラメーター	値
-templatePath	"install_root %profileTemplates%dmgr.esbserver" (完全修飾されていることが必要)
-profileName	"my_WESBDMGR_profile"
-enableAdminSecurity	"true"
-adminPassword	"admin_pwd"
-adminUserName	"admin_id"
-ndTopology	"false"
-dbType	"DERBY_NETWORKSERVER"
-dbName	"WPRCSDB"
-dbCreateNew	"true"
-dbDelayConfig	"false"
-dbUserId	"db_id"
-dbPassword	"db_pwd"
-dbHostName	"localhost"
-dbServerPort	"1528"

表 38 は、通常では変更する必要のない *manageprofiles* コマンド・パラメーターとデフォルト値を示したものです。

表 38. デフォルトの *manageprofiles* コマンド・パラメーター

パラメーター	デフォルト値
-profilePath	"install_root%profiles% my_WESBDMGR_profile"
-hostName	"host_name"
-nodeName	"host_nameCellManagernode_number"
-cellName	"host_nameCellcell_number"
 -winserviceCheck	"true"
 -winserviceAccountType	"localsystem"
 -winserviceStartupType	"manual"
 -winserviceUserName	"Administrator"
-dbOutputScriptDir	"install_root%profiles%my_WESBDMGR_profile %dbscripts%CommonDB%Derby%WPRCSDB"

### カスタム・プロファイル (デプロイメント環境のセットアップなし)

以下のコマンド例は、Windows サーバー上で *my\_WPSCUSTOM\_profile* と呼ばれるカスタム・プロファイルを作成します。

この例は、上で作成されたデプロイメント・マネージャー・プロファイルと一緒に動作するように設定されています。

表 39 および 256 ページの表 40 のパラメーターは以下を指定します。

- DB2 Universal データベース製品は共通データベース用に使用されますが、これは既に存在すると想定されています。カスタム・プロファイルの作成では、カスタム・プロファイルの統合先のデプロイメント・マネージャーによって使用されるデータベースを指し示す必要があります。
- 管理セキュリティは、カスタム・プロファイルの統合先となるデプロイメント・マネージャーで使用可能になります。

すべての有効な `manageprofiles` パラメーターのリストについては、305 ページの『`manageprofiles` パラメーター』を参照してください。

表 39 は、カスタム・プロファイルを作成するために使用する `manageprofiles` コマンド・パラメーターと値の例を示したものです。

表 39. 指定される `manageprofiles` コマンド・パラメーター

パラメーター	値
<code>-create</code>	N/A
<code>-templatePath</code>	<code>"install_root ¥profileTemplates¥managed.wbiserver"</code> (完全修飾されていることが必要)
<code>-profileName</code>	<code>"my_WPSCUSTOM_profile"</code>
<code>-dmgrHost</code>	<code>"remote_host"</code>
<code>-dmgrPort</code>	<code>"8882"</code> (-dmgrPort の値を見つけるには、このカスタム・プロファイルに関連付けられたデプロイメント・マネージャーの <code>dmgr_profile_root¥logs</code> ディレクトリーに移動します。このディレクトリーで <code>AboutThisProfile.txt</code> ファイルを開き、「Deployment manager SOAP connector port:」の項目から値を見つけます。)
<code>-dmgrAdminPassword</code>	<code>"admin_pwd"</code>
<code>-dmgrAdminUserName</code>	<code>"admin_id"</code>
<code>-ndTopology</code>	<code>"false"</code>
<code>-dbType</code>	<code>"DB2_Universal"</code>
<code>-dmgrPort</code>	<code>"8882"</code> (-dmgrPort の値を見つけるには、このカスタム・プロファイルに関連付けられたデプロイメント・マネージャーの <code>dmgr_profile_root¥logs</code> ディレクトリーに移動します。このディレクトリーで <code>AboutThisProfile.txt</code> ファイルを開き、「Deployment manager SOAP connector port:」の項目から値を見つけます。)
<code>-dbJDBCClasspath</code>	<code>"install_root¥universalDriver_wbi¥lib"</code>

256 ページの表 40 は、通常では変更する必要のない `manageprofiles` コマンド・パラメーターとデフォルト値を示したものです。

表 40. デフォルトの *manageprofiles* コマンド・パラメーター

パラメーター	デフォルト値
-profilePath	"install_root¥profiles¥ my_WPSCUSTOM_profile"
-hostName	"host_name"
-nodeName	"host_nameNodenode_number"

## WebSphere Enterprise Service Bus の例

以下は、*my\_WESBCUSTOM\_profile* と呼ばれる WebSphere Enterprise Service Bus カスタム・プロファイルを作成する類似した例です。異なる点は、Derby Network Server データベース製品が、カスタム・プロファイルの統合先となるデプロイメント・マネージャー上の共通データベースに使用されることです。この例は、上で作成された WebSphere Enterprise Service Bus デプロイメント・マネージャー・プロファイルと一緒に動作するように設定されています。

表 41 は、カスタム・プロファイルを作成するために使用する *manageprofiles* コマンド・パラメーターと値の例を示したものです。

表 41. 指定される *manageprofiles* コマンド・パラメーター

パラメーター	値
-create	N/A
-templatePath	"install_root ¥profileTemplates¥managed.esbserver" (完全修飾されていることが必要)
-profileName	"my_WESBCUSTOM_profile"
-dmgrHost	"remote_host"
-dmgrPort	"8885" (-dmgrPort の値を見つけるには、このカスタム・プロファイルに関連付けられたデプロイメント・マネージャーの <i>dmgr_profile_root¥logs</i> ディレクトリーに移動します。このディレクトリーで <i>AboutThisProfile.txt</i> ファイルを開き、「Deployment manager SOAP connector port:」の項目から値を見つけます。)
-dmgrAdminPassword	"admin_pwd"
-dmgrAdminUserName	"admin_id"
-ndTopology	"false"
-dbType	"DERBY_NETWORKSERVER"
-dbJDBCClasspath	"install_root¥derby¥lib"

257 ページの表 42 は、通常では変更する必要のない *manageprofiles* コマンド・パラメーターとデフォルト値を示したものです。

表 42. デフォルトの *manageprofiles* コマンド・パラメーター

パラメーター	デフォルト値
-profilePath	"install_root\%profiles¥ my_WESBCUSTOM_profile"
-hostName	"host_name"
-nodeName	"host_nameNodenode_number"

### デプロイメント・マネージャー・プロファイル (デプロイメント環境のセットアップあり)

以下のコマンド例は、Windows サーバー上で *my\_WPSDMGR\_DE\_profile* と呼ばれるデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成します。

表 43 および 258 ページの表 44 のパラメーターは以下を指定します。

- プロファイル作成プロセスはデプロイメント環境を自動的に構成します (**-ndTopology "true"** および **-topologyPattern "Reference"** のパラメーターによって指定されます)。
- Derby Network Server データベース製品は、共通データベースに使用されます。このデータベースは、プロファイル作成プロセスの実行時にローカル・ホスト上で作成および構成されるように設定されています。データベース関連の *manageprofiles* パラメーターの完全なリストは、トピック 323 ページの『共通データベース構成用の *manageprofiles* パラメーター (データベース製品ごと)』を参照してください。
- Windows サービスは手動で開始するように設定されます。
- プロファイル作成プロセスにより、ポート値 (データベース関連のポートは除く) が自動的に設定されます。このプロセスでは、新規プロファイルが他のプロファイルに対して検証され、ポートの競合が存在しないことが確認されます。

**ヒント:** *manageprofiles* コマンドが指定するポート値をオーバーライドするには、**-portsFile** パラメーターを使用します。すべての有効な *manageprofiles* パラメーターのリストについては、305 ページの『*manageprofiles* パラメーター』を参照してください。

- 管理セキュリティは使用可能になります。

表 43 は、デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成するために使用する *manageprofiles* コマンド・パラメーターと値の例を示したものです。

表 43. 指定される *manageprofiles* コマンド・パラメーター

パラメーター	値
-create	N/A
-templatePath	"install_root ¥profileTemplates¥dmgr.wbiserver" (完全修飾されていることが必要)
-profileName	"my_WPSDMGR_DE_profile"
-enableAdminSecurity	"true"
-adminPassword	"admin_pwd"
-adminUserName	"admin_id"

表 43. 指定される *manageprofiles* コマンド・パラメーター (続き)

パラメーター	値
-ndTopology	"true"
-topologyPattern	"Reference"
-dbType	"DERBY_NETWORKSERVER"
-dbName	"WPRCSDB"
-dbCreateNew	"true"
-dbDelayConfig	"false"
-dbUserId	"db_id"
-dbPassword	"db_pwd"
-dbHostName	"localhost"
-dbServerPort	"1529"

表 44 は、通常では変更する必要のない *manageprofiles* コマンド・パラメーターとデフォルト値を示したものです。

表 44. デフォルトの *manageprofiles* コマンド・パラメーター

パラメーター	デフォルト値
-profilePath	"install_root¥profiles¥ my_WPSDMGR_DE_profile"
-hostName	"host_name"
-nodeName	"host_nameCellManagernode_number"
-cellName	"host_nameCellcell_number"
 -winserviceCheck	"true"
 -winserviceAccountType	"localsystem"
 -winserviceStartupType	"manual"
 -winserviceUserName	"Administrator"
-dbOutputScriptDir	"install_root¥profiles¥ my_WPSDMGR_DE_profile ¥dbscripts¥CommonDB¥Derby¥WPRCSDB"

## WebSphere Enterprise Service Bus の例

以下は、*my\_WESBDMGR\_DE\_profile* と呼ばれる WebSphere Enterprise Service Bus デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成する類似した例です。

表 45 は、デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成するために使用する *manageprofiles* コマンド・パラメーターと値の例を示したものです。

表 45. 指定される *manageprofiles* コマンド・パラメーター

パラメーター	値
-create	N/A

表 45. 指定される *manageprofiles* コマンド・パラメーター (続き)

パラメーター	値
-templatePath	"install_root ¥profileTemplates¥dmgr.esbserver" (完全修飾されていることが必要)
-profileName	"my_WESBDMGR_DE_profile"
-enableAdminSecurity	"true"
-adminPassword	"admin_pwd"
-adminUserName	"admin_id"
-ndTopology	"true"
-topologyPattern	"Reference"
-dbType	"DERBY_NETWORKSERVER"
-dbName	"WPRCSDB"
-dbCreateNew	"true"
-dbDelayConfig	"false"
-dbUserId	"db_id"
-dbPassword	"db_pwd"
-dbHostName	"localhost"
-dbServerPort	"1530"

表 46 は、通常では変更する必要のない *manageprofiles* コマンド・パラメーターとデフォルト値を示したものです。

表 46. デフォルトの *manageprofiles* コマンド・パラメーター

パラメーター	デフォルト値
-profilePath	"install_root¥profiles¥ my_WESBDMGR_DE_profile"
-hostName	"host_name"
-nodeName	"host_nameCellManagernode_number"
-cellName	"host_nameCellcell_number"
<b>Windows</b> -winserviceCheck	"true"
<b>Windows</b> -winserviceAccountType	"localsystem"
<b>Windows</b> -winserviceStartupType	"manual"
<b>Windows</b> -winserviceUserName	"Administrator"
-dbOutputScriptDir	"install_root¥profiles¥ my_WESBDMGR_DE_profile ¥dbscripts¥CommonDB¥Derby¥WPRCSDB"

### カスタム・プロファイル (デプロイメント環境のセットアップあり)

以下のコマンド例は、Windows サーバー上で *my\_WPSCUSTOM\_DE\_profile* と呼ばれるカスタム・プロファイルを作成します。この例は、上で作成されたデプロイメント環境用のデプロイメント・マネージャー・プロファイルと一緒に動作するように設定されています。

表 47 および 261 ページの表 48 のパラメーターは以下を指定します。

- プロファイル作成プロセスはプロファイルをデプロイメント環境に自動的に割り当てます (`-ndTopology "true"` および `-topologyRole ADT Messaging Support` のパラメーターによって指定されます)。
- Derby Network Server データベース製品は共通データベース用に使用されますが、これは既に存在すると想定されています。カスタム・プロファイルの作成では、カスタム・プロファイルの統合先のデプロイメント・マネージャーによって使用されるデータベースを指し示す必要があります。データベース関連の `manageprofiles` パラメーターの完全なリストは、トピック 323 ページの『共通データベース構成用の `manageprofiles` パラメーター (データベース製品ごと)』を参照してください。
- 管理セキュリティは、カスタム・プロファイルの統合先となるデプロイメント・マネージャーで使用可能になります。

すべての有効な `manageprofiles` パラメーターのリストについては、305 ページの『`manageprofiles` パラメーター』を参照してください。

表 47 は、カスタム・プロファイルを作成するために使用する `manageprofiles` コマンド・パラメーターと値の例を示したものです。

表 47. 指定される `manageprofiles` コマンド・パラメーター

パラメーター	値
<code>-create</code>	N/A
<code>-templatePath</code>	<code>"install_root ¥profileTemplates¥managed.wbiserver"</code> (完全修飾されていることが必要)
<code>-profileName</code>	<code>"my_WPSCUSTOM_DE_profile"</code>
<code>-dmgrHost</code>	<code>"remote_host"</code>
<code>-dmgrPort</code>	<code>"8890"</code> ( <code>-dmgrPort</code> の値を見つけるには、このカスタム・プロファイルに関連付けられたデプロイメント・マネージャーの <code>dmgr_profile_root¥logs</code> ディレクトリーに移動します。このディレクトリーで <code>AboutThisProfile.txt</code> ファイルを開き、「Deployment manager SOAP connector port:」の項目から値を見つけます。)
<code>-dmgrAdminPassword</code>	<code>"admin_pwd"</code>
<code>-dmgrAdminUserName</code>	<code>"admin_id"</code>
<code>-ndTopology</code>	<code>"true"</code>
<code>-topologyRole</code>	<code>"ADT Support Messaging"</code>
<code>-dbType</code>	<code>"DERBY_NETWORKSERVER"</code>
<code>-dbJDBCClasspath</code>	<code>"install_root¥derby¥lib"</code>

261 ページの表 48 は、通常では変更する必要のない `manageprofiles` コマンド・パラメーターとデフォルト値を示したものです。

表 48. デフォルトの *manageprofiles* コマンド・パラメーター

パラメーター	デフォルト値
-profilePath	"install_root¥profiles¥ my_WPSCUSTOM_DE_profile"
-hostName	"host_name"
-nodeName	"host_nameNodenode_number"

## WebSphere Enterprise Service Bus の例

以下は、*my\_WESBCUSTOM\_DE\_profile* と呼ばれる WebSphere Enterprise Service Bus カスタム・プロファイルを作成する類似した例です。この例は、上で作成されたデプロイメント環境用の WebSphere Enterprise Service Bus デプロイメント・マネージャー・プロファイルと一緒に動作するように設定されています。

表 49 は、カスタム・プロファイルを作成するために使用する *manageprofiles* コマンド・パラメーターと値の例を示したものです。

表 49. 指定される *manageprofiles* コマンド・パラメーター

パラメーター	値
-create	N/A
-templatePath	"install_root ¥profileTemplates¥managed.esbserver" (完全修飾されていることが必要)
-profileName	"my_WESBCUSTOM_DE_profile"
-dmgrHost	"remote_host"
-dmgrPort	"8897" (-dmgrPort の値を見つけるには、このカスタム・プロファイルに関連付けられたデプロイメント・マネージャーの <i>dmgr_profile_root¥logs</i> ディレクトリーに移動します。このディレクトリーで <i>AboutThisProfile.txt</i> ファイルを開き、「Deployment manager SOAP connector port:」の項目から値を見つけます。)
-dmgrAdminPassword	"admin_pwd"
-dmgrAdminUserName	"admin_id"
-ndTopology	"true"
-topologyRole	"ADT Support Messaging"
-dbType	"DERBY_NETWORKSERVER"
-dbJDBCClasspath	"install_root¥derby¥lib"

262 ページの表 50 は、通常では変更する必要のない *manageprofiles* コマンド・パラメーターとデフォルト値を示したものです。

表 50. デフォルトの *manageprofiles* コマンド・パラメーター

パラメーター	デフォルト値
-profilePath	"install_root\profiles\my_WESBCUSTOM_DE_profile"
-hostName	"host_name"
-nodeName	"host_nameNodenode_number"

**例: manageprofiles コマンドと Oracle データベースを使用したプロファイルの作成 :**

Oracle データベースのインストール済み環境で *manageprofiles* コマンドを使用した、スタンドアロン・サーバーおよびデプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成に役立つプロファイル作成コマンド実例。

### スタンドアロン・サーバーのプロファイル

以下のコマンド例は、Windows サーバー上で *my\_WPSSA\_profile* と呼ばれる WebSphere Process Server スタンドアロン・サーバー・プロファイルを作成します。

263 ページの表 51、263 ページの表 52、および 264 ページの表 53 のパラメーターは以下の機能を指定します。

- Oracle 10g または Oracle 11g データベース製品は共通データベースおよび Common Event Infrastructure データベースの両方に使用でき、これらは両方ともローカル・ホストに既に存在すると想定されています。両方のデータベースは後で構成するように設定されています (**-dbDelayConfig "true"** のコマンド・パラメーター値は、構成スクリプトは作成されますが実行されないことを指定します)。データベース関連の *manageprofiles* パラメーターの完全なリストは、トピック 323 ページの『共通データベース構成用の *manageprofiles* パラメーター (データベース製品ごと)』および 330 ページの『Common Event Infrastructure データベース構成の *manageprofiles* パラメーター (データベース製品ごと)』を参照してください。
- Windows サービスは手動で開始するように設定されます。
- サンプルの Business Process Choreographer 構成が作成されます。
- ビジネス・ルール・マネージャーは構成されません。
- WebSphere が提供するビジネス・スペースは構成されます。
- プロファイル作成プロセスにより、ポート値 (データベース関連のポートは除く) が自動的に設定されます。このプロセスでは、新規プロファイルが他のプロファイルに対して検証され、ポートの競合が存在しないことが確認されます。

**ヒント:** *manageprofiles* コマンドが指定するポート値をオーバーライドするには、**-portsFile** パラメーターを使用します。すべての有効な *manageprofiles* パラメーターのリストについては、305 ページの『*manageprofiles* パラメーター』を参照してください。

- 管理セキュリティーは使用可能になります。

使用可能なオプションは 2 つあります。

- スキーマ・ユーザー ID および表のすべてをプロファイル作成の一環として作成する場合、Oracle データベースで SYSDBA 特権のあるユーザー ID を提供する必要があります。この ID はスキーマとテーブルを作成するのに使用されますが、構成のどこにも保持されません。
- SYSDBA ユーザー ID を提供しない場合、スクリプトをエクスポートし、手動で実行することができます。

これらのオプションの両方について、各コンポーネントに対して固有のスキーマ・ユーザー ID を選択できます。

表 51 は、スタンドアロン・サーバー・プロファイルを作成するために使用する manageprofiles コマンド・パラメーターと値の例を示したものです。

表 51. 指定される manageprofiles コマンド・パラメーター

パラメーター	値
-create	N/A
-templatePath	"install_root ¥profileTemplates¥default.wbiserver" (完全修飾されていることが必要)
-profileName	"my_WPSSA_profile"
-enableAdminSecurity	"true"
-adminPassword	"admin_pwd"
-adminUserName	"admin_id"
-configureBPC	"true"
-dbType	"ORACLE10G" または "ORACLE11G"
-dbName	"WPRCSDB"
-ceiDbName	"EVENT"
-dbDelayConfig	"true"
-fileStoreForME	"false" (-dbCommonForME が true の場合、true は不可)
-dbCommonForME	"true"
-dbPassword	"db_pwd"
-dbDriverType	"oracle_thin"
-dbJDBCClasspath	"oracle_library_directory"
-dbServerPort	"1521"
-configureBspace	"true"
-configureBRM	"false"

表 52 は、通常では変更する必要のない manageprofiles コマンド・パラメーターとデフォルト値を示したものです。

表 52. デフォルトの manageprofiles コマンド・パラメーター

パラメーター	デフォルト値
-profilePath	"install_root¥profiles¥ my_WPSSA_profile"
-hostName	"host_name"

表 52. デフォルトの *manageprofiles* コマンド・パラメーター (続き)

パラメーター	デフォルト値
-nodeName	"host_nameNodenode_number"
-cellName	"host_nameNodenode_numbercell_numberCell"
<b>Windows</b> -winserviceCheck	"true"
<b>Windows</b> -winserviceAccountType	"localsystem"
<b>Windows</b> -winserviceStartupType	"manual"
<b>Windows</b> -winserviceUserName	"Administrator"
-dbOutputscriptDir	"install_root¥profiles¥my_WPSSA_profile¥dbscripts¥"
-dbHostName	"local_host_name"

表 53 に示すのは、プロファイル管理ツールを通じて表示されない追加の *manageprofiles* コマンド・パラメーターで、ユーザー自身の Oracle 用ユーザー名およびパスワードの組み合わせを選択するように指定することが可能です。

表 53. Oracle 用追加 *manageprofiles* コマンド・パラメーター

パラメーター	値	注釈
-dbSysUserId	"sys_user_id"	この ID は SYSDBA 特権を持つ必要があります。Oracle の内部ユーザー 'sys' は使用しないでください。  このパラメーターは、プロファイル作成中 (dbDelayConfig = "FALSE" のとき)、データベースおよびそのオブジェクトを構成する場合に必要です。
-dbSysPassword	"sys_pwd"	このパラメーターは、プロファイル作成中 (dbDelayConfig = "FALSE" のとき)、データベースおよびそのオブジェクトを構成する場合に必要です。
-dbCommonUserId	"common_db_userID" (共通 DB オブジェクトの作成に使用)	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、このユーザーは Oracle データベース名に基づいて自動的に作成されます (SID)。例: SID が ORCL の場合、dbCommonUserId は ORCCOMM。
-dbCommonPassword	"common_db_pwd"	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。  「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、dbCommonPassword は dbPassword に設定されます。例: dbCommonPassword = dbPassword

表 53. Oracle 用追加 *manageprofiles* コマンド・パラメーター (続き)

パラメーター	値	注釈
-dbBspaceUserId	" <i>bospace_db_userid</i> " (ビジネス・スペースの構成に使用)	このパラメーターは、ユーザー独自のビジネス・スペース・スキーマが必要な場合に必要です。指定されない場合、デフォルト値 (IBMBUSSP) が設定されます。
-dbBspacePassword	" <i>bospace_db_pwd</i> " (ビジネス・スペースの構成に使用)	このパラメーターは、独自のビジネス・スペース・パスワードが必要な場合に必要です。それ以外の場合は、dbBspacePassword = "YouNameIt" でなければ dbBspacePassword = dbPassword (存在する場合)、そうでなければ dbBspacePassword = IBMBUSSP、という順序でデフォルト値が設定されます。
-dbCeiUserId	" <i>cei_userid</i> " (CEI オブジェクトの作成に使用)	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。  「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、このユーザーは Oracle データベース名に基づいて自動的に作成されます (SID)。例: SID が ORCL の場合、dbCeiUserId は ORCCEID。
-dbCeiPassword	" <i>cei_db_pwd</i> "	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。  「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、dbCeiPassword は dbPassword に設定されます。例: dbCeiPassword = dbPassword
	下のすべてのパラメーターは、-dbCommonForME = "true" の場合のみ有効です。	
-dbBPCMeUserId	" <i>bpc_me_userid</i> " (BPC ME オブジェクトの作成に使用) (-configureBPC = "true" の場合のみ有効)	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。  「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、このユーザーは Oracle データベース名に基づいて自動的に作成されます (SID)。例: SID が ORCL の場合、dbBPCMeUserId は ORCBM00。
-dbBPCMePassword	" <i>bpc_me_pwd</i> " (-configureBPC = "true" の場合のみ有効)	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。  「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、dbCeiPassword は dbPassword に設定されます。例: dbBPCMePassword = dbPassword

表 53. Oracle 用追加 *manageprofiles* コマンド・パラメーター (続き)

パラメーター	値	注釈
-dbCeiMeUserId	" <i>cei_me_userID</i> " (CEI ME オブジェクトの作成に使用)	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。  「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、このユーザーは Oracle データベース名に基づいて自動的に作成されます (SID)。例: SID が ORCL の場合、dbCeiMeId は ORCCM00。
-dbCeiMePassword	" <i>cei_me_pwd</i> "	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。  「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、dbCeiPassword は dbPassword に設定されます。例: dbCeiMePassword = dbPassword
-dbAppMeUserId	" <i>app_me_userID</i> " (SCAAPP ME オブジェクトの作成に使用)	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。  「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、このユーザーは Oracle データベース名に基づいて自動的に作成されます (SID)。例: SID が ORCL の場合、dbAppMeId は ORCSA00。
-dbAppMePassword	" <i>app_me_pwd</i> "	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。  「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、dbCeiPassword は dbPassword に設定されます。例: dbAppMePassword = dbPassword
-dbSysMeUserId	" <i>sys_me_userID</i> " (SCASYS ME オブジェクトの作成に使用)	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。  「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、このユーザーは Oracle データベース名に基づいて自動的に作成されます (SID)。例: SID が ORCL の場合、dbSysMeUserId は ORCSS00。

表 53. Oracle 用追加 *manageprofiles* コマンド・パラメーター (続き)

パラメーター	値	注釈
-dbSysMePassword	"sys_me_pwd"	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。  「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、dbCeiPassword は dbPassword に設定されます。例: dbAppMePassword = dbPassword

### WebSphere Enterprise Service Bus の例

以下は、*my\_WESBSA\_profile* と呼ばれる WebSphere Enterprise Service Bus スタンドアロン・サーバー・プロファイルを作成する類似した例です。違いは、データベースを直ちに構成するように設定されていることです (-dbDelayConfig "false" のコマンド・パラメーター値は、構成スクリプトが実行されることを指定します)。

表 54 は、*manageprofiles* コマンド・パラメーターと値の例を示したものです。

表 54. 指定される *manageprofiles* コマンド・パラメーター

パラメーター	値
-create	N/A
-templatePath	"install_root ¥profileTemplates¥default.esbserver" (完全修飾されていることが必要)
-profileName	"my_WESBSA_profile"
-enableAdminSecurity	"true"
-adminPassword	"admin_pwd"
-adminUserName	"admin_id"
-dbType	"ORACLE10G" または "ORACLE11G"
-dbUserId	"cei_id"
-dbUserPwd	"cei_pwd"
-dbName	"WPRCSDB"
-ceiDbName	"EVENT"
-dbDelayConfig	"false"
-fileStoreForME	"false" (-dbCommonForME が true の場合、true は不可)
-dbCommonForME	"true"
-dbLocation	"oracle_install_directory"
-dbPassword	"db_pwd"
-dbDriverType	"oracle_thin"
-dbJDBCClasspath	"oracle_library_directory"
-dbServerPort	"1521"
-dbSysUserId	"sys_user_id"
-dbSysPassword	"sys_pwd"

表 54. 指定される *manageprofiles* コマンド・パラメーター (続き)

パラメーター	値
-configureBspace	"true"

表 55 は、通常では変更する必要のない *manageprofiles* コマンド・パラメーターとデフォルト値を示したものです。

表 55. デフォルトの *manageprofiles* コマンド・パラメーター

パラメーター	デフォルト値
-profilePath	"install_root\profiles\my_WESBSA_profile"
-hostName	"host_name"
-nodeName	"host_nameNodenode_number"
-cellName	"host_nameNodenode_numbercell_numberCell"
<b>Windows</b> -winserviceStartupType	"manual"
<b>Windows</b> -winserviceCheck	"true"
<b>Windows</b> -winserviceAccountType	"localsystem"
<b>Windows</b> -winserviceUserName	"Administrator"
-dbOutputScriptDir	"install_root\profiles\my_WESBSA_profile\dbscripts"
-dbHostName	"local_host_name"

表 56 に示すのは、プロファイル管理ツールを通じて表示されない追加の *manageprofiles* コマンド・パラメーターで、ユーザー自身の Oracle 用ユーザー名およびパスワードの組み合わせを選択するように指定することが可能です。

表 56. Oracle 用追加 *manageprofiles* コマンド・パラメーター

パラメーター	デフォルト値	注釈
-dbCommonUserId	"common_db_userID" (共通 DB オブジェクトの作成に使用)	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、このユーザーは Oracle データベース名に基づいて自動的に作成されます (SID)。例: SID が ORCL の場合、dbCommonUserId は ORCCOMM。

表 56. Oracle 用追加 *manageprofiles* コマンド・パラメーター (続き)

パラメーター	デフォルト値	注釈
-dbCommonPassword	"common_db_pwd"	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。  「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、dbCommonPassword は dbPassword に設定されます。例: dbCommonPassword = dbPassword
-dbBspaceUserId	"bspace_db_userID" (ビジネス・スペースの構成に使用)	このパラメーターは、ユーザー独自のビジネス・スペース・スキーマが必要な場合に必要です。指定されない場合、デフォルト値 (IBMBUSSP) が設定されます。
-dbBspacePassword	"bspace_db_pwd" (ビジネス・スペースの構成に使用)	このパラメーターは、独自のビジネス・スペース・パスワードが必要な場合に必要です。それ以外の場合は、dbBspacePassword = "YouNameIt" でなければ dbBspacePassword = dbPassword (存在する場合)、そうでなければ dbBspacePassword = IBMBUSSP、という順序でデフォルト値が設定されます。
-dbCeiUserId	"cei_userID" (CEI オブジェクトの作成に使用)	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。  「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、このユーザーは Oracle データベース名に基づいて自動的に作成されます (SID)。例: SID が ORCL の場合、dbCeiUserId は ORCCEID。
-dbCeiPassword	"cei_db_pwd"	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。  「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、dbCeiPassword は dbPassword に設定されます。例: dbCeiPassword = dbPassword
	下のすべてのパラメーターは、-dbCommonForME = "true" の場合のみ有効です。	

表 56. Oracle 用追加 *manageprofiles* コマンド・パラメーター (続き)

パラメーター	デフォルト値	注釈
-dbCeiMeUserId	" <i>cei_me_userID</i> " (CEI ME オブジェクトの作成に使用)	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。  「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、このユーザーは Oracle データベース名に基づいて自動的に作成されます (SID)。例: SID が ORCL の場合、dbCeiMeId は ORCCM00。
-dbCeiMePassword	" <i>cei_me_pwd</i> "	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。  「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、dbCeiPassword は dbPassword に設定されます。例: dbCeiMePassword = dbPassword
-dbAppMeUserId	" <i>app_me_userID</i> " (SCAAPP ME オブジェクトの作成に使用)	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。  「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、このユーザーは Oracle データベース名に基づいて自動的に作成されます (SID)。例: SID が ORCL の場合、dbAppMeId は ORCSA00。
-dbAppMePassword	" <i>app_me_pwd</i> "	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。  「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、dbCeiPassword は dbPassword に設定されます。例: dbAppMePassword = dbPassword

表 56. Oracle 用追加 *manageprofiles* コマンド・パラメーター (続き)

パラメーター	デフォルト値	注釈
-dbSysMeUserId	"sys_me_userID" (SCASYS ME オブジェクトの作成に使用)	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。  「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、このユーザーは Oracle データベース名に基づいて自動的に作成されます (SID)。例: SID が ORCL の場合、dbSysMeUserId は ORCSS00。
-dbSysMePassword	"sys_me_pwd"	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。  「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、dbCeiPassword は dbPassword に設定されます。例: dbAppMePassword = dbPassword

### デプロイメント・マネージャー・プロファイル (デプロイメント環境のセットアップなし)

以下のコマンド例は、Windows サーバー上で *my\_WPSDMGR\_profile* と呼ばれるデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成します。

272 ページの表 57 および 272 ページの表 58 のパラメーターは以下を指定します。

- Oracle 10g または Oracle 11g データベース製品は共通データベース用に使用されますが、これはリモート・ホスト上に存在すると想定されています。このデータベースは後で構成するように設定されています (-dbDelayConfig "true" コマンドのパラメーター値により構成スクリプトは作成されますが、実行されません)。データベース関連の *manageprofiles* パラメーターの完全なリストは、トピック 323 ページの『共通データベース構成用の *manageprofiles* パラメーター (データベース製品ごと)』を参照してください。
- Windows サービスは手動で開始するように設定されます。
- プロファイル作成プロセスにより、ポート値 (データベース関連のポートは除く) が自動的に設定されます。このプロセスでは、新規プロファイルが他のプロファイルに対して検証され、ポートの競合が存在しないことが確認されます。

**ヒント:** *manageprofiles* コマンドが指定するポート値をオーバーライドするには、**-portsFile** パラメーターを使用します。すべての有効な *manageprofiles* パラメーターのリストについては、305 ページの『*manageprofiles* パラメーター』を参照してください。

- 管理セキュリティは使用可能になります。

表 57 は、デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成するために使用する `manageprofiles` コマンド・パラメーターと値の例を示したものです。

表 57. 指定される `manageprofiles` コマンド・パラメーター

パラメーター	値
<code>-create</code>	N/A
<code>-templatePath</code>	" <i>install_root</i> ¥profileTemplates¥dmgr.wbiserver" (完全修飾されていることが必要)
<code>-profileName</code>	" <i>my_WPSDMGR_profile</i> "
<code>-enableAdminSecurity</code>	"true"
<code>-adminPassword</code>	" <i>admin_pwd</i> "
<code>-adminUserName</code>	" <i>admin_id</i> "
<code>-ndTopology</code>	"false"
<code>-dbType</code>	"ORACLE10G" または "ORACLE11G"
<code>-dbName</code>	"WPRCSDB"
<code>-dbDelayConfig</code>	"true"
<code>-dbPassword</code>	" <i>db_pwd</i> "
<code>-dbDriverType</code>	"oracle_thin"
<code>-dbHostName</code>	" <i>remote_host_name</i> "
<code>-dbJDBCClasspath</code>	" <i>oracle_library_directory</i> "
<code>-dbServerPort</code>	"1521"

表 58 は、通常では変更する必要のない `manageprofiles` コマンド・パラメーターとデフォルト値を示したものです。

表 58. デフォルトの `manageprofiles` コマンド・パラメーター

パラメーター	デフォルト値
<code>-profilePath</code>	" <i>install_root</i> ¥profiles¥ <i>my_WPSDMGR_profile</i> "
<code>-hostName</code>	" <i>host_name</i> "
<code>-nodeName</code>	" <i>host_name</i> CellManagernode_ <i>number</i> "
<code>-cellName</code>	" <i>host_name</i> Cellcell_ <i>number</i> "
 <code>-winserviceCheck</code>	"true"
 <code>-winserviceAccountType</code>	"localsystem"
 <code>-winserviceStartupType</code>	"manual"
 <code>-winserviceUserName</code>	"Administrator"
<code>-dbOutputScriptDir</code>	" <i>install_root</i> ¥profiles¥ <i>my_WPSDMGR_profile</i> ¥ dbscripts¥"

273 ページの表 59 に示すのは、プロファイル管理ツールを通じて表示されない追加の `manageprofiles` コマンド・パラメーターで、ユーザー自身の Oracle 用ユーザー名およびパスワードの組み合わせを選択するように指定することが可能です。

表 59. Oracle 用追加 *manageprofiles* コマンド・パラメーター

パラメーター	デフォルト値
-dbSysUserId	" <i>sys_userID</i> " (SCASYS ME オブジェクトの作成に使用)
-dbSysPassword	" <i>sys_pwd</i> "
-dbCommonUserId	" <i>common_db_userID</i> " (共通 DB オブジェクトの作成に使用)
-dbCommonPassword	" <i>common_db_pwd</i> "

### WebSphere Enterprise Service Bus の例

以下は、*my\_WESBDMGR\_profile* と呼ばれる WebSphere Enterprise Service Bus デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成する類似した例です。違いは、データベースを直ちに構成するように設定されていることです (**-dbDelayConfig "false"** のコマンド・パラメーター値は、構成スクリプトが実行されることを指定します)。

表 60 は、デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成するために使用する *manageprofiles* コマンド・パラメーターと値の例を示したものです。

表 60. 指定される *manageprofiles* コマンド・パラメーター

パラメーター	値
-create	N/A
-templatePath	" <i>install_root</i> ¥profileTemplates¥dmgr.esbserver" (完全修飾されていることが必要)
-profileName	" <i>my_WESBDMGR_profile</i> "
-enableAdminSecurity	"true"
-adminPassword	" <i>admin_pwd</i> "
-adminUserName	" <i>admin_id</i> "
-ndTopology	"false"
-dbType	"ORACLE10G" または "ORACLE11G"
-dbName	"WPRCSDB"
-dbDelayConfig	"false"
-dbLocation	" <i>oracle_install_directory</i> "
-dbPassword	" <i>db_pwd</i> "
-dbDriverType	"oracle_thin"
-dbHostName	"localhost"
-dbJDBCClasspath	" <i>oracle_library_directory</i> "
-dbServerPort	"1521"
-dbSysUserId	" <i>sys_user_id</i> "
-dbSysPassword	" <i>sys_pwd</i> "

274 ページの表 61 は、通常では変更する必要のない *manageprofiles* コマンド・パラメーターとデフォルト値を示したものです。

表 61. デフォルトの *manageprofiles* コマンド・パラメーター

パラメーター	デフォルト値
-profilePath	"install_root¥profiles¥ my_WESBDMGR_profile"
-hostName	"host_name"
-nodeName	"host_nameCellManagernode_number"
-cellName	"host_nameCellcell_number"
<b>Windows</b> -winserviceCheck	"true"
<b>Windows</b> -winserviceAccountType	"localsystem"
<b>Windows</b> -winserviceStartupType	"manual"
<b>Windows</b> -winserviceUserName	"Administrator"
-dbOutputScriptDir	"install_root¥profiles¥ my_WESBDMGR_profile¥dbscripts¥"

表 62 に示すのは、プロファイル管理ツールを通じて表示されない追加の *manageprofiles* コマンド・パラメーターで、ユーザー自身の Oracle 用ユーザー名およびパスワードの組み合わせを選択するように指定することが可能です。

表 62. Oracle 用追加 *manageprofiles* コマンド・パラメーター

パラメーター	デフォルト値
-dbCommonUserId	"common_db_userID" (共通 DB オブジェクトの作成に使用)
-dbCommonPassword	"common_db_pwd"

### デプロイメント・マネージャー・プロファイル (デプロイメント環境のセットアップあり)

以下のコマンド例は、Windows サーバー上で *my\_WPSDMGR\_DE\_profile* と呼ばれるデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成します。

275 ページの表 63 および 276 ページの表 64 のパラメーターは以下を指定します。

- プロファイル作成プロセスはデプロイメント環境を自動的に構成します (**-ndTopology "true"** および **-topologyPattern "Reference"** のパラメーターによって指定されます)。
- Oracle 10g または Oracle 11g データベース製品は共通データベース用に使用されますが、これはリモート・ホスト上に存在すると想定されています。データベースは、デプロイメント環境設定の一部として構成されるように設定されています (**-dbDelayConfig "true"** コマンド・パラメーターは、デプロイメント環境設定では無効です)。データベース関連の *manageprofiles* パラメーターの完全なリストは、トピック 323 ページの『共通データベース構成用の *manageprofiles* パラメーター (データベース製品ごと)』を参照してください。
- Windows サービスは手動で開始するように設定されます。

- プロファイル作成プロセスにより、ポート値 (データベース関連のポートは除く) が自動的に設定されます。このプロセスでは、新規プロファイルが他のプロファイルに対して検証され、ポートの競合が存在しないことが確認されます。

**ヒント:** `manageprofiles` コマンドが指定するポート値をオーバーライドするには、`-portsFile` パラメーターを使用します。すべての有効な `manageprofiles` パラメーターのリストについては、305 ページの『`manageprofiles` パラメーター』を参照してください。

- 管理セキュリティは使用可能になります。

使用可能なオプションは 2 つあります。

- スキーマ・ユーザー ID および表のすべてをプロファイル作成の一環として作成する場合、Oracle データベースで `SYSDBA` 特権のあるユーザー ID を提供する必要があります。この ID はスキーマとテーブルを作成するのに使用されますが、構成のどこにも保持されません。
- `SYSDBA` ユーザー ID を提供しない場合、スクリプトをエクスポートし、手動で実行することができます。

これらのオプションの両方に対し、各コンポーネントに対して固有のスキーマ・ユーザー ID を選択できます。

表 63 は、デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成するために使用する `manageprofiles` コマンド・パラメーターと値の例を示したものです。

表 63. 指定される `manageprofiles` コマンド・パラメーター

パラメーター	値
<code>-create</code>	N/A
<code>-templatePath</code>	<code>"install_root %profileTemplates%dmgr.wbiserver"</code> (完全修飾されていることが必要)
<code>-profileName</code>	<code>"my_WPSDMGR_DE_profile"</code>
<code>-enableAdminSecurity</code>	<code>"true"</code>
<code>-adminPassword</code>	<code>"admin_pwd"</code>
<code>-adminUserName</code>	<code>"admin_id"</code>
<code>-ndTopology</code>	<code>"true"</code>
<code>-topologyPattern</code>	<code>"Reference"</code>
<code>-dbType</code>	<code>"ORACLE10G"</code> または <code>"ORACLE11G"</code>
<code>-dbName</code>	<code>"WPRCSDB"</code>
<code>-dbUserId</code>	<code>"sys_user_id"</code> (デプロイメント環境では <code>SYSDBA</code> ユーザー ID である必要あり)
<code>-dbPassword</code>	<code>"sys_pwd"</code>
<code>-dbDriverType</code>	<code>"oracle_thin"</code>
<code>-dbHostName</code>	<code>"remote_host_name"</code>
<code>-dbJDBCClasspath</code>	<code>"oracle_library_directory"</code>
<code>-dbServerPort</code>	<code>"1521"</code>

表 64 は、通常では変更する必要のない `manageprofiles` コマンド・パラメーターとデフォルト値を示したものです。

表 64. デフォルトの `manageprofiles` コマンド・パラメーター

パラメーター	デフォルト値
<code>-profilePath</code>	<code>"install_root¥profiles¥my_WPSDMGR_DE_profile"</code>
<code>-hostName</code>	<code>"host_name"</code>
<code>-nodeName</code>	<code>"host_nameCellManagernode_number"</code>
<code>-cellName</code>	<code>"host_nameCellcell_number"</code>
<b>Windows</b> <code>-winserviceCheck</code>	<code>"true"</code>
<b>Windows</b> <code>-winserviceAccountType</code>	<code>"localsystem"</code>
<b>Windows</b> <code>-winserviceStartupType</code>	<code>"manual"</code>
<b>Windows</b> <code>-winserviceUserName</code>	<code>"Administrator"</code>
<code>-dbDelayConfig</code>	<code>"false"</code> (true はデプロイメント環境では無効)
<code>-dbOutputScriptDir</code>	<code>"install_root¥profiles¥my_WPSDMGR_DE_profile¥dbscripts¥"</code>

## WebSphere Enterprise Service Bus の例

以下は、`my_WESBDMGR_DE_profile` と呼ばれる WebSphere Enterprise Service Bus デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成する類似した例です。

表 65 は、デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成するために使用する `manageprofiles` コマンド・パラメーターと値の例を示したものです。

表 65. 指定される `manageprofiles` コマンド・パラメーター

パラメーター	値
<code>-create</code>	N/A
<code>-templatePath</code>	<code>"install_root ¥profileTemplates¥dmgr.esbserver"</code> (完全修飾されていることが必要)
<code>-profileName</code>	<code>"my_WESBDMGR_DE_profile"</code>
<code>-enableAdminSecurity</code>	<code>"true"</code>
<code>-adminPassword</code>	<code>"admin_pwd"</code>
<code>-adminUserName</code>	<code>"admin_id"</code>
<code>-ndTopology</code>	<code>"true"</code>
<code>-topologyPattern</code>	<code>"Reference"</code>
<code>-dbType</code>	<code>"ORACLE10G"</code> または <code>"ORACLE11G"</code>
<code>-dbName</code>	<code>"WPRCSDB"</code>
<code>-dbUserId</code>	<code>"sys_user_id"</code> (デプロイメント環境では SYSDBA ユーザー ID である必要あり)
<code>-dbPassword</code>	<code>"sys_pwd"</code>
<code>-dbDriverType</code>	<code>"oracle_thin"</code>
<code>-dbHostName</code>	<code>"remote_host_name"</code>

表 65. 指定される *manageprofiles* コマンド・パラメーター (続き)

パラメーター	値
-dbJDBCClasspath	"oracle_library_directory"
-dbServerPort	"1521"

表 66 は、通常では変更する必要のない *manageprofiles* コマンド・パラメーターとデフォルト値を示したものです。

表 66. デフォルトの *manageprofiles* コマンド・パラメーター

パラメーター	デフォルト値
-profilePath	"install_root¥profiles¥ my_WESBDMGR_DE_profile"
-hostName	"host_name"
-nodeName	"host_nameCellManagernode_number"
-cellName	"host_nameCellcell_number"
 -winserviceCheck	"true"
 -winserviceAccountType	"localsystem"
 -winserviceStartupType	"manual"
 -winserviceUserName	"Administrator"
-dbDelayConfig	"false" (true はデプロイメント環境では無効)
-dbOutputScriptDir	"install_root¥profiles¥ my_WESBDMGR_DE_profile¥dbscripts¥"

## 既存のプロファイルの拡張

既存の WebSphere Application Server、WebSphere Application Server Network Deployment、または WebSphere Application Server Network Deployment with Web Services Feature Pack プロファイルを WebSphere Enterprise Service Bus や WebSphere Process Server プロファイルに拡張できます。あるいは、WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルを WebSphere Process Server プロファイルに拡張することもできます。このトピックの説明を使用してプロファイルを拡張します。プロファイルの拡張は、*manageprofiles* コマンドを使用してコマンド行から行うことも、プロファイル管理ツールのグラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) を使用して対話式に行うこともできます。

### 始める前に

プロファイルが以下の特性を保有していることを確認してください。

- WebSphere Process Server のインストール済み環境を持つシステム上に存在していること。
- デプロイメント・マネージャーに統合されていないこと。プロファイル管理ツールまたは *manageprofiles* コマンドを使用して、統合済みのプロファイルを拡張することはできません。
- 稼働中のサーバーがないこと。

## このタスクについて

ご使用のシステムに WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment のプロファイルが既に存在している場合は、それらのプロファイルで定義されている稼働環境で WebSphere ESB または WebSphere Process Server の機能を使用できるようになります。同様に、WebSphere Enterprise Service Bus のプロファイルが既に存在している場合は、それらで WebSphere Process Server の機能を使用できるようになります。

### 制約事項:

- 「**デプロイメント環境**」プロファイル拡張オプションを選択している場合は、デプロイメント・マネージャー・プロファイルを拡張することはできません。
- 64 ビット・プラットフォーム (i5/OS を除く) または Linux on System z プラットフォーム上では、プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成または拡張することはできません。これらのプラットフォーム上でプロファイルを拡張するには、`manageprofiles` コマンドを使用する必要があります。詳しくは、284 ページの『`manageprofiles` コマンドを使用したプロファイルの拡張』を参照してください。

以下でタスクの概要を確認して、プロファイルの拡張についての理解を深めてください。

### 手順

1. 232 ページの『プロファイルの作成または拡張に関する前提条件』のトピックで、プロファイルを作成または拡張するための前提条件のリストを調べます。
2. プロファイルを `manageprofiles` コマンドを使用してコマンド行から拡張するか、プロファイル管理ツールを使用して対話的に拡張するかを決定します。
  - `manageprofiles` コマンドを使用してプロファイルを拡張するには、284 ページの『`manageprofiles` コマンドを使用したプロファイルの拡張』のトピックを参照してください。
  - プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを拡張するには、『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの拡張』のトピックを参照してください。

## プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの拡張

プロファイル管理ツールを使用して、WebSphere Application Server、WebSphere Application Server Network Deployment、または WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルを WebSphere Process Server プロファイルに拡張します。

### 始める前に

以下の前提条件が満たされていることを確認します。

- 拡張後のプロファイル・タイプ (スタンドアロン・サーバー、デプロイメント・マネージャー、またはカスタム) が、拡張前のタイプと同じである。
- 232 ページの『プロファイルの作成または拡張に関する前提条件』で、プロファイルを作成または拡張するための前提条件リストを確認している。
- 拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーをシャットダウンした。

- スタンドアロン・サーバーまたはカスタム・プロファイルを拡張する場合は、それがデプロイメント・マネージャーにすでに統合されているかどうかを次の手順で判別します。
  - 拡張するプロファイルが既にデプロイメント・マネージャーに統合されている場合は、プロファイル管理ツールを使用して WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルに拡張することはできません。
  - 拡張しようとするプロファイルがまだデプロイメント・マネージャーに統合されていない場合は、後から **addNode** コマンドを介してそのノードを統合するとき、拡張を正常に完了するためには、統合先のデプロイメント・マネージャーが以下の条件を満たしている必要があります。
    - 実行されていないければなりません。
    - 使用可能な JMX 管理ポートが必要です。デフォルト・プロトコルは SOAP です。
    - インストールした製品に応じて、事前に WebSphere Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルに拡張しておかなければなりません。

次のステップを実行してプロファイルを拡張します。

#### 手順

1. WebSphere Process Server プロファイル管理ツールを開始します。

以下のファイルのいずれかを実行します。

- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:  
`install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh`
- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合:  
`install_root\bin\ProfileManagement\pmt.bat`
- **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合:  
`pmt_client_installation\%PMT%\pmt.bat` (デフォルトでは  
`C:\ProgramFiles\IBM\WebSphere\PMTCClient`)

このツールを開始するための各種の方法については、243 ページの『プロファイル管理ツールの開始』のトピックを参照してください。

2. 次のステップは、システム上に既に WebSphere Application Server、 WebSphere Application Server Network Deployment、または WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルが存在するかどうかによって異なります。

システムに既にプロファイルが存在しますか?	次のステップ
いいえ	「ようこそ」パネルが表示されます。この場合は、この手順を実行しないでください。240 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの作成』に記載された手順に従ってください。
はい	「プロファイルの作成または拡張 (Create or augment profile)」パネルが表示されます。ステップ 3 (280 ページ) に進んでください。

3. 「プロファイルの作成または拡張 (Create or augment profile)」パネルで「**拡張**」をクリックします。

プロファイル管理ツールが別のウィンドウで開き、「ようこそ」パネルが表示されます。

4. 「ようこそ」パネルで「**次へ**」をクリックします。

「プロファイルの選択」パネルが表示されます。

5. 「プロファイルの選択」パネルで、拡張するプロファイルをドロップダウン・リストで強調表示させ、「**次へ**」をクリックします。

すべてのプロファイルが選択項目として表示されます。WebSphere Application Server プロファイルまたは WebSphere Application Server Network Deployment プロファイルを拡張した場合は、WebSphere Process Server がインストールされている WebSphere Application Server のバージョンから行う必要があります。

「拡張の選択」パネルが表示されます。

6. 「拡張の選択」パネルで、プロファイルを WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルまたは WebSphere Process Server プロファイルに拡張するかどうかを、該当する製品を強調表示して選択して、「**次へ**」を選択します。

以下のいずれかの条件に該当する場合は、プロファイル管理ツールが警告メッセージを表示します。

- 拡張対象として選択したプロファイルに実行中のサーバーがある。サーバーを停止しない限り、プロファイルは拡張できません。あるいは、「**戻る**」をクリックして、実行中のサーバーを持たない別のプロファイルを選択してください。
- 拡張対象として選択したプロファイルは統合されている。統合されたプロファイルは拡張できません。「**戻る**」をクリックして、未統合の別のプロファイルを選択する必要があります。
- 拡張対象として選択したプロファイルは、選択した製品で既に拡張されている。「**戻る**」をクリックして、別のプロファイルを拡張対象に選択してください。
- 拡張の対象として選択したプロファイルが、選択した製品で拡張できない。例えば、WebSphere Process Server プロファイルを WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルに拡張することはできません。互換性のある製品のプロファイルを拡張するか、「**戻る**」を選択して、別のプロファイルを拡張対象に選択してください。

「プロファイル拡張オプション」パネルが表示されます。

7. 「プロファイル拡張オプション」パネルで、実行するプロファイル拡張のタイプとして「**標準**」、「**拡張**」、(カスタム・プロファイルの場合は)「**デプロイメント環境**」のいずれかを選択し、「**次へ**」をクリックします。「**標準的**」オプションでは、デフォルトの構成設定でプロファイルが拡張されます。「**高度**」オプションでは、プロファイルに独自の構成値を指定できます。「**デプロイメント環境**」オプションでは、カスタム・プロファイルに独自の構成値を指定し、1 つまたは複数のクラスターを選択して管理対象ノードに適用することができます。

8. プロファイル管理ツールの次のパネルに進む前に、以下のいずれかのトピックに記載されている手順を行って、プロファイルの拡張を構成および完了してください。

選択したプロファイル拡張のタイプ	選択したプロファイル・タイプ (スタンドアロン・サーバー、デプロイメント・マネージャー、またはカスタム) に基づいてプロファイルの拡張を完了するための手順
標準的	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 337 ページの『デフォルト値を使用したスタンドアロン・サーバー・プロファイルの構成』</li> <li>• 340 ページの『デフォルト値を使用したデプロイメント・マネージャー・プロファイルの構成』</li> <li>• 343 ページの『デフォルト値を使用したカスタム・プロファイル (管理対象ノード) の構成』</li> </ul>
高度	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 347 ページの『カスタマイズした値を使用したスタンドアロン・サーバー・プロファイルの構成』</li> <li>• 375 ページの『カスタマイズした値を使用したデプロイメント・マネージャー・プロファイルの構成』</li> <li>• 397 ページの『カスタマイズした値を使用したカスタム・プロファイル (管理対象ノード) の構成』</li> </ul>
デプロイメント環境	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 428 ページの『デプロイメント環境用のカスタム・プロファイル (管理対象ノード) の構成』</li> </ul>

## タスクの結果

これで、指定したタイプ (スタンドアロン・サーバー、デプロイメント・マネージャー、またはカスタム) で拡張された稼働環境を定義するプロファイルの構成準備ができました。

### プロファイル管理ツールの開始:

プロファイル管理ツールを開始する前に、制約事項に注意し、特定の前提条件が満たされていることを確認してください。プロファイル管理ツールは、実行するときのプラットフォームに応じて、いくつかの方法で開始できます。

### 制約事項:

- 64 ビット・プラットフォーム (i5/OS を除く) または Linux on System z プラットフォーム上では、プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成または拡張することはできません。

- **i5/OS** WebSphere Process Server が i5/OS システムにインストールされると、プロファイル管理ツールはスタンドアロン・モードでのみ実行されます。Application Server Toolkit (AST) ツールからこのツールを起動することはできません。
- **i5/OS** プロファイル管理ツールのパネル上の「参照」ボタンが使用不可になります。
- **Vista** **複数インスタンスを持つ非ルート・ユーザーの制約事項:**  
WebSphere Process Server の複数インスタンスをルート・ユーザーとしてインストールし、それらのインスタンスのサブセットだけに非ルート・ユーザーのアクセスを与えた場合、プロファイル管理ツールはその非ルート・ユーザーに対して正しく機能しません。さらに、com.ibm.wsspi.profile.WSProfileException、つまりアクセス拒否メッセージが `install_root\bin\ProfileManagement\pmt.bat` ファイルに発生します。デフォルトでは、非ルート・ユーザーはプログラム・ファイル・ディレクトリーにアクセス権がありません。プログラム・ファイル・ディレクトリーは製品がデフォルトでインストールされる場所です。この問題を解決するには、非ルート・ユーザーが製品をインストールできるようにするか、他の製品インスタンスにアクセスする許可を得るかです。

**Linux** **UNIX** **Windows** プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。システムのデフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、`java user.language` 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。次のコマンドを実行します。

- **Linux** **UNIX** `install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar`
- **Windows** `install_root\java\bin\java -Duser.language=locale install_root\bin\ProfileManagement\startup.jar`

例えば、Linux システム上でドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/
bin/ProfileManagement/startup.jar
```

### すべてのプラットフォームでのプロファイル管理ツールの開始

プロファイル管理ツールを任意のプラットフォームで開始するには、以下のいずれかの方法を使用します。

- ファースト・ステップ・コンソールから。ファースト・ステップ・コンソールを開始する方法については、162 ページの『ファースト・ステップ・コンソールの開始』を参照してください。
- インストールの最後に、プロファイル管理ツールを開始するためのチェック・ボックスを選択する。

## i5/OS プラットフォームでのプロファイル管理ツールの開始

**i5/OS** Profile Management Tool Client for i5/OS は Java アプリケーションで、Windows ワークステーションにインストールしておく必要があります。このツールは、Windows ワークステーションで i5/OS のクライアントとして稼動し、WebSphere Process Server インストールをホスティングする i5/OS サーバーにリモートで接続します。このツールをインストールして開始するには、以下のようになります。

1. 以下の 2 つのどちらかの方法で、Profile Management Tool Client for i5/OS を Windows ワークステーションにインストールします。
  - 製品のランチパッドから、「**WebSphere Profile Management Tool Client for i5/OS のインストール**」をクリックします。
  - 製品ルート・ディレクトリーの ¥PMTClient¥PMTInstaller.exe をクリックします。

インストールすると、Windows の「スタート」メニューに項目が作成されます。

2. Windows の「スタート」メニューから「スタート」 > 「プログラム」 または 「すべてのプログラム」 > 「IBM WebSphere」 > 「Profile Management Tool Client for i5/OS」とクリックしてツールを開始します。表示されたパネルで System i サーバーにサインオンすることができます。
3. サインオン・パネルで、リモート i5/OS システム名、i5/OS ユーザー・プロファイル、およびパスワードを入力し、「**OK**」をクリックします。
4. 次のパネルで、使用するインストール済み環境 (WebSphere Process Server の複数のインストール済み環境が存在する場合) およびポート番号を選択します。次に「**プロファイル管理ツールの起動**」をクリックします。

**注:** デフォルトのポート番号は 1099 です。これは別のポートに変更できます。このポート番号が使用中の場合は、エラー・メッセージが表示されます。続行するには異なるポート番号を選択します。

プロファイル管理ツール・クライアントから新しいバージョンの WebSphere Process Server のサーバーに接続すると、サーバーのバージョンに合わせてプロファイル管理ツール・クライアントを更新するかどうかを確認するためのメッセージが表示されます。「はい」をクリックすると、プロファイル管理ツール・クライアントが自動的に更新され、プロファイル管理ツールが開きます。

プロファイル管理ツール・クライアントから古いバージョンの WebSphere Process Server のサーバーに接続すると、サーバーと同じバージョンのプロファイル管理ツール・クライアントをインストールするよう促すメッセージが表示されます。サーバーと同じバージョンのプロファイル管理ツール・クライアントをインストールするまで、プロファイル管理ツールにアクセスできません。

## Linux および UNIX プラットフォームでのプロファイル管理ツールの開始

**Linux** **UNIX** このツールは、Linux および UNIX プラットフォーム上で、コマンド `install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh` を実行して開始できます。

## Windows プラットフォームでのプロファイル管理ツールの開始

**Windows** Windows プラットフォームでは、以下の方法でプロファイル管理ツールを開始できます。

- Windows の「スタート」メニューを使用します。例えば、「スタート」>「プログラム」または「すべてのプログラム」>「IBM WebSphere」>「Process Server 6.2」>「プロファイル管理ツール」を選択します。
- `install_root\bin\ProfileManagement\pmt.bat` コマンドを実行します。

### manageprofiles コマンドを使用したプロファイルの拡張

拡張は、拡張テンプレートで既存のプロファイルを変更する機能です。既存の WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment のプロファイルを、WebSphere Enterprise Service Bus または WebSphere Process Server のプロファイルに拡張できます。あるいは、WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルを WebSphere Process Server プロファイルに拡張することもできます。プロファイルは、コマンド行から `manageprofiles` コマンドを使用して拡張することができます。

### 始める前に

この手順を実行する前に、以下の作業が完了していることを確認してください。

- 232 ページの『プロファイルの作成または拡張に関する前提条件』で、プロファイルを作成または拡張するための前提条件リストを確認している。
- 拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーをシャットダウンした。
- スタンドアロン・サーバーまたはカスタム・プロファイルを拡張する場合は、それがデプロイメント・マネージャーにすでに統合されているかどうかを次の手順で判別します。
  - 拡張するプロファイルが既にデプロイメント・マネージャーに統合されている場合は、これを `manageprofiles` コマンドを使用して拡張することはできません。
  - 拡張しようとするプロファイルがまだデプロイメント・マネージャーに統合されていない場合は、後から `addNode` コマンドを介してそのノードを統合するとき、拡張を正常に完了するためには、統合先のデプロイメント・マネージャーが以下の状態になっている必要があります。
    - 実行されていない必要があります。
    - 拡張するプロファイルのリリースと同レベルか、それよりも上位レベルでなければなりません。WebSphere Process Server プロファイルは WebSphere Enterprise Service Bus デプロイメント・マネージャーを使用できませんが、WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルは WebSphere Process Server デプロイメント・マネージャーを使用できます。WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルは、WebSphere Enterprise Service Bus または WebSphere Process Server デプロイメント・マネージャー使用できます。
  - 使用可能な JMX 管理ポートが必要です。デフォルト・プロトコルは SOAP です。

- インストールした製品に応じて、事前に WebSphere Process Server プロファイルに拡張しておかなければなりません。
- 287 ページの『manageprofiles コマンドによる Derby または DB2 データベースのプロファイルの拡張 - 例』または 293 ページの『manageprofiles コマンドによる Oracle データベースのプロファイルの拡張 - 例』に記載されているプロファイル拡張コマンドの例を確認している。
- 同じプロファイルで manageprofiles コマンドを実行していないことを検査している。エラー・メッセージが表示された場合は、別のプロファイル作成操作や拡張操作が進行中かどうかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

**この作業に必要なセキュリティのロール:** 235 ページの『非 root ユーザーに対するファイルとディレクトリーの書き込み権限の、プロファイル作成のための付与』を参照してください。

manageprofiles コマンドを使用してプロファイルを拡張するには、以下のステップを実行します。

#### 手順

1. 既存のプロファイルの作成に使用された WebSphere Application Server テンプレート (deployment manager、stand-alone または managed) を判別します。プロファイルの作成に使用したテンプレートは、*install\_root/properties/profileRegistry.xml* のプロファイル・レジストリーを表示して判別できます。このファイルは変更しないでください。テンプレートを確認するだけにしてください。
2. 拡張先のテンプレートを探します。既存の WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment プロファイルを、WebSphere Process Server または WebSphere ESB プロファイルに拡張できません。既存の WebSphere ESB プロファイルを WebSphere Process Server プロファイルに拡張できません。使用可能なプロファイル・テンプレートは次のとおりです。
  - default.wbiserver: WebSphere Process Server スタンドアロン・サーバー・プロファイル用で、スタンドアロン・サーバーを定義します。
  - dmgr.wbiserver: WebSphere Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイル用で、デプロイメント・マネージャーを定義します。デプロイメント・マネージャーは、1 つ以上のマシン上にあるサーバーの論理グループに、1 つの管理インターフェースを提供します。
  - managed.wbiserver: WebSphere Process Server カスタム・プロファイル用で、デプロイメント・マネージャーにフェデレートされた場合、管理対象ノードを定義します。デプロイメント環境を必要とするソリューションを使用する場合は、ランタイム環境に 1 つ以上の管理対象ノードが必要になります。カスタム・プロファイルには、作動可能にするためにデプロイメント・マネージャー・セル内に統合する必要のある空のノードが含まれています。カスタム・プロファイルを統合すると、カスタム・プロファイルが管理対象ノードに変更されます。
  - default.esbserver: WebSphere Enterprise Service Bus スタンドアロン・サーバー・プロファイル用で、スタンドアロン・サーバーを定義します。
  - dmgr.esbserver: WebSphere Enterprise Service Bus デプロイメント・マネージャー・プロファイル用で、デプロイメント・マネージャーを定義します。

- `managed.esbserver`: WebSphere Enterprise Service Bus カスタム・プロファイル用で、デプロイメント・マネージャーにフェデレートされた場合、管理対象ノードを定義します。

拡張テンプレートを使用して既存のプロファイルに変更を加える場合は、`augment` パラメーターを使用します。`augment` パラメーターを使用すると、`manageprofiles` コマンドは **-templatePath** パラメーターのテンプレートを使用し、**-profileName** パラメーターで指定されているプロファイルを更新または拡張します。使用できる拡張テンプレートは、どの IBM 製品のどのバージョンが環境にインストールされているかによって決まります。**-templatePath** パラメーターには必ず完全修飾ファイル・パスを指定してください。理由は、**-templatePath** パラメーターに相対ファイル・パスを指定すると、指定したプロファイルが完全に拡張されないためです。

注: `install_dir/profileTemplates` ディレクトリー内のファイルは手動で変更しないでください。

3. コマンド行からファイルを実行します。**-profilePath** パラメーターは使用しないでください。これらは単純な例です。より複雑な例については、287 ページの『`manageprofiles` コマンドによる Derby または DB2 データベースのプロファイルの拡張 - 例』または 293 ページの『`manageprofiles` コマンドによる Oracle データベースのプロファイルの拡張 - 例』を参照してください。

- **i5/OS** `manageprofiles -augment -templatePath install_root/profileTemplates/default.wbiserver -profileName MyProfileName`
- **Linux** **UNIX** `manageprofiles.sh -augment -templatePath install_root/profileTemplates/default.wbiserver -profileName MyProfileName`
- **Windows** `manageprofiles.bat -augment -templatePath install_root%profileTemplates%default.wbiserver -profileName MyProfileName`

応答ファイルを作成した場合は、**-response** パラメーターを使用して `-response myResponseFile` とします。

以下の例は拡張操作のための応答ファイルを示します。

```
augment
profileName=testResponseFileAugment
templatePath=install_root/profileTemplates/default.wbiserver

nodeName=myNodeName
cellName=myCellName
hostName=myHostName
omitAction=myOptionalAction1, myOptionalAction2
```

コマンドにより、実行につれて状況が表示されます。完了するまで待ってください。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

## 次のタスク

プロファイルの拡張が正常に終了したことは、「INSTCONFSUCCESS: プロファイルの拡張は正常に終了しました。」というメッセージまたは次のログ・ファイルで確認できます。

- **Linux** **UNIX** `install_root/logs/manageprofiles/profile_name_augment.log`
- **Windows** `install_root¥logs¥manageprofiles¥profile_name_augment.log`
- **i5/OS** `user_data_root/profileRegistry/logs/manageprofiles/profile_name_augment.log`

インストール検査テスト (IVT) ツールを実行して、プロファイルが正常に拡張されたことを確認します。このためには、以下のコマンドを実行します。

- **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合: `profile_root/bin/wbi_ivt`
- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォーム: `profile_root/bin/wbi_ivt.sh`
- **Windows** **Windows** プラットフォーム: `profile_root¥bin¥wbi_ivt.bat`

**manageprofiles** コマンドによる **Derby** または **DB2** データベースのプロファイルの拡張 - 例:

インストール済み環境で **manageprofiles** コマンドを使用して、スタンドアロン・サーバー、デプロイメント・マネージャー、およびカスタム・プロファイルの拡張に役立つプロファイル拡張コマンドの例。

### スタンドアロン・サーバーのプロファイル

以下のコマンド例は、Windows サーバー上で WebSphere Process Server の機能を持つ、*AppServ04* と呼ばれる WebSphere Application Server スタンドアロン・サーバー・プロファイルを拡張します。288 ページの表 67 および 288 ページの表 68 のパラメーターは以下を指定します。

- **Derby Embedded** データベース製品は共通データベースおよび **Common Event Infrastructure** データベースの両方に使用でき、これらはプロファイル拡張プロセス中にローカル・ホストで作成および構成されるように設定されます。データベース関連の **manageprofiles** パラメーターの完全なリストは、トピック 323 ページの『共通データベース構成用の **manageprofiles** パラメーター (データベース製品ごと)』および 330 ページの『**Common Event Infrastructure** データベース構成の **manageprofiles** パラメーター (データベース製品ごと)』を参照してください。
- サンプルの **Business Process Choreographer** 実装環境は作成されません。
- **ビジネス・ルール・マネージャー** は構成されません。
- **WebSphere** が提供する **ビジネス・スペース** は構成されません。
- **管理セキュリティ** はプロファイル作成プロセス中に使用可能になっていますが、プロセス拡張中に再指定されます。

288 ページの表 67 は、スタンドアロン・サーバー・プロファイルを作成するために使用する **manageprofiles** コマンド・パラメーターと値の例を示したものです。

表 67. 指定される *manageprofiles* コマンド・パラメーター

パラメーター	値
-augment	N/A
-templatePath	"install_root ¥profileTemplates¥default.wbiserver" (完全修飾 されていることが必要)
-profileName	"AppServ04"
-adminPassword	"admin_pwd"
-adminUserName	"admin_id"
-dbType	"DERBY_EMBEDDED"
-dbUserId	"cei_id"
-dbPassword	"cei_pwd"
-dbServerPort	"50000"
-ceiDbName	"event"
-dbDelayConfig	"true"
-ceiDbAlreadyConfigured	"false"
-configureBPC	"false"
-dbType	"DERBY_EMBEDDED"
-dbName	"WPRCSDB"
-dbCreateNew	"true"
-dbDelayConfig	"false"
-dbCommonForME	"false"
-fileStoreForME	"false" (-dbCommonForME が true の場合、 true は不可)
-configureBspace	"false"
-configureBRM	"false"

表 68 は、通常では変更する必要のない *manageprofiles* コマンド・パラメーターとデフォルト値を示したものです。

表 68. デフォルトの *manageprofiles* コマンド・パラメーター

パラメーター	デフォルト値
-dbOutputScriptDir	"install_root¥profiles¥AppServ04¥dbscripts ¥CommonDB¥Derby¥WPRCSDB"
-dbOutputscriptDir	"install_root¥profiles¥AppServ04 ¥dbscripts¥CEI_event"

## WebSphere Enterprise Service Bus の例

以下は、WebSphere Enterprise Service Bus の機能を持つ *AppServ03* と呼ばれる WebSphere Application Server スタンドアロン・サーバー・プロファイルを拡張する類似した例です。

289 ページの表 69 は、スタンドアロン・サーバー・プロファイルを作成するために使用する *manageprofiles* コマンド・パラメーターと値の例を示したものです。

表 69. 指定される *manageprofiles* コマンド・パラメーター

パラメーター	値
-augment	N/A
-templatePath	"install_root ¥profileTemplates¥default.esbserver" (完全修飾 されていることが必要)
-profileName	"AppServ03"
-adminPassword	"admin_pwd"
-adminUserName	"admin_id"
-dbType	"DERBY_EMBEDDED"
-dbUserId	"cei_id"
-dbPassword	"cei_pwd"
-ceiDbName	"event"
-dbDelayConfig	"true"
-ceiDbAlreadyConfigured	"false"
-dbType	"DERBY_EMBEDDED"
-dbName	"WPRCSDB"
-dbCreateNew	"true"
-dbDelayConfig	"false"
-dbCommonForME	"false"
-fileStoreForME	"false" (-dbCommonForME が true の場合、 true は不可)
-configureBspace	"false"

表 70 は、通常では変更する必要のない *manageprofiles* コマンド・パラメーターとデフォルト値を示したものです。

表 70. デフォルトの *manageprofiles* コマンド・パラメーター

パラメーター	デフォルト値
-dbOutputScriptDir	"install_root¥profiles¥AppServ03¥dbscripts ¥CommonDB¥Derby¥WPRCSDB"
-dbOutputscriptDir	"install_root¥profiles¥AppServ03¥dbscripts ¥CEL_event"

### デプロイメント・マネージャー・プロファイル (デプロイメント環境のセットアップなし)

以下のコマンド例は、Windows サーバー上で WebSphere Process Server の機能を持つ、*Dmgr02* と呼ばれる WebSphere Application Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルを拡張します。290 ページの表 71 および 290 ページの表 72 のパラメーターは以下を指定します。

- Derby Network Server データベース製品は共通データベースに使用できます。これはプロファイル拡張プロセス中にローカル・ホストで作成および構成されるように設定されます。データベース関連の *manageprofiles* パラメーターの完全なり

ストは、トピック 323 ページの『共通データベース構成用の manageprofiles パラメーター (データベース製品ごと)』を参照してください。

- 管理セキュリティはプロファイル作成プロセス中に使用可能になっていますが、プロセス拡張中に再指定されます。

表 71 は、デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成するために使用する manageprofiles コマンド・パラメーターと値の例を示したものです。

表 71. 指定される manageprofiles コマンド・パラメーター

パラメーター	値
-augment	N/A
-templatePath	"install_root %profileTemplates%dmgr.wbiserver" (完全修飾されていることが必要)
-profileName	"Dmgr02"
-adminPassword	"admin_pwd"
-adminUserName	"admin_id"
-ndTopology	"false" (デプロイメント環境の構成はプロファイル拡張中はサポートされません)
-dbType	"DERBY_NETWORKSERVER"
-dbName	"WPRCSDB"
-dbCreateNew	"true"
-dbDelayConfig	"false"
-dbHostName	"localhost"
-dbUserId	"db_id"
-dbPassword	"db_pwd"
-dbServerPort	"1528"

表 72 は、通常では変更する必要のない manageprofiles コマンド・パラメーターとデフォルト値を示したものです。

表 72. デフォルトの manageprofiles コマンド・パラメーター

パラメーター	デフォルト値
-dbOutputScriptDir	"install_root%profiles%Dmgr02%dbscripts %CommonDB%Derby%WPRCSDB"

## WebSphere Enterprise Service Bus の例

以下は、WebSphere Enterprise Service Bus 機能を持つ Dmgr04 と呼ばれる WebSphere Application Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルを拡張する類似した例です。

291 ページの表 73 は、デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成するために使用する manageprofiles コマンド・パラメーターと値の例を示したものです。

表 73. 指定される *manageprofiles* コマンド・パラメーター

パラメーター	値
-augment	N/A
-templatePath	"install_root ¥profileTemplates¥dmgr.esbsserver" (完全修飾されていることが必要)
-profileName	"Dmgr04"
-adminPassword	"admin_pwd"
-adminUserName	"admin_id"
-ndTopology	"false" (デプロイメント環境の構成はプロファイル拡張中はサポートされません)
-dbType	"DERBY_NETWORKSERVER"
-dbName	"WPRCSDB"
-dbCreateNew	"true"
-dbDelayConfig	"false"
-dbHostName	"localhost"
-dbUserId	"db_id"
-dbPassword	"db_pwd"
-dbServerPort	"1529"

表 74 は、通常では変更する必要のない *manageprofiles* コマンド・パラメーターとデフォルト値を示したものです。

表 74. デフォルトの *manageprofiles* コマンド・パラメーター

パラメーター	デフォルト値
-dbOutputScriptDir	"install_root¥profiles¥Dmgr04¥dbscripts ¥CommonDB¥Derby¥WPRCSDB"

### カスタム・プロファイル (デプロイメント環境のセットアップなし)

以下のコマンド例は、Windows サーバー上で WebSphere Process Server の機能を持つ、*Custom21* と呼ばれる WebSphere Application Server カスタム・プロファイルを拡張します。この例は、上で作成されたデプロイメント・マネージャー・プロファイルと一緒に動作するように設定されています。

292 ページの表 75 のパラメーターは以下を指定します。

- Derby Network Server データベース製品は共通データベース用に使用されます。これは既に存在すると想定されています。カスタム・プロファイルの作成では、カスタム・プロファイルの統合先のデプロイメント・マネージャーによって使用されるデータベースを指し示す必要があります。データベース関連の *manageprofiles* パラメーターの完全なリストは、トピック 323 ページの『共通データベース構成用の *manageprofiles* パラメーター (データベース製品ごと)』を参照してください。
- 管理セキュリティは、カスタム・プロファイルの統合先のデプロイメント・マネージャー上で有効になります。

すべての有効な `manageprofiles` パラメーターのリストについては、305 ページの『`manageprofiles` パラメーター』を参照してください。

表 75 は、カスタム・プロファイルを作成するために使用する `manageprofiles` コマンド・パラメーターと値の例を示したものです。

表 75. 指定される `manageprofiles` コマンド・パラメーター

パラメーター	値
<code>-augment</code>	N/A
<code>-templatePath</code>	<code>"install_root ¥profileTemplates¥managed.wbiserver"</code> (完全修飾されていることが必要)
<code>-profileName</code>	<code>"Custom21"</code>
<code>-dmgrHost</code>	<code>"localhost"</code>
<code>-dmgrPort</code>	<code>"8903"</code> ( <code>-dmgrPort</code> の値を見つけるには、このカスタム・プロファイルに関連付けられたデプロイメント・マネージャーの <code>dmgr_profile_root¥logs</code> ディレクトリーに移動します。このディレクトリーで <code>AboutThisProfile.txt</code> ファイルを開き、「Deployment manager SOAP connector port:」の項目から値を見つけます。)
<code>-dmgrAdminPassword</code>	<code>"admin_pwd"</code>
<code>-dmgrAdminUserName</code>	<code>"admin_id"</code>
<code>-ndTopology</code>	<code>"false"</code>
<code>-dbType</code>	<code>"DERBY_NETWORKSERVER"</code>
<code>-dbJDBCClasspath</code>	<code>"install_root¥derby¥lib"</code>

## WebSphere Enterprise Service Bus の例

以下は、WebSphere Enterprise Service Bus の機能を持つ、`Custom05` と呼ばれる WebSphere Application Server カスタム・プロファイルを拡張する類似した例です。

表 76 は、カスタム・プロファイルを作成するために使用する `manageprofiles` コマンド・パラメーターと値の例を示したものです。

表 76. 指定される `manageprofiles` コマンド・パラメーター

パラメーター	値
<code>-augment</code>	N/A
<code>-templatePath</code>	<code>"install_root ¥profileTemplates¥managed.esbserver"</code> (完全修飾されていることが必要)
<code>-profileName</code>	<code>"Custom05"</code>
<code>-dmgrHost</code>	<code>"localhost"</code>

表 76. 指定される *manageprofiles* コマンド・パラメーター (続き)

パラメーター	値
-dmgrPort	"8902" (-dmgrPort の値を見つけるには、このカスタム・プロファイルに関連付けられたデプロイメント・マネージャーの <i>dmgr_profile_root</i> ¥logs ディレクトリーに移動します。このディレクトリーで AboutThisProfile.txt ファイルを開き、「Deployment manager SOAP connector port:」の項目から値を見つけます。)
-dmgrAdminPassword	"admin_pwd"
-dmgrAdminUserName	"admin_id"
-ndTopology	"false"
-dbType	"DERBY_NETWORKSERVER"
-dbJDBCClasspath	"install_root¥derby¥lib"

### manageprofiles コマンドによる Oracle データベースのプロファイルの拡張 - 例:

インストール済み環境で *manageprofiles* コマンドを使用した、スタンドアロン・サーバーおよびデプロイメント・マネージャー・プロファイルの拡張に役立つプロファイル拡張コマンドの例。

#### スタンドアロン・サーバーのプロファイル

以下のコマンド例は、Windows サーバー上で WebSphere Process Server の機能を持つ、*AppServ04* と呼ばれる WebSphere Application Server スタンドアロン・サーバー・プロファイルを拡張します。294 ページの表 77、294 ページの表 78、および 294 ページの表 79 のパラメーターは以下を指定します。

- Oracle 9i データベース製品は共通データベースおよび Common Event Infrastructure データベースの両方に使用でき、これらは両方ともローカル・ホストに既に存在すると想定されています。両方のデータベースは後で構成するように設定されています (-dbDelayConfig "true" のコマンド・パラメーター値は、構成スクリプトは作成されますが実行されないことを指定します)。データベース関連の *manageprofiles* パラメーターの完全なリストは、トピック 323 ページの『共通データベース構成用の *manageprofiles* パラメーター (データベース製品ごと)』および 330 ページの『Common Event Infrastructure データベース構成の *manageprofiles* パラメーター (データベース製品ごと)』を参照してください。
- サンプルの Business Process Choreographer 構成が作成されます。
- ビジネス・ルール・マネージャーは構成されません。
- WebSphere が提供するビジネス・スペースは構成されません。
- 管理セキュリティーはプロファイル作成プロセス中に使用可能になっていますが、プロセス拡張中に再指定されます。

294 ページの表 77 は、スタンドアロン・サーバー・プロファイルを作成するために使用する *manageprofiles* コマンド・パラメーターと値の例を示したものです。

表 77. 指定される *manageprofiles* コマンド・パラメーター

パラメーター	値
-augment	N/A
-templatePath	"install_root ¥profileTemplates¥default.wbiserver" (完全修飾 されていることが必要)
-profileName	"AppServ04"
-adminPassword	"admin_pwd"
-adminUserName	"admin_id"
-configureBPC	"true"
-dbType	"ORACLE9I"
-dbName	"WPRCSDB"
-ceiDbName	"EVENT"
-dbDelayConfig	"true"
-fileStoreForME	"false" (-dbCommonForME が true の場合、 true は不可)
-dbCommonForME	"true"
-dbPassword	"db_pwd"
-dbDriverType	"oracle_thin"
-dbJDBCClasspath	"oracle_library_directory"
-dbServerPort	"1521"
-configureBspace	"false"
-configureBRM	"false"

表 78 は、通常では変更する必要のない *manageprofiles* コマンド・パラメーターとデフォルト値を示したものです。

表 78. デフォルトの *manageprofiles* コマンド・パラメーター

パラメーター	デフォルト値
-dbOutputScriptDir	"install_root¥profiles¥AppServ04¥dbscripts¥"
-dbHostName	"local_host_name"

表 79 に示すのは、プロファイル管理ツールを通じて表示されない追加の *manageprofiles* コマンド・パラメーターで、ユーザー自身の Oracle 用ユーザー名およびパスワードの組み合わせを選択するように指定することが可能です。

表 79. Oracle 用追加 *manageprofiles* コマンド・パラメーター

パラメーター	デフォルト値	注釈
-dbSysUserId	"sys_user_id"	この ID は SYSDBA 特権を持つ必要があります。Oracle の内部ユーザー 'sys' は使用しないでください。  このパラメーターは、プロファイル作成中 (dbDelayConfig = "FALSE" のとき)、データベースおよびそのオブジェクトを構成する場合に必要です。

表 79. Oracle 用追加 *manageprofiles* コマンド・パラメーター (続き)

パラメーター	デフォルト値	注釈
-dbSysPassword	"sys_pwd"	このパラメーターは、プロファイル作成中 (dbDelayConfig = "FALSE" のとき)、データベースおよびそのオブジェクトを構成する場合に必要です。
-dbCommonUserId	"common_db_userID" (共通 DB オブジェクトの作成に使用)	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、このユーザーは Oracle データベース名に基づいて自動的に作成されます (SID)。例: SID が ORCL の場合、dbCommonUserId は ORCCOMM。
-dbCommonPassword	"common_db_pwd"	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。  「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、dbCommonPassword は dbPassword に設定されます。例: dbCommonPassword = dbPassword
-dbBspaceUserId	"bspace_db_userID" (ビジネス・スペースの構成に使用)	このパラメーターは、ユーザー独自のビジネス・スペース・スキーマが必要な場合に必要です。指定されない場合、デフォルト値 (IBMBUSSP) が設定されます。
-dbBspacePassword	"bspace_db_pwd" (ビジネス・スペースの構成に使用)	このパラメーターは、独自のビジネス・スペース・パスワードが必要な場合に必要です。それ以外の場合は、dbBspacePassword = "YouNameIt" でなければ dbBspacePassword = dbPassword (存在する場合)、そうでなければ dbBspacePassword = IBMBUSSP、という順序でデフォルト値が設定されます。
-dbCeiUserId	"cei_userID" (CEI オブジェクトの作成に使用)	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。  「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、このユーザーは Oracle データベース名に基づいて自動的に作成されます (SID)。例: SID が ORCL の場合、dbCeiUserId は ORCCEID。
-dbCeiPassword	"cei_db_pwd"	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。  「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、dbCeiPassword は dbPassword に設定されます。例: dbCeiPassword = dbPassword
	下のすべてのパラメーターは、-dbCommonForME = "true" の場合のみ有効です。	

表 79. Oracle 用追加 *manageprofiles* コマンド・パラメーター (続き)

パラメーター	デフォルト値	注釈
-dbBPCMeUserId	"bpc_me_userID" (BPC ME オブジェクトの作成に使用) (-configureBPC = "true" の場合のみ有効)	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。  「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、このユーザーは Oracle データベース名に基づいて自動的に作成されます (SID)。例: SID が ORCL の場合、dbBPCMeUserId は ORCBM00。
-dbBPCMePassword	"bpc_me_pwd" (-configureBPC = "true" の場合にのみ有効)	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。  「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、dbCeiPassword は dbPassword に設定されます。例: dbBPCMePassword = dbPassword
-dbCeiMeUserId	"cei_me_userID" (CEI ME オブジェクトの作成に使用)	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。  「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、このユーザーは Oracle データベース名に基づいて自動的に作成されます (SID)。例: SID が ORCL の場合、dbCeiMeId は ORCCM00。
-dbCeiMePassword	"cei_me_pwd"	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。  「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、dbCeiPassword は dbPassword に設定されます。例: dbCeiMePassword = dbPassword
-dbAppMeUserId	"app_me_userID" (SCAAPP ME オブジェクトの作成に使用)	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。  「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、このユーザーは Oracle データベース名に基づいて自動的に作成されます (SID)。例: SID が ORCL の場合、dbAppMeId は ORCSA00。

表 79. Oracle 用追加 *manageprofiles* コマンド・パラメーター (続き)

パラメーター	デフォルト値	注釈
-dbAppMePassword	"app_me_pwd"	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。  「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、dbCeiPassword は dbPassword に設定されます。例: dbAppMePassword = dbPassword
-dbSysMeUserId	"sys_me_userID" (SCASYS ME オブジェクトの作成に使用)	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。  「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、このユーザーは Oracle データベース名に基づいて自動的に作成されます (SID)。例: SID が ORCL の場合、dbSysMeUserId は ORCSS00。
-dbSysMePassword	"sys_me_pwd"	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。  「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、dbCeiPassword は dbPassword に設定されます。例: dbAppMePassword = dbPassword

### WebSphere Enterprise Service Bus の例

以下は、WebSphere Enterprise Service Bus の機能を持つ *AppServ03* と呼ばれる WebSphere Application Server スタンドアロン・サーバー・プロファイルを拡張する類似した例です。違いは、データベースを直ちに構成するように設定されていることです (-dbDelayConfig "false" のコマンド・パラメーター値は、構成スクリプトが実行されることを指定します)。

表 80 は、スタンドアロン・サーバー・プロファイルを作成するために使用する *manageprofiles* コマンド・パラメーターと値の例を示したものです。

表 80. 指定される *manageprofiles* コマンド・パラメーター

パラメーター	値
-augment	N/A
-templatePath	"install_root ¥profileTemplates¥default.esbserver" (完全修飾されていることが必要)
-profileName	"AppServ03"
-adminPassword	"admin_pwd"
-adminUserName	"admin_id"
-dbType	"ORACLE9I"

表 80. 指定される *manageprofiles* コマンド・パラメーター (続き)

パラメーター	値
-dbName	"WPRCSDB"
-ceiDbName	"EVENT"
-dbDelayConfig	"false"
-fileStoreForME	"false" (-dbCommonForME が true の場合、true は不可)
-dbCommonForME	"true"
-dbLocation	"oracle_install_directory"
-dbPassword	"db_pwd"
-dbDriverType	"oracle_thin"
-dbJDBCClasspath	"oracle_library_directory"
-dbServerPort	"1521"
-dbSysUserId	"sys_user_id"
-dbSysPassword	"sys_pwd"
-configureBSpace	"false"

表 81 は、通常では変更する必要のない *manageprofiles* コマンド・パラメーターとデフォルト値を示したものです。

表 81. デフォルトの *manageprofiles* コマンド・パラメーター

パラメーター	デフォルト値
-dbOutputScriptDir	"install_root¥profiles¥AppServ03¥dbscripts¥"
-dbHostName	"local_host_name"

表 82 に示すのは、プロファイル管理ツールを通じて表示されない追加の *manageprofiles* コマンド・パラメーターで、ユーザー自身の Oracle 用ユーザー名およびパスワードの組み合わせを選択するように指定することが可能です。

表 82. Oracle 用追加 *manageprofiles* コマンド・パラメーター

パラメーター	デフォルト値	注釈
-dbCommonUserId	"common_db_userID" (共通 DB オブジェクトの作成に使用)	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、このユーザーは Oracle データベース名に基づいて自動的に作成されます (SID)。例: SID が ORCL の場合、dbCommonUserId は ORCCOMM。
-dbCommonPassword	"common_db_pwd"	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。  「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、dbCommonPassword は dbPassword に設定されます。例: dbCommonPassword = dbPassword

表 82. Oracle 用追加 *manageprofiles* コマンド・パラメーター (続き)

パラメーター	デフォルト値	注釈
-dbBspaceUserId	" <i>bospace_db_userid</i> " (ビジネス・スペースの構成に使用)	このパラメーターは、ユーザー独自のビジネス・スペース・スキーマが必要な場合に必要です。指定されない場合、デフォルト値 (IBMBUSSP) が設定されます。
-dbBspacePassword	" <i>bospace_db_pwd</i> " (ビジネス・スペースの構成に使用)	このパラメーターは、独自のビジネス・スペース・パスワードが必要な場合に必要です。それ以外の場合は、dbBspacePassword = "YouNameIt" でなければ dbBspacePassword = dbPassword (存在する場合)、そうでなければ dbBspacePassword = IBMBUSSP、という順序でデフォルト値が設定されます。
-dbCeiUserId	" <i>cei_userid</i> " (CEI オブジェクトの作成に使用)	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。  「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、このユーザーは Oracle データベース名に基づいて自動的に作成されます (SID)。例: SID が ORCL の場合、dbCeiUserId は ORCCEID。
-dbCeiPassword	" <i>cei_db_pwd</i> "	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。  「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、dbCeiPassword は dbPassword に設定されます。例: dbCeiPassword = dbPassword
	下のすべてのパラメーターは、-dbCommonForME = "true" の場合のみ有効です。	
-dbCeiMeUserId	" <i>cei_me_userid</i> " (CEI ME オブジェクトの作成に使用)	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。  「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、このユーザーは Oracle データベース名に基づいて自動的に作成されます (SID)。例: SID が ORCL の場合、dbCeiMeId は ORCCM00。
-dbCeiMePassword	" <i>cei_me_pwd</i> "	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。  「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、dbCeiPassword は dbPassword に設定されます。例: dbCeiMePassword = dbPassword

表 82. Oracle 用追加 *manageprofiles* コマンド・パラメーター (続き)

パラメーター	デフォルト値	注釈
-dbAppMeUserId	"app_me_userid" (SCAAPP ME オブジェクトの作成に使用)	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。  「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、このユーザーは Oracle データベース名に基づいて自動的に作成されます (SID)。例: SID が ORCL の場合、dbAppMeId は ORCSA00。
-dbAppMePassword	"app_me_pwd"	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。  「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、dbCeiPassword は dbPassword に設定されます。例: dbAppMePassword = dbPassword
-dbSysMeUserId	"sys_me_userid" (SCASYS ME オブジェクトの作成に使用)	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。  「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、このユーザーは Oracle データベース名に基づいて自動的に作成されます (SID)。例: SID が ORCL の場合、dbSysMeUserId は ORCSS00。
-dbSysMePassword	"sys_me_pwd"	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。  「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、dbCeiPassword は dbPassword に設定されます。例: dbAppMePassword = dbPassword

### デプロイメント・マネージャー・プロファイル (デプロイメント環境のセットアップなし)

以下のコマンド例は、Windows サーバー上で WebSphere Process Server の機能を持つ、*Dmgr02* と呼ばれる WebSphere Application Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルを拡張します。301 ページの表 83 および 301 ページの表 84 のパラメーターは以下を指定します。

- Oracle 10g データベース製品は共通データベース用に使用されますが、これはリモート・ホスト上に存在すると想定されています。データベースは後で構成するように設定されています (-dbDelayConfig "true" のコマンド・パラメーター値は、構成スクリプトは作成されますが実行されないことを指定します)。データベース

関連の `manageprofiles` パラメーターの完全なリストは、トピック 323 ページの『共通データベース構成用の `manageprofiles` パラメーター (データベース製品ごと)』を参照してください。

- 管理セキュリティはプロファイル作成プロセス中に使用可能になっていますが、プロセス拡張中に再指定されます。

表 83 は、デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成するために使用する `manageprofiles` コマンド・パラメーターと値の例を示したものです。

表 83. 指定される `manageprofiles` コマンド・パラメーター

パラメーター	値
<code>-augment</code>	N/A
<code>-templatePath</code>	" <i>install_root</i> ¥profileTemplates¥dmgr.wbiserver" (完全修飾されていることが必要)
<code>-profileName</code>	"Dmgr02"
<code>-adminPassword</code>	"admin_pwd"
<code>-adminUserName</code>	"admin_id"
<code>-ndTopology</code>	"false" (デプロイメント環境の構成はプロファイル拡張中はサポートされません)
<code>-dbType</code>	"ORACLE10G"
<code>-dbName</code>	"WPRCSDB"
<code>-dbDelayConfig</code>	"true"
<code>-dbPassword</code>	"db_pwd"
<code>-dbDriverType</code>	"oracle_thin"
<code>-dbHostName</code>	"remote_host_name"
<code>-dbJDBCClasspath</code>	"oracle_library_directory"
<code>-dbServerPort</code>	"1521"

表 84 は、通常では変更する必要のない `manageprofiles` コマンド・パラメーターとデフォルト値を示したものです。

表 84. デフォルトの `manageprofiles` コマンド・パラメーター

パラメーター	デフォルト値
<code>-dbOutputScriptDir</code>	" <i>install_root</i> ¥profiles¥Dmgr02¥dbscripts¥"

## WebSphere Enterprise Service Bus の例

以下は、WebSphere Enterprise Service Bus 機能を持つ `Dmgr04` と呼ばれる WebSphere Application Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルを拡張する類似した例です。違いは、データベースを直ちに構成するように設定されていることです (`-dbDelayConfig "false"` のコマンド・パラメーター値は、構成スクリプトが実行されることを指定します)。

302 ページの表 85 は、デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成するために使用する `manageprofiles` コマンド・パラメーターと値の例を示したものです。

表 85. 指定される *manageprofiles* コマンド・パラメーター

パラメーター	値
-augment	N/A
-templatePath	"install_root ¥profileTemplates¥dmgr.esbserver" (完全修飾されていることが必要)
-profileName	"Dmgr04"
-adminPassword	"admin_pwd"
-adminUserName	"admin_id"
-ndTopology	"false" (デプロイメント環境の構成はプロファイル拡張中はサポートされません)
-dbType	"ORACLE10G"
-dbName	"WPRCSDB"
-dbDelayConfig	"false"
-dbLocation	"oracle_install_directory"
-dbPassword	"db_pwd"
-dbDriverType	"oracle_thin"
-dbHostName	"remote_host_name"
-dbJDBCClasspath	"oracle_library_directory"
-dbServerPort	"1521"
-dbSysUserId	"sys_user_id"
-dbSysPassword	"sys_pwd"

表 86 は、通常では変更する必要のない *manageprofiles* コマンド・パラメーターとデフォルト値を示したものです。

表 86. デフォルトの *manageprofiles* コマンド・パラメーター

パラメーター	デフォルト値
-dbOutputScriptDir	"install_root¥profiles¥Dmgr04¥dbscripts¥"

## manageprofiles コマンド

*manageprofiles* コマンドはプロファイルを作成します。プロファイルとは、デプロイメント・マネージャー、管理対象ノード、またはスタンドアロン・サーバーのランタイム環境を定義する一連のファイルのことです。

プロファイルはランタイム環境を定義し、サーバー・プロセスが実行中に変更できるすべてのファイルを含んでいます。

*manageprofiles* コマンドとそのグラフィカル・ユーザー・インターフェースであるプロファイル管理ツールは、プロファイルを作成する唯一の方法、すなわちランタイム環境を作成する唯一の方法です。 *manageprofiles* コマンドでは、プロファイルの拡張および削除も可能です。

コマンド・ファイルは、*install\_root/bin* ディレクトリー内にあります。コマンド・ファイルとは、i5/OS プラットフォームの場合は *manageprofiles*、Linux および UNIX

プラットフォームの場合は `manageprofiles.sh`、Windows プラットフォームの場合は `manageprofiles.bat` という名前のスクリプトです。

`manageprofiles` コマンドは、それが作成、削除、または拡張するそれぞれのプロファイルのログを作成します。ログは以下のディレクトリーにあり、プラットフォームによって異なります。

- `Linux` `UNIX` `install_root/logs/manageprofiles`
- `Windows` `install_root¥logs¥manageprofiles`
- `i5/OS` `user_data_root/profileRegistry/logs/manageprofiles`

ファイルは以下のように命名されます。

- `profile_name_create.log`
- `profile_name_augment.log`
- `profile_name_delete.log`

各プロファイルのテンプレートは、`install_root/profileTemplates` ディレクトリー内にあります。このディレクトリー内に、各プロファイル・タイプに対応するさまざまなディレクトリーがあります。各ディレクトリーは、`manageprofiles` コマンドを **-templatePath** オプションを指定して使用するとき指定するパスになります。インストール・ルートの外部にプロファイル・テンプレートがあれば、そのプロファイル・テンプレートを指定することもできます。WebSphere Process Server では、以下のテンプレートを使用してください。

- `default.wbiserver`: WebSphere Process Server スタンドアロン・サーバー・プロファイル用で、スタンドアロン・サーバーを定義します。
- `dmgr.wbiserver`: WebSphere Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイル用で、デプロイメント・マネージャーを定義します。
- `managed.wbiserver`: WebSphere Process Server カスタム・プロファイル用で、デプロイメント・マネージャーにフェデレートされた場合、管理対象ノードを定義します。
- `default.esbserver`: WebSphere Enterprise Service Bus スタンドアロン・サーバー・プロファイル用で、スタンドアロン・サーバーを定義します。
- `dmgr.esbserver`: WebSphere Enterprise Service Bus デプロイメント・マネージャー・プロファイル用で、デプロイメント・マネージャーを定義します。
- `managed.esbserver`: WebSphere Enterprise Service Bus カスタム・プロファイル用で、デプロイメント・マネージャーにフェデレートされた場合、管理対象ノードを定義します。

## 構文

`manageprofiles` コマンドは、以下の作業を実行するために使用します。

- プロファイルを作成する (**-create** パラメーター)

246 ページの『`manageprofiles` コマンドを使用したプロファイルの作成』の手順を実行します。

- プロファイルを拡張する (**-augment** パラメーター)

284 ページの『manageprofiles コマンドを使用したプロファイルの拡張』の手順を実行します。

注: 拡張解除 (**-unaugment** パラメーター) したプロファイルの使用はサポートされません。

- プロファイルを削除する (**-delete** パラメーター)

449 ページの『manageprofiles コマンドを使用したプロファイルの削除』の手順を実行します。

- すべてのプロファイルを削除する (**-deleteAll** パラメーター)
- すべてのプロファイルをリストする (**-listProfiles** パラメーター)
- 既存のプロファイルの名前から既存のプロファイルの名前を取得する (**-getName** パラメーター)
- 既存のプロファイルのパスから既存のプロファイルの名前を取得する (**-getPath** パラメーター)
- プロファイル・レジストリーを検証する (**-validateRegistry** パラメーター)
- プロファイル・レジストリーを検証して更新する (**-validateAndUpdateRegistry** パラメーター)
- デフォルト・プロファイル名を取得する (**-getDefaultName** パラメーター)
- デフォルト・プロファイル名を設定する (**-setDefaultName** パラメーター)
- プロファイルをバックアップする (**-backupProfile** パラメーター)
- プロファイルをリストアする (**-restoreProfile** パラメーター)
- manageprofiles コマンドの実行に必要な情報を含む応答ファイルを使用する (**-response** パラメーター)

manageprofiles コマンドで実行する各タスクの必須パラメーターなどの詳細なヘルプを参照するには、**-help** パラメーターを使用します。Windows オペレーティング・システムで manageprofiles コマンドの **-augment** パラメーターと一緒に **help** パラメーターを使用した例は、manageprofiles.bat **-augment -help** となります。出力によって、どのパラメーターが必須でどのパラメーターがオプションかが指定されます。

## パラメーター

manageprofiles コマンドで実行する操作によっては、305 ページの『manageprofiles パラメーター』で説明している 1 つ以上のパラメーターを指定する必要があります。プロファイル管理ツールは、必須パラメーターが指定されていること、およびこれらのパラメーターの入力値が有効であることを検査します。コマンド行はパラメーター名の大/小文字を検証しないため、パラメーターの名前は必ず大/小文字を正しく区別して入力してください。大/小文字を正しく区別せずにパラメーターを入力すると、誤った結果になることがあります。

## コマンドの出力

このコマンドでは、完了時に以下のいずれかのメッセージが表示されます。(正確な言い回しは、プロファイルを作成、削除、または拡張した場合で異なります。)

- INSTCONFSUCCESS: プロファイルが正常に作成されました。

- INSTCONFFAILED: プロファイルを作成できませんでした。
- INSTCONFPARTIALSUCCESS: 一部の重要でないインストール後構成アクションが正常に実行されませんでした。

ステートメントは 2 回以上表示されることもあります。例えば、INSTCONFSUCCESS 行はコマンド行に 3 回表示されます。詳しくは、『インストールとプロファイル作成のログ・ファイル』を参照してください。

## manageprofiles パラメーター

WebSphere Process Server の manageprofiles コマンドでは、以下のパラメーターを使用してください。

manageprofiles コマンド・ファイルは、*install\_root/bin* ディレクトリーにあります。コマンド・ファイルとは、i5/OS プラットフォームの場合は *manageprofiles*、Linux および UNIX プラットフォームの場合は *manageprofiles.sh*、Windows プラットフォームの場合は *manageprofiles.bat* という名前のスクリプトです。

manageprofiles コマンドの使用を開始する前に、プロファイルの作成と拡張に関するすべての前提条件を理解しておく必要があります。前提条件について詳しくは、232 ページの『プロファイルの作成または拡張に関する前提条件』を参照してください。プロファイルの作成および拡張について詳しくは、246 ページの『manageprofiles コマンドを使用したプロファイルの作成』 および 284 ページの『manageprofiles コマンドを使用したプロファイルの拡張』を参照してください。

**重要:** WebSphere Process Server プロファイルを作成する場合は、WebSphere Process Server のインフォメーション・センターで文書化されているパラメーターのみを使用してください。

**注:** すべてのパラメーターの大文字小文字が区別されます。

以下のオプションは、manageprofiles コマンドに使用できます。

### -adminUserName *adminUser\_ID*

管理セキュリティーに使用されるユーザー ID を指定します。管理セキュリティーが有効になっている既存のプロファイルを拡張する場合は、このパラメーターが必要です。

### -adminPassword *adminPassword*

-adminUserName パラメーターで指定されている管理セキュリティー・ユーザー ID のパスワードを指定します。管理セキュリティーが有効になっている既存のプロファイルを拡張する場合は、このパラメーターが必要です。

### -appSchedulerServerName

WebSphere Process Server Application Scheduler の実行が構成されているサーバーの名前。このパラメーターは、プロファイルに複数のサーバーが定義されている場合、プロファイルの拡張に対して有効です。

### -augment

拡張テンプレートを使用して既存のプロファイルに変更を加える場合は、augment パラメーターを使用します。augment パラメーターを使用すると、manageprofiles コマンドは **-templatePath** パラメーターのテンプレートを使用して、**-profileName** パラメーターで指定されているプロファイルを更新または拡

張します。使用できる拡張テンプレートは、どの IBM 製品のどのバージョンが環境にインストールされているかによって決まります。

**注:** `install_dir/profileTemplates` ディレクトリー内のファイルは手動で変更しないでください。例えば、プロファイルの作成中にポートを変更する場合は、プロファイル・テンプレート・ディレクトリー内のファイルを変更するのではなく、プロファイル管理ツールを使用するか、または `manageprofiles` コマンドで `-startingPort` または `-portsFile` 引数を使用します。

**-templatePath** の完全修飾ファイル・パスを指定します。以下に例を示します。

```
manageprofiles(.bat)(.sh) -augment -profileName profile_name
                             -templatePath fully_qualified_template_path
```

#### **-backupProfile**

プロファイル・フォルダー、およびプロファイル・レジストリー・ファイルに含まれているプロファイル・メタデータのファイル・システム・バックアップを実行します。

このパラメーターは、WebSphere Process Server ではサポートされていません。

#### **-backupFile** *backupFile\_name*

指定されたファイルにプロファイル・レジストリー・ファイルをバックアップします。*backupFile\_name* には完全修飾ファイル・パスを指定する必要があります。

#### **-cbeServerName**

WebSphere Process Server Common Base Event ブラウザーの実行が構成されているサーバーの名前。

#### **-ceiBufferPool4k**

Common Event Infrastructure の 4K バッファー・プールの名前を指定します。このバッファー・プールは、データベース DDL スクリプトが実行できるようになる前にアクティブである必要があります。

**注:** 6.2 では、DB2 for z/OS 以外のすべてのデータベースで推奨されません。

#### **-ceiBufferPool8k**

Common Event Infrastructure の 8K バッファー・プールの名前を指定します。このバッファー・プールは、データベース DDL スクリプトが実行できるようになる前にアクティブである必要があります。

**注:** 6.2 では、DB2 for z/OS 以外のすべてのデータベースで推奨されません。

#### **-ceiBufferPool16k**

Common Event Infrastructure の 16K バッファー・プールの名前を指定します。このバッファー・プールは、データベース DDL スクリプトが実行できるようになる前にアクティブである必要があります。

**注:** 6.2 では、DB2 for z/OS 以外のすべてのデータベースで推奨されません。

#### **-ceiDbInstallDir**

Common Event Infrastructure 用にデータベースがインストールされているディレクトリー。このパラメーターは、`dbDelayConfig` パラメーターで `true` を指定した場合にのみ必須になります。

### -ceiDbName

作成される Common Event Infrastructure イベント・データベースの名前。DB2 データベース、Derby データベース、Informix データベース、および Microsoft SQL Server データベースの場合、デフォルト値は、指定がなければ event です。DB2 iSeries (i5/OS) Native データベースの場合、デフォルト値は、指定がなければ \*LOCAL です。DB2 iSeries (i5/OS) Toolbox データベースの場合、デフォルト値は、指定がなければ \*SYSBAS です。

Oracle データベースの場合、テーブルを作成してテーブルにデータを取り込むには、Oracle システム ID (SID) が既に作成済みで、イベント・サービス・コマンドで使用可能になっている必要があります。デフォルト値は、指定がなければ orcl です。

### -ceiDbnodeName

Common Event Infrastructure の DB2 ノード名 (8 文字以下にする必要があります)。このノードは既にカタログに入れられていて、DB2 サーバーと通信するよう構成済みである必要があります。現行のマシンが DB2 クライアントとして構成済みで、パラメーター **dbDelayConfig** が true に設定されている場合に、このパラメーターを設定する必要があります。

注: 6.2 では、DB2 クライアント以外のすべてのデータベースで推奨されません。

### -ceiDbUser

注: 6.2 では、Microsoft SQL Server (組み込み) および Microsoft SQL Server (Data Direct) 以外のすべてのデータベースで推奨されません。

Common Event Infrastructure イベント・データベースに使用するユーザー ID を指定します。

DB2 データベースの場合、デフォルト値は、指定がなければ db2inst1 です。DB2 for z/OS データベースの場合、データベースの作成および除去の特権を持つユーザー ID を指定します。このパラメーターは必須です。

**i5/OS** iSeries (i5/OS) データベースの場合、データベースの作成および除去の特権を持つユーザー ID を指定します。このパラメーターは必須です。

Derby データベースの場合は、データ・ソースが Derby データベース認証に使用するユーザー ID です。このパラメーターは、WebSphere ドメイン・セキュリティを無効にしている場合はオプションであり、WebSphere ドメイン・セキュリティを有効にしている場合は必須です。

Informix データベースの場合、イベント・サービス・データベース表を所有する Informix データベース・スキーマのユーザー ID を指定します。WebSphere データ・ソースはこのユーザー ID を使用して Informix データベース接続を認証します。このパラメーターは必須です。

Oracle データベースの場合、イベント・サービス Oracle テーブルを所有する Oracle スキーマのユーザー ID を指定します。ユーザー ID はデータベースの作成中に作成され、WebSphere データ・ソースはこのユーザー ID を使用して Oracle データベース接続を認証します。デフォルト値は、指定がなければ ceiuser です。

Microsoft SQL Server データベースの場合、イベント・サービス・テーブルを所有する SQL Server のユーザー ID を指定します。デフォルト値は、指定がなければ `ceiuser` です。

#### **-dbUserId**

Common Event Infrastructure イベント・データベースに使用するユーザー ID を指定します。

DB2 データベースの場合、デフォルト値は、指定がなければ `db2inst1` です。  
DB2 for z/OS データベースの場合、データベースの作成および除去の特権を持つユーザー ID を指定します。このパラメーターは必須です。

**i5/OS** iSeries (i5/OS) データベースの場合、データベースの作成および除去の特権を持つユーザー ID を指定します。このパラメーターは必須です。

Derby データベースの場合は、データ・ソースが Derby データベース認証に使用するユーザー ID です。このパラメーターは、WebSphere ドメイン・セキュリティを無効にしている場合はオプションであり、WebSphere ドメイン・セキュリティを有効にしている場合は必須です。

Informix データベースの場合、イベント・サービス・データベース表を所有する Informix データベース・スキーマのユーザー ID を指定します。WebSphere データ・ソースはこのユーザー ID を使用して Informix データベース接続を認証します。このパラメーターは必須です。

Oracle データベースの場合、イベント・サービス Oracle テーブルを所有する Oracle スキーマのユーザー ID を指定します。ユーザー ID はデータベースの作成中に作成され、WebSphere データ・ソースはこのユーザー ID を使用して Oracle データベース接続を認証します。デフォルト値は、指定がなければ `ceiuser` です。

Microsoft SQL Server データベースの場合、イベント・サービス・テーブルを所有する SQL Server のユーザー ID を指定します。デフォルト値は、指定がなければ `ceiuser` です。

#### **-ceiDiskSizeInMB**

Common Event Infrastructure イベント・データベース用に作成される MB 単位のデータベースのサイズ。設定可能な最小値は 10 MB です。DB2 for z/OS の場合、デフォルト値は、指定がなければ 100 MB です。

注: 6.2 では、DB2 for z/OS 以外のすべてのデータベースで推奨されません。

#### **-ceiInstancePrefix**

Informix、Oracle、および Microsoft SQL Server データベースの場合、このコマンドは Common Event Infrastructure イベント・データベース・インスタンスの名前を使用して、ディレクトリー内のデータベース・ファイルを固有の名前でグループ化します。デフォルト値は、指定がなければ `ceiinst1` です。

注: 6.2 では、Informix、Oracle、Microsoft SQL Server (組み込み) および Microsoft SQL Server (Data Direct) 以外のすべてのデータベースで推奨されません。

#### **-dbLocation**

ORACLE\_HOME のディレクトリー。パラメーター `dbDelayConfig` が `true` に設定されるとき、このパラメーターは必須です。

### **-ceiOverrideDataSource**

このパラメーターが `true` に設定されると、コマンドは指定された有効範囲の既存の Common Event Infrastructure サービス・データ・ソースを除去した後に、データ・ソースを新規作成します。このパラメーターが `false` に設定されている場合、指定された有効範囲と同じ有効範囲に別のイベント・サービス・データ・ソースが見つかり、このコマンドは、指定された有効範囲にはイベント・サービス・データ・ソースを作成しません。これが指定されていない場合のデフォルト値は `false` です。

### **-ceiSaUser**

Common Event Infrastructure のテーブル、デバイス、およびキャッシュを作成するための特権を持つ Microsoft SQL Server ID。 **dbDelayConfig** パラメーターが `true` に設定されている場合、このパラメーターは必須です。

注: 6.2 では、Microsoft SQL Server (組み込み) および Microsoft SQL Server (Data Direct) 以外のすべてのデータベースで推奨されません。

### **-ceiSaPassword**

Common Event Infrastructure のテーブル、デバイス、およびキャッシュを作成するための特権を持つ Microsoft SQL Server ID のパスワード。 **ceiSaUser** パラメーターに値を指定したときにこのパラメーターは必須ですが、sa ユーザー ID がパスワードを持たない場合は除きます。

注: 6.2 では、Microsoft SQL Server (組み込み) および Microsoft SQL Server (Data Direct) 以外のすべてのデータベースで推奨されません。

### **-cellName *cell\_name***

Common Event Infrastructure のプロファイルのセル名を指定します。プロファイルごとに固有のセル名を使用します。このパラメーターは、プロファイルの作成にのみ使用します。既存のプロファイルを拡張する場合は、このパラメーターを指定しないでください。

このパラメーターのデフォルト値は、短縮ホスト名、定数のセル、および末尾の数字の組み合わせに基づいています。以下に例を示します。

```
if (DMgr)
  shortHostNameCellCellNumber
else
  shortHostNameNodeNodeNumberCell
```

ここで、*CellNumber* は 01 から始まる連続番号、*NodeNumber* は、ノード名の定義に使用したノード番号です。

このパラメーターの値には、スペースや、\*、?、"、<、>、,、/、¥、| などの無効な文字を使用してはなりません。

### **-configureBPC `true` | `false`**

Business Process Choreographer のサンプル構成を作成するかどうかを決定します。このパラメーターを `true` に設定する場合は、**-adminUserName** および **-adminPassword** パラメーターも設定する必要があります。このパラメーターのデフォルトは **-enableAdminSecurity** パラメーターと同じ値です。

注: Business Process Choreographer のサンプル構成では、共通データベース (WPRCSDB) を使用しません。この構成では、必ず Derby データベースが使用

されますが、このデータベースは Network Deployment 環境ではサポートされていません。このスタンドアロン・プロファイルを後で統合する予定である場合は、**-configureBPC** を true に設定しないでください。

**-configureBRM true | false**

ビジネス・ルール・マネージャーを構成します。デフォルト値は false です。

**-configureBSpace true | false**

WebSphere が提供するビジネス・スペースを構成します。これは、IBM Websphere Business Process Management ポートフォリオ全体にわたってアプリケーション・ユーザーに統合されたユーザー・エクスペリエンスを提供します。デフォルト値は true です。ビジネス・スペース は、次のデータベース製品でサポートされています。Derby Embedded、Derby Network Server、DB2 Universal、DB2 Universal Runtime Client、DB2 for i5/OS、DB2 for z/OS、Oracle 9i、Oracle 10g、および Oracle 11g。

**重要:** WebSphere Process Server に使用する共通データベースが、ビジネス・スペース でサポートされているデータベースと一致しない場合、`manageprofiles` コマンドはビジネス・スペース構成に Derby Embedded データベースを使用します。このプロファイルを 1 つのデプロイメント環境に後で統合することはできません。Derby Embedded はデプロイメント環境でサポートされていないためです。

デプロイメント環境に対してビジネス・スペースを構成することについての詳細は、『関連情報』の下にある『ビジネス・スペースの構成 (Configuring ビジネス・スペース)』を参照してください。

**-create**

プロファイルを作成します。

プロファイルの作成に関する特定の情報については、`manageprofiles -create -templatePath fully_qualified_file_path_to_template -help` を指定します。使用可能なテンプレートは以下のとおりです。

- `default.wbiserver`: WebSphere Process Server スタンドアロン・サーバー・プロファイル用で、スタンドアロン・サーバーを定義します。
- `dmgr.wbiserver`: WebSphere Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイル用で、デプロイメント・マネージャーを定義します。
- `managed.wbiserver`: WebSphere Process Server カスタム・プロファイル用で、デプロイメント・マネージャーにフェデレートされた場合、管理対象ノードを定義します。
- `default.esbserver`: WebSphere Enterprise Service Bus スタンドアロン・サーバー・プロファイル用で、スタンドアロン・サーバーを定義します。
- `dmgr.esbserver`: WebSphere Enterprise Service Bus デプロイメント・マネージャー・プロファイル用で、デプロイメント・マネージャーを定義します。
- `managed.esbserver`: WebSphere Enterprise Service Bus カスタム・プロファイル用で、デプロイメント・マネージャーにフェデレートされた場合、管理対象ノードを定義します。

**-dbCommonForME**

メッセージング・エンジン用の共通データベースを使用するかどうかを指示します。DB2 for z/OS データベースの場合、デフォルト値は true です。それ以外

のすべてのデータベースの場合のデフォルト値は `false` です。このパラメーターが `false` に設定されている場合、メッセージング・エンジンはファイル・ストア・データ・ストアを使用します。

**-dbConnectionLocation**

DB2 for z/OS データベースの場所。

**-dbCreateNew**

データベースを作成するのか、再使用するのかを示します。有効な値は `true` または `false` です。

**-dbDelayConfig**

テーブルの作成をプロファイルの作成後まで延期するかどうかを示します。有効な値は `true` または `false` です。このパラメーターは、デフォルトでは `false` に設定されています。

**-dbDriverType**

データベースのドライバー・タイプ。Oracle データベースの場合、有効な値は `ORACLE_THIN` または `ORACLE_OCI` です。DB2 データベースの場合、有効な値は `2` または `4` です。

**-dbHostName**

データベース・サーバーのホスト名または IP アドレス。デフォルト値は `localhost` です。

**-dbInstance**

Informix データベースのデータベース・インスタンス名。

**-dbJDBCClasspath**

JDBC ドライバー・ファイルのロケーション。

**-dbLocation**

Informix データベースを使用している場合、データベース・インストール・ディレクトリーを指示します。 `dbCreateNew` パラメーターが `true` に設定されている場合にのみ、このパラメーターを使用できます。

**-dbName**

データベースの名前。この値は、デフォルトでは `WPRCSDB` に設定されています。

**-dbOutputScriptDir**

エクスポートされたデータベース・スクリプトのロケーション。

**-dbPassword**

データベース認証に必要なパスワード。このパラメーターは、Derby Embedded を除くすべてのデータベースに必要です。

**-dbSchemaName**

DB2 for iSeries、DB2 for i5/OS、および DB2 for z/OS データベース用のデータベース・スキーマ名。

**-dbServerPort**

データベース・サーバーのポート番号。使用しているデータベースに応じて、デフォルトのポート番号以外の別のポート番号を指定できます。

**-dbStorageGroup**

DB2 z/OS データベースのストレージ・グループ名。

### **-dbType**

データベース・タイプ。

WebSphere Process Server と併用しているデータベース製品のタイプとして、以下の値のいずれかを設定します。

- Derby Embedded データベースの場合は DERBY\_EMBEDDED
- Derby Network Server データベースの場合は DERBY\_NETWORKSERVER
- DB2\_UNIVERSAL (DB2 Universal データベース)
- DB2UDBOS390\_V8\_1 (DB2 for z/OS v8 データベース)
- DB2UDBOS390\_V9\_1 (DB2 for z/OS v9 データベース)
- DB2UDBISERIES\_NATIVE (ネイティブ・ドライバーを使用する DB2 UDB for iSeries または DB2 for i5/OS データベース)
- DB2UDBISERIES\_TOOLBOX (ツールボックス・ドライバーを使用する DB2 UDB for iSeries または DB2 for i5/OS データベース)
- INFORMIX (Informix Dynamic Server データベース)
- MSSQLSERVER\_EMBEDDED (Embedded ドライバーを使用する Microsoft SQL Server データベース)
- MSSQLSERVER\_DATADIRECT (DataDirect ドライバーを使用する Microsoft SQL Server データベース)
- Oracle 9i データベースの場合は ORACLE9I
- Oracle 10g または Oracle 11g データベースの場合は ORACLE10G

### **-dbUserId**

データベース認証に必要なユーザー ID。このパラメーターは、Derby Embedded を除くすべてのデータベースに必要です。

### **-debug**

manageprofiles コマンドが使用する Apache Ant ユーティリティのデバッグ機能をオンにします。

### **-defaultPorts**

プロファイルにデフォルトのポート値または基本ポート値を割り当てます。

-startingPort または -portsFile パラメーターを使用している場合は、このパラメーターを使用しないでください。

-startingPort パラメーター、-defaultPorts パラメーター、または -portsFile パラメーターを指定していない場合、manageprofiles コマンドは、プロファイルの作成中に、自動的に生成された推奨ポートのセットを使用します。この推奨ポート値は、デフォルト・ポートが使用可能かどうかに応じて、デフォルト・ポート値とは異なる場合があります。

注: 管理対象プロファイル・テンプレートを使用している場合は、このパラメーターを使用しないでください。

### **-delete**

プロファイルを削除します。

プロファイルを削除してもプロファイル・ディレクトリーは削除されません。例えば、/usr/WebSphere/ProcServer/profiles/managedProfile ディレクトリー (i5/OS プラットフォームの場合は QIBM/UserData/WebSphere/ProcServer/profiles/

managedProfile ディレクトリー) にプロファイルを作成した場合、このディレクトリーはプロファイルを削除した後も残ります。

このディレクトリーは削除しても、残しておいてもかまいません。ただし、*profile\_root/logs* ディレクトリーには、プロファイルのアンインストールに関する情報が含まれています。例えば、アンインストール手順中の問題の原因を判別するために、*\_nodeuninst.log* ファイルを保持することができます。

プロファイル・レジストリー内の、拡張テンプレートが登録されているプロファイルを削除すると、拡張解除アクションが自動的に実行されます。

#### **-deleteAll**

登録済みのすべてのプロファイルを削除します。

プロファイルを削除してもプロファイル・ディレクトリーは削除されません。例えば、*/usr/WebSphere/ProcServer/profiles/managedProfile* ディレクトリー (i5/OS プラットフォームの場合は *QIBM/UserData/WebSphere/ProcServer/profiles/managedProfile* ディレクトリー) にプロファイルを作成したとします。このディレクトリーは、そのプロファイルを削除した後もそのまま残ります。

このディレクトリーは削除しても、残しておいてもかまいません。ただし、*profile\_root/logs* ディレクトリーには、プロファイルのアンインストールに関する情報が含まれています。例えば、アンインストール手順中の問題の原因を判別するために、*\_nodeuninst.log* ファイルを保持することができます。

プロファイル・レジストリー内の、拡張テンプレートが登録されているプロファイルを削除すると、拡張解除アクションが自動的に実行されます。

#### **-dmgrHost dmgr\_host\_name**

デプロイメント・マネージャーが稼働しているマシンを示します。作成時または拡張時にカスタム・プロファイルを統合する場合に、このパラメーターと **dmgrPort** パラメーターを指定します。このパラメーターは、*managed.wbiserver* および *managed.esbserver* プロファイル・テンプレートと併用できます。

ホスト名には、長い DNS 名、短い DNS 名、またはデプロイメント・マネージャー・マシンの IP アドレスを指定できます。

このオプション・パラメーターを指定すると *manageprofiles* コマンドは、カスタム・プロファイルを作成するときに、カスタム・ノードのデプロイメント・マネージャー・セルへの統合を試行するよう指示されます。このパラメーターは、デプロイメント・マネージャー・プロファイルまたはスタンドアロン・サーバー・プロファイルの作成時には無視されます。

デプロイメント・マネージャーが稼働していない場合にカスタム・ノードを統合すると、ログのインストール・インディケーターが完全な失敗を表す **INSTCONFFAILED** となります。結果として生成されるカスタム・プロファイルは使用不可になります。同じプロファイル名で別のカスタム・プロファイルを作成する前に、カスタム・プロファイル・ディレクトリーをプロファイル・リポジトリー (プロファイルのインストール・ルート・ディレクトリー) から移動させる必要があります。

セキュリティーを使用可能に設定している場合、またはデフォルトの **JMX** コネクター・タイプを変更している場合は、*manageprofiles* コマンドによる統合はできません。代わりに、*addNode* コマンドを使用してください。

このパラメーターのデフォルト値は `localhost` です。このパラメーターの値は正しく形成されたホスト名でなければならず、スペースや、`*`、`?`、`"`、`<`、`>`、`,`、`/`、`¥`、`|` などの無効な文字を使用してはなりません。デプロイメント・マネージャーとの接続を `dmgrPort` パラメーターと併用できるようになっている必要もあります。

#### **-dmgrPort** *dmgr\_port\_number*

デプロイメント・マネージャーの SOAP ポートを示します。作成時または拡張時にカスタム・プロファイルを統合する場合に、このパラメーターと `dmgrHost` パラメーターを指定します。デプロイメント・マネージャーが稼働しており、アクセス可能である必要があります。

セキュリティを使用可能に設定している場合、またはデフォルトの JMX コネクター・タイプを変更している場合は、`manageprofiles` コマンドによる統合はできません。代わりに、`addNode` コマンドを使用してください。

このパラメーターのデフォルト値は `8879` です。指定するポートは正整数で、デプロイメント・マネージャーとの接続が `dmgrHost` パラメーターと併用できるようになっている必要があります。

#### **-enableAdminSecurity** `true` | `false`

管理セキュリティを使用可能にします。有効な値は、`true` または `false` です。デフォルト値は `false` です。デプロイメント環境のプロファイルを作成する場合は、このパラメーターを `true` に設定する必要があります。このパラメーターは、プロファイルを作成する場合にのみ使用してください。既存のプロファイルを拡張する場合は、このパラメーターを指定しないでください。

`enableAdminSecurity` が `true` に設定されている場合は、`-adminUserName` および `-adminPassword` パラメーターをこれらのパラメーターの値と一緒に指定する必要があります。アプリケーション・サーバーのインストール中にサンプルがインストールされた場合、管理セキュリティを使用可能にするプロファイルを作成するときに、`-samplesPassword` パラメーターも指定する必要があります。管理セキュリティが有効になっている場合に `-samplesPassword` パラメーターが指定されていないと、プロファイルは正常に作成されますが、サンプルを実行しようとする、サーバーのシステム出力ログに例外と失敗が記録されます。

Linux

#### **-enableService** `true` | `false`

Linux サービスの作成を有効にします。有効な値は、`true` または `false` です。このパラメーターのデフォルト値は `false` です。このパラメーターは、プロファイルを作成する場合にのみ使用してください。既存のプロファイルを拡張する場合は、このパラメーターを指定しないでください。

`manageprofiles` コマンドの `-enableService` オプションを `true` に設定して実行すると、`root` ユーザーがコマンドを実行したときに Linux サービスがプロファイルと共に作成されます。非 `root` ユーザーが `manageprofiles` コマンドを実行すると、プロファイルは作成されますが、Linux サービスは作成されません。非 `root` ユーザーは Linux サービスをセットアップするための十分な許可を持たないため、サービスは作成されません。INSTCONPARTIALSUCCESS の結果がプロファイル作成の終了時に表示され、現行ユーザーは Linux サービスをセットアップするための十分な許可がないことを示すメッセージがプロファイル作成ログ `install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log` に記載されます。

**-federateLater true | false**

管理対象プロファイルのプロファイルの作成中に統合するか、または addNode コマンドを使用して後で統合するかを示します。WebSphere Process Server プロファイルを作成する場合は、値を入力しないでください。デフォルトである true を使用してください。

**-federateLaterProcServer true | false**

管理対象プロファイルを managed.wbiserver テンプレートを使用して後で統合するかどうかを示します。有効な値は true または false です。dmgrHost、dmgrPort、dmgrAdminUserName および dmgrAdminPassword パラメーターが設定されていない場合、このパラメーターのデフォルト値は true です。

**-federateLaterWESB true | false**

管理対象プロファイルを managed.wesbserver テンプレートを使用して後で統合するかどうかを示します。有効な値は true または false です。dmgrHost、dmgrPort、dmgrAdminUserName および dmgrAdminPassword パラメーターが設定されていない場合、このパラメーターのデフォルト値は true です。

**-fileStoreForME true | false**

true に設定すると、メッセージング・エンジンに対してファイル・ストア・データ・ストアが使用されます。このパラメーターのデフォルト値は false です。

注: -dbCommonForME パラメーターと -fileStoreForME パラメーターの両方を true に設定することはできません。そのように設定すると、妥当性検査エラーが発生します。

**-getDefaultName**

デフォルト・プロファイルの名前を返します。

**-getName**

指定した -profilePath パラメーターで登録されたプロファイルの名前を取得します。

**-getPath**

指定された名前のプロファイルのファイル・システム・ロケーションを取得します。-profileName パラメーターが必要です。

**-help**

コマンド構文を表示します。

**-hostName host\_name**

プロファイルを作成するホストの名前を指定します。既存のプロファイルを拡張する場合は、このパラメーターを指定しないでください。これは、最初の製品のインストール時に指定したホスト名と一致している必要があります。このパラメーターのデフォルト値は、長形式のドメイン・ネーム・システムです。このパラメーターは、プロファイルの作成にのみ必要です。このパラメーターの値は有効な IPv6 ホスト名でなければならず、スペースや、\*、?、"、<、>、,、/、¥、| などの無効な文字を使用してはなりません。

**-ignoreStack**

拡張された特定のプロファイルの拡張を解除するための -templatePath パラメーターと併用されるオプション・パラメーター。

注: WebSphere Process Server の場合は、拡張が解除されている (**-unaugment** パラメーター) プロファイルの使用はサポートされていません。

#### **-isDefault**

一緒に指定されている **-profileName** パラメーターで識別されるプロファイルが登録された場合には、そのプロファイルをデフォルト・プロファイルにすることを指定します。デフォルト・プロファイルを処理するコマンドを発行する場合には、このコマンドの **-profileName** 属性を使用する必要はありません。

#### **-isDeveloperServer**

サーバーを開発の目的にのみ使用するかどうかを指定します。このパラメーターは、アプリケーションをその実動アプリケーション・サーバーにデプロイする前に、実動サーバー以外のサーバーでアプリケーションをテストするためのプロファイルを作成する場合に役立ちます。このパラメーターは、WebSphere Process Server でプロファイルを作成する場合にのみ有効です。

WebSphere Process Server プロファイルの作成時に **-isDeveloperServer** を設定すると、事前に構成された VMM ファイル・リポジトリがインストールされます。このファイル・リポジトリには、Business Process Choreographer の要員分析をテストする目的で使用できる組織のサンプルが格納されており、そのままの状態ですぐに使用できます。

#### **-listProfiles**

定義済みのプロファイルをすべてリストします。

#### **-ndTopology**

プロファイルの作成にデプロイメント環境パスを使用するかどうかを示します。有効な値は **true** または **false** です。

#### **-nodeName *node\_name***

新しいプロファイルを使用して作成されるノードのノード名を指定します。既存のプロファイルを拡張する場合は、このパラメーターを指定しないでください。セル内、またはマシン上で固有な値を使用してください。同じ製品のバイナリー・セットを共有する各プロファイルは、それぞれ固有のノード名を持つ必要があります。このパラメーターは、**default.wbiserver**、**dmgr.wbiserver**、および **managed.wbiserver** テンプレートを使用してプロファイルを作成する場合にのみ必要です。

**Linux** **UNIX** **Windows** このパラメーターのデフォルト値は、短縮ホスト名、プロファイル・タイプ、および末尾の番号に基づきます。以下に例を示します。

```
if (DMgr)
  shortHostNameCellManagerNodeNumber
else
  shortHostNameNodeNumber
```

ここで、*NodeNumber* は 01 から始まる連続番号です。

**i5/OS** デフォルトのノード名は以下のとおりです。

- **dmgr** テンプレート: *profilenameManager*
- デフォルト・テンプレート: *shorthostname\_profilename*
- 管理対象テンプレート: *shorthostname\_profilename*

- セル: 前出の `dmgr` およびデフォルト・テンプレートの例を参照して、必要に応じて、作成された 2 つのプロファイルに適用します。

このパラメーターの値には、スペースや、\*、?、"、<、>、,、/、¥、| などの無効な文字を使用してはなりません。

#### **-omitAction** *feature1 feature2... featureN*

プロファイルのフィーチャーを除外するオプション・パラメーター。

各プロファイル・テンプレートには、いくつかのオプション・フィーチャーが事前定義されています。 `samplesInstallAndConfig` オプションは、選択されたサンプル・アプリケーションと一緒に製品がインストールされたときのみ利用可能です。以下のオプション・フィーチャーは、`-omitAction` パラメーターと併用して、以下のプロファイル・テンプレートに使用できます。

- **デフォルト** - アプリケーション・サーバー
  - `deployAdminConsole`
  - `samplesInstallAndConfig`
  - `defaultAppDeployAndConfig`
- **dmgr** - デプロイメント・マネージャー
  - `deployAdminConsole`

#### **-portsFile** *file\_path*

新規プロファイルのポート設定を定義しているファイルへのパスを指定するオプション・パラメーター。既存のプロファイルを拡張する場合は、このパラメーターを指定しないでください。

`-startingPort` または `-defaultPorts` パラメーターを使用している場合は、このパラメーターを使用しないでください。

`-startingPort` パラメーター、`-defaultPorts` パラメーター、または `-portsFile` パラメーターを指定していない場合、`manageprofiles` コマンドは、プロファイルの作成中に、自動的に生成された推奨ポートのセットを使用します。この推奨ポート値は、デフォルト・ポートが使用可能かどうかに応じて、デフォルト・ポート値とは異なる場合があります。

#### **-profileName** *profile\_name*

プロファイルの名前を指定します。プロファイルの作成時には固有値を使用してください。

同じ製品のバイナリー・セットを共有する各プロファイルは、それぞれ固有の名前を持つ必要があります。デフォルトのプロファイル名は、プロファイル・タイプと末尾の番号に基づきます。以下に例を示します。

*profileType ProfileNumber*

ここで、*profileType* は、`ProcSrv`、`Dmgr`、または `Custom` などの値で、*ProfileNumber* は、固有のプロファイル名を作成する連続番号です。

このパラメーターの値には、スペースや、\*、?、"、<、>、,、/、¥、| などの無効な文字を使用してはなりません。使用されていないプロファイル名を選択する必要があります。

#### **-profilePath** *profile\_root*

プロファイルへの完全修飾パスを指定します。このパスは、インフォメーション・センターでは *profile\_root* と表されます。

以下に例を示します。

```
-profilePath profile_root
```

このパラメーターは、プロファイルを作成する場合にのみ使用してください。既存のプロファイルを拡張する場合は、このパラメーターを設定しないでください。

**Windows** **Windows プラットフォーム:** 完全修飾パスにスペースが含まれている場合、値を引用符で囲みます。

デフォルト値は *install\_root* ディレクトリー、*profiles* サブディレクトリー、およびファイルの名前に基づいています。

例えば、プロファイル作成のデフォルトは以下のようになります。

```
WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileName
```

ここで、*WS\_WSPROFILE\_DEFAULT\_PROFILE\_HOME* は、*install\_root/properties* ディレクトリー内の *wasprofile.properties* ファイルで定義されています。

このパラメーターの値は、ターゲット・システムの有効なパスで、現在未使用のものである必要があります。

このディレクトリーへの書き込み権限が必要です。

#### **-response** *response\_file*

コマンド行から *manageprofiles* コマンドを使用して、すべての API 関数にアクセスします。

コマンド行インターフェースは、プロパティ・ファイルの指定されたコマンドの入力引数を、キーと値という形式で含んでいる応答ファイルによって駆動できます。以下に、*create* 命令に対する応答ファイルの例を示します。

```
create
profileName=testResponseFileCreate
profilePath=profile_root
templatePath=install_root/profileTemplates/default
nodeName=myNodeName
cellName=myCellName
hostName=myHostName
omitAction=myOptionalAction1, myOptionalAction2
```

**Windows** **Windows プラットフォーム:** Windows オペレーティング・システムの PATH ステートメントでは、スラッシュ (/) または円記号 (¥) のいずれかが使用できます。パス記述で円記号を使用する場合は、そのパスを正しく把握するために、応答ファイルには二重の円記号が必要です。以下に、*create* 命令に対する応答ファイルで二重の円記号を使用している例を示します。

```
create
templatePath=C:¥¥WebSphere¥¥ProcServer¥¥profileTemplates¥¥default
```

各種のプロファイル・テンプレートおよびアクションについて、どの入力引数が必要であるかを判別するには、*manageprofiles* コマンドに **-help** パラメーターを付けて使用してください。

#### **-restoreProfile**

プロファイル・バックアップをリストアします。**-backupFile** パラメーターと一緒に使用する必要があります。このパラメーターは、WebSphere Process Server ではサポートされていません。

**-samplesPassword** *samplesPassword*

サンプルに使用されるパスワードを作成します。パスワードは、アプリケーション・サーバーのインストール中にインストールした Web アプリケーションのサンプルに対するアクセスを制限するために使用されます。

**Linux** **-serviceUserName** *service\_user\_ID*

Linux サービスの作成中に使用されるユーザー ID を指定して、Linux サービスがこのユーザー ID で実行されるようにします。Linux サービスは、ユーザー ID がログオンするごとに実行されます。

**-setDefaultName**

既存のプロファイルの 1 つにデフォルト・プロファイルを設定します。

**-profileName** パラメーターと併用する必要があります。以下に例を示します。

```
manageprofiles(.bat)(.sh) -setDefaultName -profileName profile_name
```

**-startingPort** *startingPort*

プロファイルにすべてのポートを生成して割り当てるための開始ポート番号を指定します。

既存のプロファイルを拡張する場合は、このパラメーターを設定しないでください。ポート値は **-startingPort** から順に割り当てられ、使用中のポートは除外されます。i5/OS 以外のすべてのシステムで、システムは現在使用中のポートを認識および解決して、ポートの競合を回避するためにポート割り当てを決定します。

このパラメーターは、**defaultPorts** パラメーターまたは **portsFile** パラメーターと併用しないでください。

**-startingPort** パラメーター、**-defaultPorts** パラメーター、または **-portsFile** パラメーターを指定していない場合、**manageprofiles** コマンドは、プロファイルの作成中に、自動的に生成された推奨ポートのセットを使用します。この推奨ポート値は、デフォルト・ポートが使用可能かどうかに応じて、デフォルト・ポート値とは異なる場合があります。

**注:** 管理対象プロファイル・テンプレートを使用している場合は、このパラメーターを使用しないでください。

**-templatePath** *template\_path*

インストール・ルート・ディレクトリー内にあるテンプレート・ファイルへのディレクトリー・パスを指定します。**profileTemplates** ディレクトリー内には、プロファイル・タイプおよびインストールされている製品のタイプに応じてさまざまなディレクトリーがあります。プロファイルのディレクトリーは、

**-templatePath** オプションの使用中に示したパスです。インストール・ルートの外部にプロファイル・テンプレートがある場合には、そのプロファイル・テンプレートを指定できます。

絶対パスを使用します。このパラメーターはディレクトリーとして存在し、有効なテンプレート・ディレクトリーを指している必要があります。WebSphere Process Server では、以下のテンプレートを使用してください。

- **default.wbiserver:** WebSphere Process Server スタンドアロン・サーバー・プロファイル用で、スタンドアロン・サーバーを定義します。
- **dmgr.wbiserver:** WebSphere Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイル用で、デプロイメント・マネージャーを定義します。

- `managed.wbiserver`: WebSphere Process Server カスタム・プロファイル用で、デプロイメント・マネージャーにフェデレートされた場合、管理対象ノードを定義します。
- `default.esbserver`: WebSphere Enterprise Service Bus スタンドアロン・サーバー・プロファイル用で、スタンドアロン・サーバーを定義します。
- `dmgr.esbserver`: WebSphere Enterprise Service Bus デプロイメント・マネージャー・プロファイル用で、デプロイメント・マネージャーを定義します。
- `managed.esbserver`: WebSphere Enterprise Service Bus カスタム・プロファイル用で、デプロイメント・マネージャーにフェデレートされた場合、管理対象ノードを定義します。

#### **-topologyPattern**

作成しているデプロイメント・マネージャーのデプロイメント環境パターンを決定します。有効な値は `CondensedSync`、`CondensedAsync`、または `Reference` です。

#### **-topologyRole**

作成済みのプロファイルを統合するときに、プロファイルがデプロイメント環境で果たす機能を示します。有効な値は、デプロイメント・ターゲットの場合は `ADT`、ホスト・メッセージングの場合は `Messaging`、またはサービスをサポートする場合は `Support` です。1 つの値を指定するか、または複数の値をそれぞれスペースで区切って指定できます。例えば、`ADT Messaging Support` または `Messaging` または `ADT Support` とします。

#### **-unaugment**

注: WebSphere Process Server の場合は、拡張が解除されている (`-unaugment` パラメーター) プロファイルの使用はサポートされていません。

#### **-validateAndUpdateRegistry**

プロファイルがファイル・システムに存在しているかどうかを確認するために、プロファイル・レジストリー内にリストされているすべてのプロファイルをチェックします。欠落しているプロファイルはレジストリーから除去されます。レジストリーから削除された欠落プロファイルのリストを返します。

#### **-validateRegistry**

プロファイルがファイル・システムに存在しているかどうかを確認するために、プロファイル・レジストリー内にリストされているすべてのプロファイルをチェックします。欠落しているプロファイルのリストを返します。

#### **-validatePorts**

ポートが予約されておらず、使用中でもないことを確認するために、ポートを検査することを指定します。このパラメーターは、使用されていないポートを識別する場合に役立ちます。ポートが使用中であることが判明した場合は、プロファイルの作成が停止して、エラー・メッセージが表示されます。このパラメーターは `create` コマンド行でいつでも使用できます。このパラメーターは `-portsFile` パラメーターと組み合わせて使用することをお勧めします。

#### **-webServerCheck true | false**

Web サーバー定義をセットアップするかどうかを示します。有効な値は、`true` または `false` です。このパラメーターのデフォルト値は `false` です。このパラメーターは、プロファイルを作成する場合にのみ使用してください。既存のプロファイルを拡張する場合は、このパラメーターを指定しないでください。

**-webServerHostname** *webserv\_ host\_name*

サーバーのホスト名。このパラメーターのデフォルト値は、ローカル・マシンの長いホスト名です。このパラメーターは、プロファイルを作成する場合にのみ使用してください。既存のプロファイルを拡張する場合は、このパラメーターを指定しないでください。

**-webServerInstallPath** *webserv\_ installpath\_name*

ローカルまたはリモートの Web サーバーのインストール・パス。このパラメーターは、プロファイルを作成する場合にのみ使用してください。既存のプロファイルを拡張する場合は、このパラメーターを指定しないでください。

このパラメーターのデフォルト値は、ローカル・マシンのオペレーティング・システム、および webServerType パラメーターの値によって異なります。以下に例を示します。

AIX

```
webServerType=IHS: webServerInstallPath defaulted to "/usr/IBM/HTTPServer"  
webServerType=IIS: webServerInstallPath defaulted to "n/a"  
webServerType=SUNJAVASYSTEM: webServerInstallPath defaulted to "/opt/sun/webserver"  
webServerType=DOMINO: webServerInstallPath defaulted to "?"  
webServerType=APACHE: webServerInstallPath defaulted to "?"  
webServerType=HTTPSERVER_ZOS: webServerInstallPath defaulted to "n/a"
```

HP-UX

```
webServerType=IHS: webServerInstallPath defaulted to "/opt/IBM/HTTPServer"  
webServerType=IIS: webServerInstallPath defaulted to "n/a"  
webServerType=SUNJAVASYSTEM: webServerInstallPath defaulted to "/opt/sun/webserver"  
webServerType=DOMINO: webServerInstallPath defaulted to ""  
webServerType=APACHE: webServerInstallPath defaulted to ""  
webServerType=HTTPSERVER_ZOS: webServerInstallPath defaulted to "n/a"
```

Linux

```
webServerType=IHS: webServerInstallPath defaulted to "/opt/IBM/HTTPServer"  
webServerType=IIS: webServerInstallPath defaulted to "n/a"  
webServerType=SUNJAVASYSTEM: webServerInstallPath defaulted to "/opt/sun/webserver"  
webServerType=DOMINO: webServerInstallPath defaulted to ""  
webServerType=APACHE: webServerInstallPath defaulted to ""  
webServerType=HTTPSERVER_ZOS: webServerInstallPath defaulted to "n/a"
```

Solaris

```
webServerType=IHS: webServerInstallPath defaulted to "/opt/IBM/HTTPServer"  
webServerType=IIS: webServerInstallPath defaulted to "n/a"  
webServerType=SUNJAVASYSTEM: webServerInstallPath defaulted to "/opt/sun/webserver"  
webServerType=DOMINO: webServerInstallPath defaulted to ""  
webServerType=APACHE: webServerInstallPath defaulted to ""  
webServerType=HTTPSERVER_ZOS: webServerInstallPath defaulted to "n/a"
```

Windows

```
webServerType=IHS: webServerInstallPath defaulted to "C:\Program Files\IBM\HTTPServer"  
webServerType=IIS: webServerInstallPath defaulted to "C:\"  
webServerType=SUNJAVASYSTEM: webServerInstallPath defaulted to "C:\"  
webServerType=DOMINO: webServerInstallPath defaulted to ""  
webServerType=APACHE: webServerInstallPath defaulted to ""  
webServerType=HTTPSERVER_ZOS: webServerInstallPath defaulted to "n/a"
```

**-webServerName** *webserv\_ name*

Web サーバーの名前。このパラメーターのデフォルト値は `webserv1` です。

このパラメーターは、プロファイルを作成する場合にのみ使用してください。既存のプロファイルを拡張する場合は、このパラメーターを指定しないでください。

**-webServerOS** *webservers\_operating\_system*

Web サーバーが常駐しているオペレーティング・システム。有効な値は、windows、linux、solaris、aix、hpux、os390、および os400 です。このパラメーターは **webServerType** パラメーターと併用してください。

このパラメーターは、プロファイルを作成する場合にのみ使用してください。既存のプロファイルを拡張する場合は、このパラメーターを指定しないでください。

**-webServerPluginPath** *webservers\_pluginpath*

Web サーバーが使用するプラグインへのパス。このパラメーターのデフォルト値は *install\_root/plugins* です。このパラメーターは、プロファイルを作成する場合にのみ使用してください。既存のプロファイルを拡張する場合は、このパラメーターを指定しないでください。

**-webServerPort** *webservers\_port*

Web サーバーにアクセスするときのポートを指定します。このパラメーターのデフォルト値は 80 です。このパラメーターは、プロファイルを作成する場合にのみ使用してください。既存のプロファイルを拡張する場合は、このパラメーターを指定しないでください。

**-webServerType** *webservers\_type*

Web サーバーのタイプ。有効な値は、IHS、SUNJAVASYSTEM、IIS、DOMINO、APACHE、および HTTPSERVER\_ZOS です。このパラメーターは **webServerOS** パラメーターと併用してください。このパラメーターは、プロファイルを作成する場合にのみ使用してください。既存のプロファイルを拡張する場合は、このパラメーターを指定しないでください。

**Windows** **-winserviceAccountType** *specifieduser | localsystem*

プロファイル用に作成された Windows サービスの所有者アカウントのタイプ。このパラメーターは、プロファイルを作成する場合にのみ使用してください。既存のプロファイルを拡張する場合は、このパラメーターを指定しないでください。

有効な値は、*specifieduser* または *localsystem* です。値を *localsystem* とした場合、プロファイルを作成するユーザーのローカル・アカウントで Windows サービスが実行されます。このパラメーターのデフォルト値は *system* です。

**Windows** **-winserviceCheck** *true | false*

この値は *true* または *false* のいずれかです。プロファイル内に作成されたサーバー・プロセス用の Windows サービスを作成するには、*true* を指定してください。Windows サービスを作成しないときは *false* を指定します。このパラメーターのデフォルト値は *false* です。

このパラメーターは、プロファイルを作成する場合にのみ使用してください。既存のプロファイルを拡張する場合は、このパラメーターを指定しないでください。

**Windows** **-winservicePassword** *winservice\_password*

Windows サービスの所有者となる、指定されたユーザーまたはローカル・アカウントのパスワードを指定します。このパラメーターは、プロファイルを作成する場合にのみ使用してください。既存のプロファイルを拡張する場合は、このパラメーターを指定しないでください。

**Windows** **-winserviceStartupType** *manual | automatic | disabled*

Windows サービスの開始用に指定可能な値は、以下のとおりです。

- manual
- automatic
- disabled

このパラメーターのデフォルト値は `manual` です。

このパラメーターは、プロファイルを作成する場合にのみ使用してください。既存のプロファイルを拡張する場合は、このパラメーターを指定しないでください。

**Windows** **-winserviceUserName** *winservice\_user\_ID*

Windows サービスを作成できる ID であることを Windows オペレーティング・システムが確認できるよう、ユーザー ID を指定します。使用するユーザー ID は管理者グループに属していなければならない、次の拡張ユーザー権限を持つ必要があります。

- オペレーティング・システムの一部として振る舞う
- サービスとしてログオン

このパラメーターのデフォルト値は、現在のユーザー名です。このパラメーターの値には、スペースや、\*、?、"、<、>、,、/、¥、| などの無効な文字を使用してはなりません。指定するユーザーは、Windows サービスを作成する適切な許可を持つ必要があります。選択したユーザー名の正しいパスワードを指定する必要があります。

このパラメーターは、プロファイルを作成する場合にのみ使用してください。既存のプロファイルを拡張する場合は、このパラメーターを指定しないでください。

## 共通データベース構成用の `manageprofiles` パラメーター (データベース製品ごと)

共通データベースを構成するには、特定の `manageprofiles` コマンド・パラメーターを使用します。指定するパラメーターは、使用中のデータベース製品と、作成するプロファイルの型によって異なることがあります。

このトピックの表には、サポートされるあらゆるデータベース製品を使用して共通データベースを構成するために使用可能な `manageprofiles` パラメーターが示されています。通常、共通データベースの構成に関連付けられているパラメーターの接頭部は「`-db`」です (`-dbType`、`-dbDelayConfig` など)。`manageprofiles` パラメーターの完全なリスト (デフォルト値を含む) については、305 ページの『`manageprofiles` パラメーター』というトピックを参照してください。いろいろなタイプのプロファイルを作成または拡張するために使用する `manageprofiles` コマンドの例は、トピック 248 ページの『`manageprofiles` コマンドによる Derby または DB2 データベースの

プロファイルの作成 – 例』および 287 ページの『manageprofiles コマンドによる Derby または DB2 データベースのプロファイルの拡張 – 例』で見ることができます。

データベース構成に使用できるパラメーターを表示するには、以下のリストからデータベース製品を選択してください。

- 『Derby Embedded の場合』
- 『Derby Network Server の場合』
- 325 ページの『DB2 Universal の場合』
- 326 ページの『DB2 Universal Runtime Client の場合』
- 326 ページの『DB2 UDB for iSeries (ネイティブ)、DB2 UDB for iSeries (ツールボックス)、DB2 for i5/OS (ネイティブ)、 および DB2 for i5/OS (ツールボックス) の場合』
- 327 ページの『DB2 for z/OS v8 および DB2 for z/OS v9 の場合』
- 328 ページの『Oracle 9i、Oracle 10g、 および Oracle 11g の場合』
- 329 ページの『Informix Dynamic Server の場合』
- 329 ページの『Microsoft SQL Server (組み込み) および Microsoft SQL Server (Data Direct) に関して』

カスタム・プロファイルで使用できるパラメーターは、**-dbType** と **-dbJDBCClasspath** だけです。これは、カスタム・プロファイルの統合先のデプロイメント・マネージャーで使用される共通データベースのタイプおよびドライバーの場所を識別するだけだからです。

### Derby Embedded の場合

表 87 には、Derby Embedded でスタンドアロン・サーバー・プロファイルによって使用される共通データベースを構成するために使用可能な *manageprofiles* パラメーターが示されています。

表 87. 共通データベースの構成に使用できる *manageprofiles* パラメーター (Derby Embedded を使用)

パラメーター
スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合
-dbCreateNew (常に true である必要があります)
-dbName
-dbOutputScriptDir
-dbType
-fileStoreForME (スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合のみ)

### Derby Network Server の場合

325 ページの表 88 には、Derby Network Server でスタンドアロン・サーバー、デプロイメント・マネージャー、またはカスタム・プロファイルによって使用される共通データベースを構成するために使用可能な *manageprofiles* パラメーターが示されています。

表 88. 共通データベースの構成に使用できる *manageprofiles* パラメーター (*Derby Network Server* を使用)

パラメーター
カスタム・プロファイル用
-dbType
-dbJDBCClasspath
スタンドアロン・サーバー・プロファイルまたはデプロイメント・マネージャー・プロファイル用
-dbCommonForME (スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合のみ)
-dbCreateNew (常に true である必要があります)
-dbHostName
-dbName
-dbOutputScriptDir
-dbPassword
-dbServerPort
-dbType
-dbUserId
-fileStoreForME (スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合のみ)

## DB2 Universal の場合

表 89 には、DB2 Universal でスタンドアロン・サーバー、デプロイメント・マネージャー、またはカスタム・プロファイルによって使用される共通データベースを構成するために使用可能な *manageprofiles* パラメーターが示されています。

表 89. 共通データベースの構成に使用できる *manageprofiles* パラメーター (*DB2 Universal* を使用)

パラメーター
カスタム・プロファイル用
-dbJDBCClasspath
-dbType
スタンドアロン・サーバー・プロファイルまたはデプロイメント・マネージャー・プロファイル用
-dbCommonForME (スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合のみ)
-dbCreateNew
-dbDelayConfig
-dbDriverType
-dbHostName
-dbJDBCClasspath
-dbName
-dbOutputScriptDir
-dbPassword

表 89. 共通データベースの構成に使用できる *manageprofiles* パラメーター (DB2 Universal を使用) (続き)

パラメーター
-dbServerPort
-dbType
-dbUserId
-fileStoreForME (スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合のみ)

## DB2 Universal Runtime Client の場合

表 90 には、DB2 Universal Runtime Client でスタンドアロン・サーバー、デプロイメント・マネージャー、またはカスタム・プロファイルによって使用される共通データベースを構成するために使用可能な *manageprofiles* パラメーターが示されています。

表 90. 共通データベースの構成に使用できる *manageprofiles* パラメーター (DB2 Universal Runtime Client を使用)

パラメーター
カスタム・プロファイル用
-dbJDBCClasspath
-dbType
スタンドアロン・サーバー・プロファイルまたはデプロイメント・マネージャー・プロファイル用
-dbCommonForME (スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合のみ)
-dbCreateNew
-dbDelayConfig
-dbJDBCClasspath
-dbName
-dbOutputScriptDir
-dbPassword
-dbType
-dbUserId
-fileStoreForME (スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合のみ)

## DB2 UDB for iSeries (ネイティブ)、DB2 UDB for iSeries (ツールボックス)、DB2 for i5/OS (ネイティブ)、および DB2 for i5/OS (ツールボックス) の場合

327 ページの表 91 には、i5/OS オペレーティング・システムに提供されたデータベース上で、スタンドアロン・サーバー、デプロイメント・マネージャー、またはカスタム・プロファイルによって使用される共通データベースを構成するために使用可能な *manageprofiles* パラメーターが示されています。

表 91. i5/OS オペレーティング・システムに提供されたデータベースを使用した共通データベースの構成のために使用可能な *manageprofiles* パラメーター

パラメーター
カスタム・プロファイル用
-dbJDBCClasspath
-dbType
スタンドアロン・サーバー・プロファイルまたはデプロイメント・マネージャー・プロファイル用
-dbCommonForME (スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合のみ)
-dbCreateNew
-dbDelayConfig
-dbHostName (ツールボックス・ドライバーの場合、リモート・データベース・ホスト名を指定する必要があります)
-dbJDBCClasspath
-dbName
-dbOutputScriptDir
-dbPassword
-dbSchemaName
-dbType
-dbUserId
-fileStoreForME (スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合のみ)

## DB2 for z/OS v8 および DB2 for z/OS v9 の場合

表 92 には、DB2 for z/OS v8 または DB2 for z/OS v9 でスタンドアロン・サーバー、デプロイメント・マネージャー、またはカスタム・プロファイルによって使用される共通データベースを構成するために使用可能な *manageprofiles* パラメーターが示されています。

表 92. DB2 for z/OS v8 または DB2 for z/OS v9 を使用した共通データベースの構成のために使用可能な *manageprofiles* パラメーター

パラメーター
カスタム・プロファイル用
-dbJDBCClasspath
-dbType
スタンドアロン・サーバー・プロファイルまたはデプロイメント・マネージャー・プロファイル用
-dbCommonForME (スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合のみ)
-dbConnectionLocation
-dbCreateNew (常に false である必要があります)
-dbDelayConfig
-dbHostName

表 92. DB2 for z/OS v8 または DB2 for z/OS v9 を使用した共通データベースの構成のために使用可能な *manageprofiles* パラメーター (続き)

パラメーター
-dbJDBCClasspath
-dbName
-dbOutputScriptDir
-dbPassword
-dbSchemaName
-dbServerPort
-dbStorageGroup
-dbType
-dbUserId
-fileStoreForME (スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合のみ)

### Oracle 9i、Oracle 10g、および Oracle 11g の場合

表 93 に、Oracle 9i、Oracle 10g、または Oracle 11g のスタンドアロン・サーバー、デプロイメント・マネージャー、またはカスタム・プロファイルによって使用される共通データベースを構成するために使用可能な *manageprofiles* パラメーターを示します。

表 93. Oracle 9i、Oracle 10g、または Oracle 11g を使用する共通データベースの構成で使用可能な *manageprofiles* パラメーター

パラメーター	
<b>カスタム・プロファイル用</b>	
-dbJDBCClasspath	
-dbType	
<b>スタンドアロン・サーバー・プロファイルまたはデプロイメント・マネージャー・プロファイル用</b>	
-dbCommonForME (スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合のみ)	
-dbCreateNew (常に false である必要があります)	
-dbDelayConfig	
-dbDriverType	
-dbHostName	
-dbJDBCClasspath	
-dbName	
-dbOutputScriptDir	
-dbPassword	
-dbServerPort	
-dbType	
-dbUserId	
-fileStoreForME (スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合のみ)	

## Informix Dynamic Server の場合

表 94 には、Informix Dynamic Server でスタンドアロン・サーバー、デプロイメント・マネージャー、またはカスタム・プロファイルによって使用される共通データベースを構成するために使用可能な `manageprofiles` パラメーターが示されています。

表 94. 共通データベースの構成に使用できる `manageprofiles` パラメーター (Informix Dynamic Server を使用)

パラメーター
カスタム・プロファイル用
-dbJDBCClasspath
-dbType
スタンドアロン・サーバー・プロファイルまたはデプロイメント・マネージャー・プロファイル用
-dbCommonForME (スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合のみ)
-dbCreateNew
-dbDelayConfig
-dbHostName
-dbInstance
-dbJDBCClasspath
-dbLocation (-dbCreateNew が「true」に設定されている場合のみ)
-dbName
-dbOutputScriptDir
-dbPassword
-dbServerPort
-dbType
-dbUserId
-fileStoreForME (スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合のみ)

## Microsoft SQL Server (組み込み) および Microsoft SQL Server (Data Direct) に関して

330 ページの表 95 には、Microsoft SQL Server (組み込み) または Microsoft SQL Server (Data Direct) でスタンドアロン・サーバー、デプロイメント・マネージャーまたはカスタム・プロファイルによって使用される共通データベースを構成するために使用可能な `manageprofiles` パラメーターが示されています。

注: Microsoft SQL Server (Embedded) - Microsoft SQL Server 用の WebSphere Connect JDBC ドライバー (Data Directより) は、リリース 6.2 から非推奨になりました。次のリリースの新しい Microsoft SQL Server JDBC ドライバー、または WebSphere Process Server および WebSphere Enterprise Service Bus のフィックスバックによって置き換えられます。

表 95. Microsoft SQL Server (組み込み) または Microsoft SQL Server (Data Direct) を使用する共通データベースの構成に使用可能な `manageprofiles` パラメーター

パラメーター
カスタム・プロファイル用
-dbJDBCClasspath
-dbType
スタンドアロン・サーバー・プロファイルまたはデプロイメント・マネージャー・プロファイル用
-dbCommonForME (スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合のみ)
-dbCreateNew
-dbDelayConfig
-dbHostName
-dbJDBCClasspath
-dbName
-dbOutputScriptDir
-dbPassword
-dbServerPort
-dbType
-dbUserId
-fileStoreForME (スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合のみ)

## Common Event Infrastructure データベース構成の `manageprofiles` パラメーター (データベース製品ごと)

スタンドアロン・サーバー・プロファイルによって使用される Common Event Infrastructure データベースを構成するには、特定の `manageprofiles` コマンド・パラメーターを使用します。指定するパラメーターは、使用中のデータベース製品によって異なることがあります。

このトピックの表には、サポートされるあらゆるデータベース製品を使用して Common Event Infrastructure データベースを構成するために使用可能な `manageprofiles` パラメーターが示されています。 `manageprofiles` コマンドを使用して Common Event Infrastructure データベースを構成するのは、スタンドアロン・サーバー・プロファイルについてのみです。デプロイメント・マネージャー・プロファイルによって使用するようこのデータベースを構成するには、管理コンソールまたはスクリプトを介して行う必要があります。詳しくは、イベント・データベースの構成を参照してください。

`manageprofiles` パラメーターの完全なリスト (デフォルト値を含む) については、305 ページの『`manageprofiles` パラメーター』というトピックを参照してください。いろいろなタイプのプロファイルを作成または拡張するために使用する `manageprofiles` コマンドの例は、トピック 248 ページの『`manageprofiles` コマンドによる Derby または DB2 データベースのプロファイルの作成 - 例』および 287 ページの『`manageprofiles` コマンドによる Derby または DB2 データベースのプロファイルの拡張 - 例』で見ることができます。

データベース構成に使用できるパラメーターを表示するには、以下のリストからデータベース製品を選択してください。

- 『Derby Embedded の場合』
- 『Derby Network Server の場合』
- 332 ページの『DB2 Universal の場合』
- 332 ページの『DB2 UDB for iSeries (ネイティブ)、DB2 UDB for iSeries (ツールボックス)、DB2 for i5/OS (ネイティブ)、 および DB2 for i5/OS (ツールボックス) の場合』
- 333 ページの『DB2 for z/OS v8 および DB2 for z/OS v9の場合』
- 333 ページの『Oracle 9i、Oracle 10g、 および Oracle 11g の場合』
- 334 ページの『Informix Dynamic Server の場合』
- 335 ページの『Microsoft SQL Server (組み込み) および Microsoft SQL Server (Data Direct) に関して』

### Derby Embedded の場合

表 96 には、Derby Embedded でスタンドアロン・サーバー・プロファイルによって使用される Common Event Infrastructure データベースを構成するために使用可能な manageprofiles パラメーターが示されています。

表 96. *Derby Embedded* を使用した *Common Event Infrastructure* データベースの構成のために使用可能な *manageprofiles* パラメーター

パラメーター
-dbDelayConfig
-ceiDbName
-dbType
-dbOutputscriptDir
-ceiOverrideDataSource

### Derby Network Server の場合

表 97 には、Derby Network Server でスタンドアロン・サーバー・プロファイルによって使用される Common Event Infrastructure データベースを構成するために使用可能な manageprofiles パラメーターが示されています。

表 97. *Derby Network Server* を使用した *Common Event Infrastructure* データベースの構成のために使用可能な *manageprofiles* パラメーター

パラメーター
-dbDelayConfig
-dbHostName
-ceiDbName
-dbPassword
-dbServerPort
-dbType
-dbUserId
-dbOutputscriptDir

表 97. Derby Network Server を使用した Common Event Infrastructure データベースの構成のために使用可能な manageprofiles パラメーター (続き)

パラメーター
-ceiOverrideDataSource

## DB2 Universal の場合

表 98 には、DB2 Universal でスタンドアロン・サーバー・プロファイルによって使用される Common Event Infrastructure データベースを構成するために使用可能な manageprofiles パラメーターが示されています。

表 98. DB2 Universal を使用した Common Event Infrastructure データベースの構成のために使用可能な manageprofiles パラメーター

パラメーター
-dbDelayConfig
-dbHostName
-ceiDbName
-ceiDbNodeName (サーバーが DB2 クライアントとして構成済みで、-dbDelayConfig が true に設定されている場合のみ必要)
-dbPassword
-dbServerPort
-dbType
-dbUserId
-dbJDBCClasspath
-dbOutputscriptDir
-ceiOverrideDataSource

## DB2 UDB for iSeries (ネイティブ)、DB2 UDB for iSeries (ツールボックス)、DB2 for i5/OS (ネイティブ)、および DB2 for i5/OS (ツールボックス) の場合

表 99 には、i5/OS オペレーティング・システムに提供されたデータベース上で、スタンドアロン・サーバー・プロファイルによって使用される Common Event Infrastructure データベースを構成するために使用可能な manageprofiles パラメーターが示されています。

表 99. i5/OS オペレーティング・システムに提供されたデータベースを使用した Common Event Infrastructure データベースの構成のために使用可能な manageprofiles パラメーター

パラメーター
-dbSchemaName
-ceiDbAlreadyConfigured
-dbDelayConfig
-dbHostName
-ceiDbName
-dbPassword
-dbType

表 99. i5/OS オペレーティング・システムに提供されたデータベースを使用した Common Event Infrastructure データベースの構成のために使用可能な manageprofiles パラメーター (続き)

パラメーター
-dbUserId
-dbJDBCClasspath
-dbOutputscriptDir
-ceiOverrideDataSource

## DB2 for z/OS v8 および DB2 for z/OS v9の場合

表 100 には、DB2 for z/OS v8 または DB2 for z/OS v9 でスタンドアロン・サーバー・プロファイルによって使用される Common Event Infrastructure データベースを構成するために使用可能な manageprofiles パラメーターが示されています。

表 100. DB2 for z/OS v8 または DB2 for z/OS v9 を使用した Common Event Infrastructure データベースの構成のために使用可能な manageprofiles パラメーター

パラメーター
-ceiBufferPool4k
-ceiBufferPool8k
-ceiBufferPool16k
-dbSchemaName
-dbDelayConfig
-dbHostName
-ceiDbName
-dbPassword
-dbType
-dbConnectionLocation
-dbUserId
-ceiDiskSizeInMB
-dbJDBCClasspath
-dbOutputscriptDir
-ceiOverrideDataSource
-dbStorageGroup

## Oracle 9i、Oracle 10g、および Oracle 11g の場合

表 101 に、Oracle 9i、Oracle 10g、または Oracle 11g のスタンドアロン・サーバー・プロファイルによって使用される Common Event Infrastructure データベースを構成するために使用可能な manageprofiles パラメーターを示します。

表 101. Oracle 9i、Oracle 10g、または Oracle 11g を使用する Common Event Infrastructure データベースの構成で使用可能な manageprofiles パラメーター

パラメーター
-dbDelayConfig

表 101. Oracle 9i, Oracle 10g, または Oracle 11g を使用する Common Event Infrastructure データベースの構成で使用可能な *manageprofiles* パラメーター (続き)

パラメーター
-dbHostName
-ceiDbName
-dbPassword
-dbServerPort
-dbType
-dbSysPassword
-dbSysUserId
-dbUserId
-ceiInstancePrefix 注: 6.2 では、Informix、Oracle、Microsoft SQL Server (組み込み) および Microsoft SQL Server (Data Direct) 以外のすべてのデータベースで推奨されません。
-dbJDBCClasspath
-dbLocation (-dbDelayConfig が true に設定されている場合のみ必要)
-dbOutputscriptDir
-ceiOverrideDataSource

## Informix Dynamic Server の場合

表 102 には、Informix Dynamic Server でスタンドアロン・サーバー・プロファイルによって使用される Common Event Infrastructure データベースを構成するために使用可能な *manageprofiles* パラメーターが示されています。

表 102. Informix Dynamic Server を使用した Common Event Infrastructure データベースの構成のために使用可能な *manageprofiles* パラメーター

パラメーター
-dbDelayConfig
-dbHostName
-dbLocation (-dbDelayConfig が true に設定されている場合のみ必要)
-ceiDbName
-dbPassword
-dbServerPort
-dbType
-dbInstance
-dbUserId
-ceiInstancePrefix 注: 6.2 では、Informix、Oracle、Microsoft SQL Server (組み込み) および Microsoft SQL Server (Data Direct) 以外のすべてのデータベースで推奨されません。
-dbJDBCClasspath
-dbOutputscriptDir
-ceiOverrideDataSource

## Microsoft SQL Server (組み込み) および Microsoft SQL Server (Data Direct) に関して

表 103 には、Microsoft SQL Server (組み込み) または Microsoft SQL Server (Data Direct) でスタンドアロン・サーバー・プロファイルによって使用される Common Event Infrastructure データベースを構成するために使用可能な manageprofiles パラメーターが示されています。

**注:** Microsoft SQL Server (Embedded) - Microsoft SQL Server 用の WebSphere Connect JDBC ドライバー (Data Directより) は、リリース 6.2 から非推奨になりました。次のリリースの新しい Microsoft SQL Server JDBC ドライバー、または WebSphere Process Server および WebSphere Enterprise Service Bus のフィックスパックによって置き換えられます。

表 103. Microsoft SQL Server (組み込み) または Microsoft SQL Server (Data Direct) を使用する Common Event Infrastructure データベースの構成に使用可能な manageprofiles パラメーター

パラメーター
-dbDelayConfig
-dbHostName
-ceiDbInstallDir (-dbDelayConfig が true に設定されている場合のみ必要)
-ceiDbName
-dbPassword
-dbServerPort
-dbType
-dbInstance (-dbDelayConfig が true に設定されている場合のみ必要)
-ceiDbUser <b>注:</b> 6.2 では、Microsoft SQL Server (組み込み) および Microsoft SQL Server (Data Direct) 以外のすべてのデータベースで推奨されません。
-ceiInstancePrefix <b>注:</b> 6.2 では、Informix、Oracle、Microsoft SQL Server (組み込み) および Microsoft SQL Server (Data Direct) 以外のすべてのデータベースで推奨されません。
-dbOutputscriptDir
-ceiOverrideDataSource
-ceiSaPassword <b>注:</b> 6.2 では、Microsoft SQL Server (組み込み) および Microsoft SQL Server (Data Direct) 以外のすべてのデータベースで推奨されません。
-ceiSaUser <b>注:</b> 6.2 では、Microsoft SQL Server (組み込み) および Microsoft SQL Server (Data Direct) 以外のすべてのデータベースで推奨されません。

## デフォルト値を使用したプロファイルの構成

プロファイル管理ツールを使用して、デフォルトの構成設定でプロファイルを作成または拡張する方法について説明します。

## 始める前に

このセクションの各トピックでは、プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成または拡張中で、240 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの作成』または 278 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの拡張』のいずれかの手順に従っていることを前提としています。すなわち、プロファイル管理ツールをすでに開始しており、スタンドアロン・サーバー・プロファイル、デプロイメント・マネージャー・プロファイル、あるいはカスタム・プロファイルの作成または拡張を選択し、標準的なプロファイル作成または拡張オプションを選択しているということです。

## このタスクについて

プロファイルをデフォルト値で構成する場合は、プロファイル管理ツールによって、デフォルト値がポート、プロファイルのロケーション、プロファイル名、ノード、ホスト、セル (該当する場合)、およびすべての必要なデータベース構成に割り当てられます。

スタンドアロン・サーバー・プロファイルについては、プロファイル管理ツールで以下の作業も実行できます。

- 管理コンソールをインストールします。
- 管理セキュリティを有効にします。
- 管理セキュリティを有効にする場合は、サンプル Business Process Choreographer 構成を作成します。
- Derby Embedded を使用して WebSphere が提供するビジネス・スペースを構成します。
- Derby Embedded を使用して Common Event Infrastructure を構成します。
- Derby Embedded を使用して共通データベースを構成します。
- ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権でサービスの作成が許可される場合は、サーバーの実行用のシステム・サービスを作成します。
- デフォルト・アプリケーション (Snoop、Hello、および HitCount の各アプリケーションを含む) をインストールします。

デプロイメント・マネージャーのプロファイルについては、プロファイル管理ツールによって以下の作業も実行できます。

- ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権でサービスの作成が許可される場合は、サーバーの実行用のシステム・サービスを作成します。
- Derby Network Server を使用して共通データベースを構成します。

カスタム・プロファイルの場合、プロファイル管理ツールを使用すると、作成または拡張のプロセス時にノードを既存のデプロイメント・マネージャーに統合することができます。また、後で addNode コマンドを使用して統合することもできます。既存のデプロイメント・マネージャーにノードを統合する場合は、そのデプロイメント・マネージャーが Derby Network Server を使用するように構成されている必要があります。

以下のサブトピックでは、プロファイルの構成方法 (プロファイル・タイプによって異なります) について説明します。

- 『デフォルト値を使用したスタンドアロン・サーバー・プロファイルの構成』
- 340 ページの『デフォルト値を使用したデプロイメント・マネージャー・プロファイルの構成』
- 343 ページの『デフォルト値を使用したカスタム・プロファイル (管理対象ノード) の構成』

## デフォルト値を使用したスタンドアロン・サーバー・プロファイルの構成

プロファイル管理ツールを使用して、デフォルトの構成設定で WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus スタンドアロン・サーバー・プロファイルを作成および構成する方法について説明します。

### 始める前に

このトピックでは、プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成または拡張し、240 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの作成』または 278 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの拡張』のいずれかの手順に従うことを前提としています。すなわち、プロファイル管理ツールをすでに開始しており、スタンドアロン・サーバー・プロファイルの作成または拡張を選択し、**標準的な**プロファイル作成または拡張オプションを選択しているということです。

### このタスクについて

**標準的な**プロファイル作成または拡張のオプションを選択すると、デフォルト構成設定でプロファイルが作成または拡張されます。このタイプの構成では、プロファイル管理ツールは、ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セルの名前にデフォルト値を割り当てます。管理コンソールがデフォルト・アプリケーション (Snoop、Hello、および HitCount のアプリケーションを含む) のようにインストールされています。オプションで、管理セキュリティーを有効にすることができます (ただし、セキュリティーが有効になっているプロファイルを拡張する場合は除きます。プロファイルを WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルに拡張するためには、プロファイルの管理ユーザー ID およびパスワードを再入力する必要があります)。ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権で許可される場合は、このツールによってサーバーを実行するためのシステム・サービスが作成されます。Common Event Infrastructure および共通データベースの構成は Derby Embedded に設定されます。

セキュリティーを有効にする場合、ツールはプロファイルについてのサンプルの Business Process Choreographer 構成を作成します。セキュリティーを有効にしない場合は、このサンプルの構成は作成されません。

また、Derby Embedded を使用して WebSphere が提供するビジネス・スペースを構成します。

**制約事項:** このスタンドアロン・サーバー・プロファイルをデプロイメント・マネージャーに統合する予定がある場合、**標準的な**オプションを使用してプロファイル

を作成しないでください。**標準的な**プロファイル作成または拡張で提供されるメッセージング・エンジン・ストレージおよびデータベース・タイプのデフォルト値は、デプロイメント環境のインストールには適していません。代わりに、**拡張オプション**を使用してプロファイルを作成または拡張してください。詳しくは、347ページの『カスタマイズした値を使用したスタンドアロン・サーバー・プロファイルの構成』を参照してください。

278ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの拡張』または240ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの作成』のいずれかの手順に従うと、「管理セキュリティー」パネルまたは「プロファイルの要約」パネルが表示されます。以下の手順を実行して、新しいスタンドアロン・サーバー・プロファイルをデフォルトの構成値で構成します。

### 手順

1. プロファイル管理ツールに表示されるパネルは、プロファイルを作成するのか拡張するのかによって異なります。プロファイルを拡張する場合は、セキュリティーがそのプロファイル上で有効になっているかどうかによっても異なります。

実行内容	最初のステップ
「標準的なプロファイル拡張」を実行中で、拡張中のプロファイルで管理セキュリティーが有効になっている 場合。	「管理セキュリティー」パネルが表示されます。ステップ 2 に進んでください。
「標準的なプロファイル拡張」を実行中で、拡張中のプロファイルで管理セキュリティーが有効になっていない 場合。	「プロファイルの要約」パネルが表示されます。ステップ 3 (339 ページ) に進んでください。
<b>標準的なプロファイル作成</b>	「管理セキュリティー」パネルが表示されます。ステップ 2 に進んでください。

2. 管理セキュリティーを使用可能にします。

この画面は、プロファイルを作成するのか拡張するのかによって異なります。

プロファイルを作成する場合、管理セキュリティーをすぐに有効にすることも、後で管理コンソールから有効にすることもできます。管理セキュリティーをすぐに有効にするには、「**管理セキュリティーを使用可能にする**」チェック・ボックスを選択したままにし、管理コンソールにログオンするためのユーザー名およびパスワードを指定して、「次へ」をクリックします。管理セキュリティーを無効にするには、チェック・ボックスのチェックを外します。管理セキュリティーを後で管理コンソールから有効にするには、コンソールを開き、「**セキュリティー**」>「**ビジネス・インテグレーション・セキュリティー**」を選択してください。

**重要:** プロファイル管理ツールの機能で Business Process Choreographer サンプル構成を作成する場合、管理セキュリティーを有効にする必要があります。

プロファイルを拡張しているときにこのパネルが表示される場合、拡張中のプロファイルでセキュリティーが有効にされています。そのプロファイルの管理ユーザー ID およびパスワードを再入力する必要があります。

「プロファイルの要約」パネルが表示されます。

3. 「プロファイルの要約」パネルで、「作成」または「拡張」をクリックしてプロファイルを作成または拡張するか、あるいは「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。

プロファイルの作成または拡張が完了すると、「プロファイル完了 (Profile complete)」パネルに「プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に作成されました」または「プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に拡張されました」というメッセージが表示されます。

**重要:** プロファイルの作成または拡張中にエラーが検出された場合は、正常終了のメッセージの代わりに他のメッセージが表示される可能性があります。その例と意味は次のとおりです。

- 「プロファイル管理ツールによりプロファイルが作成されましたが、エラーが発生しました」: プロファイルの作成が完了したが、エラーが生成されたことを示します。
- 「プロファイル管理ツールでプロファイルを作成できません」: プロファイルの作成が完全に失敗したことを示します。
- 「プロファイル管理ツールでプロファイルが拡張されましたが、エラーが発生しました」: プロファイルの拡張が完了したが、エラーが生成されたことを示します。
- 「プロファイル管理ツールでプロファイルを拡張できません」: プロファイルの拡張が完全に失敗したことを示します。

「プロファイル完了 (Profile complete)」パネルには、問題のトラブルシューティングを行うために参照するログ・ファイルが示されます。773 ページの『インストールとプロファイル作成のログ・ファイル』にリストされている該当するログ・ファイルの説明を参照してください。

トラブルシューティングに役立つ情報は以下のトピックにも記載されています。

- 767 ページの『第 15 章 インストールおよび構成のトラブルシューティング』
  - 777 ページの『Launchpad アプリケーションのトラブルシューティング』
  - 779 ページの『サイレント・インストールのトラブルシューティング』
  - 780 ページの『i5/OS インストールのトラブルシューティングのヒント』
  - 781 ページの『失敗した Ant 構成スクリプトの診断』
  - 771 ページの『メッセージ: インストールおよびプロファイル作成』
  - 783 ページの『プロファイルの作成または拡張時の障害からのリカバリー』
4. 「プロファイル完了 (Profile complete)」パネルで、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」または「別のプロファイルの作成 (Create another profile)」、あるいはこの両方を選択します。終了するには、「終了」をクリックします。ファースト・ステップ・コンソールを使用して、サーバーを始動します。「別のプロファイルの作成 (Create another profile)」オプションを使用してプロファイル管理ツールを再始動し、追加のプロファイルを作成します。

## タスクの結果

以下のいずれかの作業が完了しました。

- WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus のプロファイルの作成。
- WebSphere Application Server、WebSphere Application Server Network Deployment、または WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルの Websphere Process Server プロファイルへの拡張。
- WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment プロファイルの WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルへの拡張。

プロファイル内のノードには、server1 (Linux、UNIX、および Windows プラットフォームの場合) または servername (i5/OS プラットフォームの場合) という名前のサーバーがあり、複数の WebSphere Process Server がインストールされている場合、番号が増えていきます。

## 次のタスク

ファースト・ステップ・コンソールから「**サーバーの起動**」を選択してサーバーの作動をチェックします。出力ウィンドウが開きます。次のようなメッセージが表示される場合、サーバーは正常に作動しています。

```
ADMU3000I: サーバー server1 が e-ビジネス用にオープン。プロセス ID は 3348
(Server server1 open for e-business; process id is 3348)
```

ファースト・ステップ・コンソールからインストール検査テスト (IVT) を実行するか、wbi\_ivt コマンドを実行することで、サーバーの動作を確認することもできます。このテストは、デプロイメント・マネージャーまたはスタンドアロン・サーバーのインストール環境が正常に動作していることが確認するものです。スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合はヘルス・モニター検査も実行され、レポートが生成されます。

## デフォルト値を使用したデプロイメント・マネージャー・プロファイルの構成

プロファイル管理ツールを使用して、デフォルトの構成値で WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus のデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成および構成する方法について説明します。

### 始める前に

このトピックでは、プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成または拡張し、240 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの作成』または 278 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの拡張』のいずれかの手順に従うことを前提としています。すなわち、プロファイル管理ツールをすでに開始しており、デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成または拡張を選択し、**標準的な**プロファイル作成または拡張オプションを選択しているということです。

### このタスクについて

**標準的な**プロファイル作成または拡張のオプションを選択すると、デフォルト構成設定でプロファイルが作成または拡張されます。このタイプの構成では、プロファイル管理ツールは、ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、

ノード、ホスト、セルの名前にデフォルト値を割り当てます。また、管理コンソールがインストールされます。オプションで、管理セキュリティーを有効にすることができます (ただし、セキュリティーが有効になっているプロファイルを拡張する場合は除きます。プロファイルを WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルに拡張するためには、プロファイルの管理ユーザー ID およびパスワードを再入力する必要があります)。ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権で許可される場合は、このツールによってサーバーを実行するためのシステム・サービスが作成されます。共通データベースの構成は、Derby Network Server に設定されます。

278 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの拡張』または 240 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの作成』の手順に従うと、「管理セキュリティー」パネルまたは「プロファイルの要約」パネルが表示されます。以下の手順を実行し、デフォルト値を使用して新規デプロイメント・マネージャー・プロファイルを構成します。

### 手順

1. プロファイル管理ツールに表示されるパネルは、プロファイルを作成するのか拡張するのかによって異なり、また拡張する場合はプロファイルで管理セキュリティーが有効になっているかどうかによって異なります。

実行内容	最初のステップ
「標準的なプロファイル拡張」を実行中で、拡張中のプロファイルで管理セキュリティーが有効になっている 場合。	「管理セキュリティー」パネルが表示されません。ステップ 2 に進んでください。
「標準的なプロファイル拡張」を実行中で、拡張中のプロファイルで管理セキュリティーが有効になっていない 場合。	「プロファイルの要約」パネルが表示されません。ステップ 3 (342 ページ) に進んでください。
標準的なプロファイル作成	「管理セキュリティー」パネルが表示されません。ステップ 2 に進んでください。

2. 管理セキュリティーを使用可能にします。

この画面は、プロファイルを作成するのか拡張するのかによって異なります。

プロファイルを作成する場合、管理セキュリティーをすぐに有効にすることも、後で管理コンソールから有効にすることもできます。管理セキュリティーをすぐに有効にするには、「**管理セキュリティーを使用可能にする**」チェック・ボックスを選択したままにし、管理コンソールにログオンするためのユーザー名およびパスワードを指定して、「次へ」をクリックします。管理セキュリティーを無効にするには、チェック・ボックスのチェックを外します。管理セキュリティーを後で管理コンソールから有効にするには、コンソールを開き、「**セキュリティー**」>「**ビジネス・インテグレーション・セキュリティー**」をクリックしてください。

プロファイルを拡張しているときにこのパネルが表示される場合、拡張中のプロファイルでセキュリティーが有効にされています。そのプロファイルの管理ユーザー ID およびパスワードを再入力する必要があります。

「プロファイルの要約」パネルが表示されます。

3. 「プロファイルの要約」パネルで、「作成」または「拡張」をクリックしてプロファイルを作成または拡張するか、あるいは「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。

プロファイルの作成または拡張が完了すると、「プロファイル完了 (Profile complete)」パネルに「プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に作成されました」または「プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に拡張されました」というメッセージが表示されます。

4. 「プロファイル完了 (Profile complete)」パネルで、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」または「別のプロファイルの作成 (Create another profile)」、あるいはこの両方を選択します。終了するには、「終了」をクリックします。ファースト・ステップ・コンソールを使用して、サーバーを始動します。「別のプロファイルの作成 (Create another profile)」オプションを使用してプロファイル管理ツールを再始動し、追加のプロファイルを作成します。
5. ご使用の環境で Business Process Choreographer コンポーネントを使用する場合、それを構成する必要があります。データベース管理者に Business Process Choreographer データベースを作成し、構成してもらうことが必要になる場合があります。

詳しくは、『Business Process Choreographer の構成』にある各トピックを参照してください。

## タスクの結果

以下のいずれかの作業が完了しました。

- WebSphere Process Server または Websphere Enterprise Service Bus のプロファイルの作成。
- WebSphere Application Server Network Deployment または WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルの WebSphere Process Server プロファイルへの拡張。
- WebSphere Application Server Network Deployment プロファイルの WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルへの拡張。

プロファイルで定義されたノードには、名前が Dmgr というデプロイメント・マネージャーがあります。

## 次のタスク

ファースト・ステップ・コンソールから「デプロイメント・マネージャーの始動」を選択して、サーバーが作動することを確認します。出力ウィンドウが開きます。次のようなメッセージが表示される場合、デプロイメント・マネージャーは正常に作動しています。

```
ADMU3000I: サーバー dmgr が e-ビジネス用にオープン。プロセス ID は 3072
(Server dmgr open for e-business; process id is 3072)
```

デプロイメント環境の場合には、別のデータベースを作成して構成し、カスタム・プロファイルを作成してそれをご使用のデプロイメント・マネージャーに統合し、サーバーを作成し、ワークロード管理機能が必要な場合はクラスターを作成し、さらに、計画したインストール環境に固有のその他のタスクを実行する必要があります。計画した環境では、実行が必要なタスク、およびその実行順序を指示します。

インストールの計画、および WebSphere Process Server で必要とされるデータベースについて詳しくは、『WebSphere Process Server の計画』の各トピックを参照してください。

## デフォルト値を使用したカスタム・プロファイル (管理対象ノード) の構成

プロファイル管理ツールを使用して、デフォルト構成値を使用するカスタム・プロファイルを作成および構成する方法について説明します。

### 始める前に

このトピックでは、プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成または拡張し、240 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの作成』または 278 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの拡張』のいずれかの手順に従うことを前提としています。すなわち、プロファイル管理ツールをすでに開始しており、カスタム・プロファイルの作成または拡張を選択し、標準的なプロファイル作成または拡張オプションを選択しているということです。

### このタスクについて

このタイプの構成では、プロファイル管理ツールによって、ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホストの名前にデフォルト値が割り当てられます。ノードは、作成または拡張のプロセス時に既存のデプロイメント・マネージャーに統合することができますし、後で `addNode` コマンドを使用して統合することもできます。プロファイルを作成または拡張プロセス時に統合することを決定した場合は、このツールによって共通データベースの構成がデプロイメント・マネージャーと同じデータベースに設定されます。統合しないことを決定した場合は、データベースは未構成のままになります。

240 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの作成』または 278 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの拡張』のいずれかの手順に従うと、「フェデレーション」パネルが表示されます。以下の手順を実行して、デフォルト値を使用して新規のカスタム・プロファイルを構成します。

### 手順

1. 「フェデレーション」パネルで、ノードのデプロイメント・マネージャーへの統合をプロファイルの作成または拡張の一部としてここで実行するか、またはプロファイルの作成または拡張とは別に後で実行するかを選択します。
  - プロファイル作成または拡張の一部としてノードを統合することを選択した場合は、デプロイメント・マネージャーのホスト名または IP アドレスと SOAP ポート、および認証ユーザー ID とパスワード (デプロイメント・マネージャー上で管理セキュリティが使用可能になっている場合) を指定します。「後でこのノードを統合する」チェック・ボックスを選択解除されたままにしておきます。次に、「次へ」をクリックします。

プロファイル管理ツールによって、デプロイメント・マネージャーが存在し、通信が可能であること、および認証ユーザー ID とパスワードがそのデプロイメント・マネージャーに有効であること (デプロイメント・マネージャーがセキュリティで保護されている場合) が検査されます。

**重要:** 以下の条件すべてに該当する場合にのみ、プロファイルの作成または拡張時にカスタム・ノードを統合してください。

- このカスタム・ノードをマイグレーション・ターゲットとして使用する予定がない。
- 他のノードは統合されていない (ノードの統合はシリアルライズする必要があります)。
- デプロイメント・マネージャーが稼働している。
- デプロイメント・マネージャーが WebSphere Process Server デプロイメント・マネージャーである。WebSphere Process Server プロファイルは WebSphere Enterprise Service Bus デプロイメント・マネージャーを使用できませんが、WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルは WebSphere Process Server デプロイメント・マネージャーを使用できます。
- デプロイメント・マネージャーが、作成または拡張するカスタム・プロファイルと同じか、それより高いリリース・レベルである。
- デプロイメント・マネージャーで、JMX 管理ポートが有効になっている。デフォルト・プロトコルは SOAP です。

以下の条件のいずれかに該当する場合は、プロファイルの作成または拡張時にカスタム・ノードを統合しない てください。

- このカスタム・ノードをマイグレーション・ターゲットとして使用する予定がある。
- 別のプロファイルが統合されている (ノードの統合はシリアルライズする必要があります)。
- デプロイメント・マネージャーが稼働していないか、実行しているかどうか不明。
- そのデプロイメント・マネージャーは、まだ WebSphere Process Server デプロイメント・マネージャーに拡張されていない。
- デプロイメント・マネージャーが、作成または拡張するカスタム・プロファイルと同じか、それより高いリリース・レベルではない。
- デプロイメント・マネージャーで、JMX 管理ポートが有効になっていない。
- デプロイメント・マネージャーが、デフォルトではないリモート・メソッド呼び出し (RMI) を優先 Java Management Extensions (JMX) コネクタとして使用するよう再構成されている。(優先コネクタ・タイプを確認するには、デプロイメント・マネージャーの管理コンソールで「システム管理」>「デプロイメント・マネージャー」>「管理サービス」をクリックします。)

デプロイメント・マネージャーが実行中でないとき、またはほかの理由で使用できないときにカスタム・ノードを統合しようとする、警告パネルが表示されて、続行できなくなります。この警告パネルが表示されたら、「OK」をクリックしてこの警告パネルを終了し、「フェデレーション」パネルで別の選択を行ってください。

- ノードを後で統合することを選択してプロファイルの作成または拡張とは別に行う場合は、「後でこのノードを統合する」チェック・ボックスを選択して、「次へ」をクリックします。

addNode コマンドを使用してノードを統合する方法については、402 ページの『カスタム・ノードのデプロイメント・マネージャーへの統合』を参照してください。このコマンドについては、WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 6.1 のインフォメーション・センターにあるトピック『addNode コマンド』を参照してください。

「プロファイルの要約」パネルが表示されます。

2. 「プロファイルの要約」パネルで、「作成」または「拡張」をクリックしてプロファイルを作成または拡張するか、あるいは「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。

プロファイルの作成または拡張が完了すると、「プロファイル完了 (Profile complete)」パネルに「プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に作成されました」または「プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に拡張されました」というメッセージが表示されます。

3. 「プロファイル完了 (Profile complete)」パネルで、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」または「別のプロファイルの作成 (Create another profile)」あるいはこの両方を選択します。終了するには、「終了」をクリックします。ファースト・ステップ・コンソールを使用して、製品資料にアクセスします。「別のプロファイルの作成 (Create another profile)」オプションを使用してプロファイル管理ツールを再始動し、追加のプロファイルを作成します。

## タスクの結果

以下のいずれかの作業が完了しました。

- WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus のプロファイルの作成。
- WebSphere Application Server Network Deployment または WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルの WebSphere Process Server プロファイルへの拡張。
- WebSphere Application Server Network Deployment プロファイルの WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルへの拡張。

## 次のタスク

プロファイルの作成または拡張中にプロファイルを統合しなかった場合、ここで統合します。プロファイル内のノードを統合し、デプロイメント・マネージャーを使用してそのノードをカスタマイズするまでは、そのノードは空です。

## カスタマイズした値を使用したプロファイルの構成

プロファイル管理ツールを使用して、カスタマイズした構成設定でプロファイルを作成または拡張する方法について説明します。

## 始める前に

このトピックでは、プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成または拡張し、240 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの作成』または 278 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの拡張』のいずれかの手順に従うことを前提としています。すなわち、プロファイル管理ツールをすでに開始しており、スタンドアロン・サーバー・プロファイル、デプロイメ

ント・マネージャー・プロファイル、あるいはカスタム・プロファイルの作成または拡張を選択し、高度なプロファイル作成または拡張オプションを選択しているということです。

## このタスクについて

プロファイルをカスタマイズした値で構成する場合、カスタマイズした値をポート、プロファイルのロケーション、プロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前、およびすべての必要なデータベース構成に割り当てることができます。

スタンドアロン・サーバー・プロファイルについては、プロファイル管理ツールで以下の作業も実行できます。

- Common Event Infrastructure を構成します。
- 共通データベースを構成します。
- 管理コンソールをインストールし、Web サーバー定義を作成します。
- 管理セキュリティを使用可能にします。
- ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権でサービスの作成が許可される場合は、サーバーの実行用のシステム・サービスを作成します。
- デフォルト・アプリケーション (Snoop、Hello、および HitCount の各アプリケーションを含む) および WebSphere Application Server のサンプル・アプリケーションをデプロイします。
- Derby Embedded を使用してWebSphere が提供するビジネス・スペースを構成します。
- ビジネス・ルール・マネージャーを構成し、Business Process Choreographer サンプル構成を作成します。

デプロイメント・マネージャー・プロファイルについては、プロファイル管理ツールで以下の作業も実行できます。

- 共通データベースを構成します。
- 管理コンソールをインストールします。
- 管理セキュリティを使用可能にします。
- ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権でサービスの作成が許可される場合は、サーバーの実行用のシステム・サービスを作成します。

カスタム・プロファイルの場合、プロファイル管理ツールを使用すると、作成または拡張のプロセス時にノードを既存のデプロイメント・マネージャーに統合することができます。また、後で addNode コマンドを使用して統合することもできます。

以下のサブトピックでは、プロファイルの構成方法 (プロファイル・タイプによって異なります) について説明します。

- 347 ページの『カスタマイズした値を使用したスタンドアロン・サーバー・プロファイルの構成』
- 375 ページの『カスタマイズした値を使用したデプロイメント・マネージャー・プロファイルの構成』
- 397 ページの『カスタマイズした値を使用したカスタム・プロファイル (管理対象ノード) の構成』

## カスタマイズした値を使用したスタンドアロン・サーバー・プロファイルの構成

プロファイル管理ツールを使用して、カスタマイズした構成設定で WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus スタンドアロン・サーバー・プロファイルを作成および構成する方法について説明します。

### 始める前に

このトピックでは、プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成または拡張し、240 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの作成』または 278 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの拡張』のいずれかの手順に従うことを前提としています。すなわち、プロファイル管理ツールをすでに開始しており、スタンドアロン・サーバー・プロファイルの作成または拡張を選択し、高度なプロファイル作成または拡張オプションを選択しているということです。

### このタスクについて

高度なオプションを選択することによって、ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セルの名前などの設定に独自の値を指定することができます。オプションで、管理コンソール、デフォルト・アプリケーション (Snoop、Hello、および HitCount の各サーブレットを含む)、WebSphere Application Server サンプル・アプリケーションをデプロイするか、Web サーバー定義を作成するかを選択できます。必要に応じて、管理セキュリティーを使用可能にすることができます。ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権で許可される場合は、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成することができます。Common Event Infrastructure および共通データベースに対して独自の構成値を指定してビジネス・スペースを構成することができます。オプションで、ビジネス・ルール・マネージャーを構成して Business Process Choreographer サンプル構成を作成することができます。

**重要:** プロファイルをデプロイメント・マネージャーに統合する予定がある場合、メッセージング・エンジン用にファイル・ストア・オプションまたは Common Event Infrastructure、Business Process Choreographer、あるいは共通データベース用に Derby Embedded を選択しないでください。ファイル・ストア・オプションおよび Derby Embedded データベースはデプロイメント環境構成では使用できません。

278 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの拡張』または 240 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの作成』のいずれかの手順に従うと、「管理セキュリティー」パネルまたは「オプションのアプリケーション・デプロイメント」パネルが表示されます。以下の手順を実行し、新しいスタンドアロン・サーバー・プロファイルをカスタマイズした構成値で構成します。

### 手順

1. プロファイル管理ツールに表示されるパネルは、プロファイルを作成するのか拡張するのかによって異なります。プロファイルを拡張する場合は、セキュリティーがそのプロファイル上で有効になっているかどうか、および Common Event Infrastructure がシステム上で構成されているかどうかによっても異なります。

実行内容	最初のステップ
WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルの高度なプロファイル拡張を実行中で、拡張するプロファイルに対してセキュリティが有効である。	「管理セキュリティ」パネルが表示されます。ステップ 5 (350 ページ) に進んでください。
WebSphere Process Server プロファイルの高度なプロファイル拡張を実行中で、拡張するプロファイルに対してセキュリティが有効ではない。	「Business Process Choreographer のサンプル構成」パネルが表示されます。ステップ 10 (354 ページ) に進んでください。
WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルの高度なプロファイル拡張を実行中で、 <ul style="list-style-type: none"> <li>拡張中のプロファイルでセキュリティが有効になっていなくて、</li> <li>共通データベースが既にシステム上で構成されている 場合。</li> </ul>	「ビジネス・スペース の構成」パネルが表示されます。ステップ 11 (354 ページ) に進んでください。
高度なプロファイル作成	「オプションのアプリケーション・デプロイメント」パネルが表示されます。ステップ 2 に進んでください。

2. 「高度なプロファイル作成」の場合のみ: 「オプションのアプリケーション・デプロイメント」パネルで、作成するスタンドアロン・サーバー・プロファイル環境にデプロイするアプリケーションを選択して「次へ」をクリックします。

以下のリストからアプリケーションを選択するには、アプリケーションの横にあるチェック・ボックスを選択したままにします。アプリケーションを選択解除するには、チェック・ボックスのチェックを外します。

- 「管理コンソールのデプロイ (推奨)」: サーバーを管理する Web ベースの管理コンソールをインストールします。
- 「デフォルト・アプリケーションのデプロイ」: Snoop、Hello、および HitCount の各サーブレットを含むデフォルト・アプリケーションをインストールします。
- 「サンプル・アプリケーションのデプロイ」: WebSphere Application Server サンプル・アプリケーションをインストールします。WebSphereApplication Server のサンプル・アプリケーションは、実稼働環境へのデプロイメントが推奨されていません。

注: このチェック・ボックスを選択すると、WebSphere Process Server サンプルはデプロイされません。

「プロファイル名およびロケーション」パネルが表示されます。

3. 「高度なプロファイル作成」の場合のみ: 「プロファイル名およびロケーション」パネルで、以下のステップを実行します。

- a. プロファイルに固有の名前とディレクトリー・パスを指定するか、またはデフォルト値を受け入れます。

作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。デフォルト名を使用しないことを選択した場合は、ディレクトリー名の長さ制限などのプロファイルの命名時に考慮する必要がある問題について、633ページの『プロファイル、ノード、ホスト、およびセルの命名の考慮事項』を参照してください。

指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル（コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど）が格納されます。デフォルト・ディレクトリーは、プラットフォームに依存しています。

- `i5/OS` `user_data_root/profiles/profile_name`
- `Linux` `UNIX` `install_root/profiles/profile_name`
- `Windows` `install_root\profiles\profile_name`

ここで、`profile_name` は指定した名前です。以下の場合、エラー・メッセージが表示されます。

- 指定した `profile_name` が固有ではない。
  - 指定したディレクトリーが空ではない。
  - 使用しているユーザー ID に、このディレクトリーに対する十分な権限がない。
  - プロファイルを作成するための十分なスペースがない。
- b. 開発環境用に最適化された構成設定値でスタンドアロン・サーバーを作成するには、「開発テンプレートを使用するサーバーの作成」チェック・ボックスを選択します。開発テンプレートは起動時間を削減し、サーバーがパワーの面で劣るハードウェア上でも実行できるようにします。このオプションは実動サーバーには使用しないでください。
- c. 「デフォルトにするプロファイル」チェック・ボックスを選択して、作成するプロファイルをデフォルト・プロファイルにする（コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようにする）こともできます。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

マシンで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。

デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから実行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。マシン上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。詳しくは、651ページの『複数プロファイル環境のプロファイル・コマンド』を参照してください。

- d. 「次へ」をクリックします。（「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このパネルが再表示されたときに、このパネルで手動で名前を変更しなければならないことがあります。）

「ノード、ホスト、およびセルの名前」パネルが表示されます。

4. 「高度なプロファイル作成」の場合のみ: 「ノード、ホスト、およびセルの名前」パネルで、スタンドアロン・サーバー・プロファイルのノード、ホスト、およびセル名を指定するか、またはデフォルト設定をそのまま使用して「次へ」をクリックします。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。ノード、ホスト、セルの名前を設定するときに検討しなければならない予約語や問題点については、633 ページの『プロファイル、ノード、ホスト、およびセルの命名の考慮事項』を参照してください。

「管理セキュリティ」パネルが表示されます。

5. 管理セキュリティを使用可能にします。

この画面は、プロファイルを作成するのか拡張するのかわによって異なります。

プロファイルを作成する場合、管理セキュリティをすぐに有効にすることも、後で管理コンソールから有効にすることもできます。管理セキュリティをすぐに有効にするには、「管理セキュリティを使用可能にする」チェック・ボックスを選択したままにし、管理コンソールにログオンするためのユーザー名およびパスワードを指定して、「次へ」をクリックします。管理セキュリティを無効にするには、チェック・ボックスのチェックを外します。管理セキュリティを後で管理コンソールから有効にするには、コンソールを開き、「セキュリティ」>「ビジネス・インテグレーション・セキュリティ」をクリックしてください。

**重要:** 10 (354 ページ) のステップで Business Process Choreographer サンプル構成を作成することを計画する場合、管理セキュリティを有効にする必要があります。

2 (348 ページ) のステップで WebSphere Application Server サンプル・アプリケーションを「オプションのアプリケーション・デプロイメント」パネルからデプロイすることを選択した場合、サンプルを実行するためのアカウントが必要です。アカウントのパスワードを指定してください。アカウントのユーザー名は変更できません。

プロファイルを拡張しているときにこのパネルが表示される場合、拡張中のプロファイルでセキュリティが有効にされています。そのプロファイルの管理ユーザー ID およびパスワードを再入力する必要があります。

次のステップは、以下の条件に応じて異なります。

実行内容	次のステップ
WebSphere Process Server プロファイルの高度なプロファイル拡張、または WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルの高度なプロファイル拡張	「Business Process Choreographer のサンプル構成」パネルが表示されます。ステップ 10 (354 ページ) に進んでください。
高度なプロファイル作成	「ポート値の割り当て」パネルが表示されます。ステップ 6 (351 ページ) に進んでください。

6. 「高度なプロファイル作成」の場合のみ: プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認して、「次へ」をクリックします。

プロファイル管理ツールは、ほかの WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。ステップ 2 (348 ページ) の「オプションのアプリケーション・デプロイメント」パネル上で、管理コンソールをデプロイしないことを選択した場合、管理コンソール・ポートは「ポート値の割り当て」パネル上で使用できません。

以下の条件が満たされる場合、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーによって実行されたインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている場合。
- ポートが現在使用中の場合。

「ポート値の割り当て」パネルにアクセスするときにポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」パネルで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポート競合が疑われる場合、プロファイルの作成後に調査できます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

- **i5/OS** `profile_root/properties/portdef.props`
- **Linux** **UNIX** `profile_root/properties/portdef.props`
- **Windows** `profile_root¥properties¥portdef.props`

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てするには、WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 6.1 インフォメーション・センターのトピック

『Updating ports in an existing profile』を参照し、**ws\_ant** スクリプトによって `updatePorts.ant` ファイルを実行します。

次のステップは、ご使用のプラットフォーム、およびインストールを `root` (管理者) ユーザーで行っているか、非 `root` ユーザーで行っているかによって異なります。

インストールの内容	次のステップ
Linux プラットフォーム上で、プロファイル管理ツールを <code>root</code> ユーザーとして実行している場合	「Linux サービスの定義」パネルが表示されます。ステップ 8 (352 ページ) に進んでください。
Windows プラットフォーム上で、管理者グループの特権を持っている場合	「Windows サービスの定義」パネルが表示されます。ステップ 7 (352 ページ) に進んでください。
それ以外のプラットフォームの場合、または Linux または Windows プラットフォームで非 <code>root</code> ユーザーとして実行している場合	「Web サーバー定義」パネルが表示されます。ステップ 9 (353 ページ) に進んでください。

7. **Windows** 「高度なプロファイル作成」の場合のみ: サーバーを Windows サービスとして実行するかどうかを選択して、「次へ」をクリックします。

Windows サービスをインストールする ID に管理者グループ特権が設定されている場合のみ、「Windows サービスの定義」パネルが Windows プラットフォームに表示されます。プロファイルが Windows サービスとして構成されている場合、製品は、**startServer** コマンドによって開始されるサーバー・プロセスに対応する Windows サービスを開始します。例えば、サーバーを Windows サービスとして構成し、**startServer** コマンドを実行すると、**wasservice** コマンドは定義されたサービスの開始を試みます。

**重要:** 指定のユーザー・アカウントとしてログオンする場合は、サービスを実行するユーザーのユーザー ID とパスワードを指定し、さらに開始タイプ (デフォルトは Manual) を指定する必要があります。ユーザー ID は、名前にスペースを使用できず、管理者グループに属していて、拡張ユーザー権限の「サービスとしてログオン」および「オペレーティング・システムの一部として機能」を持つ必要があります。ユーザー ID が管理者グループに属していて、まだ拡張ユーザー権限がない場合は、プロファイル管理ツールにより、ユーザー ID に拡張ユーザー権限が付与されます。

プロファイルの作成時に追加された Windows サービスをプロファイルの削除時に除去できます。

#### プロファイルを Windows サービスとして実行する場合の IPv6 に関する考慮事項

Windows サービスとして実行するように作成されたプロファイルは、このサービスがローカル・システムとして実行するように構成されている場合、IPv6 の使用時には開始できません。ユーザー固有の環境変数を作成して、IPv6 を使用可能にします。この環境変数はローカル・システム変数ではなくユーザー変数であるため、その特定のユーザーで実行される Windows サービスのみが、この環境変数にアクセスできます。新規プロファイルが Windows サービスとして実行するように作成および構成されている場合、デフォルトでは、サービスはローカル・システムとして実行するように設定されます。WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Bus の Windows サービスによって実行が試みられる場合、このサービスは IPv6 が指定されているユーザー環境変数にアクセスできないため、IPv4 として開始を試みます。この場合、サーバーは正常に始動しません。この問題を解決するには、プロファイルの作成時に、WebSphere Process Server or WebSphere Enterprise Bus の Windows サービスが、ローカル・システムの代わりに IPv6 が指定されている環境変数を定義したユーザー ID と同じユーザー ID で実行されることを指定します。

「Web サーバー定義」パネルが表示されます。

8. **Linux** 「高度なプロファイル作成」の場合のみ: サーバーを Linux サービスとして実行するかどうかを選択して、「次へ」をクリックします。

「Linux サービスの定義」パネルは、現在のオペレーティング・システムがサポート対象バージョンの Linux であり、現在のユーザーに適切な権限がある場合にのみ表示されます。

WebSphere Process Server によって、**startServer** コマンドで開始されたサーバー・プロセス用の Linux サービスの開始が試みられます。例えば、サーバーを Linux サービスとして構成し、**startServer** コマンドを実行すると、**wasservice** コマンドは定義されたサービスの開始を試みます。

デフォルトでは、WebSphere Process Server は、Linux サービスとして実行するように選択されません。

このサービスを作成するためには、プロファイル管理ツールを実行するユーザーが root ユーザーでなければなりません。プロファイル管理ツールを root 以外のユーザー ID で実行している場合は、「Linux サービスの定義」パネルは表示されないため、サービスも作成されません。

サービスの実行に使用されるユーザー名を指定する必要があります。

Linux サービスを削除するためには、ユーザーが root ユーザーであるか、またはこのサービスを削除するための適切な特権を持っている必要があります。それ以外の場合は、root ユーザーがこのユーザーの代わりにサービスを削除するために実行できる除去スクリプトが作成されます。

「Web サーバー定義」パネルが表示されます。

9. 「詳細プロファイル作成」の場合のみ: Web サーバー定義をすぐにプロファイルに組み込む場合は、以下のステップを実行します。

**注:** i5/OS i5/OS では、プロファイル管理ツールを使用して Web サーバー定義を作成してはいけません。したがって、「Web サーバー定義」パネルでは、このオプションを有効にしないでください。IBM HTTP Server for iSeries の構成フォームと管理フォームを使用して、Web サーバー定義と HTTP サーバー・インスタンスを作成することが必要になります。これにより、HTTP サーバーからこの Web サーバー定義への関連付けも正しく行われます。詳しくは、WebSphere Application Server Network Deployment for i5/OS バージョン 6.1 インフォメーション・センターの『HTTP サーバー・インスタンスの構成』を参照してください。

- a. 「**Web サーバー定義を作成する**」チェック・ボックスを選択します。
- b. パネル上の Web サーバーの特性を指定して、「次へ」をクリックします。
- c. 「第 2 部」パネルの Web サーバーの特性を指定して、「次へ」をクリックします。

Web サーバーを使用して、要求を WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Bus に送信する場合は、Web サーバー定義を組み込む必要があります。定義をすぐに組み込むことも、後で Web サーバーを WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Bus に対して定義することもできます。このプロファイルの作成中に Web サーバー定義を定義する場合は、プロファイルの作成後に Web サーバーとそのプラグインをインストールすることができます。ただし、「Web サーバー定義」パネル上で指定したパスに対してこの両方をインストールする必要があります。このプロファイルの作成後に、Web サーバーを WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus に対して定義する場合は、Web サーバーを別のプロファイル内に定義する必要があります。

10. Business Process Choreographer サンプル構成を作成するかどうかを選択します。

**制約事項:** 実稼働環境でこのコンポーネントを使用するか、このスタンドアロン・サーバー・プロファイルをデプロイメント・マネージャーに統合する予定がある場合は、Business Process Choreographer サンプル構成を作成しないでください。サンプル構成は、開発専用です。実動の設定においてこのコンポーネントをセットアップする方法については、Business Process Choreographer の構成にあるトピックを参照してください。

サンプル構成を作成するには、「**サンプル Business Process Choreographer の構成**」チェック・ボックスを選択し、「次へ」をクリックします。

「ビジネス・スペース構成」パネルが表示されます。

11. 「ビジネス・スペース構成」パネルで、「**ビジネス・スペースの構成**」チェック・ボックスを選択し、WebSphere が提供するビジネス・スペースをセットアップします。これは、IBM Websphere Business Process Management ポートフォリオ横断でアプリケーション・ユーザーに対して統合されたユーザー・エクスペリエンスを提供します。次に「次へ」をクリックします。ビジネス・スペースを構成すると、このプロファイルで稼働しているアプリケーションのビジネス・ユーザー用に統合 GUI がセットアップされます。

**重要:** ビジネス・スペース は、次のデータベース製品でサポートされています。Derby Embedded、Derby Network Server、DB2 Universal、DB2 Universal Runtime Client、DB2 for i5/OS、DB2 for z/OS、Oracle 9i、Oracle 10g、および Oracle 11g。

WebSphere Process Server で使用するデータベースが、サポートされるビジネス・スペースと一致しない場合は、Derby Embedded データベースがビジネス・スペースの構成で選択されます。このプロファイルを 1 つのデプロイメント環境に後で統合することはできません。Derby Embedded はデプロイメント環境でサポートされていないためです。

「ビジネス・ルール・マネージャーの構成」パネルが表示されます。

12. ビジネス・ルール・マネージャーを構成してインストールするかどうか選択してから、「次へ」をクリックします。ビジネス・ルール・マネージャーは、ビジネス・アプリケーションの必要に合わせてビジネス・ルール・テンプレートをカスタマイズする Web アプリケーションです。

次のステップは、プロファイルを作成するのか拡張するのか、および複数のサーバーがシステム上で定義されているかどうかによって異なります。

実行内容	次のステップ
<ul style="list-style-type: none"> <li>プロファイルの作成</li> <li>プロファイルを拡張しており、システム上で複数のサーバーが定義されていません。</li> </ul>	<p>「データベースの構成」パネルが表示されます。ステップ 14 (355 ページ) に進んでください。</p>
<ul style="list-style-type: none"> <li>プロファイルを拡張しており、システム上で複数のサーバーが定義されています。</li> </ul>	<p>「Application Scheduler の構成」パネルが表示されます。ステップ 13 (355 ページ) に進んでください。</p>

13. プロファイルに複数のサーバーが定義されているときの「詳細プロファイル拡張」の場合: 「Application Scheduler の構成」パネルで、ドロップダウン・リストからノード上のサーバーの名前としてデフォルト値 server1 を受け入れて、「次へ」をクリックします。

「データベースの構成」パネルが表示されます。

14. 「データベース構成」パネルで、選択された WebSphere Process Server と WebSphere Enterprise Bus コンポーネント内の Common Event Infrastructure コンポーネントで使用されるデータベースと、共通データベースの両方を構成します。

詳細については、357 ページの『プロファイル管理ツールを使用した共通データベースおよび Common Event Infrastructure データベースの構成』のトピックを参照してください。「データベース構成」情報パネルと「データベース構成 (第 2 部)」パネルの各フィールドを入力したら、このステップに戻ります。

「プロファイルの要約」パネルが表示されます。

15. 「プロファイルの要約」パネルで、「作成」または「拡張」をクリックしてプロファイルを作成または拡張するか、あるいは「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。

プロファイルの作成または拡張が完了すると、「プロファイル完了 (Profile complete)」パネルに「プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に作成されました」または「プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に拡張されました」というメッセージが表示されます。

16. Common Event Infrastructure データベースと共通データベースを手動で構成する必要があるかどうかに応じて、以下のいずれかを実行し、スタンドアロン・サーバー・プロファイルの構成を完了します。

- プロファイル管理ツールを使用して Common Event Infrastructure および共通データベースの構成が完了した場合、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」、「別のプロファイルの作成 (Create another profile)」、またはその両方を選択します。終了するには、「終了」をクリックします。ファースト・ステップ・コンソールを使用して、サーバーを始動します。「別のプロファイルの作成 (Create another profile)」オプションを使用してプロファイル管理ツールを再始動し、追加のプロファイルを作成します。
- 手動で実行するスクリプトを生成して実際のデータベース構成を先送りする場合は、以下のステップを実行します。
  - a. ファースト・ステップ・コンソールを起動するチェック・ボックスをクリックし、「終了」をクリックしてプロファイル管理ツールを閉じます。
  - b. サイトの標準的なデータベース定義ツールおよび手順を使用して、プロファイル管理ツールにより生成されたスクリプトを編集および実行し、event、eventcat、および WPRCSDB の各データベース (システムで別の名前が設定されている場合はこれらに相当するデータベース) を作成するか、作成および構成します。これらのスクリプトの場所は、357 ページの『プロファイル管理ツールを使用した共通データベースおよび Common Event Infrastructure データベースの構成』トピックの 2 (358 ページ) のス

トップで指定しています。また、新規のデータベースまたは既存のデータベース内の新規テーブルを手動で作成することについて説明しているトピックも参照してください。

- Common Event Infrastructure データベース: 『イベント・データベースの構成』とそのサブトピック。
- 共通データベースの場合: 435 ページの『プロファイルの作成後または拡張後の共通データベースとテーブルの作成』または 436 ページの『プロファイルの作成後または拡張後の共通データベースでのテーブルの作成』。

データベースの構成時に、162 ページの『ファースト・ステップ・コンソールの開始』で説明されているように、プロファイルに関連付けられているファースト・ステップ・コンソールを開始します。

17. ご使用の環境で Business Process Choreographer コンポーネントを使用する予定がある場合、データベース管理者に Business Process Choreographer データベースの作成および構成を依頼する必要がある場合があります。

詳しくは、『Business Process Choreographer の構成』にある各トピックを参照してください。

## タスクの結果

以下のいずれかの作業が完了しました。

- WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus のプロファイルの作成。
- WebSphere Application Server、WebSphere Application Server Network Deployment、または WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルの WebSphere Process Server プロファイルへの拡張。
- WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment プロファイルの WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルへの拡張。

プロファイル内のノードが、server1 というサーバーを持つようになりました。

## 次のタスク

ファースト・ステップ・コンソールから「**サーバーの起動**」を選択してサーバーの作動をチェックします。出力ウィンドウが開きます。次のようなメッセージが表示される場合、サーバーは正常に作動しています。

```
ADMU3000I: サーバー server1 が e-ビジネス用にオープン。プロセス ID は 3348  
(Server server1 open for e-business; process id is 3348)
```

ファースト・ステップ・コンソールからインストール検査テスト (IVT) を実行するか、wbi\_ivt コマンドを実行することで、サーバーの動作を確認することもできます。このテストは、デプロイメント・マネージャーまたはスタンドアロン・サーバーのインストール環境が正常に動作していることが確認するものです。スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合はヘルス・モニター検査も実行され、レポートが生成されます。

## プロファイル管理ツールを使用した共通データベースおよび Common Event Infrastructure データベースの構成:

選択された WebSphere Process Server コンポーネントを操作するには、共通 データベースと Common Event Infrastructure ローカル・データベースというデータベースが必要になります。プロファイル管理ツールは、データベースの構成パネルで指定された値に基づき、これらのデータベースと必要なテーブルをローカル・システム上に自動的に作成します。インストール済み環境で実際に作業するには、これらのデータベースを構成する必要があります。

### 始める前に

**注:** i5/OS データベースへの参照では、データベース・コレクションが参照されます。

この手順では、プロファイル管理ツールをすでに開始しており、「高度なプロファイル作成」または「デプロイメント環境プロファイル作成」あるいは「高度なプロファイル拡張」または「デプロイメント環境プロファイル拡張」オプションによって、プロファイルの作成または拡張を選択済みであることを前提とします。以下のうちいずれか 1 つのトピックの手順を実行します。

- 347 ページの『カスタマイズした値を使用したスタンドアロン・サーバー・プロファイルの構成』
- 375 ページの『カスタマイズした値を使用したデプロイメント・マネージャー・プロファイルの構成』
- 405 ページの『デプロイメント環境用のデプロイメント・マネージャー・プロファイルの構成』

これは、トピックの中で、「データベース構成」パネルに入力することによって、共通データベースを構成する手順のステップです。

### このタスクについて

以下の WebSphere Process Server コンポーネントは、共通データベースを使用します。

- Application Scheduler
- ビジネス・ルール・グループ
- メディエーション
- リカバリー
- リレーションシップ・サービス
- セレクター
- イベント順序付け (ロック・マネージャー)
- Enterprise Service Bus ロガー・メディエーション・プリミティブ
- メッセージング・エンジン (5 (360 ページ) のステップで説明されている「メッセージング・エンジン (ME) ではこのデータベースを使用します。」チェック・ボックスを選択した場合)。

WebSphere Process Server 製品で使用される各種データベースとデータベース表について詳しくは、『データベースの選択』を参照してください。

**重要:** Derby Network Server をデータベース製品として選択する場合、データベース・ホストがローカルの場合でも、サーバーがプロファイルの作成または拡張時に指定したホストとポートで稼働していることを確認してください。プロファイルを作成または拡張した後のみ、サーバーが実行中であることを確認できます。

#### 手順

1. 「データベース製品の選択」フィールドで、使用するデータベース製品を選択するか、またはデフォルト値の Derby Embedded (スタンドアロン・サーバー・プロファイル用) または Derby Network Server (デプロイメント・マネージャー・プロファイル用) を受け入れます。

#### 制約事項:

- Informix Dynamic Server、Microsoft SQL Server Data Direct、および Microsoft SQL Server Embedded は、デプロイメント環境構成を使用したデプロイメント・マネージャー上ではサポートされません。
  - **i5/OS** DB2 UDB for iSeries (ネイティブ)、DB2for i5/OS (ネイティブ)、および Derby Embedded は、i5/OS で稼働するデータベースとしてローカルでのみ使用できます。Derby Network Server、DB2 UDB for iSeries (ツールボックス)、および DB2 for i5/OS (ツールボックス) は、ローカルおよびリモートのどちらでも i5/OS で使用できます。リストされたその他すべてのデータベースは、適切なリモート・データベース・ドライバが使用されている場合は、i5/OS 上でのみ、リモート・データベースとして使用できます。
2. プロファイル管理ツールによって作成されるデータベースの作成と構成スクリプトを「データベース・スクリプトの出力ディレクトリ」フィールド内のデフォルトの場所以外の場所に保管するには、「生成したスクリプト用の宛先ディレクトリのオーバーライド」チェック・ボックスを選択して、「データベース・スクリプトの出力ディレクトリ」フィールドに使用する新規の場所を指定します。CommonDB スクリプトも Common Event Infrastructure スクリプトも、デフォルトのルート・ディレクトリは `<WPS home>/profiles/<profile name>/dbscripts/` です。

以下に例を示します。

Common Event Infrastructure: `<WPS home>/profiles/<profile name>/dbscripts/CEI_<ceiDbName>`

CommonDB: `<WPS home>/profiles/<profile name>/dbscripts/CommonDB/<dbType>/<dbName>`

プロファイル管理ツールに、プロファイルの作成または拡張を自動的に実行させないことを選択した場合、プロファイルの作成または拡張のプロセスによって、ユーザーまたはデータベース管理者が新規のデータベースとそれに必要なテーブルを作成するために手動で実行できるスクリプトが生成されます。(ステップ 4 (359 ページ) で説明しているように、このパネル内の「データベース・スクリプトの実行を遅延 (リモート・データベースを使用する場合は選択する必要があります)」チェック・ボックスを選択して、このデータベースの自動作成と自動構成を実行しないようにします。)

3. データベース名を入力するか、またはデフォルト値を受け入れます。

**i5/OS** **i5/OS プラットフォームの場合:** 独立補助ストレージ・プール (IASP: Independent Auxiliary Storage Pool) を使用する i5/OS 上のデータベースの名前は、IASP という名前である可能性があります。

デフォルトの共通データベース名は、データベース製品に基づいて以下のように異なります。

- **i5/OS** \*LOCAL: DB2 UDB for iSeries (ネイティブ) および DB2 for i5/OS (ネイティブ) の場合。
- **i5/OS** \*SYSBAS: DB2 UDB for iSeries (ツールボックス) および DB2 for i5/OS (ツールボックス) の場合。
- WPRCSDB 他のすべてのデータベース製品用

デフォルトの Common Event Infrastructure データベース名は、データベース製品に基づいて以下のように異なります。

- **i5/OS** \*LOCAL: DB2 UDB for iSeries (ネイティブ) および DB2 for i5/OS (ネイティブ) の場合。
- **i5/OS** \*SYSBAS: DB2 UDB for iSeries (ツールボックス) および DB2 for i5/OS (ツールボックス) の場合。
- EVENT: 他のすべてのデータベース製品用。

既存のデータベースを使用する場合は、この名前がそのデータベースの名前と一致していなければなりません。新規データベースを作成する場合、指定した名前が既に別の WebSphere Process Server プロファイルに関連付けられていた場合は、異なるデータベース名を使用する必要があります。

**注:** **i5/OS** これは i5/OS には適用されません。i5/OS 上のすべてのプロファイルで同じデータベース名が使用されます。

**注:** 注: 実際の Oracle データベース名 (dbName) は Oracle ID (SID) です。テーブルを作成する際は、このデータベース名が存在する必要があります。このデータベース名は、共通データベースと Common Event Infrastructure データベース間で共用することができます。新規プロファイルを作成する前に、すべての Oracle データベース・リソースを削除することをお勧めします。これは、Common Event Infrastructure データベースによってテーブル・スペースなどの固有のデータベース・リソースが作成されるため、そのデータベース・リソースが Oracle サーバーに既に存在する場合に障害が発生してしまうためです。

4. プロファイル管理ツールによって自動的にローカル・データベースが作成および構成されることも、プロファイルの作成または拡張時に既存のローカル・データベースに表が作成されることも望まない場合は、「**データベース・スクリプトの実行を遅延 (リモート・データベースを使用する場合は選択する必要がある)**」チェック・ボックスを選択します。このチェック・ボックスを選択しなかった場合は、ローカル・データベースが作成されます。このオプションを選択した場合は、ユーザーまたはデータベース管理者は、このパネル上の「**データベース・スクリプトの出力ディレクトリー**」フィールドで指定された場所にプロファイル管理ツールによって作成および保管されるスクリプトを手動で実行する必要があります。新規の共通データベースの手動での作成および構成、または既存のデー

データベース内でのテーブルの作成についての説明は、435 ページの『プロファイルの作成後または拡張後の共通データベースとテーブルの作成』または 436 ページの『プロファイルの作成後または拡張後の共通データベースでのテーブルの作成』を参照してください。

**重要:** 以下のディレクトリーにあるスクリプトは使用しないでください (変数の `db_type` は、サポートされるデータベース製品を表します)。

- Linux UNIX `install_root/dbscripts/CommonDB/db_type`
- Windows `install_root¥dbscripts¥CommonDB¥db_type`

これらは、プロファイル管理ツールによって更新されていないデフォルトのスクリプトです。

**制約事項:** 以下の構成の場合、「データベース・スクリプトの実行を遅延 (リモート・データベースを使用する場合は選択する必要がある)」オプションは選択できません。

- Derby Embedded または Derby Network Server 製品を選択した場合。
- Network Deployment 環境の場合。

次のステップは、スタンドアロン・サーバー・プロファイルを作成または拡張する場合とデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成または拡張する場合とで異なります。

作成または拡張するプロファイルのタイプ	次のステップ
スタンドアロン・サーバー	ステップ 5 に進んでください。
デプロイメント・マネージャー	ステップ 7 (361 ページ) に進んでください。

5. **スタンドアロン・サーバー・プロファイル場合のみ:** メッセージング・エンジンでファイル・ストアを使用するには、「メッセージング・エンジン (ME) ではファイル・ストアを使用します。 (Use a file store for Messaging Engines (MEs))」チェック・ボックスを選択します。このチェック・ボックスを選択すると、メッセージング・エンジンがファイル・ストア上に作成および構成されます (Common Event Infrastructure のメッセージング・エンジンを除きます。このメッセージング・エンジンでは、このオプションを選択しても、Derby Embedded のローカル・データベースが使用されます)。このチェック・ボックスを選択せず、6 のステップで説明されている「メッセージング・エンジン (ME) ではこのデータベースを使用します。」チェック・ボックスも選択しない場合は、メッセージング・エンジンは、デフォルトの Derby Embedded データベース上に作成および構成されます。Derby Embedded データベースは、リモート・ワークステーション上に作成することはできません。ファイル・ストアについて詳しくは、WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 6.1 のインフォメーション・センターにある『ファイル・ストア』を参照してください。
6. **スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合:** 「メッセージング・エンジン (ME) ではこのデータベースを使用します」チェック・ボックスを選択して、メッセージング・エンジンで共通データベースを使用します。このチェック・ボックスを選択せず、5 のステップで説明されている「メッセージング・エンジン (ME) ではファイル・ストアを使用します。 (Use a file store for

**Messaging Engines (MEs))** チェック・ボックスも選択しない場合は、メッセージング・エンジンは、デフォルトの Derby Embedded データベース上に作成および構成されます。 Derby Embedded データベースは、リモート・ワークステーション上に作成することはできません。データ・ストアについては、WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 6.1 のインフォメーション・センターにある『データ・ストア』を参照してください。

**制約事項:** このオプションは、Derby Embedded 製品を選んだ場合は選択できません。

7. 「次へ」をクリックします。 次のステップは、作成または拡張するプロファイルのタイプ、および選択したデータベース製品によって異なります。

作成または拡張するプロファイルのタイプ	次のステップ
Derby Embedded のデフォルト値を選択済みのスタンドアロン・サーバー・プロファイル。	「プロファイルの要約」パネルが表示されます。 347 ページの『カスタマイズした値を使用したスタンドアロン・サーバー・プロファイルの構成』のステップ 15 (355 ページ) に戻ります。
<p>選択済みの Derby Embedded 以外のデータベース製品のスタンドアロン・サーバー・プロファイル。</p> <p>選択したデータベース製品のデプロイメント・マネージャー・プロファイル。</p>	<p>「データベース構成 (第 2 部)」パネルが、選択したデータベース製品に固有のフィールドを伴って表示されます。 このパネルでの入力方法については、『共通データベース構成のための「データベース構成 (第 2 部)」パネル』のトピックを参照してください。 このパネルの情報入力が完了したら、「次へ」をクリックします。 ツールにより、有効なデータベース接続が存在することが確認されます。 データベース接続が存在していない場合は、続行する前に、データベースを始動するか、指定したパラメーターを変更して、この問題を修正する必要があります。「プロファイルの要約」パネルが表示されます。 このパネルへのアクセス元のトピックに応じて、以下のいずれかの手順に戻ります。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 347 ページの『カスタマイズした値を使用したスタンドアロン・サーバー・プロファイルの構成』トピックのステップ 15 (355 ページ)</li> <li>• 375 ページの『カスタマイズした値を使用したデプロイメント・マネージャー・プロファイルの構成』トピックのステップ 10 (380 ページ)</li> <li>• 405 ページの『デプロイメント環境用のデプロイメント・マネージャー・プロファイルの構成』トピックのステップ 9 (411 ページ)</li> </ul>

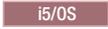
**共通データベース構成のための「データベース構成 (第 2 部)」パネル:**

プロファイル管理ツールの「データベースの構成」パネルでデータベース製品を選択すると、後続のパネルにより、データベース固有の情報を入力するよう求められます。このパネル (スタンドアロン・サーバー・プロファイルの構成時に Derby Embedded を選択した場合は表示されません) は、「**データベース構成 (第 2 部) パネル**」と呼ばれます。このパネルのフィールドやデフォルト値は、選択したデータベース製品に応じて若干異なります。

「**データベース構成 (第 2 部) パネル**」で、「**データベース・スクリプトの実行を遅延**」チェック・ボックスを選択して、新規データベースの作成または既存のデータベースへのテーブルの追加を先送りすることを選択する場合でも、このパネルの入力を行う必要があります。このパネルで選択する値は、プロファイル管理ツールにより作成され、前のパネルの「**データベース・スクリプトの出力ディレクトリー**」フィールドで指定したディレクトリーに保管されるデータベース構成スクリプトに追加されます。

**制約事項:** DB2 for z/OS V8 または V9、Oracle 9i、Oracle 10g、または 11g を使用する場合は、新規データベースを作成できません。このいずれかのデータベースを選択する場合に「**新規ローカル・データベースを作成する**」オプションを選択すると、「**次へ**」ボタンは使用不可になります。「データベース構成」パネルで、別の選択を行ってください。

「データベースの構成 (第 2 部) パネル」に入力する方法を調べるには、ご使用のデータベース製品へのリンクを以下のリストから選択します。

- 363 ページの『Derby Network Server』
- 363 ページの『DB2 Universal Database』
- 364 ページの『DB2 for z/OS V8 および V9』
- 365 ページの『DB2 UDB for iSeries (ツールボックス)』
-  365 ページの『DB2 UDB for iSeries (ネイティブ)』
- 366 ページの『DB2 Universal Runtime Client』
- 367 ページの『Informix Dynamic Server』
- 367 ページの『Microsoft SQL Server Embedded』
- 368 ページの『Microsoft SQL Server Data Direct』
- 369 ページの『Oracle 9i』
- 370 ページの『Oracle 10g または 11g』

**重要:** スタンドアロン・サーバー・プロファイルを作成または拡張していて、Derby Embedded データベース製品を選択した場合、追加のデータベース構成は必要ありません。

「データベース構成 (第 2 部) パネル」の入力が完了したら、「**次へ**」をクリックします。ツールにより、有効なデータベース接続が存在することが確認されます。ツールでエラーが検出される場合は、データベースが稼働中であることを確認するか、接続を正常にするためにパラメーターを変更して、問題を訂正してから続行する必要があります。

「プロファイルの要約」パネルが表示されます。このパネルへのアクセス元のトピックに応じて、以下のいずれかの手順に戻ります。

- 347 ページの『カスタマイズした値を使用したスタンドアロン・サーバー・プロファイルの構成』トピックのステップ 15 (355 ページ)
- 375 ページの『カスタマイズした値を使用したデプロイメント・マネージャー・プロファイルの構成』トピックのステップ 10 (380 ページ)
- 405 ページの『デプロイメント環境用のデプロイメント・マネージャー・プロファイルの構成』トピックのステップ 9 (411 ページ)

## Derby Network Server

表 104 に、Derby Network Server をデータベース製品として選択する場合、「データベースの構成 (第 2 部)」パネルで入力しておく必要があるフィールドを示します。

**重要:** データベース製品として Derby Network Server を選択する場合は、プロファイルの作成または拡張が完了した後、データベース・ホストがローカルの場合でも、サーバーが必ずプロファイルの作成中に指定したホストおよびポート上で実行するようにしてください。

表 104. Derby Network Server の必須の共通データベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベースで認証するユーザー名	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
サーバー・ポート	デフォルト値 1527 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。

## DB2 Universal Database

表 105 に、DB2 Universal Database をデータベース製品として選択する場合に「データベース構成 (第 2 部)」パネルで入力しておく必要があるフィールドを示します。

表 105. DB2 Universal Database の場合の必須の共通データベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベースで認証するユーザー名	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。

表 105. DB2 Universal Database の場合の必須の共通データベース構成フィールド (続き)

フィールド	必要なアクション
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)	<p>デフォルト値 (Linux、UNIX、または i5/OS プラットフォームの場合は <code>install_root/universalDriver_wbi/lib</code>、Windows プラットフォームの場合は <code>install_root%universalDriver_wbi%lib</code>) を受け入れるか、またはシステム上で次のファイルが置かれている場所までブラウズします。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <code>db2jcc.jar</code></li> <li>• <code>db2jcc_license_cu.jar</code> または <code>db2jcc_license_cisuz.jar</code></li> </ul> <p>指定されたロケーションでファイルが見つからない場合は、エラー・メッセージが表示されます。</p>
JDBC ドライバー・タイプ	<p>デフォルト値 4 をそのまま確定するか、正しい JDBC ドライバー・タイプの横にあるラジオ・ボタンを選択します。</p>
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	<p>デフォルト値 <code>localhost</code> をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。</p>
サーバー・ポート	<p>デフォルト値 <code>50000</code> をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。</p>

## DB2 for z/OS V8 および V9

表 106 に、DB2 for z/OS V8 および V9 をデータベース製品として選択する場合に「データベース構成 (その 2)」パネルで入力しておく必要があるフィールドを示します。

表 106. DB2 for z/OS V8 および V9 の場合の必須の共通データベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベースで認証するユーザー名	<p>データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。</p>
データベース認証用のパスワード	<p>データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</p>
パスワードの確認	<p>パスワードを確認します。</p>
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)	<p>以下のファイルが格納されているシステム上の場所を入力します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <code>db2jcc.jar</code></li> <li>• <code>db2jcc_license_cisuz.jar</code></li> </ul> <p>指定されたロケーションでファイルが見つからない場合は、エラー・メッセージが表示されます。</p>
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	<p>データベース・サーバーのホスト名を入力してください。</p>

表 106. DB2 for z/OS V8 および V9 の場合の必須の共通データベース構成フィールド (続き)

フィールド	必要なアクション
サーバー・ポート	デフォルト値 446 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。
データベースの別名	データベースの別名を入力してください。
接続のロケーション	接続のロケーションを入力してください。
ストレージ・グループ名	ストレージ・グループ名を入力してください。

### DB2 UDB for iSeries (ツールボックス)

表 107 に、DB2 UDB for iSeries (ツールボックス) をデータベース製品として選択する場合に「データベース構成 (第 2 部)」パネルで入力する必要があるフィールドを示します。この選択は、DB2 for i5/OS (ツールボックス) の場合にも有効です。

表 107. DB2 UDB for iSeries (ツールボックス) または DB2 for i5/OS (ツールボックス) の必須共通データベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベースで認証するユーザー名	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)	デフォルト値 /QIBM/ProdData/HTTP/Public/jt400/lib (i5/OS プラットフォームの場合) を確定するか、またはシステム上で次のファイルが置かれている場所までブラウズします。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• jt400.jar</li> </ul> 指定されたロケーションでファイルが見つからない場合は、エラー・メッセージが表示されます。
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	データベース・サーバーのホスト名を入力してください。
データベース・コレクション名	デフォルト値 WPRCSDB をそのまま確定するか、正しいスキーマ名を入力します。指定したデータベース内で命名の競合を防止するために、スキーマ名を指定するときは、その先頭の 3 文字がデータベース内のその他のスキーマ名と重複しないようにしてください。

### DB2 UDB for iSeries (ネイティブ)

注: **i5/OS** i5/OS プラットフォーム: このデータベース構成は、i5/OS プラットフォームにのみ適用されます。

表 108 に、DB2 UDB for iSeries (ネイティブ) をデータベース製品として選択する場合に「データベース構成 (第 2 部)」パネルで入力する必要があるフィールドを示します。この選択は、DB2 for i5/OS (ネイティブ) の場合にも有効です。

表 108. DB2 UDB for iSeries (ネイティブ) または DB2 for i5/OS (ネイティブ) の必須共通データベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベースで認証するユーザー名	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)	デフォルト値 /QIBM/ProdData/Java400/ext (i5/OS プラットフォームの場合) を確定するか、またはシステム上で次のファイルが置かれている場所までブラウズします。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• db2_classes.jar</li> </ul> 指定されたロケーションでファイルが見つからない場合は、エラー・メッセージが表示されます。
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	データベース・サーバーのホスト名を入力してください。
データベース・コレクション名	デフォルト値 WPRCSDB をそのまま確定するか、正しいスキーマ名を入力します。指定したデータベース内で命名の競合を防止するために、スキーマ名を指定するときは、その先頭の 3 文字がデータベース内のその他のスキーマ名と重複しないようにしてください。

## DB2 Universal Runtime Client

表 109 に、DB2 Universal Runtime Client をデータベース製品として選択する場合に「データベース構成 (その 2)」パネルで入力しておく必要があるフィールドを示します。

表 109. DB2 Universal Runtime Client の場合の必須の共通データベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベースで認証するユーザー名	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)	db2java.zip ファイルが格納されているシステム上の場所を入力します。指定されたロケーションでファイルが見つからない場合は、エラー・メッセージが表示されます。
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	データベース・サーバーのホスト名を入力してください。

表 109. DB2 Universal Runtime Client の場合の必須の共通データベース構成フィールド (続き)

フィールド	必要なアクション
サーバー・ポート	デフォルト値 50000 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。
DB2 ノード名 (8 文字以下)	DB2 ノード名を入力してください。

### Informix Dynamic Server

表 110 に、Informix Dynamic Server をデータベース製品として選択する場合に「データベース構成 (その 2)」パネルで入力しておく必要があるフィールドを示します。

表 110. Informix Dynamic Server の場合の必須の共通データベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベースで認証するユーザー名	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)	以下のファイルが格納されているシステム上の場所を入力します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• ifxjdbc.jar</li> <li>• ifxjdbcx.jar</li> </ul> 指定されたロケーションでファイルが見つからない場合は、エラー・メッセージが表示されます。
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
データベース・サーバー名	データベース・サーバー名を入力してください。
サーバー・ポート	デフォルト値 1526 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。
イベント・サービスのインスタンス名	正しいイベント・サービスのインスタンス名を入力してください。

### Microsoft SQL Server Embedded

368 ページの表 111 に、Microsoft SQL Server Embedded をデータベース製品として選択する場合に「データベース構成 (第 2 部)」パネルで入力しておく必要があるフィールドを示します。

注: Microsoft SQL Server (Embedded) - Microsoft SQL Server 用の WebSphere Connect JDBC ドライバー (Data Directより) は、リリース 6.2 から非推奨になりました。次のリリースの新しい Microsoft SQL Server JDBC ドライバー、または

WebSphere Process Server および WebSphere Enterprise Service Bus のフィックスパックによって置き換えられます。

表 111. Microsoft SQL Server Embedded の場合の必須の共通データベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベースで認証するユーザー名	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
データベース・サーバー名	データベース・サーバー名を入力してください。
サーバー・ポート	デフォルト値 1433 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。
管理ユーザー名	データベースおよびユーザーの作成および除去の特権を持つユーザー ID を入力するか、デフォルト値「sa」を受け入れます。この ID は、前の画面で「データベース・スクリプトの実行の遅延」オプションを選択していない場合に必要になります。
パスワード	「管理ユーザー名」 ID ユーザーのパスワードを入力します。
パスワードの確認	パスワードを確認します。

### Microsoft SQL Server Data Direct

表 112 に、Microsoft SQL Server Data Direct をデータベース製品として選択する場合に「データベース構成 (第 2 部)」パネルで入力しておく必要があるフィールドを示します。

表 112. Microsoft SQL Server Data Direct の場合の必須の共通データベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベースで認証するユーザー名	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。

表 112. Microsoft SQL Server Data Direct の場合の必須の共通データベース構成フィールド (続き)

フィールド	必要なアクション
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)	<p>以下のファイルが格納されているシステム上の場所を入力します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• sqlserver.jar</li> <li>• base.jar</li> <li>• util.jar</li> </ul> <p>また、ファイル spy.jar が、JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーションに対する次の相対ロケーションで使用可能である必要があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>Linux</b> <b>UNIX</b> ../spy/spy.jar</li> <li>• <b>Windows</b> ..\spy\spy.jar</li> </ul> <p>指定されたロケーションでファイルが見つからない場合は、エラー・メッセージが表示されます。</p>
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
データベース・サーバー名	データベース・サーバー名を入力してください。
サーバー・ポート	デフォルト値 1433 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。

## Oracle 9i

表 113 に、Oracle 9i をデータベース製品として選択する場合、「データベースの構成 (第 2 部)」パネルで入力しておく必要があるフィールドを示します。

表 113. Oracle 9i の必須の共通データベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベース・サーバーのインストール・ディレクトリー	データベース・サーバーのインストール先を入力するか、または参照します。前の画面で、「データベース・スクリプトの実行の遅延」オプションを選択した場合に必要になります。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)	ファイル ojdbc14.jar が格納されているシステム上の場所を入力します。指定されたロケーションでファイルが見つからない場合は、エラー・メッセージが表示されます。
JDBC ドライバー・タイプ	<b>OCI</b> または <b>Thin</b> をクリックします。

表 113. Oracle 9i の必須の共通データベース構成フィールド (続き)

フィールド	必要なアクション
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
サーバー・ポート	デフォルト値 1521 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。
管理ユーザー名	データベースおよびユーザーの作成および除去の特権を持つユーザー ID を入力します。前の画面で、「データベース・スクリプトの実行の遅延」オプションを選択していない場合に必要になります。
パスワード	「管理ユーザー名」 ID ユーザーのパスワードを入力します。
パスワードの確認	パスワードを確認します。

### Oracle 10g または 11g

表 114に、Oracle 10g または 11g をデータベース製品として選択する場合、「データベースの構成 (第 2 部)」パネルで入力しておく必要があるフィールドを示します。

**重要:** Oracle 11g では、プロファイルを作成する前に、SYSDBA 特権のあるユーザー ID を取得している必要があります。

表 114. Oracle 10g または 11g の必須の共通データベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベース・サーバーのインストール・ディレクトリー	データベース・サーバーのインストール先を入力するか、または参照します。前の画面で、「データベース・スクリプトの実行の遅延」オプションを選択した場合に必要になります。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)	ファイル ojdbc14.jar が格納されているシステム上の場所を入力します。指定されたロケーションでファイルが見つからない場合は、エラー・メッセージが表示されます。
JDBC ドライバー・タイプ	<b>OCI</b> または <b>Thin</b> をクリックします。
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
サーバー・ポート	デフォルト値 1521 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。

表 114. Oracle 10g または 11g の必須の共通データベース構成フィールド (続き)

フィールド	必要なアクション
管理ユーザー名	データベースおよびユーザーの作成および除去の特権を持つユーザー ID を入力します。前の画面で、「データベース・スクリプトの実行の遅延」オプションを選択していない場合に必要になります。
パスワード	「管理ユーザー名」 ID ユーザーのパスワードを入力します。
パスワードの確認	パスワードを確認します。

### スタンドアロン・サーバー・プロファイルのデプロイメント・マネージャーへの統合:

**addNode** コマンドを使用して、スタンドアロン・サーバー・プロファイルをデプロイメント・マネージャー・セルに統合する方法を学習します。統合の後に、ノード・プロセス・エージェント・プロセスが作成されます。このノード・エージェントおよびサーバー・プロセスの両方とも、デプロイメント・マネージャーにより管理されます。スタンドアロン・サーバー・プロファイルを統合し、サーバー・アプリケーションをすべて組み込むと、統合動作によりデプロイメント・マネージャーにアプリケーションがインストールされます。スタンドアロン・サーバー・プロファイルは、他に統合されたプロファイルがない場合にのみ統合できます。

#### 始める前に

以下の前提条件が満たされていることを確認します。

- WebSphere Process Server がインストール済みであり、WebSphere Process Server デプロイメント・マネージャーが作成済みである。
- スタンドアロン・サーバー・プロファイルが WebSphere Process Server プロファイルである。
- スタンドアロン・サーバー・プロファイルが、メッセージング・エンジン用にファイル・ストアも Derby Embedded データ・ストアも使用していない。プロファイル管理ツールで「標準的」オプションを使用してプロファイルを作成した場合、プロファイルはこれらのオプションを使用します。このプロファイルをデプロイメント・マネージャーに統合することはできません。
- スタンドアロン・サーバーが、リモート・アクセスをサポートするデータベース・ドライバー (Derby Network または Java toolbox JDBC など) を使用している。
- デプロイメント・マネージャーが稼働している。稼働していない場合は、ファースト・ステップ・コンソールから「**デプロイメント・マネージャーの始動**」を選択するか、または以下のコマンドを入力してデプロイメント・マネージャーを始動します。ここで、*profile\_root* はデプロイメント・マネージャー・プロファイルのインストール場所を表します。

```
- i5/OS profile_root/bin/startManager
- Linux UNIX profile_root/bin/startManager.sh
```

- **Windows** `profile_root%bin%startManager.bat`
- スタンドアロン・サーバーが実行されていません。実行されている場合は、ファースト・ステップ・コンソールから「**サーバーの停止**」を選択するか、または以下のコマンドを入力してそのサーバーを停止します。ここで、`profile_root` はスタンドアロン・サーバー・プロファイルのインストール場所を表します (i5/OS プラットフォームの場合、デフォルトで `/QIBM/UserData/WebSphere/ProcServer`)。
  - **i5/OS** `profile_root/bin/stopServer`
  - **Linux** **UNIX** `profile_root/bin/stopServer.sh`
  - **Windows** `profile_root%bin%stopServer.bat`
- デプロイメント・マネージャーが、WebSphere Process Server デプロイメント・マネージャーに拡張されている。WebSphere Process Server プロファイルは WebSphere Enterprise Service Bus デプロイメント・マネージャーを使用できませんが、WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルは WebSphere Process Server デプロイメント・マネージャーを使用できます。
- デプロイメント・マネージャーのリリース・レベルが、作成または拡張されたカスタム・プロファイルと同じか、それより高い。
- デプロイメント・マネージャーで、JMX 管理ポートが有効になっている。デフォルト・プロトコルは SOAP です。
- デプロイメント・マネージャーにほかのノードが統合されていません。

**重要:** 以下の項目のいずれかに該当する場合は、この時点ではスタンドアロン・サーバー・プロファイルを統合しないでください。

- デプロイメント・マネージャーが稼働していないか、実行しているかどうか不明。
- スタンドアロン・サーバーが実行中、またはそれが停止されているかどうか不明。
- スタンドアロン・サーバーが、リモート・アクセスをサポートするデータベース・ドライバー (Derby Network または Java toolbox JDBC など) を使用しない。
- そのデプロイメント・マネージャーは、まだ WebSphere Process Server デプロイメント・マネージャーに拡張されていない。 WebSphere Process Server プロファイルは WebSphere Enterprise Service Bus デプロイメント・マネージャーを使用できませんが、WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルは WebSphere Process Server デプロイメント・マネージャーを使用できます。
- デプロイメント・マネージャーのリリース・レベルが、作成または拡張されたスタンドアロン・サーバー・プロファイルと同じか、それより高くない。
- デプロイメント・マネージャーで、JMX 管理ポートが有効になっていない。
- デプロイメント・マネージャーが、デフォルトではないリモート・メソッド呼び出し (RMI) を優先 Java Management Extensions (JMX) コネクタとして使用するよう再構成されている。(優先コネクタ・タイプを確認するには、デプロイメント・マネージャーの管理コンソールで「システム管理」>「デプロイメント・マネージャー」>「管理サービス」を選択します。)
- 別のノードが既にデプロイメント・マネージャーに統合されている。

デプロイメント・マネージャーが実行されていないとき、または他の理由で使用できないときにスタンドアロン・サーバー・プロファイルを統合すると、プロファイルの統合に失敗し、そのプロファイルが使用不可になります。そのため、同じプロファイル名で別のプロファイルを作成する前に、このスタンドアロン・サーバー・プロファイル・ディレクトリーをプロファイル・リポジトリーの外に移動させる必要があります。

### このタスクについて

このタスクを実行する必要があるのは、既存のスタンドアロン・サーバー・プロファイルがあり、Network Deployment が提供する機能 (中央管理またはクラスタリング) をそのサーバーに追加する必要がある場合です。この機能は、既存のスタンドアロン・サーバー・プロファイルに拡張のパスを提供します。ただし、このデプロイメント環境を使用する場合、単一のクラスタ構成に制限されます。単一のクラスタ・パターンの説明については、『デプロイメント環境パターン』を参照してください。

このタスクは、各セルごとに 1 回、そのセルに統合された最初のプロファイルに対してのみ実行します。統合されたノードがそのセルに既にある場合は、このタスクを実行しないでください。既存のスタンドアロン・サーバー・プロファイルがない環境を作成する場合は、カスタム・プロファイルを使用して環境を作成します。カスタム・プロファイルの作成について詳しくは、239 ページの『プロファイルの作成』を参照してください。

**addNode** コマンドを使用し、以下の手順を実行してスタンドアロン・サーバー・プロファイルのノードをデプロイメント・マネージャー・セルに統合します。

### 手順

1. 統合するスタンドアロン・サーバー・プロファイルの `bin` ディレクトリーに移動します。 コマンド・ウィンドウを開き、プラットフォームに応じて以下のいずれかのディレクトリーに移動します。ここで、`profile_root` は、スタンドアロン・サーバー・プロファイルのインストール・ロケーションを表します。i5/OS プラットフォームでのデフォルト・ディレクトリーは `/QIBM/UserData/WebSphere/ProcServer` です。

- `i5/OS` `profile_root/bin/`
- `Linux` `UNIX` `profile_root/bin`
- `Windows` `profile_root\bin`

2. **addNode** コマンドを実行します。

セキュリティーが無効である場合は、以下のいずれかのコマンドを発行します。ポート・パラメーターはオプションで、デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成時にデフォルト・ポート番号を使用した場合は省略できます。

- `i5/OS` `addNode deployment_manager_host deployment_manager_SOAP_port -includeapps -includebuses`
- `Linux` `UNIX` `./addNode.sh deployment_manager_host deployment_manager_SOAP_port -includeapps -includebuses`
- `Windows` `addNode.bat deployment_manager_host deployment_manager_SOAP_port -includeapps -includebuses`

セキュリティーが有効である場合は、以下のいずれかのコマンドを発行します。

- `i5/OS` `addNode deployment_manager_host deployment_manager_SOAP_port -username userID_for_authentication -password password_for_authentication -localusername localuserID_for_authentication -localpassword localpassword_for_authentication -includeapps -includebuses`
- `Linux` `UNIX` `./addNode.sh deployment_manager_host deployment_manager_SOAP_port -username userID_for_authentication -password password_for_authentication -localusername localuserID_for_authentication -localpassword localpassword_for_authentication -includeapps -includebuses`
- `Windows` `addNode.bat deployment_manager_host deployment_manager_SOAP_port -username userID_for_authentication -password password_for_authentication -localusername localuserID_for_authentication -localpassword localpassword_for_authentication -includeapps -includebuses`

出力ウィンドウが開きます。次のようなメッセージが表示されたら、スタンドアロン・サーバー・プロファイルの統合は成功しています。

```
ADMU0003I: ノード DMNDID2Node02 は正常に統合されました。  
(Node DMNDID2Node02 has been successfully federated.)
```

## タスクの結果

スタンドアロン・サーバー・プロファイルはデプロイメント・マネージャーに統合されました。 **addNode** コマンドおよびそのパラメーターについては、WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 6.1.x のインフォメーション・センターにあるトピック『addNode コマンド』を参照してください。

## カスタマイズした値を使用したデプロイメント・マネージャー・プロファイルの構成

デプロイメント・マネージャーの構成中に、ポート、ノード、およびプロファイルに独自の設定を指定しなければならない場合があります。このトピックでは、プロファイル管理ツールを使用して、カスタマイズした構成設定で WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus のデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成および構成する方法について説明します。

### 始める前に

**注:** このトピックでは、プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成または拡張し、240 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの作成』または 278 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの拡張』のいずれかの手順に従うことを前提としています。すなわち、プロファイル管理ツールをすでに開始しており、デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成または拡張を選択し、**高度な**プロファイル作成または拡張オプションを選択しているということです。

### このタスクについて

このタイプの構成では、ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セルの名前などの設定に独自の値を指定することができます。オプションで、管理コンソールをデプロイするかどうか、または管理セキュリティを使用可能にするかどうかを選択できます。ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権で許可される場合は、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成することができます。また、独自の構成値を共通データベースに指定することもできます。

278 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの拡張』または、240 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの作成』の以下の手順に従うと、「管理セキュリティ」パネル、「データベース構成」パネル、「オプションのアプリケーション・デプロイメント」パネルのいずれかが表示されます。以下の手順を実行して、新規デプロイメント・マネージャー・プロファイルをカスタマイズした構成値で構成します。

### 手順

1. プロファイル管理ツールに表示されるパネルは、プロファイルを作成するのか拡張するのによって異なり、また拡張する場合はプロファイルで管理セキュリティが有効になっているかどうかによって異なります。

タスク	次のステップ
「高度なプロファイル拡張」を実行中で、拡張中のプロファイルで管理セキュリティが有効になっている場合。	「管理セキュリティ」パネルが表示されません。ステップ 5 (377 ページ) に進んでください。
「詳細プロファイル拡張」を実行中で、拡張中のプロファイルで管理セキュリティが無効になっている場合。	「データベースの構成」パネルが表示されません。ステップ 9 (380 ページ) に進んでください。
高度なプロファイル作成	「オプションのアプリケーション・デプロイメント」パネルが表示されます。ステップ 2 に進んでください。

- 「オプションのアプリケーション・デプロイメント」パネルで、作成するプロファイル環境に対して管理コンソールをデプロイするかどうかを選択した後、「次へ」をクリックします。

管理コンソールとは、サーバーを管理するための Web ベースのツールです。管理コンソールのデプロイを選択するには、「**管理コンソールのデプロイ (推奨)**」チェック・ボックスが選択されたままにしておきます。選択解除するには、チェック・ボックスのチェックを外します。

「プロファイル名およびロケーション」パネルが表示されます。

- 「プロファイル名およびロケーション」パネルで、以下のステップを実行します。
  - プロファイルに固有の名前とディレクトリー・パスを指定するか、またはデフォルト値を受け入れます。

作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。デフォルト名を使用しないことを選択した場合は、ディレクトリー名の長さ制限などのプロファイルの命名時に考慮する必要がある問題について、633 ページの『プロファイル、ノード、ホスト、およびセルの命名の考慮事項』を参照してください。

指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトでは、このディレクトリーは以下のロケーションにあります。

- `i5/OS` `user_data_root/profiles/profile_name`
- `Linux` `UNIX` `install_root/profiles/profile_name`
- `Windows` `install_root\profiles\profile_name`

ここで、`profile_name` は指定した名前です。以下の場合、エラー・メッセージが表示されます。

- 指定した `profile_name` が固有ではない。
- 指定したディレクトリーが空ではない。
- 使用しているユーザー ID に、このディレクトリーに対する十分な権限がない。
- プロファイルを作成するための十分なスペースがない。

- b. 「デフォルトにするプロファイル」チェック・ボックスを選択して、作成するプロファイルをデフォルト・プロファイルにする (コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようにする) こともできます。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

マシンで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。

デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの bin ディレクトリから実行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。マシン上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。詳しくは、651 ページの『複数プロファイル環境のプロファイル・コマンド』を参照してください。

- c. 「次へ」をクリックします。(「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このパネルが再表示されたときに、このパネルで手動で名前を変更しなければならないことがあります。)

「ノード、ホスト、およびセルの名前」パネルが表示されます。

- 4. 「ノード、ホスト、およびセルの名前」パネルで、デプロイメント・マネージャーにノード、ホスト、およびセルの各名前を指定するか、またはデフォルト値を受け入れて「次へ」をクリックします。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。ノードおよびホストの命名時に考慮する必要のある予約済みの用語やその他の問題については、633 ページの『プロファイル、ノード、ホスト、およびセルの命名の考慮事項』を参照してください。

「管理セキュリティー」パネルが表示されます。

- 5. 管理セキュリティーを使用可能にします。

この画面は、プロファイルを作成するのか拡張するのによって異なります。

プロファイルを作成する場合、管理セキュリティーをすぐに有効にすることも、後で管理コンソールから有効にすることもできます。管理セキュリティーをすぐに有効にするには、「管理セキュリティーを使用可能にする」チェック・ボックスを選択したままにし、管理コンソールにログオンするためのユーザー名およびパスワードを指定して、「次へ」をクリックします。管理セキュリティーを無効にするには、チェック・ボックスのチェックを外します。管理セキュリティーを後で管理コンソールから有効にするには、コンソールを開き、「セキュリティー」>「ビジネス・インテグレーション・セキュリティー」を選択してください。

プロファイルを拡張しているときに「管理セキュリティー」パネルが表示される場合、拡張中のプロファイルでセキュリティーが有効にされています。そのプロファイルの管理ユーザー ID およびパスワードを再入力する必要があります。

次のステップは、プロファイルを作成するのか拡張するのによって異なります。

タスク	次のステップ
高度なプロファイル拡張	「データベースの構成」パネルが表示されま す。ステップ 9 (380 ページ) に進んでくださ い。
高度なプロファイル作成	「ポート値の割り当て」パネルが表示されま す。ステップ 6 に進んでください。

6. プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認して、「次へ」をクリックします。

プロファイル管理ツールは、ほかの WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。ステップ 2 (376 ページ) の「オプションのアプリケーション・デプロイメント」パネル上で、管理コンソールをデプロイしないことを選択した場合、管理コンソール・ポートは「ポート値の割り当て」パネル上で使用できません。

以下の条件が満たされる場合、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーによって実行されたインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている場合。
- ポートが現在使用中の場合。

「ポート値の割り当て」パネルにアクセスするときにポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」パネルで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポート競合が疑われる場合、プロファイルの作成後に調査できます。以下のファイル調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

- **i5/OS** `profile_root/properties/portdef.props`
- **Linux** **UNIX** `profile_root/properties/portdef.props`
- **Windows** `profile_root\properties\portdef.props`

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てするには、WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 6.1 インフォメーション・センターのトピック

『Updating ports in an existing profile』を参照し、**ws\_ant** スクリプトによって `updatePorts.ant` ファイルを実行します。

次のステップは、ご使用のプラットフォーム、およびインストールを root (管理者) ユーザーで行っているか、非 root ユーザーで行っているかによって異なります。

インストール・タイプ	次のステップ
Linux プラットフォーム上で、プロファイル管理ツールを root ユーザーとして実行している場合。	「Linux サービスの定義」パネルが表示されます。ステップ 8 (380 ページ) に進んでください。
Windows プラットフォーム上で、管理者グループの特権を持っている場合。	「Windows サービスの定義」パネルが表示されます。ステップ 7 に進んでください。
それ以外のプラットフォームの場合、または Linux または Windows プラットフォームで非 root ユーザーとして実行している場合	「データベースの構成」パネルが表示されます。ステップ 9 (380 ページ) に進んでください。

7. **Windows** サーバーを Windows サービスとして実行するかどうかを選択して、「次へ」をクリックします。

Windows サービスをインストールする ID に管理者グループ特権がある場合にのみ、「Windows サービスの定義」パネルが Windows プラットフォームに表示されます。プロファイルが Windows サービスとして構成されている場合、製品は、**startManager** コマンドによって開始されるサーバー・プロセスに対応する Windows サービスを開始します。例えば、サーバーを Windows サービスとして構成し、**startManager** コマンドを実行すると、**wasservice** コマンドは定義されたサービスの開始を試みます。

**重要:** 指定のユーザー・アカウントとしてログオンする場合は、サービスを実行するユーザーのユーザー ID とパスワードを指定し、さらに開始タイプ (デフォルトは Manual) を指定する必要があります。ユーザー ID は、名前にスペースを使用できません。また、この ID は管理者グループに属し、拡張ユーザー権限の「サービスとしてログオン」および「オペレーティング・システムの一部として機能」を持つ必要があります。ユーザー ID が管理者グループに属していて、まだ拡張ユーザー権限がない場合は、プロファイル管理ツールにより、ユーザー ID に拡張ユーザー権限が付与されます。

プロファイルの作成時に追加された Windows サービスをプロファイルの削除時に除去できます。

### プロファイルを Windows サービスとして実行する場合の IPv6 に関する考慮事項

Windows サービスとして実行するように作成されたサーバーは、このサービスがローカル・システムで実行するように構成されている場合、IPv6 の使用時には開始できません。ユーザー固有の環境変数を作成して、IPv6 を使用可能にします。この環境変数はローカル・システム変数ではなくユーザー変数であるため、その特定のユーザーで実行される Windows サービスのみが、この環境変数にアクセスできます。新規プロファイルが Windows サービスとして実行するように作成および構成されている場合、デフォルトでは、サービスはローカル・システムとして実行するように設定されます。WebSphere Process Server サービスによって実行が試みられる場合、このサービスは IPv6 が指定されているユーザー環境変数にアクセスできないため、IPv4 として開始を試みます。この場合、サーバーは正常に始動しません。この問題を解決するには、プロファイルの作成時に、WebSphere Process Server サービスが、ローカル・システ

ムの代わりに IPv6 が指定されている環境変数を定義したユーザー ID と同じユーザー ID で実行されることを指定します。

「高度なプロファイル作成」が終了した後で、「データベースの構成」パネルが表示されます。

8. **Linux** サーバーを Linux サービスとして実行するかどうかを選択して、「次へ」をクリックします。

「Linux サービスの定義」パネルは、現在のオペレーティング・システムがサポートされるバージョンの Linux であり、現在のユーザーに適切な権限がある場合にのみ表示されます。

WebSphere Process Server によって、**startManager** コマンドで開始されたサーバー・プロセス用の Linux サービスの開始が試みられます。例えば、サーバーを Linux サービスとして構成し、**startManager** コマンドを実行すると、**wasservice** コマンドは定義されたサービスの開始を試みます。

デフォルトでは、WebSphere Process Server は、Linux サービスとして実行するように選択されません。

このサービスを作成するためには、プロファイル管理ツールを実行するユーザーが root ユーザーでなければなりません。プロファイル管理ツールを root 以外のユーザー ID で実行している場合は、「Linux サービスの定義」パネルは表示されないため、サービスも作成されません。

サービスの実行に使用されるユーザー名を指定する必要があります。

Linux サービスを削除するためには、ユーザーが root ユーザーであるか、またはこのサービスを削除するための適切な特権を持っている必要があります。それ以外の場合は、root ユーザーがこのユーザーの代わりにサービスを削除するために実行できる除去スクリプトが作成されます。

「データベースの構成」パネルが表示されます。

9. 「データベース構成」パネルで、選択した製品コンポーネントで使用する共通データベースを構成します。

詳細については、357 ページの『プロファイル管理ツールを使用した共通データベースおよび Common Event Infrastructure データベースの構成』のトピックを参照してください。「データベース構成」パネルと「データベース構成 (第 2 部)」パネルの各フィールドへの入力を完了したら、このステップに戻ります。「プロファイルの要約」パネルが表示されます。

10. 「プロファイルの要約」パネルで、「作成」または「拡張」をクリックしてプロファイルを作成または拡張するか、あるいは「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。

プロファイルの作成または拡張が完了すると、「プロファイル完了 (Profile complete)」パネルに「プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に作成されました」または「プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に拡張されました」というメッセージが表示されます。

11. 共通データベースを手動で構成する必要があるかどうかに応じて、以下のいずれかのタスクを実行し、プロファイル構成を完了します。
- プロファイル管理ツールを使用した共通データベースの構成が完了したら、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」または「別のプロファイルの作成 (Create another profile)」、あるいはこの両方をクリックします。終了するには、「終了」をクリックします。ファースト・ステップ・コンソールを使用して、サーバーを始動します。「別のプロファイルの作成 (Create another profile)」オプションを使用してプロファイル管理ツールを再始動し、追加のプロファイルを作成します。
  - 手動で実行するスクリプトを生成して実際のデータベース構成を先送りする場合は、以下のステップを実行します。
    - a. ファースト・ステップ・コンソールを開始するチェック・ボックスをクリアし、「終了」をクリックしてプロファイル管理ツールを閉じます。
    - b. サイトの標準的なデータベース定義ツールと手順を使用して、プロファイル管理ツールにより生成されたスクリプトを編集して実行し、WPRCSDB データベース (または、システムで別の名前が設定されている場合はそれに相当するデータベース) を作成するか、または作成して構成する必要があるか、このスクリプトの場所は、357 ページの『プロファイル管理ツールを使用した共通データベースおよび Common Event Infrastructure データベースの構成』トピックの 2 (358 ページ) のステップで指定しました。また、435 ページの『プロファイルの作成後または拡張後の共通データベースとテーブルの作成』または 436 ページの『プロファイルの作成後または拡張後の共通データベースでのテーブルの作成』にある、新規の共通データベースまたはテーブルを既存の共通データベースに手動で作成する方法について説明している各トピックも参照してください。各データベースの構成が完了したら、162 ページの『ファースト・ステップ・コンソールの開始』で説明されているように、プロファイルに関連付けられているファースト・ステップ・コンソールを開始します。

## タスクの結果

以下のいずれかの作業が完了しました。

- WebSphere Process Server プロファイルを作成しました。
- WebSphere Application Server、WebSphere Application Server Network Deployment、または Websphere ESB プロファイルの WebSphere Process Server プロファイルへの拡張。
- WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment プロファイルの Websphere ESB プロファイルへの拡張。

## 次のタスク

ファースト・ステップ・コンソールから「デプロイメント・マネージャーの始動」を選択して、サーバーが作動することを確認します。出力ウィンドウが開きます。次のようなメッセージが表示される場合、デプロイメント・マネージャーは正常に作動しています。

```
ADMU3000I: サーバー dmgr が e-ビジネス用にオープン。プロセス ID は 3072
(Server dmgr open for e-business; process id is 3072)
```

デプロイメント環境の場合には、別のデータベースを作成して構成し、カスタム・プロファイルを作成してそれをご使用のデプロイメント・マネージャーに統合し、サーバーを作成し、ワークロード管理機能が必要な場合はクラスターを作成し、さらに、計画したインストール環境に固有のその他のタスクを実行する必要があります。計画した環境では、実行が必要なタスク、およびその実行順序を指示します。

インストールの計画と WebSphere Process Server で必要とされるデータベースについて詳しくは、「*WebSphere Process Server for Multiplatforms* バージョン 6.2 計画」(PDF) の『*WebSphere Process Server* の計画』の各トピックを参照してください。または、WebSphere Process Server for Multiplatforms バージョン 6.2 オンライン・インフォメーション・センター (<http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/dmndhelp/v6r2mx/>)で、『**WebSphere Process Server** の計画』にナビゲートして各トピックを参照してください。

### プロファイル管理ツールを使用した共通データベースおよび **Common Event Infrastructure** データベースの構成:

選択された WebSphere Process Server コンポーネントを操作するには、共通データベースと Common Event Infrastructure ローカル・データベースというデータベースが必要になります。プロファイル管理ツールは、データベースの構成パネルで指定された値に基づき、これらのデータベースと必要なテーブルをローカル・システム上に自動的に作成します。インストール済み環境で実際に作業するには、これらのデータベースを構成する必要があります。

#### 始める前に

注: **i5/OS** データベースへの参照では、データベース・コレクションが参照されます。

この手順では、プロファイル管理ツールをすでに開始しており、「高度なプロファイル作成」または「デプロイメント環境プロファイル作成」あるいは「高度なプロファイル拡張」または「デプロイメント環境プロファイル拡張」オプションによって、プロファイルの作成または拡張を選択済みであることを前提とします。以下のうちいずれか 1 つのトピックの手順を実行します。

- 347 ページの『カスタマイズした値を使用したスタンドアロン・サーバー・プロファイルの構成』
- 375 ページの『カスタマイズした値を使用したデプロイメント・マネージャー・プロファイルの構成』
- 405 ページの『デプロイメント環境用のデプロイメント・マネージャー・プロファイルの構成』

これは、トピックの中で、「データベース構成」パネルに入力することによって、共通データベースを構成する手順のステップです。

#### このタスクについて

以下の WebSphere Process Server コンポーネントは、共通データベースを使用しません。

- Application Scheduler
- ビジネス・ルール・グループ

- メディエーション
- リカバリー
- リレーションシップ・サービス
- セレクター
- イベント順序付け (ロック・マネージャー)
- Enterprise Service Bus ロガー・メディエーション・プリミティブ
- メッセージング・エンジン (5 (360 ページ) のステップで説明されている「メッセージング・エンジン (ME) ではこのデータベースを使用します。」チェック・ボックスを選択した場合)。

WebSphere Process Server 製品で使用される各種データベースとデータベース表について詳しくは、『データベースの選択』を参照してください。

**重要:** Derby Network Server をデータベース製品として選択する場合、データベース・ホストがローカルの場合でも、サーバーがプロファイルの作成または拡張時に指定したホストとポートで稼働していることを確認してください。プロファイルを作成または拡張した後のみ、サーバーが実行中であることを確認できます。

#### 手順

1. 「データベース製品の選択」フィールドで、使用するデータベース製品を選択するか、またはデフォルト値の Derby Embedded (スタンドアロン・サーバー・プロファイル用) または Derby Network Server (デプロイメント・マネージャー・プロファイル用) を受け入れます。

#### 制約事項:

- Informix Dynamic Server、Microsoft SQL Server Data Direct、および Microsoft SQL Server Embedded は、デプロイメント環境構成を使用したデプロイメント・マネージャー上ではサポートされません。
  - **i5/OS** DB2 UDB for iSeries (ネイティブ)、DB2for i5/OS (ネイティブ)、および Derby Embedded は、i5/OS で稼働するデータベースとしてローカルでのみ使用できます。Derby Network Server、DB2 UDB for iSeries (ツールボックス)、および DB2 for i5/OS (ツールボックス) は、ローカルおよびリモートのどちらでも i5/OS で使用できます。リストされたその他すべてのデータベースは、適切なリモート・データベース・ドライバーが使用されている場合は、i5/OS 上でのみ、リモート・データベースとして使用できます。
2. プロファイル管理ツールによって作成されるデータベースの作成と構成スクリプトを「データベース・スクリプトの出力ディレクトリー」フィールド内のデフォルトの場所以外の場所に保管するには、「生成したスクリプト用の宛先ディレクトリーのオーバーライド」チェック・ボックスを選択して、「データベース・スクリプトの出力ディレクトリー」フィールドに使用する新規の場所を指定します。CommonDB スクリプトも Common Event Infrastructure スクリプトも、デフォルトのルート・ディレクトリーは `<WPS_home>/profiles/<profile name>/dbscripts/` です。

以下に例を示します。

Common Event Infrastructure: `<WPS_home>/profiles/<profile name>/dbscripts/CEI_<ceiDbName>`

CommonDB: <WPS home>/profiles/<profile name>/dbscripts/CommonDB/<dbType>/<dbName>

プロファイル管理ツールに、プロファイルの作成または拡張を自動的に実行させないことを選択した場合、プロファイルの作成または拡張のプロセスによって、ユーザーまたはデータベース管理者が新規のデータベースとそれに必要なテーブルを作成するために手動で実行できるスクリプトが生成されます。(ステップ 4 (359 ページ) で説明しているように、このパネル内の「データベース・スクリプトの実行を遅延 (リモート・データベースを使用する場合は選択する必要があります)」チェック・ボックスを選択して、このデータベースの自動作成と自動構成を実行しないようにします。)

3. データベース名を入力するか、またはデフォルト値を受け入れます。

**i5/OS** **i5/OS プラットフォームの場合:** 独立補助ストレージ・プール (IASP: Independent Auxiliary Storage Pool) を使用する i5/OS 上のデータベースの名前は、IASP という名前である可能性があります。

デフォルトの共通データベース名は、データベース製品に基づいて以下のように異なります。

- **i5/OS** \*LOCAL: DB2 UDB for iSeries (ネイティブ) および DB2 for i5/OS (ネイティブ) の場合。
- **i5/OS** \*SYSBAS: DB2 UDB for iSeries (ツールボックス) および DB2 for i5/OS (ツールボックス) の場合。
- WPRCSDB 他のすべてのデータベース製品用

デフォルトの Common Event Infrastructure データベース名は、データベース製品に基づいて以下のように異なります。

- **i5/OS** \*LOCAL: DB2 UDB for iSeries (ネイティブ) および DB2 for i5/OS (ネイティブ) の場合。
- **i5/OS** \*SYSBAS: DB2 UDB for iSeries (ツールボックス) および DB2 for i5/OS (ツールボックス) の場合。
- EVENT: 他のすべてのデータベース製品用。

既存のデータベースを使用する場合は、この名前がそのデータベースの名前と一致していなければなりません。新規データベースを作成する場合、指定した名前が既に別の WebSphere Process Server プロファイルに関連付けられていた場合は、異なるデータベース名を使用する必要があります。

**注:** **i5/OS** これは i5/OS には適用されません。i5/OS 上のすべてのプロファイルで同じデータベース名が使用されます。

**注:** 注: 実際の Oracle データベース名 (dbName) は Oracle ID (SID) です。テーブルを作成する際は、このデータベース名が存在する必要があります。このデータベース名は、共通データベースと Common Event Infrastructure データベース間で共用することができます。新規プロファイルを作成する前に、すべての Oracle データベース・リソースを削除することをお勧めします。これは、Common Event Infrastructure データベースによってテーブル・スペースなどの固

有のデータベース・リソースが作成されるため、そのデータベース・リソースが Oracle サーバーに既に存在する場合に障害が発生してしまうためです。

4. プロファイル管理ツールによって自動的にローカル・データベースが作成および構成されることも、プロファイルの作成または拡張時に既存のローカル・データベースに表が作成されることも望まない場合は、「**データベース・スクリプトの実行を遅延 (リモート・データベースを使用する場合は選択する必要がある)**」チェック・ボックスを選択します。このチェック・ボックスを選択しなかった場合は、ローカル・データベースが作成されます。このオプションを選択した場合は、ユーザーまたはデータベース管理者は、このパネル上の「**データベース・スクリプトの出力ディレクトリー**」フィールドで指定された場所にプロファイル管理ツールによって作成および保管されるスクリプトを手動で実行する必要があります。新規の共通データベースの手動での作成および構成、または既存のデータベース内でのテーブルの作成についての説明は、435 ページの『プロファイルの作成後または拡張後の共通データベースとテーブルの作成』または 436 ページの『プロファイルの作成後または拡張後の共通データベースでのテーブルの作成』を参照してください。

**重要:** 以下のディレクトリーにあるスクリプトは使用しないでください (変数の `db_type` は、サポートされるデータベース製品を表します)。

- **Linux** **UNIX** `install_root/dbscripts/CommonDB/db_type`
- **Windows** `install_root¥dbscripts¥CommonDB¥db_type`

これらは、プロファイル管理ツールによって更新されていないデフォルトのスクリプトです。

**制約事項:** 以下の構成の場合、「**データベース・スクリプトの実行を遅延 (リモート・データベースを使用する場合は選択する必要がある)**」オプションは選択できません。

- Derby Embedded または Derby Network Server 製品を選択した場合。
- Network Deployment 環境の場合。

次のステップは、スタンドアロン・サーバー・プロファイルを作成または拡張する場合とデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成または拡張する場合とで異なります。

作成または拡張するプロファイルのタイプ	次のステップ
スタンドアロン・サーバー	ステップ 5 (360 ページ) に進んでください。
デプロイメント・マネージャー	ステップ 7 (361 ページ) に進んでください。

5. **スタンドアロン・サーバー・プロファイル場合のみ:** メッセージング・エンジンでファイル・ストアを使用するには、「**メッセージング・エンジン (ME) ではファイル・ストアを使用します。 (Use a file store for Messaging Engines (MEs))**」チェック・ボックスを選択します。このチェック・ボックスを選択すると、メッセージング・エンジンがファイル・ストア上に作成および構成されます (Common Event Infrastructure のメッセージング・エンジンを除きます。このメッセージング・エンジンでは、このオプションを選択しても、Derby Embedded のローカル・データベースが使用されます)。このチェック・ボックスを選択せず、6 (360 ページ) のステップで説明されている「**メッセージング・エンジン**

(ME) ではこのデータベースを使用します。」チェック・ボックスも選択しない場合は、メッセージング・エンジンは、デフォルトの Derby Embedded データベース上に作成および構成されます。Derby Embedded データベースは、リモート・ワークステーション上に作成することはできません。ファイル・ストアについて詳しくは、WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 6.1 のインフォメーション・センターにある『ファイル・ストア』を参照してください。

6. **スタンドアロン・サーバー・プロファイルのみの場合:** 「メッセージング・エンジン (ME) ではこのデータベースを使用します」チェック・ボックスを選択して、メッセージング・エンジンで共通データベースを使用します。このチェック・ボックスを選択せず、5 (360 ページ) のステップで説明されている「メッセージング・エンジン (ME) ではファイル・ストアを使用します。 (Use a file store for Messaging Engines (MEs))」チェック・ボックスも選択しない場合は、メッセージング・エンジンは、デフォルトの Derby Embedded データベース上に作成および構成されます。Derby Embedded データベースは、リモート・ワークステーション上に作成することはできません。データ・ストアについて詳しくは、WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 6.1 のインフォメーション・センターにある『データ・ストア』を参照してください。

**制約事項:** このオプションは、Derby Embedded 製品を選んだ場合は選択できません。

7. 「次へ」をクリックします。次のステップは、作成または拡張するプロファイルのタイプ、および選択したデータベース製品によって異なります。

作成または拡張するプロファイルのタイプ	次のステップ
Derby Embedded のデフォルト値を選択済みのスタンドアロン・サーバー・プロファイル。	「プロファイルの要約」パネルが表示されません。347 ページの『カスタマイズした値を使用したスタンドアロン・サーバー・プロファイルの構成』のステップ 15 (355 ページ) に戻ります。

作成または拡張するプロファイルのタイプ	次のステップ
<p>選択済みの <i>Derby Embedded</i> 以外のデータベース製品のスタンドアロン・サーバー・プロファイル。</p> <p>選択したデータベース製品のデプロイメント・マネージャー・プロファイル。</p>	<p>「データベース構成 (第 2 部)」パネルが、選択したデータベース製品に固有のフィールドを伴って表示されます。このパネルでの入力方法については、361 ページの『共通データベース構成のための「データベース構成 (第 2 部)」パネル』のトピックを参照してください。このパネルの情報入力が完了したら、「次へ」をクリックします。ツールにより、有効なデータベース接続が存在することが確認されます。データベース接続が存在していない場合は、続行する前に、データベースを始動するか、指定したパラメーターを変更して、この問題を修正する必要があります。「プロファイルの要約」パネルが表示されます。このパネルへのアクセス元のトピックに応じて、以下のいずれかの手順に戻ります。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 347 ページの『カスタマイズした値を使用したスタンドアロン・サーバー・プロファイルの構成』トピックのステップ 15 (355 ページ)</li> <li>• 375 ページの『カスタマイズした値を使用したデプロイメント・マネージャー・プロファイルの構成』トピックのステップ 10 (380 ページ)</li> <li>• 405 ページの『デプロイメント環境用のデプロイメント・マネージャー・プロファイルの構成』トピックのステップ 9 (411 ページ)</li> </ul>

### 共通データベース構成のための「データベース構成 (第 2 部)」パネル:

プロファイル管理ツールの「データベースの構成」パネルでデータベース製品を選択すると、後続のパネルにより、データベース固有の情報を入力するよう求められます。このパネル (スタンドアロン・サーバー・プロファイルの構成時に *Derby Embedded* を選択した場合は表示されません) は、「データベース構成 (第 2 部)」パネルと呼ばれます。このパネルのフィールドやデフォルト値は、選択したデータベース製品に応じて若干異なります。

「データベース構成 (第 2 部)」パネルで、「データベース・スクリプトの実行を遅延」チェック・ボックスを選択して、新規データベースの作成または既存のデータベースへのテーブルの追加を先送りすることを選択する場合でも、このパネルの入力を行う必要があります。このパネルで選択する値は、プロファイル管理ツールにより作成され、前のパネルの「データベース・スクリプトの出力ディレクトリー」フィールドで指定したディレクトリーに保管されるデータベース構成スクリプトに追加されます。

**制約事項:** DB2 for z/OS V8 または V9、Oracle 9i、Oracle 10g、または 11g を使用する場合は、新規データベースを作成できません。このいずれかのデータベースを選択する場合に「新規ローカル・データベースを作成する」オプションを選択すると、「次へ」ボタンは使用不可になります。「データベース構成」パネルで、別の選択を行ってください。

「データベースの構成 (第 2 部)」パネルに入力する方法を調べるには、ご使用のデータベース製品へのリンクを以下のリストから選択します。

- 363 ページの『Derby Network Server』
- 363 ページの『DB2 Universal Database』
- 364 ページの『DB2 for z/OS V8 および V9』
- 365 ページの『DB2 UDB for iSeries (ツールボックス)』
- **i5/OS** 365 ページの『DB2 UDB for iSeries (ネイティブ)』
- 366 ページの『DB2 Universal Runtime Client』
- 367 ページの『Informix Dynamic Server』
- 367 ページの『Microsoft SQL Server Embedded』
- 368 ページの『Microsoft SQL Server Data Direct 』
- 369 ページの『Oracle 9i』
- 370 ページの『Oracle 10g または 11g』

**重要:** スタンドアロン・サーバー・プロファイルを作成または拡張していて、Derby Embedded データベース製品を選択した場合、追加のデータベース構成は必要ありません。

「データベース構成 (第 2 部)」パネルの入力が完了したら、「次へ」をクリックします。ツールにより、有効なデータベース接続が存在することが確認されます。ツールでエラーが検出される場合は、データベースが稼働中であることを確認するか、接続を正常にするためにパラメーターを変更して、問題を訂正してから続行する必要があります。

「プロファイルの要約」パネルが表示されます。このパネルへのアクセス元のトピックに応じて、以下のいずれかの手順に戻ります。

- 347 ページの『カスタマイズした値を使用したスタンドアロン・サーバー・プロファイルの構成』トピックのステップ 15 (355 ページ)
- 375 ページの『カスタマイズした値を使用したデプロイメント・マネージャー・プロファイルの構成』トピックのステップ 10 (380 ページ)
- 405 ページの『デプロイメント環境用のデプロイメント・マネージャー・プロファイルの構成』トピックのステップ 9 (411 ページ)

## Derby Network Server

363 ページの表 104 に、Derby Network Server をデータベース製品として選択する場合、「データベースの構成 (第 2 部)」パネルで入力しておく必要があるフィールドを示します。

**重要:** データベース製品として Derby Network Server を選択する場合は、プロファイルの作成または拡張が完了した後、データベース・ホストがローカルの場合で

も、サーバーが必ずプロファイルの作成中に指定したホストおよびポート上で実行するようにしてください。

表 115. Derby Network Server の必須の共通データベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベースで認証するユーザー名	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
サーバー・ポート	デフォルト値 1527 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。

## DB2 Universal Database

363 ページの表 105 に、DB2 Universal Database をデータベース製品として選択する場合に「データベース構成 (第 2 部)」パネルで入力しておく必要があるフィールドを示します。

表 116. DB2 Universal Database の場合の必須の共通データベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベースで認証するユーザー名	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)	デフォルト値 (Linux、UNIX、または i5/OS プラットフォームの場合は <code>install_root/universalDriver_wbi/lib</code> 、Windows プラットフォームの場合は <code>install_root¥universalDriver_wbi¥lib</code> ) を受け入れるか、またはシステム上で次のファイルが置かれている場所までブラウズします。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• db2jcc.jar</li> <li>• db2jcc_license_cu.jar または db2jcc_license_cisuz.jar</li> </ul> 指定されたロケーションでファイルが見つからない場合は、エラー・メッセージが表示されます。
JDBC ドライバー・タイプ	デフォルト値 4 をそのまま確定するか、正しい JDBC ドライバー・タイプの横にあるラジオ・ボタンを選択します。

表 116. DB2 Universal Database の場合の必須の共通データベース構成フィールド (続き)

フィールド	必要なアクション
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
サーバー・ポート	デフォルト値 50000 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。

## DB2 for z/OS V8 および V9

364 ページの表 106 に、DB2 for z/OS V8 および V9 をデータベース製品として選択する場合に「データベース構成 (その 2)」パネルで入力しておく必要があるフィールドを示します。

表 117. DB2 for z/OS V8 および V9 の場合の必須の共通データベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベースで認証するユーザー名	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)	以下のファイルが格納されているシステム上の場所を入力します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• db2jcc.jar</li> <li>• db2jcc_license_cisuz.jar</li> </ul> 指定されたロケーションでファイルが見つからない場合は、エラー・メッセージが表示されます。
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	データベース・サーバーのホスト名を入力してください。
サーバー・ポート	デフォルト値 446 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。
データベースの別名	データベースの別名を入力してください。
接続のロケーション	接続のロケーションを入力してください。
ストレージ・グループ名	ストレージ・グループ名を入力してください。

## DB2 UDB for iSeries (ツールボックス)

365 ページの表 107 に、DB2 UDB for iSeries (ツールボックス) をデータベース製品として選択する場合に「データベース構成 (第 2 部)」パネルで入力する必要があるフィールドを示します。この選択は、DB2 for i5/OS (ツールボックス) の場合にも有効です。

表 118. DB2 UDB for iSeries (ツールボックス) または DB2 for i5/OS (ツールボックス) の必須共通データベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベースで認証するユーザー名	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)	デフォルト値 /QIBM/ProdData/HTTP/Public/jt400/lib (i5/OS プラットフォームの場合) を確定するか、またはシステム上で次のファイルが置かれている場所までブラウズします。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• jt400.jar</li> </ul> 指定されたロケーションでファイルが見つからない場合は、エラー・メッセージが表示されます。
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	データベース・サーバーのホスト名を入力してください。
データベース・コレクション名	デフォルト値 WPRCSDB をそのまま確定するか、正しいスキーマ名を入力します。指定したデータベース内で命名の競合を防止するために、スキーマ名を指定するときは、その先頭の 3 文字がデータベース内のその他のスキーマ名と重複しないようにしてください。

### DB2 UDB for iSeries (ネイティブ)

注: **i5/OS** **i5/OS プラットフォーム:** このデータベース構成は、i5/OS プラットフォームにのみ適用されます。

366 ページの表 108 に、DB2 UDB for iSeries (ネイティブ) をデータベース製品として選択する場合に「データベース構成 (第 2 部)」パネルで入力する必要があるフィールドを示します。この選択は、DB2 for i5/OS (ネイティブ) の場合にも有効です。

表 119. DB2 UDB for iSeries (ネイティブ) または DB2 for i5/OS (ネイティブ) の必須共通データベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベースで認証するユーザー名	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。

表 119. DB2 UDB for iSeries (ネイティブ) または DB2 for i5/OS (ネイティブ) の必須共通データベース構成フィールド (続き)

フィールド	必要なアクション
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)	デフォルト値 /QIBM/ProdData/Java400/ext (i5/OS プラットフォームの場合) を確定するか、またはシステム上で次のファイルが置かれている場所までブラウズします。  • db2_classes.jar  指定されたロケーションでファイルが見つからない場合は、エラー・メッセージが表示されます。
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	データベース・サーバーのホスト名を入力してください。
データベース・コレクション名	デフォルト値 WPRCSDB をそのまま確定するか、正しいスキーマ名を入力します。指定したデータベース内で命名の競合を防止するために、スキーマ名を指定するときは、その先頭の 3 文字がデータベース内のその他のスキーマ名と重複しないようにしてください。

## DB2 Universal Runtime Client

366 ページの表 109 に、DB2 Universal Runtime Client をデータベース製品として選択する場合に「データベース構成 (その 2)」パネルで入力しておく必要があるフィールドを示します。

表 120. DB2 Universal Runtime Client の場合の必須の共通データベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベースで認証するユーザー名	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)	db2java.zip ファイルが格納されているシステム上の場所を入力します。指定されたロケーションでファイルが見つからない場合は、エラー・メッセージが表示されます。
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	データベース・サーバーのホスト名を入力してください。
サーバー・ポート	デフォルト値 50000 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。
DB2 ノード名 (8 文字以下)	DB2 ノード名を入力してください。

## Informix Dynamic Server

367 ページの表 110 に、Informix Dynamic Server をデータベース製品として選択する場合に「データベース構成 (その 2)」パネルで入力しておく必要があるフィールドを示します。

表 121. Informix Dynamic Server の場合の必須の共通データベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベースで認証するユーザー名	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)	以下のファイルが格納されているシステム上の場所を入力します。 <ul style="list-style-type: none"><li>• ifxjdbc.jar</li><li>• ifxjdbcx.jar</li></ul> 指定されたロケーションでファイルが見つからない場合は、エラー・メッセージが表示されます。
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
データベース・サーバー名	データベース・サーバー名を入力してください。
サーバー・ポート	デフォルト値 1526 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。
イベント・サービスのインスタンス名	正しいイベント・サービスのインスタンス名を入力してください。

## Microsoft SQL Server Embedded

368 ページの表 111 に、Microsoft SQL Server Embedded をデータベース製品として選択する場合に「データベース構成 (第 2 部)」パネルで入力しておく必要があるフィールドを示します。

注: Microsoft SQL Server (Embedded) - Microsoft SQL Server 用の WebSphere Connect JDBC ドライバー (Data Directより) は、リリース 6.2 から非推奨になりました。次のリリースの新しい Microsoft SQL Server JDBC ドライバー、または WebSphere Process Server および WebSphere Enterprise Service Bus のフィックスパックによって置き換えられます。

表 122. Microsoft SQL Server Embedded の場合の必須の共通データベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベースで認証するユーザー名	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。

表 122. Microsoft SQL Server Embedded の場合の必須の共通データベース構成フィールド  
(続き)

フィールド	必要なアクション
パスワードの確認	パスワードを確認します。
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
データベース・サーバー名	データベース・サーバー名を入力してください。
サーバー・ポート	デフォルト値 1433 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。
管理ユーザー名	データベースおよびユーザーの作成および除去の特権を持つユーザー ID を入力するか、デフォルト値「sa」を受け入れます。この ID は、前の画面で「データベース・スクリプトの実行の遅延」オプションを選択していない場合に必要になります。
パスワード	「管理ユーザー名」 ID ユーザーのパスワードを入力します。
パスワードの確認	パスワードを確認します。

### Microsoft SQL Server Data Direct

368 ページの表 112 に、Microsoft SQL Server Data Direct をデータベース製品として選択する場合に「データベース構成 (第 2 部)」パネルで入力しておく必要があるフィールドを示します。

表 123. Microsoft SQL Server Data Direct の場合の必須の共通データベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベースで認証するユーザー名	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。

表 123. Microsoft SQL Server Data Direct の場合の必須の共通データベース構成フィールド (続き)

フィールド	必要なアクション
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)	<p>以下のファイルが格納されているシステム上の場所を入力します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• sqlserver.jar</li> <li>• base.jar</li> <li>• util.jar</li> </ul> <p>また、ファイル spy.jar が、JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーションに対する次の相対ロケーションで使用可能である必要があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>Linux</b> <b>UNIX</b> ../spy/spy.jar</li> <li>• <b>Windows</b> ..%spy%spy.jar</li> </ul> <p>指定されたロケーションでファイルが見つからない場合は、エラー・メッセージが表示されます。</p>
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
データベース・サーバー名	データベース・サーバー名を入力してください。
サーバー・ポート	デフォルト値 1433 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。

## Oracle 9i

369 ページの表 113 に、Oracle 9i をデータベース製品として選択する場合、「データベースの構成 (第 2 部)」パネルで入力しておく必要があるフィールドを示します。

表 124. Oracle 9i の必須の共通データベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベース・サーバーのインストール・ディレクトリー	データベース・サーバーのインストール先を入力するか、または参照します。前の画面で、「データベース・スクリプトの実行の遅延」オプションを選択した場合に必要になります。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)	ファイル ojdbc14.jar が格納されているシステム上の場所を入力します。指定されたロケーションでファイルが見つからない場合は、エラー・メッセージが表示されます。
JDBC ドライバー・タイプ	<b>OCI</b> または <b>Thin</b> をクリックします。

表 124. Oracle 9i の必須の共通データベース構成フィールド (続き)

フィールド	必要なアクション
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
サーバー・ポート	デフォルト値 1521 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。
管理ユーザー名	データベースおよびユーザーの作成および除去の特権を持つユーザー ID を入力します。前の画面で、「データベース・スクリプトの実行の遅延」オプションを選択していない場合に必要になります。
パスワード	「管理ユーザー名」 ID ユーザーのパスワードを入力します。
パスワードの確認	パスワードを確認します。

### Oracle 10g または 11g

370 ページの表 114 に、Oracle 10g または 11g をデータベース製品として選択する場合、「データベースの構成 (第 2 部)」パネルで入力しておく必要があるフィールドを示します。

**重要:** Oracle 11g では、プロファイルを作成する前に、SYSDBA 特権のあるユーザー ID を取得している必要があります。

表 125. Oracle 10g または 11g の必須の共通データベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベース・サーバーのインストール・ディレクトリー	データベース・サーバーのインストール先を入力するか、または参照します。前の画面で、「データベース・スクリプトの実行の遅延」オプションを選択した場合に必要になります。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)	ファイル ojdbc14.jar が格納されているシステム上の場所を入力します。指定されたロケーションでファイルが見つからない場合は、エラー・メッセージが表示されます。
JDBC ドライバー・タイプ	<b>OCI</b> または <b>Thin</b> をクリックします。
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
サーバー・ポート	デフォルト値 1521 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。

表 125. Oracle 10g または 11g の必須の共通データベース構成フィールド (続き)

フィールド	必要なアクション
管理ユーザー名	データベースおよびユーザーの作成および除去の特権を持つユーザー ID を入力します。前の画面で、「データベース・スクリプトの実行の遅延」オプションを選択していない場合に必要になります。
パスワード	「管理ユーザー名」 ID ユーザーのパスワードを入力します。
パスワードの確認	パスワードを確認します。

## カスタマイズした値を使用したカスタム・プロファイル (管理対象ノード) の構成

プロファイルを手動で作成および構成できますし、プロファイル管理ツールを使用することもできます。このトピックでは、プロファイル管理ツールを使用して、構成設定がカスタマイズされているカスタム・プロファイルを作成および構成する方法を説明します。

### 始める前に

このトピックでは、プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成または拡張し、240 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの作成』または 278 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの拡張』のいずれかの手順に従うことを前提としています。すなわち、プロファイル管理ツールをすでに開始しており、カスタム・プロファイルの作成または拡張を選択し、高度なプロファイル作成または拡張オプションを選択しているということです。

### このタスクについて

カスタム・プロファイルの構成中に、ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホストの名前などの設定に独自の値を指定することができます。ノードは、作成または拡張のプロセス時に既存のデプロイメント・マネージャーに統合することができますし、後で `addNode` コマンドを使用して統合することもできます。

278 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの拡張』または 240 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの作成』の手順に従うと、「フェデレーション」パネルまたは「プロファイル名およびロケーション」パネルが表示されます。以下の手順を実行して、新規カスタム・プロファイルをカスタマイズした構成値で構成します。

### 手順

1. プロファイル管理ツールに表示されるパネルは、プロファイルを作成するのか拡張するのかによって異なります。

タスク	最初のステップ
高度なプロファイル拡張	「フェデレーション (Federation)」パネルが表示されます。ステップ 4 (399 ページ) に進んでください。
高度なプロファイル作成	「プロファイル名およびロケーション」パネルが表示されます。ステップ 2 に進んでください。

2. 「プロファイル名およびロケーション」パネルで、以下のステップを実行します。

- a. プロファイルに固有の名前とディレクトリー・パスを指定するか、またはデフォルト値を受け入れます。

作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。

指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルト・ディレクトリーは、プラットフォームに依存しています。

- **i5/OS** `user_data_root/profiles/profile_name`
- **Linux** **UNIX** `install_root/profiles/profile_name`
- **Windows** `install_root¥profiles¥profile_name`

ここで、`profile_name` は指定した名前です。以下の場合には、エラー・メッセージが表示されます。

- 指定した `profile_name` が固有ではない。
  - 指定したディレクトリーが空ではない。
  - 使用しているユーザー ID に、このディレクトリーに対する十分な権限がない。
  - プロファイルを作成するための十分なスペースがない。
- b. 「デフォルトにするプロファイル」チェック・ボックスを選択して、作成するプロファイルをデフォルト・プロファイルにする (コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようにする) こともできます。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

マシンで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。

デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから実行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。マシン上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。詳しくは、651 ページの『複数プロファイル環境のプロファイル・コマンド』を参照してください。

プロファイル管理ツールは、ほかの WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出しますが、指定されたポートを使用する可能性がある他のアプリケーションのポートは検出しません。カスタム・プロファイルを統合すると、**addNode** コマンドは、競合しないポートを使用します。つまり、プロファイルを作成する際にはデフォルトのポート割り当てを使用し、**addNode** コマンドでノードを統合する際に、競合しないポートを指定することができます。ポート割り当ては、サーバー上で固有でなければなりません。別のサーバーのサーバー・プロセスは、競合なしで同じポート割り当てを使用することができます。

- c. 「次へ」をクリックします。(「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このパネルが再表示されたときに、このパネルで手動で名前を変更しなければならないことがあります。)

「ノード名およびホスト名」パネルが表示されます。

3. 「ノード名およびホスト名」パネルで、プロファイルにノード名およびホスト名を指定するか、またはデフォルト値を受け入れて「次へ」をクリックします。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。ノードおよびホストの命名時に考慮する必要がある予約済みの用語やその他の問題については、633 ページの『プロファイル、ノード、ホスト、およびセルの命名の考慮事項』を参照してください。

「フェデレーション (Federation)」パネルが表示されます。

4. 「フェデレーション」パネルで、ノードのデプロイメント・マネージャーへの統合をプロファイルの作成または拡張の一部としてここで実行するか、またはプロファイルの作成または拡張とは別に後で実行するかを選択します。
  - プロファイル作成または拡張の一部としてノードを統合することを選択した場合は、デプロイメント・マネージャーのホスト名または IP アドレスと SOAP ポート、および認証ユーザー ID とパスワード (デプロイメント・マネージャー上で管理セキュリティーが使用可能になっている場合) を指定します。「後でこのノードを統合する」チェック・ボックスを選択解除されたままにしておきます。次に、「次へ」をクリックします。

プロファイル管理ツールによって、デプロイメント・マネージャーが存在し、通信が可能であること、および認証ユーザー ID とパスワードがそのデプロイメント・マネージャーに有効であること (デプロイメント・マネージャーがセキュリティーで保護されている場合) が検査されます。

#### 重要:

以下の項目のいずれかに該当する場合は、プロファイルの作成または拡張時にカスタム・ノードを統合しないでください。

- このカスタム・ノードをマイグレーション・ターゲットとして使用する予定がある。
- 別のプロファイルが統合されている (ノードの統合はシリアライズする必要があります)。
- デプロイメント・マネージャーが稼働していないか、実行しているかどうか不明。

- そのデプロイメント・マネージャーは、まだ WebSphere Process Server デプロイメント・マネージャーに拡張されていない。
- デプロイメント・マネージャーが、作成または拡張するカスタム・プロファイルと同じか、それより高いリリース・レベルではない。
- デプロイメント・マネージャーで、JMX 管理ポートが有効になっていない。
- デプロイメント・マネージャーが、デフォルトではないリモート・メソッド呼び出し (RMI) を優先 Java Management Extensions (JMX) コネクタとして使用するよう再構成されている。(優先コネクタ・タイプを確認するには、デプロイメント・マネージャーの管理コンソールで「システム管理」>「デプロイメント・マネージャー」>「管理サービス」を選択します。)

デプロイメント・マネージャーが実行中でないとき、またはほかの理由で使用できないときにカスタム・ノードを統合しようとする、警告パネルが表示されて、続行できなくなります。この警告パネルが表示されたら、「OK」をクリックしてこの警告パネルを終了し、「フェデレーション」パネルで別の選択を行ってください。

- ノードを後で統合することを選択してプロファイルの作成または拡張とは別に行う場合は、「後でこのノードを統合する」チェック・ボックスを選択して、「次へ」をクリックします。

addNode コマンドを使用してノードを統合する方法については、402 ページの『カスタム・ノードのデプロイメント・マネージャーへの統合』を参照してください。このコマンドについては詳しくは、WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 6.1 のインフォメーション・センターにあるトピック『addNode コマンド』を参照してください。

次のステップは、実行しているプロファイルの作成または拡張のタイプ、および「高度なプロファイル作成」で、プロファイル作成プロセスの一部としてプロファイルを統合することを選択したかどうかによって異なります。

タスク	次のステップ
<ul style="list-style-type: none"> <li>• 「高度なプロファイル作成」でプロファイルを統合しない場合</li> <li>• 高度なプロファイル拡張</li> </ul>	「データベースの構成」パネルが表示されません。ステップ 6 (401 ページ) に進んでください。
<ul style="list-style-type: none"> <li>• 「高度なプロファイル作成」でプロファイルを統合する場合</li> </ul>	「ポート値の割り当て」パネルが表示されません。ステップ 5 に進んでください。

5. 「高度なプロファイル作成」の場合のみ: プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認して、「次へ」をクリックします。

プロファイル管理ツールは、ほかの WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。

以下の条件が満たされる場合、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーによって実行されたインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている場合。
- ポートが現在使用中の場合。

「ポート値の割り当て」パネルにアクセスするときにポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」パネルで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポート競合が疑われる場合、プロファイルの作成後に調査できます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

- **i5/OS** `profile_root/properties/portdef.props`
- **Linux** **UNIX** `profile_root/properties/portdef.props`
- **Windows** `profile_root\properties\portdef.props`

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てするには、トピック『Updating ports in an existing profile』を参照し、**ws\_ant** スクリプトによって `updatePorts.ant` ファイルを実行します。

「データベースの構成」パネルが表示されます。

6. 「データベース構成」パネルで、以下の手順を実行します。
  - a. データベース製品を確認します。このカスタム・プロファイルの統合先のデプロイメント・マネージャーで使用されているデータベースと一致するデータベースが表示されます。
  - b. データベースの JDBC ドライバー・クラス・パス・ファイルのロケーション (ディレクトリー) を指定します。Derby Network Server、DB2 Universal Database、または Microsoft SQL Server Embedded の各デフォルト値を受け入れることができます。
  - c. 「次へ」をクリックします。

「プロファイルの要約」パネルが表示されます。

7. 「プロファイルの要約」パネルで、「作成」または「拡張」をクリックしてプロファイルを作成または拡張するか、あるいは「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。

プロファイルの作成または拡張が完了すると、「プロファイル完了 (Profile complete)」パネルに「プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に作成されました」または「プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に拡張されました」というメッセージが表示されます。

8. 「プロファイル完了 (Profile complete)」パネルで、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」または「別のプロファイルの作成 (Create another profile)」、あるいはこの両方を選択します。終了するには、「終了」をクリックします。ファースト・ステップ・コンソールを使用して、製品資料にアクセスします。「別のプロファイルの作成 (Create another profile)」オプションを使用してプロファイル管理ツールを再始動し、追加のプロファイルを作成します。

## タスクの結果

以下のいずれかの作業が完了しました。

- WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus のプロファイルの作成。
- WebSphere Application Server、WebSphere Application Server Network Deployment、または WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルの WebSphere Process Server プロファイルへの拡張。
- WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment プロファイルの WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルへの拡張。

## 次のタスク

プロファイル内のノードを統合し、管理コンソールを使用してそのノードをカスタマイズするまでは、そのノードは空です。

デプロイメント環境で、データベースを作成して構成し、他のカスタム・プロファイルを作成してそれをご使用のデプロイメント・マネージャーに統合し、サーバーを作成し、ワークロード管理機能が必要な場合はクラスターを作成し、さらに計画したインストール環境に固有のその他のタスクを実行する必要があります。計画した環境では、実行が必要なタスク、およびその実行順序を指示します。

インストールの計画と WebSphere Process Server で必要とされるデータベースについて詳しくは、「*WebSphere Process Server for Multiplatforms* バージョン 6.2 計画」 PDF の『*WebSphere Process Server* の計画』の各トピックを参照してください。または、WebSphere Process Server for Multiplatforms バージョン 6.2 オンライン・インフォメーション・センター (<http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/dmndhelp/v6r2mx/>)で、『**WebSphere Process Server** の計画』にナビゲートして各トピックを参照してください。

### カスタム・ノードのデプロイメント・マネージャーへの統合:

`addNode` コマンドを使用して、カスタム・ノードをデプロイメント・マネージャー・セルに統合できます。以下の説明に従って、カスタム・ノードの統合およびデプロイのプロセスを実行します。

### 始める前に

この手順を実行する前に、以下の前提条件を確認してください。

- WebSphere Process Server がインストール済みであること、および WebSphere Process Server デプロイメント・マネージャーとカスタム・プロファイルが作成済みである。この手順では、カスタム・プロファイルの統合がその作成または拡張中に (プロファイル管理ツールまたは `manageprofiles` コマンドを使用して) 行われていないことが前提となっています。
- デプロイメント・マネージャーが稼働している。稼働していない場合は、ファースト・ステップ・コンソールから「**デプロイメント・マネージャーの始動**」を選択するか、コマンド行から以下のコマンドを入力してデプロイメント・マネージャーを始動します (ここで、`profile_root` はデプロイメント・マネージャー・プロファイルのインストール場所を表します)。

- `i5/OS` `profile_root/bin/startManager`
- `Linux` `UNIX` `profile_root/bin/startManager.sh`
- `Windows` `profile_root¥bin¥startManager.bat`
- デプロイメント・マネージャーが、WebSphere Process Server デプロイメント・マネージャーに拡張されている。WebSphere Process Server プロファイルは WebSphere Enterprise Service Bus デプロイメント・マネージャーを使用できませんが、WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルは WebSphere Process Server デプロイメント・マネージャーを使用できます。
- デプロイメント・マネージャーのリリース・レベルが、作成または拡張されたカスタム・プロファイルと同じか、それより高い。
- デプロイメント・マネージャーで、JMX 管理ポートが有効になっている。デフォルト・プロトコルは SOAP です。
- このカスタム・ノードをマイグレーション・ターゲットとして使用する予定がない。

### このタスクについて

カスタム・ノードをデプロイメント・マネージャーが管理できるように、カスタム・ノードを統合します。addNode コマンドを使用し、カスタム・プロファイルをデプロイメント・マネージャー・セルに統合します。カスタム・プロファイルを統合するには、以下のステップを実行します。

### 手順

1. 統合するカスタム・プロファイルの bin ディレクトリーに移動します。コマンド・ウィンドウを開き、プラットフォームに応じて (コマンド行から) 以下のディレクトリーのいずれかに移動します (`profile_root` は、カスタム・プロファイルのインストール・ロケーションを示します)。

- `i5/OS` `profile_root/bin`
- `Linux` `UNIX` `profile_root/bin`
- `Windows` `profile_root¥bin`

2. addNode コマンドを実行します。

セキュリティーが有効になっていない場合は、コマンド行から以下のいずれかのコマンドを発行します。

- `i5/OS` `addNode deployment_manager_host deployment_manager_SOAP_port`
- `Linux` `UNIX` `./addNode.sh deployment_manager_host deployment_manager_SOAP_port`
- `Windows` `addNode.bat deployment_manager_host deployment_manager_SOAP_port`

セキュリティーが有効である場合は、コマンド行から以下のいずれかのコマンドを発行します。

- **i5/OS** `addNode deployment_manager_host deployment_manager_SOAP_port -username userID_for_authentication -password password_for_authentication`
- **Linux** **UNIX** `./addNode.sh deployment_manager_host deployment_manager_SOAP_port -username userID_for_authentication -password password_for_authentication`
- **Windows** `addNode.bat deployment_manager_host deployment_manager_SOAP_port -username userID_for_authentication -password password_for_authentication`

出力ウィンドウが開きます。次のようなメッセージが表示されたら、カスタム・プロファイルの統合は成功しています。

```
ADMU00031: ノード DMNDID2Node03 は正常に統合されました。
(Node DMNDID2Node03 has been successfully federated.)
```

### タスクの結果

カスタム・プロファイルはデプロイメント・マネージャーに統合されました。addNode コマンドおよびそのパラメーターについては、WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 6.1.x のインフォメーション・センターにあるトピック『addNode コマンド』を参照してください。

### 次のタスク

カスタム・プロファイルを統合したら、デプロイメント・マネージャーの管理コンソールに移動して空のノードをカスタマイズするか、新規のアプリケーション・サーバーを作成します。

## デプロイメント環境に対するプロファイルの構成

新規または既存のデプロイメント環境パターンで使用する、カスタマイズした構成設定のプロファイルを作成または拡張する方法について説明します。プロファイル管理ツールを使用して、プロファイルを構成します。

### 始める前に

このトピックでは、プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成または拡張し、240 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの作成』または 278 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの拡張』のいずれかの手順に従うことを前提としています。つまり、プロファイル管理ツールを既に開始しており、デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成、あるいはカスタム・プロファイルの作成または拡張を既に選択しており、「**デプロイメント環境**」プロファイル作成オプションまたはプロファイル拡張オプションを既に選択している、ということが前提になっています。

### このタスクについて

「**デプロイメント環境**」プロファイル作成オプションまたは拡張オプションを選択して、デプロイメント環境に合わせて完全に構成されたプロファイルをセットアップします。このオプションは、WebSphere Process Server が動作するために必要な

すべてのコンポーネントを構成してインストールします。以下のコンポーネントがこのオプションの一環として構成されます。

- Business Process Choreographer
- Common Event Infrastructure
- Business Rules Manager
- Service Component Architecture

「**デプロイメント環境**」プロファイル作成オプションまたはプロファイル拡張オプションを選択することによって、ポート、プロファイルのロケーション、さらにプロファイルやノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前およびすべての必要なデータベース構成に、カスタマイズした値を割り当てることもできます。

デプロイメント・マネージャー・プロファイルの場合は、このツールで以下のことも実行できます。

- 管理セキュリティ用の管理ユーザー ID およびパスワードを提供します。
- ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権で許可される場合は、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
- インストールに使用するデプロイメント環境パターンを選択します。

カスタム・プロファイルの場合は、このツールを使用して、デプロイメント環境パターンが既に定義されている既存のデプロイメント・マネージャーにノードを統合することもできます。また、そのデプロイメント環境に対して定義するクラスターを指定することもできます。

詳しくは、以下のトピックを参照してください。

- **デプロイメント環境パターン**。デプロイメント環境パターンは、デプロイメント環境に含まれるコンポーネントとリソースの制約と要件を指定します。デプロイメント環境パターンは、お客様がデプロイメント環境を最も簡単な方法で作成できるように支援することを目的とし、大半のビジネス要件を満たせるように設計されています。
- **デプロイメント環境の機能**。堅固なデプロイメント環境を設計するためには、各クラスターが特定の IBM 提供のデプロイメント環境パターンまたはカスタム・デプロイメント環境に提供できる機能について理解しておく必要があります。この知識は、ニーズに最も合うデプロイメント環境パターンを正しく判別するのに役立ちます。

構成のタイプは、プロファイルのタイプによって異なります。プロファイルのタイプに応じて、以下のいずれかのサブトピックを選択してください。

## デプロイメント環境用のデプロイメント・マネージャー・プロファイルの構成

プロファイル管理ツールを使用して、WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus のデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成および構成できます。このトピックの説明を使用して、カスタマイズされた構成値でプロファイルを構成して、提供されたパターンに基づいてこのプロファイルを新しいデプロイメント環境で使用します。

## 始める前に

このトピックでは、プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成して、240 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの作成』の手順を実行していることを前提としています。すなわち、プロファイル管理ツールをすでに開始しており、デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成を選択し、「**デプロイメント環境**」プロファイル作成オプションを選択しているということです。「**デプロイメント環境**」オプションを使用して既存のデプロイメント・マネージャー・プロファイルを拡張することはできません。

## このタスクについて

「**デプロイメント環境**」プロファイル作成のオプションを選択して、ご使用のデプロイメント環境に対して、完全に構成されたプロファイルを設定アップします。このオプションは、WebSphere Process Server が動作するために必要なすべてのコンポーネントを構成してインストールします。以下のコンポーネントがこのオプションの一環として構成されます。

- Business Process Choreographer
- Common Event Infrastructure
- Business Rules Manager
- Service Component Architecture

このタイプの構成では、ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セルの名前などの設定に独自の値を指定することができます。管理セキュリティ用の管理ユーザー ID とパスワードを指定できます。ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権で許可される場合は、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成することができます。使用するデプロイメント環境パターン、および共通データベースの構成のための独自の値を選択することもできます。

240 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの作成』の手順を実行すると、「プロファイル名およびロケーション」パネルが表示されます。以下の手順を実行して、新規デプロイメント・マネージャー・プロファイルをカスタマイズした構成値でデプロイメント環境に対して構成します。

## 手順

1. 「プロファイル名およびロケーション」パネルで、以下のステップを実行します。
  - プロファイルに固有の名前とディレクトリー・パスを指定するか、またはデフォルト値を受け入れます。

作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。

指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトでは、このディレクトリーは以下のロケーションにあります。

– Linux UNIX `install_root/profiles/profile_name`

– **Windows** `install_root\profiles\profile_name`

– **i5/OS** `user_data_root/profiles/profile_name`

ここで、`profile_name` は指定した名前です。以下の場合は、エラー・メッセージが表示されます。

- 指定した `profile_name` が固有ではない。
  - 指定したディレクトリーが空ではない。
  - 使用しているユーザー ID に、このディレクトリーに対する十分な権限がない。
  - プロファイルを作成するための十分なスペースがない。
- 「**デフォルトにするプロファイル**」チェック・ボックスを選択して、作成するプロファイルをデフォルト・プロファイルにする (コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようにする) こともできます。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

マシンで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。

デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから実行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。マシン上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。詳しくは、651 ページの『複数プロファイル環境のプロファイル・コマンド』を参照してください。

- 「**次へ**」をクリックします。(「**戻る**」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このパネルが再表示されたときに、このパネルで手動で名前を変更しなければならないことがあります。)

「ノード、ホスト、およびセルの名前」パネルが表示されます。

2. 「ノード、ホスト、およびセルの名前」パネルで、デプロイメント・マネージャーにノード、ホスト、およびセルの各名前を指定するか、またはデフォルト値を受け入れて「**次へ**」をクリックします。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。ノード、ホスト、セルの名前を設定するときに検討しなければならない予約語や問題点については、633 ページの『プロファイル、ノード、ホスト、およびセルの命名の考慮事項』を参照してください。

「管理セキュリティー」パネルが表示されます。

3. 「管理セキュリティー」パネルで、ユーザー名とパスワードを指定して管理コンソールにログオンし、「**次へ**」をクリックします。

**重要:** 「デプロイメント環境プロファイル作成」を実行している場合は、管理セキュリティーが必要です。

「ポート値の割り当て」パネルが表示されます。

4. プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認して、「**次へ**」をクリックします。

プロファイル管理ツールは、ほかの WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。

以下の条件が満たされる場合、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーによって実行されたインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている場合。
- ポートが現在使用中の場合。

「ポート値の割り当て」パネルにアクセスするときにはポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」パネルで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポート競合が疑われる場合、プロファイルの作成後に調査できます。以下のファイル調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

- **Linux** **UNIX** `profile_root/properties/portdef.props`
- **Windows** `profile_root\properties\portdef.props`
- **i5/OS** `profile_root/properties/portdef.props`

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てするには、WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 6.1 インフォメーション・センターのトピック

『Updating ports in an existing profile』を参照し、**ws\_ant** スクリプトによって `updatePorts.ant` ファイルを実行します。

次のステップは、ご使用のプラットフォーム、およびインストールを `root` (管理者) ユーザーで行っているか、非 `root` ユーザーで行っているかによって異なります。

インストール・タイプ	次のステップ
Linux プラットフォーム上で、プロファイル管理ツールを <code>root</code> ユーザーとして実行している場合。	「Linux サービスの定義」パネルが表示されます。ステップ 6 (409 ページ) に進んでください。
Windows プラットフォーム上で、管理者グループの特権を持っている場合。	「Windows サービスの定義」パネルが表示されます。ステップ 5 に進んでください。
それ以外のプラットフォームの場合、または Linux または Windows プラットフォームで非 <code>root</code> ユーザーとして実行している場合	「デプロイメント環境構成」パネルが表示されます。ステップ 7 (410 ページ) に進んでください。

5. **Windows** サーバーを Windows サービスとして実行するかどうかを選択して、「次へ」を選択します。

Windows サービスをインストールする ID に管理者グループ特権がある場合のみ、「Windows サービスの定義」パネルが Windows プラットフォームに表示されます。プロファイルが Windows サービスとして構成されている場合、

製品は、**startManager** コマンドによって開始されるサーバー・プロセスに対応する Windows サービスを開始します。例えば、サーバーを Windows サービスとして構成し、**startManager** コマンドを実行すると、**wasservice** コマンドは定義されたサービスの開始を試みます。

**重要:** 指定のユーザー・アカウントとしてログオンする場合は、サービスを実行するユーザーのユーザー ID とパスワードを指定し、さらに開始タイプ (デフォルトは Manual) を指定する必要があります。ユーザー ID は、名前にスペースを使用できず、管理者グループに属していて、拡張ユーザー権限のサービスとしてログオンおよびオペレーティング・システムの一部として機能を持つ必要があります。ユーザー ID が管理者グループに属していて、まだ拡張ユーザー権限がない場合は、プロファイル管理ツールにより、ユーザー ID に拡張ユーザー権限が付与されます。

プロファイルの作成時に追加された Windows サービスをプロファイルの削除時に除去できます。

### プロファイルを Windows サービスとして実行する場合の IPv6 に関する考慮事項

Windows サービスとして実行するように作成されたサーバーは、このサービスがローカル・システム で実行するように構成されている場合、IPv6 の使用時には開始できません。ユーザー固有の環境変数を作成して、IPv6 を使用可能にします。この環境変数はローカル・システム 変数ではなくユーザー変数であるため、その特定のユーザーで実行される Windows サービスのみが、この環境変数にアクセスできます。新規プロファイルが Windows サービスとして実行するように作成および構成されている場合、デフォルトでは、サービスはローカル・システム として実行するように設定されます。WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Bus の Windows サービスによって実行が試みられる場合、このサービスは IPv6 が指定されているユーザー環境変数にアクセスできないため、IPv4 として開始を試みます。この場合、サーバーは正常に始動しません。この問題を解決するには、プロファイルの作成時に、WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Bus の Windows サービスが、ローカル・システム としてではなく、IPv6 を指定する環境変数を定義したユーザー ID と同じユーザー ID で実行されるように指定します。

「次へ」ボタンをクリックすると、「デプロイメント環境構成」パネルが表示されます。

6. **Linux** サーバーを Linux サービスとして実行するかどうかを選択して、「次へ」をクリックします。

「Linux サービスの定義」パネルは、現在のオペレーティング・システムがサポートされるバージョンの Linux であり、現在のユーザーに適切な権限がある場合にのみ表示されます。

WebSphere Process Server によって、**startManager** コマンドで開始されたサーバー・プロセス用の Linux サービスの開始が試みられます。例えば、サーバーを Linux サービスとして構成し、**startManager** コマンドを実行すると、**wasservice** コマンドは定義されたサービスの開始を試みます。

デフォルトでは、WebSphere Process Server は、Linux サービスとして実行するように選択されません。

このサービスを作成するためには、プロファイル管理ツールを実行するユーザーが root ユーザーでなければなりません。プロファイル管理ツールを root 以外のユーザー ID で実行している場合は、「Linux サービスの定義」パネルは表示されないため、サービスも作成されません。

サービスの実行に使用されるユーザー名を指定する必要があります。

Linux サービスを削除するためには、ユーザーが root ユーザーであるか、またはこのサービスを削除するための適切な特権を持っている必要があります。それ以外の場合は、root ユーザーがこのユーザーの代わりにサービスを削除するために実行できる除去スクリプトが作成されます。

「デプロイメント環境構成」パネルが表示されます。

7. 「デプロイメント環境構成」パネルで、デプロイメント環境に対して、このデプロイメント・マネージャー・プロファイルで使用するパターンをクリックします。

以下のパターンのいずれかの隣にあるラジオ・ボタンを選択して、「次へ」をクリックします。

- **リモート・メッセージングおよびリモート・サポート:** アプリケーション・デプロイメント用に 1 つのクラスター、メッセージング・インフラストラクチャー用に 1 つのリモート・クラスター、および Common Event Infrastructure とその他のサポート・アプリケーション用に 1 つのリモート・クラスターを定義します。このパターンでは、大半のビジネス統合のニーズに適合するセットアップが構成されます。迷う場合は、このパターンを選択してください。
- **リモート・メッセージング:** アプリケーション・デプロイメント用に 1 つのクラスター、およびメッセージング・インフラストラクチャー用に 1 つのリモート・クラスターを定義します。Common Event Infrastructure とその他のサポート・アプリケーションが、アプリケーション・デプロイメント・ターゲット・クラスター上に構成されます。
- **単一クラスター:** アプリケーション・デプロイメント用に 1 つのクラスターを定義します。サポート・アプリケーションを持つメッセージング・インフラストラクチャーと Common Event Infrastructure の両方がアプリケーション・デプロイメント・クラスター上に構成されます。

詳しくは、以下のトピックを参照してください。

- **デプロイメント環境パターン。**デプロイメント環境パターンは、デプロイメント環境に含まれるコンポーネントとリソースの制約と要件を指定します。デプロイメント環境パターンは、お客様がデプロイメント環境を最も簡単な方法で作成できるよう支援することを目的とし、大半のビジネス要件を満たせるように設計されています。
- **デプロイメント環境の機能。**堅固なデプロイメント環境を設計するためには、各クラスターが特定の IBM 提供のデプロイメント環境パターンまたは

カスタム・デプロイメント環境に提供できる機能について理解しておく必要があります。この知識は、ニーズに最も合うデプロイメント環境パターンを正しく判別するのに役立ちます。

このデプロイメント・マネージャー・プロファイル上でデプロイメント環境に使用するパターンを選択すると、データベース構成パネルが表示されます。

8. 「データベース構成」パネルで、Common Event Infrastructure データベース、システム・バスのメッセージング・データベース、およびすべての Business Process Choreographer 関連のデータベースを含む、すべての WebSphere Process Server コンポーネントによって使用される共通データベースを構成します。

これらのコンポーネントに対して共通データベース以外のデータベースを使用する場合は、以下のオプションがあります。

- このデプロイメント環境プロファイルの作成を取り消し、代わりに管理コンソールを使用してデプロイメント環境を作成します。詳しくは、『デプロイメント環境の作成』を参照してください。
- 同じデータベース・ベンダーによって作成された異なるデータベース製品を使用する場合でも、このプロファイルの作成を続行し、後で管理コンソールでデータベース構成を変更できます。JDBC ドライバーとデータ・ソースの構成について詳しくは、WebSphere Server Network Deployment バージョン 6.1 のインフォメーション・センターにある『JDBC プロバイダーおよびデータ・ソースの構成』を参照してください。

詳細については、トピック 357 ページの『プロファイル管理ツールを使用した共通データベースおよび Common Event Infrastructure データベースの構成』を参照してください。「データベース構成」情報パネルと「データベース構成 (第 2 部)」情報パネルの各フィールドの入力を完了したら、このステップに戻ります。プロファイル管理ツールによりデータベース構成の選択が検証され、誤りがある場合はメッセージが表示されます。例えば、既に存在するデータベース名を入力して新規データベースを作成した場合は、エラー・メッセージにより、そのデータベースが存在することが通知されます。

#### 制約事項:

デプロイメント環境のデプロイメント・マネージャー・プロファイル作成の一部であるデータベース構成パネルには、データベース管理者 (DBA) 特権が必要です。製品のインストーラーまたはプロファイル管理ツールのデプロイメント環境機能を使用する場合に、データベース製品として Derby ネットワーク・サーバー以外のデータベースを使用するときは、データベース構成パネルの「データベースで認証するユーザー名」フィールドで指定するユーザー ID は DBA 特権を持っている必要があります。

共通データベースを構成したら、「プロファイルの要約」パネルが表示されます。

9. 「プロファイルの要約」パネルで、「作成」を選択してプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。

プロファイルの作成または拡張が完了すると、「プロファイル完了 (Profile complete)」パネルに「プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に作成されました」または「プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に拡張されました」というメッセージが表示されます。

10. 共通データベースを手動で構成する必要があるかどうかに応じて、以下のいずれかのタスクを実行し、プロファイル構成を完了します。
  - プロファイル管理ツールを使用した共通データベースの構成が完了したら、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」または「別のプロファイルの作成 (Create another profile)」、あるいはこの両方をクリックします。終了するには、「終了」を選択します。ファースト・ステップ・コンソールを使用して、サーバーを始動します。「別のプロファイルの作成 (Create another profile)」オプションを使用してプロファイル管理ツールを再始動し、追加のプロファイルを作成します。
  - 手動で実行するスクリプトを生成してデータベース構成を先送りする場合は、以下のステップを実行します。
    - a. ファースト・ステップ・コンソールを起動するチェック・ボックスをクリアし、「終了」をクリックしてプロファイル管理ツールを閉じます。
    - b. サイトの標準的なデータベース定義ツールと手順を使用して、プロファイル管理ツールにより生成されたスクリプトを編集して実行し、WPRCSDB データベース (または、システムで別の名前が設定されている場合はそれに相当するデータベース) を作成するか、または作成して構成する必要があります。このスクリプトの場所は、357 ページの『プロファイル管理ツールを使用した共通データベースおよび Common Event Infrastructure データベースの構成』トピックの 2 (358 ページ) のステップで指定しました。435 ページの『プロファイルの作成後または拡張後の共通データベースとテーブルの作成』または 436 ページの『プロファイルの作成後または拡張後の共通データベースでのテーブルの作成』にある、新規の共通データベースまたはテーブルを既存の共通データベースに手動で作成する方法について説明している各トピックも参照してください。各データベースの構成が完了したら、162 ページの『ファースト・ステップ・コンソールの開始』で説明されているように、プロファイルに関連付けられているファースト・ステップ・コンソールを開始します。

## タスクの結果

WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Bus のプロファイルの作成が完了しました。

プロファイル内のノードには、名前が dmgr であるデプロイメント・マネージャーがあります。

## 次のタスク

デプロイメント・マネージャーを開始する前に、データベースがローカルに配置されている場合でも、データベース・インスタンスが実行されていることを確認します。次に、ファースト・ステップ・コンソールから「デプロイメント・マネージャ

一の始動」を選択して、サーバーが作動することを確認します。出力ウィンドウが開きます。次のようなメッセージが表示される場合、デプロイメント・マネージャーは正常に作動しています。

```
ADMU3000I: サーバー dmgr が e-ビジネス用にオープン。プロセス ID は 3072  
(Server dmgr open for e-business; process id is 3072)
```

デプロイメント環境内にあるカスタム・ノードを構成して、デプロイメント環境パターンを完了させます。

インストールの計画について詳しくは、『WebSphere Process Server の計画』の各トピックを参照してください。

### プロファイル管理ツールを使用した共通データベースおよび Common Event Infrastructure データベースの構成:

選択された WebSphere Process Server コンポーネントを操作するには、共通データベースと Common Event Infrastructure ローカル・データベースというデータベースが必要になります。プロファイル管理ツールは、データベースの構成パネルで指定された値に基づき、これらのデータベースと必要なテーブルをローカル・システム上に自動的に作成します。インストール済み環境で実際に作業するには、これらのデータベースを構成する必要があります。

#### 始める前に

**注:** i5/OS データベースへの参照では、データベース・コレクションが参照されます。

この手順では、プロファイル管理ツールをすでに開始しており、「高度なプロファイル作成」または「デプロイメント環境プロファイル作成」あるいは「高度なプロファイル拡張」または「デプロイメント環境プロファイル拡張」オプションによって、プロファイルの作成または拡張を選択済みであることを前提とします。以下のうちいずれか 1 つのトピックの手順を実行します。

- 347 ページの『カスタマイズした値を使用したスタンドアロン・サーバー・プロファイルの構成』
- 375 ページの『カスタマイズした値を使用したデプロイメント・マネージャー・プロファイルの構成』
- 405 ページの『デプロイメント環境用のデプロイメント・マネージャー・プロファイルの構成』

これは、トピックの中で、「データベース構成」パネルに入力することによって、共通データベースを構成する手順のステップです。

#### このタスクについて

以下の WebSphere Process Server コンポーネントは、共通データベースを使用します。

- Application Scheduler
- ビジネス・ルール・グループ
- メディエーション
- リカバリー

- リレーションシップ・サービス
- セレクター
- イベント順序付け (ロック・マネージャー)
- Enterprise Service Bus ロガー・メディエーション・プリミティブ
- メッセージング・エンジン (5 (360 ページ) のステップで説明されている「メッセージング・エンジン (ME) ではこのデータベースを使用します。」チェック・ボックスを選択した場合)。

WebSphere Process Server 製品で使用される各種データベースとデータベース表について詳しくは、『データベースの選択』を参照してください。

**重要:** Derby Network Server をデータベース製品として選択する場合、データベース・ホストがローカルの場合でも、サーバーがプロファイルの作成または拡張時に指定したホストとポートで稼働していることを確認してください。プロファイルを作成または拡張した後のみ、サーバーが実行中であることを確認できます。

#### 手順

1. 「データベース製品の選択」フィールドで、使用するデータベース製品を選択するか、またはデフォルト値の Derby Embedded (スタンドアロン・サーバー・プロファイル用) または Derby Network Server (デプロイメント・マネージャー・プロファイル用) を受け入れます。

#### 制約事項:

- Informix Dynamic Server、Microsoft SQL Server Data Direct、および Microsoft SQL Server Embedded は、デプロイメント環境構成を使用したデプロイメント・マネージャー上ではサポートされません。
  - **i5/OS** DB2 UDB for iSeries (ネイティブ)、DB2for i5/OS (ネイティブ)、および Derby Embedded は、i5/OS で稼働するデータベースとしてローカルでのみ使用できます。Derby Network Server、DB2 UDB for iSeries (ツールボックス)、および DB2 for i5/OS (ツールボックス) は、ローカルおよびリモートのどちらでも i5/OS で使用できます。リストされたその他すべてのデータベースは、適切なリモート・データベース・ドライバが使用されている場合は、i5/OS 上でのみ、リモート・データベースとして使用できます。
2. プロファイル管理ツールによって作成されるデータベースの作成と構成スクリプトを「データベース・スクリプトの出力ディレクトリー」フィールド内のデフォルトの場所以外の場所に保管するには、「生成したスクリプト用の宛先ディレクトリーのオーバーライド」チェック・ボックスを選択して、「データベース・スクリプトの出力ディレクトリー」フィールドに使用する新規の場所を指定します。CommonDB スクリプトも Common Event Infrastructure スクリプトも、デフォルトのルート・ディレクトリーは `<WPS home>/profiles/<profile name>/dbscripts/` です。

以下に例を示します。

Common Event Infrastructure: `<WPS home>/profiles/<profile name>/dbscripts/CEI_<ceiDbName>`

CommonDB: `<WPS home>/profiles/<profile name>/dbscripts/CommonDB/<dbType>/<dbName>`

プロファイル管理ツールに、プロファイルの作成または拡張を自動的に実行させないことを選択した場合、プロファイルの作成または拡張のプロセスによって、ユーザーまたはデータベース管理者が新規のデータベースとそれに必要なテーブルを作成するために手動で実行できるスクリプトが生成されます。(ステップ 4 (359 ページ) で説明しているように、このパネル内の「データベース・スクリプトの実行を遅延 (リモート・データベースを使用する場合は選択する必要があります)」チェック・ボックスを選択して、このデータベースの自動作成と自動構成を実行しないようにします。)

3. データベース名を入力するか、またはデフォルト値を受け入れます。

**i5/OS** **i5/OS プラットフォームの場合:** 独立補助ストレージ・プール (IASP: Independent Auxiliary Storage Pool) を使用する i5/OS 上のデータベースの名前は、IASP という名前である可能性があります。

デフォルトの共通データベース名は、データベース製品に基づいて以下のように異なります。

- **i5/OS** \*LOCAL: DB2 UDB for iSeries (ネイティブ) および DB2 for i5/OS (ネイティブ) の場合。
- **i5/OS** \*SYSBAS: DB2 UDB for iSeries (ツールボックス) および DB2 for i5/OS (ツールボックス) の場合。
- WPRCSDB 他のすべてのデータベース製品用

デフォルトの Common Event Infrastructure データベース名は、データベース製品に基づいて以下のように異なります。

- **i5/OS** \*LOCAL: DB2 UDB for iSeries (ネイティブ) および DB2 for i5/OS (ネイティブ) の場合。
- **i5/OS** \*SYSBAS: DB2 UDB for iSeries (ツールボックス) および DB2 for i5/OS (ツールボックス) の場合。
- EVENT: 他のすべてのデータベース製品用。

既存のデータベースを使用する場合は、この名前がそのデータベースの名前と一致していなければなりません。新規データベースを作成する場合、指定した名前が既に別の WebSphere Process Server プロファイルに関連付けられていた場合は、異なるデータベース名を使用する必要があります。

**注:** **i5/OS** これは i5/OS には適用されません。i5/OS 上のすべてのプロファイルで同じデータベース名が使用されます。

**注:** 注: 実際の Oracle データベース名 (dbName) は Oracle ID (SID) です。テーブルを作成する際は、このデータベース名が存在している必要があります。このデータベース名は、共通データベースと Common Event Infrastructure データベース間で共用することができます。新規プロファイルを作成する前に、すべての Oracle データベース・リソースを削除することをお勧めします。これは、Common Event Infrastructure データベースによってテーブル・スペースなどの固有のデータベース・リソースが作成されるため、そのデータベース・リソースが Oracle サーバーに既に存在する場合に障害が発生してしまうためです。

4. プロファイル管理ツールによって自動的にローカル・データベースが作成および構成されることも、プロファイルの作成または拡張時に既存のローカル・データベースに表が作成されることも望まない場合は、「データベース・スクリプトの実行を遅延 (リモート・データベースを使用する場合は選択する必要がある)」チェック・ボックスを選択します。このチェック・ボックスを選択しなかった場合は、ローカル・データベースが作成されます。このオプションを選択した場合は、ユーザーまたはデータベース管理者は、このパネル上の「データベース・スクリプトの出力ディレクトリー」フィールドで指定された場所にプロファイル管理ツールによって作成および保管されるスクリプトを手動で実行する必要があります。新規の共通データベースの手動での作成および構成、または既存のデータベース内でのテーブルの作成についての説明は、435 ページの『プロファイルの作成後または拡張後の共通データベースとテーブルの作成』または 436 ページの『プロファイルの作成後または拡張後の共通データベースでのテーブルの作成』を参照してください。

**重要:** 以下のディレクトリーにあるスクリプトは使用しないでください (変数の `db_type` は、サポートされるデータベース製品を表します)。

- **Linux** **UNIX** `install_root/dbscripts/CommonDB/db_type`
- **Windows** `install_root¥dbscripts¥CommonDB¥db_type`

これらは、プロファイル管理ツールによって更新されていないデフォルトのスクリプトです。

**制約事項:** 以下の構成の場合、「データベース・スクリプトの実行を遅延 (リモート・データベースを使用する場合は選択する必要がある)」オプションは選択できません。

- Derby Embedded または Derby Network Server 製品を選択した場合。
- Network Deployment 環境の場合。

次のステップは、スタンドアロン・サーバー・プロファイルを作成または拡張する場合とデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成または拡張する場合とで異なります。

作成または拡張するプロファイルのタイプ	次のステップ
スタンドアロン・サーバー	ステップ 5 (360 ページ) に進んでください。
デプロイメント・マネージャー	ステップ 7 (361 ページ) に進んでください。

5. **スタンドアロン・サーバー・プロファイル場合のみ:** メッセージング・エンジンでファイル・ストアを使用するには、「メッセージング・エンジン (ME) ではファイル・ストアを使用します。 (Use a file store for Messaging Engines (MEs))」チェック・ボックスを選択します。このチェック・ボックスを選択すると、メッセージング・エンジンがファイル・ストア上に作成および構成されます (Common Event Infrastructure のメッセージング・エンジンを除きます。このメッセージング・エンジンでは、このオプションを選択しても、Derby Embedded のローカル・データベースが使用されます)。このチェック・ボックスを選択せず、6 (360 ページ) のステップで説明されている「メッセージング・エンジン (ME) ではこのデータベースを使用します。」チェック・ボックスも選択しない場合は、メッセージング・エンジンは、デフォルトの Derby Embedded データベ

ース上に作成および構成されます。 Derby Embedded データベースは、リモート・ワークステーション上に作成することはできません。ファイル・ストアについて詳しくは、WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 6.1 のインフォメーション・センターにある『ファイル・ストア』を参照してください。

6. **スタンドアロン・サーバー・プロファイルのみの場合:** 「メッセージング・エンジン (ME) ではこのデータベースを使用します」チェック・ボックスを選択して、メッセージング・エンジンで共通データベースを使用します。 このチェック・ボックスを選択せず、5 (360 ページ) のステップで説明されている「**メッセージング・エンジン (ME) ではファイル・ストアを使用します。 (Use a file store for Messaging Engines (MEs))**」チェック・ボックスも選択しない場合は、メッセージング・エンジンは、デフォルトの Derby Embedded データベース上に作成および構成されます。 Derby Embedded データベースは、リモート・ワークステーション上に作成することはできません。データ・ストアについて詳しくは、WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 6.1 のインフォメーション・センターにある『データ・ストア』を参照してください。

**制約事項:** このオプションは、Derby Embedded 製品を選んだ場合は選択できません。

7. 「次へ」をクリックします。 次のステップは、作成または拡張するプロファイルのタイプ、および選択したデータベース製品によって異なります。

作成または拡張するプロファイルのタイプ	次のステップ
Derby Embedded のデフォルト値を選択済みのスタンドアロン・サーバー・プロファイル。	「プロファイルの要約」パネルが表示されません。 347 ページの『カスタマイズした値を使用したスタンドアロン・サーバー・プロファイルの構成』のステップ 15 (355 ページ) に戻ります。

作成または拡張するプロファイルのタイプ	次のステップ
<p>選択済みの <i>Derby Embedded</i> 以外のデータベース製品のスタンドアロン・サーバー・プロファイル。</p> <p>選択したデータベース製品のデプロイメント・マネージャー・プロファイル。</p>	<p>「データベース構成 (第 2 部)」パネルが、選択したデータベース製品に固有のフィールドを伴って表示されます。このパネルでの入力方法については、361 ページの『共通データベース構成のための「データベース構成 (第 2 部)」パネル』のトピックを参照してください。このパネルの情報入力が完了したら、「次へ」をクリックします。ツールにより、有効なデータベース接続が存在することが確認されます。データベース接続が存在していない場合は、続行する前に、データベースを始動するか、指定したパラメーターを変更して、この問題を修正する必要があります。「プロファイルの要約」パネルが表示されます。このパネルへのアクセス元のトピックに応じて、以下のいずれかの手順に戻ります。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 347 ページの『カスタマイズした値を使用したスタンドアロン・サーバー・プロファイルの構成』トピックのステップ 15 (355 ページ)</li> <li>• 375 ページの『カスタマイズした値を使用したデプロイメント・マネージャー・プロファイルの構成』トピックのステップ 10 (380 ページ)</li> <li>• 405 ページの『デプロイメント環境用のデプロイメント・マネージャー・プロファイルの構成』トピックのステップ 9 (411 ページ)</li> </ul>

### 共通データベース構成のための「データベース構成 (第 2 部)」パネル:

プロファイル管理ツールの「データベースの構成」パネルでデータベース製品を選択すると、後続のパネルにより、データベース固有の情報を入力するよう求められます。このパネル (スタンドアロン・サーバー・プロファイルの構成時に *Derby Embedded* を選択した場合は表示されません) は、「データベース構成 (第 2 部)」パネルと呼ばれます。このパネルのフィールドやデフォルト値は、選択したデータベース製品に応じて若干異なります。

「データベース構成 (第 2 部)」パネルで、「データベース・スクリプトの実行を遅延」チェック・ボックスを選択して、新規データベースの作成または既存のデータベースへのテーブルの追加を先送りすることを選択する場合でも、このパネルの入力を行う必要があります。このパネルで選択する値は、プロファイル管理ツールにより作成され、前のパネルの「データベース・スクリプトの出力ディレクトリー」フィールドで指定したディレクトリーに保管されるデータベース構成スクリプトに追加されます。

**制約事項:** DB2 for z/OS V8 または V9、Oracle 9i、Oracle 10g、または 11g を使用する場合は、新規データベースを作成できません。このいずれかのデータベースを選択する場合に「新規ローカル・データベースを作成する」オプションを選択すると、「次へ」ボタンは使用不可になります。「データベース構成」パネルで、別の選択を行ってください。

「データベースの構成 (第 2 部)」パネルに入力する方法を調べるには、ご使用のデータベース製品へのリンクを以下のリストから選択します。

- 363 ページの『Derby Network Server』
- 363 ページの『DB2 Universal Database』
- 364 ページの『DB2 for z/OS V8 および V9』
- 365 ページの『DB2 UDB for iSeries (ツールボックス)』
- **i5/OS** 365 ページの『DB2 UDB for iSeries (ネイティブ)』
- 366 ページの『DB2 Universal Runtime Client』
- 367 ページの『Informix Dynamic Server』
- 367 ページの『Microsoft SQL Server Embedded』
- 368 ページの『Microsoft SQL Server Data Direct 』
- 369 ページの『Oracle 9i』
- 370 ページの『Oracle 10g または 11g』

**重要:** スタンドアロン・サーバー・プロファイルを作成または拡張していて、Derby Embedded データベース製品を選択した場合、追加のデータベース構成は必要ありません。

「データベース構成 (第 2 部)」パネルの入力が完了したら、「次へ」をクリックします。ツールにより、有効なデータベース接続が存在することが確認されます。ツールでエラーが検出される場合は、データベースが稼働中であることを確認するか、接続を正常にするためにパラメーターを変更して、問題を訂正してから続行する必要があります。

「プロファイルの要約」パネルが表示されます。このパネルへのアクセス元のトピックに応じて、以下のいずれかの手順に戻ります。

- 347 ページの『カスタマイズした値を使用したスタンドアロン・サーバー・プロファイルの構成』トピックのステップ 15 (355 ページ)
- 375 ページの『カスタマイズした値を使用したデプロイメント・マネージャー・プロファイルの構成』トピックのステップ 10 (380 ページ)
- 405 ページの『デプロイメント環境用のデプロイメント・マネージャー・プロファイルの構成』トピックのステップ 9 (411 ページ)

## Derby Network Server

363 ページの表 104 に、Derby Network Server をデータベース製品として選択する場合、「データベースの構成 (第 2 部)」パネルで入力しておく必要があるフィールドを示します。

**重要:** データベース製品として Derby Network Server を選択する場合は、プロファイルの作成または拡張が完了した後、データベース・ホストがローカルの場合で

も、サーバーが必ずプロファイルの作成中に指定したホストおよびポート上で実行するようにしてください。

表 126. *Derby Network Server* の必須の共通データベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベースで認証するユーザー名	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 <code>localhost</code> をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
サーバー・ポート	デフォルト値 <code>1527</code> をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。

## DB2 Universal Database

363 ページの表 105 に、DB2 Universal Database をデータベース製品として選択する場合に「データベース構成 (第 2 部)」パネルで入力しておく必要があるフィールドを示します。

表 127. *DB2 Universal Database* の場合の必須の共通データベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベースで認証するユーザー名	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)	デフォルト値 (Linux、UNIX、または i5/OS プラットフォームの場合は <code>install_root/universalDriver_wbi/lib</code> 、Windows プラットフォームの場合は <code>install_root¥universalDriver_wbi¥lib</code> ) を受け入れるか、またはシステム上で次のファイルが置かれている場所までブラウズします。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• <code>db2jcc.jar</code></li> <li>• <code>db2jcc_license_cu.jar</code> または <code>db2jcc_license_cisuz.jar</code></li> </ul> 指定されたロケーションでファイルが見つからない場合は、エラー・メッセージが表示されます。
JDBC ドライバー・タイプ	デフォルト値 <code>4</code> をそのまま確定するか、正しい JDBC ドライバー・タイプの横にあるラジオ・ボタンを選択します。

表 127. DB2 Universal Database の場合の必須の共通データベース構成フィールド (続き)

フィールド	必要なアクション
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
サーバー・ポート	デフォルト値 50000 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。

### DB2 for z/OS V8 および V9

364 ページの表 106 に、DB2 for z/OS V8 および V9 をデータベース製品として選択する場合に「データベース構成 (その 2)」パネルで入力しておく必要があるフィールドを示します。

表 128. DB2 for z/OS V8 および V9 の場合の必須の共通データベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベースで認証するユーザー名	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)	以下のファイルが格納されているシステム上の場所を入力します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• db2jcc.jar</li> <li>• db2jcc_license_cisuz.jar</li> </ul> 指定されたロケーションでファイルが見つからない場合は、エラー・メッセージが表示されます。
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	データベース・サーバーのホスト名を入力してください。
サーバー・ポート	デフォルト値 446 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。
データベースの別名	データベースの別名を入力してください。
接続のロケーション	接続のロケーションを入力してください。
ストレージ・グループ名	ストレージ・グループ名を入力してください。

### DB2 UDB for iSeries (ツールボックス)

365 ページの表 107 に、DB2 UDB for iSeries (ツールボックス) をデータベース製品として選択する場合に「データベース構成 (第 2 部)」パネルで入力する必要があるフィールドを示します。この選択は、DB2 for i5/OS (ツールボックス) の場合にも有効です。

表 129. DB2 UDB for iSeries (ツールボックス) または DB2 for i5/OS (ツールボックス) の必須共通データベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベースで認証するユーザー名	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)	デフォルト値 /QIBM/ProdData/HTTP/Public/jt400/lib (i5/OS プラットフォームの場合) を確定するか、またはシステム上で次のファイルが置かれている場所までブラウズします。  • jt400.jar  指定されたロケーションでファイルが見つからない場合は、エラー・メッセージが表示されます。
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	データベース・サーバーのホスト名を入力してください。
データベース・コレクション名	デフォルト値 WPRCSDB をそのまま確定するか、正しいスキーマ名を入力します。指定したデータベース内で命名の競合を防止するために、スキーマ名を指定するときは、その先頭の 3 文字がデータベース内のその他のスキーマ名と重複しないようにしてください。

### DB2 UDB for iSeries (ネイティブ)

注: **i5/OS** **i5/OS プラットフォーム:** このデータベース構成は、i5/OS プラットフォームにのみ適用されます。

366 ページの表 108 に、DB2 UDB for iSeries (ネイティブ) をデータベース製品として選択する場合に「データベース構成 (第 2 部)」パネルで入力する必要があるフィールドを示します。この選択は、DB2 for i5/OS (ネイティブ) の場合にも有効です。

表 130. DB2 UDB for iSeries (ネイティブ) または DB2 for i5/OS (ネイティブ) の必須共通データベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベースで認証するユーザー名	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。

表 130. DB2 UDB for iSeries (ネイティブ) または DB2 for i5/OS (ネイティブ) の必須共通データベース構成フィールド (続き)

フィールド	必要なアクション
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)	デフォルト値 /QIBM/ProdData/Java400/ext (i5/OS プラットフォームの場合) を確定するか、またはシステム上で次のファイルが置かれている場所までブラウズします。  • db2_classes.jar  指定されたロケーションでファイルが見つからない場合は、エラー・メッセージが表示されます。
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	データベース・サーバーのホスト名を入力してください。
データベース・コレクション名	デフォルト値 WPRCSDB をそのまま確定するか、正しいスキーマ名を入力します。指定したデータベース内で命名の競合を防止するために、スキーマ名を指定するときは、その先頭の 3 文字がデータベース内のその他のスキーマ名と重複しないようにしてください。

## DB2 Universal Runtime Client

366 ページの表 109 に、DB2 Universal Runtime Client をデータベース製品として選択する場合に「データベース構成 (その 2)」パネルで入力しておく必要があるフィールドを示します。

表 131. DB2 Universal Runtime Client の場合の必須の共通データベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベースで認証するユーザー名	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)	db2java.zip ファイルが格納されているシステム上の場所を入力します。指定されたロケーションでファイルが見つからない場合は、エラー・メッセージが表示されます。
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	データベース・サーバーのホスト名を入力してください。
サーバー・ポート	デフォルト値 50000 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。
DB2 ノード名 (8 文字以下)	DB2 ノード名を入力してください。

## Informix Dynamic Server

367 ページの表 110 に、Informix Dynamic Server をデータベース製品として選択する場合に「データベース構成 (その 2)」パネルで入力しておく必要があるフィールドを示します。

表 132. Informix Dynamic Server の場合の必須の共通データベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベースで認証するユーザー名	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)	以下のファイルが格納されているシステム上の場所を入力します。 <ul style="list-style-type: none"><li>• ifxjdbc.jar</li><li>• ifxjdbcx.jar</li></ul> 指定されたロケーションでファイルが見つからない場合は、エラー・メッセージが表示されます。
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
データベース・サーバー名	データベース・サーバー名を入力してください。
サーバー・ポート	デフォルト値 1526 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。
イベント・サービスのインスタンス名	正しいイベント・サービスのインスタンス名を入力してください。

## Microsoft SQL Server Embedded

368 ページの表 111 に、Microsoft SQL Server Embedded をデータベース製品として選択する場合に「データベース構成 (第 2 部)」パネルで入力しておく必要があるフィールドを示します。

注: Microsoft SQL Server (Embedded) - Microsoft SQL Server 用の WebSphere Connect JDBC ドライバー (Data Directより) は、リリース 6.2 から非推奨になりました。次のリリースの新しい Microsoft SQL Server JDBC ドライバー、または WebSphere Process Server および WebSphere Enterprise Service Bus のフィックスパックによって置き換えられます。

表 133. Microsoft SQL Server Embedded の場合の必須の共通データベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベースで認証するユーザー名	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。

表 133. Microsoft SQL Server Embedded の場合の必須の共通データベース構成フィールド (続き)

フィールド	必要なアクション
パスワードの確認	パスワードを確認します。
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
データベース・サーバー名	データベース・サーバー名を入力してください。
サーバー・ポート	デフォルト値 1433 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。
管理ユーザー名	データベースおよびユーザーの作成および除去の特権を持つユーザー ID を入力するか、デフォルト値「sa」を受け入れます。この ID は、前の画面で「データベース・スクリプトの実行の遅延」オプションを選択していない場合に必要になります。
パスワード	「管理ユーザー名」 ID ユーザーのパスワードを入力します。
パスワードの確認	パスワードを確認します。

### Microsoft SQL Server Data Direct

368 ページの表 112 に、Microsoft SQL Server Data Direct をデータベース製品として選択する場合に「データベース構成 (第 2 部)」パネルで入力しておく必要があるフィールドを示します。

表 134. Microsoft SQL Server Data Direct の場合の必須の共通データベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベースで認証するユーザー名	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。

表 134. Microsoft SQL Server Data Direct の場合の必須の共通データベース構成フィールド (続き)

フィールド	必要なアクション
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)	<p>以下のファイルが格納されているシステム上の場所を入力します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• sqlserver.jar</li> <li>• base.jar</li> <li>• util.jar</li> </ul> <p>また、ファイル spy.jar が、JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーションに対する次の相対ロケーションで使用可能である必要があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>Linux</b> <b>UNIX</b> ../spy/spy.jar</li> <li>• <b>Windows</b> ..%spy%spy.jar</li> </ul> <p>指定されたロケーションでファイルが見つからない場合は、エラー・メッセージが表示されます。</p>
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
データベース・サーバー名	データベース・サーバー名を入力してください。
サーバー・ポート	デフォルト値 1433 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。

## Oracle 9i

369 ページの表 113 に、Oracle 9i をデータベース製品として選択する場合、「データベースの構成 (第 2 部)」パネルで入力しておく必要があるフィールドを示します。

表 135. Oracle 9i の必須の共通データベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベース・サーバーのインストール・ディレクトリー	データベース・サーバーのインストール先を入力するか、または参照します。前の画面で、「データベース・スクリプトの実行の遅延」オプションを選択した場合に必要になります。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)	ファイル ojdbc14.jar が格納されているシステム上の場所を入力します。指定されたロケーションでファイルが見つからない場合は、エラー・メッセージが表示されます。
JDBC ドライバー・タイプ	<b>OCI</b> または <b>Thin</b> をクリックします。

表 135. Oracle 9i の必須の共通データベース構成フィールド (続き)

フィールド	必要なアクション
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
サーバー・ポート	デフォルト値 1521 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。
管理ユーザー名	データベースおよびユーザーの作成および除去の特権を持つユーザー ID を入力します。前の画面で、「データベース・スクリプトの実行の遅延」オプションを選択していない場合に必要になります。
パスワード	「管理ユーザー名」 ID ユーザーのパスワードを入力します。
パスワードの確認	パスワードを確認します。

### Oracle 10g または 11g

370 ページの表 114 に、Oracle 10g または 11g をデータベース製品として選択する場合、「データベースの構成 (第 2 部)」パネルで入力しておく必要があるフィールドを示します。

**重要:** Oracle 11g では、プロファイルを作成する前に、SYSDBA 特権のあるユーザー ID を取得している必要があります。

表 136. Oracle 10g または 11g の必須の共通データベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベース・サーバーのインストール・ディレクトリー	データベース・サーバーのインストール先を入力するか、または参照します。前の画面で、「データベース・スクリプトの実行の遅延」オプションを選択した場合に必要になります。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)	ファイル ojdbc14.jar が格納されているシステム上の場所を入力します。指定されたロケーションでファイルが見つからない場合は、エラー・メッセージが表示されます。
JDBC ドライバー・タイプ	<b>OCI</b> または <b>Thin</b> をクリックします。
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
サーバー・ポート	デフォルト値 1521 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。

表 136. Oracle 10g または 11g の必須の共通データベース構成フィールド (続き)

フィールド	必要なアクション
管理ユーザー名	データベースおよびユーザーの作成および除去の特権を持つユーザー ID を入力します。前の画面で、「データベース・スクリプトの実行の遅延」オプションを選択していない場合に必要になります。
パスワード	「管理ユーザー名」 ID ユーザーのパスワードを入力します。
パスワードの確認	パスワードを確認します。

## デプロイメント環境用のカスタム・プロファイル (管理対象ノード) の構成

既存のデプロイメント環境パターンで使用する (カスタマイズした構成値) カスタム・プロファイルを作成できます。このトピックでは、プロファイル管理ツールを使用して、WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルを作成および構成する方法を説明します。

### 始める前に

このトピックでは、プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成または拡張し、240 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの作成』または 278 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの拡張』のいずれかの手順に従うことを前提としています。すなわち、プロファイル管理ツールをすでに開始しており、カスタム・プロファイルの作成または拡張を選択し、「デプロイメント環境」プロファイル作成または拡張オプションを選択しているということです。

### このタスクについて

「デプロイメント環境」プロファイル作成オプションまたは拡張オプションを選択して、デプロイメント環境に合わせて完全に構成されたプロファイルをセットアップします。このオプションは、WebSphere Process Server が動作するために必要なすべてのコンポーネントを構成してインストールします。以下のコンポーネントがこのオプションの一環として構成されます。

- Business Process Choreographer
- Common Event Infrastructure
- Business Rules Manager
- Service Component Architecture

このタイプの構成では、ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホストの名前などの設定に独自の値を指定することができます。デプロイメント環境パターンが既に定義されている既存のデプロイメント・マネージャーにノードを統合する方法を指定する必要があります。また、そのデプロイメント環境に定義するクラスター、および共通データベースの構成用の独自の値を指定することもできます。

278 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの拡張』または 240 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの作成』の手順に従うと、「フェデレーション」パネルまたは「プロファイル名およびロケーション」パネルが表示されます。以下の手順を実行して、新規カスタム・プロファイルをデプロイメント環境用にカスタマイズした構成値で構成します。

## 手順

1. プロファイル管理ツールに表示されるパネルは、プロファイルを作成するのか拡張するのかによって異なります。

タスク	最初のステップ
「デプロイメント環境プロファイル拡張」	「フェデレーション (Federation)」パネルが表示されます。ステップ 4 (430 ページ) に進んでください。
「デプロイメント環境プロファイル作成」	「プロファイル名およびロケーション」パネルが表示されます。ステップ 2 に進んでください。

2. 「デプロイメント環境プロファイル作成」の場合のみ: 「プロファイル名およびロケーション」パネルで、以下のステップを実行します。

- a. プロファイルに固有の名前とディレクトリー・パスを指定するか、またはデフォルト値を受け入れます。

作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。

指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルト・ディレクトリーはプラットフォームに応じて異なります。

- **i5/OS** `user_data_root/profiles/profile_name`
- **Linux** **UNIX** `install_root/profiles/profile_name`
- **Windows** `install_root¥profiles¥profile_name`

ここで、`profile_name` は指定した名前です。以下の場合は、エラー・メッセージが表示されます。

- 指定した `profile_name` が固有ではない。
  - 指定したディレクトリーが空ではない。
  - 使用しているユーザー ID に、このディレクトリーに対する十分な権限がない。
  - プロファイルを作成するための十分なスペースがない。
- b. 「デフォルトにするプロファイル」チェック・ボックスを選択して、作成するプロファイルをデフォルト・プロファイルにする (コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようにする) こともできます。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

マシンで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。

デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの bin ディレクトリーから実行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。マシン上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。詳しくは、651 ページの『複数プロファイル環境のプロファイル・コマンド』を参照してください。

プロファイル管理ツールは、ほかの WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出しますが、指定されたポートを使用する可能性がある他のアプリケーションのポートは検出しません。カスタム・プロファイルを統合すると、**addNode** コマンドは、競合しないポートを使用します。つまり、プロファイルを作成する際にはデフォルトのポート割り当てを使用し、**addNode** コマンドでノードを統合する際に、競合しないポートを指定することができます。ポート割り当ては、サーバー上で固有でなければなりません。別のサーバーのサーバー・プロセスは、競合なしで同じポート割り当てを使用することができます。

- c. 「次へ」をクリックします。(「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このパネルが再表示されたときに、このパネルで手動で名前を変更しなければならないことがあります。)

「ノード名およびホスト名」パネルが表示されます。

3. 「**デプロイメント環境プロファイル作成**」の場合のみ: 「ノード名およびホスト名」パネルで、プロファイルにノード名およびホスト名を指定するか、またはデフォルト値を受け入れて「次へ」をクリックします。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。ノードおよびホストの命名時に考慮する必要がある予約済みの用語やその他の問題については、633 ページの『プロファイル、ノード、ホスト、およびセルの命名の考慮事項』を参照してください。

「フェデレーション (Federation)」パネルが表示されます。

4. 「フェデレーション」パネルで、プロファイルの作成または拡張の一部として、ここでノードをデプロイメント・マネージャーに統合する必要があります。「**後でこのノードを統合する**」チェック・ボックスは、このタイプのプロファイルの作成または拡張用の「フェデレーション」パネル上には表示されません。デプロイメント・マネージャーのホスト名または IP アドレスと SOAP ポート、および認証ユーザー ID とパスワードを指定します。次に、「次へ」をクリックします。

デプロイメント・マネージャーの SOAP ポート番号を調べるには、このカスタム・プロファイルに関連付けられているデプロイメント・マネージャーの *dmgr\_profile\_root/logs* ディレクトリーに移動します。このディレクトリーで、*AboutThisProfile.txt* ファイルを開き、「デプロイメント・マネージャーの SOAP コネクター・ポート:」という項目の値を調べます。

プロファイル管理ツールによって、デプロイメント・マネージャーが存在し、通信が可能であること、および認証ユーザー ID とパスワードがそのデプロイメント・マネージャーに有効であることが検査されます。また、有効なデプロイメン

ト環境がデプロイメント・マネージャー上に定義されていることも検査され、パターンとデータベース・タイプがデプロイメント・マネージャーから取得されま  
す。

**重要:** 以下の項目のいずれかに該当する場合は、ノードを統合しないでください。

- このカスタム・ノードをマイグレーション・ターゲットとして使用する予定がある。
- 別のプロファイルが統合されている (ノードの統合はシリアライズする必要があります)。
- デプロイメント・マネージャーが稼働していないか、実行しているかどうか  
が不明。
- そのデプロイメント・マネージャーは、まだ WebSphere Process Server デ  
プロイメント・マネージャーに拡張されていない。 WebSphere Process Server  
プロファイルは WebSphere Enterprise Service Bus デプロイメント・マネー  
ジャーを使用できませんが、WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルは  
WebSphere Process Server デプロイメント・マネージャーを使用できます。
- デプロイメント・マネージャーが、作成または拡張するカスタム・プロファイ  
ルと同じか、それより高いリリース・レベルではない。
- デプロイメント・マネージャーで、JMX 管理ポートが有効になっていない。
- デプロイメント・マネージャーが、デフォルトではないリモート・メソッド呼  
び出し (RMI) を優先 Java Management Extensions (JMX) コネクタとして使  
用するよう再構成されている。(優先コネクタ・タイプを確認するには、デ  
プロイメント・マネージャーの管理コンソールで「システム管理」>「デプロ  
イメント・マネージャー」>「管理サービス」を選択します。)

デプロイメント・マネージャーが実行中でないとき、またはほかの理由で使用  
できないときにカスタム・ノードを統合しようとする、警告パネルが表示され  
て、続行できなくなります。この警告パネルが表示されたら、「OK」をクリッ  
クしてこの警告パネルを終了し、プロファイルの作成または拡張を取り消し、シ  
ステムに必要な変更を行ってください。

次のステップは、プロファイルを作成するのか拡張するのによって異なりま  
す。

タスク	次のステップ
「デプロイメント環境プロファイル作成」	「ポート値の割り当て」パネルが表示されま す。ステップ 5 に進んでください。
「デプロイメント環境プロファイル拡張」	「デプロイメント環境構成」パネルが表示さ れます。ステップ 6 (432 ページ) に進んでく ださい。

5. 「デプロイメント環境プロファイル作成」の場合のみ: プロファイルに指定され  
たポートが固有であることを確認して、「次へ」をクリックします。

プロファイル管理ツールは、ほかの WebSphere 製品によって現在使用されてい  
るポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定され

たポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。

以下の条件が満たされる場合、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーによって実行されたインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている場合。
- ポートが現在使用中の場合。

「ポート値の割り当て」パネルにアクセスするときにはポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」パネルで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポート競合が疑われる場合、プロファイルの作成後に調査できます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

- **i5/OS** `profile_root/properties/portdef.props`
- **Linux** **UNIX** `profile_root/properties/portdef.props`
- **Windows** `profile_root\properties\portdef.props`

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てするには、WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 6.1 インフォメーション・センターのトピック

『Updating ports in an existing profile』を参照し、**ws\_ant** スクリプトによって `updatePorts.ant` ファイルを実行します。

「デプロイメント環境構成」パネルが表示されます。

6. 「デプロイメント環境構成」パネルで、少なくとも 1 つのクラスターを選択し、このノードをデプロイメント環境パターンに割り当て、「次へ」をクリックします。デプロイメント・マネージャーで前に定義されたデプロイメント環境パターンに基づいて、以下のクラスターが 1 つから 3 つ、パネルに表示されません。

表 137. 既存のデプロイメント・マネージャー上のデプロイメント環境パターンによって提供されるクラスター

デプロイメント・マネージャーのデプロイメント環境パターン	提供されるクラスター
リモート・メッセージングおよびリモート・サポート	<ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>アプリケーション・デプロイメントのターゲット:</b> ユーザー・アプリケーションをデプロイする必要があるクラスター 1 つで構成されます。</li> <li>• <b>メッセージング・インフラストラクチャー:</b> メッセージング・エンジンが配置されるクラスター 1 つで構成されます。</li> <li>• <b>サポート・インフラストラクチャー:</b> ご使用のシステムの管理に使用される Common Event Infrastructure サーバーおよびその他のインフラストラクチャー・サービスをホスティングするクラスター 1 つで構成されます。</li> </ul>
リモート・メッセージング	<ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>アプリケーション・デプロイメントのターゲット:</b> ユーザー・アプリケーションをデプロイする必要があるクラスター 1 つで構成されます。リモート・メッセージングのデプロイメント環境パターンを使用すると、アプリケーション・デプロイメントのターゲット・クラスターは、サポート・インフラストラクチャー・クラスターの機能も果たします。</li> <li>• <b>メッセージング・インフラストラクチャー:</b> バス・メンバーが配置されている 1 つのクラスターから構成されます。</li> </ul>
単一クラスター	<ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>アプリケーション・デプロイメントのターゲット:</b> ユーザー・アプリケーションをデプロイする必要があるクラスター 1 つで構成されます。単一クラスターのデプロイメント環境パターンを使用すると、アプリケーション・デプロイメントのターゲット・クラスターは、メッセージング・インフラストラクチャー・クラスターおよびサポート・インフラストラクチャー・クラスターの機能も果たします。</li> </ul>

詳しくは、以下のトピックを参照してください。

- **デプロイメント環境パターン。** デプロイメント環境パターンは、デプロイメント環境に含まれるコンポーネントとリソースの制約と要件を指定します。 デプロイメント環境パターンは、お客様がデプロイメント環境を最も簡単な方法で作成できるよう支援することを目的とし、大半のビジネス要件を満たせるように設計されています。
- **デプロイメント環境の機能。** 堅固なデプロイメント環境を設計するためには、各クラスターが特定の IBM 提供のデプロイメント環境パターンまたはカスタ

ム・デプロイメント環境に提供できる機能について理解しておく必要があります。この知識は、ニーズに最も合うデプロイメント環境パターンを正しく判別するのに役立ちます。

「データベースの構成」パネルが表示されます。

7. 「データベース構成」パネルで、以下の手順を実行します。
  - a. データベース製品を確認します。このカスタム・プロファイルの統合先のデプロイメント・マネージャーで使用されているデータベースと一致するデータベースが表示されます。

**注:** **i5/OS** DB2 UDB for iSeries (ネイティブ) および DB2 for i5/OS (ネイティブ) には、i5/OS プラットフォームでローカルにアクセスできます。Derby Network Server、DB2 UDB for iSeries (ツールボックス) および DB2 for i5/OS (ツールボックス) には、ローカルとリモートの両方でアクセスできます。他のすべてのデータベースも i5/OS システムで引き続き使用できますが、リモート・データベースとしてのみ使用できます。

- b. データベースの JDBC ドライバー・クラス・パス・ファイルのロケーション (ディレクトリー) を指定します。Derby Network Server および DB2 Universal Database の各デフォルト値を受け入れることができます。
  - c. 「次へ」をクリックします。

「プロファイルの要約」パネルが表示されます。

8. 「プロファイルの要約」パネルで、「作成」または「拡張」をクリックしてプロファイルを作成または拡張するか、あるいは「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。

プロファイルの作成または拡張が完了すると、「プロファイル完了 (Profile complete)」パネルに「プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に作成されました」または「プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に拡張されました」というメッセージが表示されます。

9. 「プロファイル完了 (Profile complete)」パネルで、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」または「別のプロファイルの作成 (Create another profile)」、あるいはこの両方を選択します。終了するには、「終了」をクリックします。ファースト・ステップ・コンソールを使用して、製品資料にアクセスします。「別のプロファイルの作成 (Create another profile)」オプションを使用してプロファイル管理ツールを再始動し、追加のプロファイルを作成します。

## タスクの結果

以下のいずれかの作業が完了しました。

- WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus のプロファイルの作成。
- WebSphere Application Server、WebSphere Application Server Network Deployment、または WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルの WebSphere Process Server プロファイルへの拡張。

- WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment プロファイルの WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルへの拡張。

### 次のタスク

デプロイメント・マネージャーを使用して、ノードをカスタマイズします。割り当てられていないクラスター・メンバーがある場合は、カスタム・ノードをさらに追加することができます。

## プロファイルの作成後または拡張後の共通データベースとテーブルの作成

プロファイル管理ツールの「データベース構成」パネルで「データベース・スクリプトの実行を遅延 (リモート・データベースを使用する場合は選択する必要がある)」チェック・ボックスを選択して共通データベースとテーブルの作成を延期した場合は、インストール実行者またはデータベース管理者がデータベースとテーブルを手動で作成する必要があります。これらは、プロファイルの作成時または拡張時にプロファイル管理ツールによって生成されるスクリプトを使用すると作成できます。

### 始める前に

このトピックは、スタンドアロン・サーバーまたはデプロイメント・マネージャー・プロファイルを、次のいずれかのトピックの手順に従って作成または拡張済みであることを前提としています。

- 347 ページの『カスタマイズした値を使用したスタンドアロン・サーバー・プロファイルの構成』
- 375 ページの『カスタマイズした値を使用したデプロイメント・マネージャー・プロファイルの構成』
- 405 ページの『デプロイメント環境用のデプロイメント・マネージャー・プロファイルの構成』

また、プロファイル管理ツールの「データベース構成」パネルで「新規ローカル・データベースを作成する」ラジオ・ボタンを選択し、さらに「データベース・スクリプトの実行を遅延 (リモート・データベースを使用する場合は選択する必要がある)」チェック・ボックスを選択して、共通データベースおよびそのテーブルの作成を延期したことも前提としています。

### このタスクについて

WebSphere Process Server のインストール済み環境では、共通データベースが機能することが不可欠であるため、プロファイル管理ツールによる共通データベースの自動作成を許可しなかった場合は、プロファイルの作成時または拡張時にプロファイル管理ツールによって生成されるスクリプトを使用して、インストール実行者またはデータベース管理者が、この段階でデータベースとテーブルを手動で作成する必要があります。

### 手順

1. i5/OS プラットフォームの場合は configCommonDB スクリプト、Linux および UNIX プラットフォームの場合は configCommonDB.sh スクリプト、Windows プラットフォームの場合は configCommonDB.bat スクリプトが含まれるディレクトリに移動します。これは、プロファイル管理ツールの「データベース構成」パネルの「データベース・スクリプト出力ディレクトリ」フィールドで指定したロケーションです。デフォルトのロケーションは以下のとおりです。

- **i5/OS** `profile_root/dbscripts/CommonDB/db_type/db_name`
- **Linux** **UNIX** `profile_root/dbscripts/CommonDB/db_type/db_name`
- **Windows** `profile_root¥dbscripts¥CommonDB¥db_type¥db_name`

変数 `db_type` はサポートされるデータベース製品を表し、`db_name` はデータベースの名前です。

2. このスクリプトを実行してデータベースおよび必要なテーブルを作成するには、標準のデータベース定義ツール、ネイティブ・コマンド、およびプロシージャーを使用します。このスクリプトには、データベース、テーブル、および索引を作成するための基本的なステートメントのみが含まれています。

## 次のタスク

データベースの作成が正しく完了したら、そのデータベースのインストール先がローカルかどうかにかかわらず、サーバーまたはデプロイメント・マネージャーを始動する前に、データベースが稼働していることを必ず確認してください。次に、プロファイルのファースト・ステップ・コンソールからサーバーまたはデプロイメント・マネージャーを始動し、エラーがないことを確認してください。SystemOut.log ファイルと SystemErr.log ファイルでエラーを確認できます。それらのファイルは以下の場所にあります。

- `profile_root/logs/server_name` (スタンドアロン・プロファイル)
- `profile_root/logs/dmgr` (デプロイメント・マネージャー・プロファイル)

## プロファイルの作成後または拡張後の共通データベースでのテーブルの作成

プロファイル管理ツールの「データベース構成」パネルで「データベース・スクリプトの実行を遅延 (リモート・データベースを使用する場合は選択する必要があります)」チェック・ボックスを選択して既存の共通データベースに必要なテーブルの作成を延期した場合は、インストール実行者またはデータベース管理者がテーブルを手動で作成する必要があります。これらは、プロファイルの作成時または拡張時にプロファイル管理ツールによって生成されるスクリプトを使用すると作成できます。

### 始める前に

このトピックは、スタンドアロン・サーバーまたはデプロイメント・マネージャー・プロファイルを、次のいずれかのトピックの手順に従って作成または拡張済みであることを前提としています。

- 347 ページの『カスタマイズした値を使用したスタンドアロン・サーバー・プロファイルの構成』

- 375 ページの『カスタマイズした値を使用したデプロイメント・マネージャー・プロファイルの構成』
- 405 ページの『デプロイメント環境用のデプロイメント・マネージャー・プロファイルの構成』

また、プロファイル管理ツールの「データベース構成」パネルで「既存のデータベースを使用する」ラジオ・ボタンを選択し、さらに「データベース・スクリプトの実行を遅延 (リモート・データベースを使用する場合は選択する必要がある)」チェック・ボックスを選択して、テーブルの作成を延期したことも前提としています。

## このタスクについて

WebSphere Process Server のインストール済み環境では、共通データベースとテーブルが機能することが不可欠であるため、プロファイル管理ツールによるテーブルの自動作成を許可しなかった場合は、プロファイルの作成時または拡張時にプロファイル管理ツールによって生成されるスクリプトを使用して、インストール実行者またはデータベース管理者が、この段階でテーブルを手動で作成する必要があります。

### 手順

1. テーブル作成スクリプトが含まれるディレクトリーに移動します。i5/OS プラットフォームの場合は `createDBTables`、Linux および UNIX プラットフォームの場合は `createDBTables.sh`、Windows プラットフォームの場合は `createDBTables.bat` というスクリプトです。これは、プロファイル管理ツールの「データベース構成」パネルの「データベース・スクリプト出力ディレクトリー」フィールドで指定したロケーションです。デフォルトのロケーションは以下のとおりです。

- `i5/OS` `profile_root/dbscripts/CommonDB/db_type/db_name`
- `Linux` `UNIX` `profile_root/dbscripts/CommonDB/db_type/db_name`
- `Windows` `profile_root%dbscripts%CommonDB%db_type%db_name`

変数 `db_type` はサポートされるデータベース製品を表し、`db_name` はデータベースの名前です。

2. このスクリプトを実行して必要なテーブルを作成するには、標準のデータベース定義ツール、ネイティブ・コマンド、およびプロシージャを使用します。このスクリプトには、データベース、テーブル、および索引を作成するための基本的なステートメントのみが含まれています。

## 次のタスク

テーブルの作成が正しく完了したら、データベースのインストール先がローカルかどうかにかかわらず、サーバーまたはデプロイメント・マネージャーを始動する前に、データベースが稼働していることを必ず確認してください。次に、プロファイルのファースト・ステップ・コンソールからサーバーまたはデプロイメント・マネージャーを始動し、エラーがないことを確認してください。`SystemOut.log` ファイルと `SystemErr.log` ファイルでエラーを確認できます。それらのファイルは以下の場所にあります。

- `profile_root/logs/server_name` (スタンドアロン・プロファイル)

- `profile_root/logs/dmgr` (デプロイメント・マネージャー・プロファイル)

## i5/OS でのリモート・データベース・サポートの構成

WebSphere Process Server は、DB2 UDB for iSeries または DB2 for i5/OS を、i5/OS に常駐するリモート・データベースとして使用するよう構成できます。z/OS などの他のプラットフォームで WebSphere Process Server を実行する場合は、DB2 UDB for iSeries または DB2 for i5/OS をその製品リポジトリのリモート・データベースとして使用する必要があります。

### このタスクについて

データベースの構成は、スタンドアロン・プロファイルおよびデプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成または拡張に対して固有のものです。データベース構成は、カスタム・プロファイルの作成または拡張時にプロファイル管理ツールを使用して実行されますが、このようなプロファイルでは、デプロイメント・マネージャー・プロファイルに既に構成されているデータベース製品と同じものを使用する必要があります。

プロファイル管理ツールの最終的な目的は、一連の「プロファイル管理ツール」パネルでユーザーが指定する引数で `manageprofiles` コマンドを実行することです。あるいは、プロファイル管理ツールをバイパスし、`manageprofiles Qshell` コマンド行スクリプトを使用して、Java プロパティ・ファイル形式の応答ファイルを使用または使用せずに、プロファイルを作成または拡張することができます。プロファイル管理ツールはグラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) を備えているため、非常に使いやすくなっています。

プロファイルの拡張中に、拡張プロセスを完了するために、データベースとその表の作成またはそれらへのアクセスが必要です。拡張プロセスでは、多くのコンポーネントがデータベース接続を必要とします。オプションで、最初にデータベース定義スクリプトのみを生成し、後で管理者にそれを実行させて DB2 コレクションおよび表を作成してもらうように選択することもできます。

プロファイルの作成および拡張プロセス中に、リモートの DB2 UDB for iSeries または DB2 for i5/OS データベースで構成可能なコンポーネントは以下のとおりです。

- 失敗イベント管理
- Common Event Infrastructure
- リレーションシップ
- リカバリー
- ビジネス・ルール
- ビジネス・スペース
- セレクター
- ロック・マネージャー
- Application Scheduler
- サービス統合 (SI) バス (メッセージング・エンジン)
- エンタープライズ・サービス・バス (ESB) のメッセージ・ロガー

## 次のタスク

これで、リモート・データベースに接続するためのスタンドアロン・プロファイルまたはデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成することができます。

### i5/OS データベースおよびコレクション

分散プラットフォームとは異なり、i5/OS システムまたは論理区画にはシステム共通の DB2 データベースが 1 つだけ存在します。DB2 UDB for iSeries または DB2 for i5/OS (使用している i5/OS オペレーティング・システムのバージョンによります) は、i5/OS オペレーティング・システムと統合されており、インストールする必要がある別個の製品ではありません。

DB2 UDB for iSeries または DB2 for i5/OS は、i5/OS オペレーティング・システムと完全に統合されたリレーショナル・データベースで、その使用および管理を容易にします。

製品には、トリガー、ストアード・プロシージャ、および動的ビットマップ索引付けなどの豊富な機能や特徴があり、さまざまなタイプのアプリケーションにサービスを提供します。こうしたアプリケーションの範囲は、クライアント/サーバー・ソリューションに対応する従来のホスト・ベース・アプリケーションからビジネス・インテリジェンス・アプリケーションにまで及びます。

データベース階層は次のようになります。

(単一データベース) > スキーマ名 > テーブル名

データベースには、以下の 2 つの JDBC ドライバーを使用してアクセスできます。

- ネイティブ JDBC ドライバー: タイプ 2。データベースが WebSphere Application Server ベースのサーバーに対してローカルである場合に使用します。このドライバーは WebSphere Process Server に対してローカルであり、リモート i5/OS マシン上のデータベースにアクセスするためには使用できません。
- ツールボックス JDBC ドライバー: タイプ 4。通常、アクセスされるデータベースが、WebSphere Process Server をホスティングするマシンに対してリモートである場合に使用します。ツールボックス・ドライバーは、データベースがサーバーに対してローカルである場合に使用できますが、ローカル・データベースへのアクセスにはネイティブ・ドライバーが最適であるため、ネイティブ・ドライバーの使用をお勧めします。

ツールボックス JDBC ドライバー・ファイルは、i5/OS 上の単一の固定の場所に格納されます。i5/OS マシンでは、Toolbox for Java JDBC ドライバー・ファイル jt400.jar は、ファイル・システム内の以下の固定の場所に格納されています。

/QIBM/ProdData/Http/Public/jt400/lib/jt400.jar

WebSphere Process Server が分散プラットフォームで実行されていても、i5/OS マシン上の共通データベースにアクセスしている異機種混合環境では、Toolbox for Java JDBC ドライバーが最適な JDBC ドライバーです。ツールボックス JDBC ドライバーのドライバー・ファイルは jt400.jar であり、WebSphere Process Server をホスティングするマシン上で使用できる必要があります。ドライバーは、分散マシン上で、以下の 2 つの方法のいずれかで取得できます。

- i5/OS データベース・マシンから分散マシン上のディレクトリーにドライバーをコピーする。
- jtopen Web サイトから分散マシン上のディレクトリーにドライバーをダウンロードする。jtopen Web サイトの URL は、 <http://sourceforge.net/projects/jt400> です。

## リモート・データベースに接続するためのスタンドアロン・プロファイルの作成

プロファイル管理ツールでは、リモート i5/OS サーバーの DB2 for i5/OS データベースを指定して構成された 1 つ以上の WebSphere Process Server スタンドアロン・サーバー・プロファイルの構成を作成または拡張できます。DB2 for i5/OS データベースをホスティングするリモート i5/OS サーバーには、WebSphere Process Server がインストールされていません。

### 始める前に

ご使用の WebSphere Process Server インストール済み環境が Linux、UNIX、または Windows サーバーに存在し、データベースがリモート i5/OS サーバーに存在する場合は、IBM Toolbox for Java JDBC ドライバー (jt400.jar) を SOURCEFORGE.NET の Web サイト (<https://sourceforge.net/projects/jt400>) からローカル一時ディレクトリーにダウンロードする必要があります。

### 手順

1. プロファイル管理ツールの「ようこそ」パネルで、「次へ」をクリックします。

**注:** WebSphere Process Server プロファイルに拡張できる WebSphere Application Server プロファイルが見つかった場合、「既存プロファイルの検出」パネルが表示されます。既存のプロファイルは拡張せず、代わりに新規プロファイルを作成することを選択してください。

2. 「環境の選択」パネルで、「**WebSphere Process Server**」または「**WebSphere Enterprise Service Bus**」を選択します。「次へ」をクリックします。
3. 「プロファイル・タイプの選択」パネルで、「**スタンドアロン・サーバーのプロファイル (Stand-alone server profile)**」を作成するオプションを選択します。「次へ」をクリックします。
4. 「プロファイル作成オプション」パネルで、デフォルト設定を使用した標準的なプロファイルを作成するか、または高度なプロファイルを作成するかを指定できます。「**詳細プロファイル作成**」を選択します。「次へ」をクリックします。
5. 「オプションのアプリケーション・デプロイメント」パネルで、管理コンソールのデプロイメント用のチェック・ボックスが選択されていることを確認し、デフォルト・アプリケーションおよびサンプル・アプリケーションのデプロイメント用のデフォルトを受け入れます。「次へ」をクリックします。
6. 「プロファイル名およびロケーション」パネルで、このプロファイルの固有の名前および固有のロケーションを入力します。最初にデフォルトの名前およびロケーションが表示されます。デフォルト・ディレクトリーは `$user_data_root/profiles/profile_name` の下に表示されます。他のプロファイルが存在する場合は、この新規プロファイルをデフォルト・プロファイルにすると

いうオプションも表示されます。また、デプロイメント・テンプレートを使用してサーバーを作成することも選択できます。「次へ」をクリックします。

7. 「ノード、ホスト、およびセルの名前」パネルで、固有のノード名を指定する必要があります。デフォルトのノード名が提供されていますが、ノード名を新しい固有の名前に変更できます。「次へ」をクリックします。
8. 「管理セキュリティー」パネルで、チェック・ボックスをクリアするか、ユーザー ID とパスワード情報を入力します。「次へ」をクリックします。
9. 「ポート値割り当て」パネルで、デフォルトのポート値が提供されます。必要であれば、別のポート値を指定できます。「次へ」をクリックします。
10. この WebSphere Process Server プロファイル作成が Windows または Linux 上で行われている場合、Windows または Linux サービス定義パネルが表示され、オプションでこのプロファイルを Windows または Linux サービスとして実行するようにセットアップできます。WebSphere Process Server をホストしているサーバーが、リモート・サーバーを指すリレーショナル・データベース・エントリを保持している必要があります。そのようなエントリが存在しない場合は作成してください。「次へ」をクリックします。
11. オプション: 「Web サーバー定義」パネルで、Web サーバー定義を作成するオプションを選択します。「次へ」をクリックします。

**注:** **i5/OS** i5/OS では、Web サーバー定義の作成にプロファイル管理ツールを使用しないようにお勧めします。したがって、「Web サーバー定義」パネルでは、このオプションを有効にしないでください。Web サーバー定義と HTTP サーバー・インスタンスを作成するために、IBM HTTP Server for iSeries の構成フォームと管理フォームを使用する必要があります。そうすれば、HTTP サーバーとその Web サーバー定義が正しく関連付けられます。詳しくは、WebSphere Application Server Network Deployment for i5/OS バージョン 6.1 インフォメーション・センターの『HTTP サーバー・インスタンスの構成』を参照してください。

12. 「Business Process Choreographer の構成」パネルで、サンプルの Business Process Choreographer を構成しないことを選択します。(このパネルで Business Process Choreographer を構成すると、DB2 for i5/OS データベースではなく、Derby が構成されます。)  
「次へ」をクリックします。
13. 「ビジネス・スペース構成」パネルで、「**ビジネス・スペースの構成**」チェック・ボックスを選択し、WebSphere が提供するビジネス・スペースをセットアップします。これは、IBM Websphere Business Process Management ポートフォリオ横断でアプリケーション・ユーザーに対して統合されたユーザー・エクスペリエンスを提供します。次に「次へ」をクリックします。ビジネス・スペースを構成すると、このプロファイルで稼働しているアプリケーションのビジネス・ユーザー用に統合 GUI がセットアップされます。

**重要:** ビジネス・スペースは、次のデータベース製品でサポートされています: Derby Embedded, Derby Network Server, DB2 Universal, DB2 Universal Runtime Client, DB2 for i5/OS, Oracle 9i, Oracle 10g, および Oracle 11g。

WebSphere Process Server で使用するデータベースが、サポートされるビジネス・スペースと一致しない場合は、Derby Embedded データベースがビジネス・

スペースの構成で選択されます。このプロファイルを 1 つのデプロイメント環境に後で統合することはできません。Derby Embedded はデプロイメント環境でサポートされていないためです。

14. ビジネス・ルール・マネージャーを構成してインストールするかどうか選択してから、「次へ」をクリックします。ビジネス・ルール・マネージャーは、ビジネス・アプリケーションの必要に合わせてビジネス・ルール・テンプレートをカスタマイズする Web アプリケーションです。
15. 「データベース構成」パネルの「データベース製品の選択」で、「DB2 UDB for iSeries (ツールボックス)」の項目を選択します。これにより、「データベース名」フィールドに \*SYSBAS が表示されます。
  - a. 「新規リモート・データベースを作成する」を選択します。
  - b. データベース・スクリプトを手動でリモート・データベース・サーバーにコピーして実行する場合は、「データベース・スクリプトの実行を遅延 (リモート・データベースを使用する場合は選択する必要がある)」の横にあるチェック・ボックスを選択します。
  - c. 「メッセージング・エンジン (ME) でこのデータベースを使用する」を選択します。
  - d. 「次へ」をクリックします。
16. 「データベース構成 (第 2 部)」パネルで、リモート i5/OS DB2 データベースに対して認証を行うための有効なユーザー名とパスワードを入力します。
  - a. JDBC ドライバーのクラスパス・ファイル (jt400.jar) のロケーション (ディレクトリー) を入力します。
    - プロファイルを i5/OS 上に作成している場合、このディレクトリーは /QIBM/ProdData/Http/Public/jt400/lib です。

注: このスクリプトは、WebSphere Process Server をホストする、i5/OS 以外のプラットフォームから実行され、リモートの共通データベースを作成します。
    - プロファイルを i5/OS 上に作成していない場合、この jar ファイルを含むローカル・ディレクトリーを入力します。
  - b. リモートの DB2 for i5/OS データベースが格納されている i5/OS サーバーのデータベース・サーバー・ホスト名 (IP アドレスなど) を入力します。
  - c. データベース・コレクション名 (デフォルトは WPRCSDB) を入力します。スキーマ名の最初の 3 文字は、リモート i5/OS サーバー上でホスティングされているデータベースに対して固有である必要があります。
  - d. 「次へ」をクリックします。
17. 「プロファイルの要約」パネルが表示されます。「次へ」をクリックします。
18. プロファイル作成が完了し、「ファースト・ステップの起動」オプションが選択解除されます。「終了」をクリックします。
19. 必要に応じて、Common Event Infrastructure と共通データベース両方の DDL をリモート i5/OS システムにエクスポートします。生成されたデータベース・スクリプト形式の DDL は、「Common Event Infrastructure データベース構成」パネルと「データベース構成」パネルで先に指定したロケーションにあります。さまざまな方法によって、スクリプトを管理者に提供できます。

20. ローカルとリモートの両方のデータベース・システムが i5/OS プラットフォームでない場合、または「データベース・スクリプトの実行を遅延 (リモート・データベースを使用する場合は選択する必要がある)」を選択した場合、管理者は、CEI スクリプトを実行して EVENT 用のリモート DB2 データベース表をセットアップする必要があります。「新規リモート・データベースを作成する」を選択していない場合、管理者は、リモートの i5/OS システムで WPRCSDB 用の commonDB スクリプトを実行する必要もあります。
21. ご使用の WebSphere Process Server インストール環境が Linux、UNIX、または Windows サーバーに存在し、データベースがリモート i5/OS サーバーに存在する場合は、サーバーを始動し、管理コンソールを使用して、WebSphere Application Server 環境変数 OS400\_TOOLBOX\_JDBC\_DRIVER\_PATH の値が、ダウンロードした jt400.jar ファイルの場所になっていることを確認します。その後、サーバーを停止してから再始動します。

**重要:** 環境変数を設定する前にサーバーを始動すると、エラー・メッセージが表示される場合があります。これらのエラーは、サーバーを停止して再始動すると解決されます。

## タスクの結果

これで、リモート・データベースに接続するためのスタンドアロン・プロファイルが作成されました。

DB2 for i5/OS のテーブルとコレクションは、CEI (EVENT)、Business Process Choreographer、CommonDB、Service Integration Bus、および WebSphere Enterprise Service Bus Message Logger のリモート i5/OS システムに生成されています。

## リモート・データベースに接続するためのデプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成

プロファイル管理ツールでは、リモート i5/OS サーバーの DB2 for i5/OS データベースを指定して構成された WebSphere Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成できます。同様に、プロファイル管理ツールでは、WebSphere Application Server Network Deployment マネージャー・プロファイルを、リモート・データベース接続用に構成された WebSphere Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルに拡張できます。DB2 for i5/OS データベースをホスティングするリモート i5/OS サーバーには、WebSphere Process Server 製品がインストールされていません。

## 始める前に

ご使用の WebSphere Process Server インストール済み環境が Linux、UNIX、または Windows サーバーに存在し、データベースがリモート i5/OS サーバーに存在する場合は、IBM Toolbox for Java JDBC ドライバー (jt400.jar) を SOURCEFORGE.NET の Web サイト (<https://sourceforge.net/projects/jt400>) からローカル一時ディレクトリにダウンロードする必要があります。

## 手順

1. プロファイル管理ツールの「ようこそ」パネルで、「次へ」をクリックします。

注: WebSphere Process Server プロファイルに拡張できる WebSphere Application Server プロファイルが見つかった場合、「既存プロファイルの検出」パネルが表示されます。既存のプロファイルは拡張せず、代わりに新規プロファイルを作成することを選択してください。

2. 「環境の選択」パネルで、**WebSphere Process Server** オプションを選択します。「次へ」をクリックします。
3. 「プロファイル・タイプの選択」パネルで、「**デプロイメント・マネージャー・プロファイル**」を作成するオプションを選択します。「次へ」をクリックします。
4. 「プロファイル作成オプション」パネルで、デフォルト設定を使用した標準的なプロファイルを作成するか、または高度なプロファイルを作成するかを指定できます。「**詳細プロファイル作成**」をクリックします。「次へ」をクリックします。
5. 「オプションのアプリケーション・デプロイメント」パネルで、管理コンソールのデプロイメント用のチェック・ボックスが選択されていることを確認します。「次へ」をクリックします。
6. 「名前とロケーション」パネルで、このプロファイルの固有の名前および固有のロケーションを入力する必要があります。最初にデフォルトの名前およびロケーションが表示されます。デフォルト・ディレクトリーは `$user_data_root/profiles/profile_name` の下に表示されます。他のプロファイルが存在する場合は、この新規プロファイルをデフォルト・プロファイルにするというオプションも表示されます。また、デプロイメント・テンプレートを使用してサーバーを作成することも選択できます。「次へ」をクリックします。
7. 「ノード、ホスト、およびセルの名前」パネルで、固有のノード名およびセル名を指定する必要があります。デフォルトのノード名およびセル名が提供されていますが、ノード名を新しい固有の名前に変更できます。「次へ」をクリックします。
8. 「管理セキュリティー」パネルで、管理セキュリティーを使用不可にします。「次へ」をクリックします。
9. 「ポート値割り当て」パネルで、デフォルトのポート値が提供されます。必要であれば、別のポート値を指定できます。「次へ」をクリックします。
10. この WebSphere Process Server プロファイル作成が Windows または Linux 上で行われている場合、Windows または Linux サービス定義パネルが表示され、オプションでこのプロファイルを Windows または Linux サービスとして実行するようにセットアップできます。「次へ」をクリックします。
11. オプション: 「Web サーバー定義」パネルで、Web サーバー定義を作成するオプションを選択します。「次へ」をクリックします。

注: **i5/OS** i5/OS では、Web サーバー定義の作成にプロファイル管理ツールを使用しないようにお勧めします。したがって、「Web サーバー定義」パネルでは、このオプションを有効にしないでください。IBM HTTP Server for iSeries の構成フォームと管理フォームを使用して、Web サーバー定義と HTTP サーバー・インスタンスを作成することが必要になります。これにより、HTTP サーバーからこの Web サーバー定義への関連付けも正しく行われます。詳し

くは、WebSphere Application Server Network Deployment for i5/OS バージョン 6.1 インフォメーション・センターの『HTTP サーバー・インスタンスの構成』を参照してください。

12. 「データベース構成」パネルの「データベース製品の選択」で、「**DB2 UDB for iSeries (ツールボックス)**」の項目を選択します。これにより、「データベース名」フィールドに \*SYSBAS が表示されます。
  - a. 「**新規リモート・データベースを作成する**」を選択します。
  - b. データベース・スクリプトを手動でリモート・データベース・サーバーにコピーして実行する場合は、「**データベース・スクリプトの実行を遅延 (リモート・データベースを使用する場合は選択する必要がある)**」の横にあるチェック・ボックスを選択します。
  - c. 「**メッセージング・エンジン (ME) でこのデータベースを使用する**」を選択します。
  - d. 「**次へ**」をクリックします。
13. 「データベース構成 (第 2 部)」パネルで、リモート i5/OS DB2 データベースに対して認証を行うための有効なユーザー名とパスワードを入力します。
  - a. ツールボックス JDBC ドライバーのクラスパス・ファイル (jt400.jar) のロケーション (ディレクトリー) を入力します。
    - プロファイルを i5/OS 上に作成している場合、このディレクトリーは /QIBM/ProdData/Http/Public/jt400/lib です。

注: このスクリプトは、WebSphere Process Server をホストする、i5/OS 以外のプラットフォームから実行され、リモートの共通データベースを作成します。
    - プロファイルを i5/OS 上に作成していない場合、この jar ファイルを含むローカル・ディレクトリーを入力します。
  - b. リモートの DB2 for i5/OS データベースが格納されている i5/OS サーバーのデータベース・サーバー・ホスト名 (IP アドレスなど) を入力します。
  - c. データベース・コレクション名 (デフォルトは WPRCSDB) を入力します。コレクション名の最初の 3 文字は、リモートの i5/OS サーバー上でホスティングされているデータベースに対して固有である必要があります。
  - d. 「**次へ**」をクリックします。
14. 「プロファイルの要約」パネルが表示されます。「**次へ**」をクリックします。
15. プロファイル作成が完了し、「**ファースト・ステップの起動**」オプションが選択解除されます。「**終了**」をクリックします。
16. 管理コンソールを使用して、Business Process Choreographer を構成します。

## タスクの結果

これで、リモート・データベースに接続するためのデプロイメント・マネージャー・プロファイルが作成されました。DB2 for i5/OS のテーブルおよびコレクションは、Business Process Choreographer、共通データベース、Service Integration Bus、および WebSphere Enterprise Service Bus Message Logger のリモート i5/OS システムに生成されています。

## 次のタスク

デプロイメント・マネージャーを開始できます。デプロイメント環境の場合には、別のデータベースを作成して構成し、カスタム・プロファイルを作成してそれをご使用のデプロイメント・マネージャーに統合し、サーバーを作成し、ワークロード管理機能が必要な場合はクラスターを作成し、さらに、計画したインストール環境に固有のその他のタスクを実行する必要があります。計画した環境では、実行が必要なタスク、およびその実行順序を指示します。

## リモート z/OS サーバー上の DB2 での Common Event Infrastructure リポジトリと共通データベース・リポジトリの作成

Common Event Infrastructure および共通データベースのリポジトリ用に DB2 をリモート z/OS マシンで使用する場合は、ユーザーまたはデータベース管理者 (DBA) は、関連するデータベースおよび正しいストレージ・グループを z/OS ワークステーション上に作成する必要があります。

- Common Event Infrastructure リポジトリを作成するには、『イベント・データベースの構成』およびそのサブトピックを参照してください。
- 共通データベース・リポジトリを作成するには、標準的なデータベース定義ツールや手順を使用して、以下のディレクトリーに用意されているデフォルト・スクリプトを編集して実行します。

– **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォーム:

```
install_root/dbscripts/CommonDB/DB2zOSV8/
```

– **Windows** **Windows** プラットフォーム:

```
install_root¥dbscripts¥CommonDB¥DB2zOSV8¥
```

– **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:

```
install_root/dbscripts/CommonDB/DB2zOSV9/
```

– **Windows** **Windows** プラットフォームの場合:

```
install_root¥dbscripts¥CommonDB¥DB2zOSV9¥
```

これらと同じスクリプトは、*media\_root* または *extraction\_root/dbscripts* ディレクトリーにも存在します。スクリプトの編集方法について詳しくは、『73 ページの『DB2 for z/OS スクリプトの編集』。

## リモート z/OS システムでの DB2 メッセージ・ロガー・データベースの構成

ランタイム製品のデフォルト・インストールでは、スタンドアロン・アプリケーション・サーバー、およびメッセージ・ロガー・メディアエーション・プリミティブが使用する Derby データベースが作成されます。このプリミティブを使用するメディアエーション・モジュールをデプロイする場合は、z/OS システムのリモート DB2 データベースの信頼性を生かす方が望ましい場合があります。

### このタスクについて

coreDBUtility を使用して、WebSphere Process Server メッセージ・ロギング・データベースを、リモートの z/OS システムに作成します。このユーティリティーは、

どのプロファイル・タイプでもプロファイルの作成後に実行することができます。このユーティリティーは、z/OS 管理者が z/OS システム上で使用できるスクリプトを生成します。

coreDBUtility で使用可能なパラメーターの完全なリストが必要な場合は、448 ページの『coreDBUtility パラメーター』を参照してください。

coreDBUtility ユーティリティーは *install\_root/bin* 内にあります。手順例で使用されるコマンドは、*default* という名前のプロファイルと、*ESBDB* という名前の DB2 for z/OS v8 データベースを対象としています。このユーティリティーは、DB2 for z/OS v9 データベースもサポートしています。

## 手順

1. coreDBUtility を使用して、データベースを作成します。以下に例を示します。

```
coreDBUtility createDB -DprofilePath=install_root¥profiles¥default
-DdbType=DB2UDBOS390_V8_1 -DdbName=ESBDB
```

*createDB\_DB2.sql* という名前のスクリプトが生成されます。このスクリプトをリモート z/OS システムで実行し、データベースを作成することができます。

2. データベースにテーブルを作成します。

- coreDBUtility を使用して、データベース表を作成するためのスクリプトを生成することができます。例えば、*ESBDBSTO* という名前のデータベース・ストレージ・グループに、*ESBLOG* という名前のスキーマでテーブルを作成する場合、次のように構成します。

```
coreDBUtility createTable -DprofilePath=install_root¥profiles¥default
-DdbType=DB2UDBOS390_V8_1 -DdbName=ESBDB -DsqlScriptPath.default=install_root
¥util¥EsbLoggerMediation¥DB2UDBOS390_V8_1¥Table_esb_DB2UDBOS390_V8_1.ddl
-DdbStorageGroup=ESBDBSTO -DdbSchemaName=ESBLOG -DdbDefineSQL false
```

このコマンドは、*Table\_esb\_DB2UDBOS390\_V8\_1.ddl* というスクリプトを *install\_root/profiles/default/databases/ESBDB* に生成します。このスクリプトをリモートの z/OS システムで実行し、テーブルを作成できます。このスクリプトの例を表示するには、448 ページの『*Table\_esb\_DB2UDBOS390\_V8\_1.ddl* の例』を参照してください。

- 1 つのコマンドでこのスクリプトを生成しリモート側で実行するよう選択することもできます。以下に例を示します。

```
coreDBUtility createTable -DprofilePath=install_root¥profiles¥default
-DdbType=DB2UDBOS390_V8_1 -DdbName=ESBDB -DsqlScriptPath.default=install_root
¥util¥EsbLoggerMediation¥DB2UDBOS390_V8_1¥Table_esb_DB2UDBOS390_V8_1.ddl
-DdbStorageGroup=ESBDBSTO -DdbSchemaName=ESBLOG -DdbHostName hostname
-DdbServerPort server_port -DdbJDBCClasspath=JDBC_classpath
-DdbUserId=username -DdbPassword=password
-DdbConnectionLocation=connection_location
```

これにより、リモート z/OS システム上で、コマンドに設定した接続パラメーターを使用してスクリプトが実行されます。

3. 必要なデータベース・タイプ用の JDBC プロバイダーを作成します。

coreDBUtility を使用して、WebSphere 構成に接続し、JDBC 定義を作成することができます。例えば、セルの名前が *defaultCell* で、ノード名が *defaultNode* の場合、次のように構成します。

```
coreDBUtility createJDBCProvider -DprofilePath=install_root¥profiles¥default
-DdbType=DB2UDBOS390_V8_1 -DscopeLevel=node -DcellName=defaultCell
-DnodeName=defaultNode -DdbJDBCClasspath=JDBC_classpath
```

4. データ・ソースを作成します。 coreDBUtility を使用して、WebSphere 構成に接続し、使用するデータ・ソースを作成することができます。以下に例を示します。

```
coreDBUtility createDataSource -DjndiName=jdbc/ESBDB
-DprofilePath=install_root¥profiles¥default -DprofileName=default
-DdbType=DB2UDBOS390_V8_1 -DdbName=ESBDB -DdbHostName hostname
-DdbServerPort server_port -DdbUserId=username -DdbPassword=password
-DdbConnectionLocation=connection_location -DdbStorageGroup=ESBDBSTO
-DscopeLevel=node -DcellName=defaultCell -DnodeName=defaultNode
-DdbJDBCClasspath=JDBC_classpath
```

## Table\_esb\_DB2UDBOS390\_V8\_1.ddl の例

coreDBUtility を使用して、z/OS 上のリモート DB2 メッセージ・ロガー・データベースにテーブルを作成するスクリプトを生成することができます。このスクリプトの例を以下に示します。

```
-- @start_restricted_prolog@
-- Licensed Materials - Property of IBM
-- 5724-I82 5724-L01 5655-N63 5655-R15
-- (C) Copyright IBM Corporation 2006 All Rights Reserved.
-- US Government Users Restricted Rights- Use, duplication or disclosure
-- restricted by GSA ADP Schedule Contract with IBM Corp.
-- @end_restricted_prolog@

-- DB2UDB for z/OS V8.1 schema for Message Logger Mediation

-- ESBDB          DBName
-- ESBDBSTO      StorageGroup
-- ESBLOG        SQLID

-- Create Tablespaces
CREATE TABLESPACE ESBTS  LOCKSIZE ROW CCSID UNICODE BUFFERPOOL BP0
IN ESBDB USING STOGROUP ESBDBSTO;
CREATE LOB TABLESPACE ESBCLOB IN ESBDB USING STOGROUP ESBDBSTO;

-- Create Tables
CREATE TABLE ESBLOG.MSGLOG
(TIMESTAMP TIMESTAMP NOT NULL,
MESSAGEID VARCHAR(36) NOT NULL,
MEDIATIONNAME VARCHAR(256) NOT NULL,
MODULENAME VARCHAR(256),
MESSAGE CLOB(100000K),
VERSION VARCHAR(10),
CONSTRAINT PK_MSGLOG PRIMARY KEY (MESSAGEID, TIMESTAMP, MEDIATIONNAME))
IN ESBDB.ESBTS;

CREATE UNIQUE INDEX ESBLOG.MSGLOG_INDEX_PK
ON ESBLOG.MSGLOG (MESSAGEID, TIMESTAMP, MEDIATIONNAME) USING STOGROUP ESBDBSTO;

-- Create AUX CLOB Tables/Index
CREATE AUX TABLE ESBLOG.MESSAGECLOB IN ESBDB.ESBCLOB STORES ESBLOG.MSGLOG COLUMN MESSAGE;
CREATE INDEX ESBLOG.MESSAGECLOB_IDX ON ESBLOG.MESSAGECLOB USING STOGROUP ESBDBSTO;
```

## coreDBUtility パラメーター

任意のプロファイル・タイプについて、プロファイル作成後に coreDBUtility を実行すると、メッセージ・ロギング・メディエーション・プリミティブと共に使用するデータベースを作成できます。このコマンドを使用するときに指定できるパラメーターがいくつかあり、一部のパラメーターは必須です。coreDBUtility の bat/sh ファイルには、より詳細な使用法の説明が組み込まれています。

coreDBUtility パラメーターは以下のとおりです。

**-DdbConnectionLocation**

データベース接続位置。

**-DdbDelayConfig**

true または false に設定します。true に設定した場合、データベース構成は実行されず、ユーザーは提供されたスクリプトを使用して構成を実行する必要があります。

**-DdbHostName**

データベース・サーバーのホスト名または IP アドレス。

**-DdbLocation**

データベース・インストール・ルートのパス。

**-DdbJDBCClasspath**

JDBC ドライバー・ファイルが含まれるディレクトリー・パス。

**-DdbName**

データベースの名前または別名。

**-DdbPassword**

データベースにアクセスするためのパスワード。

**-DdbSchemaName**

スキーマ名。

**-DdbServerPort**

データベース・サーバーの JDBC ポート番号。

**-DdbStorageGroup**

データベース・ストレージ・グループ。

**-DdbType**

データベース・タイプ。例えば、DB2 for z/OS v8 に DB2UDBOS390\_V8\_1 と指定できます。

**-DdbUserId**

データベースにアクセスするためのユーザー ID。

**-DcellName**

セル名。

**-DnodeName**

ノード名。

**-DprofilePath**

プロファイルのパス。

**-DscopeLevel**

スコープ・レベル。有効値は「node」、「cell」です。

**-DsqlScriptPath.default**

テーブル作成のデフォルト SQL スクリプト。

## manageprofiles コマンドを使用したプロファイルの削除

manageprofiles コマンドを使用することによって、コマンド行からプロファイルを削除できます。

## 始める前に

manageprofiles コマンドについて詳しくは、302 ページの『manageprofiles コマンド』を参照してください。

**この作業に必要なセキュリティのロール:** 235 ページの『非 root ユーザーに対するファイルとディレクトリーの書き込み権限の、プロファイル作成のための付与』を参照してください。

**i5/OS** `user_data_root/profiles` ディレクトリーで、読み取り、書き込み、およびコマンドを実行するためのオペレーティング・システムの許可が必要です。

### 手順

1. コマンド・プロンプトを開き、使用するオペレーティング・システムに基づいて以下のいずれかのコマンドを実行します。

- **i5/OS** **i5/OS** プラットフォーム: `manageprofiles -delete -profileName profile_name`
- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォーム: `manageprofiles.sh -delete -profileName profile_name`
- **Windows** **Windows** プラットフォーム: `manageprofiles.bat -delete -profileName profile_name`

変数 `profile_name` は削除するプロファイルの名前を示します。

2. 以下のログ・ファイルを調べて、プロファイルの削除が完了したことを確認します。

- **i5/OS** **i5/OS** プラットフォーム: `user_data_root/profileRegistry/logs/manageprofiles/profile_name_delete.log`
- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォーム: `install_root/logs/manageprofiles/profile_name_delete.log`
- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: `install_root¥logs¥manageprofiles¥profile_name_delete.log`

---

## デプロイメント環境の構成

デプロイメント環境の定義後、構成を更新または完了するために実行できるその他のタスクがあります。

### デプロイメント環境トポロジーの更新

1 つの管理コンソール・ページから、IBM 提供のパターンに基づいて、ノードをトポロジーに追加したり、デプロイメント環境内のクラスターに機能を割り当てたりできます。デプロイメント環境トポロジーからノードを削除することもできます。

### 始める前に

• デプロイメント環境が、このデプロイメント・マネージャー上に存在することを確認してください。

デプロイメント・マネージャーの管理コンソールに移動して、「サーバー」 → 「デプロイメント環境」 → 「*deployment\_environment\_name*」 → 「追加プロパティ」 → 「デプロイメント・トポロジー」をクリックします。

この作業に必要なセキュリティ役割: セキュリティおよびロール・ベースの許可が有効になっている場合、このタスクを実行するには、管理者またはオペレーターとして管理コンソールにログインする必要があります。

## このタスクについて

デプロイメント環境の要件が変化したときは、既存のデプロイメント環境に対してノードを追加/除去したり、デプロイメント環境内の機能へのリソース割り振りを変更したりすることが可能です。

注: このページでは、IBM 提供パターンに基づいたデプロイメント環境のみ構成できます。カスタム・デプロイメント環境から「デプロイメント・トポロジー」ページにアクセスすることはできません。

### 手順

1. 目的を選択し、その目的に関連付けられたアクションを実行します。

目的	アクション
デプロイメント環境の構成の最後に統合ノードを追加	リストからノードを選択して、「ノードの追加」をクリックします。
構成内の空のノードを統合ノードに置換	1. リストからノードを選択します。 2. 空の行の横にあるチェック・ボックスを選択し、「ノードの追加」をクリックします。
空のノードまたは新規ノードの構成への追加	「ノード名」フィールドに名前を入力し、「ノードの追加」をクリックします。
ノードの除去	除去するノードの横にあるチェック・ボックスを選択し、「除去」をクリックします。
ノードへの機能の割り当て	構成するクラスター・メンバーの数を、機能ごとに、その機能に関連した列に入力します。

2. 「OK」または「適用」をクリックして構成を保管します。

リソースを構成する必要がある場合、システムは構成プロセスを開始します。構成の進行を示すダイアログが表示され、システムは、マスター構成に変更を保存するためのプロンプトを表示します。

注: 「環境の生成」をクリックするまでは、構成は完了しません。

## タスクの結果

ページは、このデプロイメント環境のノードとロールの状況、およびユーザーの変更を反映するように更新されます。

## ホスト別名の構成

IBM HTTP Server または選択したサーバーを構成して、管理対象ノードとデプロイメント・マネージャー間の通信を可能にします。

### 始める前に

デプロイメント・マネージャーおよび関連ノードを作成および構成。

### このタスクについて

管理対象ノードとデプロイメント・マネージャー間の相互通信が可能になる必要があります。そのために、デプロイメント・ターゲット・クラスター内の各ノードに対するホスト別名をデプロイメント・マネージャーに対して可視にする必要があります。ホスト別名には、DNS ホスト名およびポート番号が含まれます。この別名を URL の一部として使用し、アプリケーションがデプロイメント・ターゲットで稼働したら、アプリケーションにアクセスします。

**注:** この手順は、AppCluster\_member1 および AppCluster\_member2 という 2 つのアプリケーション・クラスター・メンバーを使用します。説明内ではご使用のサーバー名と置換して理解してください。

### 手順

1. 管理コンソールから移動し、「サーバー」 → 「アプリケーション・サーバー」 → 「AppCluster\_member1」をクリックします。
2. 名前をクリックします。
3. 「通信」の見出しの下の「ポート」を展開し、WC\_defaulthost にリストされているポート値をメモします。この値は後に使用する必要があります。
4. クラスター・メンバーごとにステップ 1 から 3 を繰り返します。追加のアプリケーション・クラスター・メンバーごとにこれを繰り返します。

完了すると、クラスター・メンバーとそれらのデフォルト・ホスト用のポート番号のリストが表示されます。

5. 管理コンソールから移動し、「環境」 → 「仮想ホスト」 → 「default\_host」をクリックします。
6. 「追加プロパティ」で、「ホスト別名」をクリックします。
7. クラスター・メンバーに対するホスト名とポート値の正しい組み合わせのエントリが表示されない場合、欠落しているエントリをリストに追加します。
8. リストに新規エントリを追加した場合、「保管」および「同期化」をクリックします。

### 次のタスク

テスト・アプリケーションをインストールして、インストール済み環境を検査します。

## デプロイメント環境の認証別名の構成

1 つの管理コンソール・ページから、すべての認証別名を検討または編集できます。

## 始める前に

- デプロイメント環境が、このデプロイメント・マネージャー上に存在することを確認してください。

デプロイメント・マネージャーの管理コンソールに移動して、「サーバー」 → 「デプロイメント環境」 → 「*deployment\_environment\_name*」 → 「関連項目」 → 「認証別名」をクリックします。

**この作業に必要なセキュリティ役割:** セキュリティーおよびロール・ベースの許可が有効になっている場合、このタスクを実行するには、管理者またはオペレーターとして管理コンソールにログインする必要があります。

## このタスクについて

この統合された認証別名リストから、以下を行うことができます。

- 指定のデプロイメント環境のすべての別名の検討
- *Alias\_name* リンクを使用した認証構成ページへのアクセス

「リセット」ボタンは、選択された行を現在構成されている値にリセットします。*Alias\_name* をクリックして、変更を行う認証構成ページにアクセスしてください。

### 手順

1. 変更する行を選択します。
2. 以下のいずれかを行います。

オプション	説明
行の編集	「 <i>Alias_name</i> 」をクリックします。
行のリセット	「リセット」をクリックします。

行の編集では、「認証構成」ページが表示され、ここで変更を行うことができます。

3. 変更を保存するには、「OK」または「適用」をクリックします。

## カスタム・デプロイメント環境の構成

カスタム・デプロイメント環境を構成するには、「カスタム・デプロイメント・トポロジーの詳細」ページを使用します。

### 始める前に

- デプロイメント環境が、このデプロイメント・マネージャー上に存在することを確認してください。

デプロイメント・マネージャーの管理コンソールに移動して、「サーバー」 → 「デプロイメント環境」 → 「*deployment\_environment\_name*」 → 「追加プロパティー」 → 「カスタム・デプロイメント・トポロジーの詳細」をクリックします。

**この作業に必要なセキュリティ役割:** セキュリティーとロール・ベースの許可が有効になっている場合、このタスクを実行するには、管理者またはコンフィギュレーターとしてログインする必要があります。

### 制約事項:

- システムに存在する構成は、デプロイメント環境の構成より優先されます。したがって、カスタム・デプロイメント環境をエクスポートすると、デプロイメント環境に含まれるサーバーの実際の構成が反映されます。
- コンポーネント・ユニットを構成する前にメッセージング・ユニットを構成する必要があります。チェック・ボックスが使用不可になっている場合、メッセージング・サポートがまだ構成されていません。

### このタスクについて

カスタム・デプロイメント環境の場合、必要に応じてそれぞれの機能を構成する方法を決定できます。各機能は、クラスターまたは単一サーバーに対して構成します。カスタム・デプロイメント環境トポロジーの構成には、大きく分けて 3 つの領域があります。

- コンポーネント内通信をサポートするメッセージング。
- イベントおよびモニター機能を統合する Common Event Infrastructure。
- ビジネス・インテグレーションのサービス・コンポーネント (ビジネス・プロセスやヒューマン・タスクなど) をサポートするアプリケーション・サポート。

詳しくは、『カスタム・デプロイメント環境のレイアウト構成の概要』を参照してください。

### 手順

1. 「このデプロイメント環境で使用するクラスターとサーバーの選択」のリストから、クラスターまたはサーバーを選択します。
2. 「追加」をクリックします。下のテーブルにクラスターまたは単一サーバーが追加されます。
3. このデプロイメント環境に必要なクラスターとサーバーをすべて選択するまで、ステップ 1 と 2 を繰り返します。
4. 「メッセージング」タブを選択します。
  - a. デプロイメント環境に必要な個別のメッセージング単位の数を決定し、「新規単位の追加」をクリックしてその数を追加します。

各単位に「メッセージング単位 x」という名前が付けられます。この x は、単位の番号です。

- b. ステップ 2 で作成されたテーブルからクラスターとサーバーを各単位に割り当てます。

単位に追加するクラスターまたはサーバーを選択してから、「選択したものを単位に追加」から単位を選択します。

- c. 各単位でどのデプロイメント・ターゲットがローカル・メッセージング・サポートをホストするかを決定し、単位内の該当デプロイメント・ターゲットを定義する行の「ローカル・バス・メンバー」をクリックし、ローカル・メッセージング・ホストを構成します。

その他のクラスターまたはサーバーはすべて、リモート・メッセージング宛先として自動的に構成されます。

5. 「**Common Events Infrastructure**」タブをクリックします。
  - a. デプロイメント環境に必要な個別の **Common Event Infrastructure** 単位の数を決定し、「**新規単位の追加**」をクリックしてその数を追加します。

各単位に「**Common Event Infrastructure 単位 x**」という名前が付けられます。この  $x$  は、単位の番号です。
  - b. ステップ 2 (454 ページ) で作成されたテーブルからクラスターとサーバーを各単位に割り当てます。

単位に追加するクラスターまたはサーバーを選択してから、「**選択したものを単位に追加**」から単位を選択します。
  - c. 各単位でどのデプロイメント・ターゲットが **Common Event Infrastructure** サーバーをホストするかを決定し、単位内の該当デプロイメント・ターゲットを定義する行の「**サーバー**」をクリックし、**Common Event Infrastructure** サーバーを構成します。

その他のクラスターまたはサーバーはすべて、リモート **Common Event Infrastructure** 宛先として自動的に構成されます。
6. 「**アプリケーション・サポート**」タブをクリックします。このタブには、指定のデプロイメント・ターゲットに対して構成可能なコンポーネントがすべて表示されます。

**制約事項:** このセクションでコンポーネントを構成する前に、各コンポーネントのメッセージング・ユニットを完全な状態にしておく必要があります。例えば、**Service Component Architecture** についてチェック・ボックスが使用不可の場合は、関連するメッセージング・ユニットが構成されていません。制限については、『**カスタム・デプロイメント環境のレイアウト構成の概要**』を参照してください。

- a. デプロイメント環境に必要な個別の**アプリケーション・サポート**単位の数を決定し、「**新規単位の追加**」をクリックしてその数を追加します。

必要な単位の数は、必要な **Business Process Choreographer Container** の数によって決まります。**Business Process Choreographer Container** が不要な場合は、**Service Component Architecture** アプリケーションには 1 つの単位で十分です。

各単位に「**アプリケーション・サポート単位 x**」という名前が付けられます。この  $x$  は、単位の番号です。
- b. ステップ 2 (454 ページ) で作成されたテーブルからクラスターとサーバーを各単位に割り当てます。

単位に追加するクラスターまたはサーバーを選択してから、「**選択したものを単位に追加**」から単位を選択します。
- c. ユニット内で、デプロイメント環境の各コンポーネントに属させるクラスターまたはサーバーを選択します。
- d. 各ユニットでデプロイメント環境に必要なすべてのコンポーネントが構成されるまで、ステップ 6b と 6c を繰り返します。

## 次のタスク

デプロイメント環境が完成するか、または既存のデプロイメント環境を編集した後、「カスタム・デプロイメント環境の構成 (Custom Deployment Environment Configuration)」ウィザードが開きます。情報を検討して、必要があれば変更を加えることができます。

## デプロイメント環境の据え置かれた構成の構成

データベースとテーブルの作成を据え置く必要がある場合は、「据え置かれた構成」ページを使用してください。このページには、データベースとテーブルを作成するためのスクリプトを見つけて実行する方法の説明が示されています。

### 始める前に

- デプロイメント環境が、このデプロイメント・マネージャー上に存在することを確認してください。

デプロイメント・マネージャーの管理コンソールに移動して、「サーバー」 → 「デプロイメント環境」 → 「*deployment\_environment\_name*」 → 「追加プロパティ」 → 「据え置かれた構成」をクリックします。

**この作業に必要なセキュリティ役割:** セキュリティおよびロール・ベースの許可が有効になっている場合、このタスクを実行するには、管理者またはオペレーターとして管理コンソールにログインする必要があります。

### このタスクについて

デプロイメント環境の構成とは別に、データベース表またはスキーマを作成する必要がある場合に、この手順を使用します。

「据え置かれた構成」ページには、トポロジーのデータベースを正しく構成するために必要な構成ステップが示されています。通常、このページには、以下の内容が示されます。

- スクリプトの場所
- スクリプトの実行方法の説明

### 手順

1. 「据え置かれた構成」ページの指示を実行します。
2. 完了したら、「実行された構成」をクリックします。

## 次のタスク

据え置かれた構成をいつ誰が最後に実行したかを示すテキスト・ボックスが表示されます。表示された説明は、将来参照できるようにこのページに残ります。

## コマンド行を使用したデプロイメント環境の構成

`wsadmin` インターフェースを使用して、デプロイメント環境を構成することができます。この機能により、スクリプトを使用して、デプロイメント・マネージャー上の複数のデプロイメント環境を無人で構成できます。

## 始める前に

デプロイメント環境を構成するデプロイメント・マネージャーでコマンドを入力する必要があります。

**この作業に必要なセキュリティ役割:** セキュリティおよびロール・ベースの許可が有効になっている場合、このタスクを実行するには、管理者またはオペレーターとして管理コンソールにログインする必要があります。

## このタスクについて

デプロイメント・マネージャー上にデプロイメント環境をインポートまたは作成したあと、`generateDeploymentEnv` コマンドを使用してデプロイメント環境を構成できます。

### 手順

1. `wsadmin` 環境に入ります。
2. 構成するトポロジーごとに `generateDeploymentEnv` コマンドを入力します。

### 例

以下のコマンドは、ホスト `myDmgr` 上でトポロジー `eastEnvironment` および `westEnvironment` を構成します。

```
wsadmin -connType SOAP -host myDmgr -port 8879
> $AdminTask generateDeploymentEnv -topologyName eastTopology
> $AdminTask generateDeploymentEnv -topologyName westTopology
> $AdminConfig save
```

**注:** 管理セキュリティを有効にして実行している場合、`wsadmin` コマンドの処理後にユーザー ID とパスワードの入力を求めるプロンプトが表示されます。

## 次のタスク

構成されたデプロイメント環境を保存します。コマンド行から、`$AdminConfig save` と入力できます。

## デプロイメント環境のデータ・ソースの構成

「データベース・プロバイダー構成」ページを使用して、ビジネス・インテグレーションのデータ・ソースを初めて構成します。

### 始める前に

- デプロイメント環境が、このデプロイメント・マネージャー上に存在することを確認してください。
- デプロイメント・マネージャーの管理コンソールに移動して、「サーバー」 → 「デプロイメント環境」 → 「`deployment_environment_name`」 → 「関連項目」 → 「データ・ソース」をクリックします。

**この作業に必要なセキュリティ役割:** セキュリティおよびロール・ベースの許可が有効になっている場合、このタスクを実行するには、管理者またはオペレーターとして管理コンソールにログインする必要があります。

## このタスクについて

「データ・ソース」ページを使用して、デプロイメント環境に必要なすべてのデータ・ソースのコレクションを構成します。

データ・ソースを必要とするコンポーネントは、選択された「データベース・プロバイダー」に基づいて、すべての必須フィールドを決定します。これらの必須フィールドにはデータを入力する必要があります。コンポーネントは、残りのフィールドにデフォルト値を設定します。ユーザーは、デフォルト値を保持することもできますし、必要に応じてそれを変更することもできます。通常、コンポーネントは、「有効範囲」の値を決定します。

ビジネス・インテグレーションのデータ・ソースは、一度だけ構成できます。データ・ソースを構成して保存すると、一部のテキスト・ボックスが使用不可になり、値を変更できなくなります。ページ内のそれ以外のテキスト・ボックスは、すべて編集できます。

### 手順

1. 「データ・ソース」ページで、構成するデータ・ソースの横にあるチェック・ボックスを選択します。
2. このページに表示されない追加のデータ・ソース・フィールドを編集する必要がある場合は「プロバイダーの編集」をクリックします。

注: 「データ・ソース」列のデータ・ソース名をクリックするだけの方法も可能です。

3. 情報を入力します。サポートされているデータベース・タイプのリストについては、『データベース仕様書』を参照してください。
4. 「適用」または「OK」をクリックして、変更を保存します。

## コマンド行を使用したデプロイメント環境定義の作成

`wsadmin` コマンドを使用して、デプロイメント環境定義を作成することができます。 `wsadmin` コマンドを使用して、管理コンソールから作成する環境と同じデプロイメント環境を作成することができます。この機能により、管理タスクを実行して新しい環境定義を作成することができます。この定義には、既存の構成に基づいてすべてのデフォルト値が設定されます。

### 始める前に

環境定義を作成する場合、デプロイメント環境定義の作成元のデプロイメント・マネージャーを起動しておく必要があります。

**この作業に必要なセキュリティ役割:** セキュリティーとロール・ベースの許可が有効になっている場合、管理者権限またはオペレーター権限を持つユーザー ID とパスワードを使用してこのタスクを実行する必要があります。

### このタスクについて

このタスクは、`wsadmin` コマンドを使用して、特定のパターンに基づいたデプロイメント環境定義を作成します。

## 手順

1. コマンド・ウィンドウをオープンします。

`wsadmin` コマンドは、`<WPS>/profiles/<dmgr profile>/bin` ディレクトリーか `<WPS>/bin` ディレクトリーのいずれかに格納されています。

2. コマンド・プロンプトから `wsadmin` コマンドを入力して `wsadmin` 環境を設定します。
3. `createDeploymentEnvDef` コマンドを使用して、特定のランタイムとパターンに関して固有の名前を持つデプロイメント環境定義を作成します。

**注:** 管理セキュリティが有効になっている場合は、ユーザー ID とパスワードの入力画面が表示されます (コマンド内で指定していない場合)。

## 例

この例では、管理セキュリティが有効な状態で、ホスト `myDmgr` 上に `WebSphere Process Server` ランタイム `myDepEnv` の単一クラスター・パターンに関するデプロイメント環境定義を作成します。

```
wsadmin -connType SOAP -host myDmgr -port 8879 > $AdminTask
-createDeploymentEnvDef -topologyName topOne -topologyPattern singleCluster
-runtimeCapability WPS
```

**注:** 管理セキュリティが無効になっている場合は、ユーザー ID とパスワードを指定する必要はありません。

### 関連情報

 コマンドおよびスクリプト

 `createDeploymentEnvDef` コマンド

## コマンド行を使用したデプロイメント環境定義の削除

`wsadmin` コマンドを使用して、デプロイメント・マネージャーからデプロイメント環境定義を削除することができます。これにより、構成されている既存のサーバーやクラスターが影響を受けることはありません。

### 始める前に

管理クライアントは、削除対象のデプロイメント環境定義が存在するデプロイメント・マネージャーに接続する必要があります。

デプロイメント環境が、このデプロイメント・マネージャー上に存在することを確認してください。

リカバリーの目的で、デプロイメント環境定義をエクスポートしておくことを検討してください。

**この作業に必要なセキュリティ役割:** セキュリティとロール・ベースの許可が有効になっている場合、管理者権限またはオペレーター権限を持つユーザー ID とパスワードを使用してこのタスクを実行する必要があります。

## このタスクについて

環境定義が不要になった場合は、そのデプロイメント環境定義をデプロイメント・マネージャーから削除します。

このタスクは、`wsadmin` コマンドを使用して、デプロイメント・マネージャー上にあるデプロイメント環境定義を削除します。

デプロイメント環境を大きく変更する場合は、コマンド行を使用してデプロイメント環境定義を削除したほうが効率的なことがあります。`wsadmin` コマンドを使用すると、管理コンソールを使用するよりもオーバーヘッドが少なくなります。

### 手順

1. コマンド・ウィンドウをオープンします。

`wsadmin` コマンドは、`<WPS>/profiles/<dmgr profile>/bin` ディレクトリーか `<WPS>/bin` ディレクトリーのいずれかに格納されています。

2. コマンド・プロンプトから `wsadmin` コマンドを入力してコマンド環境を設定します。

**注:** 接続モードで実行する場合は、`wsadmin` を適切なデプロイメント・マネージャーに接続してください。

3. `deleteDeploymentEnvDef` コマンドを使用して、デプロイメント・マネージャーからデプロイメント環境定義を削除します。

**注:** 管理セキュリティが有効になっている場合は、ユーザー ID とパスワードの入力画面が表示されます (コマンド内で指定していない場合)。

### 例

この例では、管理セキュリティが有効な状態で、デプロイメント環境定義 (`myDepEnv`) を削除します。

**注:** デプロイメント・マネージャーの `bin` フォルダーから管理クライアントを実行する場合は、コマンドに `-host` パラメーターと `-port` パラメーターを指定する必要はありません。

```
wsadmin -connType SOAP -host myDmgr -port 8879 -user dmgradmin -password dmgrpass  
> $AdminTask deleteDeploymentEnvDef {-topologyName myDepEnv }
```

`-connType` パラメーターにより、使用する接続のタイプを指定します。デフォルトの引数は `SOAP` です。

**注:** デフォルトが `SOAP` であるため、使用する接続タイプが `SOAP` の場合は、明示的に指定する必要はありません。

`-host` パラメーターにより、`SOAP` または `RMI` 接続に使用するホストを指定します。`-host` のデフォルト値は、ローカル・ホストです。

**注:** ノードがローカル・ホストで稼働している場合は、`-host` を指定する必要はありません。

**注:** 管理セキュリティが無効になっている場合は、ユーザー ID とパスワードを指定する必要はありません。

この変更内容をマスター構成に保管するには、コマンド `$AdminConfigSave` を発行します。

### 関連情報

 コマンドおよびスクリプト

 `deleteDeploymentEnvDef` コマンド

## コマンド行を使用したデプロイメント環境定義の名前変更

`wsadmin` コマンドを使用して、デプロイメント環境定義名を変更することができます。

### 始める前に

定義名を変更する場合は、デプロイメント環境定義名の変更元のデプロイメント・マネージャーを起動しておく必要があります。

**この作業に必要なセキュリティ役割:** セキュリティとロール・ベースの許可が有効になっている場合、管理者権限またはオペレーター権限を持つユーザー ID とパスワードを使用してこのタスクを実行する必要があります。

### このタスクについて

このタスクは、`wsadmin` コマンドを使用して、デプロイメント環境定義を名前変更します。

デプロイメント環境 (トポロジー) が既に構成されている場合、このコマンドは失敗します。

通常このタスクは、別のデプロイメント環境定義からトポロジーをインポートした後に行います。`wsadmin` コマンドを使用すると、管理コンソールを使用するよりもオーバーヘッドが少なくなります。

### 手順

1. コマンド・ウィンドウをオープンします。

`wsadmin` コマンドは、`<WPS>/profiles/<dmgr profile>/bin` ディレクトリーか `<WPS>/bin` ディレクトリーのいずれかに格納されています。

2. コマンド・プロンプトから `wsadmin` コマンドを入力して `wsadmin` 環境を設定します。
3. `renameDeploymentEnvDef` コマンドを使用して、デプロイメント環境定義の名前を変更します。

**注:** 管理セキュリティが有効になっている場合は、ユーザー ID とパスワードの入力画面が表示されます (コマンド内で指定していない場合)。

## 例

この例では、管理セキュリティーが有効な状態で、デプロイメント環境定義の名前 (**TheOldDepEnvName**) を (**TheNewDepEnvName**) に変更します。

```
wsadmin -connType SOAP -host myDmgr -port 8879 -user dmgrAdmin -password -dmgrPass  
> $AdminTask renameDeploymentEnvDef {-topologyName myDepEnv  
-oldName TheOldDepEnvName -newName TheNewDepEnvName}
```

-connType パラメーターにより、使用する接続のタイプを指定します。デフォルトの引数は SOAP です。

注: デフォルトが SOAP であるため、使用する接続タイプが SOAP の場合は、明示的に指定する必要はありません。

-host パラメーターにより、SOAP または RMI 接続に使用するホストを指定します。-host のデフォルト値は、ローカル・ホストです。

注: ノードがローカル・ホストで稼働している場合は、-host を指定する必要はありません。

注: 管理セキュリティーが無効になっている場合は、ユーザー ID とパスワードを指定する必要はありません。

### 関連情報

 コマンドおよびスクリプト

 renameDeploymentEnvDef コマンド

## コマンド行を使用したデプロイメント環境定義へのノードの追加

wsadmin コマンドを使用して、デプロイメント環境定義にノードを追加することができます。

### 始める前に

このタスクでは、ノードがデプロイメント・マネージャーに統合されていることを前提としています。

トポロジーが既に構成されている場合、このコマンドを実行しても、デプロイメント環境定義にノードは追加されません。

ノードを追加する場合は、ノードの追加先となるデプロイメント・マネージャーを起動しておく必要があります。

**この作業に必要なセキュリティー役割:** セキュリティーとロール・ベースの許可が有効になっている場合、管理者権限またはオペレーター権限を持つユーザー ID とパスワードを使用してこのタスクを実行する必要があります。

### このタスクについて

このタスクは、wsadmin コマンドを使用して、統合ノードをデプロイメント環境定義に追加します。

## 手順

1. コマンド・ウィンドウをオープンします。

`wsadmin` コマンドは、`<WPS>/profiles/<dmgr profile>/bin` ディレクトリーか `<WPS>/bin` ディレクトリーのいずれかに格納されています。

2. コマンド・プロンプトから `wsadmin` コマンドを入力して `wsadmin` 環境を設定します。
3. `addNodeToDeploymentEnvDef` コマンドを入力して、デプロイメント環境定義にノードを追加します。

**注:** 管理セキュリティが有効になっている場合は、ユーザー ID とパスワードの入力画面が表示されます (コマンド内で指定していない場合)。

## 例

この例では、管理セキュリティが有効な状態で、ノード (**MyNode**) をデプロイメント環境定義 (**myDepEnv**) に追加します。

```
wsadmin -connType SOAP -host myDmgr -port 8879 -user dmgrAdmin -password -dmgrPass  
> $Admintask addNodeToDeploymentEnvDef -topologyName myDepEnv -runtimeCapability WPS  
-topologyRole Messaging -nodeName MyNode -serverCount 3
```

**注:** 管理セキュリティが無効になっている場合は、ユーザー ID とパスワードを指定する必要はありません。

## コマンド行を使用したデプロイメント環境定義からのノードの削除

`wsadmin` コマンドを使用して、デプロイメント環境定義からノードを削除することができます。

### 始める前に

トポロジーが既に構成されている場合、このコマンドを実行しても、デプロイメント環境からノードは削除されません。

ノードを削除する場合、削除対象のノードが存在するデプロイメント・マネージャーに管理クライアントを接続する必要があります。

**この作業に必要なセキュリティ役割:** セキュリティとロール・ベースの許可が有効になっている場合、管理者権限またはオペレーター権限を持つユーザー ID とパスワードを使用してこのタスクを実行する必要があります。

### このタスクについて

このタスクでは、`wsadmin` コマンドを使用して、デプロイメント環境定義からノードを除去します。

デプロイメント環境を大きく変更する場合は、コマンド行を使用してデプロイメント環境から統合ノードを削除するほうが効率的なことがあります。`wsadmin` コマンドを使用すると、管理コンソールを使用するよりもオーバーヘッドが少なくなります。

## 手順

1. コマンド・ウィンドウをオープンします。

wsadmin コマンドは、<WPS>/profiles/<dmgr profile>/bin ディレクトリーか <WPS>/bin ディレクトリーのいずれかに格納されています。

2. コマンド・プロンプトから wsadmin コマンドを入力してコマンド環境を設定します。

注: 接続モードで実行する場合は、wsadmin を適切なデプロイメント・マネージャーに接続してください。

3. removeNodeFromDeploymentEnvDef コマンドを使用して、デプロイメント環境定義からノードを削除します。

注: 管理セキュリティが有効になっている場合は、ユーザー ID とパスワードの入力画面が表示されます (コマンド内で指定していない場合)。

## 例

この例では、管理セキュリティが有効な状態で、デプロイメント環境定義 (**myDepEnv**) のメッセージング・クラスター (**Messaging**) からノード (**MyNode**) を削除します。

注: デプロイメント・マネージャーの bin フォルダーから管理クライアントを実行する場合は、コマンドに -host パラメーターと -port パラメーターを指定する必要はありません。

```
wsadmin -connType SOAP -host myDmgr -port 8879 -user dmgrAdmin -password -dmgrPass
> $AdminTask removeNodeFromDeploymentEnvDef -topologyName myDepEnv
-topologyRole Messaging -nodeName MyNode
```

-conntype パラメーターにより、使用する接続のタイプを指定します。デフォルトの引数は SOAP です。

注: デフォルトが SOAP であるため、使用する接続タイプが SOAP の場合は、明示的に指定する必要はありません。

-host パラメーターにより、SOAP または RMI 接続に使用するホストを指定します。-host のデフォルト値は、ローカル・ホストです。

注: ノードがローカル・ホストで稼働している場合は、-host を指定する必要はありません。

注: topologyRole の値を指定しない場合は、環境定義内のすべてのロール (クラスター) からノードが削除されます。

注: 管理セキュリティが無効になっている場合は、ユーザー ID とパスワードを指定する必要はありません。

この変更内容をマスター構成に保管するには、コマンド \$AdminConfig Save を発行します。

### 関連情報

 コマンドおよびスクリプト

## コマンド行を使用したデプロイメント環境定義内のノード名の変更

`wsadmin` コマンドを使用して、デプロイメント環境定義内のノード名を変更することができます。

### 始める前に

ノード名を変更する場合は、ノード名変更の対象となるデプロイメント環境定義が存在するデプロイメント・マネージャーに管理クライアントを接続する必要があります。

**この作業に必要なセキュリティ役割:** セキュリティとロール・ベースの許可が有効になっている場合、管理者権限またはオペレーター権限を持つユーザー ID とパスワードを使用してこのタスクを実行する必要があります。

### このタスクについて

このタスクは、`wsadmin` コマンドを使用して、デプロイメント環境定義内のノードを名前変更します。

デプロイメント環境 (トポロジー) が既に構成されている場合、このコマンドは失敗します。

通常このタスクは、デプロイメント環境定義をインポートした後に実行します。`wsadmin` コマンドを使用すると、管理コンソールを使用するよりもオーバーヘッドが少なくなります。

### 手順

1. コマンド・ウィンドウをオープンします。

`wsadmin` コマンドは、`<WPS>/profiles/<dmgr profile>/bin` ディレクトリーか `<WPS>/bin` ディレクトリーのいずれかに格納されています。

2. コマンド・プロンプトから `wsadmin` コマンドを入力してコマンド環境を設定します。

**注:** 接続モードで実行する場合は、`wsadmin` を適切なデプロイメント・マネージャーに接続してください。

3. `renameNodeInDeploymentEnvDef` コマンドを使用して、デプロイメント環境定義内のノード名を変更します。

**注:** 管理セキュリティが有効になっている場合は、ユーザー ID とパスワードの入力画面が表示されます (コマンド内で指定していない場合)。

### 例

この例では、管理セキュリティが有効な状態で、デプロイメント環境定義 (`myDepEnv`) のノードの名前 (`TheOldNodeName`) を (`TheNewNodeName`) に変更します。

```
wsadmin -connType SOAP -host myDmgr -port 8879 -user dmgrAdmin -password -dmgrPass  
> $AdminTask renameNodeInDeploymentEnvDef -topologyName myDepEnv  
-oldName TheOldNodeName -newName TheNewNodeName
```

-connType パラメーターにより、使用する接続のタイプを指定します。デフォルトの引数は SOAP です。

注: デフォルトが SOAP であるため、使用する接続タイプが SOAP の場合は、明示的に指定する必要はありません。

-host パラメーターにより、SOAP または RMI 接続に使用するホストを指定します。-host のデフォルト値は、ローカル・ホストです。

注: ノードがローカル・ホストで稼働している場合は、-host を指定する必要はありません。

注: 管理セキュリティが無効になっている場合は、ユーザー ID とパスワードを指定する必要はありません。

この変更内容をマスター構成に保管するには、コマンド \$AdminConfig Save を発行します。

#### 関連情報

 コマンドおよびスクリプト

 renameNodeInDeploymentEnvDef コマンド

## デプロイメント環境定義パラメーターの変更

AdminConfig オブジェクトを使用して、デプロイメント環境定義のパラメーターを変更することができます。

### 始める前に

AdminConfig オブジェクトにより、構成サービス・コンポーネントと通信して、構成の照会と変更を行います。このオブジェクトを使用すると、既存の構成オブジェクトの照会、構成オブジェクトの作成、既存のオブジェクトの変更、構成オブジェクトの削除、ヘルプの取得を実行することができます。

このオブジェクトを使用する場合は、パラメーター変更の対象となるデプロイメント環境定義が存在するデプロイメント・マネージャーに管理クライアントを接続する必要があります。

**この作業に必要なセキュリティ役割:** セキュリティとロール・ベースの許可が有効になっている場合、管理者権限またはオペレーター権限を持つユーザー ID とパスワードを使用してこのタスクを実行する必要があります。

### このタスクについて

デプロイメント環境定義を作成する場合、デプロイメント・マネージャーの作成時に選択された共通データベース (CommonDB) に基づくデフォルト・パラメーターが管理タスクによって選択されます。

## 手順

1. AdminConfig を使用して、デプロイメント環境定義の任意のプロパティを変更します。

構成オブジェクトの一般的な更新方法を以下に示します。

- 構成タイプと対応する属性を特定します。
  - 既存の構成オブジェクトを照会して、使用する構成 ID を取得します。
  - 既存の構成オブジェクトを変更するか、新規構成オブジェクトを作成します。
  - 構成を保管します。
2. 構成の変更内容を保管します。 この変更内容をマスター構成に保管するには、コマンド `$AdminConfig Save` を発行します。

## 関連情報

 コマンドおよびスクリプト

 `setDeploymentEnvParam` コマンド

 スクリプト管理での AdminConfig オブジェクトの使用

## コマンド行を使用したデプロイメント環境の状況表示

`wsadmin` コマンドを使用して、デプロイメント環境の現在の状況を表示することができます。

### 始める前に

状況を表示する場合、状況表示の対象となるデプロイメント・マネージャーに管理クライアントを接続する必要があります。

**この作業に必要なセキュリティ役割:** セキュリティとロール・ベースの許可が有効になっている場合、管理者権限またはオペレーター権限を持つユーザー ID とパスワードを使用してこのタスクを実行する必要があります。

### このタスクについて

このタスクは、`wsadmin` コマンドを使用して、デプロイメント環境の現在の状況を表示します。

## 手順

1. コマンド・ウィンドウをオープンします。

`wsadmin` コマンドは、`<WPS>/profiles/<dmgr profile>/bin` ディレクトリーか `<WPS>/bin` ディレクトリーのいずれかに格納されています。

2. コマンド・プロンプトから `wsadmin` コマンドを入力してコマンド環境を設定します。

**注:** 接続モードで実行する場合は、`wsadmin` を適切なデプロイメント・マネージャーに接続してください。

3. showDeploymentEnvStatus コマンドを使用して、デプロイメント環境の現在の状況を表示します。

**注:** 管理セキュリティが有効になっている場合は、ユーザー ID とパスワードの入力画面が表示されます (コマンド内で指定していない場合)。  
次の表は、結果として返される状態をまとめたものです。

**注:** 表にリストされた状態には、構成済みのトポロジに対してのみ有効な状態も含まれています。その場合、構成済みのトポロジに対してのみ適用されるということが説明欄に記載されています。

表 138. トポロジ・インスタンスの使用可能状況 (使用可能性が低い順から高い順)

状態	説明
未完了	デプロイメント環境で欠落しているエレメントはありませんが、不完全な部分があります。  この状態は、デプロイメント環境に必須のロール、ノード、コンポーネント、または依存関係が欠落している可能性がある状態です。  追加の詳細情報は、警告メッセージに含まれています。
完了	この状態は、未構成 とも呼ばれます。これは、既知の構成が完了しているが、まだ生成されていない状態です。
構成済み (Configured)	これは、構成の同期がとれている状態です。
一部が構成済み (Partially configured)	これは、デプロイメント環境は生成されているが、据え置かれた構成が完了していない状態です。
不明	これは、デプロイメント環境の現在の状態をシステムが判別できない状態です。再同期操作は、この状態で実行することができます。
停止	この状態は、構成済みのトポロジに対してのみ適用されます。トポロジ内のすべてのデプロイメント・ターゲットが停止している状態です。
実行中	この状態は、構成済みのトポロジに対してのみ適用されます。デプロイメント環境が使用可能であり、すべての機能が実行中の状態です。
一部が開始済み	この状態は、構成済みのトポロジに対してのみ適用されます。デプロイメント環境が使用可能になっているが、部分的に実行中の機能が 1 つ以上ある状態です。
始動中	この状態は、構成済みのトポロジに対してのみ適用されます。デプロイメント環境が始動中の状態です。
一部が停止済み	この状態は、構成済みのトポロジに対してのみ適用されます。デプロイメント環境が使用可能になっているが、停止した機能または部分的に停止した機能が 1 つ以上ある状態です。
停止中	この状態は、構成済みのトポロジに対してのみ適用されます。デプロイメント環境が停止中の状態です。
使用不可	この状態は、構成済みのトポロジに対してのみ適用されます。デプロイメント環境の状態は使用できません。

## 例

この例では、管理セキュリティーが有効な状態で、ホスト (**myDmgr**) 上のデプロイメント環境 (**MyDepEnv**) の状況を表示します。

**注:** デプロイメント・マネージャーの **bin** フォルダから管理クライアントを実行する場合は、コマンドに **-host** パラメーターと **-port** パラメーターを指定する必要はありません。

```
wsadmin -connType SOAP -host myDmgr -port 8879 -user dmgradmin -password dmgrpass  
> $AdminTask showDeploymentEnvStatus {-topologyName myDepEnv}
```

**-connType** パラメーターにより、使用する接続のタイプを指定します。デフォルトの引数は **SOAP** です。

**注:** デフォルトが **SOAP** であるため、使用する接続タイプが **SOAP** の場合は、明示的に指定する必要はありません。

**-host** パラメーターにより、**SOAP** または **RMI** 接続に使用するホストを指定します。**-host** のデフォルト値は、ローカル・ホストです。

**注:** ノードがローカル・ホストで稼働している場合は、**-host** を指定する必要はありません。

**注:** 管理セキュリティーが無効になっている場合は、ユーザー ID とパスワードを指定する必要はありません。

### 関連情報

 コマンドおよびスクリプト

 showDeploymentEnvStatus コマンド

---

## サーバーまたはクラスタの SCA サポートの構成

Service Component Architecture コンソール・ページでは、サービス・アプリケーションまたはそれに必要なメッセージング・エンジンと宛先 (あるいはこの両方) をホストできるように、Network Deployment 環境内のサーバーまたはクラスタを設定できます。

### 始める前に

SCA サポートを構成する前に、以下の点を確認します。

- スタンドアロン・サーバー・プロファイルを使用しているかどうか。使用している場合は SCA サポートが既に構成されているので、Service Component Architecture ページでこのサポートを除去することはできません。ただし、このページでデータベース・データ・ソースの一部のプロパティを変更することはできます。
- メッセージング・エンジンと宛先をホストする場所 (リモート・バス・メンバーまたはローカル・バス・メンバーを使用)。
- SCA システム・バスのみを構成する必要があるのか、それとも SCA アプリケーション・バスも構成する必要があるのか。アプリケーション・バスはデフォルト

で構成されます。WebSphere Business Integration Adapters を使用する SCA アプリケーションをデプロイする場合は、アプリケーション・バスが必要です。

**このタスクに必要なセキュリティ役割:** 以下のタスクを実行するには、管理者またはコンフィギュレーターとしてログインしている必要があります。

## このタスクについて

サーバーまたはクラスター上で SCA サポートを構成するには、以下のステップを実行します。

### 手順

1. 管理コンソール内から、スコープに応じて、以下のいずれかをクリックします。
  - 「サーバー」 → 「アプリケーション・サーバー」 → 「*serverName*」 → 「Service Component Architecture」
  - 「サーバー」 → 「クラスター」 → 「*clusterName*」 → 「Service Component Architecture」
2. 「Service Component Architecture コンポーネントのサポート」をクリックします。
3. 「バス・メンバー・ロケーション」パネルで、SCA アプリケーションに必要な宛先とメッセージング・エンジンをホストする場所を指定します。オプションには、以下の 2 つがあります。
  - **ローカル。** SCA アプリケーション、宛先、およびメッセージング・エンジンを現行サーバーまたはクラスターでホストすることを指定します。
  - **リモート。** SCA アプリケーションを現行サーバーまたはクラスターでホストし、宛先およびメッセージング・エンジンをリモート・サーバーまたはクラスター (デプロイメント・ターゲット ともいう) でホストすることを指定します。
4. (リモート・バス・メンバーのみ) 前のステップで「リモート」を選択した場合は、ホスト・アプリケーションの宛先およびメッセージング・エンジンをホストするリモート・サーバーまたはクラスターを指定します。ドロップダウン・メニューから、既存のデプロイメント・ターゲット (既に SCA システム・バスのメンバーとして構成されているターゲット) を選択するか、または「新規」をクリックして、「デプロイメント・ターゲットのブラウズ」ページから新規サーバーまたはクラスターを選択します。

「デプロイメント・ターゲットのブラウズ」ページから新規サーバーまたはクラスターを選択する場合は、このトピックで説明する SCA の構成が完了すると、そのターゲットで必要なメッセージング・エンジンが自動的に構成されます。
5. 「システム・バス・メンバー」パネルの表で、システム・バス・データ・ソース構成を確認または変更します。
  - a. 「データベース・インスタンス」、「スキーマ」、「テーブルの作成」、「ユーザー名」、「パスワード」、「サーバー」、および「プロバイダー」フィールドのデフォルト値を確認します。各フィールドと受け入れ可能な値の詳細については、オンライン・ヘルプを参照してください。
  - b. これらのフィールドにデフォルト値がない場合、またはデフォルト値が適切でない場合は、システム・バス・データ・ソースに対する適切な値を入力し

ます。フィールドに値を直接入力するか、または「編集」をクリックしてデータ・ソースの詳細ページで値を編集します。

- c. オプション: 「テスト接続」をクリックして、データ・ソースがデータベースに接続でき、正しく認証されることを確認します。
6. 「アプリケーション・バス・メンバー」パネルの表で、アプリケーション・バス・データ・ソース構成を確認または変更します。
    - a. 「WebSphere Business Integration Adapter コンポーネントの使用可能化」オプションが選択されていることを確認します。

注: アプリケーション・バスを使用しない場合は、「WebSphere Business Integration Adapter コンポーネントの使用可能化」オプションをクリアし、ステップ 7 に進みます。
    - b. 「データベース・インスタンス」、「スキーマ」、「テーブルの作成」、「ユーザー名」、「パスワード」、「サーバー」、および「プロバイダー」フィールドのデフォルト値を確認します。各フィールドと受け入れ可能な値の詳細については、オンライン・ヘルプを参照してください。
    - c. これらのフィールドにデフォルト値がない場合、またはデフォルト値が適切でない場合は、アプリケーション・バス・データ・ソースに対する適切な値を入力します。フィールドに値を直接入力するか、または「編集」をクリックしてデータ・ソースの詳細ページで値を編集します。
  7. 「OK」をクリックすると、SCA 構成が完了します。

## サーバーおよびクラスターでの Service Component Architecture サポートに関する考慮事項

サーバーおよびクラスターでは、Service Component Architecture (SCA) アプリケーション、アプリケーション宛先、またはその両方をサポートできます。

SCA アプリケーション (サービス・アプリケーションとも呼ばれる) では、自動的に作成される 1 つ以上のサービス統合バスを使用する必要があります。各アプリケーションでは、一連のメッセージング・リソース (宛先 と呼ばれる) が使用されます。これらの宛先には構成されたメッセージング・エンジンが必要であり、またこれらの宛先はアプリケーションと同じサーバーまたはクラスター、あるいはリモート・サーバーまたはリモート・クラスター上でホストすることができます。一般にメッセージング・エンジンはデータベース・データ・ソースを使用します。スタンドアロン・サーバー・プロファイルでは、プロファイル作成時にファイル・ストアを使用するオプションが選択されている場合、データベース・データ・ソースの代わりにファイル・ストアが使用される点に注意してください。

Network Deployment 環境または管理対象ノード環境内の新規のサーバーとクラスターは、デフォルトでは SCA アプリケーションとそれらの宛先をホストするようには構成されません。

注: スタンドアロン・サーバーでは、SCA サポートが自動的に構成されます。この構成を使用不可にすることはできません。

このサポートを有効にするには、管理コンソールの「Service Component Architecture」ページを使用します。サーバーの場合、アプリケーション・クラス・ローダー・ポリシーが「複数」に設定されていることを確認します。

Network Deployment 環境または管理対象ノード環境内にあるサーバーまたはクラスターに対して、SCA サポートを使用可能にする前に、以下の可能な構成のいずれを実装するかを決定します。

- **リモート・バス・メンバーの構成:** サーバーまたはクラスターでは SCA アプリケーションがホストされますが、宛先はリモート・サーバーまたはリモート・クラスター上でホストされます。このシナリオでは、宛先をホストするために必要なメッセージング・エンジンを使って、リモート・サービス統合バス・メンバーを構成する必要があります。

リモート・メッセージングの使用には、サービス統合バスとそのメンバーの計画を立てて構成するための初期投資が必要になりますが、この構成はアプリケーション・クラスター内の複数のメンバーで再利用できます。メッセージは、すべてのメンバーに配布されます。また、フェイルオーバー・サポートを提供するように初期構成を構造化することもできます。

- **ローカル・バス・メンバーの構成:** サーバーまたはクラスターでは SCA アプリケーションおよびアプリケーション宛先の両方がホストされます。必要なメッセージング・エンジンは、サーバーまたはクラスター上のローカル・バス・メンバーを使用して構成されます。

計画の各トピックを参照して、ご使用の環境にいずれの構成が適しているかを判断してください。

#### 関連情報

-  [サーバーのクラス・ローダーの構成](#)
-  [サービス統合バスについて](#)
-  [メッセージング・エンジン](#)

---

## REST サービス・エンドポイントの構成

Representational State Transfer (REST) アプリケーション・プログラミング・インターフェース (API) のサービス・エンドポイントを構成することができます。ウィジェットをビジネス・スペースで使用できるようにしたい場合は、それらのウィジェットについて REST サービス・エンドポイントを構成する必要があります。

### このタスクについて

REST サービスのデプロイメントは、スタンドアロン・サーバー・プロファイルで自動的に実行されます。他の構成タイプの場合は、「システム REST サービス・エンドポイント」管理コンソール・ページを使用して、REST サービス・エンドポイントを構成することができます。このプロセスにより、REST サービスが構成されたクラスターに REST サービスがデプロイされます。これで REST サービスがビジネス・スペースに登録されるため、ウィジェット REST サービスにバインドすることができます。

#### 手順

1. 次のいずれかをクリックします。

- サーバー上のシステム REST サービスの場合: 「サーバー」 → 「アプリケーション・サーバー」 → 「*servername*」 → 「ビジネス・インテグレーション」 → 「システム REST サービス・エンドポイント」
  - クラスター上の システム REST サービスの場合: 「サーバー」 → 「クラスター」 → 「*clustername*」 → 「ビジネス・インテグレーション」 → 「システム REST サービス・エンドポイント」
  - サーバー上のビジネス・プロセス REST サービスの場合: 「サーバー」 → 「アプリケーション・サーバー」 → 「*servername*」 → 「ビジネス・インテグレーション」 → 「Business Flow Manager」 → 「REST サービス・エンドポイント」
  - クラスター上のビジネス・プロセス REST サービスの場合: 「サーバー」 → 「クラスター」 → 「*clustername*」 → 「ビジネス・インテグレーション」 → 「Business Flow Manager」 → 「REST サービス・エンドポイント」
  - サーバー上のヒューマン・タスク REST サービスの場合: 「サーバー」 → 「アプリケーション・サーバー」 → 「*servername*」 → 「ビジネス・インテグレーション」 → 「Human Task Manager」 → 「REST サービス・エンドポイント」
  - クラスター上のヒューマン・タスク REST サービスの場合: 「サーバー」 → 「クラスター」 → 「*clustername*」 → 「ビジネス・インテグレーション」 → 「Human Task Manager」 → 「REST サービス・エンドポイント」
  - 「デプロイメント環境構成」ウィザードの一部として: 「サーバー」 → 「デプロイメント環境」 → 「新規」を選択し、それより前の各構成ページで入力を行います。
2. **Protocol** リストから **https://** または **http://** を選択し、クライアントがサーバーまたはクラスターと通信するために必要な 「負荷分散環境でのホスト名または仮想ホスト」 および 「ポート」 を入力することにより、すべての REST サービスの絶対 URL パスを設定します。
  3. REST サービス・エンドポイントの説明を変更する場合は、REST サービスの表の「説明」フィールドを変更します。 その他のフィールドは読み取り専用です。
  4. 「OK」をクリックします。

---

## Business Process Choreographer の構成

Business Process Choreographer コンテナをビジネス・プロセスとヒューマン・タスク用に構成する方法については、WebSphere Process Server for Multiplatforms バージョン 6.2 インフォメーション・センターにアクセスし、「WebSphere Process Server のインストールおよび構成」>「ソフトウェアの構成」>「Business Process Choreographer の構成」にあるトピックを参照してください。この情報は *Business Process Choreographer* PDF でも検索できます。

## ビジネス・スペースの構成

WebSphere が提供するビジネス・スペースをインストールして構成することができます。これは、IBM WebSphere Business Process Management ポートフォリオ横断でアプリケーション・ユーザーが Web インターフェースを作成、管理および統合するための共通インターフェースです。

### 始める前に

製品ソフトウェアをインストールする必要があります。製品をインストールする場合、ビジネス・スペースのファイルはインストーラーに含まれており、ビジネス・スペースはセットアップしたプロファイルで構成されています。

**Process Server / ESB** タスク管理ウィジェットおよびワークフロー・ウィジェットを必要とする WebSphere Process Server ランタイム環境の場合は、Business Process Choreographer を構成する必要があります。詳しくは、WebSphere Process Server ドキュメンテーションの『Business Process Choreographer の構成』を参照してください。

### このタスクについて

製品をインストールしてスタンドアロン・サーバー・プロファイルを標準的なオプションを指定して作成する場合、ビジネス・スペースのインストールと構成が Derby Embedded データベースを使用して自動的に行われます。スタンドアロン・サーバー・プロファイルを使用する場合、拡張オプションを持つプロファイル管理ツールを使用してビジネス・スペースを構成し、現在のランタイム環境で作業することができます。詳しくは、『プロファイル管理ツールを使用したビジネス・スペースの構成』を参照してください。

デプロイメント・マネージャー・プロファイルおよびカスタム・プロファイルを使用する場合は、管理コンソールまたは「デプロイメント環境構成」ウィザードのページを使用する必要があります。詳しくは、『管理コンソールを使用したビジネス・スペースの構成』または『「デプロイメント環境構成」ウィザードを使用したビジネス・スペースの構成』を参照してください。

ビジネス・スペースは、次のデータベース製品でサポートされています: Derby Embedded、Derby Network Server、DB2 Universal、DB2 for i5/OS、DB2 for z/OS、Oracle 9i、Oracle 10g、および Oracle 11g

## プロファイル管理ツールを使用したビジネス・スペースの構成

スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合、プロファイル管理ツールを使用して WebSphere が提供するビジネス・スペースを構成することができます。

### このタスクについて

製品のインストール時にインストーラー・プログラムの一部としてプロファイル管理ツールを使用することも、製品のインストール後にプロファイル管理ツールを開始することもできます。また、製品のインストール後に `manageprofiles` コマンド・パラメーター `-configureBSpace` を使用することにより、コマンド行からプロファイル管理ツール機能を使用することができます。いずれの場合も、ビジネス・スパー

スは、共通データベース用に指定したものと同一データベース製品と共にインストールされます。ただし、ビジネス・スペースでサポートされていないデータベースを選択した場合にプロファイル管理ツールを使用すると、ビジネス・スペースは Derby Embedded データベースによって構成されます。

ビジネス・スペースは、使用している WebSphere 製品のサポートに対応して、以下のデータベース製品でサポートされています。

- Derby Embedded (WebSphere Process Server、WebSphere Enterprise Service Bus、および WebSphere Business Monitor 用)
- Derby Network Server (WebSphere Process Server、WebSphere Enterprise Service Bus、および WebSphere Business Monitor 用)
- DB2 Universal (WebSphere Process Server、WebSphere Enterprise Service Bus、WebSphere Business Monitor、および WebSphere Business Modeler Publishing Server 用)
- DB2 for i5/OS (WebSphere Process Server および WebSphere Enterprise Service Bus 用)
- DB2 for z/OS (WebSphere Process Server、WebSphere Enterprise Service Bus、および WebSphere Business Monitor 用)
- Oracle 9i (WebSphere Process Server および WebSphere Enterprise Service Bus 用)
- Oracle 10g (WebSphere Process Server、WebSphere Enterprise Service Bus、および WebSphere Business Monitor 用)
- Oracle 11g (WebSphere Process Server、WebSphere Enterprise Service Bus、WebSphere Business Monitor、および WebSphere Business Modeler Publishing Server 用)

デプロイメント・マネージャー・プロファイルおよびカスタム・プロファイルの場合は、管理コンソールまたは「デプロイメント環境構成」ウィザードのページを使用する必要があります。『管理コンソールを使用したビジネス・スペースの構成』または『「デプロイメント環境構成」ウィザードを使用したビジネス・スペースの構成』を参照してください。

スタンドアロン・サーバー・プロファイルに関する拡張構成オプションを使用する場合は、管理コンソールのページを使用してビジネス・スペースを構成する必要があります。例えば、プロファイル (WebSphere Business Monitor データベース、WebSphere Business Modeler Publishing Server データベース、または WebSphere Process Server 共通データベース) に対して選択したデータベースと異なるデータソースを指定したい場合は、管理コンソールを使用して、ビジネス・スペースを構成する必要があります。

これらの拡張構成オプションを使用する場合は、後から管理コンソール上で設定することになりますが、設定の前に以下のステップを完了しておく必要があります。

- プロファイル管理ツールを使用してスタンドアロン・サーバー・プロファイルを作成する場合は、「詳細プロファイル作成」オプションを使用して「**ビジネス・スペースの構成**」チェック・ボックスをクリアします。この操作により、後から管理コンソールを使用してビジネス・スペースを構成することができます。
- 『管理コンソールを使用したビジネス・スペースの構成』を参照してください。

## 手順

1. インストーラーまたはプロファイル管理ツールを開始して、「スタンドアロン・サーバー」インストール・オプションまたは「スタンドアロン・サーバー・プロファイル (Stand-alone server profile)」オプションを選択します。
2. 以下のいずれかの操作を行います。
  - Derby Embedded データベースを使用したビジネス・スペースのデフォルトのインストールと構成をそのまま使用する場合は、「標準的インストール」オプションまたは「標準プロファイル作成」オプションを選択します。
  - 拡張オプションを構成する場合は、「拡張」オプションを選択します。「ビジネス・スペースの構成」パネルで、「ビジネス・スペースの構成」チェックボックスを選択します。
3. プロファイル管理ツールを使用して、プロファイルを作成します。ビジネス・スペースがインストールされます。
4. データベースがリモートの場合は、プロファイル管理ツールの実行後に、データベース表を構成する必要があります。『ビジネス・スペースのデータベース表の構成』を参照してください。

## 次のタスク

ビジネス・スペースを使用する前に、チームが使用するビジネス・スペースと、ウィジェットで使用するセキュリティーをセットアップします。詳しくは、『ビジネス・スペースのセキュリティーのセットアップ』を参照してください。

## 管理コンソールを使用したビジネス・スペースの構成

管理コンソールを使用して、WebSphere が提供するビジネス・スペースをインストールして構成することができます。

### 始める前に

製品ソフトウェアをインストールする必要があります。製品をインストールする場合、ビジネス・スペースのファイルはインストーラーに含まれており、ビジネス・スペースはセットアップしたプロファイルで構成されています。

**Process Server / ESB** タスク管理ウィジェットおよびワークフロー・ウィジェットを必要とする WebSphere Process Server ランタイム環境の場合は、Business Process Choreographer を構成する必要があります。詳しくは、WebSphere Process Server ドキュメンテーションの『Business Process Choreographer の構成』を参照してください。

### このタスクについて

デプロイメント環境やその他の拡張プロファイル構成を使用する場合は、管理コンソールを使用して、ビジネス・スペースをランタイム環境で稼働するよう設定する必要があります。

## 手順

1. 管理コンソールが稼働していることを確認します。

- ナビゲーション・ペインで、「サーバー」 → 「アプリケーション・サーバー」または「サーバー」 → 「クラスター」をクリックします。
- サーバーまたはクラスター・ターゲットの名前を選択します。
- 「構成」 ページで、「ビジネス・インテグレーション」の下の「ビジネス・スペース構成」をクリックします。「ビジネス・スペースの構成」ページが表示されます。すでにビジネス・スペースが構成されている場合は、このページが表示されてもフィールドを編集することはできません。
- 「ビジネス・スペース・サービスをインストールする」チェック・ボックスを選択します。
- 「データベース・スキーマ名」のボックスに、ビジネス・スペースで使用するデータベース・スキーマの名前を入力します。
- 「既存のビジネス・スペース・データ・ソース」フィールドでデータ・ソースが指定されていない場合は、「以下を使用して、ビジネス・スペース・データ・ソースを作成:」に移動し、ビジネス・スペースで使いたいデータベースに接続するデータ・ソースを選択します。

「以下を使用して、ビジネス・スペース・データ・ソースを作成:」の下のデータ・ソースを指定すると、選択したデータ・ソースでモデル化された `jdbc/bpm/BusinessSpace` の JNDI 名を持つ ビジネス・スペース の新規データ・ソースが作成されます。

**注:** 使いたい既存のデータ・ソースがリストにない場合は、「ビジネス・スペースの構成」ページをキャンセルして使いたいデータベースおよびデータ・ソースを設定し、「ビジネス・スペースの構成」ページを再開して構成を完了する必要があります。

「ビジネス・スペースの構成」ページをキャンセルした後に、以下のステップを実行します。

- データベース製品ソフトウェアを使用してデータベースを作成します。
  - 管理コンソールを使用して JDBC プロバイダーを構成します。
  - 管理コンソールを使用してデータ・ソースを作成します。その際、サーバー・スコープまたはクラスター・スコープ (ステップ 2 で選択した項目によって異なる) で、データ・ソースの JNDI 名に `jdbc/bpm/BusinessSpace` を指定します。
  - 「ビジネス・スペースの構成」ページに戻り、データ・ソースを選択します。
- 「OK」をクリックします。
  - 構成を保管します。

## タスクの結果

ビジネス・スペースを構成すると、セットアップされたプロファイルで稼働するアプリケーションのビジネス・ユーザー向けに、ブラウザー・ベースのグラフィカル・ユーザー・インターフェースがセットアップされます。ビジネス・スペースのアプリケーション・ユーザーは、WebSphere Business Process Management ポートフォリオ内の製品をカスタマイズすることができます。

## 次のタスク

管理コンソールの「ビジネス・スペースの構成」ページを使用してビジネス・スペースを設定した後、以下のステップを実行します。

- スクリプトを実行してデータベースにテーブルを作成します。詳しくは、『ビジネス・スペースのデータベース表の構成』を参照してください。
- ウィジェットのエンドポイントがビジネス・スペースに表示されるように更新します。WebSphere Process Server および Enterprise Service Bus の場合、管理コンソールの「REST サービス・エンドポイント」ページを使用します。詳しくは、『管理コンソールでビジネス・スペース・ウィジェットのエンドポイントを可能にする』を参照してください。WebSphere Business Monitor および WebSphere Business Modeler Publishing Server の場合、エンドポイント・ファイルを編集します。詳しくは、『リモート・エンドポイントに対してビジネス・スペース・ウィジェットを手動で使用可能にする』を参照してください。
- ビジネス・スペースと、チームが使用しているウィジェットで使用するセキュリティをセットアップします。詳しくは、『ビジネス・スペースのセキュリティのセットアップ』を参照してください。

## 「デプロイメント環境構成」ウィザードの一部としてビジネス・スペースを構成する

WebSphere Process Server および WebSphere Enterprise Service Bus のランタイム環境の場合、ビジネス・スペースの構成や、ビジネス・スペースのウィジェット用の Representational State Transfer (REST) サービス構成は、「デプロイメント環境構成」ウィザードに自動的に組み込まれます。どの REST サービスを構成するかを選択することができます。

### このタスクについて

**トピックの対象範囲:** このトピックは、以下の製品を対象としています。

- WebSphere Process Server
- WebSphere Enterprise Service Bus

### 手順

1. 「サーバー」 → 「デプロイメント環境」 → 「新規」をクリックします。デプロイメント環境の作成プロセスがウィザードの一連のページ表示されます。
2. 新規デプロイメント環境を定義するか、デプロイメント環境定義が記述されたファイルをインポートします。IBM 提供のパターンに基づいてデプロイメント環境を作成することができます。カスタムのデプロイメント環境を作成することもできます。
3. 「デプロイメント環境パターン」ページで、任意のデプロイメント環境パターンを選択します。
4. 「ノードの選択」ページで、デプロイメント環境に参加するノードを指定します。
5. 「クラスター」ページで、特定のデプロイメント環境機能に割り当てる各ノードのクラスター・メンバー数を指定します。

6. 「データベース」ページで、表にリストされるコンポーネントの 1 つであるビジネス・スペースのデータ・ソースを構成します。説明の編集、接続のテスト、プロバイダーに対して使用するデータベース製品をそれぞれ設定することができます。ビジネス・スペースのこのページでは、「**テーブルの作成**」チェック・ボックスは選択できません。ビジネス・スペースのデータベース表を手動で構成する必要があります。データベース製品リストには、各コンポーネントでサポートされるすべてのデータベースが表示されます。
7. 「セキュリティ」ページで、セキュア・コンポーネントへのアクセス時に WebSphere が使用する認証別名を構成します。認証別名のユーザー名とパスワードは、このページで変更することができます。これらの別名を使用してセキュア・コンポーネントにアクセスしますが、データ・ソースにアクセスすることはできません。
8. WebSphere Process Server 構成の場合は、アプリケーション・デプロイメント・ターゲットの構成に必要な情報を指定して、Business Process Choreographer コンポーネントのデプロイメントをサポートします。このデプロイメント環境の Business Process Choreographer の構成に使用されるコンテキスト・ルート、セキュリティ、および Human Task Manager メール・セッションの値を指定します。
9. WebSphere Process Server 構成の場合は、クラスターまたはサーバーで稼働するビジネス・ルール・マネージャーを構成します。
10. 「システム REST サービス・エンドポイント (System REST Service Endpoints)」ヘルプ・ファイル・ページで、ランタイム環境のビジネス・スペース上で有効に設定するウィジェットのエンドポイントを構成します。
  - クライアントがサーバーまたはクラスターと通信するために必要なポート番号と、ホストまたは仮想ホストを入力します。
  - ホスト・フィールドとポート・フィールドを空のままにした場合、個々のクラスター・メンバーのホストとその HTTP ポートの値がデフォルト値として設定されます。負荷分散環境の場合、後でこのデフォルト値を現在の環境の仮想ホスト名とポートに変更する必要があります。
  - 必要に応じて、ウィジェットの説明を設定します。
11. 次のパネルで、「終了」または「終了して環境を生成」をクリックします。
12. デプロイメント環境またはクラスターを始動する前に、ビジネス・スペースのデータベース表を構成するスクリプトを実行します。詳しくは、『ビジネス・スペースのデータベース表の構成』を参照してください。

## 次のタスク

ビジネス・スペースを使用する前に、チームが使用するビジネス・スペースと、ウィジェットで使用するセキュリティをセットアップします。詳しくは、『ビジネス・スペースのセキュリティのセットアップ』を参照してください。

## ビジネス・スペースのデータベース表の構成

WebSphere が提供するビジネス・スペース用のデータベース表は、インストール・プログラムによって生成されるスクリプトを使用して、リモート・データベース・サーバーに手動でインストールできます。デプロイメント環境を使用する場合、ま

たはデータベースがリモートの場合は、ビジネス・スペースの構成後にこれらのテーブルをインストールする必要があります。

## 始める前に

このタスクを完了する前に、以下のタスクを完了しておく必要があります。

- 製品のインストール。
- プロファイルの構成、およびそのプロファイルでのビジネス・スペースの構成。
- サーバーの停止。

DB2 for z/OS を使用している場合は、このタスクの開始前に以下の追加操作を実行してください。

- TEMP データベースと TEMP テーブル・スペースを作成し、スクロール可能カーソルを処理するための宣言済み一時テーブルを収容する。
- 専用 STOGROUP を作成し、ビジネス・スペース データを収容する。

## 手順

1. データベースでの読み取りアクセス権と書き込みアクセス権を持つユーザーとしてデータベース・サーバーにログオンします。i5/OS の場合は、認証別名にあるユーザー ID でログオンします。
2.  データベースに接続します。
3. 最後に構成したプロファイル内のスクリプトを探し、データベースと同じマシン上の任意のロケーションに保存します。

スクリプトはデフォルトで `profile_root/dbscripts/BusinessSpace/database_product_name/database_name` ディレクトリーに格納されています。スクリプトは、最後に構成したサーバーまたはクラスターのプロファイルに格納されます。「デプロイメント環境構成」ウィザードを使用した場合、スクリプトはデプロイメント・マネージャー・プロファイルに格納されます。リモート・データベースを構成する場合は、製品がインストールされているマシンからリモート・システム上にスクリプトをコピーしてください。

4.  **WebSphere Process Server for z/OS および WebSphere Enterprise Service Bus for z/OS の場合:** DB2 for z/OS を構成する場合は、`createDB.sh` スクリプトを使用して、ビジネス・スペース・データベース表を、1つのデータベース内のその他のすべてのデータベース・オブジェクトで構成することができます。詳しくは、WebSphere Process Server for z/OS の資料の『`createDB.sh` スクリプトによる DB2 データベース・オブジェクトの作成』を参照してください。または、SPUFI または DSNTEP2 などの DB2 for z/OS ユーティリティを使用して、`createTable_BusinessSpace.sql` スクリプトを実行することができます。詳しくは、WebSphere Process Server for z/OS および WebSphere Enterprise Service Bus for z/OS の資料の『`DButility.sh`、SPUFI、または DSNTEP2 を使用した DB2 データベースおよびストレージ・グループの作成』を参照してください。
5.  ご使用のデータベース・ソフトウェア用のコマンド行インターフェースで、次のコマンドのいずれかを実行します。i5/OS の場合は、Qshell からコマンドを実行してください。ビジネス・スパー

スは、ご使用の製品で使用しているデータベースと互換性があるように、以下に示す DB2、Derby、および Oracle データベースでサポートされています。

- **DB2** : `db2 -tf createTable_BusinessSpace.sql`
- **DB2 for i5/OS**: `db2 -tvf createTable_BusinessSpace.sql`
- **DB2 for z/OS**: `db2 -tf createTable_BusinessSpace.sql`
- **Derby**: `java -Dij.protocol=jdbc:derby: org.apache.derby.tools.ij createTable_BusinessSpace.sql`
- **Oracle**: `sqlplus user/password@database_name @createTable_BusinessSpace.sql`

各部の意味は、次のとおりです。

`user` は、DBA アクセス権限を持つユーザーです。

`database_name` は、`orcl` などの Oracle ID です

6. i5/OS Linux UNIX Windows DB2 および DB2 for z/OS の場合は、次のコマンドを使用してコマンド行インターフェースをビジネス・スペースのデータベースにバインドします。

```
db2 connect to database_name
db2 bind DB2_installation_directory\bnd\@db2cli.lst blocking all
grant public
db2 connect reset
```

各部の意味は、次のとおりです。

`database_name` はビジネス・スペース・データベースの名前です

`DB2_installation_directory` は、DB2 がインストールされるディレクトリーです

7. サーバーを始動します。

## 次のタスク

- ウィジェットのエンドポイントがビジネス・スペースに表示されるように更新します。
- ビジネス・スペースと、チームが使用しているウィジェットで使用するセキュリティをセットアップします。

## 管理コンソールでビジネス・スペース・ウィジェットのエンドポイントを使用可能にする

ご使用の製品で必要とされるすべてのウィジェットは、WebSphere が提供するビジネス・スペース とともにインストールされます。チームがビジネス・スペースでウィジェットを使用する前に、ウィジェットの Representational State Transfer (REST) サービス・エンドポイントをビジネス・スペースにデプロイして登録する必要があります。

### 始める前に

**トピックの対象範囲:** このトピックは、以下の製品を対象としています。

- WebSphere Process Server

- WebSphere Enterprise Service Bus

このタスクを完了する前に、以下のタスクを完了しておく必要があります。

- 製品のインストール。
- プロファイルの構成、およびそのプロファイルでのビジネス・スペースの構成。
- データベース表の構成 (リモート・データベースまたはデプロイメント環境を使用する場合)。

## このタスクについて

REST サービスのデプロイメントは、スタンドアロン・サーバー・プロファイルで自動的に実行されます。他の構成タイプの場合は、「システム REST サービス・エンドポイント (System REST Service Endpoints)」管理コンソール・ページを使用すると、ビジネス・スペース内のすべての製品ウィジェットに関する REST アプリケーション・プログラミング・インターフェース (API) のサービス・エンドポイントを構成することができます。これらの REST エンドポイントは、ビジネス・スペースに自動的に登録されます。その後、ビジネス・スペースは自動的にウィジェットをこれらのエンドポイントに関連付けて、使用されるパレットにそれらのウィジェットが表示されます。

同じ REST サービス・エンドポイントの複数インスタンスを構成したい場合は、エンドポイント・ファイルおよびウィジェット・メタデータ・ファイルを手動で編集する必要があります。詳しくは、『複数のエンドポイントに対してビジネス・スペース・ウィジェットを使用可能にする』を参照してください。

## 手順

1. 次のいずれかをクリックします。
  - サーバー上のシステム REST サービスの場合: 「サーバー」 → 「アプリケーション・サーバー」 → 「*servername*」 → 「ビジネス・インテグレーション」 → 「システム REST サービス・エンドポイント」
  - クラスター上のシステム REST サービスの場合: 「サーバー」 → 「クラスター」 → 「*clustername*」 → 「ビジネス・インテグレーション」 → 「システム REST サービス・エンドポイント」
  - サーバー上のビジネス・プロセス REST サービスの場合: 「サーバー」 → 「アプリケーション・サーバー」 → 「*servername*」 → 「ビジネス・インテグレーション」 → 「Business Flow Manager」 → 「REST サービス・エンドポイント」
  - クラスター上のビジネス・プロセス REST サービスの場合: 「サーバー」 → 「クラスター」 → 「*clustername*」 → 「ビジネス・インテグレーション」 → 「Business Flow Manager」 → 「REST サービス・エンドポイント」
  - サーバー上のヒューマン・タスク REST サービスの場合: 「サーバー」 → 「アプリケーション・サーバー」 → 「*servername*」 → 「ビジネス・インテグレーション」 → 「Human Task Manager」 → 「REST サービス・エンドポイント」
  - クラスター上のヒューマン・タスク REST サービスの場合: 「サーバー」 → 「クラスター」 → 「*clustername*」 → 「ビジネス・インテグレーション」 → 「Human Task Manager」 → 「REST サービス・エンドポイント」

「システム REST サービス・エンドポイント」ページが表示され、このページにより、製品またはコンポーネント (Business Flow Manager または Human Task Manager) で使用されるビジネス・スペース・ウィジェットのために構成できるデフォルトの REST サービス・エンドポイントがすべて表示されます。REST サービス・エンドポイントが既に構成されている場合は、メッセージが表示されます。

2. ビジネス・スペースで使用するすべての REST サービスについてのプロトコルをリストから選択します。**https://** または **http://** を選択することによりフル URL パスを設定し、「ホスト名または負荷分散環境の仮想ホスト (Host Name or Virtual Host in a Load-Balanced Environment)」と「ポート」を入力します。管理およびアプリケーションのセキュリティーで保護されているサーバーを使用している場合は、必ず **https://** を選択し、ビジネス・スペース・ウィジェットがエンドポイントに到達して正しく動作するようにします。
3. REST サービスの表で、それぞれの REST サービスの意味のある説明を「説明」フィールドに入力します。
4. 「OK」をクリックして、エンドポイント・ファイルへの変更をコミットします。

### 次のタスク

- WebSphere Business Monitor および WebSphere Modeler Publishing Server に含まれている、ウィジェットのその他のサービス・エンドポイントの場合は、エンドポイント・ファイル内でウィジェットを手動で使用可能にする必要があります。
- サービス・エンドポイントの複数インスタンスの場合、例えば、2 つのクラスター上で処理を区画化して、各クラスターからのデータをウィジェットが表示するようにしたいときは、それぞれの追加クラスターに対して追加ウィジェットを手動で使用可能にする必要があります。
- ビジネス・スペースのセキュリティーをセットアップします。

## リモート・エンドポイントに対してビジネス・スペース・ウィジェットを手動で使用可能にする

ご使用の製品で必要となるすべてのウィジェットはビジネス・スペースと共にインストールされますが、それらのウィジェットは、使用可能にしないと、チームがビジネス・スペースで使用することはできません。「システム REST サービス・エンドポイント」管理コンソール・ページ上で一部のウィジェットのエンドポイントを登録することができますが、WebSphere Business Modeler Publishing Server ウィジェット、および WebSphere Business Monitor ウィジェットは、エンドポイント・ファイルに手動で登録する必要があります。

### 始める前に

**トピックの対象範囲:** このトピックは、以下の製品を対象としています。

- WebSphere Business Modeler Publishing Server
- WebSphere Business Monitor
- WebSphere Business Services Fabric

使用可能化のプロセスは、製品のインストール中に、ビジネス・スペースをスタンドアロン・サーバー・プロファイルにインストールするときに実行されます。ただ

し、高可用性の環境またはデプロイメント環境で、ビジネス・スペースを別個のサーバーにインストール済みの場合は、ウィジェットのサービス・エンドポイントを登録するために、ビジネス・スペースがインストールされているサーバーにエンドポイント・ファイルを追加する必要があります。エンドポイントを登録する「システム REST サービス・エンドポイント」管理コンソール・ページに含まれていないウィジェットの場合は、エンドポイント・ファイルを変更することにより手動で構成する必要があります。

このタスクを完了する前に、以下のタスクを完了しておく必要があります。

- 製品のインストール。
- プロファイルの構成、およびそのプロファイルでのビジネス・スペースの構成。
- データベース表の構成 (リモート・データベースまたはデプロイメント環境を使用する場合)。

## このタスクについて

サービス・エンドポイント・レジストリー・ファイルは、各製品にバンドルされており、製品のインストール時に追加されます。以下の製品には、手動で構成する必要があるウィジェットがあります。インストール済みの製品、およびビジネス・スペースで使用しているウィジェットに基づいて、以下のエンドポイント・ファイルの 1 つ以上を編集します。

- WebSphere Business Modeler Publishing Server: pubserverEndpoints.xml
- WebSphere Business Monitor: monitorEndpoints.xml
- WebSphere Business Monitor with Alphablox: monitorABXEndpoints.xml
- WebSphere Business Services Fabric: fabricEndpoints.xml

**注:** WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus がその他の製品と異なるセルにインストールされている場合は、wpsEndpoints.xml (WebSphere Process Server および WebSphere Enterprise Service Bus ウィジェット用)、wsumEndpoint.xml (ユーザー・メンバーシップ用)、および bpcEndpoints.xml (ビジネス・プロセスおよびヒューマン・タスク用) のエンドポイント・ファイルも手動で編集する必要があります。

エンドポイント登録ファイルは、ご使用のプロファイル用に作成したディレクトリー内のビジネス・スペースのための registryData ディレクトリーにあります。エンドポイント・レジストリー・ファイルには相対パスがあり、すべてのファイルが 1 個所のローカル・ホストにある場合に有効に機能します。エンドポイントが ビジネス・スペース サーバーからリモートにある場合は、相対パスを絶対 URL として入力する必要があります。

管理者は、以下のステップを実行して、ウィジェットとエンドポイントを使用可能にすることができます。

### 手順

1. `install_root/BusinessSpace/registryData` ディレクトリーにあるエンドポイント・テンプレート・ファイルを見つけます。
2. エンドポイント・テンプレート・ファイルを、新規または変更したエンドポイントを識別するファイルにコピーします。

3. エンドポイント・ファイル内の各エンドポイントは、<tns:Endpoint> ブロックにより指定されます。変更するブロックを判別し、変更しないブロックをすべて削除します。

ウィジェットは、REST (HTTP) URL エンドポイントにバインドされます。以下の情報を更新することができます。

- <tns:url>、絶対または相対 HTTP エンドポイント URL を指定する HTTP Endpoint URL。デフォルトにより、URL は相対です。これを、例えば、`http://virtualhost.com:virtualport/rest/bpm/htm`、または `http://host1:9445/WBPublishingDRAFT/` などの絶対 URL パスに変更します。

サーバーのポート番号を調べるには、次のステップを実行します。

- 管理コンソールにログインします。
- 「サーバー」 → 「アプリケーション・サーバー」をクリックします。
- ポート番号を調べる対象のサーバーをクリックし、「ポート」セクションを展開します。

すべてのアプリケーションは、**wc\_defaulthost** (非セキュア・ホスト) パラメーターまたは **wc\_defaulthost\_secure** (セキュア・ホスト) パラメーターのいずれかに示されるように、同じポートを使用します。

**注:** HTTP サーバーを使用して Web モジュールにアクセスし、ロード・バランシングを行う場合は、HTTP サーバーのホスト名とポート設定を使用してください。

- <tns:description>、ウィジェットの目的を記述するエンドポイントの説明。アプリケーションのエンド・ユーザーにとって意味のある説明を記述します。
4. 各エンドポイント・ファイルに対して変更を行い、ウィジェットを変更、追加、または除去します。

action 属性を使用して、例えば <tns:Endpoint action=addUpdate> のように、予期するアクションを指定します。action 属性には、次の値を指定できます。

- addUpdate: ウィジェットを追加または更新します。これはデフォルトです。
  - add: レジストリーにウィジェットを追加します。レジストリーにウィジェットがすでに存在する場合は、置き換えられません。
  - update: レジストリーのウィジェットを更新します。レジストリーにウィジェットが存在しない場合は、追加されません。
  - delete: 指定した ID とバージョンのウィジェットを削除します。
5. `profile_root/profiles/profile_name/BusinessSpace/registryData/` ディレクトリーを作成し、このディレクトリーにエンドポイント・ファイルをコピーします。
  6. ビジネス・スペースがデプロイされているクラスターのすべてのノードで、同じディレクトリーにエンドポイント・ファイルを格納します。管理しやすくするため、可能な限り同じノードを使用してください。ただし、ファイルは複数のノードに配置可能です。

## 例

以下の例のエンドポイント・ファイルは、WebSphere Business Monitor 用です。

```

<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<!-- START NON-TRANSLATABLE -->
<tns:BusinessSpaceRegistry
xmlns:tns="http://com.ibm.bspace/BusinessSpaceRegistry"
xmlns:xsi="http://www.w3.org/2001/XMLSchema-instance"
xsi:schemaLocation="http://com.ibm.bspace/BusinessSpaceRegistry
BusinessSpaceRegistry.xsd ">

<tns:Endpoint>
<tns:id>{com.ibm.wbimonitor}monitorServiceRootId</tns:id>

<tns:version>1.0.0.0</tns:version>
<tns:url>rest/</tns:url>

<tns:name>Location of backing services for Monitor widgets
</tns:name>
<tns:description>Location of backing services for Monitor widgets
</tns:description>

<tns:localeInfo>
</tns:Endpoint>

</tns:BusinessSpaceRegistry>
<!-- END NON-TRANSLATABLE -->

```

エンドポイントを変更する場合は、以下を考慮してください。

- **<tns:id>**: ID には任意のストリングを使用できますが、登録済みのすべてのエンドポイントに対して固有にする必要があります。エンドポイントを追加する場合はこの ID を必ず固有にしてください。
- **<tns:url>**: URL が相対パスである場合は、REST サービスのエンドポイントがビジネス・スペース・サーバーと同じ場所にあるとみなされます。ご使用のエンドポイントがリモート・マシン上にある場合は、このフィールドを絶対 URL に更新します。ご使用の REST エンドポイントが保護されている場合は、転送プロトコルとして https があることも確認してください。
- **<tns:name>**: ご使用のエンドポイントを識別しやすくするために、意味のある名前をエンドポイントに入力します。
- **<tns:description>**: このエンドポイントが機能しているデータ・セットの性質について詳述する意味のある説明を入力します。

## 次のタスク

- サービス・エンドポイントの複数インスタンスの場合、例えば、2 つのクラスター上で処理を区画化して、各クラスターからのデータをウィジェットが表示するようにしたいときは、それぞれの追加クラスターに対して追加ウィジェットを手動で使用可能にする必要があります。

- ビジネス・スペースのセキュリティーをセットアップします。

## 複数のエンドポイントに対してビジネス・スペース・ウィジェットを使用可能にする

サービス・エンドポイントの複数インスタンスの場合、例えば、2つのクラスター上で処理を区画化して、各クラスターからのデータをウィジェットが表示するようにしたいときは、それぞれの追加クラスターに対して追加ウィジェットを手動で使用可能にする必要があります。ビジネス・スペースにエンドポイントを登録しているエンドポイント・ファイル、およびウィジェットの定義を含むウィジェット・メタデータ・ファイルの2つのファイルを編集する必要があります。

### 始める前に

**トピックの対象範囲:** このトピックは、以下の製品を対象としています。

- WebSphere Business Modeler Publishing Server
- WebSphere Business Monitor
- WebSphere Process Server
- WebSphere Business Services Fabric

このタスクを完了する前に、以下のタスクを完了しておく必要があります。

- 製品のインストール。
- プロファイルの構成、およびそのプロファイルでのビジネス・スペースの構成。
- データベース表の構成 (リモート・データベースまたはデプロイメント環境を使用する場合)。
- ご使用のウィジェットのすべてのエンドポイントの構成。

### このタスクについて

デプロイメント環境では、作業を分割できます。例えば、2つのクラスターを構成し、1つはアカウント・データを処理し、もう1つは保険データを処理するようにすることができます。ただし、1つのサービス・エンドポイントは1つのクラスターにのみサービスを提供します。ビジネス・スペースから両方の作業区画にアクセスするには、2つの個別のウィジェットを各作業区画に1つずつ登録して、ビジネス・スペースから両方の区画にアクセスできるようにします。例えば、カタログに会計ヒューマン・タスク・リスト・ウィジェットおよび保険タスク・リスト・ウィジェット (両方に同じ実際のヒューマン・タスク・リスト・コードあり) を含めることができます。

同じ REST サービス・エンドポイントの複数インスタンスを構成したい場合は、エンドポイント・ファイルおよびウィジェット・メタデータ・ファイルを手動で編集する必要があります。

サービス・エンドポイント・レジストリー・ファイルは、各製品にバンドルされており、製品のインストール時に追加されます。以下の製品には、手動で構成する必要があるウィジェットがあります。インストール済みの製品、およびビジネス・スペースで使用しているウィジェットに基づいて、以下のエンドポイント・ファイルの1つ以上を編集する必要があります。

- WebSphere Business Modeler Publishing Server: pubserverEndpoints.xml
- WebSphere Business Monitor: monitorEndpoints.xml
- WebSphere Business Monitor with Alphablox: monitorABXEndpoints.xml
- WebSphere Process Server (タスク管理ウィジェットおよびワークフロー・ウィジェットの複数インスタンスを使用可能にした場合): bpcEndpoints.xml
- WebSphere Business Services Fabric: fabricEndpoints.xml

ウィジェット・メタデータ・ファイルには、ご使用の製品用のウィジェットの定義が含まれています。インストール済みの製品、およびビジネス・スペースで使用しているウィジェットに基づいて、以下のウィジェット・ファイルの 1 つ以上を編集する必要があります。

- WebSphere Business Modeler Publishing Server: pubserverWidgets.xml
- WebSphere Business Monitor: monitorWidgets.xml
- WebSphere Process Server: wpsWidgets.xml
- WebSphere Business Services Fabric: fabricWidgets.xml

エンドポイント登録ファイルおよびウィジェット・メタデータ・ファイルはどちらも、ご使用のプロファイル用に作成したディレクトリー内のビジネス・スペースのための registryData ディレクトリーにあります。

*install\_root/BusinessSpace/registryData/BusinessSpace/registryData* ディレクトリーには、ご使用の製品用のエンドポイント・ファイルおよびウィジェット定義テンプレート・ファイルが含まれています。テンプレートとして使用する定義ファイルをコピーして、変更を追加することができます。ビジネス・スペース・サーバーが稼働しているクラスターのすべてのノード上にある、ご使用のプロファイル・ディレクトリー、 *profile\_root/profiles/profile\_name/BusinessSpace/registryData/* 内のファイルには、現在ビジネス・スペース・サーバーに登録されているエンドポイントおよびウィジェット・メタデータ定義が含まれています。

ウィジェットの追加インスタンスを作成している場合は、以下のステップを完了します。

### 手順

1. エンドポイント・ファイルを変更して、エンドポイントを追加します。
  - エンドポイント・ファイルまたはエンドポイント・テンプレート・ファイルを見つけて、新規エンドポイントを追加します。テンプレート・ファイルで作業している場合は、エンドポイント・テンプレート・ファイルをコピーします。変更しないエンドポイントをすべて除去し、追加エンドポイントを新規ファイルに追加します。
  - エンドポイント・ファイルを編集し、<tns:Endpoint> で始まるエンドポイントを追加します。その際、固有の ID (<tns:id>) および新規エンドポイントの URL (<tns:url>) を指定します。ただし、バージョンおよび (必要に応じて) すべてのロケールは元のエンドポイントと同じにします。例えば、「保険タスク・リスト」などの名前と説明を変更することができます。
  - 変更を保存します。
2. ウィジェット・メタデータ・ファイルを変更します。

- ウィジェット・メタデータ・ファイルまたはウィジェット・テンプレート・メタデータ・ファイルを見つけて、新規のウィジェット定義を追加します。テンプレート・ファイルで作業している場合は、ウィジェット・メタデータ・ファイルをコピーします。変更しないウィジェット定義をすべて除去し、追加ウィジェットを新規ファイルに追加します。
  - 新規のウィジェット・メタデータには、それ自体に固有の ID (<tns:id>) が必要です。その他の定義、および必要に応じてローカル・セクションをすべて保持することができます。名前、説明、およびツールチップを変更し、新規エンドポイントの性質の概要を説明するビジネス・スペース内の固有のウィジェットとして新規ウィジェットを使用可能にします。例えば、<tns:name> でウィジェットの名前を「チームの保険タスク・リスト」にできます。
  - エンドポイント参照 (<tns:refId>) を、エンドポイント・ファイルのエンドポイント ID (<tns:id>) に一致させてください。
  - 変更を保存します。
3. `profile_root/profiles/profile_name/BusinessSpace/registryData/` ディレクトリを作成し、このディレクトリにエンドポイント・ファイルおよびウィジェット・ファイルの両方をコピーします。
  4. ビジネス・スペースがデプロイされているクラスターのすべてのノードで、同じディレクトリにエンドポイント・ファイルおよびウィジェット・ファイルを格納します。管理しやすくするため、可能な限り同じノードを使用してください。ただし、ファイルは複数のノードに配置可能です。

## 例

以下のエンドポイントは、`bpcEndpoints.xml` でコピーおよび変更することができます。

```
<tns:Endpoint>
  <tns:id>{com.ibm.bpm}HTM</tns:id>

  <tns:version>6.1.2.0</tns:version>
  <tns:url>rest/bpm/htm</tns:url>
  <tns:name>Location of backing services for HTM widgets</tns:name>
  <tns:description>Location of backing services for HTM widgets
</tns:description>

</tns:Endpoint>
```

エンドポイントを変更する場合は、以下の情報を考慮してください。

- <tns:id>: ID には任意のストリングを使用できますが、登録済みのすべてのエンドポイントに対して固有にする必要があります。エンドポイントを追加する場合はこの ID を必ず固有にしてください。
- <tns:url>: URL が相対パスである場合は、REST サービスのエンドポイントがビジネス・スペース・サーバーと同じ場所にあるとみなされます。ご使用のエンドポイントがリモート・マシン上にある場合は、このフィールドを絶対 URL に

更新します。ご使用の REST エンドポイントが保護されている場合は、転送プロトコルとして https があることも確認してください。

- <tns:name>: ご使用のエンドポイントを識別しやすくするために、意味のある名前をエンドポイントに入力します。
- <tns:description>: このエンドポイントが機能しているデータ・セットの性質について詳述する意味のある説明を入力します。その説明は、データ・セットに対して機能しているクラスターまたはデータ・セットの性質のどちらかに基づく説明にできます (例えば、保険金請求ヒューマン・タスク、または会計データ・ヒューマン・タスクなど)。

wpsWidgets.xml では以下のウィジェット定義を変更することができます。

```
<tns:Widget>
  <tns:id>{com.ibm.bspace.widget}teamTaskList</tns:id>

  <tns:version>1.0.0.0</tns:version>
  <tns:name>My Team's Tasks</tns:name>

  <tns:type>{com.ibm.bspace}iWidget</tns:type>
  <tns:description>This widget displays tasks that have been assigned to
people within your team.</tns:description>
  <tns:tooltip>My Team's Tasks</tns:tooltip>

  <tns:categoryId>{com.ibm.bspace}tasks</tns:categoryId>
  <tns:widgetEndpointId>
{com.ibm.bspace.htm}bspaceTeamTaskListWidgetRootId
</tns:widgetEndpointId>
  <tns:url>iWidget/widgets/ttlist/TeamTaskList_iWidget.xml
</tns:url>
  <tns:helpUrl>bspace_help/widget_help/en/myteamstasks.html
</tns:helpUrl>
  <tns:iconUrl>com/ibm/bpace/widgets/ttlist/themes/images/
icon_teamtasks.gif</tns:iconUrl>
  <tns:previewUrl>com/ibm/bpace/widgets/ttlist/themes/images/
prev_teamtasks.gif</tns:previewUrl>
  <tns:previewThumbnailUrl>com/ibm/bpace/widgets/ttlist/themes/
images/thumb_teamtasks.gif</tns:previewThumbnailUrl>
  <tns:owner>International Business Machines Corp.</tns:owner>
  <tns:email>TBD</tns:email>
  <tns:serviceEndpointRef required="true">
  <tns:name>serviceUrlRoot</tns:name>
  <tns:refId>{com.ibm.bpm}HTMinsurance</tns:refId>
  <tns:refVersion>6.1.2.0</tns:refVersion>
</tns:serviceEndpointRef>
  <tns:serviceEndpointRef required="true">
```

```

        <tns:name>userImageServiceUrlRoot</tns:name>
        <tns:refId>{com.ibm.bspace.htm}bSpaceUserImageServiceRootId
    </tns:refId>
        <tns:refVersion>1.0.0.0</tns:refVersion>
    </tns:serviceEndpointRef>
    <tns:serviceEndpointRef required="true">
        <tns:name>monitorServiceRoot</tns:name>
        <tns:refId>{com.ibm.wbimonitor}monitorServiceRootId</tns:refId>
        <tns:refVersion>1.0.0.0</tns:refVersion>
    </tns:serviceEndpointRef>
    <tns:serviceEndpointRef required="true">
        <tns:name>vmmServiceUrlRoot</tns:name>
        <tns:refId>{com.ibm.bspace}bSpaceVMMServiceRootId</tns:refId>
        <tns:refVersion>1.0.0.0</tns:refVersion>
    </tns:serviceEndpointRef>
</tns:Widget>

```

ウィジェット定義を変更して、同じ基本の機能および動作を持つ複数のウィジェットを作成する場合は、以下の情報を考慮してください。

- <tns:id>: ID には任意のストリングを使用でき、ID はウィジェット定義を一意的に識別する必要があります。追加するそれぞれの新規ウィジェット定義について、この ID を必ず固有にしてください。
- <tns:name>: この名前により、ビジネス・ユーザーが正しいウィジェットを選択できるようにする必要があります。意味のある名前を入力します。
- <tns:description>: この説明により、ビジネス・ユーザーが、データの性質および選択しているウィジェットの機能を理解できるようにする必要があります。
- <tns:tooltip>: これにより、ビジネス・ユーザーが正しいウィジェットを選択できるようになります。カーソルを当該箇所に移動すると吹き出しヘルプが表示されます。
- <tns:refId>: このサービス・エンドポイント参照 ID は、エンドポイント定義セクションの ID フィールドと一致する必要があります。RefID がエンドポイント ID と同じであることを確認してください。

## 次のタスク

ビジネス・スペースのセキュリティーをセットアップします。

## ビジネス・スペースでヒューマン・ワークフロー・ウィジェットを実行するために HTML-Dojo フォームを使用可能にする

WebSphere Process Server で作業をしていて、Business Process Choreographer と異なるサーバー・インスタンスにビジネス・スペースをインストール済みの場合、ヒューマン・タスクを操作するための WebSphere Integration Developer で生成される HTML-Dojo フォームを、ビジネス・スペースで実行中のヒューマン・ワークフロー・ウィジェットで使用できるようにするためには、追加ステップを実行する必要があります。

## このタスクについて

**トピックの対象範囲:** このトピックは、以下の製品に適用されます。

- WebSphere Process Server

ビジネス・スペースおよび WebSphere Process Server の両方が、同じ WebSphere Network Deployment セルのデプロイメント・ターゲットで構成されるか、または異なるセルのデプロイメント・ターゲットで構成されるかによって、以下のいずれかのステップを完了します。

### 手順

1. 単一セルでのセットアップの場合: プロセスやヒューマン・タスク、および生成された HTML-Dojo フォームが含まれるエンタープライズ・アプリケーションをデプロイするときには、そのフォームの HTML ファイルが含まれている Web モジュールを、ビジネス・スペースが構成されているのと同じデプロイメント・ターゲットにマップする必要があります。
2. クロス・セル環境でのセットアップの場合: リモート・セルのビジネス・スペースをホストするデプロイメント・ターゲット上のフォームの HTML ファイルを含んでいる Web モジュールをデプロイします。Web モジュールをデプロイするときは、WebSphere Integration Developer のフォーム生成プログラムのフォームで定義されたコンテキスト・ルートを指定する必要があります。ビジネス・スペースのサーバーまたはクラスター上の新規アプリケーションを開始します。

## ビジネス・スペースのセキュリティーのセットアップ

製品の WebSphere が提供するビジネス・スペースのインストールおよび構成を行ったら、ビジネス・スペースの成果物をチームがどのように処理するかについてのセキュリティー・オプションを検討する必要があります。アプリケーション・セキュリティーをセットアップできますが、その場合は、アプリケーションに管理セキュリティーも必要になります。さらに、Jython スクリプトを実行して、スーパーユーザー・ロールをビジネス・スペースに割り当てる必要もあります。

### ビジネス・スペースのアプリケーション・セキュリティーの設定

ビジネス・スペースのセキュリティーをオンにするには、アプリケーション・セキュリティーおよび管理セキュリティーの両方を有効にする必要があります。

### 始める前に

このタスクを完了する前に、以下のタスクを完了しておく必要があります。

- プロファイルの構成、およびそのプロファイルでのビジネス・スペースの構成。
- データベース表の構成 (リモート・データベースまたはデプロイメント環境を使用する場合)。
- ビジネス・スペースで使用するウィジェットの REST サービス・エンドポイントの構成。
- 製品のユーザー・レジストリーにユーザー ID が登録されていることの確認。

## このタスクについて

アクセスの認証と権限を確実にするためにビジネス・スペースのエンタープライズ・アーカイブ (EAR) ファイルが事前構成済みである。ビジネス・スペースは、すべての認証ユーザーにマップされているデフォルトの J2EE ロールを使用し、これにより、ビジネス・スペース URL にアクセスするときにユーザーに認証のプロンプトが表示されます。認証されないユーザーは、ログイン・ページにリダイレクトされます。

ビジネス・スペースのスペースおよびページ内容への権限は、スペース管理の一部としてビジネス・スペース内で処理されます。

ビジネス・スペースへの認証アクセス (J2EE ロール・ベースの許可) を有効にするには、ユーザー・レジストリーを構成してアプリケーション・セキュリティーを有効にする必要があります。

### 手順

1. セキュリティーの詳細な説明については、製品のセキュリティー・ドキュメンテーションを参照してください。
2. ビジネス・スペース・アプリケーションの場合、管理、アプリケーション、およびインフラストラクチャーの保護の管理コンソール・ページ上で、「**管理セキュリティーを使用可能にする**」および「**アプリケーション・セキュリティーを使用可能にする**」の両方を選択します。
3. 同じ管理コンソール・ページ上の「**ユーザー・アカウント・リポジトリー**」の下で、「**フェデレーテッド・リポジトリー**」、「**ローカル・オペレーティング・システム**」、「**Lightweight Directory Access Protocol (LDAP)**」、または「**カスタム・ユーザー・レジストリー**」のいずれかを指定することができます。ただし、ビジネス・スペースに対して「**フェデレーテッド・リポジトリー**」を選択すると、拡張検索機能などの、ウィジェットおよびフレームワークの機能が追加されます。スペースおよびページを共用するためのユーザーを検索をするときは、検索有効範囲に E メール、ユーザーのフルネームとユーザー ID が含まれません。

### 次のタスク

- 管理およびアプリケーションのセキュリティーをオンにした後は、ビジネス・スペースにログオンすると、ユーザー ID およびパスワードのプロンプトが表示されます。ログオンするためには、選択したユーザー・レジストリーから有効なユーザー ID およびパスワードを使用する必要があります。管理セキュリティーをオンにした後は、管理コンソールに戻るたびに管理権限を持つユーザー ID でログオンする必要があります。
- ユーザーおよびグループのサブセットに対して、ビジネス・スペースへのログインを制限したい場合は、ビジネス・スペース J2EE ロールのマッピングを変更することができます。「**アプリケーション**」 → 「**エンタープライズ・アプリケーション**」 → **アプリケーション名**をクリックします。右のパネルの、「**詳細プロパティ**」の下の、「**ユーザー/グループ・マッピングへのセキュリティー役割**」を選択します。

- ビジネス・スペースのページおよびスペースへの権限を設定するには、ページおよびスペースを作成するときにビジネス・スペースでこれを管理することができます。
- ユーザーおよびグループに基づいてウィジェット内のデータのセキュリティーをセットアップするには、REST サービス・ゲートウェイ・アプリケーションへのユーザーのマッピングを変更する必要があります。REST サービス・ゲートウェイ・アプリケーションを選択し、右のパネルの、「詳細プロパティー」の下の、「**ユーザー/グループ・マッピングへのセキュリティー役割**」を選択します。  
RestServicesUser ロールの場合、ユーザーおよびグループを追加して、すべてのREST サービス・ウィジェットのデータへのアクセスを制御することができます。
- ユーザー・グループ・ロールに基づいてウィジェットのデータへのアクセスを制限したい場合は、管理グループ・ロールに割り当てたユーザーを変更することを検討してください。管理コンソールを開いて、「**セキュリティー**」 → 「**管理、アプリケーション、およびインフラストラクチャーの保護**」 → 「**管理グループ・ロール**」 をクリックし、グループを選択することにより、ロール・リストを表示してこれらのロールに割り当てられているユーザーを確認することができます。

ビジネス・ルールやビジネス変数などの、ウィジェットの管理グループ・ロールに割り当てられたユーザーを変更することを検討したい場合があります。

例えば、ヘルス・モニター・ウィジェットの場合、以下の管理ロールはすべてモニター権限を持ち、管理コンソールへのアクセスが可能であるため、これらのロールに割り当てられたユーザーはヘルス・モニターのデータにアクセスできません。

- モニター
- コンフィギュレーター
- オペレーター
- 管理者
- Adminsecuritymanager
- デプロイヤー
- iscadmins

それらの管理グループ・ロールにマップされたユーザーは、ヘルス・モニターのデータへのアクセス権限を持ちます。それらのロールにマップされていないユーザーは、ヘルス・モニターのデータにアクセスできません。

- さらに、ウィジェットの中には、ビジネス・ユーザーが作成した成果物へのロール・ベースのアクセスの追加層を持つものもあります。ソリューション管理の場合、セキュリティー・マネージャー・ウィジェットを使用すると、**Business Calendar Manager** ウィジェットのタイムテーブルに対してメンバーが持つアクセス権限のレベルを決定するユーザーおよびグループのシステム・ロールまたはモジュール・ロールを割り当てることができます。レビューの場合、**Publishing Server Access Control** ウィジェットは、レビューを行いコメントを入力できるユーザーのアクセス権限を管理します。詳しくは、ご使用のウィジェットのオンライン・ヘルプを参照してください。

## ビジネス・スペースのスーパーユーザー・ロールの割り当て

ビジネス・スペースでは、スーパーユーザーとなるユーザーを割り当てることができます。スーパーユーザーは、ビジネス・スペース内のすべてのスペースとページの表示、編集、削除を行うことができ、また、どのスペースをテンプレートにするかを指定することができます。ユーザー ID に対して、ビジネス・スペースのスーパーユーザー・ロールを割り当てるスクリプトを実行したり、`wsadmin` スクリプト・クライアントを使用して、ビジネス・スペースのスーパーユーザーを有効にするスクリプトを作成することができます。

### 始める前に

製品のユーザー・レジストリーにユーザー ID が登録されている必要があります。

#### 手順

1. スーパーユーザー・ロールをユーザーに割り当てるためのスクリプト `install_root/BusinessSpace/scripts/createSuperUser.py` を見つけます。
2. コマンド・プロンプトを開いてディレクトリー `profile_root/bin` に移動します。この `profile_root` は、ビジネス・スペース がインストールされているプロファイルのディレクトリーを表します。
3. 以下のコマンドを入力します。`wsadmin -lang jython -wsadmin_classpath install_root%plugins%com.ibm.bspace.plugin_6.2.0.jar -f createSuperUser.py user_short_name_in_VMM`

### 次のタスク

ユーザー名にスーパーユーザー・ロールが含まれているか照会する場合、またはスーパーユーザー・ロールを除去する場合は、他に 2 つのスクリプトが用意されています。両方とも、`install_root/BusinessSpace/scripts/` ディレクトリーにあります。

- `isSuperUser.py` はユーザー名にスーパーユーザー・ロールが含まれているか照会します。
- `removeSuperUserAccess.py` は、ユーザーからスーパーユーザー・ロールを除去します。

提供されている 3 つのスクリプトに基づいて、追加スクリプトを作成することができます。スクリプト中の MBean 呼び出しを以下のいずれかのメソッドで置き換えて、スーパーユーザー・ロールを処理することができます。

```
public boolean assignSuperUserRole(String userId);
public boolean removeSuperUserRole(String userId);
public List getAllSuperUsers();
public boolean isSuperUser(String userId);
public boolean removeAllSuperUsers();
```

MBean 記述子ファイル `BSpaceSecurityAdminMBean.xml` を参照してください。このファイルは `install_root/BusinessSpace/scripts` に格納されています。

ビジネス・スペースを開くには、以下の URL を使用します。 `http://host:port/BusinessSpace` この `host` はサーバーが稼働しているホスト名で、`port` はサーバーのポート番号です。

## ビジネス・ルールおよびセレクターの構成

ビジネス・ルールおよびセレクターは、基準に基づいて処理の結果を変更できるため、ビジネス・プロセスに柔軟性が提供されます。ビジネス・ルールおよびセレクターのコンポーネントを含むアプリケーションをインストールする前に、ビジネス・ルール動的リポジトリをインストールする必要があります。スタンドアロン・サーバー用または Network Deployment 用のビジネス・ルール動的リポジトリをインストールできます。

### ビジネス・ルールとセレクターの監査ログの構成

ビジネス・ルールとセレクターの新規作成、変更、および削除を追跡するログの値として、デフォルト値とは異なる値を使用するように、サーバーを構成できます。構成を変更すると、サーバー上のリソースを効率的に使用できます。

#### 始める前に

このタスクを実行するには、管理コンソールを使用している必要があります。

**このタスクに必要なセキュリティ役割:** セキュリティーとロール・ベースの許可が有効になっている場合、このタスクを実行するには、コンフィギュレーターとしてログインする必要があります。

#### このタスクについて

サーバーを実稼働環境で一定期間実行した後で、ビジネス・ルールとセレクターの監査ログのためにサーバーが使用しているデフォルト値を調整する必要があると判断することがあります。

ビジネス・ルールとセレクターの監査ログを構成するには、以下のステップを実行します。

#### 手順

1. 「サーバー」 > 「アプリケーション・サーバー」 > *servername* > 「ビジネス・ルール」 > 「ビジネス・ルールとセレクター監査」をクリックして、「ビジネス・ルールとセレクター監査」ページにナビゲートします。
2. 必要な変更のタイプに応じて、以下のいずれかを実行します。

変更のタイプ	アクション
即時	<ol style="list-style-type: none"><li>1. 「ランタイム」タブを選択します。</li><li>2. 必要な変更を入力します。</li><li>3. <b>オプション:</b> 永続的に変更するには、「構成へのランタイム変更も保管」を選択して、変更内容をリポジトリにコピーします。</li><li>4. 変更を適用してから前のページに戻るには、「OK」をクリックします。変更の適用後もこのページを表示したままにするには、「適用」をクリックします。</li></ol>

変更のタイプ	アクション
遅延	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 「構成」タブを選択します。</li> <li>2. 必要な変更を入力します。</li> <li>3. 変更を適用してから前のページに戻るには、「OK」をクリックします。変更の適用後もこのページを表示したままにするには、「適用」をクリックします。</li> <li>4. 変更内容を有効にするには、サーバーを再始動します。</li> </ol>

## タスクの結果

指定した属性が監査ログに適用されます。

**注:** WebSphere Application Server 6.1 でセキュリティーが有効に設定されている場合、サーバー・ユーザー ID の指定方法のために、ビジネス・ルールとセレクター監査の構成の変更が必要なことがあります。サーバー・ユーザー ID にデフォルト値が使用されている場合は、ビジネス・ルールまたはセレクターのインストール後にビジネス・ルールまたはセレクターが含まれているアプリケーションが開始され、ビジネス・ルールまたはセレクターを使用する監査可能アクションが実行されると、自動生成されたサーバー ID 値がユーザーの監査レコードに記録されます。インストール後のアプリケーションの開始、管理クライアント、または管理コンソールでのインポートまたはエクスポートによってビジネス・ルールまたはセレクターの成果物に変更されると、監査可能なアクションが発生します。生成される値は、他の監査レコードで使用されているユーザー ID の形式と一致していないことがあり、より一貫性のある値が必要な場合があります。

サーバー ID を指定するには、「リポジトリに保管されたサーバー ID」を使用するオプションを選択します。これにより、ユーザー・リポジトリのユーザー ID が、サーバー・プロセスに関連付けられます。ビジネス・ルールまたはセレクターの成果物がリポジトリにインストールされた後で、ビジネス・ルールまたはセレクターを含むアプリケーションが開始され、ビジネス・ルールまたはセレクターを使用する監査可能アクションが実行されると、監査レコードでこの ID が使用されます。

管理クライアント (ビジネス・ルール・マネージャーなど) による変更が行われる監査アクション、およびビジネス・ルール・グループのエクスポートやインポートなどの管理アクションには、サーバー ID 値は影響しません。このようなアクションの場合、監査レコードでは認証済みユーザーが使用されます。

サーバー・ユーザー ID の変更についての詳細は、『アプリケーションと環境の保護』の各トピックと、WebSphere Application Server の WebSphere Application Server Network Deployment セキュリティーに関する資料を参照してください。

## コマンドを使用したビジネス・ルールとセレクターの監査の構成

サーバーの実行中に特性を変更する必要がある場合には、コマンドを使用して、ビジネス・ルールとセレクターの監査を構成します。

## 始める前に

これらのコマンドは、サーバーのコマンド行環境から実行する必要があります。

**このタスクに必要なセキュリティ役割:** セキュリティとロール・ベースの許可が有効になっている場合、このタスクを実行するには、コンフィギュレーターとしてログインする必要があります。

## このタスクについて

ビジネス・ルールとセレクターを監査するサーバーの数を変更する必要があるにもかかわらず、関連するサーバーを再始動できない場合があります。コマンド行を使用して、サーバーの構成をバッチ・モードで自動化できます。以下のタスクは、コマンドを使用して 1 つのサーバーを構成する方法を示しています。

**重要:** これらの設定は、サーバーを再始動した場合には保管されません。これらのコマンドを入力した後で構成を保管するには、管理コンソールを使用する必要があります。「サーバー」>「アプリケーション・サーバー」> *servername* >「ビジネス・ルール」>「ビジネス・ルールとセレクター監査」>「ランタイム」、または「サーバー」>「アプリケーション・サーバー」> *servername* >「セレクター」>「ビジネス・ルールとセレクター監査」>「ランタイム」を選択します。

コマンドを使用したビジネス・ルールとセレクターの監査を構成するには、以下のステップを実行します。

**注:** 以下のタスクでは、サーバー *server1* を構成します。サーバーの名前が *server1* でない場合は、以下の *server1* を、そのサーバーの名前で置き換えます。ステップ 3 以降のすべてのステップは、jacl スクリプトに組み込んで実行できます。

### 手順

1. 管理環境に入ります。

```
wsadmin
```

2. 監査ロギングを構成するか、既存の構成を変更するかを決定します。

タスク	コマンド
監査ロギングの構成	set mbean [\$AdminControl queryNames *:* ,name=CustomizationAuditMBean,process=server1]
監査ロギング構成の変更	set auditconfig [\$AdminConfig list AuditLog]

3. 該当するコマンドを入力します。

## 監査ロギングを構成または変更するコマンド

**重要:** 既存の構成を変更するコマンドを入力する場合は、変更内容を保管する必要があります。サーバーを再始動しないと、変更内容は有効になりません。

以下は、入力可能なコマンドです。

**\$AdminControl invoke \$mbean getSeparateAuditLogEnabled**

別個 of 監査ログへのロギングを実行するかどうかを判別するために使用します。

**\$AdminControl invoke \$mbean setSystemOutAuditLogEnabled {boolean}**

SystemOut.log ファイルへのロギングを使用可能または使用不可にするために使用します。Boolean には、true または false を指定できます。

**\$AdminControl invoke \$mbean getSeparateAuditLogFileName**

別個 of 監査ログ of ファイル名を判別するために使用します。

**\$AdminControl invoke \$mbean setSeparateAuditLogFileName {filename}**

新規 of ログ・ファイル of 名前 (MyAudit.log など) を設定するために使用します。

**\$AdminControl invoke \$mbean getSeparateAuditLogFileRolloverSize**

監査ログ of サイズを判別するために使用します。

**\$AdminControl invoke \$mbean setSeparateAuditLogFileRolloverSize integer**

システムが監査ログをヒストリー・ファイルへロール・オーバーする条件となる、監査ログ of サイズを設定するために使用します。サイズはメガバイト単位です。

**\$AdminControl invoke \$mbean getSeparateAuditLogFileMaxNumberOfBackupFiles**

監査ログ・ヒストリー・ファイル of 数を判別するために使用します。

**\$AdminControl invoke setSeparateAuditLogFileMaxNumberOfBackupFiles integer**

監査ログ・ヒストリー・ファイル of 数を設定するために使用します。

**\$AdminControl invoke \$mbean setSeparateAuditLogEnabled {boolean}**

別個 of ログ・ファイルへのロギングを開始または停止するために使用します。Boolean には、true または false を指定できます。

**\$AdminConfig showall \$auditconfig**

現在の監査ログ構成を表示するために使用します。

**\$AdminConfig modify \$auditconfig {{separateAuditLogEnabled true}}**

別個 of 監査ログへのロギングを使用可能にするために使用します。

**\$AdminConfig modify \$auditconfig {{systemOutAuditLogEnabled false}}**

system.Out ファイルへの監査を使用不可にするために使用します。

**\$AdminConfig modify \$auditconfig {{customAuditLog {{maxNumberOfBackupFiles 7} {rolloverSize 7}}}}**

監査ログ・ヒストリー・ファイル of 数と監査ログ・ファイル of サイズを変更するために使用します。

**\$AdminConfig modify \$auditconfig {{customAuditLog {{fileName MyAudit.log}}}}**

監査ログ・ファイル of 名前を変更するために使用します。

**\$AdminConfig save**

構成を保管するために使用します。

## 次のタスク

管理コンソールを開き、「サーバー」>「アプリケーション・サーバー」> *servername* >「ビジネス・ルール」>「ビジネス・ルールとセレクター監査」>「ランタイム」、または「サーバー」>「アプリケーション・サーバー」> *servername* >

「セレクター」>「ビジネス・ルールとセレクター監査」>「ランタイム」を選択して変更を保存します。あるいは、\$AdminConfig save と入力します。

**注:** WebSphere Application Server 6.1 でセキュリティーが有効に設定されている場合、サーバー・ユーザー ID の指定方法のために、ビジネス・ルールとセレクター監査の構成の変更が必要なことがあります。サーバー・ユーザー ID にデフォルト値が使用されている場合は、ビジネス・ルールまたはセレクターのインストール後にビジネス・ルールまたはセレクターが含まれているアプリケーションが開始され、ビジネス・ルールまたはセレクターを使用する監査可能アクションが実行されると、自動生成されたサーバー ID 値がユーザーの監査レコードに記録されます。インストール後のアプリケーションの開始、管理クライアント、または管理コンソールでのインポートまたはエクスポートによってビジネス・ルールまたはセレクターの成果物に変更されると、監査可能なアクションが発生します。生成される値は、他の監査レコードで使用されているユーザー ID の形式と一致していないことがあります、より一貫性のある値が必要な場合があります。

サーバー ID を指定するには、「リポジトリに保管されたサーバー ID」を使用するオプションを選択します。これにより、ユーザー・リポジトリのユーザー ID が、サーバー・プロセスに関連付けられます。ビジネス・ルールまたはセレクターの成果物がリポジトリにインストールされた後で、ビジネス・ルールまたはセレクターを含むアプリケーションが開始され、ビジネス・ルールまたはセレクターを使用する監査可能アクションが実行されると、監査レコードでこの ID が使用されます。

管理クライアント (ビジネス・ルール・マネージャーなど) による変更が行われる監査アクション、およびビジネス・ルール・グループのエクスポートやインポートなどの管理アクションには、サーバー ID 値は影響しません。このようなアクションの場合、監査レコードでは認証済みユーザーが使用されます。

サーバー・ユーザー ID の変更についての詳細は、『アプリケーションと環境の保護』の各トピックと、WebSphere Application Server の WebSphere Application Server Network Deployment セキュリティーに関する資料を参照してください。

## ビジネス・ルール・マネージャーのインストールの考慮事項

ビジネス・ルール・マネージャーを分散環境で使用する場合、セル、ノード、クラスター概念、および実行時のパフォーマンスを最適にするビジネス・ルール・マネージャーのセットアップ方法を理解する必要があります。

アプリケーション・サーバーは、セル、ノード、およびサーバー概念に基づいて編成されます。スタンドアロン・サーバー構成では、1 つのセルには 1 つのノードが含まれ、各ノードには 1 つのサーバーが含まれます。システム管理アプリケーションとユーザー・アプリケーションはすべて同じサーバーで稼働します。スタンドアロン・サーバー構成では、ビジネス・ルール・マネージャーを同じアプリケーション・サーバーにインストールできます。また、ビジネス・ルール・マネージャーにはデフォルトの URL からアクセスできます。

分散サーバー構成では、1 つのセルに複数のノードが含まれ、各ノードに複数のアプリケーション・サーバーが含まれるように構成できます。各セルは、単一の管理

ドメインを構成します。この構成では、ドメイン全体で中央管理、ワークロード管理、およびフェイルオーバー構成を使用できます。

分散サーバー構成でパフォーマンスを最適にするには、ビジネス・ルール・マネージャーを管理デプロイメント・ターゲット (ビジネス管理サービスが中央にホストされているセル内のアプリケーション・サーバー) にインストールします。通常、このサーバーは Common Event Infrastructure サービスをホストするサーバーです。

セル内では、すべてのサーバーが単一のビジネス・ルール・リポジトリを使用および共有します。ビジネス・ルール・リポジトリにアクセスすると、ビジネス・アプリケーションがどの場所にインストールされているかにかかわらず、すべての動的ビジネス・ルール成果物の定義にアクセスできます。

実行時にセル内のすべてのビジネス・ルールが使用できるこの中央ストレージがあることによって、セル内のどのアプリケーション・サーバーにもビジネス・ルール・マネージャーをデプロイできます。また、ビジネス・ルール・マネージャーは、セル内のすべてのビジネス・ルールの一貫性のあるビューを提供します。ただし、高可用性を考慮すると、ビジネス・ルール・マネージャーを管理デプロイメント・ターゲット (ビジネス管理サービスが中央でホストされているセル内の専用アプリケーション・サーバー) にデプロイすることを、システム管理者にお勧めします。管理デプロイメント・ターゲット・サーバーは、Common Event Infrastructure サービスやその他のビジネス管理アプリケーションがインストールされているのと同じサーバーです。この構成では、高可用性が必要な場合、管理デプロイメント・ターゲット・サーバーをクラスター化して、アプリケーション・ユーザーに拡張が容易なソリューションを提供できます。

## 管理コンソールを使用したビジネス・ルール・マネージャーのインストール

ビジネス・ルール・マネージャーをエンタープライズ・アプリケーションとして WebSphere Process Server にインストールすると、実行時にビジネス・ルールを管理できます。WebSphere Process Server 6.1 以降では、プロファイル管理ツールの「ビジネス・ルール・マネージャーの構成」ページのチェック・ボックスを選択して WebSphere Process Server プロファイルを作成する時点で、同時にビジネス・ルール・マネージャーをインストールできます。ビジネス・ルール・マネージャーは、ほかの 3 つの方法を使用してインストールすることもできます。具体的には、管理コンソールの構成ページを使用する方法、オペレーティング・システムの JACL コマンドを使用する方法、Admin Tasks コマンドを使用する方法がありますが、Admin Tasks コマンドを使用する方法は、WebSphere Process Server 6.1 以降でのみ可能です。詳しくは、各インストール方法の個々のトピックを参照してください。

### 始める前に

**このタスクに必要なセキュリティ役割:** セキュリティーとロール・ベースの許可が有効になっている場合、このタスクを実行するには、管理者またはコンフィギュレーターとしてログインする必要があります。

## このタスクについて

管理コンソールを使用してビジネス・ルール・マネージャーをインストールするには、以下のステップを実行します。

### 手順

1. 管理コンソールが稼働していることを確認します。
2. ナビゲーション・ペインで、「サーバー」>「アプリケーション・サーバー」または「クラスター」をクリックします。
3. サーバーまたはクラスター・ターゲットの名前を選択します。
4. 「構成」タブを含むページで、「**Business Integration**」の下にある「ビジネス・ルール」を展開して、「ビジネス・ルール・マネージャーの構成」をクリックします。
5. 「一般プロパティ」から、「ビジネス・ルール・マネージャーのインストール」チェック・ボックスを選択します。

**注:** ビジネス・ルール・マネージャーが既にインストールされている場合は、このチェック・ボックスがチェックされた状態になりますが、このページからビジネス・ルール・マネージャーをアンインストールすることはできないのでぼかし表示されます。ただし、アプリケーションのリストを表示し、このリストから手動でアンインストールできます。

6. 「コンテキスト・ルート」フィールドで、デフォルト・コンテキスト・ルートの /br を受け入れるか、またはビジネス・ルール・マネージャー URL のカスタム・コンテキスト・ルートを入力します。
7. 「OK」をクリックします。
8. 構成を保管します。

### 次のタスク

ナビゲーション・ペインで、「アプリケーション」>「エンタープライズ・アプリケーション」をクリックして、「ビジネス・ルール・マネージャーの始動 (Start Business Rules Manager)」を選択します。

## JACL コマンドを使用したビジネス・ルール・マネージャーのインストール

Windows、Linux、i5/OS では、ビジネス・ルール・マネージャーをインストールするときに、管理コンソールの代わりとして JACL コマンドを使用できます。JACL コマンドを使用できるのは、WebSphere Process Server をインストールしてプロファイルを作成したときに、ビジネス・ルール・マネージャーをインストールしていなかった場合です。

### 始める前に

**このタスクに必要なセキュリティ役割:** セキュリティとロール・ベースの許可が有効になっている場合、このタスクを実行するには、管理者またはコンフィギュレーターのリールに割り当てられているユーザー ID を使用して認証される必要があります。

## このタスクについて

JACL コマンドを使用してビジネス・ルール・マネージャーをインストールするには、以下のステップを実行します。

### 手順

1. WebSphere Process Server が始動していることを確認します。
2. オペレーティング・システムのシェル環境またはコマンド・プロンプトを開き、*install\_root/bin* ディレクトリー (Windows の場合は *install\_root\bin* ディレクトリー) に移動します。
3. オペレーティング・システム独自のインストール・コマンドを以下のように実行します。
  - Windows で実行するコマンド: `wsadmin.bat -f installBRManager.jacl [-s servername -n nodename | -cl clustername] -ce cellname -r rootname`
  - Linux で実行するコマンド: `wsadmin.sh -f ./installBRManager.jacl [-s servername -n nodename | -cl clustername] -ce cellname -r rootname`
  - i5/OS で実行するコマンド: `wsadmin -f ./installBRManager.jacl [-s servername -n nodename | -cl clustername] -ce cellname -r rootname`

ビジネス・ルール・マネージャーをインストールして、それを複数のターゲットにマップするには、ご使用のオペレーティング・システムで以下のコマンドを実行します。

- Windows で実行するコマンド: `wsadmin.bat -f installBRManager.jacl -m "{{target1} {target2} ... {targetn}}" -ce cellname -r rootname`
- Linux で実行するコマンド: `wsadmin.sh -f installBRManager.jacl -m "{{target1} {target2} ... {targetn}}" -ce cellname -r rootname`
- i5/OS で実行するコマンド: `wsadmin -f installBRManager.jacl -m "{{target1} {target2} ... {targetn}}" -ce cellname -r rootname`
- z/OS で実行するコマンド: `wsadmin.sh -f installBRManager.jacl -m "{{target1} {target2} ... {targetn}}" -ce cellname -r rootname`

**注:** パラメーター「-m」(「複数 (multiple)」を意味する) を指定すると、ビジネス・ルール・マネージャーを複数のターゲットに一括でインストールしてマップできます。複数のターゲットを二重引用符で囲みます。

各部の意味は、次のとおりです。

#### *servername*

アプリケーション・サーバーの名前。

Network Deployment 構成内でクラスターが指定されていない場合には、引数のペア「-s servername」が必要です。欠落している場合、*servername* のデフォルト値は「server1」です。

#### *nodename*

インストール・ノードの名前。

Network Deployment 構成内でクラスターが指定されていない場合には、引数のペア「-n nodename」が必要です。

### *clustername*

アプリケーションをインストールするクラスターの名前。

Network Deployment 構成内でサーバー名とノード名が指定されていない場合には、引数のペア「-cl *clustername*」が必要です。

**注:** ノードとサーバーを指定するか、またはクラスターを指定する必要があります。両方は指定しないでください。

### *cellname*

インストール・セルの名前。

引数のペア「-ce *cellname*」はオプションです。

### *rootname*

アプリケーション・ルート・ディレクトリの名前。

引数のペア「-r *rootname*」はオプションです。欠落している場合、*rootname* のデフォルト値は「/br」です。

**target<sub>i</sub>** ビジネス・ルール・マネージャーをインストールしてマップするターゲット (*i* は 1、2、...、*n*)。

ターゲットは (-s *servername* および -n *nodename*) または -cl *clustername* のいずれかです。

**重要:** WebSphere Process Server が単一サーバー環境で構成されている場合、これらの引数のペアのすべてはオプションです。WebSphere Process Server が Network Deployment 環境用に構成されている場合、以下の引数ペアのいずれかが必要です。

- (-s *servername* および -n *nodename*)
- または -cl *clustername*
- または -m "{{target1} {target2} ... {targetn}}"

他の引数ペアはオプションです。

## 例

**例:** ビジネス・ルール・マネージャー・アプリケーションを以下のターゲットにマップするとします。

- クラスター「BofACluster」
- Web サーバー「RedirectorServer」およびノード「AIXNode01」
- アプリケーション・サーバー「LinuxServer」およびノード「LinuxNode02」

コンテキスト・ルートは「bofa/brm」です。

以下のようにコマンドを実行します。

```
install_root/bin/wsadmin -f installBRManager.jacl -m "{{-cl BofACluster} {-n AIXNode01 -s RedirectorServer} {-s LinuxServer -n LinuxNode02}}" -r bofa/brm
```

## AdminTask コマンドを使用したビジネス・ルール・マネージャーのインストール

WebSphere Process Server 6.1 以降を使用して、Admin Task コマンドを使用してビジネス・ルール・マネージャーをインストールできます。管理コンソールや JACL コマンドを使用する場合と同様に WebSphere Process Server と作成済みプロファイルのインストール時にビジネス・ルール・マネージャーをインストールしなかった場合は、Admin Task コマンドを使用してください。

### 始める前に

**このタスクに必要なセキュリティ役割:** セキュリティーとロール・ベースの許可が有効になっている場合、このタスクを実行するには、管理者またはコンフィギュレーターとしてログインする必要があります。

### このタスクについて

管理タスク・コマンドを使用してビジネス・ルール・マネージャーをインストールするには、以下のステップを実行します。

#### 手順

1. WebSphere Process Server が始動していることを確認します。
2. コマンド・ウィンドウで WebSphere Process Server のホーム・ディレクトリーに移動して、ディレクトリー /bin に切り替えます。
3. wsadmin コマンドを実行して、wsadmin モードに入ります。
4. 以下のいずれかのコマンドを入力して、ビジネス・ルール・マネージャーをインストールします。

```
wsadmin> $AdminTask configBusinessRulesManager {-serverName <serverName>
-nodeName <nodeName> -contextRoot <contextRoot>}
```

または

```
wsadmin> $AdminTask configBusinessRulesManager {-clusterName
<clusterName> -contextRoot <contextRoot>}
```

ここで、

*serverName*

アプリケーション・サーバーの名前。

*nodeName*

インストール・ノードの名前。

*clusterName*

アプリケーションをインストールするクラスターの名前。

*contextRoot*

アプリケーションを起動するために使用するコンテキスト・ルート。デフォルト値は /br です。

5. wsadmin> \$AdminConfig save を実行して、構成を保存します。

**ヒント:** `$AdminTask help configBusinessRulesManager` を実行すると、そのパラメーターの詳細を知ることができます。

## 例

**例:** コンテキスト・ルート「br」を使用してサーバー「cvuServer」およびノード「cvuNode01」にビジネス・ルール・マネージャーをインストールするには、以下のコマンドを入力します。

```
wsadmin> $AdminTask configBusinessRulesManager {-serverName cvuServer  
-nodeName cvuNode01 -contextRoot br}
```

次に構成を保存するには、以下のように入力します。

```
wsadmin> $AdminConfig save
```

## ビジネス・ルール・マネージャーのサーバー・セキュリティの構成

サーバーでセキュリティを使用する場合は、ビジネス・ルール・マネージャーを使用しているサーバーを構成する必要があります。サーバーでセキュリティを使用可能に設定しない場合は、追加の構成なしでビジネス・ルール・マネージャーを使用できます。

### このタスクについて

異なるロールまたはユーザー ID がある場合、サーバーの構成時に管理セキュリティを設定する必要があります。サーバーのセキュリティを設定するには、以下のステップを実行します。

#### 手順

1. ユーザー ID の作成時に各 ID にロールを割り当てることにより、ユーザー ID に管理セキュリティを設定します。各ユーザー ID を作成して、それをロール `BusinessRuleUser` にマップします。

ロールを設定するには、ビジネス・ルール・マネージャー・アプリケーションにナビゲートし（「アプリケーション」>「エンタープライズ・アプリケーション」）、ビジネス・ルール・マネージャー・アプリケーションを選択します。

「ユーザー/グループ・マッピングへのセキュリティ役割」を選択し、`BusinessRuleUser` ロールを更新します。

`BusinessRuleUser` ロール以外に、`NoOne` と `AnyOne` という 2 つのロールが定義されています。`NoOne` は、直接アクセスすべきではないリソースを明示的に設定する場合に開発者が使用します。`AnyOne` は、WebSphere Process Server 環境の許可を取得する場合に Tivoli Access Manager が使用します。

**注:** 管理セキュリティが有効に設定された ND 環境において、ポート 908n (n は正の整数) 上でビジネス・ルール・マネージャーを実行する場合は、ポート「944(n+3) とホスト値 "\*"」を構成する必要があります。該当するポートがない場合は、ビジネス・ルール・マネージャーを起動する前に手動で構成します。

2. Cookie を使用してセッションを追跡するように、セッション・トラッキング・メカニズムを設定します。
3. 最低でも、適切なセッション・タイムアウト値を必ず設定します。

## ビジネス・ルール・マネージャーを正常に動作させるための Web ブラウザーの構成

サーバーは、ビジネス・ルール・マネージャーのインストール中に自動的にクライアントを構成しますが、ビジネス・ルール・マネージャーが正しく動作するように、Web ブラウザーが正しく構成されていることを確認する必要があります。

### このタスクについて

ビジネス・ルール・マネージャー用の Web ブラウザーが正しく構成されていることを確認するには、以下のステップを実行します。

#### 手順

1. Web ブラウザーでスクリプトが使用可能であることを確認します。

ビジネス・ルール・マネージャーが動作するには、スクリプトが機能する必要があります。

2. Cookie が使用可能であることを確認します。

ビジネス・ルール・マネージャーを使用する場合、必要に応じてセッションの追跡に Cookie が使用されます。このため、セッションを追跡できるように、ブラウザで Cookie を使用可能にします。Cookie を使用可能にする場合、必ずシステム管理者に連絡してください。

---

## リレーションシップ・サービスの構成

製品をインストールした後で、リレーションシップ・サービス用の構成プロパティを設定する必要があります。

### 始める前に

**このタスクに必要なセキュリティ役割:** セキュリティーとロール・ベースの許可が有効になっている場合、このタスクを実行するには、コンフィギュレーターまたは管理者としてログインする必要があります。どの WebSphere セキュリティー役割でもこの構成を表示できます。

### このタスクについて

リレーションシップ・サービスのデータ・ソース・プロパティと照会ブロック・サイズ・プロパティ (リレーションシップ・インスタンス・カウント) を設定するには、以下のステップを実行します。

#### 手順

1. 管理コンソールが稼働していることを確認します。
2. ナビゲーション・ペインで、「統合アプリケーション」>「**Relationship Manager**」をクリックします。
3. 「リレーションシップ・サービス構成」をクリックします。

タブ付きの構成ページが表示され、現在インストールされているリレーションシップ・サービスの名前とバージョン (読み取り専用) が示されます。

4. 「照会ブロック・サイズ (リレーションシップ・インスタンスのカウンツ) (Query block size (relationship instance count))」フィールドに、リレーションシップ・サービスがリレーションシップ照会用に確保する最大キャッシュを指定します。この設定により、照会結果セットのサイズが決定します。デフォルトでは、5000 個のリレーションシップ・インスタンスが一度に読み取られます。このフィールドによってサーバー・サイズ・メモリー使用量が制御されるため、管理者は、任意の照会が消費できるメモリー・リソースの量を一定の範囲内で制御できるようになります。
5. 「データ・ソース」フィールドで、セル・レベルで定義されたデータ・ソースの Java Naming and Directory Interface (JNDI) 名を入力して、リレーションシップ・サービスのデフォルトのデータ・ソースを指定します。これは、リレーションシップ・サービス用のテーブルが保管される場所です。デフォルトでは、各リレーションシップ関連スキーマはこのデータ・ソース内に作成されます。
6. 以下のオプションがあります。
  - 変更内容を保管し、前のページに戻る場合は、「OK」をクリックします。
  - 変更内容をクリアし、現在構成されている値または最後に保管された値を復元する場合は、「リセット」をクリックします。
  - そのページで保管されていない変更内容をすべて破棄し、前のページに戻る場合は、「キャンセル」をクリックします。

---

## 拡張メッセージング・リソースの構成

管理コンソールを使用して、拡張メッセージング・サービスおよびこのサービスを使用するアプリケーションに必要なリソースを構成します。拡張メッセージング・サービスを使用可能にすること、遅延応答に対応するためリスナー・ポートの拡張を構成すること、および拡張メッセージングを使用するアプリケーションに対して入力ポートと出力ポートを追加または変更することができます。

拡張メッセージングはコンテナ管理メッセージングを使用可能にします。この機能は、既存のコンテナ管理パーシスタンスおよびトランザクションの振る舞いを使用するように、基本の Java Message Service (JMS) サポート、Enterprise Java Bean (EJB) コンポーネント・モデル、EJB 2.0 メッセージ駆動型 Bean を拡張します。

拡張メッセージングは、Bean 管理メッセージング・インプリメンテーションを使用して JMS インターフェースを提供します。これにより、Bean 管理メッセージングと拡張メッセージングの両方で一貫した JMS サポートが使用されるようになります。JMS の使用法は簡単です。それは、JMS のサポートが拡張メッセージング・サービスによって管理されているためです。

拡張メッセージングについて詳しくは、WebSphere Business Integration Server Foundation インフォメーション・センターの以下の記事を参照してください。

- 拡張メッセージング：概説
- アプリケーションにおける拡張メッセージングの使用

**重要:** 拡張メッセージング・サービスを使用する前に、以下の制約事項について注意してください。

- 拡張メッセージング・サービス機能は、WebSphere Process Server 6.0.x から非推奨になっています。WebSphere Process Server 6.2 以降は、アプリケーションで使用することはできません (マイグレーション中のセル内の 6.0.x ノードを管理する場合は除く)。拡張メッセージング・サービスに依存する既存のアプリケーションは、標準の JMS API を使用するアプリケーションに置き換えるか、同じ機能を備えたメッセージング製品に置き換えてください。
- **i5/OS** 拡張メッセージング・サービス機能は i5/OS システムでサポートされていません。

## 拡張メッセージング・サービスを使用可能にする

拡張メッセージング・サービスを使用可能にして、コンテナ管理メッセージング (拡張メッセージング) のランタイム・サポートを提供します。「拡張メッセージング・サービス」ページを使用して、アプリケーション・サーバーの始動時にこのサービスを自動的に開始するか、または手動で開始するかを指定します。

### このタスクについて

**重要:** 拡張メッセージング・サービス機能は、WebSphere Process Server 6.0.x から非推奨になっています。WebSphere Process Server 6.2 以降は、アプリケーションで使用することはできません (マイグレーション中のセル内の 6.0.x ノードを管理する場合は除く)。拡張メッセージング・サービスに依存する既存のアプリケーションは、標準の JMS API を使用するアプリケーションに置き換えるか、同じ機能を備えたメッセージング製品に置き換えてください。

**このタスクに必要なセキュリティ役割:** セキュリティーおよびロール・ベースの許可が使用可能になっている場合は、このタスクを実行するために、管理者またはコンフィギュレーターとしてログインしている必要があります。

拡張メッセージング・サービスを使用可能にするには、以下のステップを実行します。

### 手順

1. 管理コンソールが稼働していることを確認します。
2. 「サーバー」>「アプリケーション・サーバー」> *server\_name* > 「拡張メッセージング・サービス」をクリックして、「拡張メッセージング・サービス」ページを表示します。
3. サーバー起動時に拡張メッセージング・サービスを自動的に開始できるようにする場合、「サーバー起動時にサービスを使用可能にする」チェック・ボックスを選択します。手動でサービスを開始する場合は、チェック・ボックスをクリアします。
4. 「OK」をクリックします。
5. プロンプトが表示されたら、コンソール・タスクバーの「保管」をクリックして、マスター・リポジトリに変更を保存します。
6. ご使用の構成で WebSphere MQSeries バインディング・トランスポートを使用している場合、MQ\_INSTALL\_ROOT 環境変数の値を次のように設定します。
  - a. 管理コンソールで、「環境」→「WebSphere 変数」をクリックします。

- b. MQ\_INSTALL\_ROOT をクリックして、環境変数の構成ページを表示します。
  - c. 「値」フィールドで、デフォルト値 ( $\${WAS\_INSTALL\_ROOT}/lib/WMQ$ ) を削除し、明示的なインストール・パス (Windows システムの場合は  $D:/IBM/WebSphereMQ$  など) に置換します。
  - d. 「OK」をクリックします。
7. 変更を有効にするには、アプリケーション・サーバーを停止して再始動します。

## 遅延応答を処理するためのリスナー・ポートの拡張の構成

リスナー・ポートに遅延応答を処理させるためには、拡張を構成して、ポートが応答をチェックする頻度、および応答を待つ長さを指定します。

### このタスクについて

**重要:** 拡張メッセージング・サービス機能は、WebSphere Process Server 6.0.x から非推奨になっています。WebSphere Process Server 6.2 以降は、アプリケーションで使用することはできません (マイグレーション中のセル内の 6.0.x ノードを管理する場合は除く)。拡張メッセージング・サービスに依存する既存のアプリケーションは、標準の JMS API を使用するアプリケーションに置き換えるか、同じ機能を備えたメッセージング製品に置き換えてください。

遅延応答は、送信側 Bean から送信されたメッセージに対する応答がメッセージング・インフラストラクチャーによって遅れた場合に発生します。その結果、アプリケーションは応答を受け取ることができません。拡張メッセージングは、これらの遅延応答メッセージを取得して、アプリケーションが提供するメッセージ駆動型 Bean に渡し、遅延応答を処理します。

**このタスクに必要なセキュリティ役割:** セキュリティおよびロール・ベースの許可が使用可能になっている場合は、このタスクを実行するために、管理者またはコンフィギュレーターとしてログインしている必要があります。

遅延応答を処理する、リスナー・ポートの拡張を作成し使用可能にするには、以下のステップを実行します。

### 手順

1. リスナー・ポートが定義済みおよび構成済みであること、および送信側 Bean を「遅延応答を処理 (Handle late responses)」オプションを使用可能にしてデプロイ済みであることを確認してください。

**注:** このオプションを使用可能にした送信側 Bean のデプロイについては、WebSphere Business Integration Server Foundation インフォメーション・センターを参照してください。

2. 管理コンソールで、「サーバー」>「アプリケーション・サーバー」>  $server\_name$  >「拡張メッセージング・サービス」>「リスナー・ポートの拡張」をクリックします。
3. 「リスナー・ポートの拡張」ページで、「新規」をクリックし、新規のリスナー・ポート拡張を作成します。

4. 「新規リスナー・ポートの拡張 (New Listener Port Extension)」 ページで、「使用可能」チェック・ボックスを選択して、拡張および遅延応答の処理を使用可能にします。
5. 「要求間隔」フィールドで、デフォルト値を受け入れるか、または新規の値を指定して、リスナー・ポートが遅延応答をチェックする頻度を指定します。
6. 「要求タイムアウト」フィールドで、デフォルト値を受け入れるか、または新規の値を指定して、リスナー・ポートが遅延応答を待つ長さを指定します。リスナー・ポートは、指定されたタイムアウト値後に受信したあらゆる応答を廃棄します。
7. 「リスナー・ポート」ドロップダウン・メニューを使用して、拡張に使用するリスナー・ポートを指定します。
8. 「OK」をクリックします。
9. プロンプトが表示されたら、コンソール・タスクバーの「保管」をクリックして、マスター・リポジトリに変更を保存します。
10. 変更を有効にするには、アプリケーション・サーバーを停止して再始動します。

## 次のタスク

リスナー・ポートの拡張を作成した後、「リスナー・ポートの拡張」の設定ページを使用して、必要に応じて構成を変更できます。

## 拡張メッセージング・プロバイダーを選択する

管理する拡張メッセージング・プロバイダーを選択するには、「拡張メッセージング・プロバイダー」ページで適切なスコープをクリックします。拡張メッセージングを使用するアプリケーションを含む各スコープ (セル、ノード、およびサーバー) は、それぞれ独自の拡張メッセージング・プロバイダーを保有し、リソースを管理します。入力ポート、出力ポート、または各プロバイダーのその他のカスタム・プロパティを作成、変更または削除できます。

## このタスクについて

**重要:** 拡張メッセージング・サービス機能は、WebSphere Process Server 6.0.x から非推奨になっています。WebSphere Process Server 6.2 以降は、アプリケーションで使用することはできません (マイグレーション中のセル内の 6.0.x ノードを管理する場合は除く)。拡張メッセージング・サービスに依存する既存のアプリケーションは、標準の JMS API を使用するアプリケーションに置き換えるか、同じ機能を備えたメッセージング製品に置き換えてください。

**このタスクに必要なセキュリティ役割:** セキュリティおよびロール・ベースの許可が使用可能になっている場合は、このタスクを実行するために、管理者、オペレーター、コンフィギュレーター、またはモニターとしてログインする必要があります。

管理する拡張メッセージング・プロバイダーを選択するには、以下のステップを実行します。

## 手順

1. 管理コンソールで、「リソース」>「拡張メッセージング・プロバイダー」をクリックします。
2. 「拡張メッセージング・プロバイダー」ページで、管理する拡張メッセージング・プロバイダーについて適切なスコープを選択します。
  - 「セル」：最も汎用的なスコープです。セル・スコープに定義された拡張メッセージング・リソースは、オーバーライドされない限り、すべてのノードおよびサーバーから可視です。
  - 「ノード」：ノード・スコープに定義された拡張メッセージング・リソースは、セル・スコープに定義されたあらゆる重複する定義をオーバーライドします。そのノード上のサーバー・スコープでオーバーライドされていない限り、同じノードのすべてのサーバーから可視です。
  - 「サーバー」：サーバー・スコープに定義された拡張メッセージング・リソースは、セル・スコープ、または親ノード・スコープに定義されたあらゆる重複する定義をオーバーライドします。これらは、特定のサーバーからのみ可視です。

スコープについては詳しくは、WebSphere Application Server インフォメーション・センターを参照してください。
3. 「適用」をクリックします。

## タスクの結果

管理コンソールは、ページ下部の「スコープ」、「名前」、「説明」フィールドを更新し、選択したリソース・プロバイダーの値として反映させます。

## 次のタスク

入力ポート、出力ポート、または選択した拡張メッセージング・プロバイダーのその他のカスタム・プロパティを作成、変更または削除できます。

## 入力ポートの構成

管理コンソールを使用して、セッション Bean から作成された各受信側 Bean について、新規入力ポートを作成または既存入力ポートを変更します。入力ポートは、受信する Java Message Service (JMS) 宛先についてプロパティを定義し、メッセージの選択および処理方法を指定し、必要な応答宛先に関する詳細を提供します。

## このタスクについて

**重要:** 拡張メッセージング・サービス機能は、WebSphere Process Server 6.0.x から非推奨になっています。WebSphere Process Server 6.2 以降は、アプリケーションで使用することはできません (マイグレーション中のセル内の 6.0.x ノードを管理する場合は除く)。拡張メッセージング・サービスに依存する既存のアプリケーションは、標準の JMS API を使用するアプリケーションに置き換えるか、同じ機能を備えたメッセージング製品に置き換えてください。

メッセージ駆動型 Bean から作成された受信側 Bean について入力ポートを作成する必要はありません。必要な詳細は、デプロイ済みメッセージ駆動型 Bean およびメッセージ・リスナー・サービスに関連付けられています。

**このタスクに必要なセキュリティ役割:** セキュリティーおよびロール・ベースの許可が使用可能になっている場合は、このタスクを実行するために、管理者またはコンフィギュレーターとしてログインしている必要があります。

入力ポートを追加または変更するには、以下のステップを実行します。

#### 手順

1. 管理コンソールで、「リソース」>「拡張メッセージング・プロバイダー」をクリックします。
2. 「拡張メッセージング・プロバイダー」ページで、作業するリソース・プロバイダーについて適切な範囲を選択します。
3. 「適用」をクリックします。
4. 「追加プロパティ」テーブルから「入力ポート」をクリックします。
5. 「入力ポート」のコレクション・ページで、以下のいずれかを行います。
  - 新規の入力ポートを作成する場合は、「新規」をクリックします。
  - 既存の入力ポートを変更する場合は、ポート名をクリックします。
6. 「入力ポート」の設定ページで、入力ポートに適切なプロパティを指定します。
7. 「OK」をクリックします。
8. プロンプトが表示されたら、コンソール・タスクバーの「保管」をクリックして、マスター・リポジトリに変更を保存します。
9. 変更を有効にするには、アプリケーション・サーバーを停止して再始動します。

#### 入力ポート設定:

新規の入力ポートを作成、または既存の入力ポートを変更する場合、特定のプロパティを指定する必要があります。このトピックの情報を使用して、オプションまたは必須のプロパティ、受け入れるデータ・タイプを決定してください。

**重要:** 拡張メッセージング・サービス機能は、WebSphere Process Server 6.0.x から非推奨になっています。WebSphere Process Server 6.2 以降は、アプリケーションで使用することはできません (マイグレーション中のセル内の 6.0.x ノードを管理する場合は除く)。拡張メッセージング・サービスに依存する既存のアプリケーションは、標準の JMS API を使用するアプリケーションに置き換えるか、同じ機能を備えたメッセージング製品に置き換えてください。

入力ポートには以下の構成プロパティがあります。

#### 有効範囲

拡張メッセージング・プロバイダーが定義される範囲。この値は、構成ファイルの場所を表します。管理コンソールは自動的にこのフィールドを取り込みます。値を編集することはできません。

**名前** 管理目的で使用される入力ポートの名前。このフィールドにはストリング値が必要です。

#### JNDI 名

入力ポートの Java Naming and Directory Interface (JNDI) 名。このフィールドにはストリング値が必要です。

**説明** 管理目的で使用される入力ポートの説明。このフィールドはオプションです。ストリング値が入力できます。

#### **カテゴリ**

リソースの分類またはグループ化を行うために使用するカテゴリ・ストリング。このフィールドはオプションです。ASCII 文字で最大 30 文字のストリング値が入力できます。

#### **JMS 接続ファクトリー JNDI 名**

入力ポートが使用している Java Message Service (JMS) 接続ファクトリーの JNDI 名。このフィールドにはストリング値 (jms/connFactory1 など) が必要です。

#### **JMS 宛先 JNDI 名**

入力ポートが使用している JMS 宛先の JNDI 名。このフィールドにはストリング値 (jms/destn1 など) が必要です。

#### **JMS 肯定応答モード**

メッセージの応答に使用する JMS モード。このフィールドは Bean 管理トランザクション区分を使用するメッセージ駆動型 Bean (言い換えると、トランザクション・タイプを Bean に設定) に必須です。

このフィールドの有効な値は以下のとおりです。

- **Auto Acknowledge:** 以下のいずれかの場合、セッションは自動的にメッセージに応答します。
  - セッションが、呼び出しから正常に戻ってメッセージを受信する場合
  - セッションがメッセージ・リスナーを呼び出してメッセージを処理し、そのリスナーから正常な応答を受け取った場合
- **Dups OK Acknowledge:** セッションはメッセージの送達にのみ応答します。このため、JMS が失敗すると、重複メッセージが送達されることになります。

デフォルト・モードは Auto Acknowledge です。

#### **宛先タイプ**

JMS リソース・タイプ。このフィールドには以下のいずれかの値が必要です。

- **Queue:** 受信側 Bean はキュー宛先からメッセージを受信します。
- **Topic:** 受信側 Bean はトピック宛先からメッセージを受信します。

デフォルト値は Queue です。

#### **サブスクリプション永続性**

JMS トピック・サブスクリプションに耐久性があるかどうかを指定します。このフィールドは、JMS 宛先タイプがトピックの場合、必須です。このフィールドの有効な値は以下のとおりです。

- **Durable:** サブスクライバーは、JMS によって保存される固有の ID を持つ永続サブスクリプションを登録します。ID が同じ後続のサブスクライバー・オブジェクトは、前のサブスクライバーが残した状態でサブスクリプションを再開します。永続サブスクリプションのアクティブ・サブスクライバーがない場合、JMS は、メッセージを受信するかメッセージが期限切れになるまで、サブスクリプションのメッセージを保存します。

- **NonDurable:** 非永続サブスクリプションは、所有するサブスクライバーの存続時間中は持続します。クライアントは、サブスクライバーがアクティブの間のみ、トピックで公開されたメッセージを確認します。サブスクライバーが非アクティブの場合、クライアントはそのトピックで公開されたメッセージを確認できません。

デフォルト値は `NonDurable` です。

#### 応答 JMS 接続ファクトリー JNDI 名

応答で使用する JMS 接続ファクトリーの JNDI 名。このフィールドにはストリング値 (`.jms/connFactory1` など) が必要です。

#### 応答 JMS 宛先 JNDI 名

応答で使用する JMS 宛先の JNDI 名。このフィールドにはストリング値 (`.jms/destn1` など) が必要です。

## 出力ポートの構成

管理コンソールを使用して、送信側 Bean について、新規出力ポートを作成または既存出力ポートを変更します。出力ポートは、送信されたメッセージの宛先を定義するために必要な送信側 Bean のプロパティを指定します。また、応答が期待される場合のオプションのプロパティも指定します。出力ポートは、デプロイメント時に送信側 Bean に関連付けられます。

## このタスクについて

**重要:** 拡張メッセージング・サービス機能は、WebSphere Process Server 6.0.x から非推奨になっています。WebSphere Process Server 6.2 以降は、アプリケーションで使用することはできません (マイグレーション中のセル内の 6.0.x ノードを管理する場合は除く)。拡張メッセージング・サービスに依存する既存のアプリケーションは、標準の JMS API を使用するアプリケーションに置き換えるか、同じ機能を備えたメッセージング製品に置き換えてください。

**このタスクに必要なセキュリティ役割:** セキュリティおよびロール・ベースの許可が使用可能になっている場合は、このタスクを実行するために、管理者またはコンフィギュレーターとしてログインしている必要があります。

出力ポートを追加または変更するには、以下のステップを実行します。

### 手順

1. 管理コンソールで、「リソース」>「拡張メッセージング・プロバイダー」をクリックします。
2. 「拡張メッセージング・プロバイダー」ページで、変更する拡張メッセージング・プロバイダーについて適切な範囲を選択します。
3. 「適用」をクリックします。
4. 「追加プロパティ」テーブルから「出力ポート」をクリックします。
5. 「出力ポート」のコレクション・ページで、以下のいずれかを行います。
  - 新規の出力ポートを追加する場合は、「新規」をクリックします。
  - 既存の出力ポートを変更する場合は、ポート名をクリックします。
6. 「出力ポート」の設定ページで、出力ポートに適切なプロパティを指定します。

7. 「OK」をクリックします。
8. プロンプトが表示されたら、コンソール・タスクバーの「保管」をクリックして、マスター・リポジトリに変更を保存します。
9. 変更を有効にするには、アプリケーション・サーバーを停止して再始動します。

#### 出力ポート設定:

新規の出力ポートを作成、または既存の出力ポートを変更する場合、特定のプロパティを指定する必要があります。このトピックの情報を使用して、オプションまたは必須のプロパティ、受け入れるデータ・タイプを決定してください。

**重要:** 拡張メッセージング・サービス機能は、WebSphere Process Server 6.0.x から非推奨になっています。WebSphere Process Server 6.2 以降は、アプリケーションで使用することはできません (マイグレーション中のセル内の 6.0.x ノードを管理する場合は除く)。拡張メッセージング・サービスに依存する既存のアプリケーションは、標準の JMS API を使用するアプリケーションに置き換えるか、同じ機能を備えたメッセージング製品に置き換えてください。

出力ポートには以下の構成プロパティがあります。

#### 有効範囲

拡張メッセージング・プロバイダーの範囲。この値は、構成ファイルの場所を表します。管理コンソールは自動的にこのフィールドを取り込みます。値を編集することはできません。

**名前** 管理目的で使用される出力ポートの名前。このフィールドにはストリング値が必要です。

#### JNDI 名

出力ポートの Java Naming and Directory Interface (JNDI) 名。このフィールドにはストリング値が必要です。

**説明** 管理目的で使用される出力ポートの説明。このフィールドはオプションです。ストリング値が入力できます。

#### カテゴリ

リソースの分類またはグループ化を行うために使用するカテゴリ・ストリング。このフィールドはオプションです。ASCII 文字で最大 30 文字のストリング値が入力できます。

#### JMS 接続ファクトリー JNDI 名

出力ポートが使用している Java Message Service (JMS) 接続ファクトリーの JNDI 名。このフィールドにはストリング値 (jms/connFactory1 など) が必要です。

#### JMS 宛先 JNDI 名

出力ポートが使用している JMS 宛先の JNDI 名。このフィールドにはストリング値 (jms/destn1 など) が必要です。

#### JMS 送達モード

メッセージの送達に使用する JMS モード。このフィールドには以下の値のいずれかを選択する必要があります。

- Persistent: 宛先上のメッセージは永続的です。
- Nonpersistent: 宛先上のメッセージは永続的ではありません。

デフォルト値は Persistent です。

#### JMS 優先順位

キュー宛先のメッセージ優先順位。このフィールドでは、0 から 9 までの整数値が必要です。デフォルト値は 4 です。

#### JMS 存続時間

メッセージがキュー内に存続する時間 (ミリ秒)。指定された時間が経過すると、メッセージの有効期限が切れます。

このフィールドでは、0 から  $n$  までの整数値が必要です。

- 0: メッセージはタイムアウトになりません。
- $n$ : メッセージは  $n$  ミリ秒後にタイムアウトになります。

デフォルト値は 0 です。

#### JMS 使用不可メッセージ ID

JMS メッセージ ID をシステムが生成するかどうかを指定。このフィールドは必須フィールドです。以下のいずれかの値を選択します。

- 選択: JMS メッセージ ID は生成されません。
- クリア: JMS メッセージ ID が自動的に生成されます。

デフォルトでは、JMS message ID は生成されます。

#### JMS メッセージ・タイム・スタンプ使用不可

JMS メッセージ・タイム・スタンプが生成されるかどうかを指定します。このフィールドは必須フィールドです。以下のいずれかの値を選択します。

- 選択: 送信メッセージにメッセージ・タイム・スタンプは追加されません。
- クリア: 送信メッセージにメッセージ・タイム・スタンプは自動的に追加されます。

デフォルトでは、送信メッセージにメッセージ・タイム・スタンプは追加されます。

#### 応答 JMS 接続ファクトリー JNDI 名

出力ポートで処理する応答で使用する JMS 接続ファクトリーの JNDI 名。このフィールドにはストリング値 (jms/connFactory1 など) が必要です。

#### 応答 JMS 宛先 JNDI 名

出力ポートで処理する応答で使用する JMS 宛先の JNDI 名。このフィールドにはストリング値 (jms/destn1 など) が必要です。

---

## Common Event Infrastructure の構成

Common Event Infrastructure リソースを構成するか、サーバー AdminTask オブジェクトを使用して既存のリソースを変更できます。

### このタスクについて

Common Event Infrastructure (CEI) は、デフォルト構成を使用してインストールすることができます。このデフォルト構成は、スタンドアロン・サーバー構成で完全に機能する構成です。この操作は、プロファイル管理ツールを使用して、スタンドアロン・サーバー・プロファイルを作成する場合にのみ行います。これ以外の場合

(ND 環境またはクラスターにインストールする場合など) は、管理コンソールを使用して CEI を構成し、システムに適した構成となるようにします。

また、wsadmin コマンドを使用して CEI を構成したり、このコマンドを使用して既存の CEI 構成を変更することもできます。いずれの場合も、サーバー AdminTask オブジェクトを使用して CEI の構成を変更し、管理コマンドを実行します。

CEI 構成の変更後に、サーバーまたはクラスターを再始動する必要があります。

## Common Event Infrastructure コンポーネント

Common Event Infrastructure コンポーネントは、アプリケーション、サービス、およびリソース一式としてサーバーにインストールされます。

Common Event Infrastructure を構成すると、いくつかのコンポーネントが作成され、サーバーにデプロイされます。

### Common Event Infrastructure サービス

サーバーにインストールされるサービス。このサービスにより、アプリケーションおよびクライアントは Common Event Infrastructure を使用できるようになります。Common Event Infrastructure サービスの構成を管理コンソールで表示するには、以下の順を実行します。

- サーバーの場合は、「サーバー」>「アプリケーション・サーバー」> *server\_name* >「ビジネス・インテグレーション」>「Common Event Infrastructure」>「Common Event Infrastructure サービス」を選択します。
- クラスターの場合は、「サーバー」>「クラスター」> *cluster\_name* >「ビジネス・インテグレーション」>「Common Event Infrastructure」>「Common Event Infrastructure サービス」を選択します。

「イベント・インフラストラクチャー・サーバーを使用可能に設定」というラベルのチェック・ボックスが選択されている場合、サービスはインストールされていて稼働中であるか、あるいはサーバーまたはクラスターの再始動後にサービスが開始します。このチェック・ボックスがクリアされている場合、サービスはインストールされていないか、あるいはサーバーまたはクラスターの再始動後にアンインストールされます。

### イベント・サービス設定

データ・ストアを使用してイベント配布およびパーシスタンスを実現するイベント・サービスで使用されるプロパティ一式。一般に、このリソースの構成は不要ですが、同じセルに複数のイベント・サービスをセットアップする場合は、追加のイベント・サービス設定を作成しなければならない場合があります。イベント・サービス設定を表示するには、「サービス統合」>「イベント・サービス」>「イベント・サービス設定 (Event service settings)」をクリックします。

### イベント・メッセージング構成

Java Messaging Service (JMS) を使用したイベント・サービスへの非同期イベント伝送をサポートするリソース。デフォルトのメッセージング構成では、サーバー組み込みのメッセージングを使用します。オプションで、イベント・メッセージングの外部 JMS プロバイダーを構成できます。

## イベント・データベース

イベント・データベースは、イベント・サービスが受信するイベントを永続的に保管するために使用します。Derby データベースはサーバーの一部として組み込まれていますが、実稼働環境での使用はお勧めしません。その代わりとして、DB2、Oracle、SQLServer、および Informix 製品で外部イベント・データベースを構成できます。

## イベント・フィルター・プラグイン

フィルター・プラグインは、XPath イベント・セレクターを使用してソースでイベントをフィルタリングするために使用します。フィルター・プロパティを構成するには、「サービス統合」>「**Common Event Infrastructure**」>「イベント・エミッター・ファクトリー」>「イベント・フィルター設定」をクリックします。

## エミッター・ファクトリー

エミッター・ファクトリーは、イベント・ソースがエミッターを作成するために使用するオブジェクトであり、このエミッターは、イベントをイベント・サービスに送信するのに使用されます。エミッター・ファクトリーのプロパティは、そのエミッター・ファクトリーを使用して作成されるエミッターの振る舞いに影響を及ぼします。使用可能なエミッター・ファクトリーを表示するには、「サービス統合」>「**Common Event Infrastructure**」>「イベント・エミッター・ファクトリー」をクリックします。

## イベント・サービス伝送

イベント・サービス伝送は、エミッターが EJB 呼び出しを使用してイベント・サービスに同期的にアクセスする方法を決定するプロパティが定義されているオブジェクトです。これらのプロパティは、新規エミッターの作成時にエミッター・ファクトリーによって使用されます。エミッター・ファクトリー設定から、使用可能なイベント・サービス伝送を表示または変更できます。

## JMS 伝送

JMS 伝送は、エミッターが JMS キューを使用してイベント・サービスに非同期にアクセスする方法を決定するプロパティが定義されているオブジェクトです。これらのプロパティは、新規エミッターの作成時にエミッター・ファクトリーによって使用されます。エミッター・ファクトリー設定から、使用可能な JMS 伝送を表示または変更できます。

## イベント・グループ

イベント・グループは、イベントをその内容に応じて分類するために使用される、イベントの論理的な集合です。イベント・サービスからイベントを照会する場合や、イベント配布をサブスクライブする場合、イベント・コンシューマーはイベント・グループを指定してそのグループのイベントのみを取得することができます。イベント・グループを使用して、永続データ・ストアに保管するイベントを指定することもできます。使用可能なイベント・グループを管理コンソールで表示するには、「サービス統合」>「**Common Event Infrastructure**」>「イベント・サービス」>「イベント・サービス」> *event\_service* >「イベント・グループ」をクリックします。

# 管理コンソールを使用した Common Event Infrastructure の構成

Common Event Infrastructure の構成全体を実行するには、サーバー管理コンソールを使用します。

## このタスクについて

管理コンソールの Common Event Infrastructure サーバー・パネルを開きます。

サーバーを構成する場合は、「サーバー」>「アプリケーション・サーバー」>「*server\_name*」>「ビジネス・インテグレーション」>「Common Event Infrastructure」>「Common Event Infrastructure サーバー」を選択します。

クラスターを構成する場合は、「サーバー」>「クラスター」>「*cluster\_name*」>「ビジネス・インテグレーション」>「Common Event Infrastructure」>「Common Event Infrastructure サーバー」をクリックします。

## 手順

1. 「イベント・インフラストラクチャー・サーバーを使用可能に設定」というレベルのチェック・ボックスを選択することにより、Common Event Infrastructure エンタープライズ・アプリケーションをデプロイできるようにします。サーバーが既に構成されている場合は、このチェック・ボックスを選択またはクリアすることにより、サーバーを使用可能または使用不可能にすることができます。この「使用可能に設定」のチェック・ボックスがクリアされている場合は、Common Event Infrastructure が構成されていないか、あるいは前の構成は使用不可能に設定されたがサーバーがまだ再始動されていない状態です。このデプロイメント・ターゲットに Common Event Infrastructure が構成されているかどうかを示す情報メッセージが表示されます。サーバーが既に構成されている場合は、イベント・データベースまたはメッセージ・ストア (あるいはその両方) についてのデータ・ソース設定を変更できます。

**注:** Common Event Infrastructure サーバーがまだ構成されていない状態でチェック・ボックスを選択した場合は、表示されたパラメーターを変更しない限り、それらのパラメーターがサーバーの構成に使用されます。

- 初めて構成を実行する場合は、共通データベースにイベント・データ・ソース・テーブルが作成されます。既に Common Event Infrastructure サーバー構成が存在する場合は、新規データベースを作成する必要があります。
- 共通データベース内の固有スキーマの下にメッセージング・サービスが作成されます。

Common Event Infrastructure が構成されているサーバー/クラスターを再始動すると、新規の変更が有効になります。

2. イベント・データベースを構成 (または既存のイベント・データベース構成の現在の設定を変更) します。次のいずれかで、フィールドに適切な設定値を入力してください。
  - 「編集」をクリックして、このパネルよりも詳細なオプション・リストが設定されたデータベース構成パネルを表示します。

- パネル上のフィールドを使用して情報を入力します。入力する情報の概要は以下のとおりです。
  - a. 「データベース・インスタンス」 - イベントの保管に使用するデータベースの名前を入力します。
  - b. 「テーブルの作成」 - イベント・データベースにデータベース表を作成する場合は、このチェック・ボックスを選択します。

**注:** 別のサーバーにあるデータベースを使用するように Common Event Infrastructure を構成する場合は、このコントロールを使用してテーブルを作成することはできません。この構成をすべて設定した後に生成されるデータベース・スクリプトを使用する必要があります。その場合、「編集」をクリックしてデータ・ソース詳細パネルを表示すると、データベース作成スクリプトのロケーションが表示されます。

- c. 「ユーザー名」および「パスワード」 - イベント・データベースの認証時に使用されます。
- d. 「サーバー」 - イベント・データベースが存在するサーバーの名前を入力します。
- e. 「プロバイダー」 - データベースのプロバイダーをメニューから選択します。

**注:** 「スキーマ」フィールドは、iSeries または z/OS プラットフォーム上で DB2 を使用してデータベースを作成する場合のみアクティブになります。それ以外の場合、「スキーマ」フィールドは使用できません。

**重要:** ターゲット・データベースに既にテーブルが存在する場合は、構成が失敗することがあります。

3. Common Event Infrastructure バスがサーバー上で「ローカル」として存在するか、あるいは「リモート」として他のサーバー上に存在するかを選択します。「リモート」を選択した場合は、リモートのロケーションをメニューから選択するか、あるいは「新規」をクリックして新規リモート・バスを作成します。
4. メッセージング用の Common Event Infrastructure サポートを構成します。
  - 「編集」をクリックして、このパネルよりも詳細なオプション・リストが設定されたデータベース構成パネルを表示します。
  - パネル上のフィールドを使用して情報を入力します。入力する情報の概要は以下のとおりです。
    - a. 「データベース・インスタンス」 - メッセージの保管に使用するデータベースの名前を入力します。
    - b. 「スキーマ」 - スキーマの名前を入力します。表示されたデフォルト名をそのまま使用してもかまいません。
    - c. 「ユーザー名」および「パスワード」 - メッセージング・データベースの認証時に使用されます。
    - d. 「サーバー」 - メッセージング・データベースが存在するサーバーの名前を入力します。
    - e. 「プロバイダー」 - データベースのプロバイダーをメニューから選択します。
5. Common Event Infrastructure バスのメッセージング認証別名を作成します。

- a. 「追加プロパティ」 > 「JMS 認証別名」を選択します。
  - b. システム統合バスでのセキュア通信に使用するユーザー ID とパスワードを入力します。 セキュリティーが使用不可の場合は、ユーザー ID とパスワードの両方について、デフォルトの構成値「CEI」を使用してもかまいません。セキュリティーが使用可能になっている場合は、このユーザー ID とパスワードがバス認証に使用されます。したがって、システムを保護するためにはユーザー ID とパスワードを変更する必要があります。
  - c. 「OK」をクリックします。
6. 「OK」 または 「適用」 をクリックします。
  7. サーバーまたはクラスターを再始動します。

## タスクの結果

これで、Common Event Infrastructure の主要な部分がすべて構成され、サーバーまたはクラスター上で稼働するようになります。この構成には、イベント・データ・ストア、メッセージング・エンジン、およびイベント・アプリケーションが含まれます。このパネルを使用することにより、多数のコマンドとステップを使用して Common Event Infrastructure を構成する必要がなくなります。

## 次のタスク

サーバーまたはクラスターの再始動後は、アプリケーションから発行されたサービス・コンポーネント・イベントを保管できるようになります。この後は、

「**Common Event Infrastructure の宛先**」パネルを選択して、Common Event Infrastructure サーバーのランタイム・プロパティを変更することができます。また、始動時に Common Event Infrastructure サーバーを始動するかどうかを選択したり、イベントが送信されるエミッター・ファクトリー JNDI 名を指定することができます。

## Common Event Infrastructure アプリケーションのデプロイ

Common Event Infrastructure を使用するには、事前にイベント・サービスと関連リソースをサーバーのランタイム環境にデプロイしておく必要があります。

### このタスクについて

Common Event Infrastructure エンタープライズ・アプリケーションには、イベント・サービスのランタイム・コンポーネントや、非同期イベント・サブミットに使用されるデフォルトのメッセージング構成が含まれています。

イベント・サービスをデプロイするには、以下の手順を実行します。

### 手順

wsadmin ツールから、**deployEventService** 管理コマンドをバッチ・モードまたは対話モードで実行します。 **deployEventService** 管理コマンドのパラメーターは、以下のとおりです。

#### **nodeName**

イベント・サービスがデプロイされるノードの名前を指定します。このパラメーターはオプションです。ノード名を指定しない場合、現在のノード名がデフォルト

トとして設定されます。ノード名を指定する場合は、**serverName** パラメーターを使用してサーバー名も指定する必要があります。イベント・サービスをクラスターにデプロイする場合、このパラメーターは無効です。

#### **serverName**

イベント・サービスがデプロイされるサーバーの名前を指定します。このパラメーターは、ノードを指定する場合のみ必須です。イベント・サービスをクラスターにデプロイする場合、このパラメーターは無効です。

#### **clusterName**

イベント・サービスがデプロイされるクラスターの名前を指定します。このパラメーターはオプションです。ノード・スコープまたはサーバー・スコープでデプロイする場合は、このパラメーターを指定しないでください。

#### **enable**

サーバー始動時にイベント・サービスを自動的に開始するかどうかを指定します。デフォルト値は `true` です。

## **タスクの結果**

この管理コマンドが完了すると、Common Event Infrastructure イベント・サービスおよびデフォルト・メッセージング構成が指定の範囲でデプロイされます。

## **次のタスク**

WebSphere セキュリティーが有効になっている場合は、

**setEventServiceJmsAuthAlias** 管理コマンドを使用して、JMS 認証別名およびパスワードも構成する必要があります。

イベント・サービスをクラスターにデプロイする場合は、手動でイベント・データベースも構成する必要があります。

### **関連資料**



**deployEventService** コマンド

**deployEventService** コマンドを使用して、ご使用のサーバーにイベント・サービス・アプリケーションをデプロイします。



**setEventServiceJmsAuthAlias** コマンド

**setEventServiceJmsAuthAlias** コマンドを使用して、サーバー上でイベント・サービスに関連付けられた JMS 認証別名を設定または更新します。

## **Common Event Infrastructure のクラスターへのデプロイ**

Common Event Infrastructure リソースをクラスター環境にデプロイするには、いくつかの方法があります。

### **Common Event Infrastructure の既存のクラスターへのデプロイ:**

既存のクラスターにイベント・サービス・アプリケーションをデプロイすることができます。

## このタスクについて

イベント・サービス・アプリケーションのクラスターへのデプロイは、アプリケーションのスタンドアロン・サーバーへのデプロイと本質的には同じです。ただし、クラスター環境では、デフォルトのイベント・データベースは構成されません。

Common Event Infrastructure をクラスター環境にデプロイして構成するには、以下の手順を実行します。

### 手順

1. クラスターの名前を指定し、それ以外はスタンドアロン・サーバーの場合と同様に **deployEventService** 管理コマンドを実行します。クラスターを指定するには、`clusterName` パラメーターを使用します。
2. デプロイメント・マネージャー・システムで、データベース構成管理コマンドを実行します。 `clusterName` パラメーターを使用して、クラスター名を指定します。このコマンドにより、データベース構成スクリプトが生成されます。
3. 生成されたデータベース構成スクリプトをデータベース・システムにコピーします。
4. データベース・システムに対してデータベース構成スクリプトを実行して、イベント・データベースを作成します。
5. デプロイメント・マネージャー・システムで **enableEventService** コマンドを実行して、イベント・サービスを使用可能にします。 `clusterName` パラメーターを使用して、クラスターの名前を指定します。

### 既存の Common Event Infrastructure サーバーの変換によるクラスターの作成:

Common Event Infrastructure と共に構成されている既存のスタンドアロン・サーバーを変換して、新しいクラスターを作成することができます。

### 始める前に

既存のサーバーを変換する前に、そのサーバーが Common Event Infrastructure 用に完全に構成されていることを確認してください。その際、イベント・サービス・アプリケーションのデプロイとイベント・データベースの構成も行う必要があります。

## このタスクについて

クラスターを作成するには、以下の手順を実行します。

### 手順

1. 通常の WebSphere プロセスに従い、スタンドアロン・サーバーを新しいクラスターの最初のメンバーに変換します。サーバーを変換すると、以下のステップが実行されます。
  - サーバーの有効範囲にある使用可能な Common Event Infrastructure リソースが、新しいクラスターの有効範囲に移動されます。

**デフォルト・データベース:** 既存のサーバーがデフォルトの Derby データベースと共に構成されている場合、データベース・リソースは、クラスターの有効範囲には移動されずに削除されます。デフォルトのデータベース構成は、ク

ラスタではサポートされません。この場合、ラスタ内のイベント・サービスはデフォルトで使用不可になります。

- デプロイするイベント・サービス・アプリケーションのターゲット・リストが変更され、変換されたサーバーが削除されて新しいラスタが追加されま
2. オプション: 変換されたサーバーがデフォルトの Derby データベースと共に構成されていた場合は、ラスタの新しいイベント・データベースを構成してから、イベント・サービスを使用可能にする必要があります。
    - a. デプロイメント・マネージャー・システムで、データベース構成管理コマンドを実行します。 `clusterName` パラメーターを使用して、ラスタ名を指定します。このコマンドにより、データベース構成スクリプトが生成されます。
    - b. 生成されたデータベース構成スクリプトをデータベース・システムにコピーします。
    - c. データベース・システムに対してデータベース構成スクリプトを実行して、イベント・データベースを作成します。
    - d. デプロイメント・マネージャー・システムで `enableEventService` コマンドを実行して、イベント・サービスを使用可能にします。 `clusterName` パラメーターを使用して、ラスタの名前を指定します。

### 既存の Common Event Infrastructure サーバーをテンプレートとして使用してラスタを作成する:

既存の Common Event Infrastructure サーバーをテンプレートとして指定することにより、新しいラスタを作成できます。

### 始める前に

この方法でラスタを作成する場合、Common Event Infrastructure 用に完全に構成されている既存のサーバーをあらかじめ用意しておく必要があります。その際、イベント・サービス・アプリケーションのデプロイとイベント・データベースの構成も行う必要があります。

### このタスクについて

ラスタを作成するには、以下の手順を実行します。

### 手順

1. 通常の WebSphere プロセスに従い、既存の Common Event Infrastructure サーバーを最初のラスタ・メンバーのテンプレートとして使用して、新しいラスタを作成します。最初のメンバーを作成すると、以下のステップが実行されます。
  - 既存のサーバーの有効範囲にある使用可能な Common Event Infrastructure リソースが、新しいラスタの有効範囲にコピーされます。

**デフォルト・データベース:** 既存のサーバーがデフォルトの Derby データベースと共に構成されている場合、データベース・リソースは、ラスタの有

効範囲にはコピーされません。デフォルトのデータベース構成は、クラスターではサポートされません。この場合、クラスター内のイベント・サービスはデフォルトで使用不可になります。

- デプロイするイベント・サービス・アプリケーションのターゲット・リストが変更され、新しいクラスターが組み込まれます。
2. オプション: 既存のサーバーがデフォルトの Derby データベースと共に構成されていた場合は、クラスターの新しいイベント・データベースを構成してから、イベント・サービスを使用可能にする必要があります。
    - a. デプロイメント・マネージャー・システムで、データベース構成管理コマンドを実行します。 `clusterName` パラメーターを使用して、クラスター名を指定します。このコマンドにより、データベース構成スクリプトが生成されます。
    - b. 生成されたデータベース構成スクリプトをデータベース・システムにコピーします。
    - c. データベース・システムに対してデータベース構成スクリプトを実行して、イベント・データベースを作成します。
    - d. デプロイメント・マネージャー・システムで `enableEventService` コマンドを実行して、イベント・サービスを使用可能にします。 `clusterName` パラメーターを使用して、クラスターの名前を指定します。

## イベント・メッセージングの構成

イベントをイベント・サービスに JMS 伝送するためのメッセージング構成を変更することができます。

### このタスクについて

管理コンソール・パネルを使用してサーバーに Common Event Infrastructure を構成するときに、Common Event Infrastructure のメッセージング・インフラストラクチャーを作成します。通常、メッセージング構成では、デフォルトのメッセージング・プロバイダーを使用して、イベント・サービスにイベントを非同期伝送するための単一 JMS キューを作成します。必要な場合は、このメッセージング構成を変更することができます。

### 追加の JMS キューの構成

デフォルトのイベント・メッセージング構成を使用している場合は、JMS キューを追加してイベント・サービスにイベントを転送することができます。

### このタスクについて

デフォルトのメッセージング構成を使用して追加の JMS キューを構成するには、サービス統合バスのキュー宛先に転送される複数の JMS キューをセットアップします。Common Event Infrastructure サービス統合バスのキュー宛先は、イベント・サービスがデプロイされる有効範囲によって異なります。

有効範囲	サービス統合バスのキュー宛先
サーバー	<code>node.server.CommonEventInfrastructureQueueDestination</code>
クラスター	<code>cluster.CommonEventInfrastructureQueueDestination</code>

サービス統合バスの構成の詳細については、資料を参照してください。

## 外部 JMS プロバイダーを使用したイベント・メッセージングの構成

デフォルトの組み込みメッセージング構成をイベント伝送で使わない場合は、非同期メッセージ・トランスポートを構成することにより、外部の Java Messaging Service (JMS) プロバイダーを使用することができます。

### 始める前に

外部 JMS プロバイダーを使用してイベント・メッセージングを構成する前に、使用している JMS プロバイダーに適したインターフェースを使用して JMS キューと接続ファクトリーを作成しておく必要があります。さらに、リスナー・ポートまたはアクティベーション・スペックを作成する必要があります。

### このタスクについて

外部 JMS プロバイダーを使用してイベント・メッセージングを構成するには、以下の手順を実行します。

#### 手順

wsadmin ツールから **deployEventServiceMdb** 管理コマンドをバッチ・モードまたは対話モードで実行します。 **deployEventServiceMdb** コマンドのパラメーターは、以下のとおりです。

#### **applicationName**

デプロイするイベント・サービスのメッセージ駆動型 Bean のアプリケーション名を指定します。このパラメーターは必須です。

#### **nodeName**

イベント・サービスのメッセージ駆動型 Bean をデプロイする必要があるノードの名前を指定します。ノード名を指定する場合は、サーバー名も指定する必要があります。これはオプション・パラメーターで、デフォルト値は現在のノードです。クラスターにアプリケーションをデプロイする場合は、このパラメーターを指定しないでください。

#### **serverName**

イベント・サービスのメッセージ駆動型 Bean をデプロイする必要があるサーバーの名前を指定します。サーバーの有効範囲にアプリケーションをデプロイする場合、このパラメーターは必須です。それ以外の場合は、任意指定です。クラスターにアプリケーションをデプロイする場合は、サーバー名を指定しないでください。

#### **clusterName**

イベント・サービスのメッセージ駆動型 Bean をデプロイする必要があるクラスターの名前を指定します。このパラメーターは、アプリケーションをクラスターにデプロイする場合にのみ指定します。

#### **listenerPort**

イベントの公開時にイベント・サービスのメッセージ駆動型 Bean が使用するリスナー・ポートの名前を指定します。指定するリスナー・ポートは、既に存在している必要があります。リスナー・ポートとアクティベーション・スペックのいずれかを指定する必要がありますが、両方を指定することはできません。

### activationSpec

イベントの公開時にイベント・サービスのメッセージ駆動型 Bean が使用アクティベーション・スペックの JNDI 名を指定します。指定するアクティベーション・スペックは、すでに存在している必要があります。リスナー・ポートとアクティベーション・スペックのいずれかを指定する必要がありますが、両方を指定することはできません。

### qcfJndiName

イベント・サービスのメッセージ駆動型 Bean が使用する JMS キュー接続ファクトリーの JNDI 名を指定します。アクティベーション・スペックを指定する場合、このパラメーターは必須です。それ以外の場合は、任意指定です。キュー接続ファクトリーとリスナー・ポートを指定する場合、キュー接続ファクトリーは、対象のリスナー・ポート用に構成されたものと一致する必要があります。

## タスクの結果

**deployEventServiceMdb** 管理コマンドは、指定したリスナー・ポートまたはアクティベーション・スペック用に構成されたイベント・サービスのメッセージ駆動型 Bean をデプロイします。外部の JMS 構成を使用して、エミッター・ファクトリーと JMS 伝送の作成も行います。アプリケーションで、(デフォルトのメッセージング構成を使用するように構成された) デフォルトのエミッター・ファクトリー、または (外部の JMS プロバイダーを使用する) 新しいエミッター・ファクトリーを使用することができます。

## 次のタスク

イベント・サービスに対して複数の JMS キューをセットアップする場合は、異なるエンタープライズ・アプリケーション名と JMS キューを指定して、このコマンドを複数回実行します。スクリプトを実行するたびに追加のメッセージ駆動型 Bean がデプロイされ、新規リソースで指定された JMS キューを使用するように構成されます。

## JMS 認証別名の構成

WebSphere セキュリティーが有効になっている場合に非同期 JMS メッセージングを使用してイベントをイベント・サービスにサブミットするには、JMS 認証別名を構成する必要があります。

## このタスクについて

JMS 認証別名を構成するには、以下の手順を実行します。

### 手順

wsadmin ツールから、**setEventServiceJmsAuthAlias** 管理コマンドをバッチ・モードまたは対話モードで実行します。 **setEventServiceJmsAuthAlias** コマンドのパラメーターは、以下のとおりです。

### userName

JMS 認証別名に使用するユーザーの名前を指定します。このパラメーターは必須です。

**password**

JMS 認証別名に使用するユーザーのパスワードを指定します。このパラメーターは必須です。

**nodeName**

JMS 認証別名が更新または作成されるノードの名前を指定します。ノード名を指定する場合は、サーバー名も指定する必要があります。クラスターで認証別名を構成する場合は、ノード名を指定しないでください。

**serverName**

JMS 認証別名が更新または作成されるサーバーの名前を指定します。このパラメーターは、ノードを指定する場合のみ必須です。クラスターで認証別名を構成する場合、このパラメーターは無効です。

**clusterName**

JMS 認証別名が更新または作成されるクラスターの名前を指定します。このパラメーターは、クラスターで認証別名を構成する場合のみ指定してください。クラスター名を指定する場合は、ノード名またはサーバー名を指定しないでください。

**タスクの結果**

イベント・サービス・オブジェクトが使用する JMS 認証別名は、指定されたスコープで更新されます。認証が存在しない場合は、指定された値を使用して認証が作成されます。

## イベント・データベースの構成

サポートされるデータベース製品ごとに固有のコマンドを使用して、イベント・データ・ソースを構成することができます。

### このタスクについて

イベント・データベースは、イベントの永続性をサポートするために必要です。管理コンソールの Common Event Infrastructure 構成パネルを使用しなかった場合も、ここで説明するコマンドを使用すればイベント・データベースを作成することができます。

### イベント・データベースの制限

特定のデータベース・ソフトウェアを使用してイベント・データベースを構成する場合は、いくつかの制限が適用されます。

ご使用の環境に適用される制限については、以下の表を参照してください。

表 139. イベント・データベースの制限

データベース・タイプ	制限
Oracle	<ul style="list-style-type: none"> <li>• Oracle 10g JDBC Thin ドライバーでは、Unicode 文字セットを使用する場合にストリング値のサイズ制限があります。そのため、大きい値 (長メッセージ属性など) を含むイベントがイベント・データベースに保管されると、Oracle ORA-01461 エラーが発生する可能性があります。この制限についての詳細は、Oracle 10g の資料を参照してください。</li> </ul> <p>この問題を避けるには、Oracle 10g OCI ドライバーまたは Oracle 9i Thin ドライバーを使用してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• Oracle データベース・ソフトウェアは、ブランクのストリングを NULL 値として扱います。ブランクのストリングをイベント属性値として指定すると、そのストリングは、Oracle イベント・データベースに保管されるときに NULL に変換されます。</li> </ul>
Informix	<ul style="list-style-type: none"> <li>• JDBC 3.0 ドライバー (またはそれ以降) が必要です。以前のバージョンの JDBC ドライバーでは、必要な XA トランザクションが完全にはサポートされません。</li> <li>• <b>configEventServiceInformixDB</b> 管理コマンドにより生成されるデータベース構成スクリプトおよびデータベース除去スクリプトでは、SQL スクリプトを実行するために <b>dbaccess</b> コマンドが必要です。このコマンドは、Informix サーバー上でしか使用できない可能性があります。したがって、Informix サーバーが WebSphere サーバーとは別のシステム上にある場合は、データベース構成スクリプトを Informix サーバーにコピーして、ローカルで実行する必要がある可能性があります。</li> </ul>

表 139. イベント・データベースの制限 (続き)

データベース・タイプ	制限
SQL サーバー	<ul style="list-style-type: none"> <li>• SQL サーバー・データベースは、混在認証モードを使用するように構成する必要があります。トラステッド接続はサポートされません。</li> <li>• XA ストアード・プロシージャをインストールする必要があります。このストアード・プロシージャは、Microsoft Corporation が提供する JDBC ドライバーに同梱されています。</li> <li>• PATH ステートメントで指定したディレクトリに sqljdbc.dll ファイルが含まれ、使用できる必要があります。このファイルは、Microsoft Corporation が提供する JDBC ドライバーに同梱されています。</li> <li>• Distributed Transaction Coordinator (DTC) サービスを開始する必要があります。</li> </ul>

## Derby イベント・データベースの構成

Linux、UNIX、または Windows システム上のサーバーまたはクラスターの有効範囲にある Derby イベント・データベースを構成できます。

### このタスクについて

イベント・データベースに使用できる Derby データベースには、Derby Embedded と Derby Network の 2 つのタイプがあります。どちらのタイプも WebSphere Application Server に付属していますが、機能が制限されているため、実稼働環境には適していません。したがって、Derby は開発やテストなどの目的でのみ、イベント・データベースとして使用してください。Derby データベースの詳細については、WebSphere Application Server の (このページの下部にリンクがある) 資料を参照してください。

Derby Embedded は、スタンドアロン・サーバーでのみ使用できます。したがって、スタンドアロン・サーバーをクラスター環境または ND 環境に統合する場合は、別のデータベース製品を使用してイベント・データ・ソースを完全に再構成する必要があります。この処理は、サーバーを始動すると自動的に開始されます。

Derby Network はクラスター環境または ND 環境で使用できますが、Derby Embedded と同じように、実際の稼働システムでの使用には適していません。これをサーバーで使用するには、データベースを手動で開始する必要があります。

Derby イベント・データベースを構成するには、以下の手順を実行します。

#### 手順

1. wsadmin ツールを開始します。

2. AdminTask オブジェクトを使用して、**configEventServiceDerbyDB** 管理コマンドをバッチ・モードまたは対話モードで実行します。**configEventServerDerbyDB** コマンドに最低限必要なパラメーターを以下に示します。

#### **createDB**

データベース構成スクリプトを管理コマンドで作成して実行する必要があるかどうかを指定します。**true** または **false** を設定します。このパラメーターを **false** に設定すると、スクリプトは作成されますが、実行はされません。そのため、データベース構成を完了するには、データベース構成スクリプトを実行する必要があります。

#### **nodeName**

イベント・サービス・データ・ソースの作成が必要なサーバーが存在するノードの名前を指定します。ノード名を指定する場合は、サーバー名も指定する必要があります。以下のいずれかを指定してください。

- ノード名およびサーバー名
- クラスター名

#### **serverName**

イベント・サービス・データ・ソースを作成する必要があるサーバーの名前を指定します。

#### **clusterName**

イベント・サービス・データ・ソースを作成する必要があるクラスターの名前を指定します。クラスター名を指定する場合は、ノード名とサーバー名を指定しないでください。

環境によっては、その他のパラメーターが必要になる場合もあります。詳細なパラメーターのリストとその用法については、**configEventServiceDerbyDB** 管理コマンドのヘルプを参照してください。

## **タスクの結果**

管理コマンドにより、指定された有効範囲に必要なデータ・ソースが作成されます。**createDB** パラメーターに **true** を指定した場合、管理コマンドは、生成されたデータベース構成スクリプトも実行してデータベースを作成します。

生成されたデータベース構成スクリプトは、デフォルトで *profile\_root/databases/event/node/server/dbscripts/derby* ディレクトリーに保管されます。(Network Deployment 環境の場合、これらのスクリプトは、デプロイメント・マネージャーのプロファイル・ディレクトリーの下に保管されます。) 任意指定の **outputScriptDir** パラメーターに値を指定した場合は、その場所にスクリプトが保管されます。これらのスクリプトを使用すると、イベント・データベースをいつでも手動で構成することができます。

## **DB2 イベント・データベースの構成 (Linux、UNIX、および Windows システム)**

Linux、UNIX、または Windows システムで、DB2 Universal Database を使用して、外部イベント・データベースを構成できます。

## このタスクについて

Linux、UNIX、または Windows システムで DB2 イベント・データベースを構成するには、以下の手順を実行します。

### 手順

1. wsadmin ツールを開始します。
2. AdminTask オブジェクトを使用して、**configEventServiceDB2DB** 管理コマンドをバッチ・モードまたは対話モードで実行します。**configEventServiceDB2DB** コマンドに最低限必要なパラメーターを以下に示します。

#### createDB

データベース構成スクリプトを管理コマンドで作成して実行する必要があるかどうかを指定します。**true** または **false** を設定します。このパラメーターを **false** に設定すると、スクリプトは作成されますが、実行はされません。そのため、データベース構成を完了するには、データベース構成スクリプトを実行する必要があります。

#### nodeName

イベント・サービス・データ・ソースの作成が必要なサーバーが存在するノードの名前を指定します。ノード名を指定する場合は、サーバー名も指定する必要があります。以下のいずれかを指定してください。

- ノード名およびサーバー名
- クラスター名

#### serverName

イベント・サービス・データ・ソースを作成する必要があるサーバーの名前を指定します。

#### clusterName

イベント・サービス・データ・ソースを作成する必要があるクラスターの名前を指定します。クラスター名を指定する場合は、ノード名とサーバー名を指定しないでください。

#### jdbcClassPath

JDBC ドライバーへのパスを指定します。ドライバー・ファイルへのパスのみを指定します。ファイル名は指定しないでください。

#### dbHostName

データベースがインストールされているサーバーのホスト名を指定します。

#### dbUser

イベント・データベースの作成時に使用する DB2 ユーザー ID を指定します。指定するユーザー ID には、データベースの作成権限と削除権限が設定されている必要があります。

#### dbPassword

使用する DB2 パスワードを指定します。

環境によっては、その他のパラメーターが必要になる場合もあります。詳細なパラメーターのリストとその用法については、**configEventServiceDB2DB** 管理コマンドのヘルプを参照してください。

## タスクの結果

管理コマンドにより、指定された有効範囲に必要なデータ・ソースが作成されます。createDB パラメーターに true を指定した場合、管理コマンドは、生成されたデータベース構成スクリプトも実行してデータベースを作成します。

生成されたデータベース構成スクリプトは、デフォルト で `profile_root/databases/event/node/server/dbscripts/db2` ディレクトリーに保管されます。(Network Deployment 環境の場合、これらのスクリプトは、デプロイメント・マネージャーのプロファイル・ディレクトリーの下に保管されます。) 任意指定の `outputScriptDir` パラメーターに値を指定した場合は、その場所にスクリプトが保管されます。これらのスクリプトを使用すると、イベント・データベースをいつでも手動で構成することができます。

## z/OS システムでの DB2 データベースの構成

DB2 データベース・ソフトウェアを使用して、z/OS システムでイベント・データベースを構成することができます。

### 始める前に

リモート・クライアントから DB2 データベースを構成するには、最新のフィックスバックを含む DB2® Connect™ 製品がインストールされている必要があります。

### このタスクについて

イベント・データベースを構成するには、以下の手順を実行します。

#### 手順

1. 

Linux	UNIX	Windows
-------	------	---------

 z/OS イベント・データベースを Linux、UNIX、または Windows クライアント・システムから構成する場合は、以下のステップを実行して、データベースの作成とカタログを行います。
  - a. z/OS システム上で、DB2 管理メニューを使用して新規サブシステムを作成します。
  - b. オプション: イベント・データベースに使用するストレージ・グループを作成します。既存のストレージ・グループ (`sysdeflt` など) を使用することもできます。
  - c. イベント・データベースで使用する 4K、8K、16K のバッファ・プールを使用可能にします。
  - d. データ・ソースが使用するユーザー ID に対して必要な権限を付与します。このユーザー ID には、作成したデータベースとストレージ・グループへのアクセス権限が設定されている必要があります。また、データベース用新規テーブル、テーブル・スペース、および索引を作成する権限も必要です。
  - e. リモート・データベースをカタログします。スクリプトまたは DB2 コマンド行ウィンドウで、以下のコマンドを実行します。

```
catalog tcpip node zosnode remote hostname server IP_port
system db_subsystem
catalog database db_name as db_name at node zosnode authentication DCS
```

ノードとデータベースをカタログする方法については、DB2 Connect の資料を参照してください。

- f. リモート・サブシステムに接続できることを確認してください。この確認を行うには、以下のコマンドを実行します。

```
db2 connect to subsystem user userid using password
```

- g. ホスト・データベースにバインドします。以下のコマンドを実行します。

```
db2 connect to db_name user userid using password
db2 bind db2_root/bnd/@ddcsmvs.lst blocking all sqlerror continue message
      mvs.msg grant public
db2 connect reset
```

クライアントをホスト・データベースにバインドする方法について詳しくは、DB2 Connect の資料を参照してください。

2. WebSphere システムで wsadmin ツールを開始します。
3. AdminTask オブジェクトを使用して、**configEventServiceDB2ZOSDB** 管理コマンドをバッチ・モードまたは対話モードで実行します。

**configEventServiceDB2ZOSDB** コマンドに最低限必要なパラメーターを以下に示します。

#### createDB

**Linux** **UNIX** **Windows** データベース構成スクリプトを管理コマンドで作成して実行する必要があるかどうかを指定します。このパラメーターは、管理コマンドを Linux、UNIX、または Windows クライアント・システムから実行する場合にのみ適用されます。true または false を指定します。

このパラメーターを false に設定するか、z/OS システム上でコマンドを実行すると、スクリプトは作成されますが、実行はされません。そのため、データベース構成を完了するには、データベース構成スクリプトを実行する必要があります。

#### nodeName

イベント・サービス・データ・ソースを作成する必要があるサーバーを含むノードの名前を指定します。ノード名を指定する場合は、サーバー名も指定する必要があります。以下のいずれかを指定してください。

- ノード名およびサーバー名
- クラスター名

#### serverName

イベント・サービス・データ・ソースを作成する必要があるサーバーの名前を指定します。

#### clusterName

イベント・サービス・データ・ソースを作成する必要があるクラスターの名前を指定します。クラスター名を指定する場合は、ノード名とサーバー名を指定しないでください。

#### jdbcClassPath

JDBC ドライバーへのパスを指定します。ドライバー・ファイルへのパスのみを指定します。ファイル名は指定しないでください。

**dbHostName**

データベースがインストールされているサーバーのホスト名を指定します。

**dbUser**

イベント・データベースの作成時に使用する DB2 ユーザー ID を指定します。指定するユーザー ID には、データベースの作成権限と削除権限が設定されている必要があります。

**dbPassword**

使用する DB2 パスワードを指定します。

環境によっては、その他のパラメーターが必要になる場合もあります。詳細なパラメーターのリストとその用法については、**configEventServiceDB2ZOSDB** 管理コマンドのヘルプを参照してください。

**タスクの結果**

管理コマンドにより、指定された有効範囲に必要なデータ・ソースが作成されます。また、管理コマンドを Linux、UNIX、または Windows DB2 クライアント上で実行している場合、`createDB` パラメーターに `true` を指定すると、管理コマンドは、生成されたデータベース構成スクリプトも実行してデータベースを作成します。z/OS システムの場合は、SQL Processor Using File Input (SPUFI) 機能を使用して、生成された DDL ファイルを実行する必要があります。DDL ファイルは、`profile_root/databases/event/node/server/db2zos/ddl` ディレクトリーに保管されます。

生成されたデータベース構成スクリプトは、デフォルトで `profile_root/databases/event/node/server/dbscripts/db2zos` ディレクトリーに保管されます。(Network Deployment 環境の場合、これらのスクリプトは、デプロイメント・マネージャーのプロファイル・ディレクトリーの下に保管されます。) 任意指定の `outputScriptDir` パラメーターに値を指定した場合は、その場所にスクリプトが保管されます。これらのスクリプトを使用すると、イベント・データベースをいつでも手動で構成することができます。

**次のタスク**

データベースの構成が終了したら、サーバー管理コンソールを使用してデータベース構成をテストすることができます。これを行うには、該当する JDBC データ・ソースにナビゲートして「**テスト接続**」オプションを選択します。

**iSeries システムでの DB2 データベースの構成**

DB2 データベース・ソフトウェアを使用して、iSeries システムでイベント・データベースを構成することができます。

**このタスクについて**

ローカルの iSeries サーバーを使用してリモートの iSeries サーバーを構成する場合は、ローカル・サーバー上のリモート・データベース項目をターゲット・データベースに対して別名として指定する必要があります。イベント・データベースを構成するには、以下の手順を実行します。

**手順**

1. `wsadmin` ツールを開始します。

2. AdminTask オブジェクトを使用して、**configEventServiceDB2iSeriesDB** 管理コマンドをバッチ・モードまたは対話モードで実行します。

**configEventServiceDB2iSeriesDB** コマンドに対して最低限必要なパラメーターを以下に示します。

#### **createDB**

データベース構成スクリプトを管理コマンドで作成して実行する必要があるかどうかを指定します。true または false を設定します。このパラメーターを false に設定すると、スクリプトは作成されますが、実行はされません。そのため、データベース構成を完了するには、データベース構成スクリプトを実行する必要があります。

**制限:** 管理コマンドでデータベース構成スクリプトを自動的に実行できるのは、iSeries システム上に限られます。クライアント・システム上でコマンドを実行した場合は、エラーが返されます。

#### **nodeName**

イベント・サービス・データ・ソースの作成に必要なサーバーが存在するノードの名前を指定します。ノード名を指定する場合は、サーバー名も指定する必要があります。以下のいずれかを指定してください。

- ノード名およびサーバー名
- クラスタ名

#### **serverName**

イベント・サービス・データ・ソースを作成する必要があるサーバーの名前を指定します。

#### **clusterName**

イベント・サービス・データ・ソースを作成する必要があるクラスタの名前を指定します。クラスタ名を指定する場合は、ノード名とサーバー名を指定しないでください。

#### **toolboxJdbcClassPath**

IBM Toolbox for Java の DB2 JDBC ドライバーのパスを指定します。ネイティブの JDBC ドライバーの代わりに Toolbox for Java ドライバーを使用する場合のみ、このパラメーターを使用します。ドライバー・ファイルへのパスのみを指定します。ファイル名は含めないでください。

#### **nativeJdbcClassPath**

DB2 for iSeries ネイティブの JDBC ドライバーのパス。Toolbox for Java ドライバーの代わりにネイティブの JDBC ドライバーを使用する場合のみ、このパラメーターを使用します。ドライバー・ファイルへのパスのみを指定します。ファイル名は含めないでください。

#### **dbHostName**

データベースがインストールされているサーバーのホスト名を指定します。Toolbox for Java の JDBC ドライバーを使用する場合、このパラメーターは必須です。

#### **dbUser**

イベント・データベースの作成時に使用する DB2 ユーザー ID を指定します。指定するユーザー ID には、データベースの作成権限と削除権限が設定されている必要があります。

### dbPassword

使用する DB2 パスワードを指定します。

環境によっては、その他のパラメーターが必要になる場合もあります。詳細なパラメーターのリストとその使用法については、**configEventServiceDB2iSeriesDB** 管理コマンドのヘルプを参照してください。

## タスクの結果

管理コマンドにより、必要なデータベースとデータ・ソースを指定された有効範囲に作成するスクリプトが生成されます。これらのスクリプトは、デフォルトで *profile\_root/databases/event/node/server/dbscripts/db2iseries* ディレクトリーに保管されます。任意指定の *outputScriptDir* パラメーターに値を指定した場合は、その場所にスクリプトが保管されます。これらのスクリプトを使用すると、イベント・データベースをいつでも手動で構成することができます。

## 次のタスク

データベース構成管理コマンドをクライアント・システム上で実行した場合は、生成されたスクリプトを iSeries システムに転送し、このスクリプトを実行して必要なリソースを作成する必要があります。

データベースの構成が終了したら、サーバー管理コンソールを使用してデータベース構成をテストすることができます。その場合、該当する JDBC データ・ソースにナビゲートして「**テスト接続**」オプションを選択します。

## Informix イベント・データベースの構成

Linux、UNIX、または Windows システムで、IBM Informix Dynamic Server を使用して、外部イベント・データベースを構成できます。

## このタスクについて

Informix イベント・データベースを構成するには、以下の手順を実行します。

### 手順

1. wsadmin ツールを開始します。
2. AdminTask オブジェクトを使用して、**configEventServiceInformixDB** 管理コマンドをバッチ・モードまたは対話モードで実行します。  
**configEventServiceInformixDB** コマンドに最低限必要なパラメーターを以下に示します。

### createDB

データベース構成スクリプトを管理コマンドで作成して実行する必要があるかどうかを指定します。true または false を設定します。このパラメーターを false に設定すると、スクリプトは作成されますが、実行はされません。そのため、データベース構成を完了するには、データベース構成スクリプトを実行する必要があります。

**特権:** このパラメーターに `true` を指定する場合は、Informix データベース、DB スペース、テーブル、ビュー、索引、ストアド・プロシージャの作成特権が自分のユーザー ID に設定されていることを確認してください。

**nodeName**

イベント・サービス・データ・ソースを作成する必要があるサーバーを含むノードの名前を指定します。ノード名を指定する場合は、サーバー名も指定する必要があります。以下のいずれかを指定してください。

- ノード名およびサーバー名
- クラスター名

**serverName**

イベント・サービス・データ・ソースを作成する必要があるサーバーの名前を指定します。

**clusterName**

イベント・サービス・データ・ソースを作成する必要があるクラターの名前を指定します。クラスター名を指定する場合は、ノード名とサーバー名を指定しないでください。

**jdbcClassPath**

JDBC ドライバーへのパスを指定します。ドライバー・ファイルへのパスのみを指定します。ファイル名は指定しないでください。

**dbInformixDir**

Informix データベース・ソフトウェアがインストールされているディレクトリーを指定します。このパラメーターは、`createDB` パラメーターに `true` を指定した場合にのみ必要です。

**dbHostName**

データベース・サーバーがインストールされているシステムのホスト名を指定します。

**dbServerName**

Informix サーバー名 (`ol_servername` など) を指定します。

**dbUser**

イベント・データベース表を所有する Informix データベース・スキーマ・ユーザー ID を指定します。このユーザー ID には、データベースと DB スペースの作成特権が設定されている必要があります。WebSphere データ・ソースはこのユーザー ID を使用して Informix データベース接続を認証します。

**dbPassword**

指定したスキーマ・ユーザー ID のパスワードを指定します。

環境によっては、その他のパラメーターが必要になる場合もあります。詳細なパラメーターのリストとその用法については、`configEventServiceInformixDB` 管理コマンドのヘルプを参照してください。

## タスクの結果

管理コマンドにより、指定された有効範囲に必要なデータ・ソースが作成されます。createDB パラメーターに true を指定した場合、管理コマンドは、生成されたデータベース構成スクリプトも実行してデータベースを作成します。

生成されたデータベース構成スクリプトは、デフォルトで `profile_root/databases/event/node/server/dbscripts/informix` ディレクトリーに保管されます。(Network Deployment 環境の場合、これらのスクリプトは、デプロイメント・マネージャーのプロファイル・ディレクトリーの下に保管されます。) 任意指定の `outputScriptDir` パラメーターに値を指定した場合は、その場所にスクリプトが保管されます。これらのスクリプトを使用すると、イベント・データベースをいつでも手動で構成することができます。

**スクリプトの実行: configEventServiceInformixDB** 管理コマンドにより生成されるデータベース構成スクリプトとデータベース除去スクリプトでは、SQL スクリプトを実行するために `dbaccess` コマンドが必要です。このコマンドは、Informix サーバー上でしか使用できない可能性があります。したがって、Informix サーバーが対象のサーバーとは別のシステム上にある場合は、データベース構成スクリプトを Informix サーバーにコピーしてローカルで実行しなければならない場合があります。

## Oracle イベント・データベースの構成

Linux、UNIX、または Windows システム上で、Oracle データベースを使用して外部のイベント・データベースを構成することができます。

### 始める前に

Oracle イベント・データベースを構成する前に、データベースを作成しておく必要があります。また、イベント・データベースの構成コマンドを実行する前に、Oracle SID が既に存在している必要があります。イベント・データベースのデフォルトの SID は、event です。

### このタスクについて

Oracle イベント・データベースを構成するには、以下の手順を実行します。

#### 手順

1. wsadmin ツールを開始します。
2. AdminTask オブジェクトを使用して、**configEventServiceOracleDB** 管理コマンドをバッチ・モードまたは対話モードで実行します。**configEventServiceOracleDB** コマンドに最低限必要なパラメーターを以下に示します。

#### createDB

データベース構成スクリプトを管理コマンドで作成して実行する必要があるかどうかを指定します。true または false を設定します。このパラメーターを false に設定すると、スクリプトは作成されますが、実行はされません。そのため、データベース構成を完了するには、データベース構成スクリプトを実行する必要があります。

**nodeName**

イベント・サービス・データ・ソースを作成する必要があるサーバーを含むノードの名前を指定します。ノード名を指定する場合は、サーバー名も指定する必要があります。以下のいずれかを指定してください。

- ノード名およびサーバー名
- クラスター名

**serverName**

イベント・サービス・データ・ソースを作成する必要があるサーバーの名前を指定します。

**clusterName**

イベント・サービス・データ・ソースを作成する必要があるクラスターの名前を指定します。クラスター名を指定する場合は、ノード名とサーバー名を指定しないでください。

**jdbcClassPath**

JDBC ドライバーへのパスを指定します。ドライバー・ファイルへのパスのみを指定します。ファイル名は指定しないでください。

**oracleHome**

ORACLE\_HOME ディレクトリーを指定します。このパラメーターは、createDB パラメーターに true を指定した場合にのみ必要です。

**dbPassword**

データベース構成時に作成されるスキーマ・ユーザー ID に対して使用するパスワード (デフォルトのユーザー ID は ceiuser) を指定します。このパスワードは、Oracle データベース接続を認証するために使用されます。

**sysUser**

Oracle SYSUSER ユーザー ID を指定します。このユーザー ID には、SYSDBA 特権が必要です。

**sysPassword**

指定した SYSUSER ユーザー ID のパスワードを指定します。

環境によっては、その他のパラメーターが必要になる場合もあります。詳細なパラメーターのリストとその用法については、**configEventServiceOracleDB** 管理コマンドのヘルプを参照してください。

**タスクの結果**

管理コマンドにより、指定された有効範囲に必要なデータ・ソースが作成されます。createDB パラメーターに true を指定した場合、管理コマンドは、生成されたデータベース構成スクリプトも実行してデータベースを作成します。

生成されたデータベース構成スクリプトは、デフォルトで *profile\_root/databases/event/node/server/dbscripts/oracle* ディレクトリーに保管されます。(Network Deployment 環境の場合、これらのスクリプトは、デプロイメント・マネージャーのプロファイル・ディレクトリーの下に保管されます。) 任意指定の *outputScriptDir* パラメーターに値を指定した場合は、その場所にスクリプトが保管されます。これらのスクリプトを使用すると、イベント・データベースをいつでも手動で構成することができます。

## SQL サーバー・イベント・データベースの構成

Windows システムで、Microsoft SQL Server Enterprise を使用して、外部イベント・データベースを構成することができます。

### このタスクについて

SQL サーバー・イベント・データベースを構成するには、以下の手順を実行します。

#### 手順

1. SQL サーバー・データベース・サーバー・システムで、データベース・ファイルの格納に使用するディレクトリを作成します。ファイルは、デフォルトで `c:\program files\ibm\event\cei\inst1\sqlserver_data` ディレクトリに書き込まれます。別の場所を指定する必要がある場合は、生成されたデータベース構成スクリプトを編集して `ceiInstancePrefix` パラメーターの値を変更し、次にスクリプトを手動で実行する必要があります。
2. サーバー・システムで、`wsadmin` ツールを開始します。
3. `AdminTask` オブジェクトを使用して、`configEventServiceSQLServerDB` 管理コマンドをバッチ・モードまたは対話モードで実行します。

`configEventServiceSQLServerDB` コマンドに最低限必要なパラメーターを以下に示します。

#### `createDB`

データベース構成スクリプトを管理コマンドで作成して実行する必要があるかどうかを指定します。`true` または `false` を設定します。このパラメーターを `false` に設定すると、スクリプトは作成されますが、実行はされません。そのため、データベース構成を完了するには、データベース構成スクリプトを実行する必要があります。

#### `nodeName`

イベント・サービス・データ・ソースを作成する必要があるサーバーを含むノードの名前を指定します。ノード名を指定する場合は、サーバー名も指定する必要があります。以下のいずれかを指定してください。

- ノード名およびサーバー名
- クラスター名

#### `serverName`

イベント・サービス・データ・ソースを作成する必要があるサーバーの名前を指定します。サーバー名を指定する場合は、ノード名も指定する必要があります。

#### `clusterName`

イベント・サービス・データ・ソースを作成する必要があるクラスターの名前を指定します。クラスター名を指定する場合は、ノード名とサーバー名を指定しないでください。

#### `dbServerName`

SQL サーバー・データベースのサーバー名を指定します。このパラメーターは、`createDB` パラメーターに `true` を指定した場合にのみ必要です。

### **dbHostName**

SQL サーバー・データベースが稼働しているサーバーのホスト名を指定します。

### **dbPassword**

イベント・データベース表を所有するために作成されたユーザー ID に対して使用するパスワード (デフォルトのユーザー ID は `ceiuser`) を指定します。WebSphere データ・ソースは、このパスワードを使用して SQL サーバー・データベース接続を認証します。

### **saUser**

データベースとユーザーを作成および除去する特権を持つユーザー ID を指定します。このパラメーターは、`createDB` パラメーターに `true` を指定した場合にのみ必要です。

### **saPassword**

指定した SA ユーザーのパスワードを指定します。

環境によっては、その他のパラメーターが必要になる場合もあります。詳細なパラメーターのリストとその使用法については、`configEventServiceSQLServerDB` 管理コマンドのヘルプを参照してください。

## **タスクの結果**

管理コマンドにより、指定された有効範囲に必要なデータ・ソースが作成されます。`createDB` パラメーターに `true` を指定した場合、管理コマンドは、生成されたデータベース構成スクリプトも実行してデータベースを作成します。

生成されたデータベース構成スクリプトは、デフォルトで `profile_root/databases/event/node/server/dbscripts/dbscripts/sqlserver` ディレクトリーに保管されます。(Network Deployment 環境の場合、これらのスクリプトは、デプロイメント・マネージャーのプロファイル・ディレクトリーの下に保管されます。) 任意指定の `outputScriptDir` パラメーターに値を指定した場合は、その場所にスクリプトが保管されます。これらのスクリプトを使用すると、イベント・データベースをいつでも手動で構成することができます。

## **データベース構成スクリプトの手動実行**

データベース構成管理コマンドで生成されたスクリプトは、いつでも手動で実行することができます。

## **このタスクについて**

データベース構成には 2 つのステップがあります。最初に、データベース構成管理コマンドによって環境に対応したデータベース固有のスクリプトを生成し、次に、この生成されたスクリプトによってイベント・データベースとデータ・ソースを構成します。管理コマンドの実行時に `createDB` パラメーターに `true` を指定すると、両方のステップが自動的に実行されます。

ただし、`createDB` パラメーターに `false` を指定した場合は、生成されたスクリプトをターゲット・システム上で手動で実行してデータベースを構成する必要があります。以下の場合、スクリプトを手動で実行する必要があります。

- 管理コマンドを実行したシステムとは異なるシステムでイベント・データベースを構成する必要がある場合。
- イベント・データベースを後で再作成する必要がある場合。
- 生成されたスクリプトを実行する前に、そのスクリプトが使用するデフォルト・オプションを変更する必要がある場合。

### Derby イベント・データベースの手動による作成:

Derby イベント・データベース用のデータベース構成スクリプトを手動で生成するには、`cr_event_derby` コマンドを使用します。

#### このタスクについて

Derby イベント・データベース用に生成されたデータベース構成スクリプトを手動で実行するには、以下の手順を実行します。

#### 手順

1. サーバー・システムで、生成されたスクリプトが格納されているディレクトリーに移動します。デフォルトの場所は、`profile_root/databases/event/node/server/dbscripts/derby` ディレクトリーです。データベース構成管理コマンドの `outputScriptDir` パラメーターに値を指定した場合は、その場所にスクリプトが保管されています。
2. 必要に応じ、ASCII テキスト・エディターを使用して構成スクリプトを変更します。スクリプトの名前は、使用しているオペレーティング・システムによって異なります。

- **Windows** Windows システムの場合: `cr_event_derby.bat`
- **Linux** **UNIX** Linux および UNIX システムの場合: `cr_event_derby.sh`
- **i5/OS** iSeries システムの場合: `cr_event_derby`

3. オプション: iSeries システム上でデータベースを構成する場合は、Qshell インタープリターを始動します。
4. 以下の構文を使用して、データベース作成スクリプトを実行します (該当する場合は、ファイル拡張子を指定することを忘れないでください)。

```
cr_event_derby -p profile_path [-s server_name|-c cluster_name]
```

パラメーターは以下のとおりです。

#### **-p** profile\_path

WebSphere プロファイル・ディレクトリーへのパスを指定します。このパラメーターは必須です。

#### **-s** server\_name

サーバーの名前を指定します。サーバーの有効範囲でデータベースを構成する場合、このパラメーターは必須です。

#### **-c** cluster\_name

クラスターの名前を指定します。クラスターの有効範囲でデータベースを構成する場合、このパラメーターは必須です。

例えば以下のコマンドは、`profile1` プロファイルを使用して、`server1` サーバーの有効範囲に `Derby` データベースを作成します。

```
cr_event_derby -p c:%WebSphere%appserver%profiles%myprofile -s server1
```

5. サーバーを再始動します。統合ノードの場合は、**stopNode** コマンドと **startNode** コマンドを使用してノード・エージェントを停止してから、再始動する必要があります。

### 次のタスク

データベースの構成が完了したら、管理コンソールを使用してデータベース構成をテストすることができます。これを行うには、該当する `JDBC` データ・ソースにナビゲートして「**テスト接続**」オプションを選択します。

### Linux、UNIX、または Windows システム上での手動による DB2 イベント・データベースの作成:

Linux、UNIX、または Windows サーバー上で `DB2` イベント・データベース用のデータベース構成スクリプトを手動で生成するには、`cr_event_db2` を使用します。

### このタスクについて

Linux、UNIX、または Windows システムの `DB2` イベント・データベース用に生成されたデータベース構成スクリプトを手動で実行するには、以下の手順を実行します。

### 手順

1. サーバー・システムで、生成されたスクリプトが格納されているディレクトリーに移動します。デフォルトの場所は、`profile_root/databases/event/node/server/dbscripts/db2` ディレクトリーです。データベース構成管理コマンドの `outputScriptDir` パラメーターに値を指定した場合は、その場所にスクリプトが保管されています。
2. 必要に応じ、ASCII テキスト・エディターを使用して構成スクリプトを変更します。スクリプトの名前は、使用しているオペレーティング・システムによって異なります。

- **Windows** Windows システムの場合: `cr_event_db2.bat`

- **Linux** **UNIX** Linux および UNIX システムの場合: `cr_event_db2.sh`

3. 以下の構文を使用して、データベース作成スクリプトを実行します (該当する場合は、ファイル拡張子を指定することを忘れないでください)。

```
cr_event_db2 [client|server] db_user [db_password]
```

パラメーターは以下のとおりです。

#### **client|server**

データベースがクライアントとサーバーのいずれであるかを指定します。

**client** または **server** を指定する必要があります。

#### *db\_user*

データベース・ユーザー ID を指定します。このパラメーターは必須です。

### *db\_password*

データベース・ユーザーのパスワードを指定します。クライアント・データベースのパスワードを指定しないと、パスワードの入力プロンプトが表示されます。

例えば以下のコマンドは、ユーザー ID `db2admin` とパスワード `mypassword` を使用して、クライアント・データベース用の DB2 イベント・データベースを作成します。

```
cr_event_db2 client db2admin mypassword
```

4. サーバーを再始動します。統合ノードの場合は、**stopNode** コマンドと **startNode** コマンドを使用してノード・エージェントを停止してから、再始動する必要があります。

### 次のタスク

データベースの構成が完了したら、管理コンソールを使用してデータベース構成をテストすることができます。これを行うには、該当する JDBC データ・ソースにナビゲートして「**テスト接続**」オプションを選択します。

### **z/OS システム上での手動による DB2 イベント・データベースの作成:**

Linux、UNIX、または Windows クライアント・システムを使用して、z/OS システム上で DB2 イベント・データベース用のデータベース構成スクリプトを手動で生成するには、`cr_event_db2zos` を使用します。

### このタスクについて

Linux、UNIX、または Windows クライアント・システムを使用して、z/OS システムの DB2 イベント・データベース用に生成されたデータベース構成スクリプトを手動で実行するには、以下の手順を実行します。

### 手順

1. サーバー・システムで、生成されたスクリプトが格納されているディレクトリーに移動します。デフォルトの場所は、`profile_root/databases/event/node/server/dbscripts/db2zos` です。データベース構成管理コマンドの `outputScriptDir` パラメーターに値を指定した場合は、その場所にスクリプトが保管されています。
2. 必要に応じ、ASCII テキスト・エディターを使用して構成スクリプトを変更します。スクリプトの名前は、使用しているオペレーティング・システムによって異なります。

- **Windows** Windows システムの場合: `cr_event_db2zos.bat`

- **Linux** **UNIX** Linux および UNIX システムの場合: `cr_event_db2zos.sh`

3. 以下の構文を使用して、データベース作成スクリプトを実行します (該当する場合は、ファイル拡張子を指定することを忘れないでください)。

```
cr_event_db2zos [dbName=db_name] db_user [db_password]
```

パラメーターは以下のとおりです。

### *db\_name*

使用するデータベース名を指定します。このパラメーターは任意指定です。データベース名を指定しなかった場合は、名前が自動的に生成されます。

### *db\_user*

使用するためのデータベース・ユーザー ID を指定します。このパラメーターは必須です。

### *db\_password*

データベース・ユーザーのパスワードを指定します。パスワードを指定しないと、DB2 データベースによってパスワードの入力プロンプトが表示されません。

例えば以下のコマンドは、ユーザー ID `db2admin` とパスワード `mypassword` を使用して、`event` という名前の DB2 イベント・データベースを作成します。

```
cr_event_db2zos dbName=client db2admin mypassword
```

4. サーバーを再始動します。統合ノードの場合は、**stopNode** コマンドと **startNode** コマンドを使用してノード・エージェントを停止してから、再始動する必要があります。

## 次のタスク

データベースの構成が完了したら、管理コンソールを使用してデータベース構成をテストすることができます。これを行うには、該当する JDBC データ・ソースにナビゲートして「**テスト接続**」オプションを選択します。

### iSeries システム上での手動による DB2 イベント・データベースの作成:

iSeries システム上で DB2 イベント・データベース用のデータベース構成スクリプトを手動で生成するには、`cr_event_db2iseries` コマンドを使用します。

### このタスクについて

iSeries システム上の DB2 イベント・データベース用に生成されたデータベース構成スクリプトを手動で実行するには、以下の手順を実行します。

### 手順

1. サーバー・システムで、生成されたスクリプトが格納されているディレクトリーに移動します。デフォルトの場所は、`profile_root/databases/event/node/server/dbscripts/db2iseries` ディレクトリーです。データベース構成管理コマンドの `outputScriptDir` パラメーターに値を指定した場合は、その場所にスクリプトが保管されています。
2. 必要に応じ、ASCII テキスト・エディターを使用して `cr_event_db2iseries` スクリプトを変更します。
3. Qshell インタープリターを開始します。
4. 以下の構文を使用して、データベース作成スクリプトを実行します。

```
cr_event_db2iseries db_user db_password
```

パラメーターは以下のとおりです。

*db\_user*

データベース・ユーザー ID を指定します。このパラメーターは必須です。

*db\_password*

データベース・ユーザーのパスワードを指定します。このパラメーターは必須です。

例えば以下のコマンドは、ユーザー ID db2admin とパスワード mypassword を使用して、DB2 イベント・データベースを作成します。

```
cr_event_db2iseries db2admin mypassword
```

5. サーバーを再始動します。統合ノードの場合は、**stopNode** コマンドと **startNode** コマンドを使用してノード・エージェントを停止してから、再始動する必要があります。

### 次のタスク

データベースの構成が完了したら、管理コンソールを使用してデータベース構成をテストすることができます。これを行うには、該当する JDBC データ・ソースにナビゲートして「テスト接続」オプションを選択します。

### Informix イベント・データベースの手動による作成:

データベース構成管理コマンドで生成されたスクリプトは、いつでも手動で実行することができます。

### このタスクについて

Informix イベント・データベース用に生成されたデータベース構成スクリプトを手動で実行するには、以下の手順を実行します。

### 手順

1. サーバー・システムで、生成されたスクリプトが格納されているディレクトリーに移動します。デフォルトの場所は、*profile\_root/databases/event/node/server/dbscripts/informix* ディレクトリーです。データベース構成管理コマンドの *outputScriptDir* パラメーターに値を指定した場合は、その場所にスクリプトが保管されています。
2. 必要に応じ、ASCII テキスト・エディターを使用して構成スクリプトを変更します。スクリプトの名前は、使用しているオペレーティング・システムによって異なります。
  - **Windows** Windows システムの場合: *cr\_event\_informix.bat*
  - **Linux** **UNIX** Linux および UNIX システムの場合:  
*cr\_event\_informix.sh*
3. パラメーターを指定せずに、データベース作成スクリプトを実行します。
4. サーバーを再始動します。統合ノードの場合は、**stopNode** コマンドと **startNode** コマンドを使用してノード・エージェントを停止してから、再始動する必要があります。

## 次のタスク

データベースの構成が完了したら、管理コンソールを使用してデータベース構成をテストすることができます。これを行うには、該当する JDBC データ・ソースにナビゲートして「テスト接続」オプションを選択します。

### Oracle イベント・データベースの手動による作成:

Oracle イベント・データベース用のデータベース構成スクリプトを手動で生成するには、`cr_event_oracle` コマンドを使用します。

### このタスクについて

Oracle イベント・データベース用に生成されたデータベース構成スクリプトを手動で実行するには、以下の手順を実行します。

### 手順

1. サーバー・システムで、生成されたスクリプトが格納されているディレクトリーに移動します。デフォルトの場所は、`profile_root/databases/event/node/server/dbscripts/oracle` ディレクトリーです。データベース構成管理コマンドの `outputScriptDir` パラメーターに値を指定した場合は、その場所にスクリプトが保管されています。
2. 必要に応じ、ASCII テキスト・エディターを使用して構成スクリプトを変更します。スクリプトの名前は、使用しているオペレーティング・システムによって異なります。
  - **Windows** Windows システムの場合: `cr_event_oracle.bat`
  - **Linux** **UNIX** Linux および UNIX システムの場合: `cr_event_oracle.sh`
3. 以下の構文を使用して、データベース作成スクリプトを実行します (該当する場合は、ファイル拡張子を指定することを忘れないでください)。

```
cr_event_oracle password sys_user
  sys_password [sid=sid]
  [oracleHome=oracle_home]
```

パラメーターは以下のとおりです。

#### *password*

スキーマ・ユーザー ID のパスワードを指定します。このパラメーターは必須です。

#### *sys\_user*

Oracle データベースの SYSDBA 特権を持つユーザー ID (通常はシステム・ユーザー) を指定します。このパラメーターは必須です。

#### *sys\_password*

指定したシステム・ユーザー ID のパスワードを指定します。このユーザー ID でパスワードを使用しない場合は、`none` を入力します。

#### *sid=sid*

Oracle システム ID (SID) を指定します。このパラメーターはオプションです。

### **oracleHome=oracle\_home**

Oracle ホーム・ディレクトリーを指定します。このパラメーターは任意指定です。値を指定しない場合は、生成されたパスが使用されます。

例えば以下のコマンドは、スキーマ・ユーザー ID **auser** とシステム・ユーザー ID **sys** を使用して、Oracle イベント・データベースを作成します。

```
cr_event_oracle auser sys syspassword sid=event oracleHome=c:\oracle
```

4. サーバーを再始動します。統合ノードの場合は、**stopNode** コマンドと **startNode** コマンドを使用してノード・エージェントを停止してから、再始動する必要があります。

### 次のタスク

データベースの構成が完了したら、管理コンソールを使用してデータベース構成をテストすることができます。これを行うには、該当する JDBC データ・ソースにナビゲートして「**テスト接続**」オプションを選択します。

### SQL サーバー・イベント・データベースの手動による作成:

SQL サーバー・イベント・データベース用のデータベース構成スクリプトを手動で生成するには、**cr\_event\_mssql** コマンドを使用します。

### このタスクについて

SQL サーバー・イベント・データベース用に生成されたデータベース構成スクリプトを手動で実行するには、以下の手順を実行します。

### 手順

1. サーバー・システムで、生成されたスクリプトが格納されているディレクトリーに移動します。デフォルトの場所は、*profile\_root/databases/event/node/server/dbscripts/sqlserver* ディレクトリーです。データベース構成管理コマンドの **outputScriptDir** パラメーターに値を指定した場合は、その場所にスクリプトが保管されています。
2. 必要に応じ、ASCII テキスト・エディターを使用して **cr\_event\_mssql.bat** スクリプトを変更します。
3. 以下の構文を使用して、データベース作成スクリプトを実行します。

```
cr_event_mssql user_id password [server=server] sauser=sa_user  
sapassword=sa_password
```

パラメーターは以下のとおりです。

#### *user\_id*

作成されたテーブルを所有する SQL サーバー・ログイン・ユーザー ID を指定します。データベースに対して JDBC 接続を確立できるようにするため、このユーザー ID は SQL サーバー内に作成する必要があります。(JDBC ドライバーは、トラステッド接続をサポートしません。)

#### *password*

作成する新しいログイン・ユーザー ID のパスワードを指定します。

**server=server**

SQL サーバー・データベースを含むサーバーの名前を指定します。このパラメーターは任意指定です。デフォルト値は、ローカル・ホストです。

**sauser=sa\_user**

sa ユーザー ID を指定します。このユーザー ID には、データベースとユーザー・ログインを作成するための特権が必要です。

**sapassword=sa\_password**

sa パスワードを指定します (混在認証モードを使用する場合)。sa ユーザー ID にパスワードが設定されていない場合は、**sapassword=** に値を指定しないでください。トラステッド接続を使用する場合は、このパラメーターを省略します。

例えば以下のコマンドは、ログイン・ユーザー ID `userid` を使用して、SQL サーバー・イベント・データベースを作成します。

```
cr_event_mssql userid apassword server=myserver sauser=sa sapassword=sapassword
```

4. サーバーを再始動します。統合ノードの場合は、**stopNode** コマンドと **startNode** コマンドを使用してノード・エージェントを停止してから、再始動する必要があります。

## 次のタスク

データベースの構成が完了したら、管理コンソールを使用してデータベース構成をテストすることができます。これを行うには、該当する JDBC データ・ソースにナビゲートして「**テスト接続**」オプションを選択します。

## 以前のバージョンからのイベント・データベースのアップグレード

以前のバージョンの Common Event Infrastructure からマイグレーションした状態でイベント永続性を使用している場合は、既存のイベント・データベースのアップグレードが必要になることがあります。

### このタスクについて

イベント・データベースのアップグレードが必要になるのは、Common Event Infrastructure バージョン 5.1 以前からマイグレーションする場合です。

データベースのアップグレード・プロセスを使用すると、現在のイベント・データを保持したまま、既存のイベント・データベースのスキーマとメタデータが現行バージョンにアップグレードされます。

データベースのアップグレード・スクリプトを使用すると、既存のイベント・データベースのスキーマとメタデータが現行バージョンにアップグレードされます。

**サポートされないバージョン:** Common Event Infrastructure 6.0 でサポートされなくなったバージョンのデータベース・ソフトウェアをイベント・データベースで使用している場合は、そのデータベース・ソフトウェア用の適切な手順を使用して、サポート対象のバージョンへデータベースをあらかじめマイグレーションしておく必要があります。次に、イベント・データベースのアップグレード・プロセスに従って、データベースをアップグレードします。

### Cloudscape から Derby へのイベント・データベースのアップグレード:

既存の Cloudscape® イベント・データベースが存在する場合は、そのデータベースをアップグレードして Derby データベースを使用する必要があります。

### このタスクについて

Cloudscape イベント・データベースを Derby にアップグレードするには、以下の手順を実行します。

#### 手順

1. *profile\_root/bin* ディレクトリーに移動します。
2. 次のように、現在のオペレーティング・システム用の Derby マイグレーション・スクリプトを実行します。

- Windows システムの場合:

```
eventMigrateDerby db_dir [generateDDLOnly]
```

- Linux および UNIX システムの場合:

```
eventMigrateDerby.sh db_dir [generateDDLOnly]
```

パラメーターは以下のとおりです。

#### *db\_dir*

既存の Cloudscape イベント・データベースが入っているディレクトリーへのパスを指定します。このパラメーターは必須です。

#### **generateDDLOnly**

データベースを実行せずにアップグレードするための DDL スクリプトを生成するかどうかを指定します。データベースを後から手動でアップグレードする場合は、このパラメーターを指定します。このパラメーターは任意指定です。デフォルトの場合、DDL スクリプトが生成されて実行されます。

### タスクの結果

Derby マイグレーション・スクリプトは、既存の Cloudscape イベント・データベースのバックアップ・コピーを *db\_dir.bak* ディレクトリーに作成した後、2 つの DDL スクリプトをデータベース・ディレクトリー内に作成します。

- *event\_newDDL.sql*
- *eventcatalog\_newDDL.sql*

*generateDDLOnly* パラメーターを指定しなかった場合、マイグレーション・スクリプトはこれらの DDL スクリプトを自動的に実行して、Derby へのアップグレードを実行します。

#### 例

次の例では、Windows システムの *c:\databases\cloudscapeEventDB* ディレクトリーにある既存の Cloudscape イベント・データベースをアップグレードします。

```
eventMigrateDerby c:\databases\cloudscapeEventDB
```

以前のバージョンからの DB2 イベント・データベースのアップグレード:

Linux、UNIX、または Windows システムに Common Event Infrastructure バージョン 5.1 の既存の DB2 イベント・データベースがある場合は、現行バージョンにアップグレードする必要があります。

## このタスクについて

Linux または UNIX システムで DB2 イベント・データベースをアップグレードするには、以下の手順を実行します。

### 手順

1. 既存のイベント・データベースのバックアップ・コピーを作成します。
2. `profile_root/bin` ディレクトリに移動します。
3. 次のように、現在のオペレーティング・システム用の DB2 アップグレード・スクリプトを実行します。

- **Windows** Windows システムの場合:

```
eventUpgradeDB2 runUpgrade=[true|false] dbUser=user  
[dbName=name] [dbPassword=pw]  
[dbNode=node] [scriptDir=dir]
```

- **Linux** **UNIX** Linux および UNIX システムの場合:

```
eventUpgradeDB2.sh runUpgrade=[true|false] dbUser=user  
[dbName=name] [dbPassword=pw]  
[dbNode=node] [scriptDir=dir]
```

通常、必要なパラメーターは以下のとおりです。

### runUpgrade

生成された DDL スクリプトをアップグレード・スクリプトで自動的に実行してデータベースをアップグレードするかどうかを指定します。このパラメーターは必須です。データベースを後で、または別のシステム上で手動でアップグレードする場合は、`false` を指定します。

### dbUser

使用する DB2 ユーザー ID を指定します。このパラメーターは必須です。

### dbName

DB2 データベース名を指定します。デフォルトのイベント・データベース名は `event` です。`runUpgrade=true` を指定した場合、このパラメーターは必須です。

### dbPassword

指定した DB2 ユーザー ID のパスワードを指定します。このパラメーターは任意指定です。パスワードを指定しなかった場合、DB2 によってパスワードの入力プロンプトが表示されます。

### dbNode

データベース・ノード名を指定します。DB2 クライアント・システムからアップグレード・スクリプトを実行する場合、このパラメーターは必須です。

### scriptDir

生成された DDL スクリプトを格納するディレクトリを指定します。このパラメーターは任意指定です。ディレクトリを指定しなかった場合は、`¥eventDBUpgrade¥db2` ディレクトリにスクリプトが保管されます。

詳細なパラメーターのリストとその使用方法を確認するには、パラメーターを指定せずに **eventUpgradeDB2** スクリプトを実行します。

## タスクの結果

アップグレード・スクリプトは、イベント・データベースをアップグレードするために必要な DDL スクリプトを生成します。runUpgrade=true を指定した場合は、DDL スクリプトが自動的に実行されてデータベースがアップグレードされます。

## 例

Windows システムの既存の DB2 データベースをアップグレードする例を以下に示します。

```
eventUpgradeDB2 runUpgrade=true dbUser=db2inst1 dbName=event
```

## 次のタスク

runUpgrade=false を指定した場合は、データベース・システム上で DDL スクリプトを手動で実行してデータベースをアップグレードする必要があります。

以前のバージョンからの DB2 for z/OS イベント・データベースのアップグレード:

z/OS システムに Common Event Infrastructure バージョン 5.1 の既存の DB2 イベント・データベースが存在する場合は、現行バージョンにアップグレードする必要があります。

## このタスクについて

z/OS システムの DB2 イベント・データベースをアップグレードするには、以下の手順を実行します。

## 手順

1. 既存のイベント・データベースのバックアップ・コピーを作成します。
2. *profile\_root/bin* ディレクトリーに移動します。
3. 現在のクライアント・オペレーティング・システム用の DB2 for z/OS アップグレード・スクリプトを以下のように実行します。

- **Windows** Windows システムの場合:

```
eventUpgradeDB2ZOS runUpgrade=[true|false] dbUser=user  
[dbName=name] [dbPassword=pw]  
[scriptDir=dir] storageGroup=group  
bufferPool14K=4kbufpool bufferPool18k=8kbufpool  
bufferPool16K=16kbufpool
```

- **Linux** **UNIX** Linux および UNIX システムの場合:

```
eventUpgradeDB2ZOS.sh runUpgrade=[true|false] dbUser=user  
[dbName=name] [dbPassword=pw]  
[scriptDir=dir] storageGroup=group  
bufferPool14K=4kbufpool bufferPool18k=8kbufpool  
bufferPool16K=16kbufpool
```

通常、必要なパラメーターは以下のとおりです。

**runUpgrade**

生成された DDL スクリプトをアップグレード・スクリプトで自動的に実行してデータベースをアップグレードするかどうかを指定します。このパラメーターは必須です。データベースを後で、または別のシステム上で手動でアップグレードする場合は、false を指定します。

**z/OS システム:** このパラメーターは、ネイティブの z/OS システムでは無視されます。生成された DDL スクリプトの自動実行は、クライアント・システムでのみサポートされます。

**dbUser**

使用する DB2 ユーザー ID を指定します。このパラメーターは必須です。

**dbName**

DB2 データベース名を指定します。デフォルトのイベント・データベース名は event です。runUpgrade=true を指定した場合、このパラメーターは必須です。

**dbPassword**

指定した DB2 ユーザー ID のパスワードを指定します。このパラメーターは任意指定です。パスワードを指定しなかった場合、DB2 によってパスワードの入力プロンプトが表示されます。

**scriptDir**

生成された DDL スクリプトを格納するディレクトリーを指定します。このパラメーターは任意指定です。ディレクトリーを指定しない場合は、`¥eventDBUpgrade¥db2zos` ディレクトリーにスクリプトが保管されます。

**storageGroup**

ストレージ・グループの名前を指定します。このパラメーターは必須です。

**bufferPool4K**

4K バッファ・プールの名前を指定します。このパラメーターは必須です。

**bufferPool8K**

8K バッファ・プールの名前を指定します。このパラメーターは必須です。

**bufferPool16K**

16K バッファ・プールの名前を指定します。このパラメーターは必須です。

詳細なパラメーターのリストとその使用方法を確認するには、パラメーターを指定せずに **eventUpgradeDB2ZOS** スクリプトを実行します。

**タスクの結果**

アップグレード・スクリプトにより、イベント・データベースのアップグレードに必要な DDL スクリプトが生成されます。クライアント・システムで runUpgrade=true を指定した場合は、DDL スクリプトが自動的に実行されてデータベースがアップグレードされます。

## 例

Windows クライアント・システムから DB2 for z/OS イベント・データベースをアップグレードする例を以下に示します。

```
eventUpgradeDB2ZOS runUpgrade=true dbUser=db2inst1 dbName=event
storageGroup=sysdeflt bufferPool4K=BP9 bufferPool8K=BP8K9 bufferPool16K=BP16K9
```

## 次のタスク

`runUpgrade=false` を指定した場合、または z/OS システム上でアップグレード・スクリプトを実行した場合は、SQL Processor Using File Input (SPUFI) 機能を使用して、生成された DDL スクリプトを z/OS システムで手動で実行する必要があります。この手順により、データベースのアップグレードが完了します。

## Oracle イベント・データベースのバージョン 5 からのアップグレード:

Common Event Infrastructure バージョン 5.1 の既存の Oracle イベント・データベースを使用している場合は、それを現行バージョンにアップグレードする必要があります。

## このタスクについて

Oracle イベント・データベースをアップグレードするには、以下の手順を実行します。

## 手順

1. 既存のイベント・データベースのバックアップ・コピーを作成します。
2. `profile_root/bin` ディレクトリに移動します。
3. 次のように、現在のオペレーティング・システム用の Oracle アップグレード・スクリプトを実行します。

- Windows システムの場合:

```
eventUpgradeOracle runUpgrade=[true|false] schemaUser=schemauser
[oracleHome=dir] [dbName=name]
[dbUser=sysuser] [dbPassword=pw]
[scriptDir=dir]
```

- Linux および UNIX システムの場合:

```
eventUpgradeOracle.sh runUpgrade=[true|false] schemaUser=schemauser
[oracleHome=dir] [dbName=name]
[dbUser=sysuser] [dbPassword=pw]
[scriptDir=dir]
```

通常、必要なパラメーターは以下のとおりです。

### runUpgrade

生成された DDL スクリプトをアップグレード・スクリプトで自動的に実行してデータベースをアップグレードするかどうかを指定します。このパラメーターは必須です。データベースを後で、または別のシステム上で手動でアップグレードする場合は、`false` を指定します。

### schemaUser

データベース表を所有する Oracle ユーザー ID を指定します。このパラメーターは必須です。

**oracleHome**

Oracle ホーム・ディレクトリーを指定します。runUpgrade=true を指定した場合、このパラメーターは必須です。

**dbName**

Oracle データベース名を指定します。デフォルトのイベント・データベース名は event です。runUpgrade=true を指定した場合、このパラメーターは必須です。

**dbUser**

Oracle システム・ユーザー ID を指定します。runUpgrade=true を指定した場合、このパラメーターは必須です。

**dbPassword**

システム・ユーザー ID のパスワードを指定します。システム・ユーザー ID にパスワードが設定されていない場合は、このパラメーターを指定しないでください。

**scriptDir**

生成された DDL スクリプトを格納するディレクトリーを指定します。このパラメーターは任意指定です。ディレクトリーを指定しなかった場合は、`¥eventDBUpgrade¥oracle` ディレクトリーにスクリプトが保管されます。

詳細なパラメーターのリストとその使用方法を確認するには、パラメーターを指定せずに **eventUpgradeOracle** スクリプトを実行します。

**タスクの結果**

アップグレード・スクリプトにより、イベント・データベースのアップグレードに必要な DDL スクリプトが生成されます。runUpgrade=true を指定した場合は、DDL スクリプトが自動的に実行されてデータベースがアップグレードされます。

**例**

Windows システムの既存の Oracle データベースをアップグレードする例を以下に示します。

```
eventUpgradeOracle runUpgrade=true schemaUser=cei  
dbName=event dbUser=sys
```

**次のタスク**

runUpgrade=false を指定した場合は、データベース・システム上で DDL スクリプトを手動で実行してデータベースをアップグレードする必要があります。

## WebSphere Business Monitor 用のクロスセル Common Event Infrastructure 構成

Common Event Infrastructure (CEI) イベントを生成するリモート・サーバーと WebSphere Business Monitor サーバーの間に、接続を構成する必要があります。

**このタスクについて**

マルチサーバー環境で複数のセルを横断した CEI の構成方法について詳しくは、IBM WebSphere Business Monitor インフォメーション・センターの、トピック『

WebSphere Business Monitor を使用するようにリモート CEI サーバーを構成』を参照してください。

### 関連情報

 IBM WebSphere Business インフォメーション・センター

---

## WebSphere Business Integration Adapter の構成

WebSphere Business Integration Adapter と WebSphere Process Server を連携させるには、インストールおよび構成の手順を実行する必要があります。

### 手順

1. アダプターをインストールします。
  - a. WebSphere Business Integration Adapters のインストール方法が説明されている『WebSphere Business Integration Adapters 製品のインストール』の手順に従います。
  - b. 『WebSphere Business Integration Adapters の資料』にアクセスした後、「アダプター」の下のナビゲーションを展開して、ご使用のアダプターを表示します。追加のインストール・タスクがある場合はそれが表示されるので、ご使用のアダプターに必要な特定の手順が他にあれば、その手順に従います。
2. アダプターを構成します。『WebSphere Business Integration Adapters の資料』にアクセスした後、「アダプター」の下のナビゲーションを展開して、ご使用のアダプターを表示したら、そのアダプターの構成の指示に従います。構成手順を実行すると、必要な成果物が生成されます。
3. 「モジュールの開発とデプロイ」(PDF) の『>実動サーバーへのモジュールのインストール』の指示に従って、アプリケーション EAR ファイルをインストールします。

## WebSphere Business Integration Adapter の管理のセットアップ

WebSphere Business Integration Adapter を管理できるようにするには、いくつかの管理機能を実行する必要があります。

### 始める前に

- 『WebSphere Business Integration Adapters 製品のインストール』に示されている手順を理解している必要があります。
- アプリケーション EAR ファイルをインストールして、このタスクを実行する前に WebSphere Business Integration Adapter に必要な成果物を作成する必要があります。

### このタスクについて

WebSphere Business Integration Adapter を管理するには、以下の管理機能を実行します。

### 手順

1. キュー接続ファクトリーを作成します。

管理コンソールの最上位から、以下の手順を実行します。

- a. 「リソース」を展開します。
- b. 「JMS」を展開します。
- c. 「キュー接続ファクトリー」を選択します。
- d. 管理入出力キューの有効範囲レベルに対応する有効範囲レベルを選択します。
- e. 「新規」をクリックして、新規 JMS キュー接続ファクトリーを作成します。
- f. JMS リソース・プロバイダーを選択します。「デフォルトのメッセージング・プロバイダー」を選択して「OK」をクリックします。
- g. 以下を例外として、すべてのデフォルト値を受け入れます。
  - 名前: QueueCF
  - JNDI 名: jms/QueueCF
  - バス名: ご使用のバス名
- h. 「OK」をクリックして、新しい JMS キュー接続ファクトリーの作成を完了します。

「JMS キュー接続ファクトリー」パネルの上部にメッセージ・ウィンドウが表示されます。

- i. メッセージ・ウィンドウで「保管」をクリックして、ローカル構成レベルで行った変更をマスター構成に適用します。
2. WebSphere Business Integration Adapter リソースを作成します。

管理コンソールの最上位から、以下の手順を実行します。

- a. 「リソース」を展開します。
- b. 「WebSphere Business Integration Adapter」パネルを開きます。

「WebSphere Business Integration Adapters」を選択します。
- c. 「新規」をクリックして、新しい WebSphere Business Integration Adapter を作成します。
- d. 以下を例外として、すべてのデフォルト値を受け入れます。
  - 名前: EISConnector
  - キュー接続ファクトリー JNDI 名: jms/QueueCF
  - 管理入力キュー JNDI 名: *connectorName/AdminInQueue*
  - 管理出力キュー JNDI 名: *connectorName/AdminOutQueue*
- e. 「OK」をクリックして、 WebSphere Business Integration Adapter の作成を完了します。

「WebSphere Business Integration Adapters」パネルの上部にメッセージ・ウィンドウが表示されます。

- f. メッセージ・ウィンドウで「保管」をクリックして、ローカル構成レベルで行った変更をマスター構成に適用します。
3. WebSphere Business Integration Adapter サービスを使用可能にします。

管理コンソールの最上位から、以下の手順を実行します。

- a. 「サーバー」を展開します。
- b. 「アプリケーション・サーバー」を選択します。
- c. サーバー・リストから、WebSphere Business Integration Adapter サービスを使用可能にするサーバーを選択します。

対象となるリソースをホストするサーバーの名前をクリックします。

- d. 「**WebSphere Business Integration Adapter サービス**」を選択します。

「構成」タブの副見出し「ビジネス・インテグレーション」の下で「**WebSphere Business Integration Adapter サービス**」を選択します。

- e. 「サーバー始動時にサービスを使用可能にする」チェック・ボックスが選択されていることを確認します。
- f. 「**OK**」をクリックします。

「WebSphere Business Integration Adapters」パネルの上部にメッセージ・ウィンドウが表示されます。

- g. WebSphere Business Integration Adapter サービスを使用可能とする予定の各サーバーごとに、ステップ 3c から 3f を繰り返します。
- h. メッセージ・ウィンドウで「**保管**」をクリックして、ローカル構成レベルで行った変更をマスター構成に適用します。

**注:** WebSphere Business Integration Adapter サービスを使用可能または使用不可にする場合、変更を有効にするためにサーバーを再始動する必要があります。

## 第 9 章 デプロイメント環境の検証

実動アプリケーションを新しい環境に移動する前に、テストを行ってすべてのコンポーネントが正常に動作することを確認してください。

### 始める前に

『デプロイメント環境の実装』に記載されている説明に従って、デプロイメント環境の実装を完了します。

1. ソフトウェアをインストールする
2. デプロイメント・マネージャーをホストするノードを構成する
3. ノードを構成する
4. ノードをデプロイメント・マネージャーに統合する
5. デプロイメント環境に機能を提供するノードをクラスター化する

### このタスクについて

デプロイメント環境の検証方法は、実装した環境が IBM 提供のデプロイメント環境であるかカスタム・デプロイメント環境であるかによって異なります。IBM 提供のデプロイメント環境は、管理コンソールで単一のパネルから管理できます。カスタム・デプロイメント環境は、管理コンソールで手動で作成し管理する必要があります。

### 手順

1. 検証するデプロイメント環境のタイプを識別します。

この情報は、元の計画に基づいて用意してください。

2. デプロイメント環境を開始します。

デプロイメント環境のタイプ	始動方法
IBM 提供のパターン	「システム管理」>「デプロイメント環境」>「デプロイメント環境構成」（『デプロイメント環境の開始と停止』の説明を参照してください）。
カスタム	「サーバー」>「クラスター」（『カスタム・デプロイメント環境の始動の検証 (Verifying a custom deployment environment starts)』を参照してください）。 注: デプロイメント環境に定義されているすべてのサーバーとクラスターを始動する必要があります。

3. テスト・アプリケーションをインストールします。
4. ルーティング用のテスト・アプリケーションを構成します。
5. テスト・アプリケーションを開始します。

6. テスト・アプリケーションを実行し、その結果を検証します。

## 次のタスク

実動アプリケーションをインストールします。

---

## アプリケーション・デプロイメント・ターゲット・クラスターの始動の確認

アプリケーション・デプロイメント・ターゲット・クラスターが始動可能なことを確認するには、デプロイメント環境の 3 つのクラスターをすべて始動する必要があります。このセクションでは、3 つのクラスターで構成されるデプロイメント環境についての事例を説明します。

### 始める前に

メッセージング・エンジン、Common Event Infrastructure (CEI) イベント・サーバー・アプリケーション、およびアプリケーション・デプロイメント・ターゲットのクラスターを作成して構成する必要があります。

### このタスクについて

アプリケーション・デプロイメント・クラスターが始動可能なことを確認するには、各クラスターを順に始動します。

注:

- ここでは、トポロジーで 3 つのクラスターを構成しており、それぞれ MECluster、SupportCluster、AppCluster という名前になっているとして説明します。これらは実際のクラスター名に置き換えてください。また、デプロイメント環境に追加のクラスターがある場合は、該当するステップを繰り返してください。
- サーバーを初めて始動するときは、システムがデータベース表とスキーマを作成するため、2 回目以降の始動時よりも時間がかかります。

### 手順

1. デプロイメント・マネージャーの管理コンソールで「サーバー」を展開し、「クラスター」を選択します。
2. クラスターを開始します。
  - a. 「MECluster」の横にあるチェック・ボックスを選択します。
  - b. 「開始」を選択し、MECluster が始動して緑色の矢印が表示されるまで待ちます。
  - c. 「SupportCluster」の横にあるチェック・ボックスを選択します。
  - d. 「開始」を選択し、SupportCluster が始動して緑色の矢印がもう 1 つ表示されるまで待ちます。
  - e. 「AppCluster」の横にあるチェック・ボックスを選択します。
  - f. 「開始」を選択し、AppCluster が始動して緑色の矢印がもう 1 つ表示されるまで待ちます。
3. メッセージング・バスをクリックします。
  - a. すべてのクラスターが開始するまで待ちます。

- b. 「サービス統合」 → 「バス」の順にクリックします。
- c. バスごとに、メッセージング・エンジンが稼働していることを確認します。
  - 1) バス名を選択します。
  - 2) 「ローカル・トポロジ」をクリックしてバス・トポロジを表示します。
  - 3) メッセージング・エンジンの状況が表示されるまでバスを拡張します。
4. クラスタ・メンバーをホストするノードの profile ディレクトリーの logs サブディレクトリーにある、クラスタ・メンバーの SystemOut.log および SystemErr.log ファイルを確認します。エラーがないことを確認し、「サーバー AppCluster\_member1 が e-business 用に開かれています (Server AppCluster\_member1 is open for e-business)」または「サーバー AppCluster\_member2 が e-business 用に開かれています (Server AppCluster\_member2 is open for e-business)」という行を探します。これらの行があれば、クラスタは正常に始動しています。エラーがある場合は、訂正してから続行してください。

## 次のタスク

エラーを訂正した後は、ホストの別名を構成します。

**注:** 構成エラーを訂正した後は、必ずクラスタを停止してから再始動して、構成の変更を有効にする必要があります。

**トラブルシューティング・ヒント:** ログを調べていると、メッセージング・エンジンが特定のバスを検出できなかったために起動に失敗したことを示すメッセージが見つかることがあります。このメッセージは、クラスタを再始動すると除去されます。

---

## テスト・アプリケーションのインストール

テスト・アプリケーションをインストールして、デプロイメント環境を検査するプロセスを開始します。

### 始める前に

- 完全なデプロイメント環境を作成およびインストールする必要があります。
- デプロイメント・マネージャー管理コンソールにログインします。

### このタスクについて

BPCIVTApp (Business Process Choreographer Installation Verification Test) と呼ばれる、WebSphere Process Server に同梱されて提供されたアプリケーションを使用して、WebSphere Process Server 環境が正常にインストールおよび構成されていることを確認します。最初に、アプリケーションをインストールする必要があります。

このアプリケーションのインストールの詳細については、『Business Process Choreographer の処理の検証』を参照してください。管理コンソールからアプリケーションをインストールする方法の詳細については、『コンソールでのアプリケーション・ファイルのインストール』を参照してください。

注: ビジネス・プロセスとヒューマン・タスクを使用可能にしていない場合は、BPCIVTApp を使用してデプロイメント環境をテストすることはできません。この場合は、ビジネス・ルールとセレクターを使用してデプロイメント環境を動作させる Service Component Architecture アプリケーションをインストールして、実行する必要があります。アプリケーションに合わせてデプロイメント環境をテストするようにプロセスを変更します。

#### 手順

1. 管理コンソールで、「アプリケーション」>「新規アプリケーションのインストール」を選択します。
2. 「ローカル・ファイル・システム」が選択されていることを確認し、ファイル bpcivt.ear を参照します。このファイルは、`install_root/installableApps` ディレクトリにあります。
3. ファイル bpcivt.ear を選択し、「オープン」を選択します。
4. 以降のステップでは、デフォルト構成を使用することを想定しています。以降のパネルでは、「要約」ページが表示されるまで「次へ」を選択します。これらの各ステップでは、ほかのトピックで説明されているように、各種オプションを選択し、モジュールをサーバーにマップします。テスト用には、このモジュールをアプリケーション・デプロイメント・ターゲット・クラスターにマップします。

注: スタンドアロン・サーバーでは、モジュールをアプリケーション・ターゲット・クラスターにマップする必要はありません。

5. 「終了」を選択します。
6. 「保管」および「同期化」を選択します。

#### 次のタスク

## ルーティング用テスト・アプリケーションの構成

以下の手順を使用して、ルーティング用のテスト・アプリケーションを構成します。

#### 始める前に

テスト・アプリケーションをインストールする必要があります。

#### このタスクについて

最初にアプリケーションを構成してから、プラグイン構成ファイルを生成します。

注: 説明では、クラスター名 AppCluster および Web サーバー名 Webserver1 を使用します。テスト・アプリケーションでヒューマン・タスクまたはビジネス・プロセスを使用する場合は、Business Process Choreographer をご使用のアプリケーション・クラスターに既に構成していることを確認してください。

#### 手順

1. Web サーバーおよびデプロイメント・ターゲットを識別するために実行するアプリケーション (複数可) を以下のように構成します。

- a. 管理コンソールで、「アプリケーション」>「エンタープライズ・アプリケーション」を選択します。
  - b. アプリケーションの名前を選択します。
  - c. 「追加プロパティ」で、「モジュールをサーバーにマップ」を選択します。
  - d. 「クラスターおよびサーバー」の下の選択リストで、*Webserver1* (事前に構成した Web サーバー) および *AppCluster* (アプリケーション・デプロイメント・ターゲット) を選択します。
  - e. 「適用」を選択し、次に「OK」を選択します。
  - f. デプロイメント環境に対してすべての Web サーバーおよびデプロイメント・ターゲットを構成するまで、ステップ 1d から 1e を繰り返します。
  - g. 「保管」および「同期化」を選択します。
2. プラグイン構成ファイルを生成します。
    - a. 管理コンソールで、「サーバー」>「Web サーバー」を選択します。
    - b. 名前 *Webserver1* の横にあるチェック・ボックスを選択します。
    - c. 「プラグインの生成」を選択します。プラグイン構成ファイルが作成され、その旨がウィンドウ上部のメッセージに示されます。
    - d. デプロイメント環境に対して必要な回数分、ステップ 2b および 2c を繰り返します。

## 次のタスク

デプロイメント・マネージャーおよびノード・エージェントを停止してから再始動します。次に、テスト・アプリケーションを開始します。

## テスト・アプリケーションの開始

この手順を使用して、テスト・アプリケーションを開始し、実装をテストします。

### 始める前に

ルーティング用のテスト・アプリケーションがインストールおよび構成されている必要があります。

### このタスクについて

テスト・アプリケーションは、管理コンソールから開始します。

#### 手順

1. 管理コンソールで、「アプリケーション」>「エンタープライズ・アプリケーション」を選択します。
2. アプリケーション名の横にあるチェック・ボックスを選択し、「開始」を選択します。緑色の矢印が表示されるまで待機します。この矢印はアプリケーションが正常に開始されたことを示します。

## 次のタスク

テスト・アプリケーションを開始した後、このアプリケーションを実行します。

注: アプリケーションが正常に開始されない場合、ログ・ファイルを参照して、問題を示すエラー・メッセージを検索します。

## テスト・アプリケーションの実行

この手順を使用して、テスト・アプリケーションを実行し、デプロイメント環境が正常に作動しているかどうかを判別します。

### 始める前に

テスト・アプリケーションを開始する必要があります。

### このタスクについて

このアプリケーションが正常に実行された場合、デプロイメント環境は正常に作動しています。アプリケーション・デプロイメント・ターゲット・クラスターのその他のメンバーについても、同一の手順に従い、正常に機能していることを確認します。

#### 手順

1. ブラウザー・ウィンドウに `http://hostname:portnumber/testapp` の形式で URL を入力します。ここで、*hostname* は、アプリケーションをインストールしたクラスター・メンバーをホスティングするシステムの完全修飾 DNS 名または IP アドレス、*portnumber* は、そのクラスター・メンバーのデフォルト・ホストに関連付けられているポート番号、*testapp* はテスト・アプリケーションの名前です。
2. 画面上のログ・メッセージを確認します。

テスト・アプリケーションにヒューマン・タスクが含まれている場合は、「Looking up the HumanTaskManager API EJB...」で始まるログ・メッセージが画面に表示されます。アプリケーションでは、タスクが作成および要求され、入出力データが検査され、タスクが完了して削除されます。ログ・メッセージの終了付近で「合格」が表示され、アプリケーションが正常に実行されたことが示されます。

正常であることを示すためにアプリケーション内に組み込んだすべてのメッセージが表示されたことを確認してください。

### 次のタスク

その他のテスト・アプリケーションをインストールおよび開始します。

---

## その他のアプリケーションのインストールおよびアクセス

管理コンソールまたは Business Process Choreographer Explorer からアプリケーションのインストールおよびアクセスを行い、デプロイメント環境をさらに検査します。

### 始める前に

デプロイメント環境が正常にインストールおよび構成されている必要があります。

## このタスクについて

テスト・アプリケーションをインストールしたのと同様の方法で、その他のアプリケーションをインストールして開始できます。これらのアプリケーションにアクセスするには、管理コンソールまたは Business Process Choreographer Explorer を使用します。

### 手順

1. アプリケーションを見つけます。

管理コンソールで、「アプリケーション」 → 「新規アプリケーションのインストール」とクリックして、インストールするアプリケーションを見つけます。

2. アプリケーションをインストールします。
3. アプリケーションを開始します。
4. アプリケーションにアクセスします。

ブラウザ・ウィンドウにアプリケーションの URL を入力します。例えば、`http://hostname:portnumber/myapp` などです。ここで、*hostname* は、アプリケーションをインストールした、クラスター・メンバーに対応するシステムの完全修飾 DNS 名 (または IP アドレス) であり、*portnumber* は、そのクラスター・メンバーの `default_host` に関連付けられているポート番号です。

Business Process Choreographer Explorer で以下のステップを実行します。

- a. ブラウザー・ウィンドウに `http://hostname:portnumber/bpc` の形式で URL を入力します。ここで、*hostname* は、アプリケーションをインストールした、クラスター・メンバーに対応するシステムの完全修飾 DNS 名 (または IP アドレス) であり、*portnumber* は、そのクラスター・メンバーの `default_host` に関連付けられているポート番号です。

「ユーザーのタスク」というラベルのページが表示されますが、リストにはタスクが表示されていません。
  - b. 「ユーザーのプロセス・テンプレート」を選択します。インストールしたアプリケーションに対応するテンプレートがリストされています。
  - c. ページ上のインターフェース・コントロールを使用して、タスクを開始、処理、および完了します。Business Process Choreographer タスクの実行の詳細については、『ビジネス・プロセスおよびヒューマン・タスクの管理』を参照してください。
5. 必要に応じて、アプリケーションの記録を表示したり、エラーを確認するために、クラスター・メンバーの `SystemOut.log` ファイルを確認することができます。



---

## 第 10 章 Update Installer を使用したフィックスパックおよびリフレッシュ・パックのインストール

IBM Update Installer for WebSphere Software を使用して暫定修正、フィックスパック、およびリフレッシュ・パック (メンテナンス・パッケージと総称される) をインストールできます。Update Installer for WebSphere Software はまた、アップデート・インストーラー・プログラム、UpdateInstaller プログラム、およびアップデート・インストール・ウィザードと呼ばれています。

### 始める前に

製品の更新を正常にインストールするには、正しい権限を使用します。

管理セキュリティが WebSphere Application Server Network Deployment または WebSphere Process Server で有効になっている場合は、ファイルを更新する前に、管理ユーザー ID とパスワードを指定する必要があります。

更新する製品をインストールした際と同じインストーラーの ID で Update Installer プログラムを使用します。それ以外の ID の場合、ファイル所有権の不一致により root ユーザーによる修正が必要になる場合があります。

**i5/OS** **i5/OS プラットフォームの場合:** \*ALLOBJ 特殊権限を持つユーザー・プロファイルから、Update Installer プログラムを使用します。

### 重要:

- 製品を更新するには、更新する製品を最初にインストールしたユーザー・アカウントを Update Installer のインストールに使用する必要があり、また同じユーザー・アカウントを使用して Update Installer プログラムを開始する必要があります。
  - Update Installer ファイルが配置されたロケーションを別のユーザー・アカウントで使用する場合、そのユーザー・アカウントは、そのロケーションに対する読み取り権限および実行権限を持っている必要があります。また、このユーザー・アカウントは、logs ディレクトリーとそのサブディレクトリーに対する書き込み権限も持っている必要があります。Update Installer ファイルのロケーションについては、575 ページの『Update Installer for WebSphere Software のインストール』を参照してください。
  - ターゲットの WebSphere Application Server 製品のロケーションを更新するために別のユーザー・アカウントを使用する場合は、そのユーザー・アカウントが、保守パッケージを適用するターゲット・ロケーションに対する全アクセス権限 (読み取り、書き込み、および実行) を持っている必要があります。
- **AIX** **AIX プラットフォームの場合:** root 以外のユーザーが Update Installer プログラムを開始する場合は、そのユーザー・アカウントで slibclean コマンドを実行できる必要があります。実行できない場合は、Update Installer プログラムを使用するときに、必ず root ユーザーで slibclean コマンドを実行する必要があります。

- 保守パッケージをインストールするターゲット・ロケーションにあるどのファイルも、どのユーザーからのプロセスでもロックしていないことを確認します。

Update Installer とは、グラフィカル・ユーザー・インターフェース、またはサイレント・モード (応答ファイルの使用不使用にかかわらず) で稼働する InstallShield MultiPlatform ウィザードです。サイレント・モードで応答ファイルを省略する場合、ウィザードは、デフォルトの保守ディレクトリーにダウンロードした最後の保守パッケージをインストールします。Update Installer を使用してインストールする応答ファイルの例について詳しくは、WebSphere Application Server Network Deployment 資料の『install.txt』のトピックを参照してください。

**制約事項:** i5/OS **i5/OS プラットフォームの場合:** i5/OS 上の Update Installer は、install.txt 応答ファイルを使用する方法でのみ実行できます。

**重要:** 保守パッケージはプロファイルを更新します。既存のインストールを更新する前に、構成ファイルをバックアップしてください。保守パッケージが更新できる各プロファイルの構成をバックアップするには、backupConfig コマンドを使用します。このコマンドの実行について詳しくは、「管理構成ファイルのバックアップおよび復元」を参照してください。

リフレッシュ・パックの場合は、さまざまな WebSphere Process Server データベース・スキーマの更新が必要な場合もあります。リフレッシュ・パックをアンインストールする場合、データベースを前のレベルに復元する必要があります。そのため、データベースはバックアップしておく必要もあります。インストールまたはアンインストールの指示について詳しくは、フィックスパックまたはリフレッシュ・パックに付属の指示を参照してください。

## このタスクについて

**更新** とは、ファイルまたはデータ・セットを現行情報で変更することです。WebSphere Process Server がリフレッシュ・パック、暫定修正、またはフィックスパックで更新されると、その旧情報のファイルは新規バージョンと置き換えられます。更新はマイグレーションとは異なります。マイグレーションは、製品の新規バージョン全体をインストールして製品の旧バージョンと置き換えることです。マイグレーションについて詳しくは、『マイグレーション』を参照してください。

**重要:** このトピックの説明は、一般的な参照用として示しているにすぎません。暫定修正、フィックスパック、リフレッシュ・パックに用意されている説明のほうがこのトピックの説明よりも優先されます。必ず、暫定修正、フィックスパック、リフレッシュ・パックに用意されている具体的なインストール手順のほうを実行するようにしてください。

「WebSphere Process Server Recommended Fixes」のリストで、ソフトウェアが最新のメンテナンス・レベルであることを確認します。「Recommended Fixes」の Web ページで、インストールするフィックスパックまたはリフレッシュ・パックの readme ファイル (インストールの説明とも言う) を必ずお読みください。

**重要:** Update Installer の複数のコピーを一度に始動しないでください。Update Installer プログラムの並行インスタンスはサポートされていません。複数の更新を同時に実行すると、インストールの失敗や不完全なインストールを含む、予測不能の結果を引き起こす可能性があります。

注: このトピックでは、便宜上、特定のディレクトリー・パスは Linux および UNIX 形式でのみ示します。これに相当する Windows パスは、ディレクトリー区切り記号以外は同一です。

次の手順では、保守パッケージのインストール方法を説明します。保守パッケージのロールバック方法の説明については、『保守パッケージのアンインストール』を参照してください。

暫定修正、フィックスパック、またはリフレッシュ・パックをインストールするには、以下のステップを実行します。

### 手順

1. Update Installer for WebSphere Software の最新のバージョンがシステムにインストールされていることを確認します。 暫定修正、フィックスパック、またはリフレッシュ・パックをインストールするには、Update Installer for WebSphere Software がインストールされている必要があります。これは、WebSphere Process Server 製品サポートの Web サイトから、またはランチパッドを使用して製品 DVD からダウンロードできます。初回のインストールについて詳しくは、575 ページの『Update Installer for WebSphere Software のインストール』を参照してください。 Update Installer の新しいバージョンのインストールについて詳しくは、WebSphere Application Server Network Deployment 資料の『Update Installer for WebSphere Software』の更新を参照してください。

注: **Vista** Microsoft® Windows Vista™ オペレーティング・システム上で Update Installer for WebSphere Software を使用する場合: Update Installer for WebSphere Software を Microsoft Windows Vista オペレーティング・システムで使用するには、バージョン 6.1.0.9 以上の Update Installer がシステムにインストールされている必要があります。それより前のバージョンの Update Installer は、Windows Vista オペレーティング・システムではサポートされていません。

2. 暫定修正、フィックスパック、またはリフレッシュ・パックの現行バージョンを、「WebSphere Process Server Recommended Fixes」Web サイトから Update Installer の maintenance ディレクトリーにダウンロードします。 メンテナンス・ディレクトリーは、使用するオペレーティング・システムに応じて、以下のロケーションのいずれかにあります。

- **AIX** AIX プラットフォームの場合: /usr/IBM/WebSphere/UpdateInstaller

- **i5/OS** i5/OS プラットフォームの場合: /QIBM/ProdData/WebSphere/UpdateInstaller/V61/UPDI

- **HP-UX** **Linux** **Solaris** HP-UX、Linux、および Solaris プラットフォーム: /opt/IBM/WebSphere/UpdateInstaller

- **Windows** Windows プラットフォームの場合: C:\Program Files\IBM\WebSphere\UpdateInstaller

3. **Windows** Windows プラットフォームの場合: 「Windows Services」パネルを使用して、WebSphere Process Server プロセスのすべてのサービスを停止します。

4. Update Installer プログラムが使用されるシステム上で実行されているすべての WebSphere Process Server 関連の Java プロセスを停止します。

例えば、Java プロセスには以下のものが含まれます。

- すべての Java 仮想マシン (JVM)
- WebSphere Process Server プロセスには次のようなものがあります。
  - サーバー・プロセス
  - ノードがデプロイメント・マネージャー・セルに統合される場合、そのノード上のノード・エージェント・プロセス
  - デプロイメント・マネージャー・サーバーの dmgr プロセス
  - **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合: WebSphere Process Server を実行中のサブシステムを終了させることによって、上記のプロセスを停止することができます。このサブシステムは QWAS61 (デフォルト) または QWBI61 (カスタム) で、ENDSBS コマンドを使用して終了させることができます。
- IBM HTTP Server プロセス
- インストールしているプラグインを使用する Web サービス・プロセス
- ファースト・ステップ・コンソール
- インストール検証テスト (IVT) プロセス
- プロファイル管理ツール
- その他の InstallShield MultiPlatform (ISMP) インストール・プログラム
- InstallShield MultiPlatform アンインストール・プログラム
- IBM WebSphere Integration Developer Java プロセス
- IBM Agent Controller
- Derby Network Server データベース・サーバー (Derby Network Server を使用するように構成されたデプロイメント・マネージャー・プロファイルを更新している場合)

5. ディレクトリーを Update Installer ディレクトリーに変更します。Update Installer ディレクトリーは、使用するオペレーティング・システムに応じて、以下のロケーションのいずれかにあります。

- **AIX** **AIX** プラットフォーム: /usr/IBM/WebSphere/UpdateInstaller
- **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合: /QIBM/ProdData/WebSphere/UpdateInstaller/V61/UPDI
- **HP-UX** **Linux** **Solaris** **HP-UX、Linux、および Solaris** プラットフォーム: /opt/IBM/WebSphere/UpdateInstaller
- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: C:\Program Files\IBM\WebSphere\UpdateInstaller

6. update コマンドを使用して、暫定修正、フィックスパック、またはリフレッシュ・パックをインストールします。更新する各サーバー・ノードに保守パッケージをインストールする前に、デプロイメント・マネージャー・ノードに保守パッケージをインストールします。

- グラフィカル・ユーザー・インターフェースを使用してメンテナンス・パッケージをインストールするには、以下のコマンドのいずれかを入力します。

- Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合: メンテナンス・パッケージ・フィールドを最新の日付スタンプおよびタイム・スタンプを持つパッケージの名前で初期化するには、`./update.sh` を入力します。
- Windows** **Windows** プラットフォーム: メンテナンス・パッケージ・フィールドを最新の日付スタンプおよびタイム・スタンプを持つパッケージの名前で初期化する場合、`update.bat` を入力します。
- Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:  
`./update.sh -options "responsefiles/file_name"` を実行すると、グラフィカル・インターフェースのすべての値が、オプション応答ファイルで指定した値でオーバーライドされます。Update Installer を使用してインストールする応答ファイルの例について詳しくは、WebSphere Application Server Network Deployment 資料の『install.txt』のトピックを参照してください。
- Windows** **Windows** プラットフォームの場合: `update.bat -options "responsefiles/file_name"` を実行すると、グラフィカル・インターフェースのすべての値が、オプション応答ファイルで指定した値でオーバーライドされます。Update Installer を使用してインストールする応答ファイルの例について詳しくは、WebSphere Application Server Network Deployment 資料の『install.txt』のトピックを参照してください。

`update` コマンドを使用するオプションについて詳しくは、WebSphere Application Server Network Deployment 資料の『update command』のトピックを参照してください。

**注:** **Vista** **Microsoft® Windows Vista™** および **Windows 2008** オペレーティング・システム上で **Update Installer for WebSphere Software** を実行する場合: 管理者以外のユーザーが Update Installer を使用して保守を適用する場合、そのユーザーは、WebSphere Process Server がインストールされていた場合と同じ状態で、Windows User Account Control (UAC) を使用して保守を適用する必要があります。

- WebSphere Process Server のインストール中に UAC が有効だった場合、UAC を有効にして保守を適用します。
- WebSphere Process Server のインストール中に UAC が無効だった場合、UAC を無効にして保守を適用します。

管理者以外のユーザーが、初期インストールで使用したものと異なる UAC 設定で WebSphere Process Server に保守を適用した場合、レジストリーに悪影響が出ます。これにより、Update Installer の宛先パネルに表示されるインストール・ロケーションのリストの信頼性が低くなる場合があります。また、既存のインストール・ロケーションがドロップダウン・メニューに表示されないことがあります。

上位の権限 (管理者権限) を必要とするプログラムを Windows Vista または Windows 2008 の各オペレーティング・システムで実行しようとする、プログラムのパブリッシャーが認識されているかどうかを確認する画面が最初に表示されます。例えば、特定の WebSphere Process Server プログラムについて、オペレーティング・システム・ダイアログに「認識できないプログラムがこのコンピュータへのアクセスを要求しています」と表示されます。この場合は、プログラムの詳細を確認し、実行したい WebSphere Process Server プログラムに間違いがない場合は、「許可 (Allow)」をクリックして処理を続行します。

- メンテナンス・パッケージをサイレント・モードを使用してバックグラウンド・プロセスとしてインストールするには、以下のコマンドのいずれかを入力します。

– **Linux** **UNIX** **Linux および UNIX プラットフォーム:** グラフィカル・ユーザー・インターフェースを使用せずに、オプション応答ファイル内に指定された値を使用してインストールする場合、`./update.sh -silent -options "responsefiles/file_name"` を入力します。詳しくは、WebSphere Application Server Network Deployment 資料の『install.txt』のトピックを参照してください。

– **Windows** **Windows プラットフォーム:** グラフィカル・ユーザー・インターフェースを使用せずに、オプション応答ファイル内に指定された値を使用してインストールする場合、`update.bat -silent -options "responsefiles/file_name"` を入力します。詳しくは、WebSphere Application Server Network Deployment 資料の『install.txt』のトピックを参照してください。

– **i5/OS** **i5/OS プラットフォーム:** `update -options responsefiles/file_name`

**重要:** i5/OSプラットフォームで `update` コマンドを使用する場合は、コマンド行に `-silent` オプションを指定しないでください。このオプションは、応答ファイル自体に組み込まれています。

`update` コマンドについて詳しくは、WebSphere Application Server Network Deployment 資料の『更新コマンド』のトピックを参照してください。

Update Installer は、`install_root/properties/version/nif/backup` ディレクトリーにバックアップ・ファイルを作成します。

**注:** root 以外のユーザーが所有しているプロファイル用のサービスが含まれた保守パッケージをインストールすると、保守パッケージによって作成されるすべての新規ファイルをインストール・ユーザーが所有します。root 以外のユーザーが正常にこの製品を開始できるように新規ファイルの所有権を変更できます。詳しくは、WebSphere Application Server Network Deployment の資料の『インストーラーとして保守パッケージをインストールしてプロファイルに関連したファイルの所有権を変更する』を参照してください。

## 次のタスク

保守パッケージをインストールした後、WebSphere ソフトウェアの使用を継続してください。

**重要:** 既知の問題については、WebSphere Application Server Network Deployment の資料の『Update command - known problems and workarounds』を参照してください。

---

## Update Installer for WebSphere Software のインストール

WebSphere Process Server Launchpad から Update Installer for WebSphere Software をインストールできます。アップデート・インストーラーは、WebSphere Process Server の暫定修正、フィックスパック、およびリフレッシュ・パックをインストールするために使用します。

### 始める前に

Update Installer for WebSphere Software をインストールする前に、以下の要件を確認してください。

- 製品のハードウェア前提条件およびソフトウェア前提条件がすべて満たされている必要があります。詳しくは、『WebSphere Process Server system requirements』を参照してください。
- アップデート・インストーラーをインストールする前に、いずれかのバージョンの WebSphere Process Server を正しくインストールしておく必要があります。
- アップデート・インストーラーは、1 つのシステムに 1 つだけインストールできます。このアップデート・インストーラーをすべての WebSphere 製品が共用します。
- WebSphere Process Server 製品の最初のインストールで使用したユーザー・アカウントを使用してアップデート・インストーラーをインストールし、また同じユーザー・アカウントを使用してアップデート・インストーラー・プログラムを実行し、製品を更新してください。
  - 別のユーザー・アカウントがインストール済みのアップデート・インストーラーのロケーションを使用する場合は、そのユーザー・アカウントが、そのロケーションにあるアプリケーションを読み取って実行するためのセキュリティー・アクセス権限と、logs ディレクトリーのサブディレクトリーに対する書き込み権限を持っている必要があります。
  - 別のユーザー・アカウントを使用してターゲット WebSphere Process Server 製品のロケーションを更新する場合は、そのユーザー・アカウントが、保守パッケージを適用するターゲット・ロケーションに対する全アクセス権限 (読み取り、書き込み、および実行) を持っている必要があります。
- **AIX** **AIX プラットフォームの場合:** root 以外のユーザーがアップデート・インストーラー・プログラムを開始する場合は、そのユーザー・アカウントが slibclean コマンドを実行するためのセキュリティー・アクセス権限を持っている必要があります。持っていない場合は、アップデート・インストーラー・プログラムを使用するときに必ず root ユーザーが slibclean コマンドを実行する必要があります。

- アップデート・インストーラーをインストールするターゲット・ロケーションでは、他のユーザーによるプロセスがファイルをロックすることはできません。
- 最新バージョンの Update Installer for WebSphere Software をインストールしようとしていることを確認します。更新のバージョンを持っていない場合は、IBM Web サイト (Update Installer for WebSphere Software) から圧縮ファイルまたは TAR ファイルとして最新バージョンの Update Installer for WebSphere Software をダウンロードします。詳しくは、WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 6.1 の資料にある『Update Installer for WebSphere Software の更新』を参照してください。

- **Vista** Microsoft Windows Vista および Windows 2008 オペレーティング・システムの場合: 管理者でないユーザーが Update Installer を使用して保守を適用する場合は、Windows ユーザー・アカウント・コントロール (UAC) を、最初に Websphere Application Server をインストールしたときと同じ状態にして適用する必要があります。
  - WebSphere Process Server のインストール時に UAC が有効になっていた場合は、UAC を有効にした状態で保守を適用します。
  - Websphere Application Server のインストール中に UAC が無効になっていた場合は、UAC を無効にした状態で保守を適用します。

UAC の設定が初期インストール時の設定と異なる状態で管理者以外のユーザーが WebSphere Process Server に保守を適用すると、レジストリーに悪影響が及んでしまいます。その結果、Update Installer の宛先パネルに正しいインストール・ロケーションのリストが表示されなくなったり、既存のインストール・ロケーションがドロップダウン・メニューに表示されなくなったりする可能性があります。

昇格した (管理者の) 特権が必要なプログラムを実行するように Windows Vista または Windows 2008 オペレーティング・システムに要求すると、最初に、プログラムの提供者が認識されているかどうかユーザーに通知されます。一部の WebSphere Process Server プログラムでは、例えば、「認識できないプログラムがこのコンピュータへのアクセスを要求しています」というオペレーティング・システムのダイアログが表示されることがあります。プログラムの詳細を調べてください。実行しようとしている WebSphere Process Server プログラムである場合は、「許可 (Allow)」をクリックして次に進んでください。

Update Installer for WebSphere Software をインストールするには、以下のステップを実行します。

#### 手順

1. 新バージョンのアップデート・インストーラーをインストールする前に、既存のアップデート・インストーラーを削除する必要があります。詳しくは、WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 6.1 の資料にある『Update Installer for WebSphere Software のアンインストール』を参照してください。
2. 以下のいずれかの方法で、Update Installer for WebSphere Software のインストール・ウィザードを開始します。
  - Launchpad から:

- a. WebSphere Process Server Launchpad を開始します。Launchpad の開始方法について詳しくは、83 ページの『Launchpad の開始』を参照してください。
  - b. 「Launchpad」ウィンドウの左側に表示されるオプションのリストで、「**WebSphere ソフトウェアのインストール用の IBM Update Installer**」をクリックします。「WebSphere ソフトウェアのインストール用の IBM Update Installer」パネルが開きます。
  - c. Launchpad の「WebSphere ソフトウェアのインストール用の IBM Update Installer」パネルで、「**IBM Update Installer のインストール・ウィザードの起動**」をクリックします。
- コマンド行から:
    - a. システムにログオンします。
    - b. **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合: 必要に応じて CD-ROM ドライブをマウントします。詳しくは、『Linux および UNIX オペレーティング・システムでの CD-ROM のマウント』を参照してください。
    - c. 「WebSphere Process Server V6.2 DVD」というラベルが付いた製品 DVD を CD-ROM ドライブに挿入します。
    - d. UpdateInstaller ディレクトリーにナビゲートします。
    - e. UpdateInstaller ディレクトリーから `install` または `install -silent` コマンドを入力します。
3. インストール・ウィザードの指示に従います。

## タスクの結果

Update Installer for WebSphere Software は、使用しているプラットフォームに応じて以下のルート・ディレクトリーにインストールされます。

- **AIX** **AIX** プラットフォームの場合: `/usr/IBM/WebSphere/UpdateInstaller`
- **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合: `/QIBM/ProdData/WebSphere/UpdateInstaller/V61/UPDI`
- **HP-UX** **Linux** **Solaris** **HP-UX**、**Linux**、および **Solaris** プラットフォーム: `/opt/IBM/WebSphere/UpdateInstaller`
- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: `C:\Program Files\IBM\WebSphere\UpdateInstaller`

## 次のタスク

アップデート・インストーラーをインストールすると、それを使用して暫定修正、フィックスパック、およびリフレッシュ・パックをインストールできるようになります。詳しくは、『Update Installer を使用したフィックスパックおよびリフレッシュ・パックのインストール』を参照してください。

## 保守パッケージのアンインストール

Update Installer for WebSphere Software を使用して暫定修正、フィックスパック、およびリフレッシュ・バックをアンインストールできます。Update Installer for WebSphere Software はまた、アップデート・インストーラー・プログラム、updateInstaller プログラム、およびアップデート・インストール・ウィザードと呼ばれています。

### 始める前に

製品の更新を正常にインストールするには、正しい権限を使用します。

アップデート・インストーラーは、InstallShield MultiPlatform ウィザードであり、グラフィカル・ユーザー・インターフェースで実行されるか、応答ファイル (uninstall.txt) を使用してサイレント・モードで実行されます。

**注:** **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合: i5/OS 上の Update Installer は、応答ファイルを使用する方法でのみ実行できます。

**重要:** 既知の問題については、WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 6.1 の資料の『更新コマンドに関する既知の問題および次善策』を参照してください。

**重要:** このトピックでは、便宜上、特定のディレクトリー・パスは Linux および UNIX 形式でのみ示します。それぞれのパスに相当する i5/OS 用のパスは、Linux および UNIX のものとまったく同じです。これに相当する Windows パスは、ディレクトリー区切り記号以外は同一です。

以下の説明には、WebSphere Process Server の暫定修正、修正パッケージ、およびリフレッシュ・バックをアンインストールする場合の参照情報が含まれています。

#### アンインストール手順の概説

保守パッケージをアンインストールするには、次のようにします。

1. アップデート・インストーラーを使用して保守パッケージをインストールしたときに作成されたバックアップ・ファイルがあることを確認します。このバックアップ・ファイルは `install_root/properties/version/nif/backup` ディレクトリーに置かれています。IBM は、バックアップ・ファイルを行うユーザー変更はサポートしません。
2. このトピックで説明されているように、アップデート・インストーラー・プログラムを使用して保守パッケージを除去します。

#### ノードの修正レベルの表示

`install_root/bin` ディレクトリーの `versionInfo` コマンドを使用して、製品の正確な修正およびバージョン・レベルを表示することができます。ただし、保守パッケージのインストール中またはアンインストール中には、`versionInfo` コマンドは使用しないでください。

アップデート・インストーラーの複数のコピーを一度に起動しないでください。アップデート・インストーラー・プログラムの同時起動はサポートされていません。複数の更新を同時に実行すると、インストールの失敗や不完全なインストールを含む、予測不能の結果を引き起こす可能性があります。

## 必要な情報

グラフィカル・インターフェースでは、ユーザーは次の情報を提供する必要があります。

表 140. 保守パッケージのアンインストール時に必要な情報

フィールド	有効な値	説明
WebSphere 製品のインストール・ルート・ディレクトリーのファイル・パスおよびアップデート・インストーラー	IBM WebSphere Process Server のインストール・ルート・ディレクトリーを確認します。	アップデート・インストーラー・アプリケーションは、デフォルトでは前回と同じ製品ロケーションを参照します。
アンインストールする保守パッケージのファイル名	<code>install_root/properties/version/update/backup</code> ディレクトリーから、アンインストールする保守パッケージを選択します。	デフォルトの保守パッケージは、 <code>install_root /properties/version/update/backup</code> ディレクトリー内の、最新の日付スタンプおよびタイム・スタンプを持つパッケージです。

**この作業に必要なセキュリティ役割:** 製品の更新を正常にアンインストールするには、正しい権限を使用してください。アップデート・インストーラー・プログラムは、Linux または UNIX プラットフォームでは root ユーザーとして、Windows プラットフォームでは管理者として使用してください。

暫定修正、フィックスパック、またはリフレッシュ・パックを除去するには、以下のステップを実行します。

### 手順

1. オペレーティング・システムにログオンします。

**Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合: さらに、`umask` 設定が `0022` であることを確認します。

`umask` 設定を確認するには、以下のコマンドを入力します。 `umask`

`umask` 設定を `0022` に設定するには、以下のコマンドを入力します。 `umask 0022`

2. ディレクトリーを Update Installer ディレクトリーに変更します。 Update Installer ディレクトリーは、使用するオペレーティング・システムに応じて、以下のロケーションのいずれかにあります。

- **AIX** **AIX** プラットフォームの場合: `/usr/IBM/WebSphere/UpdateInstaller`

- **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合: `/QIBM/ProdData/WebSphere/UpdateInstaller/V61/UPDI`

- **HP-UX** **Linux** **Solaris** **HP-UX**、**Linux**、および **Solaris** プラットフォーム: `/opt/IBM/WebSphere/UpdateInstaller`

- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: `C:\Program Files\IBM\WebSphere\UpdateInstaller`

3. **Windows** **Windows プラットフォームの場合:** 「Windows Services」パネルを使用して、WebSphere Process Server および WebSphere Application Server プロセスのすべてのサービスを停止します。
4. IBM Software Developer Kit (SDK) または IBM Developer Kit for Java (JDK、および i5/OS プラットフォームで使用) を使用するすべての Java プロセスを停止します。

マシン上で暫定修正、フィックスパック、およびリフレッシュ・パックをアンインストールする前に、そのマシン上で、IBM SDK、Java Technology Edition を使用する Java プロセスをすべて停止してください。

WebSphere Process Server プロセスには次のようなものがあります。

- サーバー・プロセス
- ノードがデプロイメント・マネージャー・セルに統合される場合、そのノード上のノード・エージェント・プロセス
- デプロイメント・マネージャー・サーバーの dmgr プロセス

**注:** **i5/OS** QWAS61 または QWBI61 サブシステムのどちらかの ENDSBS (エンド・サブシステム) コマンドを使用して、アプリケーション・サーバーのプロセスを停止します。『WebSphere Application Server サブシステムのシャットダウン』を参照してください。

必要であれば、すべての Java プロセスを停止します。WebSphere Process Server 関連の Java プロセスの実行中に保守パッケージをアンインストールすると、製品が正常に (エラーなしで) 稼働しなくなる可能性があります。

5. アップデート・インストーラーを使用して、保守パッケージをアンインストールします。
  - グラフィカル・ユーザー・インターフェースを使用して保守パッケージをアンインストールするには、以下のいずれかのコマンドを入力します。
    - **Windows** **Windows プラットフォームの場合:** `update.bat -W update.type="uninstall"` を実行すると、グラフィカル・ユーザー・インターフェースを使用して最新の日付スタンプおよびタイム・スタンプの保守パッケージがアンインストールされます。
    - **Linux** **UNIX** **Linux および UNIX プラットフォームの場合:** `./update.sh -W update.type="uninstall"` を実行すると、グラフィカル・ユーザー・インターフェースを使用して最新の日付スタンプおよびタイム・スタンプの保守パッケージがアンインストールされます。
    - **Windows** **Windows プラットフォームの場合:** `update.bat -options "responsefiles/file_name"` を実行すると、グラフィカル・インターフェースのすべての値が、オプション応答ファイルで指定した値でオーバーライドされます。アップデート・インストーラーを使用してインストールする応答ファイルの例について詳しくは、WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 6.1 の資料の『uninstall.txt』のトピックを参照してください。

- **i5/OS** **i5/OS プラットフォームの場合:** `./update -options "responsefiles/file_name"` を実行すると、グラフィカル・ユーザー・インターフェースを使用せずに、オプション応答ファイルで指定した値を使用してアンインストールされます。詳しくは、WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 6.1 の資料に記載されている『`uninstall.txt`』のトピックを参照してください。
- **Linux** **UNIX** **Linux および UNIX プラットフォームの場合:** `./update.sh -options "responsefiles/file_name"` を実行すると、グラフィカル・インターフェースのすべての値が、オプション応答ファイルで指定した値でオーバーライドされます。アップデート・インストーラーを使用してインストールする応答ファイルの例について詳しくは、WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 6.1 の資料の『`uninstall.txt`』のトピックを参照してください。
- サイレント・モードを使用してバックグラウンド・プロセスとして保守パッケージをアンインストールするには、以下のいずれかのコマンドを入力します。
  - **Windows** **Windows プラットフォームの場合:** `update.bat -silent -options "responsefiles/file_name"` を実行すると、グラフィカル・ユーザー・インターフェースを使用せずに、オプション応答ファイル内に指定された値を使用してアンインストールされます。詳しくは、WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 6.1 の資料に記載されている『`uninstall.txt`』のトピックを参照してください。
  - **Linux** **UNIX** **Linux および UNIX プラットフォームの場合:** `./update.sh -silent -options "responsefiles/file_name"` を実行すると、グラフィカル・ユーザー・インターフェースを使用せずに、オプション応答ファイル内に指定された値を使用してアンインストールされます。詳しくは、WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 6.1 の資料に記載されている『`uninstall.txt`』のトピックを参照してください。

**注:** デプロイメント・マネージャー・ノードから保守パッケージをアンインストールする前に、セル内の各サーバー・ノードから暫定修正をアンインストールします。

`update` コマンドを使用して保守パッケージをアンインストールするときに使用可能なすべてのオプションを示す表については、WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 6.1 の資料に記載されている『更新コマンド』のトピックを参照してください。

6. フィックスパックをアンインストールする場合に、Update Installer はプロファイルからフィックスパックによる更新をアンインストールしません。この保守を除去しない理由は、保守のインストール後にプロファイルを構成している可能性があるからです。元のプロファイルを復元するには、`restoreConfig` コマンドを使用してバックアップをリストアしてください。このコマンドの実行について詳しくは、「管理構成ファイルのバックアップおよび復元」を参照してください。インストールまたはアンインストールの指示については、フィックスパックまたはリフレッシュ・パックに付属の指示を参照してください。

## **タスクの結果**

暫定修正、フィックスパック、またはリフレッシュ・パックが除去され、旧バージョンの WebSphere Process Server ソフトウェアがシステムに残されます。

## **次のタスク**

保守パッケージをアンインストールした後で、引き続き WebSphere ソフトウェアを使用することができます。

---

## 第 11 章 カスタマイズ・インストール・パッケージによるフィックスパックおよびリフレッシュ・パックのインストール

この機能により、カスタマイズ・インストール・パッケージ (CIP) を使用して、新しい保守レベルにアップグレードできます。

### 始める前に

総称して保守パッケージと呼ばれる、暫定修正、フィックスパック、およびリフレッシュ・パックをインストールするには、既存の WebSphere Process Server インストール済み環境が必要です。既存製品のインストール・レベルは、インストールする保守パッケージよりも低いレベルになっている必要があります。

WebSphere Process Server CIP の入手方法は 2 つあり、製品パッケージのディスクから取得するか、またはライセンスを交付されている場合はパスポート・アドバンテージ® のサイトからインストール・イメージをダウンロードできます。

**注:** インストールの指示については、フィックスパックまたはリフレッシュ・パックに付属の指示を参照してください。

CIP を使用して保守パッケージをインストールするには、以下のステップを実行します。

### 手順

1. 既存の WebSphere Process Server インストールの保守レベルを判別します。インストール済み製品の保守レベルは、適用する保守アップグレードの保守レベルより低くなっている必要があります。既存のバージョンは、versionInfo スクリプトを使用して確認できます。詳しくは、648 ページの『製品のバージョン情報および履歴情報』を参照してください。
2. 96 ページの『WebSphere Process Server の対話式インストール』のトピックの手順に従ってください。

**注:** 「ようこそ」パネルで「このカスタム・インストール・パッケージについて」をクリックし、インストールする実際の保守レベルが、既存のインストールよりも新しいことを確認します。

3. インストールの完了後は、versionInfo スクリプトを使用して、インストール済み環境が更新された保守レベルになっていることを確認できます。



---

## 第 12 章 ソフトウェアのアンインストール

IBM WebSphere Process Server をアンインストールするためのさまざまな方法について説明します。

アンインストーラー・プログラムにより、各プロファイル内の構成データやアプリケーションを含め、すべてのプロファイルがデフォルトで除去されます。i5/OS は例外で、デフォルトではすべてのプロファイルが除去されません。アンインストール手順を開始する前に、必要に応じて、各プロファイルの config フォルダー、installableApps フォルダー、および installedApps フォルダーをバックアップするか、または uninstall コマンドで `-OPT removeProfilesOnUninstall="false"` パラメーターを使用します。構成ファイルの管理の説明については、『コマンド行ツールの使用』を参照してください。別のロケーションに保管されていないすべてのアプリケーションをバックアップします。アンインストールするには、以下のサブトピックから、必要なアンインストール手順へのリンクを選択してください。

WebSphere Process Server のインストール済み環境からさまざまなコンポーネントを削除する方法についても説明しています。これらのコンポーネントは、WebSphere Process Server のアンインストール時にアンインストールされます。詳しくは、『Business Process Choreographer 構成の除去』、および『Common Event Infrastructure 構成の除去』を参照してください。

WebSphere Application Server 用 Web サーバー・プラグイン、IBM HTTP Server、および Application Client for WebSphere Application Server などの関連製品をアンインストールするには、WebSphere Application Server Network Deployment および IBM HTTP Server インフォメーション・センターの以下のトピックを参照してください。

- Uninstalling the Web server plug-ins for WebSphere Application Server
- IBM HTTP Server のアンインストール
- Application Client for WebSphere Application Server のフィーチャー・パックのアンインストール

---

### GUI の使用またはサイレント・モードによる製品のアンインストール

アンインストール・ウィザードのグラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) を使用するか、またはサイレント・モードでコマンド行呼び出しを使用して、WebSphere Process Server および基盤となる WebSphere Application Server Network Deployment with Feature Pack for Web Services のコピーをアンインストールする方法について説明します。

#### 始める前に

この手順を使用して、WebSphere Process Server をアンインストールする前に、以下の作業を行ってください。

- WebSphere Process Server のアンインストールを対話式に行うかサイレント・モードで行うかを決定します。各手順で実行する必要があるステップを、このトピックの全体手順の中で説明します。

**制約事項:** i5/OS i5/OS上の WebSphere Process Server は、サイレントでのみアンインストールできます。

- WebSphere Process Server のアンインストール時に、基盤となる WebSphere Application Server Network Deployment with Feature Pack for Web Services 製品をアンインストールするかどうかを決定します。この製品をアンインストールすると、アンインストーラー・プログラムにより、各プロファイル内の構成データおよびアプリケーションも含めて、プロファイルがデフォルトですべて除去されます。この場合、プロファイルを削除しないように選択することができます。

**注:** i5/OS WebSphere Application Server Network Deployment with Feature Pack for Web Services はデフォルトでアンインストールされます。この製品をアンインストールしたくない場合は、`uninstall` コマンドでこのオプションを変更する必要があります。

- 必要に応じて、各プロファイルの `config` フォルダー、`installableApps` フォルダー、および `installedApps` フォルダーをバックアップします。別のロケーションに保管されていないすべてのアプリケーションをバックアップします。
- イベント・メッセージング・エンタープライズ・アプリケーション、イベント・データベース、および Common Event Infrastructure アプリケーションの構成を、この順で除去します。
  - イベント・メッセージング・エンタープライズ・アプリケーションの除去についての説明は、『Common Event Infrastructure サーバーからのイベント・メッセージングの除去 (Removing event messaging from the Common Event Infrastructure server)』にあります。
  - イベント・データベースの除去についての説明は、『イベント・データベースの除去』にあります。
  - Common Event Infrastructure アプリケーションの構成の除去についての説明は、『Common Event Infrastructure アプリケーションの除去』にあります。
- Business Process Choreographer を構成した場合は、WebSphere Process Server をアンインストールした後で、すべての外部リソースを手動で削除する必要があります。これを行う方法については、『Business Process Choreographer の除去』を参照してください。
- 製品のインストール時に使用したものと同一ユーザー ID を使用して、製品をアンインストールしようとしていることを確認します。

**制約事項:** 部分的なアンインストール、カスタム・アンインストール、または増分アンインストールを行うことはできません。

## このタスクについて

アンインストール・プログラムは、製品のインストール時に作成されます。このプログラムは、インストール済みのフィーチャーを除去するための特定のディスク・ロケーションおよびルーチンで、製品インストールごとにカスタマイズされています。

WebSphere Process Server をアンインストールするには、以下の手順を実行します。

### 手順

1. 製品のインストール時に使用したものと同一ユーザー ID を使用してログオンします。
2. 基盤となる WebSphere Application Server Network Deployment with Feature Pack for Web Services をアンインストールする場合は、WebSphere Application Server の Web サーバー・プラグインのアンインストール・プログラムを実行します。

現在のシステム内で、基盤となる WebSphere Application Server 製品と共に Web サーバーが稼働するように構成されている場合は、プラグインをアンインストールして Web サーバーからその構成を削除する必要があります。プラグインのアンインストール手順については、WebSphere Application Server Network Deployment インフォメーション・センターにあるトピック『WebSphere Application Server 用の Web サーバー・プラグインのアンインストール』を参照してください。

3. すべてのデプロイメント・マネージャー、ノード・エージェント、およびサーバー・プロセスを停止します。これらのプロセスの停止方法について詳しくは、40 ページの『サーバーおよびノードの停止』を参照してください。
4. オプション: 必要に応じて、構成ファイルおよびログ・ファイルをバックアップし、後でそれらのファイルを参照します。

アンインストール・プログラムでは、*install\_root* ディレクトリーにあるログ・ファイルは除去しません。基盤となる WebSphere Application Server Network Deployment with Feature Pack for Web Services のアンインストールを選択すると、デフォルトですべてのプロファイルとプロファイル内の全データが除去されます。

必要に応じて、各プロファイルの *config* フォルダーと *logs* フォルダーをバックアップして、後でそれらのフォルダーを参照します。プロファイルは再利用できないため、プロファイル全体をバックアップする必要はありません。

対話式 GUI インターフェースを使用してアンインストールしたい場合は、ステップ 5 に進んでください。サイレント・モードでアンインストールしたい場合は、ステップ 6 (589 ページ) に進んでください。

**制約事項:** i5/OS WebSphere Process Server for i5/OS のインストール環境を GUI によってアンインストールすることはできません。このアンインストールはサイレントで実行する必要があります。

5. アンインストール・ウィザードのみを使用して対話的にアンインストールする場合は、以下を実行してください。
  - a. プラットフォームに応じて次のコマンドのいずれかを使用し、コマンド行から `uninstall` コマンドを実行します。
    - Linux UNIX `install_root/uninstall.wbi/uninstall`
    - Windows `install_root¥uninstall.wbi¥uninstall.exe`

アンインストール・ウィザードが開始し、「ようこそ」パネルが表示されます。

- b. 「ようこそ」パネルで、WebSphere Process Server のアンインストール時に、基盤となる製品をすべてアンインストールするかどうかを選択します。
- 基盤となる製品をアンインストールする場合は、インストールされている製品に応じて、次のいずれかのチェック・ボックスを選択します。
    - 基盤となっている **IBM WebSphere Application Server Network Deployment with Feature Pack for Web Services バージョン 6.1** のアンインストール
    - 基盤となっている **IBM Feature Pack for Web Services バージョン 6.1** のアンインストール (この選択項目は、WebSphere Application Server Network Deployment の上に WebSphere Process Server および Feature Pack for Web Services のほかに製品がインストールされている場合に表示されます。この場合、WebSphere Application Server Network Deployment はアンインストールできません。Feature Pack for Web Services のみをアンインストールできます。)
  - 基盤となる製品をアンインストールしない場合は、チェック・ボックスをクリアします。
- 「次へ」をクリックします。

- c. 表示されるパネルは、基盤となる製品のアンインストールを選択したかどうか、およびどの製品を選択したかによって異なります。
- WebSphere Process Server の基盤となる IBM WebSphere Application Server Network Deployment with Feature Pack for Web Services のアンインストールを選択した場合は、「プロファイル削除の確認」パネルで、アンインストールしようとしているインストール環境に関連したすべてのプロファイルを削除するかどうかを選択できます。プロファイルをすべて削除するには、チェック・ボックスにチェック・マークを付けます。WebSphere Process Server によって拡張されていないプロファイルをすべて保持するには、チェック・ボックスをクリアします。WebSphere Process Server によって拡張されたプロファイルは、すべてアンインストール処理によって使用不能にされ、チェック・ボックスをクリアした場合でも、アンインストール処理によって削除されます。デフォルトでは、すべてのプロファイルが削除されます。
  - IBM Feature Pack for Web Services のインストール環境をアンインストールすることを選択した場合 (つまり、基盤となる WebSphere Application Server Network Deployment をアンインストールできません) には、WebSphere Process Server プロファイル・テンプレートで拡張され、アンインストール処理で削除対象になるすべてのプロファイルが警告パネルに表示されます。WebSphere Process Server によって拡張されたプロファイルは、すべてアンインストール処理によって使用不能にされ、削除されます。
  - 基盤となる製品のアンインストールを選択しなかった場合は、WebSphere Process Server プロファイル・テンプレートで拡張され、アンインストール処理での削除対象になるすべてのプロファイルが警告パネルに表示されます。WebSphere Process Server によって拡張されたプロファイルは、すべ

てアンインストール処理によって使用不能にされ、基盤となる製品のアンインストールを選択しなかった場合でも、アンインストール処理によって削除されます。

「次へ」をクリックします。アンインストーラーが、インストール環境に関連したサーバーがまだ稼働しているかどうかをチェックします。

- d. 表示されるパネルは、基盤となる製品のアンインストールを選択したかどうか、およびインストール環境に関連したサーバーが稼働しているかどうかによって異なります。
  - サーバーが稼働していない場合は、アンインストーラーによって、アンインストールするコンポーネントの要約をリストした確認パネルが表示されます。「次へ」をクリックしてアンインストールを開始します。
  - サーバーが稼働しているが IBM WebSphere Application Server Network Deployment with Feature Pack for Web Services のアンインストールを選択した場合は、アンインストーラーによってサーバーがシャットダウンされます。アンインストールするコンポーネントの要約をリストした確認パネルが表示されます。「次へ」をクリックしてアンインストールを開始します。
  - サーバーが稼働しているが IBM Feature Pack for Web Services のアンインストールを選択した場合は、警告パネルが表示され、サーバーを停止するように指示されます。稼働中のサーバーがあればすべて手動で停止し、「OK」をクリックして警告パネルを閉じます。「よろこ」パネルが表示され、アンインストール処理を再開できるようになります。上記のステップ 5.b に進んでください。
  - サーバーが稼働しており、基盤となる製品のアンインストールを選択しなかった場合は、警告パネルが表示され、サーバーを停止するように指示されます。稼働中のサーバーがあればすべて手動で停止し、「OK」をクリックして警告パネルを閉じます。「よろこ」パネルが表示され、アンインストール処理を再開できるようになります。上記のステップ 5.b に進んでください。
- e. 製品が削除された後、「終了」をクリックしてウィザードを閉じます。

ステップ 7 (590 ページ) に進んでください。

6. サイレント・モードでアンインストールする場合のみ、WebSphere Process Server をアンインストールするコマンドを実行します。WebSphere Process Server および基盤となる WebSphere Application Server 製品をサイレント・アンインストールし、すべてのプロファイルを削除するには、次のコマンドを発行します。

- **i5/OS**

```
install_root/bin/uninstall_wbi -OPT isUmbrellaUninstall="true"  
-OPT removeProfilesOnUninstall="true"
```

- **Linux**      **UNIX**

```
install_root/uninstall.wbi/uninstall  
-OPT isUmbrellaUninstall="true" -OPT removeProfilesOnUninstall="true" -silent
```

- **Windows**

```
install_root%uninstall.wbi%uninstall.exe
-OPT isUmbrellaUninstall="true" -OPT removeProfilesOnUninstall="true" -silent
```

WebSphere Process Server および基盤となる WebSphere Application Server 製品をサイレント・アンインストールし、すべてのプロファイルを保持するには、次のコマンドを発行します。

- **i5/OS**

```
install_root/bin/uninstall_wbi -OPT isUmbrellaUninstall="true"
-OPT removeProfilesOnUninstall="false"
```

- **Linux**      **UNIX**

```
install_root/uninstall.wbi/uninstall
-OPT isUmbrellaUninstall="true" -OPT removeProfilesOnUninstall="false" -silent
```

- **Windows**

```
install_root%uninstall.wbi%uninstall.exe
-OPT isUmbrellaUninstall="true" -OPT removeProfilesOnUninstall="false" -silent
```

WebSphere Process Server をサイレント・アンインストールし、基盤となる WebSphere Application Server 製品を保持するには、次のコマンドを発行します。このコマンドでは、すべてのプロファイルが削除されます。

- **i5/OS**

```
install_root/bin/uninstall_wbi -OPT isUmbrellaUninstall="false"
```

- **Linux**      **UNIX**

```
install_root/uninstall.wbi/uninstall
-OPT isUmbrellaUninstall="false" -silent
```

- **Windows**

```
install_root%uninstall.wbi%uninstall.exe -OPT isUmbrellaUninstall="false"
-silent
```

アンインストール中に問題が発生した場合は、*install\_root/logs/wbi/uninstall* ディレクトリーの *log.txt* ファイルを調べてください。

7. Business Process Choreographer を構成した場合は、すべての外部リソースを手動で削除する必要があります。

これを行う方法については、『Business Process Choreographer の除去』を参照してください。

8. 削除されたデプロイメント・マネージャーを説明する管理対象ノード内の構成エントリーをすべて除去します。

共通トポロジーでは、コア製品ファイルは、複数のワークステーション上にインストールされます。1 台のワークステーションにデプロイメント・マネージャーがあり、ほかのワークステーションにはカスタム・プロファイルから作成された管理対象ノードがあります。別のインストール済み環境のカスタム・プロファイルを統合しているデータ・マネージャーを作成したインストール済み環境を削除する場合、それらのカスタム・プロファイルの構成を更新する必要があります。

管理対象ノードにおけるノード構成問題の対応として公式に発表されているのは、最初のインストールの後に **backupConfig** コマンドを使用する方法です。保

管する必要のある構成に重要な変更を行った場合は、必ずこのコマンドを再度使用してください。構成の有効なバックアップにより、常に **restoreConfig** コマンドを使用して、構成を以前の状態に戻すことができます。

また、管理対象ノードがあるマシン上で以下のコマンドのいずれかを使用して、ノードを除去することもできます。この例では、*profile\_root* は管理対象ノード・プロファイルのインストール・ディレクトリーを表します。

- **i5/OS** `profile_root/bin/removeNode -force`
- **Linux** **UNIX** `profile_root/bin/removeNode.sh -force`
- **Windows** `profile_root%bin%removeNode.bat -force`

9. 削除された管理対象ノードを説明するデプロイメント・マネージャー内の構成エントリーをすべて除去します。

デプロイメント・マネージャーの管理コンソールを開き、「システム管理」>「ノード」をクリックします。削除したいノードの横にあるチェック・ボックスを選択し、「ノードの除去」を選択します。

管理コンソールが正常にノードを除去できない場合は、デプロイメント・マネージャーが稼働している状態で以下のコマンドを実行します。

- **i5/OS** `install_root/bin/cleanupNode node_name`
- **Linux** **UNIX** `install_root/bin/cleanupNode.sh node_name`
- **Windows** `install_root%bin%cleanupNode.bat node_name`

デプロイメント・マネージャーにおけるノード構成問題の対応として公式に発表されているのは、最初のインストールの後に **backupConfig** コマンドを使用する方法です。保管する必要のある構成に重要な変更を行った場合は、必ずこのコマンドを再度使用してください。構成の有効なバックアップにより、常に **restoreConfig** コマンドを使用して、構成を以前の状態に戻すことができます。

## タスクの結果

この手順により、WebSphere Process Server がアンインストールされます。

WebSphere Application Server Network Deployment with Feature Pack for Web Services を選択した場合は、これもアンインストールされます。アンインストール・ウィザードを実行した後は、logs ディレクトリーなどのわずかなディレクトリーだけがディレクトリー構造に残ります。

アンインストール・プログラムにより、以下のファイルを含めて、このディレクトリーにいくつかのログ・ファイルが残されます。

- **i5/OS** `install_root/logs/wbi/uninstall/log.txt`
- **Linux** **UNIX** `install_root/logs/wbi/uninstall/log.txt`
- **Windows** `install_root%logs%wbi%uninstall%log.txt`

uninstlog.txt ファイルは、ファイル・システムまたはその他の異常なエラーを記録します。このログで、成功を示す INSTCONFSUCCESS を探します。

```
Uninstall, com.ibm.ws.install.ni.ismp.actions.  
  ISMPLogSuccessMessageAction, msg1,  
  INSTCONFSUCCESS
```

## 次のタスク

製品を同じインストール・ルート・ディレクトリーに再インストールする場合は、アンインストールが正常に終了したかどうかに応じて、以下のいずれかの操作を行う必要があります。

- アンインストールが正常に終了した場合は、*install\_root* ディレクトリーを手動で除去する必要があります。

**重要:** WebSphere Process Server をアンインストールして同じディレクトリーに再インストールする場合は、WebSphere Process Server と、その基盤となる WebSphere Application Server、WebSphere Application Server Network Deployment、または WebSphere Application Server Network Deployment with Feature Pack for Web Services 製品の両方をアンインストールする必要があります。したがって、手動で除去する必要のある *install\_root* ディレクトリーは空になります。

- アンインストールが正常終了しなかった場合は、残っている製品の成果物を手動でアンインストールする必要があります。詳しくは、『アンインストールに失敗した後の再インストールの準備』を参照してください。再インストールする予定がない場合は、このタスクを行う必要はありません。

このトピックに記載されたコマンドについて詳しくは、WebSphere Application Server Network Deployment インフォメーション・センターの『コマンド行ユーティリティー』セクションにある以下のトピックを参照してください。

- stopManager
- stopNode
- stopServer
- backupConfig
- restoreConfig

---

## アンインストールに失敗した後の再インストールの準備

ソフトウェアの再インストール方法について説明します。アンインストール・プログラムが正常に完了しなかった場合、ファイルが残り、このために元のディレクトリーに再インストールできないことがあります。このトピックでは、再インストールのために行う必要がある手順の概要を示します。

### 始める前に

クリーンではないマシンに再インストールすることができます。ただし、このようなインストールでは、オリジナル・ディレクトリーへのインストールを防止することができる共存シナリオが作成されます。

マシンをクリーンにするというのは、アンインストール・ウィザードまたはサイレント・アンインストール手順の使用後に残されるログ・ファイルなど、以前のインストールによるすべてのファイルを削除することです。手順を開始する前に、必要

な場合は、ログ・ファイルをバックアップします。ログ・ファイルのロケーションについては、773 ページの『インストールとプロファイル作成のログ・ファイル』を参照してください。

## このタスクについて

その他の関連する製品がインストールの一部に含まれている場合があります、それらをアンインストールする必要があります。詳しくは、WebSphere Application Server Network Deployment および IBM HTTP Server バージョン 6.1 のインフォメーション・センターにある次のトピックを参照してください。

- WebSphere Application Server 用の Web サーバー・プラグインのアンインストール
- Linux UNIX Windows IBM HTTP Server のアンインストール
- Application Client for WebSphere Application Server のフィーチャー・パックのアンインストール

アンインストールに失敗した後で再インストールの準備を行うには、以下のサブトピックの該当する説明に従ってください。システムをクリーンにすると、削除したインストール済み環境の痕跡がすべてなくなります。システムをクリーンにした後、『ソフトウェアのインストール』に進み、製品のインストール方法を再度参照してください。

## AIX システムでアンインストールに失敗した後の再インストールの準備

WebSphere Process Server のアンインストールに失敗した場合に AIX システムをクリーンにする方法について説明します。アンインストール・プログラムを実行した後に、製品を元のディレクトリーに再インストールする際にこれを妨げる可能性のあるレジストリー項目を、この手動ステップで除去します。

### 始める前に

この手順を実行する前に、アンインストール・ウィザードを使用して、あるいはサイレントに WebSphere Process Server をアンインストールしたこと、およびその手順が最後まで正常に実行されていないことを確認してください。この手順が正常に実行されている場合は、この作業を行う必要はありません。

正しい製品を除去してクリーンなシステムを作成できるように、製品の *install\_root* ディレクトリーを判別します。

デフォルトのディレクトリーのロケーションについては、615 ページの『製品、プロファイル、およびツールのデフォルト・インストール・ディレクトリー』を参照してください。

### 注:

インストール・ウィザードおよびプロファイル管理ツールにより、インストール・ルート・ディレクトリーに対して独自のロケーションを指定することができます。以下のファイルを調べて、実際のロケーションを判別します。

- /usr/.ibm/.nif/.nifregistry ファイルは、インストール済みのすべての WebSphere Process Server 製品のインストール・ルートを示します。また、すべての WebSphere Application Server 製品を検索します。
- 作成されたプロファイルごとの `install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log` ファイルは、`invokeWSProfile` メソッドを含むスタンザにインストール・ロケーションを示します。

製品のアンインストールでは、`profile_root/logs` ファイルを含む `profile_root` ディレクトリー (`profile_root` はプロファイルのインストール・ロケーションを表す) が削除されないまま残ります。`install_root/logs` ディレクトリーも残ります。

## このタスクについて

以前のインストールのファイルが残っているときに製品を新規ディレクトリーに再インストールすると、共存シナリオを作成することができます。ただし、すべてのファイルおよびレジストリー項目を削除すると、WebSphere Process Server を完全に除去することができます。システムをクリーンにすることにより、共存なしで、元のディレクトリーに製品を再インストールすることができます。

**重要:** この手順のステップを通して、WebSphere Process Server と WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment の両方のアンインストールの後に残された成果物の除去を行います。対象となる WebSphere Application Server 製品は、WebSphere Process Server のインストール済み環境の基盤となる製品であることが前提となっています。

以下の手順を実行して、クリーンなシステムを作成します。

### 手順

1. 製品をインストールしたユーザーと同じユーザー ID でログオンします。
2. **kill** コマンドを使用して、稼働中のすべての Java プロセスを停止します。

稼働中の Java プロセスが WebSphere Process Server または WebSphere Application Server 製品と無関係で、それらを停止できない場合は、すべての WebSphere Process Server および WebSphere Application Server 製品関連プロセスを停止してください。次のコマンドを使用して、実行中のすべてのプロセスを判別します。

```
ps -ef | grep java
```

**kill -9 java\_pid\_1 java\_pid\_2..java\_pid\_n** コマンドで、すべての WebSphere Process Server および WebSphere Application Server 製品関連プロセスを停止します。

3. インストール済みの WebSphere Process Server および WebSphere Application Server コンポーネントをリストします。

関連パッケージを検索するには、以下のコマンドを入力します。

```
ls1pp -l | grep -i WS
```

WebSphere Process Server パッケージのみを検索するように、照会の範囲を絞るには、次のコマンドを入力します。

```
ls1pp -l | grep -i WSEAA62
```

WebSphere Process Server バージョン 6.2 のパッケージ名の接頭部は WSE、接尾部は 62 です。WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 6.1 のパッケージ名の接頭部は WSB または WSP、接尾部は 61 です。アンインストールしなかった WebSphere Process Server および WebSphere Application Server 製品のパッケージは除去しないでください。

4. ディレクトリーを /usr/IBM ディレクトリー、またはご使用のインストール済み環境の相当するトップ・ディレクトリーに変更します。
5. `rm -rf WebSphere` と入力して、この WebSphere Process Server 関連のディレクトリーを削除します。ただし、ProcServer (または、削除した WebSphere Process Server インストール済み環境に関連付けられた AppServer ディレクトリー) が WebSphere ディレクトリー内の唯一のディレクトリーである場合のみ削除を実行してください。このディレクトリーに含まれるすべての製品を削除する場合は、このディレクトリーを削除します。
6. `installRegistryUtils` コマンドを使用して、インストール済みのすべての WebSphere Server 製品のインストール・ロケーションを調べ、インストール・レジストリーから対象の製品を削除します。
7. `vpd.properties` ファイルを編集して、WebSphere Process Server および WebSphere Application Server のエントリーを除去します。

このファイルは、`root` ディレクトリーなどのオペレーティング・システムのインストール・ディレクトリー内にあります。アンインストールした WebSphere Process Server のインストール済み環境のすべてのエントリーを除去します。WebSphere Process Server の各エントリーは、WSE という文字で始まり、その後リリース番号を表す数値が続いています。また、同じ行に、アンインストールしたインストール済み環境に対応する `install_root` パスが含まれます。(ファイルがテキスト・エディターでワード・ラップをオフにして表示された場合、各エントリーは 1 行に表示されます。) 例えば、次のような行が表示されたとします。

```
WSEAA62|6|2|0|0|6.2.0.0|2=IBM WebSphere Process Server|
IBM WebSphere Process Server|IBM WebSphere Process Server V6.2|
IBM|http://www.ibm.com|6.2.0.0|
C:¥Program Files¥IBM¥WebSphere¥ProcServer|0|0|1|WSEAA62|6|2|0|0|6.2.0.0|2|0|
false|"properties/version/_uninst.wbi" "uninstall.jar" "uninstall.dat" "
"|true|3|WSEAA62|6|2|0|0|6.2.0.0|2
```

この行は、ディレクトリー `C:¥Program Files¥IBM¥WebSphere¥ProcServer` にインストールされた Websphere Application Server に対応しています。

**注:** 本書内では、このテキストは、書式設定のために複数行に表示されていますが、`vpd.properties` ファイル内では 1 行になっています。

`vpd.properties` ファイル内の WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment の各エントリーの形式はこれと同様です。削除するエントリーの判別に役立つエントリーの情報、および `vpd.properties` ファイルについて詳しくは、WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 6.1 のインフォメーション・センターにあるトピック『`vpd.properties` ファイル』を参照してください。

`vpd.properties` ファイルは、InstallShield MultiPlatform (ISMP) プログラムがインストールするほかの製品で使用するため、削除したり、名前変更したりしない

てください。vpd.properties ファイル内に、アンインストールする WebSphere Process Server または WebSphere Application Server 製品のエントリーしか存在しない場合は、このファイルを削除することができます。

8. WPS\_ODM\_clean.sh スクリプトを実行します。
  - a. WebSphere Application Server Product Support サイトにある「Manual Object Data Manager (ODM) cleanup script for AIX」というタイトルの技術情報文書からスクリプトを入手します。
  - b. WPS\_ODM\_clean.sh スクリプトを編集し、ストリング /usr/WebSphere/AppServer のすべてのインスタンスを実際のインストール・ルート・ディレクトリーで置き換えます。
  - c. コマンド行から WPS\_ODM\_clean.sh スクリプトを実行します。
9. .nifregistry ファイルをクリーンにします。このファイルをクリーンにする手順は以下のとおりです。
  - a. .nifregistry ファイルをバックアップします。
  - b. テキスト・エディターで .nifregistry ファイルを開きます (行の折り返しは必ずオフにしてください)。
  - c. <INSTALL\_LOC> および <PRODUCT\_ID> を含む行をすべて検索して削除します。ここで <INSTALL\_LOC> は、アンインストールに失敗した環境があるインストールの場所であり、<PRODUCT\_ID> は、アンインストールしようとしている製品の製品 ID です。
  - d. .nifregistry ファイルを保存して、テキスト・エディターを閉じます。

## タスクの結果

この手順を行うと、システムがクリーンになります。これにより、同じディレクトリーに再インストールすることができます。クリーンなシステムには、以前削除したインストールの痕跡は残っていません。

## 次のタスク

システムをクリーンにした後、81 ページの『第 4 章 ソフトウェアのインストール』に進み、インストール手順を選択してください。

## HP-UX システムでアンインストールに失敗した後の再インストールの準備

WebSphere Process Server のアンインストールに失敗した場合に HP-UX システムをクリーンにする方法について説明します。アンインストール・プログラムを実行した後に、製品を元のディレクトリーに再インストールする際にこれを妨げる可能性のあるレジストリー項目を、この手動ステップで除去します。

## 始める前に

この手順を実行する前に、アンインストール・ウィザードを使用して、あるいはサイレントに WebSphere Process Server をアンインストールしたと、およびその手順が最後まで正常に実行されていないことを確認してください。この手順が正常に実行されている場合は、この作業を行う必要はありません。

正しい製品を除去してクリーンなシステムを作成できるように、製品の *install\_root* ディレクトリーを判別します。

デフォルトのディレクトリーのロケーションについては、615 ページの『製品、プロファイル、およびツールのデフォルト・インストール・ディレクトリー』を参照してください。

インストール・ウィザードおよびプロファイル管理ツールにより、インストール・ルート・ディレクトリーに対して独自のロケーションを指定することができます。以下のファイルを調べて、実際のロケーションを判別します。

- */opt/.ibm/.nif/.nifregistry* ファイルは、インストール済みのすべての WebSphere Process Server 製品のインストール・ルートを示します。また、すべての WebSphere Application Server 製品を検索します。
- 作成されたプロファイルごとの *install\_root/logs/manageprofiles/profile\_name\_create.log* ファイルは、*invokeWSProfile* メソッドを含むスタンプにインストール・ロケーションを示します。

製品のアンインストールでは、*profile\_root/logs* ファイルを含む *profile\_root* ディレクトリー (*profile\_root* はプロファイルのインストール・ロケーションを表す) が削除されないまま残ります。*install\_root/logs* ディレクトリーも残ります。

## このタスクについて

以前のインストールのファイルが残っているときに製品を新規ディレクトリーに再インストールすると、共存シナリオを作成することができます。ただし、すべてのファイルおよびレジストリー項目を削除すると、WebSphere Process Server を完全に除去することができます。システムをクリーンにすることにより、共存なしで、元のディレクトリーに製品を再インストールすることができます。

**重要:** この手順のステップを通して、WebSphere Process Server と WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment の両方のアンインストールの後に残された成果物の除去を行います。対象となる WebSphere Application Server 製品は、WebSphere Process Server のインストール済み環境の基盤となる製品であることが前提となっています。

以下の手順を実行して、クリーンなシステムを作成します。

### 手順

1. 製品をインストールしたユーザーと同じユーザー ID でログオンします。
2. **kill** コマンドを使用して、稼働中のすべての Java プロセスを停止します。

稼働中の Java プロセスが WebSphere Process Server または WebSphere Application Server 製品と無関係で、それらを停止できない場合は、すべての WebSphere Process Server および WebSphere Application Server 製品関連プロセスを停止してください。次のコマンドを使用して、実行中のすべてのプロセスを判別します。

```
ps -ef | grep java
```

`kill -9 java_pid_1 java_pid_2...java_pid_n` コマンドで、すべての WebSphere Process Server および WebSphere Application Server 製品関連プロセスを停止します。

3. HP-UX System Administration Manager (SAM) ユーティリティを使用して、パッケージを除去します。
  - a. `/usr/sbin/sam` コマンドを使用して SAM ユーティリティを開始します。
  - b. DISPLAY および TERM 環境変数の設定が適切であることを確認します。
  - c. 「ソフトウェア管理 (Software management)」をクリックします。
  - d. 「インストール済みソフトウェアの表示 (View installed software)」をクリックします。
  - e. SD リストで、WebSphere Process Server または WebSphere Application Server エントリーを探します。
  - f. SD リストをクローズします。
  - g. 「ローカル・ホスト・ソフトウェアを削除する (Remove local host software)」をクリックします。
  - h. SD 除去リストに表示されている以下のインスタンスをすべて選択します。
    - WSEAA62
    - WSBA61
  - i. 「アクション (Actions)」 → 「削除対象としてマーク (Mark for remove)」を選択します。
  - j. 「アクション (Actions)」 → 「削除 (Remove)」を選択します。
  - k. 「削除分析 (Remove analysis)」ダイアログ・ボックスで「OK」をクリックします。
  - l. 「ログ (Logs)」をクリックして、選択したパッケージの削除をリアルタイムで表示します。
  - m. すべてのパッケージが削除されたら、「完了」をクリックします。
  - n. SAM を終了します。
4. パッケージを検索し、除去されたことを確認します。

```
swlist | grep WS
```

と入力すると、WebSphere Process Server および WebSphere Application Server のパッケージが表示されます。

WebSphere Process Server パッケージのみを検索するように、照会の範囲を絞るには、次のコマンドを入力します。

```
swlist | grep WSEAA62
```

5. インストール・ルート・ディレクトリーを除去します。

`rm -rf install_root` と入力して、WebSphere Process Server を除去します。アンインストールした製品の正しい `install_root` を指定してください。例えば、デフォルト・インストール・ディレクトリー `/opt/IBM/WebSphere/ProcServer` から WebSphere Process Server をアンインストールした場合は、以下のコマンドを実行します。

```
rm -rf /opt/IBM/WebSphere/ProcServer
```

6. `installRegistryUtils` コマンドを使用して、インストール済みのすべての WebSphere Server 製品のインストール・ロケーションを調べ、インストール・レジストリーから対象の製品を削除します。
7. `.nifregistry` ファイルをクリーンにします。このファイルをクリーンにする手順は以下のとおりです。
  - a. `.nifregistry` ファイルをバックアップします。
  - b. テキスト・エディターで `.nifregistry` ファイルを開きます (行の折り返しは必ずオフにしてください)。
  - c. `<INSTALL_LOC>` および `<PRODUCT_ID>` を含む行をすべて検索して削除します。ここで `<INSTALL_LOC>` は、アンインストールに失敗した環境があるインストールの場所であり、`<PRODUCT_ID>` は、アンインストールしようとしている製品の製品 ID です。
  - d. `.nifregistry` ファイルを保存して、テキスト・エディターを閉じます。

## タスクの結果

この手順を行うと、システムがクリーンになります。これにより、同じディレクトリーに再インストールすることができます。クリーンなシステムには、以前削除したインストールの痕跡は残っていません。

## 次のタスク

システムをクリーンにした後、81 ページの『第 4 章 ソフトウェアのインストール』に進み、インストール手順を選択してください。

## i5/OS システムでアンインストールに失敗した後の再インストールの準備

WebSphere Process Server のアンインストールに失敗した場合に i5/OS システムをクリーンにする方法について説明します。アンインストール・プログラムを実行した後に、製品を元のディレクトリーに再インストールする際にこれを妨げる可能性のあるレジストリー項目を、この手動ステップで除去します。

### 始める前に

この手順を実行する前に、WebSphere Process Server がサイレントにアンインストールされていること、およびこの手順が最後まで正常に実行されていないことを確認してください。この手順が正常に実行されている場合は、この作業を行う必要はありません。

正しい製品を除去してクリーンなシステムを作成できるように、製品の `install_root` および `profile_root` ディレクトリーを判別します。

デフォルトのディレクトリーのロケーションについては、615 ページの『製品、プロファイル、およびツールのデフォルト・インストール・ディレクトリー』を参照してください。

インストール・ウィザードおよびプロファイル管理ツールにより、インストール・ルート・ディレクトリーに対して独自のロケーションを指定することができます。以下のファイルを調べて、実際のロケーションを判別します。

- /QIBM/WAS/.ibm/.nif/.nifregistry ファイルは、インストール済みのすべての WebSphere Process Server 製品のインストール・ルートを示します。
- 作成されたプロファイルごとの `user_data_root/profileRegistry/logs/manageprofiles/profile_create.log` ファイルは、`<method>invokeWSProfile</method>` タグを含むスタンプにインストール・ロケーションを示します。

製品をアンインストールしても、`user_data_root/profileRegistry/logs` ディレクトリーは残ります。また、`install_root/logs` ディレクトリーも残ります。

## このタスクについて

以前のインストールのファイルが残っているときに製品を新規ディレクトリーに再インストールすると、共存シナリオを作成することができます。ただし、すべてのファイルおよびレジストリー項目を削除すると、WebSphere Process Server を完全に除去することができます。システムをクリーンにすることにより、共存なしで、元のディレクトリーに製品を再インストールすることができます。

**重要:** この手順のステップを通して、WebSphere Process Server と WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment の両方のアンインストールの後に残された成果物の除去を行います。対象となる WebSphere Application Server 製品は、WebSphere Process Server のインストール済み環境の基盤となる製品であることが前提となっています。

以下の手順を実行して、クリーンなシステムを作成します。

### 手順

1. \*ALLOBJ と \*SECADM の特殊権限を持つユーザー・プロファイルで i5/OS システムにサインオンします。
2. Qshell で、`install_root` ディレクトリーに移動します。
3. 削除対象のインストールに関連するサブディレクトリーを削除します。該当インストールのサブディレクトリー、およびその中にあるすべてのファイルとディレクトリーを削除してください。

**注:** 追加でインストールするごとに、サブディレクトリーの名前で数字が 1 ずつ増えていきます。例えば、最初のインストールの場合のディレクトリー名は ProcServer であり、2 回目のインストールの場合は ProcServer1 になります (以下同様)。

4. 次に、`user_data_root/profiles` ディレクトリーに移動します。
5. 削除対象のインストールに関連するサブディレクトリーを削除します。該当インストールのサブディレクトリー、およびその中にあるすべてのファイルとディレクトリーを削除してください。

**注:** 追加でインストールするごとに、サブディレクトリーの名前で数字が 1 ずつ増えていきます。例えば、最初のインストールの場合のディレクトリー名は ProcServer であり、2 回目のインストールの場合は ProcServer1 になります (以下同様)。

6. /QIBM/WAS/.ibm/.nif/.nifregistry ファイルを編集します。該当インストールを参照しているすべてのレジストリー項目を削除します。

7. これが、システムから削除する WebSphere Process Server の最後のインストールである場合は、i5/OS CL コマンド・プロンプトで次のように DLTLICPGM コマンドを発行して、WebSphere Process Server の i5/OS ライセンス・プログラムのレジストリー項目も削除する必要があります。

```
DLTLICPGM LICPGM(5724L01)
```

## タスクの結果

この手順を行うと、システムがクリーンになります。これにより、同じディレクトリーに再インストールすることができます。クリーンなシステムには、以前削除したインストールの痕跡は残っていません。

## 次のタスク

システムをクリーンにした後、81 ページの『第 4 章 ソフトウェアのインストール』に進み、インストール手順を選択してください。

## Linux システムでアンインストールに失敗した後の再インストールの準備

WebSphere Process Server のアンインストールに失敗した場合に Linux システムをクリーンにする方法について説明します。アンインストール・プログラムを実行した後に、製品を元のディレクトリーに再インストールする際にこれを妨げる可能性のあるレジストリー項目を、この手動ステップで除去します。

### 始める前に

この手順を実行する前に、アンインストール・ウィザードを使用して、あるいはサイレントに WebSphere Process Server をアンインストールしたこと、およびその手順が最後まで正常に実行されていないことを確認してください。この手順が正常に実行されている場合は、この作業を行う必要はありません。

正しい製品を除去してクリーンなシステムを作成できるように、製品の *install\_root* ディレクトリーを判別します。

デフォルトのディレクトリーのロケーションについては、615 ページの『製品、プロファイル、およびツールのデフォルト・インストール・ディレクトリー』を参照してください。

インストール・ウィザードおよびプロファイル管理ツールにより、インストール・ルート・ディレクトリーに対して独自のロケーションを指定することができます。以下のファイルを調べて、実際のロケーションを判別します。

- *opt/ibm/nif/.nifregistry* ファイルは、インストール済みのすべての WebSphere Process Server 製品およびすべての WebSphere Application Server 製品のインストール・ルートを示します。作成された各プロファイルの *install\_root/logs/manageprofiles/profile\_name\_create.log* ファイルは、*invokeWSPProfile* メソッドがあるスタンザ内のインストール・ロケーションを示します。

製品をアンインストールしても、*profile\_root/logs* ディレクトリーを含む *profile\_root* ディレクトリーは削除されずに残ります (*profile\_root* はプロファイルのインストール先)。また、*install\_root/logs* ディレクトリーも残ります。

## このタスクについて

以前のインストールのファイルが残っているときに製品を新規ディレクトリーに再インストールすると、共存シナリオを作成することができます。ただし、すべてのファイルおよびレジストリー項目を削除すると、WebSphere Process Server を完全に除去することができます。システムをクリーンにすることにより、共存なしで、元のディレクトリーに製品を再インストールすることができます。

**重要:** この手順のステップを通して、WebSphere Process Server と WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment の両方のアンインストールの後に残された成果物の除去を行います。対象となる WebSphere Application Server 製品は、WebSphere Process Server のインストール済み環境の基盤となる製品であることが前提となっています。

以下の手順を実行して、クリーンなシステムを作成します。

### 手順

1. 製品をインストールしたユーザーと同じユーザー ID でログオンします。
2. 実行中の Java プロセスをすべて停止します。

稼働中の Java プロセスが WebSphere Process Server または WebSphere Application Server 製品と無関係で、それらを停止できない場合は、すべての WebSphere Process Server および WebSphere Application Server 製品関連プロセスを停止してください。次のコマンドを使用して、実行中のすべてのプロセスを判別します。

```
ps -ef | grep java
```

`kill -9 java_pid_1 java_pid_2...java_pid_n` コマンドで、すべての WebSphere Process Server および WebSphere Application Server 製品関連プロセスを停止します。

3. 関連パッケージを検索します。以下のコマンドを実行すると、WebSphere Process Server および WebSphere Application Server 製品のパッケージが表示されます。

```
rpm -qa | grep WS
```

WebSphere Process Server パッケージのみを検索するように、照会の範囲を絞るには、次のコマンドを入力します。

```
rpm -qa | grep WSEAA62
```

例えば、コマンド `rpm -qa | grep WSEAA62` を実行した後、以下のようなパッケージを表示することができます。

```
WSEAA62LicensingComponent-6.2-0
```

WebSphere Process Server バージョン 6.2 のパッケージ名の接頭部は WSE、接尾部は 62 です。WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 6.1 のパッケージ名の接頭部は WSB または WSP、接尾部は 61 です。アンインストールしなかった WebSphere Process Server および WebSphere Application Server 製品のパッケージは除去しないでください。

- 削除するパッケージがある場合は、`rpm -e packagename` と入力してアンインストールした製品のパッケージを除去します。

あるいは、以下のようにパッケージを検索し、リスト中のすべての項目が削除対象であることを確認することができます。

```
rpm -qa | grep WSEAA62
```

リストに削除する予定のパッケージのみが含まれている場合、以下のコマンドを使用してすべてのパッケージを除去します。

```
rpm -qa | grep WSEAA62 | xargs rpm -e
```

パッケージの依存関係に問題がある場合は、以下のコマンドを使用してパッケージを除去します。

```
rpm -e packagename --nodeps --justdb
```

`nodeps` オプションを指定すると、依存関係の検査がスキップされます。`justdb` オプションを指定すると、パッケージのデータベースのみが更新され、ファイル・システムは更新されません。`nodeps` オプションだけを指定すると、パッケージを除去する際に、依存するファイル・システム (ファイルおよびディレクトリー) にミスマッチが生じた場合に、障害が発生する可能性があります。

- インストール・ルート・ディレクトリーを除去します。 `rm -rf install_root` と入力して、WebSphere Process Server のディレクトリーを除去します。アンインストールした製品の正しい `install_root` を指定してください。例えば、デフォルト・インストール・ディレクトリー `/opt/ibm/WebSphere/ProcServer` から WebSphere Process Server をアンインストールした場合は、以下のコマンドを実行します。

```
rm -rf /opt/ibm/WebSphere/ProcServer
```

- `vpd.properties` ファイルを編集して、WebSphere Process Server と、WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment のエントリーを除去します。

このファイルは、`root` ディレクトリーなどのオペレーティング・システムのインストール・ディレクトリー内にあります。アンインストールした WebSphere Process Server のインストール済み環境のすべてのエントリーを除去します。WebSphere Process Server の各エントリーは、`WSE` という文字で始まり、その後リリース番号を表す数値が続いています。また、同じ行に、アンインストールしたインストール済み環境に対応する `install_root` パスが含まれます。(ファイルがテキスト・エディターでワード・ラップをオフにして表示された場合、各エントリーは 1 行に表示されます。) 例えば、次のような行が表示されたとし

```
WSEAA62|6|2|0|0|6.2.0.0|2=IBM WebSphere Process Server|
IBM WebSphere Process Server|IBM WebSphere Process Server V6.2|
IBM|http://www.ibm.com|6.2.0.0|
C:¥Program Files¥IBM¥WebSphere¥ProcServer|0|0|1|WSEAA62|6|2|0|0|6.2.0.0|2|0|
false|"properties/version/_uninst.wbi" "uninstall.jar" "uninstall.dat" "
"|true|3|WSEAA62|6|2|0|0|6.2.0.0|2
```

この行は、ディレクトリー `C:¥Program Files¥IBM¥WebSphere¥ProcServer` にインストールされた WebSphere Process Server に対応しています。

注: 本書内では、このテキストは、書式設定のために複数行に表示されていますが、vpd.properties ファイル内では 1 行になっています。

vpd.properties ファイル内の WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment の各エントリーの形式はこれと同様です。削除するエントリーの判別に役立つエントリーの情報、および vpd.properties ファイルについて詳しくは、WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 6.1 のインフォメーション・センターにあるトピック『vpd.properties ファイル』を参照してください。

vpd.properties ファイルは、InstallShield MultiPlatform (ISMP) プログラムがインストールするほかの製品で使用するため、削除したり、名前変更したりしないでください。vpd.properties ファイル内に、アンインストールする WebSphere Process Server または WebSphere Application Server 製品のエントリーしか存在しない場合は、このファイルを削除することができます。

7. /opt/ibm/.nif/.nifRegistry ファイルを編集します。

このファイルは、製品のインストールに使用したユーザー ID のホーム・ディレクトリー内にあります。

/opt/ibm/.nif/.nifRegistry ファイルには、WebSphere Process Server 製品のインストール環境ごとに 1 行のエントリー、WebSphere Application Server 製品のインストール環境ごとに 1 つのエントリーがあります。

フラット・ファイル・エディターを使用して、除去した製品のインストール・ルート・ディレクトリーを示す行を除去します。その他の行はそのままにしておきます。

8. installRegistryUtils コマンドを使用して、インストール済みのすべての WebSphere Process Server 製品のインストール・ロケーションを調べ、インストール・レジストリーから対象の製品を削除します。

## タスクの結果

この手順を行うと、システムがクリーンになります。これにより、同じディレクトリーに再インストールすることができます。クリーンなシステムには、以前削除したインストールの痕跡は残っていません。

## 次のタスク

システムをクリーンにした後、81 ページの『第 4 章 ソフトウェアのインストール』に進み、インストール手順を選択してください。

## Solaris システムでアンインストールに失敗した後の再インストールの準備

WebSphere Process Server のアンインストールに失敗した場合に Solaris システムをクリーンにする方法について説明します。アンインストール・プログラムを実行した後に、製品を元のディレクトリーに再インストールする際にこれを妨げる可能性のあるレジストリー項目を、この手動ステップで除去します。

## 始める前に

この手順を実行する前に、アンインストール・ウィザードを使用して、あるいはサイレントに WebSphere Process Server をアンインストールしたことが、およびその手順が最後まで正常に実行されていないことを確認してください。この手順が正常に実行されている場合は、この作業を行う必要はありません。

正しい製品を除去してクリーンなシステムを作成できるように、製品の *install\_root* ディレクトリーを判別します。

デフォルトのディレクトリーのロケーションについては、615 ページの『製品、プロファイル、およびツールのデフォルト・インストール・ディレクトリー』を参照してください。

インストール・ウィザードおよびプロファイル管理ツールにより、インストール・ルート・ディレクトリーに対して独自のロケーションを指定することができます。以下のファイルを調べて、実際のロケーションを判別します。

- */opt/.ibm/.nif/.nifregistry* ファイルは、インストール済みのすべての WebSphere Process Server 製品のインストール・ルートを示します。また、すべての WebSphere Application Server 製品を検索します。
- 作成されたプロファイルごとの *install\_root/logs/manageprofiles/profile\_name\_create.log* ファイルは、*invokeWSProfile* メソッドを含むスタンプにインストール・ロケーションを示します。

製品のアンインストールでは、*profile\_root/logs* ディレクトリー・ファイルを含む *profile\_root* ディレクトリー (*profile\_root* はプロファイルのインストール・ロケーションを表す) が削除されないまま残ります。*install\_root/logs* ディレクトリーも残ります。

## このタスクについて

以前のインストールのファイルが残っているときに製品を新規ディレクトリーに再インストールすると、共存シナリオを作成することができます。ただし、すべてのファイルおよびレジストリー項目を削除すると、WebSphere Process Server を完全に除去することができます。システムをクリーンにすることにより、共存なしで、元のディレクトリーに製品を再インストールすることができます。

**重要:** この手順のステップを通して、WebSphere Process Server と WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment の両方のアンインストールの後に残された成果物の除去を行います。対象となる WebSphere Application Server 製品は、WebSphere Process Server のインストール済み環境の基盤となる製品であることが前提となっています。

以下の手順を実行して、クリーンなシステムを作成します。

### 手順

1. 製品をインストールしたユーザーと同じユーザー ID でログインします。
2. **kill** コマンドを使用して、稼働中のすべての Java プロセスを停止します。

稼働中の Java プロセスが WebSphere Process Server または WebSphere Application Server 製品と無関係で、それらを停止できない場合は、すべての

WebSphere Process Server および WebSphere Application Server 製品関連プロセスを停止してください。次のコマンドを使用して、実行中のすべてのプロセスを判別します。

```
ps -ef | grep java
```

**kill -9 java\_pid\_1 java\_pid\_2..java\_pid\_n** コマンドで、すべての WebSphere Process Server および WebSphere Application Server 製品関連プロセスを停止します。

3. 関連パッケージを検索します。以下のコマンドを実行すると、WebSphere Process Server および WebSphere Application Server 製品のパッケージが表示されます (これらのコマンドを使用してもパッケージが表示されない場合は、次のステップをスキップしてください)。

```
pkginfo | grep WS
```

WebSphere Process Server パッケージのみを検索するように、照会の範囲を絞るには、次のコマンドを入力します。

```
pkginfo | grep WSEAA62
```

例えば、コマンド `pkginfo | grep WSEAA62` の発行後に、以下のパッケージ・リストが表示されます。

```
application WSEAA62                IBM WebSphere Process Server
application WSEAA62LC              LAP Component
```

WebSphere Process Server バージョン 6.2 のパッケージ名の接頭部は WSE、接尾部は 62 です。WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 6.1 のパッケージ名の接頭部は WSB または WSP、接尾部は 61 です。アンインストールしなかった WebSphere Process Server および WebSphere Application Server 製品のパッケージは除去しないでください。

4. ディレクトリーをパッケージ情報が登録されているディレクトリーに変更します。

```
cd /var/sadm/pkg
```

5. 次のコマンドを実行し、WebSphere Process Server または WebSphere Application Server 製品関連のパッケージをすべて除去します。

```
pkgrm packagename1 packagename2 packagename3 ...
```

アンインストールしなかった WebSphere Process Server および WebSphere Application Server 製品のパッケージは除去しないでください。

`/var/sadm/pkg` ディレクトリーから次のコマンドを発行し、`/var/sadm/pkg` ディレクトリーに登録されているすべての WebSphere Application Server 製品関連パッケージを検索および除去します。

- a. 正しいディレクトリー `cd /var/sadm/pkg` に移動します。
- b. WebSphere Application Server 製品の場合は `ls |grep WSB|xargs -i pkgrm -n {}`
- c. WebSphere Application Server クライアントの場合は `ls |grep WSC|xargs -i pkgrm -n {}`
- d. WebSphere Application Server の Web サーバー・プラグインの場合は `ls |grep WSP|xargs -i pkgrm -n {}`
- e. WebSphere Process Server 製品の場合は `ls |grep WSE|xargs -i pkgrm -n {}`

WebSphere Application Server の Web サーバー・プラグインのパッケージ名は次のとおりです。

```
WSPAA61
WSPAA61AC
WSPAA61BC
WSPAA61CC
WSPAA61DC
WSPAA61FC
WSPAA61FB
WSPAA61GC
WSPAA61HC
```

パッケージを除去する際に問題が発生する場合は、除去前のファイルを含め、`/var/sadm/pkg` ディレクトリーの関連パッケージ・ディレクトリーを除去します。例えば、`pkgrm -n WSBA61` コマンドを実行する前に、以下のファイルを除去します。

```
/var/sadm/pkg/WSBA61/install/preremove
```

6. インストール・ルート (*install\_root*) ディレクトリー内にはないプロファイル・ディレクトリーをすべて除去します。

プロファイル・ディレクトリーのロケーションを判別するには、最初に `wasprofile -listProfiles` コマンドを使用してプロファイル名を表示します。その後、プロファイル・ディレクトリーが存在する場所を判別するために、`wasprofile -getPath -profileName profile_name` コマンド (*profile\_name* は特定のディレクトリーに対応するプロファイルの名前) を使用します。

7. インストール・ルート・ディレクトリーを除去します。 `rm -rf install_root` と入力して、WebSphere Process Server のディレクトリーを除去します。アンインストールした製品の正しい *install\_root* を指定してください。例えば、デフォルト・インストール・ディレクトリー `/opt/IBM/WebSphere/ProcServer` から WebSphere Process Server をアンインストールした場合は、以下のコマンドを実行します。

```
rm -rf /opt/IBM/WebSphere/ProcServer
```

同様に、プロファイル・ディレクトリーもすべて除去します。

8. `/opt/.ibm/.nif/.nifregistry` ファイルを編集します。

このファイルには、各 WebSphere Process Server 製品のインストール環境ごとに 1 行のエントリー、各 WebSphere Application Server 製品のインストール環境ごとに 1 つのエントリーがあります。

それぞれが除去した製品を示す行が 1 行のみになった場合、これらのファイルを削除することができます。そうでない場合は、フラット・ファイル・エディターを使用して、除去した製品のインストール・ルート・ディレクトリーを示す行を除去します。その他の行はそのままにしておきます。

9. `installRegistryUtils` コマンドを使用して、インストール済みのすべての WebSphere Process Server 製品のインストール・ロケーションを調べ、インストール・レジストリーから対象の製品を削除します。

## タスクの結果

この手順を行うと、システムがクリーンになります。これにより、同じディレクトリーに再インストールすることができます。クリーンなシステムには、以前削除したインストールの痕跡は残っていません。

## 次のタスク

システムをクリーンにした後、81 ページの『第 4 章 ソフトウェアのインストール』に進み、インストール手順を選択してください。

## Windows システムでアンインストールに失敗した後の再インストールの準備

WebSphere Process Server のアンインストールに失敗した場合に Windows システムをクリーンにする方法について説明します。アンインストール・プログラムを実行した後に、製品を元のディレクトリーに再インストールする際にこれを妨げる可能性のあるレジストリー項目を、この手動ステップで除去します。

### 始める前に

この手順を実行する前に、アンインストール・ウィザードを使用して、あるいはサイレントに WebSphere Process Server をアンインストールしたこと、およびその手順が最後まで正常に実行されていないことを確認してください。この手順が正常に実行されている場合は、この作業を行う必要はありません。

正しい製品を除去してクリーンなシステムを作成できるように、製品の *install\_root* ディレクトリーを判別します。

デフォルトのディレクトリーのロケーションについては、615 ページの『製品、プロファイル、およびツールのデフォルト・インストール・ディレクトリー』を参照してください。

インストール・ウィザードおよびプロファイル管理ツールにより、インストール・ルート・ディレクトリーに対して独自のロケーションを指定することができます。以下のファイルを調べて、実際のロケーションを判別します。

- *.nifRegistry* ファイルは、インストール済みのすべての WebSphere Process Server 製品のインストール・ルートを示します。また、インストール済みのすべての WebSphere Application Server 製品のインストール・ルートも示します。場所は以下のとおりです。
  - 製品をインストールしたユーザー ID が管理特権を持っていた場合のファイルの場所は Windows ルート・ディレクトリー (ほとんどの Windows システムでは *C:\Windows* または *C:\WINNT*) です。
  - 製品をインストールしたユーザー ID が管理特権を持っていなかった場合のファイルの場所は、そのユーザー ID のホーム・ディレクトリーです。
- プロファイルの *install\_root\logs\manageprofiles\profile\_name\_create.log* ファイルは、そのプロファイルの場所を示します。このファイルでテキスト *profilePath* を検索すると、プロファイルの場所が分かります。

製品のアンインストールでは、`profile_root\logs` ディレクトリーを含む `profile_root` ディレクトリー (`profile_root` はプロファイルのインストール・ロケーションを表す) が削除されないまま残ります。`install_root\logs` ディレクトリーも残ります。

## このタスクについて

以前のインストールのファイルが残っているときに製品を新規ディレクトリーに再インストールすると、共存シナリオを作成することができます。ただし、すべてのファイルおよびレジストリー項目を削除すると、WebSphere Process Server を完全に除去することができます。システムをクリーンにすることにより、共存なしで、元のディレクトリーに製品を再インストールすることができます。

**重要:** この手順のステップを通して、WebSphere Process Server と WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment の両方のアンインストールの後に残された成果物の除去を行います。対象となる WebSphere Application Server 製品は、WebSphere Process Server のインストール済み環境の基盤となる製品であることが前提となっています。

以下の手順を実行して、クリーンなシステムを作成します。

### 手順

1. 製品をインストールしたユーザーと同じユーザー ID でログオンします。
2. オプション: Emergency Recovery Disk があることを確認します。このディスクを作成するための説明は、Windows のヘルプ文書に記載されています。

このステップは安全機能です。この手順では、リカバリー・ディスクは必要ありません。

3. オプション: Windows のリソース・キットにある `regback.exe` プログラムを使用してレジストリーをバックアップします。

このステップは安全機能です。この手順では、レジストリーのバックアップ・コピーは必要ありません。

4. アンインストールした WebSphere Process Server および WebSphere Application Server 製品の製品レジストリー項目を削除します。

コマンド・プロンプトから `regback.exe` を呼び出して、Windows システムのレジストリーを編集します。

### 注意:

レジストリーの取り扱いには注意してください。レジストリー・エディターを使用して、レジストリーの内容を表示したり編集したりする際に、間違えることがよくあります。エディターは、きわめて危険な結果を生じる場合もある編集上のエラーについて、警告を発してはくれません。レジストリーが壊れることにより、システムが破壊され、Windows オペレーティング・システムを再インストールせざるを得なくなる場合もあります。

- a. **Ctrl-F** を使用して WebSphere のインスタンスをすべて検索し、各項目を削除する必要があるかどうかを判断してください。WebSphere Process Server および WebSphere Application Server に関連したすべてのエントリーを除去できない場合がありますが、これは問題ありません。

- b. WebSphere Process Server および WebSphere Application Server 製品に関連するキーを展開し、選択します。

WebSphere Application Server 製品用の以下のキーがある場合は、削除します。

- HKEY\_CURRENT\_USER¥Software¥Microsoft¥Windows¥CurrentVersion¥Explorer¥MenuOrder¥Start Menu2¥Programs¥IBM WebSphere¥Application Server Network Deployment V6.1
- HKEY\_CURRENT\_USER¥Software¥IBM¥WebSphere Application Server Network Deployment¥6.1.0.0
- HKEY\_LOCAL\_MACHINE¥Software¥IBM¥Web server Plug-ins for IBM WebSphere Application Server¥6.1.0.0

WebSphere Application Server 6.1 Feature Pack for Web Services 製品に対するキー HKEY\_CURRENT\_USER¥Software¥IBM¥WebSphere Application Server 6.1 Feature Pack for Web Services¥6.1.0.9 が存在する場合は削除します。

WebSphere Process Server 製品用の以下のキーがある場合は、以下のキーを削除します。

- HKEY\_CURRENT\_USER¥Software¥Microsoft¥Windows¥CurrentVersion¥Explorer¥MenuOrder¥Start Menu2¥Programs¥IBM WebSphere¥Process Server 6.2
- HKEY\_CURRENT\_USER¥Software¥IBM¥WebSphere Process Server¥6.2

- c. 関連するキーごとに、メニュー・バーから「編集」>「削除」を選択します。
- d. キーの削除について確認を求められた場合は、「はい」を選択します。
- e. 終了したら、メニュー・バーから「レジストリ エディタの終了」の順に選択します。
5. アンインストールした製品のインストール・ルート・ディレクトリーを削除します。
6. regedit を使用して、アンインストールしたインストール環境に関連付けられている HKEY\_LOCAL\_MACHINE¥SYSTEM¥CurrentControlSet¥Services¥IBM WAS61 Service という形式のレジストリー・キーがあれば、すべて削除します。
7. すべてのプロファイル・ディレクトリーを判別し、それらのディレクトリーを削除します。
8. Windows エクスプローラーのウィンドウを開き、ディレクトリー C:¥Documents and Settings¥user\_id¥Start Menu¥Programs¥IBM WebSphere を参照します (ここで、user\_id は製品をインストールしたユーザーです)。

インストールされた WebSphere Application Server が 1 つのみの場合は、以下のフォルダーを削除します (このフォルダーが存在する場合)。

Application Server V6.1

インストールされた WebSphere Application Server Network Deployment が 1 つのみの場合は、以下のフォルダーを削除します (このフォルダーが存在する場合)。

Application Server Network Deployment V6.1

インストールされた WebSphere Process Server が 1 つのみの場合は、以下のフォルダーを削除します (このフォルダーが存在する場合)。

Process Server 6.2

複数のバージョンの WebSphere Application Server または WebSphere Process Server がインストールされている場合は、フォルダー名の後に数値が付加されます (例: Application Server Network Deployment V6.1 (2) または Process Server 6.2 (2))。この場合は、以下の手順を使用して削除するフォルダーを判別できます。

- a. Windows エクスプローラーで、C:\Documents and Settings\user\_id\Start Menu\Programs\IBM WebSphere を開きます (ここで、user\_id は製品をインストールしたユーザーです)。
  - b. Application Server V6.1 または Application Server Network Deployment V6.1 フォルダーを開きます。
  - c. Profile Management Tool サブフォルダーを右クリックし、「プロパティ」を選択し、「ショートカット」タブを選択します。
  - d. ターゲット・プロパティを調べて、アンインストールに失敗した WebSphere Application Server のインストールをターゲット・ディレクトリーが指しているかどうかを確認します。指している場合は、Application Server V6.1 または Application Server Network Deployment V6.1 フォルダーを削除します。
  - e. ステップ b から d までを繰り返します。ただし、今回は、ステップ b では Process Server 6.2 サブフォルダーを開くことから始めて、ステップ d ではターゲット・ディレクトリーがアンインストールに失敗した WebSphere Process Server のインストールを指しているかどうかを確認します。
  - f. この他のフォルダー・セットについて (例えば、Application Server Network Deployment V6.1 (2) および Process Server 6.2 (2))、ステップ b から e までを繰り返します。
9. .nifRegistry ファイルの項目を編集します。

.nifRegistry ファイルの場所は以下のとおりです。

- 製品をインストールしたユーザー ID が管理特権を持っていた場合のファイルの場所は Windows ルート・ディレクトリー (ほとんどの Windows システムでは C:\Windows または C:\WINNT) です。
- 製品をインストールしたユーザー ID が管理特権を持っていなかった場合のファイルの場所は、そのユーザー ID のホーム・ディレクトリーです。

.nifRegistry ファイルには、各 WebSphere Process Server 製品のインストール環境ごとに 1 行、および各 WebSphere Application Server 製品のインストール環境ごとに 1 行のエントリーがあります。

除去した製品を示す 1 行だけがファイルに存在する場合は、このファイルを削除してもかまいません。そうでない場合は、フラット・ファイル・エディターを使用して、除去した製品のインストール・ルート・ディレクトリーを示す行を除去します。その他の行はそのままにしておきます。ファイルにリストされているインストール環境すべてを除去するまでは、.nifRegistry ファイルを削除しないでください。

10. 再始動を指示するプロンプトが表示された場合、サーバーを再始動します。

### タスクの結果

この手順を行うと、システムがクリーンになります。これにより、同じディレクトリーに再インストールすることができます。クリーンなシステムには、以前削除したインストールの痕跡は残っていません。

### 次のタスク

システムをクリーンにした後、81 ページの『第 4 章 ソフトウェアのインストール』に進み、インストール手順を選択してください。

---

## Business Process Choreographer のアンインストール

Business Process Choreographer コンポーネントを WebSphere Process Server のインストール済み環境から除去する方法については、WebSphere Process Server for Multiplatforms バージョン 6.2 インフォメーション・センターで、「**WebSphere Process Server のインストールおよび構成**」>「**ソフトウェアのアンインストール**」>「**Business Process Choreographer 構成の除去**」の下の各トピックを参照してください。この情報は *Business Process Choreographer PDF* でも検索できます。

---

## 第 13 章 インストール情報

この参照用セクションには、WebSphere Process Server のインストールと構成に関連するサブタスク、およびサポートされている概念と参照情報が記載されています。

---

### ポート競合の回避

同じマシンで WebSphere Process Server と他の WebSphere 製品のインストール済み環境を共存させる場合は、ポートの競合を回避してください。

#### このタスクについて

別の WebSphere 製品の管理対象ノードが存在する WebSphere Process Server システムと同じシステム上に管理対象ノードを作成して、「固有の HTTP ポートを生成する」チェック・ボックスにチェック・マークを付けた場合は、addNode コマンドにより、競合が発生しないように 2 番目のノード・エージェント・プロセスのポート割り当てが自動的に増分されます。addNode コマンドは、既存のプロファイルが以下のいずれかのタイプである場合に、ポート割り当てを自動的に増分します。

- WebSphere Process Server
- WebSphere Enterprise Service Bus
- WebSphere Application Server バージョン 6.0 以降
- WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 6.0 以降

プロファイル管理ツールでも、WebSphere Process Server のカスタム・プロファイルの作成中にカスタム・プロファイルを統合するとき、ポート割り当てを正常に処理します。

addNode コマンドは、既存のインスタンスが以下のいずれかのタイプである場合は、ポート割り当てを自動的に増分しません。

- WebSphere Business Integration Server Foundation
- WebSphere Application Server Enterprise
- バージョン 6.0 より前の WebSphere Application Server
- バージョン 6.0 より前の WebSphere Application Server Network Deployment

この場合は、addNode コマンドでも、プロファイル管理ツールでも、これらのインスタンスに対するポート割り当てのレコードが保持されません。2 番目の WebSphere Process Server ノード・エージェント・プロセスへのポート割り当てが増分されないため、競合が発生する可能性があります。

この競合により、2 番目のノードを始動できなくなることがあります。例えば、既存の管理対象ノードを最初に始動した場合、WebSphere Process Server ノードを始動できません。WebSphere Process Server ノードを最初に始動すると、既存のノードを始動できません。

addNode コマンドがポート割り当てを自動的に増分しないこのような場合、以下の手順を実行し、競合しないポートを使用して WebSphere Process Server 管理対象ノードを作成する必要があります。

#### 手順

1. WebSphere Process Server スタンドアロン・サーバーまたはカスタム・プロファイルを作成します。を作成します。

プロファイル管理ツールを使用して、プロファイルを作成します。「プロファイル作成オプション」パネルで、「標準的なプロファイル作成」または「高度なプロファイル作成」の実行を選択します。カスタム・プロファイルを作成する場合は、作成時に統合しないでください。「プロファイル管理ツール」パネルで、プロファイルを後で統合するチェック・ボックスを選択します。

2. 使用中のポートを確認して、WebSphere Process Server のノード・エージェント・プロセスの開始ポート番号を決定します。

既存のポート割り当てを確認するには、netstat -a コマンドを使用します。ポート割り当てを分析して、12 の順次空きポートを判別します。

**注:** i5/OS i5/OS システムの場合、コマンドは、i5/OS のコマンド行から実行する必要がある CL コマンドである netstat \*cnn です。

3. ポートを更新します。この実行方法に詳しくない場合は、『ポートの構成』にある情報を参照してください。

---

## 暫定修正の自動インストール

WebSphere Process Server の暫定修正は、事前定義またはユーザー定義のディレクトリー・ロケーションに配置することで自動的にインストールすることができます。ディレクトリーはインストール中に暫定修正がないか検査され、暫定修正があればインストール・プロセスの一部としてインストールされます。

多くの場合、製品が完全に機能するためには重要なまたは必須の暫定修正のセットが必要とされ、それらは製品と同時に出荷されます。製品パッケージ・ディスクに含まれていない暫定修正は、インストール・イメージのパッケージに含めることができます。これらの修正は、事前定義のロケーション <INSTALL\_IMAGE\_LOC>/WBI/WBI\_Fixes にあります。DVD ではなく書き込み可能なロケーションからインストールする場合、ソフトウェアはインストール中にこの事前定義のディレクトリーを検査して、インストールが必要な暫定修正がないか調べます。

**制約事項:** WebSphere Application Server の暫定修正では、暫定機能の自動インストールを使用できません。

暫定修正が見つかった場合、修正は製品バイナリー・ファイルの後にインストールされます。インストーラー・プログラムは暫定修正がこのロケーションに見つかったか検査して、インストールの要約パネルにレポートします。暫定修正が見つからない場合、インストールは通常通り続行されます。

柔軟性を一層高めるために、関連する暫定修正をダウンロードして、DVD から直接インストールしない場合はデフォルト・ディレクトリーに配置するか、または選択

したディレクトリーに配置することができます。ユーザー定義のディレクトリーは追加のディレクトリーです。ユーザー定義のディレクトリーおよびデフォルト・ディレクトリーの両方が、暫定修正がないか検査されます。

対話式インストールの場合、インストール・プログラムはパラメーター **-OPT fixLocation=<user\_fix\_dir>** を付けて起動する必要があります。ここで、<user\_fix\_dir> はユーザー定義のディレクトリーです。

- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合: `install -OPT fixLocation=<user_fix_dir>`
- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: `install.exe -OPT fixLocation=<user_fix_dir>`

注: **i5/OS** 暫定修正の自動インストールは、i5/OS プラットフォームについてのリモート・インストールを実行するときは利用できません。この機能は、System i サーバーでサイレント・インストールを直接実行する場合にのみ使用できます。

サイレント・インストールの場合、応答ファイルには以下の追加パラメーターを設定します。

`fixLocation=<user_fix_dir>`

このパラメーターは、提供されているサンプルの応答ファイル内ではデフォルトでコメント化されています。

事前定義ディレクトリーおよびユーザー定義ディレクトリーからの暫定修正のインストールには、規定された順序があります。事前定義ディレクトリーが最初に検査され、その後でユーザー定義ディレクトリーが続きます。インストール・プログラムが事前定義ディレクトリーおよびユーザー定義ディレクトリーの両方で修正を検出した場合、どちらの修正のセットもインストールされます。両方のディレクトリーで同じ修正が検出された場合、常にユーザー定義ディレクトリーの暫定修正が使用されます。インストール・プログラムは、指定されたディレクトリーに限って修正を検査します。サブディレクトリーは再帰的に検査されません。インストール・プログラムは、「インストールの要約」パネルを表示する前に、暫定修正が有効かどうかを検査します。無効な修正はこの要約パネルには表示されず、インストールもされませんが、エラー・メッセージは何も表示されません。

---

## 製品、プロファイル、およびツールのデフォルト・インストール・ディレクトリー

製品情報での `install_root`、`user_data_root`、`profile_root`、`updi_root`、および `cip_proc_server_root` の記述は、製品のインストール済み環境、プロファイル構成ファイル、およびツールのための特定のデフォルト・ディレクトリーの場所を示します。このトピックでは、WebSphere Process Server に使用する規則について説明します。これらの変数の意味は、製品をクリーン・サーバーにインストールするか、WebSphere Application Server、WebSphere Application Server Network Deployment、WebSphere Process Server、または WebSphere Enterprise Service Bus が既にインストールされているサーバーにインストールするかによって異なる場合

があります。またこれらは、インストールを root ユーザー (Windows システムでは Administrator) として実行しているか、非 root ユーザーとして実行しているかによっても異なる場合があります。

## root 以外のユーザーがインストールする場合の制限

**Linux** **UNIX** **Windows** root、Administrator、および非 root ユーザーが製品をインストールできます。インストール・ウィザードが用意するデフォルトのディレクトリーは、ユーザーが root (Administrator) 権限を持つかどうかで異なります。

**Linux** **UNIX** **Windows** root および Administrator ユーザーは共用製品を登録でき、システム所有のディレクトリー (すべてのユーザーが使用可能なグローバル共有リソース) にインストールできますが、非 root ユーザーはこれができません。root 以外のユーザーは、そのユーザーが所有しているディレクトリーにしかインストールできません。

## この資料で使用されている変数

この資料では、特定のデフォルト・ディレクトリーを表すいくつかの変数が使用されています。これらのファイル・パスは、デフォルトのロケーションです。書き込み権限を所有しているディレクトリーであればどのディレクトリーにも、製品およびその他のコンポーネントをインストールし、プロファイルを作成できます。WebSphere Process Server 製品またはコンポーネントを複数インストールする場合は、もちろん複数のロケーションが必要です。

以下に、この資料で使用されている主な変数を示します。

**注:** **i5/OS** **i5/OS プラットフォーム:** i5/OS システム上でインストールを実行するには、\*SECADM および \*ALLOBJ の特殊権限を備えたユーザー・プロファイルを持つ必要があります。

**Linux** **UNIX** **Windows** **Linux、UNIX、および Windows プラットフォーム:**  
*install\_root*

WebSphere Process Server のインストール・ロケーション。WebSphere Process Server は常に、関連付けられた WebSphere Application Server Network Deployment と同じ場所にインストールされます。

**i5/OS** **i5/OS プラットフォーム:** *user\_data\_root*  
WebSphere Process Server のデフォルト・ユーザー・データ・ディレクトリー。 *user\_data\_root* は *install\_root* とは異なるため、これらを同じ場所にすることはできません。製品をインストールすると、*profiles* および *profileRegistry* サブディレクトリーがこのディレクトリーの下に作成されます。

*profile\_root*

WebSphere Process Server プロファイルの場所。

*updi\_root*

Update Installer for WebSphere Software のインストール場所。

### *cip\_proc\_server\_root*

Installation Factory によって作成されたカスタマイズ・インストール・パッケージ (CIP) のインストール・ロケーション。CIP は、1 つ以上の保守パッケージとその他のオプション・ファイルおよびスクリプトと一緒にバンドルされている WebSphere Process Server 製品です。

## クリーンなサーバー上のデフォルト・ディレクトリー

以下の表に、WebSphere Process Server、WebSphere Process Server プロファイル、および Update Installer for WebSphere Software のデフォルトのインストールの場所と、インストール・ファクトリーによって生成されたカスタマイズ・インストール・パッケージ (CIP) のデフォルトのインストールの場所を示します。ただし、これらがデフォルトの場所になるのは、その他の WebSphere 製品の既存のインストール済み環境がない 場合です。

表 141 は、root (Administrator) ユーザーおよび非 root ユーザーの両方について、インストール・ウィザードが WebSphere Process Server および WebSphere Application Server Network Deployment の両方をインストールするデフォルトのインストール・ルート・ディレクトリーを示したものです。

表 141. *install\_root* デフォルト・ディレクトリー

root または Administrator ユーザーのデフォルトの <i>install_root</i>	root 以外のユーザーのデフォルトの <i>install_root</i>
<b>AIX</b> AIX プラットフォーム: /usr/IBM/WebSphere/ProcServer	<b>AIX</b> AIX プラットフォーム: <i>user_home</i> /IBM/WebSphere/ProcServer
<b>HP-UX</b> <b>Solaris</b> HP-UX および Solaris プラットフォーム: /opt/IBM/WebSphere/ProcServer	<b>HP-UX</b> <b>Solaris</b> HP-UX および Solaris プラットフォーム: <i>user_home</i> /IBM/WebSphere/ProcServer
<b>Linux</b> Linux プラットフォーム: /opt/ibm/WebSphere/ProcServer	<b>Linux</b> Linux プラットフォーム: <i>user_home</i> /ibm/WebSphere/ProcServer
<b>Windows</b> Windows プラットフォーム: C:\Program Files\IBM\WebSphere\ProcServer	<b>Windows</b> Windows プラットフォーム: C:\IBM\WebSphere\ProcServer

表 142 は、root (Administrator) ユーザーおよび非 root ユーザーの両方について、*profile\_name* という名前のプロファイルのデフォルト・インストール・ディレクトリーを示したものです。

表 142. *profile\_root* デフォルト・ディレクトリー

root または Administrator ユーザーのデフォルトの <i>profile_root</i>	root 以外のユーザーのデフォルトの <i>profile_root</i>
<b>AIX</b> AIX プラットフォーム: /usr/IBM/WebSphere/ProcServer/profiles/ <i>profile_name</i>	<b>AIX</b> AIX プラットフォーム: <i>user_home</i> /IBM/WebSphere/ProcServer/profiles/ <i>profile_name</i>

表 142. *profile\_root* デフォルト・ディレクトリー (続き)

root または Administrator ユーザーの デフォルトの <i>profile_root</i>	root 以外のユーザーのデフォルトの <i>profile_root</i>
<p><b>HP-UX</b> <b>Solaris</b> <b>HP-UX</b> および <b>Solaris</b> プラットフォーム: /opt/IBM/WebSphere/ProcServer/profiles/ <i>profile_name</i></p>	<p><b>HP-UX</b> <b>Solaris</b> <b>HP-UX</b> および <b>Solaris</b> プラットフォーム: <i>user_home</i>/IBM/WebSphere/ProcServer/profiles/ <i>profile_name</i></p>
<p><b>Linux</b> <b>Linux</b> プラットフォーム: /opt/ibm/WebSphere/ProcServer/profiles/ <i>profile_name</i></p>	<p><b>Linux</b> <b>Linux</b> プラットフォーム: <i>user_home</i>/ibm/WebSphere/ProcServer/profiles/ <i>profile_name</i></p>
<p><b>Windows</b> <b>Windows</b> プラットフォーム: C:\Program Files\IBM\WebSphere\ ProcServer\profiles\<i>profile_name</i></p>	<p><b>Windows</b> <b>Windows</b> プラットフォーム: C:\IBM\WebSphere\ProcServer\profiles\ <i>profile_name</i></p>

表 143 は、root (Administrator) ユーザーおよび非 root ユーザーの両方について、Update Installer for WebSphere Software のデフォルト・インストール・ディレクトリーを示したものです。

表 143. *updi\_root* デフォルト・ディレクトリー

root または Administrator ユーザーの デフォルトの <i>updi_root</i>	root 以外のユーザーのデフォルトの <i>updi_root</i>
<p><b>AIX</b> <b>AIX</b> プラットフォーム: /usr/IBM/WebSphere/UpdateInstaller</p>	<p><b>AIX</b> <b>AIX</b> プラットフォーム: <i>user_home</i>/IBM/WebSphere/UpdateInstaller</p>
<p><b>HP-UX</b> <b>Linux</b> <b>Solaris</b> <b>HP-UX</b>、<b>Linux</b>、および <b>Solaris</b> プラットフ ォーム: /opt/IBM/WebSphere/UpdateInstaller</p>	<p><b>HP-UX</b> <b>Linux</b> <b>Solaris</b> <b>HP-UX</b>、<b>Linux</b>、および <b>Solaris</b> プラットフ ォーム: <i>user_home</i>/IBM/WebSphere/ UpdateInstaller</p>
<p><b>Windows</b> <b>Windows</b> プラットフォーム: C:\Program Files\IBM\WebSphere\UpdateInstaller</p>	<p><b>Windows</b> <b>Windows</b> プラットフォーム: C:\IBM\WebSphere\UpdateInstaller</p>

**Linux** **UNIX** **Windows** **Linux**、**UNIX**、および **Windows** プラットフォーム  
: 619 ページの表 144 は、root (Administrator) ユーザーおよび非 root ユーザーの両  
方について、インストール・ファクトリーによって作成されたカスタマイズ・イン  
ストール・パッケージ (CIP) のデフォルト・インストール・ディレクトリーを示し  
たものです。*cid\_uid* 変数は、ビルド定義ファイルの作成時に生成された CIP 固有  
の ID です。ビルド定義ウィザードで生成された値は、オーバーライドできます。  
システムに複数の CIP をインストールできるようにするには、固有値を使用しま  
す。

表 144. *cip\_proc\_server\_root* デフォルト・ディレクトリー

root または Administrator ユーザーのデフォルトの <i>cip_proc_server_root</i>	root 以外のユーザーのデフォルトの <i>cip_proc_server_root</i>
<b>AIX</b> AIX プラットフォーム: /usr/IBM/WebSphere/ProcServer/cip/cip_uid	<b>AIX</b> AIX プラットフォーム: user_home/IBM/WebSphere/ProcServer/cip/cip_uid
<b>HP-UX</b> <b>Solaris</b> HP-UX および Solaris プラットフォーム: /opt/IBM/WebSphere/ProcServer/cip/cip_uid	<b>HP-UX</b> <b>Solaris</b> HP-UX および Solaris プラットフォーム: user_home/IBM/WebSphere/ProcServer/cip/cip_uid
<b>Linux</b> Linux プラットフォーム: /opt/ibm/WebSphere/ProcServer/cip/cip_uid	<b>Linux</b> Linux プラットフォーム: user_home/ibm/WebSphere/ProcServer/cip/cip_uid
<b>Windows</b> Windows プラットフォーム: C:\Program Files\IBM\WebSphere\ProcServer\cip\cid	<b>Windows</b> Windows プラットフォーム: C:\IBM\WebSphere\ProcServer\cip\cid

表 145 は、i5/OS プラットフォームのデフォルト・ディレクトリーを示したものです。

表 145. クリーン・サーバーの i5/OS デフォルト・ディレクトリー

デフォルト・ディレクトリー変数	デフォルト・ディレクトリー
<i>install_root</i>	<b>i5/OS</b> i5/OS プラットフォーム: /QIBM/ProdData/WebSphere/ProcServer
<i>updi_root</i>	<b>i5/OS</b> i5/OS プラットフォーム: /QIBM/ProdData/WebSphere/UpdateInstaller
<i>user_data_root</i>	<b>i5/OS</b> i5/OS プラットフォーム: /QIBM/UserData/WebSphere/ProcServer/
<i>profile_root</i>	<b>i5/OS</b> i5/OS プラットフォーム: /QIBM/UserData/WebSphere/ProcServer/profiles/ <i>profile_name</i>

## WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment が既にインストールされている場合のデフォルト・ディレクトリー

サポートされるバージョンの WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment がサーバーにインストールされている場合、WebSphere Process Server をその上にインストールすると、WebSphere Process Server は同じ場所にインストールされます。620 ページの表 146 は、root (Administrator) ユーザーおよび非 root ユーザーの両方について、そのような場合でのデフォルトのインストール・ルート・ディレクトリーを示したものです。

表 146. WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment が既にインストールされている場合の *install\_root* デフォルト・ディレクトリー

root または Administrator ユーザーのデフォルトの <i>install_root</i>	root 以外のユーザーのデフォルトの <i>install_root</i>
<b>AIX</b> AIX プラットフォーム: /usr/IBM/WebSphere/AppServer	<b>AIX</b> AIX プラットフォーム: <i>user_home</i> /IBM/WebSphere/AppServer
<b>HP-UX</b> <b>Linux</b> <b>Solaris</b> HP-UX、Linux、および Solaris プラットフォーム: /opt/IBM/WebSphere/AppServer	<b>HP-UX</b> <b>Linux</b> <b>Solaris</b> HP-UX、Linux、および Solaris プラットフォーム: <i>user_home</i> /IBM/WebSphere/AppServer
<b>Windows</b> Windows プラットフォーム: C:\Program Files\IBM\WebSphere\AppServer	<b>Windows</b> Windows プラットフォーム: C:\IBM\WebSphere\AppServer

*profile\_root*、*updi\_root*、および *cip\_proc\_server\_root* 用のデフォルト・ディレクトリーは同じように扱われます。

表 147 は、i5/OS プラットフォームのデフォルト・ディレクトリーを示したものです。

表 147. WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment が既にインストールされている場合の i5/OS デフォルト・ディレクトリー

デフォルト・ディレクトリー変数	デフォルト・ディレクトリー
<i>install_root</i>	<b>i5/OS</b> i5/OS プラットフォーム: /QIBM/ProdData/WebSphere/Appserver/V61/ND
<i>user_data_root</i>	<b>i5/OS</b> i5/OS プラットフォーム: /QIBM/UserData/WebSphere/Appserver/V61/ND
<i>profile_root</i>	<b>i5/OS</b> i5/OS プラットフォーム: /QIBM/UserData/WebSphere/Appserver/V61/ND/ <i>profiles/profile_name01</i>

## WebSphere Process Server のインストールが存在する場合のデフォルト・ディレクトリー

WebSphere Process Server がサーバー上にインストールされているとき、インストール・ウィザードを実行して製品の 2 度目のインストールを開始すると、インストール・ウィザードは既存のインストール済み環境を検出して、2 つ目のデフォルト・ディレクトリーに番号を追加します。例えば、WebSphere Process Server がデフォルト・ディレクトリー /opt/IBM/WebSphere/ProcServer に存在している場合に、2 回目のインストール・ウィザードを実行すると、インストール・ウィザードは、「インストール・ロケーション」パネルに 2 番目の製品インストール用のデフォルトのインストール・ロケーション /opt/IBM/WebSphere/ProcServer1 を表示します。621 ページの表 148 は、root (Administrator) ユーザーおよび非 root ユーザーの両方について、そのような場合でのデフォルトのインストール・ルート・ディレクトリーを示したものです。

表 148. WebSphere Process Server の既存のインストールが存在している場合の *install\_root* デフォルト・ディレクトリー

root または Administrator ユーザーのデフォルトの <i>install_root</i>	root 以外のユーザーのデフォルトの <i>install_root</i>
<b>AIX</b> AIX プラットフォーム: /usr/IBM/WebSphere/ProcServer1	<b>AIX</b> AIX プラットフォーム: user_home/IBM/WebSphere/ProcServer1
<b>HP-UX</b> <b>Solaris</b> HP-UX および Solaris プラットフォーム: /opt/IBM/WebSphere/ProcServer1	<b>HP-UX</b> <b>Solaris</b> HP-UX および Solaris プラットフォーム: user_home/IBM/WebSphere/ProcServer1
<b>Linux</b> Linux プラットフォーム: /opt/ibm/WebSphere/ProcServer1	<b>Linux</b> Linux プラットフォーム: user_home/ibm/WebSphere/ProcServer1
<b>Windows</b> Windows プラットフォーム: C:\Program Files\IBM\WebSphere\ProcServer1	<b>Windows</b> Windows プラットフォーム: C:\IBM\WebSphere\ProcServer1

**重要:** このシナリオでは、WebSphere Process Server がインストールされていない状態の WebSphere Application Server Network Deployment の 2 つ目のインストール済み環境は、サーバー上に存在しないことを想定しています。これがあある場合、WebSphere Process Server を同じディレクトリー (/opt/IBM/WebSphere/AppServer など) にインストールするか、または WebSphere Process Server および WebSphere Application Server Network Deployment の両方を、前述のディレクトリーに新たにインストールすることができます。

表 149 は、i5/OS プラットフォームのデフォルト・ディレクトリーを示したものです。

表 149. WebSphere Process Server がインストールされている場合の i5/OS デフォルト・ディレクトリー

デフォルト・ディレクトリー変数	デフォルト・ディレクトリー
<i>install_root</i>	<b>i5/OS</b> i5/OS プラットフォーム: /QIBM/ProdData/WebSphere/ProcServer1
<i>user_data_root</i>	<b>i5/OS</b> i5/OS プラットフォーム: /QIBM/UserData/WebSphere/ProcServer1
<i>profile_root</i>	<b>i5/OS</b> i5/OS プラットフォーム: /QIBM/UserData/WebSphere/ProcServer1/ profiles/profile_name01

## WebSphere Enterprise Service Bus がインストールされている場合のデフォルト・ディレクトリー

WebSphere Enterprise Service Bus がサーバー上にインストールされている場合、WebSphere Process Server をその上にインストールすると、WebSphere Process Server は同じ場所にインストールされます。622 ページの表 150 は、root (Administrator) ユーザーおよび非 root ユーザーの両方について、そのような場合でのデフォルトのインストール・ルート・ディレクトリーを示したものです。

表 150. WebSphere Process Server を WebSphere Enterprise Service Bus の既存のインストール済み環境の上にインストールしたときの *install\_root* デフォルト・ディレクトリー

root または Administrator ユーザーのデフォルトの <i>install_root</i>	root 以外のユーザーのデフォルトの <i>install_root</i>
<b>AIX</b> AIX プラットフォーム: /usr/IBM/WebSphere/ESB	<b>AIX</b> AIX プラットフォーム: <i>user_home</i> /IBM/WebSphere/ESB
<b>HP-UX</b> <b>Solaris</b> HP-UX および Solaris プラットフォーム: /opt/IBM/WebSphere/ESB	<b>HP-UX</b> <b>Solaris</b> HP-UX および Solaris プラットフォーム: <i>user_home</i> /IBM/WebSphere/ESB
<b>Linux</b> Linux プラットフォーム: /opt/ibm/WebSphere/ESB	<b>Linux</b> Linux プラットフォーム: <i>user_home</i> /ibm/WebSphere/ESB
<b>Windows</b> Windows プラットフォーム: C:\Program Files\IBM\WebSphere\ESB	<b>Windows</b> Windows プラットフォーム: C:\IBM\WebSphere\ESB

**重要:** このシナリオでは、WebSphere Process Server がインストールされていない状態の WebSphere Application Server Network Deployment の 2 つ目のインストール済み環境は、サーバー上に存在しないことを想定しています。存在している場合は、WebSphere Process Server をそれと同じディレクトリー (例えば /opt/IBM/WebSphere/AppServer) にインストールできます。

*profile\_root*、*updi\_root*、および *cip\_proc\_server\_root* のデフォルト・ディレクトリーは同じように扱われます。

表 151 は、i5/OS プラットフォームのデフォルト・ディレクトリーを示したものです。

表 151. WebSphere Enterprise Service Bus がインストールされている場合の i5/OS デフォルト・ディレクトリー

デフォルト・ディレクトリー変数	デフォルト・ディレクトリー
<i>install_root</i>	<b>i5/OS</b> i5/OS プラットフォーム: /QIBM/ProdData/WebSphere/ESB1
<i>user_data_root</i>	<b>i5/OS</b> i5/OS プラットフォーム: /QIBM/UserData/WebSphere/ESB1
<i>profile_root</i>	<b>i5/OS</b> i5/OS プラットフォーム: QIBM/UserData/WebSphere/ESB1/profiles/ <i>profile_name</i> 01

## i5/OS スクリプト

これらの WebSphere Application Server スクリプトは、WebSphere Process Server の使用時にタスクを実行するために一般に使用されます。これらのスクリプトのデフォルトの場所は、*install\_root*/bin ディレクトリーです。プロファイルが作成されると、スクリプトのコピーも *profile\_root*/bin ディレクトリーに書き込まれます。

注: 他のプラットフォームと異なり、i5/OS Qshell スクリプトではファイル名に拡張子 (.bat または .sh) が付きません。例えば、Windows プラットフォームでは addNote.bat というスクリプトが、i5/OS では addNode になります。

i5/OS 用の WebSphere Process Server でよく使用されるスクリプトの説明については、表を参照してください。

表 152. i5/OS 用の WebSphere Process Server でよく使用されるスクリプト

スクリプト	説明
backupConfig	backupConfig コマンドは、ノードの構成をファイルにバックアップする単純なユーティリティです。
enableJVM	enableJVM コマンドを使用すると、サーバーの始動時に JVM に対して IBM J2SE 5.0 32-bit JVM と i5/OS Java Developer Kit 5.0 JVM (64 ビット、「クラシック」JVM としても知られる) のどちらを使用するかを切り替えることができます。  i5/OS V6R1 リリースには、追加の JVM である i5/OS 用の Java 2 Standard Edition (J2SE) 64 ビット版 JVM のサポートが組み込まれています。この JVM を使用可能に設定するには、 <code>-jvm std64</code> を使用します。その他のオプションには、IBM J2SE 5.0 32 ビット版 JVM を指定する <code>std32</code> と、i5/OS Java Developer Kit 5.0 JVM を指定する <code>classic</code> があります。
historyInfo	historyInfo コマンドは、 <code>properties/version</code> フォルダおよび <code>properties/version/history</code> フォルダ内の XML ファイルから抽出されたデータからレポートを生成します。このレポートには、変更されたコンポーネントのリスト、およびインストールされた保守パッケージまたはアンインストールされた保守パッケージの履歴が含まれています。
wbi_ivt	インストールの検証 (wbi_ivt) スクリプトは、あるインスタンスのデプロイメント・マネージャーまたはスタンドアロン・サーバーが正常に機能しているか検証します。スタンドアロン・サーバーで実行するとき、このスクリプトはヘルス・モニター・テストも実行し、レポートを生成します。
manageprofiles	manageprofiles コマンド行ツールは、アプリケーション・サーバーのすべてのランタイム環境を作成します。このコマンドは、スタンドアロンのアプリケーション・サーバーのランタイム環境を定義するファイル・セットであるプロファイルを作成します。
restoreConfig	restoreConfig コマンドは、backupConfig コマンドを使用してノードの構成をバックアップした後に、その構成をリストアする場合に使用します。
startNode	startNode コマンドは、ノード・エージェント・プロセスの構成ファイルを読み取って、launch コマンドを構成します。
startServer	startServer コマンドは、指定されたアプリケーション・サーバーの構成ファイルを読み取って、そのサーバーを開始します。

表 152. i5/OS 用の WebSphere Process Server でよく使用されるスクリプト (続き)

スクリプト	説明
stopNode	stopNode コマンドは、Network Deployment のノード・エージェント・プロセスの構成ファイルを読み取り、ノード・エージェントのシャットダウンを指示する Java Management Extensions (JMX) コマンドを送信します。
stopServer	stopServer コマンドは、指定されたサーバー・プロセスの構成ファイルを読み取ります。このコマンドは、サーバーのシャットダウンを指示する Java Management Extensions (JMX) コマンドをサーバーに送信します。
versionInfo	versionInfo コマンドは、properties/version フォルダー内の XML ファイルから抽出されたデータからレポートを生成します。このレポートには、変更されたコンポーネント、およびインストールされた保守パッケージまたはアンインストールされた保守パッケージのリストが含まれています。

i5/OS 上の WebSphere Application Server では、いくつかの i5/OS プラットフォーム固有のスクリプトも提供しています。次の表には、i5/OS プラットフォーム固有の一部のスクリプトが記載されています。

表 153. i5/OS プラットフォーム固有のスクリプト

スクリプト	説明
chgwassvr	chgwassvr コマンドを使用すると、プロファイル内のアプリケーション・サーバーのポートを変更できます。
dspwasinst	dspwasinst コマンドは、プロファイルと、それに含まれているアプリケーション・サーバーに関する情報を表示します。

## install コマンド

install コマンドは、製品と製品内の大半のコンポーネントをインストールするコマンドです。製品をインストールする場合、インストーラー・プログラムによってコア製品ファイルがインストールされ、プロファイルが作成されます。インストール時の選択内容によっては、プロファイルが作成されない場合もあります。サイレント・パラメーターを指定すると、インストール・ウィザードがサイレント・モードで実行され、グラフィカル・ユーザー・インターフェースが表示されません。

### 目的

このトピックでは、install コマンドのコマンド行構文について説明します。install コマンド・モジュールをコマンド行から開始して、製品をインストールします。

### 製品のインストールを始める前に

インストールできるようにオペレーティング・システムを準備します。42 ページの『インストールのためのオペレーティング・システムの準備』の手順に従って作業を開始します。

コマンド・ファイルは、製品ディスクまたは CIP 上にあるコンポーネントのルート・ディレクトリーにあります。

install コマンドを実行すると、製品パッケージのほとんどすべてのコンポーネントでインストール・プログラムが開始されます。

- **i5/OS** **i5/OS** プラットフォーム (i5/OS ネイティブ・インストール): install
- **i5/OS** **i5/OS** プラットフォーム (リモート Windows インストール):  
install.exe
- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォーム: install
- **Windows** **Windows** プラットフォーム: install.exe

このコマンドまたは代替コマンドを特定のオペレーティング・システムのコンポーネントに適用できない場合は、N/A という略語を表 154 に記載しています。コンポーネントをオペレーティング・システムにインストールできない場合、コマンドを適用することはできません。

表 154. WebSphere Application Server Network Deployment Supplements V6.1 CD および WebSphere Application Server Toolkit V6.1.1 Disk 1 CD でのソフトウェアのインストール・コマンド

オペレーティング・システム	Application Client	IBM HTTP Server	Web サーバー・プラグイン	IBM Support Assistant	Application Server Toolkit
AIX	/AppClient/install	/IHS/install	/plugin/install	/ISA/install.bin	N/A
HP-UX	/AppClient/install	/IHS/install	/plugin/install	/ISA/install.bin	N/A
i5/OS	<ul style="list-style-type: none"> <li>• /AppClient/install (ネイティブ・インストール)</li> <li>• ¥AppClient¥install.exe (リモート Windows インストール)</li> </ul>	N/A	<ul style="list-style-type: none"> <li>• /plugin/install (ネイティブ・インストール)</li> <li>• ¥plugin¥install.exe (リモート Windows インストール)</li> </ul>	N/A	N/A
Linux	/AppClient/install	/IHS/install	/plugin/install	/ISA/install.bin	/install
Solaris	/AppClient/install	/IHS/install	/plugin/install	/ISA/install.bin	N/A
Windows	¥AppClient¥install.exe	¥IHS¥install.exe	¥plugin¥install.exe	¥ISA¥install.exe	¥install.exe

表 155. WebSphere Process Server DVD でのソフトウェアのインストール・コマンド

オペレーティング・システム	WebSphere Process Server	IBM WebSphere Installation Factory	IBM WebSphere Profile Management Tool Client for i5/OS	IBM WebSphere Process Server ヘルプ・システム	Update Installer (UPDI)	Message Service Clients for C/C++	Message Service Clients for .NET
AIX	/WBI/install	/IF/setupif.sh	N/A	/IEHS/install	/UpdateInstaller/install	MsgClients/XMSCC/setupAix.bin	N/A
HP-UX	/WBI/install	/IF/setupif.sh	N/A	/IEHS/install	/UpdateInstaller/install	N/A	N/A

表 155. WebSphere Process Server DVD でのソフトウェアのインストール・コマンド (続き)

オペレーティング・システム	WebSphere Process Server	IBM WebSphere Installation Factory	IBM WebSphere Profile Management Tool Client for i5/OS	IBM WebSphere Process Server ヘルプ・システム	Update Installer (UPDI)	Message Service Clients for C/C++	Message Service Clients for .NET
i5/OS	<ul style="list-style-type: none"> <li>• /WBI/install (ネイティブ・インストール)</li> <li>• ¥WBI¥ install.exe (リモート Windows インストール)</li> </ul>	¥IF¥ setupif.bat (リモート Windows サーバーでのみ実行)	¥PMTClient¥ PMTInstaller.exe (リモート Windows インストール)	¥IEHS¥ install.exe (リモート Windows サーバーでのみ実行)	<ul style="list-style-type: none"> <li>• /UpdateInstaller/install (ネイティブ・ヘッドレス)</li> <li>• ¥UpdateInstaller¥ install.exe (Windows での GUI)</li> </ul>	N/A	N/A
Linux	/WBI/install	/IF/setupif.sh	N/A	/IEHS/install	/UpdateInstaller/install	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 32 ビット: MsgClients/XMSCC/setuplinuxia32</li> <li>• 64 ビット: MsgClients/XMSCC/setuplinux-x86_64</li> </ul>	N/A
Solaris	/WBI/install	/IF/setupif.sh	N/A	/IEHS/install	/UpdateInstaller/install	MsgClients/XMSCC/setup-solaris	N/A
Windows	¥WBI¥ install.exe	¥IF¥ setupif.bat	N/A	¥IEHS¥ install.exe	¥UpdateInstaller¥ install.exe	MsgClients¥XMSCC¥ setup.exe	MsgClients¥XMSNET¥ dotNETClientsetup.exe

## パラメーターおよび構文

このセクションでは、インストール・ウィザードを開始するコマンドについて説明します。

- インストール・ウィザードを開始してグラフィカル・ユーザー・インターフェースを表示するには、install コマンドを以下のように実行します。
  - **i5/OS** **i5/OS** プラットフォーム (**i5/OS** ネイティブ・インストール):  
component\_disc\_directory/install
  - **i5/OS** **i5/OS** プラットフォーム (リモート **Windows** インストール):  
component\_disc\_directory¥install.exe
  - **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォーム:  
component\_disc\_directory/install
  - **Windows** **Windows** プラットフォーム:  
component\_disc\_directory¥install.exe
- インストール・ウィザードをサイレント・モードで開始してグラフィカル・ユーザー・インターフェースを表示しないようにするには、install -silent コマンドを以下のように実行します。
  - **i5/OS** **i5/OS** プラットフォーム (**i5/OS** ネイティブ・インストール):  
component\_disc\_directory/install -options "response\_file\_name" -silent

- **i5/OS** **i5/OS** プラットフォーム (リモート **Windows** インストール):  
`component_disc_directory%install.exe -options "response_file_name" -silent`
- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォーム:  
`component_disc_directory/install -options "response_file_name" -silent`
- **Windows** **Windows** プラットフォーム:  
`component_disc_directory%install.exe -options "response_file_name" -silent`

install コマンド・オプションは、以下の作業を実行するために使用します。

- 新規製品のインストールを実行する。
- 既存のインストール済み環境に機能を追加して増分インストールを実行する。
- 既存のインストール済み環境を新しいサービス・レベルに更新する (「スリップ・インストール」という用語は、既存のインストール済み環境に対する更新 (インストール済み環境を新しいサービス・レベルに更新する) を表すために使用されることがあります)。
- 既存の WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment インストールを、 WebSphere Process Server インストールに変換する。
- 既存の WebSphere Enterprise Service Bus または WebSphere Process Server Client インストールを WebSphere Process Server インストールに変換する。
- プロファイルを作成して、既存の WebSphere Process Server 製品を構成する。

各オプションの有効な値を調べるには、表 156 を参照します。

表 156. WebSphere Process Server install コマンド・オプションの値の表

オプション名 (-OPT)	値	デフォルト	説明
silentInstallLicenseAcceptance	true/false	false	ご使用条件に同意するかどうかを選択します。
allowNonRootSilentInstall	true/false	false	root 以外のユーザーによるインストールを認めることを選択します。
disableOSPrereqChecking	true/false	false	オペレーティング・システム前提条件の検査を使用不可に設定するかどうかを選択します。
disableNonBlockingPrereqChecking	true/false	false	非ブロッキング前提条件の検査を使用不可に設定するかどうかを選択します。
installType	<ul style="list-style-type: none"> <li>• installNew</li> <li>• addFeature</li> <li>• upgrade</li> </ul>	installNew	実行するインストールのタイプを選択します。
createProfile	true/false	false	既存のインストール済み環境のプロファイルを作成するかどうかを選択します。

表 156. WebSphere Process Server install コマンド・オプションの値の表 (続き)

オプション名 (-OPT)	値	デフォルト	説明
wpsInstallType	<ul style="list-style-type: none"> <li>• typical</li> <li>• ndGuided</li> <li>• クライアント</li> </ul>	typical	標準インストール、デプロイメント環境インストール、およびクライアント・インストールの中から選択します。
fixLocation	任意の有効なロケーション	none	追加の暫定修正を含むパスを選択します。
ndGuidedInstallType	<ul style="list-style-type: none"> <li>• deploymentManager</li> <li>• additionalRoles</li> </ul>	none	実行するデプロイメント環境インストールのタイプを選択します。
PROF_topologyPattern	<ul style="list-style-type: none"> <li>• Reference - リモート・メッセージングおよびリモート・サポート</li> <li>• CondensedAsync - リモート・メッセージング</li> <li>• CondensedSync - 単一クラスター</li> </ul>	none	デプロイメント環境インストールを選択します。
PROF_topologyRole	<ul style="list-style-type: none"> <li>• ADT - アプリケーション・デプロイメントのターゲット</li> <li>• Messaging - メッセージング・インフラストラクチャー</li> <li>• Support - サポート・インフラストラクチャー</li> </ul>	none	このノードをデプロイメント環境トポロジーに割り当てるために 1 つ以上のクラスターを選択します。複数の項目を選択する場合は、分離文字としてコンマ文字 (,) を使用します。使用可能なオプションは、選択したデプロイメント環境インストールの種類により異なります。
samplesSelected	<ul style="list-style-type: none"> <li>• true - その機能はインストールの対象として選択されている</li> <li>• false - その機能はインストールの対象として選択されていない</li> </ul>	false	この機能を使用する場合は、必要な値を選択します。
installLocation	任意の有効なインストールの場所	対象プラットフォーム・タイプのデフォルトの場所	インストールの宛先パスを選択します。
useExistingWAS	true/false	false	WebSphere Application Server の既存のインストール済み環境を使用するかどうかを選択します。「true」を選択した場合は、installLocation オプションを、既存の WebSphere Application Server インストール済み環境のインストール・ルートに設定する必要があります。

表 156. WebSphere Process Server install コマンド・オプションの値の表 (続き)

オプション名 (-OPT)	値	デフォルト	説明
defaultProfileLocation	任意の有効なユーザー・データの場所	none	i5/OS プラットフォームにのみ適用可能。プロファイルの希望するデフォルト・ロケーションを選択します。既存の WebSphere Application Server インストール済み環境が使用するデフォルト・プロファイル・ロケーション・ディレクトリは、WebSphere Application Server にインストールする場合に、指定する必要があります。
profileType	<ul style="list-style-type: none"> <li>• standAlone</li> <li>• deploymentManager</li> <li>• custom</li> <li>• none</li> </ul>	standAlone	4 つのプロファイル作成オプションのいずれかを選択します。
PROF_enableAdminSecurity	true/false	none	出荷時の設定のままのセキュリティを有効にするかどうかを選択します。 samplesSelected オプションを「true」に、または wpsInstallType オプションを「ndGuided」に設定する場合、「true」を選択する必要があります。
traceFormat	<ul style="list-style-type: none"> <li>• text - 読みやすいようにトレース・ファイルはプレーン・テキスト形式で生成される</li> <li>• XML - トレース・ファイルは標準の Java ロギング XML 形式で生成される</li> </ul>	両方の形式が、2 つの異なるトレース・ファイルに生成されず。生成する必要がある形式が 1 つのみである場合は、該当するオプションを選択します。	トレース・ファイルの出力形式を選択します。

表 156. WebSphere Process Server install コマンド・オプションの値の表 (続き)

オプション名 (-OPT)	値	デフォルト	説明
traceLevel	<ul style="list-style-type: none"> <li>• OFF 0 - トレースは生成されない</li> <li>• SEVERE 1 - 重大エラーのみがトレース・ファイルに出力される</li> <li>• WARNING 2 - 致命的以外の例外および警告に関するメッセージがトレース・ファイルに追加される</li> <li>• INFO 3 - 通知メッセージがトレース・ファイルに追加される</li> <li>• CONFIG 4 - 構成関連のメッセージがトレース・ファイルに追加される</li> <li>• FINE 5 - 非 public メソッドのメソッド呼び出しをトレースする</li> <li>• FINER 6 - getter および setter を除く非 public メソッドのメソッド呼び出しをトレースする</li> <li>• FINEST 7 - すべてのメソッド呼び出しをトレースし、入口および出口をトレースして、パラメーターおよび戻り値を組み込む</li> </ul>	0	取り込むトレース情報の量を選択します。

## Linux および UNIX オペレーティング・システムでのディスク・ドライブのマウント

一部の Linux および UNIX オペレーティング・システムでは、ドライブをマウントしなければ、製品に付属のディスク上のデータにアクセスできません。

### 始める前に

ドライブをマウントする前に、製品ディスクをディスク・ドライブに挿入してください。ディスク・ドライブをマウントするには、root ユーザーでなければなりません。

### このタスクについて

以下の手順を使用して、WebSphere Process Server に付属の製品ディスクをマウントします。

- **AIX** AIX システムで CD または DVD をマウントします。 System Management Interface Tool (SMIT) を使用して、AIX システムで CD または DVD をマウントするには、以下のステップを実行します。
  1. root 権限を持つユーザーとしてログインします。
  2. ドライブにディスクを挿入します。

3. `mkdir -p /cdrom` コマンドを入力して、ディスク・マウント・ポイントを作成します。ここで、`cdrom` はディスク・マウント・ポイント・ディレクトリーを表します。
4. `smit storage` コマンドを入力することによって、SMIT を使用してディスク・ファイル・システムを割り振ります。
5. SMIT の開始後、「システム記憶域管理 (物理および論理域)」>「ファイルシステム」>「ファイルシステムの追加/変更/表示/削除」>「**CDROM** ファイルシステム」>「**CDROM** ファイルシステムの追加」を選択します。
6. 「**CDROM** ファイルシステムの追加」ウィンドウで、以下のようになります。
  - 「**デバイス名**」フィールドで、ご使用のディスク・ファイル・システムのデバイス名を入力します。ディスク・ファイル・システムのデバイス名は固有でなければなりません。デバイス名が重複する場合は、先に定義したディスク・ファイル・システムを削除するか、またはディレクトリーに他の名前を使用する必要があります。例では、デバイス名として `/dev/cd0` を使用します。
  - 「**マウント・ポイント**」ウィンドウで、ディスク・マウント・ポイント・ディレクトリーを入力します。この例では、マウント・ポイント・ディレクトリーは `/cdrom` です。
  - 「**システム再始動時に自動的にマウントする**」フィールドで、「はい」を選択し、ファイル・システムの自動マウントを使用可能にします。
  - 「**OK**」を選択してウィンドウを閉じ、「**取り消し**」を 3 回選択して SMIT を終了します。
7. 次に、`smit mountfs` コマンドを入力して、ディスク・ファイル・システムをマウントします。
8. 「ファイルシステムのマウント」ウィンドウで、以下を実行します。
  - 「**ファイルシステム名**」フィールドで、ご使用のディスク・ファイル・システムのデバイス名を入力します。この例では、デバイス名は `/dev/cd0` です。
  - 「**マウントするディレクトリ**」フィールドにディスク・マウント・ポイントを入力します。この例では、マウント・ポイントは `/cdrom` です。
  - 「**ファイルシステムのタイプ**」フィールドに `cdrfs` を入力します。マウント可能なその他のタイプのファイル・システムを表示するには、「リスト (List)」を選択します。
  - 「**読み取り専用システムとしてマウントする**」フィールドで、「はい」を選択します。
  - 残りのデフォルト値を受け入れて、「**OK**」を選択し、ウィンドウを閉じます。

ご使用のディスク・ファイル・システムがマウントされました。CD または DVD のコンテンツを表示するには、ドライブに CD または DVD を入れて、`cd /cdrom` コマンドを入力します。ここで、`cdrom` はディスク・マウント・ポイント・ディレクトリーです。

- **HP-UX** HP-UX システムで CD または DVD をマウントします。WebSphere Process Server には長いファイル名のファイルがいくつかあるため、マウント・コ

マウントが失敗する場合があります。以下のステップを実行すると、ディスクを HP-UX プラットフォームに正常にマウントすることができます。

1. root 権限を持つユーザーとしてログインします。
2. /etc ディレクトリーで、pfs\_fstab ファイルに次の行を追加します。

```
/dev/dsk/c0t2d0 mount_point pfs-rrip ro,hard
```

ここで、*mount\_point* は、CD または DVD のマウント・ポイントを表します。

3. 次のコマンドを入力して、pfs デーモンを始動します (まだ実行していない場合)。

```
/usr/sbin/pfs_mountd &  
/usr/sbin/pfsd 4 &
```

4. CD または DVD をドライブに挿入して、次のコマンドを入力します。

```
mkdir /cdrom  
/usr/sbin/pfs_mount /cdrom
```

ここで、*/cdrom* 変数はディスクのマウント・ポイントを表します。

5. ログアウトします。

- **Linux** Linux システムで CD または DVD をマウントします。Linux システムで CD または DVD をマウントするには、以下を実行します。

1. root 権限を持つユーザーとしてログインします。
2. ディスクをドライブに挿入して、次のコマンドを入力します。

```
mount -t iso9660 -o ro /dev/cdrom /cdrom
```

ここで、*/cdrom* 変数はディスクのマウント・ポイントを表します。

3. ログアウトします。

一部のウィンドウ・マネージャーでは、自動的に CD または DVD がマウントされます。詳しくは、ご使用のシステムの資料を参照してください。

- **Solaris** Solaris システムで CD または DVD をマウントします。Solaris システムで CD または DVD をマウントするには、以下を実行します。

1. root 権限を持つユーザーとしてログインします。
2. ディスクをドライブに挿入します。
3. ボリューム・マネージャー (vold) がご使用のシステムで稼働していない場合は、以下のコマンドを入力してディスクをマウントします。

```
mkdir -p /cdrom/unnamed_cdrom  
mount -F hsfs -o ro /dev/dsk/c0t6d0s2 /cdrom/unnamed_cdrom
```

*/cdrom/unnamed\_cdrom* 変数はディスク・マウント・ディレクトリーを表し、*/dev/dsk/c0t6d0s2* はディスク・ドライブ・デバイスを表します。

NFS を使用してリモート・システムからディスク・ドライブをマウントしている場合、リモート・マシンのディスク・ファイル・システムは root アクセスでエクスポートされる必要があります。また、ローカル・マシンでは root アクセスでファイル・システムをマウントする必要があります。

ボリューム・マネージャー (vold) がご使用のシステムで稼働している場合、ディスクは自動的に次のようにマウントされます。

```
/cdrom/unnamed_cdrom
```

4. ログアウトします。

---

## Mozilla 1.7 での各国語サポート

Mozilla 1.7 は、すべてのネイティブ言語とオペレーティング・システムの組み合わせで使用可能なわけではありません。

WebSphere Process Server バージョン 6.2 配布製品は、以下のネイティブ言語でサポートされています。

- ブラジル・ポルトガル語
- チェコ語
- 英語
- フランス語
- ドイツ語
- ハンガリー語
- イタリア語
- 日本語
- 韓国語
- ポーランド語
- ロシア語
- スペイン語
- 中国語 (簡体字)
- 中国語 (繁体字)

バージョンが 1.7 より前の Mozilla には、機密漏れがあることが知られています。これらの機密漏れについて詳しくは、Mozilla Web サイト (<http://www.mozilla.org/security/known-vulnerabilities/older-vulnerabilities.html>) に掲載されています。

---

## プロファイル、ノード、ホスト、およびセルの命名の考慮事項

このトピックでは、プロファイル、ノード、ホスト、およびセル (該当する場合) を命名する際に考慮しなければならない予約語および問題について説明します。

### プロファイルの命名の考慮事項

プロファイル名には、固有の名前を付けることができますが、以下の制限があります。プロファイルの名前を付ける際には、以下の文字を使用しないでください。

- スペース
- \*, &, または ? など、ご使用のオペレーティング・システムのディレクトリ名に許可されていない特殊文字
- スラッシュ (/) または円記号 (¥)

全角文字は許可されています。

**制約事項:** **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合: i5/OS オペレーティング・システムでは、パス名の各コンポーネントの長さを最大 255 文字に制限しています。IBM では、プロファイルのルート・ディレクトリーのパス名はできるだけ短くすることをお勧めします。

## ノード、ホスト、セルの命名の考慮事項

**予約名:** フィールド値として予約済みのフォルダ名を使用しないでください。予約済みフォルダ名を使用すると、予測不能な結果が起こる可能性があります。以下のワードは、予約されています。

- buses
- cells
- nodes
- servers
- clusters
- applications
- deployments

「ノード名およびホスト名」および「ノード名、ホスト名、セル名」パネルのフィールドの説明: 表 157 では、プロファイル管理ツールの「ノード名およびホスト名」および「ノード名、ホスト名、セル名」パネルにあるフィールドについて説明します。この表には、フィールド名、デフォルト値、および制約が示されています。プロファイルを作成する場合、この情報をガイドとして使用してください。

表 157. ノード、ホスト、およびセルの命名ガイドライン

フィールド名	デフォルト値	制約	説明
スタンドアロン・サーバー・プロファイル			

表 157. ノード、ホスト、およびセルの命名ガイドライン (続き)

フィールド名	デフォルト値	制約	説明
ノード名	<p><b>Linux、UNIX、および Windows プラットフォームの場合:</b>  <i>shortHostName</i>                      Node  <i>NodeNumber</i>                      ここで、</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <i>shortHostName</i> は短いホスト名です。</li> <li>• <i>NodeNumber</i> は、01 から始まる連続番号を表します。</li> </ul> <p><b>i5/OS プラットフォームの場合:</b>  <i>shortHostName</i>                      _profileName                      ここで、</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <i>shortHostName</i> は短いホスト名です。</li> <li>• <i>profileName</i> はプロファイル名です。</li> </ul>	<p>予約名を使用しないでください。</p>	<p>希望の名前を選出してください。システムに複数のサーバーを作成する予定がある場合、インストールを編成するには、固有の名前を使用します。</p>

表 157. ノード、ホスト、およびセルの命名ガイドライン (続き)

フィールド名	デフォルト値	制約	説明
ホスト名	<p><b>Linux、UNIX、および Windows プラットフォームの場合:</b> 長形式のドメイン・ネーム・サーバー (DNS) 名です。</p> <p><b>i5/OS プラットフォームの場合:</b> ドメイン・ネーム接尾部を含む、完全修飾マシン名。</p>	<p>ホスト名は、ご使用のネットワークを介してアドレス可能でなければなりません。</p>	<p>ワークステーションの実際の DNS 名または IP アドレスを使用して、ワークステーションと通信できるようにします。この表の後にある、ホスト名に関する追加情報を参照してください。</p>

表 157. ノード、ホスト、およびセルの命名ガイドライン (続き)

フィールド名	デフォルト値	制約	説明
セル名	<p><b>Linux、UNIX、および Windows プラットフォームの場合:</b>  <i>shortHostName</i>  <i>Node</i>  <i>NodeNumber</i></p> <p>セル ここで、</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <i>shortHostName</i> は短いホスト名です。</li> <li>• <i>NodeNumber</i> は、01 から始まる連続番号を表します。</li> </ul> <p><b>i5/OS プラットフォームの場合:</b>  <i>shortHostName</i>  <i>_profileName</i></p> <p>ここで、</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <i>shortHostName</i> は短いホスト名です。</li> <li>• <i>profileName</i> はプロファイル名です。</li> </ul>	<p>デプロイメント・マネージャー・セルに固有の名前を使用します。製品が同じ物理ワークステーション上で稼働する場合や、ワークステーションのクラスター上で稼働する場合 (例: Sysplex) は、どんな環境でも、セル名は固有でなければなりません。また、エンティティー間のネットワーク接続性 (セル間の、または各セルと通信する必要があるクライアントからの) が求められる環境では、セル名は固有でなければなりません。名前空間が統合される場合でも、セル名は固有である必要があります。固有でなければ、<code>javax.naming.NameNotFoundException</code> 例外などの症状が発生する可能性があります。この場合は、固有の名前のセルを作成する必要があります。</p>	<p>すべての統合ノードは、デプロイメント・マネージャー・セルのメンバーになります。このセルは、プロファイル管理ツールの「ノード名、ホスト名、セル名」パネルで指定します。</p>
Deployment manager プロファイル			

表 157. ノード、ホスト、およびセルの命名ガイドライン (続き)

フィールド名	デフォルト値	制約	説明
ノード名	<p><b>Linux、UNIX、および Windows プラットフォームの場合:</b>  <i>shortHostName</i>                      Cell                      ManagerNode                      Number ここで、</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <i>shortHostName</i> は短いホスト名です。</li> <li>• <i>NodeNumber</i> は、01 から始まる連続番号を表します。</li> </ul> <p><b>i5/OS プラットフォームの場合:</b>  <i>profileName</i>                      Manager ここで <i>profileName</i> はプロファイル名です。</p>	<p>デプロイメント・マネージャーの固有の名前を使用します。予約名を使用しないでください。</p>	<p>この名前は、デプロイメント・マネージャー・セル内での管理に使用されます。</p>
ホスト名	<p><b>Linux、UNIX、および Windows プラットフォームの場合:</b> 長形式のドメイン・ネーム・サーバー (DNS) 名です。</p> <p><b>i5/OS プラットフォームの場合:</b> ドメイン・ネーム接尾部を含む、完全修飾マシン名。</p>	<p>ホスト名は、ご使用のネットワークを介してアドレス可能でなければなりません。予約名を使用しないでください。</p>	<p>ワークステーションの実際の DNS 名または IP アドレスを使用して、ワークステーションと通信できるようにします。この表の後にある、ホスト名に関する追加情報を参照してください。</p>

表 157. ノード、ホスト、およびセルの命名ガイドライン (続き)

フィールド名	デフォルト値	制約	説明
セル名	<p><b>Linux、UNIX、および Windows プラットフォームの場合:</b>  <i>shortHostName</i> セル  <i>CellNumber</i> ここで、</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <i>shortHostName</i> は短いホスト名です。</li> <li>• <i>CellNumber</i> は、01 から始まる連続番号を表します。</li> </ul> <p><b>i5/OS プラットフォームの場合:</b>  <i>profileName</i> ネットワーク ここで  <i>profileName</i> はプロファイル名です。</p>	<p>デプロイメント・マネージャー・セルに固有の名前を使用します。製品が同じ物理ワークステーション上で稼働する場合や、ワークステーションのクラスター上で稼働する場合 (例: Sysplex) は、どんな環境でも、セル名は固有でなければなりません。また、エンティティー間のネットワーク接続性 (セル間の、または各セルと通信する必要があるクライアントからの) が求められる環境では、セル名は固有でなければなりません。名前空間が統合される場合でも、セル名は固有である必要があります。固有でなければ、<code>javax.naming.NameNotFoundException</code> 例外などの症状が発生する可能性があります。この場合は、固有の名前のセルを作成する必要があります。</p>	<p>すべての統合ノードは、デプロイメント・マネージャー・セルのメンバーになります。このセルは、プロファイル管理ツールの「ノード名、ホスト名、セル名」パネルで指定します。</p>
カスタム・プロファイル			

表 157. ノード、ホスト、およびセルの命名ガイドライン (続き)

フィールド名	デフォルト値	制約	説明
ノード名	<p><b>Linux、UNIX、および Windows プラットフォームの場合:</b>  <i>shortHostName</i>                      Node  <i>NodeNumber</i>                      ここで、</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <i>shortHostName</i> は短いホスト名です。</li> <li>• <i>NodeNumber</i> は、01 から始まる連続番号を表します。</li> </ul> <p><b>i5/OS プラットフォームの場合:</b>  <i>shortHostName</i>                      _profileName                      ここで、</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <i>shortHostName</i> は短いホスト名です。</li> <li>• <i>profileName</i> はプロファイル名です。</li> </ul>	<p>予約名を使用しないでください。</p> <p>デプロイメント・マネージャー・セル内で固有の名前を使用します。</p>	<p>この名前は、カスタム・プロファイルが追加されるデプロイメント・マネージャー・セル内で管理のために使用されます。デプロイメント・マネージャー・セル内で固有の名前を使用します。</p>

表 157. ノード、ホスト、およびセルの命名ガイドライン (続き)

フィールド名	デフォルト値	制約	説明
ホスト名	<p><b>Linux、UNIX、および Windows プラットフォームの場合:</b> 長形式のドメイン・ネーム・サーバー (DNS) 名です。</p> <p><b>i5/OS プラットフォームの場合:</b> ドメイン・ネーム接尾部を含む、完全修飾マシン名。</p>	<p>ホスト名は、ご使用のネットワークを介してアドレス可能でなければなりません。</p>	<p>ワークステーションの実際の DNS 名または IP アドレスを使用して、ワークステーションと通信できるようにします。この表の後にある、ホスト名に関する追加情報を参照してください。</p>

#### ホスト名の考慮事項:

ホスト名は、ノードがインストールされている物理ワークステーションのネットワーク名です。ホスト名は、サーバー上の物理ネットワーク・ノードに解決する必要があります。サーバーが複数のネットワーク・カードを備えている場合は、ホスト名または IP アドレスは、そのネットワーク・カードのいずれか 1 つに解決されなければなりません。リモート・ノードは、ホスト名を使用して、このノードに接続および通信します。

WebSphere Process Server は、インターネット・プロトコル・バージョン 4 (IPv4) およびバージョン 6 (IPv6) の両方に対応しています。管理コンソールなどで IP アドレスを入力できる場所では、どちらの形式で入力しても構いません。ご使用のシステムに IPv6 が実装されている場合は、IP アドレスを IPv6 形式で入力する必要があります。反対に、IPv6 を使用できない環境では、IP アドレスを IPv4 形式で入力してください。IPv6 について詳しくは、IPv6 の公式 Web サイトを参照してください。

以下のガイドラインが、ご使用のマシンに適切なホスト名を付ける場合に役立ちます。

- その他のワークステーションがネットワーク内でアクセスできるホスト名を選択します。
- この値に汎用 ID、localhost を使用しないでください。
- 2 バイト文字セット (DBCS) の文字を使用しているホスト名を持つサーバーには、WebSphere Process Server 製品をインストールしないでください。DBCS 文字は、ホスト名に使用する場合はサポートされていません。
- サーバー名には下線文字 ( \_ ) を使用しないようにしてください。インターネット標準では、ドメイン・ネームが Internet Official Protocol Standards の RFC 952 および RFC 1123 に記述されているホスト名の要件に適合するよう定めています。

す。ドメイン・ネームには、文字 (大文字または小文字) および数字のみを使用する必要があります。ただし、名前の末尾にならない限り、ドメイン・ネームにダッシュ文字 ( - ) を使用してもかまいません。ホスト名では、下線文字 ( \_ ) はサポートされていません。サーバー名に下線文字を使用しているサーバーにすでに WebSphere Process Server をインストールした場合、このサーバーにアクセスするには、その名前を変更するまで IP アドレスを使用してアクセスしてください。

同一コンピュータ上に共存している複数のノードを固有の IP アドレスで定義する場合は、ドメイン・ネーム・サーバー (DNS) のルックアップ・テーブルで、個々の IP アドレスを定義してください。スタンドアロン・サーバーの構成ファイルでは、ネットワーク・アドレスが 1 つしかないワークステーションでの複数 IP アドレスのドメイン・ネーム解決が提供されません。

ホスト名に指定する値は、構成文書で `hostName` プロパティの値として使用されます。次のいずれかの形式で、ホスト名の値を指定してください。

- 完全修飾のドメイン・ネーム・サーバー (DNS) ホスト名ストリング。例えば `xmachine.manhattan.ibm.com` など。
- デフォルトの DNS 短縮ホスト名ストリング。例えば `xmachine` など。
- 数値 IP アドレス。例えば `127.1.255.3` など。

完全修飾 DNS ホスト名には、あいまいなところがなく、しかも柔軟性に富むという利点があります。この柔軟性により、ユーザーは、ホスト・システムの実際の IP アドレスを変更しても、スタンドアロン・サーバー構成を変更する必要がありません。ホスト名のこの値は、動的ホスト構成プロトコル (DHCP) を使用して IP アドレスを割り当てる際に頻繁に IP アドレスを変更することが予定されている場合には、特に有用です。この形式の欠点は、DNS に依存するということです。DNS が使用できないと、接続に支障を来します。

短縮ホスト名も、動的に解決可能です。ショート・ネーム形式には、ネットワークから切断されたときでもシステムがスタンドアロン・サーバーを実行できるように、ローカルの `hosts` ファイルで再定義されるという機能もあります。`hosts` ファイルの `127.0.0.1` (ローカル・ループバック) に対するショート・ネームを、切断した状態でも実行されるように定義します。ショート・ネーム形式の欠点は、リモート・アクセスでは DNS に依存するということです。DNS が使用できないと、接続に支障を来します。

数値 IP アドレスには、DNS によって名前を解決する必要がないという利点があります。リモート・ノードは、DNS が使用できなくても、数値 IP アドレスを使用して名付けられたノードに接続できます。この形式の欠点は、数値 IP アドレスを使用するとアドレスが固定化されるということです。ワークステーションの IP アドレスを変更したら、構成文書の `hostName` プロパティの設定も必ず変更しなければなりません。したがって、DHCP を使用するか、あるいは IP アドレスを定期的に変更する場合は、数値 IP アドレスを使用しないでください。もう一方の形式の欠点としては、ホストがネットワークから切断されるとノードを使用できないということがあります。

## .nifregistry ファイルおよび vpd.properties ファイル

WebSphere Process Server のインストーラー・プログラムでは、InstallShield MultiPlatform (ISMP) プログラムを使用してコードをインストールします。  
.nifregistry ファイルおよび vpd.properties ファイルには、現在インストールされているプログラム・コンポーネントのリストがあります。これらのファイルは ISMP を補助します。また、WebSphere Process Server のインストーラー・プログラムは、WebSphere Process Server の以前のインストールを認識して、新しいインストールのオプションを制御します。

### .nifregistry ファイルの場所

.nifregistry ファイルの場所は、以下に示すように作動プラットフォームにより異なります。

- **AIX** **AIXプラットフォームの場合:** root のディレクトリー  
/usr.ibm/.nif/.nifregistry または非 root のディレクトリー <NON-ROOT-HOME>/  
.ibm/.nif/.nifregistry
- **HP-UX** **HP-UXプラットフォームの場合:** root のディレクトリー  
/opt.ibm/.nif/.nifregistry または非 root のディレクトリー <NON-ROOT-HOME>/  
.ibm/.nif/.nifregistry
- **i5/OS** **i5/OSプラットフォームの場合:** root のディレクトリー  
/QIBM/WAS/.ibm/.nif/.nifregistry
- **Linux** **Linuxプラットフォームの場合:** root のディレクトリー  
/opt.ibm/.nif/.nifregistry または非 root のディレクトリー <NON-ROOT-HOME>/  
.ibm/.nif/.nifregistry
- **Solaris** **Solarisプラットフォームの場合:** root のディレクトリー  
/opt.ibm/.nif/.nifregistry または非 root のディレクトリー <NON-ROOT-HOME>/  
.ibm/.nif/.nifregistry
- **Windows** **Windowsプラットフォームの場合:** root のディレクトリー  
C:\Windows\ibm\.\nifregistry

以下に例を示します。

```
NON-ROOT user: fvttest  
NON-ROOT-HOME: /home/fvttest .nifregistry dir: /home/fvttest/.ibm/.nif/.nifregistry
```

### .nifregistry ファイルの例

特定の製品用の .nifregistry ファイルには、インストールされる PAK ごとに 1 項目 (行)、および製品に対して 1 項目 (行) が格納されています。

以下の行に、.nifregistry ファイルの PAK 項目の例を示します。

```
<pak installrooturi="file:///C:/IBM/WebSphere/ProcServer/" name="wbi.primary.pak"  
paklocationuri="zip:///C:/IBM/WebSphere/ProcServer/properties/version/nif/backup/  
wbi.primary.pak" productid="WBI"/>
```

以下の行に、.nifregistry ファイルの製品項目の例を示します。

```
<product installrooturi="file:///C:/IBM/WebSphere/ProcServer/"  
lastvisited="2008-09-04 16:56:33-0400" productid="WBI" version="6.2.0.0"/>
```

## アンインストール失敗後の .nifregistry ファイルのクリーンアップ

アンインストールの失敗後に .nifregistry ファイルを除去するには、以下の手順に従います。

1. .nifregistry ファイルをバックアップします。
2. テキスト・エディターで .nifregistry ファイルを開きます (行の折り返しは必ずオフにしてください)。
3. <INSTALL\_LOC> および <PRODUCT\_ID> を含む行をすべて検索して削除します。ここで <INSTALL\_LOC> は、アンインストールに失敗した環境があるインストールの場所であり、<PRODUCT\_ID> は、アンインストールしようとしている製品の製品 ID です。
4. .nifregistry ファイルを保存して、テキスト・エディターを閉じます。

### HP-UX Solaris vpd.properties ファイルを使用するためのオペレーティング・システムの例外

- ISMP は、vpd.properties ファイルを使用して、Solaris および HP-UX を除くすべてのプラットフォームでインストールする WebSphere 製品を追跡します。
- root としてインストールする場合、ISMP はこれらのプラットフォームではネイティブのオペレーティング・システム登録を使用するため、vpd.properties ファイルは作成しません。

root 以外のインストーラーとしてインストールする場合、インストーラー・プログラムは、Solaris および HP-UX を含むすべてのプラットフォームで vpd.properties ファイルを作成します。

### vpd.properties ファイルの編集が必要となる状況

ある一定の状況では、WebSphere Process Server を再インストールする前に、vpd.properties ファイルを編集する必要があります。WebSphere Process Server のアンインストーラー・プログラムは、製品をアンインストールすると同時に vpd.properties ファイルを編集して、製品の項目と、製品の機能のうちこのファイル内に項目があるすべての機能の項目を除去します。

状況によっては、製品を再インストールするためには、その前に vpd.properties ファイルから製品の項目を手動で除去しなければなりません。該当する状況には、以下の状況があります。

- アンインストーラー・プログラムを介さずに製品を手動でアンインストールする
- アンインストーラー・プログラムが存在しないか動作しない場合に製品を手動でアンインストールする

アンインストールした製品の項目が vpd.properties ファイルに存在する場合は、このファイルを編集して、その項目を除去する必要があります。vpd.properties ファイルを編集せず、製品または製品の機能の項目を除去しなかった場合は、この製品を同じディレクトリー構造に再インストールすることはできません。vpd.properties ファイルに製品の項目が存在する場合は、インストーラー・プログラムが vpd.properties ファイルを読み取り、製品が既にインストールされているものと判断して、既存の製品に追加機能をインストールするか、バイナリーを再度インストールするように求めるパネルを表示します。既存のバイナリーはその時点では有効でない可能性が

あります。インストーラー・プログラムは、vpd.properties ファイル内にリストされているのを検出した製品については検査を行いません。

**Vista** vpd.properties ファイルを Microsoft® Windows Vista™ および Windows 2008 オペレーティング・システムの非管理者ユーザーで使用する際の制限: ユーザー・アクセス制御 (UAC) が有効に設定されている場合、Windows Vista および Windows 2008 オペレーティング・システムの非管理者ユーザーには、このファイルは無効です。管理者のプロパティを含んでいる可能性があり、一貫性を保てません。

## vpd.properties ファイルの場所

vpd.properties ファイルの場所は、以下に示すように作動プラットフォームごとに異なります。

- AIX** AIXプラットフォームの場合: root ディレクトリーまたは usr/lib/objrepos ディレクトリー
- i5/OS** i5/OS プラットフォーム: /InstallShield/VitalProductData/vpd.properties
- Linux** Linux プラットフォーム: root ディレクトリー
- Windows** Windows プラットフォームの場合: オペレーティング・システムのインストール・ディレクトリー (C:\WINNT ディレクトリーまたは C:\windows ディレクトリーなど)

## vpd.properties ファイルの例

以下の例では、Windows プラットフォーム上にある WebSphere 製品のバージョン 6.2.0.0 を対象とする vpd.properties ファイルの項目を示しています。この例では行全体を示しますが、書式を整えるため、各行を折り返しています。

```
WSEAA62|6|2|0|0|6.2.0.0|2=IBM WebSphere Process Server|
IBM WebSphere Process Server|IBM WebSphere Process Server V6.2|
IBM|http://www.ibm.com|6.2.0.0|
C:\Program Files\IBM\WebSphere\ProcServer|0|0|1|WSEAA62|6|2|0|0|6.2.0.0|2|0|
false|"properties/version/_uninst.wbi" "uninstall.jar" "uninstall.dat" "
"|true|3|WSEAA62|6|2|0|0|6.2.0.0|2
```

## vpd.properties ファイルでの項目の識別

次の表を参照すると、製品項目を識別するのに役立ちます。

表 158. vpd.properties ファイル内にある WebSphere 製品の ID

ID	製品
WSE...62	すべてのバージョン 6.2 製品では、この ID を使用して以下のコア製品ファイルを識別します。 <ul style="list-style-type: none"><li>WebSphere Process Server バージョン 6.2</li><li>WebSphere Enterprise Service Bus バージョン 6.2</li></ul>

## オペレーティング・システムのレジストリー・キー

WebSphere Process Server および関連製品をネイティブのオペレーティング・システム・レジストリーに登録するには、インストールの手順に従います。このトピックでは、指定できるレジストリー・キーの値について説明します。

インストール済み環境は、ネイティブのオペレーティング・システム・レジストリーに登録されます (例えば、Linux システムでの Red Hat Package Manager (RPM) など)。

**注:** root 以外でインストールを実行する場合は、ネイティブのオペレーティング・システム・レジストリーに登録することはできません。

InstallShield MultiPlatform (ISMP) のインストール・ウィザードでは、ウィザードが実行したインストール処理を追跡するために ISMP が使用する製品コードのリストが格納されている .nifregistry ファイルと vpd.properties ファイルも作成されます。

**i5/OS** i5/OS 対応のライセンス・プログラム製品コードは、以下のとおりです。

- 5724I82 WebSphere Enterprise Service Bus V6.2
- 5724L01 WebSphere Process Server V6.2

その他の WebSphere Process Server オプションのいずれかをインストールした場合は、5724L01 WebSphere Process Server V6.2 となります。

レジストリー項目について詳しくは、『非 root ユーザーがインストールする場合の制限』を参照してください。

**注:** **i5/OS** root 以外でのインストールは、i5/OS プラットフォームでは利用できません。

表 159. WebSphere Process Server および WebSphere Enterprise Service Bus を登録するときに使用するキー

レジストリー・ファイルのロケーション	WebSphere Process Server	WebSphere Enterprise Service Bus
vpd.properties	WSEAA62	WSEAA62
AIX	WSEAA62	WSEAA62
HP-UX	WSEAA62	WSEAA62
i5/OS	WSEAA62	WSEAA62
Linux	WSEAA62	WSEAA62
Solaris	WSEAA62	WSEAA62
Windows	HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥IBM¥WebSphere Process Server¥6.2	HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥IBM¥WebSphere Enterprise Service Bus¥6.2

インストール・プログラムは、vpd.properties ファイルの他に、インストール済み製品のレコードをインストール・レジストリー・ファイル内に作成し、IBM Tivoli License Compliance Manager が使用するためのカタログ署名ファイルを作成します。

### インストール・レジストリー・ファイル

バージョン 6.2 のインストール・レジストリー・ファイルは、前述の表に示したすべてのインストール済み製品のデータ入力項目が格納されている XML ファイルです。

- **製品情報:** 製品 ID (提供品)、製品のインストール場所、および製品のバージョン
- **パッケージ情報:** パッケージ名、パッケージのインストール場所、製品のインストール場所、および関連製品

### カタログ署名ファイル

root 以外のインストーラーがインストールしたパッケージは、ネイティブのオペレーティング・システムのメカニズムを使用して登録できない場合があります。

**AIX** 例えば、AIX バージョン 5.3 オペレーティング・システムに root 以外のユーザーとしてインストールした WebSphere Process Server バージョン 6.2 製品を AIX lpp コマンドに登録することはできません。このため、ls lpp コマンドを実行しても、インストールされている現在の WebSphere Process Server バージョンはリストに表示されません。

IBM Tivoli License Compliance Manager を使用すると、WebSphere Process Server のライセンスおよびバージョンを管理できます。

IBM Tivoli License Compliance Manager を使用可能に設定し、WebSphere Process Server ソフトウェア・コンポーネントを検出してモニターするには、ITLMReadinessOfferings.xml カタログ・ファイル入手します。このファイルは、IBM Tivoli License Compliance Manager では、IBMUUseOnlySoftwareCatalog\_\*\*\*\*-\*\*-\*\*.xml ファイルまたは IBMSoftwareCatalog\_\*\*\*\*-\*\*-\*\*.xml ファイルとも呼ばれます。IBMUUseOnlySoftwareCatalog\_\*\*\*\*-\*\*-\*\*.xml ファイルは、サブキャパシティー・バージョンで使用します。IBMSoftwareCatalog\*\*\*\*-\*\*-\*\*.xml ファイルは、フル・バージョンに対して使用します。

カタログ・ファイルには、ソフトウェア・シグニチャー認識ファイルおよび使用法ファイルが XML 形式で登録されており、これらのファイルは、エージェントで検出されるソフトウェアを識別してモニターするために IBM Tivoli License Compliance Manager コンポーネントによって使用されます。カタログ・ファイルは、IBM Tivoli License Compliance Manager で入手できます。

### パッケージ入力の例

**Linux** WebSphere Process Server のパッケージを表示するには、Linux システムで以下のコマンドを実行します。

```
rpm -qa | grep WS
```

---

## ポート番号設定

WebSphere Process Server のインストール済み環境を、別の WebSphere Process Server インストール済み環境や、WebSphere Enterprise Service Bus、WebSphere Application Server、WebSphere Business Integration Server Foundation、または WebSphere Application Server Network Deployment のインストール済み環境と共存させる必要がある場合は、ポートの競合が発生しないようにしてください。

WebSphere Process Server は WebSphere Application Server をベースとしているため、ポートの設定はいずれの製品の場合も同じです。 WebSphere Application Server の複数のバージョンのポート番号設定の表を参照すると、ご使用のさまざまなサーバーの範囲内で、どのポートが既に使用中であるかを調べるのに役立つため、ポートの競合を防止できます。これらの表の値はデフォルトのポート番号であるため、値を大きくして競合を回避する必要があります。

WebSphere Process Server を WebSphere Application Server のインストール済み環境の上にインストールした場合は、**Application Server** という見出しの列にある値を使用します。 WebSphere Process Server を WebSphere Application Server Network Deployment のインストール済み環境にインストールした場合、または WebSphere Application Server Network Deployment を、ご使用の WebSphere Process Server インストール済み環境の一部としてインストールした場合は、**Deployment Manager** という見出しの列にある値を使用します。

これらの表で、**Application Server** という見出しの列は、スタンドアロン・サーバーまたは管理対象サーバーのいずれかに使用されている値を表します。

注: WebSphere Application Server バージョン 5.x および WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 5.x の値は、WebSphere Business Integration Server Foundation バージョン 5.x にも適用されます。

---

## WebSphere Process Server の製品コンポーネント

このトピックでは、WebSphere Process Server のフィーチャーについて説明します。

表 160 に、WebSphere Process Server のインストール可能なフィーチャーをリストします。開発環境であっても、または実稼働環境であっても、パフォーマンス改善のためには WebSphere Process Server のサンプルをインストールしないようにしてください。

表 160. WebSphere Process Server のフィーチャー

フィーチャー	説明
WebSphere Process Server のサンプル	WebSphere Process Server および WebSphere Application Server Network Deployment の両方のサンプル・アプリケーションをインストールします。最新の Java 2 Platform, Enterprise Edition (J2EE) および WebSphere テクノロジーのいくつかを実証する、ソース・コード・ファイルと統合エンタープライズ・アプリケーションの両方が含まれます。  サンプルの詳細については、『サンプル・ギャラリーのインストールおよびアクセス』を参照してください。

---

## 製品のバージョン情報および履歴情報

製品のバージョン情報および履歴情報とそのリンク

properties/version ディレクトリーにある WBI.product ファイルには、製品、バージョン、ビルドの日付、およびビルド・レベルなどの情報が記載されています。以下に例を示します。

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<!DOCTYPE product SYSTEM "product.dtd">
<product name="IBM WebSphere Process Server">
  <id>WBI</id>
  <version>6.2.0.0</version>
  <build-info date="11/15/08" level="o0845.22"/>
</product>
```

該当する製品バージョン情報および履歴情報については、以下のリンクをクリックしてください。

表 161. 製品のバージョン情報および履歴情報のリンク

項目	リンク
製品のバージョン情報	<a href="http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/wasinfo/v6r1/topic/com.ibm.websphere.nd.multiplatform.doc/info/ae/ae/rins_prodVersion.html">http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/wasinfo/v6r1/topic/com.ibm.websphere.nd.multiplatform.doc/info/ae/ae/rins_prodVersion.html</a>
genVersionReport コマンド	<a href="http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/wasinfo/v6r1/topic/com.ibm.websphere.nd.multiplatform.doc/info/ae/ae/rins_genVersionReport.html">http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/wasinfo/v6r1/topic/com.ibm.websphere.nd.multiplatform.doc/info/ae/ae/rins_genVersionReport.html</a>
versionInfo コマンド	<a href="http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/wasinfo/v6r1/topic/com.ibm.websphere.nd.multiplatform.doc/info/ae/ae/rins_versionInfo.html">http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/wasinfo/v6r1/topic/com.ibm.websphere.nd.multiplatform.doc/info/ae/ae/rins_versionInfo.html</a>
historyInfo コマンド	<a href="http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/wasinfo/v6r1/topic/com.ibm.websphere.nd.multiplatform.doc/info/ae/ae/rins_historyInfo.html">http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/wasinfo/v6r1/topic/com.ibm.websphere.nd.multiplatform.doc/info/ae/ae/rins_historyInfo.html</a>
genHistoryReport コマンド	<a href="http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/wasinfo/v6r1/topic/com.ibm.websphere.nd.multiplatform.doc/info/ae/ae/rins_genHistoryReport.html">http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/wasinfo/v6r1/topic/com.ibm.websphere.nd.multiplatform.doc/info/ae/ae/rins_genHistoryReport.html</a>

## 製品ライブラリー、ディレクトリー、サブシステム、ジョブ・キュー、ジョブ記述、および出力キュー

i5/OS プラットフォームでは、WebSphere Process Server を他のプラットフォームにインストールする場合とは異なる構成を使用します。このトピックでは、WebSphere Process Server が i5/OS プラットフォーム上で使用する、製品ライブラリー、ディレクトリー、サブシステム、ジョブ・キュー、ジョブ記述、および出力キューについて説明します。

### 製品ライブラリーおよびディレクトリー

デフォルトのインストールでは、i5/OS 用の WebSphere Process Server は、以下のライブラリーとディレクトリーを使用します。

#### QWBI61

製品ライブラリー。

#### /QIBM/ProdData/WebSphere/ProcServer

デフォルトのルート・ディレクトリー。すべての WebSphere Process Server プロファイルで共有される製品データが含まれます。

#### /ICBM/UserData/WebSphere/ProcServer

デフォルトの WebSphere Process Server ユーザー・データ・ルート・ディ

レクトリー。すべての WebSphere Process Server プロファイルおよび profileRegistry サブディレクトリーは、このディレクトリーの下に作成されます。

## サブシステム

i5/OS 用の WebSphere Process Server のインストール済み環境では、以下のサブシステムのいずれか 1 つを使用できます。

### QWAS61

WebSphere Application Server によって提供および構成されたサブシステム。デフォルトでは、サーバーはこのサブシステム内で稼働します。

### QWBI61

WebSphere Process Server 固有のサブシステム。QWBI61 サブシステム内でサーバーを稼働させるには、startServer スクリプトを変更し、サーバーを再始動する必要があります。

以下のパラメーターを指定して startServer スクリプトを実行します。

- `-sbs QWBI61/QWBI61`
- `-jobq QWBI61/QWBIJOBQ`
- `-jobd QWBI61/QWBIJOB`
- `-outq QWBI61/QWBIJOB`

詳しくは、『i5/OS でのサブシステムの構成』を参照してください。

## ジョブ・キュー

i5/OS 用の WebSphere Process Server は、使用されるサブシステムに基づいて、サーバー、ノード・エージェント、およびデプロイメント・マネージャー・プロセス用の以下のいずれかのジョブ・キューを使用します。

- QWASJOBQ キューは QWAS61 サブシステムで使用します。
- QWBIJOBQ キューは QWBI61 サブシステムで使用します。

## ジョブ記述

i5/OS 用の WebSphere Process Server は、使用されるサブシステムに基づいて、サーバー、ノード・エージェント、およびデプロイメント・マネージャー・プロセス用の以下のいずれかのジョブ記述を使用します。

- QWASJOB 記述は QWAS61 サブシステムで使用します。
- QWBIJOB 記述は QWBI61 サブシステムで使用します。

## 出力キュー

i5/OS 用の WebSphere Process Server は、使用されるサブシステムに基づいて、サーバー、ノード・エージェント、およびデプロイメント・マネージャー・プロセス用の以下のいずれかの出力キューを使用します。

- QWASOUTQ キューは QWAS61 サブシステムで使用します。
- QWBIOUTQ キューは QWBI61 サブシステムで使用します。

---

## 複数プロファイル環境のプロファイル・コマンド

サーバーに複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用するプロファイルを指定する必要があります。これらのコマンドでは、`-profileName` 属性を使用して、アドレス指定するプロファイルを指定します。コマンドごとに `-profileName` 属性を指定する必要をなくすためには、各プロファイルの `bin` ディレクトリーに存在するバージョンのコマンドを使用します。

WebSphere Process Server の 1 つのインストール済み環境内部で作成する最初のプロファイルがデフォルト・プロファイルになります。デフォルト・プロファイルは、WebSphere Process Server がインストールされているディレクトリーの `bin` ディレクトリーから実行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。システム上にプロファイルが 1 つしかない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに対して作用します。デフォルト以外のプロファイルをコマンドのターゲットにするには、以下のようにしてコマンドを実行する必要があります。

- 任意のディレクトリーからコマンドを実行する場合は、コマンドの後に `-profileName` 属性と、アドレス指定するプロファイルへの完全修飾パスを指定します。以下に例を示します。

```
startServer -profileName server1
```

- コマンドに対して `-profileName` 属性を指定せずに済むようにするには、アドレス指定するプロファイルの `bin` ディレクトリーに存在するコマンドのバージョンを使用します。そのディレクトリーは、i5/OS、Linux および UNIX プラットフォームでは、`profile_root/bin`、Windows プラットフォームでは、`profile_root%bin` です。

---

## パスポート・アドバンテージからインストールするときの特別な考慮事項

パスポート・アドバンテージで取得したイメージからインストールする場合は、イメージに付属するダウンロードの手順説明を精読し、ユーザー許可とディレクトリー・セットアップに関するいくつかのガイドラインに従う必要があります。

**注:** **i5/OS** **i5/OS プラットフォームの場合:** パスポート・アドバンテージから取得したインストール・イメージは、Windows ワークステーションにダウンロードする必要があります。

これらのイメージは、*WebSphere Process Server V6.2 DVD* と、WebSphere Application Server CD に、1 対 1 でマップします。これらのイメージは、プラットフォーム別に電子アセンブリーに分類されます。それぞれのアセンブリーにはそのプラットフォーム用のすべてのイメージが含まれているため、そのプラットフォームに必要なすべてのソフトウェアを素早く識別することができます。

パスポート・アドバンテージで取得したインストール・イメージからインストールする場合は、以下のガイドラインに従ってください。

- **Linux** **UNIX** **Linux および UNIX プラットフォームの場合:** `untar` コマンドでファイルを解凍したユーザーと同じユーザーが、製品をインストールするようにします。これらの作業を異なるユーザーが実行した場合、製品のインストーラーは正しく機能しません。

- *WebSphere Process Server V6.2 DVD*、*WebSphere Application Server Network Deployment Supplements V6.1 CD*、および *WebSphere Application Server Toolkit V6.1.1 ディスク 1 CD* のイメージの内容を 3 つの別個のディレクトリーに解凍するようにしてください。複数のイメージからのファイルを同じディレクトリーに解凍すると、エラーの原因となります。以下の例のように、3 つの兄弟ディレクトリーの使用を検討してください。

– **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合:

```
%/downloads/WPS/image1  
%/downloads/WPS/image2  
%/downloads/WPS/image3
```

– **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:

```
%/downloads/WPS/image1  
%/downloads/WPS/image2  
%/downloads/WPS/image3
```

– **Windows** **Windows** プラットフォームの場合:

```
C:¥downloads¥WPS¥image1  
C:¥downloads¥WPS¥image2  
C:¥downloads¥WPS¥image3
```

---

## 第 14 章 IBM WebSphere Installation Factory の使用

IBM WebSphere Installation Factory は、すぐに使用可能なインストール・パッケージを作成するための機能です。このインストール・パッケージを使用することにより、特定のニーズに対して設計された WebSphere 製品を、安全な方法で何度も繰り返してインストールすることができます。このインストール・パッケージは、カスタマイズされた WebSphere Process Server のインストール・イメージです。このイメージには、1 つ以上の保守パッケージ、スクリプト、および作成されたインストール・イメージのカスタマイズに役立つその他のファイルを含めることができます。

カスタマイズ・インストール・パッケージ (CIP) を作成してインストールする前に、WebSphere Process Server のインストール方法と構成方法を理解しておいてください。『WebSphere Process Server の計画』の PDF を参照してください。

また、WebSphere Process Server for Multiplatforms バージョン 6.2 のオンライン・インフォメーション・センター (<http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/dmndhelp/v6r2mx/index.jsp>)の『WebSphere Process Server の計画』で、計画に関するトピックを参照してください。

インストール方針の計画が完了すると、以下の情報を使用してインストールを迅速に処理することができます。

---

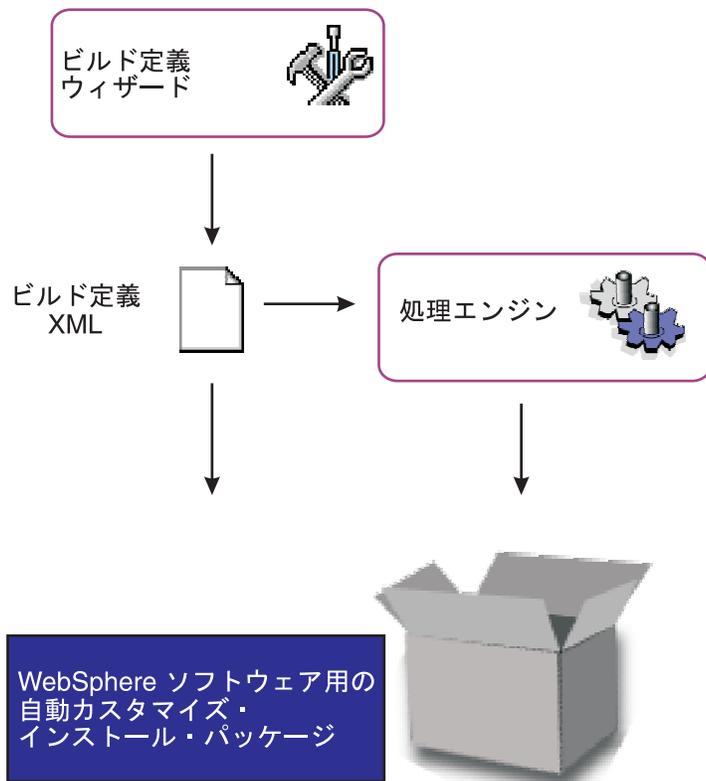
### IBM WebSphere Installation Factory - 概要

IBM WebSphere Installation Factory では、WebSphere Process Server のインストール・イメージを、適用可能な保守パッケージ、カスタマイズ・スクリプト、および他のファイルと結合し、カスタマイズ・インストール・パッケージ (CIP) を作成します。これらのインストール・パッケージは、単一の手順でインストールできます。

WebSphere Process Server のインストールおよび構成は、通常は以下のような複数の手順で行います。

1. WebSphere Process Server の出荷済みバージョンをインストールします。
2. 現在のフィックスパックをインストールします。
3. リフレッシュ・パックをインストールします。
4. 必要に応じて 1 つ以上の暫定修正をインストールします。
5. アプリケーション・サーバーおよびその他の成果物を作成し、構成します。
6. アプリケーションをデプロイします。

IBM WebSphere Installation Factory では、カスタマイズ・インストール・パッケージ (CIP) と呼ばれる単一のインストール・イメージを作成することにより、このプロセスが簡略化されます。豊富なオプションを使用してインストール・イメージを作成できるため、結果として作成されるインストール済み環境をユーザーのニーズに合わせてカスタマイズできます。



## IBM WebSphere Installation Factory のインストール

Installation Factory は、製品メディアで提供されます。また、最新バージョンは、IBM サポート・サイトからダウンロードすることができます。

### 始める前に

ご使用のシステムで認証を受ける必要があります。また、すべてのハードウェア要件とソフトウェア要件が満たされている必要があります。ソフトウェアおよびハードウェアの要件のページを参照してください。

### 手順

1. ご使用のオペレーティング・システム用の該当する Installation Factory アーカイブ・ファイルのコピーを取得します。

オプション	説明
製品メディアから取得	製品メディアの /IF ディレクトリーから適切なアーカイブを選択し、ご使用のシステム上のローカル・ディレクトリーにコピーします。

オプション	説明
IBMサポート・サイトから取得	<p>1. 基本の Installation Factory ツールをダウンロードします。「Category (カテゴリ)」で「WebSphere」、「Sub category (サブカテゴリ)」で「WebSphere Application Server」を選択します。右矢印をクリックします。次のページで、「Tools/Utilities (ツールとユーティリティ)」をクリックします。Installation Factory のダウンロード・ページがリストされます。作業を行うマシンのオペレーティング・システム用の該当するアーカイブ・ファイルをダウンロードします。</p> <p>2. WebSphere Process Server の Installation Factory プラグインをダウンロードします。「Category (カテゴリ)」で「WebSphere」、「Sub category (サブカテゴリ)」で「WebSphere Process Server」を選択します。右矢印をクリックします。次のページで、「Tools/Utilities (ツールとユーティリティ)」をクリックします。Installation Factory のダウンロード・ページがリストされます。作業を行うマシンのオペレーティング・システム用の該当するアーカイブ・ファイルをダウンロードします。</p> <p><b>注:</b> Installation Factory を特定のオペレーティング・システム上で使用して、異なるオペレーティング・システム用のインストール・パッケージを作成することができます。ただし、すべての組み合わせがサポートされているわけではありません。Installation Factory をインストールするプラットフォームを決定する前に、サポート対象のオペレーティング・システムのリストを調べてください。</p>

2. アーカイブ・ファイルを別の空ディレクトリーに解凍します。
3. オプション: 解凍されたパッケージの bin ディレクトリーをパス環境変数に追加します。bin ディレクトリーをパス変数に追加すると、コマンドでパスの修飾を行わずに、システム上のすべてのディレクトリーから Installation Factory コマンドにアクセスすることができます。
4. オプション: Installation Factory を使用する必要があるすべてのユーザーに、install ディレクトリー内の logs ディレクトリーに対する書き込み権限があることを確認してください。このディレクトリーに書き込み可能な Installation Factory ユーザーを制限する場合、ユーザーは、Installation Factory コマンドを起動して、作成されるログ・ファイルとトレース・ファイルの場所を変更する際に -logFile および -traceFile オプションを使用する必要があります。

## 次のタスク

Installation Factory が使用可能になりました。

---

## カスタマイズ・インストール・パッケージの処理

カスタマイズ・インストール・パッケージ (CIP) とは、1 つ以上の保守パッケージ、プロファイル・カスタマイズ、EAR ファイル、スクリプト、および結果として生成されるインストールをカスタマイズするために役立つその他のファイルを組み合わせることができるカスタマイズ済み WebSphere Process Server のインストール・イメージです。IBM WebSphere Installation Factory によって CIP が作成されます。

### 始める前に

このトピックおよび関連の各トピックをすべてお読みになり、カスタマイズ・インストール・パッケージ (CIP) の作成およびインストールの準備を行います。インストール・ツールの使用を開始する前に、CIP のインストール・オプションについて十分理解しておいてください。サポートされるハードウェアとソフトウェアについての Web サイトでハードウェア要件とソフトウェア要件を確認してから、作業を開始します。

ご使用のシステムにさらに多くのディスク・スペースや一時スペースが必要であったり、前提条件パッケージが存在しないなどの問題が発生した場合は、インストールをキャンセルして必要な変更を行ってからインストールを再開します。

### このタスクについて

IBM WebSphere Installation Factory を使用して、CIP を作成することができます。最初のステップでは、Installation Factory のコンソールを使用して CIP 用のビルド定義を作成します。ifgui コマンドを使用して、Installation Factory のコンソールを開始します。

**i5/OS** Installation Factory コンソールは、i5/OS ではサポートされていません。ただし、Windows、UNIX、または Linux サーバー上で Installation Factory を操作して、i5/OS 上で使用するためのビルド定義ファイルおよび CIP を作成できます。

**注:** i5/OS 上への CIP のインストールは、Windows プラットフォームからリモートで実行することも、i5/OS サーバー上でサイレントに実行することもできます。

ビルド定義ファイル内にビルド・パラメーターを定義した後、CIP を作成します。この CIP には WebSphere Process Server インストール・ウィザードの 1 バージョンが含まれます。

次の手順では、WebSphere Process Server 用の CIP の作成およびインストールの開始方法について説明します。

### 手順

1. Installation Factory を使用して、カスタマイズ・インストール・パッケージを作成します。詳細については、サブトピック『**カスタマイズ・インストール・パッケージの作成**』を参照してください。

2. インストール用のオペレーティング・システム・プラットフォームを準備します。 関連情報『インストールのためのオペレーティング・システムの準備』を参照してください。
3. CIP を使用して WebSphere Process Server をインストールします。 CIP インストール・ウィザードでは、以下の操作が実行されます。
  - 前提条件を自動的に検査します。
  - 前の WebSphere Process Server バージョン 6.2 を検索し、表示するインストール・オプションを決定します。オプションには、製品バイナリーにフィーチャーおよび保守を追加するオプションや、一連の新規製品バイナリーを CIP に含まれる更新された保守レベルでインストールするオプションなどがあります。
  - 関連する WebSphere 製品の前のバージョンを検索します。アップグレード・パスはそこから使用できます。
  - オプションで、一連の新規製品バイナリーと CIP に含まれる保守パッケージのインストール時に、デプロイメント環境または WebSphere Process Server Client をインストールすると同時に、スタンドアロン・サーバー、カスタム・プロファイルまたはデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成できます。
4. 以下のインストール・シナリオの 1 つを選択して、インストールを続行します。

オプション	説明
CIP インストール・ウィザードを使用して、標準的インストールを実行します。	基本製品の標準インストールでは、CIP 内の使用可能なすべてのフィーチャー、および作成するプロファイルのタイプをインストールできます。
低い保守レベルから高い保守レベルへのスリップ・インストールを実行します。	CIP インストール・ウィザードでは、フィーチャーをインストールせずに、既存の製品に保守をインストールすることができます。
CIP インストール・ウィザードを使用して、保守パッケージと追加フィーチャーをインストールし、既存のインストールをインクリメントします。	CIP インストール・ウィザードでは、既存の製品に対して保守をインストールし、フィーチャーを追加できます。
低レベル製品から完全な製品へのトレードアップ・インストールを実行します。	CIP インストール・ウィザードでは、低レベル製品からのアップグレード時に保守パッケージをインストールできます。
CIP インストール・ウィザードを使用して、サイレント・インストールを実行します。	詳細については、関連タスク『カスタマイズ・インストール・パッケージのサイレント・インストール』を参照してください。サイレント・インストールでは、インストールの選択項目のすべてが含まれた応答ファイルを編集する必要があります。有効な応答ファイルを作成したら、コマンド・ウィンドウで <code>silent</code> パラメーターを指定して <code>install</code> コマンドを発行します。

インストーラー・プログラムは、コンソール・モード・インストールをサポートしていません。

## タスクの結果

続くトピックで概説される手順に従って、CIP を使用して WebSphere Process Server をインストールできます。

## IBM WebSphere Installation Factory の開始

コマンド行から Installation Factory のコンソールを起動します。Installation Factory のコンソールでは、インストール・パッケージの作成のための GUI が提供されています。

### 始める前に

このタスクを開始するには、システムに Installation Factory がインストールされている必要があります。Installation Factory の GUI を使用して CIP を作成する場合は、ローカル・マシンにある、または作業しているマシンからアクセス可能な場所にあるターゲット・オペレーティング・システム用のインストール・イメージのコピーを保有している必要があります。

### このタスクについて

Installation Factory のコンソールには、ご使用のシステム用のビルド定義ファイル、カスタマイズ・インストール・パッケージ (CIP)、または の作成に必要なすべてのツールが用意されています。コンソールを起動する前に、インストール・パッケージに含めるすべてのコンポーネントを収集します。オプションの資産には、以下のものがあります。

- 保守パッケージ
- スクリプトまたは Java クラス
- 追加のユーザー・ファイル
- エンタープライズ・アーカイブ (EAR) ファイル

### 手順

1. Installation Factory グラフィカル・ユーザー・インターフェースを起動します。

Installation Factory ディレクトリーから、次のように ifgui コマンドを起動します。

```
AIX HP-UX Linux Solaris bin/ifgui.sh
```

```
Windows bin¥ifgui.bat
```

2. Installation Factory コンソールの起動パネルで、新規カスタマイズ・インストール・パッケージの作成、新規統合インストール・パッケージの作成、および既存のビルド定義ファイルのオープンのいずれかを選択します。また、Installation Factory のヘルプ・システムを起動することもできます。Installation Factory のコンソールのオプションの詳細は、後続の各トピックに記載されています。

### ifgui コマンド

ifgui コマンドは IBM WebSphereInstallation Factory コンソールを起動します。Installation Factory コンソールを使用すると、ビルド定義 XML ファイルを作成でき

ます。このファイルは、インストールする製品、製品のフィーチャー、保守パッケージなどのカスタマイズを識別して、カスタマイズ・インストール・パッケージ (CIP) に組み込みます。ifgui ツールを接続モードで使用すると、CIP を直接作成することもできます。

## 目的

注: Installation Factory コンソールは、ビルド定義ウィザードとよばれることもあります。

ifgui コマンドを使用すると、Installation Factory コンソールにアクセスできます。ビルド定義ファイルを作成するには、この方法が最も簡単です。

## ロケーション

ifgui コマンド・ファイルは、Installation Factory を解凍したディレクトリーの /bin ディレクトリーにあります。コマンド・ファイルは、以下の名前前のスクリプトです。

**AIX** **HP-UX** **Linux** **Solaris** ifgui.sh

**Windows** ifgui.bat

## ロギング

ifgui コマンドは、ビルド定義ファイルが正常に作成されたかどうかを示すログ・ファイルを作成します。接続モードでは、ログ・ファイルに CIP の作成に関する情報も含まれます。ビルド定義ファイルが正常に作成されていない場合は、トレース・ファイルを調べて問題のある箇所を突き止めてください。

以下のファイルに、ビルド定義ファイルのデータが記録されています。

- *IF\_working\_directory*/logs/trace.xml は、XML 形式の詳細なトレース・ログです。
- *IF\_working\_directory*/logs/log.txt はログ・ファイルです。

トレースおよびロギングの出力およびレベルは、**logLevel** および **traceLevel** パラメーターの説明に従って構成することができます。成功したことを示す指標は INSTCONFSUCCESS です。

障害の原因としてよく挙げられる問題は、フィックスパックおよび暫定修正の不一致、またはディスク・スペースの不足です。

## ifgui.sh の構文

**AIX** **HP-UX** **Linux** **Solaris**

ヘルプを表示する:

```
./ifgui.sh -help
```

ビルド定義を作成する:

```
./ifgui.sh
-logLevel log_level
-logFile log_file_path_name
-traceLevel trace_level
-traceFile trace_file_path_name
```

## ifgui.bat の構文

### Windows

ヘルプを表示する:

```
¥ifgui.bat -help
¥ifgui.bat -?
```

ビルド定義を作成する:

```
¥ifgui.bat
-logLevel log_level
-logFile log_file_path_name
-traceLevel trace_level
-traceFile trace_file_path_name
```

## パラメーター

以下の引数がサポートされています。

**-?** 使用法の情報を表示します。

### **-help**

使用法の情報を表示します。

### **-logFile** *log\_file\_path\_name*

ログ・ファイルを識別します。デフォルト値は *current\_working\_directory/logs/log.txt* です。

### **-logLevel** *log\_level*

メッセージのロギングのレベルを設定します。*log\_level* の有効な値は以下のとおりです。

- ALL
- CONFIG
- INFO
- WARNING
- SEVERE
- OFF (ロギングをオフにします)

デフォルト値は **INFO** です。

### **-traceFile** *trace\_file*

トレース・ファイルを識別します。デフォルト値は *current\_working\_directory/logs/trace.xml* です。

### **-traceLevel** *trace\_level*

トレースのレベルを設定します。*trace\_level* の有効な値は以下のとおりです。

- ALL
- FINE

- FINER
- FINEST
- OFF (トレースをオフにします)

デフォルト値は OFF です。

## 使用法

このウィザード内から CIP を作成するには、ビルド定義ファイルを接続モードで使用します。異なるオペレーティング・システム向けの CIP を作成している場合でも、ビルド定義ウィザードは、ほとんどの場合、接続モードを使用することをお勧めします。カスタマイズ・インストール・パッケージを作成する場合は、ビルド定義を Installation Factory の処理エンジンの入力として切断モードで使用します。詳しくは、ifcli コマンドを参照してください。

## Installation Factory Console のオプション

Installation Factory のコンソールでは、ビルド定義ファイルの作成および変更の際に選択できるオプションが提供されます。これらのビルド定義ファイルは、次にカスタマイズ・インストール・パッケージまたは統合インストール・パッケージ (CIP または IIP) を作成するために使用できます。

Installation Factory コンソールには、新規ビルド定義ファイルを作成し、オプションで新規ビルド定義から対応するカスタマイズ・インストール・パッケージ (CIP) および統合インストール・パッケージ (IIP) を作成するオプション、または既存のビルド定義を開いて編集し、オプションでそのビルド定義から CIP または IIP を作成するオプションがあります。さらに、Installation Factory ヘルプ・システムを起動するためのオプションもあります。

### 新規カスタマイズ・インストール・パッケージの作成

「新規カスタマイズ・インストール・パッケージの作成 (Create New Customized Installation Package)」オプションでは、製品の選択ウィザードが起動されます。インストールする製品およびリリースを選択すると、ビルド定義ウィザードが起動します。ビルド定義ウィザードを使用してビルド定義ファイルを作成し、オプションで対応するカスタマイズ・インストール・パッケージを作成します。

### 新規統合インストール・パッケージの作成

「新規統合インストール・パッケージの作成 (Create New Integrated Installation Package)」オプションにより、製品の選択ウィザードが起動されます。インストールする製品およびリリースを選択すると、ビルド定義ウィザードが起動します。ビルド定義ウィザードを使用してビルド定義ファイルを作成し、オプションで対応する統合インストール・パッケージを作成します。

### ビルド定義を開く

「ビルド定義を開く」オプションを選択すると、「既存のビルド定義の変更」パネルが表示され、編集するビルド定義をファイル・ブラウザで選択できます。

## ヘルプ

ヘルプ・アイコンをクリックすると、Installation Factory 資料が表示されます。

## ビルド定義の作成

ビルド定義とは、カスタマイズ・インストール・パッケージ (CIP) の作成に使用できる XML 文書です。Installation Factory コンソールからビルド定義ウィザードを使用して、ビルド定義を作成します。

## 始める前に

このタスクを実行する前に、Installation Factory が正しく設定されていることを確認してください。

**注:** **i5/OS** i5/OS インストール用のビルド定義と CIP を作成するには、Windows、UNIX、または Linux サーバーを使用する必要があります。Windows から CIP を i5/OS 上にインストールできますが、Linux または UNIX からは、インストール前に CIP を i5/OS サーバーまたは Windows サーバーに転送する必要があります。

## このタスクについて

CIP を作成する前に、まず CIP 用のビルド定義を作成する必要があります。ビルド定義とは、Installation Factory による WebSphere Process Server のインストールのカスタマイズ方法が定義された XML 文書です。ビルド定義ウィザードは、ビルド定義を作成する最も簡単な方法です。 *Installation\_Factory\_home/bin* ディレクトリー (*Installation\_Factory\_home* は Installation Factory を解凍したディレクトリー) から *ifgui* コマンドを使用してこの Installation Factory コンソールを起動します。新規 CIP の作成を選択するか、既存のビルド定義を開くことにより、ビルド定義ウィザードを立ち上げます。ビルド定義を保管し、そのビルド定義を使用して、ビルド定義ウィザードから直接 CIP を生成できます。また、*ifcli* コマンドでオプションを使用して、ビルド定義をコマンド行インターフェースに受け渡すこともできます。あるマシン上でコンソールを使用して対話的にビルド定義を作成し、その後 CIP をバッチ・モードで生成する (例えば、異なるマシン上で生成したり、大規模な自動化プロセスの一部として生成したりする) 場合、この 2 番目の方法が役立ちます。

**i5/OS** ビルド定義ウィザードを接続モードで実行し、i5/OS をターゲット・オペレーティング・システムとして選択します。この CIP は、その後 i5/OS システムに転送して、サイレントにインストールできます。また、インストール GUI を使用して、Windows サーバーから i5/OS に対して CIP をインストールできます。

## 手順

1. Installation Factory コンソールを起動します。 *Installation\_Factory\_home/bin* ディレクトリー (*Installation\_Factory\_home* は、Installation Factory を解凍したディレクトリー) から *ifgui* コマンドを使用してコンソールを起動します。
2. ビルド定義ウィザードの各パネルで操作し、カスタマイズ・ビルド定義を作成します。各コンソール・パネルの詳細については、後続の各トピックを参照してください。
3. ビルド定義を保管します。

4. ビルド定義を使用して、CIP を生成します。 CIP は、Installation Factory コンソールを直接使用するか、コマンド行ツールを使用して生成できます。

オプション	説明
ビルド定義ウィザードを使用	CIP を作成するためのオプションを選択します。
ifcli コマンド行ツールを使用	保管したビルド定義をオプションとして ifcli コマンドに受け渡します。

### ビルド定義ウィザード:

カスタマイズ・インストール・パッケージ (CIP) を作成するには、最初にビルド定義ファイルを作成する必要があります。ビルド定義ファイルは、IBM WebSphere Installation Factory が CIP の生成に使用するファイルです。ビルド定義ファイルには、必要とするインストールのカスタマイズを行えるようにするために、Installation Factory が CIP に組み込む内容が正確に記述されています。ビルド定義ウィザードを使用すると、ビルド定義ファイルを簡単に作成できます。

### 目的

Installation Factory の GUI 内のビルド定義ウィザードは、ビルド定義ファイルの作成プロセスを、手順を追って案内します。さまざまなビルド定義ファイルが必要なだけ作成して、必要とする CIP を定義できます。また、ビルド定義ウィザードを使用して、既存のビルド定義ファイルを変更することもできます。ビルド定義ファイルは、選択したロケーションに XML 文書として保存されます。

### 概要

ビルド定義ウィザードの各パネルでは、CIP に関する情報の入力が必要とされます。例えば、保守パッケージ、スクリプト、および組み込み可能なその他のコンポーネントのロケーションの入力が要求されます。CIP を生成するためのロケーションの入力も要求されます。この情報はすべて、新規のビルド定義ファイルに保存されるか、または変更中のビルド定義ファイルに保存されます。

ウィザードの最後のパネルでは、定義したばかりのビルド定義ファイルの内容に基づく CIP を生成するためのオプションが提供されます。または、ビルド定義ファイルのみを保存することもできます。以前に保存したビルド定義ファイルから CIP を作成するには、ifcli コマンドを使用します。ifcli コマンドは、Installation Factory コンソールの外部に CIP を生成するため、別のマシンまたはオペレーティング・システムで使用できます。

新規のビルド定義ファイルを作成する場合は、初期ウィザードで、カスタマイズする特定の製品およびインストール・パッケージを選択できます (例えば WebSphere Process Server 製品のインストール・パッケージなど)。この初期ウィザードが製品の選択ウィザードです。WebSphere Process Server、Enterprise Service Bus または WebSphere Process Server クライアントのいずれかを選択できます。

カスタマイズするインストール・パッケージを選択すると、前述のように、ビルド定義ウィザードがビルド定義ファイルの作成を支援してくれます。

## 例

ビルド定義ファイルのサンプルが `IF_root/samples/wbi` ディレクトリーにあります。

### ビルド定義ウィザードのパネル:

ビルド定義ウィザードは、ビルド定義ファイルおよびカスタマイズ・インストール・パッケージを作成するための便利なツールを提供しています。

### 目的

ビルド定義ウィザードは、ビルド定義ファイルを作成する場合に使用されます。次にビルド定義ファイルを使用して、カスタマイズ・インストール・パッケージを作成できます。

### パネル

- 「モードの選択」パネル
- 「パッケージ ID」パネル
- 「ビルド情報」パネル
- 「製品インストール・イメージ」パネル
- 「フィーチャーの選択」パネル
- 「保守パッケージ」パネル
- 「インストール・スクリプトとアンインストール・スクリプト」パネル
- 「プロファイルのカスタマイズ」パネル
- 「追加ファイル」パネル
- 「作成情報」パネル
- 「カスタマイズされたインストールのプレビュー」パネル

### ビルド定義ウィザード: 「モードの選択」パネル:

「モードの選択」パネルを使用して、接続モードか切断モードかを選択します。i5/OS サーバーの CIP を作成するには、「モードの選択」パネルで接続モードを選択します。

ビルド定義ウィザードで、製品インストール・イメージ、保守パッケージ、およびカスタマイズ・インストール・パッケージ (CIP) の作成に必要なその他のコンポーネントにアクセスできる場合、ウィザードを「接続モード」と呼ばれるモードで使用できます。このモードでは、ビルド定義ウィザードで、入力データとして提供されたファイルの検証、ビルド定義ファイルの作成、およびオプションで CIP の生成を行うことができます。製品インストール・イメージ、保守パッケージ、およびその他のコンポーネントが別のマシン上にあるためにアクセスできない場合、ビルド定義ウィザードは切断モードでしか使用できません。i5/OS サーバーの CIP を作成する場合は、接続モードを使用することをお勧めします。

切断モードでは、ビルド定義ウィザードを使用してターゲット・プラットフォームのビルド定義ファイルを作成することができますが、入力データを検証したり実際に CIP を生成したりすることはできません。その場合、ビルド定義ファイルをター

ゲット・マシンにコピーし、ifcli コマンドへの入力データとして使用して、実際に CIP を生成することができます。このとき、ビルド定義ウィザードで入力されたすべての入力データが検証されます。

可能な場合は常に接続モードで実行すると便利です。ビルド定義ウィザードと処理エンジンが同じマシン上で稼働する場合は、接続モードを選択します。

### モードがコンポーネントのロケーション指定に与える影響

接続モードでは、すべてのコンポーネントのローカル・ファイル・パスを指定します。CIP を作成する処理エンジンもこのマシン上にあります。そのため、処理エンジンはローカル・コンポーネントにアクセスできます。切断モードでは、処理エンジンが稼働し CIP を作成するターゲット・マシンでのコンポーネントのロケーションを指定します。例えば、製品インストール・イメージがターゲット・マシンの /tmp/IBM/WASimage ディレクトリーにあるとします。ターゲット・マシンでのロケーションを指定します。ターゲット・マシンでは、処理エンジンは CIP に組み込む製品イメージを検出する必要があります。

### モードがコンポーネント検証に与える影響

接続モードでは、ビルド定義ウィザードはビルド定義ファイルの作成時に、接続されたインストール・イメージ、保守パッケージ、およびその他のコンポーネントを検証できます。これは、すべて同じマシン上にあるためです。切断モードで実行する場合、ビルド定義ウィザードはコンポーネントにアクセスしないため、それらのコンポーネントを検証できません。この場合、Installation Factory はすべてのコンポーネントの検証を処理エンジンに任せます。処理エンジンは、CIP にコンポーネントを追加するときに、各コンポーネントを検証します。

### モードがターゲット・オペレーティング・システムに与える影響

切断モードでは、ターゲット・オペレーティング・システムおよびハードウェア・プラットフォームを識別するための選択フィールドが表示されます。処理エンジンが稼働して CIP を作成し、CIP がインストールされるオペレーティング・システムおよびハードウェア・プラットフォームを選択します。コマンド行呼び出しツール (ifcli) は 32 ビット・カーネルおよび 64 ビット・カーネルで稼働します。

### サポートされるアーキテクチャー

**Linux** **UNIX** 以下のアーキテクチャーの CIP を作成できます。

- HP PA-RISC 上の HP-UX。
- Intel Itanium® 64 ビット上の HP-UX。
- IBM PowerPC32 上の IBM AIX。
- IBM PowerPC64 上の IBM AIX。
- IBM PowerPC64 上の IBM i5/OS。
- Intel IA32 上の Linux。
- AMD Opteron 64 ビット/Intel EM64T 上の Linux。
- IBM PowerPC32 上の Linux。
- IBM PowerPC64 上の Linux。

- Linux z/Architecture®。
- Linux 64 ビット z/Architecture。
- Sun SPARC 32 ビット上の Sun Solaris。
- Sun SPARC 64 ビット上の Sun Solaris。
- AMD Opteron 64 ビット/Intel EM64T 上の Sun Solaris。
- Intel IA32 上の Windows。
- AMD Opteron 64 ビット/Intel EM64T 上の Windows。

**Windows** 以下のアーキテクチャーの CIP を作成できます。

- i5/OS
- WindowsIA32
- WindowsAMD64

### ビルド定義ウィザード: 「パッケージ ID」パネル:

「パッケージ ID」パネルで、カスタマイズ・インストール・パッケージ (CIP) の ID およびバージョンを指定します。

パッケージ識別フィールドは以下のとおりです。

- ID: 記述子を入力します。例えば、WebSphere Process Server インストール開発チームの機能検証テスト部門で作業している場合、作成したテスト CIP を識別するのに *com.ibm.toronto.wps.fvt* を使用できます。また、ノースカロライナ大学のスポーツ情報 IT 部門で作業するとします。プレスで使用するマシンに WebSphere Process Server の更新をインストールするため、作成する CIP の ID として *edu.unc.tarheels.sid.wps* を使用できます。

パッケージ ID は、汎用固有 ID となるように設計されています。単一のインストール済み環境に複数の CIP をインストールできます。各 CIP は、インストール済み環境の固有のディレクトリーにカスタマイズ資産をインストールします。固有のディレクトリー名は、固有 ID が提供された後にモデル化されます。このため、ID は固有でなければなりません。こうした理由で、IBM ではバージョン番号を使用した固有の逆ドメイン表記を提案しています。

- バージョン: 作成した CIP の識別に役立つバージョン番号を入力します。例えば、「GUI」フィールドに 1.0.0.0 と事前入力されている場合、そこから始めて増やしていきます。

CIP のバージョン番号は、製品のバージョン番号を反映していなくても構いません。

- フルパッケージ ID: 通知のみ。このフィールドには、前の 2 つのフィールドを連結したものが示されます。Installation Factory では、この固有 ID をカスタマイズ・インストール・パッケージを保持するディレクトリーの名前として使用します。例えば、完全パッケージ ID は *edu.unc.tarheels.sid.wps\_1.0.0.0* のようになります。完全パッケージ ID は、変数 *cip\_uid* として参照される場合もあります。

完全パッケージ ID の制約は以下のとおりです。

- **Windows** 45 文字以下とする

- 先頭と末尾の文字は英字 (A から Z、a から z) または数字 (0 から 9) のみとする
- 英字 (A から Z、a から z)、数字 (0 から 9)、ピリオド (.), および下線 (\_) のみ使用可能
- スペース、または以下の文字は使用不可: ~ ` ! @ # \$ % ^ & ( ) { } [ ] | ¥ / : ; , ? ' " < = > + \*

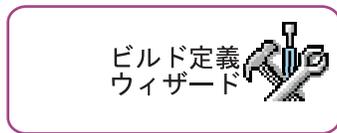
### ビルド定義ウィザード: 「ビルド情報」パネル:

「ビルド情報」パネルで、カスタマイズ・インストール・パッケージ (CIP) のビルド設定を指定します。

ビルド定義ウィザードでは、CIP の出力ロケーションを指定する XML ビルド定義ファイルを作成します。ファイルの名前とロケーションは、どちらもユーザーが制御します。ビルド定義ファイルは、常にビルド定義ウィザード・マシン上のディレクトリー・パスに保存されます。「ビルド定義」フィールドにビルド定義ファイルの名前を指定します。ビルド定義ファイルは、処理エンジンの応答ファイルと考えることができます。この XML ファイルは、処理エンジンが CIP のすべてのコンポーネントを配置するために必要な情報を提供します。「カスタマイズ・インストール・パッケージ」フィールドで、CIP を作成するディレクトリーの名前を指定します。Installation Factory は、CIP を含む圧縮ファイルを作成し、そのファイルをユーザーが名前を指定したディレクトリーに格納します。

**注:** Windows CIP ビルド・ディレクトリーの文字数は、30 文字以下にする必要があります。

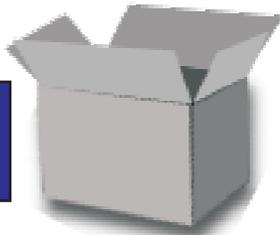
処理エンジンは、ビルド定義ファイルから CIP ロケーションを読み取り、CIP を格納する場所を判別します。



ビルド定義 XML



WebSphere ソフトウェア用の  
自動カスタマイズ・  
インストール・パッケージ



カスタマイズ済みインストール・パッケージのビルド・ロケーション

/opt/ifactory/wpsimages

ファイルおよびディレクトリ場所は、フィールドに直接入力できます。または、接続モードで「参照」をクリックして、既存のビルド定義ファイルまたは既存の CIP を検索し、選択します。CIP ディレクトリ・パスはターゲット・マシン上にあります。切断モードで作業している場合は、適切なパスを入力する必要があります。さらにそのパスがリモート・システムに対して適切である必要があります。例えば、ビルド定義ディレクトリのパスとファイル名は、以下のようになります。

- **AIX** **HP-UX** **Linux** **Solaris** /IF/builddefs/  
com.ibm.ws.install.wbiserver\_1.0.0.0.xml
- **Windows** C:\¥IF¥builddefs¥com.ibm.ws.install.wbiserver\_1.0.0.0.xml

- **i5/OS** /IF/builddefs/com.ibm.ws.install.wbiserver\_1.0.0.0.xml

対応する CIP ビルド・ディレクトリーのパスは以下のようになります。

- **AIX** **HP-UX** **Linux** **Solaris** /IF/
- **Windows** C:\¥IF¥
- **i5/OS** /IF/

「次へ」をクリックすると、検証が実行されます。検証では、ビルド・ディレクトリー・パスが正しいフォーマットであることが検査されます。

### ビルド定義ウィザード: 「製品インストール・イメージ」パネル:

「製品インストール・イメージ」パネルで、WebSphere Process Server のインストール・イメージのロケーションを指定します。

ビルド定義ファイルによって、処理エンジンにインストールされている WebSphere Process Server 製品のインストール・イメージが格納されているディレクトリーのロケーションが提供される必要があります。

注: インストール・イメージは、WebSphere Process Server の一般出荷可能なインストーラーです。カスタマイズ・インストール・パッケージには、インストール・イメージが含まれていますが、それ自体はインストール・イメージではありません。

製品インストール・イメージのディレクトリーのロケーションを「製品インストール・イメージのディレクトリー・パス」フィールドに指定します。指定するパスは、(製品メディアまたはダウンロードしたイメージから) インストールする WebSphere Process Server 製品の最新のインストール・イメージが格納されているディレクトリーへのパスです。

親ディレクトリーを指定することもできます。例えば、イメージが /tmp/WPS ディレクトリーにある場合には /tmp と指定できます。

ディレクトリーのロケーションを指定するには、フィールドに直接入力します。または、接続モードで「参照」をクリックし、既存のディレクトリーを検索して選択します。

処理エンジンでは、ディレクトリーが存在し、製品の選択ウィザードで選択された製品と一致する有効なインストール・イメージを保持している必要があります。接続モードでは、「次へ」をクリックすると検証が行われます。切断モードでは、処理エンジンは、カスタマイズ・インストール・パッケージを作成している間に検証を行います。

接続モードでは、インストール・イメージ用のディレクトリーが存在しなければなりません。切断モードの場合、処理エンジンが稼働するマシンのファイル・パスを指定するようにしてください。例えば、ターゲット・マシンの CD-ROM ドライブのマウント・ポイントを指定します。処理エンジンは、作成時にイメージを見つけられなければなりません。

### ビルド定義ウィザード: 「フィーチャーの選択」パネル:

「フィーチャーの選択」パネルを使用して、ビルド定義ファイルに組み込む機能を選択します。

**注:** このパネルは、WebSphere Process Server クライアントをインストールする場合には表示されません。この場合は、即時にウィザードは「保守パッケージ」パネルに移動します。

ビルド定義ファイルには、カスタマイズ・インストール・パッケージ (CIP) に組み込む製品機能を指定する必要があります。組み込む機能を選択します。インストーラーで CIP を使用して製品をインストールするときには、ユーザーが CIP に組み込んだ機能が表示されます。

必須機能は「必須」という語が追加された名前でもリストされますが、選択できません。一部の製品には、実行可能な製品をインストールするための CIP に組み込む必要がある機能があります。

インストーラーで CIP を使用して製品をインストールするときには、ユーザーが CIP に組み込んでいないオプション機能は選択できません。

**重要:** インストールに組み込む機能は、この段階で組み込む必要があります。CIP をインストールするときに、これらの機能をインストールから除外するオプションはありますが、CIP に組み込まれていない機能を追加することはできません。

#### **ビルド定義ウィザード: 「保守パッケージ」パネル:**

「保守パッケージ」パネルを使用して、カスタマイズ・インストール・パッケージ (CIP) に組み込む保守パッケージ (\*.pak ファイル) を選択します。保守パッケージには、リフレッシュ・パック、フィックスパック、および暫定修正が含まれます。

保守パッケージの選択はオプションです。どのようなパッケージのタイプも組み込むことができます。例えば、フィックスパックをスキップして暫定修正をインストールすることができます。または、リフレッシュ・パックを 1 つと暫定修正を 5 つインストールすることもできます。

フィックスパックの圧縮ファイルは、WebSphere ソフトウェア用の Update Installer にバンドルされます。ファイルを解凍して、保守パッケージ (\*.pak) ファイルを /updateinstaller/maintenance ディレクトリーに格納します。

保守パッケージを選択するときには必ず \*.pak ファイルを選択してください (例えば、updateinstaller¥maintenance¥6.2-WS-WBI-WinX32-RP0000001.pak ファイルなど)。

選択できるのは、1 つのフィックスパックと 1 つのリフレッシュ・パックのみです。フィックスパックは累積されます。必ず入手可能な最新のパッケージを選択してください。

各フィールドに直接入力して、\*.pak ファイルのファイル・パスとファイル名を指定します。接続モードでは、代わりに「参照」ボタンをクリックして、入手可能なリフレッシュ・パックとフィックスパックを検索することができます。

## 検証

処理エンジンには、有効なファイル・パスと有効なフォーマットを持つ保守パッケージが指定されている必要があります。接続モードでは、「次へ」をクリックすると、ファイル・パスの検証が行われます。フィックスパックの検証時に、作成される WebSphere Process Server CIP に必要な基本 WebSphere Application Server 保守レベルを示すダイアログが表示されます。

切断モードでは、処理エンジンがビルド定義からカスタマイズ・インストール・パッケージをビルドするときに検証が行われます。

### 切断モードのファイル・パス指定への影響

接続モードでは、ディレクトリーおよび有効な保守パッケージが存在している必要があります。切断モードの場合、処理エンジンが稼働するマシンについて、ファイル・パスおよび \*.pak ファイルの名前を指定するようにしてください。処理エンジンは、ビルド時に保守パッケージを見つけられなければなりません。

### 保守パッケージとは

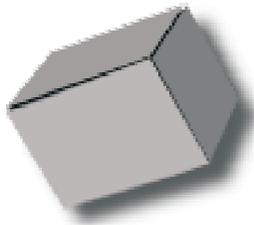
保守パッケージには、フィックスパック、リフレッシュ・パック、および暫定修正が含まれます。

フィックスパックは修正の累積パッケージであり、バージョン 6.2.0.1 のようになります。フィックスパックは前のフィックスパックの上にインストールされます。例えば、バージョン 6.2.0.2 はバージョン 6.2.0.1 に適用されます。フィックスパックは累積的に追加されるため、バージョン 6.2.0.2 にはバージョン 6.2.0.1 のすべての修正が含まれます。配布されたフィックスパック内の修正のリストを確認して、再インストールする暫定修正を判別します。暫定修正が削除されていてフィックスパックにその修正が含まれない場合、暫定修正を再インストールします。

リフレッシュ・パックは修正の累積パッケージであり、バージョン 6.2.1 のようになります。リフレッシュ・パックは前のリフレッシュ・パックの上にインストールされます。例えば、バージョン 6.2.2 はバージョン 6.2.1 に適用されます。リフレッシュ・パックは累積的に追加されるため、バージョン 6.2.2 にはバージョン 6.2.1 のすべての修正が含まれます。また、リフレッシュ・パックには、すべての中間フィックスパックからの修正も含まれます。リフレッシュ・パックで配布された修正のリストを確認して、再インストールする暫定修正を判別します。暫定修正が削除され、リフレッシュ・パックにその修正が含まれない場合、その暫定修正を再インストールします。

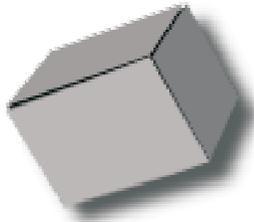
暫定修正は公開された 1 つの緊急の修正であり、1 つ以上の製品の問題点を解決します。

暫定修正は、適用可能な場合、リリース、リフレッシュ・パックまたはフィックスパックに適用することができます。暫定修正が公開される際には、1 人以上のお客様によって事前に検証されます。



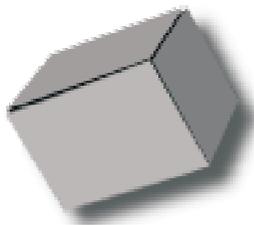
リフレッシュ・パック  
Rp1

C:\WBI\_downloads\name\_of\_refresh\_pack\_1\_ZIP\_file.pak



フィックスパック  
FP3

C:\WBI\_downloads\name\_of\_fix\_pack\_3\_ZIP\_file.pak



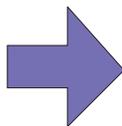
SDK、Java テクノロジー・エディション・フィックスパック  
SDK

C:\WBI\_downloads\name\_of\_SDK\_fix\_pack\_ZIP\_file.pak



暫定修正  
iFix 「A」 および iFix 「B」

C:\WBI\_downloads\name\_of\_ifix\_A\_file.pak  
C:\WBI\_downloads\name\_of\_ifix\_B\_file.pak



ビルド定義  
ウィザード



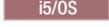
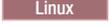
**ビルド定義ウィザード:** 「インストール・スクリプトとアンインストール・スクリプト」パネル:

ビルド定義ウィザードでは、カスタマイズ・インストール・パッケージ (CIP) を正常にインストールした後、または CIP のアンインストール前に完全アンインストールの一部として実行する構成スクリプトを組み込む方法を指定します。保守を含む CIP をインストールすることによって既存のインストールを更新する場合、これらのスクリプトは実行されません。

スクリプトは CIP の一部として組み込むことができます。このようなスクリプトは、インストールまたはアンインストールの一部として実行できます。サポートされるスクリプトのタイプは以下のとおりです。

- ANT (.ant)
- JACL (.jacl)
- Jython (.py)
-  バッチ・シェル・スクリプト (.bat)

注: このプラットフォームは、ターゲット・プラットフォームを指します。これは IBM WebSphere Installation Factory を実行しているプラットフォームであるとは限りません。

-    シェル・スクリプト (.sh)

注: このプラットフォームは、ターゲット・プラットフォームを指します。これは Installation Factory を実行しているプラットフォームであるとは限りません。また、i5/OS では、シェル・スクリプトに .sh 拡張子がないことに注意してください。

- JAR ファイル (.jar)

### 「インストール」タブ

「インストール」タブで、CIP の正常なインストールの後に実行するスクリプトを指定します。

### 「アンインストール」タブ

「アンインストール」タブを使用して、完全アンインストール中の CIP のアンインストール前に実行するスクリプトを指定します。

### ファイル名

スクリプトの追加後に「ファイル名」フィールドに表示されるスクリプトの名前。この名前は「変更」ボタンを使用して変更できます。

### ディレクトリー・パス

スクリプトの追加後、「ディレクトリー・パス (Directory Path)」フィールドにスクリプト・ファイルが格納されているディレクトリーが示されます。このパスは「変更」ボタンを使用して変更できます。

### 障害時アクション

「障害時アクション」フィールドには、スクリプト・エラーの発生時に実行されるアクションが示されます。この値は、「スクリプトの追加」パネルの「このスクリプトの実行中にエラーが発生した場合に操作を停止する (Stop the operation if an error occurs while running this script)」チェック・ボックスを選択したかどうかによって最初に設定されます。このチェック・ボックスを選択した場合、「障害時アクション」フィールドに「致命的エラー」という値が示されます。選択していない場合は「継続」という値が示されます。

「障害時アクション」フィールドの値を変更するには、「変更」ボタンを押し、「このスクリプトの実行中にエラーが発生した場合に操作を停止する (Stop the operation if an error occurs while running this script)」チェック・ボックスを選択または選択解除します。

## スクリプトの追加

CIP に組み込むスクリプトを検索して選択するには、「スクリプトの追加 (Add scripts)」ボタンを押します。スクリプトは、以下のサポートされるスクリプト・タイプのいずれかを選択できます。

- ANT スクリプト (\*.ant)
-  Windows バッチ・ファイル (.bat)
-   シェル・スクリプト (.sh)
- JACL スクリプト
- Jython スクリプト
- JAR ファイル

.jar ファイルには、各 .jar ファイル内の META-INF/MANIFEST.MF ファイルにメイン・クラスが定義されています。CIP がインストールされる時、スクリプトは `cip_uid_root/config/install` ディレクトリー内にあります。これらのスクリプトは、通常のインストール手順のすべての構成アクションが実行された後に構成アクションとして実行されます。

- 「変更」：項目を選択して「変更」をクリックし、ファイル名またはディレクトリー・パスを変更します。
- 「削除」：選択したスクリプトを CIP から削除します。
- 「上へ移動」：リスト内のスクリプトを上へ移動させ、それより下にあるスクリプトよりも前に実行されるようにします。
- 「下へ移動」：リスト内のスクリプトを下へ移動させ、それより上にあるスクリプトの後に実行されるようにします。

## ビルド定義ウィザード: 「プロファイルのカスタマイズ」パネル:

プロファイルのカスタマイズ・パネルを使用して、プロファイルの作成時または削除時にスクリプトを実行できます。また、プロファイル拡張の一部として、1 つ以上のエンタープライズ・アーカイブ (EAR) ファイルをデプロイすることもできます。

注: WebSphere Process Server クライアントには追加のプロファイル・テンプレートが組み込まれていないため、WebSphere Process Server クライアントをインストールするときにこのパネルは表示されません。この場合は、即時にウィザードは「追加ファイル」パネルに移動します。 panel.

プロファイルのカスタマイズ・パネルを使用して、以下の 3 つのプロファイル・タイプのいずれかについて、カスタマイズを作成することができます。

- スタンドアロン・サーバー
- デプロイメント・マネージャー
- カスタム

CIP のインストール時に、プロファイル管理ツールによって、プロファイル・タイプを選択するよう求められます。ここで定義するカスタマイズを使用するには、プロファイル・カスタマイズ・パネルで選択するプロファイル・タイプと同じプロファイル・タイプを、プロファイル管理ツールで選択する必要があります。

注: Network Deployment 環境にインストールする場合は、デプロイメント・マネージャーおよびカスタムのみを選択できます。

注: プロファイル・カスタマイズ・パネルを使用する際、EAR ファイルはデフォルト・オプションでのみデプロイできます。他のオプションで EAR ファイルをデプロイする必要がある場合は、その EAR ファイルをユーザー・ファイルとして組み込み、必要なオプションで EAR をデプロイするためのスクリプトを使用します。

### プロファイルのタイプ

カスタマイズを作成するプロファイルのタイプを選択します。

- スタンドアロン・サーバー
- デプロイメント・マネージャー
- カスタム

### *Profile\_type* プロファイル

セクション「*Profile\_type* プロファイル」(*Profile\_type* は処理しているプロファイルのタイプ) では、プロファイル管理ツールに、カスタマイズを使用して新規プロファイルを作成する、または既存のプロファイルを拡張するためのオプションを表示するかどうかを指定できます。

注: 既存のプロファイルの拡張はサポートされていません。

プロファイル管理ツールが、カスタマイズを使用して作成することのできるプロファイル・タイプをすべてリストできるようにするには、「**カスタマイズを使用した新規プロファイルの作成を許可する (Allow creation of new profiles using the customizations)**」を選択します。

### *Profile\_type* のカスタマイズ

セクション「*Profile\_type* のカスタマイズ」(*Profile\_type* は処理しているプロファイルのタイプ) では、プロファイル作成時または削除時に作成するカスタマイズを指定できます。

### プロファイルの作成

実行するスクリプト、または CIP を正常にインストールした後に組み込むファイルを指定します。

スクリプトの実行、構成アーカイブの組み込みと復元、エンタープライズ・アーカイブ (EAR) ファイルの組み込み、および EAR ファイル内でのアプリケーションのデプロイなどのアクションを実行します。

### プロファイルの削除

プロファイルを拡張解除する場合に実行するスクリプトを指定します。

プロファイルの削除時に、CIP は実行するスクリプトを追加で指定できます。通常、これらのスクリプトは、プロファイルの作成時に行われたカスタマイズ・アクションを元に戻すために必要です。実行するプロファイル削除時の構成アクションがある場合は、`cip_app_server_root/lif_augmentingTemplates/deleteRegistry.xml` ファイルにその構成アクションが含まれます。`manageprofiles` コマンドは通常、プロファイルの削除時に、カスタマイズされた Installation Factory の拡張を解除します。

### **cip\_app\_server\_root**

Installation Factory によって生成されたカスタマイズ・インストール・パッケージ (CIP) のデフォルトのインストール・ルート・ディレクトリーを以下にリストします。

<b>AIX</b>	<code>/usr/IBM/WebSphere/ProcServer/cip/cip_uid</code>
<b>HP-UX</b>	<code>/opt/IBM/WebSphere/ProcServer/cip/cip_uid</code>
<b>Linux</b>	<code>/opt/ibm/WebSphere/ProcServer/cip/cip_uid</code>
<b>Solaris</b>	<code>/opt/IBM/WebSphere/ProcServer/cip/cip_uid</code>
<b>Windows</b>	<code>C:\Program Files\IBM\WebSphere\ProcServer\cip\cip_uid</code>
<b>i5/OS</b>	<code>/QIBM/ProdData/WebSphere/ProcServer/V61/ND/cip/cip_uid</code>

`cip_uid` 変数は、ビルド定義ファイルの作成時に生成された CIP 固有の ID です。ビルド定義ウィザードで生成された値は、オーバーライドできます。システムに複数の CIP をインストールできるようにするには、固有値を使用します。

### **アクション・タイプ**

以下の構成アクション・タイプのいずれかを指定します。

- スクリプトの実行
- エンタープライズ・アーカイブのデプロイ。EAR ファイルは、スタンドアロン・サーバーにのみデプロイできます。

### **ファイル名**

スクリプト、エンタープライズ・アーカイブ・ファイル、または構成アーカイブ・ファイルを指定します。

### **ディレクトリー・パス**

スクリプト、エンタープライズ・アーカイブ・ファイル、または構成アーカイブ・ファイルが格納されるディレクトリーを指定します。

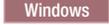
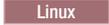
### **障害時アクション**

スクリプトに障害が発生した場合、またはファイルがロードできない場合に行われるアクションを指定します。以下の選択項目が有効です。

- 致命的エラー
- 継続

## スクリプトの追加

CIP に組み込むスクリプトを検索して選択できる、ファイル参照ダイアログ・ウィンドウを開きます。スクリプトは、以下のサポートされるスクリプト・タイプのいずれかを選択できます。

- ANT スクリプト (\*.ant)
-  Windows バッチ・ファイル (\*.bat)
-    シェル・スクリプト (\*.sh)

注: i5/OS では、シェル・スクリプトには .sh 拡張子がありません。

- JAR ファイル (.jar)
- JACL スクリプト (.jacl)
- Jython スクリプト (.py)

注: 追加するスクリプトは、このパネルで選択したプロファイル・タイプおよびアクション・タイプ (作成または削除のいずれか) に明確に関連付けられます。そのため、スクリプトを追加する前にタイプおよびイベントを選択する必要があります。

## エンタープライズ・アーカイブの追加

WebSphere Process Server プロファイルの CIP に組み込むエンタープライズ・アプリケーション・アーカイブ (EAR) ファイルを検索して選択できる、参照ダイアログを開きます。

EAR ファイルは、拡張された Java アーカイブ (JAR) ファイルであり、J2EE アプリケーションを J2EE アプリケーション・サーバーにデプロイするために使用される J2EE 標準で定義されています。EAR ファイルには、エンタープライズ Bean、デプロイメント記述子、および個々の Web アプリケーションの Web アーカイブ (WAR) ファイルが含まれています。

### ビルド定義ウィザード: 「追加ファイル」パネル:

「追加ファイル」パネルを使用して、カスタマイズ・インストール・パッケージ (CIP) にファイルとディレクトリーを追加します。

スクリプトは以下の 4 つのタイミングのうちいつでも実行できます。

- CIP のインストール時
- CIP のアンインストール時
- プロファイルの作成時
- プロファイルの削除時

スクリプトは、追加ファイルとして組み込み可能な他のスクリプトを呼び出すことができます。

すべての追加ファイルおよびディレクトリーは、*install\_root/cip/cip\_uid/userFiles* ディレクトリーのインストール済み CIP 内にあります。

## ファイルの追加

構成済みシステム内または関連ファイルのキャッシュ内を参照して、CIP に組み込む追加ファイルを選択します。例えば、「プロファイル・カスタマイズ」パネルにリストされたスクリプトによって呼び出される、1 つ以上のスクリプト・ファイルを組み込むことができます。スクリプトをプロファイルの作成時または削除時に実行する場合、スクリプトでは、追加ファイルとして組み込まれた他のスクリプトを呼び出すことができます。

同様に、「インストール・スクリプトとアンインストール・スクリプト」パネルにリストされたスクリプトは、CIP のインストール時または CIP の削除時に実行されます。このようなスクリプトは、追加ファイルとして組み込まれた他のスクリプトを呼び出すことができます。

## ディレクトリーの追加

CIP に指定する追加ディレクトリーを参照して選択します。例えば、多数のスクリプトが含まれるディレクトリーを指定することができます。

## 変更

項目を選択して「変更」をクリックし、ファイル・パスとファイル名またはディレクトリー・パスとディレクトリー名を変更します。

## 削除

選択したファイルとディレクトリーを CIP から除去します。

## ファイル名

ファイルを識別します。

## ディレクトリー・パス

ファイルが格納されているディレクトリーを識別します。

## ビルド定義ウィザード: 「作成情報」パネル:

「作成情報」パネルを使用して、カスタマイズ・インストール・パッケージ (CIP) に関する有用な情報を指定します。

インストールを実行するユーザーは、「このカスタム・インストール・パッケージについて」パネルを参照できます。「作成情報」パネルのフィールドに情報を入力することにより、インストールを実行するユーザーに追加情報を提供できます。

## 組織

組織に関する識別情報を入力します。

## 説明

CIP の説明を入力します。

## ビルド定義ウィザード: 「カスタマイズ・インストール・パッケージのプレビュー (Customized installation package preview)」パネル:

ビルド定義ウィザードでは、ユーザーが選択したすべての内容を確認するための要約パネルを参照できます。

ビルド定義ウィザードを接続モードで実行する場合、処理エンジンを開始してカスタマイズ・インストール・パッケージ (CIP) を作成することもできます。ビルド定義ウィザードを切断モードで実行する場合は、ビルド定義ファイルをターゲット・システムにコピーしてから、ifcli コマンドを使用してターゲット・システムで処理エンジンを開始してください。

「終了」をクリックすると、ビルド定義ファイルが自動的に作成されます。指定したファイルが既に存在する場合、ファイルを上書きすることを確認するダイアログが表示されます。また、CIP 用のディレクトリーも自動的に作成されます。指定したディレクトリーが既に存在する場合、現在の内容を上書きすることを確認するダイアログが表示されます。

「推定サイズとスペースの表示」ボタンをクリックすると、提示された CIP のサイズを推定し、ローカル・システムで使用可能なディスク・スペースと比較することができます。

### ビルド定義ファイル:

ビルド定義ファイルとは、カスタマイズ・インストール・パッケージ (CIP) のコンポーネントおよび特性を識別する XML ファイルです。

### 目的

ビルド定義ファイルは、CIP の内容を識別します。Installation Factory のグラフィカル・ユーザー・インターフェースを使用する場合は、ビルド定義ファイルを編集する必要はありません。ビルド定義ファイルを編集する場合は、サンプルのビルド定義ファイルから始め、XML 検証エディターを使用して変更を加える必要があります。サンプルのビルド定義ファイルは *IF\_root/samples/wbi* ディレクトリーにあります。ここで *IF\_root* は、Installation Factory を解凍したディレクトリーの名前です。

### 例

WebSphere Process Server バージョン 6.1 製品の以下の例では、あるバージョンのビルド定義ファイルのいくつかの要素を示しています。最新の例については、*IF\_root/samples/wbi/SampleBuildDefinition.xml* ファイルを参照してください。XML スキーマのコーディングに関する疑問に対して明確な回答が必要な場合は、常に最新のビルド定義の XML スキーマを参照してください。

```
<basebuilddef:buildDefinition
xmlns:xsi="http://www.w3.org/2001/XMLSchema-instance"
xmlns:basebuilddef="http://www.ibm.com/xmlns/prod/websphere/if/basebuilddef"
xmlns:builddef="http://www.ibm.com/xmlns/prod/websphere/if/builddef"
xmlns:common="http://www.ibm.com/xmlns/prod/websphere/if/common"
xsi:type="builddef:BuildDefinition">
  <installFactoryVersion>
    <version>6</version>
    <release>1</release>
    <refreshPack>0</refreshPack>
    <fixPack>0</fixPack>
```

```

    <buildID>o0618.44</buildID>
  </installFactoryVersion>
  <description lang="en_US">Custom Install Package for
  WebSphere Process Server</description>
  <qualifiedVersionedPackageId>
    <offeringId>WBI</offeringId>
    <editionId></editionId>
    <installPackageId></installPackageId>
    <version>
      <version>6</version>
      <release>1</release>
      <refreshPack>0</refreshPack>
      <fixPack>1</fixPack>
    </version>
  </qualifiedVersionedPackageId>
  <modeSelection>Connected</modeSelection>
  <supportMultiPlatformsImage>>false</supportMultiPlatformsImage>
  <buildOptions>
    <targetLocation>E:%test%</targetLocation>
    <overwriteWithoutWarning>>false</overwriteWithoutWarning>
  </buildOptions>
  <authorInfo lang="en_US">
    <organization>IBM</organization>
  </authorInfo>
  <packageIdentifier>
    <fullPackageIdentifier>com.ibm.ws.install.wbiserver_1.0.0.0
    </fullPackageIdentifier>
    <identifier>com.ibm.ws.install.wbiserver</identifier>
    <version>1.0.0.0</version>
  </packageIdentifier>
  <packageMergeInfo>
  <sourceFullInstallPackageLocation>
    E:%WPSImage%v6.1%installimage</sourceFullInstallPackageLocation>
    <sourceMaintenanceInstallPackages installOrder="1" maintenanceType="fixPack">
      <rootFolder>
        <whichFolderToUse>literalRootProvided</whichFolderToUse>
        <rootFolder>E:%WPSImage%v6.1%FixPack%Windows%6.1.0.1</rootFolder>
      </rootFolder>
      <relativeFolder>.</relativeFolder>
      <fileNamePattern isRegex="false">6.1.0-WS-WPS-ESB-WinX32-FP0000001.pak
      </fileNamePattern>
    </sourceMaintenanceInstallPackages>
    <interimFixes maintenanceType="interimFix">
      <rootFolder>
        <whichFolderToUse>literalRootProvided</whichFolderToUse>
        <rootFolder>E:%ICT%maintenance</rootFolder>
      </rootFolder>
      <relativeFolder>.</relativeFolder>
      <fileNamePattern isRegex="false">6.1.0.1-WS-WBI-IFJR78946.pak
      </fileNamePattern>
    </interimFixes>
  </packageMergeInfo>
  <userFiles>
    <files>
      <fileSet>
        <rootFolder>
          <whichFolderToUse>literalRootProvided</whichFolderToUse>
          <rootFolder>E:%test%</rootFolder>
        </rootFolder>
        <relativeFolder includeSubfolders="false">.</relativeFolder>
        <fileNamePattern isRegex="false">myFile</fileNamePattern>
      </fileSet>
    </files>
  </userFiles>
  <common:features>
    <feature>
      <featureId>

```

```

        <featureId isRegEx="false">wbi.server.samples</featureId>
    </featureId>
    <selectedByDefault>false</selectedByDefault>
    <userModifiable>true</userModifiable>
    <hidden>false</hidden>
</feature>
</common:features>
</basebuilddef:buildDefinition>

```

以下は、WebSphere Process Server バージョン 6.1 用のサンプルの CustomInstallInfo.xml です。

```

<custinstinfo:customInstallInfo
xmlns:common="http://www.ibm.com/xmlns/prod/websphere/ibm/common"
xmlns:custinstinfo="http://www.ibm.com/xmlns/prod/websphere/ibm/custinstinfo">
  <installFactoryVersion>
    <version>6</version>
    <release>1</release>
    <refreshPack>0</refreshPack>
    <fixPack>0</fixPack>
    <buildID>o0618.44</buildID>
  </installFactoryVersion>
  <common:bundle>
    com.ibm.ws.install.factory.wbiserver.cip.v61.comd.provider.wbiservercip
  </common:bundle>
  <description lang="en_US">Custom Install Package for WebSphere Process Server
</description>
  <qualifiedVersionedPackageId>
    <offeringId>WBI</offeringId>
    <editionId></editionId>
    <installPackageId></installPackageId>
    <version>
      <version>6</version>
      <release>1</release>
      <refreshPack>0</refreshPack>
      <fixPack>1</fixPack>
    </version>
  </qualifiedVersionedPackageId>
  <offeringDisplayName>
    <messageKey>COMD.OfferingName.WPS</messageKey>
  </offeringDisplayName>
  <platformInfo>
    <common:osVendor isRegEx="false">MICROSOFT</common:osVendor>
    <common:osName isRegEx="false">WINDOWS</common:osName>
    <common:osVersion isRegEx="false">NA</common:osVersion>
    <common:osPatchLevel isRegEx="false">NA</common:osPatchLevel>
    <common:osArch isRegEx="false">x86</common:osArch>
    <displayName>
      <osVendorDisplayName>
        <messageKey></messageKey>
      </osVendorDisplayName>
      <osNameDisplayName>
        <messageKey>COMD.OS.Windows</messageKey>
      </osNameDisplayName>
      <osVersionDisplayName>
        <messageKey></messageKey>
      </osVersionDisplayName>
      <osArchDisplayName>
        <messageKey>COMD.Arch.x32</messageKey>
      </osArchDisplayName>
    </displayName>
  </platformInfo>
  <authorInfo lang="en_US">
    <organization>IBM</organization>
  </authorInfo>
  <packageIdentifier>
    <fullPackageIdentifier>com.ibm.ws.install.wbiserver_1.0.0.0

```

```

    </fullPackageIdentifier>
    <identifier>com.ibm.ws.install.wbiserver</identifier>
    <version>1.0.0.0</version>
  </packageIdentifier>
  <buildDate>2006-06-26</buildDate>
  <buildTime>15:59:44</buildTime>
  <rollbackSupported>true</rollbackSupported>
  <fixes>
    <fix>
      <name>6.1.0.1-WS-WBI-IFJR78946.pak</name>
    </fix>
    <folderWithinPackageForInterimFixes>custom.wbi/maintenance
    </folderWithinPackageForInterimFixes>
  </fixes>
  <common:features>
    <feature>
      <featureId>
        <featureId>wbis</featureId>
        <common:displayName>
          <messageKey>COMD.FeatureName.wbis</messageKey>
        </common:displayName>
      </featureId>
      <selectedByDefault>true</selectedByDefault>
      <userModifiable>false</userModifiable>
      <hidden>true</hidden>
    </feature>
    <feature>
      <featureId>
        <featureId>wbisonly</featureId>
        <common:displayName>
          <messageKey>COMD.FeatureName.wbisonly</messageKey>
        </common:displayName>
      </featureId>
      <selectedByDefault>true</selectedByDefault>
      <userModifiable>false</userModifiable>
      <hidden>true</hidden>
    </feature>
    <feature>
      <featureId>
        <featureId>wbis.itlm</featureId>
        <common:displayName>
          <messageKey>COMD.FeatureName.wbis.itlm</messageKey>
        </common:displayName>
      </featureId>
      <selectedByDefault>true</selectedByDefault>
      <userModifiable>false</userModifiable>
      <hidden>true</hidden>
    </feature>
    <feature>
      <featureId>
        <featureId>wbi.common2</featureId>
        <common:displayName>
          <messageKey>COMD.FeatureName.wbi.common2</messageKey>
        </common:displayName>
      </featureId>
      <selectedByDefault>true</selectedByDefault>
      <userModifiable>false</userModifiable>
      <hidden>true</hidden>
    </feature>
    <feature>
      <featureId>
        <featureId>wesb</featureId>
        <common:displayName>
          <messageKey>COMD.FeatureName.wesb</messageKey>
        </common:displayName>
      </featureId>
      <selectedByDefault>true</selectedByDefault>
      <userModifiable>false</userModifiable>
    </feature>
  </common:features>

```

```

    <hidden>true</hidden>
  </feature>
</feature>
<feature>
  <featureId>
    <featureId>bpc</featureId>
    <common:displayName>
      <messageKey>CMD.FeatureName.bpc</messageKey>
    </common:displayName>
  </featureId>
  <selectedByDefault>true</selectedByDefault>
  <userModifiable>false</userModifiable>
  <hidden>true</hidden>
</feature>
<feature>
  <featureId>
    <featureId>soacore</featureId>
    <common:displayName>
      <messageKey>CMD.FeatureName.soacore</messageKey>
    </common:displayName>
  </featureId>
  <selectedByDefault>true</selectedByDefault>
  <userModifiable>false</userModifiable>
  <hidden>true</hidden>
</feature>
</common:features>
<omittedFeatures>
  <featureId>
    <featureId>wbis.samples</featureId>
    <common:displayName>
      <messageKey>CMD.FeatureName.wbis.samples</messageKey>
    </common:displayName>
  </featureId>
  <featureId>
    <featureId>bpc.samples</featureId>
    <common:displayName>
      <messageKey>CMD.FeatureName.bpc.samples</messageKey>
    </common:displayName>
  </featureId>
  <featureId>
    <featureId>wesb.samples</featureId>
    <common:displayName>
      <messageKey>CMD.FeatureName.wesb.samples</messageKey>
    </common:displayName>
  </featureId>
  <featureId>
    <featureId>soacore.samples</featureId>
    <common:displayName>
      <messageKey>CMD.FeatureName.soacore.samples</messageKey>
    </common:displayName>
  </featureId>
  <featureId>
    <featureId>wbis.brb</featureId>
    <common:displayName>
      <messageKey>CMD.FeatureName.wbis.brb</messageKey>
    </common:displayName>
  </featureId>
  <featureId>
    <featureId>wbis.brb.samples</featureId>
    <common:displayName>
      <messageKey>CMD.FeatureName.wbis.brb.samples</messageKey>
    </common:displayName>
  </featureId>
  <featureId>
    <featureId>wbis.cmm</featureId>
    <common:displayName>
      <messageKey>CMD.FeatureName.wbis.cmm</messageKey>
    </common:displayName>
  </featureId>

```

```

</featureId>
<featureId>
  <featureId>wbis.cmm.samples</featureId>
  <common:displayName>
    <messageKey>CMD.FeatureName.wbis.cmm.samples</messageKey>
  </common:displayName>
</featureId>
<featureId>
  <featureId>wbis.javadocs</featureId>
  <common:displayName>
    <messageKey>CMD.FeatureName.wbis.javadocs</messageKey>
  </common:displayName>
</featureId>
</omittedFeatures>
<slipInstallInfo>
  <supportsSlipInstall>true</supportsSlipInstall>
</slipInstallInfo>
</custinstinfo:customInstallInfo>

```

## カスタマイズ・インストール・パッケージの作成

カスタマイズ・インストール・パッケージ (CIP) の作成は、ビルド定義ウィザードを直接使用するか、またはビルド定義ウィザードでビルド定義ファイルを作成し、コマンド行ツールを使用して CIP をビルドすることによって実行できます。

### このタスクについて

**i5/OS** i5/OS では、Windows、Linux、または UNIX サーバー上で IBM WebSphere Installation Factory コンソールを使用して、カスタマイズ・インストール・パッケージ (CIP) を作成する必要があります。次に、CIP を i5/OS サーバーにエクスポートして CIP を直接インストールするか、Windows サーバー上でインストール GUI を使用して、CIP をリモート i5/OS サーバーにインストールできます。

ビルド定義ウィザードの各パネルでは、CIP に関する情報の入力が必要されます。例えば、保守パッケージ、スクリプト、および組み込み可能なその他のコンポーネントのロケーションの入力が要求されます。CIP を生成するためのロケーションの入力も要求されます。この情報はすべて、新規のビルド定義ファイルに保存されるか、または変更中のビルド定義ファイルに保存されます。

ウィザードの最後のパネルでは、定義したばかりのビルド定義ファイルの内容に基づく CIP を生成するためのオプションが提供されます。または、ビルド定義ファイルの保存のみを行い、後で ifcli コマンドでファイルを使用することもできます。切断モードでは、CIP を作成することはできません。ifcli コマンドは Installation Factory コンソールの外部で CIP を生成します。別のマシンやオペレーティング・システム上でも生成します。

**i5/OS** ビルド定義ウィザードが完了したら、後で i5/OS サーバーにインストールできるように、ビルド定義ファイルを保存し、接続モードで作業している場合は CIP を作成します。

### 手順

1. 「ビルド定義」ウィザードを使用して、新規のビルド定義ファイルを作成するか、または既存のビルド定義ファイルを編集します。

2. CIP の作成を選択するか、または新規または変更されたビルド定義ファイルのみを保存することを選択します。

一般に、CIP を使用できると便利なため、CIP を作成するオプションを選択することを推奨します。デフォルトの「ビルド定義ファイルのみを保管する」ではなく、「ビルド定義ファイルを保管し、カスタマイズ・インストール・パッケージを生成する」を選択してください。

注: 切断モードで作業している場合、CIP を作成することはできません。

**i5/OS** CIP の作成を選択します。

3. CIP の作成を選択しない場合、ビルド定義ファイルをターゲット・サーバーに転送し、ターゲット・サーバー上で `ifcli` コマンドを使用して、ビルド定義ファイルから CIP を作成します。
4. **i5/OS** CIP をターゲット・サーバーに転送し、それを直接インストールします。

## 処理エンジン・マシン上で使用するカスタマイズ・インストール・パッケージの作成

Installation Factory を使用して、ローカル・マシン上または他のサーバーで使用するカスタマイズ・インストール・パッケージを作成することができます。ここでは、ビルド定義ウィザードをホストするマシン上での CIP の作成プロセスについて説明します。

### 始める前に

IBM WebSphere Installation Factory プラグインがインストールされたマシン上で作業している必要があります。

### このタスクについて

以下の手順を使用して、ビルド定義ファイルとカスタマイズ・インストール・パッケージを特定のマシン上に作成します。

#### 手順

1. ご使用のオペレーティング・システム用の製品インストール・イメージをマウントするか、またはそのイメージにアクセスします。 WebSphere Process Server インストール・イメージを持つ製品メディア (DVD、またはダウンロード・イメージ) が作業中のマシンからアクセスできることを確認します。カスタマイズ・インストール・パッケージを作成するには、このインストール・イメージが必要です。
2. 保守パッケージをダウンロードします。 Web サイト「WebSphere Process Server のための推奨される更新 (Recommended updates for WebSphere Process Server)」で WebSphere Process Server 用のダウンロード・パッケージを見つけます。
3. `ifgui` スクリプトを使用して、Installation Factory のコンソールを開始します。
  - **AIX** **HP-UX** **Linux** **Solaris** `IF_root/bin/ifgui.sh` スクリプトを使用します。

- **Windows** `IF_root\bin\ifgui.bat` スクリプトを使用します。

4. 新規のビルド定義を作成するか、または既存のビルド定義を編集します。

オプション	説明
新規ビルド定義ファイルの作成 	新規ビルド定義ファイル用のボタンをクリックします。ここから、Installation Factory によって、2 つのウィザードが順に起動されます。この 2 つのウィザードは、製品の選択ウィザードとビルド定義ウィザードです。
既存のビルド定義ファイルを開く 	ボタンをクリックして、既存のビルド定義ファイルを開きます。既存のビルド定義を開いた場合は、ビルド定義ウィザードのみが開始されます。製品を変更する必要がある場合は、新規ビルド定義を開始します。

5. 「**接続モード**」を選択し、後でビルド定義ファイルの作成だけでなくカスタマイズ・インストール・パッケージの作成も行えるようにします。インストール・イメージのディレクトリーと保守パッケージ・ファイルを参照して選択します。
6. 製品、インストール・イメージ、保守パッケージ、エンタープライズ・アーカイブ・ファイル、その他のファイルとディレクトリー、スクリプト、ビルド定義ファイル用の出力場所、およびカスタマイズ・インストール・パッケージ (CIP) 用の出力場所を特定するために必要なすべてのパラメーターを指定します。
7. 「ビルド定義ファイルを保管し、カスタマイズ・インストール・パッケージを生成する」オプションを選択します。デフォルトの「**ビルド定義ファイルのみを保管する**」ではなく、「**ビルド定義ファイルを保管し、カスタマイズ・インストール・パッケージを生成する**」を選択してください。
8. 「**終了**」をクリックして、CIP を生成します。

CIP の生成に必要な時間は、保守パッケージの数とパッケージに組み込んだフィーチャーの数によって決まります。

処理エンジンの終了時、Installation Factory によって `/logs/log.txt` ファイルに完了メッセージが記録されます。

9. CIP に組み込まれている InstallShield MultiPlatform (ISMP) インストール・ウィザードを使用して、カスタマイズ・インストール・パッケージをインストールすることができます。CIP インストール・ウィザードのパネルは、インストールしている製品に応じて異なります。WebSphere Process Server 用のインストール・ウィザードは、`CIP_directory\WBI` ディレクトリーにある `install` コマンドです。
10. CIP ベースのカスタム・スタンドアロン・サーバー・プロファイルを以下のいずれかの方法で作成します。

オプション	説明
プロファイル管理ツールの使用	<p>CIP のインストール後に、プロファイル管理ツールを実行します。</p> <p><b>注:</b> CIP にプロファイル・カスタマイズが含まれていない場合、または CIP にプロファイル・カスタマイズが含まれているが、それを使用しないように選択している場合、プロファイルの拡張のみを実行できます。</p>
manageprofiles コマンドの使用	<p>CIP のインストール後に、manageprofiles コマンドを実行して、サーバー・プロファイルを作成し、オプションでそれを拡張します。このプロファイルの作成は、コマンドを一度実行する (作成および拡張) か、または二度実行する (作成後に拡張) ことによって行うことができます。</p> <p><b>注:</b> CIP にプロファイル・カスタマイズが含まれていない場合、または CIP にプロファイル・カスタマイズが含まれているが、それを使用しないように選択している場合、プロファイルの拡張のみを実行できます。</p>
CIP インストール・ウィザードの使用	<p>CIP を使用して新規インストール (アップグレードやパッチではない) を作成している場合、以下の処理を行うことによってサーバー・プロファイルを作成できます。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 「フィーチャーの選択」パネルで、「プロファイル・カスタマイズをインストールする (Install profile customizations)」チェック・ボックスを選択します。</li> <li>2. 「環境の選択」パネルで、プロファイル・カスタマイズが定義されているプロファイルを選択します。選択したプロファイルにプロファイル・カスタマイズが定義されている場合は、インストール・ウィザードで、manageprofiles コマンドが効率的に一度実行され、作成および拡張が行われます。プロファイル・カスタマイズが定義されていない場合は、通常のプロファイルを取得します。</li> </ol>

## 次のタスク

場合によっては、ターゲット・オペレーティング・システムのプラットフォーム上で Installation Factory コンソールを使用できないことがあります。例えば、プラットフォームによっては、ifcli コマンドがサポートされますが、ifgui コマンドはサポートされません。その場合には、以下の 2 つのオプションがあります。

- サポートされているマシンで、切断モードでコンソールを使用し、別のマシン上のターゲット・オペレーティング・システム用のビルド定義ファイルを作成します。

ファイルをターゲット・オペレーティング・システムにコピーし、コマンド行インターフェースを使用して処理エンジンを開始し、カスタマイズ・インストール・パッケージを作成します。

この処理の詳細については、関連タスクを参照してください。

- 検証 XML エディターを使用して、ビルド定義の XML 文書を作成します。

*IF\_root/samples/wbi* ディレクトリーから、サンプルのビルド定義文書の 1 つをコピーして開始します。

変更を行ったら、検証 XML パーサーまたは検証 XML エディターを使用して、ビルド定義文書をその XML スキーマ (Commom.xsd、BaseBuildDefinition.xsd、および BuildDefinition.xsd ファイル) で検証します。次に、コマンド行インターフェースを使用して、処理エンジンを開始し、カスタマイズ・インストール・パッケージを作成します。

## リモート・システム上で使用するビルド定義ファイルの作成

場合によっては、あるマシンで、別のマシンで使用するビルド定義ファイルを作成することが必要になったり、便利であったりする場合があります。ビルド定義ファイルは、カスタマイズ・インストール・パッケージ (CIP) の先行版です。CIP を i5/OS サーバーにインストールするには、ビルド定義ファイルおよび CIP を Windows、Linux、または UNIX サーバー上に接続モードで作成します。次に、CIP を i5/OS サーバーまたは Windows サーバーにエクスポートすると、そこから i5/OS サーバー上にインストールできます。

### 始める前に

WebSphere Process Server 用の IBM WebSphere Installation Factory を、カスタマイズ・インストール・パッケージの作成で使用するサーバー・マシンにダウンロードして、解凍しておく必要があります。

### このタスクについて

以下の手順を使用して、ビルド定義ファイルおよび関連する CIP を作成し、別のサーバーへのインストールを実行します。分かりやすくするために、カスタマイズ・インストール・パッケージをインストールするマシンを「ターゲット・システム」と呼び、ビルド定義ファイルを作成するマシンを「処理エンジン」と呼びます。

### 手順

1. ターゲット・システムのオペレーティング・システム用の製品インストール・イメージをマウントするか、そのイメージにアクセスします。

接続モードで作業する場合、WebSphere Process Server インストール・イメージを格納している製品メディア (DVD、またはダウンロード・イメージ) が処理エンジンからアクセスできることを確認します。

このイメージを指すビルド定義ファイルを作成できるように、このイメージの場所を認識しておく必要があります。

マウント・ポイントまたは保管場所を書き留めて、この保管場所を処理エンジン上で実行されているビルド定義ウィザードで指定できるようにします。

- ターゲット・システムのオペレーティング・システム用の保守パッケージを処理エンジンにダウンロードします。

Web サイト「WebSphere Process Server のための推奨される更新 (Recommended updates for WebSphere Process Server)」で WebSphere Process Server 用のダウンロード・パッケージを見つけます。

リフレッシュ・パックとフィックスパックの ZIP ファイルは、Update Installer for WebSphere Software にバンドルされています。ファイルを解凍して、その保守パッケージ (\*.pak) ファイルを updateinstaller/maintenance ディレクトリーに格納します。

ダウンロードした保守パッケージの保管場所を書き留めて、この場所を処理エンジン上で実行されているビルド定義ウィザードで指定できるようにします。

- ifgui スクリプトを使用して、処理エンジンで Installation Factory のコンソールを開始します。

- AIX** **HP-UX** **Linux** **Solaris** `IF_root/bin/ifgui.sh` スクリプトを使用します。

- Windows** `IF_root/bin/ifgui.bat` スクリプトを使用します。

- 新規のビルド定義を作成するか、または既存のビルド定義を編集します。

オプション	説明
新規ビルド定義ファイルの作成 	新規ビルド定義ファイル用のボタンをクリックします。ここから、Installation Factory によって、2 つのウィザードが順に起動されます。この 2 つのウィザードは、製品の選択ウィザードとビルド定義ウィザードです。
既存のビルド定義ファイルを開く 	ボタンをクリックして、既存のビルド定義ファイルを開きます。既存のビルド定義を開いた場合は、ビルド定義ウィザードのみが開始されます。製品を変更する必要がある場合は、新規ビルド定義を開始します。

- 「**接続モード**」を選択し、ターゲット・システムのオペレーティング・システムをリストから選択します。
- 製品、インストール・イメージ、保守パッケージ、エンタープライズ・アーカイブ・ファイル、その他のファイルとディレクトリー、スクリプト、ビルド定義ファイル用の出力場所、およびカスタマイズ・インストール・パッケージ (CIP) 用の出力場所を特定するために必要なすべてのパラメーターを指定します。
- CIP とビルド定義ファイルの両方を作成するオプションを選択します。デフォルトの「**ビルド定義ファイルのみを保管する**」ではなく、「**ビルド定義ファイルを保管し、カスタマイズ・インストール・パッケージを生成する**」を選択してください。
- 「**終了**」をクリックして、処理エンジン上にビルド定義ファイルを保存し、CIP を作成します。

9. CIP をターゲット・システムにコピーします。
10. **i5/OS** Windows サーバーから i5/OS に CIP を直接インストールすることもできます。関連タスク『Windows ワークステーションのグラフィカル・インターフェースによる System i への CIP のインストール』を参照してください。
11. ターゲット・システムで、CIP に組み込まれている InstallShield MultiPlatforms (ISMP) インストール・ウィザードを使用して、カスタマイズ・インストール・パッケージをインストールします。

CIP インストール・ウィザードのパネルは、インストールしている製品に応じて異なります。WebSphere Process Server 用のインストール・ウィザードは、以下の名前で WBI ディレクトリーに保管されています。

- **AIX** **HP-UX** **Linux** **Solaris** install
- **Windows** install.exe

## ifcli コマンド

ifcli コマンド行ツールは、指定されたビルド定義ファイルに対して Installation Factory の処理エンジンを起動します。この処理エンジンは、カスタマイズ・インストール・パッケージ (CIP) を作成します。

### 目的

ifcli コマンド行ツールは、ビルド定義 XML ファイルを入力として受け取り、Installation Factory の処理エンジンを起動します。この処理エンジンは XML ファイルを解釈し、製品のソース・ファイルおよび保守パッケージを見つけ、カスタマイズ・インストール・パッケージ (CIP) を作成します。

### ロケーション

コマンド・ファイルは、Installation Factory を解凍したディレクトリーの /bin ディレクトリーにあります。コマンド・ファイルは、以下の名前のスクリプトです。

**HP-UX** **Linux** **AIX** **Solaris** ifcli.sh

**Windows** ifcli.bat

### ロギング

ifcli コマンドは、カスタマイズされたインストールのイメージが正常に作成されたかどうかを示すビルド・ログ・ファイルを作成します。CIP が正常に作成されていない場合は、トレース・ファイルを調べて問題のある箇所を突き止めてください。

以下のファイルには、CIP 作成データが記録されています。

- trace.xml は、XML 形式の詳細トレース・ログです。
- log.txt はログ・ファイルです。

トレースおよびロギングの出力およびレベルは、**logLevel** および **traceLevel** パラメーターの説明に従って構成することができます。

## ifcli.sh の構文

AIX

HP-UX

Linux

Solaris

ヘルプを表示する:

```
./ifcli.sh -help
```

カスタマイズ・インストール・パッケージを作成する:

```
./ifcli.sh -buildDef build_definition_file  
-silent  
-logLevel log_level  
-logFile log_file_path_name  
-traceLevel trace_level  
-traceFile trace_file_path_name
```

## ifcli.bat の構文

Windows

ヘルプを表示する:

```
./ifcli.bat -help  
./ifcli.bat -?
```

カスタマイズ・インストール・パッケージを作成する:

```
./ifcli.bat -buildDef build_definition_file  
-silent  
-logLevel log_level  
-logFile log_file_path_name  
-traceLevel trace_level  
-traceFile trace_file_path_name
```

## パラメーター

以下の引数がサポートされています。

Windows **-.?**

使用法の情報を表示します。

### **-help**

使用法の情報を表示します。

### **-buildDef** *build\_definition\_file*

ビルド定義ウィザードによって作成されたビルド定義ファイルを識別します。

### **-logFile** *log\_file\_path\_name*

ログ・ファイルを識別します。デフォルト値は *current\_working\_directory/logs/log.txt* です。

### **-logLevel** *log\_level*

メッセージのロギングのレベルを設定します。*log\_level* の有効な値は以下のとおりです。

- ALL
- CONFIG
- INFO

- WARNING
- SEVERE
- OFF (ロギングをオフにします)

デフォルト値は INFO です。

**-silent**

処理エンジンをサイレント・モードで、すなわち結果をコンソールに表示しないで実行することを指定します。

**-traceFile *trace\_file***

トレース・ファイルを識別します。デフォルト値は *current\_working\_directory/logs/trace.xml* です。

**-traceLevel *trace\_level***

トレースのレベルを設定します。*trace\_level* の有効な値は以下のとおりです。

- ALL
- FINE
- FINER
- FINEST
- OFF (トレースをオフにします)

デフォルト値は OFF です。

**使用法**

ifcli コマンドを使用して、ビルド定義ファイルから WebSphere Process Server 製品用のカスタマイズ・インストール・パッケージを作成します。

**基礎となる WebSphere Application Server インストールの検証**

WebSphere Process Server CIP は、WebSphere Application Server Network Deployment カスタマイズ・インストール・パッケージ (CIP) が WebSphere Process Server CIP と同じディレクトリー・レベルにないと、システムにインストールすることはできません。また、WebSphere Application Server CIP は正しいフィックスパック・レベルである必要があります。

WebSphere Process Server CIP は、WebSphere Application Server Network Deployment CIP を必要とします。これは、WebSphere Process Server CIP のインストール時に、基礎となる WebSphere Application Server Base または WebSphere Application Server Network Deployment を包括的インストール (つまりスリップ・インストール) するために必要です。

WebSphere Application Server Network Deployment インストール・イメージは WebSphere Process Server 製品の一部として組み込まれており、これを使用して CIP を製品メディアから直接構築することができます。

Installation Factory ツールを使用して、WebSphere Process Server CIP をインストールするために必要な WebSphere Application Server Network Deployment CIP を作成することができます。WebSphere Application Server Network Deployment CIP の作成およびインストールの詳細については、WebSphere Application Server の資料を参照してください。

WebSphere Application Server Network Deployment CIP は、正しいフィックスパック・レベルである必要があります。必要なフィックスパック・レベルは、2つのインスタンスのうち1つ、または両方において、メッセージ・ダイアログで報告されます。

- 「保守パッケージ」パネルで「次へ」をクリックする。
- Installation Factory GUI の最後のパネルで、保存を選択し、CIP をビルドする。

メッセージ・ダイアログに以下の情報が表示されます。

- WebSphere Application Server Network Deployment CIP の必要なバージョン。バージョン要件は、WebSphere Process Server の要件に加え、フィックスパック、暫定修正から設定されます。
- サンプル・フィーチャーが WebSphere Application Server Network Deployment CIP 内に含まれている必要があるということ。

## カスタマイズ・インストール・パッケージのインストール: タスクのロードマップ

カスタマイズ・インストール・パッケージは、いくつかの方法でインストールできます。

カスタマイズ・インストール・パッケージ (CIP) の取り扱い方法はインストール・イメージの場合とほぼ同じです。つまり、CIP をインストールする場合は、標準インストールのインストール・ルートをたどっていきます。

CIP は、以下に示したさまざまな方法でインストールできます。

- WebSphere Process Server インストーラーを対話的に使用して、新規のインストールを作成する。
- 応答ファイルを使用してサイレント・インストールする。
- WebSphere Process Server インストーラーを対話的に使用して、既存のインストールに保守を追加する。
- 下位レベルの製品からより上位レベルの製品にトレードアップする。

### カスタマイズ・インストール・パッケージの対話式でのインストール

インストール・ウィザードを使用して、カスタマイズ・インストール・パッケージ (CIP) を分散オペレーティング・システム・プラットフォームにインストールします。このインストールは、IBM WebSphere Installation Factory で作成された CIP イメージから行います。

### 始める前に

WebSphere Process Server 製品および1つ以上の保守パッケージと他のカスタマイズが組み込まれているカスタマイズ・インストール・パッケージ (CIP) をインストールすることができます。CIP をインストールするには、その前に IBM Installation Factory で CIP を作成する必要があります。カスタマイズ・インストール・パッケージ (CIP) の生成について詳しくは、『**カスタマイズ・インストール・パッケージの作成**』を参照してください。

- CIP の対話式インストールに必要なステップは、標準的なインストールの場合と同じです。必要なステップについては、96 ページの『WebSphere Process Server の対話式インストール』を参照してください。
- CIP をインストールしているときに、「ようこそ」パネルに、追加の「このカスタム・インストール・パッケージについて」ボタンが表示されます。このボタンをクリックして、以下のような CIP についての詳細情報を表示します。
  - CIP の作成に使用される Installation Factory のバージョン
  - CIP がインストールする製品のパッケージおよびバージョン
  - CIP のビルド日時
  - 機能および暫定修正のリスト
  - CIP をインストールできるオペレーティング・システム
  - スリッパ・インストールがサポートされるかどうか
  - 作成者が「作成情報」パネルで追加した組織または説明

## タスクの結果

これで、インストール・ウィザードの開始、使用条件への同意、前提条件の確認、インストールに影響を与える可能性のある WebSphere 製品の既存のインストールの識別が終わりました。インストール済みの WebSphere 製品が今回のインストールに影響しない場合は、実行するインストールのタイプ (標準的、デプロイメント環境、またはクライアント) も選択しました。

## 次のタスク

行った選択に応じて該当するリンクの説明に従い、インストールを続行します。

## Windows ワークステーションのグラフィカル・インターフェースによる System i へのカスタマイズ・インストール・パッケージのインストール

i5/OS

System i では、Windows ワークステーションのグラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) から WebSphere Process Server CIP をインストールできます。

### 始める前に

このトピックは、Installation Factory を使用して CIP イメージを作成済みであること、CIP のインストール先オペレーティング・システムが i5/OS であること、および製品のインストールを CIP から行う必要があることを前提としています。CIP の作成について詳しくは、684 ページの『カスタマイズ・インストール・パッケージの作成』を参照してください。

Windows ワークステーションから i5/OS システムにインストールされた WebSphere Process Server CIP は、既存の WebSphere Process Server インストール環境に対してアップグレードを実行、機能を追加、または保守を適用する目的では使用できません。それらの作業を行う場合は、i5/OS システムからのローカルなサイレント・インストールによって WebSphere Process Server CIP を実行する必要があります。

## このタスクについて

GUI インストール・ツールを実行する場合は、インストール・プロセスでいくつかのインストール・オプションを対話式に指定します。

GUI インストール・プログラムを使用して CIP から i5/OS に WebSphere Process Server をインストールするには、以下の手順に従ってください。

### 手順

1. TCP/IP が開始されていない場合、または TCP/IP が開始されているかどうか不明な場合は、制御言語 (CL) コマンド行に TCP/IP の開始 (STRTCP) コマンドを入力します。
2. ホスト・サーバーのジョブが、使用する System i サーバー上で開始されていることを確認します。ホスト・サーバーのジョブにより、インストール・コードが System i 上で実行可能になります。

CL コマンド行でこのコマンドを入力します。

```
STRHOSTSVR SERVER(*ALL)
```

3. ユーザー・プロファイルに \*ALLOBJ と \*SECADM の特殊権限が指定されていることを確認してください。
4. CIP for i5/OS のディスクを、Windows ワークステーションのディスク・ドライブにセットします。自動実行機能によりランチパッドが起動されます。

製品パッケージ内の IBM WebSphere Process Server Windows のディスク、またはその他のオペレーティング・システム・プラットフォーム用のディスクは使用しないでください。

5. WebSphere Process Server をインストールする i5/OS サーバーの名前、およびそのサーバーに対応する i5/OS ログイン情報を入力して、「OK」をクリックします。

さらに、そのサーバーに対して有効なユーザー ID とパスワードを入力する必要があります。このステップでは、プロファイルに \*ALLOBJ と \*SECADM の特殊権限が必要です。

6. 「ようこそ」パネルで「次へ」をクリックします。
7. 「ご使用条件」パネルで、IBM および IBM 以外のライセンス条項を確認し、同意する場合は「IBM および IBM 以外の両方の条件を受諾します」を選択して、「次へ」をクリックします。使用許諾条件の条項に同意しない場合、インストールに進むことはできません。
8. システムの前提条件のチェックが行われ、サーバーが製品をインストールするための最低限の要件を満たしているかどうかチェックされます。前提条件が満たされている場合は「次へ」をクリックします。前提条件が満たされていない場合でもインストールを続行することは可能です。しかし、ここでインストール・ウィザードを終了して必要な変更を加えることをお勧めします。
9. 「インストール・タイプ」パネルで、実行するインストールのタイプを選択して、「次へ」をクリックします。

インストール・ウィザードでは、インストール・パスを選択することができます (前のパネルの選択内容によっては、すべてが表示されるとは限りません)。次の

ステップは、実行するインストールのタイプおよび (WebSphere Process Server クライアントの場合は) インストールを実行する既存環境に WebSphere Application Server および WebSphere Application Server Network Deployment のどちらがインストールされているかによって異なります。

インストール・タイプ	次のステップ
<p><b>標準的インストール (デフォルト):</b>  WebSphere Process Server および WebSphere Application Server Network Deployment のインストールは、デフォルトのインストール・オプションと構成によって実行されます。また、スタンドアロン・サーバー・プロファイル、デプロイメント・マネージャー・プロファイル、またはカスタム・プロファイルを作成することもできます。</p> <p><b>重要:</b> 標準的インストールを選択してスタンドアロン・サーバー・プロファイルを作成し、セキュリティーを有効にした場合は、Business Process Choreographer のサンプル構成が作成されます。セキュリティーを有効に設定しない場合、Business Process Choreographer のサンプル構成は作成されません。後日、このサーバーを統合する場合は、ここで作成された Business Process Choreographer のサンプル構成があれば削除する必要があります。</p>	<p>「フィーチャーの選択」パネルが表示されます。112 ページの『WebSphere Process Server のインストールおよびプロファイルの作成の対話式実行』のトピックに進んでください。</p>
<p><b>デプロイメント環境インストール:</b>  WebSphere Process Server および WebSphere Application Server Network Deployment のインストールからデプロイメント環境のセットアップまでを、ウィザードのガイドに従って行います。デプロイメント環境パターンに基づいてデプロイメント・マネージャーを作成するか、すでに作成されているデプロイメント環境の定義ステップに進むかを選択できます。</p>	<p>「フィーチャーの選択」パネルが表示されます。121 ページの『デプロイメント環境による WebSphere Process Server の対話式インストール』のトピックに進んでください。</p>

インストール・タイプ	次のステップ
<p>クライアント・インストール: WebSphere Process Server Client がインストールされ、WebSphere Application Server Network Deployment をインストールできます。これにより、同一セル内で WebSphere Process Server と対話するクライアント・アプリケーションの実行が可能になります。</p>	<p>表示されるパネルは、(基本または Network Deployment の) WebSphere Application Server のインストール済み環境にインストールを実行するかどうかによって異なります。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment がインストール済みではない環境にインストールする場合は、「インストール・ロケーション」パネルが表示されます。136 ページの『WebSphere Process Server Client の対話式インストール』のトピックに進んでください。</li> <li>• WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment のインストール済み環境にインストール場合は、「インストールの要約」パネルが表示されます。136 ページの『WebSphere Process Server Client の対話式インストール』のトピックに進んでください。</li> </ul>

## タスクの結果

この手順によって、Windows ワークステーション GUI からこの製品がインストールされます。

## 次のタスク

このインストールに進むには、693 ページの『カスタマイズ・インストール・パッケージのインストール: タスクのロードマップ』を参照してください。

## カスタマイズ・インストール・パッケージのサイレント・インストール

サイレント・インストールを使用したカスタマイズ・インストール・パッケージ (CIP) のインストールとは、応答ファイルを使用して、ユーザーとの対話なしでインストール・オプションを指定することを指します。インストールを構成するには、インストールのコマンドを発行する前に、応答ファイル内のオプションを変更します。サイレント・インストール・モードでは、対話式インストール・オプションを受け付けません。サイレント・インストール中にデフォルト以外のオプションを指定するには、応答ファイルを事前に編集しておく必要があります。サイレント・インストールを実行するには、使用許諾契約オプションでご使用条件を受け入れる必要があります。

## 始める前に

- 38 ページの『WebSphere Process Server のインストールに関する前提条件』で、製品をインストールするための前提条件のリストを確認してください。
- セキュリティおよびロール・ベースの許可を有効にする場合は、必ず管理者としてログインしてください。サイレント・インストール中には、デフォルトでセ

セキュリティーが有効になります。セキュリティーを無効にするには、応答ファイルの **PROF\_enableAdminSecurity** 値を "false" に変更します。

**重要:** インストール・パスに括弧を使用することはできません。インストール・パスに括弧が含まれている既存の WebSphere Application Server インストール済み環境上にインストールすることはできません。

**注:** 標準的インストール中にスタンドアロン・サーバー・プロファイルの作成を選択し、セキュリティーを有効にした場合、インストーラーによりそのプロファイルにサンプルの Business Process Choreographer 構成が作成されます。セキュリティーを有効にしない場合は、このサンプルの構成は作成されません。スタンドアロン・サーバーをデプロイメント・マネージャーに統合する場合は、事前にこのサンプル構成の削除が必要となります。

## このタスクについて

WebSphere Process Server および 1 つ以上の保守パッケージとその他のカスタマイズを含むカスタマイズ・インストール・パッケージ (CIP) をインストールすることができます。CIP をインストールするには、その前に Installation Factory で CIP を作成する必要があります。カスタマイズ・インストール・パッケージ (CIP) の作成について詳しくは、684 ページの『カスタマイズ・インストール・パッケージの作成』を参照してください。

サイレント・インストールでは、インストール・ウィザードを使用して、グラフィカル・ユーザー・インターフェースを使用せずに製品をサイレント・モードでインストールします。サイレント・インストールでは、ウィザードのインターフェースを表示する代わりに、インストール・プログラムが指定されたファイルからすべての応答を読み取ります。

この手順を使用して、製品のサイレント・インストールを実行します。

### 手順

1. オペレーティング・システムにログオンします。

**i5/OS** **i5/OS プラットフォームの場合:** ユーザー・プロファイルには、必ず \*ALLOBJ および \*SECADM の特殊権限が与えられるようにしてください。

2. **Linux** **UNIX** **Linux および UNIX プラットフォームの場合:** ドライブに製品メディアを挿入後、一部の Linux および UNIX オペレーティング・システムではドライブをマウントする必要があります。
3. サンプル応答ファイル responsefile.wbis.txt を、CIP の WBI ディレクトリーからシステム上の識別が容易な場所にコピーし、新しい名前 (myoptionsfile.txt など) で保存します。
4. ターゲット・オペレーティング・システム上で、選択したフラット・ファイル・エディターを使用してファイルを編集し、ご使用のシステム用のパラメーターを使用してカスタマイズします。応答ファイル内の指示を読み、今回のサイレント・インストールのために設定するすべてのオプションに適切な値を選択します。

応答ファイル内のパラメーターはすべて変更できますが、以下のパラメーターには注意してください。

- 必ず **-OPT silentInstallLicenseAcceptance** パラメーターの値を "true" に変更してください (-OPT silentInstallLicenseAcceptance="true")。値を "false" のままにすると、インストールが失敗します。
- **-OPT wpsInstallType** パラメーターの値を変更して、以下のいずれかのインストール・タイプを指定します。

- "typical": WebSphere Process Server をフルインストールします。このインストールでは、インストール中にスタンドアロン・サーバー、デプロイメント・マネージャー、またはカスタム・プロファイルをオプションで作成できます。これはデフォルトです。
- "client": WebSphere Process Server の部分インストールです。このインストールでは、同一セル内でプロセス・サーバーと対話するクライアント・アプリケーションを実行できます。

WebSphere Process Server クライアントの動作環境を作成するために、オプション機能を選択したり、インストールの一部としてプロファイルを作成したりしないでください。これを行うと、インストールが失敗する可能性があります。クライアント・インストールを作成する方法の例については、応答ファイル例を参照してください。

- "ndGuided": WebSphere Process Server をフルインストールします。このインストールでは、デプロイメント環境のセットアップ、デプロイメント環境のパターンに基づくデプロイメント・マネージャーの作成、または以前に作成したデプロイメント環境の定義について、操作手順が指示されます。
- "typical" インストールを実行する場合は、WebSphere Process Server の動作環境を用意するプロファイルを作成する必要があります。インストール処理中にプロファイルを作成するように応答ファイルで値を指定することにより、プロファイルをサイレントに作成できます。パラメーター **-OPT profileType** の値を以下のいずれかの値に変更します。
  - "deploymentManager": デプロイメント・マネージャーでプロファイルを作成します。以下に例を示します。  
-OPT profileType="deploymentManager"
  - "standAlone": スタンドアロン・サーバーでプロファイルを作成します。以下に例を示します。  
-OPT profileType="standAlone"
  - "custom": 空のノードでプロファイルを作成します。この空のノードは、インストール後に構成できます。  
-OPT profileType="custom"
  - "none": インストール中にプロファイルを作成しません。この値は、サイレント・インストール・プロセス中にプロファイルを作成しない場合に使用します。インストール後にプロファイル管理ツールを実行してプロファイルを作成する必要があります。  
-OPT profileType="none"

- 既存のインストール済み環境のプロファイルを作成する場合は、応答ファイルの `-OPT installType="installNew"` セクションをコメント化し、応答ファイルの `-OPT createProfile` セクションからコメントを外し、パラメーター **-OPT createProfile** の値を "true" に変更します。以下に例を示します。

```
#-OPT installType="installNew"
-OPT createProfile="true"
```

プロファイルのサイレント作成については、246 ページの『manageprofiles コマンドを使用したプロファイルの作成』を参照してください。

- デプロイメント環境のインストール (`-OPT wpsInstallType="ndGuided"`) を指定した場合は、追加のパラメーターも指定して、インストールを定義する必要があります。 **-OPT ndGuidedInstallType** パラメーターの値を以下のいずれかの値に変更します。

- "deploymentManager": デプロイメント・マネージャーを作成するためのガイドを表示します。このガイドでは、選択したパターンに基づく新しいデプロイメント環境を作成します。以下に例を示します。

```
-OPT ndGuidedInstallType="deploymentManager"
```

"deploymentManager" の値を使用する場合は、応答ファイルの他の値も変更して、サイレント・インストール中のデプロイメント・マネージャー・サーバーの作成を詳細に定義する必要があります。

- "additionalRoles": 定義済みのデプロイメント環境でカスタム・プロファイルを作成するためのガイドを表示します。そのデプロイメント環境で稼働しているデプロイメント・マネージャーに接続できる必要があります。以下に例を示します。

```
-OPT ndGuidedInstallType="additionalRoles"
```

また、パラメーター **-OPT profileType** の値も "none" に変更します。

デプロイメント環境については、概要: WebSphere Process Server の計画および デプロイメント環境の実装を参照してください。

- (新規インストールを作成するのではなく)、既存のインストール済み環境に CIP をサイレントにインストールするには、 **-OPT installType** パラメーターを "installAndPatch" または "addFeature" に設定し、 **-OPT if\_cip\_modifyexistinginstall** パラメーターを "maintenanceOnly" (製品バイナリーのみをインストールし、プロファイルのカスタマイズは実行しない) または "customizationAndMaintenance" (製品バイナリーのインストールに加えて、プロファイルのカスタマイズを実行する) に設定します。プロファイル・カスタマイズについては、674 ページの『ビルド定義ウィザード: 「プロファイルのカスタマイズ」パネル』を参照してください。

**注:** デフォルトのパラメーターおよび値は、 WebSphere Process Server メディアの WBI ディレクトリーにあるサンプルの応答ファイル responsefile.wbis.txt で常に確認できます。

5. コピーした応答ファイルに変更内容を保存します。
6. install コマンドを WebSphere Process Server 製品メディア、あるいはパスポート・アドバンテージでダウンロードした電子イメージのコンテンツを保存した一

時的な場所のいずれかから実行して、カスタム応答ファイルを使用して WebSphere Process Server をインストールします。 コマンド例では、ファイルをカスタマイズする前に、応答ファイルが一時ディレクトリーにコピーされていること、および名前が myoptions.txt に変更されているものと想定しています。

- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合: `install -options /tmp/WBI/myoptions.txt -silent`
- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: `install.exe -options "C:¥temp¥WBI¥myoptions.txt" -silent`
- **i5/OS** **System i** サーバー (**Qshell** から) の場合: `INSTALL -options /tmp/WBI/myoptions.txt -silent`

## タスクの結果

インストール・ウィザードおよびプロファイル管理ツール (インストール中にプロファイルを作成する場合) は、インストール・イベントをさまざまなログ・ファイルに記録します。これらのログ・ファイルの説明については、773 ページの『インストールとプロファイル作成のログ・ファイル』を参照してください。

## カスタマイズ・インストール・パッケージの対話式的実行による、既存の WebSphere Process Server のインストール済み環境への保守の追加: 基本ステップ

WebSphere Process Server および 1 つ以上の保守パッケージが組み込まれたカスタマイズ・インストール・パッケージ (CIP) のインストールのためのオプションはいくつかあります。CIP インストール・ウィザードを使用して、CIP 内に組み込まれたフィーチャーをインストールすることができます。CIP インストール・ウィザードは、CIP 内に組み込まれた保守パッケージもインストールします。考えられるユース・ケース・シナリオに共通の手順が提供されます。

## 始める前に

カスタム・インストール・パッケージをインストールするためには、適切な権限でシステムにログオンする必要があります。ターゲット・システム上に、少なくとも 1 つの WebSphere Process Server のインストール済み環境が存在している必要があります。

## このタスクについて

CIP が作成されると、ビルド定義ウィザードの「ビルド情報」パネルで指示したディレクトリー (*CIP\_directory*) に圧縮ファイルとして保管されます。*CIP\_directory* には、WBI および *custom.wbi* という 2 つのサブディレクトリーがあります。

WebSphere Process Server の CIP をインストールするには、その前に WebSphere Application Server Network Deployment CIP を作成する必要があります。*WAS\_ND\_CIP\_directory* には次のディレクトリーが含まれています。

- WAS
- custom
- JDK

以下のステップは後続の各タスクに共通で、想定している特定のインストール・シナリオに進む前に実行する必要があります。

## 手順

1. WBI および custom.wbi を WebSphere Application Server Network Deployment CIP ディレクトリー `WAS_ND_CIP_directory` にコピーします。このステップを実行すると、`WAS_ND_CIP_directory` に以下のサブディレクトリーが含まれるようになります。

- custom.wbi
- WBI
- WAS
- custom
- JDK

WebSphere Process Server 製品メディアが手元にあり、必要な保守レベルについてメッセージで報告された WebSphere Application Server Network Deployment CIP のバージョンが、その製品メディア上のバージョンより低い場合、WBI ディレクトリーおよび custom.wbi ディレクトリーをインストール・イメージの WebSphere Application Server Network Deployment CIP ディレクトリーに単にコピーします。これは既存の WBI ディレクトリーを上書きします。

2. WebSphere Process Server のカスタム・インストール・パッケージのインストールを開始します。

install コマンドでインストールを直接開始します。

- a. `WAS_ND_CIP_directory/WBI` ディレクトリーに変更します。
- b. 以下のコマンドを発行します。

- `AIX` `HP-UX` `Linux` `Solaris` `./install`
- `Windows` `install.exe`

コマンド行から CIP インストール・ウィザードを起動すると、ウィザードにより、「ようこそ」パネルが初期化され表示されます。「このカスタム・インストール・パッケージについて」をクリックして、エディションやバージョンなどの現在のカスタマイズ・インストール・パッケージに関する詳細情報を表示します。

「次へ」をクリックして、「ご使用条件」パネルに移動します。

3. 「ご使用条件」パネルで、ご使用条件をお読みにになり、この条件を受け入れます。

「IBM および IBM 以外の両方の条件を受諾します (I accept both the IBM and the non-IBM terms)」をクリックしてご使用条件に同意し、「次へ」をクリックして先に進みます。

ライセンス条項に同意すると、インストール・ウィザードにより、サポートされるオペレーティング・システムと前提条件のパッチが検査されます。システムに適切な前提条件の更新が存在しないなどの問題が発生した場合は、インストールをキャンセルして必要な変更を行ってから、インストールを再開始します。

インストール・ウィザードでは、prereqChecker アプリケーションで前提条件のオペレーティング・システムのパッチがチェックされますが、前提条件をまだ確認していない場合は、サポートされるハードウェアとソフトウェアの Web サイトで前提条件を確認してください。

この Web サイトには、サポートされているオペレーティング・システム、およびオペレーティング・システムを準拠させるためにインストールする必要があるオペレーティング・システムのフィックスおよびパッチがすべて記載されています。

サポートされているバージョンへのマイグレーションについては、IBM 以外の前提条件および相互に必要な製品の資料を参照してください。

4. 前提条件の確認を完了し、「既存のコピーの検出 (Detect existing copy)」パネルに移動します。システムの前提条件の確認が完了したら、「次へ」をクリックします。
5. 製品の前のバージョンを確認します。

インストール・ウィザードでは、同じメジャー製品レベルの前のインストールかどうかを検査します。

ウィザードで前のインストールが検出されると、「既存のインストール (Existing installation)」パネルが表示されます。このタスクでは、前のインストールが存在していて、フィーチャーを増分インストールで追加していることが前提となります。

CIP ウィザードでは、すべての WebSphere Process Server のインストールが検出されます。CIP を使用して製品間インストールを実行することができます。ただし、CIP を使用して異なる製品インストールにフィーチャーを追加することはできません。例えば、WebSphere Process Server CIP を使用して、WebSphere Enterprise Service Bus のインストール済み環境にフィーチャーを追加することはできません。

6. 既存の WebSphere Process Server のコピーに保守を適用して、フィーチャーを追加することを選択します。

「既存の WebSphere Process Server のコピーに保守を適用してフィーチャーを追加する (Apply maintenance and add features to an existing copy of WebSphere Process Server)」をクリックして、リストから既存のインストールを選択します。選択したインストールに対してシステム前提条件の検査が実行されます。

## 次のタスク

CIP をインストールする場合、このタスクで説明した手順の実行では不十分で、インストールを実行するにはサブトピックで説明する手順に従う必要があります。インストール計画に適合したサブトピックを選択し、そこで説明されている手順に従います。

### スリップ・インストール:

スリップ・インストールとは、機能の追加の有無に関わらず、既存の WebSphere Process Server インストールを高い保守レベルの WebSphere Process Server に移すことを意味します。

ある保守レベルの既存の WebSphere Process Server インストールがある場合、それより高い保守レベルの WebSphere Process Server インストールを含むカスタマイズ・インストール・パッケージ (CIP) を使用して、ご使用のインストールをこの高い保守レベルに移すことができます。このようなインストールを、スリップ・インストールといいます。

スリップ・インストールには、オプションでフィックスパックや追加の機能を組み込むことができます。

**i5/OS** スリップ・インストールは、リモートの i5/OS システムではサポートされません。この場合は、ローカルのサイレント・インストールを実行する必要があります。

### **CIP のインストールを完了して、既存の WebSphere Process Server インストール済み環境を拡張する:**

既存のインストール済み環境を拡張するためのコア・ステップを完了したら、このタスクを実行して拡張のプロセスを完了します。

#### **始める前に**

このタスクは、『既存の WebSphere Process Server インストール済み環境の拡張のための対話式での CIP の実行 (Running a CIP interactively to augment an existing WebSphere Process Server installation)』というトピックで提供されている情報の続きです。前提条件タスクが完了するまで、このタスクを開始しないでください。

#### **このタスクについて**

『既存の WebSphere Process Server インストール済み環境の拡張のための対話式での CIP の実行 (Running a CIP interactively to augment an existing WebSphere Process Server installation)』のタスクを完了した後すぐに以下のステップを実行してください。CIP インストール・ウィザードの「フィーチャー (Features)」パネルが表示されます。

#### **手順**

1. 「フィーチャー (Features)」パネルで追加フィーチャーを選択しないでください。追加フィーチャーを含むインストール方法については、別の箇所で説明されています。「次へ」をクリックするだけです。
2. 「インストール・プレビューの要約 (Installation preview summary)」パネルでインストール情報を確認します。要約情報がユーザーの要件に合わない場合は、インストール・プロセスを停止して、再度開始します。
3. インストールを開始します。「インストール・プレビューの要約 (Installation preview summary)」パネルの情報が正しい場合、「次へ」をクリックしてインストールを開始します。
4. 進行状況表示でインストールの進行を追跡します。

5. インストールが完了すると、「インストールが完了しました」パネルが表示されます。パネルを調べて、インストールが正常に完了したことを確認します。

### タスクの結果

CIP のバックアップが `install_root/properties/versions/nif/backup` ディレクトリーに作成されます。システムをそのスリップ・インストールの前の状態に復元する場合 (例えば、WebSphere Process Server の前のバージョンに復元するなど)、Update Installer を使用して CIP をスリップ・アンインストールすることができます。

### WebSphere Process Server のスリップ・インストール - 追加フィーチャーなし:

既存のインストール済み環境を拡張するためのコア・ステップを完了したら、このタスクを実行して拡張のプロセスを完了します。

### 始める前に

このタスクは、『既存の WebSphere Process Server インストール済み環境の拡張のための対話式での CIP の実行 (Running a CIP interactively to augment an existing WebSphere Process Server installation)』というトピックで提供されている情報の続きです。前提条件タスクが完了するまで、このタスクを開始しないでください。

### このタスクについて

『既存の WebSphere Process Server インストール済み環境の拡張のための対話式での CIP の実行 (Running a CIP interactively to augment an existing WebSphere Process Server installation)』のタスクを完了した後すぐに以下のステップを実行してください。既存のインストール済み環境に含まれるフィーチャーに対する追加フィーチャーが CIP に含まれていない場合、使用可能なすべてのフィーチャーが選択され使用不可にされた状態で、CIP インストール・ウィザードの「フィーチャー (Features)」パネルが表示されます。「このインストールに含まれる保守更新のインストール」が選択され、使用不可にされています。

### 手順

1. 「フィーチャー (Features)」パネルの「次へ」をクリックします。
2. 「インストール・プレビューの要約 (Installation preview summary)」パネルでインストール情報を確認します。要約情報がユーザーの要件に合わない場合は、インストール・プロセスを停止して、再度開始します。
3. インストールを開始します。「インストール・プレビューの要約 (Installation preview summary)」パネルの情報が正しい場合、「次へ」をクリックしてインストールを開始します。
4. 進行状況表示でインストールの進行を追跡します。
5. インストールが完了すると、「インストールが完了しました」パネルが表示されます。パネルを調べて、インストールが正常に完了したことを確認します。

### タスクの結果

CIP のバックアップが `install_root/properties/version/nif/backup` ディレクトリーに作成されます。システムをそのスリップ・インストールの前の状態に復元する場合 (例えば、WebSphere Process Server の前のバージョンに復元するなど)、Update

Installer を使用して CIP をスリップ・アンインストールすることができます。

### **WebSphere Process Server のスリップ・インストール - 1 つ以上の追加フィーチャーあり:**

既存のインストール済み環境を拡張するためのコア・ステップを完了したら、このタスクを実行して拡張のプロセスを完了します。

#### **始める前に**

このタスクは、『既存の WebSphere Process Server インストール済み環境の拡張のための対話式での CIP の実行 (Running a CIP interactively to augment an existing WebSphere Process Server installation)』というトピックで提供されている情報の続きです。前提条件タスクが完了するまで、このタスクを開始しないでください。

#### **このタスクについて**

『既存の WebSphere Process Server インストール済み環境の拡張のための対話式での CIP の実行 (Running a CIP interactively to augment an existing WebSphere Process Server installation)』のタスクを完了した後すぐに以下のステップを実行してください。CIP インストール・ウィザードの「フィーチャー (Features)」パネルが表示されます。

#### **手順**

1. 「フィーチャー (Features)」パネルでインストールする追加フィーチャーを選択します。インストールの一部としてインストールする追加フィーチャーを選択して、「次へ」をクリックします。
2. 「インストール・プレビューの要約 (Installation preview summary)」パネルでインストール情報を確認します。要約のフィーチャー・セクションに、インストールされる追加フィーチャーおよび暫定修正がリストされます。既にインストールされているフィーチャーはリストされません。要約情報がユーザーの要件に合わない場合は、インストール・プロセスを停止して、再度開始します。
3. インストールを開始します。「インストール・プレビューの要約 (Installation preview summary)」パネルの情報が正しい場合、「次へ」をクリックしてインストールを開始します。
4. 進行状況表示でインストールのプロセスを追跡します。
5. インストールが完了すると、「インストールが完了しました」パネルが表示されます。パネルを調べて、インストールが正常に完了したことを確認します。

#### **タスクの結果**

CIP のバックアップが `installation_root/properties/version/nif/backup` ディレクトリーに作成されます。システムをそのスリップ・インストールの前の状態に復元する場合 (例えば、WebSphere Process Server の前のバージョンに復元するなど)、Update Installer を使用して CIP をスリップ・アンインストールすることができます。

### **WebSphere Process Server のスリップ・インストール - 既存のインストール環境に暫定修正あり:**

既存のインストール済み環境を拡張するためのコア・ステップを完了したら、このタスクを実行して拡張のプロセスを完了します。

### 始める前に

このタスクは、『既存の WebSphere Process Server インストール済み環境の拡張のための対話式での CIP の実行 (Running a CIP interactively to augment an existing WebSphere Process Server installation)』というトピックで提供されている情報の続きです。前提条件タスクが完了するまで、このタスクを開始しないでください。

### このタスクについて

『既存の WebSphere Process Server インストール済み環境の拡張のための対話式での CIP の実行 (Running a CIP interactively to augment an existing WebSphere Process Server installation)』のタスクを完了した後すぐに以下のステップを実行してください。追加フィーチャーが CIP に含まれていない場合、CIP インストール・ウィザードの「フィーチャー (Features)」パネルはスキップされます。「インストール・プレビューの要約 (Installation preview summary)」パネルが表示されます。

### 手順

1. 「インストール・プレビューの要約 (Installation preview summary)」パネルでインストール情報を確認します。パネルの上部にメッセージが表示され、(リストされている) 暫定修正が CIP のインストール時にアンインストールされることが警告されます。これらの暫定修正のうち CIP に含まれていないものがある場合は、CIP のインストールの完了後に別個に再インストールする必要があります。
2. インストールを開始します。「インストール・プレビューの要約 (Installation preview summary)」パネルの情報が正しい場合、「次へ」をクリックしてインストールを開始します。
3. 進行状況表示でインストールのプロセスを追跡します。進行状況表示には暫定修正のアンインストールも含まれています。
4. インストールが完了すると、「インストールが完了しました」パネルが表示されます。パネルを調べて、インストールが正常に完了したことを確認します。

### タスクの結果

CIP のバックアップが `installation_root/properties/version/nif/update/` ディレクトリに作成されます。システムをそのスリップ・インストールの前の状態に復元する場合 (例えば、WebSphere Process Server の前のバージョンに復元するなど)、Update Installer を使用して CIP をスリップ・アンインストールすることができます。

**WebSphere Process Server のスリップ・インストール - CIP で一部のフィーチャーが欠落しており、更新できない:**

既存のインストール済み環境を拡張するためのコア・ステップを完了したら、このタスクを実行して拡張のプロセスを完了します。

### 始める前に

このタスクは、『既存の WebSphere Process Server インストール済み環境の拡張のための対話式での CIP の実行 (Running a CIP interactively to augment an existing

WebSphere Process Server installation)』というトピックで提供されている情報の続きです。前提条件タスクが完了するまで、このタスクを開始しないでください。

### このタスクについて

『既存の WebSphere Process Server インストール済み環境の拡張のための対話式での CIP の実行 (Running a CIP interactively to augment an existing WebSphere Process Server installation)』のタスクを完了した後すぐに以下のステップを実行してください。CIP に追加フィーチャーが含まれている場合、CIP インストール・ウィザードの「フィーチャー (Features)」パネルが表示されます。追加フィーチャーがない場合、最初のステップが省略されます。

### 手順

1. インストールする追加フィーチャーがある場合、それらのフィーチャーが「フィーチャー (Features)」パネルに表示されます。追加フィーチャーがない場合、「フィーチャー (Features)」パネルは表示されません。CIP の一部であり、かつオリジナルの WebSphere Process Server インストールの一部である各フィーチャーは、チェック・ボックスが使用不可にされて表示され、フィーチャーがインストールされることが示されます。オリジナルの WebSphere Process Server インストールの一部ではない CIP フィーチャーは、チェック・ボックスがアクティブにされて表示されます。インストールするフィーチャーを選択し、インストールから除去するフィーチャーを選択解除します。完了したら、「次へ」をクリックします。
2. 「インストール・プレビューの要約 (Installation preview summary)」パネルでインストール情報を確認します。パネルの上部にメッセージが表示され、(リストされている) 暫定修正が CIP のインストール時にアンインストールされることが警告されます。これらの暫定修正のうち CIP に含まれていないものがあれば、CIP のインストールの完了後に別個に再インストールする必要があります。
3. インストールを開始します。「インストール・プレビューの要約 (Installation preview summary)」パネルの情報が正しい場合、「次へ」をクリックしてインストールを開始します。
4. 進行状況表示でインストールのプロセスを追跡します。進行状況表示には暫定修正のアンインストールも含まれています。
5. インストールが完了すると、「インストールが完了しました」パネルが表示されます。パネルを調べて、インストールが正常に完了したことを確認します。

### タスクの結果

CIP のバックアップが `installation_root/properties/version/nif/update/` ディレクトリーに作成されます。システムをそのスリップ・インストールの前の状態に復元する場合 (例えば、WebSphere Process Server の前のバージョンに復元するなど)、Update Installer を使用して CIP をスリップ・アンインストールすることができます。

### 増分インストール:

増分インストールでは、基礎となる WebSphere Process Server のインストール済み環境を置き換えたり変更したりすることなく、既存のインストールの機能を追加または変更します。

増分インストールでは、カスタマイズ・インストール・パッケージ (CIP) を使用して、同じ保守レベルの WebSphere Process Server を含む CIP を使用した現在の WebSphere Process Server インストール環境に機能を追加します。

増分インストールの結果、製品の保守バージョンは変更されないまま、インストールのほかの機能が追加またはアップグレードされます。

### 増分 WebSphere Process Server インストール - 同じ保守レベルの既存のインストール済み環境へのフィーチャーの追加 - 既存のインストール済み環境にある CIP 内の暫定修正の検出:

既存のインストール済み環境を拡張するためのコア・ステップを完了したら、このタスクを実行して拡張のプロセスを完了します。

#### 始める前に

このタスクは、『既存の WebSphere Process Server インストール済み環境の拡張のための対話式での CIP の実行 (Running a CIP interactively to augment an existing WebSphere Process Server installation)』というトピックで提供されている情報の続きです。前提条件タスクが完了するまで、このタスクを開始しないでください。

#### このタスクについて

増分インストールでは、WebSphere Process Server のバージョンが変更されるのではなく、フィックス、フィーチャー、または保守パックが追加されます。『既存の WebSphere Process Server インストール済み環境の拡張のための対話式での CIP の実行 (Running a CIP interactively to augment an existing WebSphere Process Server installation)』のタスクを完了した後すぐに以下のステップを実行してください。CIP インストール・ウィザードの「フィーチャー (Features)」パネルが表示されます。

#### 手順

1. 「フィーチャー (Features)」パネルでインストールする追加フィーチャーを選択します。CIP インストールの一部としてインストールするフィーチャーを選択します。「次へ」をクリックします。
2. 「インストール・プレビューの要約 (Installation preview summary)」パネルでインストール情報を確認します。要約情報がユーザーの要件に合わない場合は、インストール・プロセスを停止して、再度開始します。
3. インストールを開始します。「インストール・プレビューの要約 (Installation preview summary)」パネルの情報が正しい場合、「次へ」をクリックしてインストールを開始します。
4. 進行状況表示でインストールのプロセスを追跡します。
5. インストールが完了すると、「インストールが完了しました」パネルが表示されます。パネルを調べて、インストールが正常に完了したことを確認します。

## タスクの結果

CIP のバックアップが `installation_root/properties/version/nif/update/` ディレクトリーに作成されます。システムをその増分インストールの前の状態に復元する場合、Update Installer を使用して CIP をスリップ・アンインストールすることができます。

WebSphere Process Server のバージョンは同じままで、暫定修正も変更されずに、選択した新規フィーチャーがインストールされます。

**増分 WebSphere Process Server インストール - 既存のインストール済み環境に同じ保守レベルのフィーチャーを追加 - CIP のいずれの暫定修正も既存のインストール済み環境に存在しない場合:**

既存のインストール済み環境を拡張するためのコア・ステップを完了したら、このタスクを実行して拡張のプロセスを完了します。

## 始める前に

このタスクは、『既存の WebSphere Process Server インストール済み環境の拡張のための対話式での CIP の実行 (Running a CIP interactively to augment an existing WebSphere Process Server installation)』というトピックで提供されている情報の続きです。前提条件タスクが完了するまで、このタスクを開始しないでください。

## このタスクについて

増分インストールでは、WebSphere Process Server のバージョンが変更されるのではなく、フィックス、フィーチャー、または保守パックが追加されます。『既存の WebSphere Process Server インストール済み環境の拡張のための対話式での CIP の実行 (Running a CIP interactively to augment an existing WebSphere Process Server installation)』のタスクを完了した後すぐに以下のステップを実行してください。CIP インストール・ウィザードの「フィーチャー (Features)」パネルが表示されません。

## 手順

1. 「フィーチャー (Features)」パネルでインストールする追加フィーチャーを選択します。CIP インストールの一部としてインストールするフィーチャーを選択します。「次へ」をクリックします。
2. 「インストール・プレビューの要約 (Installation preview summary)」パネルでインストール情報を確認します。要約情報がユーザーの要件に合わない場合は、インストール・プロセスを停止して、再度開始します。
3. インストールを開始します。「インストール・プレビューの要約 (Installation preview summary)」パネルの情報が正しい場合、「次へ」をクリックしてインストールを開始します。
4. 進行状況表示でインストールのプロセスを追跡します。
5. インストールが完了すると、「インストールが完了しました」パネルが表示されます。パネルを調べて、インストールが正常に完了したことを確認します。

## タスクの結果

CIP のバックアップが `installation_root/properties/version/nif/update/` ディレクトリーに作成されます。システムをその増分インストールの前の状態に復元する場合、Update Installer を使用して CIP をスリップ・アンインストールすることができます。

WebSphere Process Server のバージョンは同じままで、インストールされる暫定修正は以前にインストールされた暫定修正と CIP 内に組み込まれた暫定修正とが結合されたものになります。さらに、選択した新規フィーチャーもインストールされます。

**増分 WebSphere Process Server インストール - 同じ保守レベルの既存のインストール済み環境へのフィーチャーの追加 - 既存のインストール済み環境にある CIP 内の一部の (すべてではない) 暫定修正の検出:**

既存のインストール済み環境を拡張するためのコア・ステップを完了したら、このタスクを実行して拡張のプロセスを完了します。

### 始める前に

このタスクは、『既存の WebSphere Process Server インストール済み環境の拡張のための対話式での CIP の実行 (Running a CIP interactively to augment an existing WebSphere Process Server installation)』というトピックで提供されている情報の続きです。前提条件タスクが完了するまで、このタスクを開始しないでください。

### このタスクについて

増分インストールでは、WebSphere Process Server のバージョンが変更されるのではなく、フィックス、フィーチャー、または保守パックが追加されます。『既存の WebSphere Process Server インストール済み環境の拡張のための対話式での CIP の実行 (Running a CIP interactively to augment an existing WebSphere Process Server installation)』のタスクを完了した後すぐに以下のステップを実行してください。CIP インストール・ウィザードの「フィーチャー (Features)」パネルが表示されます。

### 手順

1. 「フィーチャー (Features)」パネルで追加フィーチャーを選択しないでください。追加フィーチャーを含むインストール方法については、別の箇所で説明されています。「次へ」をクリックするだけです。
2. 「インストール・プレビューの要約 (Installation preview summary)」パネルでインストール情報を確認します。要約情報がユーザーの要件に合わない場合は、インストール・プロセスを停止して、再度開始します。
3. インストールを開始します。「インストール・プレビューの要約 (Installation preview summary)」パネルの情報が正しい場合、「次へ」をクリックしてインストールを開始します。
4. 進行状況表示でインストールのプロセスを追跡します。
5. インストールが完了すると、「インストールが完了しました」パネルが表示されます。パネルを調べて、インストールが正常に完了したことを確認します。

## タスクの結果

CIP のバックアップが `install_root/properties/version/nif/update/` ディレクトリーに作成されます。システムをその増分インストールの前の状態に復元する場合、Update Installer を使用して CIP をスリップ・アンインストールすることができます。

WebSphere Process Server のバージョンは同じままで、インストールされる暫定修正は以前にインストールされた暫定修正と CIP 内に組み込まれた暫定修正とが結合されたものになります。さらに、選択した新規フィーチャーもインストールされます。

## トレードアップ・インストール

カスタマイズ・インストール・パッケージ (CIP) を使用して、下位レベルの製品から上位レベルの製品へのトレードアップ・インストールを実行することができます。

## 始める前に

このタスクを実行するためには、下位レベルの製品の既存のインストール済み環境が存在している必要があります。また、上位レベルの製品イメージが含まれたカスタマイズ・インストール・パッケージを保有している必要もあります。

## このタスクについて

トレードアップ・インストールとは、下位レベルの製品から WebSphere Process Server の完全バージョンに変更することです。次の表に、どのトレードアップ・パスがサポートされるかを示します。

表 162. サポートされるトレードアップ・パス

既存の製品	トレードアップ製品	サポート対象
Enterprise Service Bus	WebSphere Process Server	はい
WebSphere Process Server Client	WebSphere Process Server	はい

トレードアップ・インストールとは、1 つのステップから成るプロセスで、CIP を実行すると、インストールを下位レベルの製品から上位レベルの製品へ移行し、次に、新しくインストールした製品を必要な保守レベルへ上げます。

## 手順

1. WebSphere Process Server のカスタマイズ・インストール・パッケージのインストールを開始します。

`install` コマンドでインストールを直接開始します。

- a. `installation_root` ディレクトリーに移動します。
- b. 以下のコマンドを発行します。

- `AIX` `HP-UX` `Linux` `Solaris` `./install`
- `Windows` `install.exe`

コマンド行から CIP インストール・ウィザードを起動すると、ウィザードにより、「ようこそ」パネルが初期化され表示されます。「このカスタム・インストール・パッケージについて」をクリックして、エディションやバージョンなどの現在のカスタマイズ・インストール・パッケージに関する詳細情報を表示します。「次へ」をクリックします。

2. 「ご使用条件」パネルで、ご使用条件をお読みにになり、この条件を受け入れません。

「IBM および IBM 以外の両方の条件を受諾します (I accept both the IBM and the non-IBM terms)」をクリックしてご使用条件に同意し、「次へ」をクリックして先に進みます。

ライセンス条項に同意すると、インストール・ウィザードにより、サポートされるオペレーティング・システムと前提条件のパッチが検査されます。システムに適切な前提条件の更新が存在しないなどの問題が発生した場合は、インストールをキャンセルして必要な変更を行ってから、インストールを再開始します。

インストール・ウィザードでは、prereqChecker アプリケーションで前提条件のオペレーティング・システムのパッチがチェックされますが、前提条件をまだ確認していない場合は、サポートされるハードウェアとソフトウェアの Web サイトで前提条件を確認してください。

この Web サイトには、サポートされているオペレーティング・システム、およびオペレーティング・システムを準拠させるためにインストールする必要があるオペレーティング・システムのフィックスおよびパッチがすべて記載されています。

サポートされているバージョンへのマイグレーションについては、IBM 以外の前提条件および相互に必要な製品の資料を参照してください。

3. 前提条件の確認を完了し、「既存のコピーの検出 (Detect existing copy)」パネルに移動します。システムの前提条件の確認が完了したら、「次へ」をクリックします。システムが WebSphere Process Server の既存のコピーを検出した場合
4. 実行しているトレードアップ (例えば、どの製品からトレードアップしているかなど) に基づいて、「既存のコピーの検出 (Detect existing copy)」パネル上にさまざまなオプションが表示されます。オプションを選択して、WebSphere Process Server の新規コピーをインストールします。
5. 「トレードアップ (Trade up)」パネルに、トレードアップする下位レベルの製品の既存のコピーが表示されます。

「トレードアップ (Trade up)」パネルには、システムで検出された、製品用のフィールドのみが表示されます。「*product\_name* の既存のコピーを使用 (Use an existing copy of *product\_name*)」をクリックします。ここで、*product\_name* は、トレードアップする下位レベルの製品です。

次に、既存の製品の固有のインストール済み環境をリストから選択します。

「次へ」をクリックします。このステップを完了すると、トレードアップ元の製品にすべての前提条件フィーチャーが備わっていることがチェックされます。問題が検出されない場合は、ウィザードは「フィーチャー (Features)」パネルに移動します。

6. 「フィーチャー (Features)」パネルで、CIP からインストールするフィーチャー、または下位の製品に既にインストールされているフィーチャーを選択します。

「フィーチャー (Features)」パネルのデフォルトの表示は以下のようになります。

- インストールされておらず CIP に含まれるすべてのフィーチャーが選択されている。
- インストール済みで CIP に含まれるすべてのフィーチャーが選択され、チェック・ボックスが使用不可にされている。
- インストールされていて CIP に含まれていないすべてのフィーチャーが、チェック・ボックスがクリアされて表示されている。

このパネル上のオプションは変更しないでください。「次へ」をクリックします。

7. 「インストールの要約」パネル上の情報を確認します。すべてが正しい場合は、「次へ」をクリックしてインストールを開始します。
8. 進行状況表示でインストールをモニターします。

## カスタマイズ・インストール・パッケージによりインストールした環境の保守

カスタマイズ・インストール・パッケージ (CIP) を使用してインストールした後は、インストールを直接実行した場合と同様にシステムを保守します。CIP を使用すると、任意の WebSphere Process Server のインストール済み環境に保守パッチまたは暫定修正を適用できます。

### 始める前に

以下のトピックでは、Installation Factory を使用して作成された WebSphere Process Server のインストール済み環境を保守する方法について説明します。

### このタスクについて

WebSphere Process Server のインストール済み環境は、CIP を使用して作成した場合でも別の方法で作成した場合でも、実質的な違いはありません。したがって、保守、リフレッシュ・パック、フィックスパック、および暫定修正を適用する方法は、通常の手順と同じです。詳しくは、関連作業についてのトピックを参照してください。ただし、CIP を使用して適用された保守をロールバックするには特別なステップを実行する必要があります。

以降のトピックでは、CIP で作成された WebSphere Process Server のインストール環境に対して保守を適用したりロールバックしたりする方法について説明します。

## Installation Factory で作成された WebSphere Process Server インストールに対する保守の適用

CIP を使用して作成された WebSphere Process Server インストール上に保守パッケージをインストールするために必要なステップは、その他の WebSphere Process Server のインストールの場合と同じです。

### 始める前に

保守を CIP インストールに適用するには、Update Installer for WebSphere ソフトウェアを使用する必要があります。

### このタスクについて

保守を WebSphere Process Server のインストール済み環境に適用する方法については、保守パッケージのインストールに関する関連タスクを参照してください。

カスタマイズ・インストール・パッケージを使用して WebSphere Process Server のインストール済み環境に保守を適用する方法については、カスタマイズ・インストール・パッケージによるフィックスパックおよびリフレッシュ・パックのインストールについての関連タスクを参照してください。

## カスタマイズ・インストール・パッケージでインストールされた WebSphere Process Server のインストール済み環境からの保守のロールバック

一般に、カスタマイズ・インストール・パッケージ (CIP) を使用して作成された WebSphere Process Server のインストール済み環境からの保守パッケージのロールバックは、他のインストール済み環境での手順と同じです。ただし特定の相違点があるため、ここではそれについて説明します。

### 始める前に

このタスクは、さまざまな方法のいずれかで保守パッケージが適用された CIP を使用して作成された WebSphere Process Server のインストール済み環境がある場合に当てはまります。Update Installer for WebSphere ソフトウェアを使用して、CIP インストール済み環境から保守をロールバックする必要があります。

### このタスクについて

保守パッケージのロールバックに関する核心となる情報は、関連タスク『保守パッケージのアンインストール』に記載されています。CIP を使用して作成された WebSphere Process Server のインストール済み環境から保守パッケージをアンインストールするための追加ステップについて、以下に説明します。

- CIP を既存の WebSphere Process Server のインストール済み環境にスリップ・インストールした後に、製品全体をアンインストールしないで保守をアンインストールする場合。CIP は、リフレッシュ・パック、フィックスパック、および 1 つ以上の暫定修正をマージしたもので構成されます。
  1. スリップ・インストールの一環としてインストールされた暫定修正をアンインストールします。

2. CIP に含まれている保守レベルをロールバックします。これは、単一のフィックスバックまたはリフレッシュ・バックをアンインストールすることと同じです。ただし単一の操作では、CIP にロールアップされていた保守がすべてロールバックされます。これは、CIP のフィックスバック部分のみロールバックし、インストール済み環境をリフレッシュ・バック・レベルのままにしておくことはできないことを意味します。つまり、両方が同時にロールバックされ、インストール済み環境がスリップ・インストールが実行される前と同じ状態のままになります。
- スリップ・インストールの後で、スリップ・インストールの前にインストールされていた保守を除去する場合。
    1. スリップ・インストールをロールバックします。
    2. 関連タスク『保守パッケージのアンインストール』にある説明に従って、保守パッケージをロールバックします。
  - CIP を使用して作成された WebSphere Process Server のインストール済み環境に暫定修正を追加した後の場合。この手順は、WebSphere Process Server のインストール方法とは関係がありません。
  - CIP を使用して作成された WebSphere Process Server のインストール済み環境にフィックスバックまたはリフレッシュ・バックを追加した後の場合。この手順は、WebSphere Process Server のインストール方法とは関係がありません。

## カスタマイズ・インストール・パッケージのインストールのアンインストール

元のインストールの実行方法に関係なく、WebSphere Process Server をシステムからアンインストールするプロセスは同じです。

### このタスクについて

カスタマイズ・インストール・パッケージのインストールの内容（例えば、フル、スリップ、または増分など）に関係なく、アンインストール・プロセスは、標準インストールの場合のソフトウェアのアンインストールと同じです。アンインストールの実行方法について詳しくは、関連トピックを参照してください。

---

## 統合インストール・パッケージの処理

カスタマイズ・インストール・パッケージ (CIP) は、カスタマイズ済み WebSphere Process Server インストール・イメージです。統合インストール・パッケージ (IIP) は、多くの WebSphere ソフトウェアおよび複数の CIP をまとめた大規模パッケージです。IBM WebSphere Installation Factory は、CIP および IIP を作成します。

### このタスクについて

複数のインストール・パッケージを自動化された反復可能な方法でインストールする必要があるお客様は、これらのパッケージを単一のインストール可能パッケージに集約した IIP を作成できます。例えば、複数のサーバーを用意して、それらのサーバーに WebSphere Process Server といくつかのフィーチャー・バックをデプロイできます。これらの各製品をサーバーごとに個別のステップとしてインストールする代わりに、すべての製品を一度にインストールする IIP を作成できます。

Installation Factory ユーザーは、IIP に組み込むインストール・パッケージ、インストールの順序、IIP や各収容インストール・パッケージの動作に関するその他の詳細を指定します。

IIP に組み込む各製品は、別個にカスタマイズ可能なため、柔軟性に富んでいます。例えば、WebSphere Process Server 製品インストールを対話式に実行してから、1 つ以上のフィーチャー・パック・インストールをサイレントに実行することによって、パッケージ一式をシームレスにインストールすることが可能です。また、IIP の任意の呼び出し時に、含まれているインストール・パッケージのうちどれを実際にインストールするかを決定できるという柔軟性もあります。言い換えると、IIP に含まれる特定のパッケージを選択してインストールされないようにすることも可能です。

以下は、IIP インストール・シナリオの一例です。

#### 手順

1. WebSphere Process Server が含まれている CIP をインストールする
2. フィーチャー・パック (または、フィーチャー・パックおよびフィーチャー・パック・フィックスとともに作成された CIP) をインストールする
3. マシンの別のディレクトリーに WebSphere Process Server CIP の別のインスタンスをインストールする

---

## 統合インストール・パッケージの開発およびインストール

統合インストール・パッケージ (IIP) は、IBM WebSphere Installation Factory を使用して作成された集約インストール・パッケージです。これには、1 つ以上の一般出荷可能なインストール・パッケージ、1 つ以上のカスタマイズ・インストール・パッケージ (CIP)、およびユーザーが指定した他のファイルおよびディレクトリーを組み込むことができます。IIP は、複数の製品インストーラーを 1 つのパッケージにまとめた複合インストーラーです。IIP は、これらのコントリビューションを事前定義された順序で順番に、また組織的に呼び出して、エンドツーエンド・インストールを実行します。

### 始める前に

このトピックおよび関連の各トピックを一読し、IIP の作成およびインストールの準備を行います。インストール・ツールの使用を開始する前に、IIP のインストール・オプションについて十分理解しておいてください。作業を開始する前に、『Supported hardware and software』を参照してください。

ご使用のシステムにさらに多くのディスク・スペースや一時スペースが必要であったり、前提条件パッケージが存在しないなどの問題が発生した場合は、インストールをキャンセルして必要な変更を行ってからインストールを再開します。

### このタスクについて

このトピックでは、IIP の作成およびインストールの概要について説明します。まず、Installation Factory をダウンロードして、製品を使用するためのシステム環境をセットアップします。詳しくは、654 ページの『IBM WebSphere Installation Factory のインストール』を参照してください。

次の手順では、IIP の作成およびインストールの開始方法について説明します。

## 手順

1. Installation Factory を使用して、IIP を作成します。

詳しくは、724 ページの『ビルド定義の作成と IIP の生成』を参照してください。

2. インストール用のオペレーティング・プラットフォームを準備します。

42 ページの『インストールのためのオペレーティング・システムの準備』を参照してください。

3. IIP をインストールします。

以下のいずれかのシナリオを選択して、インストールを開始します。

- ウィザードを使用して IIP をインストールします。

733 ページの『IIP のインストール』を参照してください。

インストール・ウィザードを使用すると、インストールするコントリビューションを選択したり、IIP の作成中に選択したオプションに基づいてインストールをカスタマイズしたりすることができます。

- IIP をサイレント・インストールします。

758 ページの『IIP のサイレント・インストール』を参照してください。

コマンド行のオプションや応答ファイルを使用して、IIP をサイレントにインストールできます。IIP の完全なエンドツーエンド・サイレント・インストールを実行するには、サイレント・インストール用にすべてのコントリビューションを構成する必要もあります。

コントリビューションの各インストール・モードを組み合わせて構成することができます。例えば、WebSphere Process Server のインストール中はウィザードを表示し、Feature Pack for Web Services のインストールはサイレントに実行するよう選択できます。

## タスクの結果

この手順に従うことにより、IIP を使用して、IBM WebSphere Process Server 製品スタックをインストールできます。例えば、プロセス・サーバーおよびフィーチャー・パック・インストーラーを 1 つのパッケージにまとめた IIP を作成できます。

## IIP の概要

IBM WebSphere Installation Factory は、特定のニーズに合うように調整された WebSphere ソフトウェア・スタックを、信頼できる反復可能な方法でインストールするためのインストール・パッケージを作成する Eclipse ベースのツールです。

IIP は、プロセス・サーバー、フィーチャー・パック、およびユーザー・ファイルなどの WebSphere ソフトウェア・スタック全体をインストールすることが可能なインストール・パッケージです。IIP には、いくつかの CIP を含めることもできます。

## 統合インストール・パッケージ

自動化された反復可能な方法で複数のインストール・パッケージをインストールする必要があるお客様は、それらのパッケージを 1 つのインストール可能パッケージに集約した IIP を作成することができます。例えば、WebSphere Process Server と何個かのフィーチャー・パックをデプロイしなければならないサーバーが複数台あるとします。この場合は、各サーバーでこれらの製品それぞれを個別のステップでインストールする代わりに、定義された順序でそれらの製品すべてをインストールする IIP を作成できます。

Installation Factory ユーザーは、IIP に含めるインストール・パッケージ、それらのパッケージのインストール順序、および IIP の適切な振り舞いや含まれるインストール・パッケージそれぞれについての他のさまざまな詳細事項を指定します。

IIP に含める各製品は、個別にカスタマイズして柔軟性を高めることができます。例えば、WebSphere Process Server 製品のインストールを対話式に実行し、それから 1 つ以上のフィーチャー・パックのサイレント・インストールを実行して、パッケージ・セット全体のインストールをシームレスに行うことが可能です。また、IIP の任意の呼び出し時に、含まれているインストール・パッケージのうちどれを実際にインストールするかを決定できるという柔軟性もあります。言い換えると、IIP に含まれる特定のパッケージを選択してインストールされないようにすることも可能です。

IIP のインストール・シナリオの一例を以下に示します。

1. WebSphere Process Server 製品を含む CIP をインストールする
2. フィーチャー・パック (または、フィーチャー・パックおよびフィーチャー・パック・フィックスとともに作成された CIP) をインストールする
3. マシンの別のディレクトリーに、プロセス・サーバー CIP の別のインスタンスをインストールする

### コントリビューション

IIP は、WebSphere 製品、フィーチャー・パック、またはファイル・セットであるコントリビューションによって構成されています。指定されたコントリビューションは、必要に応じて複数回呼び出すことができます。その呼び出しそれぞれを、呼び出しと言います。例えば、同じマシンの異なるディレクトリーに WebSphere Process Server を複数回インストールする場合のコントリビューションの呼び出しを追加できます。

コントリビューションの例を以下に示します。

- 定義済みインストール・パッケージ (DIP)。WebSphere Process Server や Feature Pack for Web Services などの一般出荷可能インストール・パッケージ
- 以前に作成した CIP
- readme ファイルや画像ファイルなどの追加のユーザー・ファイルまたはディレクトリーすべて

**注:** コントリビューション・タイプに関係なく、Installation Factory でインストール・パッケージを作成するソフトウェアを入手する必要があります (例えば、WebSphere Process Server の製品イメージを Installation Factory パッケージに含め

るには、まず、その製品イメージを用意する必要があります)。Installation Factory 自体は、これらのパッケージのいずれにもバンドルされておらず、自動的に取得することもできません。

### 定義済みインストール・パッケージ

IBM では、時前構成されたコントリビューション・タイプをいくつか用意しています。これにより Installation Factory では、IIP へのコントリビューション・タイプの追加および IIP 実行時における振る舞いの制御に対するサポートを拡張し、ユーザー操作の必要や間違いの可能性などを抑制することができます。

DIP に関する情報は、Installation Factory に実際に組み込まれるのではなく、XML メタデータと Eclipse プラグイン・メカニズムを使用して「プラグイン」されます。Installation Factory には、CIP の作成をサポートするためにインストール・パッケージに関する詳細なメタデータがすでに組み込まれており、このメタデータは、IIP の作成をサポートするように拡張されることとなります。IIP が正常に作成されるようにするには、DIP を使用せずに、カスタム・スクリプトによって各パッケージのインストールを呼び出す必要があります。この執筆時点では、以下のコントリビューションがサポートされています。

- IBM WebSphere Process Server 6.2
- IBM WebSphere Enterprise Server Bus 6.2
- IBM WebSphere Process Server Client 6.2
- IBM WebSphere Application Server 6.1
- IBM WebSphere Application Server Network Deployment 6.1
- IBM WebSphere Application Server Version 6.1 Feature Pack for Web Services
- IBM WebSphere Application Server Version 6.1 Feature Pack for EJB 3.0
- IBM WebSphere Application Server 6.1 トライアル版
- IBM WebSphere Application Server - Express™ 6.1
- IBM WebSphere Application Server - Express 6.1 トライアル版

### インストール統合バス

インストール・パッケージと関連ツールは、ユーザーが簡単に IIP に含めることができ、Installation Factory は、IIP 内の既存の他のパッケージにこのインストール・パッケージを自動的に統合して時間と手間を節約します。含まれているインストール・パッケージ間のこのような統合は、パッケージからパッケージに情報を渡すことによって達成されます。このような統合機能を実現する基盤となるインフラストラクチャーを、インストール統合バス (IIB、または単に「バス」) と呼びます。この設計により、統一された方法で、インストール・パッケージや他のインストール関連コマンドをバスを介してプラグインしたり、一緒につないだり、実行したりすることができます。これにより、バスがなければ別々であったインストール・パッケージを一緒に実行することが可能になります。マクロ置換を使用してこのインフラストラクチャーの利点を活用することができます。詳しくは、721 ページの『IIP マクロ置き換え』を参照してください。

例えば、IIP を使用して WebSphere Process Server および 1 つ以上のフィーチャー・パックをインストールする場合、このプロセス・サーバーで使用された `-installLocation` オプションは、マクロ (例えば、`$RESV`) によってフィーチャー・

パックそれぞれのデフォルト・インストール・ロケーションとして自動的に再使用できるため、そのロケーションを何度も指定する必要がなくなります。多くの場合、フィーチャー・パック・パッケージを IIP に追加する以外の操作を行う必要はなく、他のパッケージとの統合に関係するその他の操作は Installation Factory によって実行されます。バスにより、組み込まれているパッケージすべてのエンドツーエンド・フローが可能になります。

## IIP マクロ置き換え

統合インストール・パッケージ (IIP) の重要な特長の 1 つは、マクロを使用して組み込みインストール・パッケージのインストールを自動化できることです。

このトピックでは、IIP マクロに関する以下の情報を記載します。

- 『IIP のマクロの使用』
- 『\$RESV{<Invocation\_ID>:<Result\_value\_name>}』
- 722 ページの 『\$OPTV{<Invocation\_ID>:<Option\_name>}』
- 723 ページの 『\$OPTS{<Invocation\_ID>:<Option\_name>[;string]}』
- 724 ページの 『\$LOC{[<Contribution\_ID>\_<Sub\_ID> | IIP]}』
- 724 ページの 『\$JP{<Java property>}』

### IIP のマクロの使用

定義済みのマクロを使用することにより、IIP の柔軟性を高め、IIP 作成時にビルド定義ウィザードですべてを指定しなくても特定のコントリビューションのインストール方法を自動化することができます。例えば、IIP ビルド定義ウィザードでロケーションを手入力によって 2 回指定しなくても、同じロケーション (または同じロケーションに相対的なロケーション) に異なる 2 つのインストール・パッケージをインストールすることができます。最初のパッケージのインストール・ロケーションを 2 番目のパッケージの `-installLocation` オプションに自動的に割り当てることにより、最初のパッケージのインストール・ロケーションがインストール・ロケーションのデフォルトになるようにすることができます。IIP の作成時に変更の許可をしていれば、インストール時にユーザーはこの値を変更することができることに注意してください。マクロは、IIP がインストールされるまで解決されないため、その IIP を作成するユーザーだけでなく、IIP を呼び出すユーザーも使用することができます。ビルド定義ウィザードと IIP インストール・ウィザードの両方には、オプション・ストリングを手動で編集して直接にマクロを作成または変更しなくても、ユーザーがマクロを活用するための便利な方法が用意されています。

**注:** コントリビューションでサポートされているすべてのオプションをマクロで参照できるとは限りません。現時点では、`-installLocation` オプションと `-silent` オプションのみを、`$RESV`、`$OPTV`、および `$OPTS` の各マクロで参照することができます。

以下のマクロを IIP で使用できます。

#### **\$RESV{<Invocation\_ID>:<Result\_value\_name>}**

これは、指定された呼び出しの結果値 を値として取り、マクロをその値で置き換えます。ここで `<Invocation_ID>` は、名前付き結果値を指定する、IIP 内のコントリビューション呼び出しを指定します。呼び出し ID は、異なるコントリビューションが同じ結果値名を使用する場合、または指定されたコントリビューションの呼び

出しが複数存在する場合に発生する可能性がある、何らかのあいまいさを解決するために必要になります。例えば、IIP にプロセス・サーバーのインストール・パッケージ (Invocation\_ID = 6.2.0-WS-WBI\_1-1) および Feature Pack for Web Services のインストール・パッケージが含まれている場合には、プロセス・サーバーと同じ場所にフィーチャー・パックを自動的にインストールすることが考えられます。これを実現するには、IIP インストールのコマンド行で、以下のオプションをフィーチャー・パック・インストール・プログラムに渡します。

```
-OPT installLocation=$RESV{6.2.0-WS-WBI_1-1:installLocation}
```

プロセス・サーバーのインストーラーとフィーチャー・パックのインストーラーの両方が `-installLocation` 結果値をサポートしているため、これにより、プロセス・サーバーで使用されたインストール・ロケーションがどこであったとしても、そのロケーションはフィーチャー・パックのインストーラーに自動的にかつ確実に渡されます。IIP のインストール時に、参照される呼び出しがユーザーによって抑制され (言い換えると、ユーザーがその特定のパッケージをインストールしないことにし)、その参照を含んでいる呼び出しが抑制されていない場合は、マクロを解決することが不可能になるため、エラーが生成されて IIP のインストールを続行できなくなります。例えば、プロセス・サーバーが IIP の外部ですでにインストールされているときに、選択解除されたプロセス・サーバー・パッケージのインストール・ロケーションに解決するマクロを使用して IIP のフィーチャー・パック・パッケージをインストールしようとする、そのインストールは失敗します。このマクロを使用せずに、フィーチャー・パックのインストール・ロケーションを指定する必要があります。マクロを解決できない場合、ユーザーは続行するために以下の 4 つの操作のいずれかを実行しなければなりません。

- 抑制されていない別の呼び出しを参照するようにマクロを変更する。
- 参照されている呼び出しを有効にする。
- その参照が含まれている呼び出しを無効にする。
- マクロを除去する。

### **\$OPTV{<Invocation\_ID>:<Option\_name>}**

このマクロは、指定された名前のオプションの値を取り、マクロをその値で置き換えます。ここで <Invocation\_ID> は、名前付きオプションをサポートする、IIP 内のコントリビューション呼び出しを指定します。これは、異なるコントリビューションが同じ結果値名を使用する場合、または指定されたコントリビューションの呼び出しが複数存在する場合に発生する可能性がある、何らかのあいまいさを解決するために必要になります。参照される呼び出しで実際に指定されていなかったために、参照されるオプションを解決できない場合は、IIP インストール中のエラーです。IIP ユーザーは、参照される呼び出しを変更してそのオプションが含まれるようにする、またはその参照を含むマクロを変更/除去する必要があります。このマクロを使用して、値を取らないオプション (例えば、`-silent`) を参照するのは、IIP 作成中のエラーです。この場合、ビルド定義ウィザードがエラーを発行し、IIP はビルドできなくなります。

この例は、1 つの重要な点を除いて、\$RESV の例と非常によく似ています。

```
-OPT installLocation=$OPTV{6.2.0-WS-WBI_1-1:installLocation}
```

このマクロは、どこであれ `-installLocation` オプションによってプロセス・サーバーに渡されたインストール・ロケーションを値として取り、フィーチャー・パックにその値をインストール・ロケーションとして渡します。これは、プロセス・サーバーがサイレント・インストールされた場合には問題ありませんが、プロセス・サーバーが GUI モードでインストールされた場合には、ユーザーがインストール・ウィザードでロケーションを変更して別の場所を指定した可能性があります。それでもこのマクロは、IIP 作成時に設定された元の値に解決します。この場合は、オプション値マクロ (`$OPTV`) ではなく、結果値マクロ (`$RESV`) を使用することをお勧めします。

### **`$OPTS{<Invocation_ID>:<Option_name>[;string]}`**

このマクロは、指定された名前のオプションの仕様を値として取り、マクロをその仕様で置き換えるか、指定されている場合には `string` で置き換えます。`<Invocation_ID>` は、名前付きオプションをサポートする、IIP 内のコントリビューション呼び出しを指定します。オプション仕様は、コマンド行での正確なオプションの指定方法を示す、値を差し引いたストリングで、`-OPT installLocation=` のようになります。このマクロは、ほとんどの場合、`-silent` のように値を何も取らないオプションで使用されます。マクロの `string` 部により、参照されるオプション仕様を直接使用するのではなく、このマクロの代わりとしてストリング値を使用できます。これにより、2 つの異なるコントリビューションで、同じ機能に対して異なるオプションを選択できる場合 (この場合はサイレント・インストール) をサポートします。コントリビューションの 1 つがこのマクロを使用し、他のコントリビューションがサイレントで呼び出されたかどうかをチェックし、サイレント呼び出されている場合は、`string` を使用してサイレント呼び出し用の独自のオプションを指定できます。

`$OPTV` マクロとは異なり、`$OPTS` は、参照される呼び出しで参照されるオプションが指定されていなかった場合に、拡張されて空ストリングになります (これは、エラー状況ではありません)。これは、インストール・モードなどをサポートするために重要です。`-silent` のようなオプションが指定されていないと、インストーラーは GUI モードを使用するからです。仕様を持たないオプションを参照するためにこのマクロを使用すると、エラーになります。

`-silent` などの値を取らないオプションは、例えば次のようにマクロを使用して解決することもできます。

```
$OPTS{6.2.0-WS-WBI_1-1:silent}
```

この場合は、プロセス・サーバー・コントリビューション `6.2.0-WS-WBI` の呼び出しで、参照されるオプション `-silent` が指定されていれば、マクロはオプション仕様 `-silent` で置き換えられます。このオプションが指定されていない場合、マクロは空ストリングに解決されます。これにより、コントリビューションの 1 つで指定されたオプションに基づき、サイレント・モードまたは GUI モードで、コントリビューションのセットを一貫してインストールすることができます。この参照がユーザー・エラーの場合、参照されるコントリビューションでオプションが指定されていなければ、警告が発行されます。

## **\$LOC{[<Contribution\_ID>\_<Sub\_ID> | IIP]}**

このマクロは、IIP の指定されたパッケージ呼び出しのロケーションに解決し、結果は絶対パスになります。Contribution\_ID と Sub\_ID が指定されている場合、これは、IIP 内の指定されたコントリビューションのルート・ロケーションに解決されます。例えば、Windows 用のプロセス・サーバー製品の基本エディションのコントリビューションがある場合、そのコントリビューションのルート・ディレクトリーは *IIP\_home/contrib/6.2.0-WS-WBI/1/WinX32* となります。以下のマクロ例は、このディレクトリーに解決します。

```
$LOC{6.2.0-WS-WBI_1}
```

IIP だけを指定すると、この値は IIP のルート・ディレクトリー (つまり、*IIP\_home*) に解決します。

```
$LOC{IIP}
```

## **\$JP{<Java property>}**

このマクロは、名前付き Java プロパティの現行値で置き換えられます。これは、Java ランタイムで現在知られているいずれかのプロパティです。例えば、IIP ビルド定義ウィザードでの作業中には、コントリビューション呼び出しのターゲット・インストール・ディレクトリーを指定するよう求められます。root 以外のユーザーのデフォルトのターゲット・インストール・ディレクトリーは以下のとおりです。

```
$JP{user.home}/IBM/WebSphere/ProcServer
```

これにより、現在のユーザーのホーム・ディレクトリーに */IBM/WebSphere/ProcServer* を付加し、ディレクトリー・パスを完成させます。

## **ビルド定義の作成と IIP の生成**

このトピックでは、ビルド定義ファイルの作成方法と、IBM WebSphere Installation Factory を使用した統合インストール・パッケージ (IIP) の生成方法について説明します。

### **始める前に**

最初に Installation Factory をインストールしてから、それを使用してインストール・パッケージを作成します。詳しくは、『Installation Factory 入門 (Getting Started with the Installation Factory)』を参照してください。

### **このタスクについて**

IIP を作成するには、最初にビルド定義ファイルを作成します。次いで、Installation Factory が、このファイルを使用して IIP を生成します。ビルド定義ファイルは、IIP に組み込むパッケージと構成を正確に記述します。この両方のステップは、ローカル・マシン上で行うことができます。あるいは、ビルド定義をローカルで作成してから、XML ファイルを別のマシン (異種のマシンまたはオペレーティング・システムの場合もある) に渡して IIP を生成することもできます。ビルド定義ファイルから IIP を生成するには、まず Installation Factory および IIP に組み込むすべての製品をリモート・マシンに用意しておく必要があります。

ターゲット・オペレーティング・システム・プラットフォーム上で、ビルド定義ウィザードを使用できない場合もあります。その場合には、以下の 3 つのオプションがあります。

- サポートされているマシンで、切断モードでウィザードを使用し、別のマシン上のターゲット・オペレーティング・システム用のビルド定義ファイルを作成します。

次いで、そのファイルをターゲット・オペレーティング・システムにコピーし、コマンド行インターフェースを使用して IIP を生成します。

**注:** リモート・サーバーで Installation Factory を使用する場合は、接続モードで作業を行い、「モードの選択」パネルでターゲット・オペレーティング・システムを選択するのが最適の方法です。

- 同様のプラットフォームで作業する場合は、ビルド定義ファイルを作成し、他のプラットフォーム用の IIP を生成することができます。つまり、他のすべてのサポートされる UNIX スタイル・プラットフォーム用にサポートされる UNIX スタイル・プラットフォーム上で IIP を作成および生成したり、他のすべてのサポートされる Windows プラットフォーム用にサポートされる Windows プラットフォーム上で IIP を作成および生成したりすることができます。
- 検証 XML エディターを使用して、ビルド定義の XML 文書を作成します。

*IF\_home/samples/iip* ディレクトリーから、サンプルの IIP ビルド定義文書の 1 つをコピーして開始します。

変更を加えた後、検証のための XML パーサーまたはエディターを使用して、ビルド定義文書とその XML スキーマ (IIPBuildDefinintion.xsd) と突き合わせながら検証します。次に、コマンド行インターフェースを使用して、処理エンジンを開始し、IIP を作成します。

以下の手順を使用して、ビルド定義ファイルを作成し、IIP を生成します。

#### 手順

1. 『IBM WebSphere Installation Factory』のダウンロード・ページから製品コードをダウンロードして、コードを解凍します。

テスト済みオペレーティング・システムの完全なリストについては、ダウンロード・ページを参照してください。

2. IIP に組み込むインストール・パッケージについて検討します。Installation Factory には、製品インストール・イメージは含まれていません。Installation Factory でインストールするソフトウェアを用意する必要があります。
3. グラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) スクリプトを使用して、Installation Factory コンソールを開始します。

- **AIX** **HP-UX** **Linux** **Solaris** *IF\_home/bin/ifgui.sh* スクリプトを使用します。

- **Windows** *IF\_home\bin\ifgui.bat* スクリプトを使用します。

4. 新規の IIP ビルド定義を作成するか、既存のビルド定義を開きます。

新規の IIP ビルド定義を作成するには、「**統合インストール・パッケージの新規作成**」をクリックします。

既存のビルド定義 XML ファイルを編集する場合は、「**ビルド定義を開く**」をクリックします。

5. ウィザードを接続モードと切断モードのいずれで実行するのかが選択します。

- **接続モード**

接続モード処理のチェック・ボックスを選択すると、ローカル・マシン上にビルド定義ファイルを作成することに加えて、IIP を生成できるようになります。ビルド定義ウィザードは、すべてのディレクトリー、ファイル、およびインストール・パッケージを接続モードで検証するため、これらのリソースにローカルにアクセス可能でなければなりません。

- **切断モード**

切断モード処理のチェック・ボックスを選択すると、ビルド定義のみが保存され、IIP は後で作成することになります。サポートされるマシンで、ウィザードを切断モードで使用し、別のマシン上のサポートされるオペレーティング・システム用のビルド定義ファイルを作成します。次いで、ビルド定義 XML ファイルをターゲット・オペレーティング・システムにコピーし、ifcli コマンドを使用して処理エンジンを開始し、IIP を生成します。ビルド定義ウィザードでは、インストール・イメージ、保守パッケージ、または切断モードで入力する他のファイルやスクリプトを検証することはできません。ターゲット・プラットフォーム用の IIP を同種のプラットフォームで生成することもできます。つまり、別の Windows プラットフォーム用に Windows プラットフォーム上で IIP を作成したり、別の UNIX スタイル・プラットフォーム用に UNIX スタイル・プラットフォーム上で IIP を作成したりすることができます。

ウィザードで指定するすべての製品、ディレクトリー、およびファイルのパスは、IIP を作成するマシンに対する相対パスでなければなりません。例えば、ターゲット AIX システムにアクセスできない Red Hat Enterprise Linux 4 システムでコンソールを実行しているとします。ビルド定義ウィザードは、ターゲット・システム上のファイル・ロケーションを参照できません。ただし、Network Deployment インストール・イメージおよび IIP の他のエレメントの AIX ロケーションのディレクトリー・パスを入力することは可能です。

6. パッケージ情報、ビルド定義ファイルの出力場所、IIP、製品、インストール・イメージ、追加のファイルおよびディレクトリー、作成情報の出力場所を識別するために必要なすべてのパラメーターを指定します。IIP 作成プロセスの各ステップについては、以下のヘルプ・パネルの資料を参照してください。

**制約事項:** IIP を作成する際に、ディレクトリー・パスに英語以外のローカル固有文字を使用することはできません。ディレクトリー名には、印刷可能な US ASCII 文字のみを使用してください。

パネル	説明
738 ページの『IIP モードの選択』	接続モードと切断モードのいずれで作業するのかが指定し、IIP のターゲット・オペレーティング・システムを指定します。

パネル	説明
739 ページの『IIP パッケージ ID』	IIP の汎用固有 ID を指定します。
740 ページの『IIP ビルド情報』	ビルド定義ファイルおよび IIP の名前と場所を指定します。
741 ページの『IIP 統合インストール・ウィザードの設定』	このパネルは、インストール中に IIP インストール・ウィザードを IIP ユーザーに表示するかどうか、およびこの設定をオーバーライドできるかどうかを指定するために使用します。
742 ページの『IIP 統合インストール・パッケージの構成』	<p>IIP のインストール・パッケージを追加および変更します。このパネルには、以下のパネルも含まれています。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 745 ページの『IIP インストール・パッケージの追加』</li> </ul> <p>インストール・パッケージを IIP に追加します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>- 746 ページの『IIP インストール・パッケージ情報』</li> </ul> <p>IIP 内で現在選択されているインストール・パッケージのプロパティを検討します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>- 747 ページの『IIP インストール・パッケージ・プロパティの変更』</li> </ul> <p>選択されているインストール・パッケージのインストール・パッケージ・ファイルへのディレクトリー・パスを指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 748 ページの『IIP インストール・パッケージ呼び出しプロパティ』</li> </ul> <p>IIP 内で現在選択されているコントリビューション呼び出しのプロパティを指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>- 751 ページの『IIP デフォルトのインストール・ディレクトリー・パスの変更』</li> </ul> <p>選択されているインストール・パッケージのターゲット・インストール・ディレクトリー・パスを指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>- 753 ページの『IIP デフォルトのサイレント・インストール応答ファイルの変更』</li> </ul> <p>選択されているインストール・パッケージのサイレント・インストール応答ファイルを指定します。</p>
754 ページの『IIP 追加ファイル』	IIP にファイルおよびディレクトリーを追加します。
755 ページの『IIP 作成情報』	IIP の組織および説明を指定します。
755 ページの『IIP プレビュー』	この要約パネルは、IIP のすべての選択項目を検討するために使用します。

7. 「統合インストール・パッケージのプレビュー」パネルで、ビルド定義ファイルを保存するだけなのか、ビルド定義ファイルを保存して IIP をローカルに生成するのかが選択します。「終了」をクリックして、ビルド定義ウィザードを終了します。

定義ファイルのビルドのみを選択した場合は、ビルド定義 XML ファイルをターゲット・マシンにコピーします。ビルド定義ファイルに対して `ifcli` コマンドを実行して、IIP を生成します。詳しくは、690 ページの『`ifcli` コマンド』を参照してください。

IIP を生成するために必要な時間は、パッケージに組み込む製品の数と種類によって異なります。

8. 処理エンジンの終了時、Installation Factory によって `IF_home/logs/log.txt` ファイルに完了メッセージが記録されます。

## 例

以下の例では、ビルド定義ファイルを作成し、プロセス・サーバー・コントリビューションおよびフィーチャー・パック・コントリビューションが組み込まれた IIP を Windows システムに生成する方法を示します。プロセス・サーバーのサンプル・アプリケーションの 1 つで言及されている架空の「Plants by WebSphere」という会社のために IIP を作成します。

1. `IF_home\bin\ifgui.bat` スクリプトを起動します。
2. 「IBM Installation Factory」パネルで、「**新規統合インストール・パッケージの作成 (Create a New Integrated Installation Package)**」を選択します。
3. ビルド定義ウィザードが起動し、「モードの選択」パネルが表示されます。このマシンで作成およびインストールするための IIP をビルドしているため、「**接続モード**」を選択します。この IIP を作成すれば、ローカル・システムと同じオペレーティング・システムおよびプラットフォームを使用するマシンでインストールを行うことができます。「プラットフォーム」で、現在のプラットフォームを選択します。「次へ」をクリックします。
4. 「パッケージ ID」パネルで、ID `com.plantsBy Websphere` を入力します。バージョンは 1.0.0.0 のままにします。「次へ」をクリックします。
5. 「ビルド情報」パネルが表示されます。作成中のビルド定義 XML ファイルのファイル名と場所を入力します。IIP の生成先のディレクトリーも選択します。ビルド定義を作成するだけでなく IIP も生成する場合は、ターゲット・ディレクトリーに十分なスペースがあることを確認します。デフォルトの IIP ディレクトリーが空ではなく、「**ターゲット・ロケーションが空でない場合は警告する**」チェック・ボックスが選択されている場合は、ディレクトリーが空でないことを示すエラーが表示されます。「次へ」をクリックします。
6. 「統合インストール・ウィザードの設定」パネルで、選択されている両方のインストール・ウィザードの設定をそのままにしておきます。インストール時の柔軟性を最大限に引き出すために、始動時に IIP ウィザードを表示するという設定はオーバーライド可能になっています。「次へ」をクリックします。
7. 「統合インストール・パッケージの構成」パネルが表示されます。これは、IIP に組み込むパッケージのプロパティーを選択、追加、および変更するメイン・パネルです。IBM WebSphere Application Server Network Deployment 製品、フィーチャー・パック、および WebSphere Process Server バージョン 6.2 を組み込むパッケージを作成するため、以下のようにして Network Deployment 製品を開始します。

- a. 「サポートされるインストール・パッケージおよびツール」フィールドで、「**IBM WebSphere Application Server Network Deployment 6.1**」を選択します。「**インストーラーの追加**」をクリックします。
- b. 「インストール・パッケージの追加」パネルには、パッケージの名前、パッケージの ID、および IIP を作成しているプラットフォームのオペレーティング・システムおよびアーキテクチャーが表示されます。指定されたプラットフォームでの Network Deployment の製品コードを指定する必要があります。「**変更**」をクリックします。
- c. Network Deployment 製品イメージのルート・ディレクトリーのディレクトリー・パスを入力するか、「**参照**」をクリックしてイメージを参照します。接続モードを使用しているため、「**パッケージ・サイズの取得**」をクリックしてパッケージのサイズを見積もることができます。「**OK**」をクリックします。
- d. 「インストール・パッケージの追加」パネルに戻ります。「パッケージへのディレクトリー・パス (Directory path to the package)」フィールドと、「パッケージ・サイズ (Package size)」フィールドが入力されていることを確認できます。「**OK**」をクリックします。
- e. 「統合インストール・パッケージの構成」パネルに戻ります。「この IIP で使用されるインストール・パッケージ」フィールドにパッケージがリストされていること、およびそのパッケージ呼び出しが作成されて「インストール・パッケージ呼び出し」フィールドにリストされていることを確認できます。パッケージ呼び出しが選択されていることを確認し、「インストール・パッケージ呼び出し」フィールドの横にある「**変更**」ボタンをクリックします。
- f. 「インストール・パッケージ呼び出しプロパティ」パネルが表示されます。このパネルで、パッケージ呼び出しのすべてのインストール・プロパティを設定します。
  - 1) 呼び出しの表示名および説明を変更します。IIP をインストールするユーザーに対して、この情報がパッケージ呼び出しで表示されます。これらのフィールドをカスタマイズして、会社でのこのパッケージの実装方法を反映することができます。
  - 2) 「このインストール呼び出しを 1 次インストール呼び出しにする」チェック・ボックスが選択されています。後で追加するフィーチャー・パック・パッケージは、このパッケージの情報 (ターゲット・インストール・ディレクトリーも含む) をデフォルトとして使用するため、この値は変更しないでください。実際、この設定により、値を手動で変更しない限り、このパッケージの後に追加する他のすべてのパッケージ呼び出しで、このパッケージに指定した特定の値が使用されるようになります。
  - 3) 「ユーザーはこのパッケージのインストールを抑止できる」チェック・ボックスを選択解除します。これは、組み込まれているパッケージが 3 つだけの比較的単純な例であるため、ユーザーは 3 つのパッケージすべてをインストールするものとします。
  - 4) 「デフォルトのインストール・モード」のデフォルト値は変更しないでください。インストール時に Network Deployment のインストール・ウィザードが表示されます。

- 5) 「デフォルトのインストール・ディレクトリー・パス」タブで、このパッケージのインストール・パスを設定します。管理者と非管理者の両方のユーザー・タイプのパスを設定できます。「変更」をクリックして「デフォルトのインストール・ディレクトリー・パスの変更」パネルを開いて、パッケージのインストール先のパスを入力します。「OK」をクリックして、現在のパネルに戻ります。
  - 6) 「応答ファイル」タブをクリックします。このパッケージをサイレントにインストールするわけではないため、このセクションの設定はスキップできます。
  - 7) 「終了コードのアクション」タブをクリックします。これらは、パッケージが、これらの終了コードを生成するときに実行されるアクションです。「インストールは部分的に成功した」のアクションを「インストールを停止するか続行するかをユーザーに質問する」に変更します。ユーザーが、製品ログまたは他の情報に基づいて部分的な成功を受け入れるかどうかを決定できるようにします。残りの 2 つの終了コードのアクションは、デフォルトでインストールを停止するように設定されています。これは、この 2 つの場合に受け入れられる動作です。「OK」をクリックして、「インストール・パッケージ呼び出しプロパティー」パネルを終了します。
8. フィーチャー・パックを IIP に追加します。
- a. 「サポートされるパッケージおよびツール (Supported packages and tools)」リストから「**IBM WebSphere Application Server Version 6.1 Feature Pack for Web Services**」を選択して、『Network Deployment』セクションのステップ a から d を製品ディレクトリー・パスのみを変更して実行します。
  - b. 「統合インストール・パッケージの構成」パネルに戻ります。「この IIP で使用されるインストール・パッケージ」フィールドにフィーチャー・パック・パッケージがリストされていること、およびそのパッケージ呼び出しが作成されて「インストール・パッケージ呼び出し」フィールドにリストされていることを確認できます。フィーチャー・パック呼び出しが選択されていることを確認し、「インストール・パッケージ呼び出し」フィールドの横にある「変更」ボタンをクリックします。
    - 1) 呼び出しの表示名および説明を変更します。IIP をインストールするユーザーに対して、この情報がフィーチャー・パック呼び出しで表示されます。会社または組織を反映するように、これらの名前をカスタマイズします。
    - 2) 「このインストール呼び出しを 1 次インストール呼び出しにする」チェック・ボックスは、デフォルトで選択されていないことに注意してください。フィーチャー・パックは Network Deployment 製品の上にインストールされ、Network Deployment のデフォルト値を継承するため、これは必要な動作です。
    - 3) 「ユーザーはこのパッケージのインストールを抑止できる」チェック・ボックスを選択解除します。これは、組み込まれているパッケージが 3 つだけの比較的単純な例であるため、ユーザーは 3 つのパッケージすべてをインストールするものとします。
    - 4) 「デフォルトのインストール・モード」のデフォルト値は変更しないでください。インストール時にフィーチャー・パックのインストール・ウ

ィザードが表示されます。ただし、フィーチャー・パックをサイレントにインストールすると、2つのパッケージがインストールされる場合でも、ユーザーにとっては、Plants by WebSphere IIP 全体が1回の操作でシームレスにインストールされるように見えます。ここでサイレント・インストールを選択する場合は、応答ファイルを指定する必要があります。あるいは、インストール時に IIP インストーラーが応答ファイルを指定する必要があります。

- 5) 「デフォルトのインストール・ディレクトリー・パス」タブで、このパッケージのインストール・パスを設定します。Network Deployment パッケージを1次インストール呼び出しとして設定するため、フィーチャー・パックのインストール・パス値は \$RESV{6.1.0-WS-WASND\_1-1:installLocation} に設定されています。これは、Network Deployment パッケージの installLocation オプションの Result Value をここで使用することを示すマクロです。マクロとその用法については、721ページの『IIP マクロ置き換え』を参照してください。
  - 6) 「応答ファイル」タブをクリックします。このパッケージをサイレントにインストールするわけではないため、このセクションの設定はスキップできます。このパッケージ呼び出しをサイレントにインストールする場合は、応答ファイルを指定します。
  - 7) 「終了コードのアクション」タブをクリックします。これらは、パッケージが、これらの終了コードを生成するときに実行されるアクションです。「インストールは部分的に成功した」のアクションを「インストールを停止するの継続するかをユーザーに質問する」に変更します。ユーザーが、製品ログまたは他の情報に基づいて部分的な成功を受け入れるかどうかを決定できるようにします。残りの2つの終了コードのアクションは、デフォルトでインストールを停止するように設定されています。これは、この2つの場合に受け入れられる動作です。「OK」をクリックして、「インストール・パッケージ呼び出しプロパティー」パネルを終了します。
9. 次に、WebSphere Process Server バージョン 6.2 を IIP に追加します。
- a. 「サポートされるパッケージおよびツール (Supported packages and tools)」リストから「**IBM WebSphere Process Server 6.2**」を選択して、『Network Deployment』セクションのステップ a から d を製品ディレクトリー・パスのみを変更して実行します。
  - b. 「統合インストール・パッケージの構成」パネルに戻ります。「この IIP で使用されるインストール・パッケージ」フィールドにフィーチャー・パック・パッケージがリストされていること、およびそのパッケージ呼び出しが作成されて「インストール・パッケージ呼び出し」フィールドにリストされていることを確認できます。WebSphere Process Server 呼び出しが選択されていることを確認し、「インストール・パッケージ呼び出し」フィールドの横にある「変更」ボタンをクリックします。
    - 1) 呼び出しの表示名および説明を変更します。IIP をインストールするユーザーに対して、この情報が WebSphere Process Server 呼び出しで表示されます。会社または組織を反映するように、これらの名前をカスタマイズします。

- 2) 「このインストール呼び出しを 1 次インストール呼び出しにする」チェック・ボックスは、デフォルトで選択されていないことに注意してください。WebSphere Process Server は Network Deployment 製品の上にインストールされ、Network Deployment のデフォルト値を継承するため、これは必要な動作です。
  - 3) 「ユーザーはこのパッケージのインストールを抑止できる」チェック・ボックスを選択解除します。これは、組み込まれているパッケージが 3 つだけの比較的単純な例であるため、ユーザーは 3 つのパッケージすべてをインストールするものとします。
  - 4) 「デフォルトのインストール・モード」のデフォルト値は変更しないでください。インストール時に WebSphere Process Server のインストール・ウィザードが表示されます。ここでサイレント・インストールを選択する場合は、応答ファイルを指定する必要があります。あるいは、インストール時に IIP インストーラーが応答ファイルを指定する必要があります。
  - 5) 「デフォルトのインストール・ディレクトリー・パス」タブで、このパッケージのインストール・パスを設定します。Network Deployment パッケージを 1 次インストール呼び出しとして設定するため、フィーチャー・パックのインストール・パス値は \$RESV{6.1.0-WS-WASND\_1-1:installLocation} に設定されています。これは、Network Deployment パッケージの installLocation オプションの *Result Value* をここで使用することを示すマクロです。マクロとその用法については、721 ページの『IIP マクロ置き換え』を参照してください。
  - 6) 「応答ファイル」タブをクリックします。このパッケージをサイレントにインストールするわけではないため、このセクションの設定はスキップできます。このパッケージ呼び出しをサイレントにインストールする場合は、応答ファイルを指定します。
  - 7) 「終了コードのアクション」タブをクリックします。これらは、パッケージが、これらの終了コードを生成するときに実行されるアクションです。「インストールは部分的に成功した」のアクションを「インストールを停止するのか続行するのかをユーザーに質問する」に変更します。ユーザーが、製品ログまたは他の情報に基づいて部分的な成功を受け入れるかどうかを決定できるようにします。残りの 2 つの終了コードのアクションは、デフォルトでインストールを停止するように設定されています。これは、この 2 つの場合に受け入れられる動作です。「OK」をクリックして、「インストール・パッケージ呼び出しプロパティー」パネルを終了します。
10. インストール・パッケージ呼び出しテーブルで、2 つのパッケージ呼び出しに指定したプロパティーを確認します。「次へ」をクリックします。
  11. 「追加のファイルとディレクトリー」パネルが表示されます。IIP に組み込むファイルまたはディレクトリーを指定できます。例えば、IIP に組み込むイメージまたは他の資料に加えて、README ファイルを組み込むことができます。この機能を使用してスクリプトを実行することはできません。インストール中に実行するスクリプトを追加する場合は、アプリケーションおよびプロファイルをカスタマイズした Process Server のカスタマイズ済み統合パッケージ (CIP) をビルドして、一般出荷可能 Process Server 製品イメージを使用する代わりに、パッケージ呼び出しで使用することができます。「次へ」をクリックします。

12. 「作成情報」パネルで、組織名 (例えば、「Plants by WebSphere」) と説明を入力します。この情報は、インストール・ウィザードの「製品情報」ボタンをクリックすると、IIP インストーラーで確認できます。「次へ」をクリックします。
13. 「統合インストール・パッケージのプレビュー」パネルが表示されます。作成した XML ファイルを保存するのか、ファイルを保存して IIP を生成するのを選択できます。接続モードで IIP をビルドして検証したため、ファイルを保存して IIP を生成することを選択します。「終了」をクリックします。

## 次のタスク

これで、作成した IIP をインストールできるようになりました。詳しくは、『IIP のインストール』を参照してください。サイレントにインストールする場合は、758 ページの『IIP のサイレント・インストール』を参照してください。

## IIP のインストール

インストール・ウィザードを使用した統合インストール・パッケージ (IIP) のインストール

### 始める前に

インストール・ツールを使用する前に、このトピックを読んで、インストールの準備を行い、インストール・オプションについて理解してください。また、サポートされるハードウェアとソフトウェアについての Web サイトで、ハードウェア要件とソフトウェア要件を確認してから、作業を開始してください。

インストーラー ID には、非 root ユーザー ID を使用できます。ただし、インストール手順によっては、root ユーザーのインストーラー ID が必要となる場合もあります。すべての組み込みコントリビューションはユーザー・タイプと関係があるため、コントリビューションについて考慮してください。例えば、root ID を使用している場合で、非 root ユーザー・コントリビューション・オプションをコントリビューションに渡す必要がある場合は、`-iipUserType=nonroot` を使用する必要があります。

### このタスクについて

Installation Factory を使用して IIP を作成してから、IIP をインストールします。IIP の作成について詳しくは、717 ページの『統合インストール・パッケージの開発およびインストール』を参照してください。IIP をサイレントにインストールするには、758 ページの『IIP のサイレント・インストール』を参照してください。

インストール・ウィザードは、IIP の作成中にユーザーが定義した順番で、各コントリビューションをインストールします。IIP インストーラーは前提条件検査を実行しませんが、各コントリビューション・インストーラーは独自の検査を実行し、製品のシステム要件をマシンが満たしていない場合は失敗します。

### 手順

1. インストールの計画を立てます。

概要: WebSphere Process Server の計画を参照してください。

2. インストール用のオペレーティング・プラットフォームを準備します。

IIP に含まれているさまざまな製品のすべてがインストールされるようにオペレーティング・システムを準備しておかないと、コントリビューションが失敗する可能性があります。IIP をインストールする前に、各製品の前提条件を確認してください。アプリケーション・サーバー製品の前提条件については、『System Requirements for WebSphere Application Server V6.1』を参照してください。

必要に応じてドライブをマウントします。

3. IIP が含まれている CD または DVD をディスク・ドライブに挿入するか、IIP が存在するディレクトリーにアクセスします。IIP がディスクに存在する場合は、インストーラーはメディアにログを書き込むことができません。そのため、`-iipLogFile` パラメーターを使用してログの場所をリダイレクトする必要があります。使用可能なインストール・コマンド行パラメーターおよび応答ファイル・パラメーターについては、758 ページの『IIP のサイレント・インストール』を参照してください。

**Linux** 必要に応じてドライブをマウントします。

4. `install` コマンドでインストールを直接開始します。ステップ 4 で言及されているインストール・オプションを参照してください。

• **AIX** **HP-UX** **Linux** **Solaris** `IIP_home/bin/install.sh`

• **Windows** `IIP_home\bin\install.exe`

: **Vista**

標準のユーザー特権を使用してインストールを起動すると、管理者ユーザーであるかどうかにかかわらず、続行する前に、管理者特権への昇格を求めるプロンプトが出されます。以下の方法でインストールを実行することにより、このプロンプトが表示されないようにすることができます。

- `install.exe` を右クリックします。
- 「**管理者として実行 (Run As Administrator)**」をクリックします。

非管理者ユーザーの場合は、ユーザー ID およびパスワードのプロンプトが出された場合に、別のステップを実行する必要があります。

- Windows Vista オペレーティング・システムでの WebSphere Application Server バージョン 6.1 のサポートは、WebSphere Application Server バージョン 6.1.0.9 以降で対応しています。

Windows Vista オペレーティング・システムは、WebSphere Application Server の開発およびテスト用の 32 ビット・プラットフォームとしてサポートされていますが、実動アプリケーション・サーバー用にサポートされているわけではありません。アプリケーション・クライアントは、開発、テスト、および実動用にサポートされています。

詳しくは、『WebSphere Application Server detailed system requirements』および『WebSphere Application Server support for the Microsoft Windows Vista operating system』を参照してください。

5. インストーラー・ウィザードが初期化され、「ようこそ」パネルが表示されません。

作成者、組織、バージョン、およびすべての組み込みパッケージについては、「製品情報」をクリックします。「次へ」をクリックします。

6. 「インストール選択」パネルが表示されます。

このパネルには、IIP に含まれているすべてのコントリビューション呼び出しとプロパティが、呼び出される順序でリストされています。各コントリビューションの特定のプロパティのみを変更できる場合がありますが、これは IIP の作成者が、実行時にユーザーによる変更を許可しているかどうかによって異なります。コントリビューション・テーブルの下の「説明」フィールドは、読み取り専用で、選択するコントリビューションによって内容が変わります。

- **インストール名**

選択されたパッケージのインストール名を指定します。これは読み取り専用です。

- **状況**

行の先頭のチェック・ボックスが選択されているかどうかに基づいて、パッケージがインストール用に選択されているか選択解除されているかを示します。選択解除されているパッケージは、インストール時に IIP インストール・ウィザードによってスキップされます。別のパッケージの前提条件となるパッケージを除去すると、次のパッケージをインストールすることができなくなります。例えば、アプリケーション・サーバー・パッケージを選択解除すると、ターゲット・ディレクトリーのマシンに既存のアプリケーション・サーバーが存在しない場合は、フィーチャー・パックをインストールすることができません。

このフィールドは、インストール中またはインストール後のパッケージのインストール状況も示します。各インストールの最後に、インストールが成功したかどうかは状況フィールドに表示されます。成功しなかった場合、IIP は、パッケージに指定された終了コードのアクション (自分で指定するか、IIP 作成者が指定する) を実行します。有効な状況コードは、以下のとおりです。

- **成功**

パッケージが正常にインストールされました。

- **障害**

パッケージのインストールが失敗しました。

- **部分的な成功**

パッケージは正常にインストールされましたが、特定のポストインストール・スクリプトが正常に完了しませんでした。

- **ユーザーによって取り消された**

パッケージ・インストーラーは、ユーザーによって取り消されました。

- 不明

パッケージ・インストーラーは、不明なエラーのために正常に完了しませんでした。

• インストール・モード

選択したインストール・パッケージをウィザードによって対話的にインストールするのか、指定した応答ファイルを使用してサイレントにインストールするのかを指定します。

• インストール・ディレクトリー

選択したインストール・パッケージのターゲット・インストール・ディレクトリーを指定します。

• 応答ファイルのディレクトリー・パスとファイル名

選択したインストール・パッケージについて応答ファイルのロケーションを指定します。選択したパッケージをサイレントにインストールする場合は、応答ファイルを指定する必要があります。

呼び出しを選択して「変更」をクリックし、使用可能なプロパティーを変更します。必要なすべてのオプションを変更したら、「インストール」をクリックしてインストールを開始します。

7. インストールが開始されます。パネル下部の「インストール進行状況 (Installation progress)」バーで、各コントリビューションの状況を追跡できます。各インストールの最後に、インストールが成功したかどうか状況フィールドに表示されます。IIP の全体のインストール状況を示す進行状況表示バーもあります。

コントリビューションのインストールに失敗すると、IIP インストーラーは、コントリビューション呼び出しに指定した (ユーザーまたは IIP 作成者が指定)、終了コードに関連付けられている以下の 3 つのアクションのいずれかを実行します。

表 163. 終了コードのアクション

アクション	説明
インストールを停止するのか続行するのかをユーザーに質問する	IIP インストーラー・ウィザードに制御が戻り、何らかのアクションを実行するようプロンプトが出されます。例えば、インストール対象の残りのコントリビューションの選択を変更したり、インストールを停止したり、現在のパッケージ・インストールを変更することなくインストールを続行することができます。
統合インストール・パッケージのインストールを続行する	終了コードは無視され、IIP インストール・プロセスは、次のインストール・パッケージ呼び出しを続行します。
統合インストール・パッケージのインストールを停止する	パッケージのインストール・プロセスが停止し、制御が IIP インストーラーに戻ります。

コントリビューションのインストールが部分的に成功した場合、またはユーザーによって取り消された場合は、制御が IIP インストーラーに戻り、表 1 の終了コードに関連付けられた 3 つのアクションのいずれかが実行されます。デフォルトは、IIP の作成時に指定を変更しない限り、「**統合インストール・パッケージのインストールを停止する**」です。

インストール中に IIP インストール・ウィザードで「**取り消し**」をクリックすると、現在のパッケージは完了するまでインストールが続行されますが、残りのコントリビューションはインストールされません。残りのコントリビューションを変更してインストールを続行するか、インストール・ウィザードを終了することができます。パッケージをインストールする前に「**取り消し**」をクリックすると、インストーラーは、確認ダイアログ・ウィンドウでプロンプトを出してからウィザードを終了します。

8. パッケージのリストの横にある「**ログの表示**」ボタンをクリックして、選択したパッケージのログを表示します。ログ・ファイルを参照して、任意のテキスト・エディターで表示することもできます。ログ・ファイルの場所については、製品の資料を調べてください。

インストール状況セクションの横にある「**ログの表示**」ボタンをクリックすると、全体の IIP ログ・ファイルを表示できます。以下の場所にあるログ・ファイルを任意のテキスト・エディターで直接開くことによって、ログを表示することもできます。

- **AIX** **HP-UX** **Linux** **Solaris** `IIP_home/iip/logs`
- **Windows** `IIP_home\iip\logs`

9. 「**終了**」をクリックして、インストール・ウィザードを終了します。

## タスクの結果

統合インストール・パッケージのインストールが完了しました。

## 次のタスク

**注:** 組み込まれているコントリビューションのインストールが失敗した場合は、そのコントリビューションの応答ファイル (全体の IIP 応答ファイルとは異なる) を編集する必要があります。デフォルトで、コントリビューションの応答ファイルは、`IIP_home/ResponseFiles` にあります。

**注:** IIP のインストール中に、Eclipse の重要なロギング情報が含まれている可能性のあるワークスペース・ファイルが、以下のディレクトリーに作成されます。

- **Windows** `%USERPROFILE%\com.ibm.ws.install.factory.iip`
- **AIX** **HP-UX** **Linux** **Solaris** `$HOME/.com.ibm.ws.install.factory.iip`

これらのファイルを定期的に手動で削除して、ディスク・スペースを解放できます。

## IIP ビルド定義ウィザードのパネル

ビルド定義ウィザードのパネルを使用して、統合インストール・パッケージ (IIP) の各コンポーネントおよび特性を識別します。IIP は、IBM WebSphere Installation

Factory で作成された、集約されたインストール・パッケージで、1 つ以上の一般出荷可能なインストール・パッケージ、1 つ以上のカスタマイズ・インストール・パッケージ (CIP)、およびその他のユーザー指定ファイルとディレクトリーをこれに組み込むことができます。IIP はこれらのコントリビューションを 1 つずつ呼び出して、エンドツーエンドのインストールを完了します。

以下のパネルを使用して、IIP に含めるコンポーネントを特定します。

1. 『IIP モードの選択』
2. 739 ページの 『IIP パッケージ ID』
3. 740 ページの 『IIP ビルド情報』
4. 741 ページの 『IIP 統合インストール・ウィザードの設定』
5. 742 ページの 『IIP 統合インストール・パッケージの構成』
  - 745 ページの 『IIP インストール・パッケージの追加』
    - 746 ページの 『IIP インストール・パッケージ情報』
    - 747 ページの 『IIP インストール・パッケージ・プロパティの変更』
  - 748 ページの 『IIP インストール・パッケージ呼び出しプロパティ』
    - 751 ページの 『IIP デフォルトのインストール・ディレクトリー・パスの変更』
    - 753 ページの 『IIP デフォルトのサイレント・インストール応答ファイルの変更』
6. 754 ページの 『IIP 追加ファイル』
7. 755 ページの 『IIP 作成情報』
8. 755 ページの 『IIP プレビュー』

#### **IIP モードの選択:**

このパネルを使用して、接続モードまたは切断モードのいずれかで作業するかを指定し、統合インストール・パッケージ (IIP) のターゲット・オペレーティング・システムを指定します。

ビルド定義ウィザードで、製品インストール・イメージ、および IIP の作成に必要なその他のコンポーネントにアクセスできる場合、ウィザードを接続モードで使用できます。このモードでは、ビルド定義ウィザードで、入力データとして提供されたファイルの検証、ビルド定義ファイルの作成、およびオプションで IIP の生成を行うことができます。製品インストール・イメージ、およびその他のコンポーネントが別のマシン上にあるためにアクセスできない場合、ビルド定義ウィザードは切断モードでしか使用できません。切断モードでは、ビルド定義ウィザードを使用してターゲット・プラットフォームのビルド定義ファイルを作成することができますが、入力データを検証したり IIP を生成したりすることはできません。その場合、ビルド定義ファイルをターゲット・マシンにコピーし、ifcli コマンドへの入力データとして使用して、IIP を生成することができます。このとき、ビルド定義ウィザードで入力されたすべてのデータが検証されます。

#### **モード:**

ビルド定義ファイルで作業するモードを指定します。モードはコンポーネント検証に影響を与えます。

## 接続モード

このコンピューターでビルド定義ファイルを扱い、オプションでカスタマイズ・インストール・パッケージを作成するには接続モードを選択します。接続モードでは、製品インストール・イメージおよび指定したあらゆるオプションの資産に直接アクセスする必要があります。これらの資産は、このコンピューターのオペレーティング・システムおよびアーキテクチャーに合致しなければなりません。

接続モードで実行する場合、ビルド定義ウィザードはビルド定義ファイルの作成時に、接続されたインストール・イメージ、およびその他のコンポーネントを検証できます。これは、すべて同じマシン上にあるためです。

## 切断モード

別のコンピューターで使用するビルド定義ファイルを扱うには切断モードを選択します。ビルド定義ファイルは、このコンピューターに対して相対的なロケーションに保管されます。処理エンジンが IIP を生成するコンピューターに対して相対的な、その他のすべてのディレクトリー・パスおよびファイル名を指定します。

例えば、製品インストール・イメージがターゲット・マシンの `/tmp/IBM/WPSimage` ディレクトリーにあるとします。ターゲット・マシンでのロケーションを指定します。ターゲット・マシンでは、処理エンジンは IIP に組み込む製品イメージを検出する必要があります。

切断モードの場合、ビルド定義ウィザードはコンポーネントにアクセスしないため、それらのコンポーネントを検証できません。この場合、Installation Factory はすべてのコンポーネントの検証を処理エンジンに任せます。処理エンジンは、IIP にコンポーネントを組み込むときに、各コンポーネントを検証します。

## プラットフォーム:

IIP をビルドする対象のプラットフォームを指定します。

使用可能なプラットフォームは、接続モードまたは切断モードのいずれを選択したかによって異なります。接続モードでは、現在のプラットフォームでサポートされているインストーラーからのみ選択できます。切断モードでは、サポートされているプラットフォームのリスト全体から選択できます。IIP を実行するオペレーティング・システムおよびハードウェア・プラットフォームを選択します。

コマンド行呼び出しツール `ifcli` は 32 ビット・カーネルおよび 64 ビット・カーネルで稼働します。

Installation Factory GUI (`ifgui`) および `ifcli` ツールを実行するためにサポートされているプラットフォームのリストは異なります。

Installation Factory でサポートされているすべてのプラットフォームの現在のリストについては、『WebSphere Process Server』を参照してください。

## IIP パッケージ ID:

「パッケージ ID」パネルを使用して、統合インストール・パッケージ (IIP) の汎用固有 ID を指定します。

### **ID:**

IIP に固有 ID を指定します。

記述子を入力します。例えば、テスト環境で作業している場合、作成したテスト IIP を識別するのに `com.ibm.toronto.test.wps` を使用できます。また、ローカルの大学のスポーツ情報 IT 部門で作業するとします。メディアで使用するマシンに WebSphere Process Server の更新をインストールするため、作成する IIP の ID として `edu.abc.sid.wps` を使用できます。

パッケージ ID は、汎用固有 ID となるように設計されています。単一のインストール済み環境に複数の IIP をインストールできます。バージョン番号を使用した固有の逆ドメイン表記を推奨しています。

「次へ」をクリックします。

### **バージョン:**

作成した IIP の識別に役立つバージョン番号を指定します。

例えば、バージョン・フィールドには `1.0.0.0` が入力されます。その値から開始して、後で IIP バージョンの番号を増やすことができます。IIP のバージョン番号は、製品のバージョン番号を反映していなくてもかまいません。

### **フルパッケージ ID:**

前の 2 つのフィールドを連結したものを指定します (読み取り専用)。

Installation Factory では、この固有 ID をカスタマイズ・インストール・パッケージを保持するディレクトリーの名前として使用します。例えば、完全パッケージ ID は `edu.abc.sid.wps_1.0.0.0` のようになります。完全パッケージ ID は以下のガイドラインに準拠する必要があります。

- 30 文字以内 (Windows プラットフォームの場合)
- 先頭と末尾の文字は英字 (A から Z、a から z) または数字 (0 から 9) のみとする
- 英字 (A から Z、a から z)、数字 (0 から 9)、ピリオド (.)、または下線 (\_) のみ使用可能
- スペース、または以下の文字は使用不可: ~ ` ! @ # \$ % ^ & ( ) { } [ ] | ¥ / : ; , ? ' " < = > + \*

### **IIP ビルド情報:**

このパネルを使用して、ビルド定義ファイルおよび統合インストール・パッケージ (IIP) の名前およびロケーションを指定します。

ビルド定義ウィザードでは、IIP の出力ロケーションを指定する XML ビルド定義ファイルを作成します。ファイルの名前とロケーションの両方を指定できます。ビルド定義ファイルは、常にビルド定義ウィザード・マシン上のディレクトリー・パスに保存されます。

### **ビルド定義ディレクトリー・パスおよびファイル名:**

ビルド定義ディレクトリー・パスおよびファイル名を指定します。

ビルド定義ファイルは、処理エンジンの応答ファイルと考えることができます。この XML ファイルは、処理エンジンが IIP のすべてのコンポーネントを配置するために必要な情報を提供します。新規のビルド定義 XML ファイルを作成、または既存のファイルを上書きすることができます。ディレクトリー・パスおよびファイル名を入力して、「参照」をクリックし、ディレクトリーとファイルを検索します。

### **IIP ビルド・ディレクトリー・パス:**

IIP ビルド・ディレクトリー・パスを指定します。

Installation Factory は、IIP を作成し、IIP をユーザーが指定したディレクトリー名に格納します。「統合インストール・パッケージ」フィールドで、IIP を作成するディレクトリーの名前を指定します。

希望のディレクトリー・パスおよびファイル名を入力して、「参照」をクリックし、ディレクトリーを選択します。

**Windows** IIP ビルド・ディレクトリーの文字数の長さは、Windows オペレーティング・システム上で限られています。Installation Factory は、Windows 上で許容される最大のディレクトリーの長さを計算します。IIP 内のコンポーネントによって制限よりも長いディレクトリー長になった場合、そのコンポーネントを変更しないと、IIP を作成できません。例えば、IIP 内のカスタマイズ・インストール・パッケージ (CIP) に含まれているものが Windows が許容するより長いディレクトリー長である場合、ID をより短くして CIP を再生成する必要があります。

処理エンジンは、ビルド定義ファイルから IIP ロケーションを読み取り、IIP を格納する場所を判別します。「次へ」をクリックすると、ビルド定義および IIP 検証が実行されます。指定されたファイルが既に存在する場合、現在の内容を上書きすることを確認するプロンプトが表示されます。

ターゲット・ディレクトリーに保管済みの既存 IIP ファイルを誤って置換することを避けるには、「ターゲット・ロケーションが空でない場合は警告する」を選択します。

### **IIP 統合インストール・ウィザードの設定:**

このパネルを使用して、インストール中に統合インストール・パッケージ (IIP) インストール・ウィザードを IIP ユーザーに対して表示するかどうかを指定します。

また、IIP ウィザードを表示するオプションの変更を IIP ユーザーに対して許可するかどうかを指定することができます。IIP のサイレント・インストールが大規模な自動インストール・プロセスの一部である場合、IIP のインストール全体をサイレント・インストールとして設定すると便利なことがあります。

**注:** 各コントリビューションが「統合インストール・パッケージの構成 (Construct the integrated install package)」パネルでどのように構成されているかにより、IIP ウィザードは表示されなくても、ウィザードの各コントリビューションは表示される

場合があります。すべてのインストールをサイレントで実行したい場合、組み込まれているすべてのコントリビューションのインストール・モードをサイレントに設定する必要があります。

IIP ユーザーに対して IIP インストール・ウィザードの使用を許可する場合は、「**開始時に IIP インストール・ウィザードを表示 (Display the IIP installation wizard at startup)**」チェック・ボックスを選択します。これを選択しないと、ウィザードは表示されません。

IIP ユーザーに対してウィザードの表示オプションの変更を許可する場合は、「**IIP インストール・ウィザードを表示するかどうかの指定変更をユーザーに許可する (Allow users to override whether to display the IIP installation wizard)**」を選択します。

### **IIP 統合インストール・パッケージの構成:**

このパネルを使用して、統合インストール・パッケージ (IIP) のインストール・パッケージを追加および変更します。

IIP はコントリビューションから構成されています。コントリビューションは、WebSphere Process Server や Feature Pack for Web Services のようなインストール可能パッケージです。定義済みインストール・パッケージ (DIP) のリストから選択する必要があります。このパッケージは、インストール終了コードなど、ビルド定義ウィザードで既知のプロパティを保有するコントリビューションです。作成およびインストール中に、IIP はこの内部ロジックによって、さまざまなイベントを予測および処理できます。

コントリビューションが IIP に追加される際、そのファイルは指定されたロケーションから、ターゲットの IIP ビルド・ロケーションにコピーされます。一般出荷可能なインストール・パッケージのバージョンに加えて、Installation Factory によって作成されたカスタマイズ・インストール・パッケージ (CIP) も IIP へのコントリビューションとして選択できます。1 つのコントリビューションについて、パッケージ ID とバージョンが異なる限り、複数の CIP を追加できます。各 CIP は、コントリビューションの一形式と考えられるため、IIP に追加される際に固有コントリビューション ID が割り当てられます。

### **サポートされているインストール・パッケージおよびツール:**

IIP に含めることができる、サポートされる定義済みインストール・パッケージを指定します。

#### **インストーラーの追加**

このボタンをクリックして、IIP に追加する、サポートされるインストール・パッケージを選択します。「インストール・パッケージの追加」パネルが表示されます。サポートされるプラットフォーム、サポートされるインストール・モードなど、各パッケージの情報を表示することもできます。これは Process Server などの一般出荷可能な製品でも、以前作成した既存の CIP でもかまいません。

### **この IIP で使用されるインストール・パッケージ:**

サポートされるインストール・パッケージ・リストから選択したパッケージを指定します。

### 製品名

ログ・エントリー、メッセージ、およびその他の場所で使用されるインストール・パッケージの表示名を指定します。このフィールドは読み取り専用です。

### パッケージ ID

インストール・パッケージを一意的に識別するコントリビューション ID を指定します。DIP については事前定義されており、変更することはできません。例えば、WebSphere Process Server 6.2 製品のコントリビューション ID は 6.2.0-WS-WBI です。追加されたこのパッケージの最初のコントリビューションは 6.2.0-WS-WBI\_1 となります。このフィールドは読み取り専用です。

使用可能なインストール・パッケージに対する作業には以下のいずれかのオプションを選択します。

ボタン  
変更

#### 結果として実行されるアクション

選択したインストール・パッケージのプロパティを変更できます。

削除

選択したインストール・パッケージを削除します。これによって、このパッケージに関連したすべての呼び出しも削除されます。

呼び出しの追加

このパッケージの呼び出しを IIP に追加し、「インストール・パッケージ呼び出しプロパティ」パネルを表示します。このボタンを使用して、この呼び出しのすべての使用可能なプロパティを変更できます。変更後のインストール・パッケージ呼び出しが、インストール・パッケージ呼び出しテーブルに表示されます。

### インストール・パッケージ呼び出し:

IIP のすべてのインストール・パッケージ呼び出しを指定します。

1 つのコントリビューションを複数回インストールできます。その呼び出しそれぞれを、**呼び出し** と言います。例えば、同じマシン上で異なるターゲット・ディレクトリーを使用して、WebSphere Process Server を複数回インストールするとします。この場合、1 つのコントリビューションが複数回呼び出されます。

以下の、各インストール・パッケージ呼び出しのプロパティのリストを参照してください。「**変更**」をクリックして、「インストール・パッケージ呼び出しプロパティ」パネルを表示して、それらの値を編集します。これらのプロパティの情報について詳しくは、このパネルのヘルプ文書を参照してください。

プロパティ	値
1 次呼び出し	呼び出しが IIP における 1 次呼び出しかどうかを指定します。

プロパティ	値
呼び出し ID	コントリビューション ID および生成された番号 (6.2.0-WS-WBI_1-1 など) に基づいて、このパッケージ呼び出しの固有 ID を指定します。この値は変更できません。
表示名	インストール・パッケージの名前を指定します。
抑止を許可する	IIP インストーラーがこのパッケージのインストールをスキップできるかどうかを指定します。
デフォルトでインストールする	パッケージをデフォルトでインストールするかどうかを指定します。
デフォルトのインストール・モード	インストールをサイレントまたは対話式のいずれの方法で行うかを指定します。
インストール・モードのオーバーライド	IIP インストーラーがデフォルト・インストール・モードをオーバーライドできるかどうかを指定します。
インストール・パスのオーバーライド	IIP インストーラーがターゲット・インストール・ディレクトリーをオーバーライドできるかどうかを指定します。
応答ファイルのオーバーライド	IIP インストーラーがインストール時に異なる応答ファイルを指定できるかどうかを指定します。
終了コードのオーバーライド	IIP インストーラーが終了コードのアクションをオーバーライドできるかどうかを指定します。
取り消しアクション	インストールが取り消された場合に実行するアクションを指定します。
一部成功アクション	インストールが部分的に成功した場合に実行するアクションを指定します。
障害時アクション	パッケージがインストールを失敗した場合に実行するアクションを指定します。

インストール・パッケージ呼び出しに対する作業には以下のいずれかのオプションを選択します。

**ボタン  
変更**

#### 結果として実行されるアクション

選択したパッケージ呼び出しのプロパティを編集します。「インストール・パッケージ呼び出しプロパティ」パネルが表示されます。

**削除**

選択したインストール・パッケージ呼び出しを削除します。

**すべて削除**

テーブル内のすべてのインストール・パッケージ呼び出しを削除します。すべてのインストール・パッケージ呼び出しを削除すると、IIP は無効になります。IIP には、少なくとも 1 つのパッケージ呼び出しが含まれていなければなりません。

**上へ移動**

選択したインストール・パッケージ呼び出しをリスト内で上へ移動し、そのパッケージがリスト内の下にある呼び出しよりも早くインストールされるようにします。パッケージを前提条件のパッケージよりも前に移動すると、警告が表示されます。

ボタン  
下へ移動

**結果として実行されるアクション**  
選択したインストール・パッケージ呼び出しをリスト内で下へ移動し、そのパッケージがリスト内の上にある呼び出しよりも後にインストールされるようにします。前提条件のパッケージをそれを前提とする他のパッケージよりも後ろに移動すると、警告が表示されません。

### **IIP インストール・パッケージの追加:**

このパネルを使用して、統合インストール・パッケージ (IIP) にインストール・パッケージを追加します。

このパネルは、「統合インストール・パッケージの構成」パネルで「インストーラーの追加」ボタンをクリックした場合、または同じパネルの IIP テーブルで 사용되는インストール・パッケージの隣にある「変更」ボタンをクリックした場合に表示されます。パッケージを、サポートされるインストール・パッケージ・タイプの事前定義リストから選択して追加できます。

#### **インストール・パッケージ:**

インストール・パッケージの名前を指定します。このフィールドは読み取り専用です。

#### **パッケージ ID:**

選択したインストール・パッケージを一意的に識別するコントリビューション ID を指定します。例えば、WebSphere Process Server 6.2 製品のコントリビューション ID は 6.2.0-WS-WBI です。追加されたこのパッケージの最初の呼び出しは 6.2.0-WS-WBI\_1 になります。このフィールドは読み取り専用です。

「インストール・パッケージ情報の表示」をクリックして、選択したインストール・パッケージの事前定義プロパティを表示します。

#### **インストール・パッケージのプロパティ:**

選択したインストール・パッケージのさまざまなプロパティを指定します。

以下の値がリストされます。

- **オペレーティング・システム**

選択したパッケージのオペレーティング・システムを指定します。接続モードで作業している場合、ローカル・マシンのオペレーティング・システムがリストされます。

- **アーキテクチャー**

選択したパッケージのプロセッサ・アーキテクチャーを指定します。接続モードで作業している場合、ローカル・マシンのアーキテクチャーがリストされます。

- **パッケージへのディレクトリー・パス**

選択されたパッケージ・コードへの絶対ディレクトリー・パスを指定します。このフィールドは、「変更」ボタンをクリックしてディレクトリー・パスを指定するまで空です。接続モードで作業している場合、「参照」をクリックしてパッケージを参照できます。

#### • パッケージ・サイズ

インストール・パッケージのサイズ (MB) を指定します。切断モードで作業している場合、このフィールドは空です。

「変更」をクリックして、パッケージへのディレクトリー・パスを指定します。このパネルで選択したインストール・パッケージの製品コードへのディレクトリー・パスを指定する必要があります。接続モードでインストーラーを追加する場合、ファイル・システム上で有効なインストーラーを含むパスを示す必要があります。

#### **IIP インストール・パッケージ情報:**

このパネルを使用して、統合インストール・パッケージ (IIP) で現在選択されているインストール・パッケージのプロパティーを確認します。

このパネルは、「インストールの追加」パネルで「インストール・パッケージ情報の表示」ボタンをクリックすると表示されます。このパネルには、選択したインストール・パッケージのすべての事前定義プロパティーが含まれます。このパネルは通知するだけで読み取り専用です。ここでは選択済みのコントリビューション・タイプのすべての特性をリストし、コントリビューション自体に必要な特定の構成可能アクションをリストするわけではありません。

#### **インストール・パッケージ:**

インストール・パッケージの名前を指定します。

#### **パッケージ ID:**

選択したインストール・パッケージを一意的に識別するコントリビューション ID を指定します。例えば、IBM WebSphere Process Server 6.2 製品のコントリビューション ID は 6.2.0-WS-WBI です。追加された最初のパッケージは 6.2.0-WS-WBI\_1 になります。この ID の最後に生成される番号は常に順次とは限りません。このフィールドは読み取り専用です。

#### **サポートされているプラットフォーム:**

選択したインストール・パッケージでサポートされているプラットフォームを指定します。これらのプラットフォームは、製品の詳細なシステム要件が記載されている Web ページにある、サポートされているプラットフォームのリストと同じです。

これらは製品でサポートされているプラットフォームですが、選択した製品コードでサポートされているとは限りません。例えば、前の「インストール・パッケージの追加」パネルで Process Server パッケージに、Windows バージョンの IBM WebSphere Process Server 6.2 製品を選択していた場合、そのパッケージを Linux プラットフォームにインストールすることはできません。そのパッケージを Linux プラットフォームにインストールするには、Linux バージョンの Process Server コードを含める必要があります。

### **サポートされるインストール・モード:**

選択したインストール・パッケージについて使用可能なインストール・モードを指定します。

選択したインストール・パッケージについて使用可能なインストール・モードを指定します。ほとんどの定義済みインストール・パッケージにはサイレント・モードと対話式モード (つまり、コマンド行インターフェースとインストール・ウィザード) があります。

### **結果値:**

選択したインストール・パッケージについて、さまざまな使用可能なロケーション・パラメーターを指定します (ターゲット・インストール・ディレクトリー、ログ・ディレクトリーなど)。

### **終了コード:**

選択したインストール・パッケージについて使用可能な終了コードを指定します。「インストール・パッケージ呼び出しプロパティ」パネルで、後からさまざまな終了コードに対してユーザー・アクションを指定できます。

### **IPP インストール・パッケージ・プロパティの変更:**

このパネルを使用して、選択したインストール・パッケージについて、インストール・パッケージ・ファイルへのディレクトリー・パスを指定します。

このパネルは、「インストール・パッケージの追加」パネルで、「**変更**」ボタンをクリックすると表示されます。このパネルでインストール・パッケージ・ファイルのディレクトリー・パスを指定します。

### **インストール・パッケージ**

選択済みのインストール・パッケージの名前を指定します。このフィールドは読み取り専用です。

### **プラットフォーム**

選択したパッケージのプラットフォームを指定します。接続モードで作業している場合、ローカル・マシンのプラットフォームがリストされます。切断モードで作業している場合、ターゲット・システムのプラットフォームがリストされます。このフィールドは読み取り専用です。

### **アーキテクチャー**

選択したパッケージのプロセッサ・アーキテクチャーを指定します。接続モードで作業している場合、ローカル・マシンのアーキテクチャーがリストされます。切断モードで作業している場合、ターゲット・システムのアーキテクチャーがリストされます。このフィールドは読み取り専用です。

### **インストール・パッケージ・ファイルへのディレクトリー・パス**

選択されたパッケージ・コードへの絶対ディレクトリー・パスを指定します。一般出荷可能な製品イメージまたは製品 CIP のルート・ディレクトリー・パスを入力します。接続モードで作業している場合、ディレクトリーを入力するか、または「参照」をクリックしてローカル・システムのディレクトリー・パスを参照します。切断モードで作業している場合、ターゲット・システムに対して相対的なパッケージ・コードへのパスを入力します。

### ディスク・スペース所要量

インストール・パッケージのサイズ見積もり (MB) を計算するには、「パッケージ・サイズの取得」ボタンをクリックします。この機能は、接続モードで作業している場合のみ使用可能です。

### IIP インストール・パッケージ呼び出しプロパティ:

このパネルを使用して、統合インストール・パッケージ (IIP) で現在選択されているコントリビューション呼び出しのプロパティを指定します。

このパネルには、新規のインストール・パッケージ呼び出しのすべてのプロパティ、または「統合インストール・パッケージの構成」パネルで現在選択されているインストール・パッケージ呼び出しのプロパティが含まれています。パッケージ情報の表示方法、パッケージのインストール方法、IIP インストーラーがプロパティをオーバーライドできるかどうかを制御できます。

### この呼び出しの表示名

IIP インストール時に表示されるインストール呼び出しの名前を指定します。デフォルト値はコントリビューションの汎用名です。

### この呼び出しの説明

IIP インストール時に表示されるインストール呼び出しの説明を指定します。デフォルト値はコントリビューションの汎用名です。

### 呼び出し ID

コントリビューションの呼び出しごとに変更できない固有 ID を指定します。コントリビューション ID は生成された番号 SubID と組み合わせて、この IIP 内で固有の呼び出し ID を形成します。例えば、Process Server 製品の最初の呼び出しの呼び出し ID は、6.2.0-WS-WBI\_1-1 のようになります。同じインストーラー・パッケージを使用して異なるディレクトリーにインストールした場合、呼び出し ID は 6.2.0-WS-WBI\_1-2 のようになります。

コントリビューション ID を使用することで、製品、エディション、およびバージョンによって、コントリビューション・パッケージを区別できます。また、SubId は、CIP などのコントリビューションの異なる「バリエーション」の区別に役立ちます。

### このインストール呼び出しを 1 次インストール呼び出しにする

IIP 作成時に、コントリビューション呼び出しの 1 つを 1 次 コントリビューション呼び出しに指定できます。これによって、コマンド行インストール中に特定の

ントリビューションについて `-iipOptionSet` オプションを省略できるため、オプション名と構文の観点から、IIP 全体の呼び出しをそのコントリビューションの呼び出しと仮想的に同じにすることができます。インストール中のコマンド行での指定で、`-iipOptionSet` オプションが前に存在しないあらゆるオプションは、1 次コントリビューションに属するとみなされます。これは、1 次コントリビューションを目的としたオプションを最初に、つまり他の目的のあらゆるコントリビューションよりも前に指定する必要があることを意味します。場合によっては、IIP ユーザーは他のコントリビューションに、他のオプションを一切渡す必要がないこともあります。オプションのデフォルト値が適正な場合、またはマクロ置き換えを使用して、あるコントリビューションから別のコントリビューションへのオプションのフローを制御している場合がそれに該当します。『IIP のインストール』および『IIP のサイレント・インストール』を参照してください。

### インストール抑止オプション:

ユーザーがこのパッケージのインストールをスキップできるかどうか、およびパッケージをデフォルトでインストールするかどうかを指定します。

### ユーザーはこのパッケージのインストールを抑止できる

IIP インストーラーがこのパッケージのインストールをスキップできるようにするにはこのチェック・ボックスを選択します。IIP インストーラーがこのパッケージのインストールをスキップできないようにするにはこのチェック・ボックスの選択を解除します。

### デフォルトでインストールにこのパッケージを選択する

デフォルトでインストールにこのパッケージを選択するには、このチェック・ボックスを選択します。このチェック・ボックスの選択を解除した場合、パッケージ呼び出しは表示されますが、インストールには選択されません。

### デフォルトのインストール・モード:

パッケージを対話式ウィザードを使用してインストールするか、サイレント・インストールを使用するか、および選択済みのインストールのモードをユーザーがオーバーライドできるかどうかを指定します。

IIP インストール中にこのパッケージ呼び出しのインストール・ウィザードを表示するには、「**対話式ウィザード**」ラジオ・ボタンを選択してください。このパッケージをサイレント・インストールする場合は、「**サイレント・インストール**」ラジオ・ボタンを選択してください。「統合インストール・ウィザードの設定」パネルでの IIP 全体のインストール・モードの選択と併せて、この選択を検討してください。例えば、IIP をサイレント・インストールするように選択しても、ここで「**対話式ウィザード**」ラジオ・ボタンを選択すると、このパッケージ呼び出しのインストール・ウィザードは表示されたままになります。デフォルトのインストール・モードは対話式です。

**注:** サイレント・インストールを選択しても、応答ファイルを選択しないと、「統合インストール・パッケージの構成」パネルに戻った際に警告メッセージが表示さ

れます。応答ファイルを指定するか、またはこのパッケージについて IIP インストーラーがインストール中に応答ファイルを指定することができるように選択してください。

IIP インストーラーがこのインストール・モードをオーバーライドできるようにするには、「**デフォルトのインストール・モードをユーザーがオーバーライドできる**」チェック・ボックスを選択します。

#### **デフォルトのインストール・ディレクトリー・パス:**

このインストール・パッケージ呼び出し用のデフォルトのインストール・ディレクトリー・パスを指定します。

リストされた、パッケージで使用可能なサポートされたプラットフォームおよびユーザー・タイプに基づいて、インストール・ディレクトリー・パスを指定できます。例えば、管理者権限を持つユーザーにあるインストール・パスを、管理者でないユーザーに別のパスを指定できます。選択されたアーキテクチャーおよびユーザー・タイプのインストール・ディレクトリー・パスの値を変更するには、「**変更**」をクリックします。ここで入力したディレクトリー・パスは、インストール・ウィザードでデフォルトとして使用されます。

インストール中に IIP インストーラーがターゲット・インストール・ディレクトリーの値を変更できるようにする場合は、「**インストール中にユーザーがインストール・ディレクトリー・パスを変更できる**」チェック・ボックスを選択します。このチェック・ボックスはデフォルトで選択済みです。

#### **応答ファイル:**

サイレント・インストール中に使用するサイレント・インストール応答ファイルのロケーションを指定します。

リストされた、パッケージで使用可能なサポートされたプラットフォームおよびユーザー・タイプに基づいて応答ファイルを指定できます。例えば、管理者権限を持つユーザーに応答ファイルを、管理者でないユーザーに別の応答ファイルを指定できます。選択されたアーキテクチャーおよびユーザー・タイプのサイレント・インストール応答ファイルを入力するには、「**変更**」をクリックします。サイレント・インストールを選択した場合、応答ファイルは必須です。

インストール中に IIP インストーラーが別の応答ファイルを指定できるようにするには、「**インストール中にユーザーが別の応答ファイルを指定できる**」チェック・ボックスを選択します。

#### **終了コードのアクション:**

パッケージ・インストール中にコントリビューションによって生成された終了コードに応じて実行するアクションを指定します。

IIP インストーラーによって認識される 3 つの主要なインストール終了コードがあり、これによってユーザーは残りの IIP コントリビューション・インストールを制御できます。

- 「**インストールはユーザーによって取り消された**」

ユーザーは選択済みのパッケージ呼び出しのインストールをウィザードまたはパッケージ・コマンド行のいずれかで取り消しました。

- 「インストールは部分的に成功した」

選択済みのパッケージ呼び出しのインストールは正常終了しましたが、インストール後アクションの一部が失敗しました。リカバリー可能な状況の可能性も、パッケージの再インストールが必要な可能性もあります。

- 「インストールは失敗した」

選択済みパッケージ呼び出しのインストールは失敗しました。

パッケージによって生成されたそれぞれの終了コードに応じて実行するアクションを、以下の中から 1 つ指定できます。

- 「インストールを停止するのか続行するのかをユーザーに質問する」

IIP インストーラー・ウィザードに制御が戻り、何らかのアクションを実行するようプロンプトが出されます。例えば、インストール対象の残りのコントリビューションの選択を変更したり、インストールを停止したり、現在のパッケージ・インストールを変更することなくインストールを続行することができます。

- 「統合インストール・パッケージのインストールを続行する」

終了コードは無視され、IIP インストール・プロセスは、次のインストール・パッケージ呼び出しを続行します。

- 「統合インストール・パッケージのインストールを停止する」

IIP インストール・プロセスを停止します。

インストール中に IIP インストーラーが終了コードのアクションを変更できるようにする場合は、「インストール中にユーザーが終了コードを変更できる」チェック・ボックスを選択します。

### **IIP デフォルトのインストール・ディレクトリー・パスの変更:**

このパネルを使用して、選択したインストール・パッケージのターゲット・インストール・ディレクトリー・パスを指定します。

このパネルは、「インストール・パッケージ呼び出しプロパティー」パネルの「デフォルトのインストール・ディレクトリー・パス」タブで、「変更」ボタンをクリックすると表示されます。

### **プラットフォーム**

選択したパッケージのプラットフォームを指定します。接続モードで作業している場合、ローカル・マシンのプラットフォームがリストされます。切断モードで作業している場合、ターゲット・システムのプラットフォームがリストされます。このフィールドは読み取り専用です。

### **アーキテクチャー**

選択したパッケージのプロセッサ・アーキテクチャーを指定します。接続モードで作業している場合、ローカル・マシンのアーキテクチャーがリストされます。切

断モードで作業している場合、ターゲット・システムのアーキテクチャーがリストされます。このフィールドは読み取り専用です。

### ユーザー・タイプ

選択したパッケージをインストールするユーザーのタイプを指定します。選択肢は、Windows プラットフォームの、ルートとルート以外、または管理者と管理者以外です。

### デフォルトのインストール・ディレクトリー・パス

ターゲット・インストール・ディレクトリー・パスを指定します。デフォルト値を受け入れることも、手動でディレクトリーを入力することもできます。接続モードで作業している場合、ディレクトリーを入力するか、または「参照」をクリックしてローカル・システムのディレクトリー・パスを参照します。切断モードで作業している場合、ターゲット・システムに対して相対的なディレクトリーへのパスを入力します。

インストール・ディレクトリーのデフォルト値は、ターゲット・プラットフォームおよびユーザー・タイプに基づいています。ターゲット・システムによっては、ルート以外または管理者以外のユーザーがソフトウェアをインストールできる場所が制限されることに注意してください。両方のユーザー・タイプにディレクトリーを指定できます。

また、`$RESV{invocationID:installLocation}` というマクロ値を使用して、別のコントリビューションのインストール・ディレクトリーをフィーチャー・パック・コントリビューションに使用することもできます。例えば、Process Server コントリビューションと同じロケーションにフィーチャー・パックをインストールする場合、フィーチャー・パックのインストール・ロケーションとして、マクロ `$RESV{6.2.0-WS-WPS_1-1::installLocation}` を使用できます。ここで `6.2.0-WS-WPS_1-1` は Process Server パッケージの呼び出し ID です。

Windows および Linux のデフォルトの例については、以下の表を参照してください。

表 164. デフォルトのインストール・ディレクトリー・パスの値

オペレーティング・システム	アーキテクチャー	ユーザー・タイプ	インストール・ディレクトリー・パス
Microsoft Windows	Intel IA32	管理者以外	C:\Program Files\IBM\WebSphere\ProcServer
Microsoft Windows	Intel IA32	管理者	C:\Program Files\IBM\WebSphere\ProcServer

表 164. デフォルトのインストール・ディレクトリー・パスの値 (続き)

オペレーティング・システム	アーキテクチャー	ユーザー・タイプ	インストール・ディレクトリー・パス
Linux	Intel IA32	ルート以外	<code>\$JP{user.home}/IBM/</code> <code>WebSphere/ProcServer</code>  インストール・ディレクトリーはマクロを使用して構成され、そのマクロはターゲット・インストール・マシンで指定された現在のユーザーのホーム・ディレクトリーを使用します。\$JP マクロは、 <i>user.home</i> Java プロパティを使用して、現在のユーザーのホーム・ディレクトリーを解決することを示しています。
Linux	Intel IA32	ルート	<code>/opt/IBM/WebSphere/</code> <code>ProcServer</code>

### HTTP デフォルトのサイレント・インストール応答ファイルの変更:

このパネルを使用して、選択したインストール・パッケージのサイレント・インストール応答ファイルを指定します。

このパネルは、「インストール・パッケージ呼び出しプロパティ」パネルの応答ファイルのタブで、「変更」ボタンをクリックすると表示されます。

### プラットフォーム

選択したパッケージのプラットフォームを指定します。接続モードで作業している場合、ローカル・マシンのプラットフォームがリストされます。切断モードで作業している場合、ターゲット・システムのプラットフォームがリストされます。このフィールドは読み取り専用です。

### アーキテクチャー

選択したパッケージのプロセッサ・アーキテクチャーを指定します。接続モードで作業している場合、ローカル・マシンのアーキテクチャーがリストされます。切断モードで作業している場合、ターゲット・システムのアーキテクチャーがリストされます。このフィールドは読み取り専用です。

### ユーザー・タイプ

選択したパッケージをインストールするユーザーのタイプを指定します。選択肢は、Windows プラットフォームの、ルートとルート以外、または管理者と管理者以外です。両方のユーザー・タイプに応答ファイルを指定できます。

## サイレント・インストール応答ファイルのディレクトリー・パスおよびファイル名 (Directory path and file name of the silent installation response file)

サイレント・インストール応答ファイルのパスとファイル名を指定します。接続モードで作業している場合、ディレクトリー・パスとファイル名を入力するか、または「参照」をクリックしてファイルを参照します。切断モードで作業している場合、ターゲット・システムに対して相対的なディレクトリー・パスおよびファイル名を入力します。

応答ファイルは IIP ルート・ディレクトリーの相対ディレクトリーに保管されます

IIP のルート・ディレクトリーに対して相対的な IIP で応答ファイルをコピーする場所を指定します。

### IIP 追加ファイル:

このパネルを使用して、統合インストール・パッケージ (IIP) にファイルとディレクトリーを追加します。

例えば、IIP のインストール・パッケージに、README ファイルまたはその他の追加情報を含めることができます。Installation Factory エンジンには、これらのファイルを IIP 生成時に IIP にコピーします。しかし、インストール時には追加処理は行われません。この振る舞いは、組み込み済みのスクリプトを実行できる、カスタマイズ・インストール・パッケージ (CIP) の振る舞いとは対照的です。パッケージでスクリプトを実行する場合は、最初に CIP にスクリプトを組み込んでから、その CIP を IIP に組み込む必要があります。

切断モードで作業している場合、ファイルまたはディレクトリーを参照できないため、手動でパスを指定する必要があります。

### ファイルの追加

IIP に追加するファイルを指定します。

### ディレクトリーの追加

IIP に追加するディレクトリーを指定します。すべてのサブディレクトリーを含めるには、「サブディレクトリーを含む」を選択します。

### 変更

項目を選択して「変更」をクリックし、ファイル・パスとファイル名またはディレクトリー・パスとディレクトリー名を変更します。

### 削除

選択したファイルとディレクトリーを IIP から除去します。

### ファイル名

ファイル名を指定します。

### ディレクトリー・パス

ファイルが格納されているディレクトリーを指定します。

### **IIP 作成情報:**

このパネルを使用して、統合インストール・パッケージ (IIP) の組織および説明を指定します。

IIP インストール・ウィザードの「ようこそ」パネルでユーザーが確認できる IIP の組織および説明の情報を指定できます。「ようこそ」パネルから「製品情報」をクリックすると、1 つのパネルが表示され、そこにはビルド定義ファイルの作成中に入力したすべての情報 (ID、バージョン、組織、および説明など) が含まれています。パッケージ ID 情報は、ビルド定義ウィザードの最初の方にある、「パッケージ ID」パネルで収集されます。

#### **組織**

組織の名前を指定します。

#### **説明**

IIP の説明を指定します。

### **IIP プレビュー:**

ビルド定義ウィザードでは、ユーザーが選択したすべての内容を確認するための要約パネルを参照できます。

ビルド定義ウィザードを接続モードで実行する場合、処理エンジンを開始して統合インストール・パッケージ (IIP) を作成することもできます。ビルド定義ウィザードを切断モードで実行する場合は、ビルド定義ファイルをターゲット・システムにコピーしてから、ifcli コマンドを使用して処理エンジンを開始してください。

### **ビルド定義ファイル:**

ビルド定義ウィザードでは、処理エンジンへの入力ファイルとして XML ビルド定義ファイルを作成します。処理エンジンはビルド定義ファイルを使用して、IIP に含めるすべてのコンポーネントを見つけます。

接続モードで作業し、ビルド定義ウィザードと処理エンジンが同じマシン上で稼働する場合は、「**ビルド定義ファイルを保存し、統合インストール・パッケージを生成する**」ラジオ・ボタンを選択します。そうではなく、別のマシンでビルド定義ファイルを使用する場合、「**ビルド定義ファイルのみを保存する (Save the build definition file only)**」ラジオ・ボタンを選択してファイルを保存します。

**注:** ビルド定義ウィザードでコントリビューションを指定しなかった場合、「**ビルド定義ファイルを保存し、統合インストール・パッケージを生成する**」オプションは使用不可になります。

### **推定サイズとスペースの表示**

生成される IIP のサイズを見積もるには、「**推定サイズとスペースの表示**」をクリックします。このオプションは接続モードでのみ使用可能です。

「終了」をクリックして、切断モードでビルド定義ファイルを保存するか、またはファイルを保存して、接続モードで実行するときに IIP の作成を開始します。

状況標識がパネルの最後に表示されます。処理が完了すると、完了メッセージが表示され、Installation Factory コンソールに戻ります。

#### **切断モード処理:**

切断モードで作業している場合、「ビルド定義ファイルを保存し、統合インストーラー・パッケージを生成する」ラジオ・ボタンは使用不可です。

IIP プレビュー・パネルにビルド定義ファイルのロケーションが表示されます。「終了」をクリックして、ビルド定義ファイルを保存し、Installation Factory コンソールに戻ります。

ビルド定義ファイルを、処理エンジンを持つシステムにコピーします。  
`install_factory_root/bin/ifcli` スクリプトで処理エンジンを開始します。

処理エンジンは、ビルド定義ファイルを読み取り、IIP を作成します。

### **IIP インストーラー・プロパティーの変更**

このパネルを使用して、選択したインストーラー・パッケージのインストーラー・プロパティーを編集します。

このパネルは、「インストーラーの選択」パネルで選択済みのインストーラー・パッケージについて、「変更」ボタンをクリックすると表示されます。

**制約事項:** 変更できるプロパティーは、IIP 作成者が IIP 作成時に編集可能として指定したプロパティーのみです。

#### **インストーラー・パッケージ名:**

インストーラー・パッケージの表示名を指定します。このフィールドは読み取り専用です。

#### **デフォルトのインストーラー・モード:**

インストーラー・パッケージがサイレント・インストールを行うのか、インストーラー・ウィザードを起動するのかを指定します。サイレント・インストールを選択した場合、「応答ファイルのディレクトリー・パスとファイル名」フィールドで応答ファイルを指定する必要があります。

#### **インストーラー・ディレクトリー・パス:**

選択したインストーラー・パッケージについてターゲット・インストール・ディレクトリー・パスを指定します。ディレクトリーを入力するか、「参照」をクリックしてローカル・システム上のディレクトリー・パスを参照します。パス全体を手動で指定することも、マクロ値を使用することもできます。

`$RESV{invocationID:installLocation}` というマクロ値を使用して、別のコントリビューションのインストーラー・ディレクトリーをフィーチャー・パック・コントリビューションに使用できます。例えば、Process Server コントリビューションと同じロケーションにフィーチャー・パックをインストールする場合、フィーチャー・パックの

インストール・ロケーションとしてマクロ \$RESV{6.2.0-WS-WBI\_1-1:installLocation}を使用できます。ここで 6.2.0-WS-WBI\_1-1 は Process Server パッケージの呼び出し ID です。

#### 応答ファイルのディレクトリー・パスとファイル名:

選択したインストール・パッケージについて応答ファイルのロケーションを指定します。ディレクトリー・パスおよびファイル名を入力するか、「参照」をクリックしてローカル・システム上のファイルを参照します。パス全体を手動で指定することも、マクロ値を使用することもできます。詳しくは、IIP マクロ置き換えを参照してください。

応答ファイルのロケーションが、IIP 作成者によって IIP 作成中に指定されなかった場合、デフォルト値の \$LOC{IIP} になります。これはマクロで、IIP のルート・ディレクトリーに解決されます。この値を使用してディレクトリー・パスを指定するか、絶対パスを指定できます。

#### 終了コードのアクション:

パッケージ・インストール中に生成された終了コードに応じて実行するアクションを指定します。

IIP インストーラーによって認識される 3 つの主要なインストール終了コードがあり、これによってユーザーは残りの IIP コントリビューション・インストールを制御できます。

- 「インストールはユーザーによって取り消された」

ユーザーは選択済みのパッケージ呼び出しのインストールをウィザードまたはパッケージ・コマンド行のいずれかで取り消しました。

- 「インストールは部分的に成功した」

選択済みのパッケージ呼び出しのインストールは正常終了しましたが、インストール後アクションの一部が失敗しました。リカバリー可能な状況の可能性も、パッケージの再インストールが必要な可能性もあります。

- 「インストールは失敗した」

選択済みパッケージ呼び出しのインストールは失敗しました。

パッケージによって生成されたそれぞれの終了コードに応じて実行するアクションを、以下の中から 1 つ指定できます。

- 「インストールを停止するのか続行するのかをユーザーに質問する」

IIP インストーラー・ウィザードに制御が戻り、何らかのアクションを実行するようプロンプトが出されます。例えば、インストール対象の残りのコントリビューションの選択を変更したり、インストールを停止したり、現在のパッケージ・インストールを変更することなくインストールを続行することができます。

- 「統合インストール・パッケージのインストールを続行する」

終了コードは無視され、IIP インストール・プロセスは、次のインストール・パッケージ呼び出しを続行します。

- 「統合インストール・パッケージのインストールを停止する」

IIP インストール・プロセスを停止します。

## IIP のサイレント・インストール

統合インストール・パッケージ (IIP) をサイレントにインストールするには、IIP インストール・ウィザードを使用しないで、IIP をコマンド行からインストールします。組み込まれているインストール・コントリビューションは、コントリビューションの設定に基づいてサイレントにインストールすることはできません。

### 始める前に

Installation Factory を使用して IIP を作成してから、IIP をインストールします。IIP の作成について詳しくは、717 ページの『統合インストール・パッケージの開発およびインストール』を参照してください。

IIP インストール・ウィザードは、IIP の実行時に表示されないように完全に抑制することができます。コントリビューション呼び出しは、IIP の作成時に Installation Factory ユーザーが指定した組み込みオプションを使用して呼び出されるか、IIP コマンド行で指定したオプションを使用して呼び出されます。このオプションは、組み込みオプションをオーバーライドします (IIP 作成者がオーバーライドを禁止していない場合)。IIP ウィザードが表示されないとしても、IIP 内の各コントリビューションは、IIP の作成時に選択したオプションに基づいて、単独で表示される場合もあれば表示されない場合もあることに注意してください。この場合、IIP の完全なサイレント・インストールは、IIP インストール・ウィザードとコントリビューション・インストール・ウィザードの両方が存在しないことを意味します。

### このタスクについて

この手順を使用して、製品のサイレント・インストールを実行します。

#### 手順

1. エンドツーエンド・サイレント・インストールを実行する場合は、すべてのコントリビューションがサイレントに実行されるように構成しておく必要があります。

コントリビューションのさまざまなインストール・オプションを構成する方法について詳しくは、724 ページの『ビルド定義の作成と IIP の生成』を参照してください。混合モードでインストールするよう、IIP を生成することもできます。つまり、コントリビューションの一部をウィザードでインストールし、別のコントリビューションをサイレントにインストールすることができます。例えば、フィーチャー・パック・コントリビューションをサイレントにインストールし、WebSphere Process Server をインストールするコントリビューションをウィザードでインストールするようにすることができます。

2. 以下の場所にある `install` コマンドを使用して、IIP をサイレントにインストールできます。

- `AIX` `HP-UX` `Linux` `Solaris` `IIP_home/bin/install.sh`
- `Windows` `IIP_home¥bin¥install.exe`

**注:** **Vista** Microsoft Windows Vista で、標準のユーザー特権を使用してインストールを起動すると、管理者ユーザーであるかどうかにかかわらず、続行する前に、管理者特権への昇格を求めるプロンプトが出されます。以下の方法でインストールを実行することにより、このプロンプトが表示されないようにすることができます。

- install.exe を右クリックします。
- 「**管理者として実行 (Run As Administrator)**」をクリックします。

非管理者ユーザーの場合は、ユーザー ID およびパスワードのプロンプトが出された場合に、別のステップを実行する必要があります。

コマンド行で直接指定したオプションと、応答ファイルで指定したオプションを組み合わせ、コントリビューションを呼び出すことができます。詳しくは、753 ページの『IIP デフォルトのサイレント・インストール応答ファイルの変更』を参照してください。ただし、コントリビューション・オプションをコマンド行に渡すと、IIP インストーラーは、特定のコントリビューションの応答ファイルに指定されているすべての オプションを無視します。例えば、コントリビューションのインストール・ロケーションは、IIP の作成中に自分で指定することができます。IIP をインストールするユーザーも応答ファイルで指定することができます。コマンド行で直接指定したインストール・ロケーションは、コントリビューションが呼び出されてオプションが処理されるときに、IIP の作成中に設定したインストール・ロケーションをオーバーライドします。さらに、IIP の作成中にそのコントリビューションに指定した他のすべてのオプションは、これ以降無視されます。

インストール中は、以下のオプションを使用できます。オプションの値にスペースが含まれている場合は、単一引用符で囲む必要があります。コマンド行でのみ使用できるオプションは、そのことが明記されています。

表 165. IIP インストール・オプション

オプション	値	説明	例
-help  Windows -?		IIP install コマンドで使用可能なすべてのパラメーターを表示します。このオプションは、コマンド行でのみ使用できます。	-help

表 165. IIP インストール・オプション (続き)

オプション	値	説明	例
-iipResponseFile	<IIP 応答ファイルへのパス >	<p>応答ファイルの場所を指定します。IIP を呼び出すときにコマンド行で指定できるすべてのオプションは、IIP 応答ファイルにも指定できます (-iipResponseFile オプションは除く)。これには、このセクションで説明されている最上位 IIP オプションとコントリビューション固有のオプションも含まれます。応答ファイル内のオプションの順序は重要です。IIP UI によって直接サポートされる最上位オプションを最初に指定し、「プライマリー」コントリビューション (存在する場合) のオプションを 2 番目に指定する必要があります。次に、他のコントリビューションのオプション (必要な場合) を -iipOptionSet オプションで区切って指定する必要があります。応答ファイル内の番号記号 (#) で始まる行は、コメントと見なされて無視されます。</p> <p>サンプルの応答ファイルと、その使用方法について詳しくは、753 ページの『IIP デフォルトのサイレント・インストール応答ファイルの変更』を参照してください。このオプションは、コマンド行でのみ使用できます。</p>	-iipResponseFile=D:¥myIIPResponsefile.
-iipLogfile	<ログ・ファイルへのパス>	IIP ログ・ファイルのディレクトリー・パスおよび名前を指定します。	-iipLogfile=C:¥mylog.txt
-iipLogLevel	<ul style="list-style-type: none"> <li>• all</li> <li>• config</li> <li>• info</li> <li>• error</li> <li>• warning</li> <li>• severe</li> <li>• off</li> </ul>	ログ・ファイルの冗長度を指定します。デフォルト値は info です。	-iipLogLevel=info

表 165. IIP インストール・オプション (続き)

オプション	値	説明	例
-iipTracefile	<トレース・ファイルへのパス>	トレース・ファイルのディレクトリー・パスおよび名前を指定します。	-iipTracefile=C:\¥mytrace.xml
-iipTracelevel	<ul style="list-style-type: none"> <li>• all</li> <li>• fine</li> <li>• finer</li> <li>• finest</li> <li>• off</li> </ul>	トレース・ファイルの冗長度を指定します。デフォルト値は off です。	-iipTracelevel=fine
-iipNoGUI		<p>IIP GUI を表示しないで IIP を実行します。IIP の作成時に、IF ユーザーは、IIP GUI がデフォルトで表示されるように指定することができます。IIP ユーザーは、このオプションを指定して、デフォルトをオーバーライドすることができます。ただし、IF ユーザーは、デフォルトをオーバーライドできないように指定することもできます。この場合、このオプションを使用するとエラーになります。このオプションは、IIP 内のコントリビューションをサイレント・モードで実行するのかどうかを制御するわけではないため (これはコントリビューション呼び出しに指定されるオプションによって決まります)、意図的に「-silent」という名前になっていません。「-iipNoGUI」という名前の方が適切です。</p>	-iipNoGUI

表 165. IIP インストール・オプション (続き)

オプション	値	説明	例
-iipShowGUI		<p>IIP を呼び出すときに IIP GUI を表示します。IIP の作成時に、IF ユーザーは、IIP GUI がデフォルトで表示されないように指定することができます。IIP ユーザーは、このオプションを指定して、デフォルトをオーバーライドすることができます。ただし、IF ユーザーは、デフォルトをオーバーライドできないように指定することもできます。この場合、このオプションを使用するとエラーになります。</p> <p><b>注:</b> このオプションを使用すると、GUI インストーラーがサポートされないオペレーティング・システムではエラーになります。</p>	-iipShowGUI
-iipUserType	<root または nonroot>	<p>ユーザーが <i>root</i> または <i>nonroot</i> のいずれであるかを指定します。IIP 作成者は、IIP インストーラーのユーザー・タイプに基づいてコントリビューションに渡すオプションの値を変えることができるため、これは重要な設定です。デフォルト値は <i>root</i> です。</p>	-iipUserType=nonroot

表 165. IIP インストール・オプション (続き)

オプション	値	説明	例
-iipOptionSet	<Invocation_ID>	<p>特定のコントリビューション呼び出しを参照します。これ以降のすべてのオプションは、-iipOptionSet オプションが別途指定されるまで、指定したコントリビューションに提供されるものと想定されます。</p> <p>IIP のインストール時に、-iipOptionSet オプションを先頭に付けずにオプションを指定すると、それらのオプションはすべてプライマリー・コントリビューション呼び出しに属すると見なされます。IIP の呼び出しは、オプションの名前と構文に関しては、プライマリー・コントリビューション呼び出しと実質的に同じです。</p> <p><b>注:</b> IIP を GUI モードでインストールする場合は、すべてのコントリビューション・オプションが無視されます。</p>	-iipOptionSet=6.2.0-WS-WBI_1-1 ?OPT installLocation=C:¥ myLocation
-iipDisable	<Invocation_ID1, Invocation_ID2,...>	<p>IIP のインストール中に、指定したコントリビューションをインストールしません。IIP の作成時に、ユーザーは、IIP のインストール時にデフォルトで抑制されるコントリビューションを指定することができます。この設定がオーバーライド可能かどうかを指定することができます。IIP 作成者が抑制をオーバーライドできないと指定した場合は、このオプションをインストール中に使用するとエラーになります。ID はコンマで区切ります。</p>	-iipDisable=6.2.0-WS-WBI_1-1, 6.2.0-WS-WBI_1-2

- インストール後に、IIP および各コントリビューションのログおよび/またはトレース・ファイルを確認できます。詳細なロギング情報については、製品の資料を参照してください。

IIP のログ・ファイルおよびトレース・ファイルのデフォルトの場所は、-iipLogfile または -iipTrace パラメーターを使用して別のパスを指定しない限り、以下のとおりです。

- **AIX** **HP-UX** **Linux** **Solaris** `IIP_home/iip/logs`
- **Windows** `IIP_home\iip\logs`

## タスクの結果

統合インストール・パッケージのサイレント・インストールが完了しました。

## 例

WebSphere Process Server バージョン 6.2 パッケージのサイレント・インストールの例を以下に示します。IIP インストーラーは、指定した応答ファイルを使用してサイレントに起動し、プロセス・サーバーのコントリビューションを、指定したディレクトリーにサイレントにインストールします。サンプルの応答ファイルを編集して、ログおよびトレースの場所を変更したり、他のパラメーターを組み込んだりすることができます。コントリビューションのインストール・ロケーションが指定されているため、既にコントリビューションに指定されていた他のすべてのオプションは無視されます。

```
install -iipNoGUI -iipOptionSet=6.2.0-WS-WBI_1-1 -OPT installLocation=
C:\Program Files\IBM\WebSphere\ProcServer -options D:\WPS\responseFile.txt -silent
```

## 次のタスク

注: 組み込まれているコントリビューションのインストールが失敗した場合は、そのコントリビューションの応答ファイル (全体の IIP 応答ファイルとは異なる) を編集する必要があります。デフォルトで、コントリビューションの応答ファイルは、`IIP_home/ResponseFiles` にあります。

注: IIP のインストール中に、Eclipse の重要なロギング情報が含まれている可能性のあるワークスペース・ファイルが、以下のディレクトリーに作成されます。

- **Windows** `%USERPROFILE%\com.ibm.ws.install.factory.iip`
- **AIX** **HP-UX** **Linux** **Solaris** `$HOME/.com.ibm.ws.install.factory.iip`

これらのファイルを定期的に手動で削除して、ディスク・スペースを解放できます。

---

## Installation Factory ツールのアンインストール

Installation Factory ツールをシステムからアンインストールするには、単に Installation Factory が置かれているフォルダーを削除します。

### このタスクについて

Installation Factory をシステムからアンインストールするには、この Installation Factory が入っているフォルダーをオペレーティング・システムから除去します。

### 手順

1. 作成したビルド定義およびカスタマイズ・インストール・パッケージで、将来使用する可能性があるものは、バックアップを取ります。

2. Installation Factory が置かれているディレクトリーを除去します。このツールは、Installation Factory を最初に解凍したディレクトリーにあります。

**注:** Installation Factory をアンインストールする前に、作成したファイル (ビルド定義ファイルなど) のバックアップを取る必要があります。



---

## 第 15 章 インストールおよび構成のトラブルシューティング

WebSphere Process Server のインストールおよび構成に失敗したときに、問題を診断できます。

### このタスクについて

インストーラー・プログラムは、1 次ログ・ファイルの最後に以下の標識を記録します。

- INSTCONFSUCCESS: インストールは正常に終了しました。
- INSTCONFPARTIALSUCCESS: インストールは部分的に正常に終了しました。一部のインストール操作は失敗しましたが、再試行可能です。
- INSTCONFFAILED: インストールは正常に終了しませんでした。リカバリーは不可能です。

1 次ログ・ファイルの log.txt は、i5/OS、Linux、および UNIX プラットフォームでは `install_root/logs/wbi/install/log.txt` に、Windows プラットフォームでは `install_root¥logs¥wbi¥install¥log.txt` に格納されています。この `install_root` は、製品のインストール先ディレクトリーです。

結果が INSTCONFPARTIALSUCCESS または INSTCONFFAILED の場合は、以下のステップを実行して問題の分析を続行します。(再インストールの前にインストールされた部分をアンインストールする方法の詳細については、『アンインストールに失敗した後の再インストールの準備』を参照してください。)

### 手順

1. インストール・プロセスからのエラー・メッセージを読みます。

説明については、『エラー・メッセージ: インストールおよびプロファイルの作成と拡張』を参照してください。メッセージが、記載されているものと対応する場合は、問題を訂正し、インストールされた部分をクリーンアップして、再インストールを試みます。

2. 部分的な成功または失敗の原因となった製品を判別します。Linux、UNIX、および i5/OS プラットフォームの場合は `install_root/logs/wbi/install` ディレクトリー、Windows プラットフォームの場合は `install_root¥logs¥wbi¥install¥` ディレクトリーにある `install_error.log` ファイルを調べます。このファイルには、WebSphere Application Server Network Deployment、WebSphere Feature Pack for Web Services、および WebSphere Process Server のインストール用のログ・ファイルから取り出したエラー、警告、およびインストール結果が記録されています。プロファイルの作成が失敗した場合、またはインストール中に部分的に成功した場合も、結果がプロファイル・ログ・ファイルから取り出され、このファイルに入れられます。

**ヒント:** `install_root/logs/wbi/install` ディレクトリーにファイルが存在しない場合は、インストールは早い処理段階で失敗しています。`user_home/wbilogs` のログ・ファイルを参照してください。

正しくインストールされなかった製品に基づいて、以下のいずれかのタスクを実行します。

- WebSphere Application Server Network Deployment が正しくインストールされなかった場合は、ステップ 3 に進みます。
  - WebSphere Feature Pack for Web Services が正しくインストールされなかった場合 (WebSphere Application Server Network Deployment は正しくインストールされた場合) は、ステップ 4 に進みます。
  - WebSphere Process Server が正しくインストールされなかった場合 (WebSphere Application Server Network Deployment および WebSphere Feature Pack for Web Services は正しくインストールされた場合) は、ステップ 5 に進みます。
3. WebSphere Application Server Network Deployment のインストールが成功しなかった場合は、install\_error.log ファイルにエラーがないか調べます。問題を修正するための十分な情報がこのファイルで提供されていない場合は、WebSphere Application Server Network Deployment インフォメーション・センターにある『インストールのトラブルシューティング』を参照し、そこにある情報を使用して問題を修正してから WebSphere Process Server の再インストールを試行してください。

**ヒント:** WebSphere Process Server インストールの一部としての WebSphere Application Server Network Deployment のインストール中に問題が発生した場合、インストール・プロセスは続行されず、エラー・メッセージが表示されません。

4. WebSphere Feature Pack for Web Services のインストールが成功しなかった場合 (WebSphere Application Server Network Deployment のインストールは成功した場合) は、install\_error.log ファイルにエラーがないか調べます。問題を修正するための十分な情報がこのファイルで提供されていない場合は、WebSphere Application Server Network Deployment インフォメーション・センターにある『Web サーバー・プラグインのインストールおよび除去のトラブルシューティング』を参照し、そこにある情報を使用して問題を修正してから WebSphere Process Server の再インストールを試行してください。

**ヒント:** WebSphere Process Server インストールの一部としての WebSphere Feature Pack for Web Services のインストール中に問題が発生した場合、インストール・プロセスは続行されず、エラー・メッセージが表示されます。

5. WebSphere Process Server のインストールが成功しなかった場合 (WebSphere Application Server Network Deployment および WebSphere Feature Pack for Web Services のインストールは成功した場合) は、install\_error.log ファイルにエラーがないか調べます。問題を修正するための十分な情報がこのファイルで提供されていない場合は、WebSphere Process Server の他のインストール・ログ・ファイルを調べてください。これらのログ・ファイルの名前、存在場所、および説明について詳しくは、『インストールとプロファイル作成のログ・ファイル』を参照してください。以下の順序でログ・ファイルを確認してください。

i5/OS

#### i5/OS プラットフォームの場合:

- a. `install_root/logs/wbi/install` ディレクトリーにあるログ・ファイル

- b. *user\_home/wbilogs* ディレクトリーにあるログ・ファイル  
(*install\_root/logs/wbi/install* にファイルがない場合)
- c. *user\_data\_root/profileRegistry/logs/manageprofiles/profile\_name\_create\_error.log*
- d. *user\_data\_root/profileRegistry/logs/manageprofiles/profile\_name\_create.log* および *user\_data\_root/profileRegistry/logs/manageprofiles/pmt.log*
- e. *install\_root/logs/wbi/installconfig.log* (製品の正しい動作を妨げている可能性のある構成の問題を示しています)。失敗した構成スクリプトの診断については、781 ページの『失敗した Ant 構成スクリプトの診断』を参照してください。
- f. インストール操作によって生成される追加のログ・ファイルまたはトレース・ファイル。*install\_root/logs/wbi/install* で、インストール・プロセスの間に生成されたトレース・ファイルを探します。*user\_data\_root/profileRegistry/logs/manageprofiles/profile\_name* を参照して、プロファイルの作成または拡張で生成されたファイルを探します。( *install\_root* および *user\_data\_root* の場所について詳しくは、615 ページの『製品、プロファイル、およびツールのデフォルト・インストール・ディレクトリー』を参照してください。) これらのファイルは、主に IBM 技術サポートが使用するためのものです。

Linux

UNIX

#### Linux および UNIX プラットフォームの場合:

- a. *install\_root/logs/wbi/install* ディレクトリーにあるログ・ファイル
- b. *user\_home/wbilogs* ディレクトリーにあるログ・ファイル  
(*install\_root/logs/wbi/install* にファイルがない場合)
- c. *install\_root/logs/manageprofiles/profile\_name\_create\_error.log*
- d. *install\_root/logs/manageprofiles/profile\_name\_create.log* および *install\_root/logs/manageprofiles/pmt.log*
- e. *install\_root/logs/wbi/installconfig.log* (製品の正しい動作を妨げている可能性のある構成の問題を示しています)。失敗した構成スクリプトの診断については、781 ページの『失敗した Ant 構成スクリプトの診断』を参照してください。
- f. インストール操作によって生成される追加のログ・ファイルまたはトレース・ファイル。*install\_root/logs/wbi/install* で、インストール・プロセスの間に生成されたトレース・ファイルを探します。*install\_root/logs/manageprofiles/profile\_name* を参照して、プロファイルの作成または拡張で生成されたファイルを探します。( *install\_root* および *profile\_root* の場所について詳しくは、615 ページの『製品、プロファイル、およびツールのデフォルト・インストール・ディレクトリー』を参照してください。) これらのファイルは、主に IBM 技術サポートが使用するためのものです。

Windows

#### Windows プラットフォームの場合:

- a. *install\_root¥logs¥wbi¥install* ディレクトリーにあるログ・ファイル
- b. *user\_home¥wbilogs* ディレクトリーにあるログ・ファイル  
(*install\_root¥logs¥wbi¥install* にファイルがない場合)
- c. *install\_root¥logs¥manageprofiles¥profile\_name\_create\_error.log*
- d. *install\_root¥logs¥manageprofiles¥profile\_name\_create.log* および *install\_root¥logs¥manageprofiles¥pmt.log*

- e. `install_root¥logs¥wbi¥installconfig.log` (製品の正しい動作を妨げている可能性のある構成の問題を示しています)。失敗した構成スクリプトの診断については、781 ページの『失敗した Ant 構成スクリプトの診断』を参照してください。
- f. インストール操作によって生成される追加のログ・ファイルまたはトレース・ファイル。`install_root¥logs¥wbi¥install` で、インストール・プロセスの間に生成されたトレース・ファイルを探します。  
`install_root¥logs¥manageprofiles¥profile_name` を参照して、プロファイルの作成または拡張で生成されたファイルを探します。( `install_root` および `profile_root` の場所について詳しくは、615 ページの『製品、プロファイル、およびツールのデフォルト・インストール・ディレクトリー』を参照してください。) これらのファイルは、主に IBM 技術サポートが使用するためのものです。
6. エラー・ログに問題の原因を判別するための十分な情報が含まれない場合は、製品をアンインストールし、ログ・ファイルまたはその他の成果物が残っていればクリーンアップし、トレースをオンにしてから再インストールします。
- 以下のように、`install` コマンドに **-is:javaconsole** パラメーターを追加して、`stdout` ログおよび `stderr` ログをコンソール・ウィンドウにレポートします。
    - **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合:  

```
install -is:javaconsole
```

次のコマンドで、ストリームをファイルに取り込みます。

```
install -is:javaconsole > captureFileName.txt 2>&1
```
    - **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:  

```
install -is:javaconsole
```

次のコマンドで、ストリームをファイルに取り込みます。

```
install -is:javaconsole > captureFileName.txt 2>&1
```
    - **Windows** **Windows** プラットフォームの場合:  

```
install.exe -is:javaconsole
```

次のコマンドで、ストリームをファイルに取り込みます。

```
install.exe -is:javaconsole > drive:¥captureFileName.txt
```
  - `-is:log file_name` オプションを使用して、選択したログに対する追加情報を取り込みます。
7. サーバー・プロファイルを正常に作成した場合は、ファースト・ステップ・コンソールまたはコマンド行方式を使用して、サーバーを始動します。
8. 実行中の Java プロセス、および `SystemOut.log` ファイルと `SystemErr.log` ファイル内の「*e-business* に対してオープンな状態です」というメッセージを調べて、サーバーが適切に始動およびロードされていることを確認します。
- Java プロセスが存在しない場合、あるいはメッセージが表示されない場合は、同じログでその他のエラーを検査します。エラーがあればそれを修正し、再試行します。

SystemOut.log および SystemErr.log ファイルは、以下のプラットフォーム固有のディレクトリーにあります。

- **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合: `profile_root/logs/servername`
  - **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:  
`profile_root/logs/servername`
  - **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: `profile_root¥logs¥servername`
9. サーバーが稼働中の場合は、ファースト・ステップ・コンソールまたはコマンド行方式を使用して停止します。
  10. WebSphere Process Server デプロイメント環境のトラブルシューティングを行うには、561 ページの『第 9 章 デプロイメント環境の検証』を参照してください。
  11. Snoop サブレットを使用して Web サーバーがアプリケーションを WebSphere Process Server から取得できるかどうかを検証する場合は、WebSphere Application Server Network Deployment 資料の『インストールのトラブルシューティング』のステップ『Snoop サブレットを開始し、アプリケーション・サーバーからアプリケーションを検索する Web サーバーの機能を検証します』を参照してください。
  12. 管理コンソールを開始します。詳しくは、『管理コンソールの始動と停止』を参照してください。
  13. IP アドレスのキャッシュに関する問題を解決するには、WebSphere Application Server Network Deployment 資料の『インストールのトラブルシューティング』のステップ『IP アドレスのキャッシング問題を解決します』を参照してください。

## 次のタスク

この Product Support Web サイトでは、既知の問題の解決方法に関する最新情報を確認できます。また、問題の解決に必要な情報の収集時間を節約できる資料を参照することができます。PMR を開く前に、IBM WebSphere Process Server サポート・ページを参照してください。

---

## メッセージ: インストールおよびプロファイル作成

インストール時および構成時に発生する一般的なエラー・メッセージの一部は、基本的な問題を解決するアクションで処理できます。

**注:** **Linux** **UNIX** **Windows** 以下の WebSphere Process Server のインストールおよび構成エラーは、Linux、UNIX、および Windows プラットフォームで発生します。

**ヒント:** WebSphere Application Server Network Deployment のインストールによって生成される可能性のあるメッセージについては、『Business Process Management のメッセージ (Business Process Management messages)』のトピックを参照してください。

WebSphere Process Server のインストール中に、以下のようなエラー・メッセージが表示されることがあります。

- 『サポートされる IBM JDK が見つかりませんでした。この製品に同梱されている IBM JDK は *install\_root/JDK* に配置されている必要があります。問題を訂正して再試行してください。』
- 『警告: ストリング "<type\_name>" をタイプ FontStruct に変換できません (Warning: Cannot convert string "<type\_name>" to type FontStruct)』

類似したエラー・メッセージが見つからない場合、または提供されている情報では問題が解決されない場合は、IBM の WebSphere Process Server サポートにさらに支援を求めて連絡してください。

## サポートされる IBM JDK が見つかりませんでした。この製品に同梱されている IBM JDK は *install\_root/JDK* に配置されている必要があります。問題を訂正して再試行してください。

この製品に付属する IBM Java Development Kit (JDK)、またはご使用のシステムの PATH 環境変数にある JDK を指すためにシンボリック・リンクを使用した場合は、IBM SDK for Java の妥当性検査が失敗して、インストールが失敗するおそれがあります。この問題は、IBM SDK for Java の妥当性検査コードが、この製品に付属する JDK がインストールに使用された現行の JDK であるかどうかを検出する方法によって引き起こされます。

この問題を解決するには、WebSphere Process Server のインストール・イメージに提供された JVM 内でシンボリック・リンクを使用せず、またご使用のシステムの PATH 環境変数にあるすべての JVM からシンボリック・リンクを除去します。

## 警告: ストリング "<type\_name>" をタイプ FontStruct に変換できません (Warning: Cannot convert string "<type\_name>" to type FontStruct)

WebSphere Application Server 用の Web サーバー・プラグインをインストールする場合には、ikeyman ユーティリティもインストールします。ikeyman ユーティリティは、Global Services Kit 7 (GSKit7) の一部です。

**Linux** Linux システムで *ikeyman.sh* スクリプトを実行すると、以下のメッセージが表示される場合があります。

```
警告: ストリング "-monotype-arial-regular-r-normal---140-***-p--iso8859-1" を
タイプ FontStruct に変換できません
(Warning: Cannot convert string
"-monotype-arial-regular-r-normal---140-***-p--iso8859-1"
to type FontStruct)
```

この警告を無視して *ikeyman* ユーティリティを使用しても問題ありません。

## インストールとプロファイル作成のログ・ファイル

WebSphere Process Server のインストール時やアンインストール時、プロファイルの作成時、拡張時、および削除時には、さまざまなログ・ファイルが作成されます。これらの手順の実行中に問題が発生した場合は、該当するログを参照してください。

表 166 に、WebSphere Process Server のログ、その内容、および成功/失敗を示す標識を示します。

logs ディレクトリーがシステム上に存在しない場合は、インストールがプロセスのごく初期の段階で失敗しています。この場合は、以下を確認してください。

- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合: `user_home/wbilogs`
- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: `user_home¥wbilogs`
- **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合: `user_home/wbilogs`

表 166 に示すいくつかのディレクトリー・パス、ファイル名、および標識値には、エントリーがテーブル・セルのサイズに合うように、スペースが含まれています。実際のディレクトリー・パス、ファイル名、および標識値には、スペースは含まれません。

変数 `install_root` は、WebSphere Process Server のインストール・ディレクトリーを表します。変数 `profile_root` は、プロファイルのルートの場所を表します。

**i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合: 変数 `user_data_root` は、デフォルトのユーザー・データ・ディレクトリーを表します。

詳しくは、615 ページの『製品、プロファイル、およびツールのデフォルト・インストール・ディレクトリー』を参照してください。

表 166. WebSphere Process Server コンポーネントのインストール・ログおよびプロファイル・ログ

ログ	内容	インディケーター
• <b>Linux</b> <b>UNIX</b> <code>install_root/logs/wbi/install/log.txt</code>	WebSphere Process Server に関するすべてのインストール・イベントをログに記録します。	<b>INSTCONFFAILED</b> すべてのインストールの失敗。
• <b>Windows</b> <code>install_root¥logs¥wbi¥install¥log.txt</code>		<b>INSTCONFSUCCESS</b> インストールの成功。
• <b>i5/OS</b> <code>install_root/logs/wbi/install/log.txt</code>		<b>INSTCONFPARTIALSUCCESS</b> インストール・エラーが発生しましたが、インストール・システムは使用することができます。他のログ・ファイルの追加情報でエラーを識別します。

表 166. WebSphere Process Server コンポーネントのインストール・ログおよびプロファイル・ログ (続き)

ログ	内容	インディケータ
<ul style="list-style-type: none"> <li> <span>Linux</span> <span>UNIX</span>  <code>install_root/logs/wbi/install/install_error.log</code> </li> <li> <span>Windows</span> <code>install_root/logs/wbi/install/install_error.log</code> </li> <li> <span>i5/OS</span> <code>install_root/logs/wbi/install/install_error.log</code> </li> </ul>	<p>WebSphere Application Server Network</p> <p>Deployment、WebSphere Feature Pack for Web Services、および WebSphere Process Server のインストール用のログ・ファイルから取り出したエラー、警告、およびインストール結果が記録されています。プロファイルの作成が失敗した場合、またはインストール中に部分的に成功した場合も、結果がプロファイル・ログ・ファイルから取り出され、このファイルに入れられます。</p>	N/A
<ul style="list-style-type: none"> <li> <span>Linux</span> <span>UNIX</span>  <code>install_root/logs/wbi/installconfig.log</code> </li> <li> <span>Windows</span> <code>install_root/logs/wbi/installconfig.log</code> </li> <li> <span>i5/OS</span> <code>install_root/logs/wbi/installconfig.log</code> </li> </ul>	<p>コンポーネントの構成、システム・アプリケーションのインストール、および Windows ショートカットとレジストリー項目の作成を行うために、インストール・プロセスの最後に実行される構成アクションをログに記録します。</p>	<p>構成処置を記録した一連の &lt;record&gt; エレメントを含んでいます。インストール後の構成処置が失敗した場合、以下のようなテキストがログに含まれています。</p> <pre>&lt;record&gt; &lt;date&gt;2005-05-26T11:41:17&lt;/date&gt; &lt;millis&gt;1117132877344&lt;/millis&gt; &lt;sequence&gt;742&lt;/sequence&gt; &lt;logger&gt;com.ibm.ws.install.configmanager.ConfigManager&lt;/logger&gt; &lt;level&gt;WARNING&lt;/level&gt; &lt;class&gt;com.ibm.ws.install.configmanager.ConfigManager&lt;/class&gt; &lt;method&gt;executeAllActionsFound&lt;/method&gt; &lt;thread&gt;12&lt;/thread&gt; &lt;message&gt;Configuration action failed: com.ibm.ws.install.configmanager.actionengine.ANTAction-D:¥WBI¥AS¥properties¥version ¥install.wbi¥6.1.0.0¥config¥full¥install¥90SInstallCEI.ant&lt;/message&gt; &lt;/record&gt;</pre> <p>失敗した処置がない場合は、ログのレコードに以下のメッセージがあります。</p> <pre>&lt;record&gt; . . . &lt;message&gt;No errors were encountered while executing the repository actions&lt;/message&gt; &lt;/record&gt;</pre>

表 166. WebSphere Process Server コンポーネントのインストール・ログおよびプロファイル・ログ (続き)

ログ	内容	インディケータ
<ul style="list-style-type: none"> <li>Linux UNIX <i>install_root/logs/manageprofiles/pmt.log</i></li> <li>Windows <i>install_root\logs\manageprofiles\pmt.log</i></li> <li>i5/OS <i>user_data_root/profileRegistry/logs/manageprofiles/pmt.log</i></li> </ul>	<p>プロファイル管理ツールからすべてのイベントをログに記録します。</p>	<p><b>INSTCONFFAILED</b> すべてのプロファイル作成の失敗。</p> <p><b>INSTCONFSUCCESS</b> プロファイル作成の成功。</p> <p><b>INSTCONFPARTIALSUCCESS</b> プロファイル作成エラーが発生しましたが、プロファイルは機能しています。他のログ・ファイルの追加情報でエラーを識別します。</p>
<ul style="list-style-type: none"> <li>Linux UNIX <i>install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log</i></li> <li>Windows <i>install_root\logs\manageprofiles\profile_name_create.log</i></li> <li>i5/OS <i>user_data_root/profileRegistry/logs/manageprofiles/profile_name_create.log</i></li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>名前付きのプロファイルの作成中に発生するすべてのイベントをトレースします。</li> <li>完全インストールの間に、プロファイル管理ツールを使用したとき、または <code>manageprofiles</code> コマンドを使用したときに作成されます。</li> </ul>	<p><b>INSTCONFFAILED</b> すべてのプロファイル作成の失敗。</p> <p><b>INSTCONFSUCCESS</b> プロファイル作成の成功。</p> <p><b>INSTCONFPARTIALSUCCESS</b> プロファイル作成エラーが発生しましたが、プロファイルは機能しています。他のログ・ファイルの追加情報でエラーを識別します。</p>
<ul style="list-style-type: none"> <li>Linux UNIX <i>install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create_error.log</i></li> <li>Windows <i>install_root\logs\wbi\update\profile_name_create_error.log</i></li> <li>i5/OS <i>install_root/logs/wbi/update/profile_name_create_error.log</i></li> </ul>	<p><i>profile_name_create.log</i> ファイルから抽出された情報をログに記録します。この情報は、失敗したあらゆる構成アクション、検証、<code>wsadmin</code> 呼び出し、および対応するあらゆるログ・ファイルに関連します。</p>	N/A
<ul style="list-style-type: none"> <li>Linux UNIX <i>install_root/logs/manageprofiles/profile_name_augment.log</i></li> <li>Windows <i>install_root\logs\manageprofiles\profile_name_augment.log</i></li> <li>i5/OS <i>user_data_root/profileRegistry/logs/manageprofiles/profile_name_augment.log</i></li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>名前付きのプロファイルの拡張中に発生するすべてのイベントをトレースします。</li> <li>プロファイルを拡張したとき、プロファイル管理ツールを使用したとき、または <code>manageprofiles</code> コマンドを使用したときに作成されます。</li> </ul>	<p><b>INSTCONFFAILED</b> すべてのプロファイル拡張の失敗。</p> <p><b>INSTCONFSUCCESS</b> プロファイル拡張の成功。</p> <p><b>INSTCONFPARTIALSUCCESS</b> プロファイル拡張エラーが発生しましたが、プロファイルは機能しています。他のログ・ファイルの追加情報でエラーを識別します。</p>

表 166. WebSphere Process Server コンポーネントのインストール・ログおよびプロファイル・ログ (続き)

ログ	内容	インディケータ
<ul style="list-style-type: none"> <li>Linux UNIX <i>install_root/logs/manageprofiles/profile_name_augment_error.log</i></li> <li>Windows <i>install_root\logs\wbi\update\profile_name_augment_error.log</i></li> <li>i5/OS <i>install_root/logs/wbi/update/profile_name_augment_error.log</i></li> </ul>	<p><i>profile_name_augment.log</i> ファイルから抽出された情報をログに記録します。この情報は、失敗したあらゆる構成アクション、検証、wsadmin 呼び出し、および対応するあらゆるログ・ファイルに関連します。</p>	N/A
<ul style="list-style-type: none"> <li>Linux UNIX <i>install_root/logs/manageprofiles/profile_name_delete.log</i></li> <li>Windows <i>install_root/logs/manageprofiles/profile_name_delete.log</i></li> <li>i5/OS <i>user_data_root/profileRegistry/logs/manageprofiles/profile_name_delete.log</i></li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>名前付きのプロファイルの削除中に発生するすべてのイベントをトレースします。</li> <li>manageprofiles コマンドによってプロファイル削除が実行されたときに作成されます。</li> </ul>	<p><b>INSTCONFFAILED</b> すべてのプロファイル削除の失敗。</p> <p><b>INSTCONFSUCCESS</b> プロファイル削除の成功。</p> <p><b>INSTCONFPARTIALSUCCESS</b> プロファイル削除エラーが発生しましたが、プロファイルは削除されています。他のログ・ファイルの追加情報でエラーを識別します。</p>
<ul style="list-style-type: none"> <li>Linux UNIX <i>install_root/logs/install/log.txt</i></li> <li>Windows <i>install_root\logs\install\log.txt</i></li> <li>i5/OS <i>install_root/logs/wbi/install/log.txt</i></li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>WebSphere Application Server Network Deployment に関連するすべてのインストール・イベントをログに記録します。</li> <li>WebSphere Process Server と共にインストールされ、基盤となる WebSphere Application Server Network Deployment のインストールの一部として作成されます。</li> </ul>	<p><b>INSTCONFFAILED</b> すべてのインストールの失敗。</p> <p><b>INSTCONFSUCCESS</b> インストールの成功。</p> <p><b>INSTCONFPARTIALSUCCESS</b> インストール・エラーが発生しましたが、インストール・システムは使用することができます。他のログ・ファイルの追加情報でエラーを識別します。</p>
<ul style="list-style-type: none"> <li>Linux UNIX <i>install_root/logs/installconfig.log</i></li> <li>Windows <i>install_root\logs\installconfig.log</i></li> <li>i5/OS <i>install_root/logs/wbi/installconfig.log</i></li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>コンポーネントの構成、システム・アプリケーションのインストール、および Windows ショートカットとレジストリ項目の作成を行うために、インストール・プロセスの最後に実行される構成アクションをログに記録します。</li> <li>WebSphere Process Server と共にインストールされ、基盤となる WebSphere Application Server Network Deployment のインストールの一部として作成されます。</li> </ul>	<p>構成処置を記録した一連の &lt;record&gt; エレメントを含んでいます。</p>

表 166. WebSphere Process Server コンポーネントのインストール・ログおよびプロファイル・ログ (続き)

ログ	内容	インディケータ
<ul style="list-style-type: none"> <li>Linux UNIX <code>install_root/logs/wbi/uninstall/log.txt</code></li> <li>Windows <code>install_root¥logs¥wbi¥uninstall¥log.txt</code></li> <li>i5/OS <code>install_root/logs/wbi/uninstall/log.txt</code></li> </ul>	<p>WebSphere Process Server に関するすべてのアンインストール・イベントをログに記録します。</p>	<p><b>INSTCONFFAILED</b> すべてのアンインストールの失敗。</p> <p><b>INSTCONFSUCCESS</b> アンインストールの成功。</p> <p><b>INSTCONFPARTIALSUCCESS</b> アンインストール・ウィザードは、コア・プロダクト・ファイルを正常に削除しましたが、構成中にエラーが発生しました。他のログ・ファイルの追加情報でエラーを識別します。</p>
<ul style="list-style-type: none"> <li>Linux UNIX <code>install_root/logs/wbi/update/updateconfig.log</code></li> <li>Windows <code>install_root¥logs¥wbi¥update¥updateconfig.log</code></li> <li>i5/OS <code>install_root/logs/wbi/update/updateconfig.log</code></li> </ul>	<p>アンインストール・プロセスの最後に実行される構成処置をログに記録します。</p>	<p>構成処置を記録した一連の &lt;record&gt; エレメントを含んでいます。</p>
<ul style="list-style-type: none"> <li>i5/OS <code>%TEMP¥¥firststeps_i5.log</code></li> </ul>	<p>ファースト・ステップ・コンソールの実行時に発生したエラーをログに記録し、それらの修正方法に関する提案を提供します。</p>	<p>ファースト・ステップ・コンソールで予期しない動作や誤った動作が発生した場合は、このログ・ファイルを確認してください。コマンド行からファースト・ステップ・コンソールを実行している場合は、タイプミスの可能性があるため、特に役立ちます。</p>

## Launchpad アプリケーションのトラブルシューティング

Launchpad アプリケーションが開始されない場合、以下のトラブルシューティングのヒントを試行してください。

変更を行った後、Launchpad を再起動します。

- パスポート・アドバンテージ からのイメージを使用している場合は、*WebSphere Process Server V6.2 DVD*、*WebSphere Application Server Network Deployment Supplements V6.1 CD*、および *WebSphere Application Server Toolkit V6.1.1 ディスク 1* (ご使用のプラットフォームに含まれている場合) のイメージの内容は、3 つの個別のディレクトリーに解凍してください。イメージのファイルを同じディレクトリーに抽出すると、エラーが発生する原因となります。3 つの兄弟ディレクトリーを使用することをお勧めします。例えば、以下のようなディレクトリーのセットを使用してください。

注: i5/OS パスポート・アドバンテージから取得したインストール・イメージは、Windows ワークステーションにダウンロードする必要があります。

– i5/OS

```
%/downloads/WPS/image1
%/downloads/WPS/image2
%/downloads/WPS/image3
```

– **Linux**      **UNIX**

```
%/downloads/WPS/image1
%/downloads/WPS/image2
%/downloads/WPS/image3
```

– **Windows**

```
C:¥downloads¥WPS¥image1
C:¥downloads¥WPS¥image2
C:¥downloads¥WPS¥image3
```

- Launchpad は開始できるが、リンクを選択しても Launchpad 内のページが表示されない場合、ディスク・ドライブに異なるオペレーティング・システム用のメディアが挿入されている可能性があります。メディアの妥当性を確認してください。
- **Windows** Windows システムで Mozilla ブラウザーを使用しようとする、代わりに Internet Explorer が開くことがあります。Internet Explorer が同じシステムにインストールされている場合、Launchpad はデフォルトのブラウザーとして Mozilla を認識しません。Launchpad は Internet Explorer での操作性が良いため、処置は必要ありません。

Mozilla の使用を強制する環境変数を作成するには、コマンド・プロンプトで以下のコマンドを大文字小文字を正確に使用して実行します。

```
set BROWSER=Mozilla
```

- ご使用のブラウザーで JavaScript™ 機能が使用可能になっていることを確認してください。

**Linux**      **UNIX**      Mozilla: 「編集」 > 「設定」 > 「詳細」 > 「スクリプト & プラグイン」 をクリックします。

- 「Enable JavaScript for: Navigator」を選択します。
- 「以下スクリプトを許可」ですべてのボックスを選択します。

**Linux**      **UNIX**      Mozilla Firefox: 「ツール」 > 「オプション」 > 「コンテンツ」 をクリックします。

- 「Java を有効にする」を選択します。
- 「JavaScript を有効にする」を選択します。
- 「詳細設定」をクリックし、「次のスクリプトを許可」ですべてのボックスを選択します。

**Windows**      Internet Explorer: 「ツール」 > 「インターネット オプション」 > 「セキュリティ」 > 「インターネット」の「レベルのカスタマイズ」 > 「スクリプト」 > 「アクティブ スクリプト」 > 「有効にする」 をクリックします。

これらの操作を試した後でも Launchpad のリンクが機能しない場合は、コンポーネントのインストール・プログラムを直接開始してください。これらのプログラムのロケーションは、85 ページの『Launchpad のオプション』にリストされています。

## サイレント・インストールのトラブルシューティング

応答ファイルを使用したサイレント・インストールに失敗した場合は、ログ・ファイルおよびエラー・メッセージを調べて原因を判別し、応答ファイルを変更できます。

### 始める前に

WebSphere Process Server のサイレント・インストールのための応答ファイルの使用については、『サイレント・インストール』を参照してください。

製品のサイレント・インストールのトラブルシューティングを行うには、以下のステップを実行します。

### 手順

1. 応答ファイルを調べて、ファイルでオプション値を指定するときに正確に指定しており、インストール・プログラムが値を読み取れることを確認します。誤った指定は、インストール・ウィザードのサイレント・インターフェースに影響を及ぼします。例えば、大/小文字の区別があるプロパティ名では、常に大/小文字の誤りのないようにしてください。また、値は常に二重引用符で囲みます。オプション値が正しくないというエラーの場合、InstallShield MultiPlatform プログラムには確認を要求する警告メッセージが表示され、インストールは停止します。
2. 応答ファイルを、製品に同梱される `responsefile.wbis.txt` ファイルと比較し、必要な修正を行います。このファイルは、`install_image/WBI` ディレクトリにあります。ファイルの修正後に、再インストールします。
3. 『メッセージ: インストールおよびプロファイルの作成と拡張』に記載されている、よくあるエラー・メッセージを確認します。
4. ログ・ファイルを調べます。『インストールとプロファイル作成のログ・ファイル』リストされている該当するログ・ファイルの説明を参照してください。
5. 特定のイベントによって、InstallShield MultiPlatform がインストール・ウィザードをサイレント・モードで開始できなくなる可能性があります (例えば、インストール・ウィザードを起動するためのディスク・スペースが十分でない状況などが考えられます)。インストールが失敗し、インストール・ログに情報がない場合は、ISMP プログラムによるインストール・ウィザードの開始が失敗する原因となるイベントについてのエントリーを記録します。

このようなイベントを記録するための `install` コマンドの構文は、以下のとおりです。

**AIX**

**AIX プラットフォームの場合:**

```
install -options "/usr/IBM/WebSphere/silentFiles/myresponsefile.txt"  
-silent -log
```

**HP-UX**

**Solaris**

**HP-UX および Solaris プラットフォームの場合:**

```
install -options "/opt/IBM/WebSphere/silentFiles/myresponsefile.txt"  
-silent -log
```

**i5/OS**

**i5/OS プラットフォームの場合:**

```
install -options responsefile.wbis.txt -silent -log log.txt @ALL
```

**注:** **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合: コピーした DVD イメージが格納されているディレクトリーに変更する必要があります。例: */MYDIR/WBI*

**Linux** **Linux** プラットフォームの場合:

```
install -options "/opt/ibm/WebSphere/silentFiles/myresponsefile.txt"
-silent -log
```

**Windows** **Windows** プラットフォームの場合:

```
install.exe -options "C:¥IBM¥WebSphere¥silentFiles¥myresponsefile.txt"
-silent -log # !C:¥IBM¥WebSphere¥silentFiles¥log.txt @ALL
```

6. インストールのトラブルシューティングに関するその他のヒントについては、『インストールのトラブルシューティング』を参照してください。
7. プロファイルが正常に作成されていなかった場合は、『プロファイルの作成または拡張時の障害からのリカバリー』を参照してください。

---

## i5/OS インストールのトラブルシューティングのヒント

WebSphere Process Server 製品を i5/OS オペレーティング・システムにインストールする際に発生する問題のトラブルシューティングに役立つ可能性がある各種情報ソースを参照できます。

WebSphere Process Server には、問題のトラブルシューティング方法がいくつかあります。使用する方法は、問題の性質によって異なります。通常、さまざまな方法を組み合わせて問題の原因を判別してから、問題を解決するための適切な方法を決定します。

### ヒント 1: WebSphere Application Server for i5/OS のトラブルシューティング資料の参照

以下のリソースでは、一般的なトラブルシューティングを支援しています。

- WebSphere Process Server のリリース情報。
- WebSphere Application Server FAQ データベース。
- WebSphere Application Server for OS/400® ニュースグループ。この System i テクニカル・サポートの Web ベースのフォーラムは、WebSphere Application Server for i5/OS および OS/400 専用です。

### ヒント 2: WebSphere Process Server for i5/OS バージョン 6.2 のインストール

- サーバーに間違ったバージョンの i5/OS がインストールされています。

WebSphere Process Server が、i5/OS V5R4 および V6R1 で稼働しています。この製品を前のリリースの i5/OS にインストールすることはできません。

- **IBM Development Kit for Java V1.5** がインストールされていません。

ローカルおよびリモートのコマンド行インストールでは JDK 1.5 が必要です。製品 5722-JV1 オプション 7 をインストールして、JDK 1.5 を取得してください。

オプション 7 をインストールした後、JDK 1.5 固有の修正を実行するため、累積 PTF パッケージおよび Java グループ PTF を再インストールする必要があります。

- ホスト・サーバーが開始されていないか、または正常に開始されませんでした。

インストール・プロセスでは、i5/OS ホスト・サーバーが実行されている必要があります。ホスト・サーバーを開始するには、CL コマンド行から次のコマンドを実行します。

```
STRHOSTSVR SERVER(*ALL)
```

ホスト・サーバー開始時に「ホスト・サーバー・デーモン・ジョブで、IPX を使用して通信することができません。(Host server daemon jobs unable to communicate using IPX.)」以外のエラーが発生した場合、エラー・メッセージの指示に従って問題を解決してください。問題が解決した後、ホスト・サーバーを開始して、再度 WebSphere Process Server のインストールを試行します。

- 「オブジェクトが見つかりません」または「許可されていません」のエラーのためにインストールが失敗しました。

製品をインストールしているユーザーのユーザー・プロファイルには \*ALLOBJ および \*SECADM 特殊権限が必要です。

### ヒント 3: WebSphere Process Server for i5/OS の開始

- ポートの競合

WebSphere Application Server のスタンドアロン・インストールが複数ある場合、または同じ物理 i5/OS マシンで WebSphere Enterprise Service Bus や WebSphere Process Server のような WebSphere Application Server をバンドルするスタック製品が複数インストールされている場合は、ポート競合が存在する可能性があります。

---

## 失敗した Ant 構成スクリプトの診断

AIX、Linux、Windows、i5/OS などのオペレーティング・システムに製品をインストールするときの問題が、Apache Ant 構成スクリプトの失敗に起因するかどうかを判別します。

### 始める前に

トラブルシューティング手順を参照して、インストールの問題の診断を開始します。『インストールのトラブルシューティング』を参照してください。インストールが正常に完了した後、いくつかの Ant スクリプトが製品を構成します。以下では、Ant スクリプトに失敗したときに行う処理について説明します。インストール・ログに失敗が示されていない場合に、失敗した Ant 構成スクリプトの問題を訂正する方法について調べます。

### このタスクについて

*install\_root/logs/wbi/installconfig.log* ファイルが存在する場合は、そのファイルに Ant スクリプトの失敗が示されています。以下の構成スクリプトのうち、失敗したスクリプトがあるかどうかを判別します。ある場合は、構成スクリプトのリカバリー手

順を使用します。調査アクションを使用して、WebSphere Process Server 製品の構成中に以下の構成スクリプトが正常に実行されたかどうかを手動で検証します。失敗したスクリプトがある場合は、リカバリー・アクションのステップを使用してそのスクリプトの機能を実行します。

失敗した Ant 構成スクリプトを診断するには、以下のステップを実行します。

- 実行が失敗した 90SConfigWBIMigrationScript.ant 構成スクリプトを診断します。このスクリプトは、スクリプト `install_root/bin/wbi_migration` のアクセス権を 755 に変更します。このスクリプトは、`install_root/bin/wbi_migration` スクリプトにある以下のトークンも置換します。

変更前:	変更後 (インストール中に選択した値):
<code>\${JAVAROOT}</code>	<code>install_root/java/jre/bin/java</code>
<code>\${MIGRATIONJAR}</code>	<code>install_root/bin/migration/migrationGUI/migrationGUI.jar</code>
<code>\${WASROOT}</code>	<code>install_root</code>
<code>\${PRODUCTID}</code>	<code>\${WS_CMT_PRODUCT_TYPE}</code>

1. 調査アクション: Linux および UNIX プラットフォームの場合は `install_root/bin/wbi_migration.sh` スクリプト、Windows プラットフォームの場合は `install_root/bin/wbi_migration.bat` スクリプト、i5/OS プラットフォームの場合は `install_root/bin/wbi_migration` スクリプトについて、それぞれ許可が 755 であるかどうかを確認します。
  2. リカバリー・アクション: Linux および UNIX プラットフォームの場合は `chmod 755 install_root/bin/wbi_migration.sh` コマンド、Windows プラットフォームの場合は `chmod 755 install_root/bin/wbi_migration.bat` コマンド、i5/OS プラットフォームの場合は `chmod 755 install_root/bin/wbi_migration` コマンドをそれぞれ実行します。
  3. 調査アクション: Linux および UNIX プラットフォームの場合は `install_root/bin/wbi_migration.sh` スクリプト、Windows プラットフォームの場合は `install_root/bin/wbi_migration.bat` スクリプト、i5/OS プラットフォームの場合は `install_root/bin/wbi_migration` スクリプトをそれぞれエディターで開き、`${JAVAROOT}`、`${MIGRATIONJAR}`、`${WASROOT}`、`${PRODUCTID}` の部分に実際の値が指定されているかどうかを確認します。
  4. リカバリー・アクション: 以下のトークンを、`wbi_migration` スクリプトで実際の値に変更します。`${JAVAROOT}`、`${MIGRATIONJAR}`、`${WASROOT}`、および `${PRODUCTID}`。
- 失敗した 85SConfigNoProfileFirstStepsWBI.ant を診断します。このスクリプトは、`install_root/properties/version/install.wbi/firststeps.wbi` ディレクトリーにあるすべてのファイルを `install_root/firststeps/wbi/html/noprofile` ディレクトリーにコピーします。また、このスクリプトにより、`install_root/firststeps/wbi/firststeps.sh` スクリプト (Linux、および UNIX)、`install_root/firststeps/wbi/firststeps.bat` スクリプト (Windows プラットフォーム)、または `install_root/firststeps/wbi/firststeps` スクリプト (i5/OS プラットフォーム) 内の以下のトークンが置き換えられます。

変更前:	変更後 (インストール中に選択した値):
<code>\${JAVAROOT}</code>	<code>install_root/java/jre/bin/java</code>

変更前:	変更後 (インストール中に選択した値):
<code>\${PROFILERROOT}</code>	<code>install_root</code>
<code>\${HTMLSHELLJAR}</code>	<code>install_root/lib/htmlshellwbi.jar</code>
<code>\${CELLNAME}</code>	<code>\${WS_CMT_CELL_NAME}</code>

1. 調査アクション: `install_root/properties/version/install.wbi/firststeps.wbi` ディレクトリーにあったすべてのファイルが `install_root/firststeps/wbi/html/noprofile` ディレクトリーにコピーされていることを確認します。
2. リカバリー・アクション: `install_root/properties/version/install.wbi/firststeps.wbi` ディレクトリーにあるすべてのファイルを `install_root/firststeps/wbi/html/noprofile` ディレクトリーにコピーします。
3. 調査アクション: エディターで `install_root/firststeps/wbi/firststeps` スクリプトを開きます。値 `${JAVAROOT}`、`${PROFILERROOT}`、`${HTMLSHELLJAR}`、および `${CELLNAME}` の代わりに実際の値が存在することを確認します。
4. リカバリー・アクション: `install_root/firststeps/wbi/firststeps` スクリプトにある以下のトークンを実際の値に変更します。`${JAVAROOT}`、`${PROFILERROOT}`、`${HTMLSHELLJAR}`、および `${CELLNAME}`。

## タスクの結果

この手順に示す修正アクションを実行してインストール・エラーおよび Ant スクリプトの構成エラーをすべて訂正すると、インストールが完了します。

## 次のタスク

ファースト・ステップ・コンソールを開始します。

---

## プロファイルの作成または拡張時の障害からのリカバリー

プロファイル管理ツールでは、プロファイルの新規作成時、または既存プロファイルの拡張時に障害が発生する場合があります。manageprofiles コマンドの使用時にも同じことが起こる場合があります。このような障害が発生した場合は、このトピックで説明するように、最初にログ・ファイルを調べてから、その状況に応じて、以下のリカバリー手順に従ってください。

### ログ・ファイル

manageprofiles コマンドに関するログ・ファイルはすべて、`install_root/logs/manageprofiles` ディレクトリーに格納されます。示されている順序で、次のログ・ファイルを参照します。各ログ・ファイルには、「INSTCONFSUCCESS」というエントリーが含まれていなければなりません。ファイルにこのエントリーが含まれていない場合、障害が検出されています。ログ・ファイルに目を通して、障害が発生した理由を確認し、その対応策を調べてください。

1. ログ・ファイル `profile_name_create_error.log` (`profile_name` はプロファイルの名前)。

**注:** 新規プロファイルを作成し、既存のプロファイルを拡張しなかった場合のみ、このファイルを調べます。

- **Linux** **UNIX** `install_root/logs/manageprofiles/  
profile_name_create_error.log`
- **Windows** `install_root¥logs¥wbi¥update¥profile_name_create_error.log`
- **i5/OS** `install_root/logs/wbi/update/profile_name_create_error.log`

このログ・ファイルで「Configuration action succeeded」または「Configuration action failed」というテキストを探します。

**注:** 「Configuration action failed」は、複数出力されていることがあります。それぞれの障害を調査し修正します。プロファイルが作成されている場合は、以下のオプションで説明するログ・ファイルも確認してください。

**注:** その他の情報を得るには、manageprofiles ディレクトリーの `pmt.log` というログ・ファイルを参照します。このファイルには、プロファイル管理ツールによる完全インストールの実行中にデフォルト・プロファイルが作成されたとき発生する、すべてのイベントが記録されます。

2. ログ・ファイル `profile_name_augment_error.log` (`profile_name` は、プロファイルの名前)。

このログ・ファイルは以下のディレクトリーにあります。

- **Linux** **UNIX** `install_root/logs/manageprofiles/  
profile_name_augment_error.log`
- **Windows** `install_root¥logs¥wbi¥update¥profile_name_augment_error.log`
- **i5/OS** `install_root/logs/wbi/update/profile_name_augment_error.log`

このログ・ファイルで「Configuration action succeeded」または「Configuration action failed」というテキストを探します。

**注:** 「Configuration action failed」は、複数出力されていることがあります。それぞれの障害を調査し修正します。プロファイルが作成されている場合は、以下のオプションで説明するログ・ファイルも確認してください。

**注:** インストール中に作成したプロファイルの状況を確認する場合は、以下のコマンドを実行してください。

- **Linux** **UNIX** `install_root/bin/logProfileErrors.sh`
- **Windows** `install_root¥bin¥logProfileErrors.bat`
- **i5/OS** `install_root/logProfileErrors`

3. 個々のプロファイル・テンプレート・アクション・ログ・ファイル。

これ以前のステップで説明したログ・ファイルで不適切な値が見つかった場合は、以下のディレクトリーにあるログ・ファイルを調べてください。

- **i5/OS** `user_data_root/profileregistry/logs` (i5/OS システムの場合)
- **Linux** **UNIX** `install_root/logs/manageprofiles/profile_name` (Linux および UNIX システムの場合)

- **Windows** `install_root¥logs¥manageprofiles¥profile_name` (Windows システムの場合)

`profile_root` または `user_data_root` は、プロファイルのインストール・ロケーションを表します。

これらのログ・ファイルは一貫性のある命名規則に従っていませんが、通常は失敗した Ant スクリプト名の後に `.log` が続く名前になっています。例えば、`profile_name_augment.log` ファイルに次のエントリーがあるものとします。

```
<messages>Result of executing
E:¥00536.15¥profileTemplates¥default.wbicore¥actions¥saveParamsWbiCore.ant
was:false</messages>
```

最初に、`install_root/logs/manageprofiles` ディレクトリーの `profile_name_augment.log` ファイル内で周囲のエントリーを調べます。周囲のエントリーから障害の原因を判別できない場合は、障害が発生している Ant スクリプトのエントリーに対応するログ・ファイルを探してください。この例では、`saveParamsWbiCore.ant` スクリプトによって作成されたログ・ファイルは `saveParamsWbiCore.ant.log` です。このファイルに目を通して、障害が発生した理由を詳しく調べます。

## 作成時の障害のリカバリー

プロファイル作成で障害が発生した理由を判別して、その障害の原因に対処した後、プロファイルの作成を再度実行することができます。

**注:** プロファイルを作成する場合は、最初に WebSphere Application Server プロファイルを作成し、次に WebSphere Process Server プロファイル・テンプレートを使用してこれを拡張して、WebSphere Process Server プロファイルを作成します。プロファイルの作成で障害が発生しても、必要とされる拡張の一部を含んでいないプロファイルとして存続可能です。

プロファイルが存在しているかどうかを判別するには、`install_root/bin/manageprofiles -listProfiles` コマンドを実行してください。作成時に使用したプロファイル名が存在しない場合は、そのプロファイルを再作成することができます。作成時に使用したプロファイル名が存在する場合は、そのプロファイルは作成されており、拡張時の障害が発生しています。拡張時の障害からのリカバリーのヒントについては、『拡張時の障害のリカバリー』を参照してください。

## 拡張時の障害のリカバリー

プロファイルの拡張で障害が発生した理由を判別し、その障害の原因に対処した後、以下の手順を実行すると、既存のプロファイルを再度拡張して、完全な WebSphere Process Server プロファイルを正常に作成することができます。

1. プロファイル管理ツールを開始して、プロファイルの新規作成ではなく既存プロファイルの拡張を選択します。
2. 処理を行ったプロファイルを選択して、そのプロファイルに正しい情報を入力します。

注: プロファイル管理ツールを初めて実行したときに、一部の拡張は正常に完了している場合があります。このため、最初にプロファイルを作成しようとしたときには表示されたパネルすべてが表示されない場合があります。これは、プロファイル管理ツールが残りのどの拡張を完了すべきかを検出して、必要なパネルのみを表示するためです。

---

## Business Process Choreographer 構成のトラブルシューティング

Business Process Choreographer およびその Business Flow Manager、または Human Task Manager コンポーネントの構成に関する問題の解決方法については、WebSphere Process Server for Multiplatforms バージョン 6.2 インフォメーション・センターにアクセスし、「**WebSphere Process Server のインストールおよび構成**」>「**インストールおよび構成のトラブルシューティング**」>「**Business Process Choreographer 構成のトラブルシューティング**」のトピックを参照してください。この情報は *Business Process Choreographer PDF* でも検索できます。

---

## 特記事項

本書は米国 IBM が提供する製品およびサービスについて作成したものです。

本書に記載の製品、サービス、または機能が日本においては提供されていない場合があります。日本で利用可能な製品、サービス、および機能については、日本 IBM の営業担当員にお尋ねください。本書で IBM 製品、プログラム、またはサービスに言及していても、その IBM 製品、プログラム、またはサービスのみが使用可能であることを意味するものではありません。これらに代えて、IBM の知的所有権を侵害することのない、機能的に同等の製品、プログラム、またはサービスを使用することができます。ただし、IBM 以外の製品とプログラムの操作またはサービスの評価および検証は、お客様の責任で行っていただきます。

IBM は、本書に記載されている内容に関して特許権 (特許出願中のものを含む) を保有している場合があります。本書の提供は、お客様にこれらの特許権について実施権を許諾することを意味するものではありません。実施権についてのお問い合わせは、書面にて下記宛先にお送りください。

〒106-8711  
東京都港区六本木 3-2-12  
日本アイ・ビー・エム株式会社  
法務・知的財産  
知的財産権ライセンス渉外

以下の保証は、国または地域の法律に沿わない場合は、適用されません。IBM およびその直接または間接の子会社は、本書を特定物として現存するままの状態を提供し、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むすべての明示もしくは黙示の保証責任を負わないものとします。国または地域によっては、法律の強行規定により、保証責任の制限が禁じられる場合、強行規定の制限を受けるものとします。

この情報には、技術的に不適切な記述や誤植を含む場合があります。本書は定期的に見直され、必要な変更は本書の次版に組み込まれます。IBM は予告なしに、随時、この文書に記載されている製品またはプログラムに対して、改良または変更を行うことがあります。

本書において IBM 以外の Web サイトに言及している場合がありますが、便宜のため記載しただけであり、決してそれらの Web サイトを推奨するものではありません。それらの Web サイトにある資料は、この IBM 製品の資料の一部ではありません。それらの Web サイトは、お客様の責任でご使用ください。

IBM は、お客様が提供するいかなる情報も、お客様に対してなんら義務も負うことのない、自ら適切と信ずる方法で、使用もしくは配布することができるものとします。

本プログラムのライセンス保持者で、(i) 独自に作成したプログラムとその他のプログラム (本プログラムを含む) との間での情報交換、および (ii) 交換された情報の相互利用を可能にすることを目的として、本プログラムに関する情報を必要とする方は、下記に連絡してください。

IBM Corporation  
1001 Hillsdale Blvd., Suite 400  
Foster City, CA 94404  
U.S.A.

本プログラムに関する上記の情報は、適切な使用条件の下で使用することができますが、有償の場合もあります。

本書で説明されているライセンス・プログラムまたはその他のライセンス資料は、IBM 所定のプログラム契約の契約条項、IBM プログラムのご使用条件、またはそれと同等の条項に基づいて、IBM より提供されます。

この文書に含まれるいかなるパフォーマンス・データも、管理環境下で決定されたものです。そのため、他の操作環境で得られた結果は、異なる可能性があります。一部の測定が、開発レベルのシステムで行われた可能性があります。その測定値が、一般に利用可能なシステムのものと同じである保証はありません。さらに、一部の測定値が、推定値である可能性があります。実際の結果は、異なる可能性があります。お客様は、お客様の特定の環境に適したデータを確かめる必要があります。

IBM 以外の製品に関する情報は、その製品の供給者、出版物、もしくはその他の公に利用可能なソースから入手したものです。IBM は、それらの製品のテストは行っておりません。したがって、他社製品に関する実行性、互換性、またはその他の要求については確認できません。IBM 以外の製品の性能に関する質問は、それらの製品の供給者にお願います。

IBM の将来の方向または意向に関する記述については、予告なしに変更または撤回される場合があります、単に目標を示しているものです。

本書には、日常の業務処理で用いられるデータや報告書の例が含まれています。より具体性を与えるために、それらの例には、個人、企業、ブランド、あるいは製品などの名前が含まれている場合があります。これらの名称はすべて架空のものであり、名称や住所が類似する企業が実在しているとしても、それは偶然にすぎません。

著作権使用許諾:

本書には、様々なオペレーティング・プラットフォームでのプログラミング手法を例示するサンプル・アプリケーション・プログラムがソース言語で掲載されています。お客様は、サンプル・プログラムが書かれているオペレーティング・プラットフォームのアプリケーション・プログラミング・インターフェースに準拠したアプリケーション・プログラムの開発、使用、販売、配布を目的として、いかなる形式においても、IBM に対価を支払うことなくこれを複製し、改変し、配布することができます。このサンプル・プログラムは、あらゆる条件下における完全なテストを経ていません。従って IBM は、これらのサンプル・プログラムについて信頼性、利便性もしくは機能性があることをほめかしたり、保証することはできません。

それぞれの複製物、サンプル・プログラムのいかなる部分、またはすべての派生的創作物にも、次のように、著作権表示を入れていただく必要があります。(c) (お客様の会社名) (西暦年)。このコードの一部は、IBM Corp. のサンプル・プログラムから取られています。(c) Copyright IBM Corp. 年を入れる。 All rights reserved.

この情報をソフトコピーでご覧になっている場合は、写真やカラーの図表は表示されない場合があります。

### プログラミング・インターフェース情報

プログラミング・インターフェース情報がある場合、それらはこのプログラムを使用してアプリケーション・ソフトウェアを作成する際に役立つよう提供されています。

一般使用プログラミング・インターフェースにより、お客様はこのプログラム・ツール・サービスを含むアプリケーション・ソフトウェアを書くことができます。

ただし、この情報には、診断、修正、および調整情報が含まれている場合があります。診断、修正、調整情報は、お客様のアプリケーション・ソフトウェアのデバッグ支援のために提供されています。

**警告:** 診断、修正、調整情報は、変更される場合がありますので、プログラミング・インターフェースとしては使用しないでください。

### 商標

IBM、IBM ロゴ、および [ibm.com](http://ibm.com) は、International Business Machines Corporation の米国およびその他の国における商標または登録商標です。これらおよび他の IBM 商標に、この情報の最初に現れる個所で商標表示 (® または ™) が付されている場合、これらの表示は、この情報が公開された時点で、米国において、IBM が所有する登録商標またはコモン・ロー上の商標であることを示しています。このような商標は、その他の国においても登録商標またはコモン・ロー上の商標である可能性があります。現時点での IBM の商標リストについては、[www.ibm.com/legal/copytrade.shtml](http://www.ibm.com/legal/copytrade.shtml) の「Copyright and trademark information」をご覧ください。

Intel および Itanium は、Intel Corporation または子会社の米国およびその他の国における商標または登録商標です。

Microsoft および Windows は、Microsoft Corporation の米国およびその他の国における商標です。

Linux は、Linus Torvalds の米国およびその他の国における商標です。

Java は、Sun Microsystems, Inc. の米国およびその他の国における商標です。

UNIX は The Open Group の米国およびその他の国における登録商標です。

他の会社名、製品名およびサービス名等はそれぞれ各社の商標です。

この製品には、Eclipse Project (<http://www.eclipse.org>) により開発されたソフトウェアが含まれています。



IBM WebSphere Process Server for Multiplatforms バージョン 6.2





Printed in Japan